炎の吐息と紅き翼

ユッケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
炎の吐息と紅き翼

【Ｎコード】
Ｎ８０６０Ｊ

【作者名】
ユッケ

【あらすじ】
ブレスオブファイアとネギまのクロスオーバー

紅き翼の冒険時代、そこには一人の少年の姿があった。

割と王道な冒険ファンタジー？かも

この話は一向に中二病が治らない作者の脳内から溢れ出た煮汁です。
ご都合主義・どっかで見たような展開・イタタな設定のバーゲンセ

ールです。
ブレスオブファイアシリーズの致命的なネタバレもあるかも知れません。
それらを許せる方はしばしお付き合いください。
※更新は2週に一回くらいです

第一章　始まり

「……」

時刻は夜。小奇麗に纏まった８畳ほどの部屋の中で、一人放心している青年が居た。まるで心ここに在らずであるかのようにカーペットの上に足を投げ出し、後ろに両手をついて体を支えている。目の前にあるテレビからは絶えずゲームの音楽が鳴り響き、今か今かとスタートボタンを押される事を待っている。音量自体は大きくなく、耳を澄ませば近くの山からホーホーという梟の声さえ聞こえてくる。普通ならすぐにでもコントローラを握って何かしらのボタンを押すシチュエーションであるが、青年は転がっているそれを一向に拾おうとはしない。

「……」

彼は今、そのゲームをクリアしたばかりだった。繰り返されるオープニングは電源を入れた直後なのではなく、クリアしてエンディングを見た後、何とも言えないもの寂しさを感じていた青年が放置した結果である。エンディングの後に始まるオープニングと言うのも、また何とも不思議な感じを与えてくれる。

「ふぃー……しかしカプ○ンさんも、もうちょいがんばってくれないかな……」

しばらくして、思考の再起動を果たした青年はそう一人ごちた。

彼の名前は龍浪（たつなみ）　竜亮（りゅうすけ）。年は今年で１９才の掛け値なしの一般人。背は平均より少し高く、身長一体重＝１１０をキープしている。短髪黒髪、顔は自他ともに「普通」という評価だ。この部屋は彼の部

屋だが、この家は正確には彼の実家ではない。通う大学が実家から遠く、たまたま学校近くにあった父方の祖父が神主を務めるここ「龍浪神社」に下宿という形で間借りしている、と言うのが実態だ。

特技は水泳。趣味は釣り・ゲーム・漫画・カラオケとどちらかと言えばインドア系が多い。余談だがこの名前のせいで小学校時代からクラス替えのたびに某奇妙な冒険の主人公っぽくからかわれたりしたというどうでもいい過去もある。

そんな彼は今、のんびりと自分の部屋で趣味の一つであるゲームをしていた。やっていたのはカプ○ン不朽のＲＰＧ、ブレスオブファイアの５作目。今のご時世にしては結構な難易度のゲームだったが、悪戦苦闘して辿りついたエンディングには中々感動したらしい。彼は先月の休日に暇だったので中古ゲームショップを巡り、目に付いたゲームを買い込んでいた。その内の一つがこのゲームの２作目。プレイした結果妙に気に入ったので一気に３，４，５作目を纏めて購入したのが先々週の事。

学校から帰宅して即ゲームと言う生活を繰り返した為に３と４はもうクリアしており、これでナンバリングされているタイトルの内、１作目以外は全てクリアしたことになる。１作目をやってないのは単に売ってなかったというだけだ。探したのだが６作目というのが見当たらず、おかしいと思いネットで情報を漁ってみたら、どうやら色々と問題があり次のナンバリングは出そうな気配がないと言う事がわかっていたので、思わず先程の独り言が出ることとなった。

「あー、１０時か……」

ボーっとしてても仕方がないのでゲーム機の電源を切り、時計を見るとＰＭ１０時。寝るにはちょっと早いかな、と考えていると、

ふと彼の眼に本屋の袋が目に入った。入っているのは2作目と一緒に買い込んだきり、ゲームに没頭していたせいですっかり忘れていた漫画の新刊数冊だ。手を伸ばし、無造作にほっぽり出されているその袋をガサガサと近くに持ってくると、気合いを入れて袋を開けて中から適当に一冊取る。取り出したそれは某週刊連載の少年魔法先生が活躍する漫画である。

「ん……しょっ」

起き上がり、布団が敷かれたままのベッドへバフッと寝転がって準備完了、ページを捲る。どこら辺まで読んだっけな、と記憶の引き出しからストーリーラインを呼び起こしつつ、そうこうしていると瞬く間に時間が過ぎて行くのだった。

＊

さて、唐突だが彼には霊感等と言った特殊能力は一切ない。

彼の友人に一人「視える」人物がいるが、その友人が「この部屋は本気でヤバい」と太鼓判を押した部屋で一晩何も問題なく爆睡できるほどだ。友人からしたらそれの方が特殊能力だと言えるかもしれないが、まぁどちらが“普通”かと言えば圧倒的に龍亮のほうである。だがそんな霊感０である事を、今日この日、彼はほんの少しだが疑いたくなった。

……レ……コヨ……

「？」

何か、聞こえた気がした。

声だったような音だったような、思い出して反芻してみると外から聞こえた単なる雑音だったような気もしてくる。少し気になり周りを見渡したが、何の変哲もないいつもの自分の部屋以外、特に変な物は見当たらない。

「……疲れてんのかな……」

呟いた事でそちらへの思考を打ち切り、特に気にも止めずに漫画を読んでいると……今度は空耳でも気のせいでもなく、誰の耳にも明確に聞こえる声でその行為を邪魔する存在が現れた。

「おーいリュウー！　おったら返事せーい！」

ドアの向こうの方から聞こえてきた、しわがれた男性の声。年季の入ったその声が嫌でも耳に届く。

「……ったく、いいところで」

渋々彼は漫画を読むのを止め、起き上がった。声の主は彼の祖父。彼はその祖父にあまり頭が上がらない。何しろ住まわせてくれている上に食事も一応出してくれるのだ。衣食住のうち二つを世話になっていて、さらにここが神社だからか年寄りを邪険にしたらバチが当たるような気がして、ないがしろには出来なかった。

（昔はヤンチャだったってのはウソだよなぁ絶対……）

酔った勢いで過去の武勇伝を語られる事星の数。もう本当に耳にタコが出来る程聞かされている。そんなどう見ても只の飲んだくれジイサンだが、これでも一応祖父で神主で大家みたいなもんだし、と龍亮は玄関まで足を運んだ。

「おお、リュウおったか。全く、返事ぐらいせんか」

「なんか用？　じいちゃん」

「冷たいのぉ……昔はあんなに可愛かったんに」

どうしてこう身内というのはいつまでも小さかった頃の話を持ち出すのだろうか。いい加減そのネタはやめてくれ。そんな誰もが感じているかもしれない感想を龍亮は心の中で述べ、本読んでる最中に呼ばれりゃじいちゃんだって機嫌悪くなる癖に、と、しきりに目で訴えたりしたが通じるはずもない。

「はいはいごめんよおじい様。んで、何か御用？」

「うむ。わしはちっと近所の寄合に行かねばならんから、今日も龍堂のお祈りをしておいてくれんか？」

またか、とさらに聞こえないように心の中で溜息一つ。寄合と言うのは方便で、正体は単なる近所のじいさん達による飲み会である事を彼は知っている。

「……わかった、やっとくよ」

「おお、さすがはリュウじゃ。ホレ、これやるから頼んだぞ」

立場的に断れない事を知っていて頼んだしたたかな祖父は、そう言って龍亮の手を取ると無理やり小さなお守りを渡してきた。

「いやこんなのいらんし」

「こんなのとは何じゃ！　よいかこれは我が神社の霊験あらたかな……」

「はいはい、それで時間はいいの？」

いつものように手慣れた話題の誤魔化しで、祖父の注意を逸らす。老人特有の長い話は苦痛の元なので、早々に切り上げさせる術が身に着いている龍亮である。

「おっといかんいかん。じゃ、頼んだぞ」

「いってらっしゃいませー」

棒読みの孫の言葉を聞き終わるや否や、祖父は足早に出て行った。

（何個目だっけなこれ……？）

このような事は一度や二度では勿論ない。お祈りを頼まれるたびに同じお守りを渡して同じ事言ってるので最早恒例行事だ。それでも一応お守りだし捨てるのも……と言う事でポケットに突っ込んでおく辺り、小心者である。

（めんどくさー）

＊

龍浪神社には本堂の脇に小屋がある。そこには地下への階段があり、その先に作られた石造りの地下広場……どちらかと言えば広めの物置のようなものを、彼の家族は“龍堂”と呼んでいる。龍堂の中心には高さ３ｍ程の釜……見方によっては鍋かもわからない大きな器が祀られていた。龍浪の者は毎夜必ずこの前でお祈りを捧げなければならないという古いしきたりがあり、忘れると災いが降りかかる等と言い伝えられるが、現代人で霊感０な龍亮にとってはぶっちゃけ眉唾過ぎる話だ。

彼の祖父はこうして龍亮を下宿させるようになってから、ちょくちょく自分に代わりに祈るよう頼んでいた。近頃はその頻度が大分多くなってきており、そろそろ注意するべきか迷う龍亮であったりする。

そんなこんなでだらだら歩いて現場へと到着。パチッと蛍光灯のスイッチを入れ、明るくなるまで若干間の開く古さに苦笑しながら、仕方ないのでいつものように器の前に立って手を合わせて目を閉じる。

「……」

特に信心深いという訳でもなく目を閉じてるだけだが、一応お祈りと言えるだけの時間を過ごすとゆっくり目を開けた。

「……帰ろ」

いつもの通りにやる事やって、さて帰ろう、と息を吐いたその時

だった。

点けていたはずの蛍光灯が、消えた。

まるで目の前数センチに緞帳が下りたように、視界が黒く染まる。明るさに慣れた目は咄嗟に対応しきれず、入口から漏れてくる僅かな明かりも捉えきれていない。

マ……ドレ……ノ……コ……ハ……タ

「!?」

聞こえた。即座に龍亮の頭にリロードされる、部屋で聞こえた気がしたあの音。今のは空耳ではない。ハッキリとまではいかずとも、確かに“声”が聞こえた。馬鹿馬鹿しい、気のせい気のせい、と一笑に付すのは簡単だが、そんな風に思い込めるほど龍亮は自分の耳の性能を疑ってはいない。

「誰!?　誰かいんの!?」

叫んでみる。返事はない。まさか霊感０である俺がこんな現象に遭遇するなんて、と明日学校で友達と会ったら話のネタにするかどうか考えつつ、結論としてはポルターガイストか何かだろうと無理やり納得した。

「……！」

ゾクリと背筋を過ぎる悪寒。これ以上この場に留まって良い事なんかきっと何一つない。さっさと帰る！　と大きな器に背を向けた――――正に直後だった。

――マイモドレ……リュウノミコ……トキハミチタ――

聞こえた。聞こえてしまった。

瞬間、部屋の入り口からゴッ！という音と共に物凄い風が吹いてきて、龍亮は足を止めた。

「な、なんだよ……コレッ！！？」

あり得ない。こんな事あり得ない。今まで経験した事のない凄まじいまでの風を受け、片足が浮く。

「おわっ！　ちょっ、待って……ッ！」

とても耐えられるような姿勢ではなく、さらに勢いを増す強風に龍亮は吹き飛ばされた。天井すれすれまで上昇し、人生初体験のあり得ない浮遊状態になった一瞬、理解した。この風は入り口から吹いてきたのではない。背を向けた、龍堂の中央にあるあの器のようなモノが、どういう訳か自分“だけ”を猛烈な勢いで吸い込んでいるんだ、と。

その証拠にチラリと見えた視界の端っこでは、物置きとして放りこまれている箒や土嚢に全く何の変化もないようだった。今まさに自分が吸い込まれようとしている器の、初めて真上から見るそのぽ

っかりと開いた口の中は、暗さのせいだけではない、とてつもなく深い底なしのように見えた。

「うおぁぁぁ！？　だ、誰か……」

抵抗さえ許されないまま、まるで見えない何かに引っ張られるように弧を描いて、彼の体は器の中へと吸い込まれていった。すぐに底にぶつかるだろうという彼の僅かな希望と、力の限りに発した助けを求める叫び声は、誰にも届くことなく消えていくのだった。

第一章　始まり（後書き）

初めて投稿しました。
誤字脱字等ありましたらお手数ですが知らせていただけるとありがたいです。

※２０１１／０２／１５全面改稿

第一章　2、試練

落ちている。それはもう清々しいほどに。周りは真っ暗で落ちてること以外何もわからない。

「……」

落ち始めてから何時間たったのだろう?それともまだ数分だろうか？　俺は最初こそ泣き叫んだり暴れたりしていたのだが、一向に激突したりして死ぬ瞬間が訪れないので、実はもういい加減慣れてきてしまっていた。

「起きろ起きろ起きろ……」

いくらなんでも現実にこんな不思議が起こるわけもないので、今はこれを夢だと判断している。しかし何故か、必死に起きようとするけどなかなか起きない。

「あ”あ”あ”あ”ーーー」

「ほぁっ！！」

「～～～～♪」

空飛ぶ夢は何度か見たことあるけど、こうも落ち続ける夢なんて初めてなので、しばらくすると大声を出したり気合いを入れてみたり歌ったりもしてみる。

が、もちろん何も起こらない。

「おーーーい！　誰かーーーー！！　居なくても返事してーーーー！！」

暗闇に向けて叫んでみるも、やっぱり何も起こらない。もう何と言うか、涙目だ。

「はぁ……ん？」

そんな中、ふと下を向いた瞬間何かが目に映った。よーく目を凝らすと暗闇の中のかなり下の方に白い点のようなものが見える。

「お？　やーっと終わりか。無駄に長かったなー」

恐らく出口だろうと楽観視しながら、このわけわからん夢ともおさらばできると安堵したのも束の間、その点の正体がわかるにつれて俺は自分の顔が強張っていくのがわかった。思い出すのは以前科学のテレビ番組で見た映像。徐々に大きくなっていく、全てを飲み込む程の業火が渦巻くそれは、どう見ても太陽としか思えない。

「うおぉぁああ！？　ちょっと！？　マジで！？　ヤメ……」

なす術もなく、俺はその中に突っ込んだ。

＊

未だに落ち続けているらしい。あの太陽からは抜けたのだろうか。しかし何故生きているかわからない。四肢は炭化したのか動かせず、目は見えず、鼻も利かず、耳も利かず、声も出ない。肺も焼けているはずなのに息が出来ているのは夢だからなのか？　これは夢の筈

だ。なのにこの苦しみはなんだ？

いい加減にしてくれ！！

喋る事のできない口でそう叫んだ瞬間、夢の筈なのに俺はさらに意識を失った。

＊

「あ……れ？　……あーあー……治って……る？」

気が付くと知らない天井……な訳もなく、やっぱり落ち続けていた。手も足もあるし動く、暗闇だから目はよくわからないが、手を叩けば感触もわかるし音も聞こえる。

「はぁぁぁ。絶対死んでたよさっきの……しかし夢とは言えリアル過ぎだろ」

なんとか復活できたらしい。さすが夢だ。もっとも、あの痛みと苦しみは二度と味わいたくない。とはいえ、以前何も見えない闇の中を落下中なのに変わりはない。

「いやもういいから終われよ夢！」

そんな自分の夢に対して悪態をついてると、ちらりと目の前に何かが横切ったのがわかった。

「冷たっ！？」

暗闇の筈なのに白く舞うモノが見える。雪だ。気がつけばだんだんと自分の周りが寒くなっていっているのがわかる。

「まさか……っ！！」

除々に吹き付けてくる雪の量が増えている。しかも体に当たる雪自体の冷たさも増している気がする。

「マジ！？　……かっ……」

途端、猛烈な勢いとなった雪から守るために薄く閉じた目に映った最後の光景は、周りの暗闇とは対照的に、真っ白く荒れ狂ったブリザードだった。

＊

相変わらず落ち続けているが、ブリザードは抜けたらしい。俺は全てが凍りついていた。もし今誰かに肩を叩かれたら、それだけで液体窒素に漬けた後の薔薇のように俺の体は砕け散るだろう。今度は息もできない。意識があるのが本当に不思議で仕方ない。

もう無理だ……そう思い、俺は再び意識を手放した。

＊

「……っは！？」

また意識を取り戻す。期待したが、暗闇の中を落ち続けている状況から脱してもいない。全身触って確かめてみると、やっぱり先ほどのように体の異常が無くなっていた。もうここまで来ると、いくらこれが夢だとしても変だと感じる。

っていうかもう認めるしかない。これは現実だ。あの痛み、熱さや寒さはどう考えても夢じゃない。何で発狂しないかわからないぐらいだ。それともう俺は狂ってるんだろうか？

「誰か！！　居るんだろ！！　助けてくれ！！　お願いだから！！」

俺はあらん限りの全力で声をあげた。居るのかもわからない俺をこんな空間に呼び込んだモノへと。

しかし、やはり返事はない。

「なんなんだよぉぉぉ！！　ちくしょぉぉぉ！！」

泣いた。自棄になった。仕方ない。この状況じゃどうしようもない。……と、その瞬間、耳元で何かが弾けるような音が俺の鼓膜を振るわせた。

「！？」

確かに聞こえた。今のは冬場によくあるアレ、静電気に似た感じである。そして、それが何を意味しているのか。俺はこれから起こることを想像すると共に、自分のこれまでの人生での行いを思い出していた。

（ここは地獄だ。俺何か悪いことしたっけ……）

回想する思い出。走馬灯って結構簡単に見えるもんだと感心した。
目を向ければ、暗闇の下の方には青白い閃光が激しく瞬いている。

（もう嫌……）

抗うことなど当然できず、俺は渦巻く電撃の嵐に突っ込んだ。

「イギャァァッ！」

三度、俺は意識を失った。

＊

（あ……うう……）

どれだけ気絶してたかわからない。落下特有の浮遊感やあの強烈な痛みなどはない。どうやらあの妙な空間は出られたらしい。

（……？　……どこだここ……地獄？）

ぼやけた頭で考えを巡らせていると、少しずつだが手足の感覚が戻ってくる。それらはなんとか動かす事はできるらしい。

「んっ……っく……」

何かゼリーのような半固形の液体らしきものに全身が漬かっている。顔には人工呼吸器のようなものが付いてるのが感覚と呼吸ができる事でわかる。

「こ……こ…は……？」

目を開けながら口を開く。声も出せる。ゼリー状の液体のせいでかなり視界がぼやけているが、自分が龍堂に居るわけでないことだけはわかった。

「や、目が覚めたようですな」

うまく聞き取れなかったけど、誰かが何やらこっちを見ているらしい。ぼやけた視界の先で、ぐにゃぐにゃした人型らしき何かが横の機械の様なものをいじっているのが、朧げながら見えた。

「！」

途端、ボコボコとゼリー状の液体が抜けていき、代わりに入ってきた空気が肌を乾かしていく。そしてプシューという空気を抜くような音と共に、俺の入れられているらしい何かの前面が開いた。

「……」

その誰かは無言で俺の事をじっと見ているようだ。パシュッと小気味良い音を立てて人工呼吸器が外れ、途端に全身に気だるさを感じ、俺は前に倒れるようにへたり込んだ。

「はっ……はっ……はっ……」

「……や、無理も御座いませぬな。まだ同化して間もないですからな」

（？　どうか……？）

なんのことだろうか？　イマイチ頭がはっきりしない。言葉の意味が理解できない。まぁそんな事よりもとにかく、今自分がどうなっているのかの確認の方が先だ。

「あ……俺は……一体？」

その姿勢のまま固まっていると、徐々にだが視界だけはハッキリしてきた。

「！　……や、私がわかりますか？　体には何か異常がありますかな？」

「え？　あ……はい……大…丈夫です」

本当は全く大丈夫ではない。しかし頭がボーっとするせいか適当に答えてしまった。

「……。拒絶反応はないか……うまくいきましたか。しかしこれは……」

話し掛けてきた老人のような人物は、よくわからないことをブツ

ブツ呟いている。まだボーっとしてる頭を抑えつつ、ここがどこなのか気になった俺は辺りを見回した。見たことも無い機械類、ゴチャゴチャした配線が至る所にある。

（俺って……どうしたんだっけ？）

いつの間にこんなよくわからない場所に移動したのだろうか。なんとなく自分の後ろを見てみると、そこには人一人入れるどこかで見たようなカマクラ的物体がある。

（んー、ああ、アレだ。フ○ーザの宇宙船にあった怪我を治すアレに似てる……）

ぼやけた頭でそんなどうでもいいことを思い出しながら、ふと視線を下に落とす。覗き込んだ水溜りには、見知らぬ少年の顔が写っていた。

「え……あれ？」

自分の頬を抓ってみる。水溜りの中の顔も自分の頬を抓っている。変な顔をして見る。水溜りの中の顔も変な顔をしている。

（誰コレ？　……え……俺……か？）

水溜りのせいでわかり辛いが、髪は青色で自分より若干長い。目の色も青っぽく見える。どことなく自分の小さい頃と似ている気もするが、あくまでどことなく、のレベルだ。

（何だよ……誰なんだよコレ……ッッ！）

その瞬間、突然頭の中のモヤが晴れ、気を失う直前の光景が眼前にフラッシュバックした。

「！！　うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「や、これはいけませんな」

何事かをブツブツ言っていた老人が焦ったようにこちらを見る。頭を抑えて振り乱す俺を老人は押えつけ、注射器のような物を腕に押し付けた。

「あぁぁぁぁぁぁぁ…ぁ……ぁう……」

だんだんと意識が朦朧としていく。

（また……かよ……）

何度目になるのか、また俺は意識を失った。

「や、流石にすぐに馴染むわけはありませんか。まぁ良いとしましょう」

気を失った少年を抱え、老人はその部屋を後にした。

＊

（眩しい……）

どうやら顔に日の光が当たっているらしい。閉じた瞼の向こうからやたらと明るい光が眠りを邪魔してくる。俺はうっすらと目を開けると、次に伸びをし、ようやく頭に血が回りだして――

（俺は……そうだ！）

一気に思考が覚醒し、俺はがばっと上半身を起こした。

「？　……ここは……？」

キョロキョロと辺りを見回してみる。どう見ても知らない部屋だ。俺はその部屋のベッドに寝かされていたらしい。部屋はこじんまりとしていて小さなテーブルと椅子、化粧台らしきものがある。

「ここどこだよ。俺どうなったんだよ……」

悩んでもわからない。化粧台が目に付いたので、起き上がって近寄る。恐る恐る鏡に全身を映すと、そこには白い寝間着のようなローブに身を包んだ、青髪青目の少年が立っていた。

「あーやっぱ……夢じゃないね……しかしこれは……もしかして……」

鏡の中の少年が引き攣った笑みを返す。龍浪竜亮１９才。伊達に大学の授業中にこっそり携帯を弄ってネットの海を徘徊してはいない。これはきっと何かの拍子に異世界に来たのでは？　何というか色々と疑問は浮かぶものの、多少冷静になった頭は何故かあっさりそうだと決め付け、受け入れていた。……やけにすんなりと、まるで最初からそうだったように思えてきてしまう。

（まさかこんな事になるとは……でもアレか？　この見た目からすると俺変身できちゃったりするのか？）

なんとなく現状を察すると、鏡の中の少年に対して思うところがあった。妙な事が起こる前までやっていたおかげで、自分の見た目があのゲームの主人公の特徴を継承していることには気が付いていた。

あのゲームでは全シリーズ通して主人公は青髪で幾つかは青目だ。鏡の中の少年も顔こそ若干自分に似てる気がするが青髪・青目で見た目は特徴が同じだ。そして自分があのゲームの主人公と仮定すると、思い出されるのが竜への変身能力、【竜変身】だ。

全シリーズを通して、主人公は精神力や生命力を使って様々な形態と強大な力を持つドラゴンへと変身できる。制約はあるものの変身すれば大体は凄い力を発揮する事が出来る。

（でも……もしそうだとするとここはその世界なんかな。……どの世界なんだろう？　万が一1だとすると俺知らないんだよなー）

そんな事をボチボチ考えたが、あまり意味のない事に気付いた。見た目がこうであっても、もしかしたら全く別の存在で、関係ない可能性もある。現状では情報がないに等しいからわかりようもない。取り合えず自分の体を確認するように動かしていると、不意にドアが開いた。

「や、目が覚めたようですな。ご気分は如何ですかな？」

現れたのは、最後に気を失う直前に見た老人だった。恐らく、この人が俺を助けてくれたんだろう。ここは素直に礼を言うべき場面

である。

「あ、はい。大丈夫です。すみません、何かご迷惑をおかけしたようで」

取り乱して叫んだところまでは覚えていたため、とりあえず謝っておく。

「や、お気になさらず。それより朝食をご用意しましたので、宜しければお召し上がりになりませんか？」

「はい？　……ああ……えと……いいんですか？」

いきなりご飯の提案をされて正直驚いた。ただ、気がつくと実際腹は減っているらしい。朝食、という単語を聞いた瞬間、思い出したように腹がぐうとなったのだ。

「や、構いませんよ。それに聞きたいこともあるのではないですか？　取り合えず、こちらへどうぞ」

いやに優しげな老人に連れられて、居間らしき場所へと進む。ちょっとしたリビングのような空間のテーブルの上には、焼きたてと思われるトースト、目玉焼きとローストビーフ、サラダ、何かのスープが置かれていた。目玉焼きとスープから暖かそうな湯気が立ち昇っている。

「えーと、じゃあ、頂きます」

「や、どうぞご遠慮なく」

何となく、こういう時は可愛い女の子が持て成しをてくれる事を期待した俺は間違っているだろうか。じいさんの手料理と言うのが少しばかりテンションを下げるが、それでも味のほうは問題なかった。むしろスープに関しては絶品と言ってもいいぐらい美味かった。

なんかくやしかった。

第一章　2、試練（後書き）

20111030修正

第一章　ＳＯＬ　～前日～（前書き）

ＳＯＬと付く話は微妙に本編と時系列がズレてます。

第一章　ＳＯＬ　～前日～

薄暗い部屋に響く、扉を開ける音。中に佇む一人の白衣を着た老人。謎の文字が映し出されるモニターを操作しているその白衣の老人の傍に、ドアを開けた張本人……深い皺を顔に刻み込んだもう一人の老人が静かに近付いてきた。

「ユンナよ。計画は順調なのか？」

「や、これは村長。このような場所へいらっしゃるとは。ご機嫌は如何ですかな？」

ユンナと呼ばれた白衣の老人は操作する手を一旦止めて、薄笑いを浮かべながらもう一人の老人に挨拶を繰り出した。

「世辞はいい。オマエに言われても何とも思わん。首尾はどうなんだ？」

村長と呼ばれた老人はフンと無愛想にそれをあしらい、自分の用件のみを端的に伝える。ユンナは、村長の態度を気にする素振りも見せず、モニターに目を落とした。

「や、これは失礼。そうですな。ボディの方はほぼ完成しております。素の状態では負担が大きすぎますが、高出力の別形態に変わることにより、予定通り貴方方に伝わる魔法全てと、そしてあらゆる“種”の力を発揮出来るでしょうな。これならあなた方の願いを叶える事も容易でしょう。ですが……」

「……何か問題が起きたか？」

「や、実はどうにも適応がうまくいかないようでして、今までに４９人ほど呼びましたがいずれも適応する前に拒絶反応を起こし、魂が崩壊してしまうのですよ」

そこまで言うと、ユンナはわざとらしく困った顔を村長へと向けた。

「それは仕方ないだろう。いくら適正があるとは言え、この身体に順応出来る者がそう居るとは思えぬ」

村長の回答が予想通りの物であることに、困り顔を元の薄笑いへと変えたユンナは、元々行うと決めていた実験内容をさも許可を取る風に語り出した。

「や、それで、ある考えがありまして、次はそれを実行してみたいと思うのです」

「ほう、してその考えとは？」

「や、今までは魂のみを召喚しておりましたが、その場合どうにもボディとの力の差が激し過ぎる為か拒絶反応を抑えられませぬ。それならばいっそ肉体ごと召喚し、その全てを一つの魂へと還元させてみようと思うのです」

「……」

ユンナの実験内容を聞いた村長は顎に手をやり、考える素振りを見せる。

「……なるほどな。それなら魂の容量も爆発的に増え、適応できる……か」

「や、その通りです。しかしそれでも適応できるかどうかは五分五分。まだ犠牲が増えるとなると、いやはや少々心が痛みますな」

村長は、一瞬だけ驚いた顔をした。ユンナからまさかそのようなセリフが飛び出るとは、予想だにしていなかった。セリフとは裏腹に、ユンナの薄笑いは変わっていない。

「ハハハハハ！　お前がそれを言うか！　わしにこの悪魔の提案をしたのは他ならぬお前だぞ？　わしにとっては憎きアヤツに一矢報いる力が欲しい。オマエは“うつろわざるもの”を自分の手で創り出したい。この案を飲んだのは互いの利害が一致したからではないか。……今更戯言を言うな」

「……や、そうですな。私も少々疲れているようです。今日はこの辺りで休むとします」

僅かに……ほんの僅かにだが、ユンナの顔に影が差したのを、村長は気付かない。

「ふん、構わんが早めに頼むぞ。ないとは思うが、万が一アヤツにココが発見されることもあるやも知れぬ。この計画が漏れては元も子もない」

「や、わかりました。では予定を少し繰り上げましょう。明日には早速先程の実験を行います。では今日はこれで」

「うむ。ではな」

村長は正面にある人一人入れるほどの機械に一瞥くれると、足早にその部屋から出て行った。

――――――――――――――――――――――――――――――

薄暗い部屋の中。そこには一人の老人がいた。

「ふう」

溜め息を着くその姿。
成就を願う研究者か、または犠牲を憂う一人の男か。

「せめて……あなたには実り多き世となることを……」

そう言って一人佇む老人の視線の先……人一人入れる機械の内部には、ゼリー状の液体の中に浮かぶ死んだように動かない少年の姿があった。

第一章　3、考察

「……はー。いやそれにしても美味しかったです。ユンナさんは料理うまいんですねー」

「や、それほどでもありませんよ。一人暮らしが長いものでして。リュウスケ様は料理などはしないのですか？」

「一応することはするんですが、それほど美味しくはできないですね」

「や、そうでしたか。何、一人で暮らす時間が多くなれば嫌でも上手くなりますよ」

空き皿の上を飛び交う穏やかな言葉のやり取り。食後に入れたお茶のカップを前にしながら、龍亮と老人は談笑（と言う名の一方的に質問攻め）をしていた。

龍亮は食事中、自己紹介ついでに思い切って自分のことを打ち明けていた。話し方や振る舞いを少年っぽくするのが面倒であったし、何か余計な詮索されて変なことを口走って、妙な誤解を生む前に先手を打ったのだ。

見た目はこうだが自分は本当はごく普通の１９才の男であるということを伝えると、老人は一瞬驚いたような表情をしたがすぐに元に戻り「や、何か理由があってその姿になったのでしょうな」と、それ以降もさして気にする風でもなかった。

そんな穏やかな対応を受け龍亮はホッと胸を撫で下ろした。自分

の祖父とは大違いな理解の早い老人の態度に、大分気を緩める事ができたのだ。全くの別世界出身であるということは、いくらなんでも荒唐無稽なので秘密にしているが。

「……」

「や、どうかしましたか？」

「あいえ、何でもないですユンナさん」

老人の名も、龍亮は知る所になった。この老人は「ユンナ」と言うらしい。ある目的の為に世界を転々とする研究者だと自己紹介された。ちなみに何を目的にしているのか、については教えてはくれなかった。

「……」

龍亮は他愛ない会話をしながら、今自分がどういう立場に置かれているのかを整理していた。最も両方を同時になんて器用な事は出来ないので、時折こうして会話が途切れていたりする。

居場所については、ここはユンナの家である事が判明している。だからどうしたと言えばそれまでだが、少なくとも危険は無い場所である事がわかったのは大きい。

そして“天よりうつろわざる龍の御子が遣わされる。其は神の代理なり。丁重に迎えよ”という内容の御神託？　が3日前にこの村の神官を通して伝わっていたという事。この体になった自分が衰弱しきった状態で、その神託の通りに天から光を纏って降ってきたという事をユンナから聞かされていた。

一度目覚めたあの場所はユンナの研究部屋であり、龍亮が入れられていた謎の機械は、ユンナの研究の副産物である治癒装置だとの事であった。辻褄は合っているので、龍亮は一応納得はしていた。一応というのは、ある一点が気になっているからだ。

「あ、そう言えば聞いてませんでしたけど、ここって町なんですか？」

「や、言っていませんでしたか。ここは忘れ去られた村、ドラグニールという所ですよ」

「！？　へ、へー……ドラグニール……ですか」

龍亮はその単語にかなりの動揺を見せた。自分の記憶が確かなら、つい最近までやっていたゲーム……に存在していた名前だ。何となくそうだったらいいかな、などと思っていた所へ極普通にそんな名前が出た事で、わかりやすいぐらいに狼狽した。

「すみません、恥ずかしながら地理には疎くてどの辺にある村かわからないんですが、よければ国名か大陸名を教えてもらえませんか？」

龍亮は期待と、恐れのような感情を込めて、そんな質問をした。自分の知っている範囲ならば良いが、もし全く知らない土地だったらどうしようという思いが口を突いた。さあどんな名前が飛び出てくるんだ？　と身構える。

「や、知らないのも当然ですな。何せ“忘れ去られた村”というくらいですから。ここは中国の山奥、秘境と言っても差し支えない奥

地ですよ。大陸で言えばユーラシア大陸ですな」

「……って……え？　ち、中国？　ユーラシア大陸……ですか？」

「や、そうですが……いかがされました？」

「……え？　あー、いえ別になんでもないです。あはは。へー、ここってチュウゴクなんですかー……」

龍亮は愛想笑いを浮かべながら、大きくなった内心の動揺を必死に悟られまいとした。まさか、普通に中国やユーラシアなどという現実に沿った言葉が出てくるとは思っていなかった。反対の意味で予想を裏切られたせいで龍亮の頭は大分こんがらがってきている。

どうしようかと考えて、取り合えず一旦置いておき、何食わぬ顔で会話を続けることに専念する事にした。

「世界中周ったんですよね？　逆に行ってない場所ってどこかあるんですか？」

龍亮はさらに情報を引き出すべく、ユンナに話を促した。

「や、そうですな、歩ける場所で行ってないのは北極くらいかと」

「！？」

結果、龍亮はさらに驚愕する事になった。北極などと言う単語が出てしまった。これはひょっとすると、自分のよーく知っている星と全く同じなのではないか。となると、もしかすると自分の生まれ故郷であるあの国もあるのでは？　そう思った龍亮は、カマをかけ

てみることにした。

「それじゃ一番料理の美味しい国ってどこなんでしょうかね？　俺は日本だと思うんですけど」

「や、確かに日本の料理は素晴らしいものでした。トーキョーなどでは全世界の料理も食べることができますし、日本人の食への拘りには感心させられましたよ」

「へー……」

龍亮は確信した。少なくとも地理や知名に関しては、恐らく自分の知っている物と大差ない……はずであると。だが同時に混乱もしていた。てっきり自分の知るゲームと同じ舞台かと思ったら、夢を壊すように現実的な名前ばかり。何かもうよく分からなくなってきていた。

龍亮の頭の上にピヨピヨ鳥が舞っている傍らで、ユンナはチラリと龍亮の後ろにある窓の上に目をやった。

「……や、私としてはリュウスケ様の疑問にまだまだお答えしたい所ですが、そろそろ研究所に行かねばなりませんので」

そういうとユンナは立ち上がり、そそくさと食器を片付け始めた。そこで龍亮はハッとして思考を打ち切り、ユンナの時間を奪ってしまった事に謝罪する事にした。

「あ、すんません。なんか長々と質問ばかりしてしちゃって」

「いえいえ、構いませんよ」

謝りついでにユンナが見た自分の後ろへと龍亮も目をやる。そこにあったのは時計だった。死角にあったからわからなかったが、自分でもアレが時計だとわかる。なにしろアラビア数字で１２個数字書かれているのだ。ちなみに１０時を指している。

「や、リュウスケ様は突然このような場所に呼び出されたのですから、混乱なさるのも無理ないでしょう。生憎と、私は研究所に行かなければなりませんが、もしまだ知りたいことがあるようでしたら、村長に会いに行かれては如何ですかな？　龍の御子についても詳しく聞けると思いますよ」

「……」

食器を洗いながらのユンナからの勧めに、龍亮は考える。確かに情報は欲しいから、村長とやらに会って話を聞いてみたい。だが、とにかくまずはよく分からない周囲の状況を把握するだけの時間が欲しいとの結論に至った。

「お気遣いありがとうございます。正直ちょっとまだ色々戸惑ってる部分もあるので、部屋で少し休ませてもらってもいいですか？その後でも大丈夫でしたら会いに行こうかと思いますけど」

「や、構いませんよ。村長にはそのように伝えておきます。なに、どうせヒマしてるでしょうからな。いつ行っても居ないということはないでしょう」

ユンナはそこまで言うと、洗った食器を手早く乾燥台らしき場所に置き、龍亮に背を向けた。

「や、それでは失礼します」

そしてユンナは、ドアから出て行った。

＊

寝ていたベッドのある部屋に戻り、ベッドに腰掛ける。ついつい二度寝心が頭をもたげて来るがここは我慢しなければならない。龍亮は、一旦情報を整理する為にここまでで判明した事実を列挙することにした。

・日本や中国などが存在している。
・記憶にあるゲームに出てくる地名が存在している。
・自分の居た現実にはありえない科学技術が存在している。

パッと思いつくだけでも以上3点。これらの点から見て、少なくとも龍亮の住んでいた現実には当てはまらない。もちろん、記憶にあるゲームの物とも微妙に違う。そうなると残る可能性は全く別の世界、一番可能性が高いのが両方が混在した異世界……という線だ。

「……まいったなぁ」

龍亮は溜め息をついた。こうなると自分の知ってる知識なんてのも大して役に立たないかも知れない。ゲームのストーリーを覚えてはいるが、ここがそれらとは違う全くの別世界ならそんな知識は在って無きの如しだ。自分の中の常識が通用しそう、と言う点はありがたいが。

それに気になるのはそれだけではない。ユンナのこともある。

「やっぱユンナさんって……あのユンナかなぁ……」

そう、「ユンナ」はゲームに出てきた敵キャラクターの名前だ。その物語の根幹の事件の首謀者で、目的の為なら人体実験も平気で行うマッドサイエンティスト。最終的にもちゃっかり生き残ってて少々腹が立った記憶が龍亮にはある。龍亮が先程の話を丸ごと鵜呑みにしていない理由がこれだった。

「……」

しかし、本当にそうだと断定できるかと言うと、そう簡単にはいかない。ゲームのユンナは少なくとも老人ではなかった。ついさっきまで自分と話していたユンナは、確かに面影はあるもののどう見ても老人だった。そして老人の「ユンナ」なんて自分の記憶の中には居ない。この違いからも、早速自分の知っている事が通用するかどうかわからないという事がわかる。

（取り合えず俺の居た現実とは違うってのは確定かな。あとは俺の体か……）

龍亮は次に今の自分の身体について考える事にした。ユンナとの会話から、自分に関してもある程度の推測が立っている。

・空から衰弱して光を纏って落ちてきたらしいということ
・姿が少年のものになっていてゲームの主人公と同じ特徴を持っている事
・このドラグニール村に神託が降り、恐らく自分がその「うつろわざる龍の御子」とか言う存在と思われる事

龍亮は、何というか嬉しいようなこそばゆいような妙な気持ちだった。まさか自分が嵌っていたゲームの登場人物のようになるとは想像……は少ししていたが現実になるとは思わなかったからだ。不思議な力に導かれて、勇者か何かのようになる、なんて考えただけでワクワクしてくる。

「……」

だが、話してくれたのが他ならぬ“ユンナ”であるということだけが、何か引っ掛かっていた。思ったより親切にしてくれたし、内容が嘘ではないと信じたい気もするが、ゲームでは真実を隠して都合のいいことだけを言うヤツだったので、疑惑がどうしても頭を離れない。

（うーん、これぱっかりは何とも……）

神託云々や自分を運び込んだ等の話はどこまで信用すればいいかわからないので、とりあえず頭の隅に残して棚上げする事にした。

「……」

後、龍亮が気になったのはこの身体になる前の出来事。あの、思い出すだけで嫌な汗が出てきそうになる恐ろしい空間。おそらくここに来ることになった元凶。今は思い出しても、何とか取り乱すほどではなくなっている。

（単純に考えればゲートとかそういうの……なのかな。でもそうだとするとあのイメージはなんだったんだ……）

太陽に燃やし尽くされ、ブリザードに全身凍結させられ、電撃に感電させられたアレは
一体なんだったのか。流石にこれについては、いくら考えても情報が少なすぎてわからなかった。

（……さて、となると最後はやっぱコレだな）

龍亮は、それまでの難しい顔を払拭してワクワクしながら立ち上がった。自分の推測が正しければ魔法とか、何か不思議な力がこの世界には存在してもおかしくないと思ったからだ。特に今の自分の見た目はどう見ても不思議な力が使えそうである。

「ん～」

あのゲームの世界には、他のＲＰＧと同じく魔法が存在する。火系の「パダム」や氷系の「レイガ」など、大体はその辺のＲＰＧと変わらず属性毎に魔法の系統が分かれ、その中で威力毎に名称が異なっている。

「やっぱ試すしかねーだろ」

龍亮はノリで目を閉じ、右手を前にかざした。

「……むむむ……」

右手に意識を集中させる。なんか心なしか手が暖かくなってきたような気がする。そして龍亮はくわっ！　と目を見開いた！

「……パダム！」

……

部屋は、とても静かだった。耳をつんざくほどに。

「何も起きねぇし……」

龍亮は思わずドアの方をチラ見してしまった。もし今の姿を誰かに見られたとしたら、高層マンションの屋上から紐なしバンジーしたい衝動に駆られること請け合いだ。これをネタに延々強請られるような事態も想像できる。

その後も知ってる限りの魔法を唱えてみたが、結局全部何も起こらなかった。度々ユンナが戻って来ないかどうかドアを気にしている辺りは、気が小さいというか何と言うか。

「はぁ。やっぱそう都合よくはいかないかー」

男子たるもの超常の力には憧れるのが世の常である。ましてここは異世界で、今の自分は明らかに不思議な力を宿してそうだ。期待した龍亮を誰が責められようか。

「まぁいいか。取り合えず村長さんのところに行ってみよ」

大体の事を把握しなおした龍亮は、いつまでもここに居ると思わず寝ちゃいそうなので、とりあえず動くことにした。

第一章　3、考察（後書き）

20111030修正

第一章　ＳＯＬ　～直後～

二人の老人が、大型の機械の前に立っていた。機械に動力の火は既に灯っておらず大きく口を開け、内容物を取り出されたままの姿を晒している。もう、この機械の役目は終わったのだ。

「起動は成功したようだな」

「や、問題ありません。まだ若干魂の定着に不安はあるようですが、じき落ち着くでしょう」

白衣を着た老人ともう一人の老人は、静かに語り合う。もう一人の老人は、物思いに耽る様に、開いた機械を見つめていた。

「そうか。それにしても……ここまで漕ぎ着けるのに８年か。随分と長くかかったものだな」

「や、その点に関しては申し訳ありません。何分私も龍の力を侮っておりましたゆえ。素体の調整が何度も必要になりました」

「いや、いい。責めているわけではない。とにかくこれでアヤツに一泡吹かせられると思うと笑いがこみ上げてくるわ……！」

もう一人の老人は窪んだ目にギラギラと復讐の炎を滾らせると、醜く笑った。

「や、まだ力の発現は難しいと思いますが、制御にはそれほど時間は掛からないでしょう」

「ククッ……実に楽しみだ。あの力さえあれば……ククク ッ」

もう一人の老人の顔に浮かぶのは狂気だった。執念、怨念、遺恨……まるで長年の積りに積もった負の感情を凝縮させたようなその表情は、生きながらにして怨霊のようにさえ見えてくる。

「……」

「……どうしたユンナよ。まさか怖気づいたわけでもあるまい」

黙っている白衣の老人に向け、もう一人の老人から鋭い視線が飛んだ。

「……や、何でもありませぬ。それで、どのように吹き込まれますか？」

「ん？　そうだな……適当に神託に従ったとでもでっち上げておけ。内容はお前の好きにして構わん」

「や、わかりました。そのように」

「所詮は自我の失せた操り人形だ。言うことさえ聞けばどうでも良い」

もう一人の老人の興味はこれから“操り人形”を使って何をするか、その一点のみだった。白衣の老人は、僅かな忌避の視線を込めて、もう一人の老人を見やった。

「……」

「……さっきからなんだ？　報告はそれだけだろう。もう休んで構わんぞ」

「……や、それでは失礼します」

白衣の老人は告げなかった。もう一人の老人の野望……“自我の無い人形”を使ったその野望は、既に破綻しているという事を。

月も出ていない、虫すら鳴いていない深夜。

青髪青目の少年は、ベッドで寝息を立てていた。

第一章　4、覚醒

「なんなんだよこの村……」

ついそんな呟きが出てしまう。

村長に会いに行くと決めたはいいものの家の場所を聞いていなかったのを思い出し、

「まぁ村の人に聞けばいいや」と考えてユンナさんの家を出たのが数分前。

海外に来たのはこれが初めて、さらに異世界の未知の村ということで俺は結構わくわくしていた。店屋の威勢のいい掛け声や子供のハシャいでいる姿、井戸端でお喋りするおばさんなど、よくある異世界ののどかな暮らしの風景を想像していた。

しかし、そこにあったのは異常なまでの静けさだった。

そこには想像していたモノは一つもなく、代わりにあったのは打ち捨てられた農具、朽ち果てた家畜小屋、至る所にヒビが入り今にも崩れそうな家々。いまだ慣れない歩幅でしばらく村を散策したが、やはりというか村人などどこにもいなかった。

腑に落ちない何かが頭の隅に引っ掛かっていたが、村自体さして広いわけでもないので、気づいたらユンナさんの家の前におり、一息ついたのだった。

「村長ん家行くか」

見事に期待を裏切られたのと、あまりの静かさにちょっとした恐怖を感じてテンションガタ落ちだったが、気を取り直して村長の家に向かう。村長の家とユンナさんの研究所とやらにはとうに目星が付いていた。

他の家に比べると、明らかに手入れのされている大きめな家が多分村長の家だろう。村の奥にある謎のピラミッドのような建物がきっとユンナさんの研究所だ。というかそれ以外にそれっぽい建物はないのだ。

そんなこんなで村長宅に到着。

「ごめんくださーい！」

「……入れ」

やたらと低い声に招かれ、ドアを開けて中へとお邪魔する。

「し、失礼しまーす……」

あまりの声の低さから強面を想像してちょっと萎縮してしまうのは仕方ない。

「……」

恐る恐る目を上げてみれば、スキンヘッドで緑がかったチャイナ風の服を着ている老人が、立ったままでこっちを酷く怪訝な様子で睨

んでいる。目は窪み肌は土気色で、ほぼ骨と皮だけと言ってもいいかも知れない。夜中暗い所でいきなり現れたらマジで失神する程である。まぁ一応この人が村長なのだろう。

「……」

村長はまだこっちを睨んでいる。なに？俺ってそんなに変？　と自分について考えてしまいそうだ。

どうすればいいのか、ユンナさんと違って非常に頭固そうなじーさんである。とりあえず此処はフレンドリーにいこう。

「えーと、どうもはじめまして。自分は龍浪竜亮と言います。この度は何やらご迷惑をおかけしたようで……」

そこまで言うと村長？は

突然顔を真っ赤にして怒り出した

「ユ、ユンナめ、失敗しおったな！なんだコイツは！約束が違うぞ！」

（……何言ってんだこのじーさん）

ていうか謙った俺の挨拶をスルーとは一体どういう了見ですかちくしょう。

「ええい！どけ！ユンナはどこじゃ！このわしを謀りおって！！」

そう叫ぶや老人は俺を強引に押しのけてドアから出て行った。

（なんだ？　俺なんか気に障る事言ったか？　ていうか人の顔見て怒るとか失礼じゃね？）

俺はしばし呆然とした後、特にすることもないのでユンナさんの研究所と思われるピラミッド？に向かった。

ーーー

少年には幾分余裕が見て取れる。対して老人は表面上取り繕ってはいるが、どこかにほんのわずかだけ焦りのような色が浮かんでいた。

「や、失礼ですが私にはあなたとお会いした記憶はございませんが？」

「そうだったね。この姿で会うのはこれが初めてだよ。なら、これを覚えてるかい？」

白髪の少年が左手をかざすと、それはおぞましい触手のようなモノに変形した。それを見た途端ユンナはわずかばかりだが目を見開く。

「や、まさかとは思いますが生きていたとは驚きですね」

「あのままだったら死んでたよ。たまたまある人に拾われてね。運が良かったんだ」

「や、そうですか。ここへはどうやって？」

「昨日妙な力がこの辺で感知されたからね。ほんの少しだったけど。気になったんで一番近い所に居た僕達がこの辺りを探索してたのさ。こんな所に村があるなんて知らなかったけど、あなたが居る所を見るとどうやら当たりだったみたいだ」

そこまで言うと少年は老人の後ろにある装置を一瞥し、その口を開けたままの機械についての疑問を発した。

「その機械、何が入っていたのかな？」

「や、なんでしょうな」

「そう。一応聞いておくけど、素直に言うつもりはないよね」

「や、ですから私にはなんのことかわかりませんよ」

と、老人の惚けた応答に少年が苛立ちをわずかに感じた所で、入り口のドアが勢いよく吹き飛んだ。

「ユンナァ！　貴様、よくもこのわしを謀ってくれたな！！」

現れたのは憤怒の形相の老人。彼はギョロッとした目を見開き、その瞳にはユンナと呼ばれた老人だけしか映っていない。

「や、これは村長。ご機嫌は如何ですかな？　生憎と今は取り込み中でして……」

「貴様ぁ！　まだこのわしを愚弄するか！　なぜあのじんぞ――――」

「五月蝿い」

憤怒の老人の言葉を遮り、白髪の少年はわずかに眉を吊り上げてその老人に目を向ける。少しだけ驚いたらしい少年は、その老人に対して感情の篭っていない声で話し掛けた。

「へぇ。こんなところにまだ生き残りがいたんだ。絶滅させたって聞いてたんだけど」

「っ！！　なんじゃ貴様は！何故こんな所にいる！ここは神聖な場所――――」

その時、何かが憤怒の老人の首を通り過ぎた。

「！！……」

「悪いけど、亡霊に用はないよ」

その老人は二度と喋る事ができなかった。

気がつけば白髪の少年の指にはドス黒い血が滴っており、その老人が最後にその目で見た物は、自分から離れていく首から上の無い自分の体だった。

「や、惜しかったですな。もう少し粘っていればあなたの知りたいこともわかったかも知れませんよ？」

「かも知れないね。けど、それよりもあなたに余裕を与える方がやっかいだから」

「……や、仕方ないですね」

僅かな問答でユンナは悟った。逃げられない、と。しかしこれは元はと言えばかつての自分の不始末だ。ならば――――

「！　……させないよ。ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ。【石化の邪眼】」

「！！……っな……！」

少年の指先から放たれた光は、一瞬のうちにユンナを石化させていた。

「あなたは頭だけはいいからね。何をするかわかったもんじゃない」

＊

「今の音はあっちか…？」

音が聞えた方向へ俺は走っていた。大体想像はつく、おおかた村長さんがドアを蹴破ったか何かして、今ごろユンナさんに詰め寄ってるんだろう。俺が行った所で何ができるわけでもないが、まぁ宥める位はできるだろう。

「あれか」

ちょうど壊れたドアを発見し、その前まで走ろうとしたまさにその時――

「！！　なんだ！？」

壊れたドアの向こうから、激しい光が溢れた。思わず手で光を遮る。

（光？　もしかして村長さんかユンナさんのどっちかが魔法かなんか使ったのか！　そんなオオゴトに！？）

そんな事しなくてもいいじゃないか、と急いで部屋に辿り着き、そして俺の目に入ったものは

首と体が離れている村長さんの死体とユンナさんそっくりの石像、そして血の着いた手で石像に触りながらこちらを見ている白髪の少年の姿だった。

「……？」

「……え？　……う……あ……？」

一瞬何がなんだかわからなかった。目に入ってるのに頭は惨状を受け入れられない。

顔から血の気が引いていくのがわかる。まだ死んだばかりであろう村長さんの死体からは
血の染みが広がっている。途端に口の中に酸っぱいモノが広がる。
胃から内容物が込み上げる。

「……うっ……うぇッ……」

血の臭いが鼻につく。耐え切れない、足元に吐いた。

「ふぅん、他にも生き残りがいたのか。君、こういうのははじめて？」

白髪の少年が、まるで友達にするかのように話し掛けてきた。あま

りの自然さに思わず頷いてしまう。そしてその後ですぐに気付く。俺は何をしているんだ、恐らく村長さんを殺したのはコイツしかいないのに、と。

すでに俺は恐怖に支配されていた。

「そう。それは悪いことをしたね。でも、これなら血も出ないから安心だよ」

そう言うと、白髪の少年はそっとユンナさんの石像を押した。大きく耳障りな音を立て、倒れた石像はまるでガラス細工のように粉々に砕け散る。全くの無表情で少年はまた一人の命を砕いたのだと俺は理解した。

そして白髪の少年はこちらに向かってゆっくりと歩いてくる。全身が震えている。間違いなく俺はもうすぐ死ぬ。怖くて足が動かない。あの暗闇の空間で3回ほど死んだが、ゆっくりと近付いてくる死の恐怖は比べ物にならない。

いつのまにか目の前に来ていた少年が口を開く

「最後にいい経験が出来てよかったね。なかなかいい顔をしていたよ」

そして、目の前まで来た少年はこちらに手をかざす。驚くほど冷静に状況を分析しながら、俺の頭の中は恐怖でぐちゃぐちゃだった。

（あ…ああ足がアシがマズイウゴケ動け怖いイヤダ逃げナクチャダ、ダレカタスケ――）

「じゃあね」

地面から生えた石の槍は、俺の首を貫いていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ここは……？」

気が付くと周りは黒一色。全身を襲う落下特有の浮遊感。間違いなく、つい最近3度死んだあの場所だった。

「俺は……今度こそ死んだのか……」

何故この場所に居るか気になるがもういいだろう。自分は死んだんだ。何が来ようとどうでもいい。

そう思い、諦めて目を瞑っていると……いつのまにか落下している感覚が無くなっていた。

（……？）

目を開ける。見えない。だが何かに乗っているかのように、下から自分の身体が支えられていた。

「誰か居るの？」

暗闇へ向け、訪ねる。

「……」

返事は、ない。何を期待したのだろう。どうせすぐにまた落下が始まる。

所詮無駄な期待だと再び目を閉じようとして――――

「イキタイカ？」

声が、聞えた。

「だ、誰！？」

「我が名は【アジーン】。龍の御子よ、今一度問う。生きたいか？」

（……生きられるのか？　……自分はまだ生きられるのか？）

「さあ、心を示せ。我にオマエの心を刻み付けろ！」

聞えてきた暗闇からの声。何かを待っていたような、そんな声。

今まで１９年生きてきた。気付いたら異世界で変な体になったけど心から死にたいとは思わなかった。まだ色々やってみたいこともあ

る。彼女だって欲しい。正直、未練だらけだ。

「俺は……できるならまだ生きたい！　死にたくなんかねぇよ！！」

突如、目の前に巨大なドラゴンが現れた。あまりの巨大さに顔の先端しかわからないが、俺にはそれがドラゴンだと何故かわかっていた。そして、俺はその手の上に乗っていた。

「……承知した。オマエの心、しかと受け取った」

それは暗闇からの声と全く同じ声。ドラゴンはその大きな瞳で俺を凝視していたが、不意に何かを認めたかのように、ニヤリと凶悪な笑みを浮かべた。

お前を、選んでやる

そう言うとドラゴンはゆっくりと、俺をそのでかい口の前に持っていく。

「え!?　ちょっ!?　何すんの!?　うおぁぁぁああ!?」

俺はドラゴンにパクリと飲み込まれた。

ーーー

「……何だ？」

石の槍は確実に喉を貫いている。まだかろうじて生きてはいるが、すぐに心臓も止まるだろう。放っといても何も問題はない……はずだ。

しかしこの気配は何だ？

何か巨大な生物が目の前に現れたような圧迫感を、白髪の少年は感じていた。

ドクン……

途端、項垂れたままもう意識もないはずの青髪の少年の手が動き――――

「……！！」

自らの首を貫いている石を掴み砕いた。

「……馬鹿な……」

青髪の少年は俯いたまま、首に突き刺さったままの石槍を無理やり引っこ抜く。

ドクン！

「……う…あぁぁぁぁ……」

（……！　危険だ！）

理解できないその光景を止めようと、白髪の少年がトドメを刺すべく踏み込んだ瞬間――――

「ガアアアアアアアアアーーーーッ！！」

「！！！！」

咆哮が、響いた。

声の主、青髪の少年の足元からは炎のようなオーラが吹き上げている。彼はその火柱にも似た光の中で宙に浮いていた。部屋には凄まじいまでの風が吹き荒れ、白髪の少年は吹き上げるオーラに弾き飛ばされていた。

「……クッ！？」

（なんだ……これは……）

白髪の少年は理解できない目の前の現象に珍しく焦っていた。いや、正確には理解できなかったわけではない。話には聞いていたし、目の前の少年が「彼ら」の生き残りだとしたら変身するのが当たり前と思えたからだ。

だが目の前の状況は聞いていた話とは全く違う。

力が違う、規模が違う、プレッシャーが違う。完全に自分より上位の存在。そう思わずにはいられない。少なくとも今の自分なら「彼ら」が変身しようとも楽に勝てると言われていた。だから圧倒的すぎる力を感じさせる目の前の現象は、白髪の少年の理解の範疇を超えていたのだ。

そして、白髪の少年の目の前で、火柱の如きオーラが一層強烈な閃光を放つ

「！！」

あまりの閃光に思わず目を細めた白髪の少年が次に目にしたものは、

宙を舞う自らの左腕だった。

第一章　5、暴走

「……こ、こんな……うぐっ！」

何も見えなかった。気付いたら左腕が斬り飛ばされていた。魔法障壁は完璧だったはずだ。いつの間に貫通したのか。わからない。喉を掴まれている。このままではマズイ、とにかく脱出を……。

白髪の少年は右の腕で左腕の切断面を抑えながらもがいていた。片腕で、自分の体を軽々と持ち上げている生物から逃れるために。しかしその抵抗は、何の影響も目の前の生物には与えなかった。元の青い髪の少年だったなら、上半身毎消し飛ばしてもおかしくない蹴りを、ガンガンとその顔面に打ちつける。生物は、微動だにしない。

「ッ！」

その生物は白髪の少年の喉を掴んだまま、その身体を上に掲げて――――猛スピードで急上昇した。

「……あ……ぐっ！？」

次から次へと高速で天井を貫く。一つ破壊する毎に白髪の少年が呻き声を上げるが、生物は止まらない。猛烈な速度で最後の天井を抜け、青空が見えたところで、その生物はようやく止まった。

（このままでは……駄目だっ！）

そう決断した白髪の少年は、右腕に魔力を込めた。

「くっ……ふっ！」

力を集中させた拳で生物の胴体を殴り、その反動でなんとか掴まれていた首を振りほどき、距離を取る。そこでようやく相手の姿を確認した白髪の少年は、目を見開いた。

自分と似た白髪、真っ赤な瞳、両腕には肘から先に真っ赤なドラゴンの腕を彷彿とさせる手甲、下半身は黒い何かに覆われ、両足にも膝から下にドラゴンの脚に似た形の脚甲がついている。背中には羽のような突起があり、赤い光が吹き出ているようだ。

さっきの青髪の少年の面影はどこにもない。「彼ら」がこんな姿を取るなんて聞いたことが無い。

（なんなんだ……コイツは！？）

白髪の少年は混乱していた。唯一つわかっているのは、このままでは自分が確実に死ぬということ。蹴った顔面も、殴った箇所も、傷一つついてはいない。今の自分では例え“本来の姿”に戻っても、勝てる気がしない。じっとこちらを睨み続けているその眼からは、絶えず殺気が溢れている。逃げたい所だが、先程の速度から考えても到底逃げ切れない。転移するにも空中では水がない。

（せめて左腕があれば）

あった所でどうしようもないが、無いよりマシだ。しかし、八方塞がり……そんな考えが頭をよぎった直後、自分はまだ運に見放されていはいない事を、少年は自らが崇拝する神に感謝した。

「おいおい探したぞバルバロイ……お？　何？　おまえ怪我してんの？」

「お〝、お〝で……ま〝わ〝り〝み〝でぎだげど、だ、だれ〝も〝い〝な〝がっだ」

「ふぅん？　あなたが手傷を負うなんて……堕ちたものねぇ」

「……」

禍々しい魔力を放つ人型が四つ、バルバロイと呼ばれた白髪の少年の側に飛来した。いかつい男、太った男、妖艶な女、顔のないヒトガタ。一緒にこの辺りを探索していた者達で、いずれも爵位持ちの上位魔族だ。

「やぁみんな。いきなりで悪いけど、アレの相手をしてくれないかな？　ちょっと僕疲れてるから」

左腕の切断面を抑えながら、少年は目の前の生物を顎で指す。四人の魔族は釣られてそちらへと目をやった。

「お？　……っておいあれ……人間なのか？　やっちまっていいのか！？　なぁおい！」

「お〝でばら〝べっだ。あ〝れ〝、ぐっでい〝い〝が？」

「やれやれ、気が進まないわねぇ」

「……」

四人の反応からもう一押しだと判断したバルバロイは、少しずつ下降しながら距離を取る。あの生物はどうやら４人の方を意識しているらしい。こうなれば好都合。彼らを囮にして、腕の回収を優先する。

「あ、それと、アレ化け物だから気をつけてね。帰ったら一杯奢る

よ」

「おお！？　マジか！？　おまえってそんなイイ奴だったか？　言っとくが俺メチャメチャ飲むからな！　言質取ったぞ！」

「お〝、お〝で、ばら〝い〝っぱい〝ぐう〝。だ、だの〝じみ〝」

「フフフ……そういうことなら、頑張らないとねぇ」

「……」

（帰ってこれれば……ね）

自分の仲間をけしかけて、バルバロイは腕を回収しに先程の部屋へと落ちていった。

＊

（体が……熱い……）

朦朧とする意識の中で、龍亮は目を開けた。手も足も頭も胴体も、何か自分の体が自分じゃないような、妙な感覚のままで目だけを動かす。

（ここは……空……？）

浮いている。あり得ない。

そう、あり得ないはずなのに、その事に疑問を挟む気は起きなかった。これは当たり前。空を飛ぶくらい当たり前の事。気にする必要さえない。そんな風に、今のこのあり得ない現象を、ぼんやりと受け入れていた。

（何か……）

何かが、皮膚の薄皮一枚の下で暴れ回っている。そんな初めての感覚。戸惑う。訳が分からない。

（苦しい……）

徐々に大きくなっていくその感覚は何なのか。止められない。どうすれば。

（……手……が……）

ふと、指先に残る感触。おぼろげに、あの白髪の少年の腕を斬り飛ばした気がする。

これは、その感触。

（……）

虚ろな視線が前を捉える。変なのが４人、そこにいる。さっきのはどこへ行った？　こいつらは何だ？　あぁ、敵か。そうだ、俺……殺されて……ああ、そうか。敵は倒さなきゃ……倒す……タオス……

「ウオオオオォォォォォォアアアア！！！！」

世界は、真っ赤に染まっていった。

＊

一瞬。

魔族４人、誰が最初にあの正体不明の相手をするか決めようとジャンケンをしようとした時、咆哮が轟いた。驚くように振り向いた彼らの前に、それは居なかった。

「オガァッ！？」

鈍い悲鳴。それだけを残して、彼らの仲間の一人である太った魔族の腹に、正体不明の肘がめり込んでいた。パン、と風船が割れるような音が響き、肘の威力は背を貫いて、トンネルのような大穴をそこに空けた。

「！！　ば……！？」

馬鹿な。いかつい男の魔族はそう口にしようとして、最後まで言わずに身を翻した。太った魔族はこの４人の中で随一の防御能力を誇る。それがたったの一撃で致命傷。信じられない。残った３人は目の前の生物を侮っていた事を悟り、そして気を引き締めた。全力で殺す。もうそこには先程までの余裕を見せていた３人は居ない。

腹に大穴を開けた太った魔族。それにとどめを刺そうとした正体不明の両脇へ、左右に展開した女性型魔族と顔なしの魔族。その両手から、巨大な魔力の光弾が放たれる。手加減は無い。人間ならば掠っただけでも死に至る。迫る巨大な光に両手を向けた正体不明は、涼しげな表情のままで、いとも容易くソレを受け止めた。

「……っ！？」

「そんな！？」

顔の無い魔族にさえ、ハッキリと驚愕の色が浮かぶ。認めたくない。こんな馬鹿な事があってたまるか。そんな事を口走りたかったが堪える。これで倒せなかったのは意外。だが動きは止めた。もう一人の厳つい魔族が正体不明の頭上を取った。腕を鋭い刃へと変形させ、両断するべく迫る。二段構えのコンビネーション。

だが正体不明の表情は変わらない。受け止めていた光弾を掴み、あろうことかそれをあっさり上へと放った。腕を軽く振っただけのはずなのに、尋常でない速度で打ちあがる光弾。頭上の確認すらしていないはずのそれは、厳つい魔族への軌道を確実に捉えていた。

「うおおっ！？」

予想していなかった正体不明の反撃。咄嗟に停止し、横へと逸れる厳つい魔族。目の前数ミリを通り過ぎた光弾に、わずかに肌を焼かれる。そしてすぐさま下に居る筈の正体不明へと目をやって――

「が……は……っ！！？」

正体不明の右腕が、厳つい魔族の腹を貫いていた。背中から生えた腕の先端、鋭い爪からは青い血が滴っている。自らの魔法障壁が、この正体不明に何の効果も無かった事を魔族が認識するより早く……正体不明の蹴りが、その顔面を捉えた。猛烈な勢いで大地へと叩き付けられた厳つい魔族は、もう動けない。

（……一匹……）

正体不明は次に、光弾を放った魔族二人へと目をやる。そこには女性型一人しか居ない。その一人は呪文を唱え、先程よりも強力な魔力を溜めている。正体不明が詠唱中の魔族を標的として定め、そちらへと動き出そうとした瞬間、背後から何かに羽交い絞めにされた。

「そのまま抑えてな！！」

女性型の溜めた魔力が一層の輝きを放つ。背後から抑えている魔族――顔無しの力は強く、振り解こうとする正体不明に懸命に喰らいつく。

「フフフ……死ね！！」

顔無しが避ける時間的余裕はない。巻き添えになるが仕方が無い。一番の優先事項はこの正体不明を葬る事だ。女性型が、魔力を解き放とうとしたまさにその時。

「！？　……ッアアアアア！」

顔無しの声にならない悲鳴が木霊し、その両肩からは青い血が噴出していた。

腕は、ない。

正体不明の背中の突起から発する赤い光が瞬間的に膨らみ、まるで水圧カッターのように、顔無しの肩口から先を切断したのだ。よろよろと痛みに耐えるように、呻きながら離れる顔無し。正体不明の左手には、切断した片腕が未だ残されている。そして返り血を浴びて青く濡れた正体不明は、空いている右腕で、顔無しの頭を掴んだ。冷めた表情のまま、メリメリと骨が軋む音を響かせながら、今にも握りつぶさんばかりの力で締め上げる。

「アアア……アアアアアッッ！！」

正体不明はそのまま、悲鳴を上げる顔無しをまるでボールか何かのように投げつけた。先程、厳つい魔族を蹴落とした場所へ。猛烈なスピードで。またもや大地に大穴を開ける。顔無しの意識は、もうない。

（……二匹……）

「お……おのれ……っっ！」

女性型は焦った。溜めた魔力は完成している。しかし、動きを止められないのなら、遠距離で当てるのは不可能。危険だが至近距離で炸裂させるしかない。

女性型は、真正面から正体不明へと迫る。その顔には正体不明とは正反対に、鬼のような形相が浮かんでいる。そして正体不明は、持っていた顔無しの片腕を、女性型へ向けて投げつけた。

「！？」

何のマネだ。こんな物、牽制にすらならない。飛んでくる腕を無造作に払い除けようとして、女性型はその向こうの正体不明が、自分に向けて手をかざしている事に気付いた。

『メガ』

正体不明が、呪文を唱える。瞬間、女性型の目の前にあった腕が、轟音と共に爆発した。

「あああっ！？」

強烈な熱と閃光に目を焼かれ、動きが止まる。魔族の再生能力を持って、即座に視力だけは回復させた女性型が再び上空へと目をやると、正体不明は居ない。

「後ろか……っ！」

女性型は気付いた。気付けた。
が、間に合わなかった。
自らの腹に、腕が生えていた。痛みは遅れて襲ってきた。

「か……ぁ……！？」

障壁が役に立たない。それに加えてなんという速度だ。この正体不明に自分達魔族が、そもそものスペックで負けている。バルバロイは、なんてモノを押し付けてくれたんだ。ちくしょう。

女性型は恨み節を吐く時間すら与えられず、正体不明は血濡れの腕を引き抜くと同時に下へと殴り飛ばした。厳つい魔族、顔無し魔族と同じ場所へ。大地に三つ目の大穴が空いて、女性型は呼吸を止めた。

（……三匹……）

「ヒ……ヒィ……」

最初に腹に大穴を明けられた太った魔族は、軽くなった腹を押さえながら逃げていた。逃げ出そうとしていた。何なんだこれは。こ

の状況は。こんな化け物の相手なんて無理だ。こんなはずじゃなかったのに。逃げるしかない。

よたよたと力なく宙を飛ぶその太った魔族を、正体不明は逃がさない。背中の突起から赤い光を大きく噴出させ、距離を詰める。僅かな間にその太った魔族の背中を捉え、そのまま頭からの体当たり。

「ガァ〝ァ〝ッッ！？」

開いた穴をさらに大きく広げるような、重い重い一撃。飛び出た血が、さらに正体不明を青く染める。正体不明はさらに太った魔族の頭上で両手を組み、脳天を叩き潰すように、それを振り下ろした。

「グギャッ！？」

耳障りな音と悲鳴。それと共に頭を陥没させた魔族は、他3体と同じように地面へと叩き付けられた。大地に4つ目の大穴が開いた。

（……これで……全部……）

大地の密集した箇所に、4つの大穴。それを見下ろす血濡れの正体不明は、空へと手を掲げる。広がる空に、分厚い雲が集まりだした。巨大な力を集中させ、正体不明は、呪文を唱える。

『バルハラー』

空気が膨張する強烈な音。そして目も眩むほどの閃光。極太の柱のような雷が、地上の4つの大穴目掛けて降り注ぐ。

「……」

痕には、焦げた地面と溶けた岩で出来たクレーターだけが残っていた。

＊

（４人の上位魔族を瞬殺、か）

バルバロイと呼ばれた白髪の少年は考えていた。

昨日感知した妙な力は多分アレだ。全く正体がわからないが、恐らくは「彼ら」の突然変異種か何かだろう。これは報告しておかないといけない。

（でも……）

自分が恐怖を感じたなんて認めたくないが、認めるしかない。今日のこれは屈辱だ。力を回復させ、必ず……僕がこの手で殺す。それまでは君の命、預けておく。

（必ず……）

白髪の少年は、あの空に浮かぶ正体不明への復讐を誓う。そして自らの千切れた左腕を拾い、どす黒い床の血溜りの中へ、静かに消えて行くのだった。

第一章　5、暴走（後書き）

２０１１／０５／０２全面改稿

第一章　6、旅立ち

寂れた村の入り口に、二つの影が立っていた。一つは、青い髪をした少年の物。もう一つは、それよりもさらに小さい小動物らしきモノ。

「おっし、そろそろ行こうぜ、相棒！」

「はいよ。でもまさかリアルでこんな火事場泥棒紛いなコトする事になるとはなぁ……」

どう見ても小動物としか思えない物体から流暢に紡ぎ出される人語。その小動物から相棒と呼ばれた少年は、溜息交じりに言葉を返している。

「気にするこたぁねえって。もうこの村にゃ誰もいねぇからよ」

「……そうだね」

少年はある程度の荷物を背負っていた。小動物はとっととこの場所から離れたいのか、少年を急かしている。一体何故、こんな事になっているか。その経緯はと言うと……

＊

あの後、龍亮は村へと戻った。周りに怪しい気配はすでにない。

何でかはわからないが、そういうのが感覚でわかるようになっていた。歩いてるところで自然と変化が収まったのか、ハッキリと自分の意志が帰ってきている。

「……」

龍亮は、自分が何をしたのかだけは、しっかりと覚えていた。

あの白髪の少年の腕を訳のわからない力で切断し、天井を突き抜けて空へと舞い上がり、４人の悪魔みたいな連中を一瞬の内に粉砕した。思い出してみれば、無敵の力を使って敵を蹴散らしただけ、と思える。龍亮は、少なからずそのような力には憧れを持っていた。

しかし、今龍亮の表情は明るくない。

怖い。

龍亮は怖かった。未だ手に残る感触や、視界を青く染める血飛沫。自分の持つ現実感とは懸け離れた現実に気がおかしくなりそうだった。もう自分は今までの自分じゃないんだと文字通り魂で理解したのだ。でも、だからと言って生を放棄するつもりはない。少しだけボーっとした後、龍亮は一応世話になったユンナ、そして村長の墓を立てる事にしたのだった。

村長の死体を前にして再び襲ってきた吐き気を何とか抑え込み、古びた農具を拝借して外に掘った穴に埋めていく。作業をしながら龍亮はぼんやりと思った。きっとこれから、こんなことは何度も見ることになる気がする。慣れたくないけど割り切らざるを得ない、と。

ユンナの石像はできる限り砕けた破片を持ちより、同じく埋めることとした。研究室のあちこちに飛び散った破片を集めている途中、龍亮はあの機械の部屋の隅に電子レンジのような物がある事に気付いた。

何となくその物体に近付くと、中にはイタチらしき小動物が入っているのがわかった。どうやら生きてはいるらしく、きょとんとした目で龍亮の方を見ている。

（何かの実験動物かな？）

あのユンナさんがペットなんて飼ってるはずもないしな、等と龍亮がそのイタチを見ながら考えていると……

「おう！　お前、誰でもいいから俺っちをこっから出してくんねぇか？」

……いきなり話し掛けられた。勿論、龍亮は固まった。さすがに言葉を話せるだなんて思いもしなかったのだ。改めて、もう自分の現実は通用しないまさに異世界なんだな、とその何でもありな事実に驚いた。

「何固まってやがんだよ！　ほら、下にスイッチがあんだろ、さっさと開けてくれよ」

口の悪さにちょっとムッとした龍亮だが、まぁ別に取って食われる訳でもないだろうしいいかと思い、電子レンジのスイッチらしき物を押す。適当に押すとシュゥゥという煙と共に、レンジの前面が開いた。

「いやー、助かったぜ。サンキュー見知らぬ小僧！　んで？　あのクソヤローはどこだ？」

開くや否や凄い勢いで外に飛び出て、辺りをキョロキョロするイタチ。

「糞野郎って？」

「ユンナだよユンナ。あのボケジジイ俺っちをこんなとこに閉じ込めやがって！」

イタチらしき小動物が汚い言葉を撒き散らしながらぷりぷり怒っている。なんともシュールな絵柄である。見た目はかわいいのになぁ、と龍亮はイタチの口の悪さを微妙に残念がった。

「ああ？　なんだコリャ？　何だってこんな荒れてやがんだ？　地震でもあったのか？」

そこでようやくイタチはこの部屋の惨状に気がついた。驚いたようにチョロチョロ行ったり来たりしている。ていうかあの惨劇に気付かないとかこいつ結構図太いんだな、と龍亮は密かに思った。

「なぁ、えーと……君？　は一体なにもの？」

「あん？　俺っちはフェレットのボッシュってんだ。そーゆーおめぇさんは何モンだ？」

「あ……ああ、えーと俺はたつな……」

そこまで言いかけてふと、龍亮は思う。俺はもう俺ではない。多

分あのとき……あの白髪の少年に殺されて、暗闇の中でドラゴンに食われたときに完全にこの世界の者になった気がする。元の世界に帰る手段もわからないし、この姿で帰ってもどっちみち一人ぼっちだろう、と。

「……」

きっとこの世界にある日本は今まで自分の居た日本とは違う。自分自身の居場所はないから新たに作らなきゃいけない。龍浪の名前もきっと混乱するから、これからは名乗らない方がいいように思える。

「……」

「おいおい、何を黙りこくってやがんだ？」

そこまで考えて別の適当な名前を名乗ろうかと思った龍亮だったが、本名まで完全に捨てるのも心情的に嫌だった。どこかに元の自分との繋がりがあり、かつ違う名前。そんな名前を探して、不意にその口から出たのは……

「俺は……“リュウ”って言うんだ」

龍亮は、思わず心の中で苦笑した。真っ先に出たのが祖父に呼ばれてた愛称だったからだ。それに、自分の名前の一部でもある。ついでにこの姿には本当にお似合いな名前に思えてくる。安直だけど、とてもしっくりきた。

「リュウか。わかったぜ。所でよ、おめーこれからどっか行くのか？」

「いや、実はこれからどうしようか迷ってたんだけど……」

実際、これからどうしようかは悩んでいた所だった。本当は日本に行きたいけれど、道もわからなければ金も無い。ここが中国だという事がかろうじてわかっているだけである。

「そうかい。なら俺の故郷へ来ねぇか？　なに、ここから出してくれた礼がしてぇだけさ」

イタチ……ボッシュはそう言うと、僅かに照れくさそうにしている。なんだか、お互い何となく通じる物があるな、と龍亮改めリュウは思った。

「……わかった。ここに居ても仕方が無いし、連れてってもらっていいかな」

「おうよ。ならとっとと行こうぜ。いつまでもこんな辛気くせぇとこにいちゃあ体が腐っちまうぜ」

トコトコと部屋の入口に向かうボッシュ。相手がフェレットとは言え、一応これから一緒に行動する訳だから、とリュウはちゃんと挨拶する事にした。

「あ、んじゃぁよろしく。えーと……ボッシュさん？」

「んだよ水臭ぇな。ボッシュでいいってんだよ。こっちこそよろしくな、相棒」

「！」

（相棒……か）

ごく自然にそう呼ばれて、リュウは別に悪い気はしなかった。“ボッシュ”にそう言われるとホントに自分が“リュウ”になったんだと妙に実感できた。

「あ、でもちょっと待って。これからちょっと……お墓を立てるから」

墓を建て終えると、既に日は暮れていた。リュウはボッシュと共に誰も居ない村のユンナの家に泊まり。朝を迎える事にしたのだった。

＊

「おら、いつまでも辛気くせぇ面してねぇで行こうぜ！」

「うん」

準備はした。この村に戻ることがあるかはわからないが、もし機会があるならどこかで戻って来よう。自分の新たな始まりの地だから。いくつかわかったこととまだよくわからないことがあったけど今はいい。

リュウは、空を見上げながらそんな風に思う。

ユンナが何を考えていたのか。村長が怒った理由。あの白髪の少年……見覚えがありすぎる彼が襲ってきた理由。村人が居ないこの村。気になる事は多々あれど、ここに居た所でわからない物はわからない。考えるだけの時間なら、これから結構ありそうだ。まぁ、なんとかなるかな。

少年と一匹は誰にも見送られず旅立っていく。

空は、雲一つない晴天だった。

「あぁ！　しまった。おいちょっと待て相棒！」

「何だよボッシュ。人がせっかくこう感慨に耽ってたのに……」

「忘れもんだよ。ぜってーアレ持ってった方がいいって。癪だがあの辛気くせぇとこへ戻るぜ！　ほら！」

「へいへい」

さてどうなることやら

続く

第一章　6、旅立ち（後書き）

２０１１１１０１修正

第二章　1、変身

「こっからどうしよっか……」

「どうするっておめぇ……どうすっかな」

ドラグニールの村はやたらと険しい山々の間、奇跡的に開けた場所に作られていた。なのでそこから出ようと言うなら当然、命綱なしのロックでクライマーな真似事をしなければならない。早速そんな文字通りの「壁」にぶち当たり、リュウとボッシュは早くも心がペキッと折れそうになっていた。どうやったらこんな立地条件の悪い場所に村を作れるのだろうか。色々通り越してそう感心するリュウである。

「相棒よぉ、やっぱここはアレ使うしかねぇよ。なぁに大丈夫だって……多分な」

最後の一言を極めて小さな声でボソッと付け足すボッシュ。アレ、とは何かすぐさま悟ったリュウ的には、そう簡単に承諾できるものでもない。

「ボッシュお前無責任すぎだろ。そうそう簡単にあんな力使えるかアフォ！」

「ああん！？　アホってなぁ俺っちの事か！？　言うじゃねぇかこのハナタレ小僧！」

「あーもう、いちいち突っかかってくんなよこのボケイタチ！」

売り言葉に買い言葉。ちょうどお互い溜まっていたストレスが、口を突いて出てしまう。あれよと言う間にエスカレートしていく一人と一匹。

「俺っちはフェレットだっつってんだろうがぁ！」

怒りのボッシュのかみつく！

リュウの指に大ダメージ！

「痛ってぇー！　やりゃーがったなこの野郎！」

リュウの反撃、全力で拳を叩きつける！

ボッシュにクリティカルヒット！

「おぐっ……」

ボッシュから大量の血が流れ出る！

「……さてどうしよ」

「ヒュー……ヒュー……この……野郎……」

ボッシュの顔からは段々と血の気が失せていく。リュウの一発は致命傷だった。息も絶え絶えに最後の力を振り絞り、リュウをキッと睨みつけて――――

「……ちったぁ手加減しろやこのボケ！　死んだらどーする！」

――――ガバッと、起き上がった。ボッシュの体にはいつの間にか傷一つ見当たらない。

「いやそうは言ってもお前不死身じゃん」

「っかぁーーーっ！　わかってねぇ！　わかってねぇよ！　不死身だろうが動物虐待ってヤツだろがぁ！」

興奮するボッシュ。対してリュウは幾分冷静になったのかどうするか真面目に考えていた。結局ここから移動するには崖を登るしかないのだ。少々怖いが他に方法も無いので、結局はアレをやるしかないか、との結論に達していた。

「はいはいわかったわかった。いいからホラ離れて。また巻き添え食うぞ」

「おお？　なんだよやる気になったってのか？　初めからそうしてりゃいいんだよ！」

どうやら相棒が自分の助言を受け入れた物と思い、途端に機嫌を良くするボッシュ。むっとしたリュウだが、ここでまた暴言を吐いたら先程と同じことの繰り返しなので耐える事にする。

「いいから離れろって。今度は丸焼きにすんぞ！」

「俺っちすぐ復活するけどな」

「うっさい」

そしてリュウは自分の中へと意識を集中させていく。

さてここで話は数時間前に戻る。今リュウが何をしようとしてい

るのか。そしてリュウが出発しようとしたとき、ボッシュが慌てて引き止めてまで持って行きたかったモノとは――――

――――――

「おっ！　あった！　ありやがったぜ相棒！」

そう言ってボッシュが機械同士の狭い隙間からずりずりと引きずり出したのは、何かのアクセサリーのような物だった。確かに中央に宝石のようなものが付いているのがリュウにもわかる。

「ふ～、やっとか。ていうかどこにあったのさ」

「ああ、俺っちの寝床の裏の隙間にあったぜ！」

「電子レンジの裏ぁ！？　普通自分が居た周辺って真っ先に探すだろ！？」

若干呆れ気味に突っ込むリュウ。無駄な時間を過ごしたと言えなくも無いが、あまり気にすると話が進まなそうなので、これ以上はスルーするつもりだ。

「まぁんなこたぁどうでもいいじゃねぇか。そんなことよりよ、コイツを見て驚け！」

リュウの突っかかりよりも見つけた喜びの方が大きそうなボッシュ。彼はそう言いうとその妙なアクセサリーを改めて口に咥えなおし、目の前に落ちていた瓦礫の岩に近づけていく。

すると……

「！？　岩が消えた！？」

そう、リュウの目の前で、そのアクセサリーを近づけた岩が突然消えたのだ。ヒュパッと音を立て、一瞬にしてその視界から消え去

った。リュウは驚きで目を白黒させている。

「へっへー、ビックリしたろ？　コイツはよ、「ドラゴンズ・ティア」って言ってな。この真ん中の宝石ん中に、「物」を入れておけるってスグレもんよ」

物凄い自慢顔で説明するボッシュ。ここまでふんぞり返ったフェレットを見たことのある人間など、これまでの歴史で存在しただろうか。いや、居ない。

「ふーん。そんな便利アイテムがあるとはねぇ。なんでそんなのをユンナさんが持ってたんだろ？」

（ドラゴンズ・ティアにそんな効果あったっけ？）

勿論、リュウの知識の中に「ドラゴンズ・ティア」と言う名前は記憶されている。重要アイテムであったことも忘れてはいない。

「そこまでは知らねーよ。俺っちは前にあのボケジジイが弄ってたのを見てただけさ」

「ふーん」

「ま、あいつはもういねぇんだし、俺っち達で使っても罰は当たるめぇよ」

若干、だがボッシュはそう言ってフッと遠い目をした。流石に自分を色々と実験に使った憎き相手とは言え、死んでしまったらどこかに哀れむような気持ちもあるのか、と思いを巡らせるリュウである。

「……じゃあ何か悪い気もするけど使わせて貰うか」

「おうよ。じゃあまずは使い方だがよ……」

……といった感じでリュウとボッシュはドラゴンズ・ティアを使い、ユンナ宅や村長宅にあった食料や使えそうな道具、そしてお金を拝借して詰め込んだのだった。火事場泥棒のような気がして咎める気持ちもリュウの中にも無いではなかったが、生きてる者がそれらを有効活用するというのも弔いになるだろう、と無理やり自分を納得させていた。

そして、それらの作業を終えたリュウとボッシュは今、元ユンナの家で少し休憩タイム。

「なかなか似合ってるじゃねぇか相棒」

「そう？　俺今までこういうアクセサリーって着けたことないからなんか恥ずかしいんだよね」

両側に豪華な龍の銀細工、真ん中に大きめで楕円の透明な宝石を嵌め込んだアクセサリーを、リュウはペンダントのように身につけていた。埃を取り、磨いてみると、かなりの年代物かつ値打ち物であるらしい。ちなみに服と靴に関しては、ユンナの家に何故かぴったりのサイズの物がいくつかあったので、ありがたく使わせてもらっていた。

「？　なぁボッシュ、何か心なしか体が楽になった気がするんだけど……」

そのアクセサリーを見につけてから、リュウはそんな不思議な感覚を覚えていた。何か身に着ける前よりも、明らかに心身が軽く感じられるのだ。

「あん？　そりゃ気のせいじゃねぇのかい？」

「いやでも……」

リュウは試しに、とドラゴンズ・ティアを着けたり外したりしてみた。着けるとやはり体が軽くなり、外すと少し重たげに感じる。どうやら間違いはないようだ。

「……やっぱコレを着けると楽になるな」

「じゃあ何かい？　そいつはただの便利な道具入れじゃねぇってのか……いや……」

そんな疑問を議論していると、何故かボッシュが唐突に神妙な顔をして、短い前足で額を押さえ始めた。

「どした？　なんか思い当たる節でもあった？」

「いやよ、今突然頭ん中に浮いてきたんだが……それにゃ「龍の力」ってヤツを抑える力があるんだとよ」

「？」

いきなりそんな妙な事を言い出すボッシュ。はっきり言って、怪しい。リュウの目がボッシュを胡散臭げにねめつける。

「突然って何それ。最初から知ってたんじゃないの？」

「いやマジで俺っちにもわかんねぇ……何かソレ見てたら突然頭にピカっと浮かんでよぉ」

心底不思議そうにそう言うボッシュ。嘘を付く理由も見当たらないし、演技にも見えないので本当なのか、と納得するリュウである。そして、そこで傍と気が付いた。体が軽くなる事実、「龍の力」を抑えるというボッシュの言葉。それらが示す事とは、つまり……

「それが本当なら、つまりコレを着けてれば、ひょっとしたら「あの姿」になっても暴走したりしないのかな……」

思い出すのも恐ろしい「あの力」。あれこそが、間違いなくボッシュの言う「龍の力」という物だと感覚でわかってしまう。あの時一度暴走したせいか、何となく変身の仕方も掴めていた。このアクセサリーを見に着けていれば暴走しなくなるのなら、と少し試してみたい気持ちが沸いてくる。

「どうしよう……でももし違ってたら洒落にならないしなぁ……」

自分の意思で操れるなら良いが、もしまた暴走したら今度はどうなるか想像できない。下手な事はしない方がいいかなぁ、と一人悩む少年。

「おいおい何悩んでんだぁ？　俺っちにもわかるように説明しろや相棒よぉ」

「……ん、わかった」

そしてリュウは説明した。自分の体と力の事。暴走した事。その結果どうなったのかという事。自分の本当の正体だけは隠して、ボッシュに訥々と語った。

「……ってーこたぁ、あそこをボロボロにしたのは相棒だったのかい。人は見かけに寄らないってなぁよく言ったもんだなぁ」

「悪かったな。んでさっきのボッシュの説明だと、このアクセサリーがあれば暴走はしないんじゃないかなー、と思ったんだけどどうだろ？」

「ダメ元でやってみりゃいいんじゃねぇかね？　どうせこの辺にゃあ生き物はいねぇんだしよ」

ぶっきらぼうに言い放つボッシュ。まぁ確かにその通りか、とリュウは納得した。この村には最早住人は一人も居ないし、動物も遠い所に鳥が飛んでいるくらいで迷惑は掛からないだろう。

「……それもそうか。敵とか居なければ元に戻れると思うし」

実際敵を倒した後に元に戻れた事もあり、リュウは安直にそんな風に考えていた。

「おうよ。んじゃあその相棒の「力」ってやつを見せてもらおうかね」

リュウとボッシュは力を試すべく外へと出ることにした。村から離れ、ちょっと広めの岩場のような場所に着くと、早速リュウは「あの力」の発動に取り掛かった。

「……」

恐らくあの暗闇で、ドラゴンに食われた事がトリガーになったのだろう。リュウは自分の中に意識を集中すると「それ」が見えてくるという事を何となく理解していた。「それ」とは抽象的なものだが、言うなれば「スイッチ」だ。意識を集中させてこれをＯＮにすると、全身が変わりだすのだ。

「……」

体の力を抜き、目を閉じて自分の内側に意識を巡らせる。そうすると段々と、「スイッチ」が浮かび上がってくるのが分かる。はっきり認識すると同時、足元から火柱のようなオーラが噴き上がる！

浮かび上がったスイッチを、気合を入れるようにＯＮにする。気合を入れるのは一番変身をイメージしやすいのが良い。半分は気分の問題だがノらないよりはノる方が良い。そしてリュウが行う「気合を入れる動作」とは、自分の記憶の中にある“変身”の象徴。

即ち、力の限り叫ぶ！

「でえぇぇぇぇぇぇやあぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！！」

「うおお！？　あ……相棒！　か……加減てやつを……ぶげぁ！？」

足元から噴き上げていたオーラが強烈な閃光を放ち、辺りに暴風が吹き荒れる！

次の瞬間弾け飛ぶオーラに吹き飛とばされた何かが離れた岩へと激突！

暴風が止むと、そこにはドラゴンと人間の中間のような姿の化け

物が佇んでいた。

（……だ……大……丈夫）

変身が完了しても、リュウは意識を保っていた。着ている服は吸収されたのかもわからないが、ドラゴンズ・ティアだけは変身後も変わらず首に掛かっていた。そのおかげかあの暴走時よりははるかにましであった。だがそれでも、思ったほど自由に動けるわけではない。

（……く……うぅ……）

気を抜くと意識が飛びそうになる。こなくそ、と何とか耐えていると、少しずつだが慣れてきて、ある程度は自分の意志で動かせそうだとわかってきた。背中に意識を集中させて宙を飛んでみる事にする。

「……！」

ふわりと、足が浮いた。どうやら上に浮くくらいならなんとかできるらしい。

（も……もういい……戻れ！……戻れ！！）

ふっと、リュウの体が淡い光に包まれ、それが消えると元の青い髪の少年の姿を取り戻していた。どうやら強く念じれば戻れるらしいという事がわかった。一応これで現状の把握ができたというところだ。

「はぁ……はぁ……」

リュウの全身に疲労感が漂う。それは例えるなら全力で数百m走ったときのような、そんな疲れだった。何となくだが、訓練すれば徐々に疲れないように出来そうな手応えがある。ドラゴンズ・ティアのおかげか、なんとか変身も自分の意志でコントロールできそうな感触を得た。やはり物事はやってみる物だ。助言をくれたボッシュに感謝しなければ。

「ふぅー。なぁボッシュ今ので……？　……あれ？　ボッシュ？」

そこでリュウはようやく気が付いた。側に居た筈のフェレットの姿がない。どこ行ったんだよ、と辺りをキョロキョロと見回してみて……

「あ……！」

ちょっと離れた所の岩の下に、血ダマリの中で動かないフェレットの姿が目に入った。岩に強く全身を叩き付けられたのだろう。明らかにボッシュの全身から絶えず流れ出たとしか思えない量の血だった。

「ボッシュ！」

リュウは急いでそこへと駆けつけた。まさかこんなことになるなんて。リュウの心に後悔の念が渦巻く。これはもう、助からない。自分が殺してしまった。そんな申し訳ない気持ちが溢れ、自然と涙が落ちようとして……

「……っかぁーーー！　効いたぁ！」

「……え？」

ガバッと、倒れていたフェレットが体を起こした。

「ったくよぉ、危ねぇじゃねぇか相棒！　死んだらどーする！！」

「……」

そこには元気に怒鳴り散らすボッシュの姿。夢でも見ているのかと、リュウは思わず自分の頬をぷにっと抓った。普通に、痛い。

「お前……何で無事なの？」

「ケッ！　俺っちはこのくらいじゃ死ねねーんだよ」

ぷいっとそっぽを向いてボッシュは言った。全く訳が分からない。リュウからはどう見ても死んでいる筈の怪我に思えた。色々と問いたかったが、それよりも生きていてくれた事が素直に嬉しかった。

「……あーもー、死んだかと思ったじゃねーか！　このボケイタチ！」

「あん？　心配してくれたってーのか？　意外と優しいじゃねぇかええ？　相棒よぉ」

「うっせー！　知るか！」

そんな照れ隠しのようなやり取りをしつつ、リュウ達は村を出て、一路ボッシュの故郷を目指すことになったのだった。

ーーー

色々と変身した自分の体の確認をする。今なら何とか飛べそうだな、と自分の体との相談を終えると、ボッシュがスルスルと身体をよじ登り、その首に巻きついた。

「おほっ！　相棒カッコいいねぇ！　おら、さっさと飛び越えっちまおうぜ！」

「了解。落ちんなよ」

そしてリュウは背中に意識を集中し、崖を飛び越えていくのだった。

第二章　1、変身（後書き）

2011／05／22　改稿

第二章　ＳＯＬ　～幕間～

／／／

「これって……？　一万円札じゃん！？　嘘、コレが全部そうなの！？」

そこには無造作に放りだされた一万円札の束が。紛れも無い日本銀行券そのものである。さらにボッシュは奥から束を掘り出し始めた。

「他にもあるぜ！　ポンド！　ドル！　フラン！　ルーブル！　ルピー！　ペソ！クラウン、リラ！」

「こ……これは……」

どさどさとリュウの前に放り投げられてくる札束の山！

「おほ！　ウォンまであるぜ！　世っ界中あらぁな」

「まさかこれが……この村の秘密……！？」

勿論これはニセモノなどではない、れっきとしたお札である。村長のヘソクリと言った所だろうか。それにしてもこの二人、意外とノリノリなのは突っ込んではいけないのかもしれない。

＊

所変わって今度はユンナの家。リュウとボッシュは村長宅と同じように物色していた。何故か料理系の器具が多いが気にする程のことはない。

「所でボッシュさぁ、なんであんなところに居たんだ？」

二人して泥棒よろしくごそごそしていると、ふとリュウはボッシュがどうしてユンナに捕まっていたか気になったので聞いてみた。

「ん？　あぁ……まぁその……色々あってな……」

「いや色々ってなんだよ。その中身を聞いてんの」

妙に言いたくなさそうな態度のボッシュだが、リュウに強く言われると渋々、と言った感じで話し出した。

「あー……いやまぁ……昔俺っちが自由気侭な一人旅してる頃よぅ、その、……スゲーうまそうな肉が目の前に転がっててよぅ。……ちょうどその時腹減ってたんで、思わずカブリついたらその……捕まっちまった」

「はぁ！？　何お前そんなくっだらない罠に嵌ったわけ！？」

リュウの割と容赦ない突っ込み攻撃が炸裂！　ボッシュの心に結構なダメージ！

「……う、うっせーってんだよ！　仕方ねーだろ！　腹減ってたんだからよ！　……はぁ。まぁそれからあのボケジジイに色々されたってわけよ」

（ああ、やっぱ実験用モルモットみたいな感じだったんだなぁ）

経緯はどうあれ、どこか哀愁漂うボッシュの姿にリュウはちょっと同情した。フェレットが窓の外を見て黄昏ているのはシュール以外の何物でもないが。

「……でさ、何であんな電子レンジの中に入ってたん？　あの騒ぎでも起きずに寝てたっぽいし」

「いや俺っちもよくわかんねーんだよ。毎日毎日あのボケジジイの顔見るたびに文句言ってやってたらいつだったか、文句言ってる最中にふっと寝ちまってよ。んで気付いたらあん中に居て、目の前に相棒が居たってわけよ」

「……」

何となくリュウは思った。きっとボッシュは口悪いから、ユンナさんがイラッと来て眠らせたんじゃなかろうか、と。という事は、ボッシュが入ってたあの電子レンジは長期睡眠装置みたいなものでは？　と思ったり思わなかったり。

「何か、大変だったんだ」

「そうなんだよ。訳わかんねぇ緑色の液体を注射されたりよぉ、他にも思いだしゃぁ殺意が沸いてきそうな事が山ほど……」

そんなこんなでいつの間にかボッシュの愚痴大会が開催され、物色タイムは続いていく……

／／／

／／

「……以上です」

「ごくろうでしたバルバロイ。下がって結構ですよ」

「……」

「……どうしました？」

「恐れながらお伺いしたいことがあります」

「構いませんよ。私にわかることでしたら」

「ありがとうございます。……あの少年は本当に“龍の民”なのでしょうか」

「……。なぜ、そう思うのですか？」

「僕はあれほどの力を感じたのはあなた以外では初めてでした。いくら“龍の民”が大きな力を持っているとしてもあれは尋常じゃない……とても話に聞いたレベルの物とは思えません」

「なるほど。確かに、その少年のものは大きすぎる力でしょう。ですが私にはわかります。多少異質な力も混じっているようですが、それは私が滅ぼしたはずの“龍の力”に間違いない」

「……」

「そして、“龍の力”は数が集まれば世界を滅ぼす力になる。その

少年が一人でそれほどの力を持つのなら、世界の為にも必ずや滅ぼさなければなりません」

「……お願いがあります。僕にあいつを監視させてください」

「……」

「今は無理かも知れませんが……近いうちに必ず……討ち取って見せます」

「……わかりました。かわいいバルバロイ……あなたの好きなようになさい」

「ありがとうございます。必ずや仕留めてご覧にいれます。……ミリア様」

何処とも知れぬ静かな空間。

そこには美しい女性と白髪の少年の姿があった。

第二章　2、移動

変身したリュウとボッシュは崖を飛び越えた勢いのまま一気に進んだ。人どころか動物の気配すら感じられない山をいくつか越え、ようやく平坦な開けた場所へと出た所で変身を解き、一休みしてから歩いて進んでいった。ちなみに変身自体が3度目であったせいか、前2回よりも自分の意思で制御できているという実感があったのは収穫と言えた。

恐らくは中国のどこかだろうと適当に考えつつ歩いていると、ポツポツと家らしき建物が目に入るようになり、チラホラ人も見かける事が出来た。ようやく普通の人間に出会えて、リュウは何となく安堵というか安心感の様なものを覚えていたりする。

「そんでさ、ボッシュの故郷って一体どこなんだよ？」

「ああ、日本だよ日本。わかるか日本ってのは……」

「ブフッ！？　ちょま、待った！？」

リュウは思わず噴出した。まさかこのフェレットの出身地が自分の出身地と同じ土地とは予想外だった。そっちを向いていたせいか思いっきり唾の飛んだボッシュは必死に顔を拭いている。

「おいィっ！　汚ぇだろうが何しやがんだ！」

「あーごめん。いや実はさ、俺も故郷は日本なんだよね」

「おぉ？　そうだったのかよ。何だよ教えてくれりゃぁ良かったの

によ」

「いやまぁでも……よく考えるとそうとも言い切れない……という諸々の事情がありまして……」

「？」

リュウのイマイチ煮え切らない態度にボッシュはハテナ顔だ。恐らくではあるが、その日本はリュウの故郷である日本と同じ日本で在り、かつ違う日本でもあるのだ。

そんなこんなでテクテク歩くリュウとボッシュ。だが流石に今進んでいるのは広大な畑らしき土地である。地平線さえ見えてきそうな場所を子供の足では進んでいる気がしない。

「相棒よぉ、とりあえずどっかでタクシー拾うかヒッチハイクでもしようぜ、俺っち疲れちまったよ」

「……うーん、そうだね。まぁこの道行けばきっと車の走ってる道に出るでしょ。もう少し頑張れ」

「……」

それにしてもフェレットがタクシーとか平然と言うのはスッゴイ違和感だな、とまだ己の常識を捨てきれないリュウは心の中で呟いていた。

＊

村長宅にあったお金（非偽札）のおかげで難なくタクシーを捕ま

え、（ぼられそうになったが、ボッシュの声をリュウの声に見立てて凄んで事なきを得た）何とか到着したそれなりに大きな街で一泊しようとしたリュウとボッシュ。

所が、駄目元で探した飛行機の予約に運良く空きがあった。疲れたから休もう派のボッシュと早く日本に行きたい派のリュウとの間でジャンケンデスマッチが行われ、結果そのまま金に物を言わせて飛行機に飛び乗り、一路日本を目指す事になったのだった。

ちなみに、リュウのパスポートは用意の良い事にユンナの家を物色した際に発見されている。どこかに連れて行く気だったのか？ていうかいつ申請したんだ？　等々色々疑問はあったが、答えてくれる人が居ないので仕方なくリュウはスルーした。

ボッシュに関しては飛行機にペットはダメだったが、リュウは子供の姿であることを利用しての泣き落としを決行し、おまけに警備員への賄賂で目を瞑ってもらう事になった。人間、意外と追い詰められると何でも出来るもんである。手続きをちゃくちゃくとこなす姿に「何この子気味悪い」という目で見られた事は、例によって我慢&スルーであった。

（さすが中国、チェック甘いなぁ）

早速、見た目は子供・頭脳は大人のズルさを全力でフル活用しつつ、リュウとボッシュは思ったより早く故郷への道に着く事が出来ていた。

＊

「……」

「なんでぇ外見て黄昏やがってよ」

「いいだろ別に。ていうか喋んなバレる」

機内でボーっと外を見ていたリュウは、あのドラグニールの村での出来事から感じたある種の予感めいた物について考えていた。どうも今自分が居るこの世界は、あのゲームの要素に加えて“あの漫画”の要素もあるのではないだろうか。そんな予感である。根拠は二つ。

「……」

自分の元居た現実と全く同じ（であろう）中国や日本という国が存在する。それが一つ。そしてもう一つは、あのユンナや村長を殺害した白髪の少年である。今冷静になって思い出すと、あの白髪の少年の顔には見覚えがある。確か名を“フェイト・アーウェルンクス”と言った筈だ。その“漫画”の登場人物に瓜二つなのである。

見た目がああだったからこそ、リュウはユンナが“石化”させられたという事も素直に受け入れていた。勿論、まだ自分の主観でそうかもしれない、というだけであって、確実にそうだと断定するには説得力が不足している。

「日本か……」

自分のこの仮説を立証するに当たって、例えば呪文を聞くなどの機会がなかったのであと一つ何か欲しい。そういう意味で、日本に行くのは一石二鳥であった。もしも日本に「麻帆良」という地名が

存在しているなら確定だからだ。他にも「関西呪術協会」や「神鳴流」等の名称が出てくればわかるだろう。

本当ならばわざわざ自分の目で確かめに行かなくても、インターネットでちょちょいと調べて一発……と行きたかったが、そうも行かない事情がある。……「今」がリュウの住んでた時代よりかなり前である事が、空港の文字列を見てわかったのだ。

「俺、まだ生まれてもいねーなぁ……」

１９７８年。

仮に元の現実であったとしても、まだリュウの存在は影も形もない時代である。ちなみにリュウは歴史に関してはあまり詳しくないので、どこでどんなことがあったのかはさっぱりだ。ある意味タイムスリップでもあるので尚更現実感がない。

さらにはリュウの記憶に薄らとある漫画の項目に検索を掛けても、「確か主人公の父親とか、真祖の吸血鬼がブイブイ言わせてるんだっけ？」といったレベルでしか覚えていない。ノープランもいいトコである。

「……」

何にせよ、リュウはボッシュの実家とやらに訪ねたら、ちょっと日本をぶらぶら放浪してみるつもりだった。幸いお金（非偽札）はある。残念ながらネットがまだ存在しないというのが中身現代っ子のリュウにはちょっと物足りなかったりもするが。

そんなことを考えていると、ボッシュが小声で話し掛けてきた。

「ところで相棒はどこ出身なんでぇ」

ボッシュはなるべく目立たないようリュウの膝の上で丸まっている。こうして口さえ開かなければちょっとはかわいいのに、と心の中で思うリュウである。

「俺はｘｘ県だよ。そこの神社で暮らしてた」

「へぇーｘｘ県ねぇ。特に印象がねぇなぁ。俺っちは京都よ。いいぜ京都は」

「……」

京都。リュウの記憶からそういえば関西呪術協会とか神鳴流って京都だったな、という情報が引き出される。ボッシュの実家を訪ねるついでに、ひょっとしたら色々わかるかも知れない。

「じゃああっち着いたら京都へ向かうか」

「いや折角だしｘｘ県に先に行こうぜ。そっちの方が空港から近いだろうよ」

「……」

ボッシュはそう言うが、リュウはあまり気が乗らなかった。自分の故郷の町に行った所で、そこに居るのは自分の親族ではない別の家族だ。何となく、そんな今の現実を見たくは無かった。

「ならさ、埼玉県に行かない？　ちょっと行ってみたい所があるん

だけど」

リュウは唐突にそんな提案を出した。この飛行機は羽田行きである。なので京都へ行くよりも先に“麻帆良”の確認をしようと思ったのだ。

「あぁ？　埼玉？　それこそ何もねぇじゃねぇか。何でそんな所行くんだよ？」

「いやちょっと見たいもんがあってね」

「まぁ相棒が行くってんならいいけどよ」

「じゃあ決まりね」

リュウとボッシュのひそひそ話しが途切れた所で偶然スチュワーデスに話しかけられ、まさかボッシュとの会話を聞かれた!?　とテンパるリュウ。そんなこんなで飛行機は無事に日本へと到着。時刻はとっくに深夜である。リュウは眠い目を擦りつつ気合を入れて、まずは寝床を探すために微妙に違う故郷の地を踏みしめるのだった。

第二章　2、移動（後書き）

20111103修正

第二章　3、武道会

歓声に次ぐ歓声。
観客席には大勢の人が犇きあい、熱狂し、盛り上がっている。そんなアツ苦しい空気の真っ只中に、リュウとボッシュはポツンと座っていた。

「なぁ相棒、見たかったのってなぁこれかい？」

「いや……うん……まぁ、一応……」

ここは日本国埼玉県麻帆良市。
結論から言うと「麻帆良学園都市」は存在していた。つまりリュウの推測通り、ここはどうやらあの漫画の世界でもあるということで決着と相成ったのだった。ついでにその舞台となった学園を見て周ってみようと欲を出してみたら、ちょうどこの日は一年に一度のお祭り“まほら祭”の開催初日日だったらしい。

リュウはうっかり年号ばかりに気を取られて、今日が何月何日か全く気にしていなかったから予想外ではあった。まぁ日付を見た所でまほら祭の日付なぞ覚えていない訳であり、それがどーしたってなもんである。

（ん～確か……ナギ・スプリングフィールドがこのいつかの武道会で優勝してるんだったけなぁ。１９７８年ってどうだっけ？）

頭の隅からそんな記憶を引っ張り出し、ひょっとしたらナギ見れるんじゃね？　という期待を胸にリュウはこの武道会の会場へと詰め掛けてみたのだった。

（しかし……）

そして（見物は途中からだが）始まった武道会。
肉体を駆使して互いの技を競い合う男達。
息もつかせぬ攻防。手に汗握る逆転劇。
そして決着。

（……）

正直、圧巻であった。格闘技の試合などテレビのしょっぱいＫ－１やクリンチばかりのボクシングくらいしか見たことなかったからか、生で見る拳と拳のぶつかり合いはリュウの胸になかなか来るものがあったのだった。

「おお！　いいねぇ火事と喧嘩は江戸の花ってねぇ！」

首に巻きついてるフェレットも、そんな試合を覗んで先程から興奮しっぱなし。普段なら耳元でうるせーと吐き捨てるところだが、今はその気持ちもわからんでもないリュウである。

（うーん……）

しかしリュウはそれとは別に少しガックリきている事もあった。どうも控え室から出てくるのは筋骨隆々の巨漢やプロ選手っぽい人物ばかりで、自分と同じくらいの子供サイズの人間が居ないのだ。要するにお目当てにしていたナギ・スプリングフィールドの姿が見当たらないのである。

（やっぱそう都合良くは行かないかぁ）

溜め息混じりに肩を落としつつ、聞こえてきたアナウンスに耳を傾ける。見始めたのはつい先程からだったので1回戦の事は知らないが、なにやら次が準々決勝の最後の試合らしい。という事は次の試合で一応勝ち残っている全選手の姿を拝めるという事になる。

（今まで出てこなかったし、これに居ないようだったら別のとこ見に行こうかな）

と、そう思っていたリュウであったが、一際大きな歓声が周りの見物客達から上がり、何だと思って舞台へと目をやる。……どうやら、待っていた甲斐はあったらしい。

（あれは……）

「なんでぇあのちっこいのは？　あんなのが良くここまで残ったもんだなぁ？」

遠目からもわかる赤い髪に、どことなく魔法使いっぽいローブ、そして明らかに今までの人物と比べて低い身長。ボッシュはそのあまりに不釣合いな姿の選手を胡散臭げな眼差しで見ている。そしてリュウは、確信した。間違いない。ナギ・スプリングフィールドだと。

（おおお！？　キタキタ本物だよ！　スゲェ！　ていうか何あのイケメンっぷり反則だろ！？）

気分は超有名芸能人を見た一般人。オノボリさんが都会で目をキラキラさせるような感じで舞台の上見ているリュウである。アナウンスでもハッキリとナギ・スプリングフィールドと紹介されたので

もはや疑いようも無い。

（ちょっとサイン欲しいなー。自慢する相手居ないけど）

「なぁ相棒よぉ、あんなガキンチョに何かあるってのか？　さっきから変だぜぇ？」

リュウの様子がそれまでと大分変わったのが気になったのか、ボッシュが疑問を投げかけてきた。

「……喋るイタチに変とか言われたかねー」

「だぁから俺っちはフェレットだって何度も……」

と、売り言葉に買い言葉がヒートアップしそうなところで、アナウンスが試合の開始の合図へと入った。

「しっ、始まるから静かに！」

「～～～～」

ぶすくれているボッシュを尻目にリュウは試合会場を見つめる。ナギの相手はまるで北〇の拳から出てきたようなスーパーマッスル大男だ。おまけに手加減などするつもりはないらしく、手をポキポキ鳴らしながら勝利を確信した表情でナギを見下ろしている。

（いやいや明らかに生まれる世界間違ってるだろ）

とかリュウは心の中で突っ込みつつ呆れていた。他の人がどう見てるのかは知らないが、リュウの目にはそのマッスル男が可愛そう

なくらいに良い所無くやられる未来しか見えなかったからだ。一言で言えば単なる雑魚キャラとしか映っていない。

『始め！』

試合開始の合図。

と同時に大男が振りかぶりながらナギへと突っ込んでいく。

そして次の瞬間には、大男は逆側に凄いスピードで吹っ飛ばされていた。そのまま気を失ったのか起き上がる気配が無い。ナギはちょうど大男が最初に立っていた位置に、涼しい顔して立っていた。審判が大男の様子を見に行く。

「……勝者！　ナギ選手！！」

そして一斉に沸き起こる歓声。人々がその勝利を称えている。

「……え？」

リュウは呆然としていた。今までの試合とは全く持ってレベルが違っていた。文字通りの瞬殺だ。かろうじてナギが拳を突き出す動作が見えた気がしたが、本当にそうかと聞かれると答えられない。

「……おい相棒、あいつ何だってんだ？　ありゃ人間か？　相棒の同類じゃねぇのか？」

「いや俺は素じゃ弱いし、あれはレッキとした人間だよ。……多分」

ボッシュも口をあんぐりと開けてその様子を見ていた。変身すれば自分もあれくらいの戦闘力は発揮できると思うが、改めて他人がそういう動きをするのを見ていると何というか桁が5個くらい違く

見えてしまう。

そんな感じで呆気に取られたリュウが観客に手を振るナギを見ていると……

次の瞬間、ナギと目があった！

「ヤベッ！」

咄嗟にリュウは目を逸らす。

「おいおい相棒、明後日の方向見て何やってんだぁ？」

（……って、よく考えたら別に目を逸らす必要なくね？）

悲しいかな、一般人の習性か。どうにも喧嘩を売られそうな気がしてつい目を逸らしてしまうのだ。無用なトラブルを避けようとする本能であろうか。恐る恐る視線を戻すと、もうナギは裏に引っ込んでいたようだ。ほっと一息つくリュウである。

「ふぅー。あー今の試合一瞬だった癖に、これまでのより疲れた気がするのは何でだ？」

「そりゃおめぇ食い入るように見つめてたからだろーが。……！！……まさか！　相棒はそっちの趣味なのか！？」

「……」

いらぬ疑いを掛けられたリュウは、無言でその首巻きイタチの減らず口と鼻を塞いだ。

「〜〜〜〜」

もがくボッシュ。しかしリュウの手はそこから離れない！　そのままたっぷり五分が経過し……リュウはようやく手を離した。

「ぶっはぁーっ！　はぁ、はぁ……てめぇ！　マジで死んだらどーする！」

猛烈な勢いで呼吸を繰り返すボッシュ。顔は青くなっていたが、たちどころに元に戻っていくのが逆再生でもしているかのようだ。

「いやお前死なないじゃん」

「〜〜〜！　もう勘弁なんねぇ！　表へ出ろや！　このスットコドッコイがぁ！！」

「おっとそうだ。準決勝が始まる前にトイレに行っとかねば」

「聞いてんのかゴラァッ！！」

プリプリ怒るボッシュの扱いにも慣れてきたのか、見事なスルー力であしらうリュウの図。しっかりとトイレ休憩を済ませ、再び元の席へと戻るのだった。

その後、準決勝もナギは難なく勝ち残り、決勝はナギｖｓ鉢巻を巻いた八極拳の使い手の青年（バーチャファ〇ターのアキラにソックリ）との戦いとなったのだった。

『決勝戦！　始め！』

アナウンスと同時にそのアキラ（偽）は隙なく構えた。流石にここまで勝ち進んできただけあって、リュウの素人目にも只者でない事ぐらいはわかる。

（スゲェ！　どっかで見たような構えそっくり！　これなら少しくらいはナギも苦戦するんじゃ……）

対するナギはそれまで自然体だった物の、初めてグッと構えらしき体勢を作っていた。試合会場の空気が緊張に包まれていく。

「おい相棒、あいつマジでやる気みたいだぜ！」

「だね」

つまり、構えを取らなかった準決勝までは本気ではなかったという事である。リュウは「ですよねー」とある意味その手抜きっぷりを察していた。手を抜いていてもあの動きかよ、と呆れてもいた。

そして舞台の上、張り詰めた空気の中……ナギが動いた！

「え……！？」

と思ったのも束の間、舞台上どこを見渡してもその姿がない！

『こ！　これはぁーーー！？　ナギ選手！　忽然と姿を消してしまいましたー！！』

半ば絶叫のような実況が入る。会場もそのあり得ない現象にざわついている。

しかし、アキラ（仮）は微動だにしていない。

「見えているぞ！」

突如、アキラ（仮）は何もない空間へ拳を繰り出した！

一瞬そこに影が重なったようにも見えたが、しかし拳は空を切る。

驚愕するアキラ（仮）！

「何！？」

「惜しいねオッサン！」

突如アキラ（仮）の後ろにナギが出現！　その顔には不適な笑みを浮かべたまま、アキラ（仮）の背中に強烈な掌低を打ち込んだ！

「ぐあぁっ！？」

アキラ（笑）は大きく吹っ飛んで顔面からズシャァーッと着地、ピクピクしているがそれ以上動かない。審判がそっと近付き、その様子を伺う。

……彼はすでに気を失っていた。

『そ、そこまで！！　優勝はナギ・スプリングフィールド選手に決定ーーー！！！』

その日一番の歓声が轟き、リュウは思わず耳を塞いだ。そんなリュウの耳の傍にボッシュが口を近づける。

「相棒……あの動き、見えたか？」

「いや……全っ然」

さすがと言うかなんというか。リュウはその明らかな力量差に最早開いた口が塞がらなかった。もう仕方ないのであああいうのは子供時代からああなのか、と納得するしかないのであった。

そして大会は円満の内に終了し……、気付けば既に日は傾いていた。リュウとボッシュは会場を後にし、少し寂しさを感じさせる夕暮れの道をポツポツと歩いていく。

「なぁボッシュ、何か食いたいもんとかある？」

「あぁん？　そうだなぁ、俺っちは栄養バランスのいいメシならなんでもいいぜ」

「……」

思ったより意外な答えにリュウは少し驚いた。てっきり肉とか言われるかと思ったら、何やら健康を気にしてそうな注文である。不死身の癖に……とリュウは思ったとか何とか。

「じゃあ、適当にその辺の旅館とか当たってみようか」

「おう」

もう遅いし今晩泊まる場所も欲しいので、リュウは取り合えず学園都市の中をそれっぽい建物探して歩く事に決めた。そんな感じでしばらくふらふら歩いていると……不意にリュウは、背後から声を掛けられた。

「よお！」

「え？」

振り向くとそこには……

なんか目がイっちゃってるオッサンが立っている！

オッサンはリュウへ向けて思いっきり倒れこんできた！

「おわっとぉ！？」

こんなオッサンからの抱擁をそのまま受ける趣味はリュウにはない。素早く後ろに飛び退いてそのオッサンハグを避けるリュウ。おっさんは受身すら取らないまま、顔面から地面にドシャリと突っ伏した。

「何この人……？」

「いやーわりぃわりぃ。なんかそいつが後を付けてたからよ。とりあえず殴っといた」

「え……？」

リュウがその声の発信源へと視線を上げると……オッサンの後ろに、そう言って爽やかに笑うナギ・スプリングフィールドの姿があ

るのだった。

第二章　3、武道会（後書き）

20111204修正

第二章　4、邂逅

「いやー、メシ奢ってもらってなんか悪ぃな」

「いえとんでもないです。危ないところを助けてもらったんですから」

妙なおっさんを道端に適当に放置し、俺は赤い髪をした武道大会の覇者を連れて、取り合えず目に付いた適当な飯屋に入っていた。一応助けてもらったらしいので、そのお礼みたいなものだ。

「でもあのオッサン何で俺なんかを付けてたんだろ？」

「さぁな。まぁそっちの趣味のおっさんだったんだろ。なんかハァハァ言ってたし」

「マジすか……」

確かに今現在自分の見た目はショタであるからして、そういう歪んだ思考を持った人間の的になりやすいというのはわかる。しかしまぁ、どの世界もいつの時代も居るとこには居るんだなぁと変らない変人発生率にゲンナリしたり。

「アンタ自身もなかなかマシなツラしてるしな。ま、俺には負けるけどな！」

（うーわ凄い自信……）

流石はあのナギである。見た目同じ年代くらいなのに自分のイケ

メンっぷりを自慢して、しかも否定しようがないというのが、またなんとも小憎たらしいようなある意味微笑ましいような。

「お、そういや挨拶がまだだったな。俺はナギ。ナギ・スプリングフィールドってんだ。よろしくな！」

「あ、これはどうも。俺はリュウって言います」

今更になっての自己紹介タイム。ちなみにボッシュは人前で喋ってはマズイことを知ってるので足元に丸まってる。

「ところで、何で俺の所へ？ナギさんなら今や時の人だし色々引っ張りだこでしょう？」

「いや、舞台からリュウを見かけてさ、ちょっと興味が湧いたんだよな。俺と同じくらいの年っぽかったし、その青髪スゲェ目立ってたし」

そう言えばすっかり忘れてたが、今の俺は子供サイズなだけじゃなくて青い髪をしていたのだった。黒髪が主流で年代の割に意外と色んな髪の色の人が居たりするが、それでも流石に日本でこれは目立つだろう。

「あ、そういえば順序逆になりましたけど、優勝おめでとうございます。マジで凄かったです」

「なぁに、あんな程度の連中じゃあ俺の相手にはならないね。朝飯前ってやつよ」

「ははっ、そりゃまぁ確かに」

そりゃ普通の人間の目に映らない速度で動ける程の強さなら、よっぽどのことがない限り敵無しだろうと常識的に考える俺である。

「まぁそんなこたどうでもいいんだ。んで本題だがよ……」

「？　……なんでしょうか？」

それまでの表情とあまり変った様には見えなかったが、何か空気が切り替わったような、ズシンと肩にのしかかるような重さが全身に掛かったような錯覚を俺は覚えた。

「……お前さ、人間じゃないだろ？」

「……はは、何を仰いますやら……」

「目ぇ逸らすな。あと、今の間だけで状況証拠は十分だけどな」

「……えー、っと……」

まさかの一撃。いきなり本題中の本題である。確かに自分は生物学的にみて”人間”だ、とは言えない。それをズバリと指摘したナギは流石だが、一体何を目論んでいるのだろうか。そんな感じで一気に背中に嫌な汗を書き出した俺を見て、ナギは大きく息を吐き出してみせた。

「まぁ別に退治しようとかってわけじゃねーから安心しろよ」

「……はぁ」

「俺が気になったのは、お前に妙な力を感じたからだ」

妙な力、とはまずもって確実に「龍の力」のことだろう。流石にナギは鋭いらしい。

「どーも魔力や気とは違う感じなんだよな。小さすぎてわかり辛ぇけど。んで明らかに人間のものじゃないときた」

流石である。なんかもうさっきからコレばっかりだけどそうとしか言えない。ドラゴンズ・ティアのおかげで薄まってるはずなのに、やはり達人と言うかわかる人にはわかってしまうのか。

「そんで？　お前は結局なんなんだ？」

ズズイッと不敵な笑みを浮かべて訪ねてくるナギ。これはもう確実に逃げられないらしい。しかし相手はあのナギ・スプリングフィールドである。何とかして味方にできれば、少なくとも戦いとかで死ぬ可能性がかなり低くなる可能性大だ。だが大戦とかに巻き込まれるのは正直御免被りたい。という訳で、ここはなんとか疑いを晴らして誤魔化す方向に決定。

「実は俺、自分でも自分がよくわかんないんですよ」

「なんだそりゃ？」

自分で言って非常になんだが、セリフだけを取ってみれば最高に痛いアレな人である。まぁこの際ある程度の痛さには目を瞑るしかなかったり。

「気が付いたらこの身体になってて……何か変な力があるのは確かなんですが」

「ふむふむ」

「ナギさんなら色々知ってそうだし、もし良かったらどこかでこの力について調べて貰えませんか？」

かろうじて嘘を言わず、しかしどこかヤバげなアレな人。俺がナギの立場なら絶対に距離を起きたくなるような見事な言い回しに内心イタタな俺である。ナギは顎に手を当てて何やら悩んでいたが、すぐに俺の目を見て口を開いた。

「なるほど、よくわかったぜ。俺で良ければその変な力とやらの解明手伝ってもいい」

「え？　あー、ホントですか？」

まさかの方向に思考が進んだらしい。しかしまぁ信じたならそれはそれで。思ったよりあっけないが、これはきっと俺のなんちゃって主人公補正のおかげだろうと無理やり解釈してみたり。

「でもそうだなー、その変な力ってヤツを実際に見てみないことにはどうにもできないからなぁ」

ニヤニヤと何かイヤな笑みを浮かべて、ナギは今こっちをチラっと見た。その反応で俺の脳裏に警報が鳴り響き、すっごいヤな予感がヒタヒタとやってきていた。

「よし、大体その手の力は命の危機に反応するってのがパターンだからな、俺が軽く揉んでやるよ！」

「うぇあ!?　いやちょっと待って下さいよ!?　何でそうなるんすか!?　ナギさんに攻撃されたら俺確実に死にますよ!?」

狼狽える俺！　どこをどうしたらそんな結論に達するのか、全く持ってわからない！

「だーから死ぬ直前まで行きゃその変な力ってやつも表に出て来やすいだろ?俺の勘だけどな！」

（勘かよ！）

俺の中でナギの評価を無敵の男から単なるバトルマニアへと変更！　原作もこんなんだったかどうか知らないが、しかし冗談ではない。

「いやホントマジで勘弁してくださいよ。ここだけじゃなくて宿代とかも持ちますから！」

「じゃ、こうしよう。負けた方が勝った方の飯代と宿賃を払う。簡単だろ?」

そう言うと、ナギはこれでもかってくらいにいい笑顔を浮かべていた。

（……こりゃダメだ……）

もうこのバトルマニアの中では俺と戦うことが決定しているらし

い。判定は覆らず、そして逃げられない。じゃあもうとるべき手段は一つしかない。何たる理不尽だろうか。

「……はぁ、わかりましたよ。やればいいんでしょやれば！」

もうヤケである。

「そうそう、初めからそう言やいいんだよ。んじゃ、広いとこ行こうぜ！　いい場所知ってんだ」

そう言って席を立ち、店を出て行くナギと仕方なく着いていく俺。メシ食いに来たのに水飲んで騒いだだけである事を、心の中でゴメンなさいと店の人に告げ、とぼとぼ付いて行くのだった。

＊

連れて来られた場所は地理的に言えばまほらの隅っこらしく、ちょうどうっすら周りの明りが届く程度でそこへ月明かりがいい感じに指している。かなり広く、ナギに言わせるとここまではギリギリで結界や監視の目も来ないそうだ。ちなみにボッシュは巻き込むと悪いので、さっきの店のとこで待っててもらってる。まぁ不死身だから居てもらってもいいのだが、何となく気が散るんで待機してもらった。

「さて。それじゃあその変な力ってのを見せて貰おうか？」

「あのさ、ひょっとして隠してるのバレバレだった？」

「ったりめーだろ。あんなしょぼい言い訳に騙されるやつなんていてるかってーの」

（クソがぁ！）

色々悩んで捻り出した言い訳を、しょぼいと言われりゃ腹も立つってなもんである。

「どうなっても知らないからな！」

「いいからホラ、早く見せろって！」

言われ、俺は意識を自分の中へと集中させる。それと共に足元から火柱のようなオーラが噴出、その中で宙に浮かび、自分の中にあるスイッチを入れる！

「でぇぇぇやぁぁぁぁぁぁ！！！」

激しい閃光と暴風、そしてオーラがはじけ飛び――――

「……」

ナギ待望の、人外の姿へと俺は変身した。

「……じゃあ……やってやるよ……！」

＊

（こいつぁ……とんでもねぇ！）

ナギはリュウの変身を見ながら、徐々に自分から余裕が消えているのがわかった。魔力でも気でもない力が立ってるだけで嵐のように襲って来る。自分の目に狂いがなかったことを確信し、目の前の化け物と戦う事ができるという事に純粋に喜び、そして戸惑っていた。

今まで全力を出して戦う事が出来た相手など数えるほどしかいない。目の前の相手は間違い無く、それまでの連中よりはるかに格上。倒せるかどうか全くわからない。

（……いや、何を弱気になってやがるんだ）

わからなくても勝つ！　弱気になったら勝てるもんも勝てない！

ナギは自信と実績、そして自分の矜持とこれだけの強敵と戦える喜びを噛み締めて、リュウを見据える。

（これで4度目の変身、安定している……か）

今までの変身と比較し、リュウは自分の調子を確かめていた。

暴走はする気配がなく、無理をしなきゃ大丈夫といった安心感さえある。飛行機の中でボッシュに聞いたこの自分の姿を想像すると、恐らく今の龍の力を引き出した姿は“ドラゴナイズドフォーム”。圧倒的なパワーを誇る姿、そして、自分ならその使える技等は大体わかる。呪文も使えるのが少し意外だったが、この場合はメリットのみなので問題はなさそうだ。

（知識・情報ってのは武器だなぁ……）

そんな事を考えて、自分を見据えるナギに同じく視線を返すリュウ。

（この姿の強さと俺の知識、ナメんなや！）

そして両者は、自然と戦う姿勢を取る。

「行くぜ！」

先に動いたのはナギ。無詠唱の魔法の射手を放ち、同時に右手に魔力を溜め、瞬動でリュウへと突っ込む！

「効かねぇっ！」

それに対してリュウも背中のバーニアを全開にして迎え撃つ。先行した魔法の射手はリュウに全弾直撃。しかし全てが弾かれ、全くの無傷。

「くっ！」

「つっ！」

勢いのままにお互いの右拳同士がぶつかり合う。魔力と龍の力が音を立てて火花を散らし、だがパワーはリュウが上。そのまま押し勝ってナギに先制の一撃を当てーーーー

「っく……オラァ！」

だが一撃が入る寸前、ナギは自ら力を抜き後ろに倒れこんだ。バランスを崩したリュウへ、かち上げるようなドロップキックを見舞

って上空へと吹き飛ばす。咄嗟の判断力は流石に戦いの年季の違いか、そしてナギは吹っ飛んだリュウを見上げながら、懐からあんちょこを取り出そうとする。

と、

『レイギル！』

吹き飛びながらリュウが魔法を発動。ナギの周囲の地面から無数のつららが生え、赤髪の少年を串刺しにするべく襲い掛かる。

「うおおっ！？」

間一髪ナギは瞬動で避け、距離を取ってあんちょこを開き、すかさず呪文の詠唱に入る。

「みてやがれ……！！」

それを見たリュウも上空で両手をナギの方に向け、龍の力をその掌に溜めていた。次に来るのは大魔法、ならばこちらもそれ相応の技を使って迎え撃つ！　リュウが力を溜め終わるのと、ナギが詠唱を終えるのはほとんど同時だった。

「雷の暴風！！」

ナギの杖を握り突き出した拳から、強大な雷のビームがリュウを襲う。

「Ｄ－ブレス！」

リュウが構えた両手から、龍の力を凝縮させた熱線が溢れ出る。

両者の中央で激しくぶつかり合う光線と光線。互いに色の違う力同士がせめぎあい、閃光が迸る。

「く……くっ……！！！」

「……っ！」

拮抗……ではない。ナギの放つ魔法のほうがリュウの放つ膨大な龍の力に抗いきれていない！

「くっくそっ……おわぁっ！？」

押し負けると悟ったナギは咄嗟に身を翻す。リュウのＤ－ブレスは容赦なく雷の暴風を貫いて地面へと着弾、激しく爆発。もうもうたる爆炎の中、リュウは地面に降り立ち、吹き飛んだナギに近付いていく。

「……まだやる？」

「……ったりめーだ！　こんな程度でこの俺が負けるか！」

即座に飛び起き、乱暴に言葉を投げ返すナギ。爆発の影響で所々ボロボロになりつつも、目の光は全く失われていない。

「はぁ……わかった」

「へっ、よぅし、第２ラウンドだ……！」

リュウは溜息を、ナギは楽しそうな言葉を、二人とも吐くと同時に再び戦いの構えをとる。

「行くぜぇ！！」

「っ！！」

そして両者が再びぶつかろうとした瞬間――――

――――二人に目掛けて突如大量の魔力弾が打ち込まれた。

「「！？」」

リュウは両手を前に組んでガードし、ナギも魔法障壁を張って防ぐ。不意打ちではあるがそこまでのダメージは両者共に受けていない。

「誰だ！　いいとこで邪魔しやがって！」

「何だ今の……っ」

ナギが何もない空間へ向かって叫び、リュウも辺りを警戒する。心当たりはない。自然と背中を合わせて警戒する二人の前で、先程のつららが爆発の余波で解けた水溜りから白髪の少年が現れた。

「やぁ、また会ったね」

「！！」

リュウは覚えている。あの村で村長を殺し、ユンナを砕いた「フェイト」そっくりの少年を。

「何だてめぇ！　今邪魔したのはてめぇか！　どういうつもりだ！」

ナギが叫ぶ。だが相手の実力を感じとっているのか杖を握る手に力が入り、先程より警戒度が増している。

「……そうだね。一応自己紹介しておこうか」

そう言うと白髪の少年は、二人に向けてうやうやしく頭を下げた。

「はじめまして。僕はバルバロイ……以後お見知り置きを」

「へっ、随分と礼儀正しいじゃねぇか。俺はナギ・スプリングフィールドってんだ。冥土の土産に覚えときな！」

つられて盛大に名乗るナギ。白髪の少年はさして興味のない風にその名乗りを聞き流し、リュウの方をじっと見つめていた。

「……」

「こっちは名乗ったんだ。そっちの君も名前くらい教えてくれてもいいんじゃないのかい？」

正論と言えば正論。リュウとしてはこいつにあまり関わりたくないが、このままでは話も進まない。仕方なく、名乗る。

「俺は……リュウ、だ」

「ふぅん。リュウ、ね。ま、お見知り置きをって言ったけど、君達にはここで死んでもらうから」

「あんだとっ！？」

「！！」

いきなりの宣言に二人が同時に疑問の声をあげると、バルバロイはパチンと指を鳴らす。それを合図に何か薪が弾けるような渇いた音が周囲に響いたと思うと、辺りの空間にヒビが入って割れていく。

何もないはずの空間そのものが砕け散ると、二人の周りを地上と上空から全てを取り囲むように、大量の魔族の軍団が二人を見ていた。

第二章　5、殲滅

リュウとナギは周囲を見渡して顔を青くした。星の明かりさえ届かない程に、魔族の軍勢が自分達を囲んでいる。まるで悪魔によって形成されたドームのようだ。蠢くモノ達から発せられる悪意に、今にも押しつぶされそうになる。

「いくら君達が強くても、消耗した上でこの軍に勝てるかな」

バルバロイと名乗る少年は表情一つ変えない。正直、マズイ。そう思ったリュウの額からツゥッと汗が滴り落ちた。ナギも流石にこの状況では余裕は無く、リュウと似た表情で少年を睨んでいる。

「おいリュウ、お前こいつ等に心辺りあんのか？」

隣に立つナギがそう小声でリュウへと話し掛ける。敵の敵は味方。一時休戦。こうなっては勝負所ではないため、二人は既に協力し合う事を前提として動いている。逆に言えば、協力しなければとてもじゃないが突破出来ないとわかっているのだ。

「一応、ある……」

目の仇にされている理由をリュウは即座に理解したが、今全てを話している暇はない。リュウが複雑そうな顔をしているのをチラリと見たナギは、若干の余裕を無理やり捻り出して再び前を向いた。

「まぁいい、後で話してもらうからな。それで、お前こいつらどれくらいイケル？」

ナギの言葉は、乱闘を視野に入れてのものだ。二人で暴れまくる。単純明快な作戦。ナギはリュウの強さなら何とかなるのではないかと思っていた。だがリュウの口から出た返答に、ナギは落胆の色を見せることになった。

「ごめん。正直わからない。この力もあとどれくらい持つか……」

今、リュウの心にあるのは不安だった。今まで、これほど長時間変身したままでいた事はない。中国の山奥では飛んだだけで戦闘はしていない為、負担は今の方が段違いだ。これ以上龍の力を使えば、ドラゴンズ・ティアがあると言ってもどうなるかわからない。本当の所は、あのＤ－ブレスで押し勝った時点で変身を解くつもりだったのだ。

「……」

「時間を与えるつもりはないよ。それじゃ、死んで」

「くっ……！」

バルバロイはそう言うと、再び水溜りの中に消えていった。それを合図に前後左右に斜め、上空などあらゆる角度からリュウ達へ向けて魔力弾が放たれた。避ける隙など皆無。鼠一匹這い出る隙間のない無慈悲な弾幕が。

「ちっ……くそったれめ！」

ナギは咄嗟に杖を持った手を上に掲げ、半球状のドームのような魔法障壁を展開した。リュウとナギを何とか守れる程度の大きさの障壁が、容赦なく飛んでくる魔力弾から二人を守っている。

「く……思ったより……！！」

魔力弾の雨は止む気配がない。予想以上の勢いにナギは慌てた。

「お、おいリュウ。このままじゃ……ちっとだけヤバイぜ……！」

先程のリュウとの戦いで多少消耗している事も手伝って、ナギにはもう余裕は欠片もない。いくら強いと言っても、ナギはまだ１０才程度。リュウはそんな子供を自分の巻き添えで死なせたくはないと素直に思った。

「……！」

この場を打開する術は何かないのか。リュウは必死に自分の記憶を漁った。しかしドラゴナイズドフォームで使える技、恐らく使えるであろう呪文。いずれ劣らぬ強大な力ではあるだろうが、どれを取ってもこの大群を一挙に押しのける程の決め手にならないと思えた。数が違いすぎる。まともに使えるかどうかの心配もある。

（クソッ……何か……何かあんだろ！）

なかなか止めをさせない事に魔族達は業を煮やしたのか、魔力弾の雨は勢いを増してきた。台風を髣髴とさせる一方的な暴力だ。かろうじて防ぐ事は出来ているが、最早ナギの障壁が突破されるのも時間の問題。気を抜いたらその時点でアウトだ。

「くっ……ちきしょう！　リュウ！　何かあるなら何でもいいから早くしてくれ！」

（……こうなったら！！）

リュウは自分の胸にかかっている宝石に手をやった。このドラゴンズ・ティアを外せば、ひょっとしたらなんとかなるかも知れない。あの暴走状態なら今の自分よりもはるかに戦闘力が上だ。あの時の４人組を瞬殺したように、この魔族の群れも蹴散らす事が出来る。

（でも……）

しかし、この場にはナギもいる。自分一人だけならばそれで突破できるかも知れないが、逆にナギに襲い掛かってしまうこともないとは言い切れない。そもそもあの暴走状態からまた戻れる保証も無い。この選択肢を選ぶには、あまりにリスクが高すぎる。

（クソッ！　あのドラゴンに食われた時はもっとこう……）

そこまで思ったリュウは、気付いた。

そうだ。ドラゴン。あの時、暗闇で食われた相手……アイツは多分、この身体に眠っていた力そのものだ。今の自分の姿は、ひょっとしたらその力の“一部”に過ぎないのではないか。記憶にあるゲームの主人公は、変身しても最初は人型の形態を取る事があった。今の自分も、それと同じ状態なのではないか。そして、それならば“できる”んじゃぁないのか？

リュウは静かに目を閉じ、自分の中を探るように意識を内側へと向けた。自分の中に眠る切り札。生物の頂点とも言えるあの存在へと姿を変える方法。

即ち、【竜変身】を求めて。

「ナギ！　あと少しでいいから時間稼いでくれ！」

「お、おい！　リュウ！？」

目を閉じたままナギに言い放つと、リュウは自分のさらに奥深くへと意識を巡らせた。どうすればいいかはわからない。わからないけど、きっとある。それは只の期待か、もしくはそうならば良いという希望か。傍からは現実逃避のようにも見える生の放棄。だがある種の予感めいたものが、リュウに半ば確信を抱かせていた。

きっとある。強大な何かが。身の内に眠るの力の結晶が。リュウはまるで昔から知っているかのように、その場所へと辿りついた。次第に見えてくるそれが何なのか、直感でわかった。

（……これだ！）

認識すると同時に覚醒を始めるその“力”。今まで違う、文字通りの巨大な力。時間がない。後先考えてる暇は無い。

（……これに賭ける！）

リュウは目を開けるとナギの前に盾になるように立ち、そして胸に着けていたドラゴンズ・ティアの鎖を引き千切って、ナギに向けて放り投げた。

「ナギ、それ持ってて！　んで、そしたらお前自身だけを全力でガードしてろ！！」

「！？　おい！　ちょっと待て！！　んなことしたらお前が！」

「いいから！」

ナギは片手でリュウが放ったドラゴンズ・ティアを受け取ると、リュウを見てハッとした。何だコレは。この気配は今まで感じた事がない。何をするつもりなんだ。混乱するナギの前で、リュウは両手を腰溜めに構えて目を瞑る。自分の奥深く、力の結晶を呼び起こす為に！

【フレイム】炎
【プロテクト】防御
【シャープ】特徴強化
【グロース】能力強化

リュウの中で覚醒した強大な龍の力の流れが、奔流となってリュウを包み込む！

「でぇぇぇやぁぁぁぁあ！！！」

渾身の咆哮と同時に上空から魔族の群れを突き破り、リュウに紫の雷が振り注いだ。リュウを中心に、黒い半球状の巨大なドームが広がる。ドームの表面には見たことも無い魔方陣が浮かび上がり、闇夜を静かに照らしている。

「うぉぉ！？　な、なんだ！！？」

ナギはリュウに言われた通りに全身を最大の魔力障壁で覆い、雷の衝撃を防いでいた。杖を持っていない手には、リュウのアクセサリーをしっかり握っている。ナギは僅かに混乱していた。突然自分

の回りが暗くなり、周囲からの攻撃も届かなくなったからだ。リュウが何をしたのかわからないが、しかし不思議と敵意は感じなかった。

「「「！！」」」

魔族達からの攻撃が再び始まる。突然の雷に僅かに怯んだが、よく見れば障壁の様なものが展開されただけ。恐れる事は無い。魔族の軍勢は突如現れた巨大なドームに対して、執拗に魔力弾を放ち続ける。

ピシッ

黒いドームにヒビが入った。軍勢の内、誰とも無く「勝った！」という空気が流れ、魔力弾の雨はトドメを刺そうとさらに強力な嵐となっていく。

ピシッ！

もう一息で割れる。割れかかったドームに魔力弾が集中する。やはり自分達魔族の敵ではない。これでトドメだ！　その場に居る全ての魔族がそう思ったとき……

グ　オ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　！！！

咆哮。

……否。

それは衝撃波だった。放たれていた大量の魔力弾は全て押し返され、至る所で爆発を起こす。地の底から響くような巨大な咆哮を放った元凶。黒いドームの中心。一斉に、そこを魔族たちが見やる。

「「「！！」」」

そこには居たのはドラゴン。

全長３０メートルはあろうかという、真っ赤な鱗に身を包んだ巨大なドラゴンが、静かに魔族の軍勢を見据えていた。

「あ……」

傍らに居るナギはドラゴンを見上げて絶句していた。黒いドームがヒビ割れ、もう駄目かと思った時、耳を劈く咆哮が響いたと思うと……そこにはドラゴンが居た。

「リュウ……か？」

ナギは、知識としてドラゴンがどういう生物かは知っている。だがこの目の前のドラゴンは、自分の知るそれとは一線を画す存在だと一目でわかった。魔法世界に居るという古龍（エンシェント・ドラゴン）。見たことは無いが、吸血鬼の真祖と並ぶ最強の生物。目の前のコレがそうなのか？　いや、それ以上？

いくら考えを巡らせても、正体がリュウであるということだけしかわからなかった。

≪ナギ、背中に乗れ≫

「え？」

≪早く！≫

「あ、ああ」

突如として頭に響いた声に混乱しながら、ナギは目の前のドラゴンの背に飛び乗った。今の声は、間違いなくさっきまで隣に居たリュウのものだ。ナギは、その広い背に乗った時点で自分の心に安心感が芽生えたのを感じた。負ける訳が無い。理由も無く、そう思った。

≪障壁張ってろよ！≫

「え？　おお！？　……おわぁぁぁぁあ！？」

巨体が動きだす。一対の翼を広げ、羽ばたくと凄まじい風が吹き荒れる。次の瞬間、ドラゴンはその場から消えていた。魔族の大群は、一瞬にしてはるか上空へ舞い上がったドラゴンに目を奪われていたが、

「たかがドラゴン一匹」「こっちはこの数だ、どうってことない」「捻り潰せ」

本能が警鐘をならしているのを数とプライドで頭の隅に追いやり、次々に後を追うべく空を飛んでいった。

≪来てるな≫

ドラゴンははるか上空で静止し、眼下を見下ろす。視線の先では、魔族の軍勢が我先にと殺到して柱のようになっている。徐々に下方から魔力弾が飛び荒れてきた。

≪やるか≫

今、リュウの胸にドラゴンズ・ティアはない。そしてこの力はドラゴナイズドフォームよりも圧倒的な力であるのに、何故か心は落ち着いていた。

≪……≫

息を吸う。そこが肺であるかはわからないが、体内で荒れ狂う炎の力と混合されていく。どうすればいいか。もうわかっている。コレを吐き出すだけ。この力は、多分負けない。

≪行くぞ……！≫

狙うは迫り来る魔族の大群。
しっかりと狙いを定め……口から猛る力の奔流を吐き出す！

≪ドラゴン……ブレス！！！≫

――それはまるで、光で出来た塔のようであった。

「……！」「！！？」「……っ！」

――辺り一帯を、昼であるかのように明るく照らし

「！…っ…！」「っっ！！」「！！！」

――殺到していた魔族達を次々と巻き込んでいくその炎は

「！？？？」「！！！！」「っ――」

――断末魔の叫びすら飲み込み、太陽の如き灼熱を持って全てを焼き尽くすのだった。

第二章　5、殲滅（後書き）

20111105修正

第二章　6、紅き翼

「うっ・・こ、こは・・？」

知らない天井が目に入る。

体中が悲鳴を挙げているが致命的なモノはない。

（俺は・・・？）

竜変身を行い、魔族をブレスで焼き払ってからの記憶が無い。

「おぉ？相棒、気がついたみてぇだな。」

「・・・ボッシュ？」

傍らにいたフェレットがこっちを怪訝そうに見ている。

「身体はどうだい？」

「ああ、！つっ・・イッテェ。あんまり動かせないかも。」

「そうかい、まぁ無理しなさんな。」

「なぁボッシュ、ここは一体？」

「んぁ？ああ、ここは」

ガチャリ

「おや、気が付いたようですね。」

「おー、リュウ、おめぇ身体大丈夫か？」

ドアが開き、入ってきたのはナギとローブをまとった若い男だった。

「あー、ナギと？えーとスミマセン、どちら様でしょうか？」

「ああ、申し遅れました。私はアルビレオ・イマと申します。よろしくお願いしますね、リュウさん。」

そういってローブの男はニコッと笑い、頭を下げた。

（アルビレオ・・？ああクウネル・サンダースか。ま、どっちでもいいや。）

「えーと、イマイチ現状がわからんのですが」

「なんだリュウ覚えてねーのか？おめぇがスッゲェブレスで敵を全滅させた後、お前浮いたまま元の姿に戻って気ぃ失ってよ、大変だったんだぜ？」

「そうだぜ相棒！相棒達がなかなか帰ってこねぇから近くまで様子見に行ったらよ、ナギっこが相棒を背負ってるじゃねぇか！思わず声掛けちまったよ。」

「それで、ナギの仲間である私のところまで運んできて、こうして

手当てをしてたわけですよ。まぁ特に外傷はありませんでしたけどね。」

「そうだったのか。あ、それじゃどうも、随分とご迷惑をおかけしたようでスミマ・・・くぁっ！」

お礼を言おうと起き上がり頭を下げようとしたら全身に激痛が走った。

「あーあー別に礼はいいから寝とけって。なぁ？」

「そうだぜ相棒。ナギっこの言う通りだ。」

「・・・なんだボッシュ、お前妙にナギと仲いいな。」

「なんでぇ相棒妬きもちかぁ？心配すんなよ相棒は相棒だけだぜ？」

「ちげーよボケイタチ。おめーらの間に何か良からぬ気配を感じたんだよ。」

「ああ、ではここからは私がお話しますよ。」

「おう、頼まぁ」「あいよ、アルの兄さん。」

・・・なんだこの空気？

「ボッシュさんに聞いたのですが、何やらリュウさんは天涯孤独の身だとか？」

「え？ああまぁ。そうですが。」

「実は私とナギと詠春とゼクト・・・ああ他の仲間です・・・それで今度チームを結成しようと思ってるのですよ。それで、もしリュウさんが良ければ私たちのチームに加わっては頂けませんか？と思いまして。何やら行く当てもないようですので。」

「えぁぁっ！？俺がっすか？」

「はい。」

この人めっちゃいい笑顔しとる。だけど何か黒いモノを感じるのは気のせいであってほしい

「いやいや、だって俺弱いっすよ！？マジで。」

「何を仰るんですか。ナギから聞きましたよ？凄いドラゴンに変身して魔族の大群を一撃で葬り去った、と。」

くそぅ

「いやでもそうそうあの力を使うわけにはいかないし、素の俺はホンット弱いですから」

「ああ、それなら大丈夫です。私達全員で徹底的にシゴキますから。」

うーわ、最早笑顔が真っ黒にしか見えねぇ

「いやでもきっと足手まといになると思いますし」

「ったく、いいだろリュウ！俺はお前が気に入ったんだよ！」

「うぅ・・む」

どうしよう

「・・・ふぅ、まぁいきなりですしねぇ。」

お？何か風向きが変わりそうな予感？

「ま、あなたが私たちの仲間にならないと仰るならば、それはそれで仕方ないですが、それでしたら2日ほどのここの滞在料を頂かないといけませんねぇ。」

「・・・はい？」

「そうですねぇ、ベッド占有料とボッシュさんの食事代、それとここまでの運び賃も合わせて・・・1億でいかがでしょう？」

「ぶふぉぁっ！！何じゃそら！ボッタくりにも程があるでしょーが！」

流石にドラゴンズ・ティアに入ってるお金全部足してもそんなにねーよ！

「おやこれは異なことを。この隠れ家はとても高度な建築技術で作られていて一流ホテルのスイートルームなんて足元にも及ばないのですよ？ねぇナギ？」

いやどう見てもその辺の安アパートの一室じゃね？

「おう、そうそう。いやーしかしそうかー。仲間にならねぇのかー。ならキッチリ耳揃えて全額払ってもらわねぇとなー。」

何というニヤニヤっぷり。これを腹黒と言わずして何を腹黒と言えばいいのか。

「あー・・・ボッシュ？」

一抹の望みをかけて相棒を見やる。

「相棒、諦めな。人生ってなぁ諦めが大事なんだぜ？」

まさかフェレットに人生を語られるとは・・・俺オワタ

「・・・はぁ。わかりました参りましたよ。是非お仲間に入れてください。このとーりです。」

痛みを抑えて頭を下げる。ちょっとしか下がらないけど。

「おう！んじゃ改めてこれからよろしくな、リュウ、ボッシュ。」

「ふふ、よろしくお願いしますね。リュウさん。ボッシュさん。」

「・・・はい。よろしくお願いします。あと俺のことはリュウでい

いです・・・」

「俺っちもさん付けなんて痒くっていけねぇや。ボッシュでいいぜ。」

「そうですか。では私の事も気軽にアルとお呼びくださいね。」

「よっしゃ！そうと決まったらそろそろチーム名決めようぜ！実は1個案があるんだ！」

いや俺チーム名知ってるんだけどな。ていうかまだ決まってなかったんだ。

「ふぅ、ナギ。あなた自分が言い出したことを曲げた事ほとんどないじゃないですか。どうせ誰の意見も聞く気はないのでしょう？」

「まぁな。だが結構いい名前だと思うぜ。その名も【紅き翼（アラルブラ）】！実はリュウのスゲェドラゴンを見て思いついたんだけどな！」

あれ？そういう成り立ちなの？

「ふむ、紅き翼（アラルブラ）ですか。なかなか良い名前だと思いますよ。ナギにしては。」

「うっせい。いいだろーが。リュウとボッシュはどう思うよ？」

「え？あ、ああ、かっこいいと思う。」

「おう、俺っちもなかなかイカス名前だと思うぜ。」

「だろ？さすがお前らはわかってんなぁ。まぁいつかあのドラゴンとも戦ってみてぇってのもあるんだけどな。」

「いやいや。ホントマジ勘弁してください。」

「そうですねぇ。ナギにそこまで言わせるとは私も一度見てみたいものですね。」

「アルも！？」

ここはアレか？バトルジャンキーの巣か？俺もしやメッチャヤバイとこ入ったのか？

「よし、じゃあとっとと詠春とお師匠を呼びに行こうぜ！」

はぁ、マジどうなるんだこれ

続く

第二章　6、紅き翼（後書き）

ここまでこの駄文を読んで下さった方々、本当にありがとうございます。

第三章　1、京都

「おーいリュウー！早くしろー！電車出ちまうぞー！」

「全く、朝からナギがあんなにシゴくからですよ。もう少しペースを考えてですね」

「いやそれより今リュウが背負ってる荷物は全部アルのもんじゃねぇか。」

「何のことやら、アレはリュウが自分から言ってきたのですよ？」

「ホントよく回る口だよな。脅したくせに。リュウに同情するよ。」

その頃、はるか後方では

「はぁ・・・ひぃ・・・はぁ・・・はぁ」

「相棒よぅ、大丈夫か？顔色わりぃぞ？」

「だい・・・じょうぶ・・・じゃ・・・ない」

「まぁアルの兄さんに言われてっから俺っちは手伝えないけどな。」

今俺は大量の荷物を背負っている。

アルの手荷物だ。

どっから出したかわかんないけど登山用の大型リュックに大量に何かが入っている。

中は覗いてはいけないらしい。

アルビレオ・イマは重力魔法を得意としている。

そのアルにより、今俺の身体には修行と称して通常の3倍の重力が掛かっていた。

（どこのドラゴンボ○ル的発想だよちくしょう）

この状態で朝ナギと一緒にランニング。もちろん即潰れた。

ナギはどうやら５０ｋｍほど行ってきたようだ。だが汗もかいていなかった。

時間？知らねー。気付いたら戻って来てた。

その後目的地を目指して出発。

詠春さんとゼクトさんは何かの用事で京都に行っているらしいので京都を目指す。

ついでにボッシュの実家もあるらしいので見に行くのだ。

ナギは行く手段について「走って行こうぜ！」とかアフォな事を抜かしていたので、

日本の公道を時速3桁で走る少年とかどんだけ非常識であるかをとつとつと説き、納得させた。

アルも何故か走るのに乗り気だったが、どうやら俺の説得に反論して荷物を持たせる策略だったようだ。

俺は口がそれほど達者なわけでもないので、まんまと荷物を背負わされることになった。

ちなみにドラゴンズ・ティアは俺の調子が良くなるのと荷物を中にしまわせないために

ボッシュが無理やり身体にくくりつけている。

今は新幹線乗り場への乗り換え徒歩中だ。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」

「相棒。頑張れ！俺っちにはそれしか言えねぇ。」

「頑張れ」という言葉がこれほど非情な言葉だとは知らなかった。

水泳やってた頃はそうでもなかったんだけどなー。そういや高校の頃は・・・

「相棒！相棒！大丈夫か！なんか顔色が死人みてぇだぞ！」

「・・・はっ！」

危ねぇ。立ったままあっちへ逝くところだった。

しかしこのままではまたいずれ・・・

ヒュッ！

「おいリュウ、荷物よこせ。持ってやるから。」

瞬動でナギ登場！マジ救いの神キタコレ！

「た・・・頼む」

とは言っても通常の3倍の重力は依然として俺の足腰を虐めてるんだけどな。

その後、何とか新幹線の発射時刻には間に合った。

列車に乗り、ナギ・アル・ボッシュが景色を見ながら談笑している傍らで、俺爆睡！

俺の分の駅弁は当然ナギの腹に収まった。ちきしょう！

京都に付いて改札を出る。荷物はお情けでドラゴンズ・ティアにしまってある。

3倍の重力だけで腹いっぱいだと必死にアルに訴えたら、

「ええ、わかってましたよ」と腹黒笑顔で言われて本気で脱力した。

あのどSが！いつかドラゴンブレスの餌食にしてやる

しかしこの身体は素のままでもやはり、俺の元の身体よりはるかにハイスペックらしく

昼寝しただけでかなり重力に慣れたようだった。

ただ、アルにバレると重力何倍にされるかわかんないので疲れてるフリをしてる。

道中は特に問題なく、ナギがハシャギ、アルが煽り、俺とボッシュが止めると言った感じだった。

多分今の俺の立ち位置に詠春さんがいるんだろうなぁ。苦労が偲ばれる。

「おー、ここだここ！」

「日本の匠の技とは素晴らしいですね。」

「？あれ？詠春さんの実家って神鳴流の道場じゃないんだっけ？」

「ああ、そうだけどこっちの方に来るって聞いてたからさ。」

「ここは私たちの隠れ家なんですよ。」

「へー。」

なんかどっかで見たような家だな？

・・・ああ！

京都にナギが住んでた家があるって言ってたヤツの家がこれか！

確かネギまの京都の事件で最後に行った家だ。展望台あるし。

へー、まだ建築直後って感じだな。新築の臭いがする。

しかしこのままの状態で２０何年後まで存在するとは。

あれか？「固定化」の魔法でもあるんだろうか？

取り合えず中に入ってくつろぐ事になった。

「詠春とゼクトはまだ来ていないようですね。」

「よっし、おいリュウ、ボッシュ、暇だからお前らの話でも聞かせろよ。」

「はぁ・・・いやホント俺いま疲れてるからさ。後にしよ。どうせ後で二人来るんだから、そんときでいいじゃん。」

「そうだぜナギっこ。おめぇらと違ってこのまんまの相棒は貧弱だからな。」

ボッシュ、援護ありがたいんだがもうちょい言い方があるだろ

「んーそっか。あーしかし詰まんねぇ。・・・よしアル！いっちょやるか！」

「あなたも好きですねぇ。まぁいいですよ。お付き合いしましょう。」

そう言って二人は奥へと入っていった。

直後に遠くの方で爆発音や打撃音が聞えてきた気がするが気にしない。

外へ出た気配はないし奥行きからして暴れるスペースがないが、

多分魔法でなんかしてるんだろ。

あれだ、エヴァンジェリンの別荘みたいなヤツがあるんだろう。多分。

俺は昼寝のおかげでかなり楽になってたので、本当はそこまで疲れ

ていない。

ソファから身体を起こしてドアへ近寄る。

「おい相棒、どこ行くんだ?」

「いや、京都なんて修学旅行以来だからさ、少し散歩してくる。」

少しくらいなら平気だろう。

そう思っていた時期が俺にもありました。

第三章　2、紹介

ナギ達の隠れ家から出て、物理的に重い足取りで少し歩いたところで不意に視線を感じた。

そちらに視線をやると

「ん？おぬしは誰じゃ？何故このような場所にいる？」

どことなく「フェイト」やバルバロイと似てるような感じの少年と

「おや？君、ここは関係者以外立ち入り禁止だよ。」

白木ごしらえの長刀を持った面長で眼鏡をかけた青年が居た。

（おわ！？もしかして近衛詠春！？ってことはこっちのガキがゼクトだっけか？）

銃刀法違反とかってどうなんだこれ？と思いながら見ていると

「おい、聞いとるのか？」

「まぁまぁゼクト、そんなに凄まなくても。きっとたまたま迷い込んだのでは？」

「ふむ、それもそうじゃな。というわけでおぬし、そうそうに立ち去れ。」

「あーえっと何て言えばいいか・・一応俺も関係者なんですが。」

「「？」」

話すのめんどいな。

「ほう、するとナギがスカウトした、と。」

「はい、そうです。」

「そうですか。しかし失礼ですがあまりその・・・腕が立つようには・・・」

「今はまだ修行中でして、多分そこらの一般人とさして変わらない程度かと。」

「うむ、しかしナギが誘ったという割には一般人とは解せんな。何か裏技でも持っとるのか？」

なかなか鋭いな、さすがナギの師匠。

「えーと、まあ一応は。」

「ほう。」「ふむ。」

何だろう。似たような展開があったような・・・

「よし、ではその言葉が本当かどうかワシがテストしてやろう」

うおぉぉい！またコレかぃ！！

「えぇ！？いやあのそのホラ、すぐソコが隠れ家じゃないですか。もうナギ達も居ますしそれはまた話し合い？の後にでも・・・」

できれば永遠に機会がないほうがいいけどな。

「そうですよゼクト。それにこの辺であなたが戦ったら大変ですし。」

さすが！さすが紅き翼の良心近衛詠春！あんたは神か！

「むぅ、仕方ないの。」

「あはは。えーとあーじゃあ行きましょうか。」

ＯＫ、死亡フラグ回避成功！冷や汗かいた。

まさか外に出て即効でイベントエンカウントとか勘弁して。

隠れ家に戻るとそこにはボロボロの格好のナギと澄ました顔のアルが居た。

（？？この段階だとアルの方が強いのか？）

「おーリュウ。とお師匠に詠春じゃねーか。やっと来たか。」

「ナギお前なんだその格好は。また何かやったのか？」

「あ？ちげーよ詠春。アルとあそこでちっとな。」

「なんじゃお前ら。それが人を出迎える格好か？」

「まーいいじゃねーかお師匠。今回も俺が勝ったからな。」

「やれやれ。日に日にナギの魔力は膨大になっていますしねぇ。誰に似たのやら。」

へー。つまり今のアルの顔はやせ我慢かなにかか。

「おい、相棒相棒！」

「ん？なんだよボッシュ。」

「そっちのお二方が例の待ち人さんかい？」

「ああ、そうみたい。」

「よっし！」パン！

ナギが手を合わせて立ち上がる

「そんじゃ全員集まったことだし。第一回紅き翼会議を始めるぜ！」

「「紅き翼（アラルブラ）？」」

詠春さんとゼクトさんの声がハモる

「あーまぁその話をする前に紹介するぜ。おいリュウ、こっち来い。」

物理的に腰が重いけどそっちへ行き、ボッシュが俺の首に巻きつき
ナギの横に立つ。

「こいつらが俺が武道会に足を運んだ結果、ウチのチームに入ることになったリュウとボッシュだ。」

「改めて、リュウです。よろしくお願いします。」

「おう、俺っちはボッシュってんだ。よろしくな。」

「ふむ。ワシはゼクトと言う。ナギの師匠をやっておる。よろしく頼む。」

「青山詠春です。よろしくね。リュウ君、ボッシュ君。」

あれ？青山・・？ああ、婿入りだったっけ

「以上！紹介終わりだ！」

いやはえーよナギ。

「ナギ、ワシから質問いいかの？」

ナギが頷く。

「武道会でスカウトしたとのことじゃが、あれか？決勝の負かした相手だったのか？」

ナギが優勝したであろうことを微塵も疑ってないのな。まぁわかるけど。

「いや？ふっつーに観戦してた一般人だぜ。」

「ほう、やはりか。では結局おぬしはなんじゃ？妙な気配も感じるが・・・」

「それは私も思ってました。気や魔力とは違うし、魔の者ともどこか違うような・・」

あー説明すんの激しくめんどい

「そうですねぇ。ナギ、あちらで実際に見て貰った方が早いのでは？私も詳しくは知りませんし。」

「それもそうだな。よし、じゃあ全員であっちに移動だ！」

あっちってどこだよ。まさかお前らが闘っていた不思議空間（想像）か？

「リュウとボッシュは初めてだよな。ここには便利なモンがあんだぜ！楽しみにしてろよ。」

ナギがすげー楽しそうだ。大体予想はついてるから驚けないけど。

奥にある扉をくぐると、そこは異世界でした。

って何ここ？サバンナ？だだっ広い草原が広がってる。

うんまぁわかってる。精神と時の部屋だろこれ。

「ここは外の空間と遮断された別世界なのですよ。時間の流れは残念ながら現実と同じなんですけどね。」

「コイツぁすげえな。なあ相棒。」

「あ、ああ。」

しかし時間が通常どおりとは何たる中途半端な！

「おし、じゃあ早速だがリュウ、お前変身しろ。」

「えー？ここで？」

人前で変身ってなんかやっちゃいけない気がするんだよなぁ。特撮的に考えて。

「ほら、アルと詠春とお師匠に俺がスカウトしたお前の凄さを見せ

付けてやれってのー！」

チラっとギャラリーを見るとアルがわくわくした表情で、詠春さんが真面目だけどちょっと怪訝そうに、ゼクトさんがポケっとしてるけど目は笑ってない顔でこっちを見てる。

「相棒、頑張れよ！」

はぁ。

「んじゃ取り合えず・・・この通常の3倍の重力を解いてください。」

「「あ」」

こいつらぜってー忘れてやがったよ！

第三章　3、激突

重力魔法を解除されて一気に身体が軽くなる。

（なんかこれだけでも強くなった気がするな）

身体が丈夫になってる気がする。やっぱこの身体結構チートだなぁ素でも。

ギャラリーからの早くしろというプレッシャーが大きくなってきたので変身する。

意識集中、足元からオーラが噴出す。

「でぇぇぇぇやぁぁぁぁぁぁあ！」

スイッチＯＮ！オーラが弾け飛ぶ！

「俺、参上！」

５回目の変身。もう大分慣れたもんだ。

感じる力が大きくなってるのは、やっぱりあの重力修行のおかげだろうか？

期間的にはほんのわずかだったけどこうも変わるもんなのか。

ギャラリーを見るとナギとボッシュ以外は皆驚いた感じで固まっていた。

その顔になんて書かれているのかは俺でもわかる。

「まさかこれほどとは！」だ。自惚れかも知れないけど大体あってるだろ。

「な？俺の言った通りだろ！？」

ナギが嬉しそうに周りに話し掛けてる。

「うむ。なるほどな。どうやらワシはかなりリュウを見くびっておったようじゃ。」

「恥ずかしながら私も同じです。しかしこの魔力とも気とも違う力は一体・・」

「ナギ、あなたはこのリュウと戦ったんですよね。どうだったんですか？」

「ん？ああ、そりゃ強かったぜ。ちっと邪魔が入っちまったけど。ま、あのままやってりゃ俺が勝ってたね！」

あれー？そうだったっけ？ボロボロになってたのはどこの誰だっけな？

「まぁあれだ。百聞は一見になんとかってやつだ。リュウ、誰と戦いたいか言ってくれ！」

あぁ戦うのは前提なのね。まぁ俺も少し興味がないわけでもないしな。

「えーと、じゃあ俺と戦いたい人ー。」

呼びかけると４人全員が手を挙げた。

「いやナギ、お前は除外な。」

「えぇ！？別にいいだろーがよ。」

何かブツブツ文句言ってる。さっきアルとも闘ってた癖にどんだけジャンキーなんだ。

ん？

てことはこれって恨みを返すチャンスじゃね？

「じゃあ、アルで。」

「ふふ、私をご指名のようですね。」

「「ちっ」」

他二人から舌打ちが聞えたような。

あれ？こいつらってこんなキャラだったっけ？

少し離れた場所へ移動する。ホントに見渡す限りの草原だ。

「リュウ！遠慮するこたねーからな！アルをコテンパンにしちまえ！」

ナギからありがたい応援が飛ぶ。

いやまぁ言われるまでもないんだけどな。

「では、お手柔らかに頼みますよ。」

「いやこちらこそ。」

フヘヘ。もちろん全力でボッコボッコにしてやんよ！

「はじめ！！」

ナギの声が響き渡った。

俺は即効でバーニア全開で突っ込む。

アルは両手の先にバスケットボールより一回り大きめな黒い球体を発生させて足は若干宙に浮いている。

「食らえ！ヴィールヒ！」

力を漲らせた爪の一撃！ちなみに技名はブレスオブファイア５からだ。

シュバッ！

アルは上に飛んでかわし、球体の一つをこっちに放ってきた。

「！！」

これはヤバイ！俺にかかってた重力魔法なんて目じゃない威力！

即座に横へステップしてかわす。

メギャァッ！！

球体の当たった地面がエライ陥没している。これは当たってやれねぇわ。

アルは浮遊したままこちらに向けて黒い球体を次々に放ってきた。

ドゴォッ！メキィッ！バゴンッ！

「くそぉっ！」

球体をバーニアとステップでかわしまくるが、こっちの進路上に設置するように来るし、

防御も相殺もできないので非常にイヤラシイ。

ナギと違って直接的じゃないのがヤり辛い！

「ふふっ。避けてばかりでは私には勝てませんよ？」

くそがっ。お決まりなセリフ吐きやがって！なら魔法には魔法じゃ！

『ババル！』

「！」

バリィッ！ドォン！

アルの居る場所に落雷が突き刺さる。

アルはかわしたようだが少し面食らったみたいだ。

「驚きました。まさか魔力を感知させず、発動体もなしに魔法を使うとは。」

「いや、原理なんかは知らねーよ！」

すぐにまた黒い球体乱舞に戻る。

こっちもそれをかわしながら当たりそうな魔法を使う。

しかしフワフワと避けて当たらない。

しばらくそんな状態が続いたが、相手の魔力は全然底を突かないらしい。

このままでは埒があかない。

（何か、何かねーか。コイツをギャフンと言わせるような・・・）

竜変身は論外だ。

今はドラゴンズ・ティアを首にかけてるから、もし万が一このまま変身してドラゴンズ・ティアもそのままになるようだったら変身後の大きさから言って壊れるだろう。

さすがにそれはいやだ。勿体無いし。

それに前回のように理性を保っていられるのかもわからない。

となると、何とかこの状態でやるしかないわけだが、いい方法が思いつかない。

（どうする！？）

あれこれ考えていると不意に球体が来なくなった

「！！」

アルがいない！？

「ふふっ。油断大敵ですよ？」

後ろ！？

「！しまっ・・」

ベゴォッ！

「グォアッ！」

真後ろから声がしたと思ったらいきなり凄い重力に潰された。

格好悪く地面に這いつくばる。

ズゴゴゴゴゴゴッ！

「クゥッ・・」

凄まじい重さだ！周りの地面は既にスリバチ状になってる。

「ふぅ。どうやら私の勝ちのようですね。確かにパワーは凄まじいですが、まだまだ戦い方がなってないですよ。」

「くっ、ち、ちく・・しょう・・！」

ドラゴナイズドフォームなのに重すぎて動けない！これ一体普段の何倍の重さなんだよ！

ん？倍？

（そうだ！！【Ｄ－チャージ】！！）

Ｄ－チャージ！重ねがけすることで全身に力を溜めて、次の一撃の威力を何倍にもするドラゴナイズドフォームの奥の手！あれをやれば何とか一矢報いれる！気がする！

やり方は多分気合だ！エフェクト的に考えて！

「ウオォォォォォッ！」

突っ伏したまま気合を込める！1回じゃ無理か。なら！

「ハアァァァァァッ！」

×2！まだまだ！

「ォォォォォォオオオッ！」

×3！・・・いける！！

無理やり重力に逆らって立ち上がり、アルの方を見ると「バカな！？」って顔してる。

いいね。その顔が見たかった！

「オォラァァッ！」

再びバーニア全力全開！喰らえやぁ！

「タルナーダァッ!!」

両手に思いっきりパワーを乗せた全力の二連撃!

これで決まりだ!!

ガッシィッ!

「そこまでじゃリュウ。おぬしはアルを殺す気か?」

「あっぶねー。間に合ったぜ。」

当たった!と思った瞬間。

俺の両腕はゼクトさんとナギに止められていた。

第三章　ＳＯＬ　～ギャラリー～

～リュウとアルが勝負する直前～

「リュウ！遠慮するこたねーからな！アルをコテンパンにしちまえ！」

「ゼクト、どっちが勝つと思いますか？」

「そうじゃのう、あの圧倒的な力をリュウが使いこなせるならばアルに勝ち目はないじゃろうが、生憎とリュウは素人じゃ。経験の差でアルが勝つであろうな。」

「ふむ、そうですね。しかしそれにしてもあのリュウ君の力は気になりますね。」

「ボッシュ殿はリュウのあの力については知っとるのか？」

「いや、俺っちも詳しくは知らねぇんだよ。何か頭に浮かびそうにはなるんだけどよ。」

「・・・そうかの。」

「おいおい俺を差し置いて面白そうな話してんじゃねーよ！そろそろはじめっからな。」

「はじめ！！」

～リュウの突撃をかわし、アルが重力弾爆撃に移る～

「今の一撃は当たれば終わる威力ではありましたね。」ポリポリ

「じゃが、あんな大振りでは当たってはやれんのぅ。」モグモグ

「あー、アルのヤロー嫌な攻撃してんなー。あいつ性格わりーよ。」
ムシャムシャ

「こ、このテーブルとお菓子セットは一体どっから・・？」

「ん？なんだボッシュ？食わねーのか？」モグモグ

「遠慮せず食べてくださいね。」ボリボリ「そうじゃぞ。」ムシャムシャ

「お、おう・・・。」

～リュウが魔法を使って反撃に出る。～

「おお？なんじゃ今のは？魔法か？」バリボリ

「しかし魔力の波動はありませんでしたよ？」モシャモシャ

「あー、あいつ発動体すら持ってねーのに魔法撃ってくんだよなー。
しかも詠唱が1単語だけ。」ガツガツ

「ほう、それは興味深いの。後でどんなものか聞かんとな。お茶はいるか？」コポコポ

「意外と引き出しが多いですね。他にもどんな力があるのか。頂きます。」コポコポ

～リュウがアルを見失い背を取られ、重力地獄に囚われる～

「むぅ、やはり力はあっても経験不足じゃな。」ズズーッ

「しかしアル相手にここまでやれるとは驚きですよ。スピードも大したものでしたし。あちっ」ズッズズーッ

「あんだよー、おいリュウー！そんなん気合いでなんとかしろー！！」

「「無茶言うな」」

～リュウがD－チャージを使い始める～

「「「！！」」」

「リュウ君から感じる力が一気に膨れ上がりましたね・・・」

「うむ、これは一体・・。」

「なんだってんだ？俺んときはこんなのなかったぜ！？」

～D－チャージ×2～

「お師匠、詠春！」

「うむ、危険があったらすぐに止めるぞ！」

「わかった。」

～D－チャージ×3、リュウ立ち上がる～

「いかん！！ナギ！！」

「ああ！！」

ビュオッ！

ドガシャッ！

「私もぷぉあ！！あっちぃぃぃ！！お湯がぁぁぁ！！」

「おいおい大丈夫かい詠春の兄さんよ。」

「なんで私がこんな目に・・・」

なんてことがあったとかなかったとか

第三章　4、自戒

「いやぁ私も少し油断していました。まだまだですねぇ。」

そう言って笑うアル。

「おらリュウ！いつまでも落ち込んでんじゃねぇぞ！勝負としちゃお前の勝ちだしな！」

「うん・・・」

一泡吹かせたい気持ちが先走って危うくオーバーキル気味な攻撃をするところだったことに

俺は気落ちしていた。

（何やってんだ俺・・）

確かにアルに仕返ししたいとは思っていたが、別に殺したいわけじゃない。

（これじゃ力に振り回されてるだけだ・・）

改めて自分の持つ力の大きさを認識するとともに、ドラゴンズ・ティアのおかげとはいえ自分でまともに制御できていると思っていたものが、結局は感情に任せてるだけであって、下手をすれば周囲に取り返しのつかない被害を与えてしまうのだということを理解していた。

それがどんな力かも考えずにぶつけようとしていた自分の小ささに腹が立ってもいた。

無敵の力で無双ってのにはそれ相応の責任が伴うのだ。

「俺、強くなりたい・・」

力に溺れて暴れるのではなく、自分の意思で龍の力を操る。

そういう意味で強くなりたいと思った。

この世界に来てこの体になってどうするかまともに考えて居なかったが、

初めて明確な目的を持てた気がした。

「うむ、その意気じゃ。それでこそ我らの仲間に相応しい。のう詠春？」

「そうですね。神鳴流でも力に溺れる者はいます。今のリュウ君の心掛けはとても大事だと思いますよ。」

「・・ありがとうございます。」

・・・ホント、さすが英雄の集まりなんだなぁ、このチーム。ちょっと泣けそうだ。

「相棒！長い人生そういうこともあるぜ！気にすんなってなぁ無理かもしれねぇが、そうくよくよすんなって。」

「ああ、ありがとう。ボッシュ。」

「うほぁ！！相棒にお礼言われるたぁね。こりゃ今夜は嵐だな。」

「うっせーよボケイタチ。」

だが突っ込みは自重することにする。

「うし、じゃあ今更だがさっきの話の続きだ。」

ナギが仕切り直す。

「とりあえずリュウの実力はわかって貰えたと思うが、実はリュウの力はあれだけじゃねーんだ。」

「なんと？あれほどのパワーがあるというのにか？」

「おう、お師匠。なんとリュウはな、ドラゴンそのものに変身して、スンゲェ数の魔族をブレスの一撃で焼き払ったんだぜ！」

「それは凄い・・・それならナギがそこまでリュウ君に入れ込むのもわかるな。」

「そんで、そん時のドラゴンを見て頭に浮かんだのが【紅き翼（アラルブラ）】ってわけだ。いい名前だろ？」

「むう、そう言われると何やら神々しい名前のような気がしてくるから不思議じゃ。」

「そうですね。まぁ実際名前自体のセンスも悪くはないと思いますし。それでいいのでは？」

「よしじゃあ決定な。俺らのチームはこれから正式に【紅き翼（アラルブラ）】って名乗ることにする」

「「異議なし」」

「そんじゃあこれからの俺達の行動だが・・・あーもういいや。アル、頼まぁ。」

「ナギ、自分が言いたいことだけを言うのではリーダーとは言えませんよ？」

「うっせーうっせー。なんか今日は柄にもなく頭使ったから疲れたんだよ。」

「はいはい。では僭越ながら私が。えー、一応私たちはこれから「紅き翼」を名乗るわけですが、その名を正式に名乗るには「悠久の風」に届け出なければなりません。」

「なんだっけそれ？」

「この馬鹿ナギ。この前も説明しただろ。私たちのような者が活動するための大元の組織のことだ。表向きはＮＧＯ団体としてだがな。」

「今回はリュウとボッシュもいるからのう。詳しく説明してやってもよいのではないか。」

「ま、それはおいおい。というわけで、今後の私たちは「悠久の風」本部のある「魔法世界」を目指すこととなります。」

魔法世界か・・・確かリアル剣と魔法のファンタジー世界だよな。

今も十分ファンタジーだけど。

「次のゲートの発動まで2週間ほど時間がありますから、ここに1週間くらい滞在し、その後現地に向かいましょう。明日一日はリュウの現状の把握に費やそうと思いますが、その後6日は各自自由時間ということでいかがですか?」

「「「賛成!!」」」

「ではそういうことで。あ、リュウはこの後職員室まで来てくださいね。」

「はぁ。」

ここで小ネタを挟むとは

「では解散。」

というわけでアルに近寄る。

「もうあまり気落ちはしていないようですね。」

「うん、その・・・ごめん。」

なんとなく悪い気がしたので謝ってみた。

「おや?何を謝るのですか?もしかしてあの時私を殺しそうになった事・・・ですか?」

「いや・・まぁそうなんだけど。」

「ふふっ。リュウは優しいですね。ですが、私の名誉のために言っておきますが、あの程度私はなんなくかわしてましたよ?」

「え?」

でもかなり焦ってたように見えたような

「仮にゼクトとナギが止めなくても私は死にませんでした。と、言いますか、私もあなたを殺すつもりで術をかけてましたからねぇ。ここはお相子ということで。」

おいマジか。

「ああでも、謝って下さったということはそちらの方が悪かったと認めたわけですから、お詫びとして一つ私の言うことを聞いて貰いましょうかね?」

ああ、何かいい話だと思ったのにもはや真っ黒だ・・・

「・・・はい。」

「いいお返事ですね。ではお楽しみに。」

なーんかうまくまるめこまれたような？

冷静に考えると辻褄あってるか？

・・・はぁ。

（俺ってこの先アルに一度も勝てないんじゃねーか？）

そんな風に感じた京都の夜でした。

第三章　5、解剖

「第一回チキチキ！リュウ君の力大解剖大会、ただいまより開催いたします！」

「「「いぇーい」」」パチパチパチ

「・・・」

「相棒・・・」

「言うなボッシュ。」

昨日の衝撃的な顔合わせから一夜明け、アルの宣言通りに俺の現状把握をしようと

朝からあのサバンナ空間に俺らは来ていた。

しかし俺の隣にあるキャスター付き黒板は一体どこから持って来たのか。

そして詠春さん・・・あなただけは違うと思ってたのに！

何故司会者！？

神鳴流の生真面目剣士じゃなかったっけあなた！？

紅き翼の面々ってこんなのだったのか！？

そりゃ確かにネギまで出てきた回想は一部だけだし、他にはラカンの思い出話しだけだったけど。

でもこれは事実は小説より奇なりってレベルじゃねーぞ！

「それではまず本日の主役！リュウ君です。どうぞー！」

「「「おー」」」パチパチパチ

「いやさっきからここに居ますから。」

「ではまずは最初のお便りです。ペンネーム「馬鹿小僧の師匠」さんより頂きました。」

一人しかいねぇじゃん。ってかお便りかよ！黒板意味ねぇ！

「えー、「単語一つで魔法を発動できるようじゃが、どうやってるのじゃ？」とのことです。これは興味深い質問ですね。」

そういえばブレスオブファイアの魔法はネギまの魔法とは違う体系なんだよな。

「実はこの他にもペンネーム「チビジジイの弟子」さんと「天使の微笑み」さんから同様のお便りを頂いております。」

アル痛い！痛いよ！自分で「天使の微笑み」とか痛すぎるよ！

「ふふふ、リュウ。私の顔になにか付いていますか？」ゴゴゴゴ

ヒィッ！笑顔怖っ！

「・・ナギ、後で話がある。」ゴゴゴゴ

「・・奇遇だなお師匠、俺もだ。」ドドドド

そっちはそっちで魔力全開にしてんじゃねぇぇ！！地面捲れてますからぁぁ！！

「えーそれではリュウ君、回答の方をよろしくお願いします。」

ここで振るか。ていうか司会者！止めろよそこのアホ師弟を！

はぁ。とりあえず、一応推測は立ってるからそれでいくか。

「ふぅ。ええまぁ、はい。俺の使ってる魔法は皆様方の使う魔法とは根本から違いまして。」

「ほぉ、そんな魔法があるとは初耳じゃの。」

「日本のオンミョウジュツ？ってヤツとはちげーのか？」

「違いますよナギ。陰陽術と言えどもあれだけの力を触媒も詠唱もなしに使うのは無理です。」

「へー。」

「一応俺もよくわかってないので推測なんですが、多分俺の「龍の力」を使って魔法を使えてるんだと思います。」

「「「「龍の力？」」」」

「はい。皆さんが感じてる魔力でも気でもない力ってやつですね。」

だいたい合ってると思うんだけどな。

「ふむ、それが本当じゃとすると、その「龍の力」を持たないワシらには使えんということになるのう。」

「えー何だよ。せっかく長ぇ呪文覚えなくて済むと思ったのに。」

「残念でしたねぇ。ナギ。まぁ勉強は大事ですから。」

「ケッ！中退舐めんな！」

「ふむ、ではリュウ、お主は普段はその魔法は使えぬのか？」

使える・・・のかな？むしろ使いたい。

「どうでしょう？そう言えば変身できるようになってからは試してませんでした。」

「よし、なら早速やってみようぜ！」

そうだな。この姿でもできるならいいかも。

以前こっち来た直後の時はまだ変身もまだ出来なかったし。

「じゃあやってみます。」

ドラゴナイズドフォームの時みたいに無意識に発動する感じで

『パダム！』

ボオゥッ！！

「「「おお！」」」

「相棒！すげーじゃねぇか！」

「あ、ああ。」

なんだ、出来るじゃん俺。

「確かに「龍の力」に注視していると動きがありましたねぇ。どうやら先ほどの推論で正解のようですね。」

そうなんか。

「はい、では一つ疑問が解決したところで次の質問に移ります。」

なんか楽しそうだな詠春さん。

「えー次のお便りはペンネーム「詠春はムッツリスケ・・」・ってお い誰だこれはぁ！」シャキッ！

おわ！！抜刀すんなよ危ねぇ！！

「えーしゅんはムッツリだと思う人ー」

「「「「「はーい」」」」」

ナギが声をかけると、俺・ボッシュ含めて満場一致！

・・は！？しまったつい「リュウ君？」ヒィッ！首筋に冷たい感触！？

恐る恐る詠春さんの方を見ると・・

「そんなことないよね？」ゴゴゴゴ

こえぇ！メガネの奥で白目と黒目が逆転してる！！マジこえぇ！！

カクカク

無言で頷く俺。

「ならいいんだよ。」チンッ

やっと刀納めた・・マジやべーよ俺。突っ込みで死ぬとか洒落にならん。

「では気を取り直して、えー「リュウは普通の魔法や気、アーティファクトは使えねーのか？」だそうです。えー、追加でナギには後で用があるので首を洗っておくように。」

ナギを睨む詠春さんと横を向いて口笛吹くナギ。

「うーん、そうですねー、その辺については試したことがないのでなんとも言えないです。」

「よし、んじゃそれらも試そうぜ！まずは魔法、これ使っていいからよ。」

そう言ってナギに教鞭のような杖を手渡された。

「いいか？それ持ってこう言うんだ。「プラクテ・ビギ・ナル　アール・デスカット」（火よ灯れ）」ボッ！

ナギの持つ杖の先に火が灯る。俺も呪文だけは知ってるけど。

同じように杖を持ってやってみる。

「プラクテ・ビギ・ナル　アール・デスカット」ボッ！

あれ？いきなり？

「ほう、初見から出来るとは意外じゃな。」

「そうですねぇ。普通はコツを掴むまで多少なりかかるものですが・

・」

「相棒、器用なんだな。」

そうなのか？俺あんまり器用じゃないんだけどな。でも出来てるのは事実だし。

「やるなぁリュウ。なら次は魔法の射手だ。火でいいよな。こう唱えるんだ。」

しかし呪文を唱えても魔法の射手は発動しなかった。

「あーやっぱそこまでは無理か。」

・・ちょっと思い当たる節がある。

「あの、すみませんがどなたか今の魔法の射手を実際に撃ってみてもらえませんか？」

「「「「？」」」」

「あー、ちょっと思い当たる節がありまして。」

もしかするとなぁ・・・

「ならばワシがやろう。～～～魔法の射手・連弾・炎の３矢」ボボボッ！

ズドドッ！

「これで良いかの？」

「はい。」

そしてもう一度さっきの魔法の射手を唱えると・・・

ボボボッ！

「「「「！？」」」」

「おいリュウ！なんで出来るんだよ！」

ナギが驚いて聞いてくる。

ＯＫ，大体把握した。何というチートスペックだこの身体。

「あー、今気付いたんですが、多分俺見た技をソックリ会得できるっぽいです。」

「「「「な、なんだってー！」」」」

そう、ブレスオブファイア３と４にあるスキルラーニングシステム。戦闘中に「見た」技をスキルとして習得することができるのだ。ただ習得できるのは汎用技のみで、さらに難しい強い技ほど習得できる確率も下がるわけだが。

「ってことは見たことがありゃなんでも真似し放題ってことか？」

「あーいや、そういうわけでもなくて。才能による物とかは無理かと。」

「しかしそれが本当なら凄いことじゃぞ！？」

「そうですね。私の剣技なんかもそっくり使えるようになってしまうということでしょう？」

「多分難しい技とかはそう簡単には覚えられないと思いますが簡単なものなら。」

「いやはや何ともこれは・・驚きました。さすがナギの見込んだだけありますよ。」

「おいリュウ！おめぇそりゃずりーぞ！」

いや俺もそう思う。

「しかし魔力の波動は感じましたから、魔法自体は普通に使えるようですね。」

へー

「まぁ技を覚える事に関しては今後リュウ君の修行時に詳しく見てみましょう。それでは次は「気」についてですね。」

「あーそれは使えんじゃろ。」

はい？

「えーと、なんでしょうゼクトさん？」

「気とは普通の人間でも微量じゃが放出しているものじゃ。しかしリュウからは件の「龍の力」がその役割を果たしておるせいか、気が感じられぬ。」

「確かに。言われてみればそうですねぇ。」

「恐らく先ほどの「技を覚える」ことはできるじゃろうが、その技に使用するのも気ではなく「龍の力」となるじゃろう。」

なるほどー。解説ありがとうゼクトさん。

「では最後はアーティファクトですね。」

「うっし、じゃあ誰かリュウと仮契約（パクティオー）するか！」

ええ！？

「あーすみません。つかぬことをお伺いしますがそのパクティオーとやらはどのように行うのでしょうか？」

「なんだリュウそんなことも知らねーのか？魔法陣を二つ敷いて、一人ずつその中に入って呪文を唱えるんだよ。唱えた方が唱えなかった方を従者にするんだ。」

良かった。キスじゃないんだ。本当に良かった。

「まぁ一つの魔法陣に二人で入ってキス、でもできますが、リュウはそちらがお好みですか？」

こんの天使の微笑み（笑）がいきなり何をほざくか！

もちろん絶対にノゥ！だ！

「いえ。そちらは断固としてお断りします。２つの魔法陣の方でお願いします。」

「相棒、いいのかい？」

にやついてるフェレットの尻尾を足でぐりぐりしてると、目の前に魔法陣が二つできあがる。

「では誰がパクティオーしましょうか。」

と詠春さんが言うと

「俺俺！俺しかいねーだろ！」

「いやここはこのワシがじゃな」

「いえ、ここは私が。」

お前らはあれか。餌を待つヒナか何かか。

「ではリュウ君に選んでもらいましょう。リュウ君、どうぞ！」

「あー、えっとじゃあゼクトさんで。」

「ふむ、リュウは見る目があるの。」

「なんでだよリュウ！」

「私ではご不満ですか？」

「いやだって・・」

だってこの中では一番まともそうなんだもん。

「よせよせ、負け犬どもは下がっておればよい。」

「「・・・」」

なんかナギとアルが爆弾のように見えるのは俺だけか？

「それではいってみましょう。どのようなアーティファクトが出るのでしょうか！」

ノリノリの詠春さんに言われて魔法陣へと入る。

パアァァァッ！

「～～～～」

ゼクトさんが呪文を唱えてるらしい。

しかしくすぐったいなこれ。

呪文が終わりかけたその時。

パァンッ！

「ぬ？」

「あれ？」

光がはじけ飛んだ。

「これは・・？」

「どうしたお師匠ー！呪文間違えたかー！」

「やれやれ、ゼクトには任せておけませんねぇ。やはりここは私が。」

こいつら絶対さっきの負け犬発言根に持ってるな。

「・・もう一度やってみるかの。」

「はい。」

しかしその後も契約途中で光が弾かれてしまった。

「ふむ、どうやらリュウは仮契約はできないようじゃな。」

「えぇ！？そうなんですか！？」

実は内心結構がっかりだったりする。

だってうまくすればこれを口実に女の子とちゅっちゅできるじゃん！

それができないなんて・・・

「リュウの持つ「龍の力」のせいか、又は魂レベルで何かあるのかは定かではないがの。」

「そう・・ですか。」

はぁ・・。素で凹んだ。

「はい、と言ったところで、「リュウ君の全貌が明らかに！？潜入！紅き翼！」を終了いたします。司会は私、神鳴流剣士青山詠春でお送りしました。」

「「「「いぇーい」」」」パチパチパチぱち

ていうか最初と題名違うし。ボッシュもいつの間にか輪に入ってるし。

何ぞこれとか思ってたら、終わりの空気を察するや否や

「誰がムッツリだナギコラァッ！」ドガァッ！

「へっ！んなもん当たるかよ！オラ食らえお師匠！！」ヒュボッ！

「ゼクト！誰が負け犬ですかっ！」ゴォォッ！

「何じゃ心の狭い奴らじゃのう」ヒュヒュッ！

ドガァッ！ドゴンッ！バギィ！・・・

はぁ。なにやってんだか。

「まぁいいか。こんなのも結構楽し「ドゴォッ！」へぶぅしっ！」

「「「「あ」」」」

・・・

「あ、相棒？生きてるか？」

「ふ、ふふふふふ・・・」ユラリ

「リ、リュウ？」

「てめーらよぅ・・・いい加減にしろやぁぁ！！」ドォンッ！

足元から噴き出す火柱のようなオーラ！

「お、おいリュウ、話せばわかるって・・・」

「そ、そうじゃぞ！感情に任せて暴れるのは・・・」

「問答無用じゃー！！」

「「「「ぎゃー！！」」」」

その日、俺は穏やかな心と激しい怒りでも変身できる事を知りました。

第三章　6、故郷

「なぁボッシュ、こっちでいいのか？」

「おうよ相棒、あぁ次の路地右な。」

俺とボッシュはボッシュの実家とやらを訪ねていた。

４人全員に（暴力的な意味で）認められて正式に紅き翼の一員となったので、

一応６日の自由時間を満喫出来る予定なのだが、

例によって俺の身体には修行と称してアルの重力魔法がかかっていた。

「そうですね、３倍程度では失礼だったようですから、次は８倍で。」

とおもっくそ笑顔で言われた。やっぱ殺しかけた事恨んでんじゃねーのか？と勘繰りかけたが、どっちにしろ自分が未熟であることは確実なので我慢した。

俺ってエライねー。

アルが俺に何か一つお願いをする権利を持ってることが超怖い。

しかしそれにしても8倍の重力にも関わらず、なんとか普通に出歩けているこの身体が本当に不思議だ。

その内本格的な修行を行うとのことなので、どれだけ強くなれるか楽しみだが戦々恐々でもある。

そうこうしているとボッシュの様子が変わった。

「・・・相棒、ここだ。」

「え?ここ?」

周りを見渡すが京都の癖に普通のマンションが建っているだけでそれっぽい建物はない。

・・・あぁ、そうか。

「もしかして・・・」

「そうだよ相棒。ココが俺っちの生まれた場所さ。」

ボッシュが短い前足を指す先には、立派なマンションが立っていた。

「・・・」

「まぁわかっちゃいたけどな。俺っちがあのボケジジイに捕まってからどれくらい経ってるか考えりゃ・・」

「どれくらいなんだ？」

「まぁ三、四十年は経ってるんじゃねぇか？」

「そんなに！？」

フェレットって寿命どれくらいだ！？

ていうかそんな昔から日本にフェレットって居たのか？

「俺っちはあのボケジジイに色々されたからな。寿命も不死身っぷりも、何かが狂っちまったんだろうよ。」

「ボッシュ・・・」

「まぁ、相棒のおかげでこうしてまた故郷の地を踏めたんだ。これでも一応感謝してるんだぜ？」

こいつこんなイイヤツだったなんて。ちょっ、マジで涙が・・

「ボッシュ。俺にできることがあったら何でも言ってくれ。俺にはそれくらいしかできねぇから。」

「あんだぁ？俺っちのこたぁ気にすんなよ相棒。だがそうだな、じゃああっちの神社へ行かねぇか？」

そう言って顎をしゃくる先には上へ続く階段がある。

「あそこ神社なのか。何かあるの？」

「俺っちがガキの頃よく遊んだ場所だ。少しくれぇ感傷に浸りたくもならぁな。」

「わかった。」

俺はボッシュを持ち上げようとしたが、ボッシュは歩きたいらしい。

なのでゆっくりめに神社へ向かった。

「ここは変わってねぇなぁ。」

階段の先にあったのはかなり古い神社だった。

ところどころ苔がこびり付いてる石畳や石灯籠、色の落ちた鳥居、枯れているのかわからない大木、そんなに参拝客が来ている様でもない。

荘厳な気配に、どことなく俺が住んでた神社を思い出して少しばかりホームシックになる。

「じゃあ一応お参りしてくか。」「おう。」

俺はボッシュを連れて寂れた本殿の賽銭箱に２００円を投げ入れ、鐘を鳴らす。

（願い事何にするかなー）

と考えたとき

『お主、我が声が聞えるな？』

何か聞えた。

「・・・ボッシュ、お前何も言ってないよな？」

「あん？まぁ言ってねぇが。なんだい？」

「いや・・」

龍堂で吸い込まれたときを思い出した。何だ今の声は。

『聞えているな。こっちへ来てくれぬか？』

また聞えた。

敵意のようなものは感じない。

俺は振り返って辺りを見回すと、視界の隅に小さな祠があるのに気がついた。

「あれか。」

「どうしたんでぇ？相棒？」

「ああ、ちょっと待ってて。」

俺は祠に近付いて行った。

よく見ると小さな祠だが、竜の絵が掘ってある。

どうやら竜の神を祀っているようだ。

『よく来たな。龍の御子。』

そう言えばアジーンもそう言ってたな。

「えーとまさかと思いますが神様でしょうか？何か御用で？」

『我と契約をしないか？』

契約？というかイキナリ何だ？

「あのースミマセン、契約というのがよくわからないのですが。」

『案ずるな。我をここから出して欲しいのだ。もう退屈は飽きた。』

なんか少し俗っぽいこと言い出したな。ホントに神様か？

「俺に何かリスクとかがないなら構わないですけど？」

チキン代表、俺！やっぱペナルティとかは嫌だよ。

『問題ない。むしろお主に我が力を貸すことになる。』

へぇ。ならしてみようか。

「本当ですね。もし嘘だったら即破棄しますよ。」

だがしかしチキン代表、俺！確認は怠らない。

『構わぬ。用意ができたら祠の表面に手をかざすが良い』

（別に用意とかないし）

俺は祠の表面に恐る恐る手をかざした。

すると掌から熱が伝わってくる。ていうか

熱い！

「あっちぃぃ！！何すんじゃぁ！」

『これで我は外へ出られる。感謝するぞ』

何がじゃーと思うと、何かが頭の上に落ちてきた。

「何これ・・・カード？」

それは表面に青く美しい東洋の龍の絵が書かれたパクティオーカードだった。

『我が力が必要になった時に使え』

もしかしてこれって！？いやもしかしなくても・・・

【竜召喚】！？

竜召喚とはブレスオブファイア４の能力で、各地の竜と契約してその力を召喚できるという技だ。しかも消費は０。一度しか使えないが、宿屋へ泊まれば復活してるってものだったはず。

マジか！？いいのか？

見た目がネギまのパクティオーカードなのはつまり契約の証しということなんだろうか。

しかし

「えと、どうやって使えばいいのでしょうか？」

始めて見るアイテムをいきなり使いこなせる特撮ヒーローのような力は俺にはないのよ。

『掲げて我が名を叫べ』

簡単だなー使い方。でも問題は

「あの、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

この神社の名前を見ておらんのかーとかって怒られたらどうしよ。

『我には名が無い。故にそのままでは使えまい。我に名を付けろ』

そうきたか。だけど漠然としすぎてるよなぁ。せめて属性とかないのか？
カードの見た目からするとＦＦのリバイア○ンっぽいけど。

「あの、それでしたら何かこう司っている力など参考に教えてもらえないでしょうか。」

『我は風を操る』

風だったか。割とありきたりだな。
風ねぇ・・・シルフィード・・ウィンディ・・ワムウ？
そういやブレスオブファイア４の風竜の名前なんだっけ・・・あんま覚えてないなぁ
まぁ風だしアレでいいかな。

「じゃあ『サイフィス』でどうでしょう？」

『・・・構わぬ』

ヤベェ、なんか気に障ったか？ちょっと怖いな。

「えーと、じゃあよろしくお願いします。サイフィスさん。」

『我のことは呼び捨てで構わぬ。我が力、お主に預ける、龍の御子よ。』

カードが輝き、龍の絵の上に文字が現れた。恐らく名前が刻まれたんだろう。

俺はカードをポケットにしまい、ボッシュの方へ向かった。

「相棒、疲れてんだな。なんかブツブツ言ってたみてぇだし。連れまわして悪かった。」

戻るとなんかボッシュに哀しそうな目をされた。

いやちげーから。

第三章　7、前兆

ボッシュに故郷に残るかどうか聞くと首を横に振り、着いて行くと言った。

「相棒達と居りゃぜってぇ退屈しねぇしよぉ。」

と笑いながら言ったボッシュはどこかに寂しげな感じがしたが、本人がそう決めたならいいのだろう。

改めて全員で歓迎した。

その歓迎時に調子に乗ったナギが洗面器一杯に注いだ酒（のようなもの。未成年だから）にボッシュを突っ込み、溺死させかけて全員顔が真っ青になるが、「死んだらどーする！」といつもどおりに復活したボッシュを見て一騒ぎあったのは完全な余談だ。

一夜明け、一昨日発覚したスキルラーニングと言う俺のチートっぷりを確かめるべく、

俺達は再びサバンナ空間に集合していた。

目の前には刀を構えた詠春さんと魔法で出したのか巨大な岩がある。

「ではリュウ君、よく見てて下さいね。」

「はい。」

「神鳴流奥義！斬岩剣！」

ズバンッ！

「おおおーっ！」パチパチパチ

「さっすが、兄さん方は半端じゃぁねぇな。」

「さて、ではこれでリュウも出来るかどうかやって見て下さい。」

そうアルに言われ、少し短めの太刀を渡される。

「よっし、せーの！斬岩剣！」

バガァッ！

「・・・できたし。」

「ふぅむ・・私のモノより速度は遅いし、威力も小さいが、確かにこれは紛れも無い斬岩剣。いや本当だったんだね。」

ちょっと疑ってたのか詠春さん。

「流石じゃの、リュウ。よし詠春、もう幾つか奥義を見せい。」

「そうですね。では次は・・・」

しかし、幾つかの奥義を見たがまともに覚えられたのは「奥義斬空閃」だけだった。

「斬魔剣」も一応覚えることはできたがどうにも上手く使えない。

「やっぱり難しいヤツは覚えられないみたいですねー。」

「いや、初見で斬岩剣と斬空閃を覚えられてしまったし、これ以上簡単に覚えられたら私の立場が無いよ。」

そう言って思わず苦笑する詠春さんであった。

「そういやリュウ、お前多分もう瞬動できるんじゃないのか？」

「あ、そういやそうかも。」

瞬動は何度かナギのモノを見ているし。

「じゃやってみる。・・ほっ！」

ヒュオッ！

瞬時に少し離れた所へ来れた。やっぱ出来た。

ヒュッ！

「おっし、やっぱできたな。さすがだぜリュウ。」

ナギも瞬動でこっちへ来る。他の面子はまださっきの場所にいる。

「ではリュウの修行方針を決めましょうか。」

「おわぁっ！」

イキナリ後ろからアルに声を掛けられた。

あれぇ？今さっき見たときはあっちに居たのに。瞬動ってレベルじゃねぇ。

「リュウは基本的な技に関しては見て覚えられますので、それを使いこなすだけの筋力がまず必要です。恐らく今のリュウでは瞬動で数往復するだけで筋肉痛になるでしょう。」

ああ、そうかも。確かに覚えは早いけど即効で完璧に使いこなすってのは無理だよなぁ。

「というわけで、しばらくは基礎体力向上の修行ですね。ふふっ今度は何倍がいいですか？」

うわぁ・・どSの微笑みキタコレ

「あとは魔法と戦いに関する経験ですね。これに関しては私達と日替わりで組み手を行いましょう。もちろん手は抜きませんから死ぬ気で頑張ってくださいね。」

マジですか。

「はい、アル先生質問です。変身はありですか？」

「なしに決まってるでしょう？その変身を使いこなすための修行でもあるんですから。」

ですよねー

というわけで、それから魔法世界へ行くまでの間、普段は重力ｎ倍で体力を増強し、自由時間以外には修行として紅き翼のメンバーを相手に変身を封印してのデッドオアアライブな組み手を行うのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

そこは魔法世界の一角、上空に浮かぶ王都オスティア。

その周辺に数在る浮遊岩の上で

バルバロイは驚いていた。

自分の目の前に自分の見た目を大きく成長させたような青年が居たからだ。

「君はなんだい？」

「やあ。プロトタイプ。残念だけど、君にはもう用はないんだ。」

「・・何を言ってるんだ？」

「有体に言えば、君はただの実験体さ。女神もそう言ってたよ。（嘘だけど）
それに、あれだけの魔族を動かしておいて成果０。どうなるかわかるよね、プロトタイプ。」

「僕は・・僕はバルバロイだ！そんな名前じゃない！」

バルバロイは珍しく感情を表に出した。

しかしもう一人の白髪の青年は動じない

「君、正体は醜い化け物なんだってね。ああそうそう、こう言えばいいのかな。失敗作。」

「！！貴様ぁ！」

「感情丸出しなんてみっともないよ。やっぱりプロトタイプだね。」

バルバロイは目の前の少年に掴みかかろうとしたが動けない。何かに両手両足を捕まれているようだ。

「最後にいい事を教えてあげるよ。君は失敗作だけど、あのリュウ

ってやつがその失敗の上に立つ成功作・・つまり本物の「うつろわざるもの」さ。」

「！！それは・・」

本当か！と言おうとしたが声が出ない

「これ以上君のその感情にまみれた醜い顔を見たくない。恨むなら君を造り上げた老人と女神、そしてあのリュウとかいう化け物でも恨むんだね」

そう言って白髪の青年が手を振ると、バルバロイは動けないまま空中に放り出された。

両手両足が動かず、魔法を使うこともできないまま、バルバロイは奈落の底へ落ちて行った。

「リュウ・・・リュウゥッ！！僕は・・・僕はっぁぁぁぁぁぁ！！」

その後しばらくして、魔法世界全土に生息する竜種が一時的に激減すると言う奇妙な事件が発生することになる。

第四章　1、単独

「おー、やっぱスゲェな魔法世界。」

「スゲェ。俺っちこんな景色見たことねぇぜ。」

俺とボッシュは魔法世界の広大な景色を飛行船から見て唸っていた。

（ナイアガラの滝なんて目じゃないね。行ったことないけど。）

俺とボッシュが何故2人だけで居るのかと言うと、話は魔法世界到着直後までさかのぼる

――――――――――――――――――――――――――――――――

「さて、登録は完了しました。これで私たちは晴れて「紅き翼」を名乗ることになります。」

アルがまとめる。

俺達は「紅き翼」を「悠久の風」に登録するために魔法世界を訪れていた。

「よっし、じゃあまず何をすればいーんだ?」

「アホ弟子よ。少しは自分の頭で考えることをせい。」

「お前一応リーダーだろナギ。リュウ君はきちんと勉強していたのにお前ときたら・・」

「あーうっせうっせー。俺にそんなもんは必要ねー。」

「ナギさぁ、せめて魔法くらいは真面目にするとかさぁ。」

「そうだぜナギっこ。イチイチあんちょこ見んのはカッコわりぃってての。」

「ぐっ・・」

俺とボッシュ含めたほぼ全員からの攻撃！ナギに精神的ダメージ！

「ナギを責めるのはそれくらいにして、これからの私たちの行動ですが、ここに5枚の紙があります。」ひらひら

「なんじゃその紙は？」

「とりあえず一人一枚ずつ受け取ってください。」

そういって適当に全員分配られた。

「では表を見てください。そこに書かれている内容の依頼を一人でこなしてきてもらいます。」

はい？

「私たちは発足して間もないですから、知名度が全くありません。ですのでがんがん依頼をこなして名を上げましょう。」

「そういうことか、わかったぜ！」

「面白そうじゃの。」

「私たちには簡単な仕事ですね。」

あの、俺初めての仕事なんですけど。

「相棒、がんばろうぜ！」

「リュウ君、私たちとの修行と実戦とはまた少し毛色が違うから、早めに慣れるのにもこれは向いてると思うよ。」

フォローありがとう詠春さん。

「そうですね。やってみます。」

「ではそういうことで。集合は今から2週間後にメガロメセンブリアとします。」

ーーー

街道の盗賊退治」を行う為に近場の町まで高速飛行船で向かったのだった。遠いので実はもう船内で一泊してたりする。

ナギ・アル・詠春さん・ゼクトさんとの1週間ちょいほどのスパルタ修行で、俺は普段の状態でもそこそこ強くなっていた。

ネギま魔法は魔法の射手を53発くらい無詠唱で出せるし、ブレスオブファイアの魔法も最上級以外の魔法はほぼ使えるようになった。

問題はネギま魔法に必要な発動体を持ってないことだが。

剣技としては斬岩剣と斬空閃がそれなりに使える。

が、俺は神鳴流ではないし、技のみを覚えていてその他の剣捌き等はそれほどでもないのにその名を使うのも気が引けたので、詠春さんの許可を得て、技名をそれぞれ「大地斬」「海波斬」とした。

「斬魔剣」はもう少し修行してまともに使えるようになったら、「空裂斬」に改名する予定だ。そうすれば俺はきっと全てを斬ることができるに違いない。ふへへ。

問題は武器を持ってないことだが。

後は瞬動と虚空瞬動ができる。意外と覚えてる技が少ないが、周りのレベルが高すぎるのが原因だろう。

だが代わりに瞬動、虚空瞬動の連発とか体術とかはかなり手慣れたものになったと思う。

ていうか生き延びるためにはこれらは必須だったし。

とりあえずこの身体は修行したらしただけ血肉になるチートっぷりが素敵だ。

ズブの素人だったので何度か死ぬ思いをしたけどそれ相応の見返りだと思う。

たった一週間ちょいの修行、まだ見た目１０歳程度なのにこの強さはいいのだろうかと思ったが、

ネギまのネギは１０歳なのにあの強さまで行ったんだし、俺自身まだそこそこ程度のレベルではあるからいいんだろう。

ちなみに今の状態での変身はしていないが、ここまでの強さが反映されたらどれほどになっているのか想像もつかない。

まぁ変身したとしても以前のように感情に任せて振わないようしっかりとしなければ。

などと、景色を見ながら色々考えていると高速飛行船が目的地に到着したようだ。

ここからはバスのような魔法の乗り物を使う。地面から少し浮いている乗り合いの馬車のようなもので好きなところで降ろしてくれるそうだ。料金は５Ｄｐ。

この世界の通貨であるドラクマ（Ｄｐ）はイマイチ価値がよくわからない。

日本円に換算すると１Ｄｐ＝５０～１００円くらいだ。

変動しているのはそもそも物価や価値感が違うため、俺の頭じゃ計算ができないからだ。

ちなみにこの依頼は解決したら特別報酬として４０００Ｄｐ貰えるとか。

高いか低いかようわからん。

「悠久の風」は基本慈善事業なところが多いので、特に解決して欲しい場合はこのように依頼者が直接報酬を払うこともあるそうだ。

全体的にこう言った依頼は少ないらしいけど。

目的地のオウガー街道は辺境の田舎であるウールオル地方の街道だ。

ウールオルの街の人が盗賊に困っているので依頼をしたらしい。

と、

とりあえずウールオルの街に着いたので降りると、他にも数人降りたようだ。

普通の人に交じって軽装鎧を着て剣を持った人?や、斧を背中に装

備し、鎧を着たピンク色のワニの獣人もいる。

（あの人には後でサインを貰おう。）

どう見ても某獣王のような人を見てそんな風に思ったりした。

紅き翼の面々と知り合う前だったらきっとビビりまくってただろうが、今は多少自信が付いたのかそんなことはなかった。ありがたいことだ。

「相棒、どうやらあっちの広場で説明が聞けるみてぇだぜ。」

考え事をしていると首に巻きついてるボッシュが話しかけてきた。

周りに気を配れる相棒は優秀だね。これでもう少し口調が優しければいいのに。

俺はボッシュの言う方向へ向かった。

第四章　1、単独（後書き）

第四章　2、鰐男（前書き）

なんて副題だｏｒｚ

第四章　2、鰐男

広場では俺を含めた結構な人数が立っていた。

鎧はおろか武器すら持っていない子供で普段着の俺は、この中では浮きに浮きまくっている。

野宿とかに必要な道具はドラゴンズ・ティアに入ってるから実質手ぶらだ。

「おい坊主、ここに居る意味わかってるか？俺達ゃ盗賊を退治するんだぞ！」

「ガキはおうち帰ってママと仲良くおねんねしてな！ＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

うは。何というステレオタイプなセリフ。俺は今猛烈に感動している。

まさか自分がこの手のセリフを吐きかけられる日が来ようとは。

「あはは、まぁ俺の事なんてそんなにお気になさらずに。」

罵声を浴びせられたのに、にこやかにそう言う俺を見て不気味に思ったのか、周りの戦士たちはそれ以上突っ込むのを止めたらしい。

ちなみに某獣王似のワニの人は我関せずと目を瞑り腕を組んでいる。

まさに王者の風格。

しばらく待っていると、ちょっと太めの木こりのような人が向こうの方からやってきた。

恐らく町長さんだろう。

「お集まり頂いた皆様には厚く御礼を申し上げます。私たちの住むこの街の、南にあるオウガー街道、そこに出没する盗賊を、どうか退治して頂きたい。この街に出入りする商人がもう何人も被害にあっています。生死は問いません。どうかよろしくお願いいたします。」

ざわ・・・ざわ・・・

周りの戦士たちはチームを組んでる人達は相談を、

そうではない人達は考え事をしながら散って行った。

手柄は早い者勝ちだから、早速向かったんだろう。

「どうする？相棒。」

「そうだな。ちょっとあの町長さんらしき人に聞きたいことがあるんだ。」

「現場に行かなくていいんか？」

「まぁいいから。」

ふっふっふ。オウガー街道、ウールオル地方とくれば、ブレスオブファイア3のイベントが思い出される。

ならば、盗賊ってのは十中八九俺の想像通りの筈だ。

そしてあの町長さんは見た目からすると・・

「すみません、町長さん、ちょっと質問いいでしょうか?」

「ん?なんだね?」

「失礼ですが、町長さんのお名前を教えてもらえませんか?」

「うん?ああ、ワシの名前はババデルだ。それがどうかしたかい?坊や。」

「あ、いえ、ちょっと気になっただけです。ありがとうございました。」

「うん、君も依頼を受けてくれたのかも知れないが、無茶はいかんぞ?相手は強力な盗賊だからな。」

「へー、その盗賊って強いんですか?」

「ああ、めっぽう強い。なにせ商人達も噂を聞いて用心棒を雇ったりしたが、ことごとく潰されてしまったからな。おかげでこの街は物流が滞って大変だよ。」

「そうなんですか。」

「うむ。まぁなんだ。あまり無茶はせんでくれよ。」

「はい、ありがとうございました。」

ビンゴだ！ババデル来た！これは是非盗賊に会って話を聞かなければ！

「相棒、あのジーサンの名前がなんだってんだよ。」

「ああ、ちょっと知ってるのさ。あのじーさんは悪い人じゃないよ。」

ババデルはブレスオブファイア2、3と4に出てくるキャラで主人公に助言を与えてくれる。

2でのババデルは一発キャラだし、話し方からして違ったので3，4的な方だろう。

そして街道の盗賊は3で仲間となったキャラの筈だ。

「魔法世界来たことねぇのに知ってんのかい？相棒はつくづく変だぁね。」

「こまけぇこたぁ気にすんな。」

「んで、どうすんだ相棒？」

「んーじゃあ一応街道の様子見に行ってみようか。」

「よしきた。」

オウガー街道は俺の知ってるブレスオブファイアのとは違って、道の周りを木々に囲まれている。

林の中を突っ切るように太い道が一本通っていた。

これなら隠れるのにも向いてるし、少人数なら通行人への略奪撤退のコンボはやりやすそうだ。

さっきの広場に居た、盗賊を討伐しに来た人たちが罠を張ったり声を揚げたりしている。

こんなことして出てくるわけねーと思うのは俺だけだろうか。

「相棒、俺っちが盗賊ならここにゃぜってぇ出てこねぇと思うんだが・・・」

良かった。俺一人じゃなかった。

「だよね。一度街戻って休むか。今日は移動多くて疲れたし。」

「おう。」

俺とボッシュはウールオルの街へと戻り、宿を取った。

もう夕刻だし、と食堂へ行くと人が多く居たが、一角だけ妙に人が少ない個所があった。

空いてるそこへ近付くとあのピンク色のワニの獣人が一人で酒を呑んでいた。

「おい、相棒、あのおっさんナカナカ出来るな。」

「そうだね。」

ナギ達のおかげで、俺とボッシュは相手の強さというモノに大分敏感になっていた。

こうしてしっかりと見てみると、食堂の片隅に居る獣人のおっさんはナギ達には全然及ばないが、それでも十分な強さを感じる。

俺は食堂でトレイを受け取り、おっさんの側へやって来た。

「こんばんは。ご一緒してもよろしいですか？」

「・・・」

最大限に笑顔で言ってみたが、おっさんはこっちを一瞥しただけで酒を呑みつづける。

無言は肯定と無理やり解釈して俺はおっさんの横の席に座った。

「盗賊退治の方ですよね。」

「・・・」

「あ、これは失礼しました。俺は紅き翼所属(アラルブラ)のリュウって言います。」

「・・・」

「街道に出る盗賊は何やら腕が立つようで、どうなりますかねー。」

「・・・」

周りの人たちはこちらをチラ見しては「大丈夫かあの少年」とか「おっかねぇ。くわばらくわばら」とか言ってるがスルー。

「・・・お前はオレが怖くないのか?」

ようやくおっさんが口を開いた。

「え?いや別にそれほどは。おじさんは無闇に暴力を揮うような人ではないと思いますし。」

俺は先入観以上にこのおっさんが全く周囲に敵意を振り撒いていないことを理解していた。

恐らく、あの某獣王と性格的にも同じような感じだろうと思い、声をかけたのだ。

おっさんは俺の答えに意外と思ったのか、続けて話してきた。

「不思議な小僧だな。オレに近付いてくるとは勇気があるのかバカなのか。」

「いやぁ、それほどでも。それに大丈夫ですよ。おじさんがここで暴れたとしても俺多分死なないですから。」

暗に俺は強いと言ってみる。

「・・ふ、ぐはははは。お前は面白いヤツだな。よもやこの俺にそんな口を聞くやつが居るとは思わなかったぞ。」

「いえいえ。」

「リュウ、だな。覚えておこう。オレの名はガーランドだ。」

「ぶふっ！」

「？なんだ？」

「げほっけふっ。いえ、スミマセンちょっと咽たようで・・何でもないです。」

思わず吹いちゃったよ！

おっさんガーランドかよ！

絶対クロコダ○ンだと思ったよちきしょう！

ちなみに「ガーランド」はブレスオブファイア３の味方キャラで、素早さの低いゴツめのパワーキャラではあったが、断じて見た目はピンクのワニではない。

（ちょこちょこ細かいとこで違うんだなぁ。）

「ふう、えっとガーランドさんはどうしてこの依頼を？」

「ん、オレは今武者修行をしていてな。これはその修行の一環だ。」

「へー。」

意外と理由は普通なんだな。

「そう言うリュウはどうなんだ？お前のような小僧にその装備・・とても盗賊退治をするようには見えんぞ？」

ごもっともで。

「あはは。これでも一応ちゃんと依頼はこなすつもりですよ？」

いざとなったら変身するしね。

「フッ、そうか。なにやら自信があるようだな。だが気を付けろよ。」

「はい。クロ・・・ガーランドさんもがんばってくださいね。」

危ねぇ。素で間違えそうになった。

俺とボッシュは食事を終え、部屋に戻った。

宿ではあまりあの盗賊退治の戦士達は見かけなかったが、あの街道沿いで野宿でもするんだろうか。

夜は冷えるってのにご苦労なことで。

俺とボッシュは部屋で魔法世界やガーランドさんについて談笑後、眠りについた。

第四章　3、盗賊

「相棒、相棒起きろ！なんか変だ！起きろ！」

「・・・んぁ？」

「外が騒がしいってんだよ！いいから起きろやこらぁ！」ベシッ！

「わぷっ！・・なにすんねんボッシュ。」

尻尾で顔を叩くとは。まぁ噛まれないだけましだけど。

「とっとと外行くぜ相棒早くしろ！」

「あ、あぁ、ちっと待って。」

急かすボッシュを抑えて取り合えず最低限の身だしなみを整えてから外へ出ると

昨日の広場に街の人が集まっていた。

しかし街に着いて一晩経ったら即イベントか。

つくづくこういうところは主人公補正なんかなぁとか考えてうろうろしてると

その中にババデルさんの姿を見つけたので近づく。

「おはようございます。ババデルさん、何かあったんですか？」

「ああ、君か。君は無事だったか。良かった。」

「？どういうことですか？」

「さきほど私の使いの者が所用で街道に出たんだが、なんでも凄いバケモノモンスターが居たらしくてすぐに戻ってきたんだ。昨日の依頼を引き受けてくれた方々の姿が見えないからどうしたものかと思い、動くに動けないのだよ。」

「そうなんですか。」

バケモノ？まさかな・・

「ちょっと俺見てきます。」

「ば、馬鹿な！危ないぞ！やめなさい！」

「大丈夫です。俺はこれでも「紅き翼」の一員ですから。」ダッ

「お、おい！」

俺とボッシュは引き留める村長を背に街道へと急いだ。

俺とボッシュが街道に到着し歩いていると覚えのある臭いがして気分が悪くなった。

血の臭い。

少し歩くと果たしてソレはあった。

折り重なるように山となっている戦士たちの死体。

そしてその先で二人の男がにらみ合っていた。

一人はピンク色のワニの獣人

もう一人は人と虎のハーフのような見た目の獣人だった。

（やっぱり！あれはレイだ！）

レイはブレスオブファイア3の味方キャラで素早さを生かした戦法を得意とする主人公の兄貴分だったはずだ。そして彼にはある行動を取ると暴走するという秘密がある。

だが復讐などの理由がない限り人を傷付けたりはしないキャラだったはずだが・・。

（どうなってるんだ？）

すると2人の話し声が聞こえてくる。どうやらこちらには気付いてないようだ。

「これをやったのは貴様か？」

「愉快だねぇ、俺じゃねぇっつっても聞く気ねぇんだろ？」

「そうだな。捕まえて口を割らせればそれで済むことだ。」

ワニの獣人はそう言って斧を構える

「へっ！なら聞くなっての！」

虎の獣人もそう言ってナイフを両手に構える

辺りに殺気が満ち始め、ぶつかろうとした瞬間

「ちょっと待ったぁ！！」

「「！」」

俺必殺ちょっと待ったコールが炸裂した。

（危ねぇ、一触即発だった。）

二人は同時にこちらに視線を飛ばす。

俺は二人に近づきながら話しかけた。

「ガーランドさんもレイさんも取り合えず落ち着いて下さいよ。」

「・・リュウ。」

「ガキ、何故俺の名前を知ってやがる?」

そりゃ原作知ってますから

「そんなことはどうでもいいですから、お二方とも得物を収めてくださいよ。」

「だがコイツは俺がここに来た時にはこの場に立っていた。コイツ以外あの殺戮の犯人はおるまい。」

「愉快だねぇ、頭の固ぇおっさんだ。俺がたまたま通りすがったとは考えねぇのかよ。」

「ならばその殺気はなんだ?大方盗賊と言うのも貴様だろう。一体今まで何人殺めてきたのだ?」

「んだと!?俺は確かに盗賊だが、人を殺した事は一度もねぇ!言いがかりつけてんじゃねぇぞ!」

「おーい。お二人さんいい加減にしなよー・・」

「相棒、声ちっちぇえぞ・・」

だって見た目があだから本気で怒ってる二人がちょっとこえーんだもんよ。

はぁ。まぁ仕方ない、ここは腹をくくって。

「ほら、ガーランドさん、もしレイさんがこんな酷い事をする血も涙もないような悪党なら、俺を見て止まったりせずに、とっくに斬りかかってきてるはずでしょ。」

「む・・」

「レイさんも、そうかっかしないで。俺はレイさんはこんなことしてないと思ってますから、まずは話を聞かせて下さいよ。」

「・・・ちっ。」

二人はどうにか武器を納めてくれて、辺りの物騒な空気も霧散したようだった。

なんとか説得成功。今までの俺とは思えない主人公っぷりにちょっとだけ自嘲した。

「とりあえずレイさんに話を聞きたい所ですが、街の中はマズイのでどこか落ち着いて話せる場所とかないですかね？」

レイさんに問いかけてみる

「確かにこの場にいちゃぁまたこのおっさんみてぇなのに疑われるな。話だけならしてやるがいいのか？俺は嘘を付くかも知れねぇぜ？」

「いやぁ、人を殺さないという義賊のような人が俺のような子供に嘘なんてつかないと思いますから。」

なるべくの笑顔。しかし俺はいつからこんな黒くなったんだろうか。絶対アルのせいだ。

「・・・この先に俺が使ってる掘立小屋がある。そこでよけりゃ。」

「大丈夫です。ガーランドさんもいいですね。」

「・・・」

沈黙は肯定と受け取る。

「それじゃ俺は一旦町長さんにこの惨状を報告して来ますので、先に行って待ってて下さい。」

「おい待てガキ。まさかとは思うがお前俺を売る気じゃねぇだろうな。」

あー確かにそう取られても仕方ないか。

「・・そうですね。わかりました。では俺の大事な相棒を置いていきますからそれでなんとかお願いします。」

そう言って俺は首に巻きついてるフェレットをむんずっと掴み

「ちょっ！おい！相棒！待てって・・」

二人に放った。

「・・ほう、しゃべるイタチとは珍しいな」

「おいおい、こいつが何だって？」

「そいつは人質ってことで。もし俺が裏切ったりしたら煮るなり焼くなりどうぞご自由に。」

「おいィィィ！あいぼぉぉぉう！」

「大丈夫だってボッシュ、心配すんな。ちょっと行ってくるだけさ。」

俺はなるべくの笑顔でボッシュにそう言うと街に向かってダッシュした。

第四章　4、目的

街へ戻ってババデルさんに会い、街道の悲惨な状況を伝え、その処理についてお願いした。

その後、バケモノを見たというババデルさんの使いの人に運良く話を聞くことができた。

話によるとバケモノは身の丈3～4メートルはあり、皮膚の色は紫で鎧を纏い、巨大な戦斧を持っていたとのことだった。

そいつが殺しの犯人だろう。これを伝えればガーランドさんからレイさんへの殺人疑惑は晴らせるな、

と考えながら俺は街道をさっきレイさんが示した方へ急いでいた。

しばらく走っているとみすぼらしい小屋のような物が林の中に建っているのが目に付いた。

恐らくあれだ、と思い草の生えた林を通って近づいてノックしてみる。

コンコン「リュウです。居たら返事してください。」

ややあって、ドアがギィィッと開いた。

中へ入るとレイさんだけが居る。

他二人はどこかという疑問を声に出す直前に

「こっちだ」

そう言ってレイさんが指を刺す場所にはよーく目を凝らすと床の木目が不自然な板があった。

レイさんがその板を外すと、そこには地下へ続くはしごが。

（なるほどねー）

はしごを降りていくと細い石造りの通路があり、奥には割と立派な部屋が2つほどあった。

レイさんが手前の部屋へ入っていったのでそちらへ続くと、中でガーランドさんとボッシュが寛いでいた。

（奥はなんだろ。寝室かな？）

と、ボッシュは俺を見るなり食ってかかってきた。

「ひでぇじゃねぇか相棒！俺っちを人質なんてよ！死んだらどーする！」

「悪かったな。でもホラ、大丈夫だったろ？」

ガーランドさんとレイさんはそんなことしないからな。原作的に考えて。

取り合えず落ち着いたので話を切り出す。

「さて、町の人に言ってあの戦士達の亡骸は手厚く葬ってもらうことになりました。」

ちょっと薄情な気もするが俺にできることは何も無い。と思う。精々仇討ちくらいだ。

「それと、化け物の目撃証言も聞いてきました。～～～といった感じで、とてもレイさんとは似つかない容姿みたいですよ。」

「・・・ふん」

納得してない感じだけどこれで一応ガーランドさんの疑いもかなり薄まるだろう。

「それで、さっきあの場に居たレイさんの話を聞きたいのですがいいでしょうか？」

「その前に、リュウとか言ったな。何でお前が俺の名前を知ってたか教えて貰うぜ？」

ヤベェ、誤魔化せなかったか。

さてどうしよう・・

「あー、実は俺盗賊退治の依頼を受けてここに来たんですけど、その依頼書に書いてあったんですよ。」

俺はさらに誤魔化すを選択した！

「・・・」

ガーランドさんはスルーしてくれてるらしい。絶対怪しんでるよなぁ。

「俺はこの辺りじゃぁ一度も名前を出した事はなかったんだがな。」

「「悠久の風」は魔法使いも多数居る大きな組織ですから、どこからかバレたんじゃ？」

「・・・ケッ。俺も焼きが回ったもんだぜ。」

突っ込みどころ満載だけど一応誤魔化せたか？

まさかゲームで知ってるなんて言えないしなぁ。

「それじゃ話を聞かせてもらえますか？」

「・・・俺が今朝ここからあの道に行こうとした時、何か妙な気配と血の臭いがしてな、急いでみたら死体だけがあったのさ。それだけだ。」

「・・バカな。そんな話を信じろというのか？」

ガーランドさんが睨みながら言う。

「愉快だねぇ。だが俺は嘘は言っちゃいねぇ。本当の事をこれ以上どう言えってんだ？」

「まぁまぁガーランドさん。俺は信じますから。後ついでにレイさんに聞きたいことがあるんですがいいですか？」

「なんだよ」

「あなたが盗賊をしている本当の目的は何ですか？」

「！」

「・・？」

ガーランドさんが少し不思議そうに見ている。

ここからスーパー俺タイム！

「人を殺していないという事はいずれ自分の存在が露見し、俺達みたいな討伐隊が来る事もわかったはずですよね。でも目撃者を消さず、しかもこの周辺から動かない。てことはここに何か盗賊行為以外の目的があるからってことになりますよね？」

「へっ、ただのガキじゃねぇと思ったが・・」

「ただの推測ですけどね。で、どうなんです？」

「・・・まぁいいか。俺はこの辺の大地主のミクバ・マクニールってヤツに用がある。わりぃが用の中身までは言えねぇ。最初はヤツの屋敷に忍び込むつもりだったが警備が厳重過ぎでな、入り込めねぇ上に本人の警戒心が強くてなかなか表に出て来やがらねぇ。この街に居る商人が何かそいつに会う為の通行手形のようなものを持ってる筈だからそれが欲しかったんだ。」

なるほどね、「ミクバ」や「マクニール」はボスの名前だった筈だ。

しかし原作のレイさんとそいつらの関係からすると用ってのはもしかして・・

（・・まぁ今はいいか。）

「えーとじゃあつまりその人に会うために盗賊してたってことですか？」

「・・人騒がせな盗賊だ。」

「愉快だねぇ・・おっさんのワニヅラもお騒がせって意味なら人の事言えないと思うぜ。」

「まーまー、それで一応俺とガーランドさんは盗賊退治を依頼されているわけですが、レイさんはそのミクバに会えれば盗賊はやめるわけですね？」

「・・・まぁ・・そうだな。」

何か歯切れ悪いけど。

「なら、そのミクバに会いに行きましょう。それが早い。」

「リュウ、この男を役所に突き出すだけで良いのではないか？」

「それだとあの殺しの犯人がわからないじゃないですか。俺の勘ではそのミクバが怪しいと思うんです。」

ふはは。一見すると脈絡も何もない。しかしもちろん根拠は原作知識からだ。

「だが今の話ではそう簡単には会えんのだろう?そこのコソ泥が諦めるくらいなら侵入するとて厳しいと言わざるを得まい?」

「愉快だねぇ・・誰がコソ泥だって?」

「まーまー、それじゃ取り合えず俺とガーランドさんでミクバ・マクニールとその家について街で聞き込みしたりしてきますから、それから対策を立てましょう。それでレイさんは今後盗賊稼業を自重してください。どうですか?」

「・・いいぜ。俺はミクバの野郎に会えりゃそれでいいんだ。」

「・・・ふん。」

「しっかし相棒よぉ、いつの間にそんな堂々とできるようになったんでぇ?」

「ふっふっふ、俺も成長しているのだよボッシュ君。」

俺のあまりに堂々とした主人公っぷりに疑問を抱いたらしい。

(まぁ原作知識とナギ達の(修行の)おかげなんだけどね。)

俺とガーランドさんで街に戻り、ババデルさんに話を聞くと、どうやら戦士たちの殺しについて、もっと高額の賞金を懸けた依頼を悠久の風にするところだったらしい。

俺はガーランドさんと解決するのでそれまで待って貰えないか交渉し、もしそれも解決できたら盗賊退治の礼金４０００＋殺し解決の礼金１６０００で計２万Ｄｐ貰う約束をした。

ガーランドさんと分けても一人１万、金はいくらあってもいいだろうし貰える物はありがたく頂くことにする。

ただし期限は３日以内とのことだった。

一通り街の人に話を聞いてレイさんの隠れ家へ戻る。

聞き込みで集まった情報は大体以下の通りだ。

・大地主のミクバ・マクニールは高額な税を取り立て評判が良くない上にその金で大量に私兵を雇っている。

・マクニール邸の私兵はたまに数十人単位で人間業とは思えない死

に方をする事があるらしい。
・マクニール邸には正門の他に裏口があるが、そこも決して小さくはなくかなりの兵が見張っている。

「・・・と言ったところです。」

俺はレイさんに聞き込みの結果を話した。俺ならこんな職場で働くのは絶対嫌だな。

「街人の話では確かに何かあるようだったな。」

「リュウよお、肝心の忍び込み方がわからねぇじゃねえか。」

「ああその点はご心配なく、俺が正門前辺りで派手に陽動を起こしますから、その隙に裏から忍びこんでください。」

アレを初めて使うのが陽動ってのがちょっと気が引けるけど。

「他に質問はありますか?」

「おっさんは行くのか?」

レイさんがガーランドさんを睨みながら言う。

そう言えばガーランドさんはあんまり関係ないや

「・・そのつもりだが？」

「どういう風の吹き回しだって聞いてんだよ。」

「どうにもな。オレも関係ないとは思ったがリュウが・・」

「え？俺？」

「・・リュウの言う勘とやらではあの殺戮にはそのミクバが関わってるのだろう。それが本当ならばあの犯人と戦うチャンスだからな。」

「えーと、俺が言うのも何ですが結構簡単に信じてくれてるんですね。」

「ふっ、お前はその事に随分自信があるようだったし、な。」

何か妙に俺の事買ってくれてる。

「愉快だねぇ。物好きなおっさんだ。」

「あー、じゃあ決行は明日の夜ってことで。今日はこの辺でお暇しますね。」

マクニール邸侵入作戦の日時を決め、俺とガーランドさんは宿へと戻った。

第四章　5、侵入

翌日、マクニール邸に忍び込むのは夜なので、俺はナギ達に言われた日課の基礎修業後はボッシュとぷらぷらしてようと思ったが、何故かガーランドさんに捕まった。

曰く、いくらなんでもこれから戦いがあるのにその装備はないだろう、と言うことで

街にある武器屋に拉致られた。

俺が「基本素手でいいですよ」と言っても聞く耳持たず。

心配してくれるのはありがたいんだけど引っ張られてる手が痛いとです。

武器屋に着くと中は思ったより小奇麗ではあったが、所狭しと様々な武器が置いてあった。

俺も男の子なもので、強そうな剣や装飾の付いた槍なんかには素直に感動した。

手持ちには一応４００Ｄｐほどあるが、ガーランドさんが少し出してくれるそうだ。

思わず色々と目移りしていまい、こんな辺境の街だからこそと６００年前のインテリジェンスソードとか神通無比の大業物たる大太刀とかを探してみたが、さすがになかった。

結局、俺は刃渡り７０ｃｍほどの片刃の刀剣、スクラマサクスを買った。

４００Ｄｐちょうどだったのでガーランドさんの手を煩わせずにすむというのもあった。

小さめの剣なのは１０才程度の身長なのであまり長いのだと持てない上に装備姿がカッコ悪いからだ。

装飾のない無骨な剣だが、それでも初めて自分の武器を持つって事でテンションがあがった。

そんなこんなで夜が来る。

「なぁ相棒、ホントに大丈夫かね？」

「いやまぁ陽動くらい余裕だって。多分。」

マクニール邸はウールオルの街から少し離れた場所に建っている。

大地主だけあって凄まじいほどの豪邸だ。

聞き込みとレイさんの情報通り私兵がうろついていて忍び込む隙はなさげに見える。

俺はそのマクニール邸の正門からかなり離れた場所に一人でいた。

ガーランドさんとレイさんは裏口周辺で待機してもらっている。

その裏手周辺の見張りを表の方にまで引っ張ってくるのが俺の役目だ。

「んじゃそろそろ行きますか。」

「相棒の新しい力ってヤツを見せて貰うぜ。」

俺はポケットに入ってるカードを取りだすと、額に近付ける。

≪サイフィス！聞こえる？≫

≪聞こえておる。出番か？≫

≪そう。なるべく人の目を引きつけて、かつ殺さないように。ある程度暴れたら戻っていいから。≫

≪心得た≫

「よし。んじゃやるぞボッシュ！」

「おうよ！」

俺はカードを掲げて叫んだ

「来い！サイフィィィス！！」

カァァァッ！！！！

カードから眩い光が溢れ、美しい青い東洋の龍が姿を現した。

「しかし相棒、ノリノリだねぇ。」

「いやだって使うときは叫べっつってたし。」

実は少しだけ恥ずかしかった。

マクニール邸の私兵は慌てた。

門番が前方に光を見たと思うと突然龍が襲って来たのだ。

龍は暴風を巻き起こして暴れ、私兵たちは迎撃に出たがいかんせん田舎町の私兵では龍と対峙した事のある者などおらず、剣槍は届かず矢は跳ね返されわずかに居た魔法使いの魔法も凄まじい風に掻き消される始末。

こうなれば数が頼みとリュウ達の思惑通りに正門前へ兵を集めていた。最も、恐怖を感じて逃げ出す者もそれなりに居たが。

「リュウはうまくやったようだな。」

「おいおっさん、ぐずぐずしてねぇで行くぜ。」

レイとガーランドは裏手から兵士の姿が消えたのを見計らって内部へ侵入した。

途中数人の兵士と鉢合わせしたが、レイが持ち前のスピードで即座に気絶させていた。

「おっさんも何かしろよ。」

「この手の作業は専門外でな。」

「ちっ。」

ミクバの居る場所は一番奥らしい。二人はさして手強くない抵抗をいなして進んでいた。

ドドドドドド！

「相棒！どうすんだ！？」

「いや！マジで！どうしよう！」

正門部分に居た大量の兵士に俺は追われていた。

一通り陽動は成功したのでサイフィスを戻そうとした時、偶然一人の兵士にチラリと姿を見られてしまったのだ。

現在一直線に屋敷から離れてしまっている。

「ヤベェ！このままじゃいいとこに立ち会えないかも・・」

さすがにここまで首を突っ込んでるのにクライマックスをスルーはできない。

かといって・・チラッと後ろを見ると

先ほどよりも多い数の兵士が追いかけてきてる。

「サイフィスが結構ダメージ与えたはずなのになんでこんな増えてんだよ！？」

ナギ達との重力ｎ倍ランニングのおかげで追い付かれはしないがこのままじゃマズイ。

（くそぉ！サイフィス無駄遣いするんじゃなかった！）

カードを見てみたが前面が真っ黒になっており、やはり一度召喚したら休まないと駄目なようだった。

逆に言えばマクニール邸には今ほとんどの兵士が居ないだろうから正面からでも侵入できるはずである。

ここから戻るには土の下を掘るか空を飛ぶしかない。

土を掘る術とかはないので選択肢は一つだ。

（あーもう！せっかくの修業後初変身だからもっとカッコいい場面で変身したかった！）

仕方なく、ボッシュを少し前に先行させて立ち止まって変身し、閃光で兵士の目を晦ませ、オーラがはじけ飛ぶと同時に先行したボッシュを掴んで上空へバーニアを吹かして瞬時に上がり、兵士が俺を見失ったのを確認して屋敷へ戻るのだった。

その頃、レイとガーランドは1人の男と対峙していた。

その男はよく言えばいい身なり、悪く言えば成金趣味丸出しな服装をした小太りの男だ。

レイが鋭く睨みつけて言う。

「てめぇがミクバだな?」

「ひっ・・そ、そうだがき、貴様らは何だ!兵士は何をやっている!」

「わりぃがお前の大事な兵隊さんなら来ねぇよ。それより今からする俺の質問に正直に答えな。」

レイの目が段々と憎悪に染まりつつある

「ひぅ・・な、なんだ!?」

小太りの男はレイの空気に完全に呑まれていた

「2年前、ズブロの山で俺の弟・・ティーポを殺したのはお前だな?」

「な、何のことだ!?わ、わしはそんなことはしては・・」

「ふざけるな!てめぇがあの日、部下を連れて山に入ってった事はわかってんだよ!」

レイが視線で殺せるほどの敵意をぶつけると、男は酷くうろたえ、ポツポツ話し始めた。

「あ・・ああ、思い出した。あれか。あの時の小僧か。だがアレは

わしのせいじゃない。山であの小僧にわしの・・・わしの・・」

「・・なんだ?」

ガーランドは何か空気が変わったことに気付いた。

「おい、最後まで話せ。」

レイは両手にナイフを構え、今にも男に斬りかかりそうになっている。

「わしの・・・趣味を見られたからなぁ・・」

「「!」」

男の声が変わった。同時に先ほどまでの震えが消え、怯えていた顔つきも別人のようになっている。

「ククク・・余計な事に首を突っ込むから早死にする・・あの小僧も・・貴様らも同じだな・・」

メキメキメキッ！

「なっ！？」「これは！？」

小太りの男、ミクバは服を破り全身を巨大化させていた。

どこからか金属が生成され、ミクバに纏わりついていく。

「「！」」

「ふしゅうぅぅぅぅ・・」

レイとガーランドが呆気に取られている前には、全長3～4メートル、紫の皮膚に強固そうな鎧、巨大な戦斧を持った醜悪な豚の巨人が立っていた。

第四章　6、対峙

「街道の戦士達を殺したのは貴様か。」

ガーランドが斧に手を掛けつつミクバへ問い掛ける。

「そうだとも。近頃は運動不足だったんでなぁ。」

「ふむ、リュウの勘とやらは正しかったわけか。」

ガーランドは腰の斧を構え、いつでも動ける体制を作る。

「てめぇ・・何故ティーポを殺しやがったぁ！」

「見られたんだよ。「趣味」をな。ちょうど部下の最後の一人を殺った所だったな。抵抗もしない小僧だったが悲鳴だけはなかなかだったぞ。」

ククククっと笑うミクバを見て

レイはキレた。

「殺す！！」

途端、レイの纏う空気が変わる。半人半獣の姿だったレイはざわざわと毛に覆われ、

凶悪なトラ（ワータイガー）と化した。

「ほう、貴様も俺と同類か。なかなかだが、弱いな。」

レイは目にも止まらぬスピードでミクバへ襲い掛かった。

「ウウゥオオオォォォッ！」

（速いっ！）

ガーランドはかろうじて目に捕らえたレイのスピードに驚いていた。

ガキィインッ！

レイのミクバの首を狙った爪の一撃は斧に遮られる

「ふん、虎人（フーレン）如きが！」

「グルルルルッ！」

ギィンッ！

ミクバの斧の柄がレイを襲うもレイは受け流して距離を取った。

「ガァァァッ！」

再び飛びかかるレイ

「雑魚が五月蝿いわ！」

ギィンッ！バキッ！ゴシャッ！・・・

レイとミクバは何度も切り結んでいたが、徐々にレイが押されてきたのか所々に切り傷や打撲の後が増えている。

ドガァンッ！

「ふん。そっちのワニはかかって来ないのか？」

幾度目かの衝突の後、吹き飛ばしたレイを尻目にミクバはガーランドに話し掛けた。

ガーランドは様子を見ていた。決して空気に呑まれているわけではない。

彼我の力量差の分析を行い、そしてレイの様子がおかしいことに気付いていたのだ。

（もしや・・理性を？）

レイの動きはこの屋敷の兵士相手にだが見ている。スピードは今の姿より遅いが

的確に急所を狙い、兵士を気絶させていた。

だが今のレイは明らかに力任せスピード任せのただのケモノだ。

（いかんな・・）

一人ではミクバにはまず適わないが、二人ならばなんとかなるかも知れない。

しかしレイがこの状態では共同戦線を張るどころか自分にまで襲い掛かってくる可能性もある。

下手にミクバに手を出せばコンビネーションもなく各個撃破される。

しかしこのままではレイはいずれ力尽きる事が目に見えていた。

（・・やむを得ん、か）

ガーランドは斧を構えなおし、ミクバへと突っ込んでいった。

――

「なんでこんな無駄に広いんだよちくしょう！」

「相棒、急がねぇとヤベえかもだぜ！」

俺は屋敷に到着すると元の姿に戻り、ボッシュを首に巻きつけて中

を走っていた。

俺は外の大量の兵士達を遠くへ置き去りにしたままではあったが内部に数人は残っているだろうと考え、出会ったら即気絶させる気満々だった。

しかし残っていたと思われる兵士達は所々で気絶しており、刃を反したスクラマサクスを振るう機会も無く、多少迷いつつも奥へと進んでいた。

（もうかなり時間立ってるし、まさか決着ついちゃったりしてないだろうな？）

そんな事を考えていると一際大きな扉へ辿り着いた。

恐らくこれが一番奥の部屋であろう扉を開けると

そこには傷ついて倒れているレイさんと、同じく傷つき片膝をついて荒い息をしているガーランドさん、そして紫の皮膚に醜悪な豚の顔をした巨人が立っていた。

「ボッシュ！」

「あいよ！」

予め打ち合わせておいた通りに、ボッシュは邪魔にならないよう俺

から離れて瓦礫の影に行く。

「なんだ小僧。貴様もこいつらの仲間か？」

醜悪な豚の巨人が訪ねてくる。

「そうだよ。俺は紅き翼（アラルブラ）のリュウ。ちなみに兵士を来れなくさせたのは俺ね。」

そう言いつつレイさんの方を見ると傷ついてはいるものの意識はあるのかうっすらと目を開けてこっちを見ている。

（よかった。死んじゃいないっぽいな。）

「ふん、こいつらを殺したら次はお前の番だ。大人しくしてれば苦しまず殺してやる。」

「やだね。」

ヒュオッ！

「！」

瞬動で倒れているレイさんに近付き、呪文を唱える。

『アプリフ！』

パァァッ！

「うっ、これ・・は？」

ブレスオブファイアの回復魔法。性能的にはベホイミみたいな感じだ。

「大丈夫ですか？」

レイさんが立ち上がる

「おまえ・・魔法使いだったのか？」

「いやまぁ細かいことは気になさらず。」

「小僧・・！」

ブンッ！

醜悪な化け物は俺をやっかいと判断したのか油断を消して斧を振るってきた。

「ふっ！」「おわっ！」

ヒュォッ！

レイさんを引っ張ったまま瞬動でガーランドさんの近くへ。

ドガァッ！

「！なんだと！？」

大きく空振りした化け物の驚愕をよそに回復魔法を唱える。

『アプリフ』

パアァァッ！

「・・ぬぅ、助かった。」

「いえいえ。」

3人で化け物の方を向き、対峙する。

「レイよ、どうやら正気に戻ったようだな。」

「・・ああ」

「全く・・・リュウのおかげで助かったがあのままでは確実に死んでいたぞ。」

「・・・・」

どうやらガーランドさんがレイさんを正気?に戻そうとしたが結局駄目だったって感じだな。

今の話から大体経過は予想できた。

一応二人がかりの攻撃を軽く捌いたのであろうあの化け物はかなり強力なようだ。

「雑魚が3人集まった所でオレに勝てるとでも思っているのか?」

化け物はそう言って来たが、俺についてまだ不明な部分が多いのか若干余裕が減っているように感じる。

「レイさん、ガーランドさん、あいつはやっぱり?」

「リュウの勘の通り、殺戮の犯人は奴、ミクバだ。レイの弟の仇でもある。殺しが趣味と言っていたな。」

なかなかの外道だな。姿を見たとき思い出したが確か原作でもそんな感じだったか？

「どうした？まさか怖気づいたか？オレが仇なんだろう？ならさっさとかかって来い。貴様らもあの小僧のように悲鳴を上げさせ！ズタズタに引き裂いてやるぞ！」

「！・・てめぇぇ！！」

レイさんから殺気が膨れ上がり、ざわざわと毛が身体を覆い尽くし・・・

「待ったぁ！！」

「！」

俺の待ったコールが炸裂した。

レイさんがワータイガー（トラ）に変身するということは知っている。もちろんその特性も。だがここで理性を無くされては正直困る。

「レイさん、冷静に。アレに無闇に突っ込んでも勝てないよ。」

「・・くっ！」

どうやらわかっているらしいのか素直に変化を解く。

「ガーランドさん、俺がヤツに隙を作りますから、そこへレイさんと一緒に切り込んでください。」

「一人でだと・・正気かリュウ。」

「俺は至って正常です。」

そう言って俺はスクラマサクスを構える

「作戦は決まったか？雑魚ども。」

ミクバが斧を両手で持ち威圧してくる。

「じゃあ、行きますよ！」

俺は二人に声をかけ、瞬動で飛び出した。

第四章　7、攻防

「・・小僧ッ！」

ミクバは驚いていた。人間の子供が、先程の虎人（フーレン）より速く跳ね回り、自分にピッタリ張り付いて攻撃してくる。

一撃一撃は大したダメージにならないが自分の攻撃がまるで当たらず、鬱陶しい事この上なかった。

ブオッ！

ヒュッ

「当たんねーよ！」

ミクバの斧が空を斬る。

俺は瞬動と虚空瞬動を駆使してミクバを翻弄していた。

ナギ達との修行の成果だ。あいつらには普通に見切られていたがこいつには十分通用している。

「小僧がぁっ！」

ブンッ！

「だから当たんねぇって！」

ヒュォッ！サクッ！

避けるついでに攻撃を加える。微々たる物だが。

ドゴッ！

「ふんっ！」

バババッ！

と、ミクバが斧で床を砕いたままこちらへ瓦礫を放ってきた！

ヒュッ！

難無く避けたが

「！！砂利がっ・・目にっ・・・！」

「死ねっ！」

「！」

ドガァァッ！

ミクバの渾身の一撃はしかし、床をさらに砕いただけだった。

ヒュッ！

「あぶねぇってんだよ！」

俺は間一髪瞬動で跳ねて避けていた。

「なっ！？」

「オラッ！」

バゴォッ！

「ぐっ！」

ミクバの後頭部に蹴りを入れ、僅かにたたらを踏んだのを見逃さない！

「今だ！」

「うおぉぉぉおっ！」

「ぬうぅぅんッ！」

ズシュッ！

ドゴォッ！

「ぐぁあっ！」

レイさんとガーランドさんがその隙を突いて攻撃！

鎧の無い部分をレイさんのナイフが切り裂き、鎧の上から腹目掛けてガーランドさんの斧がめり込んだ。

「雑魚どもがぁっ！！」

ブォンッ！！

ミクバが斧を横薙ぎに一閃するが全員かわし3人は集まり、再びミクバと対峙する。

「やるねぇリュウ。」

「全くだ。末恐ろしいな。」

「嬉しいけど後にして。まだ来る。」

「雑魚どもがぁ・・・雑魚どもがぁぁぁぁぁっ！！」

気を抜かずにミクバを睨んでいると、ダメージでタガが外れたのか目の色が赤くなり、威圧感が増した！

「！ヤバイ！回避して！」

ヒュッ！

「ぬ！」「うお！」

ドガドゴドガァッ！

「ぐおっ！」「うあぁっ！」

巨大な斧を先程とは全く違うスピードで振り回してきた！

（これは・・「みだれうち」か！）

ブレスオブファイアのスキルの一つで1度に1～3回程度攻撃する技である。

確かこのボスは使ってきたはずだ。

技の難易度的にはそこそこだが、ナギ達の速度に比べれば楽に見切れたので多分覚えられただろう。

レイさんはナイフで一発、ガーランドさんは斧で2発をモロに受け、何とか直撃は避けたものの別々に弾き飛ばされている。二人ともダメージが大きそうだ。

だが横に避けた俺からは隙の塊にしか見えない！

「隙ありぃ！」

ガキィン！！

「えぇ！？」

鎧の無い皮膚を狙ったのに弾かれた！？ってヤバイ、体勢が、こっち見んな！

「小僧ぉぉぉっ！」ブン！

ドゴォッ！

「うぐぅっ！！」

何とか腕でガードして直撃は防いだが、薙ぎ払うように振り回された腕に、俺は吹き飛ばされた。

「くっ・・なんだ・・今の！？」

さっきは俺の攻撃やレイさんのナイフで切れていたのに、何故突然硬くなった！

「今のは・・まさか・・「大防御」か！」

傷を抑えつつ体勢を立て直したガーランドさんがミクバを見て叫ぶ。

（大防御だって！？マジか！？）

大防御もブレスオブファイアのスキルの一つで、発動したターンはあらゆるダメージが効かなくなるってやつだ。しかし同時に他の動作はできないはず。

『リリフ』

パァッ！

回復魔法で腕の怪我を治す。

（大防御ってことは魔法も効かねーんだろうな。でもなんであれで・・！）

取り合えず知っているらしいガーランドさんに聞く

「ガーランドさん！大防御って動けるもんなの！？」

「動けない・・はずだ。普通ならな。だがコイツは今、現に動いている。今は出来る出来ないを問答している暇はないぞ！」

ちくしょう。納得いかないが正論だ。

大防御したまま攻撃ってどんだけだよくそが！

「虎人よ、まずは貴様から血祭りにしてくれる。貴様の弟と同じ場所へ送ってやるぞ！」

「・・ちっ・・」

ミクバの視界に入ったレイさんにミクバが近寄る。

レイさんはミクバを睨んでいるが、さっきのみだれうちで出来たのであろう傷から大分血が流れている。

あの位置はマズイ、レイさんの後ろは壁だし、ここからじゃ距離が遠い！

（何か手は・・・そうだ！）

「海破斬（斬空閃）！！」ヒュゴォッ！

「！」

ギィンッ！

「くっ！」ダッ！

飛ぶ斬撃が頭に直撃し、ミクバが気を逸らされた瞬間、レイさんが死角から脱出した。

「小僧ぉ・・どこまでも邪魔をしたいらしいなぁ・・」

ミクバがこちらに向き直り、怒りに顔を歪ませている。

（ナギ達との修行がなかったら確実に足が竦んでたな。）

本当に感謝しっぱなしだ。これからはもっと真面目に修行に打ち込もう。

（しかし、こりゃ変身するしかねーな。）

大防御を打ち破るにはそれを上回る圧倒的な攻撃力が必要だ。

レイさん、ガーランドさん、普通の俺じゃあ打ち破るだけの力が残念ながらなさそうだ。

だが意識を自分の中に向けようとしても

「死ね！小僧ぉ！」

ブンッ！ブンブンッ！！

「うおっ！」

ドゴドガァッ！

攻撃されて意識が集中できない！

変身中への攻撃とかこいつどんだけ反則繰り返す気だよ！

「くそが！」

忙しない攻撃の合い間に思わず悪態を突く。少しでいいから時間が稼げれば！

その時

グワッシィ！

「！ガーランドさん！？」

ガーランドさんがミクバの斧を持った腕を押えつけている！？

「リュウ、何か手があるのだろう？見せてもらうぞ！」ニヤッ

「！」

ガシィッ！

「愉快だねぇ。俺もリュウに賭ける。一口乗るぜおっさんよ。」

いつの間にか近寄っていたレイさんもそう言って反対の腕を抑えている。

（チャンスは今だ！）

「死にぞこないどもが鬱陶しいわぁ！！」

ドゴォッ！バキィッ！

「ぐっ！」「うぉっ！」

ミクバが暴れて二人にダメージが蓄積する。

だが気にしている暇はない。

意識を自分の中に集中させる。

ドォンッ！

「「「！？」」」

足元からオーラが噴出す。

「でぇぇぇやぁぁぁぁあ！！」

激しい閃光が起き、オーラが弾け飛ぶ。

そこにはリュウの面影のない半人半龍の姿があった。

「まさか・・小僧もか！！」

「リュウ、お前・・」

「！・・・」

「二人とも離れて。・・危ないから」

レイさんとガーランドさんは言葉の意味を即座に理解し、ミクバから離れる。

俺は真っ直ぐにミクバを睨み、そしてゆっくりと指を差した。

「……覚悟はいい？」

「！？　小僧が……図に乗るなぁ！！」

これで決まりだ。

第四章　8、完遂

圧倒的な力の差

それ以外にその場を表す言葉はなかった。

変身したリュウの攻撃はミクバの大防御を容易く貫き、次々とダメージを与えていく。

「喰らえぇっ！」

ブンッ！

「ふんっ！」

バシィッ！

「！？バカな！？」

振りおろした戦斧の一撃はリュウに軽々と受け止められ

「ハァッ！」

ゴシャァッ！

「ぐぶぅっ！」

飛び上がったリュウの蹴りが顎の骨を砕き、ミクバは鈍い声を上げる。

ミクバは既にボロボロだった。

「ぐっ・・・」

ミクバはここまでの力の差を感じたことはこれまで一度もなかった。

他の生物は全て自分以下であり、自分に嬲られる存在でしかなかった。

しかし今自分の目の前に居る存在からは自分が明らかにそれ以下のモノであり、今度は自分が嬲られる番だという感覚を骨の隋にまで覚えさせられていた。

頭は必死に否定するが最早戦意は限りなく低くなっていた。

「ヴィールヒ！」

ズギャアァッ！！

「ぐぉあぁぁッ！」

ズズゥンンッ！

リュウの爪が鎧を紙のように引き裂いて深い傷を腹に刻み、ミクバは沈む。

「ぐ・・がふっ・・」

シュウゥゥゥゥゥ

ミクバは元の姿に戻っていた。

――――――

修行のせいか、今まで以上に鬼のような自分の威力に驚いていたのもある。

「レイさん」

「あ・・ああ。」

レイさんとガーランドさんは俺の姿と戦い振りに呆然としていたらしい。

声を掛けたらようやく気がついたようだった。

「コイツの処遇はあなたに任せます。」

俺はレイさんに最後の処置を委ねた。

「・・・」

ザッ

しばらく目を閉じて何事か考えたレイさんがナイフを構えてすでに無防備な男へと近付く

「ひ・・ひぃ・・・」

弟を殺された・・確か原作では微妙に違ったようだったが、こっちでは本当にそうなんだろう。

そして復讐。

俺は復讐を否定する気はなかった。

本当に殺されたことはないが、自分がもし誰かに理不尽な理由で大事な人を殺されたとしたら、俺はきっとその犯人を恨むだろう。

人殺しはいけないとか、死んだ者はそんなこと望んじゃいないとか、そういう事を言う気持ちはよくわかる。

でも復讐する気持ちもわかる。復讐とは言わばケジメのようなものだ。

盗賊の真似事をしても人は殺さなかったレイさんだ。少なくともやっていい事と悪い事の分別くらいついてる。

自分がレイさんと同じ立場なら同じ事をするだろうと思うと、俺は目の前の行為を否定する気も咎める気も起きなかった。

「・・・」

ザッ

さっきまでの威圧感は最早無く、そこにはただただ怯える普通の男がいた。

「わ、わしを殺すのか・・？わしはこの辺り一帯の大地主だぞ！わしを殺せば貴様は一生逃げ続ける羽目になるぞ！？」

最後の抵抗だろうか。男が遠まわしな命乞いをしている。

「・・関係ねぇよ。」

ザッ

「ひっ・・く、来るな！」

レイさんの歩みは止まらない。

俺も止めるつもりはない。

ガーランドさんも黙認している。

ザッ

「俺ぁよ・・この2年、空っぽだった。てめぇに復讐することだけを糧に生きてきた。そのためなら多少の犠牲も構わねぇと盗賊なんかもした。全てこの・・この時のためだ！」

レイさんがナイフを振りかぶる

「ひっ！ひぃぃぃぃぃ！」

「死ねよ」

ザグゥッ

ナイフはミクバの心臓を貫いていた。

その後、俺たちは化け物を倒した証拠としてミクバの持っていた巨大な斧を持ち、

兵士達が帰ってくる前に屋敷を後にした。（もちろんボッシュも連れて）

うっすらと明けてくる空はどことなく暗い空気を晴らす事もなく、俺たちは無言で町へと戻った。

日が真上の辺りに来た頃、俺とガーランドさんはババデルさんに会い、化け物を倒したことと盗賊も退治したことを報告した。証拠として持って帰った斧をババデルさんの使いの者が化け物の持ち物だと証言し、レイさんから借りたナイフを盗賊の被害者の人が盗賊の物と認めたため、晴れて俺とガーランドさんは2万Ｄｐを貰った。

俺はガーランドさんと半分ずつにしようと提案したが、「それはお前のものだ。お前が居なければ盗賊を退治するだけだったからな」と、ガーランドさんは2千Ｄｐだけを受け取り、後は俺にくれた。

ババデルさんには「紅き翼」を宣伝しまくっておいたので、名を売るという目的も一応達成されただろう。

色々と雑多な作業が済んだ頃、

俺とボッシュ、ガーランドさんはレイさんの隠れ家へと来ていた。

「お前はこれからどうするんだ？」

ガーランドさんがレイさんに訪ねる。

「・・そうだな。旅に出るさ。ここにゃあもう用はねぇし。下手すっと俺は本当のお尋ね者だ。」

「そうか。」

なんだかんだで二人が割と仲良くなっていて少し嬉しい。

「おっさんはどうするんだ?」

「俺は修行の旅の途中だ。この依頼も終えた。俺もまた修行の旅に戻るだけだ。」

「へっ、なら途中までついてってもいいか?」

「・・好きにするがいい。」

「愉快だねぇ・・んじゃまぁよろしく頼まぁ。」

「うん、まぁこれで一応一件落着ってやつですね。」

「相棒よぅ、俺っち忘れて帰ろうとした事忘れねぇぞ。」

実は屋敷から帰るとき、うっかりボッシュを置き去りにしそうになったりしたことを未だにボッシュにねちねち言われてる。

「リュウよぉ、お前には世話んなったな。」

「ふむ、お前のおかげで自分の弱さと世の中の広さも知った。感謝

している。」

「いやあの・・なんか恥ずかしいんですけど。」

真正面から誉められるとか慣れてないからヤメテ。

「お前確か「紅き翼」所属って言ってたよな。もしかしてお前みたいなのがわんさかいるのかそのチーム。」

「あー、まぁそうですね・・変身はしないけど変なのが４人ほど居ますよ。」

「愉快だねぇ・・お前みたいなのが４人もか・・」

「「紅き翼」か。その名、覚えておこう。」

「はい。何かあったら是非ご連絡を。お二人なら無料でお受けしますよ？」

「ふっ」「へっ」

「それじゃ、俺はそろそろ戻ろうと思います。お二人ともお元気で。またいつかどこかで。」

「おめぇら無茶すんじゃねぇぞ！」

「愉快だねぇ・・お前らもな。」

「次に会う時を楽しみにしているぞ。」

俺とボッシュは二人に別れを告げ、一路メガロメセンブリアを目指すのだった。

続く

第四章　8、完遂（後書き）

ここまでこんな駄文を読んで下さった皆様に深く感謝を。

第五章　1、指輪

「さーて、みんなもう来てるかな？」

「どうだかなぁ。俺っち達が最初かもだぜ？」

リュウとボッシュはメガロメセンブリアに到着し、待ち合わせのホテルへと歩いていた。流石に首都と言うだけあって、あのウールオルの街とは比べ物にならない賑やかさだ。

（人口密度で言ったら東京の方が酷いんかなぁ）

そんなどうでもいい事を考えながら、ぶらぶらと辺りを見て回る。出店や売店が所狭しと並ぶ通り、高級ブティックらしき建物が並ぶ通り、怪しい道具屋らしき店が並ぶ通りなど、道一つとっても景色は様々だ。チラリと除いた土産屋では、街のシンボルとも言えるあの「女性の魔法使い＋男の剣士の像」のミニチュアなんかが売られていた。

上を少し向いてみれば、そこは当然のように多種多様な飛行物体の博覧会だ。最初に来た時は紅き翼の登録だけを済ましてすぐ飛行船乗り場に行ったので、リュウとボッシュはこうしてまじまじと町並みを見るのは初めてだった。

（街だけを見てるととても上層部の元老院（だっけ？）が腐ってるとは思えないなぁ）

昔の記憶を頼りにそんな事をを考えつつ歩いていると、少し先に人だかりが見えた。何か見世物でもやっているらしい。まぁよくあ

ることだろうし、特段珍しがるのもお上りさんっぽいかな、と思っていると……

「おいおい！　他に挑戦者はいねぇのかよ！」

人だかりの中心から、何やらとても聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「相棒、今のは……」

「しっ、駄目ですよボッシュ、見たらアホが移りますよ」

「そりゃ誰の真似だよ相棒」

瞬時に何かを悟ったリュウは、見なかった振りをすることに決めた。しかしここで一つの問題が浮上した。実はこの道は大通り。にも拘らず、曲がれる道はあの人だかりの先だった。しかも目的のホテルはこの道が一番早い。他の道を行くにも迷ったりしたら嫌だ。

「ボッシュ、ダッシュで行くぞ。掴まれ」

「お、おう」

リュウはボッシュを首に巻くと、猛スピードで走り出した。一気に人だかりの横を突っ切って、何も見ないように通り過ぎる算段。しかし……

あろうことか、その進路にいいタイミングで男が割り込んできた！

当然、ぶつかる！

「はぶぅっ！？」

「！！　ってぇなぁ……！　おいこらガキィ！　てめぇどこ見てやがんだぁ、ああ！？」

お約束というのはまさにこの事。ぶつかられてキレる男性。これはどちらが悪いというとリュウの方が悪い。今のでちょっと人の目がこちらへ向いたこともあるし、ムカつくが謝ってとっとと逃げよう、とリュウは即決した。

「スミマセン。ぶつかったことは謝ります。ちょっと先を急いでますので……」

「あぁん！？　てめぇナメてんのかぁ？　そんなんでこの俺が許すとでも思ったのかガキぃ！」

リュウが下手に出たせいで男は強気に出た。選択が裏目に出てしまって焦るリュウ。どんどんギャラリーの目がこちらへ向いてしまっているのがわかる。いけない、一刻も早くここから立ち去らないと……

「おお！？　リュウ！　リュウじゃねーか！！」

そう思ったリュウの努力も空しく、気付かれたくない人物にとうとう気付かれてしまった。

（ちくしょうばれた……）

人だかりを掻き分けるようにやって来たのは、そのギャラリーの中心に居た人物。ナギ。

「リュウも仕事終わってたのか。言ってくれりゃあ出迎えたってのによ」

「あーいや、今さっき着いたとこ」

男に絡まれた状態と言う情けないリュウの姿を華麗にスルーし、話しかけるナギ。疑問に思わないのはどうでもいいからだろう。

「おう、ナギっこ。首尾はどうだったい？」

「ようボッシュ。この俺がしくじるわけねーだろ？　ちょちょいっと片付けてきたぜ」

自慢げに語るナギ。それは良ござんしたね、と苦笑いのリュウ。しかし話しかけられてしまっては聞かざるを得ない。心なしかナギもその質問を待っているように感じられた。

「で、そのナギさんはここで何をやっていたのかな？」

「いやー、やる事ねーから暇でよ。今は名前を売るのが目的だろ？だからこうしてストリートファイトってやつをな！」

（やっぱりかこのバトルジャンキーめ！）

全くの想像通りだったことに、リュウはもう少し捻ってくれてもいいのに、と理不尽な文句を内心で呟いていた。

「リュウもやるか？」

そのセリフも聞けるだろうと思っていたリュウは案の定、といった感じだ。当然、そんな事をするつもりはまったく無い。

「遠慮しとくって。……あ、ホラ、あっちに挑戦者っぽいのがいるよ？」

「お？　そか。んじゃあ俺は適当に片付けたらホテル行くからよ」

「それじゃまた後で」

「ほどほどにしとけよナギっこ！」

シュタッと人だかりの中心にナギは戻っていった。よくあんな元気あるな、と自分も子供の見た目の癖にお疲れモードなリュウである。

と、

「て、てめぇ……アレの知り合いかよ……」

先程リュウに絡んだ男がまだその場に立っていた。ビビるくらいなら逃げればいいのに、随分律儀なお人である。リュウはその男の前でわざとらしく溜め息を付いた。

「あーまぁ知り合いというか仲間です。もう急ぐ理由も無くなったんで、お望みでしたらお相手しますが？」

そう言って、ギロリと睨みつけてみる。男はもう雰囲気に飲まれていた。いくら子供とは言え、ストリートファイトで連戦連勝のナギの仲間だとしたら、後が怖い。怖すぎる。

「……ケッ！お、俺はガキは相手にしねぇ主義なんだよ！」

男は逃げ出した。情けない捨て台詞を吐いて、スタコラと。

リュウはその男の矛盾だらけの行動と言動に呆れていた。

「さて、行くかボッシュ」

「おうよ」

どっと疲れたリュウ達は、再び賑やかになる人だかりを尻目に、ホテルへと足を向けた。

＊

ホテルの部屋は、既に紅き翼の名で取られていた。受け付けで部屋の番号を聞き、エレベーターで該当の階に向かう。そしてガチャリと部屋のドアを開くと、そこには……

「これはこれは。リュウにボッシュ。お疲れ様でした」

そう言って笑顔を浮かべているこの男、アルがいた。窓際のソファに寛ぎながら、優雅に紅茶を楽しんでいる。テーブルの上にはティーポットとクッキーが置いてある。あまりの寛ぎぶりに、なんかエライ勢いで脱力したリュウである。

「……なにしてんの？」

「余りにも暇だったので、ただ食っちゃ寝していただけですが、何か？」

飄々と答えるアルビレオ・イマ。まさに部屋の主。とても昨日今日でここまでの境地には至れない。

「ひょっとして……一番乗りってヤツ？」

「そうなりますねぇ。１日で終わりましたし」

「１日！？　ってことは、もしかしてそれからずっとこうして……？」

「ええ、食べることと寝ることは本当に素敵ですよねぇ」

それは、キラキラと輝くほどの満面の笑みだった。リュウとボッシュの脱力は留まる所を知らない。

「さすがはクウネル・サンダース……」

「！！」

「相棒、そりゃ何のことでぇ？」

「あいや、何でもない」

ついつい、心の声が漏れ出てしまった。そして、その呟いた名前

は今まで寛いでいた、かの男の琴線に何故か思いっきり引っ掛かった。

「リュウ！」

凄まじい魔力！　なんかアルが突如キリッと真剣な表情をして、もの凄いパゥワーを放っている！　豹変と言う言葉がまさに相応しい！　一体何がどうしたというのか！

「な、何？」

「今の、クウネル・サンダースと言いましたか。実に素晴らしい名前ですね。まさに私の為にあるといっても過言ではない！」

「は、はぁ」

（……何言っちゃってんのこの人）

「是非、その名を名乗る権利を私に下さい。いえ、勿論ただでとは言いません。ちょっと待ってください今対価を……」

そう言って懐をごそごそしだすアル。一体この名前のどの辺に食いつく要素があるのだろう。リュウにはわからない。あんまり深く考えたところで分かりそうもないので、リュウは考えないことにした。

「いやちょっと。そんなんで良ければいくらでもあげるから」

「本当ですか！？　……ふふ、やはりリュウは優しいですね。では、私はこれから何かあった時は偽名として“クウネル・サンダース”

を名乗りましょう。……は!?　いえいえ待って下さい、それでしたらいっそ本名を改名した方が……」

何やら真剣な表情で顎に手を当て、ブツブツ言って悩んでるアル。ナギといい、アルといい、何故このチームにはこうも変人が多いのだろうか。わからない。悩んでも分からない。

「相棒、やっぱこのチームやめねぇか？」

「やめないけど気持ちはわかるぞボッシュ」

リュウとボッシュは、何故かお互いに深く理解しあっていた。

その後、凄いスッキリした顔で戻ってきたナギを交えて、夕食兼報告会が開かれた。ナギは今日のストリートファイトで57人抜きを達成。本当はもっと戦りたかったが、腹が減ったので終わりにしたらしい。勿論いくらか稼いできたのは言うまでもない。

詠春とゼクトについては明日にでもメガロに到着するとの情報が入っていた。

（俺より時間がかかるとはねぇ）

と、リュウは内心ニヤニヤして喜んでいたのだが、実は二人とも依頼自体は即効終わらせて、ちょっとした旅行気分でその辺りをぷらぷらしてた、と言うことを聞き、

「自分だけ辺境だったってのを差し引いても、ガチでこれだけ時間

かかったのって俺だけ！？」

と、激しく落ち込んだのだった。

＊

「神鳴流奥義、斬魔剣！」

「空裂斬（斬魔剣）！」

二本の剣から放たれた退魔の斬撃。二つの剣線が不浄の霊を浄化する！

「オオオォォォ……」

シュウシュウと音を立て、その存在を滅させられていく不定形。

リュウと詠春による攻撃が、そこに潜む闇を文字通りに斬り開き、光を呼び込んでいく。

「ふう、今ので全部か。お疲れ、リュウ君」

「お疲れ様です。詠春さん」

「相棒もちったぁ役に立ってたな」

「うっせー」

リュウとボッシュと詠春は、メガロメセンブリアから北に行った

所にある古城、「スイマー城」に住み着いた悪霊の退治をしていた。リュウ&ボッシュと詠春だけである理由は、ナギやアル、ゼクトは悪霊のみを消す技を得意としていない為だ。

とくにナギに至っては、面倒だからと古城ごと消滅させかねない。

リュウはこの前の戦いのおかげで多少レベルアップしたのか、空裂斬（斬魔剣）をまともに使えるようになっていた。その為、詠春と共にこの依頼に出向いたのだった。妥当な人選である。

（はぁー。まさかこんなゴーストスイーパーな事をするとはねぇ）

正直なところ、こうもハッキリと幽霊を見る事になるとは思ってなかったリュウ。さすがは魔法世界と感心しきり。旧世界の頭の固い大学教授とかに見せてやりたいくらいだ。勿論いろんな面で無理ではあるが。

（それにしても、“スイマー城”の割に悪霊は普通だったな）

確か二作目に出てくるカエルの国の城がそんな名前だった事を思い出し、カエルの霊か？と思って構えていたのだが、別にそんなことはなかった。少しだけ肩透かしを食らった気分である。

「いやホントリュウ君の上達ぶりは凄いね。こんな短期間に斬魔剣までマスターするとは」

「いえ、そんなことないですよ」

「うん、その謙虚な態度もいい所だと思うよ。はぁ、それに引き換えナギときたら……」

近頃の詠春は、見た目同年代のナギとリュウを比べている節があった。まぁ確かに見た目は同じくらいに見えてるかも知れないけど、こっちの中身はもっと年上ですから、と心の中で突っ込みを入れるリュウである。

「まぁまぁ。それじゃそろそろ地下へ行ってみますか？」

「おっとそうだね。地下の一番奥にある宝を持ち帰るのが今回の依頼だからね」

今回の依頼主はこの城の持ち主だった人の子孫で、物凄い財産を持っている人だった。何でも財産の整理をしていたら、この城が自分の所有であることが「発覚」し、調査しようと思ったら悪霊の住処になっていたので、仕方なく悠久の風に依頼した、というのが経緯だ。

この城が何故寂れたのか理由は分からなかったが、文献によると地下の最奥に宝があるらしい。悪霊退治のついでにそれだけでも持ってきて欲しい、とのことだった。

先程倒したのが悪霊の親玉だったらしく、それ以後はほとんど悪霊は襲ってこなかった。これは楽だとリュウと詠春は城の地下へと降りて行った。

「これが宝……か？」

「何でしょうねこれ？」

リュウ達は地下の一番奥にあった大きな箱の中を覗いていた。そこにあったのは小さな指輪。ちょっと古臭いが何か怪しい感じの指輪である。

「見た所うっすらと力を感じるが、少々良からぬモノも感じるな」

「確かにそんな感じですね」

指輪は装飾が龍の顔の上半分で、下半分の部分にぴったりと赤い石が嵌っている。古い割に、損傷などがあるようには見えない。意匠的にブレス的な物かと思いつつ、装備品がどんな見た目かはほとんど知らないので、それが何かはわからない。

（まぁもしかしたら全く違う普通の宝かも知れないし）

その場で考察していても仕方が無い。リュウ達は一応呪いのようなものがあることを考えて、直接は触らずに箱ごと持ち出すことにした。

（こういうときにこのドラゴンズ・ティアって便利なのよね）

大きな箱だろうと全然気にせず収納可能なドラゴンズ・ティア。取り合えずヒュパッと収納し、その何も無くなった筈の空間を見て……

……リュウの顔に、戦慄が走った。

全身が総毛立ち、今にも叫び声をあげそうになった。
詠春が絶句している。
ボッシュも一言も喋らない。

大きな箱をどかしたそこには、口に出すのもおぞましいほど巨大な
――――

――――ゴキブリが居た。

（ヒイィッ！？）

リュウが女だったら確実に気絶してるだろう。大きさは大体1メートル弱。背中のてかり具合といい、足の細キモさといい、まごう事なきゴキブリである。その触角がひょこひょこ動き、リュウ達の様子を伺っているのか動きはない。旧世界ではあり得ないくらいの巨大ゴキブリ。こんなでかいのがカサカサ高速で動こう物なら本気で失神モノだ。

（に、逃げる！）

リュウが足を引こうとしたまさにその時……あろうことか突然、その巨大ゴキブリは「ジャンプ」して来た！

「ぎゃーーーー！！」

駄目だった。これは駄目だった。幽霊は平気だったが、これはリュウの生理的に無理だった。限界突破。リュウ、錯乱。

「神鳴流奥義！　斬空閃っ！！」

驚いてはいたが冷静だった詠春の一撃。リュウを目掛けたジャンプの落下中だったゴキブリの腹に、飛ぶ斬撃がクリーンヒット！

「ピィギィィイッ！」

しかし息の根を止めるには至らず。気色の悪い悲鳴をあげ、ボトッと落ちてきたゴキブリはそのままカサカサと闘争を図る。

「……ふふふ“ジャンプ”って何だっけ。そうだ確かスキルの一つで敵単体に0～2倍のダメージを……」

リュウはゴキブリのあまりの気持ち悪さに、現実から目を背けて精神を逃避させていた。うつろな目でブツブツ呟くさまは、いっそ不気味である。

「あ、相棒！　逃げちまうぞ！！」

「リュウ君！　魔法だ！　早く！」

「え？　あ、えーと……あ、あーもう！　マジホントマジこうゆーのマジ勘弁っ！」

何とか現実に引き戻されたリュウ。視界の向こうでカサカサ動くゴキブリの背中目掛け、容赦なく

『パダーマッ！』

中級の炎の魔法を浴びせた。下から吹き上げる炎の熱が、ゴキブ

リをこんがりと焼き上げる！

「！！ッ！！」

吹き上げる炎の中でもがき苦しんだゴキブリ。炎が消え去った後には、腹を上に向けてピクリとも動かなくなっていた。

「ふう。まさかあんなのが居るとはね」

「おおお……マジでキモかった……。と、鳥肌が……」

「情けねぇなぁ相棒よぅ」

「俺あーゆーの駄目なんだよこのボケェ！」

何とか一件落着。その後、まさかあんな巨大ゴキブリが居るとは思わなかったので、帰りは異様なほどに慎重になったリュウ達である。警戒のおかげかはわからないが、幸運にもエンカウントはしなかった。

リュウは自分の昔の記憶を振り返り、そう言えばやたらとリアルなゴキブリだったんだよなぁ、とゲームの画面を思い出していた。実際に見てみれば、こんな巨大ゴキブリは本気で無理。マジで二度と見たくない、と心の底から祈るのだった。

＊

一応依頼は達成したのでメガロメセンブリアに帰還したリュウ達。

別件で出ていたナギ達と合流し、悠久の風本部にて、依頼者に宝らしき指輪を提示した。依頼者にもやはりどんな指輪かわからないらしく、紅き翼の面々にも知っているそれがどんな指輪なのかわかる人間は居なかった。

「変わった指輪じゃの。この怪しい感じからして呪いか何かかかっておるな」

「そうですねぇ。ナギ、試しに付けてみませんか？　大丈夫あなたなら死にはしないと思いますよ？　多分ですけどね」

「アルよぉ、いい加減人で実験しようとするのやめろ。ていうかお前が付けてみろってんだよ」

「フフッ、嫌です」

断るアルの、なんと素敵な笑顔であろうか。爽やか過ぎて目が潰れそうになるほどだ。

依頼者と相談した結果、その指輪はなんとリュウ達に調査のお礼として進呈されることになった。呪いがあるとわかってて着けてみる気もしないし、仮にこれが凄まじいお宝であったとしても既に十分財産はあるのでいらない、と依頼者は言ったのだ。

人それを、厄介払いとも言う。

ちなみに依頼者の名前は「エカル伯爵」だった。

（エカルかぁ。やっぱり関係あったんだな）

リュウは聞き覚えのあるそのフレーズを記憶の中から引っ張り出し、うっかり依頼者のフルネームを聞きそびれていた事を少し後悔していた。そういうわけで現在ホテルに戻ったリュウ達の前には、ででーんとあの指輪が置いてあった。

「さて、どうしましょうか」

「どうすっかな……」

「むぅ、やはり誰か装着してみるべきとワシは思う」

「そうですね。どんな呪いかわかればいいですが」

「いやあの１００％呪われてる物を着けるってどんだけ……」

「俺っちは装着できねぇから何が起こんのか楽しみだぜ」

皆それぞれな感想を述べる中、最後のセリフを言った人物に、全員の視線が集中した。

「「「……」」」

「な、なんでぃおめーら。俺っちがなに……か……」

その視線にどういう意味を込められているのか。くるりと見渡して、ハッと気付いたらしいボッシュ。

「……」

瞬間、ボッシュは一目散に逃げ出した！

「っと、どこ行くのかなぁボッシュ？」

しかし遅い！　ボッシュの眼前にはナギの足が！　瞬動で回り込まれてしまった！

「くそぉ！　何しやがる！　離せナギっこてめこら！」

悪態を突いてジタバタするボッシュ。しっかりと首の根っこを捕まえているナギにはその抵抗も効果が薄い。

「まぁいいじゃねーかボッシュ、不死身だし」↑笑顔で

「そうですよボッシュ。不死身なんですから」↑満面の笑顔で

「すまんのボッシュ。まぁ不死身じゃし」↑無表情で

「ごめんねボッシュ君。君不死身だし」↑笑顔で

怒涛の４連コンボ！　ボッシュは一抹の期待を胸に、唯一の退路と思しき自分の相棒へと顔を向ける。

「……相棒……？」

力なく、しゅんと項垂れたフェレットは中々かわいいな、とリュウは思った。しかし今は関係ない。世の発展の為には多少の犠牲は仕方ないんだよボッシュ、と心を鬼にして。リュウはグッと親指を立て、

「がんばれ！」↑笑顔で

ボッシュに言い放った。

「ちくしょおぉぉぉぉぉ！」

多数決という圧倒的な力の前に敗北し、指輪はボッシュの尻尾の先っぽに無理やり装着された。最初こそ何もないようだったが、少しすると「な、なんか体の力が抜けて……」と言い出し、ボッシュはあからさまに衰弱していくのだった。

「どうやら、この指輪は装着者の「気」を吸い取るらしいの」

ピンセットのような物で指輪を掴み上げ、そう言い放つゼクト。ボッシュの尊い犠牲によってわかったことはそれだった。ボッシュは「てめーらぁ！　ホントに死んだらどーする！」と喚いていたが、全員で謝り倒してどうにか機嫌を直してもらった。

リュウは危惧していたが、ボッシュがすぐに取り外していたので、着けたら外れなくなる、なんてことはないようだった。

「一応この指輪には魔法発動体としての力もあるようですね。古城に宝として祭られていたのでしたら他にも何か効果があるかも知れませんが」

「でもよぉ、着けてるだけで気が吸い取られるんじゃぁ誰も使えねぇじゃねえか」

全く持ってナギの言う通り。使い道なんて無いに等しいだろう、と頷くリュウ。

「それじゃがな……リュウよ」

「はい？」

「お主これを着けてみぃ」

（……なんですと？）

しれっと言い放つゼクト。無表情な少年顔に「は？」と間抜けな顔で返し、思わずゼクトの正気を疑うリュウである。

「いやあの、俺だって死にたくはないんですけど？」

「何を言う。コレは「気」を吸い取る指輪じゃ。お主には「気」がないではないか。何も問題は無いはずじゃ」

「「「なるほど」」」

リュウ以外は皆あっさりと納得している。それでいいのか、と思ったリュウだが、この流れではいくら逆らっても無駄な事は理解していたので、渋々指輪をはめてみた。

「……」

「どうじゃ？」

「特に影響はないみたいですね……」

「やはりな」

読みどおり、と得意げな感じでキラリと目を輝かせるゼクト。無表情な少年顔が、一瞬だけ見た目相応に見えたのは内緒だ。

「リュウ、何かこう不思議な力とか湧いてきたりはしねーか？」

「んー、特には……」

ナギに言われてあちこち見たり触ったりしてみるが、今のところ特に不思議な効果は感じられない。

「なんだぁ。ってことはただの発動体か。しかも気がないリュウ専用じゃねーか」

「全く、リュウならもう少し面白いオチを用意してくれると期待したんですけどねぇ」

「リュウ君、もし何か不調があったらすぐに言いなよ？」

「ありがとうございます。詠春さん」

心無い感じの二人のコメントはスルーし、気遣ってくれた詠春にだけ返事を返す。今のところは不明だが、何かその内指輪の効果が発動するかも知れないので、一旦着けたまま放置と相成った。それ以後は特に何事も無く、次にどんな依頼を受けるか夕食に交えて話し合い。その後、つつがなく就寝。

……したはずだった。

第五章　1、指輪（後書き）

2011／04／02　改稿

第五章　2、強化

「相棒、その隈はどうしたんでぇ？」

「・・・」

「リュウおめー・・大丈夫か？」

「・・・」

「何か不安でもありましたか？リュウ？」

「・・・」

「リュウよ、黙っていてはわからぬぞ？」

「・・・」

「リュウ君、一体何が・・？」

「・・指輪。」

「「「「「？」」」」」

「・・多分これのせい。」

俺は昨夜一睡もできなかった。いつも通りにベッドに横になったに

も関わらずだ。

別に寝る前にコーヒー飲んだりとかはしていない。

唯一これまでと違う点と言えば、ずっと付けっ放しのこの指輪しか思い浮かばなかった。

当然俺は指輪外そうとしたのだが、力を入れても全く外れる気配が無かった。

ボッシュが簡単に外したのを見て油断していた。

一晩中悪戦苦闘し、気が付いたら徹夜していたというわけだ。

「それは大変じゃのう。」

素敵なコメントありがとうゼクトさん

「それですと、その「眠れなくなる」というのがその指輪の効果なんですかね？」

「・・さぁ」

アルの問いに超適当に答える。眠いのに寝れないとかマジ拷問です。

「どっちかって言や「気を吸い取る」方が効果っぽいな。眠れない方が呪いなんじゃねーのか？」

「その辺は判断に困るところだな。どっちにしろ発動体として以外は全く役に立たないんじゃないかな？」

今更そんなこと言われても困りますよ詠春さん。

「ふむ、まずはその指輪を外すことを考えんとな。このままではリュウが大変じゃし。」

「・・お願いします。」

その後、石鹸水やら熱膨張やら本気で引っ張って貰ったりとか色々試したが外れなかった。

「これは・・どうしようもないですね。仕方が無いので最後の手段を行いますか。」

チャキッ！

「・・・あのー、何故詠春さんは刀を構えてらっしゃるのですか？」

「リュウ君、心配はいらないよ。動かなければ他の場所には当たらないから。」

いやそう言うことが聞きたいんじゃなくてね

「リュウよ。大丈夫じゃ。ここの医療機関ならすぐに魔法で縫合できるでな。」

「いや最後の手段早くないですか！？もうちょっと色々頑張りましょうよ！？」

「じゃあどーすんだよリュウ。お前だって一晩色々やって駄目だったんだろ？」

「くっ・・・」

「相棒、こんな時の為の魔法だろ？でーじょぶだっての。」

・・・まさか若い身空で指を詰めるハメになるとは。

いやまぁすぐくっ付くんだろうけど怖いし。

「さぁ！リュウ君！」

何でそんな嬉しそうなんだよ！

「！！」ドンッ！

睡眠不足で頭が上手く回ってないのか、詠春さんのヤる気に対して思わず変身しようとしてしまった。

すると

スルッ

「あ・・・れ？」

「外れたな相棒・・・」

「・・・助かった・・・？」

よく見ると指輪の石の色が赤から青に変わっている。

なんかよく分からなかったが、それ以降は誰でも着けたり外したりできるようになった。

しかし「気」を吸い取る効果は残っているらしく、結局指輪は俺の持ち物となった。

発動体として使えるし、寝るときは外せば良いので取り合えず一件落着。

取り合えず外れるようになったことで安堵した俺は即爆睡したのだった。

「ナギ！まだわからんのかぁこのワシの気持ちがぁ！」

バチバチバチッ！

「お師匠！アンタは間違っている！」

ドギャァッ！

「フン、ならばワシが正しいかオマエが正しいか・・決着をつけてくれるわぁ！」ズオッ！

「望むところだぁ！！」ゴオッ！

「「ハァァーッ！！！」」

ズドオオォォォンンッ！

今日は修行ｄａｙ。

そう言い出したのはナギだった。

俺が指輪騒動を起こしたおかげで朝方に「悠久の風」に依頼を受けに行かなかったのでちょうどいいやと思い立ったらしい。

今ナギとゼクトさんが争っているのは、俺が半日ほど寝て起きた後、遅めのお昼に食べたケバブ的食べ物にかけたソースでケチャップかヨーグルトかどっちが美味いかで揉めたのが原因だ。

（あいつら生身でモビルスーツ破壊できるよなぁ）

その修行と言う名の師弟喧嘩を見ながら俺はそんなことを考えていた。

ちなみにここはメガロメセンブリアから少し離れた原っぱだ。

「さてリュウ、私と手合わせしませんか？」

アフォな師弟喧嘩をよそに俺に話しかけてくるアル。

「どうせ拒否権はないでしょ？」

「もちろんです。よくわかってるじゃないですか。」

もうその笑顔にも慣れたよ。

～数分後～

「ぐふぅ・・・」

「やれやれ、まだまだですねぇ。」

地面に這いつくばる俺とそれを見下ろすアル。

こっちには武器もあるし（もちろん刃を返しているが）、いくつかブレスオブファイアのスキルも覚えてそこそこ俺も成長してるから行けるんじゃね？という思いは見事に角砂糖と一緒に溶けた。

「リュウ君、剣を構えた時はもう少し重心を前にずらした方がいいね。」

「・・はい」

詠春さんは俺の動きを見てアドバイスをくれている。

「相棒、もうちょい粘れや。」

「ほっとけよ。」

ボッシュは横で余計な口出しをしてくれている。

（ちくしょう、こうなったらとっておきの・・）

大地斬・海波斬・空裂斬をマスターした今ならきっと出来ると妄想してやまないあの技を試してくれる！と立ち上がった所で

「しかしリュウの動きもだいぶマシにはなってきましたね。これからも戦いは多くなるでしょうし、ちょうど魔法発動体も手に入れたことですから、この辺りで簡易魔力供給の魔法でも覚えて貰いましょうかね？」

なにかアルが殊勝な事を言い出した。

が、絶対裏があるに違いない。

「ありがたいけど、それは一体どのような目的で？」

「何を言うのですか、もちろんあなたのためですよ。リュウの「龍の力」は魔力と反発はしていないようですし、そうですねぇ・・「戦いの歌」と言う物をお教えしましょう。」

あー確かネギが使ってた身体強化術だったっけ。

「まずは私が使いますので見ててください。リュウなら一発で覚えられると思いますから。」

「・・うぃっす。」

まぁ教えてもらえるならいいか。

「・・・戦いの歌（カントゥス・ベラークス）」

ゴォッ！

「おー！」

魔力がアルの全身にみなぎってかなりの圧迫感を感じる。なるほどこれか。

シュウゥ

「ふう。ではやってみてください。」

「よし。・・・戦いの歌（カントゥス・ベラークス）！」

ポヒュッ

「おや？」

「あれ？」

できたことはできたっぽいけどなんか超弱いっぽい

「ふむ、おかしいですね。呪文は合ってると思いますが・・リュウ、もう一度お願いします。」

「・・戦いの歌（カントゥス・ベラークス）！」

ポフッ

「・・・」

「・・・」

「相棒、駄目駄目だな。」

「なんでじゃー！」

くそう、駄目な理由がわからん！

「リュウ君、見てて思ったんだけど、魔力自体は動いてるけど体に行き渡らせるほどの勢いが無いようだね。」

「ふむ、なるほど。詠春の言う通りだとすれば魔力を循環させるイメージと魔法の詠唱が一致していないと言えますね。それでしたら呪文の詠唱を少々変えるだけで対処できるでしょう。」

んなこと言われても正直意味がわかりません。

「ようするに、呪文をあなたの一番イメージしやすい言葉に変えれば良いのですよ。」

「じゃあ日本語で「戦いの歌」？」

ボシュ！

「おお、さっきよりいいかも」

「ですがそのくらいでは「戦いの歌」とは言えませんね。」

「でも他にって言ったら・・」

なんだろ・・・戦いの歌・・・戦い・・バトル・・

「あ！」

わかった・・ブレスオブファイア的にこれしかないと思う・・

「何か思いついたようですね。やってみてください。」

「戦いの歌（バトルソング）！」

ゴァッ！！

「ふむ」

「これは凄いね。」

「相棒、スゲェ強くなってるように感じるぞ！」

なるほどね、バトルソングはブレスオブファイアのスキルの一つだ。

効果は味方全体の攻撃力のアップ。それがこういう風になってるの

か。

攻撃力・防御力・スピードなんかが一時的に大きくなってるな。

（そうだ、今度ブレスオブファイアの身体強化魔法なんかを試してみよう）

とか色々今後について考えていると

「良かった。何とか習得できたようですね。ではリュウ、そこに立っていて下さい。」

「？えーと何を？」

なんかよからぬ気配が・・

「いえ、ちょっと思いついた広域殲滅魔法を試してみたいのでその実験だ・・テストにと思いまして」

何だその笑顔はいつもより3割マシで黒いぞ。

ていうか言い直してもあんまり変わってませんから。

ってあれ？気付いたらボッシュと詠春さんがあんな遠くに？

「ふふ、まぁもう遅いんですけどね。それでは・・・『大地に眠る力強き精霊達よ今こそ我が声に耳を傾けたまえ』【重圧(ベタン)呪文】！」

ズゴンッ！

「おごぉっ！」ベシャッ！

周りが！周りの地形がちょうど上からデカイ円柱を叩き込んだように凹んでるぅぅぅ！

「ほう、なるほど。即興で考えたにしては中々の威力ですねぇ。」

ズゴゴゴ

「やぁめぇてぇぇ・・」

こうして俺のスキルと共にアルのレパートリーが増えた。

「もしあの時・・・お前がケチャップなど選ばなければ・・こんな・・こんな事にはならなんだのに・・！」

「お師匠・・」

「・・美しいなぁ・・ナギよ・・」

「あぁ・・夕日が目に染みるぜ・・」

あっちも所々酷く崩壊した原っぱで夕日をバックにクライマックスなようだった。

その後、変わった地形についてメガロメセンブリア当局に激しく問い詰められました。

第五章　3、調査

「リュウ～氷の魔法使ってくれよ～。一番弱いヤツ。」

「いやいややんねーよ。ていうか何度目だよ。俺だって暑いの我慢してんだよ。」

「ちぇっ。わーったよ。」

俺達は現在火山を目指して歩いていた。目的地はそのふもとの村だ。

次に受けた依頼は「ヨギ火山の活動調査」だった。

「ヨギ火山」とはメガロメセンブリアから西へ数日行ったところにある火山のことだ。

その周辺は交通の便が悪いらしく、歩くしかない。

依頼自体は曖昧で、火山に関して調べて欲しい、とにかく来て欲しいというよくわからない依頼だった。

ナギがそれを面白そうだと言って受けたというわけだ。

そんなのの調査を何故「悠久の風」に頼んだのか疑問だが、国じゃあそんな地方の村ばかりに構ってられないのだろう。魔法世界じゃ

大抵は魔法でなんとかしてるから火山専門調査隊みたいなのもないだろうし。

そんなわけで、俺達は山のふもとの「ヨギ村」へと足を運んでいた。

全員での旅とあって、もちろん俺は荷物持ちをしていた。

と言っても重い物を背負ってヒーコラって事は無く、ドラゴンズ・ティアのおかげによるものだ。

なんでもかんでもヒュパっと中にしまえる便利アイテムのおかげで実に楽に旅が出来るのだ。

それに今回はメンバー全員だ。これなら何かあってもそこまで苦労はしないだろう。

「見えてきました。あれがどうやら村の入り口のようですね。」

アルが言う先には木の杭で囲まれた村がある。

「ようやくかぁ。よっし、全員あそこまでダッシュだ！」ダッ！

そう言って走り出す我らがリーダー。

「仕方ないの。」

「やれやれですね。」

「全くナギのアホは・・」

「しゃーねぇ。がんばるべ」

「おう、頑張れ相棒！」

約一匹他力本願なフェレットが居るが、なんだかんだで全員ナギの後をついて走っていく。

もちろん俺だけみるみる差が着いていったので、こっそり練習しておいたブレスオブファイアの速くなる魔法「ハサート」を使って追いついた。

「ようこそおいで下さいました。私はこの村の村長をやっております。チェックと言う者です。」

村に着いた俺達は連絡を受けて待っていてくれた村長さんの家へとやって来ていた。

「おう、俺達は「紅き翼」ってんだ。火山調査の依頼に来てやったぜ。よろしくな、ばぁさん！」

「ちょっ！ナギこら目上の人にはきちんとした挨拶をだな・・」

「あー？まぁ気にすんなよ詠春。」

「お前が気にしろ！」

「いえいえ構わないですよ。このような元気な子は私は大好きですから。」

そう言ってにこやかにほほ笑むチェクさん。

身長が俺やナギの2／3程度で背中も曲がってるけど優しそうなおばあさんだ。

「おー、話せるねーばぁさん。おら詠春、ばぁさんがいいって言ってんだからいいんだよ！」

「全く・・申し訳ありません。チェクさん。」

しかし傍から見てるとヤンチャなガキを窘める兄のようにしか見えないな。

「すまんが話を進めさせてもらっていいかの？チェク殿、火山の調査をして欲しいとの事だが具体的にはどのような？」

ゼクトさんが少し強引に話を進める。まぁこうでもしないとずっと兄弟漫才を見せつけられそうだし。

「ええ、この村の先にあるヨギ火山なのですが、元々あの山は既に休火山となっていたはずでした。ところが最近になって活発化し始めまして。このままでは噴火も時間の問題かと思われているのです。」

へー、思ったより展開早そうだな。

「そうですか。ですが、そこまでわかっておられるなら何故悠久の風に依頼を？」

詠春さんが合いの手を打つ。その隣でナギは一応大人しくなっているようだ。

「元々あの山には竜の神様が祀られておりまして、昔は火山の活動が活発になってもお祈りを捧げると収まっていたのです。ですが、実はしばらく前に魔物らしきモノが火山に住み着いてしまったようで、それからなのです。お祈りもしたのですが効果がなく・・ですからその・・魔物を倒して頂ければこの異常も収まるのではないかと。」

「竜の神様」ねぇ。俺って何か関係あるのかな。

「なるほど、わかったぜばぁさん。そのモンスターを探してぶっ飛ばしゃいいんだな！」

「ナギ、そう簡単でもないんじゃね。噴火がもし止められなくなってたりしたら大変だし。」

一応俺が突っ込んでおく。

「てことはそのモンスターを倒すのは早い方がいいってわけだな。んじゃ早速明日倒しに行こうぜ。」

こいつわかってんだがわかってねぇんだか。

「そうですねぇ。大体のところは把握できましたしそうしますか。」

「でしたら私どもの家をお使いください。お客様用にいくつか部屋もありますゆえ。」

「ありがとうございます。チェクさん。こらナギ、お前もきちんとお礼くらい言え！」

「へーへー。」

というわけで俺達はチェクさんの家で一泊することになった。

（チェクって確か村の名前じゃなかったっけ？あとたしかヨギ火山ってボスがいたような・・）

俺はブレスオブファイア４の記憶を思い出していたが、まぁこのメンツなら心配はいらねーなと考えて、部屋へと向かった。

その後は夕食の時間。

関係ないが、周辺で取れる暖かい気候に即した野菜の料理、生息する草食動物の肉料理等はメガロメセンブリアのホテルの料理に引けを取らないものだった。

「うめぇ、やっぱ料理はバランスが大事ってな。なぁ相棒。」

「あ、ああ、そうだな。」

これまた関係ないけどどうやらボッシュは不死身の癖に健康に気を使ってるらしい。

（そう言えば前にも飯はバランスがどうの言ってたな・・）

相棒のフェレットの意外な一面を見て「でも不死身の癖になんか気にするところ間違ってね？」とか考えたりしていた。

俺達は明日どうするかをチェクさんとそのお付きの人を交えて火山について聞いたりとワイワイやり、その後は明日に備えて早めに眠るのだった。

次の日、俺達は朝早くに村を出た。チェクさんの話では火山への道は普通の山道で、そこから火山内部へ通じる洞窟に入れるらしい。

山道の入り口付近には管理人を自称する人が住んでいるとのことなので、まずはその人のところへ向かうこととなった。

第五章　4、管理人

山道を目指して進んでいると、立派なログハウスが見えてきた。

チェクさんの言う自称この山の管理人とやらが住んでるのがここだろう。

「おーい誰かいるかー！山に入りてぇんだけどー！」ドンドン！

到着した途端ナギがドアをノックしている。

止めようとする詠春さんを見つつ

（あの態度を素で貫けるのはある意味羨ましいなー）

とか俺が感心しているとと

「うるっさいねー！なんなんだい！あたしゃ今急がしいんだよ！」

中から女性の怒鳴り声が聞えてきた。

「すみませーん！火山の調査に来た者ですが！少々お話を聞かせて貰えませんかー！」

さすがに詠春さんは常識を弁えてるよね。

「いいからちょっと待っといておくれ！」

答えるように再び怒鳴り声が。

仕方ないので全員ドアの前で待ちぼうけしていると

カッ！

「「「「「「！？」」」」」」

チュドォーーン！！

ログハウスの窓から光が発せられたと思うと轟音が轟き、大爆発が起きた！

「なんだ！？」

「爆発しましたね。」

「中にモンスターでもおったか！？」

「みんな！突入するぞ！」

「イエッサ！」「おうよ！」

詠春さんに言われ、無理やりドアを開けて入った俺達が見たものは

爆発の影響かプスプスと煙を上げて倒れている女性と、色々な物が

吹っ飛んで荒れ果てた部屋だった。

「いやー、あっはっは。みっともない所を見せちまったね。」

そう笑っているのは先程爆発した謎の女性。

俺達は取り合えず女性の部屋をわかる範囲だけ片付けた後、目を覚

ました女性と共にテーブルを囲んでいた。

女性は爆発直後は面白アフロ状態だったが、今は落ち着いている。

青紫の長髪をポニーテール状に纏め、水着のような胸からお腹までを覆う薄手の服に青のベストを羽織っていて胸の谷間が実にけしからんことになっている。

見た目の年齢としては２０代、容姿としては絶世の美女と言っていいだろう。

しかし最も特筆すべきはその下半身。

なんと何も着けていないのだ！

爆発で服が消滅した等という事ではなく、最初から何も着けていないという文字通りのスッポンポンである。

この事実を見るとただの露出狂としか思えない！

我々の業界ではまさに御褒美だ。ふへへ。

シュルシュルッ

「おっとそうだ、あっちの棚にお菓子があった筈だからね。ちょい

と取ってくるよ。」

シュルシュルッ

だがしかし現実は甘くない。

人が歩いているとは思えない効果音。

そう、この女性の下半身は

蛇だった。

ようするにイメージとしてはラミアだ。

お菓子の入った箱をテーブルに起き、指定の位置に座る美女。

「全くばぁさんからお客が来るとは聞いてたけど、こんなイイ男達が来るなんてねぇ！んもう、言ってくれりゃきっちりお化粧しといたのに！」

そう言って指定の位置・・詠春さんとアルの間で先程の怒鳴り声が嘘のようにご機嫌である。

詠春さんは目が泳いでてアルはいつも通りのスマイルだ。

「それで？わざわざあたしの為に会いに来てくれたアンタ達の名前を教えておくれでないかい？」

「あたしの為」辺りを強調するように言って俺達を見回す美女。

「あ、ああ。俺達は「紅き翼」ってんだ。俺はリーダーのナギ・スプリングフィールド。」

ナギが気圧されている。これは珍しい絵柄だ。

「アルビレオ・イマと申します。」

「ゼクトと言う。」

「あ、青山詠春・・です。」

「俺はリュウと言います。」

「俺っちはボッシュってんだ。」

「へぇーえ、喋るイタチなんて珍しいわね。」

「俺っちはフェレットだぜ。そこんとこ頼むぜねーちゃん。」

「そ、それでし、失礼ですがあなたの名前を教えて頂けますか？」

詠春さんが顔真っ赤にしながら言ってる。声多少裏返ってるしやはりムッツリだな。

「おっと、自己紹介が遅れたね。あたしはディース。大魔道士（マジックマスター）ディースさ。よろしく！」

そう言って笑うディースさんであった。

「大魔道士」にナギがちょっとピクッとしていたが。

「それで？あの爆発はなんだったんだ？」

ナギが全員持ってるだろう疑問を代表として訪ねる

「ん？あっはっは、いやー今日こそはって思って気合入れて料理してたんだけどねぇ。ちょーっと分量間違えちゃったみたいで爆発しちゃったのよねー。」

（（（（（（料理なのになんで爆発！？））））））

「いやおかしーだろ！？何混ぜたら料理で爆発すんだよ！？」

ナギが突っ込みに回るとは

「いや絶対アレ混ぜた方が美味しくなると思ったのよ。ほら、舌にピリっと来るのって美味しいの多いじゃない？」

「ち、ちなみにそのアレとは何でしょうか？」

未だにまともにディースさんと目を合わせようとしない詠春さん。

「ん？ああ、「なまずのいかり」って言ってね。近所に居る大ナマズのモンスターから取れる部位さ。」

「ぶふぉ！？ぐほっこほっ、いやあのちょっと待って下さい！」

思わず吹いた。ブレスオブファイアで「なまずのいかり」とは敵全体への攻撃アイテムだ。

「どうしたんだいリュウちゃん？」

「いやソレって攻撃用のアイテムじゃないんですか！？」

俺の言葉に周りみんなの顔に縦線が走った気がする。

「へぇ、よく知ってるわね。お姉さん感心するわ。んでも少しだけだから平気だってば。」

「いやいやちょっとでも危ねーと思いますよ！？まさか他にも何か入れたりはしてないですよね！？」

「んーそうねぇ・・後はサンダークラッカと氷河の欠片をちょっとだけ入れたけど」

はい全部攻撃アイテム。

「ちょっとぉ！？何入れてんですか！？全部攻撃アイテムですよ！？料理下手ってレベルじゃねーですよ！」

「ふん、何よぅおこちゃまに大人の味はわからないわよ！」

全員の顔に「この人に料理をさせちゃいけない！」と書かれているのに気付かないのだろうか。

（・・「ディース」ってこんなキャラだったっけか？）

「ディース」はブレスオブファイアの５以外に出てくる味方キャラで強力な魔法使いだ。下半身蛇なのも青紫な髪なのも合ってるはずだ。

うーん、と色々思うところはあったが細かいことは気にしない事にした。

何故なら美人は正義だからだ！

下半身蛇などさしたる問題ではない。むしろアリだ。

乳の大きさも相まって「ディース様」と呼びたいくらいだがそれは

秘密だ。

「ではディース殿、良ければ火山について話を聞かせてくれぬか？」

ゼクトさんは相変わらずだなぁ。

「オッケー。ちょっと前になるんだけどね、あたしが街まで遠出した後戻ってきたら妙な気配がしたのさ。いつもならあたしが帰ると出てくる動物達が全ッ然姿を見せなくてね。」

「ふんふん」

「なんかおかしいなーと思って山の洞窟へ行ったら凄い魔物の気配がしてさ。あたしも一応音に聞えた魔法使いだし、とっとと退治してやろうと思ったんだけどこれが見つからなくてね。あそこ暑すぎるし面倒だし何度も行く気にならないしで困ってた所だったんだよ。」

「あんた・・あの山の管理人なんじゃねーのかよ。」

ここはナギの言う通りだ。

「いやーこの辺りは気候が良くてねー。暖かいから冬眠しないで済むし何とか住みたかったから仕事なんて適当にでっち上げたわ。」

いいのかそんなんで・・

「おや？ディースさんは元々この辺りに住んでいらっしゃったのではないのですか？」

「ん？そうさね。あたしは元々旧世界出身なんだけど、ちょっとした理由であっちに嫌気が指してね。ちょうど運良く魔法世界なんてものを知ったんでこっちに移住してきたのさ。」

「理由ってなんだよ？」

「んふふ。それは秘密よナギちゃん。いい女ってのは秘密が多いもんなのさ。」

「なんだそりゃ。」

こんな感じで終始ディースさんのペースで話していき、気が付いたら日は既に沈みかけていた。

真っ暗な中、全く知らない山道を登るのは愚の骨頂ってことで、ここで一泊することになった。

そして長い夜が始まる・・

第五章　４、管理人（後書き）

ディースは毎ターン終了時にＨＰが３０００自動回復します。

嘘です。

第五章　5、料理

「ちょっとディースさん！うろちょろしないで下さい！危ないですから（危険物混入的な意味で）！」

俺は今人参の皮を剥いている。

「何よー。いいじゃないのよー。折角のお客さんだし、あたしだって料理作りたいの！っていうかここあたしの家だし！何でリュウちゃんが料理してるのさ！」

後ろにはディースさんがうろうろしている。

（何を入れるかわかったもんじゃないんだから勘弁してください。）

一泊泊めてもらうということで、当然俺達が料理を担当した。

昼間に見た料理とは呼べない怪しい実験で出来たようなモノを食わされた日にはどうなるかわかったもんじゃないのだ。

俺が今一人で料理を担当しているのは、単純にジャンケンで負けたからだ。

あの４人、こっちの手を出す直前の動きを見て即座に手を変えて来るというどこぞのハンターのような手を使ってくるから困る。

俺も次はラーニングもしくは両手スイッチ戦法で対抗してやらねば。

そして今日のメニューはカレー。ルーさえあれば誰でも作れて失敗のしようもない安牌だ。

人参の皮を剥き終え、次の食材を探すがまだ取り出していなかった事に気付く。

「っと、ジャガイモじゃがいも・・」

（確かまだあった筈っと。）

ヒュパッ！

あら不思議、手の上にはどこからともなくじゃがいもが。

「え？何今の！？リュウちゃんそれどっから出したの！？え？手品！？」

ひょいっと俺の手の上の芋を覗き込んでくるディースさん。

それにしても魔法使いの癖になんとまぁ説明心をくすぐるリアクションだ。

近くによるとイイ匂いがするし・・

っと、危ない危ない。これは孔明の罠だ。正気を保て俺。

「これは俺のこの「ドラゴンズ・ティア」に収納されてるんですよ。すげー便利ですよ?」

そう言って芋の皮を向きつつ器用にアクセサリーを指差す。

「なにそれすっごいレアアイテムじゃん!ね、ね、もし良かったらさー、おねいさんにそれちょーっと貸してくれたりしないかなー?」

そう言って身体を摺り寄せてくるディースさん。

(あぁ・・何か柔らかいのが・・柔らかいのが当たってる・・・あーもーちくしょう!けしからんぞちくしょう!)

煩悩と闘いつつもこれは絶対に手放せない物なので涙を飲む。

「残念ですけどこれは無理です。俺これがないとちょっとヤバイ事になるんで。」

「えー、何よーこのあたしの言うことが聞けないってのー?いいじゃないのよー。リュウちゃんのケチー。」

ちょっと膨れっ面でぶーぶー文句を言うディースさん。

くっそう「ディース」ってこんな可愛いキャラじゃなかったハズだぞチクショウ!

「ほらディースさん。あっちにカッコいい大人が二人も居るじゃないですか。子供の俺より楽しいと思いますよ。」

リビングのテーブルで明日の事について話をしているアルと詠春さんの方にディースさんの意識を向けさせる。

「っと、そうだったわ。あんなイイ男達が居るのにおこちゃまの相手してる場合じゃなかったわね！」

シュルシュルシュルッ！

ディースさんはあっという間に二人の間の席に収まった。

詠春さんは一気にしどろもどろになり、アルが面白そうに弄っているようだ。

「はぁ・・なんで俺は今子供なんだ・・」

俺は今初めて自分が子供の見た目であることを悔い、泣いた。

「だー、やっぱつえーなお師匠。」

「ナギよ、もう少し魔力の制御をしっかりしろ。あれでは無駄が多すぎるぞ？」

「わーったよ。ったく・・」

「いやいや、あんたら二人ともおかしいっての。」

玄関のドアを開けて入ってきたのはナギとボッシュとゼクトさん。

夜と言うこともあって派手な修行を行わず、魔力による身体強化訓練を行っていたらしい。

ぶっちゃけるとただの肉弾戦だ。

ボッシュは暇だから見にいっていたようだ。

ちょうどカレーが出来上がった辺りで二人と一匹は帰ってきた。

「お、うまそうな匂いだなー」

「ふむ、ちょうど良いタイミングじゃったの。」

「俺っちも腹減ったぜぇ。」

「いやせめて座る前に食器を並べたりはして。」

俺はドラゴンズ・ティアから人数分の食器をヒュパッと取り出す。

「へいへい。まーそれぐらいならな。」

「ナギよ、ワシの分も頼む。」

「何だよお師匠、手伝ってくれよ。」

「年寄りをこき使うもんじゃないのぅ。」

「いやいやどう見ても俺より年下じゃねーか。」

確かにゼクトさんの見た目は俺やナギより年下っぽいよな。一体どうなってるんだか。

と、ここでそれまで椅子に座っていたアルがこちらを向き、

「ふふ、では私とナギが並べますよ。ゼクトはどうぞ、お好きなだけ座っていてください。お年寄りは大事にしませんとバチが当たりますからねぇ。」

そう言って立ち上がった。

「・・・ワシもやろう。」

「おや?どうしました?座っていて結構ですよゼクト?」

「・・アルに言われるとこう・・無性にな・・。」

「わかるぜお師匠・・」

「ふふ、ではお願いしますね。」

着席するアルの何と言う笑顔か。全てはアルの掌の上だと言うのだろうか。

「だ、誰か・・た、助けてー！！」

詠春さんとその肩にしなだれかかって何事か囁いているディースさんはみんなに文字通りカレーにスルーされているのだった。

「はぁーご馳走様！いやーリュウちゃん料理上手いのねー。全く羨ましいわ。」

「いやまぁありがとうございます。」

誰が作っても美味しい物とは言え、そう言われると嬉しい。

「あたしもさー、あんな感じで前に鍋一杯におじやでも作ろうとした事あったんだけどね、ちょっとだけ失敗しちゃってねー。」

「「「「「・・・」」」」」

どんな失敗か想像が付かないが碌な事にはなってないだろう。

「そうだ！まだどっかに取ってあった筈だからそれ見てリュウちゃんアドバイス頂戴！今持ってくるから！」

シュルシュルッ

「ちょっ！？待っ・・」

行っちゃった。

心なしか周りからの視線が痛い。

ちょっと待つとディースさんが何やら厳重に封印されたような入れ物を持ってきた。

「ほう、これは・・」

「ふむ、なかなかに・・」

アルとゼクトさんがその封印を見て呟く。そんな感心する程の物なんですか。

ディースさんがその壺？をドンっとテーブルに置く。

「これよ。さぁ、リュウちゃん！見てやって頂戴！」

「その前にディース殿、この封印は実に見事なものじゃな。」

「ええ、私もこれほどの封印術式は初めて見ましたよ。」

二人が壺？を見て誉める。

「ふっふーん。中々見る目あるじゃない。あたしも伊達に「大魔道士」なんて呼ばれてるわけじゃないのよ？」

「ねーちゃん、大魔道士ったってこんな封印だけでそりゃ大げさ過ぎだろ。」

ナギは「大魔道士（マジックマスター）」が気に入らないらしい。

「ふふん。ナギちゃん、言っとくけどこんな程度の封印なんてあたしにとっちゃ序の口よ？これでも数百年は生きてるんだからね。呪文だって軽く５～６００は使えるし。」

「５～６００だって！？」

未だにあんちょこが手放せないナギからすると驚くような数だろう。

しかし数百年の方はスルーですかそうですかババァかわいいよババァ。

「そうよ～。確かに見た感じナギちゃんの魔力の量は膨大だけど、そんなくらいじゃあたしには勝てないわよ？」

「・・・」

何やら神妙な顔つきのナギだ。

「さーて、そんじゃリュウちゃん！お願い！」

スチャッ！と壺の側に立ったディースさんがそう言って壺の蓋の封印を解くと

ゴボ・・ゴボ・・

「「「「「「・・・」」」」」」

全員目が点になった。

（何この真っ黒いゲル状の何か・・）

作ってから大分日が経ってるハズなのになんでゴボゴボ言ってんのコレ！？

「あの・・これどう見ても食いモンじゃないですよね？」

「ちょーっと聞き捨てならないわね。これでもあたしが丹精こめて作ったおじやなのよ？」

唐突だがブレスオブファイアには戦闘中に使うと即死効果のある攻撃アイテムが存在する。

即死魔法ワースと同じ効果を持つその道具の名称を・・「デスおじや」と言う。

まさに今目の前にある物がそれだろう。あの厳重な封印も納得だ。

（これにアドバイスとか無理だから・・）

いっそ攻撃アイテム開発にその壊滅的な料理の才能を存分に発揮して欲しいと心から思いつつ、宥める→説得→逆ギレのワルツがしばらく続くのだった。

第五章　6、出現

「・・なんか一日無駄にしたよなぁ。」

「フフ、いえいえなかなか楽しい時間でしたよ?」

「・・・」

「詠春さん・・大丈夫ですか?」

「リュウよ、放っておくのじゃ。」

「そうだぜ相棒、それが情けってモンだ。」

「・・・」

現在俺達は山道を洞窟に向かって進行中である。

あんな場所に住んでるのでイイ男分が足りない!と夜中までずっとアルと詠春さんはディースさんの飲みに付き合わされていた。

今、詠春さんはかなりグロッキーだがアルは何故かケロッとしてる。

道中には多少モンスターが出現しているようだが、先頭を突き進むナギがサーチアンドデストロイなので後ろに居る俺達には全く影響が無い。

「ナギに任せると楽でいいですねぇ。」

相変わらずの腹黒笑顔だ。でも意見には同意する。

そんな調子で進んでいると

「着いたぜ！」

目の前には大きな洞窟の入り口がぽっかりと開いていた。

ここから異常の原因と思われるモンスターの居る火山の内部へと進んでいく。

ディースさんの話では奥にでかい空洞があって多分そこに居るんじゃないか、とのことだ。

「さて、こっからは気合入れて行くぞ！」

ナギが先頭で手に魔法の明りを灯し、俺達は暑さを我慢して歩くのだった。

ある程度雑魚モンスターを蹴散らし（主にナギが）つつ進んでいると、道が二手に分かれていた。

「確か人間はこういうとき左を良く選択するんだよね」というどこかの試験にあったような話をすると、その話が何か影響したのか右に進む事になった。

しばらく進むと突き当りで妙な石が置いてある割と大きめな部屋に出た。

「ここがあのねーちゃんの言っていた部屋か？」

「いえ・・何かの気配はしますが魔物ではなさそうですね。」

「ふむ、あの石から不思議な気配を感じるの。」

「なんだろ？」「相棒、俺っちにも見せてくれよ」

部屋の隅に細長い楕円のような石が墓石のように立っていた。

明らかに怪しさ大爆発だ。

≪あなた、私の声が聞えるわよね？≫

「！」

「リュウどした？」

「何かあったかの？」

「あーいや、ちょっと。」

俺はボッシュを置いて石に近付いて行った。

（この感じはもしかして・・）

≪こんにちは。龍の御子。まさかこんなとこに来てくれるなんて思わなかったわ。≫

石の前に立つとよりはっきり聞えてきた。

（村でチェクさんが言ってた竜の神ってのはこの人？かな。）

「えーと、竜の神様ですよね。ひょっとして契約ですか？」

「「「「？」」」」

全員の？目線が背中に突き刺さるがスルー。

≪話が早いわね。ちょっとアイツに用があるんだけどここから出られなくて困ってたの。≫

「アイツって・・もしかしてここのモンスターですか？」

≪そ。あたしを押しのけてデカイ顔してさ。あたしの封印魔力貪り食ってるし、いい加減頭来てんのよね。≫

（チェクさんの言った通り、元々はこの人？が山を治めてたのか）

≪で、どう？契約してくれる？≫

「構わないですよ。」

≪よかった。やり方はわかるわよね？≫

「大丈夫です。」

（もうサイフィスと契約してるしな）

俺は石に向かって手をかざした。

すると掌から熱が伝わってきて・・

「あっつっ！」

これがあるの忘れてた！

≪ふふっ、ありがと。これで動けるわ。≫

ひらひらと頭の上にカードが落ちてきた。

やはりパクティオーカードとそっくりだったが、絵柄は赤い東洋の龍だ。

サイフィスより装飾が少し派手気味だけど。

「あ、そうだ。名前って決まってますか？」

≪名前無いのよ。だからあなたが決めてくれていいわ。≫

またかい。

「えーとじゃあ属性は何でしょう?」

≪情熱の「炎」よ≫

情熱とかどこの貴族だよ。

しかしそうだな。炎系ならアレで・・

「グランバ・・なんて・・」

≪ナニソレ?もう少しマシな名前にして≫

ですよねー。

そうだな・・火山・・雌・・火の竜・・リオレイア・・

でも色とか形状とか違うし・・

「じゃ「ラグレイア」なんてどうでしょう?」

足して2で割ってみました。

≪・・まぁいいわ。≫

ヤベッちょっとご機嫌斜めかも。

シュウゥゥゥ

カードの上に名前が刻まれる。

「じゃあよろしく。ラグレイア。」

≪ええ、こっちこそ。アイツはもっと奥に居て、噴火を抑える私の封印魔力を自分の力にしてるわ。なんなら遠慮なく粉微塵にしちゃって。≫

へぇ。それは貴重な情報だ。後半は物騒だったが気にしない。

カードをポケットに突っ込み、四人と一匹の下へ戻る。

「リュウ、辛かったんだな。今度からはもっと修行を緩めるようにすっから。」

「いやまさかリュウがそこまで追い詰められてるとは。気付かなかった私の責任です。」

「リュウよ、大丈夫じゃ。ワシ等がついておる。」

「リュウ君。今度私の実家に湯治に行かないかい？心の傷にも聞くと評判なんだ。」

「相棒、大丈夫だ。大丈夫だぞ！」

なんか全員に生あったかい目で見られた。

だからちげーっての。

その後、ラグレイアの部屋には特に何もなさそうだったので分かれ道まで戻り、さっき選ばなかった方へと進んだ。

「ここか」

「確かに魔物の気配がしますが・・それらしいモノは見当たりませんね。」

俺達は最奥にあったとても広い空間に出ていた。

何故か明るく、下手な野球ドームくらいの広さはあるかもしれない。

火山の中心に近いためかかなり暑い。

しかしとにかく魔物の気配が濃いのに辺りには何もいないように見える。

「確かにディースさんの言った通りですねぇ。どこにいるのでしょうか。」

「めんどくせぇ!手当たり次第に・・」

「手当たり次第に攻撃は駄目ですよナギ。ここは火山の中心に近いですから、あまりに大きな衝撃を与えると噴火が始まってしまうやも知れません。」

「くっ。」

「ふむ、しかしじゃ。この空間には居ないようじゃぞ?」

「一通り気で探索したけど、この空間には障害物すらないな。透明になっているというわけでもないようだし。」

「そうか・・なら・・・ん?リュウ、どうした?」

ナギの目線の先に居る俺は、地面のある一点を見ている。

俺はブレスオブファイア4の記憶を手繰っていた。

その中で火山に出てきたボス。確かそいつは頭に・・

「ねぇ、あそこの地面にさ。一箇所だけ妙な草が生えてるじゃない?」

「「「「!」」」」

「こんな場所であんなの生えるわけないだろうし、多分あれって・・」

「ふむ、お手柄じゃぞリュウ。」

「ふふっ、さすがですねぇ。」

俺達は一斉に草の地点に対して構える。

「よし、詠春！いけぇ！」

「おお！神鳴流奥義！斬岩剣！」

草の生えた場所への詠春さんの一撃！

ギャギィンッ！

だが突如そこに障壁のような物が生まれ、ガードされた。

ズゴゴゴゴゴゴ・・

地響きと共に草の生えた個所が激しく隆起する。

ゴゴゴゴ・・・ボゴォッ！

「我を目覚めさせたのはうぬらか。」

腹の底に来るような重い声が響き渡る。

そこに出現したのはまさに巨大な岩の塊だった。

第五章　7、粉砕

「こいつがボスだな！」

「お出ましじゃな。」

「無駄に大きいですねぇ。」

「なかなか頑丈そうな相手だな。」

「こいつはデケェな相棒。」

「そうだね。剣もあんまり効かなそうだし。」

出現した岩の塊は徐々に変形し、ずんぐりむっくりな体型の人型へ変わった。

大きさは２０メートル程で一番近いイメージとしてはガチャ〇ンの相方ム〇クの肌を岩肌にしてでかくなったような感じだ。

「我は山の神なり。人間共よ、よくも我を眠りから覚まさせてくれたな。」

「はっ！神とは大きく出たな！このデカブツが！」

「その程度で神を名乗るとは片腹痛いの。」

「神でしたらもう少し美しい見た目になったらどうですか？」

「貴様は神でもなんでもない！ただのモンスターだ！」

（全員言いたい放題だなー）

「相棒！相棒もなんか言え！」

「えー、別に・・倒すだけだしいらなくね？」

「なんでそこだけノリがわりーんだよ相棒！」

いやなんか周りが盛り上がってると逆に冷静になっちゃうのよね。

「俗物共め。神の力を思い知れ。【サモン・カイン】」

ビュワッ！

と、デカブツから周囲に魔力が飛び散ったと思うと

ボゴボゴッ！

「キシャー」「ビギィー」「フシュー」

なんかデカブツのちっちゃいのが何匹も現れた！

「む、これは思ったより厄介かも知れぬな。みな聞け！ワシとアルでザコを潰す！ナギリュウ詠春は本体を叩け！」

「わかったぜお師匠！」

「ふむ、ではやりますか。」

「いざ、参る！」

「りょーかい！」「おうよ！」

ヴォンッ！

アルが重力弾を両手に作り

ドドドドドドンッ！

周囲のちっちゃいのに向けて重力弾爆撃を行う。

「ふん！」グシャッ！

ゼクトさんが撃ち漏らしたヤツを的確に潰していく。

重力弾が小さいのは火山への影響を気にしているからだろう。

ちっちゃいのはデカブツの魔力を受けて次から次に生産されているので早めに本体を叩く必要がある。

「神鳴流奥義斬空閃！」

ヒュゴォッ！

「魔法の射手・連弾・雷の１９９矢！」

ズァァッ！

「海破斬（斬空閃）！」

ビュゴッ！

三つの技がデカブツへ飛んでいく！

ズゴオォォォン！

「やったか！？」

「ちょっ！ナギそのセリフは駄目だ！」

「なにがだよ！」

「！来るぞ！二人とも避けろ！」ヒュッ！

「「！」」

ヒュッ！ヒュオッ！

ドズウゥゥウン！

俺とナギが居た場所にデカブツの手が落ちてきていた。

向こうには無傷な本体が立っている。

「へっ、なるほど。少しは骨がありそうだな！」

そう言って突っ込む気満々なナギ。

「落ち着けナギ。コイツは何か妙だ。普通のモンスターとは思えない防御力。何かあるぞ！」

「ナギ、詠春さん。コイツは火山の力を吸い取って魔力に変換してるみたい。」

「それホントかリュウ！？」

「ホント。今さっき気付いた。」

本当はラグレイアの情報だけどね。

「そうか、通りでな。しかしそうなると厄介だな。」

「じゃあ俺が変身して・・」

「いや、リュウ君のあの力では下手をすると周囲に影響を及ぼして噴火を促し兼ねない。」

「マジすか・・」

「へ、問題ねぇよ！俺が居るからな！」

「ナギ、何か策があるのか？」

「ようするに・・・ぶっとばしゃいいんだろ！！」

「「・・・」」

「ナギっこよぅ。そりゃ策でも何でもなくねぇか？」

「気にすんな。大体俺達が本気だしゃぁこんな程度のヤツに負けるわけねーだろうが！」

「「！」」

それもそうだ。やっぱナギってリーダーの器かもねぇ。

何も考えてないだけかもしんないけど。

「ふっ、そのとおりだな。私達に対してコイツ程度では役者不足だ。」

「確かに。じゃあそのナギの本気ってヤツを見せて貰おうかな。」

「よーし見せてやるよ！吠え面掻くなよリュウ！」

「よしリュウ君、とどめはナギに任せて、私達でヤツを足止めし、

少しでもダメージを与えるぞ！」

「了解！」

「ナギ！でかい事言ったんだからきっちりやれよ！」

「へっ、誰に言ってんだよ詠春！」

「ナギ頼んだ！」「頼んだぜナギっこ！」

「まかせな！リュウ！ボッシュ！」

「俗物共、我が力をその身に受けよ」

デカブツの頭のてっぺんの草から木の実のような物体が振りまかれる！

「まずい！当たるな！」

「おわっ！」

ドゴォンッ！

「！爆弾かよ！」

直撃したら即戦闘不能ぐらいの威力はありそうだ。

幸い呪文を唱えてるナギは範囲外だからいいけど、ひっきりなしにばら撒いているからこっちからはちょっと近付き辛い。

でも・・

ドゴォン！

「リュウ君！まさかこんな程度で根を上げたりしないよな！」ヒュッ

ドゴォン！

「当たり前ですよ詠春さん！」ヒュオッ

ドゴォン！

流石にこの程度でやられはしない。

俺と詠春さんは爆弾をかわしつつそれぞれデカブツの右と左に回りこむ

「いくぞ！神鳴流奥義！雷光剣んっ！」

ガカァッ！

ビギギギギッ！

しかし分厚い魔力障壁に遮られる

「・・・はぁっ！！」

ズバァンッ！！！

ドスゥン！

詠春さんの気合一発本気の一撃が障壁をヘシ破って腕を切断！

「お・・お・・おお・・」

デカブツがうめく

「相棒！どうする！？」

「こんなこともあろうかと必殺技を用意してある！」

技名はどうしようか迷ったけどな！

「よし、ならそいつで行っちまえ相棒！」

「ＯＫ！戦いの歌（バトルソング）！」

ゴァッ！

身体強化完了！さらに

「ギガート！」

パァッ！

ブレスオブファイアの攻撃力アップ魔法を重ね掛け！

俺はスクラマサクスを逆手に持ち、後ろ手に構えて3つの技の力を込める。

イメージするのは大地を斬り、海を斬り、空を斬ることができた者にのみ許される必殺技！

昔小さい頃に傘やほうきで散々真似したからモーションはバッチリのはずだ！

ドゴォン！

「相棒！今だ！」

爆弾をかわし、巨大な腕に近付く。

「行くぜぇ！」

ジャンプし、巨大な腕目掛けて力を溜めた剣を叫びと一緒に振り下ろす！

「喰らえやぁ！　テ　ラ　ブ　レ　イ　ク　ッ　！」

ブオァッ！

ビギギギギッ！

障壁に阻まれるが

「ううおりゃぁぁぁぁあっ！」

ズバガァッ！！

ドスゥン！

切断成功！

「すげぇぜ相棒！」

「よっしゃぁ、うまくできた。」

正直ぶっつけだったけど満足いく出来だ。やはりブレスの技と言えばこれだろう。

技名迷ったけど。

「お・・おおおお・・・」

ズン、ズズゥン。

デカブツが両腕を切断されたダメージで後ずさる。

後は・・

「「ナギ！」」

詠春さんと声がハモる。

トドメに控えるは我らがリーダーの一撃！

「雷の暴風！！」

ズオォォァアッッ！！！！！

以前俺と戦った時とは比べ物にならない位太いエネルギー波がデカブツを襲い

ビギギギギッ！

障壁も

パリィンッ！

あっさりと貫通して

ズゴォォッ！！！

「ぐ・・お・・・お・・」

エネルギー波がデカブツの腹に突き刺さった！

ズズッ・・ズズズッ・・

そのあまりの勢いに巨体が押し戻され

「うおおおおあああああああっ！」

ズァッ！！！

「！！！！！」

バグォンッ！

腹部を貫かれて

「お・・が・・・」

ドズウゥン！！

デカブツは地に倒れ附した。

本体を倒されたからか、無制限に沸いていた小さな敵達もナリを潜めていった。

「やれやれ。終わりましたか。私達は今回完全に脇役でしたねぇゼクト？」

「ふむ、まぁいいじゃろアル。これくらいナギ達なら問題ないでの。」

そう言って目を合わせて微笑む二人だった。

「よっし、終わったな。そんじゃ村に戻るとすっか。」

「そうだな。これでこの山も収まるだろう。」

「いやー、なんか疲れた。あの技ぶっつけ本番だったし。」

「相棒、今回はかなり役に立ったな。」

「うるせー。」

アル、ゼクトさんと合流し、広い空間を後にしようとした時

≪リュウ！大変よ！リュウ！≫

「ん？ラグレイア？」

「？どしたリュウ？」

「腹の調子でも悪くなったかの？」

「あ、いやちょっと待って。」

立ち止まった俺を不思議がるみんなを尻目にラグレイアのカードを額に近づける。

≪どうかした？≫

≪あいつ！死ぬ直前に取り込んでた私の封印魔力を反転させたの！それを一気に開放して山の奥に放ったから、このままだと・・≫

≪えーと・・もしかして・・≫

≪あと少しで噴火する！≫

どうやらまだ終わっていないようだ。

第五章　8、防衛

≪あと少しで噴火する！≫

「やっぱりかぁ！！」

「ど、どうしたよリュウ？」

いきなり大声を上げた俺を変な物見る眼でナギが見てくる。

「やばい！あのデカブツ倒したせいで魔力が一気に山に戻ってあと少しで噴火が始まるって！」

「「「「なんだって！？」」」」

≪ここは真っ先にマグマで溢れるから早く脱出を！≫

「ここはマグマがすぐに来るから早く脱出しないとマズイって！」

「リュウ！そのカードは何だよ！？」

「いいから！早くこっから出た方がいい！」

「お、おう。よし、全員走るぞ！」

「「「「「おお！」」」」」

俺達は一目散に出口を目指した。

途中に居るはずのモンスター達も異変を察知したのか全く出てこない。

「ふう、なんとか出られたな。」

「ええ、それにしてもリュウ、その情報は一体どこから得たのですか？」

「いやまぁそれはこの・・」

カードを見せようとした時

ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ

「な、なんだ！？」

「地震じゃと？まさか！？」

「あ、あれを見てください！」

アルが指をさす先を見ると、噴煙を上げている山頂が目に入った。

「おい！まずいんじゃねーか！？このままだと村が・・」

「噴火すれば間違いなく壊滅するでしょうね。あの噴煙を見てチェクさん達も避難してくれていれば良いのですが・・」

「それはともかくここにいてはマグマに飲み込まれるやも知れぬ。」

「そうだ。洞窟を通ってここにもマグマが来るぞ！」

全員で急いで避難しようとしたところへ

「あんたたち！無事だったんだね！」

振り返るとディースさんが来ていた。

「親玉をやっつけてくれたみたいね。でも・・これはちょっとやばいかも知れないわ。」

「ねーちゃん！村の人はどうしたか知らねーか！？」

「それが、みんな逃げないんだよ。なんか竜の神様が守ってくれるとか言ってて。あたしはそんなのより早く逃げろって言ったんだけど。」

「おいおいそりゃやばいぞ！もう噴火はすぐ起きそうなんだぞ！？」

「だから、あんた達にも説得を手伝って欲しいんだよ！協力しとくれ！」

「むう、今は村人の避難が先じゃ。迷っておる暇は無いの。」

「全員！村まで全力ダッシュ！！」

「「「「「了解！」」」」」

俺達は急いで村まで戻ってきていた。

チェクさんの家に村人が大勢集まっていると聞き、行ってみる。

中へ入るとそこに居たのは老人がほとんどで若い人は見当たらない。

「ばぁさん！何で逃げねぇんだよ！」

「私らはもう十分生きました・・今更ここを捨て、よその地で生きていこう等とも思いませぬゆえ・・」

「ちげーだろばぁさん！あんたが死んだら悲しむ人間だって居るだろーが！あんた一人の都合で死ぬとか言うんじゃねぇ！！」

「なに。私らはこの山を信じております。古より我等を守って下さった竜の神様を・・」

「竜の神」とは恐らくラグレイアの事だろう。でも

≪私にはもう無理よ。今回の噴火はとてもじゃないけど抑えきれないわ。アイツのせいでね。本当、腹立たしいわ。≫

ラグレイアはそう言う。これまで何度も噴火を阻止してきた本人が

言うのだから相当な規模なんだろう。

「もう噴火は目の前だって言ってるだろうが！！」

「・・・」

ナギは必死に説得するが集まっている老人達は逃げるそぶりを見せない。

「埒があかないねぇ。仕方ない・・こうなったら！」

ディースさんが家を飛び出す。俺達もそれに続いた。

「ディース殿、どうするつもりじゃ？」

「あたしが全部受け止めてみせるよ。ばぁさん達はあたしを受け入れてくれた恩人だし、ここももう第2の故郷みたいなもんさ。それが滅びちまうのを黙って見てなんて居られないよ！！」

そう言ってどこからか杖を取り出す

「ねーちゃん！俺も行くぜ！ここのわからずやのばぁさん達に生きる意地ってやつを教えてやる！お前等も行くぞ！」

「やれやれ。リーダーには従わんとな。」

にやりと笑うゼクトさん

「ふふっ。今度の相手は大自然ですか。あなたと居ると本当に飽きませんね。」

アルの顔にも珍しく黒くない笑顔が。

「みすみす村が蹂躙されるのを見過ごすわけにはいかない！神鳴流剣士としても、私自身としてもだ！」

詠春さんもキッと決意を秘めた顔をしている。

「・・・」

「相棒！ここは決めるとこだろうが！」

「・・ナギ。」

「どうしたリュウ！行くぞ！」

「いや、俺は行かない。」

「何だと！？」

ナギの顔に怒りが浮かぶ。

「お前！ここまで来てどういうつもり・・」

「待つのじゃナギ！・・リュウよ、何をする気じゃ？」

流石にゼクトさんは鋭い。

「・・俺が噴火を直接抑える。」

「「「「「!?」」」」」

「リュウちゃん。こんな時に冗談は頂けないよ?」

「俺は至って真面目ですよディースさん。」

「まさか・・・リュウお前アレをやる気か?」

ナギだけは知っている。

「そう。多分止められるとしたらアレだけだと思う。」

≪ちょっとリュウ!?あなた本気!?いくら龍の巫女でもあの噴火を止めるなんて無茶よ!?≫

ラグレイアが話し掛けてくる。

≪封印魔力ってのが上回れば噴火止められるんでしょ?それって氷系の魔力で代用できる?≫

≪できなくはないけど・・でもそれだと尋常じゃない量の魔力が必要よ!≫

≪良かった。魔力は大丈夫、当てがあるから。≫

「みんなはマグマを止められるよう準備しておいて。」

「・・・リュウ、出来るんだな?」

ナギが真剣な顔で聞いてくる。

「・・多分。」

幸い自分には力がある。

チェクさん達には死んで欲しくないし、このままでは確実に村は壊滅だ。

ならば無理やりにでも向こうを止めるしかない。

「歯切れ悪いな。こういう時は「やるぜ」って言い切るんだよ！」

・・・

「・・・よし、んじゃあ・・・やってくる！」

「・・わかった！みんな聞いたな！」

「ナギ、リュウは何を・・・まさか！」

アルの顔に珍しく驚きが。今回は貴重なショットが多いね。

「っと、そうだ。ナギ、そっち手伝えるヤツ一人居るから連れてってやって。」

「は？」

俺はポケットに入っているカードを取りだすと額へ近付ける。

≪サイフィス！お願い！ナギ達と一緒にマグマをくい止めてほしい≫

≪心得た≫

「サイフィスッ！！」

カァァァァッ！！

カードから光が溢れ、頭上に青い東洋の龍が現れる。

「お、おいリュウ、コイツは・・」

「大丈夫、マグマを防ぐの手伝ってくれるから。名前はサイフィス。」

≪よろしく頼む、少年よ≫

「あ、ああ。」

これで一応事前準備完了。

俺は自分の中へと意識を集中する。足元からオーラが吹き上げ、スイッチを入れる。

「ハァァァァァッ！！」

オーラが弾け飛び、ドラゴナイズドフォームが顕わになる。

ディースさんが目を丸くしているが気にしない。

「・・・ボッシュ！」

「おう、なんだい相棒！」

「これ持ってて。」

首に掛かっているドラゴンズ・ティアを外す

「お、おい大丈夫なんか！？」

「修行のおかげで少しなら平気さ。落としたり壊したりすんなよ。」

そう言って放ると、ボッシュは器用に口でキャッチした。

「わかったぜ！なんだかわかんねぇが頑張れよ相棒！」

「ああ。」

そして両手を腰溜めに構え、自分の奥深くへと意識を巡らす。

（相手は火山。上空での気流に負けない飛翔能力と冷やす魔力・・）

自分の奥深くにある力を分析し、選択する。

【アイス】氷

【マジカル】魔力強化

【グロース】能力強化

そして

【アクエリアス】水飛竜

最後の一つはそれまでとは色の違う要素。ドラゴンの形態を直接変形させる要素の一つ。

目覚めさせた力が自分の中で膨れ上がっていく！

「でぇぇぇぇやぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「「「「「！！」」」」」

ドオォォォォン！！！

上空からドラゴナイズドフォームのリュウへと紫の雷が落ち、リュウを中心に表面に緑の線で魔方陣が描かれた黒い半球状のドームが形成される。

ディースを含めた全員がその光景に目を奪われていた。

フォンッ！

黒いドームが宙へと浮かぶ。それは半球状ではなく、完全な黒い球体だった。

ピシ・・ピシ・・パキャァァン！！

ル　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　！　！

ドームが砕け散ると、咆哮と共に辺りにひやりとした冷気が漂う。

そこには前足の代わりに深い蒼の翼を持った、巨大な飛竜が空を舞っていた。

飛竜・・リュウはその翼をはためかせ、火山の火口を目指して飛んでゆく。

「あれが・・リュウ君の本当の力・・」

「あれほどの力・・・ワシは初めて見る・・」

「凄い・・・それ以外の言葉では言い表せません。」

「相棒・・おめぇってホントスゲェヤツだったんだな・・」

空を見上げ、四者四様の感想を述べる。

ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ

「これは!?まずい!さっきよりデカイぞ!」

「いかん!この揺れは・・もうマグマが噴出しとるかも知れぬ!!」

「おめーら急ぐぞ!俺達は「紅き翼」だ!マグマぐれぇ吹き飛ばしてみせらぁ!後はリュウを信じるんだ!」

「「「「おう!」」」」

ナギ達が山道へと続く道に急ぐその後ろで、ディースはリュウが居た空を見上げていた。

「まだ・・生き残りが居たんだ・・・」

≪ともかく抑える!≫

俺はまだギリギリ噴火が起きていない火口を見下ろしながら狙いを定めていた。

山の脇からは既にマグマが噴出している。

あれはナギ達を信じるしかない。

だがこれで山頂から大爆発が起きれば確実に村はアウトだ。

スゥウウウウ・・

体内を巡る冷たい何かと膨大な量の魔力を、吸い込んだ息に混ぜ合わせる。

口から魔力を秘めた、絶対零度に限りなく近いブレスを吐き出す！

≪水飛竜（ジャバウォック）のドラゴンブレス！ヘル＝ブリザード！！≫

シャアァァッ！！！

ドン　ッ！　！

およそ口から吐き出されたとは思えないほどの巨大な氷塊。

直径１ｋｍはあるであろう火山の火口を覆い尽さんばかりのその氷塊が火口へと吸い込まれていく。

ドボオォォン！

物質的な氷とは違うのか、周囲の熱・運動エネルギーを凍り付かせるだけで水蒸気爆発などは起こらない。

≪まだまだぁぁぁぁ！！≫

ドン　ッ　！

ドンッ！

ドンッ！！！

周囲の空気ごと凍り付かせ、ダイヤモンドダストを撒き散らしながら、極寒のブレスは次々に火口へと吸い込まれていった。

山道の方へ向かうと、開けた視界の先に洞窟から溢れ出てきたと思われるマグマが見えた。

木々を燃やし、地を這う灼熱の速度はかなり速い。

「あたしの故郷はやらせないよ！」

焼け落ちつつある自分の家を目の端に捉えながら、村へと迫るマグマに対してディースが杖を掲げ呪文を唱える。

「ベリ・ルス・ル・ビルス・ウロボロス！『契約に従い、我に従え、氷の女王！来れ、とこしえのやみ』【えいえんのひょうが】！！」

ギシィィ！！

視界一面のマグマが瞬時に凍り付き、その進行を食い止める
しかしそれでもマグマは上から止め処なく流れてくる
「へ、やるなねーちゃん。大魔道士ってな伊達じゃねーんだな！」
「ふふん、当たり前よ。さて、まだまだいくよ！・・・こおる大地！」
「俺もやるぜ！・・・雷の暴風！」
極太のビームにマグマが吹き飛ばされていく
「いきますよ！・・・重圧（ベタン）呪文！」
アルの重力魔法がマグマ全体を抑え込む
「神鳴流奥義！百烈桜花斬！」
詠春の放った螺旋を描く気の波動がマグマを吹き飛ばす
「ではワシも・・・【氷神の戦槌】！！」
ゼクトの造りだした複数の氷塊がマグマを冷やし固める
≪やるな、人間達よ。我も負けてはおれぬな。≫
ビュゴオオオオオオッ！！

サイフィスの巻き起こす風が盾となり、マグマを一定ラインから進ませない。

ナギ達の活躍により、村へ迫るマグマは次々に冷え固まっていった。

「長老!!あれを・・あれをご覧ください!」

「おお・・・これは・・・」

「凄い・・人の業とは思えぬ・・」

老人達は遠方のマグマを固まらせていく「紅き翼」の活躍を目の当たりにして感嘆の声をあげていた。

ゴ ゴ ゴ ゴ ゴ ゴ

「!!まずい!ナギ!あっちだ!!」

「なんだと!」

詠春が顔を向ける先では、別方向から村へとマグマが襲い掛かって来ていた。

量も勢いもこちらの比ではない僅かな程度。

しかしその進路の先にはぽつんと一軒家が建っている。

「ヤバイ！あそこには確か寝たきりのばぁさんが居たはず！」

「ホントかねーちゃん！？くそぉっ！・・」

ナギは多少衰えたもののまだまだ上から流れてくるマグマを睨む

ビュゴオォォォォォ！！

≪ここは我が引き受けよう少年。お主はあちらを。≫

「・・わかった！ここはまかせる！」

「はよう行けナギ！」

「あたしも行くよ！」

ナギは家へ最速で向かう、しかし自分一人の使える魔法では、家へ向かってくるマグマの勢い全てを殺せるような魔法はまだない。

「くっ！ちくしょう！」

ナギは家の中へと突入する。

「おい！すぐそこまでマグマが来てる！早くここから出るぞ！」

声をかけると、そこにはほぼ寝たきりの老人とその側から離れようとしない小さな女の子が居た。

「おい！」

「でも・・おばぁちゃんが・・」

「～～いいから行くぞ！」

ナギは咄嗟に老人を背負い、小さな女の子を抱きかかえて家を飛び出した。

瞬間、家はマグマに流され焼かれ落ちる。

「ああ・・おうちが・・」

「・・・」ギリッ

女の子の呟きにナギは答えず、ただ歯噛みするだけだった。

「・・・【えいえんのひょうが】！！」

ギ　シ　ィ　！　！

やって来たディースがマグマを止め、被害を一件だけで食い止める。

大したことのない量の為か、それだけでマグマは停止した。

アル達の方を見ると、あちらも何とか全ての流れ出たマグマを止めたようだった。

村へと襲ってきていたマグマはこれで全部らしい。

「・・？」

老人を背負い、小さな女の子を抱え、杖の上で安堵したナギは自分の頬に何か冷たい物が当たった事に気付いた。

「これは・・・雪？」

気が付くと火山の山頂から上がっていた噴煙は姿を消し、蒼い飛竜がこちらへ向かって飛んで来ていた。

辺りにはこの地方ではまず降る事の無い小雪が舞っている。

「おお・・まさに・・竜の神さまじゃ・・」

「やはりわしらを助けてくださった・・」

それが「紅き翼」の一員であるとも知らずに、老人達は奇跡を起した飛竜を仰ぎ見て祈りを捧げるのだった。

第五章　9、宣誓

「相棒、大丈夫か？」

「駄目。めっちゃ身体痛い・・」

かつて竜変身を行った時よりは幾分マシなものの、身体中が悲鳴を上げるのはあまり変わっていなかった。

今はかろうじて歩いても問題ない程度だ。

俺達はチェクさんの家の前に集まっていた。

目前まで迫ったマグマを見て諦めていた老人達は、それを見事に食い止めたナギ達に心からお礼をしていたのだった。

竜変身に関しては伏せている。噴火を止めたドラゴンが実は俺だなどと言っても信じないだろうし、信じられても後々面倒そうだからだ。

「本当に、ありがとうございました。あなた方へのお礼はこのくらいではとても言い尽くせませぬ」

チェクさんがその小さい身体で深々と頭を下げる。

「いいってことよばぁさん。少しは生きてるって実感できてるだろ？・・・まぁ家一軒だけ焼けちまったけどな。」

ナギが少しバツが悪い感じであわせる。

「いえ、村人に被害が全く無かったのです。家くらいなんの問題もありませぬよ。」

「そう・・か。」

すると人垣からナギが助けた女の子が近寄って来た。

「あの・・赤毛のお兄ちゃん。」

「ん?」

「その・・おばあちゃんと私を助けてくれてありがとう!」

女の子はそう言ってペコっと頭を下げた。

「・・・おう!怪我とか無くて良かったな。」

そう言ってナギは女の子を頭をくしゃくしゃっと撫で、笑顔を取り戻したようだった。

その後、俺達はチェクさん達のお礼もそこそこに元ディースさんの家へとやって来ていた。

あの場では俺達にお礼を言う老人達で埋め尽くされて少し居心地が悪かったのだ。

「すみませんディースさん。俺の力が及ばず・・」

洞窟から村への通り道にあったディースさんのログハウスは焼け落ちて跡形も無い。

「あはは。いーのいーの。リュウちゃんが謝ることなんて全っ然ないじゃない。家なんてまた建てればいーのさ。」

「はぁ・・。」

あっけらかんと言うディースさん。本当に大したことではないと思ってるようだ。

「いやー、それにしてもリュウちゃんが「龍の民」の生き残りだったなんてね。気付かなかったあたしも耄碌したもんだわー。年かしら？」

「ねーちゃん、「龍の民」ってなんだ？」

ナギが頭上に思いっきり？を出して訪ねる。

「そうさね。ナギちゃん達が知らないのも無理ないか・・」

そう言って少し顔を伏せるディースさん。

他の面々も興味津々なようだ。

「リュウちゃんはね、かつて旧世界に居た「龍の民」の生き残りさ。

「龍の民」は強大なドラゴンへの変身能力を持った一族でね。・・・今はもう滅んだはずだったんだけど。」

へー、ようやく俺の出自が明らかに・・まぁ居た村が「ドラグニール」だったし自分の見た目からそんなとこだろうと大体見当は付いてたけどね。

「ただ・・さすがに火山の噴火を止められるほどの力は無かったはずなんだけどね。」

ふーん?

「となると、リュウは突然変異か何かでしょうかねぇ?」

「どっちでもいいさ。リュウは俺達の仲間だ。そうだろ?」

全員がそうだと頷く。なんだろうこのこそばゆい気持ちは。

「ま、いいわ。あんた達のおかげでこの山もしばらくは大丈夫そうになったし、あたしはまたここでぼちぼち暮らすことにするわ。今度こそあたしの料理を完璧なものにしないといけないしね!」

全員顔に縦線が・・

「あー、それなら誰も居ないところでお願いしますね。」

「ちょっと!リュウちゃんそれって何気に酷いんじゃ・・・ない!」

バシッ!

「いっ!!!」

俺の背中を叩くディースさん。

人が全身疲労で碌に動けないのをいいことに・・

するとディースさんがちょっと耳に寄せて

（リュウちゃん、もし「龍の民」について詳しく知りたくなったらあたしの所へ来な。少しは教えたげるから。）

そう囁いた。

「はぁ・・まぁじゃあその内に。」

気になることはなるけど、別に急ぐ必要もないし。

「さてお前等！俺は今回、決めたことがある。」

「・・えっといきなり何を？」

唐突にナギが全員に向かって真剣な眼差しで言う。

「これからの俺達「紅き翼」は・・人助けをする！」

「「「「「？」」」」」

「こんな理不尽に人が死んでいいなんてことはねえ！今回のばぁさんみてぇに諦めてるやつだろうと俺達で救える範囲はできるだけ手

を差し伸べてやりてぇんだ！とにかく助ける！それが目標だ。」

「「「「「・・・」」」」」

「だからこれからはそう言った依頼を優先して受けることにする！もちろん依頼でなくても俺達にできることなら全部やる！異議のあるヤツは居るか？」

「リーダーがそう言うんならいいんじゃね？」「俺っちも文句はねぇぜ。」

「ふふ、私もいいと思いますよ。」

「ワシもじゃ。」「もちろん私も賛成だ。」

「よし、ならこれから俺達は新生「紅き翼」だ！気合入れていくぜ！」

「「「「おー！！」」」」

なんという妙なテンション。しかし意外とノリノリな自分に気付く。

「へー、随分とやる気になったじゃない？ナギちゃん。」

「おっとそうだった。蛇のねーちゃん、今回はあんたに随分と世話になっちまったが、次に会う時までにゃ俺はあんたの「大魔道士」を超えてやらあ！」

ビシッ！とディースさんに指をさして宣言するナギ。気持ちはわかるけどそれはやめれ。

「ふーん。言うじゃないかナギちゃん。でも、その二つ名は別にあたしが自分で名乗ったんじゃないよ？周りが勝手にそう呼び出したのさ。ま、あたし自身も気に入ってるけどね。」

「へっ、なら俺も周りにあんたに負けない二つ名で呼ばせるようになってやるさ。んー・・あんたが呪文６００個使えるってんなら・・俺は「千の呪文の男」になってやる！どうだ？」

「は、自分で名乗ってちゃ世話無いよ？ナギちゃん。」

「うるせー、そのうち周りに認めさせるさ。ぜってーそうなってやっから覚えてろよ！」

「はいはい。期待せずに待ってるさ。」

（ひょっとして俺、結構貴重な瞬間に立ち会ってるのかも知れん・・。）

「どした相棒？」

「ん？まぁ一応大まかにやる事も決まったし、いいんじゃねーかな？」

「だな。」

俺達は新たな志を胸にヨギの村を後にするのだった。

続く

第五章　9、宣誓（後書き）

5章終了。

読んでくれた皆様に感謝を。

第六章　1、趣味

「うーし、この辺でちょっと休憩すっか。」

「やれやれ。年寄りに長旅はキツイの・・」

「ゼクトさんそれ本気で言ってます？」

「まぁまぁリュウ。ゼクトは老人なんですからもっと労わらないと。」

「俺っちにゃ一番年下に見えるぜ・・」

ナギの決意も新たに、俺達「紅き翼」は次の目的地へと移動していた。

「悠久の風」は確かに大きな組織ではあるが、魔法世界全てを完璧に網羅しているというわけでもない。

直接的に内情を知られる事を嫌っている国も多いのだ。

今は「悠久の風」があまり関与していない国がいくつか在ると聞き、ナギの提案でそちらに向かっている。

大体はメガロメセンブリアから見てヘラス帝国よりのさらに南の方だ。

ナギがその案を言った直後、調べる間もなく出発したのでどんな名

前の国があるのかすらわかっていない。

正直この見切り発車ぶりはどうかと思うが、まぁこれはこれで。

多少小競り合いはあるにせよ、まだこの時代はそこまで大きな戦争などは起きていないらしいから比較的移動は楽に出来る。

ただ、連絡飛行船の類は通っていないらしく、またしても徒歩だった。

「リュウ！近くに川があるみたいだぜ！見に行かねーか？」

パパっと辺りを見てきたナギが言う。

「川？」

（川・・ねぇ。）

忘れかけていた趣味魂がちらりと頭をよぎる

「おう、結構広いみたいだぜ。あっちだ。」

「相棒、俺っちも行くぜ！」

ボッシュを肩に乗せ、俺はナギと共にそちらの方向へと向かった。

「おー、こりゃ綺麗な川だな。詠春達も呼んで来ようぜ！」

目の前には広大な川が流れていた。

水の透明度は底まで見渡せるほどで、所々に中州があり、少し上流に目を向けると小さな滝のようになっている。

魔法世界だけあって見た事もないような魚も居る。

今居る川原以外は森の部分が多いがジャングルというほどでもない。

中々の景観だ。

「・・・ふ・・ふふ・・うふふふふふ。」

「ど、どうした？リュウ？」

「相棒、なんか怪しいぞ？」

沸々と趣味魂に火が灯る。

目の前には大きな川、そして優雅に泳ぐ魚達。

これを見過ごすことなど・・・俺にはできない！

「出ろおぉぉぉ！！ガンダァァム！！」

「「！？」」

パチン！

指を鳴らすと

ヒュパッ！

掲げた俺の手には釣り竿が握られていた。

「なんだぁ！？」

「なんだリュウ、釣りやんのか？」

「くくく・・今日の昼飯は焼き魚に決定じゃあ！」

諸君俺は釣りが好きだ。

ゲーム・漫画・カラオケとインドア多数な趣味の中にあって唯一のアウトドアな趣味だ。

大学の休みは長期間であったので、マイロッドを持ってよく遠い釣り場まで泊まりでいったものだ。

この身体になってからは釣りをする機会がなかったが、こうもあからさまに釣って下さいと言わんばかりの魚達が目の前に居たのでは釣らない方がむしろ失礼だ。

そしてこんな事もあろうかと、実は京都に滞在していた時に釣り竿

を購入していた。

流石に時代が時代なので小物やリールの性能自体は俺の居た頃の物より劣ってはいたが、金に物を言わせてそれなりの物を買っていたのだ。

趣味の出費に糸目は付けぬ！

ヒュパパッとドラゴンズ・ティアから針やら餌やら買っておいた必要な物を取り出すと、

「・・・とうっ！！」バッ！

中州のよさげな足場を一瞬で看破し、そこへジャンプするのだった。

しかし元々の趣味が釣りと言うのもブレスオブファイアの主人公が５以外は全て釣りを趣味にしていると言うのも、全く何の因果か。

「・・・取り合えず詠春達呼んでくるか。」

「お、おう。」

その姿を呆れるようにナギとボッシュが見ていたとかなんとか。

「くはぁぁぁ、たーのしーーーーー！！」

まさにスーパーハイテンション！

川はそれはもう入れ食いだった。

他に釣りをする人間など居ないのかちょっと餌を垂らすだけですぐに食い付いてくる。

釣りと言えばひたすら待つのもいいが、やはりバリバリ釣り上げるのが快感だ。

「ありゃ？・・・もう一杯か。」

一応かなり大きめな桶を用意しては居たが、気付いたら中には大量の魚が居た。

ヤマメやアユに似た魚から見たことも無い派手な色彩の魚など、文字通りの大漁だ。

「ふいー。うんまぁこんなもんだろ。」

一通り興奮も冷めた所で川岸に目を向けると、ナギ達が焚き火を囲んでいた。

ふとナギと目があう。

「リュウー！気が付いたかー！釣れた魚こっち持って来ーい！」

全っ然気付かなかったぜ。

「了解ー！今行くー！！」

と、竿をしまおうと思った時、唐突に閃いてしまった。

「今ポケットに入っている小銭を餌にしたらどうなるのだろう？」

と。

ブレスオブファイア３ではコインを餌にすると、ある特殊な魚が釣れたりするのだ。

（ひょっとしたら・・あーイヤでもそんなまさかね・・）

と、葛藤しつつも試しに、と針にコインを括り付け、川へ投げ入れて見るのだった。

～数分後～

（・・・まぁ、ないよな。）

ですよねーと思いつつ竿を引こうとした瞬間

クイッ

「！！」

手応えがあった。

（まさか・・本当に!?）

俺は慎重かつ大胆にリールを巻き上げる。

段々と魚影?が大きくなるにつれてそれが人型を取っているのがわかる。

ちょうど手前1メートル程まで接近したとき・・

ザバァッ!!

「いやー参りましたわ。わての負けです。まさか正規のコイン餌にするとはなぁ。してやられましたわー。」

そう言って、水の中から商人の格好をした魚人が頭を掻きつつ現れた。

「おいリュウ、なんだソイツ?」

「ほう・・魚人ですか。これは珍しい・・。」

「あまり美味そうには見えんの。」

「ゼクト、その感想はちょっと・・」

「わては「海人」やで。魚人とはちゃいます。改めて、マニーロ商会のマニーロってもんや、よろしゅうな。」

「はぁ・・」「お、おう・・」

しかしまさか本当に釣れるなんてねぇ。

ブレスオブファイア3ではコインを餌にこの海人「マニーロ」を釣ることができる。

「マニーロ」は釣った魚をなかなか貴重なアイテムと交換してくれるキャラで、様々な釣り場に姿を表すのだ。

（マニーロって商会の名前なんだ。てことはこの人創始者なのか？）

なんかよくわからん。

「あんさん達はわてら「マニーロ商会」って知ってまっか？」

「いや、全然？」

軽く顔を横に振るナギ。

「そうでっか。ほなら説明させてもらいます。わてらマニーロ商会は別名「水場の商人（あきんど）」言いましてな、魚を通貨に色んな便利なモンを取引しとりますのや。」

「へー。」

あーなんかその辺は想像通りだ。

「こうしてそちらのぼっちゃんに釣られてしもたのも何かの縁。良かったらその魚とわての商品と何か交換しまへんか？」

「・・どうする？釣ったのはリュウだからお前に任せる。」

ナギはそう言う。他のメンツを見るが全員同じ意見のようだ。

「あー、じゃあ今これだけある内で交換できそうな物を見せてもらえます？」

昼飯用の食っても大丈夫そうな魚を除いた分を見せてみる。

「よっしゃ、じゃちょっと待っとってな。」

そう言ってマニーロさんは俺の釣果を吟味し始めた。

「いやー、こりゃうめーなー。」

「うむ、こうして塩を振るのみというのも乙なものじゃな。」

「ほらボッシュ君、これでどうだい。」

「お、わりぃな兄さん、わざわざほぐしてくれてよ。・・・おほっ、うめぇ。」

「ふふっ、あちらはまだ終わりそうにないですねぇ。」

「ふーむ・・・これは・・いや待て・・・」

「・・・あの、まだですか？」

「もーちょい待っとき！短気は損気やでぼっちゃん。」

俺の後ろではみんながホクホク顔で焼いた魚を頬張っている。

俺は未だに俺の釣果と自分の持ち物を見比べているマニーロさんに待たされていた。

「・・・よし！やっぱこれやな。ぼっちゃん、決まったで。」

「はぁ。ようやくですか。」

マニーロさんが差し出してきた物は一振りの剣だった。

「ぼっちゃんにはちょいと大きいかも知れんけど、まぁ見た所タダモンやなさそうやし問題ないやろ。」

「・・？これは何ていう剣なんですか？」

実は手持ちのスクラマサクスが安物だったせいか、戦いや修行やテラブレイクのせいでダメージを受けていて刃こぼれが酷いのだ。

タダで剣を貰えるならまさに渡りに船というやつだ。

「これは通称「カッツバルゲル」言うてな。由来はようわからんが旧世界はドイツだかっちゅう国から流れてきたって噂のワザモノやで。」

「へー、これが。」

「カッツバルゲル」自体はブレスオブファイアの装備品にあったから知っている。スクラマサクスより攻撃力の高い剣だ。

「他には交換できそうな物はなかったんですか?」

「そうやなー・・実は1個だけあったんやけど・・」

「?何か問題でも?」

「あー・・実はコッチはもう予約入ってるんですわ。この先の「フォウ帝国」で何やら武器を欲しがっとるようやってな。」

「えぁ!?フォウ帝国!?この先にフォウ帝国があるんですか!?」

「なんやぼっちゃん知らへんのか?こっから西に「フォウ帝国」、東に「ウィンディア」、南東に「フーレンの里」っちゅう国があるんやで?」

「ウィンディア!?フーレンの里!?」

なん・・だと!?

ブレスオブファイアの地名が集合しているじゃないか!

「なんやそんな驚くことかいな？・・ああ、ぼっちゃん達は旅人さんやったか。ほな知らんのも納得やな。」

ま、まあいい。取り合えず今は・・

「えーと、わかりました。じゃあ取り合えずそのカッツバルゲルとこれら交換ってことで。」

「お！おーきに。ぼっちゃん御目が高いなぁ。将来大もんになるで！」

「あはは。流石商売人ですね。」

魚と剣を交換する。剣は刀身１ｍ弱の両刃で、かなりずっしりとした重量感だ。

「ほな、わてはこの辺で失礼しますわ。もしまた「マニーロ商会」とコンタクト取りたくなったらこれつこうてや」

そう言って金ピカのコインを渡された。

両面にマニーロさんのような魚人がデフォルメされた絵柄が描かれている。

「？これは？」

「今回みたいなドラクマ通貨に掛かるのは、わてのような物好きだけやで。そのコインなら他のもんでも食いつきよるさかいな。」

「え？でもいいんですか？これ貴重なんじゃ？」

かなりの金ピカだしいいのか？こんなのヒョイっとあげて

「えーてえーて。まさか正規の通貨を餌にするヤツがおるとは思わへんかったからなー、珍しい縁ってやつの記念や。」

「そうですか。じゃありがたく貰っておきます。」

心が広いなーマニーロさん。

「うんうん、子供は素直なんが一番やで？ほな、わてはもう行きますわ。まいどー！」

バッシャァンッ！

マニーロさんは川へと飛び込んでいった。

俺は貰ったコインをためつすがめつすしながらみんなの方へ戻る。

既に焚き火は跡形も無くなっていた。

「おやリュウ。あまりに遅いのでもう全部食べてしまいましたよ？」

「わりぃな相棒！」

「は！？マジすか！？」

何俺メッチャ腹減ってんのに！？

「おめーらその辺にしとけ。ほらよ、リュウ。」

そう言ってナギが差し出したのは串に刺さった焼き魚！

「まだあったけーから早く食っちまえ。」

「ナギ、もう少し引っ張らないと面白くないじゃないですか。」

「そうだぜナギっこよぉ。」

こいつら・・

「はっ、まーあれだ。腹減って倒れられても迷惑だからな。」

「うう・・ありがとうナギ。」

ナギのツンデレぶりとアル・ボッシュの嫌がらせぶりに心の中で各人の株価を変動させつつ、俺はまだ暖かい魚を頬張るのだった。

第六章　ＳＯＬ　～幕間２～

～よくある修業後の一幕～

「そういやリュウ、あのカードは一体何だったんだ？あん時のドラゴンもよくわかんねーし。」

「あー、何て言えばいいやら・・えーと・・使い魔？」

≪ほう、我を使い魔と呼ぶか・・豪気なことだな龍の御子よ。≫

≪へぇー、サイフィスはともかく私を使い魔ねぇ・・リュウ、ちょっと態度デカイんじゃない？≫

ポケットが！ポケットがなんか熱くてゴゴゴゴって聞こえる気がする！

「おわぁ！ごめんなさい！」

「？何いきなり謝ってんだよ？」

「あーいやその・・」

≪ラグレイアよ、我に対してその態度は頂けぬな。≫

≪あら、ごめんあそばせ。風竜さんはもう少し心が広いものだと思ったのだけれど。≫

≪ぬ・・・そう来たか。≫

≪ふふっ。≫

（なんかサイフィスいい包められてるし・・）

「で、どうなんだよリュウ！」

「ああ、これこれ。」

俺は2枚のカードをポケットから取り出してナギ達に見せた。

「こっちが風竜サイフィス。で、こっちが火山で契約した炎竜ラグレイア。」

「ほう、パクティオーカードじゃな。リュウはパクティオーできないと思うとったがのう。」

「あー、俺ってディースさんが言ってたように、龍の民ってやつらしいんで、なんかその地の竜の神様となら契約できるみたいなんですよ。」

「ふふ、全くリュウは色々と規格外なのですね。」

「あーじゃああん時リュウが変な石に向かってぶつぶつ言ってたのは・・」

「そ、契約するから色々話を聞いてた。」

ようやくあの時の事を弁解できたか。

「そうだったのか。私はてっきりリュウ君の精神がやられてしまったのかと・・」

「俺っちも相棒がおかしくなっちまったのかと・・」

「私は気付いてないフリをした方が面白いからと・・」

「ちょっと待ったぁ！何最後の！？わかってやってたん！？」

「ふふっ、当たり前じゃないですか。」

「・・・」

憎たらしいくらい素敵な笑顔ですね

「リュウ、アルに何言っても無駄だぞ。」

「・・・ですよねー。」

最近「紅き翼」の力関係が俺の中で確立してきました。

～まさかのラカン！？～

マニーロさんと出会う2～3日前、俺達は例によってよさげな渓谷で昼食を取っていた。

以前俺が作ったカレーが思いのほか好評だったのか、また作ることになったのだ。

「あ、ナギ馬鹿！お前細かく切りすぎだ！」

「あー？俺にこんな作業なんざ向いてねーんだよ！」

「ったくいいか？人参やじゃがいもはほどよく一口サイズだ。たまねぎは涙対策を忘れるなよ。」

「へいへい。」

「詠春よ、火を起したぞ。」

「助かります、ゼクト。おいしく作るポイントは、じっくりと弱火でたまねぎを炒めることなんですよ。」

「ふふふ、知ってますよ詠春。あなたのような人を日本では「カレー大臣」と呼ぶそうですね？」

「「カレー大臣！？」」

「ふむ、偉そうじゃな。」

「ああ、負けたぜ詠春。これからお前はカレー大臣だ。」

「うむ、全て任す。よきに計らえ。」

「嬉しくないなー。」

「いやいやタンマ。みんなちょっと待て。」

ドラゴンズ・ティアから色々な道具を取り出しつつ俺は突っ込んだ。

なんだこのどっかで見たことあるようでないようなやり取りは・・

確か・・ラカンの遭遇シーンだったか?作ってるのは鍋じゃなくてカレーだけど。

(いやでもおかしい。ナギはまだ10歳だしラカンと出会うのはまだ先だった気がする・・)

だが俺の心配をよそにつつがなく調理は進んでいく。

こういった開けた場所でキャンプのように作る料理はやはりカレーに限るとは思うが。

~数十分後~

「よし、できたぞ!各自好きなだけよそえ!」

「「「「「おー!」」」」」

流石カレー大臣。香り立つカレーのなんとも見事な出来栄えだ。

「相棒、俺っちの分も頼むぜ。」

「はいはい。」

（うーむ、やっぱラカンは取り越し苦労だったか。）

カレーをパクつきながらほっと安堵した頃、

しかし、ソレは来てしまった。

「はーっはっはっは！食事中失礼！！お前達が「紅き翼」というヤツ等だな！さぁ！俺と尋常に勝負しろ！」

ちょっと離れた崖の上から辺り一帯に騒音のような野太い男の声が響き渡った。

（まさか・・ラカン！？）

そう思って急ぎ声のした崖の方を見ると・・

眩しく光る頭頂部、その後ろにちょんまげのような弁髪を生やし、上半身は服を身に着けておらず逞しい筋肉が顕わになっており、下

には青いだぼっとしたズボンをはいている。
顔は雰囲気的に言えば某ランプの精「ジン」に濃い髭を生やした感じが一番近い。
その男・・否、暑苦しい漢はこちらを見据えて名乗りを上げた。

「俺の名はラ・カーン!!さぁいざ尋常に勝負!」

(おいぃぃ!カーンかよ・・・よりによってカーンかよ!!「ラ」ってなんだよちくしょう!!)

取り合えず大事な事じゃないけど二回言いました。

「カーン」はブレスオブファイア4に出てくるキャラで何度も主人公一向に立ち塞がってはやられる一種のライバルキャラ的存在だが・・・まぁどっちかと言えばバグキャラとかではなくギャグキャラだ。

「なんじゃあれは?」もぐもぐ

「さぁな。アル知ってるか?」むぐむぐ

「いえ残念ながら。」もくもく

「リュウ君、さっきから食べてないようだけどどうかした?」ぱく

ぱく

「うめーぜ相棒？」がつがつ

「あーいやあの・・アレどうすんです？」

「はーっはっはっは！！」↑アレ

「ふむ、見たところ単なる馬鹿じゃな。ボッシュでも倒せるじゃろ」

「いやいやいくらなんでも俺っちにゃ無理だっての。」

「よし、いくんだボッシュ！修行の成果を見せてやれ！」

「おいぃちょっと待てやナギっこ！俺っちは修行ったって僅かな魔法ってやつしか」

「いーからやってみ？」

「だーもう！どうなっても知らねぇぞ・・・魔法の射手・光の１矢！」

パヒューン

ペチンッ！

「ぐ　ぼ　ぁ　っ！」ドシャァ

「「「「「・・・」」」」」

「さって片付けたし行くか。」

「そうじゃの。ナカナカ美味じゃったぞ。」

「ナギ、今度はキチンとした包丁捌きを教えてやるからな。」

「えー」

「ふふ、カレー大臣には逆らえませんね。」

全員なかったことのようにスルーしてるな。

「はぁ・・・まいいや。忘れよ。」

俺は釈然としない気持ちを抱えつつ、みんなについて行くのだった。

「ふ・・・ふっふっふ・・・さ、流石だな「紅き翼」・・だが・・俺は負けんぞ！」

なんて呟きは聞えなかったと思いたい。

第六章　2、労働

ガヤ・・・ガヤ・・・

「おわー・・すげー人だな。」

「ええ、私も知りませんでした。このような国があるとは。」

「リュウ君、あそこに見えるのがその「ウィンディア城」なんだね？」

「多分、マニーロさんはあの場所から東って言ってたからあってると思いますよ。」

「活気があるのは良いことじゃの。」

俺達はマニーロさんの言っていた場所、ウィンディア城へと足を運んでいた。

街中に機械的な物は見受けられるが多くはない。

風車等の素朴な仕掛けの方がどちらかと言えば多い。

民家が建ち並び、商店も数多くある。行き交う街人の顔も明るく、治世が良い事が窺い知れる。

どうしてこんな大きな国が「悠久の風」にあまり積極的でないのか疑問だったが、ちょっと辺りを見回すとなんとなく察しがついた。

ここはほとんどが亜人で構成されている国らしい。

人間は居るには居るが割合的には亜人９９に人間１くらいだ。

確かネギまの大戦の最初の原因というのがその辺りの理由だった気がするし、そこらの理由で非積極的なんだろう。

何やら近くにあるフォウ帝国が武器を集めているとの事で、明るい雰囲気とは裏腹に若干きな臭い空気も感じる。

だがここだけの話、俺にはウィンディア来訪に際して別の思惑もあった。

（ウィンディア城キタ！ニーナは居るのかニーナは！）

ウィンディア城とはブレスオブファイア５以外に必ず在った城の名前だ。ヒロインの「ニーナ」がその城の王女なのが共通事項だ。

（ディースさんがあれほどの美人だったんだから相当期待が持てる！）

もちろん困った人を助けるという目的は忘れていないが不順な動機もある。

あれだ。見た目はこうだけど中身は大学生ですから。

「さって、とりあえず宿探そうぜ！」

「そうですね。これだけの城下町ならいい宿もあるでしょう。」

俺達は取り合えずの宿を探す為に人ごみに入って行った。

ワシャワシャワシャワシャ

シャアアアアア

キュッキュッ

カチャ・・カチャ・・

「で？」

「どうしました？リュウ？」

「何で俺達がこんなとこで皿洗いなんてしてんのかな？」

「そうですねぇ。運がよくなかったのでしょうね。」

「へー。そうかー。アレって運なんだ。」

「そうですよ。たまたまチンピラに割り込まれてたまたま悪口を言われてたまたまナギの虫の居所が悪くてたまたま殴った先が店の中だったというだけです。」

「火山で目標を掲げたときは大物だなぁとか思ったんだけどなぁ。」

「ま、こんなときもありますよ。」

「「こんなとき」の方が多い気がしないでもない・・」

「そこ！手が止まってるアルよ！そんなんじゃいつまで経っても終わらないアル！」

「はーい。」

ここは「山猫亭」と言う。

ウィンディア城下町で評判の美味い店だ。

俺達は今そこで何故か店の手伝いをしている。

今しがたゲキを飛ばしたのはこの店の店長のハオチーさん。

ちょっと太った山猫の亜人で至って良識的なシェフだ。

ブレスオブファイア２のイベントのように客「を」料理するなんてことが無くてそこは安心した。

事の発端は詠春さんが街で貰ったチラシだった。

宿を見つけて部屋を取った後、そのチラシを見てちょうどお腹も空いていたし全員でその店に行ってみようという話しになったのだ。

来店してみると店はかなり繁盛しているらしく、店を取り巻いて長蛇の列が出来ているほどだった。

しばらく待ち、ようやく俺達の番になろうと言う時に、あろうことかタイミング悪く割り込んで来た男が居た。

最初はアルと詠春さんが紳士的に対応していたのだが、男の矛先が俺やナギ、ゼクトさんの方に向かってしまったのが運の尽き。

ガキだ何だとボロクソ言われてイラッと来たのかナギが殴り飛ばしたのだが、その方向が店の中だったのだ。

結果、謝罪だ弁償だなんとかだ、と俺達はこの店でタダ働きすることとなってしまった。

今、俺とアルは皿洗い、詠春さんとゼクトさんがウェイター、そしてナギがウェイトレスをしている。

何か間違った単語が混ざっているが気にしてはいけない。そういう罰なのだ。

もちろん発案者はアルだ。

流石に今回は自分が悪いと思ったのか反発したもののナギは説き伏せられていた。

何故（腹黒）スマイルイケメンであるアルが裏方になったのか疑問だったが、ウェイトレスナギの存在感が凄まじすぎて詠春さんとゼクトさんの存在が霞むほどだった。

これなら表に出ていようが裏に居ようがあんまり関係ない。

ウェイトレスナギはあっという間にその手の評判を呼び、通常ではあり得ないほどの集客効果を巻き起こしていた。

その大半の客がナギ目当ての不順な客だったが、料理の美味さに感動していたし、まさに紛れもない客寄せパンダと言っていいだろう。

元々行列のできる美味い店だったのが、さらに酷い行列ができる事となった。

その日の深夜、店長のハオチーさんとの交渉の結果、予想以上の集客効果で、刑期は3日で勘弁して貰えるようだった。

ハオチーさん的には永久にここで働いて欲しいようだったが流石にそうは行かないので、3日間だけ我慢して働くのだった。

～3日後～

「お前達のおかげでリピーターたくさん増えたネ。最初はどうなるか思たがまさに怪我の功名。感謝してるアル。またいつでも来るアルね。」

「ふふ、こちらこそありがとうございました。実に貴重な機会でしたよ（主にナギの狼狽的な意味で）。今後は暴力沙汰は起さないようナギには言いつけておきますので。」

「俺はそんな趣味ない俺はそんな趣味ない俺はそんな趣味ない・・」

部屋の隅で壁に寄りかかりながら顔に縦線が走っている。

ナギにしては珍しくどんよりな空気だ。

「ナギ、いい加減にせい。とっとと行くぞ。」

「あーあ、ナギっこトラウマじゃねぇの？」

「ま、その内立ち直るでしょ。」

その後、宿へ向かう途中でナギのストレスが限界を超え、危うく俺達は様々な店で賠償活動をするハメになりそうだったことを付け加えておく。

第六章　3、濡衣

3日ぶりに解放された俺達は宿で会議を開くことにした。

無駄にタダ働きをしていた訳ではない。

街で評判の店だけあって様々な人が来るので、情報収集にはまさにうってつけだった。

おかげで色んな話が聞けたのだ。

「さて、この国の情勢だが、やはり私達の睨んだ通り・・」

詠春さんがどこから取り出したのかペシっと教鞭を、これまたどこから取り出したのかいつぞやのキャスター付き黒板に叩きつける。

（まさかまたこれの出番が来るとは思ってもいなかったな）

適当な噂話から物騒な話まで色々仕入れたので、とりあえず聞いた噂をまとめようということだったが・・

「俺っちはミイナちゃんがいいやね。」

「ふふ、なかなかですねボッシュ。しかしエリーナさんも捨て難いと私は思いますよ」

「なっとらんぞナギ。あのチャーハンの方が美味いに決まっとろうが」

「いーや、お師匠。絶対あっちのラーメンの方が美味いね！」

しかし誰も聞いていなかった！

「「・・・」」

駄目だこいつら・・早くなんとかしないと・・

「詠春さん・・」

「リュウ君。どうやら私の味方は君だけのようだ」

詠春さん・・背中が煤けてるぜ。

「がんばりましょう。」

「ああ。」

俺達は誓い合った。

なんとか気が剃れてるやつ等を話の輪に入れて話を進める。

「で、だ。ナギ、この国の王女とフーレンの里の族長の間柄を答えよ」ペシッ

教師姿似合ってるなー詠春さん。

「あー？二人は恋人なんだろ？んで、それを邪魔したいのが「フォウ帝国」」

「その通り。ウィンディア王女エリーナとフーレン族族長クレイ、この二人の婚姻によって二つの勢力は一緒になるだろう。そして、この辺りの覇権を狙うフォウ帝国としてはそれが面白くないというわけだな。」

詠春さんがまとめる。

話の通り、この国の王女とフーレンの里の族長は恋人同士で、近々結婚の予定だそうだ。

この辺りの勢力ではフォウ帝国が一番大きいのだが、ウィンディアとフーレンの里が一緒になってしまえば、帝国を大きく上回ることになり、勢力図は逆転する。

「街の評判を見る限り、このウィンディアは治安も良く、フーレンの里も名前に反して大分穏やかなようじゃったな」

「ええ、それに対してフォウ帝国は皇帝による酷い圧政が敷かれていると聞きます」

ゼクトさんにアルも結構話はわかっているようだ。

「店に来た人の話によると、フォウ帝国は近々戦争でも始めるんじゃないかって話まであるようでしたね」

俺も一応聞いていた話を出す。武器を集めてるってのとも合致するし。

「つまり、今までの話を統合すると、まず間違いなく近いうちにフォウ帝国は行動を起こすつもりだろう。そして最も標的とされやすいのが・・」

「王女エリーナと族長クレイってわけだな兄さんよ」

「その通り。この二人が二つの勢力を結びつけているからな。逆に言えばこの二人をどうにかしてしまえば簡単に分裂させることができる」

「そーゆーことなら見過ごせねぇよな。早速俺達でその二人の護衛をやろうぜ！変な連中が来たら片っ端から潰して、結婚まで持ってけばいいんだろ？」

確かにナギの言う通りかも。

「じゃがそう簡単に行くかの？ワシらには王家と直接会えるようなコネはないぞ？」

「お師匠、まずは行ってみるんだよ！結果が出なきゃそんときまた考えりゃいい。ここでウダウダしてるなんざ性に合わねーし！」

「それもそうじゃな。」

ゼクトさんも意外と武闘派だしなぁ。

「では、二手に分かれるということですね。どのようにわけましょ

うか？」

「はい！俺は王女側がいいです！」

ここで俺登場！男所帯なんだから少しでも華のある方がいい！

族長も大体想像付くし王女の方がきっと色々楽しいだろ常識的に考えて。

「そうですねぇ。この中では詠春とリュウがかろうじて常識を弁えていますから、二人は別々にした方が都合がいいですね。では私とリュウとボッシュでこちら側、ナギと詠春とゼクトで里の方へ向かうということで如何でしょう？」

かろうじてとは失礼な。ていうか自分に常識が無い事を自覚してたのか。

「えー？俺も王女の方がいいな」

ナギよ気持ちはわかる・・・わかるけど、これは譲れぬ！

「ナギ、フーレンと言えば猛者の集まり、その族長ならかなりの強者と思われます。それでも行きたくないのですか？」

「・・そういうことなら話は別だ。いいぜ。俺は里の方へ行く」

さすがアルはナギの性格を熟知してらっしゃる。まぁ確かにあっちはツワモノだろうしな。

「ふふ、ではそう言うことで、詠春もゼクトもそれでいいですね？」

「私はそれでいい」

「ワシもじゃ」

と言うわけで明日は早速ウィンディア城訪問となった。

翌朝、俺達は早くに宿を出て二手に分かれた。

ナギ達の目的地であるフーレンの里はここからだと多少距離もあるし、取り合えずどちらかが一段落付いたら連絡を取ろうという事になった。

で、俺は現在アルとボッシュと城へ向かっている。

「さーてどうやって王女様に会おうか・・」

「おや？リュウには何か考えがあるのではなかったのですか？」

「え？いや別に何も？」

「そうですか。私はあれほど強くこちらを希望するものですから、てっきり何か算段があるものと思っていましたが」

「あーいやその・・」

くそう、まさか王女目当てだとは言えない・・

「ふふ・・リュウもお年頃なんですねぇ」

見透かされてる!!いいからその笑顔やめて。

「あーまぁその・・どうするボッシュ？」

こういう時に便利な相方よ!

「相棒よぅ、話逸らすんならもうちょいやり方ってもんがあらぁな」

どうやら周りには敵しかいないようだ。

「ふふ、まぁそれはいいとして・・どうしましょうか」

「うーん。」

歩いている内にもう城は目の前まで来ている。不思議な事に周りには誰もいない。

あれだけ街に人が居るのに城周辺には全く居ないと言うのもおかしい気がするが。

「こんな案はどうでしょう?まずリュウがドラゴンに変身して、珍しい竜を発見したと王様に献上するというのは」

「却下!」

何でそのイベントを知ってる！それはブレスオブファイア３の序盤
実際にあったイベントじゃないか！

「おや、いい案だと思ったのですが。」

「絶対にノゥ！なら俺よりボッシュの方が」

「おいおい相棒俺っちは見世物じゃねぇぞ！」

「えーでも喋るイタチは珍しいって・・」

「だぁから俺っちはフェレットだと何度・・」

と誰も居ない城の前で漫才をしていると

バンッ！

突如城の門が開き

「いたぞー！！こいつらだ！！衛兵！出あえー！！」

「「「ハッ！！」」」

ドタタタタッ！！

「「「！？」」」

ヂャキッ！！

あっと言う間に兵士に囲まれて、槍を向けられた。

（・・・何この状況？）

取り合えず両手を上にあげる俺とアル。

「えーと・・アルなんかした？」ひそひそ

「まさか。リュウこそどこかでナギのように暴れたのでは？」ひそひそ

「いやいやないない。ていうか昨日までうちら働いてたよね」ひそひそ

「そうですね。ですからこれは間違いなく何かの濡れ衣かと。」ひそひそ

「貴様ら！エリーナ姫誘拐を企てた不届き者だな！我らウィンディア近衛兵の名において貴様らを逮捕する！神妙に縛につけい！！」

なんか兵隊の輪から偉そうな人が前に出てきてそう言った。

「アルどうする？俺は取り合えず大人しく捕まった方がいいと思うけど」ひそひそ

「私もそう思います。気が合いますね」ひそひそ

俺達は大人しく捕まることにした。

「お前達がエリーナの誘拐を企てた者達か。」

目の前に居る凄く偉そうな人がそう言った。

まぁ偉くて当たり前。何しろここは謁見の間、目の前に居るのは王様だからだ。

見た目は人間だが背中に白い羽が生えている。

ここウィンディアでは比較的多い種族、「飛翼族」の証しだ。

厳格そうな顔には深い皺が刻まれており、王冠にマントと豪華な杖というどこからどう見ても王！である。

全身から醸し出すのが神々しさと言うか高貴なオーラというかとにかくそういう雰囲気で、俺の住んでた世界なら、この人が「私は神だ」とか言ったらほとんどの人が信じてしまいそうなほどの威厳がある。

俺とアルは両手を後ろに縛られてここまで連れて来られた。

幸い街中に居た為、カッツバルゲルはドラゴンズ・ティアに収納していたので武器を取られたりはしていない。

ただのアクセサリーと思ったのかドラゴンズ・ティアはそのままだ

ったのでいざとなれば中に収まっているモノでどうにでもできる。
ちなみにボッシュは俺の服の中に潜り込んでいる。

「恐れながら王様、私達はただの旅の者にございます。誘拐などと言う物騒な謀(はかりごと)を企てる道理等ございませぬ。」

何だ。アル結構常識を弁えてるじゃん。

「ふん、白々しい。衛兵！直ちにこ奴らを牢へ連れて行け！」

「ハッ！」

「え！？あの！せめて理由を聞かせてください！ちょっと！おーい！」

俺とアルは兵士に引っ張られ、問答無用で地下の牢へと連れて行かれた。

ガチャーンッ！

「お前ら！大人しくしとけよ！！」

カツカツカツ・・

「さて、妙な事になりましたね」

「そうだね」

「こりゃまた変な事になったなぁ相棒」

うす暗くてカビ臭い。纏わりついてくるような湿気が実に不快だ。

まさに地下牢、俺とアルは手を縛られたまま、狭い石造りの牢へぶち込まれていた。

「取り合えずコレ（縄）ほどこうか」

俺はそう言って腕に力を込めるがさすがに堅い。

「その調子です。頑張ってください」

って、いつの間にかアルの足元には縛っていた筈の縄が！？

「・・・いつの間に」

「これぐらいは常識ですよ」

いやそれ常識外れです。

とりあえずドラゴンズ・ティアからヒュパっと出したスクラマサクスでアルに縄を斬って貰った。

「あー肩凝った」

「さて、先程の話から推察するに、私達は王女誘拐の犯人と間違えられたようですね」

「そうなんだろうね。城の前に居ただけでここまで問答無用ってことは、つい最近何かしら予兆とか犯行声明とかアクションがあったんじゃないかな？」

でなけりゃこんなことするはずないだろう。いくらなんでも。

「そうですね。実際に王女誘拐等ということをしでかして、今一番得になる者と言えば「フォウ帝国」しかありませんね。」

「となると、事前のヤツってのは結婚を妨害する為の脅しかなにか・・」

「または、ワザと警戒させるように仕向けたのかも知れません。警備が厳重になっている中で誘拐が達成されれば王家の権威も失墜し、市民の不満も高まるでしょう。エリーナさんの人気は凄いですから」

「そう言えばアルはエリーナ王女知ってるんだっけ？どんな人？」

実に気になるね。

「それはもうお美しい方だと思いますよ。リュウが会ってみたいと思うのも無理ないですね。第二王女ミイナさんの写真も一緒に拝見しましたが、私はどちらかと言えばエリーナさんの方が。」

「俺っちはミイナちゃんの方がいいけどなぁ。」

「ていうかお前も知ってるのかよ。ちくしょー俺だけ見てねーのか。」

「残念だったなぁ相棒。」

「ふふ、まぁそのうち見る機会があるのではないですか？」

「くそぅ・・・そう言えば王女ってその二人だけ？」

「そのようですね。何か気になることでも？」

「あーいや何でもない。」

やっぱりというか・・情報収集時に気付いてはいたけども。

まさか「ニーナ」が存在してないとは。

ショックだ。

しかしなんか気付いたら世間話に・・実際のところ牢に捕まっていることなど意にも介していない俺とアルとボッシュである。

コツ・・コツ・・コツ・・

「・・リュウ。」

「うん、誰か来たね・・。」

俺とアルは瞬時に感覚を鋭敏にする。

足音からするとハイヒールだ。つまり女性、こんな所に一体誰が何の用だろう。

だんだんと明かりが近付いてくる。

その明りは俺達の入れられている牢の前で止まった。

「こんにちは。旅人さん達。いきなりこのような事になってごめんなさい。」

その声の主を見て、俺は驚愕する。

なんともエライ美人がそこに居た。

第六章　4、王女

正直なところ、俺は目の前の女性に見とれていた。

長い金髪を後ろで纏め、清楚で派手すぎないティアラを付けている。

青を基調としたシックなドレスに胸元にはペンダント、そして背中には大きな白い翼が生えている。

高貴なオーラと相反するように人懐こさを感じさせるその笑みは、見るもの全てを魅了すると言っても決して過言ではないだろう。

「私はエリーナ・ウィンディア。この度のご無礼、父に代わってお詫び致します。」

こちらの驚愕を華麗にスルーし、そう言って頭を下げるエリーナさん。

「あーいえその・・と、取り合えず顔を上げてください。」

「リュウ、声が上擦ってますよ？」

いやこれは仕方ない。だってこの人ものっすごい美人なんですもの。

「本当なら一刻も早く解放してさしあげたいのですが・・」

「いえいえ、ご丁寧にありがとうございます。私はアルビレオ・イマ、こちらはリュウと言います。何故王女様自らがこのような場所へ？」

エリーナさんを目の前にしてもなんら普段と変わらないアル。

「父が旅人の方を話も聞かずに牢へ入れてしまったと聞きましたので。原因は全て私にあります。本当に申し訳ありません。」

そう言ってさらに頭を下げる王女様。

「いやいやそんな、ホント顔を上げてくださいエリーナさん。」

すげー何かこっちが悪い事したような気になってくるから。

「エリーナ様、私達は大丈夫ですからお顔を上げてください。良ろしければ、このような事態になった原因というのを教えていただけませんか？」

おーそうそう、俺もそれが聞きたかった。

「・・・実は二日前、私とクレイ・・婚約者との婚約を破棄しないと私に不幸が起きるだろうと脅迫めいたことが書かれた手紙が届いたのです。・・本来ならばそのような手紙など早々に処分されるのですが、運悪く父がそれを最初に発見してしまい・・悪戯にしては悪質だと腹を立てて警備を厳しくしてしまったのです。」

まぁ一応納得・・かな。理由も聞かずに逮捕投獄はやりすぎだと思うけど。

「なるほど。事情はわかりました。エリーナ様はその手紙の差出人に何か心当たりはおありですか？」

「いえ・・この城にはそのような悪戯をする人間はおりません。ですが、私とクレイとの婚約を良く思っていない輩が国の外に居ることは存じております・・」

そう言って少し暗い顔をするエリーナさん。

「わかりました。わざわざありがとうございます。それで、私達は今後どうなるのでしょう？」

あーそれも聞いておかなきゃ。

「恐らく手紙の真犯人が捕まらない限りはこのままになると思います。こればかりは私ではどうにも・・」

マジかー。どうしよ・・

「ふむ・・」

「アル、何かいい案ある？」

「そうですね・・エリーナ様、ここの地下牢は随分と湿気が多いようですが、近くに水脈か何かが通っていますね？」

「・・・よくお分かりになりましたね。ここは下水道として掘られた空間を改良して作られた地下牢ですから、奥にその名残が残っています。」

・・・なるほど。

「ふむ、リュウ、脱獄しましょう。」

「あー、やっぱり。でもエリーナさんの方は大丈夫かな？」

正直こっちを放置するのは不安が残る。

「これほど厳重な警備ならフォウ帝国と言えども易々と入り込めないでしょうし、どのみち顔の知られている私達では取り付く島もないでしょう。」

「まぁ確かにね。ナギ達と交代した方がいいかも。」

王様も兵士さん達も少し頭固そうだったしなぁ。

「エリーナ様、もしこれから起こる事を見逃して頂けるのでしたら、私達がその手紙の犯人を捕まえてご覧に入れますがいかがですか？」

「まぁ・・本当に？」

「ええ、私は嘘は申しません。神に誓って。」

スゲェ。よくもまぁそんな嘘八百が出るもんだ。

「フフッ、大丈夫ですよアルビレオさん。あなた達の目を見れば、悪人でない事くらいはわかりますから。」

まるっとお見通しですか。流石です王女様。

「これはこれは、一本取られてしまいましたね。」

ハッハッハと笑うアル。どこまで本気かわからんね。

そうこうしているとエリーナさんが持っていた鍵の束で牢を開けてくれた。

「えと・・いいんですか?勝手にこんな・・」

「ふふっ、私は何も見ていませんわ。あらまぁ大変、鍵が開いてますわね。どうしましょう。」

わざとらしいとぼけた演技も実に美しいです。

「跡地はこの奥にあります。かつての下水道とは言え、長年使っていないので何が出るかわかりませんわ。」

「問題ありませんよ。リュウ、行きましょうか?」

「了解。・・あーあの・・エリーナさん。」

「なんでしょう?リュウさん?」

スゲェ優しげな微笑だ。アルとは２７０。違う。マジ惚れるねこれは。

「あの・・・クレイさんとの結婚、絶対に上手く行きます。俺が保証します。だからその・・あー・・月並みですけど俺たちを信じていてください。」

俺は心の底から本音を言った。ちょっと恥ずかしいけど。

「ありがとう。もちろん、信じるわ。あなたの目も嘘を付いていな

いもの。」

俺は今回の件は心底上手くいって欲しいと思っていた。

何故なら「エリーナ」と「クレイ」の話はブレスオブファイア４の根幹に位置する話であり、そしてその結末は・・・悲劇だったからだ。

何とも後味の悪い話だった。

本来はそこに関与しているのが他ならぬあの「ユンナ」さんだったが、ここではもうあの人は居ない。

物語では開始当初から捕われの身だったエリーナさんがこうしてまだ城に居る。

ならば、あのような結末には絶対にしたくない。そう思っていた。

俺とアルは牢屋を出て、奥にあったカモフラージュの石扉を開けてもらう。

この存在を知っているのは王家の者のみだそうだ。

そんなことをひょいひょい教えて良かったのか今更だが聞くと、鍵

もそうだが最初から俺達を逃がすつもりだったから構わないとのことだった。

石扉は牢屋側からしか開けられないらしい。

そして俺達は城の地下の旧下水道跡地を進む。

トンネルに水の通り道と脇に人が通れる通路、とよくある下水道のイメージそのまんまだ。

唯一違うのが本来水が通っていたであろう場所がほとんど干上がっていて、剥き出しの石が見えていることぐらいだ。

結構歩いているが全然出口が見えず、思いのほか長い。

「やれやれ、かなり長いようですね。」

「まぁあのまま牢屋に居るよりはマシだし。」

「相棒、俺っちは湿気多いトコは苦手だぜ。」

心なしかボッシュが弱ってる。

しばらく歩いていると不意にアルが立ち止まった。

「・・リュウ、何か妙な気配を感じませんか？」

「気配？」

アルに言われ、目を閉じて回りに感覚を巡らせると

≪・・・てる？・・・こえ・・！≫

「！」

「どうかしましたか？リュウ。」

「いや、これは多分・・」

周りを見回してみる。

すると、ちょっと先の通路の壁にヒビが入っているのが目に付いた。

というかそれ以外に怪しいポイントなどなかったのだ。

（・・・アレ・・かなぁ？・・）

「ちょっと待ってて。」

「「？」」

アルとボッシュを置いてそのヒビの辺りへ来てみる。

≪聞えてるでしょ！！いいから返事しなさいよ！！≫

壁の中から何かすげー気の強そうな声が・・

「あの・・竜の神様か何かでしょうか？」

≪あんた！龍の御子でしょ！いいから早くこの壁砕いて！≫

（なんなんだ？）

一応竜の神さまであろう事は予測できるので言うことを聞く。

「・・よっ！」バガァ！

ヒビの入った壁を蹴り砕くと、そこには僅かな空間と墓石のように立った細長い岩があった。

≪ふー、ありがと。まさかこんなとこに龍の御子が来てくれるなんてね。あたしの運も捨てたもんじゃないわ！≫

（神様？の癖に運とか・・なにこいつ）

なんかサイフィスやラグレイアとは感じが全然違うなぁ。

「えーと、なにゆえこんな壁の中に？」

≪知らないわよ。随分前に埋め込まれてそのままよ。全くあたしをこんなとこに閉じ込めといて忘れるなんてどうしてくれようかしら≫

「はぁ。」

忘れられた土地神とかそんな感じだろうか？

「あの・・契約とかするんですか？」

石に向けて恐る恐る聞いてみる。

≪契約？・・あー・・そうね。うん、今まで暇だったし外を見て周るのも悪くないわね。≫

あれ？何この反応。もしかしてやぶ蛇だった？

≪いいわ。あなたと契約してあげる。このあたしがそんなこと言うなんて、あなた一生分の運を使ったかも知れないわ！感謝しなさいよね！≫

「・・・はぁ。」

なんか調子狂うな。

「まぁいいや。じゃあいきますよ？」

≪いいわよ！どーんと来なさい！≫

俺は熱いのを我慢するべく気合をいれて石へと掌を近づける

ボッ！

「！！あっっちゃーー！！！」

掌に熱を通り越していきなり火が！

『リリフッ！』パァッ！

すぐに火を消して回復魔法で火傷を治す。

「はぁ・・はぁ・・ふう、てめぇ！なんて事すんじゃぁ！！」

≪あっはは！ごめん！ちょっと気合入れすぎちゃったわ！≫

なに笑ってやがんじゃこのぼけぇ！

と、口から出る前にひらひらと頭の上にカードが落ちてくる。

表面には翡翠色の東洋の龍の絵が描かれていた。

心なしか龍の顔が楽しそうに見える。

「で？あんたももしかして名前ないの？」

≪そうよ！よくわかってるじゃない！だからあなたに名前を決めさせてあげるわ！光栄に思いなさい！≫

うわーなんかこの態度むかつく。

「んで？じゃあ属性は？」

≪水よ水！≫

やっぱ水なのかよ・・・水属性ってもっとこうおしとやかな感じだろ常識的に考えて。

（まだラグレイアの方が大人しいな・・）

≪ほら！早くしなさいよ！龍の御子の癖にこのあたしを待たせるなんていい度胸じゃない！≫

（くっ・・なんなんだコイツ・・）

わかった。コイツの気の強さはアレだ。

某世界を大いに盛り上げるとか言ってる団長そっくり。

水なら本当は「ガッド」にしたかったがもうどうでもいい。

「ハルフィール。お前の名前はハルフィール。決定。文句は聞きません。」

≪・・ふーん、何よ結構いい名前じゃない。なんかしっくりくるわ。≫

そうかい。やれやれ。

≪ま、よろしく頼むわね。くれぐれもあたしを退屈させないように！≫

俺は名前の刻まれたカードをポケットにしまうとアルとボッシュのもとに戻る。

「リュウ、安心してください。街で評判の医者の情報なら仕入れてありますから。」

「相棒・・俺っちこんな時どんな顔すればいいのかわからんぜ・・」

笑えばいいんじゃね。

「ていうかもうそのネタはいいから。」

以前説明しただろうが。

さらに続く道をしばらく行くと、ようやく外の明かりが見えてきた。

出口はどこかの森？の小高い丘の影になっていて、これは流石に誰も気付かないだろう。

「ようやく外ですか。さてここはどこでしょうねぇ。」

「うーん・・さすがにわからんね。取り合えずこっちは何かありそうだってのがわかったし、ナギ達に連絡取ろうか？」

「そうですね、それがいいでしょう。」

アルはいつの間に契約していたのか、ナギとのパクティオーカードを取り出して念話をするのだった。

第六章　5、族長

連絡はすぐに取れ、どうやら今居る場所はフーレンの里とそう離れてはいないようだったので迎えが来るらしい。

詳しい事は着いてからってことで、なんとかその日の内に着けそうであった。

――――――

男は皇帝と呼ばれた男を落ち着かせると、玉座の間を出ていく。

「将軍！」

「・・何かありましたか？」

「はっ、何者かがウィンディア城前にて騒動を起こした模様です。」

「ほう・・その者達はどうなりましたか？」

「はっ、特に抵抗もなく城の兵士に捕まったとのことです。」

「・・・そうですか。では問題ないですねぃ・・もし邪魔になるようなことがありましたら消してしまいなさい。」

「はっ！」

「・・・里の方は？」

「はっ、既に長に取り入り、作戦成功も時間の問題と思われます。」

「・・・よろしい。」

将軍と呼ばれた男は兵を下がらせると、誰ともなく呟く

「くくく・・・戦争・・人死に・・ようやくアレを使う事ができますねぃ・・」

―――

俺とアルが里の方へとボチボチ向かって少しすると、前から見覚えのある赤髪がやってきた。

「よー、アルにリュウ。城でとっ捕まったんだって？」

ニヤニヤしながら話し掛けてくるこの男、ナギである。

「フフ・・そうなんですよ、全くリュウが些細なことで暴れたりするものですから。」

「おいぃ！何言ってんの！？またそんな根も葉もない事を・・」

「ナギっこよう、そっちはどんな感じなんでぇ？」

「おう、こっちは族長のクレイと会えたぜ。まぁまぁ強そうだったが俺の方が強いな！」

「いや聞きたいのはそういう事じゃなくて・・」

ナギの思考はどうにもそっちよりだなぁ

「詠春とゼクトはどうしました？」

「今は里でぶらぶらしてるぜ。なんかウィンディアからの使者ってヤツも来ててよ、族長さんも結構忙しいみてーだったから、お前らが来る頃に合わせて時間を少し取って貰った。」

「ふむ、では行きましょうか。」

その後、ナギに先導されて俺達はフーレンの里へとたどりついた。

流石に里と言うだけあってレイさんのような鋭い感じの人や太った人など様々なフーレン族の人がいる。

家は木や土、石なんかで造られた家が多く、家畜なんかも結構居るようだ。

さりげに女性の服装が露出度高くてポイント高い！

キョロキョロしている内に俺達は一際立派な家へとナギに案内された。

「よく来たな。俺は若輩ながらこの部族の長を務めているクレイと言う。話はナギ達から聞いているぞ。人助けとは殊勝な心掛けだ。」

そう言って握手を求めてくるのは族長のクレイさん。なかなかの男前だ。

フーレンの長を務めてるだけあってガタイが良い。

レイさんのようなスピードタイプではなく完全なパワータイプだ。

確か持ち武器が丸太という変なものだったハズだが、この腕の太さなら納得だ。

「ありがとうございます。早速で申し訳ありませんが、少々お話を伺ってもよろしいですか？」

「構わんぞ。」

アルが切りだす。ゼクトさんと詠春さんの紅き翼の面子も集まっている。

「ではリュウ、お願いします。」

「え？俺？・・・まぁいいけどどの辺から説明しようか？」

「そうですね。エリーナさんから聞いた話でいいのではないでしょうか。」

「ほう、お前達はエリーナと会ったのか？」

ちょっと意外そうなクレイさんだ。

「はい。えーとですね、多少込み入った事情があるんですが・・まぁとにかくエリーナさんと少しだけお話をしまして、ちょっと城の方で問題が起きたそうなんです。」

「問題だと？」

「はい。実はエリーナさんの元にクレイさんとの婚約を破棄するようにという手紙が来たそうでして」

「・・・」

「それでまぁ片方だけと言うのも不自然なので、クレイさんの方には何かそういった事象が起きてる、または手紙の犯人に心当たりがないかと思いまして。」

「・・・なるほどな。」

「ふふ、まぁここまで来るのに脱獄などやらかしてしまいましたが。」

ちょっ！それ言わなくてもいいのに。

「お主らも随分と苦労したようじゃのう。」

「こっちはこっちでナギを抑えるのが大変だったじゃないですか。」

微妙に疲れた様子の詠春さん。

「それもそうじゃな。」

ここまで来る途中にナギから聞いた話だが、どうもナギがまたこの里で暴れたようだった。

普通ならそれだけで捕まったりしてもいいのだが、そこはやはりフーレンの里。

強い者は持て囃されるので、ナギ達は随分と好意的に対応してもらっていたのだ。

「話はわかった。だがエリーナにそのような手紙をよこす相手には、一つしか心当たりはないな。」

「フォウ帝国・・ですか？」

まぁ国に喧嘩を売るっていったら他にはいないよねぇ。

「そうだ。大方里とウィンディアが一つになる事に焦ったのだろう。そんな手紙ごときでどうにかなると本気で思ったとしたら、とんだお笑い草だな。」

鼻で笑うクレイさん。

「こちらにはそう言った類のものは何一つ起きていない。俺達フーレン族は強者ばかりだ。それゆえ、卸し易いエリーナの方を狙ったのだろう。俺の身に何か起こす事などできはしないさ。」

「・・・」

「もしも・・万が一にでもエリーナに何か起きたら・・この俺が帝国に乗り込んで壊滅させてくれる！」

グッと握り拳を作るクレイさん。そうとう惚れてんなぁこれ。

「・・失礼した。今日はもう遅い。あなた方も今日はここで寛いで行くがいいだろう。さぁ、今日は客人が多い！ウィンディアからの使者殿も居るからな！盛大な宴だ！」

そう言ってテントの入り口にいた使いの人へ声を掛けるクレイさん。

（ウィンディアからの使者ねぇ）

ちょっと気に掛かるけど、まぁそういう交流もあるんだろうと考えてスルーすることにした。

「うおおお！すげぇ料理！」

「うまそうじゃの！」

ナギと共にゼクトさんが珍しく嬉しそうだ。

なんとなくあの人は食欲が大半を占めてそうな気がする。

「アル、酒はほどほどにしろ。」

「詠春？そんなことだからディースさんに手玉に取られたりするのですよ？」

「そ、それは・・忘れてくれ・・」

こっちはこっちで盛り上がってるな。

「相棒、食わねぇのか？ここまで手の込んだ料理なんざそうそう食

えるもんじゃねぇぜ？」

テーブルに乗って料理を分けた皿にパクつくボッシュ。

「ああ、うん。貰う。」

今は屋外での立食パーティー中である。

里の人総出で料理を作り、酒を飲み、宴を盛り上げるのだ。

どうにも里の人達はこういうイベント大好きらしい。

「さぁみんな！今日はウィンディアからの使者殿、そして強者たるナギとその仲間が来てくれたのだ！宴だ！存分に飲んで食おう！！」

オ　オ　オ　ォ　ォ　ォ　！

さすがに居るのが虎の獣人だけあって食事時の空気は凄まじい・・・

それにしても随分とナギが持ち上げられてんな。何したんだか。

「長、一杯どうですか？」

「む、かたじけない。使者殿。」

クレイさんがお酌されてる。あの人がウィンディアからの使者さんか。

フード被っててよく顔が見えない。あれで使者ねぇ。

（羽は生えてないんだな）

その背中に飛翼族の特徴が無い事を気にしつつ、その辺の種族的なモノは出世とは関係ないのだろうと考えて、ボッシュと共に料理に舌鼓を打つ。

一部が飲み比べをし始めたり、ナギが勝負を挑まれたり、それを俺と詠春さんが抑えたりと、しばらく和気藹々？とした歓談が続いた。

大分周りが出来上がってきたと思われた頃、

ズルッ

「？おいボッシュ？」

肩に捕まっていたボッシュがずり落ちそうになった。

「・・・」

「ボッシュ？」

「・・ｚｚｚ」

「寝てるし・・」

食いながらいきなり寝るとは行儀の悪い奴め。

「・・・」

周りを見るとさっきまでざわざわしていたのに急に静かになっていて、フーレンの人達がそこかしこで倒れている。眠っているようだ。

「これは・・」

少し離れた所にみんなが居るのが確認できた。

急いで近寄る。

「おい！ナギ！おい！」

「ｚｚｚ・・」

地面に大の字になっているナギに話しかけるがやはり反応なし。

アルも木に寄りかかってすやすやと寝息を立てているし、詠春さんもテーブルに突っ伏している。

「くっ・・り・・リュウか・・」

「！ゼクトさん！」

ゼクトさんが這いつくばるように近寄ってきた。そっちへ向かう

「大丈夫ですか!?」

かなり意識が朦朧としているようだ。

「く・・ワシとした事が・・・リュウ・・すまぬが・・後を頼む・・」

そこまで言うと力尽きたように眠ってしまった。

「やっぱり・・」

恐らく料理に遅効性の強力な眠り薬でも入っていたのか。

何で俺だけ平気なんだ?龍の民・・・とかは関係ないな。

多分この呪いの指輪（仮）の呪い?のおかげか。

「あら?あなたはなんで起きてられるのかしら?」

「!」

声がした方に目を向けるとそこにはウィンディアの使者を名乗った者が立っていた。

「あなたもパクパク料理食べてたわよねぇ。どういうことかしら?」

太い男の声の癖にオネェ言葉を喋る使者。

それが素か。

それにしても気持ち悪い事この上ない。

「あー、何ででしょう？むしろ俺が知りたいです。」

「・・ま、いいわ。あなたはこれと遊んでなさい。」

そう言って使者は一枚の札を取りだし目の前の空間へと投げる。

「ジョよ、出なさい。」

シュンッ！

投げられた札を中心に魔法陣が浮かび上がり、

ズモモモモッ！

剣と盾を持った中身が空洞の鎧騎士が現れた。

「！これって・・」

見たことがある。確かブレスに出てきた式神のようなボスキャラだ。

ということはこの使者は・・

「じゃあね、ボクちゃん。」

使者はクルッと踵を返す。その向かう方向はクレイさんが居る方向だ。

使者の背に向けて俺は言葉を放つ。

「待ちなよ「ラッソ隊長」。」

「!?」

振り返った顔は、フードで見えないけど驚いてるみたいだ。

ブレス４の敵、「ラッソ」は式神のようにこうやって「鉄鬼」を召喚する。

ムカツク奴だったから逆によく覚えていた。

「あなた・・何故わかったの?」

フードの下でだいぶ警戒しているようだ。

「いやぁ何でしょうね?」

「・・そういう態度は利口じゃないわよ?ジョよ、潰しなさい。」

オオンッ!

鉄鬼が剣を振り上げてこっちへ突っ込んでくる

しかし・・・遅い。

ナギ達と過ごしているとは言え、この程度のスピードじゃガーランドさんより遅い。

「あのさ・・舐めてる？」

「・・なんですって？」

ヒュパっとドラゴンズ・ティアからカッツバルゲルを取りだし、

「ふっ！」ヒュオッ！

瞬動で鎧騎士の横へ回る。

「大地斬（斬岩剣）！」

ギギャァァンッ！

「なっ！？」

振り下ろした剣により、金属同士が擦れる嫌な音を発しながら真っ二つになる鉄鬼。

あんな程度のスピードしか出ないようなのが今の俺に勝てるわけないだろ常識的に考えて。

「さて、ラッソさん。あなたがコレ、やったんですね？大人しく捕まって貰いますよ？」

「・・ちっ。生意気なガキは嫌いよ。」

「気が合いますね。俺もムカつくオカマは嫌いです。」

「・・忌々しいわね。あなた、楽には死ねないわよ?」

「いや知らんし。」

ヒュオッ！

ラッソへ瞬動で近付く

「！くっ！」バッ！

ラッソは懐から2枚目の札を出そうとするが

「はっ！」ドゴッ！

「！！かっ・・・」ポロッ

ドサッ

カッツバルゲルの柄が鳩尾にクリーンヒット。

見事に気絶させられた。

「ふう。これでよし。」

他には誰も居ないようだったので、ラッソをその辺にあったロープで雁字搦めに縛り、

みんなが目を覚ますまで待つのだった。

「・・ちっ」シャッ！

その頃里から足早に離れていく人影があったのは誰も知らない。

第六章　6、再訪

「俺としたことが面目ない。フーレンの長として自覚が足りていなかった。客人であるあなた方にまで迷惑を掛けてしまった。」

そう言って深々と頭を下げるクレイさん。

翌朝、全員が起きだした頃に俺は事情をクレイさんに説明し、ラッソを引き渡したのだった。

今頃ラッソは尋問中だろう。

「あーそんな、頭を上げてください。俺がなんとかできたのは偶然ですし。」

これはホント運が良かった。たまたまこの指輪の呪いがあったからいいようなものの。

「いや、そもそも俺が使者だと言うのを確認もせずに信じてしまっていた事が原因だ。まさかそれがこんなことになるとはな。・・・リュウには多大な恩ができた。」

反省しきりのクレイさん。

「いやあ、今回は完全にリュウに助けられてしまいましたね。」

「うむ、まさかあの料理に毒が仕込まれていたとはな。」

「私もまだまだ修行が足りないな。」

「・・・」

俺がお礼を言われている後ろでは紅き翼の面子も揃って反省しているみたいだ。

約一名ナギだけはまだ寝ぼけているようだが。

「すまねぇ、相棒。」

「いやお前は仕方ないだろ。気にすんな。」

取り合えず反省会はこの辺でストップとさせてもらって、話を進めて貰うことにした。

「さて、あの男は未だに口を割らないが、持ち物の中にコレがあった。」

そう言ってクレイさんが置いたのは紋章の刻まれた剣だった。

「これはこの辺りでは知らぬ者は居ない。フォウ帝国の士官の証だ。」

「ほう、やはりアレはフォウ帝国の刺客というわけじゃな。」

やっぱりか。ラッソだしそうじゃないかとは思ったけど。

「そうだ。あなた方の話の通り、帝国の奴らは今のうちに俺とエリーナをどうにかするつもりのようだな。」

「どうする？族長さんよ。こっちから仕掛けるか？」

ナギは既に起きている。さっき詠春さんに叩かれていた気がするがスルー。

「いや、昨日はああ言ったが、実際に俺が動くとなるとそれは最早戦争だ。単純な兵力ではフォウ帝国は決して侮れんし、準備も整わないままで闇雲に兵を出すわけにもいかない。」

「つまり、攻めるにしても時間がかかるってわけか。」

「ああ、あのラッソとかいう人物に関しての質問状を送付したところで、無視されるのが落ちだろうし、な。」

里は動けない、と。

クレイさんはしばらく何かを考えたようだが意を決したように切りだした。

「昨日今日知り合ったばかりのあなた方に頼むのは心苦しいのだが・・エリーナを守ってやってはくれないか？」

「「「「「？」」」」」

「俺はこれから軍備を整える。しばらくここから動けなくなるだろう。警備も厳重にするからそう簡単には間者も入り込めまい。しかしウィンディアの兵には・・・失礼だが腕に信用が置けないのだ。」

マジですか。確かに頭堅そうなのばっかだったけど。

「あなた方はナギやリュウのように大きな力を持っているようだ。恥を承知で頼む。エリーナを守ってやってくれ。この通りだ。」

俺達全員に向かって本気で頭を下げるクレイさん。

「・・へっ、そこまで言われちゃ受けねぇわけにはいかねぇよな！」

ナギが笑って言う。別に言われなくても行くつもりだった癖に。

「ふふっ、当たり前ですね。エリーナさんには逃がして貰った恩もありますし。ねぇリュウ？」

「うん。当然。」

「ワシも異論は無いぞ。」

「もちろん私もだ。汚名を返上するいい機会だしな。」

「ってわけだ。族長さんよ。俺達はウィンディア城へ行くぜ。」

「ありがとう。ナギ、リュウ。そしてその勇敢な仲間達。」

俺達はウィンディア城へと改めてエリーナ王女護衛のために戻ることとなった。

――

ーーーーーーーーーー

「・・・そうですか。ラッソ隊長は捕まりましたか。」

「はっ、いかがなされますか？」

「そうですねぃ・・その集団が邪魔をしたと見て間違いないのですね？」

「はっ、間者の報告によれば間違いないかと。」

「そうですか・・では少々強引ですが先に王女の方を抑えましょう。その集団へはあの連中を使いなさい。」

「は？あれですか？しかし・・」

「・・こんな時の為に生かしてあるんですよ。・・・作戦に支障はないと思いますが念には念を・・」

「・・は！了解しました！」

タッタッタ・・・

「・・王女の方はうまくやりませんとねぃ・・」

ーーーーーーーーー

俺達は再びフーレンの里からウィンディアへと向かっていた。

距離的にはナギ達が半日で着いたようにそんなに離れていないが、どういうわけかこの辺りでは便利な魔法の乗り物が少ないので急ぎでも足に頼るしかないのだった。

ウィンディアと里との街道は、開けた平野で所々に木々が生えているような感じだ。

俺達はそこを走っていたのだが・・

「・・ナギ。」

急にアルが立ち止まる。

「・・ああ。」

ナギも立ち止まった。

辺りには妙な気配が漂っている。

（なんだ・・？）

全員で辺りを警戒していると

フォンッ！

「「「「「！」」」」」

突然空中に赤いお札のようなモノが現れた。

ヴォンッ！

「なんだこりゃ！？」

札は４枚に分かれ、回転しながら広がっていく。

一定の広さまで広がると、それぞれの札を繋ぐように力場が形成され、その中が怪しく七色に輝きだした。

「！？これって！？」

「リュウ！知ってんのか！？」

見たことがある。ブレス４の空間転移のモノだ。

「確かこれ・・空間転移だ！」

「「「「「！」」」」」

ヴゥン

ザザザザザッ！

４枚札の力場から次々に出てくるのはいずれも盗賊・夜盗・泥棒といった風情の汚い男達。

何故か全員首に妙なわっかを付けている。

ざっと見て２００人は居るだろうか。男達が俺達を中心に周りを取り囲んだ。

「おめーら・・何の用だ！」

ナギが男達に向かって問い掛けると、その内の一人が答えた。

「どうもこうもねぇよ！お前等を殺っちまえばこの首輪を外してくれるってんだ！俺たちのために死んでもらうぜぇ！！」

ジャキィ！

周囲の男達が一斉に獲物を構える。ナイフだったり鎖鎌だったりこん棒だったり色々だ。

「どうやら帝国側に私達が邪魔をしていることがバレた、と見えますね。」

「じゃが刺客がこの程度とはまた随分と過小評価されとるのぅ。」

「こんな所で悠長に時間を取られている暇はないな。」

「はぁ、めんどいけどがんばりますか。」「相棒、もうちょいやる気出せや。」

「へっ、おめえら！俺達「紅き翼」に手を出すとどうなるか教えてやるよ！」

「しゃらくせぇ！殺っちまえぇ！」

ウオォォォォ！！

大量の賊どもが一斉に襲い掛かってきた。

乱戦となるが特に問題はない。

「おととい来やがれ！」ドガガッ！

「おぐっ！」「ぐへっ！」「げはぁっ！」

ナギの蹴りが賊を薙ぎ払う

「これはいかがですか？」ズゴムッ！

「ぎやぁぁっ！」「重いぃぃっ！」「助け・・！」

アルの魔法が賊達を押しつぶす。

「ワシらに挑もうとは千年早いの」ヒュヒュヒュッ

「！！」「・・かっ」「・・・」ドササッ！

ゼクトさんが駆け抜けたと思うと賊達の意識を刈り取る

「奥義を使うまでもないな！」ズバァッ！

「ぎゃあぁっ！」「ぶへっ！」「うごおっ！」

詠春さんの刀が次々と敵を討つ。

（やっぱあの４人つえーよなぁ）

「ガキがっ！」ブンッ

ヒュッ

「このっ！」シュバッ

ヒュヒュッ

「ちょこまかとっ！」

「いやあんたらさ、悪いこと言わないからやめときなって。」

俺は賊の攻撃を余裕でかわしながら４人の活躍を見学していた。

一応俺が反撃していない事には理由がある。

こいつらは賊だけあって色々な技を使ってきているのだ。

「盗む」「とびげり」「「ぶんどり」「めつぶし」「ねらいうち」

取り合えずこれだけ確認。

近頃はラーニングできたかどうか感覚で分かるようになってきた。

何かこう見た後で「出来る」という根拠のない自信みたいなものが沸くのだ。

「相棒、何で反撃しねーんだよ！？」

腰に付けた袋の中からボッシュに言われる。

戦闘時に首や肩に捕まってるのは厳しくなってきたので、こんなこともあろうかとボッシュ用に拵えたポーチだ。

「そうだね、そろそろいいか。」

一通りスキルも覚えたことだし、あんまり無駄に時間を取られるわけにもいかないし、早々に終わらせることにした。

「みんな！こっちへ！」

「「「「！」」」」

俺はポケットに手を入れてそう周りに声を掛ける。

みんなは俺が何をするか瞬時に見抜いたのか、すぐに俺の周りに集まった。

「ていうかリュウ、お前それ最初からやれよ。」

「いやまぁ一応相手の目的とか知りたかったし。」

「ふむ、まぁこいつらはタダの時間稼ぎのようじゃな。」

「そんなわけで一気に行きます。」

集まった俺達に警戒している賊達を見つつ、ポケットからカードを取り出して額に近づける。

≪適当に流しちゃって≫

≪オッケ！全部きれーに掃除したげるわ！≫

≪いや少しは手加減して。≫

俺はカードを掲げ、叫ぶ。

「ハルフィーールッ！！」

カァァァッ！

カードから眩い光が溢れ、俺達の頭上に翡翠色の東洋の龍が現れた。

「なんだありゃあ！」「聞いてねぇぞ！」「お、俺は逃げる！」

突如現れた龍に対する賊達の混乱っぷりが凄い。

≪行くわよ！！≫カッ！

ビシビシビシィッ！

ハルフィールが光ったと思うと俺達の前の地面が突如割れ、

ズブァァァァァッ！！

割れから大波のような水が空高く噴出した！

「おわぁっ！」「うそおぉ！」「ちょっ！俺泳げな・・！」

ズバッシャァァァァン！！！

いきなり目の前に現れた大波に飲まれ、哀れ賊達は全部まとめて彼方まで流されて行くのだった。

「凄いですねぇ。今度からは雑魚掃除はリュウに頼みましょうか。」

「いや召喚はそれぞれ一回使ったら休まないと駄目だし。」

「リュウ君は何かどんどん人間離れしていくな。」

「人のこと言えますか詠春さん？。」

全員人間離れしてると思います。

「よし、おめーら！急ぐぞ！時間稼ぎに来たってことはこの先で何かしてるってことだ！」

「「「「「おう！」」」」」

たまーにナギは鋭いな。

「じゃあアルとリュウはここで待っててくれよ。」

「わかりました。」「ういす。」

俺とアルとボッシュはナギ達と分かれる。

城下町に着き、城へはナギと詠春さんとゼクトさんで行くこととなった。

俺とアルは脱獄犯なので城へ一緒に行ってわざわざ余計な騒動を起したくない。

このためにクレイさんに一筆書いて貰った書状があるので、それを渡して無罪を認めて貰うまでは行かない方がいいという判断だった。

もちろん何かあったらすぐに駆けつけられるよう、城の見張りの目から届かないところで待機するつもりだ。

「さて、ここで少し休憩としますか。」

「そうだね。」

「相棒、このポーチもう少し改良していいか？」

「いいよ。下手に重くなんなけりゃ。」

「うっし。」

ちょうど時間が少しできたし、さっきの賊との戦いでそこそこスキルを覚えたので、俺は自分の戦力を整理することにした。

取り合えず今覚えているスキルはこれだけだ。

「みだれうち」「大防御」「ジャンプ」「盗む」「ぶんどり」「とびげり」「ねらいうち」「めつぶし」

そして「大地斬（斬岩剣）」「海破斬（斬空閃）」「空裂斬（斬魔剣）」「テラ・ブレイク」に「瞬動」と「虚空瞬動」。

魔法としてはブレスオブファイアの中級までの魔法全般と「火と氷の魔法の射手」、「戦いの歌（バトルソング）」。

あとは竜召喚だ。

これが今、変身せずに使える俺のスキル。

変身すると一気に変わる。

使える技が基本的にドラゴナイズドフォームの技とブレスオブファイアの攻撃魔法のみに限定される事が今までの経験でわかっている。

が、まぁ上級魔法も含めて圧倒的な力なので問題はない。

さらに普通の攻撃では身体に傷一つ付かない辺りは流石の一言だ。

【竜変身】に至っては圧倒的過ぎてブレス以外よく分かっていない部分もあるが。

（さて、多分できると思うんだけど。）

実はここまでで、俺にはある一つの構想があった。

それはテラ・ブレイクを考えた時・・・というか、ずーっと前から

思っていたことだ。

ソレができれば大分技の応用範囲が広がる。

（一応伝えておくか。）

俺はポケットからカードを取り出し、その構想を仲間の龍達と相談するのだった。

「！・・・リュウ、来ましたよ。」

しばらくするとアルがそう言ってパクティオーカードを額に近づけた。

「・・・ナギはなんだって？」

「どうやら・・少々まずいことになっているようですね。」

アルが複雑そうな顔をしてそう言った。

「・・・城へ急ごう。」

「そうですね。」

「おうよ！」

アルの表情に嫌な予感を覚えつつ、俺とアルとボッシュは城へと向

かった。

第六章　7、奪還

ウィンディア城へはすんなり入る事が出来た。
すれ違う兵士たちが皆一様に謝ってくるが、それにしても顔色が悪く雰囲気が沈んでいる。

「そなたらには詫びのしようもない。すまなかった。」

「あーいえそんな・・」

「私達は気にしていませんので。」

「・・・そうか。そう言ってくれると助かる。」

俺とアルが謁見の間に着くや否や、開口一番王様に謝られた。
クレイさんの書状が功を奏したようだ。

「君達は「紅き翼」と言うらしいな。「悠久の風」に所属しているとも聞いたが？」

「そうだぜ王様。だけど今回のは「悠久の風」とは関係ねぇよ。俺達が何とかしてぇから動いてるだけさ。」

ナギ、流石に王様にまでタメ口ってのはどうだろ？

あ、詠春さんのこめかみがぴくぴくと・・

「・・そう、か。さすがクレイの見込んだだけはあるな。」

あの神々しさはどこへ行ったのか、王様は随分とやつれたように見える。

「それはともかく、ナギの話では王女様が連れ去られたと聞きましたが。」

「そうだ！ナギ、どういうことだよ！？」

「どうやら俺達より大分向こうが早かったみてーだぜ。」

「あの街道の賊どもは慎重に慎重を重ねた保険程度といった所のようじゃな。ワシらがここに着く大分前には攫われたようじゃ。」

「くっ！私達がもう少し早く動いていれば・・」

くそが！

城の警備を過信し過ぎてたか。クレイさんの言う通りだった。

甘かった！

しかし連れ去ると言うのが気にかかる。相手はフォウ帝国、嫌な予感が走る。

その後の話によると、兵士の一人が気絶したエリーナさんを抱きかかえ、フォウ帝国の方角へ去って行ったのを偶然外の見張りの兵が目撃したそうだ。

「・・・私はなんと愚かだったのだ・・警備に慢心し、関係のない者達を投獄し、あまつさえ娘を攫われるとは・・なんたる醜態だ。ご先祖に顔向けできん・・」

王様が両手で顔を覆い、嘆いている。

「王様・・」

「・・・最早疑う余地はない。フォウ帝国め・・こうまで強引な手を使ってくるとはな。まさか既にこの城に彼奴らの手の者が入り込んでいたとは思いもよらなんだ。」

「連れ去られちまったんじゃ取り返すしかねーよな?」

「そうですね。今のところ王女に危害を加えることはないでしょうし。」

「・・・何故そう思うのだね?」

「簡単ですよ。殺そうと思えばすぐにでも殺せたハズです。しかし連れ去ったと言うことは何か王女に利用価値があるからでしょう。」

「むぅ・・」

ただ単に2国間の関係を悪化させたいだけならわざわざ連れ去る必

要はない。

連れ去った理由には一つ心当たりがある。

しかしそれに必要不可欠な「ユンナ」さんはいないはずだし、そんなはずはないと思いたいが。

「お前等、もううだうだ考えんのは辞めだ。乗り込むぞ！」

「「「「「！」」」」」

「フォウ帝国へお姫様を取り返しにな！」

「よっしゃぁ！」「相棒気合入ってんなぁ」

「ふふ、そう言うと思ってましたよ。」

「ワシ等を敵に回したことを後悔させてくれよう。」

「このような蛮行を見過ごすことは私の誇りが許さん。」

不安が的中していたとしても、今ならまだ間に合うかもしれない。

何としても取り戻す！

「すまぬ・・・君たちに迷惑を・・。わしらも軍備を整えしだいフォウ帝国へ向かうつもりだ。こうなっては戦力が足りん等とは言っておれんからな。」

「へっ、その前に終わらせてやるよ！待ってな、王様！」

残念ながらエリーナさんを攫われてしまったことをクレイさんに連絡するよう王様に頼み、俺達は即座にフォウ帝国へ向かった。

途中国との境目に関所があったが、力技で無理矢理通過した。

小細工を行う時間すら惜しいからと俺が押し切ったためだ。

少し時間を取られたが、駐屯の兵士がそれほど多くなかったので即効でカタがついた。

だがそれにより俺達が帝国領内に入ったという情報は伝わった可能性が高い。

「ここがフォウ帝国か・・」

「ウィンディアとは対照的ですね。」

「活気がないの。街人に覇気が感じられん。」

「これは・・想像以上だな。」

「みんな病んでるよなこれ。」「俺っちもそう思うぜ。」

フォウ帝国、帝都。

あたかも宮殿のような皇帝の城、「皇城」がある巨大な国の中心地。

そこはウィンディアやフーレンの里の素朴な町並みとは対照的に、機械の溢れる近代的な都市だった。

どちらかと言えばメガロメセンブリアに近い。

しかしパラパラと見受けられる街人は皆一様に俯き、疲れた表情をしていた。

「圧政って想像以上かも。」

思わずそんな呟きが漏れる。

「ふむ、これも何とかせねばならぬかも知れんな。」

「今はそれよりお姫さんだ。取り合えずあの城だろ！」

「そうじゃな。もう遠慮はいらん。」

「突っ込むぜ！」

「「「「「おお！」」」」」

俺達は城を目指し、他の視線など意に介さず突っ込んでいった。

「あら？ようやく来たようね。待ちくたびれたわ。」

「！？お前！？」

城に着いた俺達を出迎えたのは、ズラリと並んだ兵士達と、里で捕まえてあったはずのラッソだった。

「これはこれは・・どのようにして抜け出したか聞いてもよろしいですか？」

アルが丁寧に問い掛ける。

「ふん、あの程度で私を抑えておけると思ったの？あんな拘束どうってことなかったわ。見張りにトドメを刺せなかったのが心残りだけど。」

「！！」

やっぱむかつくなこいつ・・

「まぁ、あたしにあんなことした薄汚いフーレン達には後でたっぷりとお返ししないといけないわねぇ。」

ラッソは愉悦を思い浮かべて歪んだ顔でそう言い放つ。

「ならば今すぐお相手しよう。」

「!?」

「ク、クレイさん!?」

いつの間に来たのか、俺達の後ろにはクレイさんを中心とするフーレン族の戦士達が数人立っていた。

「・・エリーナは返して貰う!」

その内に秘めた怒りがこちらまで伝わってくる。

「族長さん、随分はえーご登場だな?」

「エリーナが攫われたと聞いてな。居ても立ってもいられなかった。」

「しかし良いのか?軍備を整えるに族長のお主なしでは成り立たぬのではないか?」

「確かに、俺は自分の仕事を放り出した。これは族長としては許されない行為だ。だが・・惚れた女の危機に座して待っているなど!俺にはできん!」

この惚れっぷりは本物だ。マジ男だクレイさん。

「へっ、そうかい。そうこなくっちゃな！」

「クレイさん流石です！」「おうよ、俺っちシビレたぜ！」

「雑魚共に構っている暇はないな。早々に中へ突入するぞ！」

詠春さんが刀を構えつつ言う。

クレイさんの視線は既に城の中へ釘付けだ。

「お待ちなさい！あたしが居ることを忘れてもらっては困るわね！」

ラッソはそう言って懐から2枚の札を取り出して目の前に投げた。

ウォン！

札から魔方陣が現れ、

ズモモモモッ！

2体の鉄鬼が現れた。

2体とも、先日一撃のもとに倒した鉄鬼より鎧が禍々しく、武器も強力そうだ。

「アイトー、イメカフ、まずはあのリュウとかいうガキをやりなさい。」

「「オオン！」」

しつこいオカマは嫌いです。

「はぁ・・俺ねらい、ね。・・みんな、俺はアイツと兵士達の相手をするから先行ってて。」

本当は俺も一刻も早くエリーナさんを助けにいきたいけど、後続の憂いを断つ事も必要だし仕方ない。

それにナギ達ならなんとかできるはずだ。

「わかった。ここは任せた！」

「無理するでないぞ。」

「ふふ、あなたが来る前に終わらせてみせますよ。」

「リュウ君、ボッシュ君、私達は君達を信じるからな。」

「了解！」「おうよ！」

「よし、お前達！このリュウを中心に動け！いいな！」

「「「オオー！！」」」

クレイさんの号令でフーレンの戦士たちが頷く

「お前等！俺に掴まれ！行くぞ！」ゴォッ！

ナギがクレイさんを含めた5人を包むように魔力障壁を展開し、兵士を弾きながら突っ込んでいく。

兵士達はそれを阻もうとするが

「お待ち！アレは放っときなさい！」

「！？」

何故かラッソは素通りさせた。

困惑顔な兵士達だが、素直にナギ達を通したようだ。

（・・何かあるのか・・？）

「いいの？ラッソさん。ナギ達は強いよ？」

「ふん、どうかしら？将軍が直々にお相手するから、そんな心配はいらないわ。」

（将軍？誰だ？）

「フォウ帝国」の将軍には何人か心当たりがあるが、いずれもナギ達を止められるような猛者とは思えない。

「さて、ようやくあなたに借りを返すことができるわねぇ。」

ラッソが憎しみを込めた目で睨んでくる。

その横では2体の鉄鬼が控えている。
後ろには数百人のフォウ帝国の兵達。
対してこちらは俺とフーレンの戦士達だが数と言う点で大きく劣っている。
しかし俺は余裕の態度を崩さない。
この程度でやられては信じてくれたナギ達に申し訳が立たないし、もちろん負けるとはこれっぽっちも思ってないからだ。
「んじゃ、こっちも助っ人呼ぼうかな？」
この状況での俺の余裕の態度に疑問を感じたのかラッソの顔がこわばる。
俺はポケットに入っているカードを取り出し、額に近づけた。
≪ラグレイア、あれやってみようか。≫
≪私はいいわよ。ふふ、楽しみね。≫
俺はカードを掲げて叫ぶ！
「ラグレイアッ！」
カァァッ！
カードから眩い光が溢れると、頭上に赤い東洋の龍が現れた。

「なっ！？」

ラッソは驚愕の表情、他の兵士達にも動揺が走っている。

「これは・・」「一体・・」「まさか竜の神か？」

後ろのフーレン族の戦士達もいささか混乱しているがまぁスルー。

「こんなドラゴンをあっさり召喚するなんて・・・あなた、一体何者なの？」

ラッソが顔に汗を浮かべたまま問い掛けてきた。

こう聞かれた時の答えは決まっている。

俺はゆっくりと、だが自信満々な態度で答えた。

「通りすがりの「紅き翼（アラルブラ）」さ。覚えておけ！」

「！！・・馬鹿にして・・！！」

ラッソの顔に怒りの色が浮かぶ。

「行きなさい！アイトー！イメカフ！」

そして戦いの火蓋が斬って落とされた。

第六章　8、将軍

ブォ！

「よっ！」ヒュッ

ゴオッ！

「はっ！」ヒュオッ

「てぇりゃあっ！」ゴガァッ！

2体の鉄鬼の攻撃を俺はかわし、時には蹴り飛ばし、殴り飛ばし、少しずつ位置を調整する。

既に戦いの歌（バトルソング）は使用済みだ。

あの里の時の一体よりは速いが、それでも2体同時に捌ける程度の速度だ。

「ちっ・・何をやってるの！アイトー！イメカフ！そんなガキ一匹に！」

鉄鬼が一撃も俺に当てられない事にラッソはシビレを切らして来たらしい。

ラグレイアはフーレンの戦士達の頭上に陣取り、フォウ帝国兵に向かって火炎を吐いてフーレンの戦士達を援護している。

さらに、実は兵士達を徐々にラッソの周りへと誘導もしている。
俺は2体の鉄鬼の相手をしながらタイミングを計っていた。
これから使う大技の範囲になるべくやつらを巻き込ませられるよう狙っていたのだ。

「！ここだ！」ドギャッ！

「なに！？」

ガシャシャッ！

2体の鉄鬼を巻き込んでラッソへと蹴り飛ばす。これでいい具合に兵士達と固まった。

今がチャンスだ！

「みなさん、下がってください！」

「「はっ！」」

ゴァッ！

フーレンの戦士達を下がらせるとラグレイアが火炎を吐き、フォウ帝国兵達との間に炎の壁を作る。

これでフーレンの戦士たちは巻き込まないはず。

「よし・・・ラグレイア！アレをやるぞ！」

≪ええ、よくってよ。≫

俺はバックステップして距離を取る。

『パリア！』フォァァッ！

ウォォォォン！

ブレスの対魔法防御を掛けた俺と共鳴するように唸りながら、ラグレイアが俺の周囲を囲む

「！？何をする気！？」

「さぁてね！」

ラッソへ答えながらポーズを決める。

足は肩幅より広めにスタンスを取って腰を落とし、左腕は腹の前で何かを抱えるかのように、右腕は肘を上げて後ろへ引き気味に手を顔の横辺りへ。

「ハァァァァ・・」

顎を引き、俺を囲むラグレイアと共に敵を睨みながらタメを作る

この動作自体には何の意味もない。

が、これからやる技には必須なのだ！主に気分的な意味で！

「はっ！」ダンッ！

そして足を揃えて空高く「ジャンプ」！

「おおおおおっ！」

宙を舞う俺を中心にラグレイアが渦を巻くように旋回し、俺はひねりを加えた宙返りを経て「とびげり」の姿勢を2体の鉄鬼とラッソの方向へと向ける。

これこそ俺の理想！思い描いていたスキルの形！

スキルの合成！

複数のスキルを同時に使い、組み合わせて昇華させるという夢の一人コンボ技！

今回は「ジャンプ」＋「とびげり」、さらに竜召喚「炎龍」！

ウォォォンッ！

ラグレイアが口に強大な炎弾を溜めながら「とびげり」の姿勢を取った俺の真後ろに来る。

そしてタイミングを合わせて狙いを定め、示し合わせた技名を叫ぶ！

≪ドラゴン！≫

「ライダー！」

≪「キィィィック！！」≫

ドギュァァァ！！

ラグレイアの口から放たれた強大な炎弾を全身に受け、その勢いで急降下！

その様相はまさに紅蓮の砲弾！

「うおぉぉ！あっちぃぃぃぃ！！」

ラグレイアの炎弾が魔法防御の上からでもめっさ熱い！

全身に強大な炎を纏った俺のキックがさながら隕石のようにラッソ達へと降り注ぐ！

「いやぁぁぁぁぁぁ！！」

ズドオォォォォォンンッ！

ラッソの叫びも空しく、俺のファイナルベント（必殺技）が帝国の兵士達を巻き込んで爆裂するのだった。

ーーー

後ろから突如として声を掛けられた。

全員が一斉にそちらを振り返る。

そこには一人佇む男が居た。

一切の気配を感じさせずにそこに現れた男は、実に奇妙な出で立ちをしていた。

隠密行動を是とするような薄暗い色のピッチリとした上下にやはり暗い色のジャケット、手にはナイフのような釘のような物が握られている。

顔は形容のしようも無い。

額から鼻の下までを覆うように一つの丸いゴーグルのようなものを着けており、それ以外は白い布で覆っている。

ゴーグルの中心には「目」の模様が逆さまに描かれており、口のあるべき場所にのみ布に穴が開いていて、頭には釘らしきものが刺さっている。

「お前はなんだ?何故皇帝が死んでいる?エリーナはどこだ!?」

「皇帝陛下は・・・邪魔でしたので私が片付けておきました。」

「・・では・・エリーナはどこだ!?力づくでも返してもらうぞ!」

クレイの怒りがぶつけられるが男は全く動じていない。

「・・あの方は最上のニエになりますから・・今お返しするわけにはいきません」

「何だと!?」

「待つんじゃクレイ殿。お主・・「ニエ」とはなんじゃ?」

「ふふ・・そうですねぃ・・兵器・・「呪砲」の弾丸のことですよ・・あの方の痛みや苦しみ・・・負の感情を呪いへと変換する・・こんな風に。」

ヴォン!

「!!」

男の手の上に捉えられたエリーナの姿が映し出される。

エリーナは金属的な椅子に括り付けられ、ぐったりと憔悴しているようだった。

「エリーナッ!!」

「くくく・・」カチッ!

叫ぶクレイをよそに、男が取り出したスイッチのようなものを押すと

バリバリバリッ!

『あああああーーーっ!!』

画面に映ったエリーナへ電撃が走った。

「！！貴様ぁぁぁ！！！」

クレイはその光景に我を忘れて男へと飛び掛る。

「この痛みと苦しみを・・」

いつの間にか男の手に握られていた銃のようなものが暗く輝き、

ドンッ！！

「ぐはっ！」

クレイへと発射された。

「おい！？族長さん！」

「いけません！」

アルが倒れたクレイに近寄り、治療を施そうとするが

「！？これは・・呪い！？」

「うぐ・・ぐ・・」

クレイの胸の撃たれた個所が紫に光り、継続的に苦痛を与えている。

「「呪砲」・・ニエにされた人物と関係の深い者ほど効果が増す・・

その点民に慕われている王女の苦しみは弾丸にピッタリですねぃ・・・まだ試作段階なのが実に惜しい・・」

「お前・・許せねぇ・・」

「こやつに情けはいらんな。」

「・・斬る！」

男の余りの非道ぶりにナギ達の怒りが高まる。

「ふはは・・いいですねぃ・・・その殺気・・・でははじめましょうか。」

男はエリーナの映った画面をフッと消すと、釘のようなモノを構え、ゆらゆらと前後に揺れだした。

「魔法の射手・連弾・雷の１９９矢！」

ズアァッ！

ナギの放った魔法の射手が吸い込まれるように男へと飛んでいく！

ズドドドッ！

「痛！痛ひぃぃぃ！！・・・ふ、ふはは・・いい・・いいです！」

全弾モロに食らった男はそれでもただゆらゆらと揺れ続ける。

「なんだコイツは！？」

「神鳴流奥義！斬空閃！」ビュゴッ！

ズシャッ！

「痛ひぃぃ・・ぐ・・・は・・」

ドサッ

詠春の放った気の斬撃が直撃し、壁に打ち付けられた男は力なく床へ倒れた。

「・・・拍子抜けじゃな。」

「ああ、何だったんだコイツは・・」

ゼクトは倒れて動かなくなった男を見て警戒したまま呟き、ナギも同様の様子でそれに答える。

「・・アル、族長さんはどうだ？」

「うぐぐ・・」

「・・なんとか呪いの進行は抑えました。このまま抑え続ければ命に別状はありません。早めに治癒専門の術士に診て貰うのが良いかと。」

「そうか。」

ナギはホッと胸を撫で下ろす。

「っと、そうだ。お姫さんを探さねぇと！」

ナギとゼクトは城の奥へと入っていった。

城の奥、映像に映っていた部屋を発見すると、ドアをぶち破り、ナギとゼクトが突入する。

中には椅子に括り付けられたエリーナが居た。

「大丈夫か？姫さん！」

「うっ・・くっ・・・あ・・あなたは・・？」

「俺達はあんたを助けに来た。族長さんも居るぜ。安心しな。」

「クレイも・・・そう・・よかっ・・」カクッ

「お、おい！姫さん！？」

「大丈夫じゃ。気を失っておるだけじゃな。気が抜けたんじゃろう。」

「そうか。とりあえずアルに怪我を治してもらうか。」

「そうじゃな。」

ナギとゼクトはエリーナの拘束具を破壊し、背負ってクレイ達の居

る玉座の間を目指した。

「それにしてもコイツはやけにあっけなかったな。」

玉座の間でナギとゼクトを待つ詠春は、床に倒れた男へと近付く。

アルは倒れたクレイの側で引き続き治癒を施している。

「・・・死んでいる・・な。」

脈を取り、確認を取ったが男は確実に死んでいるようだった。

「まぁいい・・！・・さて。」

ナギ達の物と思われる足音が近付いてくるのに気がつき、詠春が立ち上がってそちらへ気がそれた瞬間

ぐりんっ！

男の顔が詠春の方を向いた。

「・・ふはは・・強い・・・強いですねぃ・・」

「!!なに!?」

詠春は突如足元から聞えた声に驚愕する。

確かに死んでいたハズなのに。

その驚愕が一瞬詠春の動きを鈍らせた。

ガシッ!

「貴様!?」

「・・・【フォルカッション】」

ギュウオォォォォォ・・・

詠春からオーラのようなものが立ち上り、それが男へと吸い込まれていく。

「くっ・・・これ・・は・・!」

「ふはは・・・いい・・・いいです・・」

「詠春!?」

「なんじゃと!?」

エリーナを背負って玉座の間へとやってきたナギ達の目にその光景が飛び込んできた。

男は詠春の足を離し、立ち上がる。

「ふはは・・・いい・・・とてもいい・・あなた達にも私の糧になってもらいますよ・・」

「くっ・・・き、貴様ぁ・・・」ヒュンッ！

弱った詠春が刀を振るうが

キンッ！

「！！」

男の持つ釘のようなもので容易く受け止められた。

「・・あなたにはもう用はないんですよ・・」

ザスッ！

「うっ・・ぐ！」

男の釘が一閃する。

詠春はギリギリでかわしたが、腹を浅めに抉られた。

「ゴホッ・・！今の太刀筋は・・斬岩剣！？」

そのままヨロヨロと詠春はアルとクレイの元に辿り着く。

「詠春！大丈夫か！？」

「これは・・「気」が極限まで減っています！」

「何だって！？」

「それだけではないようじゃぞ。ヤツは詠春の技まで完璧にコピーしとる。」

「じゃあアイツに捕まるとパワーを吸われて技をコピーされるってのか！？」

「・・そのようじゃな。」

「ちっ！アル！族長さんと詠春と・・姫さんも頼むぜ！」

「任せてください！」

「行くぜお師匠！」

「うむ！」

「ふはは・・あなた達の力も・・・いい・・とてもいいですねぃ・・」

二人はエリーナを床へそっと寝かせ、一層不気味な雰囲気を醸し出す男へと攻撃に出た。

第六章　9、怒

帝国の兵士のほとんどが俺の必殺技に巻き込まれた形で戦闘不能に陥り、フーレン族の戦士達で抑えられる程になった。

ラッソは焦げた状態で伸びており、2体の鉄鬼は盾にされたのか鉄くずと化している。

『リリフ』パアッ！

俺は火傷した個所を治しながらカードへ戻ったラグレイアへ話し掛けていた。

≪もう少し炎弾の威力を抑えてくれると思ってたんだけど？≫

≪まぁいいじゃない。一応成功したんだし。細かい事を気にしたら負けよ？≫

「はぁ。」

「相棒、今の技は封印してくんねぇか？俺っち死ぬかと思ったぜ。」ぷすぷす・・

焦げたボッシュがポーチから顔を出す。

身体強化や魔法防御は身に付けたモノまで強化するのでポーチの中は安全だろうとそのままだったが、ボッシュ本体が熱にやられていたらしかった。

まぁ不死身だから問題ないって言えばないけど。

「さて、城の中へ急ぐか。」「おうよ。」

俺とボッシュが城へ向かおうとした時

ドゴォォン！！

「え！？」「なんだぁ！？」

突如として城の上階の壁が吹き飛び

「ぐっ！」

「くそぉっ！」

そこからゼクトさんとナギが落ちてきた。

二人は体制を立て直しながら俺の側へと着地する。

「はぁ・・はぁ・・よおリュウ、こっちは片付いたみてーだな。」

「問題ないよ。そっちは？何が起きた？」

「厄介な相手じゃ。捕まれるとこちらの気や魔力を吸い取り、技をコピーされる。」

「そんなヤツが！？」

そんなの「フォウ帝国」に居たか？

「ああ、詠春がやられた。アイツの技を全部そっくり使ってきやがる。」

「それに加え、ヤツの持つあの釘・・あれは体力を吸い取り、ヤツの怪我を回復させるようじゃ。」

「怪我も？」

「うむ、こちらの攻撃で付いた傷がヤツの攻撃後に治っておった。」

それってもしかして・・

「そいつの見た目ってひょっとして・・」

そこまで言い掛けて

ストッ

破壊された個所からその男は降りてきた。

「・・・あなたも・・・お仲間ですねぃ」

「！！こいつ！？」

その姿には覚えがある。こいつは４に出てきた敵じゃない。５の方に出てきた敵だ。

確かに「吸い取る」という攻撃をコイツはしてきていた。

「・・なるほど、ラッソの言ってた将軍ってコイツだったのか・・」

ようやく合点がいった。確かにコイツなら力を吸い取ってナギ達を倒せる可能性がある。

男は周りに居る虫の息の帝国の兵士達をくるりと見渡すと、妙に嬉しそうに言った。

「ふはは・・・ありがとうございます・・兵士達を倒してくれて・・」

「「「!?」」」

「これで・・私はもっと強くなれますねぃ・・」

「何を言ってやがる!?」

「お主の味方の兵達は最早戦力にはならぬぞ!」

「・・・くく・・まぁ・・これでこの国はお終いでしょうがねぃ・・」

「それは・・そうだ。お前を・・倒してな!」

そう言って城の入り口からクレイさんが胸を抑えながら出てきた。

「クレイさん、今は一時的に痛みを抑えているだけです。早めに本

格的な治療を行った方がいい。」

「クレイ・・」

その後ろからはアルとその背に背負われた詠春さん、そしてエリーナさんが。

アルはクレイさんと詠春さんに魔法をかけ続けているようだ。

「ナギ、エリーナさんは無事だったみたいだね。」

俺は不安が的中しなかった事に安堵した。

「ああ、危ねーとこだったけどな。なんかの弾にされそうなトコだった。」

「弾!?」

(まさか呪砲!?「ユンナ」さんが居ないのにか!?)

的中しなかったわけではなく、ギリギリだったことに驚く。

まぁ助け出せたしこれでとりあえずは大丈夫だろう。

「はっ、これでお前を倒せばウィンディアやフーレンの里を侵略することもなくなるな!」

ナギが構えながら男に言う。

「・・侵略?・・ふはは・・私は最初からそんなものに興味はあり

ません・・皇帝は覇権が望みのようでしたがねぃ・・」

「ならば、お主の目的は一体なんじゃ？何故皇帝を殺した？」

クレイさんやエリーナさんを狙ったのは、呪砲を使って国を侵略するためじゃないのか？

それにフォウ帝国の「皇帝」を殺したって？

「くく・・皇帝陛下は・・ただ邪魔だったのですよ・・それだけです・・」

「それは俺たちと戦う為ってことか！？」

「その通り・・あの秘術が手に入った今・・あんな男などどうでも良かったのです・・」

秘術・・？

「ふはは・・・私の望みは・・・戦争そのもの。そして死に行く人々・・・」

「なんだと！？」

ナギの声がみんなの声を代弁する

「くく・・本当なら・・戦争の起きた地で・・数多の死体を相手に使うはずでしたが・・・」

男の手にいつの間にか気で作られたクナイが何本も握られている

「!?何をする気じゃ!?」

「ふはははは!!」バババッ!

ドスドスドスッ!

「うぐっ!」「ぐはっ!」「げほぉっ!」

男は周囲にクナイを投げつけ、虫の息となっていた帝国の兵士達に次々とトドメを刺しだした。

「ふはは!」バババッ!

ドスドスドスッ!

「ぎゃっ!」「ひゃぶっ!」「かはっ!」

「てめぇ!やめろ!」ヒュッ!

ナギがその狂った行為を止めに入るが、

バシィッ!

焦ったパンチは男に軽く止められてしまった。

「ふふはは・・・【フォルカッション】!」

「!しまった!!」

ギュウォォォ・・

「ナギ！」

「いかん！」ヒュオッ！

俺より速くゼクトさんが飛び出し、

「馬鹿弟子がっ！」ドガッ！

「うぐっ！」

「！」

ズザァァッ！

ナギを蹴り飛ばして男の手から離させる。

二人は俺から見て男を挟んで反対側へと着地した。

「ハァッ、ハァッ・・す、すまねぇ、お師匠・・」

「ふん。頭に来る気持ちはわからんでもないが・・今の突撃は最悪じゃ。」

「ああ・・。」

ナギはギリギリ無事なようだがかなり魔力が減っているのがわかる。

その分男から感じる力が増している。

その間にも男は周囲の兵士達へクナイを投げつけることを止めない。

ドスドスドスッ！

「ふははは・・・さて・・」

男は周囲に居た何百人もの兵士達にトドメをさし終えたのか動きを止めた。

死んだ兵士達の中にはラッソの姿もある。

「・・あなた達にお見せしましょう。・・この国の・・かつての宮廷呪術師・・ユンナの残した秘術を・・」

「ユンナだって!?」

「相棒!?」

（ここでその名前が出てくるのか！）

男はばっと両手を広げる

「さあ・・私と一つになりましょうねぃ・・」

キュウゥゥゥゥゥ・・・

周りの兵士達の死体が徐々に光を放ち、死体から何かが光の塊となって男の方へと吸い寄せられていく。

「ふはは・・」

「「「！！」」」

シュウォォォォッ！

死体から出てきた光の塊が、次々に男の顔のゴーグルへと吸い込まれていく。

「くっ！魔法の射手・連弾・雷の３１矢！」ズァッ！

「魔法の射手・連弾・炎の５３矢！」ボアァッ！

ナギと俺が前後から攻撃するが

バキキィンッ！

「くそっ！」

「駄目か！」

しかし魔法の射手は男の発する障壁に容易く遮られた。

「ふはは・・いい・・・とてもとても・・いい！」

シュオオォォォォッ！

「ふはは・・・これこそ・・宮廷呪術師ユンナの残した「魂吸いの秘術」！」

ズオォォォ・・

僅かな間に数百人分の光の塊を取り込んでいく男からは、目も眩む程の強大なオーラが立ち上っている。

「ぐ・・お前は・・まさか・・・この為に戦争を・・・!?」

「クレイ・・」

胸を抑えているクレイさんが訪ねる。その横でエリーナさんがクレイさんを支えている。

「そう・・そうです・・私は侵略などどうでもよい・・私が欲しいのは・・力・・」

「貴様・・」

「この術も・・・呪砲と同様いまだ未完成・・・死体相手にしか使えない・・ですから私は・・皇帝に取り入り・・あなた方二人を捕らえるよう進言しました・・くく・・戦争さえ起これば・・この術で私は・・もっともっと強くなれる・・」

男は魂を吸収している為なのか不気味なほどに饒舌だ。

「世迷い言はあの世で言うんじゃな。」

「！」

ゴッ！

ゼクトさんが男の真後ろに出現したと同時に強烈なパンチを顔面に放った。

「・・・ふはは。効きませんね。」

「ちっ」バッ

しかし男は全くダメージを受けていない。仕方なくゼクトさんは距離を取る

ヒュッ

「遅いですねぃ」

「！！」

ガッ！

距離を取ったハズのゼクトさんの真後ろに男が出現、顔を捕まれている！

「・・【フォルカッション】」

ギュウオォオォオッ！

「ぐうぅ・・ッ！」

「ゼクトさんっ！？」「お師匠！」バッ！

ナギが突撃し、

「海破斬！」ビュゴッ！

俺もそれを援護する！

「！」バシッ！

斬撃はあっさりと跳ね除けられたが

「うらぁ！」ガシィッ！

「うっ・・」「うがっ！」ドサァッ

ゼクトさんはナギが抱きかかえてなんとか助け出せたようだ。

だがナギは今のが全力だったのか起き上がりはしたがフラフラだ。

「ふはは・・・まぁ・・・よいです。」

（くそが！）

俺は変身しようと自分の中に意識を向ける。

「はぁぁぁ・・・では次は・・・」

男が俺とクレイさん達の方を見渡す。

「くくく・・そうですねぃ・・あなた方も・・私と一つになりますか？」

シュバババッ！

男が気のクナイを俺とクレイさん達の方へ投げつけてきた！

「くっ！」ギギンッ！

「させません！」ヴォン！

俺は変身を止めて剣で弾き、アルが詠春さんを背負ったまま広範囲に障壁を展開して防ぐ。

が・・障壁が弱い！

パリィッ

「！・・くっ！」

一発が突き抜けてクレイさんの方へ！

「クレイさん！避け・・」

「クレイ！」ドンッ！

「なっ！？」

ドスッ！

「あぐっ・・！」

エリーナさんがクレイさんを庇って！？

ドサッ

「！！エリーナ・・・エリーナァァァッ！！！」

クナイがエリーナさんの腹部に直撃している！

「ヤバイッ！」ダッ

俺はエリーナさんの側へ瞬動で寄るとすぐさま回復呪文をかける。

『アプリフ！』パアアアッ！

「う・・・・」

（ダメだ・・これは俺の回復魔法だけじゃ・・）

「アル！」

「くっ・・」パァッ

アルも咄嗟に治癒魔法を掛けるが、弱い。

「すみません・・・私にはもう・・魔力が・・」

確かにさっきからクレイさんと詠春さんの回復をしてるみたいだし障壁も・・

「かは・・・」

そうしている間にエリーナさんの顔から血の気が引いていく

（助けなきゃ・・・！）

自分の使える技・・アプリフでダメなら・・

（・・・できろよ！！）

「・・・『トプリフ』！」カッ！

シュバァァァッ！

（・・・できたっ！！）

アプリフより強力な回復魔法、なんとか発動できた。

これで駄目だと・・

「うっ・・」スゥゥ

僅かにだがエリーナさんの顔色が良くなる。

「ううううう！」シュバアァァァッ！

龍の力をありったけ込める。

「く・・・ふ・・」

傷が塞がっていく。呼吸も落ち着いてきた。

「くううううっ！」シュバアァァッ！

「・・は・・う・・」

なんとか顔色も戻った。ぎりぎりで持ち直せたようだ。

「はぁっ・・はっ・・はっ・・」

（これで・・・なんとか・・）

本気で危なかった。今のは。一歩間違えれば・・・死んでいた。

「ふはは・・死にませんでしたか・・急所に当たったと思ったのですがねぃ・・」

「！」

男はこちらの行動をじっと見ていたらしい。

「くくく・・・もう少しで・・・王女も私と一つになれたのですがねぃ・・」

「・・・」

「まぁ良い・・・力の無い者の魂など・・塵以下・・・」

「・・・」

「くくく・・・ニエとしてならまだ使い道もありましたがねぃ・・」

「・・・」

「まだまだこの場には力のある魂がありますし・・・そんなカスは要りません・・」

「・・・」

「くくく・・それにしても・・不思議な魔法・・・とてもいい・・・」

「・・・」

シュウウゥゥゥゥ

「スイッチ」が勝手に入る。

「くくく・・・次は・・あなたです・・」

男の指が俺へと向けられる。

「その不思議な力・・・いただきますねぃ。」

「・・・」

さっきから言いたいことがごちゃごちゃしてうまく言葉に出来ない。

ブアァッ！

「！・・その姿は・・？」

俺は既にドラゴナイズドフォームへと姿を変えている。

「・・・」

「ふはは・・いい・・その力・・とても・・とても！」

男がこっちへゆっくりと向かってくる。

俺は立ち上がり、静かに力を溜める

「Ｄ－チャージ・・」

俺は感謝していた

「Ｄ－チャージ」

存在するのかもわからない神に

「D－チャージ」

今俺にこの力が在るということを

「D－チャージ」

倫理観だなんだというのはどうでもいい

「D－チャージ！」

今だけは感情を抑えるつもりはない

「D－チャージッ！」

頭に角のような物が生えてくる

「D－チャージ！！」

両肩から胸の中心へ輝く入墨のような模様が浮き出る

「D－チャージッ！！」

両目から顎へ向けて輝く入墨のような模様が走る

「！！」

男は俺が発する威圧感に歩みが止まった

「・・・【フォルカッション】！！」

パキィィン！

男が離れた位置から手をこちらへ向けて攻撃してくるが、それは俺に効果を上げる事もなく弾かれる。

龍の力は普通の人間には扱えない。

「・・・これはどうです！」ズアァッ！

男の周囲に三千を優に越える大量の魔法の射手が浮かぶ。

ズドドドドドドド！

「・・・」

「！？」

ドラゴナイズドフォームに生半可な攻撃は通用しない。

「・・Ｄ－チャージッ！！！」

ゴァッ！

両手両足と背中のバーニアから炎のような龍の力が吹き出す。

ナギ達が俺と男の一挙手一投足を見守っている。

フッ

背中のバーニアに意識を向けただけで、瞬時に男の目の前に移動す

る。

「！」

「・・・」

「ふ、ふはは・・これは！」ビュッ

男は俺めがけて釘を振るう。太刀筋から見て斬岩剣。

ドッ！

「なっ！？」

「・・・」

釘は俺の皮膚でピタリと止まっている。

「く・・」

「・・Ｄ－チャージッッ！！！」

ゴゥッ！

足元から激しい龍の力が吹き上げる

「あ・・ふ・・・ふは・・」ズズッ・・

後ずさる男に、感情の赴くままに腕に宿る膨大な龍の力を振るう！

「タル・・」ヒュンッ・・

ゾ　バ　ッ　！

「・・ッ！！！」

ズシャァッ！

刹那の瞬間に男の胴体が二つに分かれ、一泊遅れて後ろの地面に底の見えない亀裂が走る

「・・ナーダッ！！」

ゴ　ッ　！

「ッ！・・・」

ドズンッ！

続く一撃で男の全ての部位が砕けて空中へと打ち上げられ、余波で離れた城壁の一部が消し飛ぶ。

「・・・」スッ

そして俺はゆっくり腕を向ける。

「男だった物」へと。

龍の力を怒りと共に。

「ウオオオオッ！」カッ！

ドギュオオオオオオオオ！！！

その腕から極大のＤ－ブレスが放たれ

ジュッ！

あっけない音を立てて「男だった物」は塵一つ残さず蒸発する

ギュオオオオオオオオ

それでも衰えない龍の力の極光は、怒り狂うドラゴンのように天へと昇って行くのだった。

第六章　１０、帰還

あの後、俺達はフォウ帝国を後にしてウィンディアへと戻ってきていた。

恥ずかしながら俺達は全員フラフラだったため、エリーナさんとクレイさんはフーレンの戦士達が一足早くウィンディア城へと連れて行き、怪我等は呼びつけた魔導師が治してくれていた。

俺自身には直接的なダメージはなかったが、Ｄ－チャージ×１０のせいで全身の疲労感が凄まじくてやはりフラフラだった。

「男」がユンナさんの名を出していたことが少し気になり、ボッシュと共に身体に鞭打って帰る前にこっそり城内部を調べたが、特にそれらしい資料などは発見できなかった。

恐らくすでに男が消していたのだろう。

それでもって城で一晩お世話になり、今現在はというと・・

「本当に・・君達には感謝の言葉もない・・」

「まー気にすんな王さｍ「ゲシッ」・・ってぇな何すんだ詠春てめー！」

「お前はアホか！？いい加減タメ口をやめろ！相手は一国の王なんだぞ！？」

「だってよー・・」

「だっても何もない！」

王様の眼前でＴＰＯを弁えずに兄弟漫才が繰り広げられていたりする。

まぁそのおかげで堅苦しさが微塵も無いのはありがたい。

フォウ帝国に関しては兵は全滅、皇帝も死亡で実質的に崩壊だ。

取り合えずこちらは被害もなくみんな無事に終わったし、結果だけをみれば大団円って感じだろうか。

「・・・あー、なんだ。その、ともかく礼を言う。若者達よ。いや、「紅き翼」か。」

「あれはお気になさらないで下さい。」↑笑顔で

横でギャーギャー言ってるナギと詠春さんはスルー。

「うむ。王殿、帝国はこれで壊滅じゃろうが、あの国の住人達は・・」

「それは問題ない。このウィンディアとフーレンの里で支援を行う。これからはよりよい国として生まれ変わるだろう。」

「なら安心ですね。」「おうよ。」

「あなた方には本当に世話になった。」

「私からも心よりお礼を申し上げますわ。」

王様の傍らにいたクレイさんとエリーナさんも俺達に頭を下げていた。

「アルビレオさんとリュウさんはちゃんと約束を守って下さいましたね。」

いやそんな眩しすぎる笑顔を向けられるとその・・・困ります。

「御主たちも、大事にならず良かったの。」

「全くですねぇ。それにしてもあの時のリュウの形相たるや、鬼も裸足で逃げ出すほどでしたよ。」

「まぁ。」

「えーと今それ言いますか・・」

後で知った事だがあの時変身する前の俺は、それはそれは凄いツラをしてたそうだ。

（今度アルと組み手をする時はファイナルベントを・・）

こっそり仕返し策を考えておく。

「さて、君達には是非褒賞を受け取って・・」

「あー、いいっていいって王様。今回のこれは俺達の勝手だ。何も気にするこたねーぜ。」

詠春さんはナギのタメ語の矯正を諦めたようだ。後ろで大きなため息をついている。

「そうですよ。お金なら街や人の支援に回してください。」

俺も別にそれほど興味があるわけでもなし、支援に回してもらった方が気が楽だ。

「そう・・か。あいわかった。君達の要望通り、報償分は支援に回そう。」

「そうですわお父様、一つ彼等にお願いがあるのですがいいでしょうか？」

エリーナさんが両手を合わせて「いいこと思いついた！」って顔してる。

「エリーナよ、これ以上彼等の世話になるのは・・」

「いえ、簡単なことでございますわ。いつか授かる私とクレイの子供の名前を彼等に付けて欲しいのです。」

「こ、子供か。そ、そうだな、ナギやリュウのような強い子に育って欲しいからな。」

若干焦ったようなクレイさん。ムッツリがここにもいたか。

「ふふっ、リュウもあまり人の事は言えませんよ？」

「!？何のことかな!？」

心が読まれた!？

「駄目ですよクレイ、最初は女の子に決まってます。私が必ず女の子にしますから。」

「ぐむ・・」

凄いぱわぁ。意外とクレイさんの方が尻に敷かれる感じがする。

「というわけで皆さん。良かったらいい名前を考えてくれませんか？」

「そうだなー、じゃあリュウ、何か良い名前考えてやってくれや。」

「俺？何故俺だけ？」

周りを見渡してみるが・・

「今回あなたが一番頑張ったじゃないですか。」

「おいしい所持ってかれちまったしなー。」

「ナギよ、あれはお前が悪いぞ？もう少し頭を冷やすことをじゃな・・」

「私はリュウ君なら構わないと思うよ。」

「相棒、いい名前付けてやんな。」

と言った感じだ。

（まいった。名前ねぇ・・しかも女の子・・）

ん～・・・

！

「では「ニーナ」なんていかがでしょう?王家らしい名前だと思うんですが・・」

やはりウィンディアと言えばね。

「まぁ、「ニーナ」・・素敵な名前ね。」

「そうだな。リュウが決めたのなら俺に文句はない。」

良かった。気に入って貰えたようだ。

「ふん、それにはクレイがもう少し自分の責任を重んじるようにならなければな。今のような無鉄砲さではワシは許さんぞ。だいたい・・」

「・・面目ありません・・。」

王様に小突かれて小さくなるクレイさん。やはり王様も親ですな。

一通りクレイさんに小言を言ってスッキリしたような王様はこちらへと向き直った。

「君たち「紅き翼」はエリーナの・・そして我が国の恩人だ。またいつでも来るがいい。その時は国を挙げて歓迎するぞ！」

「いやそんな大げさなのは・・なぁ？」

ナギがみんなに視線を向ける。

「王殿、ワシらには普通に対応して貰えれば結構じゃ。気遣いは無用でお願いする。」

「王様。その歓待にかかる費用も全て支援の方に回してください。その方がより役に立つでしょう。」

「・・あいわかった。」

みんな結構無欲だなぁ・・・

「そのときはフーレンの里にも是非立ち寄ってくれ。あなた方「紅き翼」は里にとっても恩人だ。今や里ではあなた方の武勇伝で持ちきりだからな。」

苦笑したクレイさんの呟きで、また一つ「紅き翼」の名声が広まったことを再確認した。

（どんな噂になっているやら・・）

なんだかんだと俺たち紅き翼の活躍で国の危機も回避し、俺達はウィンディア王国を後にするのだった。

その後フーレンの里の一部で、ナギの率いる「紅き翼」には龍を操る騎士「龍騎（ドラゴン・ナイト）」が居るとされる噂が流行るが、それはスルー。

続く

第六章　１０、帰還（後書き）

六章終わりです。

ここまで読んで下さった皆様、まことにありがとうございます。

もし言いたい事とかお叱りとかありましたら感想等でご一報下さい。

真摯に受け止める次第です。

第七章　1、今後

俺達は今大海原で船に乗っている。

ウィンディア地方から一旦メガロメセンブリアへ帰ろうということになり、本来なら何日かかけて歩いて帰るところなのだが、ナギが今後のことについて少し話し合いたいと言ったのを聞いていた王様がそれならば是非使ってくれと気を利かせてくれたのだ。

せめてこれぐらいはさせて欲しいとのことだったので無碍にもできず、お言葉に甘える事にした。

船の見た目は古風な大ガレオン船であるが、その心臓部はウィンディアでも珍しい高度な機械技術で作られた高速船とのことだ。

王家御用達であり、巨大なマストに張られた何枚もの帆にはウィンディアの国章が刻まれている。

なんと海空両用で、大陸から海へ出るまでは普通に空を飛んでいたのがなんともシュールな絵であった。

別にそのまま空を行けばいいのにと思うのだが、そこはやはり船であるからして、船員達が頑なに海を行くと主張して譲らなかった。

船乗りとしての拘りらしい。

まぁ特に急ぎの用があるわけでもないし、所要時間は3日くらいなので別段問題はなかったが。

そして今、俺達はナギの話というのを聞こうと船内でテーブルを囲んでいた。

「で、ナギ、話とはどういったことなのですか？」

「今度は何思いついたん？人助けの次はモンスター退治とか？」

何を言い出すのやら。

「ちげーよ。ちょっと俺たちの力不足ってヤツを痛感してな。」

「ほう・・ワシらが弱い・・と？」

意外な発言だ。

「そう言うわけじゃねぇ。自惚れてるわけじゃねーが、俺達は強い。それこそ余程の事がねぇ限り負けねぇと思う。」

「ならばどういうことだ？」

詠春さんもナギの思考を測りかねているようだ。

「ああ、今回あの出来事はその「余程の事」だったと俺は思ってんだ。なんとかお姫さんを守れて、あの気味悪い男を倒せたのは・・リュウのおかげだ。」

「あー、まぁ確かにトドメは刺したけど・・」

変身したドラゴナイズドフォームはある意味反則だし。

「そう、リュウの力がなけりゃ俺達はあそこで全滅してた。だから俺はもっともっと強くなりてぇ。今のままだと本当の強敵と当たった時に今回と同じ事になるかも知れねぇ。」

「確かにそうかも知れませんね。」

いつの間にか随分と俺の株が上がってるなぁ

「だからな、一度個人個人で色々世界を周って力をつけた方がいいと思うんだ。」

「ふむ、一理あるの。ワシらもこの辺りで一度基本に立ち戻り、強化する必要があるやも知れぬ。」

「そうだな。私もまだまだ修行が足りない。こうして全員で居てもいいが、甘さが出ることもあるし、な。」

全員その意見には賛成のようだ。

俺も別に異論はない。

「よし、じゃあメガロメセンブリアについたら各自一旦自由行動にする。ただ、今回の目的は「人助け」と「強くなること」だ。」

「わかりました。」

「うむ。」

「了解だ。だが連絡は取れるようにしておいた方がいいな。」

「っと、確かにそうだな。まぁそれはあっち着いたら考えようぜ。」

「うい。しかし自由行動かー。どうしよっかな・・。」

「相棒、適当に依頼でも見繕ったらどうでぇ？」

「そうだな・・・」

今後の事について少し考えてみる。

このまま行くと確かあと2~3年もすれば大戦が始まったはずだ。

それによって「紅き翼」の名は爆発的に広まった。

だが今、その紅き翼には俺が居る。

戦争が起きるってわかってるのに止めない手はない。

人死になんか出ない方がいいに決まってるだろ常識的に考えて。

普通の人にとってはのんびり釣りとかゲームとかできる日常こそが大事だと元大学生の俺は考える。

何の因果か俺には力があるし、できることはやろうと思うわけだ。

候補としてはまず根本原因となるだろう「完全なる世界」だったか

の組織をどうにかすること。

確かウェスなんちゃら国の王都「オスティア」とそこの姫「アスナ」がキーだった筈だ。

だが今の状況じゃその国は普通に存在してるし、乗り込んだ所で暴れるくらいしかできないから単なるテロになるのがオチだ。

ナギ達の助力を得るにも今はまだ何も大っぴらになってないのだから信用されないだろうし。

となるとできるのは早めに「完全なる世界」の幹部とかの正体掴んで暴露することや戦争の火種になりそうな問題をとっとと解決する事とか、あとは俺自身の強化。

それ以上は思いついたらだな。

下手に大きく動いたりしたら暗殺とかも怖いし。

懸念事項としてはブレスっぽい世界でもあるということ。

この事がどのように影響するのかは未知数だ。

まぁ少なくともあと1年は余裕があると思われるしどうにかやろう。

そんなことをごちゃごちゃと考えつつ、船旅は穏やかに進んでいった。

そのまま2日経ち、航路の3／4を過ぎた来た頃・・

ゴォォォン！

ちょうど集まって朝食を取っていた時、船が大きく揺れた。

「「「「「「！？」」」」」」

「なんだぁ？」

「岩礁に乗り上げでもしたかの？」

「まさか。この船はウィンディアの選りすぐりの船員が操舵しているのですよ？」

「甲板へ見に行こうか。」

原因が気になったので俺達は船室を出て甲板へと急いだ。

「あ、皆さん。」

甲板では船員が何人か集まって海の方を覗いていた。

「何かあったのですか？」

「いえ、何かが船に体当たりをしているようで・・」

「体当たりだぁ？」

「魔物の類かの？」

「それが・・どうにもわからなくて困っているんです。」

「はぁ、まぁ魔物だろ。んじゃ俺が・・魔法の射手・連弾・雷の１７矢！」

ズシャシャシャシャ！

ナギの魔法の射手が船の周囲を爆撃する。

バシャァッ！

「何だ！？」

「イルカだ！大量に居るぞ！」

魔法の射手に驚いたのか、辺りから船を囲むようにイルカ（多分）の群れが現れた。

「なんでぃイルカかい。」

「これはいいものが見れましたねぇ」

（魔法世界でもこういった普通のイルカは居るんだなぁ。）

バッシャバッシャと飛び跳ねるイルカの群れを見ながらそう思って和んでいると、詠春さんが何かに気付いたのか群れの中心を指さした。

「いやまて、あの真ん中の一頭・・人が乗っていないか？」

「本当だ！」「馬鹿な！？」「何だあれは！？」

その指摘に船員達が騒ぎ出す。

「ぬぅぅぅぅっはぁーーーーーーー！」バッ！

イルカに跨っていたその男は、暑苦しい雄叫びと共に空高くジャンプした！

宙を舞い、太陽に照らされ、水滴の滴るその筋肉はまさに鋼鉄！

その男、否、漢はズドムッ！とマストへと着地した。

「はぁーはっはっは！また会ったな「紅き翼」！今度こそこのラ・カーンが貴様等に引導を渡してくれる！」

「「「「「・・・」」」」」

ビシィッと俺たちを指さすカーンに、俺は何とも言えない呆れたような視線を向けながら相方を促す。

「ボッシュ。」

「おう、魔法の射手・・」

「ぬふぁ！前回のような轍は踏まん！先手必勝！とぅ！」バッ！

掛け声一発マストから飛び降りたカーンの腕に巨大な気の波動が！

「これは・・」

「・・まさか」

全員がその気の量に警戒態勢を取った。

「これぞ荒波に揉まれて生まれた俺の新必殺技！くらえぇぇい！「散・烈・拳」！！」

ズドドドド！

「なにぃ！？」

カーンの突き出した拳から気の散弾が放たれ、俺たち目掛け飛来する！

ズダダダダダッ！

「くっ！大丈夫かお前等！」

「ええ、大丈夫です。」

「どうやら命中率に難があるようじゃの」

「あービックリした。」

散弾は俺たちを掠めたが、特に誰が被弾したわけでもなかった。

一発一発の威力は低い上に命中率も悪いが、これだけの技をあのカーンが放ってきたのが驚きだ。

まぁもちろん今の一撃はラーニングできちゃったけれども。

スタン！

甲板に降り立ったカーンがニヤリと不適にこちらを一瞥する

「野郎・・生意気にも修行してきたってわけだな。」

「ふふ、ではその心意気に答えてあげましょうか・・」

ナギとアルが戦闘態勢を取ると同時に

「ぐふぁ！」

カーンは血を吐き

「どうやら・・ここまでのようだな・・」ニヤッ

ドシャッ

倒れた。

「「「「「「・・・」」」」」」

「えーと・・？」

「今の一発で気を使い果たしたようですね。」

「「「「「「・・・」」」」」」

このハゲ・・・

「ナギ、足の方よろしく。」

「おう。」

ガシッ

俺がカーンの腕、ナギが足を持ち上げ、見事なコンビネーションで勢いを付け・・

「せーのっ・・」

「「そぉい！！」」ブンッ！

ざっぱぁんっ！

そして思いっきり海へと放逐されるカーン。

なんかイマイチ締まらない海上の旅であった。

第七章　1、今後（後書き）

∩
（　゜∀゜）彡　カーン！カーン！
⊂彡

第七章　2、港町

「お前だけと旅すんのも久々だよな。」

「本当だなぁ相棒。」

俺とボッシュは飛行船を降り、乗り場から港町シュークへと向かっていた。

久々の単独?行動である。

本来なら「完全なる世界」の情報収集でもするはずだったが、何故こんな所に居るかというと・・・金が欲しいのだ。

理由はメガロメセンブリアでそれぞれの連絡用に携帯電話のような「テレコーダー」という装置を全員分購入したことによる。

腕輪のような装置で登録してあるテレコーダーを呼び出して離れた相手と会話できるというものだ。

もし何かがあって誰かの協力を得たくなった時や、緊急事態が発生した時の為にというわけだ。

俺はパクティオーが出来ないので、この装置はありがたい。

だが実際この装置めっちゃ高かった。

5人分で活動資金のほとんどを食い尽くすハメになってしまった。

なので取り合えず「悠久の風」の依頼を受けてみたのだ。

一応事前にナギに出された条件の

1、困ってる人などは必ず助ける

2、今以上に強くなること

の2点を満たせそうな感じ＋報酬ありのものを適当に見繕った。

ついでにどこかで情報でも集められれば恩の字と言った所だ。

今では割と安定しているが変身にばかり頼るのは何か嫌だし、力試し的な意味も少しある。

余談だけどこの前のはよくあれで暴走しなかったと今更だが思う。

シュークはメガロメセンブリアから見て北側、龍山山脈のある大陸の端っこにある風光明媚な港町だ。

この大陸では食料の生産がうまくいかないため、近くに魔法を利用した食料生産工場もあるらしい。

飛行船乗り場からさして離れているわけでもないので町にはすぐに着いた。

「さーて着いたな港町。」

「おうよ。で、どーするね相棒？」

ボッシュはポーチに大分慣れてきたのか、最近はモッパラそっちに入っている。

「基本は宿屋でしょ。それと「悠久の風」支部かな。」

「おう。んじゃあ行こうぜ。」

港町だけあって海の匂いがする。

先日の船旅もあるし釣り好きの俺としては問題ないが、普通の人だとどことなく生臭く感じるあの匂いだ。

街人は船乗りや漁師が多く、酒場はなかなか繁盛していることだろう。

依頼内容は灯台を荒らすモンスター退治。

そんなに手古摺ったりはしないと思われる。

この街には数少ない「悠久の風」支部があるので、俺とボッシュはそこへと向かった。

「相棒よぅ。」

「何か？」

「俺っち達ゃ支部へ行くんだったよな？」

「そうだけど？」

「ならよぅ・・」

「なんだよ？」

「なんでおめーわ暢気に釣りなんざやってやがんだぁ！」

「いやだってさ・・」

「いいんかそれでよぉ！」

仕方がなかった。支部への道を歩いて居たらふと釣り場の看板を発見したのだ。

さらに「今日は食いつきが良かったぜ」なんて世間話が聞えてきたならば、そちらへ足が向いてしまうのはコーラを飲んだらゲップが出るっていうくらいに極々当たり前のことなのだ。

これで行かなければ釣り好きの名がすたると云ふものである。

釣り場には幾人か人がいたが皆良い顔をしていた。アタリがいいという話は本当らしい。

広くて岩だらけの海岸だが、よさげな場所に腰を降ろして俺は釣り

を楽しんでいた。

ビィンッ！

「お！キタキタァ！！」ぐぐっ！

（これは中々の手応え。大物と見た！）

「はぁ・・」

ボッシュが老け込んだように見えたがカレイにスルーし、俺はしばらく趣味に没頭した。

「すみません、そちらの依頼はもう達成済みなんですよ。」

「へ？」

一通り釣り終えて中々の釣果に満足した俺は、日も沈みかけた時分に「支部」を訪れていた。

「え、でもこの依頼って受理されてからまだそんなに時間経ってないですよね？」

「ええ、ですがもう既に解決しています。あれが証拠の品です。」

そう言って受付の人が指をさす先には巨大なゲソのようなものがあ

る。

「あれが灯台を襲っていた「アンモナイカ」の脚です。」

「はぁ・・」

「だぁから俺っちは早く行こうぜって何度も何度も・・」

「うるさいだまれ。」

どうやら俺がこなそうと思っていた依頼は既に達成されていたらしい。

本部でこの依頼の発行日付を見た時、最新だったからまだ誰も手を付けてないだろうと思ったが甘かったようだ。

決して俺が釣りにかまけていたからではない。きっと多分十中八九恐らく。

「・・そうですか。」

「はい、また何かありましたらよろしくお願いしますね。」

まいった。初っ端からこういうオチとは。

ちょっとテンションを落としつつ、受付から去ろうとした時

「・・それは悪いことをしたわね、君。」

「え?」

横から突然話しかけられた。

「君が誰かは知らないけれど、手柄は私達「レンジャー」が頂きましたよ。」

そこには銀髪のショートカットにメガネ、凛々しい顔立ち、緑を基調とした動きやすそうな服を着た女性と

「でもー、ちょっとだけ苦戦したわよー？」

青い帽子に青い学者風コート、ピンクの長髪を二手に編みこんだ中折れ兎耳？のメガネの女性、

「ふん、モモ、私たちに掛かればあの程度造作もない。余計なことは言うな。」

赤紫の忍者を彷彿とさせる装束を身に付け、腰には銃を下げており、髪はまとめて後ろにお団子にしている少しつり気味な目の狐耳っぽい女性。（尻尾つき）

3人の美女が立っていた。

「モモ、アースラ、そろそろ行きますよ。」

「は～いゼノ隊長。」「・・了解。」

（ふおおおお！？）

この瞬間俺の頭から仕事の事など消えうせた。

今目の前に居るのは紛れもなくブレスの３４５に出てくる女性達。

それぞれ傾向は違うものの美人揃い！

そしてその服の上からでもわかる圧倒的なボリューム感！

一人はメガネきゅぬー、一人はケモノ耳きょぬー、さらに一人はその両方とかマジで俺によし！

これでテンション上がらない男など居るだろうか。いや、居ない！

（是非ともお近づきになりたい！）

「あ、あの！」

「？なんでしょう、何か用ですか？」

リーダー格と思しきゼノと呼ばれた女性が振り向く。

「あの・・もし良かったらですけど・・この後どこかでお話でもしませんか？」

「「「・・・」」」

一瞬沈黙が場を支配した。

「ぷ・・くくく・・・」

「・・くっ・・あははは！」

「君ー、それナンパ？」

「えぁ！？あーいやそのちょっと話を・・って」

そう取られても仕方ない・・よなぁ今の。何言ってんだ俺。

チラッと腰のポーチを見るとボッシュが呆れた目をこちらへ向けている。

「くくっ・・・い、いいですよ。ふふ・・こんな少年から声を掛けられるとは思いませんでしたが・・」

そんな笑わなくても・・

「ぷ・・くっく、見る目あるわね坊や。名前を聞こうか？」

「あ、俺は「紅き翼」のリュウって言います。」

「「「！」」」

なんか3人の顔色が変わった。

「紅き翼・・」

目がなんかこえーよゼノさん。

「こんな子供が？」

そんな胡散臭そうな目で見られても困りますアースラさん

「それ本当ー？」

わずかに首を傾げるモモさんは実に癒し系だ。

「？えーと・・本当ですけど何か？」

何だろうこの妙な空気・・

「・・私達も「悠久の風」に登録している団体ですから、君達「紅き翼」の噂は耳にしています。」

「はぁ・・」

「曰く、火山の噴火を止めた、曰く、邪悪な国を一つ消し去った。他にも色々とやっているそうじゃないか。」

噂はえーな。しかし色々の部分がナギ達が何をやらかしたのか怖い。

「えーと、それがなにか・・」

「私達はー、新興勢力だからねー、桁違いのその活躍が羨ましいのよー。」

なるほど。

「こらモモ！・・コホン！あなたが紅き翼の一員であるというなら・・」

「・・・いうなら？」

すっげーやな予感

「「私達と勝負なさい！」」

「ええー！？」

いやその理屈はおかしい。

「いやいや何故？だって・・」

「ちなみに断ったら、「紅き翼」は私達「レンジャー」に恐れをなしたって言いふらすわよ？」

その黒い顔、美人が台無しだよアースラさん・・

しかし・・そんなことになったらナギ達に申し訳が立たない。

俺としても少しはプライドのようなものもある。

「・・わかりました。」

「さすがね「紅き翼」。しかし今日はもう遅いですし、明日の午前１０時、町の北にある原っぱへ来なさい。」

「フフン、楽しみにしている。」

「またねー。」

悠々と去っていくゼノさんアースラさんモモさん。

「どうしてこうなった・・」

「相棒、気ぃ落とすなって。」

俺は明日の事を考えて憂鬱のまま宿へ向かった。

第七章　3、慢心

「よく来ましたね。」

「逃げずに来たことは誉めてあげるよ。」

「でもそんな装備で大丈夫ー？」

「あー・・まぁ大丈夫ですよ。多分。」

時間どおりに指定された場所へ来てみると、美女たちが臨戦態勢で待ちかまえていた。

美しい女性が待っているという状況なのにこれほど嬉しくないというのも珍しい。

で、現在俺の前にいる3人の女性は各々得物を手に武装している。

ゼノさんは剣を、アースラさんは銃を、モモさんはバズーカを。

この辺は俺の記憶にある装備と一緒だ。

隊形はゼノさんを頂点とした二等辺三角形、ワントップ型だ。

「さて・・噂に聞く紅き翼の力・・試させてもらうぞ！」

なんかゼノさんの口調が変わった！？

「・・・お手柔らかにお願いします。」

ヒュパッとドラゴンズ・ティアからスクラマサクスを取り出す。

カッツバルゲルは両刃だし、みねうちなら刃こぼれも関係ないのでこちらを使う。

ボッシュはいつものポーチに納まっている。

「では・・・参る！」

ゼノさんの顔つきと目つきが変わり、獲物を狩る目になった！

「ハッ！」ビュオッ！

（！結構速い！）

見事なダッシュでゼノさんが踏み込んできた。

「ふっ！」ビュッ！

ギィンッ！

「くっ」

剣と剣の打ち合い。太刀筋は詠春さんに及ばないけどなかなか・・

「ふっ！はっ！」

「お！っと！」ギッ！ギィン！

何合か打ち合う。パワーはそれほどでもないけど手数が多いのは神鳴流とは違うな・・

「はぁっ！」ブンッ！

「うおっ！」ヒュッ

小回りの利く素早い剣技と切り結ぶということ自体にあまり慣れていない為、後ろに跳んで一先ず距離を・・

「そこ！」ダンッ！

「おわっ！？」チュインッ！

（アースラさんの銃か！？）

危うく剣の腹で受けたが、俺の着地点に向けて的確な銃弾が飛んできた！

「ほらほら！」ダダンッ！

「くっ！」ギン！ビシュッ！

（痛っ！）

弾丸が頬を掠める。

「余所見をしている余裕があるかしら！」ビュオッ

「！！」ギィンッ！

いつの間にかゼノさんに距離を詰められ、斬撃を受けた。

「なんか・・こっちの動きが？」

さっきからどうにもかわし辛いのが気にかかる！

「ならこっちも！」ギィン！

「っ！」

ゼノさんの剣を力任せに弾く！一瞬だがこれでガードはできないはず！

「くらえ海破・・」

「貫け！」

「！？」バッ！

アースラさんの声に反応して咄嗟にその場からバックステップ。

ズオン！

直後、それまで居た個所に青いビームが通り過ぎた。

「あっぶねーなんだ今の・・」

「チッ、モモ！出力の調整しとけと言っただろう！」

「えー・・でも高出力高威力が私の信条・・」

「後で直しておけ！」

アースラさんとモモさんが向こうで何か言いあってる

（あの銃、モモさん作か・・）

「ふっ、またも余所見とは随分と余裕を見せてくれる！」ビュッ！

「おわっ！」チッ！

踏み込みの突きをギリギリでかわし、銃弾が掠った方とは反対の頬が斬られる。

（ていうか直撃したら死ぬだろこれ！？）バッ

もう一度後ろへバックステップして距離を取る。

アースラさん・モモさんとはかなり距離が離れたから少し余裕ができた。

それにしても何故かこっちの動きが見切られている気がする。

可能性があるとしたら・・モモさんかな。

唯一戦闘に加わってないように見えるが、何かこちらの動きを「し

きべつ」して

念話か何かで伝えたりしてるに違いない。

推測だけど他には思い当たらないし、取り合えず真っ先に潰してみる。

「ハサート！」パァッ！

速さを上げて一気に近付く・・

「おっと！そうはいかない。」ザッ

「！」

ゼノさんが剣でこちらの進路を塞いだ。

「どうやら気付いたようね。しかし、私とアースラから逃れられるとでも？」

「・・・」

こちらの動く先が読まれているなら二人の連携を止めるのは難しい。

「そろそろ仕留めさせて貰う。」ジャキッ！

「！二刀流！？」

ゼノさんはもう一本の剣を取り出し、こちらに対して構える

そう言えば、「ゼノ」は二刀流だった。すっかり失念していた！

「はっ！」ビュッ！

「くう！」ギギィン！

一気に手数が倍になった。次から次へと繰り出してくる剣撃を何とか一本で捌く。

「流石は「紅き翼」、大した腕だが・・」

「！」

剣撃を捌く傍ら、視界に一瞬だが人影が映った。

アースラさんが位置を調整している！

「くらえ！」ドゥン！

「ちょ！？」

今度はミサイル！？なんだあの銃！？

「くそっ！」バッ！

ミサイルに備えて剣撃がやんだ一瞬を突き、真上へとジャンプする。

とりあえずこれで・・

「これで逃げられた・・なんて思ってないでしょうね？」

「！」

ゼノさんの剣に気が集中している！

（これは・・！？）

「秘剣・・『絶命剣』！」

ズドゥウン！！

「うわっ！」

ゼノさんが構えた剣の内の一本を地に突き刺すと、そこから気の塊が間欠泉のように噴出した。

「くっ！」ビュオッ！

直撃する前に虚空瞬動でギリギリ避ける。

「やはりこちらへ来たな。」

「！！やべっ！！」

しかし飛んだ先には既にアースラさんが銃を構えていた。

「これで・・砕け散るがいい！」

ズダダダダダ！！

「うおおおお！？」ビュオッ！

マシンガンのように銃から弾丸が荒れ狂う！

咄嗟に方向転換の虚空瞬動でまたもやギリギリでかわすが

「うがっ！」ズザッ！

無理な姿勢の瞬動だったため肩口から地面に突っ込んだ。

もうゼノさんとアースラさんがこちらへと迫ってきている。

（・・これはもうとにかくモモさんをまず止めるしかないな！）

こうまでこっちの動きを読まれちゃたまらん！

幸い今なら俺とモモさんの間に障害物はない。

「うおおおっ！」ヒュオッ！

全力の瞬動。

さすがにゼノさんも追いつけないはず！

「あらーこっちに来たのー？」

モモさんが俺に向けてバズーカを構えているのが見える。

だが撃たれる前に倒す！

ヒュオ！

「え？」

バズーカのスコープを覗いているモモさんの懐に入り、

「悪いですけど、眠ってもらいますよ！！」ゴォッ！

鳩尾に拳をお見舞いす・・

スカッ！

「あ・・れ？」

拳に来るはずの衝撃が・・来ない？

「かかったわねー。」

「！？」

俺の後ろに！？どうやって！？

「ふふっ！」ピピピッ！

「しまっ・・『カテクト』・・」

ド　ゴ　ム　ッ　！

「うぐうっ！」ズサァァッ！

思いっきり至近距離から背中にバズーカの直撃を食らい、俺は吹き飛とんで地面に顔から着地した。

咄嗟にブレスの防御魔法「カテクト」が間に合ったからいいものの、これは結構ダメージがでかい。

「モモ！あんたそれ昨日言ってた対人用捕縛弾は！？」

「え？あ、対モンスター用のままだ・・。」

「あんたねぇ・・」

なんてアースラさんとモモさんのやりとりが聞こえてきたが構っている余裕がない。

「げはっ・・ア・・『アプリフ』・・」パァァッ

俺は起き上がりながら自分に回復魔法を掛けていた。

「いかがかしら。出し抜かれた気分は。」

ゼノさんがこちらへ歩きながら話し掛けてくる。

「くっ・・」

「ふふん、「紅き翼」ほどの実力者ならこっちのからくりに気付くだろうからね。私達の本命は・・・モモさ。」

「私ってば鈍いから狙われやすくてねー。ごめんねー。」

そういうことか。完全にしてやられた。

まさか全てが撒き餌で弱点だと思ったモモさんこそが罠だったとは。

しかし・・

（最後のアレは・・なんだったんだ？）

確実に捕らえたと思ったのに瞬時に背後に回られた。

モモさんがあんな動きをするとは到底思えない。

（とすると・・技か魔法か・・）

ピンポイントであんな短距離を移動する技か魔法。ネギまかブレスのやつであったか・・

「ホント・・死ぬかと思いました・・よっ！」スタッ

回復魔法であらかたダメージが抜けたので起き上がり、顔の汚れを拭う。

「まさか・・モモさんがあんな技を使うとは・・どんな手を使ったんですか？」

「教えると思うー？」

やっぱり無理か。

「フン、バズーカの直撃に耐えるとは呆れた頑丈さだわ。」

「・・どーも。」

アースラさんの呆れた声にそっけなく答える。

「それにしても回復魔法まで使えるとは・・驚きましたよ。」

ゼノさんが俺の前で構え直し、再びワントップの隊形に戻る。

「・・・・」

正直、侮っていた。

俺は「紅き翼」の面々と日頃から鍛えていたし、ラーニングやなんかで大分強くなった気でいた。

それが今この3人の女性に見事に手玉に取られてしまった。

「・・すみませんでした。」

「「「?」」」

3人とも気を緩めては居ないが?マークが出ているように見える。

「いやこう何か調子に乗ってた自分が情けなくて・・なんというかホントすみませんでした。」

なんか悪い事したような気になったので謝る。

「ほう・・つまり今までは真面目にやってはいなかった・・と?」

いや必死に逃げてました。ここだけの話。

「あーいや、本気でなかったわけじゃないんですが・・まぁもう・・出し惜しみはしませんよ。」

俺はスクラマサクスをドラゴンズ・ティアにしまってからポケットのカードを取り出し、額に近づける。

≪サイフィス、昨日言ったアレ、よろしく！≫

≪心得た！≫

「サイフィスッ！」

カァァァッ！

カードを掲げた俺の頭上に青い東洋の龍が現れる。

「召喚！？」

ゼノさんの顔の険しさが増す

「フン・・面白い。」チャキッ

アースラさんも銃を握り締める

「へぇー今のどうやったのかしら？」

モモさんだけは俺の竜召喚への興味の方が強いらしい。

「戦いの歌（バトルソング）！」ゴァッ！

「「「！」」」

「じゃあ・・いきます！」ビュオッ！

ウオォォン！

俺は3人に対してわざと中心に突っ込んでいく。

サイフィスは俺たちの周りを数メートル離れて回って円状に暴風を巻き起こし、魔力を込めた風の檻を作ってそこから出られないようにする。

「何を！？」キィンッ！

「しまった！？これじゃ！？」

「距離が取れないわねー。」

俺は3人相手に乱戦に持ち込んだ。

これだけ近ければ誤射の可能性のある銃やバズーカを簡単にはぶっ放せないはず。

「くっ」ギン！

「舐めるな！」ブンッ！

「えぇ～い！」ヒョロっ！

近距離戦闘で気を付けるのはゼノさんのみ。アースラさんは多少体術ができるようだが

あいつらと幾度も組み手をしていた俺には鈍すぎる。

モモさんは論外。バズーカの砲身を振り回すが当たるわけない。

「散烈拳！」ズドドドッ！

「ぐっ！」「かはっ！」「きゃっ！」

カーンからラーニングしていた散烈拳を放つ。

威力は弱いがこの至近距離なら龍の力の散弾がどれかはヒットする。

バチィッと何発か当たらなかった散弾が風の渦に当たって弾けた。

「おのれ！」ビュッ！

「はっ！」キンッ！

さっきのカテクトに加え、さらに身体強化した今の俺の強度なら素手でもなんとか剣を捌ける。

何合か打ち合いつつ、隙を突いてアースラさんが拳や蹴りを放ってくるがその辺りのコンビネーションはイマイチで、あっさりと避けられる。

ゼノさんも勝手が違う為かモモさんの反則が無い為か、先程よりは捌くのが楽だし、あの「絶命剣」とかの派手な攻撃はし辛いようだ。

「散烈拳！」ズダダッ！

「うぐっ！」「ちっ！」「きゃあ！」

龍の力の散弾がまたしても3人を襲う。

やはり当たらなかった何発かは風の渦に飲まれる。

「・・この程度では私達には大して効果はありません！」

「そんな威力の無い攻撃ではな！」

「全然平気ー。」

しばらくこのままこう着状態かと思われたが・・

ヂッ！

「きゃっ！風が・・」

「あつっ！？」

「これは！？」

「気付きました？」

俺たちの周りを回っていたサイフィスはただ逃げ場を無くすためにそうしていたわけではない。

魔力を帯びた風の渦、それが俺の龍の力の散弾と擦れ弾け合って徐々に熱を帯び、少しずつ狭まって来ていたのだ。

「これは・・何をする気！？」

ゼノさんが辺りを見回して愕然とする。

既に熱を持った風の渦は加速し、俺たちを中心に小規模な台風と言えるほどの威力を持っていた。

「サイフィス！」

≪うむ、頃合だ。≫

ゴオッ！

サイフィスが離れると風の渦がさらに狭まり、強風が3人を襲う。

「・・魔法の射手・氷の５３矢！」シュウウゥッ！

「「「！？」」」

右腕に氷の魔法の射手を纏わりつかせる。

これぞ変則スキル合成必殺技第２弾！

散烈拳＋氷の魔法の射手に竜召喚「風竜」！

「・・させない！」

「くらえっ！」

「えーい！」

俺が何か大技を出すと踏んで3人が囲んでくるが、既にこちらは技の体制に入っている。

今俺の立っている場所こそ熱を持った風の渦の中心！

そしてそこから上へ向けて放たれる冷気の拳によって周囲の風は・・・竜巻となる！

「飛　竜　昇　天　破　っ！」

ズ　ォ　ッ　・　・　・

「「「！？」」」

ゴ　オ　ォ　ォ　ォ　ッ！！

「なっ！？」「うわっ！」「きゃーーっ！？」

龍の力と魔力を合わせ持った竜巻は、3人を激しい回転に捕らえ、はるか上空にまで吹き飛ばすのだった。

第七章　4、妖精

『アプリフ』パァァッ

「んっ・・・」

「はい、これでもう大丈夫だと思いますよ。」

「ありがとーリュウ君。」

「いえそんな、怪我させたのはこっちですから。」

俺の必殺技Ｐａｒｔ2で吹き飛ばした3人は上空で気を失っていたため、サイフィスの風でゆっくりと地上に降ろしてもらった。

その後、目を覚ました3人と俺は近くにあった岩場で一休みして傷を治したりしている。

「やれやれ、完敗です。「紅き翼」はやはり伊達ではないのですね。」

「私達ももっと力をつける必要がありますね、ゼノ隊長。」

「ええ。次こそは必ず勝ちますよ。」

「えあ!?次があるんですか?」

「当然だ。負けっぱなしだなど私達が許すと思うか？」

「・・・勘弁してくださいよ。」

私「達」と言ってもモモさんはそんなに気にしてなさげだけど。

「あー、それにしてもモモさんの瞬間移動にはビックリしましたよ。あれってどういった技なんですか？」

話題を逸らしてみる。

「残念だけど教えられないのよー。」

うん、ちょっと困った風なモモさんかわいい。

「じゃあせめてあの技術の名前だけでも教えてもらえません？」

「フン、そこまで言うなら仕方ない。勝者の頼みだしな。あれは「シャドウウォーク」と言う技だ。」

アースラさんのツンっぷりが良いね。

しかしアレ「シャドウウォーク」だったのか。

ブレスのスキルで１００％クリティカル攻撃を当てると言う強力な技だ。

（なるほどねー）

「見た」し、ちょっと練習すればできそうな感じではある。

「それにしてもあのようなドラゴンを容易く召喚するとは。一体どういうカラクリなのか・・」

ゼノさんが呆れたようにこちらを見ている。

キリっとした表情の中に時々見せるこういったギャップがなかなか・・・

「そういえば「紅き翼」には龍を使役する術者が居ると聞いていたが・・」

「なるほど、それがリュウというわけですか。」

何か段々と俺の情報が広まってるな・・

「そーだ。ねーリュウ君、あの召喚どうやってやったの？ねぇ教えてー？」

うわ上目使いのモモさんとかなにこれ反則ですよ奥さん。

その後、俺達はシュークの町へと戻りつつ、色々と情報交換をした。

一応「完全なる世界」について聞いてみたのだが、やっぱりというか3人とも知らないようだった。

まぁ巻き込むのもアレなのでそのことについては適当に誤魔化したが。

途中、うっかり喋ってしまったボッシュにモモさんの興味が爆発し、とっ捕まって危うく色々調べられそうになったが余談なので割愛する。

ゼノさん達は俺に負けたのが悔しいらしく、ここを拠点に少し修行をするそうだ。

俺は当初の目的に立ち戻り、適当な依頼を支部で見繕うことにした。

「・・・以上が現在こちらで取り扱っている内容となります。」

「・・・そうですか。」

支部にていくつか依頼を漁ってみたが、あまりまともなのはなかった。

倉庫整理だとかコンテナの荷積みとか逃げ出したニワトリを捕まえて欲しいなんてのばかりだ。

（ていうかそういうのはバイトでも雇えっての。）

俺は無言で支部を後にした。

「相棒、どうすんだ?」

当てもなくぶらぶらしてるとポーチの中からボッシュが口を出してきた。

「んー、これは参った。・・・じゃ何もしないってのもアレだし町で情報収集でもしてみるか。」

「するってぇと・・酒場かい？」

「まぁね。基本だろ。」

ウィンディアで働いた経験から人の賑わう場所には様々な噂が飛び交ってるのがわかっている。

もちろん酒場なんてのはこういった時の格好の的だ。

俺とボッシュは夜を待ってから酒場へと向かうことにした。

夜の帳が降り、家々の明かりも少しずつ消えていくような時分、騒がしさが外まで漏れ出てきている酒場のウェスタン風な入り口を開けて入ると・・

「おうボウズ、ここは子供の来る場所じゃねーぜ！」

「そうだぜ、ここはガラのわりい連中が多いからなぁ。おめーみてぇなのはケツからやられちまうぜ！ＧＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

「はぁ・・・」

なんとも、どっかであったようなやりとりに歓迎された。

ま、確かに夜の酒場に１０歳くらいの少年とか場違いも甚だしいのはわかる。

（酔っ払いうぜー）

変な視線はスルーしてカウンターへ向かい、マスターに話を聞いてみる。

「あの・・」

「君、なかなか勇気があるのはわかったけど、こんな時間にこんな場所へ来るのは感心しないな。」

（・・マスターは結構いい人そうだな。）

見た目イカツイ感じの割に手際良く酒を作り、注文を取ったり酔っ払いの相手をしつつ俺の方にも気を向けられるとはさすが酒場のマスターだ。

「あーすみません。ちょっと話を聞かせてもらったら出て行きますので。」

「何かな?私が知っている話であれば答えるよ。」

「えーと・・なんかこの辺で妙な話とか誰かが困った話とかないですかね?どんな話でもいいんですが。」

我ながらなんて質問だ。アバウトにも程がある・・

「ん?妙な質問だねぇ。・・そうだな・・困った話・・そう言えば」

「なにかあるんですか？」

「ああ、前にここへ来た客の一人なんだがね、ここから西にちょいとした花畑があるんだが、そこで妖精を見たって言うんだよ。」

「妖精？でもこの世界じゃそこまで珍しいってわけでもないのでは？」

魔法世界にはどう見ても妖精然とした見た目の人種？も普通に存在するので不思議と言うほどでもない。

「そうなんだけどねぇ、その妖精に助けてくれ助けてくれって懇願されたってしきりに言うんだよ。まぁあの時も相当酔っ払ってたみたいだし、次の日にはケロっと忘れてたから幻覚でも見たんじゃないかって話しだったんだけどね。」

妖精か・・・ちょっと気になるな。

「へー。他には何かあります？」

「そうだねぇ、他には・・・」

その後も幾つか話を聞いたが、これといって特筆すべきモノはなかった。

ただ流石に酒場のマスターだけあって話自体が面白く、大分笑わせてもらった。

もちろんジュース代はなけなしの手持ちから多めに出しておいた。

んで翌日、早速酒場のマスターの言っていた花畑へと向かうことにした。

話に聞いた男の人が妖精に遭遇したのは今日から逆算すると5日前、困ってる妖精というのもこれだけ間が開けば問題解決してるかなーと考えつつ道を歩く。

「相棒、妖精なんざどうすんだ？助けて欲しいってのに応じる気かい？」

「まぁねぇ。もう解決してるかもしんないけど、ちょっと気になるし。」

ブレス的に考えると何かあっても不思議ではないからね。

「物好きだねぇ。」

「そうは言ってもついてきてるお前もな。」

「へっ。」

グダグダ話しながら歩いていると、段々と鮮やかな色彩が目に飛び込んできた。

近付くにつれ、花畑が辺り一面に広がっているのがわかる。

こんな場所に不釣合いなくらいに花が咲き乱れている光景は、まるでちょっとした楽園のようだ。

思わず見とれてしまう。

サァッと吹く風に揺れる花々に気を取られ、俺は背後からフライパンがこっそり忍び寄っていたことに気付けなかったのだった。

ゴ　チ　ッ　！

・・・・

・・・

・・

（・・・いたっ・・・っつ～・・・）

後頭部の痛みに意識が覚醒する。

「・・・あれ？・・・えーっと・・・」

体を起こして回りを見渡す。

どう見てもさっきまで居た花畑ではない。

荒れ果てた畑らしきものや朽ちた木々が立ち並び、周囲に花など全くない。

「・・どこココ？」

（魔法世界に来てさらにその異世界？召喚とかどんだけよ？）

「相棒、気がついたかい。」

「おー、ボッシュ。」

声に振り向くと見慣れたフェレットが後ろに居た。

「なぁボッシュ、ここどこ？」

「さぁな、俺っちも今さっき気がついてよ。」

「なにお前も気絶してたの？」

「ああ。イキナリ倒れた相棒の背中に潰されてよ。」

「そいつぁ・・・あー・・ごめん。」

「いや気にすんな。相棒が悪いわけじゃねぇみてぇだからな。」

「ってー、しかしまだ頭がジンジンするわ。」

後頭部に衝撃を受けて気絶し、気付いたら別世界（？）。

これはもう間違い無く妖精さんの仕業だろう。

なんか頭のおかしい人みたいな言い方だけど間違いないと思う。

ブレスでもこんなシーンあったし。

「取り合えずあっち行ってみるか。」

「おうよ。」

俺とボッシュが倒れていた場所は小さな道の行き止まりのような場所だったので、道なりに進んでみることにした。

するとさほど歩かないうちに開けた場所に出ることができた。

やはりというか、そこで3匹の小さいのが集まってなにやら相談している様子が目に入った。

「どうするのよぅ。勢いで連れて来ちゃったけど。」

「仕方なかったのよぅ。だーれも私達の話聞いてくれないし。」

「そうよぅ。それに生贄にすればいいだけだから簡単よぅ。」

どうやら俺とボッシュに気付いてないっぽい。

「あのー、もしもし?」

「「「!?」」」

3匹の妖精?が一斉にこちらを向く。

（うわ本物だよ・・）

妖精達は身長は膝くらいまでで、それぞれ赤、青、黄色の髪の毛をしており、その髪の量は身体が隠れるくらい。

3匹とも顔立ちがそっくりで、なんかキラキラと背中の羽から光を出しつつ宙をふよふよ飛んでいる。

「こ、こんにちはよぅ。」

「今日はいい天気よぅ。」

「ご機嫌はいかがかよぅ。」

全員素っ裸だが俺は幼女趣味ではないので問題ない・・・はず。

「えーと、俺をここに連れて来たのって君らだよね？」

「そ、そうよぅ。」

「たまたまあそこに居たあなたが悪いのよぅ」

「大体あなたなんであんなとこに居たのよぅ」

どうしよう・・全裸だからなんか目のやり場に困る。

まぁそれはともかく・・

「いや妖精が居るって聞いたからどんなかなーと思ったんだけど、

突然殴るのはヒドクね？」

取り合えず頭のダメージが残ってるので謝罪と賠償を要求する！

「な、何言ってるのよぅ！」

「殴ってなんてないよぅ。」

「あなた何か勘違いしてるのよぅ。」

「ほほぅ・・」

とぼける気か・・なんかかわいいけどそれはそれ。

（ならばこっちにも考えがあるぜよ。）

俺はボッシュにチラリと目配せをすると、察してくれたのかボッシュもわずかに頷いた。

「ふーん。でもこっちには証人がいるんだけどね。」

「おうよ、俺っちが証人だ。確かに見たぜ！」

「だ、誰よぅ！？」

「あ！イタチが喋ってるよぅ！？」

「そんな・・見られてたのかよぅ！」

流石だよボッシュ、うまく合わせてくれる。

「というわけで、君らがやったことはバレてるんだよ。」

「おら、キリキリ吐いちまいな！」

「・・・ごめんなさいよぅ。」

「でも、仕方なかったのよぅ。」

「明日が期限なのよぅ。生贄を用意しないと私達・・」

カマかけ成功。そこまで腹が立ってるって程でもないし、謝らせたので気は済んだ。

しかしなんか事情があるのか。

「生贄？なにそれ。誰に捧げんの？」

「それは・・」

「ドラゴンよぅ！」

「「ドラゴン！？」」

俺とボッシュの声が被った。

（まさかドラゴンとは・・）

「それってどんなの？」

「確か自分で「地竜」だって言ってた気がするよぅ。」

「とても恐ろしい声で脅してくるのよぅ」

「明日までに生贄を用意しないと私達が食べられちゃうのよぅ」

なるほど、だから助けてって男の人に言ってた訳か。

「はぁ、なるほど。わかった、俺が何とかする。」

「「「！」」」

一応俺も竜には縁があるし。

（あれ？でもおよそ勝てないようなのだったらどうしよ・・）

確かネギまで最強の生物って言う古龍（だっけ）みたいなのが出てきたら手に負えないかも・・

（まぁいいや・・・そうなったらこいつら連れて逃げよ。）

弱気な結論に達する俺だった。

「そういや君らここから逃げられないの？」

「駄目なのよぅ」

「なにかアイツが私達をここに縛ってるのよぅ」

「あの花畑までしか出られないのよぅ」

「さいですか。」

どうやら逃げられないらしい。

（・・・ちょっと早まったかなぁ・・）

背筋に冷たい汗が流れる俺だった。

そして妖精3人に案内されてきたのは、それまでいた広場のさらに奥、丸いサークルのような場所で一番奥に大樹があり、周りは背の高い草で覆われているようなところだった。

「ここで待ってればいいの？」

「そうよぅ」

「待ってれば来るはずよぅ」

「頼んだよぅ。リュウのヒト。」

「いやだから俺は「リュウ」だって。」

自己紹介したんだけどどうにも変な感じで伝わっているようだ。

竜が怖いのかなんか3人ともぴゅーっと逃げていった。

（しかし地竜ねぇ・・・）

俺はポケットから3枚のカードを取り出して額に近づける。

≪申し訳ないけど、誰か「地竜」に心当たりあったりしないかな？≫

≪すまぬ、我にはわからぬな。≫

まぁサイフィスは旧世界出身だしねぇ。

≪私は聞いた事ないわねぇ。ハルは？≫

≪知らないわ！大体あんな可愛い妖精を食おうだなんて竜の風上にも置けないわね！≫

≪そう。わかった、ありがと。≫

（手掛かりなし、と。）

どうやらぶっつけで戦わなければならないようだ。

（いざとなったら・・・やるしかないかな。）

古龍ってのは確か全長１００ｍはあるドラゴンだったハズだ。

対抗するにはこちらも竜変身するしかない。

（できればそんなの出てきませんように！！）

俺はちょっと弱気に構えつつ、そのドラゴンが来るのを待った。

しばらくすると、辺りにどことなく暗い雰囲気が立ち込めてきた。

「相棒」

「ああ、来たな。」

感じる力はそれほど大きくなさそうだけど油断はできない。

≪お前がめしか？≫

「！」

サイフィス達とは声の感じが何か違うが、一応聞えた。

確かに妖精の言っていた通り、酷く重い感じの声だ。

「そうらしいですよ。そちらは地竜さんですよね？」

≪・・・食う所が少なそうだが・・食らってやるぞ！≫

「！」

なんか話が通じてなくね？とか考えてる間に周囲の雰囲気が変わった。

俺はドラゴンズ・ティアからカッツバルゲルを取り出し、大樹を背

にして構える。

（どこから来る・・？）

地竜と言うからには地面から飛び出してくるのかと思い、多少下へ多めに意識を払いつつ周囲をうかがう。

ガサッ

「・・え？」

（草むら？）

ガサッ

何かわからないが草むらから近付いて来ている。

（ドラゴン・・なのか？）

地面から飛び出すわけでもなく、空を飛んでくるでもなく、まさかガサガサ草を分けてココへ来るとは驚きだ。

俺は音の方へと意識を向けて構える。

恐らく、次には飛び出してくる！

ガサァッ

「めし・・・めしはどこだぁ！！」

「・・・はい？」

そこに現れたのは可哀相な位痩せ細った・・・トカゲだった。

第七章　5、地竜

「お前がめしかぁ！・・・クワセロォッ！」バッ！

「ちょっ！？待て・・」

現れたトカゲは脇目も振らず、よだれを垂らしながらこっちへ飛び掛って来た！

「・・話を聞けぇ！」シュッ！

ドゴッ！

「ホベェッ！？」

飛んで来たトカゲの顔面へカウンターの右ストレートがクリーンヒット。

「め・・・めし・・・」ドサッ

「ふう・・・あー・・何だコイツ？」

俺のパンチ一撃で気絶したのか目の前できゅーっと伸びてる黄色いトカゲ。

よく見ると盾と剣を持ってるっぽい。

（なんかこんな感じの敵居たような・・・）

ブレスの雑魚にこんな感じのリザードマンが居た気がする。

「おーい。生きてるー？」つんつん

ピクッ

どうやら生きてはいるようだ。

しかしホント可哀相なぐらいに痩せている。

何があったかこれは気になるところだ。

「なぁボッシュ、これどうしたらいいと思う？」

「相棒の好きにしろや。俺っちとしちゃあ何か助けてやりてぇけどな」

俺も同意見だ。

とりあえずドラゴンズ・ティアの中からロープを取り出して、暴れないようトカゲをぐるぐる巻きにしておく。

いまだ気絶しているようなので、一旦そのままにして妖精達を呼びにいった。

「す、すみませんっした」

「謝って済む問題じゃないのよぅ！」

「そうよぅ！私達本気で怖かったのよぅ！」

「仕返しにお前を食べてやるのよぅ！」

「申し訳ねぇ・・」グゥ～・・

「・・・」

只今ぐるぐる巻きのトカゲを囲んで妖精3人が糾弾中である。

このトカゲは種族を「ドレイクナイト」と言うらしい。

何でもこのよくわからない場所に迷い込んでしまって、食べる物も見つからず彷徨っていたら妖精を発見し、彼女らに食料を持って来させようとしたそうだ。

その時たまたま光加減が逆光っぽくなっていて、妖精達がその姿を勝手に竜だと思い込んで、生贄を差し出そうとしていたのが真相であるらしかった。

（俺のあの覚悟って一体・・・）

拍子抜けもいいとこである。

「本当勘弁してくだせぇ。そして・・何か食べる物を・・」グゥ～

「私達だっておなか空いてるのよぅ！」

「お前はそのまま餓死しちゃえばいいのよぅ！」

「そしてお前を私達の食料にしてやるのよぅ！」

なんか話が物騒な方向へ進んでるなぁ

「あーストップストップ。えーと、そこのドレイクナイトさんは別にこいつ等に危害を加えようとかはないんだよね？」

「へ？え、ええ、そりゃもう。あっしはこのよくわからねぇ空間に迷い込んだだけでして・・」

本当に困った表情のドレイクナイトがなんかスゲー哀れに思えてきた。

「そっちの妖精達はコイツが居なくなればいいんでしょ？」

「そうよぅ！」

「こんな奴に脅されてたなんて悔しいよぅ！」

「できればこの世からも居なくなって欲しいよぅ！」

遠慮ねーなおい。

「じゃあまぁとにかくコイツを俺と一緒にここから出して。それでいいでしょ」

「に、兄さん・・・」ダァッ

なんかドレイクナイトの目に滝のような涙が。

「・・・まぁリュウのヒトのおかげだしわかったよぅ」

「できればそいつをギッタンギッタンにして欲しかったよぅ！」

「で、私達がそいつをムシャラムシャラと食べてやるのよぅ！」

なんか妖精怖い・・・

「に、兄さんはあっしの命の恩じ「ぐぅ～」・・・」

「「「「「・・・」」」」」

「・・わかった、ちょっと待ってな」

このままだとトカゲの腹の虫の音にイチイチ会話を遮られそうなので、俺はドラゴンズ・ティアに入ってる食材を適当に取り出すのだった。

～2時間後～

「さて、まぁ適当に食ってくださいな」

最初に妖精が集まっていた広場にて、俺の前にはドラゴンズ・ティアから取り出したキャンプで使うテーブルと、その上に所狭しと並

べた料理がある。

「こ、これ本当に食ってもいいんですかい！？」

「どうぞ。あとそのよだれ拭いて」

「私達も！？」

「食べていいの！？」

「美味しいのよぅ！」ムシャラムシャラ

「そこ！フライングしない！」

「やるようになったなぁ相棒よぉ」

俺は持っていた食材で作った料理を振舞っていた。

日頃の料理担当に加え、ウィンディアでタダ働きしてた時にハオチーさんの技術をラーニングしていたので、料理の腕は劇的に上達していたのだ。

ちなみに「せんぎり」にはかなり自信がある。

チャーハンや小龍包など全体的にメニューが中華よりなのは御愛嬌。

まさか料理技術をラーニングできるとは思ってもいなかったけど。

それにしてもドラゴンズ・ティアと魔法は本当に便利だと痛感する。

サバイバル技術とかなんのそのってな感じだ。

ガツガツガツガツ・・・・

「・・・」

で、まぁ自分の作った料理を食ってくれるのは嬉しいのだが、それにしても目の前のトカゲと妖精（＋どこかのフェレット）は凄まじい勢いで料理を平らげていく。

この勢いじゃ味とか関係なくね？って感じだ。

俺はしばらくその光景を見ているのだった。

～さらに数分後～

「げふぅ、ご馳走様っす、兄さん」

「美味しかったのよぅ！」

「私達大満足よぅ！」

「お粗末さまでした」

ドレイクナイトと妖精達（＋どこかのフェレット）は物の見事に完食してくれた。

ここまでの食べっぷりだと作ったこちらとしても実に清々しい。

「も・・もう・・・食べれない・・のよぅ・・」

約一匹欲張ったヤツが悶え苦しんでるようだがスルー。

「いやー、ホントあっしはもう駄目かと思いやした」

「おめーさんはいつからここにハマってたんでぇ？」

ボッシュが何気なくドレイクナイトに尋ねる。

「ちょうど8日でさ。その間飲まず食わずでもう・・・」

8日か。結構微妙にヤバい時間だな・・

「そうかい。そりゃ危ねぇ所だったなぁ」

「よく妖精食べなかったね」

「あっしにとっちゃこいつらは虫みたいなモンでさ。本当に最後の最後まで食いたかねぇですぜ」

ああ、まぁ・・わかる。

「虫呼ばわりとは何事よぅ！」

「あんたなんかトカゲの癖に！」

「く・・苦しいよぅ・・」

ドレイクナイトに向かってぷりぷり怒ってる二人の隣で、一人はまだ苦しんでるらしい。

「あーそっちの一人は大丈夫？」

「だめよう・・・」

「ったく、仕方ねぇなぁ」

のそっとドレイクナイトがその一人に近付く

「何する気よぅ！」

「やっぱり食べる気かよぅ！」

「黙って見てなせぇ」

そう言って苦しんでる一人に手をかざし、気合いを込めだすドレイクナイト。

「むっ！」シュワァァッ

癒しの光が妖精を包みこむ。

「・・・あれ？苦しいのが・・・治ってるよぅ」

「これでよし。全く手間ぁかけさせなさんな」

悪態を付くわりに良い人だなこのドレイクナイト。

「今のって？」

「ああ、今のはあっしの特技でさ。体調不良と怪我も治せるってんで重宝してまさぁ」

「へー」

思い出した。今のって確かスキルの一つ、「ヤプリフ」だ。

アプリフ以上の回復量を持ち、毒とか混乱とかも回復できる優れモノスキルだ。

なんか出来そうな気がするので覚えられたっぽい。

思わぬ収穫。

「さて、そんじゃこの妖精たちへの封印も解いたら？ここから出られないようにしてんでしょ？」

「へ？封印？何の事でさ？」

「ん？妖精がここと花畑にしか出られないようにしてたんじゃないの？」

「と、とんでもねぇ。あっしはそんな器用なマネはできやせんぜ？」

別段嘘をついてるようでもないドレイクナイト。

（・・・確かによく考えたら辻褄が合わないな）

「・・・妖精達さぁ」

「何よぅ？」

「この人？のどこら辺で「地」竜だと思ったわけ？」

百歩譲って竜に見間違えたのはわからんでもないけど、どうして「地」竜だったんだ？

「・・・そう言えば何でよぅ？」

「私は知らないよぅ」

「私もよぅ。ただそんな気がしたのよぅ」

3人とも何でかわからない様子だ。

「・・・もうこっから外に出れたりする？」

「やってみるよぅ」

ちょっと待つが

「駄目よぅ。やっぱり出れないよぅ」

ふむ・・・

「・・・ドレイクナイトさんはこの辺りでドラゴンかなんか見かけ

たりした？」

「いえ全く。ここにゃああっしとこいつらしか居ないようでしたぜ」

なるほど・・・つまりまだここには妖精を縛っている見えない存在が居るのか。

そしてそれは多分本物の地竜だ。

妖精達は無意識にそれを感じとったと見た。

「多分ここには本物の地竜がどっかに居るんじゃないかな。そいつを探そう」

「了解よぅ」

「手分けして探すよぅ」

「でもここ以外は草しかないよぅ」

「兄さんの願いとあっちゃ黙ってられねぇや。あっしもお手伝いしやすぜ」

「ありがと。んじゃちょっくら探してみるか。多分細長い石みたいなのがどっかにあると思うんだ」

俺達は手分けして捜索を開始した。

俺とボッシュは倒れてた周辺、ドレイクナイトは妖精たちの居た広場、妖精たちは大樹の広場を担当した。

しばらくすると、

「あったよぅ！」

「あったか！」

妖精の一人から発見の報告が上がった。

場所は大樹の真裏。

木に寄り添うように細長い石が立っていた。

「はぁ。まぁ見つかって良かった。んじゃ話しかけてみるんでみんな下がってて」

俺は周辺の草を切り分けて石の前に立つ。

「えーと、地竜さん？居たら返事してください」

・・・

「・・・あれ？」

全く持って応答なし。

（居ないのか？）

「もしもーし！居ませんかー？」

・・・

「・・・」

このパターンは新しいな。まさかここに居ないとは。

しかしこれじゃ俺単なる不審者じゃないか。

すがるようにポケットに手を伸ばす。

≪誰か、ここに地竜とやらが居るかどうかわかる?≫

≪わずかに力は感じるな≫

≪ふん、どうせずーっと一人で居たからきっと溶けちゃったのよ!≫

≪そんなわけないでしょ。多分寝てるんじゃないかしら?≫

(寝てんのかよ・・・)

有力な情報を得たので取り合えず石に向かって大声を出してみることにした

「おーい!起きろー!」

・・・しかし無反応。

ちょっとイラっとくるね。

「おいこら!起きろっつってんだろうがぁ!」

さらに無反応。

・・・こうなったら肉体言語だ。

『ギガート！』パァッ

攻撃力を上げて

「セイッ！」ドゴッ！

石に向けて壊さない程度に拳を見舞ってみた。

≪・・・ってーなぁ≫

「！」

ようやく声が聞こえた。

「地竜さん？目ぇ覚めた？」

≪お前・・・龍の御子か・・なんか用か？≫

うわぁめっちゃ気だるげな声。

「とりあえず妖精たちの呪縛を解いてくれません？」

≪呪縛ぅ？・・・ああ、この前寝ぼけた時のあれか。≫

寝ぼけたのかよ。これは妖精に同情できなくもない。

「多分それ。早く解いて」

≪・・・解いたぜ。≫

はえーな。

「ありがと」

≪じゃあな。俺は眠いんだ。≫

うわー本気でやる気ねーなこの竜。

するとポケットが輝き、そこから一枚のカードが飛び出した。

≪ちょっとあんた！あんたもあたし達と一緒に来なさい！≫

≪ああ？誰お前。俺ぁねみーんだよ≫

≪いいから来なさい！そんな寝てばっかりじゃ詰まんないじゃない！≫

≪だから俺は・・・≫

≪ほらリュウ！早く契約しなさい！手を出して！≫

なんつう強引な。まさにこいつは某団長。名前をハルフィールにして正解だ。

「いやでも本人？の意思を尊重したほうが・・」

≪良い事言うな龍の御子。おい、俺は・・・≫

≪いいから！このあたしが連れてくって言ってんだから連れてくのよ！ほら早く！≫

なんかカードがプルプル震えだした。

（やべーなこれ以上ほっとくと何するか・・・）

俺は仕方なく石に手をかざした。

「えーと・・ごめん」

≪・・・仕方ねぇ≫

掌に熱が伝わってくるが・・・何と言うかヌルイ。

（これで契約できたのか？）

イマイチ疑問が拭えなかったが、頭の上にヒラヒラとカードが落ちてきたのでどうやら成功したらしい。

カードには黄色の東洋の龍の絵が描かれていた。その顔にはあまりやる気が見られない。

≪ふふん、最初からそうすればいいのよ≫

震えの収まったハルフィールのカードが御満悦な声を上げながら俺のポケットへと戻った。

なんとも言えない空気が漂う。

「・・・えーと、名前ないんだよね」

≪ああ。いいの付けてくれや≫

なんか声が急に老けこんだな地竜さん。

それはともかく名前ねぇ・・属性は「地」だろ・・・通例的に行けば「ザムージュ」で・・

≪ふぁ～あ・・あー腰いてぇ・・≫

・・その身体で腰ってどこだよ。じじいかっての。

ん?・・・じじい・・ザムージュ・・

「・・ザムディン・・とかどう?」

≪・・まぁ・・いいんじゃねーか?≫

うん。俺もいい名前だと思う。

・・・元ネタさえ知らなければ。

「じゃまぁそういうことで」

≪ああ。・・は～・・かったりぃ・・≫

俺はやる気ない声をだすカードをポケットにしまい、妖精たちの元へと戻る。

「凄いよぅ！」

「竜の神様と話ができるなんて流石リュウのヒトよぅ！」

「尊敬するよぅ！」

「兄さん、いや、旦那！あっしは感動しやしたぜ！」

とたんに凄い好意的な反応に出迎えられる俺。

「良かったなぁ相棒。いい反応でよ」

「あー、うん」

（今まで変人扱いされてたから何か新鮮な感じだ。）

とりあえず一件落着？して安堵する俺であった。

第七章　6、工場

「それじゃ旦那、あっしはこの辺で。このご恩は一生忘れねぇですぜ！」

「んな大げさな。まぁ気ぃ付けてね」

深々と頭を下げると、ドレイクナイトは去って行った。

今はようやくあの花畑に戻ってきている。

聞いた話だとあの場所は別に異世界でもなんでもなく、ここ龍山山脈の奥地の一角らしかった。

どうりでドレイクナイトが入り込めたはずだ。

もともとはザムディンが（寝るために）結界を敷いてたそうだが、長い事放置してたせいで綻びが出来ちゃってたらしい。

妖精達もたまたまあの広場に侵入して敵も居ないし良い場所だから住もうと決め、いざ色々用意しようとした矢先にザムディンの寝ぼけのせいで出れなくなったそうだ。

・・・運が悪いにも程があるだろ。

「んでお前らはどうすんの？」

傍らにふよふよ浮いてる妖精3人に問いかける。

「どうもこうもないよぅ！」

「できたら私達を養ってくれよぅ！」

「リュウのヒトならそれくらい余裕な筈よぅ！」

（・・・）

こいつら俺にたかる気か？

「いや今まで通り好きなように生きていけばいいじゃん」

「そんなのめんｄ・・大変じゃないかよぅ！」

「そうよぅ！責任とってよぅ！」

「今なら私達３人セットでお買い得よぅ！」

いや確かに見た目可愛いのは認めるけどさ。

何故俺が養わねばならんのか。

俺は幼女趣味じゃ・・・ない・・・と思うし。

「相棒、女囲うのも男の甲斐性ってやつだぜ？」

このニヤけイタチめ。他人事だと思って・・・

「じゃあほら、少しだけどお金あげるからそれでなんとか」

「ドライ過ぎだよぅ！」

「子供の癖にその発想はないよぅ！」

「でも貰えるなら貰うよぅ！」

（なら文句言うなよ・・）

手持ちにあるのはわずかに３００Ｄｑほどだったのだが、財布を取り出した瞬間目にも止まらぬスピードでひったくられ、見事に２９８Ｄｑほど持って行かれた。

２Ｄｑ残ったのはせめてもの良心なのだろうか。

「ありがとよぅ」

「これでもっと良い場所見つけるよぅ」

なんかもう怒る気にもならない・・

「そうだ。これあげるよぅ」

「？これは？」

そう言って一人から手渡されたのは掌に乗るくらいの赤い宝石。結構価値が高そうだ。

「それは「フェアリドロップ」よぅ」

「それを使うと私達の所に転送されるのよぅ」
「たまにでいいから遊びに来てよぅ」
「ふーん、わかった。じゃあたまに見に来る」
「ところでおめーらよ、なんでその宝石を売ろうとは考えねぇんだ？」
ボッシュの疑問ももっともだ。
「そ、それは・・」
「あ、あんまり作れないからよぅ」
「そうよぅ。別に思いつかなかったとかじゃないわよぅ」
・・・
「まぁ、がんばって」
とりあえず妖精と別れ、もう遅いしシュークの街に戻る事にした。
「相棒・・また釣りかよ・・」
「まぁそう言うなって」

翌日、一応人助け?をしたことだし、天気も良かったので俺は気分良く朝っぱらから釣り場に入り浸っていた。

「くふぅ・・さて、今日こそはここら一帯のヌシを釣ってくれる!」

「相棒、そんな噂真に受けてんじゃねーよ」

「はぁ〜・・わかってねーなお前「ヌシ」とか釣り人のロマンじゃねーか」

「俺っちにゃぁよくわかんねーよ。どーでもいーから暇だっての」

ちっ、この楽しさがわからんとはかわいそうな奴め。

その後もネチネチとポーチの中から文句を言うボッシュにイラっときたので、餌の代わりにボッシュを糸の先に括り付けて海へ放ってみた。

どうやらボッシュは泳げないらしく暴れていたが、しばらくしたらブクブクと沈んでいった。

流石にやり過ぎたかと引っ張り上げてみるも、「てめー死んだらどーするぁ!!」

と海水と一緒に暴言を吐くいつも通りのボッシュにちょっと安心した。

そんな感じにまったりと過ごして・・・

「あ、居ましたよ隊長！」

「やれやれ、本当に釣りが好きなようですね・・」

「おーいリュウくーん！」

「！・・・ゼノさん達？」

だらーっと糸を垂らしてぼけぼっけしてると不意に後ろから名前を呼ばれ、振り返るとゼノさん達がそこまで来ていた。

今日は微妙に食い付きも悪いし、待たせるのもあれなので道具一式をしまってそちらへと近付く。

「私達としては不本意ですが、「紅き翼」であるあなたに解決して欲しい問題が起きたそうです」

「問題？」

「そうだ。ほら、とっとと支部へ行くぞ！」

「ごめんねー」

なんかよくわからないけど、いつまでも釣りをしているわけにもいかないので取り合えず再び支部に向かった。

「良かった。噂に聞く「紅き翼」の方でしたら対処頂けると思いまして・・実は速やかに対処しなければならない問題が発生したのです」

「？何があったんですか？」

なんか受付の人にイキナリ捲し立てられた。

支部には引っ切り無しに人が出入りしていて慌ただしくなっている。よほどの事が起きたのだろうか。

「はい、ここから山脈方面へ２ｋｍほど先にある食糧生産工場・通称「プラント工場」なのですが、そこの署長が工場内の全機械を停止し、職員を追い出して中へ閉じこもってしまったのです。このままでは食料の安定供給に支障が出るのも時間の問題なのです」

・・・そりゃ大変だ。

「署長ってそんなことするような人だったんですか？」

「いえ、署長のペレット氏は研究熱心な方で人当たりも良く、このような行動に出る原因が全くわからない状況でして・・」

・・まぁ、見過ごせんわな。

「早めに行った方がいいみたいですね。わかりました。俺が行って・・」

「待った。私達も当然ついて行きますよ」

「え！？」

さも当たり前のように言い放つゼノさん。

「リュウ？嫌とは言わないですよね？」

「う・・・」

キラリと光るメガネの迫力が・・・

「ふん、私達だけで十分だがな」

・・・アースラさんは腕を組む姿が様になっているね。

「でもー、リュウ君は私達より強いしー、足手纏いにならないようにしないとねー」

「ぐっ・・」

「リュウ、私達と今回だけ手を組みましょう。工場は広い。人手は多い方がいいと思いますが？」

まぁ確かに。

「・・・わかりました。いいですよ」

（まぁ結果的には女だらけのパーティとか・・・うん、良いね！！）

内心全く別の事を考える俺である。

「ではそういうことで。場所は北でしたね。早速向かいましょう」

「よろしくお願いします。解決していただけましたら、「悠久の風」より特別報酬もあると思いますので」

「本当ですか！？」

思いがけない所から金が手に入るチャンスが降ってきたもんだ。

というわけで俺はゼノさん、アースラさん、モモさんと工場へと向かうのだった。

工場は険しい山々を背にするように立てられていた。

無理やり辺りを開拓したような不自然さが際立つ。

この不毛の土地では致し方ないのだろう。

職員達が朝工場に向かった時には全区画に鍵を掛けられていたとのこと。

マスターキーを持っているのは署長のみなので必然的に犯人は署長

と断定されたそうだ。

「さすがに広い・・署長が立て篭もっているというのはどの区画でしょう？」

「モモ、わかるか？」

「んーっとぉ・・・あ、あれー。こっちの棟の奥の方に妙な反応がー」ピッピッピ

モモさんがどう見てもスカウターな代物を着けている。

「・・・便利ですね」

「そうよー、ちなみにこの機械は熱源反応や生命探知だけじゃなく、なんと戦闘力も・・」

「いやそれはいいですから」

気になるがこれは突っ込んではいけない領域だ。

「よし・・我ら「レンジャー」の力を見せてくれる！」

「了解！」「りょーかい！」

「俺は違うんですけど・・」「相棒、諦めな」

ガラララ！

俺達は工場内部へと入るべく鍵をこじ開けて大きなドアを開け放った。

「!?」

「これは!?」

「うわー生命反応一杯ねー」ピピピッ

「モモ!そう言う事はもっと早く言いなさい!」

「だってぇ・・」

「お取り込み中のトコすみませんけど、これなんとかしないと進めないっすよ」

ドアの向こうにはずらりと並んだモンスターの群れがいた。

大型のハエ男に中型のハエそのもの、蝙蝠みたいなのや球根に目玉がついて触手が生えたようなものなど、なかなかグロテスクだ。

「ふん、この程度の相手など造作もありません」シャキッ

「モモ、お前は伏せてろ」チャッ

「私もやるってばー」サッ

3人とも獲物を取り出して戦闘態勢を取る。

「うんまぁ心強いっちゃ心強いよね」「相棒、その溜息はなんでぇ？」

俺もカッツバルゲルを取り出す。

「行くぞ！」

ゼノさんの掛け声と共にモンスターの群れへ向けて俺達は突っ込んでいった。

第七章　7、署長

工場内には区画ごとにモンスターが配置されているようで、殲滅しては次の区画へ進むという事を俺達は繰り返していた。

今現在これで４つ目くらいの区画だ。

ズシャッ！

「グエェッ・・」ドサッ

ゼノさんの剣がハエ男を切り伏せる

「そこ！これはどう！」ドドゥッ！

「ピチュッ！」ブシィッ！

アースラさんの銃弾が目玉球根を貫通する

「あと何匹だ！？」

「隊長、残り２匹！」

「１匹ですよ！」ズバッ！

俺の剣が蝙蝠を斬り裂く。

これでこのエリアで残るのは向こうのハエ男のみとなった。

「んっとぉ・・」ピピピッ

モモさんは俺の隣で次のドアの先の策敵をしている。

と、

ブゥーン

「え？」

ちょっと気がそれた瞬間、ハエ男がいきなりこっちへ飛んできた！

「バハァッ！」ブアッ！

「「！」」

ハエ男の口から俺とモモさんを巻き込むように紫の息が溢れ出る。

（毒ブレス！？）

明らかに毒々しい色からその息の効果を予想する。

「この・・海破斬！」ビュゴッ！

「！」

ザンッ！

「ギェィ・・」ドサッ

俺の放った飛ぶ斬撃で真っ二つになるハエ男。

「ふう。モモさん！大丈夫ですか？」

「うっ・・・」

「隊長！モモが・・」

「はぁ・・・はぁ・・・だ、大丈夫よー・・・」

その場にへたり込んでしまったモモさんは明らかに顔色が良くない。

「どうやら毒を食らったらしいな・・どうしますか隊長」

「毒・・確か道具箱に毒消しがあったはずでしたが・・？」

「それが・・先日の灯台戦のあと補充し忘れてまして・・」

「全く・・・仕方ありません、一旦戻って・・」

「あー、俺治せるから大丈夫ですよ」

「「え？」」

二人が驚きの表情で俺を見る。

ちょうど先日便利なスキル覚えたことだし、と俺はモモさんに手をかざしてスキルを使う。

『ヤプリフ』シュワァァ

「・・え・・あ・・なんか楽になってるー」

すぐに顔色も良くなって立ち上がるモモさん

「良かったですねモモさん」

「ありがとーリュウ君」

「いえそんな礼には及びませんとも」

俺は美人の味方ですから。

「でも何でリュウ君は平気だったのかしらー？」

「？あーなんででしょう？」

そういや俺も思いっきり毒吸ったけど平気だな。

まぁきっと運が良かったんじゃね？

「解毒魔法か・・・流石は「紅き翼」ですね」

「隊長、私達も本格的に魔法を覚えましょうか？」

「・・・戻ったら検討しましょう」

隣では神妙な顔をして相談している二人が。

「さてとー、（ピピピ）・・あ、どうやら次のドアの先がさっき言った怪しい棟みたいー」

「そうか。各員、警戒を怠らないように！」

「了解！」「りょーかい！」

「だから俺は違うチームなんですって・・」「相棒、もう慣れろや」

ゼノさんは結構強引・・と。

「行くぞ！」

バンッ！

ドアを開けると・・・そこはもぬけの空でした。

「「「「・・・」」」」

「モモさん、その装置壊れてません？」

「えー！？そんなことはー・・・」

だが残り二人も疑いの眼差しを向けている。

「えーと・・ほ、ほら、あそこー。あの棚の辺りから妙な反応が漏

れてるみたいー」

額に汗を浮かべて焦ったように言うモモさんが指差す先には、薬品やら書類やらが乱雑に置かれた木の棚がある。

「この棚がどうしたと？」

「それ偽装ー」

「ふむ・・」

棚がカモフラージュとは随分とベタな。

しかしそうなるとどこかに開閉装置とかあるのかね？

「どこかに棚をどけるスイッチとかあるんですかね？」

言いながら俺は棚周辺の壁やらを調べて回る。

「まどろっこしいな。こうすれば早いだろう」チャキッ

「！？ちょっ！？待っ・・」

「とどめだっ！」ドドドドゥンッ！

ミサイルの雨あられ！？

チュドドォォォォンッ！

問答無用でアースラさんの放ったミサイルが棚ごと壁を砕いたらしい。

「げほっ、げほっ、えふっ・・」

・・・思いっきり爆風直撃の俺、参上。

「馬鹿！アースラこんな至近距離で！」

「う～ん、もう少し火力が欲しいかなー」シュコー

爆風を腕でガードしてるゼノさんといつの間にかガスマスクを装着しているモモさんが対照的だ。

しかしあのアースラさんの銃は掛け声に反応して発射するモノが変わるらしい。

ちょっと欲しいかも。

「・・コホン、隊長、どうやら奥に階段があるようです」

「・・全く。・・・全員、奥へと向かいましょう」

なかなか素敵なパーティですことで。

俺達はぶっ飛ばした壁の中にあった階段を降りていった。

途中まではコンクリートっぽかったが、どうにも途中から剥き出しの土や岩がそのままでただ掘っただけって感じがありありとする。

しばらく階段を降りると一本の道がさらに奥へと続いていた。

所々に明りが配置してあり、明らかに人が居る気配がする。

「この先に署長がいるな・・・気を抜かないように」

「了解」「りょーかい」

「了解」「相棒、なんか染まってるじゃねーか」

ボッシュの呟きをスルーしつつ進んでいると、奥に明りが見えてきた。

どうやら大きめな部屋のようだ。

俺達はその部屋の入り口まで来ると、そーっと中を覗き込んだ。

中は異様に広く、それまでの道とは違って金属的な部屋となっており、妖しげな機械類が多数配置されているようだった。

部屋の隅には巨大な根っこのような物が天井を突き破っている。

どちらかと言えばその根っこの側にこの部屋を作ったと言った方が正しい感じだ。

中心の巨大な機械の前に白衣を着た男らしき存在がいる。

（お前達、一斉にいくぞ！）

（（（了解！））））

示し合わせて飛び掛る準備をする。

3・・・2・・・1・・

ダッ！

「そこまでです！署長ペレット！工場無断占有及び魔物配置の件で話を聞かせてもらいますよ！」

「観念するんだな！」

「そうですよー」

「えーと、その通りです」「相棒、もーちょい気の効いたセリフはねーのかい？」

俺達が一斉にその部屋へと踊り出ると、男はようやく気付いたかのように振り返った。

「うふうふぅ・・・やっと来ましたか実験台の方たち」

この男の目は狂気の色に染まっている。

一目見ただけでそう直感した。

白衣を身に着け、眼鏡をかけた中年の男。

小太りで白い髭を生やし、頭髪も多くなく側頭部に白髪が見える。

手には怪しい液体の入った試験管を持ち、こっちを見る顔には気色の悪い笑みが浮かんでいる。

そしてその表情は「狂った」と形容するのが一番近いように思う。

まともにおかしくなった人間というのは見たことがなかったが、これは中々強烈だ。

「ペレット署長、なぜこのようなことをしたのですか？」

ゼノさんが剣を抜き放ちつつ問い掛ける。

「いやぁ、最終工程の為にはこの工場の全電力を注ぎ込まないと足りないものでしてね」

「そんなに電気を使って・・一体何をするつもりなのー？」

モモさんはイマイチ緊張感がない。

「うふふぅ・・なぁに、ただの実験ですよ。人類の夢の、ね」

（なんだっけなコイツ・・見たことある気がするんだが・・）

俺は会話を聞きながら記憶を手繰る。

「実験だと?夢とはなんのことだ!」

アースラさんも銃に手を掛けている。

「うふふぅ・・人類の夢・・即ち、「死者の蘇り」です。以前よりひっそりと研究をしていたのですがねぇ、この所煮詰まっていたのですよ。・・・しかし!天は私を見放さなかった!この素晴らしい研究資料がこのタイミングで手に入ったことはまさに天恵!神が私に実験をしろと言っているに違いありません!!」

興奮気味に熱弁し、デスクの上の書類を掲げる署長。

(資料ねぇ・・・)

「相棒・・・」

「ん?どうしたボッシュ?」

署長の言葉を聞いたボッシュは掲げられている資料をじっと見つめている。

「いや・・・なんか「蘇り」ってのが頭の墨でチカッと引っ掛かってな・・」

「・・・」

そういや以前もそんなことを言ってたっけ。

「まさか・・・その妙な装置で死人を蘇らせるつもりですか！？」

「その通りです。いけませんか？誰だって死んで欲しくない人はいますでしょ？私もそうです。だから蘇らせるのですよ。お母さんを・・」

署長の目はまともな光を放っていない。

「貴様がやろうとしていることは死者への冒涜だ！今すぐ止めろ！」

気持ちはわかるが、俺もやはり死んだ人は戻ってこないのが世の理だと思う。

「うふふふぅ・・まぁまぁ、あなた達はあの実験動物たちを倒してきたんです。でしたらこれとも戦ってみてくださいよ」

署長が取り出したのは一匹のナメクジ、それを地面に置き・・

「うふふふふ」ポタッ

持っていた試験管の中身をナメクジに垂らした。

ズ　グ　ン　ッ　！

ナメクジが大きく脈を打つ

「「「「「！？」」」」」

ジュオオオオオッ！

みるみるうちにナメクジが巨大化していく！

「・・どうやら口で言ってもわからないようですね」

「ふん、力づくで止めてやる」

「すごーい、あの薬一体なんなのかしらー？」

「こいつは・・」

このお化けのようなナメクジもブレスのボスで居たはずだが、どんな攻撃をしてきたかまでは覚えていない。

「仕方ない。やるか」「・・・」

ボッシュはさっきから神妙に黙っていて突っ込みをする余裕も無いらしい。

俺達は気味の悪い巨大なナメクジ相手に戦闘へと突入するのだった。

第七章　8、解決

「シアアアアッ！」ジュビュッ！

「「「「！」」」」

巨大ナメクジの口からぶっとい舌のような物体がこちらへと迫ってくる！

「散開！」ダッ！

ドゴッ！

ゼノさんの声に全員がそれを避け、舌のようなものは床に激突した。

俺とモモさんが少し後ろに、ゼノさんが右手、アースラさんが左手の方にばらける。

「ハッ！」ビュオッ！

ゼノさんが突っ込み、ナメクジに剣を振り下ろして・・

にゅるんっ

「！？」

当たったと思った瞬間、剣がナメクジの表面で滑り、ゼノさんの体制が崩れた。

「くっ！」

「シャアァッ！」ヒュバッ

ドゴッ！

「がっ・・！」

ナメクジの舌のようなものが薙ぎ払うようにゼノさんに直撃する。

「隊長！コイツめ・・爆ぜろ！」ドゥン！

ぬりゅりゅッ！

「くっ・・これもか！」

アースラさんの銃から散弾が発射されたが、やはり全弾ナメクジの表面で滑った。

「これは・・表面のヌメリを火か何かで取る必要がありそうねー」

ピピピ

「火、ですか？」

俺の後ろに居るモモさんがスカウターを通してしきべつしたらしい。

（そう言えばそんなことしなけりゃいけなかったな）

「じゃ、俺がやりますよ！」

俺はナメクジの方を向いて呪文を唱える

『パダーマ！』

ゴオォォッ！

「シャギャァァァ！！」

下から噴き出す炎の熱さにナメクジが叫ぶ。

これで表面のヌメリが取れたはず。

「今です！」

「ぐっ・・化け物め・・よくも・・！」

ゼノさんが2本の剣を構えると剣に強烈な気が集中していく！

「奥義・・『紫音絶命剣』！」ドッ・・

ズドズドズドゥン！！！

「ギヤァァァァ！！」

ゼノさんが床へ突き刺した二本の剣から気の衝撃波が3発吹き上げ、

その威力でナメクジの片側半分以上が抉れて吹き飛んだ。

（おおぅ、すげー・・）

先日の一発のならともかく、あれはラーニング出来なそうだ。

「あたしも・・」

アースラさんがベストな位置へと動いて狙いを定めている。

「これで！」ズダンッ！
「とどめだ！」ドドドドゥンッ！
「乱れ舞え！」ビュアァッ！

銃弾、ミサイル、ビームの雨が一気にナメクジへと襲い掛かり・・

キュゴォォォォォン！

全弾ナメクジの残った半身へと直撃した。

「あのスピードで3種の攻撃を撃てるのか・・」

「アースラは3連撃が得意よー」

傍らでモモさんが得意げに説明してくれている。

（3連撃！あれがそうか！）

その名の通り、瞬時に3発攻撃するスキルだ。

ゼノさんの奥義とは違って、認識すると途端に俺もできるという根拠のない自信が湧く。

恐らくラーニングできただろう。

「「・・・」」

俺とモモさんは特に手を出す事もなく爆発の中心を見ていた。

二人の攻撃による影響で、辺りには爆煙が充満していて視界が悪い。

「「・・・」」

「・・やったかしらー？」

「ちょ・・モモさんそのセリフは・・」

だが徐々に煙が晴れていくと、そこには小さくなって死んでいるナメクジがいた。

「・・ほっ」

どうやらフラグは立たなかったようだ。

「さて、あとはあなただけです。ペレット署長」

ゼノさんが剣の切っ先を署長に向ける。

「うふふふう・・さすがに神木のエキス・・素晴らしい・・素晴らしい生命力です。この資料に書かれていることはまさに本物！」

しかし署長はナメクジの巨大化にいたく御満悦の様子でこちらの忠告等全く聞いていない。

「貴様！早くその装置を止めろ！さもないと・・」チャキッ・・

アースラさんが銃を署長へと向ける。

そこでようやく署長の顔がこちらへと向いた。

「うふう・・・私はね・・・死ぬわけにはいかないのですよ」

少しずつ署長はデスクへと近付いていく

「お母さんを蘇らせるまではね・・・どんな手を使っても・・・」

そしてその上に置いてあった三角フラスコを手に取り

「殺されるくらいなら・・この濃縮エキスを・・」

そう言ってフラスコの中身を・・

飲み干した。

パリィンッ！

「うふ・・うふふ・・・うふふふふふふふふ」

「！！相棒！ヤバイ！」

「え！？ボッシュ？」

突然ボッシュが必死の形相でポーチから叫びだした。

「やばいんだよ相棒！あれは賢樹のエキスだ！」

「賢樹？お前何言ってるん・・」

「あの根っこが賢樹だったんだよ！ああ、んなこたどうでもいい！大変なことになるぜ！」

「わたしはおかアサンを蘇らセルンダ・・オカアサン・・ヲ・・」

メキメキメキ・・

「「「！」」」

俺達の目の前で署長が変貌していく・・

「オ・・・オカ・・サ・・・ヲ・・」

ボゴッ・・ベシィッ・・

「うっ・・」

「っ！」

「ひっ・・」

「こいつは・・」

変貌し終えた署長は、可哀相な位哀れな姿だった。

巨大化した脳が剥き出しになり、左右が赤と青に分かれていて傘のようになっている。

さらに胴体は潰れて横に広がり、傘と合わせてまるでキノコのよう。

脚と思しきモノは金属質の床を突き破り、根を張るかのごとく地面にめり込んでいた。

バキバキバキッ・・

胴体だった場所がひび割れ、顔が浮かび上がる。

「オ・・オ・・オオオオ」

全員がその光景を何とも言えない表情で見ていた。

その視線には憐れみのような感情と生理的な嫌悪感が入り混じっているように思える。

だが、見た目とは裏腹に変貌した署長から感じる魔力は桁外れのものがあることは確かだ。

膨れ上がった魔力は、ひょっとしたらナギ以上かもしれない。

「何よこの反応（ピピピピピ！）こんなのって・・」

モモさんがスカウターを作動させ、青ざめた表情をしている。

何故知ってるのかは知らないが、ボッシュが焦るのもわかる。

「なぁボッシュ、あの人って・・元に戻れるのか？」

「いや・・無理だぜ相棒・・ああなっちまったら・・な」

何故ボッシュが知っているのか気にはなったが、せめて署長を元に戻せるのかを聞いたところ・・回答は否。

「・・このままって訳にはいかないよね」

「・・おう」

（終わらせよう）

ボッシュのポーチを外して放り、自分の中へ意識を巡らせる。

ドォンッ

足元からオーラが吹き上げる。

「「「！？」」」

こちらを驚いた表情で3人が見やる。

「でぇぇぇやぁぁぁぁぁぁっ！」

カァッ！

オーラが一層眩い光を放ち、弾け飛ぶとドラゴナイズドフォームが露わになった。

「リュウ・・なのか？」

「その姿は・・」

「うそ・・信じられない・・（ピピピ、ピー！）・・何よこれ・・キャッ！？（ボンッ！）」

モモさんがスカウターを作動させたまま俺の方を見て爆発したらしい。

「そんな・・・」

「皆さんは下がって。後は・・俺がやります」

俺の言葉に全員が無言で頷いた。

（・・・？・・なんだ？）

違和感・・・以前とは違い、何故か妙に気分が昂ぶっている。

「オオオオオオッ」

シュッ！

「！」

署長は俺を敵と判断したのか、生えた触手を鞭のようにして振ってきた。

「ふんっ！」パシィ！

俺はそれをかわさずに引っ掴み

「うらああっ！」ブォッ！

「！！！」

ドガァァッ！

触手ごと署長を引っ張りブン投げて壁へと叩きつける

「ガ・・アアアア！」ドムッ！

「！」

叩きつけられた署長の脳のような傘の部分が開き、そこから火山弾が発射された！

「喰らうか！」バガァッ！

突き出した拳で火山弾を砕く。

ジュウゥ・・

飛び散った火山弾の破片により金属の床が強烈に熱せられる。

「シャアアアッ！」ドドドドムッ！！

「！」

火山弾の連射が飛んでくる。数は８。

俺と後ろの３人も巻き込むように飛んで来ている。

「させねぇよ！」ヒュッ！

３人の前に壁のように立ちはだかり、腕に龍の力を込める

「ウラガーン！」ブオッ！

バガガガガァッ！

爪の一薙ぎで全ての火山弾を撃墜。

「「「・・・」」」

３人は俺と署長の戦いを驚愕の表情で見守っている

（今のは「だいふんか」だな）

火属性全体攻撃のスキル。

一応ラーニングはできたがこの状態では使えないしどうでもいい。

「うおお！」ゴォッ！

俺はバーニア全開で壁際の署長へ突っ込む！

「ヴィールヒ！」

ズシャァッ！

「ギシュアアアア！」ブシィッ

左の爪で署長の胴体に出来た目を引き裂き、そこから紫の体液が噴き出したが・・致命傷には足りない。

「ちっ、一発じゃ・・」

「グギャアアアアッ！」ヒュバッ！

「！」

ビシィッ！

４本の触手が俺の両手両足を拘束した。

「ふん！」ぐにぃっ

今までの触手とは違うのか引き千切ろうにも伸びるだけで千切れない。

「アアアアアッ！」グッグッ

署長は俺を斜め上に掲げ、頭をこちらへと向けた。

（だいふんかを至近距離から直撃させる気か！）

「アアアッ！」ドムッ！

「！！」

ドギャッ！

「うぐっ！」

火山弾が直撃し、

ドガァァァッ！

俺はその勢いで後ろの壁へ突っ込んだ。

ガラガラ・・

「リュウ！？」

「しっかりしろ！」

「だいじょうぶー？」

バガァッ！

「問題ねぇ！」

心配してくれる3人をよそに、瓦礫を吹っ飛ばして俺復活。

もちろん無傷。

「シュアアアア！！」

署長は俺に対して怒り狂っているのか触手をビシビシ下に叩きつけている。

「終わらせてやる！」ゴォッ！

俺は再びバーニアを吹かして署長へ突っ込む！

「タルナーダ！！」

ズシャッ！

左の爪の一撃で先ほどとは反対の目を引き裂き

ドジュッ！

「アギィッ！！」

右の一撃が胴体の奥深くへめり込む

「ア・・ア・・アアアア」

「うおおおらぁぁぁ！」ブチブチィッ！

めり込んだ腕を思いっきり振り上げて上の傘ごと抉り飛ばす！

ゴ　ギ　ャ　ア　ッ　！

「ギィ・・ア・・アア・・ア」

ズズゥ・・ン・・

署長はそのまま倒れ、動きを止めた。

倒したにもかかわらず姿は元に戻らない。

「ふう・・・」

俺は変身を解いた。それに伴って妙な気分の高まりも収まっていく。

途端に後味の悪さがこみ上げて来る・・・

「リュウ・・？」

「お前・・近付いても大丈夫か？」

「え？・・ああ、大丈夫ですよ」

「良かったー。リュウ君ちょっと怖いかもー」

3人とも俺の様子を恐る恐ると言った感じで伺ってきた。

（・・・まぁそれが普通の反応だよね）

「相棒」

「ん？おおボッシュ。そういやお前も大丈夫か？」

放ったポーチからボッシュが神妙な表情でこちらを見ていた。

「いや・・・俺っちよぅ、少しだが思い出したぜ」

「？・・・何を？」

「いやよぅ・・・まぁ・・・あれだ。取り合えずこっから出ようや」

「？・・・ああ」

（なんだろ？）

ボッシュにしては珍しい歯切れの悪さだ。

「っとそうだ、資料ってどれだ・・？」

署長が言っていた資料が気になったので机に近付き、調べてみると・・

「これは・・・」

「・・・やっぱなぁ」

ボッシュの呟きから同じことを予想していたことが伺えた。

詳しくは何が書かれているかわからなかったが、最後の名前のサインの場所、そこには「ユンナ」の名が書かれていた。

その後、俺達はシュークの街へと戻り、支部に問題が解決したこと

を報告した。

手柄は一応「レンジャー」と「紅き翼」が半々と言う事で落ち着き、謝礼金も半々となった。

１万２千Ｄｑの半分で６千Ｄｑ、取り合えずこれだけあれば当面は困らないだろう。

一応目的は果たしたのでそろそろこの町ともお別れすることにした。

「まさかあんな力を隠し持って居たとは・・・私達が勝てないわけですね」

「ふん、今度会った時は絶対ギャフンと言わせてやるから覚悟しておきな！」

「あはは・・まぁ・・その時はその時ってことで」

御三方ともお別れ。「紅き翼」は女っ気がないパーティだから非常に名残惜しい。

だがしかし、連絡先だけは交換した。これぐらいはしてもいいだろう。

「えーリュウ君も私達と一緒に行こうー？色々楽しいよー？」

ぐふぅ、モモさんの誘いとか俺の精神にダイレクトアタックですよ。

「いやあのお誘いはホント心の底から嬉しいのですが、やっぱそういうわけにも・・」

（俺がフリーだったら・・・フリーだったら！！）

俺が内心で血の涙を流している事を見越してるのか、呆れた眼差しをこっちに向けているボッシュはスルー。

「モモ、あまり無理を言ってはいけませんよ」

「・・・」

残念そうなモモさんになんかこう非常に申し訳ない気持ちになってくる。

「じ、じゃあ御三方、またどこかでお会いしましょう。お元気で」

「リュウもな」

「今度は勝つからね！」

「うん、それじゃまたねー」

俺は後ろ髪をひかれつつ、シュークの街を後にするのだった。

続く

第七章　8、解決（後書き）

7章終わりです。

ここまで読んで下さった皆様へ深くお礼申し上げます。

第八章　1、昔話

『だからよー、おかしいんだよ』

「はいはい何が？」

俺とボッシュはメガロメセンブリアへと戻って来ていた。

今はそれぞれ個別のフリータイム期間中なので別にここに戻ったりしなくていいのだが、なんとなく結構過ごした場所なのでつい戻ってきてしまうのだ。

そして現在適当に入った喫茶店内で、ナギとテレコーダーによる会話中である。

『どこ探しても居ねぇんだよドラゴンがさー』

「ドラゴン？」

ナギの声が若干イラついてるように聞こえる。

『今居るのはニャンドマってんだけど、ここにはドラゴンが出るって聞いたから来たのに今年は出てねぇとさ』

「へー」

『アルもその辺ちょっと不思議がっててよー、なんだってんだ』

「ふーん」

ナギは力試しの王道ドラゴン退治をしようと思ったらしいが、肝心のドラゴンが至る所で消えてるらしい。

アルにも連絡したところ、やはり同様だそうだ。

それで俺の所にも何か情報がないかどうか聞きたかったとのこと。

他にもゼクトさんとは何故だか連絡が取れなくなったらしいが、まぁあの人なら心配はいらないだろう。

『だからよ、もしドラゴンが居たら教えてくれや』

「ういー了解」

変身した俺と戦いたいとか言い出さなくてこっそり安心だ。

「あ、そうだ。ちょっと旧世界に行ってもいいかな？」

『あー？別にいいぞ。詠春も行ってるし』

「そうなんだ。んじゃちょっと行ってくる」

『おう、おみやげ頼んだぜ』

「へいよ」

テレコーダーのスイッチを切ると、テーブルの上のボッシュが顔を上げた。

「そんじゃあ行くか？」

「おうよ、わりぃな相棒」

何故旧世界に行くかと言うと、先日ボッシュが何かを思い出したとしきりに騒ぐので話を聞いた時、とにかくあの「ドラグニール」へ戻りたいと言い出したのだ。

なんかよくわからなかったが、ボッシュがそこまで言うならなにかあるのだろう。

あれから大分月日も経ってちょうどいい機会だし、ということで手掛かりの掴めない「完全なる世界」とかは一旦棚上げして戻る事にしたのだった。

「次のゲートの発動は1週間後です」

「そうですか、ありがとうございました」

ゲートポートの前に居た係員の人に尋ねるとそんな返事が返ってきた。

ゲートの発動まで一週間、ちょっと暇が出来てしまった。さすがに依頼をこなす気にもならない。

となれば……

「相棒、あの蛇のねーちゃんのとこへ行かねぇか？」

「ん？ディースさんとこ？」

釣りに行く気満々だった俺に妙な方向からストップをかけるボッシュ。

「おうよ。あのねーちゃん色々知ってそうだったじゃねぇか」

「あー、そういえば」

龍の民について知りたくなったらおいでと言っていたことを思い出す。

「まぁそうだけどそれとお前の用事って関係あんの？」

「いや、ねぇけどよ、相棒の出自がちっと気になるだけさ」

どうにもあのシュークの出来事以来ボッシュの態度はちょっと変だった。

まぁ1週間ほど時間もあるし、ヨギの村ならちょうど行って来ればいい感じで時間が潰せるので、俺とボッシュはヨギの村へと向かった。

アレ以来随分と過ごしやすくなったヨギの村は、いつも通りの日常になっているようだった。

穏やかそうな老人たちの顔を見ると、あの時に頑張った甲斐があったというものだ。

とりあえず見物もそこそこにディースさんの家のあった場所へと向かう。

山道の方へ歩いていくと、それらしい建物が見えてきた。

建て直したディースさんの家は、どうやら以前と同じログハウスのようだった。

ドアをノックして少しすると、中から聞き覚えのある色っぽい気だるそうな声が聞えてきた。

「はーいどちら様……ってあら、リュウちゃんじゃないかい。どーしたんだい？ナギちゃん達は？」

「あー、こんにちはディースさん。今回は俺一人です」

相変わらずの美しさが実に目の保養になる。

「ふっふーん、そうかいそうかい。そんなにおねいさんに会いたか

ったかい？えーリュウちゃん？」

随分と楽しそうにニヤニヤしているディースさん。

「いやまぁそれもありますが…」

「龍の民について……かい？」

こっちの雰囲気を察してか、少し真面目な表情になるディースさん。

「そうです。なぁボッシュ」

「お、おう」

「わかった。ま、とりあえずお入りよ」

「お邪魔します」

外からでは詳しくわからなかったが、立て直したログハウスは中身がかなり豪華になっていた。

前はなかった二階と地下室を備え、広々としたキッチンが自慢らしい。

だが所々爆発の跡らしきものが見えるのが気に掛かる。

とりあえず居間に転がっていた大量の酒瓶を片付け、テーブルにお菓子とお茶を用意（俺が淹れました）してディースさんに話を伺う。

「じゃあディースさんの知ってる話を聞かせて欲しいんですけど」

「わかったよ。まずリュウちゃんはどこまで龍の民について理解してるんだい？」

「そうですねー、とりあえず竜に変身できるってのと、前言ってたようにもう俺以外は居ないってことくらいですかね。どんな風に暮らしてたとかは知らないです」

気が付いたらこの身体だったので、このくらいのことしかわからない。

暮らし振りを知らない事に関しては別にディースさんも気にしていないようだ。

「そうさね、元々龍の民達は普通の人達と同じように暮らしててね、その力をひけらかしたりもせずに過ごす穏やかな種族だったさ」

「へー、そうなんですか」

どこか懐かしそうに言うディースさん。

まぁこんな力持ってても別に使わないならそれでいいと思う。

「？でもそれならなんで滅んだんですか？何か災害とか？」

人間と共存していたのなら龍の民だけが滅んだ理由が良く分からない。

するとディースさんはちょっと暗い顔をして答えてくれた。

「……リュウちゃん達龍の民が滅んだのには……元凶がいてね」

「？普通に滅んだんじゃないんですか？」

「……」

ボッシュは黙って聞いてるようだ。

「違うんだよリュウちゃん。龍の民達はね、女神に滅ぼされたのさ」

「女神？それってひょっとして「ミリア」って名前だったりとか？」

たしかブレス３のラスボスがそんな名前だったことを思い出す。

「！」

ボッシュがその言葉に僅かに反応を示す。

「知ってんのかい？女神ミリアを？」

ディースさんが目を見開いて驚いている。

「いやまぁちょっと小耳に挟んだというか……」

ここは全力で誤魔化さざるを得ない。

「そうかい。まぁ……そうさ。その女神ミリアがリュウちゃん達龍の民を滅ぼしたのさ」

「何か理由があったんですか？龍の民が暴れたとか？」

俺みたいなのが暴れまわったらそうなるのも無理はないと思う。

「いや、本来龍の民はみんな穏やかだったさ。それに変身するドラゴンは確かに強かったけど、そこまでじゃなかった」

「……じゃあ何故？」

「残念だけどミリアが何を思って龍の民を滅ぼしたかは本人にしかわからないさ」

苦虫を噛み潰したような表情のディースさん。

「「……」」

俺とボッシュはそれを無言で聞いていた。

「あたしの推測でよければ話すけど？」

「お願いします」

いまいち背景がわからないので何でもいいから情報が欲しい。

「じゃあこれはあたしの考えだけど……龍の民には「可能性」があるからじゃないかと思うんだよ。世界を滅ぼせる「可能性」がね」

「可能性……ですか」

首を傾げつつ相槌を打つ。

「ミリアは曲がりなりにも神さ。ドラゴンと言う圧倒的な力を内包した存在、寿命も他の種族を圧倒している、そんな連中が世界にその牙を向ければ、あっという間に滅んじまうと危惧したんじゃないかね」

「「……」」

ディースさんはどこか複雑そうな顔をしている。

しかしそれが本当だとすると随分勝手な女神のように思える。

「人間だって核を使えば世界滅ぼせますよ？」

「その辺りの事はあたしも知らないさ。推測だって言ったろ？」

「はぁ」

やはり詳しいことはわかりそうにない。

「そう言えばなんでディースさんは龍の民を滅ぼしたのが女神だって知ってるんですか？」

ふと思った率直な疑問をぶつけてみる

「あたしは止めようとしたのさ、その暴挙をね。でもミリアは止まらなかった。あたしの力じゃたいした事が出来なかったのさ。だからもしリュウちゃん達龍の民が生き残ってたなら……いつか謝りたいとも、出来る限り力になってやりたいとも思ってた」

「……そうなんですか」

ディースさんの視線が、俺に申し訳ないという感情を向けていることがわかる。

「何故ディースさんがそこまで龍の民に尽くそうとしたんですか？」

またもふっと思い浮かんだ質問を訪ねてみる。

「あはは、まぁちょっとね。どちらかと言やミリアに腹が立ったと言うか、ね」

「……」

どこか言い難そうな様子が伺えたので、それ以上その事には突っ込まないことにする。

（そうか。でも向こうの世界でミリアに色々対抗したってことは…）

「ディースさんが魔法世界に来たのってひょっとして……」

「ああその通りさ。ちょっとゴタゴタしてあっちに居辛くなってね。あたしもあの我儘女神が居る世界なんてまっぴらだからね」

「なるほど」

「……」

ちょっとお茶を飲んだりして一息つく。

ボッシュは何事かさっきから考えているようだ。

「そういえば以前リュウちゃんが噴火を止めた時、ドラゴンになる前に妙な形態になっただろ？」

「ドラゴナイズドフォームのことですか？」

何かを思い出したような感じで話し出すディースさん。

「多分それさ。あれは本来の龍の民の力じゃない気がするんだよねぇ。あんな姿を取る龍の民なんて初めて見たよ」

「へー」

（やっぱあれは変なのかね）

あの形態を取る龍の民は居なかったというのは俺からすると妙な感覚だ。

「ひょっとしたらミリアはリュウちゃんみたいなのが生まれるのを危惧したのかも知れないねぇ」

「なんかよくわからなくなってきたんですが・・」

「ま、その辺はリュウちゃんは気にしなくてもいいんじゃないかね」

（ドラゴナイズドフォームか）

ディースさんの雰囲気のおかげか、話があまり暗くなり過ぎないのは正直ありがたい。

「ところでリュウちゃんはどこで生まれたんだい？」

「一応出身は旧世界の中国の山奥かな？」

（……だよな？この場合）

正直どこで生まれたかなんて詳しくは知らないのだ。

「はーんなるほどねぇ。そんなところで生き延びてたのかい。なら他にも龍の民が残ってたりは？」

「いえ、多分俺で最後です」

「そっか……」

若干肩を落としたようなディースさん。

多分、あの村の村長さんが龍の民だったんだろうと思う。

「まぁボッシュがなんか言うんでこれからあそこに一度戻ろうかって話をしてたんですよ」

「ほっほぅ」

途端、何故かディースさんの目がキラリと輝き、気合を居れて立ち上がった。

「よし、じゃああたしも旅の支度をするかね。旧世界なんて久々だわ～。ちょうどいい機会だし、ちょっと会いたい人も居るのよね！」

「え？いやもしかしてディースさんも行くつもりですか？」

「そうよ。いいじゃないあたしも見てみたいのよ。リュウちゃんの生まれ故郷を」

「はぁ」

言うや否や奥の方へ引っ込んでいくディースさん。

（まぁ別にいいか）

「ボッシュ、今ので知りたい事ってのはわかった？」

「おう……まぁ俺っちの記憶が間違いじゃないってこたぁわかったぜ」

「？」

何かよくわからない事を言うボッシュと、やたら張り切っているディースさんが対照的な感じなのであった。

第八章　2、尋人

色々と用意を済ませたディースさんと共にメガロメセンブリアの転送ゲートへと向かい、特に問題も無くそれを通過した俺たち。

「っと、到着！いやー、懐かしの我が世界よ、ってねぇ！」

「ノリノリじゃないですか」

「おうよ。ねーちゃん案外ミーハーだな」

俺とボッシュとディースさんは、イギリスはウェールズのゲートを通って旧世界へと戻ってきていた。

本当なら中国に出るゲートを使おうと思ったのだが、ディースさんがちょっと会いたい人が居るというので、別に俺の方は急ぎでもないしそっちを優先したのだ。

ちなみに今、ディースさんは変装魔法で下半身を普通の人間のように装っている。

蛇は蛇で問題なかったけど、これはこれでこうスラッとした足とムチっとした尻がなんとも……

「リュウちゃん？どこ見てるんだい？」

「あはは、なんでもないですよ？」

ニヤニヤとした視線を軽くスルーする俺。

（危ない。これは孔明の罠だった。気を付けないと）

ストーンサークルのようなゲートから周りの人たちがぞろぞろと移動する中、目的地がわからないので俺たちはその場に立ち竦んでいた。

「んでねーちゃんよぅ、その会いたい人ってなぁどこにいるんでぇ？」

「ん？さぁ？確か前にこの辺に住んでるって聞いたような気がしたんだけどねぇ。どうだったかしら？」

あっけらかんと他人事のように言うディースさん。

（なんと言うアバウトな……）

思わず溜息も漏れるというものだ。

「はぁ……それでその人ってどんな人なんですか？」

ディースさんが会いたいと言う人に興味が湧いたので尋ねてみる。

「そうさね、こうリュウちゃんくらいの年の見た目なんだけど、その実あたしと同じで何百年も生きてる女の子さ」

「へぇー、ディースさん以外にもそんな長命な人がいるとは」

（はて、ブレスにそんな人間居たっけな？）

自分の記憶にそんなキャラが居たかどうか検索を掛けるがヒット数は0。

「ねーちゃん、そいつの名前はなんてーんだ？」

どうやらボッシュも気になったらしい。

「そうねぇ結構長ったらしかったから、あたしはキティって呼んでるよ」

「キティ……？」

「どうしたぃ相棒？」

「いや……」

（なんだっけなー、どっかで……）

記憶の片隅の何かが引っ掛かるがどうにも思い出せない。

「それって本名は何ていうか思い出せませんか？」

「えー、何だったかしら？ん～、確かなんとかマクドナルド……だったような……」

眉間に思いっきり皺をよせて考えるディースさん。

「随分とジャンクフードな名前ですね……」

一瞬赤いアフロで黄色い服のランランルーなピエロが浮かぶがすぐ

に思い直す。

しかしよく考えると「マクドナルド」にまたもや記憶の何かがどこかしら引っ掛かっている。

「聞いたことないかしら?確か今は６００万ドルくらいの賞金首だったと思うけど」

「賞金首!?」

(俺と見た目同じくらいの年、キティ、６００万、マクドナルド……)

「あ」

ようやく頭の中で全ての線が繋がった感覚を得た。

「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル……ですか?」

「あー、そうそうそんな名前。なんだ、リュウちゃんも知ってるんじゃない」

「まぁそりゃぁ」

(まさかここでエヴァンジェリンが出てくるとは)

魔法世界では結構噂は聞いている。その悪名の内実は知ってるから特にこれといって何かしようとかはないが。

「「闇の福音」って呼ばれてる人ですよね?」

「そうさ。あの子も可哀想な境遇でね。全くあんないい子を賞金首にするなんてお上は馬鹿だよホント」

ディースさんも経緯を知っているらしく、その過去に憤っているようだ。

「はぁ。で、その「闇の福音」とどうやってコンタクトを取るおつもりで？」

「……さぁリュウちゃん！気合入れて探しましょう！」

適当にどこかを指差し、適当にノリで言い放つディースさん。

「わかっちゃいたけどノープラン！？」

「頑張れ、相棒」

ボッシュは完全に諦めモードのようだ。

（いくらなんでもこの広い地球上でそんなのわかるか！）

いくら稀代の賞金首とは言え、全くのノーヒントで探すなど無謀にも程がある。

「何か良い方法は……」

「あはは！さ、取り合えずここから移動しながら考えましょ、ね！」

「適当だなぁねーちゃんよお」

ディースさんに背中を押されつつそこから移動する。

気が付くと既に周りには誰もおらず、遠くにいた係りの人がこちらを急かすように睨んでいるのみだった。

そんなわけで取り合えずエヴァンジェリン探索の方法を考えながら、俺達は場所を移すことにした。

移動中、散々悩んで考えついた方法は、今こちらの世界に来ているだろう詠春さんに連絡を取ること。

蛇の道は蛇、餅は餅屋というわけで、そっちの情報に精通してそうな人に聞くのが手っ取り早いと言うことになった。

ウェールズの首都カーディフに到着すると早速電話のある施設を探す。

テレコーダーは当然旧世界への持ち込み禁止、さらにこの時代ケータイなんていう便利な物はないので公衆電話を使うのだ。

一応あることにはあったが、外国な上に見た事もない機種、さらに数が少ないせいで尋常でない金額が必要だったりしたが仕方なかった。

面倒な手続きを経て詠春さんの実家に電話を掛けてみると、すぐに本人が出てくれたのは運が良かった。

「ってわけなんですけど、賞金首の「闇の福音」の居場所とか御存じないですか？」

『ほう、「闇の福音」がディースさんの知り合いとはね。わかった。ちょっと待っていてくれ』

「お手数おかけします」

詠春さんは一から己を鍛え直すべく、実家の道場にてそれまでの数倍の修行をしていたらしい。

流石は生真面目剣士。

イメージ的に素振り→感謝の祈りを一日で一万回繰り返していても何ら不思議ではない気がしてくる。

そんなことを考えていると、電話の先に気配が。

『もしもしリュウ君、調べたんだけど闇の福音はちょうど今日本に居るみたいだな』

「日本に？」

『ああ、詳しくはわからないが関東の方で討伐騒動が持ち上がってるみたいでね。ちょっと大変かも知れないな』

「わかりました。お忙しい中情報ありがとうございます」

『いやなに。ディースさんによろしくな』

「はい。それでは」

公衆電話のあった場所から少し離れた場所にある喫茶店で、待っていたディースさんとボッシュに合流する。

座っている席のテーブルの上に何故か山ほどあるケーキの空き皿は悉くスルー。

「で、どうだったい？リュウちゃん？」

ディースさんは自分では優雅に食べているつもりのようだが、口の周りのクリームが色々と台無しである。

「一応有力な情報をもらえました。日本に居るらしいですよ」

「ほっほー、あの有名なジャパァンね。あたし行ったことなかったのよねー。楽しみだわー」

最後のケーキを頬張りながら、なんかまた目が輝きだすディースさん。

「ねーちゃん、観光か人探しか目的メッチャクチャになってんぞ？」

「いや本来の目的は龍の民についてだったような……」

「ほら、行くよリュウちゃん！空港目指してしゅっぱーつ！」

「ちょっ、引っ張らないで下さい！」

俺の腕を引っ張りながら会計に胸の谷間から取り出したお札をぽんと置き、お釣りも貰わずに突き進むディースさん。

（ウェールズに出た意味がまるでねぇ！）

俺達は終始ご機嫌なディースさんに引っ張られながら日本を目指すことになった。

当然ディースさんなら高速飛行魔法なんてお茶の子サイサイだが、流石に不法入国はヤバイし色々問題を起こしたくないので適当に一泊してから素直に飛行機に乗ったのだった。

何だかんだで微妙に時間を掛けて日本に到着。

今現在、日本は夕刻だが、時差のせいでおかしな感覚に陥る。

「で、キティはどの辺に居るって？」

「いやー関東としかわからないです」

「相棒、もうちょい詳しく聞いとけや」

関東と言ってもやっぱり広いので、現在空港のロビーでどっちへ行くか迷い中だ。

（確か今の時代のエヴァンジェリンって特にナギ達とは関係ないんだっけ）

少しずつおぼろげになってきた記憶を頼りにそんなことを考える。

（そういえば……）

「ディースさんと「闇の福音」の関係ってどんなのなんですか？」

どこら辺で接点があるのか気になったので聞いてみた。

「ん？あの子がまだヒヨッコだったときに魔法の基礎を教えたげたのがあたしさ」

「ってことはディースさんが師匠なんですか？」

「ふふん、ま、そういうことになるわね」

大きな胸を張って自慢げに答えるディースさん。

確かにそれなら納得だ。

（しかし探すのめんどいなー）

とロビー内を見渡しながら内心思っていると、ふとアイデアが浮かんだ。

「俺はあんまり魔法とか詳しくないですけど、何かこう探知魔法みたいなのってないんですか？知ってる人の魔力ならわかったりとかの」

すると本当に今しがた思いついたかのようにポンと手を打つディースさん。

「お！そーだった、その手があったね！いやーあっちじゃそんなの使わなかったからころっと忘れてたよ。リュウちゃんエライ！」

（……この人ホントに大魔道士なんだろうか……）

俺とボッシュのジト目をまっったく気にせず我が道を行くディースさん。

正直、このフリーダムっぷりは最早呆れるのを通り越して羨ましいレベルだ。

ここ数日で俺の中のディース株は猛烈な勢いで底値を更新している。

「ん～……あ、あっちの方にキティっぽい力を感じるね。……いやでもちょっと待ってこれは……戦ってる？」

ディースさんが目を閉じて意識を集中しながらそんなことを呟く。

「そう言えば討伐騒動がどうとかって詠春さん言ってましたね」

「……ちょっと面倒な事になってるかも知れないねぇ」

「急ぎますか」

「おうよ」

俺達はディースさんの指し示す方角へ、漠然と進むのだった。

第八章　3、真祖

「ふん、こんなものか。その程度でこの私に手を出そうとはな。身の程を知れ、雑魚どもが」

満月の夜、薄暗い林の開けた一角で、月光に照らし出されるのは流れるような美しい金髪。

万物の霊長たる人間を糧にするその女性の美貌は、世の男性全てを魅了する。

「ケケケ、オイ御主人斬リ足リネーゾ、モット殺ラセロ」

傍らに控えるはパートナーのキリングドール。

その手に持つは血濡れの刃。

「我慢しろチャチャゼロ。これ以上の無用な騒ぎは御免だ」

「ケッ、命拾イシタナオ前ラ」

「ぐう……」「くそ……」「闇の福音め……」

一人と一体の足元に転がる死屍累々の人間達。

「闇の福音」を討伐しようと集まった人間達はただの一太刀も浴びせられず、その圧倒的な魔力に容赦なく蹴散らされていた。

「じゃあな」

「ま、待て！「闇の福音」！」

倒れた大勢の中から一人の男がよろよろと起き上がり、去ろうとした女性を呼び止めた。

その男は幾分傷が浅かったらしく、血を流しているもののそれなりに余力があるようだった。

「……なんだ？死を望むならいくらでもくれてやるぞ？」

「御主人、俺ニ殺ラセテクレ」

振り向いた女性の氷のような眼差しに対し、男は不敵にも笑いだした。

「ふ、ふふふ……さすがは最強の魔法使いと謳われた吸血鬼……だが……少しばかり油断が過ぎるんじゃないか？」

「……なに？」

「『解放』！」

男の力強い言葉が鍵となり、吸血鬼と呼ばれた女性の足元が光り輝いたかと思うと、その全身を光の帯が次々と絡め取っていく。

「ふ……ははははは！特製の捕縛結界だ！まさかこれを使うハメになるとは流石は闇の福音と言った所だが……」

「貴様……」

女性は冷静に魔力を全身に漲らせる。

しかし光の帯の結界は、動きのみならず魔力をも封じているのか思うように力を発揮できない。

「吸血鬼の真祖（ハイディライトウォーカー）と言えど、魔力を封じた上で首を撥ね、頭を砕いて心臓にこの銀の刃を突き立てれば倒せるはず」

男は左手に魔法を、右手に銀のナイフを持って女性へと近付いていく

「……チャチャゼロ」

「アイサー御主人！」

パートナーの殺戮人形が待ち侘びていたかのように嬉々として男へと迫る。

「甘いねぇ……」

「ゲッ！何ダコレ！？」

しかし人形も死角から放たれた魔法の糸でその動きを封じられてしまった。

「くくく……やられたフリは俺だけじゃないんだぜぇ？」

男の側には、またもや倒れていたはずの魔法使いが一人立っていた。

「……」

女性はその光景を見ても何一つ表情を変えない。

「おい、これからお前は死ぬんだぜ？もう少しいい顔しろってんだよ」

男は下卑た視線と言葉を女性へと向ける。

「はっ、何だ？命乞いをして欲しいのか？下等な貴様らの考えそうなことだな」

女性は家畜以下のモノを見る目で自分へと迫る魔法使い達に視線を返す。

「けっ、可愛げのねぇ野郎だぜ」

「おい、もういいだろう？さっさと終わらせようぜ」

「そうだな」

男二人は身動きの取れない女性へと近付いていく。

女性はそれでもなお表情を変えず、凍える程に冷徹な眼差しを二人の男へと送っていた。

「……気にいらねぇなぁ」

その視線に何かを思いついた男は、片手のナイフを足元に落とした。

「おいどうするつもりだ？」

「ああ？こいつは見ての通り上玉だ。このままヤッちまおうぜ」

「おいよせよ。相手は吸血鬼だぞ？」

「構うもんかよ。最近溜まってんだよこっちぁ」

相方の静止を振り切り、男が一層下卑た笑みを女性へと向け、自分のベルトへと手を掛けたとき……

「ベリ・ルス・ル・ビルス・ウロボロス」

「「！！」」

辺りに凛とした声が響き渡った。

「『契約に従い、我に従え、氷の女王』」

男二人は慌てて周囲を見回すが、声の元凶は見当たらない。

「誰だ！」

「おい！不味いぞ！この呪文は……」

「『来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが！』」

「「！！」」

男二人は騒ぐ暇もないまま、膨大な魔力により顕現した氷柱の中へ閉じ込められる

「『全ての命ある者に等しき夢を。其は、安らぎ也』【こおる世界】」

周囲に木霊す呪文が完成すると、眩い光と共に氷柱が封印され、二度と融けることのない氷のオブジェと化した。

「やっほー、キティ。随分と素敵な状況ねぇ」

「貴様は……ディース！？」

帯に絡め取られた女性が驚いた視線を向ける先には、蛇のような下半身を持つ女性が宙に浮かびながら笑顔で手を振っていた。

ーーー

「何よキティ、久しぶりに会ったってのに随分とご挨拶じゃない」

吸血鬼の真祖に対して全く臆することなく、長年の友達と再会したように接するディースさん。

「そんなことはどうでもいい。……そっちのガキはなんだ？」

「あー、どうも初めまして。リュウと申します」

先程の場所から離れ、俺達はエヴァンジェリンさんの隠れ家を目指して歩いている。

ちなみにさっきは、俺とボッシュはディースさんに掛けられた浮遊魔法で上空に浮きつつ一部始終を見せられていた。

（まさかこんなところでエヴァンジェリンと会うことになろうとはなぁ）

俺たちの他に誰も居ないことを確認して幻術を解いたエヴァンジェリンさんは、俺と見た目同年代っぽい幼女で長い金髪とゴスロリ服に人形のような顔立ち、とやはりイメージ通りの容姿だった。

今、そのエヴァンジェリンさんは俺の方を胡散臭げにじろじろ見ている。

「そのガキ、妙な力を感じるな……貴様がこちらへ来たことと関係があるのか？」

「あー、ちょっとねー、野暮用があってね」

ディースさんの態度に若干何かを考えるような仕草をするエヴァンジェリンさん。

「ふん、それで？わざわざこの私に会いに来た目的はなんだ？」

その顔は冷静を装っているようだが、何か玩具を見つけた子供のような雰囲気が滲み出ている。

「ん？別に目的とかないわよ？ん～、強いて言うならあたしが会いたかったからかな？」

「……」

ディースさんの言葉に微妙にがっかりしたようなその表情は、何か自分が面白いことに関われるのではないか、という期待が崩れ去ったように見えた。

「ケケケ、オイ御主人コッチノチッコイノ殺ッテイイカ？」

足元のチャチャゼロがその背丈より大きな剣を担いで俺の方を見ている。

「我慢しろ。何やら一応は事情がありそうだ。それを聞いてからでも遅くはない」

言いながら俺に対してイライラのようなものを込めて睨みつけるエヴァンジェリンさん。

（……なんか物騒でコエーっす）

どことなくストレスをぶつけられたような気がしなくもない。

「まぁいい。久方ぶりの客人だ。私の別荘へ招待しよう」

「キティがどんなトコに住んでるか興味あるわねー」

「いい加減その名で呼ぶなと昔から何度も言っているだろうが！」

結構な迫力があるのにディースさんに軽くかわされてるエヴァンジェリンさんには、何かこう一種の微笑ましさがある。

とは口が裂けても言えない。

その小さな姿の後に素直についていく俺とディースさんであった。

「ほう、龍の民の生き残り、か」

「そうなんですよ」

ここはエヴァンジェリンさんの別荘の中。

「ふん、まだ居たとはな。とっくの昔に絶滅したと思っていたよ」

椅子に深く腰掛けながら、そう言って紅茶の注がれたカップに口を付ける。

「そうなのよー、まぁこれから色々その辺を調べにね」

「さらには喋る不死身の小動物、か……中々愉快な一行だな」

「俺っちはフェレットだっての。そこんとこ頼むぜ吸血鬼の嬢ちゃんよぉ」

今現在俺とディースさんとエヴァンジェリンさんでテーブルを囲んで優雅にティータイム中である。

別荘の置き場所は一応隠れ家とのことだったが、どこにでもある住宅街のふつーの一軒家だった。

まぁこんな空間があるなら、そっちに拘る必要は確かにあまりない。

やはり外の一時間がこの中では1日になるというのは素直に凄いと思う。

「ところでディース、コイツは変身できるのか？」

（ん……？）

座ったままのエヴァンジェリンさんが口の端をわずかに吊り上げてこちらを見ている。

「もちろんよ。リュウちゃんは龍の民の超絶エリートだからね。も、ホントとびっきりさ」

ディースさんが何故か自分の事のように自慢げに語っている。

「いやなんですかそれ。初めて聞きましたよ……」

なんかちょっと恥ずかしい。

「くくく……なるほど。ディースにそこまで言わせるか。私も一度龍の民とやらの力を見てみたかったんだよ」

楽しそうに笑うエヴァンジェリンさんの纏う空気が剣呑なものに変わっていくのがわかる。

「あの……まさか」

俺の言葉に反応したように立ち上がり、入口に歩いて行くエヴァンジェリンさん。

「察しがいいな。来い！腕前を見せてもらおう」

「うえぇ！？」

（いやいやマジヤベーよ今のエヴァンジェリンってナギ達より強いじゃん！）

ナギ達がまだ修業中な状態なのだから、現状既に超賞金首の正真正銘の化け物であるエヴァンジェリンはそれより強いはずである。

しかもその性格はドのつくSだ。

なんとかして全力で拒否したいと思う俺を誰が責められようか。

「いやあのー、俺の負けでいいんですけど……」

「私にそんな戯言が通用すると思っているのか？この「闇の福音」に」

（すんごいブラックな笑み……）

某性悪重力魔法使いとはベクトルの違うその笑顔に、俺は決定が覆りそうもない事を悟った。

「……ですよねー」

「相棒、頑張れ」

俺の意見など完璧スルーされ、何故か急遽俺ｖｓエヴァンジェリンのノンタイトルマッチが開催されることになってしまいましたとさ。

第八章　4、力試し

丸い塔のような建物から離れ、ここは一面広い砂浜。
透き通るような海と穏やかな日差しは、流石にエヴァンジェリンの自慢する別荘である。
（こんなプライベートビーチが持ち運び可能とかズルイよなぁ）
本来なら久しぶりに水泳でも楽しみたいところだが、今そこに俺は吸血鬼の少女と数メートル離れて相対していた。
「ん？貴様、ドラゴンにはならないのか？」
「取り合えずはこのままで……」
（なんと言うかどこまで通用するのかなーっとね）
俺はどうせ避けられないのなら、と開き直って力試しをすることにしたのだ。
「ふん……随分と舐められたものだな」
俺がドラゴンにならない事に眉を吊り上げるエヴァンジェリン。
「……できたら死なない程度にお願いします」
「それは貴様次第だ。覚悟はいいな？」

腕を組むエヴァンジェリンの周りにいくつもの魔法の射手が浮かぶ。

「魔法の射手・連弾・氷の７９矢！」

遠慮のない氷の矢がこちらへと襲い掛かってきた。

「魔法の射手・連弾・炎の７９矢！」

俺も同数の炎の矢でそれを迎え撃つと、ちょうど中間辺りで二つの魔法が相殺し、辺りに爆風が立ち込めた。

「ハハハッ！」

「！」

エヴァンジェリンがその爆風の中を突っ切って迫ってきている。

だがその程度の事は予想済みであり、既に俺は龍の力を腕に溜めている。

「散烈拳！」

「！」

爆風から飛び出た所を迎撃するように放った散烈拳は軽く避けられ、その勢いで上空へと舞い上がるエヴァンジェリン。

「ふん……」

俺に先読みされていたことが気に食わなかったのか、表情を硬くしたエヴァンジェリンの周りを魔力のオーラが包みだす。

「【氷爆】！」

「！」

目の前の空間に氷の爆発が起きて破片が飛び散り、体制を崩され視界も塞がれた。

「くっ！」

上からこちらへ突っ込んできているのはわかる。

だが先程と同じ動作なのに、よりスピードが速くこの勢いだと迎撃は間に合わない。

俺は肉弾戦に入る事を覚悟する。

「戦いの歌（バトルソング）！」

用意が整った所へ、目の前に拳を振りかぶったエヴァンジェリンが現れた。

「ハハハハハッ！！」

「うらぁっ！」

エヴァンジェリンと俺のパンチ同士がぶつかり合い、互いの魔力の火花が散る

「そらそらっ！」

「くっ……！」

そのまま流れるように連撃に移ったエヴァンジェリン。

流石の猛攻だが、今まで培ってきた体術を駆使して辛くも凌いでいた。

だがエヴァンジェリンの方が宙を飛んでいる分のアドバンテージがあるのに加えて……

「なかなか！やるじゃないか！」

「おわっ！？」

向こうは少しずつギアを上げてきていた。

こちらは段々と防戦一方になってくる。

「そらっ！」

「っつ！」

拳に魔力を集中させた一際強烈なパンチを両腕をクロスしてガードするが、威力を殺しきれずに後方まで吹っ飛ばされた。

「ぐっ……」

腕がギシギシ言っているのがわかる。身体強化無しだったら軽く骨が砕けていただろう。

「いいぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『来たれ氷精、闇の精！』」

「！？」

（まずい！）

空中に静止して手を掲げ、呪文を唱えるエヴァンジェリン。

（今あれを止める手は……）

「『闇を従え吹雪け、常世の氷雪！』」

大防御で耐えきれるかは不安が残り、避けるには俺のスピードでは軽く見切られてしまう。

もちろんエヴァンジェリンは手加減などしないだろうことが予想できる。

（仕方ねぇ！）

俺は自分の中に意識を向けた。

足元から火柱のようなオーラが吹き上げる。

「！　……ハッ！ようやく本気か！？だがこれはどうする！」

エヴァンジェリンの手に強大な魔力が収束していく。

「【闇の吹雪】！」

その魔力が放たれるのと同時にオーラが弾け飛び、ドラゴナイズドフォームが顕わになった。

変身した俺の目前に迫る強大な闇のビーム。

「ふんっ！」

俺は両腕に力を込め、こちらへと放たれていた闇の吹雪を真正面から受け止めた。

「！なに！」

「うお……お……おらぁっ！」

そのまま強引に軌道をあさっての方向へと逸らす。

軌道を逸らされた闇の吹雪はそのままいずこかへ飛んでいき、少しすると遠くの方から爆発音が響き渡った。

「ふぅ……」

やはり前回同様、変身すると気分がヤケに高揚していることがわかる。

（なんなんだこの現象は……）

「……」

今の俺の力を感じ取ったのか、静かに砂浜に降り立ったエヴァンジェリンの顔色が変わった。

「貴様……思った以上のようだな」

「……どーも」

少しずつエヴァンジェリンの表情が楽しげなモノへと変わっていき、放つ威圧感もそれに伴って増していく。

「ならばこちらも遠慮はしないぞ！」

エヴァンジェリンを包む魔力のオーラが膨れ上がり、その手から光が伸びていく。

「はっ！」

光の剣を携え、エヴァンジェリンが先ほどとは比べ物にならないスピードで飛び掛かってきた。

「おおっ！」

俺も龍の力を腕に込め、バーニア全開で飛び出す。

「『断罪の剣』！」

「ヴィールヒ！」

互いに渾身の一撃同士がぶつかり合い、行き所のない威力が衝撃となって周囲の砂を吹き飛ばしていく。

「ぐっ……」

拮抗するかに思われたが、変身した俺の方が純粋な力は強い。

（押し勝てる！）

「うらぁっ！」

「！」

爪が光の剣を砕き折った。

「ちっ！」

剣を砕いた勢いのままエヴァンジェリンの胴体を薙ぎ払うが、寸前でバックステップされ、服を切り裂くだけに留まる。

「まだまだぁっ」

「！」

俺は今が好機とばかりにさらにバーニアを噴かせて追撃に出た。

「っらあああっ！」

「ちぃっ！！」

さっきと打って変わって今度は俺が攻勢になる。

拳も蹴りも、威力・速度がそれまでの俺の比ではなく、防御の上からでもお構いなしに攻撃を喰らわせる。

ドラゴナイズドフォームとなった俺の攻撃は着実にエヴァンジェリンを捉え、ダメージを与えていた。

「ガキが……調子に乗るな！」

俺の攻撃の一瞬の隙をついてエヴァンジェリンから魔力が放たれ、突如真上に巨大な氷塊が出現した。

（無詠唱！？）

「『氷神の戦槌』！」

そのまま巨大な氷塊――圧倒的な質量が俺に圧し掛かってくる。

「『パドラーム』！」

それに対抗するべく俺が呪文を唱えると、足元の地面が赤く光り、そこから吹き上げた巨大な火柱が氷塊へと迫っていく。

「！」

エヴァンジェリンの目の前で、氷塊は火柱により跡形も無く溶け落ちた。

「ちっ、リク・ラク……」

「させねぇ！」

呪文を唱えようとしたエヴァンジェリンの隙を突いて俺のパンチが鳩尾に決まる。

「っ！」

身体をくの字に曲げ、初めて苦悶の表情に顔を歪めるエヴァンジェリン。

「ハァッ！」

さらに顔面目掛けて蹴りを見舞う。

「ぐっ！」

が、さすがに腕でガードされた。

蹴りの威力で距離が離れ、互いに見合うがエヴァンジェリンから感じる力は未だ衰えを感じない。

「……これほどとはな」

腕の血が流れた部分を舐めながら、しかしその目は今まで以上に輝きだしていた。

「この私と互角以上の戦いができるとは思わなかったぞ！」

「！」

先程よりさらに大きな魔力がエヴァンジェリンの身体を包みこむ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『契約に従い、我に従え、氷の女王！』」

「！！」

（あの呪文はやべぇ！）

「さぁ！この魔法からは逃れられんぞ！ドラゴンになってみせるがいい！」

「！……」

脅しにかかるエヴァンジェリン。

どうあっても俺の竜変身が見たいらしい。

（ったく……）

「なら……見せてやるよ！」

俺はドラゴンズ・ティアを外して放る。

そして自分の奥深くへと意識を巡らせ……

「！？」

（……これ……は……？）

その途端に凶暴な力が暴れる感覚が全身を支配しだした。
それは初めてこの姿になった時に感じたものと全く同じだ。
（まさか……暴走!?でもこんなに早く……）
ドラゴンズ・ティアを外してから少しは大丈夫なハズだったのだが、今は感覚的にそんな余裕はない。
（早く……竜変身……！）
俺はすぐに自分の力を呼び覚ました。
【ワンダー】巨大化
【シャープ】特徴強化
【リバース】反転
その特殊な組み合わせに体内で力が共鳴し合い、形態の変化を引き起こす。
「でぇぇやぁぁぁぁぁあ！」
頭上から紫の雷が落ち、黒い球体が広がった。
「……くくく、さて、どれ程なのか」

エヴァンジェリンは呪文を中断すると、ようやく見る事が出来る龍の民の真骨頂に笑みを浮かべ、その光景を眺めていた。

黒い球体の大きさはリュウの身長を僅かに上回る程度。

「……？」

その大きさにエヴァンジェリンの脳裏に疑問が浮かぶ。

黒い球体は地面へとゆっくり着地すると、ひびが入り、砕け散る……

ピ　ァ　ァ　ァ　ァ　ァ　！

「な……！？」

そこに現れたのは小さなドラゴンだった。

全長はリュウの身長と大差なく、小さな羽が生えており外殻は黄色で子供のドラゴンと言って差支えない。

「ちっ……変身できると言ってもその程度か」

エヴァンジェリンは失望の表情を浮かべながら着地し、そのドラゴンへと近付いていく。

≪舐めて貰っちゃ困るよ？≫

「なに？」

瞬間、エヴァンジェリンの視界からドラゴンは消えた。

「!?」

≪こっちさ≫

「!?なんだと!?」

振り返ったエヴァンジェリンの目には、はるか後方に位置する小さなドラゴン。

エヴァンジェリンは自分の目でさえ負えないスピードに驚愕した。

だがすぐに理解したのか目を閉じ、己を嘲り笑う。

「……は、なるほどな。……よくわかった。前言を撤回しよう!」

失望の表情が掻き消え、ニヤリと笑うエヴァンジェリンの身体を再び魔力が覆う。

このドラゴンの名は「クイックシルバー」。

巨大化の力を強化し、それを反転させることで生まれる驚異の対弾性を誇るドラゴン。

その外殻は全ての属性に耐性を持ち、いかなる攻撃も弾いてしまうほどの密度を秘めていた。

そしてその特技はブレスではなく、小さな体と強固過ぎる防御力を最大に生かした――突進。

またもドラゴンの姿がエヴァンジェリンの視界から消える。

と、

「くっ！」

文字通りの目にも止まらぬ超高速でエヴァンジェリンの側を通過したドラゴン。

かろうじて避けたエヴァンジェリンだが、遅れて来る衝撃波の強大さが、音速などはるかに超えている事を示している。

当たればどんなものでも粉砕されるだろう。

ドラゴンが着弾したと思われる遠方の土煙りが晴れると、その中心に居た生物がエヴァンジェリンの方に向き直った。

≪次は当てますよ≫

その声には自信が伺える。

「……フハハハハハ！　いいだろう！　来てみろ！」

≪……じゃあ遠慮なく！≫

吸血鬼とドラゴンが全力の勝負に入ろうとしたまさにその瞬間……

真剣な場の空気が一気に霧散するように、塔の方から間抜けな爆発音が辺りに響いた。

≪「!?」≫

≪……ディースさんか≫

ドラゴンの視線の先には、真ん中周辺から煙を上げる塔があった。

「……はっ……やめだ」

その煙を見たエヴァンジェリンが緊張を解く。

≪?≫

「……気がそれた。貴様の実力も大体わかったしな」

≪……≫

エヴァンジェリンは魔力を抑える。本当にこれで止めるようだ。

それを察したリュウも元の姿へと戻っていった。

（俺変身し損じゃね?）

大して力を使ってないせいか、元に戻っても筋肉痛などは気にならない。

思いのほかスッキリとした顔でエヴァンジェリンさんが俺の方に近付いてきた。

「貴様、さっきの闘い方は我流か？妙な技が多いが」

「まぁ、実戦が多かったもので」

どことなく機嫌の良さそうなエヴァンジェリン。

（型とかないよなぁ、あのメンツを相手に頑張ってたのが基本になってるから……）

「そうか。だが気に入ったぞ。ドラゴンも悪くはないが……あの姿の遠慮の無さが特にな」

「……すみません」

どうも近頃はあの気分のせいで、変身すると手加減等を考える余裕が消えてしまうのだ。

「貴様は中々見込みがあるぞ。どうだ？我が下僕として悪の覇道を突き進む気はないか？ん？」

凶悪にブラックな笑みを浮かべながら誘いを掛けてくるエヴァンジェリン。

（何その勧誘。どこの魔王？）

「下僕」と言う部分に、やはりSな部分が垣間見られる。

「んー……考えときます」

しかし美少女の誘いとなると嫌とは言えない俺だった。

その後、塔へと戻った俺とエヴァンジェリンさんの前に、煤けてぷすぷす煙を上げている不思議アフロなディースさんが倒れていたが、華麗にスルーしたのは言うまでもない。

第八章　ＳＯＬ　～ディース様のお料理地獄～

リュウとエヴァンジェリンが外へと出て行った後

エヴァの塔　客室

「はぁ～暇ねぇ～」

「ねーちゃんよ、相棒とあの嬢ちゃんの戦いは見ねーのかい？」

「ん～、何もこんなところで戦わなくてもいいじゃないの。あたしは興味ないわー」

「そうかい。なら俺っち見てくるぜ」

「ケケケ、オ前俺ト遊バネーカ？刻ミ甲斐ガアリソウダ」

「けっ、俺っちにゃ人形と遊ぶ趣味はねぇっての」

「詰マラネェナ。ソウダ、でぃーすハアレカラ料理ハ上達シタノカ？」

「おい人形てめ、余計な事を……」

「それはあたしに対する挑戦ね？いいわよチャチャゼロ。この数百年研鑽を積んできたあたしの料理の腕前、とくと見るがいいわ！キッチンに案内しなさい！」

「ハッハー、ソイツハ楽シミダナ」

「やめろって！俺っちはどうなっても知らねぇぞ！」

エヴァの塔、キッチン

「さ～てチャチャゼロ、この冷蔵庫の中身全部使っていいんでしょ？何かリクエストはある？」

「俺ハ食エナイガ「スパゲティナポリタン」ッテノガイイ。血ヲブチマケタヨーダカラナ」

「ふふん、スパゲティね。簡単じゃない。見てなさい。すんばらしい出来にしたげる」

～材料集め～

「（ゴソゴソ）あった！これよねパスタ！うんうん、小麦のいい匂いがするわ」

「ドー見テモ「ウドン」ダナソレ」

「何よ。同じ小麦だし問題ないじゃないのよ」

「……」

「後はー（ゴソゴソ）あったーこれこれ、ナポリタンと言えばトマトよねトマト！」

「……ソレハ熟シタ柿ダゾ」

「同じようなもんでしょー？大丈夫だって！」

「……」

「ふんふーん♪あとは（ゴソゴソ）色合い的に緑も欲しいわね……ってあれ？これってキュウリ？」

「ソレハ御主人ノ好キナ漬物ダ」

「ふーん、キティが好きならきっと美味しいのよね？なら入れちゃいましょー」

「……」

「そうそう、キノコも居るわよね！んっと、（ゴソゴソ）あった！」

「見事ナ紫色ダナ」

「大丈夫、前に図鑑で見たことあるわ。毒じゃなかったと思うわよ。あたしの記憶が確かなら」

「……」

「さて、こんだけあれば大丈夫でしょ。そんじゃ張り切っていってみましょー！」

～調理～

「ナポリタンはね、パスタを茹でてる間に絡めるソースを作ってお

くのよ」

「ホー」

「じゃあまずはパスタを茹でてっと」

「（流石ニ湯ニブチ込ムダケダカラナ）」

「お湯には塩を一つまみが常識ね！」サッ

「……ソレハ砂糖ノ瓶ダゾ」

「あ。……大丈夫、こっちは塩だから多めに入れれば誤魔化せるわよ」ザバッ

「……」

「そしたら切った材料を炒めて……あら？油がないわね」

「切ラシテルンジャネーカ？」

「ふふん、でも大丈夫、この大魔道士ディース様は空気中から「あぶら」を合成する魔法を会得しているのよ！ん～……はっ！」ドヴォンッ

「フライパンノ半分以上ヲ埋メテルナ」

「問題ないわ。ちょっとくらい油が多い方が美味しいし」

カチッ……ボッ！

「火はこれでよしっと。じゃあパスタを茹でてる間にちゃっちゃと炒めちゃいましょー」

ジュワァァァァァ……

「コレハ揚ゲ物ッテ言ウンジャネーカ？」

「ま、まぁ大丈夫よ……さ～て、いい感じの色になってきたわね」

「マァ俺ハ食エナイカライイケドナ」

「んじゃあここに潰したトマトを投入～」だばぁ

「……甘ソウダナ（柿ダシ）」

「そうね～確かにこれだと……しょうがない、も少し塩を入れましょう」ザバッ

「……」

「さーてここで隠し味！こんなこともあろうかと、この前手に入れた特製のスパイスがあるのよここに」

「ホー？」

「（ゴソゴソ）じゃーん、「ファイアスパイス」～。これでちょっとピリ辛な大人の味を表現できちゃうってわけよ」

「オイソノ瓶ノ横ノ文字ハ……」

「も、一気にドバっといっちゃいましょっか！」ドバッ

カッ！

「「あ（ア）」」

それはあまりにも無慈悲で、あまりにも残酷な結末だった。

ディースが全身全霊を傾けた珠玉の料理は、あろうことか轟音と共に炭と化し、その全てが漆黒の結晶「おこげ」へと成り果ててしまったのだ。

我々はこの尊い犠牲を決して忘れてはいけない。

世の中には必ず守らなければならないルールというものがあり、それは例え大魔道士と言えども決して破ることは出来ないのである。

注意書きというルールを蔑ろにしたディースがこのような結果になってしまった事は、非常に残念ではあるが半ば当然とも言えるかも知れない。

しかし我々はこれでまた一つ、大事な事を学び取ることが出来たのだ。

この悲劇をご覧の皆様も、是非肝に銘じておいて欲しい。
「火気厳禁」「爆発物注意」と書かれているものは決して料理の隠し味に使ってはならない、ということを。

「無茶しやがって……骨は拾ってやるぜ人形よ……」

その時、ボッシュは空に浮かぶチャチャゼロの幻に見事な敬礼で答えていたと言う。

ファイアスパイス……敵全体にパダーマと同等の効果

第八章　5、到着

「ほう、中国の山奥か」

「ええ。そこに龍の民の隠れ里があったんですよ」

取り合えず一連の腕試しも終了し、ディースさんも復活して現在は再び別荘にてティータイム中である。

エヴァンジェリンさんは久々に全力で暴れられて楽しかったとのことで、一応あれで満足してくれたようだ。

だが誰かさんのせいで集中力が途切れたので、またその内再戦したいとも言われた。

御開きにはなったがここだけの話、あのまま続けていたらドラゴナイズドフォームでも普通に負かせられたように思えなくもない。

（変身後の俺ってもしかしなくても最強なんじゃね？）

微妙に増長した考えになっても仕方ないのではないかと思う。

「暇ならキティも一緒に来る？」

ふと会話に耳を傾けるとディースさんが何やらエヴァンジェリンさんに問うている。

……考え事をしている間にいつの間にやらそんな話になっていたらしい。

わずかに考えるそぶりを見せたエヴァンジェリンさんだが決断は早かった。

「そうだな。私がこの極東の島国に滞在している事もバレているようだし、移動するのも悪くは無い」

「じゃ決定ね。よかったわねー、リュウちゃん。あたしとキティで両手に華よ？」

エヴァンジェリンさんが移動するという話はまぁわかる。

ディースさんの言うことも確かにその通りなんだけども、微妙に嬉しくないのは何故だろうか。

「……そうですねー」

もちろん二人の方を直視できずに視線を逸らす俺。

お昼休みはウキウキｗａｔｃｈｉｎｇ！な気分である。

「貴様、今の間は何だ？」

「リュウちゃん、あたし素直な子供の方が好きだナー？」

二人の周囲に黒いオーラが満ちていく！

「いえはいとても嬉しいデス」

「相棒、声裏返ってるぜ」

「ケケケ、案外余裕アルミテーダナコイツ」

というわけでディースさん、エヴァンジェリンさんと言う心強い味方？と共に俺の生まれたであろう場所、ドラグニールを目指すこととなったのだった。

……と思いきや

「へー、これがジャパァンの首都のトゥキョーね！　……まぁ意外と普通ね」

「そりゃそうですよ」

「何を期待したんだ貴様は……」

何故か今俺達は東京観光をしている。

ディースさんが日本を離れる前に見て回りたいとダダをこねたのだ。

一応エヴァンジェリンさんの認識疎外の魔法で周囲には普通の少年・少女と引率のお姉さんとしか見られていない。

どちらかと言えば子供二人にそのお母さんぽくね？という疑問は喉まで出掛かったが我慢した。

しかし最初に麻帆良に訪れた時には気にもしていなかったが、こうして改めて周りを見てみると中々興味深いものがある。

この時代……１９７８～９年辺りは高度経済成長期は終わっていたが、それでも安定成長期であり、詰まる所景気がいいのだ。

俺の昔の生まれてからの記憶と比較すると信じられないような周囲の浮かれっぷりだ。

正直、そんな世間に少々腹立たしさを覚えてしまうのは許して欲しい。

他にもどうにも以前から未だに慣れない事として、お金に関する事がある。

なんと５００円が「お札」なのだ。

万札の絵柄が聖徳太子だったり千円の絵柄が伊藤博文だったりと、実に違和感バリバリ。

町行く人々の流行のファッションがタンクトップだったりと、俺の感覚からすると何故？と思えるようなのが最先端であり、ピンクレディーとか言うユニットや山口百恵というアイドルが大人気なようだ。

もう本当リアルでナウなヤングにバカウケの時代である。

約３０年前がこれとは、時代の進歩って凄いんだなぁと感心しきりだった。

テレビは無駄にでかくてリモコンのないガチャガチャ回すダイヤル式だったが、この時代から既に暴れん坊将軍をやっていたのには驚いた。

一通りディースさんが観光を満喫したところで、俺は行った事のなかった秋葉原に喜び勇んで行ったのだが……この時代なのでまだ電気街が出来るかどうかってくらいだった。

パソコンなど８ｂｉｔのモノすら危ういような始末らしく、当然売ってもいない。

ファミコンなんかもまだ発売されていないようで、ようやくインベーダーゲームが出たくらいだった。

顔にこそ出さなかったが、俺の心中の落胆ぶりを是非とも察して欲しい気持ちで一杯だ。

腹いせによったゲームセンター（インベーダーハウスと言うらしい）で溜まっていた不良どもを追っ払い、二人にインベーダーゲームをやってもらったら異常にハマっているようだった。

これからのゲームの進歩に驚きと喜びを感じてくれると俺としては嬉しい。

ついでにせっかく未来？を知っているのだからなんとかして金を稼ぎたいとも思ったのだが、手っ取り早く競馬で稼ごうにも馬の種類とかどれが勝ったなどは全く知らないし、株をやろうにも大した元手が無い上、戸籍も身元保証もない孤児っていうか子供なので借金もできない。

非常にやきもきとした観光となったのだった。

数日ちょこちょこと移動しながら日本見物を終えて、俺達は中国を目指した。

当然行き先はあの集落だ。

移動に関しては特筆すべき問題はなかった。

中国でも多少の見物を交えつつ、記憶を頼りに山奥まで進んでいった。

今はようやくかつて飛び越えた山脈の麓の辺りに来ている。

「この山の向こうですよ」

「変わってねぇだろうなぁ」

上を見上げる俺とボッシュの前には、険しく切り立った岩肌が剥き出しの山々。

「じゃあ早速行きましょ」

「ふん」

魔力を纏い、飛んで行く二人を見送る俺とボッシュ。

「ん？どうした。お前が先頭を進まんと場所がわからんではないか」

「あー、そっか。リュウちゃん飛べないんだっけ」

「はぁ。すみません」

こちらを見下すエヴァンジェリンさんの呆れたような視線が心に突き刺さる。

「軟弱な……なら気合で山を登れ」

「今度浮遊魔法教えてくださいよー」

「「……」」

俺の頼みに二人が何事か空中でアイコンタクトをかわしている。

「いいだろう。後でたっぷりと教えてやる」

「あたしも構わないわよぉ？」

二人の笑顔がエラく不気味に見えるのは気のせいだろうか。

（やべ……地雷踏んだか……）

まぁどうにも浮遊魔法は「見て」も覚えられないので助かることは事実だ。

取り合えずこの場はディースさんに魔法を掛けてもらって飛んでいくことにした。

しばらくすると、山奥の一角に開けた場所が見えてきた。

周囲には生物の居る気配などは全くない。

段々と日が暮れだし、影が東へと伸びていく最中……

「やっぱ変わってないな」

「そりゃなぁ」

視界の先に古びた家々が立ち並ぶ集落が見えた。

「あれが……龍の民の隠れ里かい……」

「随分と寂れているな……」

それを見た二人もそれぞれ感想を述べている。

ドラグニール。

俺がこの身体になった始まりの場所だ。

こうして冷静になって考えるとよくわからないことが多すぎる。

あの時は全く疑問を感じなかったが、なぜ自分はこの身体になったのか、その辺りのことが全く分からないのだ。

（まぁでもそれは別にいいか）

今、疑問を感じてはいたが、何故かそういうものだと思えてそれほど気にしていなかった。

俺が考えながら歩いていると、いつの間にか既に村は目の前まで来ていた。

中へと入り、他二人と一緒にぼちぼち見て回る。

「大して見る物もないと思いますよ」

「……」

ディースさんは村を見渡して複雑そうな表情をしている。

「なるほどな。ここに逃げ延びた龍の民も結局は全滅したというわけか」

エヴァンジェリンさんも憐れむような表情で辺りを見ている。

「まぁ今日はもう遅いですし、ひとまずどこかで休みましょうか」

既に当たりは暗くなってきていたので、あの研究所でのボッシュの調べ物は明日にしようということになった。

ここまでそこそこの長旅で疲れもあり、（主にディースさんが）眠たいのもあるので俺達は村で一番まともな建物である、かつての「ユンナ」さんの家にお邪魔して一晩泊まることにした。

当然だが俺が料理を担当し、日本で調達した食材を使用して腕を振るった。

上達している料理の腕は二人になかなかの評価を頂くことができ、その後は早々に就寝することとなった。

二人が寝静まり、俺もベッドの上で意識が闇に落ちていこうというちょうどその時――

『……リュウ……』

「……ん……？」

俺たちのほかには誰も居ないはずのその場所で声が聞えてきた。

『……リュウ……』

「……誰だ？」

声自体には聞き覚えがあるような気がした。

傍らで寝ているボッシュを起さないように起き上がり、隣の部屋をこっそり覗くがディースさんもエヴァンジェリンさんもグッスリ寝ている。

どうやら自分にしかこの声は聞えていないようだ。

「？外……か」

ディースさんは寝相が悪く、肌蹴た部分が実に目の保養になるが今はどうでもいい。

俺は服を整え、念の為に魔法発動体である呪いの指輪（仮）を身につけて静かに外へ出た。

外は半月の明りが周囲を照らし、静かな状況と相まってある種幻想的な空間のようだった。

『……こっちだよ……』

「……何だろ？」

声に導かれるままに俺は歩いた。

声は村の外から聞えてきており、月明かりを頼りにそちらへと向かう。

以前2度目の変身をした時、ボッシュを吹っ飛ばした辺りの広場に、そいつは居た。

「……やぁ、リュウ」

「！！」

月の光に照らされて、その白髪は輝いて見える。

岩に腰掛け、膝を立てた状態で月を見ているその顔はとても穏やかで、思わず見入ってしまうような芸術性があった。

「こっちの世界に来たって聞いてね。ここに来れば会えると思ったよ」

「お前……」

「久しぶりだね」

白髪の少年、バルバロイは立ち上がり、こちらへと向き直った。

第八章　6、執念

「あの時の……ナギって言ったっけ。彼と組んでいたとはね」

「……」

「ずっと探していたんだ。その「力」、忘れたことはない」

「……」

（何だ……？）

俺はバルバロイの放つ雰囲気が以前と全く違う事に戸惑っていた。

能面の様だった表情は妙に豊かになって人間味を感じさせ、言葉の抑揚がそれを後押ししている。

こいつは本当にあのバルバロイなのか、その態度に俺は警戒しつつ混乱していた。

「……そう、リュウだよね。僕、君を殺さなくちゃ」

「！？」

思い出したようにそれまでの表情が消え、辺りの空気が沈む。

言動の妙な不自然さに思考が傾いた瞬間、バルバロイの姿が目の前から消えた。

「え？」

その事を認識し、体が動き出すより早く

左の頬に衝撃が走った。

「がっ！？」

俺は後方へ激しく吹っ飛ばされたが、なんとか態勢を立て直して着地する。

「どうしたんだい？早くあの姿になりなよ」

それまで俺の居た位置の半歩前で棒立ち、まるで友達に注意を促すような言い方でバルバロイは俺に声を掛ける。

ころころと変わるその仕草と言動に、俺は背筋に嫌な汗が流れるのを感じた。

「くっ……戦いの歌（バトルソング）！」

「へぇ」

「うおおおっ！」

粉砕する勢いで地を蹴り、拳に全体重を乗せてバルバロイへと殴りかかる。

「っ……ふぅん、なるほど。少しはそのままでもできるようになっ

たんだ」

「！」

しかし俺の拳はあっさりと片手で受け止められてしまった。

力を込めて振り解こうとするが、ピクリとも動かない。

「じゃ、力比べでもしようか」

俺の手を離し、戦闘態勢を取るバルバロイ。

「くっ！」

（やってやる！）

そして激しい衝突が起きた。

「うらぁっ！」

「……」

拳の応酬、蹴りの乱舞。

俺だけが声を荒げ、対するバルバロイは涼しい顔で強烈な攻撃を繰り出す。

外れた威力が空を裂き、地を削っていく。

最初こそ互角かと思われたが、

「ぐっ！」

顔面に肘が

「かふっ！」

鳩尾に蹴りが

「うごっ！」

顎に拳がヒットする

既に俺は劣勢だった。

「……こんなものかい？」

セリフに反して気持ち悪いほどの笑顔をバルバロイは浮かべている。

（このままじゃジリ貧だ！）

「くそっ！」

「ふん……」

突然表情を無くしたバルバロイが攻撃の手を止めた。

「このままでも君を殺せるけどね、それじゃ意味がないんだ。早くあの姿になりなよ」

（……？）

無表情のまま、俺に変身するよう促してくるバルバロイ。

「嫌だね。なんかムカツクし……」

俺にも意地がある。この野郎に言われてはいそうですかと変身するのは癪に障る。

それにまだこちらにはブレスの補助魔法という地力を上げる手が残されている。

（さらに身体強化……）

俺にまだ変身する気がない事を悟ると、今度は怒ったような表情で話しかけてきた。

「そう。なら、その身体強化、面倒だから消しておこうか」

「！？」

バルバロイの周囲に判別できない力が集まっていく。

「【結界】」

バルバロイがその力を解放すると、足元から波紋のような光が広がった

「え？」

途端に全身を襲う虚脱感。

（戦いの歌（バトルソング）が……！？）

身体強化の効果が掻き消されたらしい。

「これで君の力は大幅に下がった。さぁ、早くあの姿になりなよ」

笑顔になり、執拗に変身するよう求めて来るバルバロイ。

（何でコイツはそんなにドラゴナイズドフォームに拘るんだ？）

「戦いの（バトル）……」

「【結界】」

「！」

またしてもバルバロイの発した波紋のような光に、纏おうとした魔力が掻き消された。

（くそっ！結界ってあれか！）

記憶の中にあるブレスのスキル。敵味方の補助魔法を全て消し去る技が思い浮かぶ。

「そのままじゃどうあがいても僕には勝てないよ？」

「……」

頭では理解できている。

このままではコイツには勝てない、と。

俺の中で意地と理性がぶつかりあうが、結果は最初から見えていた。

「……」

バックステップして距離を離し、自分の中に意識を集中する。

足元から火柱のようなオーラが吹き上げる。

「ハァァァァッ！」

オーラが激しく発光して弾け飛び、俺はドラゴナイズドフォームに姿を変えた。

「そう、それだよ…それこそ僕が倒さなければいけない力……「うつろわざるもの」」

今度は表情だけではなく、言葉も喜びを表すように震えていた。

「？」

（うつろわざるもの？）

「ふふ……あはは……じゃあ僕も……手に入れた力を使おうか」

そう言うと、バルバロイが何かを解放するように小刻みに揺れ出した。

「!?」

バルバロイの体から骨が軋み、砕けるような音が聞こえてくる。

徐々にバルバロイの半身が変わっていくのが見て取れる。

「ぐあ……あ……あああ!」

苦悶の声を上げてもがくその姿は、まるで何かに取り憑かれていくようだった。

「!?」

「はぁっ、はぁっ……」

変化を終え、肩で息をするその姿は――右半身はそれまでのバルバロイ。

……しかし左半身は黒く変色していた。

腕や足は極端に細くなって指先が妖しく光り、目の部分は完全に白で瞳がない。

人の体とは思えないその黒い表面には、オレンジ色の光を放つ不気味な模様がつま先から頭頂部にわたって浮かんでいる。

（……これって!?）

ブレス5の敵、そのブースト形態に雰囲気が似ていることに気が付

いた。

「お前、それは……」

「あはは……僕もね、ちょっと……ドラゴンの力を取り込んだんだよ……何匹も何匹も……おかげで君に対抗できるだけの力を得た」

黒い半身の顔には生気が無く、残りの半身に浮かぶ表情は……狂気だった。

「！　魔法世界のドラゴンが居なくなったのは……」

「そうさ。目には目を……龍の民にはドラゴンを……てね」

魔法世界でディースさんの家に行く前のナギとの会話が思い出される。

「じゃあ、試させて貰うよ！」

そう言って特に考えがある風でもなく、無防備に俺の方へ突っ込んできた。

「！」

さっきは見えなかったが、変身した今では余裕で捉えられた。

どうやらスピードはそこまで変わっていない。

突っ込みながら、発光する模様だけが闇に浮かぶ左腕を振りかぶっている。

（弾いてヴィールヒ！）

俺はそれを迎え撃ち、黒い左腕を払い飛ばして爪を決める。

……はずだった。

「え？」

次に俺の目に入ったのは自らの鮮血。

「！？」

そして感じたものは痛み。

（ドラゴナイズドフォームが！？）

「うぐ……くっ！」

俺は混乱しながらもバーニアを使って一旦後ろへ離れた。

痛みの元を見ると、弾こうとした右腕に深い裂傷が走っているのがわかった。

「なんで……」

（あの左半身……）

「あはは、駄目だよ逃げちゃ……」

何気なく突っ立っているバルバロイの左腕からは、俺のものと思われる血が滴っている。

「！　あの腕……」

記憶の中を掘り返すと、今になってあれがなんだったかを思い出せた。

「気付いた？これは【ドラゴンキラー】って言うのさ。取り込んだ数多のドラゴンの怨念の力だよ」

バルバロイが誇示するかのようにその黒い半身を見せつけてくる。

「くっ……」

生半可な攻撃では傷一つつかない筈のドラゴナイズドフォームを、いとも簡単に斬り裂いたことからわかる。

あれは龍の力に相反する力だ。

恐らく今の俺では触れるだけでダメージを喰らう。

かと言って変身を解くわけにはいかない。

素の身体スペックでは到底勝ち目がないのだ。

（アレには触れない！）

バルバロイはその黒く染まった半身を前にし、まるでフェンシングのように細い腕を構えている。

『ババル！』

呪文を唱えると、上空から雷が束となって降り注ぐ。

「ふん」

しかし雷撃は本体まで届かず、障壁に遮られ弾かれた。

障壁の分厚さから余程の威力でないと貫けないであろう事が伺える。

並の魔法では通用しないらしい。

「なら……『バルハ……」

「『石の槍』」

こちらが雷系最大魔法を放つより早く、バルバロイの魔法により発生した石の槍が俺の周囲から迫ってきた。

左右と後ろ、気配から上にも発生した事がわかる。

「！！」

避けられる空間は前方のみ。

そしてその先には待ち受けるバルバロイ。

接近戦を誘っていることはすぐにわかった。

「……やってやる！」

高揚しているテンションも手伝い、俺はバーニアを滾らせて突っ込む。

しかし前に突き出ている黒い半身、ドラゴンキラーは触るだけでダメージを食らってしまう。

「はっ！」

迎撃体制のバルバロイの寸前でバーニアを駆使してその脇へと回り込む。

「ヴィールヒ！」

爪がガラ空きの半身にヒットし、白い二の腕を抉った。

……が、浅い。

「ふん……これは？」

受けたダメージを全く気にせず、こちらを向いたバルバロイがドラゴンキラーを振りかぶる。

「ぐっ！」

その腕がこちらのガードした腕の肉を切り裂いた。

「ほらっ！」

脇腹を狙ったドラゴンキラーの蹴りを足でガードするが、衝突した箇所から血が飛び散る。

（……くそが！）

「うらぁっ！」

「うぐっ……」

こちらの拳が白い脇腹に鈍い音を立てて突き刺さり、苦悶の表情のバルバロイの片目が血走って気迫が膨れ上がる。

それを合図に再び激しい攻防となった。

俺の爪の一撃が地を深く抉り、バルバロイの蹴りが大岩を砕く。

今度は俺だけでなくバルバロイも声を荒げ、互いに致命を狙ってその力を振るっていた。

両者とも並の人間なら掠るだけで吹き飛ぶ威力の攻撃を惜しみなく繰り出している。

こちらが攻撃をしてもドラゴンキラーには触れるだけでダメージを食らい、俺は傷だらけになっていく。

だが身体的なスペックは今の俺の方が高く、少しずつだがバルバロイにもダメージを蓄積させていた。

「はぁ……はぁ……」

「ふぅ……」

どれほどの間そうしていただろうか。

互いに決め手がないまま時が過ぎ、周りの岩場は所々クレーターができていてわずかにあった丘は消し飛び酷い有様になっている。

膠着状態となり、お互い傷だらけのまま隙を窺っていると

「うぐっ……」

「……！？」

突然バルバロイが胸を押さえて苦しみだした。

「僕は……君を殺す……絶対に……絶対にだ！」

変色していない半身の目が血走ったまま、怒りを剥き出しにした表情をしている。

そのただならぬ執念に、俺は若干気押されていた。

（……なんなんだ！？）

「お前、俺がなんだってんだ？なんでここまで執拗に俺を狙う？」

「君は龍の民の生き残り……ミリア様の敵だ！」

「！！」

思いがけずに聞えてきた単語。

その口振りから、バルバロイがミリアの手下である事は容易に想像できた。

「そして「うつろわざるもの」……その存在を僕は許せない。僕が君より劣っているだなんて……許さない！」

表情のない黒い半身と憤怒の形相でこちらを睨む半身。

「！？」

（なんだ……？　……歪んで）

俺の目には、ドラゴンキラーが徐々に歪んでいるように見えていた。

「僕は失敗作なんかじゃない！僕は……僕は！？」

「！！」

バルバロイの黒い半身が脈動し始める。

「なんだ！？」

「うぐあああああ！リュウゥゥゥゥ！！！」

「！？」

振り乱して雄叫びを上げるバルバロイは、半ば野生の獣のような気配を振りまいていた。

（こいつ……暴走！？）

「アアアアア！！」

「！」

ドラゴンキラーの腕を振り上げ、こちらへとただ真っ直ぐに走ってくるバルバロイ。

「……」

俺はそれを無言でかわすと、なお止まらないバルバロイは後方の岩へと激突した。

「リュウゥゥゥ……どこだぁぁぁぁ！」

（意識が混濁してる……？）

暴れて岩を破壊し、土煙りの中で辺りを見回すバルバロイ。

「！　見つけたぞぉぉぉぉリュウゥゥゥ！」

こちらへと振り返り、俺の姿を認識したようだ。

ドラゴンキラーでない方の目も、最早光を失っていた。

（とどめ……！）

何故そうなったかはわからない。

しかしこれはチャンスだ。

俺はとどめを刺そうと力を溜める。

「Ｄ－チャージ……」

その瞬間、自分の中の力が激しく暴れ出した。

「がっ！？」

（何で……！？）

それはドラゴンズ・ティアを外した時のような暴走の感覚と酷似していた。

今の力でとどめになるかはわからない。

しかし俺はこれ以上のＤ－チャージを止めた。

「リュウゥゥゥゥ！！」

正気を失ったバルバロイが向かってくる

「……おおお！！」

こっちもバーニア全開で受けて立つ。

「ウオァァッ！」

「リュウゥゥッ！」

夜空に浮かぶ半月が造り出す、互いの影が重なった瞬間

俺の右腕はバルバロイの胸を貫いていた。

「がふっ……」

「……っく」

紙一重でかわしたドラゴンキラーの腕が頬を掠め、鮮血が舞う。

「う……ぐ……」

「……」

右腕からバルバロイの体が弛緩していく感覚が伝わってくる。

「……」

腕を引き抜くと、すれ違うようにバルバロイは倒れた。

少しずつ黒い半身が元へと戻っているのが見て取れる。

「……リ…リュウ」

「！」

（まだ意識が……？）

先程の感触から、もう動く力すら無いだろう事がわかっている。

「お前、なんなんだよ……人格に影響が出るまでなんでそんな……」

「君の力も……これと同じ……怨念のようなものだろう？」

既に視点の定まっていない目が俺の方に向いている。

「……どういうことだ？」

「君のその力は尋常じゃ…ない……あの男が何かしたはずだ」

「あの男？」

バルバロイが知っていて、俺もわかる人間と言えばユンナさんぐらいしか浮かばない。

「確かに……君は成功したらしいね……でも……ゴホッ…」

（成功？）

血を吐き、段々と声が聞き取り辛くなっていく。

「僕は……失敗作じゃ……ない……」

（失敗作？）

俺は混乱していた。

いくら考えを巡らせても、その言葉の意味する所が全く分からなかった。

「おい！お前は結局何なんだ！失敗作って何がだよ！」

「……さぁ……ね……」

「……」

バルバロイの目から少しずつ光が消えていく。

か細くなった声で、何かをぶつぶつ言っているようだが聞き取れない。

「ミリア様……あなたの願いを……「完全なる世界」を……」

「！！」

ようやく聞き取れた言葉に、俺の探す手掛かりがあることが窺い知れた。

（やっぱり何か関係あったのか！）

「おい！「完全なる世界」とお前らは……」

うつ伏せのバルバロイの顔付近に近付くが、しかし俺の声は最早届いていないようだった。

「僕は……拾ってくれたミリア様に……恩を……」

バルバロイの傍らでなお問いただそうと乗り出した瞬間、

「願いは……僕がっ！」

バルバロイの腕が動き、俺の足を掴んだ。

「【石の息吹】ッ！」

「！！？」

最後の力を振り絞ったバルバロイの魔力は、俺と放った本人を包み込むように、石化の霧となって辺りを埋め尽くしていった。

第八章　7、正体

山間から太陽が顔を覗かせ、辺りを爽やかな日差しが照らし出す。
次第に闇が晴れていくと、朽ち果てた家々もそれを待ちわびていたように色を取り戻していく。

「ん～～ふっ……くっ……ん……」

色っぽい声をあげながらベッドの上で伸びをする女性。
顔に光が当たり、意識が覚醒しだしたらしい。

「ん～……あれ？　……リュウちゃん？」

「おはようございますディースさん」

起き上がり、目を擦るディースさんの目の前には、既に動いている俺が居た。

……俺は今、何事もなかったように食事の用意をしている。

「リュウちゃん早起きねー……キティは……？」

未だ半分寝ぼけ眼なディースさんは、同じ部屋に寝ていたハズの少女を探してキョロキョロ見回している。

「もう起きてますよ。もうすぐ朝ごはんできますから、顔洗って来たらどうです？」

「ふあーい……」

のそのそと重たい足取りで洗面所へと向かうディースさん。

そのいつも通りのマイペースな仕草に、何となく心が軽くなった気がした。

「……」

俺は無事だった。

バルバロイが最後の力を振り絞って放った石化魔法は、俺に何の効果を及ぼす事もなく、放った当人のみを石像と化していた。

（一体……）

今回ばかりは確実に駄目かと思った。

しばらくあの場で硬直していた俺だったが、バルバロイは完全に石像と化していたので、何をするでもなく放置して戻ってきていた。

あの岩場周辺にはバルバロイが介入者を妨げる結界を張っていたようで、轟音が響いていたはずなのに家では二人と一匹がスヤスヤと寝息を立てていた。

戻ってきたはいいものの眠る気にもならず、怪我を魔法で治した俺

はそのまま朝を迎えたのだった。

特に心配をさせるようなつもりもなかったので、朝食では何もその辺りの事は言わなかった。

ディースさんは相変わらずだったが、エヴァンジェリンさんはひょっとしたら何か気付いていたのかもしれない。

俺達はその後、ユンナさんの研究所へと向かった。

薄暗く、怪しげな機械に囲まれた研究所の内部は、かつてバルバロイに襲われ、墓を建てるときに多少片づけた時のまま何一つ変わっていなかった。

「なんだい？この薄気味悪い所は……」

「研究所……か。随分凝った作りだな」

ディースさんとエヴァンジェリンさんも、その妙な雰囲気を怪しみつつ見て回っていた。

ゆっくりと回り、所々千切れた配線や壊れた天井から落ちてきたであろう岩を跨ぎ越え、奥の機械へと向かうと、カタカタと物音が聞えてきた。

音の発生源は今朝、一足先に研究室へと入っていたボッシュだ。

「んでボッシュ、何を調べるってんだよ？」

「おう、相棒、こいつをな……」

ボッシュは半分壊れたような機械を操作していた。

何事かスイッチを器用に操作するボッシュを、俺たち3人は妙な気分で見守っていた。

「相棒、あれだ」

「？」

何か一区切りついたのか、そう言ってボッシュが前足をさす先にある機械は、あの時の惨事の割にそんなに傷ついていない何かの台座のようなものだった。

「見てろよ」

ボッシュがその機械の下に付いているスイッチを入れると、

『（ザザッ）や、私を呼び起こ（ザザッ）は誰ですかな？』

「！？」

辺りにノイズ混じりの聞き覚えのある声が響き渡った。

「ユンナさん……？」

テレビのスイッチを入れた時のような耳障りな音がすると、目の前

の台座の上に立体映像のユンナさんが浮かび上がった。

『や、私はユンナの意識を忠実にトレースした機械に過ぎません。しかしこうして私が目覚めたと言う事は「私」は死にましたか』

そう言って台座の上で目を細める幻影。小さい上に見た目は若いが間違いない。

「ボッシュ、どういうことだよ？」

俺は何が何だかわからないまま、装置のスイッチを押したままの姿勢で固まっているボッシュに問う。

ボッシュは忌々しそうに幻影を睨みながら説明してくれた。

「俺っちはこのクソジジイに捕まって色々実験されてたって前に言っただろ？　この前やっと思い出したんだよ。このジジイが万一の時の為に、自分の意識をこの機械に移してやがったことをな」

ボッシュの表情からは、諦めというか一種の悟りのような感情が窺い知れた。

「ねぇリュウちゃん、このおじさんは一体？」

「……」

「ユンナ」と全く面識のないディースさんとエヴァンジェリンさんは、俺とボッシュしかわかっていない現状に些か困惑気味のよう。

「や、ご苦労様でした。外部生体記憶媒体４号。無事役割を果たし

てくれたようですね」

幻影はボッシュの方を見ると満足そうにそう言った。

「外部……なに？」

「そのフェレットは「私」に万一の事があった場合に目覚め、私を呼び起こすようプログラムされていたのですよ。経過はどうあれ、こうして私を呼び起こしたなら問題はありません」

「……」

ユンナの幻影の言葉に、俺は考え込む。

「ふむ、うつろわざるもの……や、人造龍神も無事起動したようですな。私の願いは叶いましたか」

幻影は次に俺の方を見ると、やはり満足そうにそう言った。

「何を……？」

（ユンナさんは何を言ってるんだ？）

「おい、オマエは一体なんだ？」

「どういうことだい？」

「や、これはこれはご婦人方。このような姿で失礼致します。私の生前の名はユンナ、ただのしがない研究者ですよ」

疑問符を浮かべる二人に対して、仰々しく二人に向けて頭を下げる幻影。

「研究者、か。今オマエはこいつを見て人造龍神と言ったな。それはなんだ？」

「リュウちゃんが何だっていうのさ。龍の民なんじゃないのかい？」

二人はユンナの事はどうでもいいかのように矢継ぎ早に質問を飛ばす。

幻影は挨拶が無視されたことを全く意に介さない様子で俺の事を指差しながら、淡々と口を開いた。

「や、そうですな。順を追って説明しなければなりませんが、端的に申し上げますとコレは確かに龍の民……の体です。ただし、一度命を落とし、魂を無くした龍の御子のものですが」

「「「！？」」」

俺を含めた3人とも、一瞬本気でその言葉の意味する所を理解できなかった。

俺自身、記憶を探っても龍堂で器のようなものに吸い込まれ、気付いたらこの身体だったとしか思い出せない。

「……俺は空から降ってきたんじゃ？」

幻影に対して敬語を使う気にもならず、以前説明されたことの是非を問う。

「空？　何の事かわかりませんがそれは違います。あなたは私が造り出した「人造龍神」。龍の民の生き残り達の力を結集して造り上げた対女神を目的とした生物兵器ですよ」

「「「！？」」」

その言葉にボッシュは目を閉じ、ディースさんとエヴァンジェリンさんは絶句している。

（……兵器？）

幻影は自慢するかのように続けた。

「そしてその体には私の夢、「うつろわざるもの」創造技術の粋が注ぎ込まれています」

言葉の端から滲み出ている自信が、嘘や冗談で言っている訳ではない事を物語っている。

（こいつに造られた……）

俺は段々とわかりかけてきた事を否定したかった。

この身体になった当初は、自分の知っている話の主人公と同じ特徴を持つ容姿である事に、正直なところワクワクしていた。

最初にユンナに会った時に言われた「天よりうつろわざる龍の御子が遣わされる」という話を疑いつつも心のどこかでは信じていた。

今の口振りからするとその事は全部がデタラメだったらしい。

……よく考えるとあの時ユンナは「村の神官に神託が」と言っていた。

村には人など誰も居なかったのだから、その時点で１００％嘘だとわかることだ。

何故俺はそんなことをどこかで信じていたのかわからない。

「オマエ……「うつろわざるもの」とは何だ？」

エヴァンジェリンさんが訝しげな視線を幻影に向けている。

「や、有体に言えば「神」ですよ。時を経てもうつろわないモノこそ神であると私は定義しました」

自らの考えを楽しげに披露する幻影には、まるで生きているかのような錯覚を覚える。

「ほう……ならば吸血鬼の真祖である私も神ということか？」

「いいえ。吸血鬼は必ず他人の血液を必要とする。それでは「うつろわざるもの」とは言えません」

幻影は首を横に振る。

「なら俺は……？」

「や、あなたは極端な話、「食べる」必要などありません。「食べ

られない」わけではありませんが」

「……初めてユンナさんに会った時にご飯を勧められたけど？」

「や、それは「私」が試したのでしょう。あなたが……」

「ちょっと待ちなよ！龍の民達が……あんたがリュウちゃんを造ったって……生き残りの力を結集ってどういうことだい！？」

幻影が説明を続けようとした時、ディースさんが語気を荒げてそれを遮った。

龍の民に入れ込んでいたディースさんとしては、聞き捨てならない話であることは想像できる。

「や、そうですな。女神であるミリアに対抗するには同種の力が必要と、私の研究に望みをかける龍の民と私との間で利害が一致したのですよ」

幻影は淡々と説明をしている。

「訳がわからないね。もう少しわかりやすく言いな」

ディースさんの幻影を見る目に宿っているのは怒りだろうか。

「俺について最初の経緯から全部教えろ」

俺とディースさんが問い詰めると、幻影は少しの間目を閉じ、その後ゆっくりと話し出した。

「や、いいでしょう。話は私がこの村を初めて訪れた時にまで遡ります。私は開発した「うつろわざるもの」創造の技術に耐えられる生命体を求めて世界中を彷徨っている最中、ふとした偶然からこの地へと辿り着きました」

「「「……」」」

「初めは警戒した村人達でしたが、私がただの研究者であることを知ると……外の人間との交流に飢えていたのでしょうな、安心したのか様々な話を聞かせて下さいました。お返しにと私の知る知識を幾つか話している内に、私はこの村が「龍の民」の隠れ里である事を知ったのです」

全員その話を食い入るように聞き入っていた。

「私はその大きな力に対して確信を抱きました。龍の民の身体こそ、私の夢を叶えるに相応しい器であると。中でも注目したのは「龍の御子」と呼ばれた子供でした。数世代に一人の確率で生まれる「龍の御子」は、他の民を大きく超える素晴らしい潜在能力を秘めていました」

幻影は、なおも淡々と説明を続けている。

「私が村に滞在して数日たったとある日のことでした。なんと運の悪い事に、その御子は崖崩れに巻き込まれ、瀕死の重傷を負ってしまいました。私は御子に賢明な治療を施しましたが、残念ながらその甲斐もなく、息を引き取ってしまったのです」

「「「！」」」

（……）

若干思う所はあったが、口を挟むのは後にして素直に聞き続ける。

「私は最後の手段として「うつろわざるもの」創造過程で得た副産物の一つ、「賢樹のエキス」を投与しました。今までこのエキスの効果に耐えられた生物はいませんでしたが、龍の御子は見事に息を吹き返したのです」

（「賢樹のエキス」……あのペレット署長の使ったヤツか）

流出した資料に「ユンナ」の名が入っていた事が思い出される。

「しかし御子の体には、一度死んだことにより魂は戻りませんでした。生きてはいるが、からっぽの龍の御子の体。それを見て私はこの村の長へ内密に提案をしました。「この体を使って神を倒す兵器を作りませんか？」とね」

「「！」」

「……」

……驚く二人とは対照的に俺は冷静だった。

「や、もちろん村長は反対するものと思っていましたが、意外にも乗り気でした。どうやらあの村長は女神に虐げられた時代からの唯一の生き証人だったようで」

「……」

「村の民達にも協力を仰ぐと、みな快く承諾してくれました。彼らは、自分たちの力のせいで細々と隠れ住まなければならないことに鬱憤が溜まっていたようでした。そして私はこの村に隠れ住んでいた民全員から龍の力の摘出と…移植を行ったのです」

黙って聞いていた二人も段々と事の真相を呑み込み出したようだ。

「まさか……」

「そう、私の持つ「うつろわざるもの」創造の技術と膨大な龍の力、二つの力を注ぎ込んで龍の御子の体を改造したものが……」

「……俺か」

「その通り」

「……おぞましいな」

エヴァンジェリンさんが怒りにも似た侮蔑の表情を幻影に向けている。

「や、確かに。ですがその力は甚大。その気になれば、楽に女神を超える事ができましょうな」

「「「……」」」

話が途切れ、辺りには耳障りな機械音だけが鳴り響いていた。

事実としては衝撃的だが、何故か素直に理解している自分が居る。

「……今の話じゃリュウちゃんの魂は無くなったはずじゃなかったのかい？」

「魂等と言う抽象的な物が存在するとは私は思わんがな」

ディースさんはとても納得しきれていなく、エヴァンジェリンさんは変わらずの表情をしている。

「や、確かに本来の魂は消失していました。しかしながら、足りない部品は他から合うものを持ってくれば良いのですから楽なものですよ」

「「！？」」

「そうか……」

俺は全てを察した。

「……そうかよ。つまり俺はオマエの術で、魂をこの身体に移されたってわけかよ」

「や、良くおわかりですな。私が長い年月をかけて完成させた秘術は、生きた者から魂を抽出させることができます」

（魂を抜き出す……）

フォウ帝国の「男」の言っていた事が思い出される。

「や、お怒りになりましたかな？」

「……」

普通なら怒らないわけがない。

問答無用でこうなってしまった元凶がこいつだと言うなら、怒らない方がおかしい。

だが俺には何故か怒りが湧いてこなかった。

そして心に浮かぶのはただ一点。ただ一つの疑問。

「すみませんが……エヴァンジェリンさんとディースさん、少し席をはずして貰えませんか。あとボッシュも……」

二人と一匹は俺の方をなんとも言えない表情で見ている。

「お願いします」

俺が真剣な表情で頼むと、二人と一匹は無言で部屋を出て行ってくれた。

今、耳障りな機械音が響くこの部屋には俺と幻影しかいない。

「……聞きたい事がある」

「や、なんですかな？」

ユンナの幻影は全く変わらない態度で答えた。

「お前の言い方だと魂を召喚したって話だったな」

「や、そうです」

それは召喚の術への疑問。

「その術はどの程度の範囲の魂を呼ぶんだ？」

「や、この世界に住む適性のある魂を無差別に呼び出しますがそれが何か？」

「「この世界」……じゃあ単刀直入に聞く」

「どうぞ」

「……俺は元々この世界の住人じゃねぇ」

「！」

幻影は初めて驚きの表情を示した。

「俺にしてみればお前等は架空の物語の登場人物に過ぎねぇ。そのハズなのに、なんでそのオマエに！「俺」が召喚されるんだよ！おかしいだろ！」

……我慢できなかった。

それは疑問を疑問だと感じようとせず、さっきから妙に理解できている自分への苛立ちから来る八つ当たりのようなものだった。

「や……物語……つまりあなたは私達の事を何もかも知っている、と？」

「そうだっつってるだろうが！」

声を荒げ、興奮と共に疑問をぶちまけると、

ユンナの幻影は

笑いだした。

「ははははははは！」

「！？」

「ははははは！……は……や、これは失礼を」

「……何がおかしい」

「や、いえいえなるほどなるほど、そういうことでしたか。私は……既に神を超えていたのですか」

何かを悟ったように、僅かに遠い目をする幻影。

俺はやはりその幻影の考えを掴めないでいた。

「もっとわかるように言え」

「……や、つまりあなたはこの次元の上の次元より来た者。すなわちこの世界の神よりもさらに上位の存在」

「……」

「そんな存在を召喚できるとは……や、違いますね。私一人の術がそのような場にまで干渉できるとも思えない」

幻影は考え込むようなしぐさを取る。

「……」

「そう……ですか。や、ひょっとしたらその体に宿る数多の龍の力がアナタを欲したのかもしれませんね」

「……どういう意味だよ？」

「や、先ほども申し上げた通り、その身体に宿る龍の力は、この村に存在していた全生き残りの力の結晶です。当然その分の女神に対する恨みも同時に流れ込んでいておかしくはない」

「……それで？」

「その女神への恨みが、神を超えたいと言う切実な願いが、アナタという次元を超越した存在を求めたのかもしれませんね」

「……」

……納得したくなかった。

「……研究者の癖に随分と曖昧だな」

「や、確証はありません。私の推論です」

「そうかよ」

俺にはそれ以上、言葉が思いつかなかった。

「それより先ほどのお話からすると、アナタの意識は最初からあったということですな？」

「……当たり前だろ」

またもその言葉の意図がわからず、投げやりに答える。

「や、本来ならアナタの自我があるという事自体があり得ない事なのです」

「は？」

「私の術では魂を抽出した時点で、記憶や自我等は一切無くなりま

す。村長にはそのように伝えてありましたから、自分の思うように動かせると意気込んでいましたな。しかし、あなたはその自我を保ったままこの身体に同化した……」

「……」

初めて村長に会った時の事を思い出す。

あの時村長は怒りの表情でこう言っていた。

「約束が違う」と。

つまり俺に自我があるとわかり、それが話と違ったせいで取り乱したんだろう。

（だからあの時……）

気になってはいた。しかし今となってはもうどうでもいい事だ。

「や、ある種呪術である私の術に抗ったということは、何か召喚される前に護符のような物を持っていた可能性もありますが……」

（護符……？）

あの時吸い込まれる直前の状況を思い出そうとするが、何を持っていたかなどは詳しく覚えていない。

「いずれにしろ、自我を保ったままでその体に同化できたという点も、アナタが普通ではないことを裏付けていると言えますな」

「……」

……俺は既に受け入れている、という事を受け入れたくなかった。

「何で……」

「……？」

「怒れない……のは何でなんだよ」

思わず口を出た呟き。それは本音だった。

俺がユンナによってこの体にされたという事も、ユンナが死んだ子供の体を人体実験に使った事にも、怒りが湧かなかった。

俺がこの世界に居ることが、この身体であるということが、さも当たり前のように感じている。

怒りが湧かないという事に対するイライラが俺の語気を荒げているだけだった。

「や、当然です。いくら記憶を保っているとはいえ、少なからず術の影響を受けているはずですから。元の暮らしへの未練や心配を起こさず、その身体に順応できるほどには」

「！」

幻影の言葉に、俺は理解した。

何の疑問も持たずにあっさりとこの状況を受け入れられた理由は、

ユンナによってそれまでの暮らしへの執着を消されていたから。
俺はここに至ってようやく幻影に憤りを感じ始めていた。

「……なんでお前はそんなことまでペラペラ喋る？」

「ユンナ」なら隠しそうな事まで全部喋っていることに疑問を感じる。

「や、私は機械です。聞かれた事には答えるようインプットされていますから」

「……」

その動じない姿に、これは確かに「ユンナ」ではあるが、同時にただの機械でもあると認識した。

……それならば今、気になる事を全て吐いてもらう。

「……この身体についてもっと詳しく教えろ」

「や、わかりました。まず、あなたは「うつろわざるもの」。その身体はそれ以上成長はしません」

「！……」

「や、本来なら魔力や身体能力も向上はしない筈でしたが……やはり肉体ごと魂に変換する術は不完全でしたか。内部的な成長要因として残っているようですね」

「身体ごと……どういうことだよ？」

先程の話とは微妙に食い違う話の内容に、俺は疑問を挟んだ。

「や、あなたの前に４９人ほど失敗したと記録にはあります。ですから、あなたの場合は魂のみでなく身体ごと召喚し、それら全てを魂へと還元したようですな。最も、それにより苦痛を伴う事もあったかもしれませんが」

「……」

「苦痛」に思い当たるのはあの暗闇での落下と出来事。

「じゃあ俺は絶対に元の身体には戻れないと？」

「や、残念ながら。既にアナタの元の身体そのものは魂となって一体化していますから」

俺の心の中にあった何かの最後のラインが、ぷつりと切れた気がした。

「……「うつろわざるもの」についても教えろ」

「「うつろわざるもの」……時を経てもうつろわない者。私はそれを神と位置付けました。そして、この世に存在する神は「女神ミリア」のみ。……や、あなたが２例目ですね」

「うつろわない……つまり俺は年を取らない？」

「や、当然永久にその姿のままですよ」

「……」

……特に驚きはない。

「……じゃああのバルバロイはなんだ？」

「バルバロイ……？　ああ、自我を持った失敗作ですか。その昔私が作った「うつろわざるもの」の実験体ですよ。数多の生物の強靭な部分を繋ぎ合せたのですがうまくいかず、かつて魔法世界に遺棄したはずですがそれが何か？」

「……」

……理解できた。バルバロイが俺にこだわった理由が。

俺の前に造り出されたバルバロイは、俺を倒すことで、自分の存在が失敗ではないと証明したかったのだろう。

「……「完全なる世界」については？」

「や、初めて聞く名ですな。それは一体なんですかな？」

「……」

……嘘は付いているとは思えない。

「……ボッシュは一体何なんだ？」

「や、あれは外部生体記憶媒体４号。唯一不死実験を全てクリアし

た個体でしたので、薄めた賢樹のエキスを投与し、言葉を話せるようにした後で私の研究内容を記憶させていたのですよ」

「……」

「や、しかし口汚かったので「私」に何かあった時のためのバックアップに変更しましたがね」

「……」

これも理解できた。

ボッシュが不死身な訳と何かが引っ掛かると言っていた理由。

「……」

コイツが行った事と、それによる結果については大体理解した。

でも俺は、元一般人の俺としては、それこそ話の中でしかないような、命をモノとしか考えていないその行いを……

理解したくなかった。

「お前……お前は……最低だ」

「……や、否定はしません。あなたにはせめて実りのある暮らしをして欲しいと「私」は思ったようですが」

いきなり聞かされたその綺麗事に、俺は呆れた。

（……）

「……最後の質問。……お前の目的は結局何だったんだ？」

「や、そうですな。何だったのでしょうな」

「……ふざけるな」

ようやく湧き上がってきたわずかな怒りと納得いかない気持ちを、遠い目をする幻影にぶつける。

「や、私の目的は「神の創造」だったはずですが……「私」自身はその後を期待したのかも知れませんな」

「……」

よくわからない。

「や、神として造られたアナタに自我があることがわかり、そのアナタが一体何を成すのかをその目で見たかった……とでも言いますか」

「……」

「や、私は機械なのでこれ以上はわかりませんな」

「……」

俺は乱暴にスイッチを切ると、その部屋を後にした。

研究室の外ではディースさんとエヴァンジェリンさん、それにボッシュが神妙な顔つきで待っていてくれた。

外はもう夕刻近くなのか薄暗く、湿気と曇り空も相まって今にも降りだしそうな気配を漂わせていた。

俺達は無言で元ユンナの家へと足を向けた。

深夜、俺は幾分冷静になった頭で、ベッドに寝転がりながら考える。

これはなんて言うのだろうか。憑依か？転生か？召喚か？

生きているまま体を消され、

死んでいないのに魂にされ、

納得していないのに別の体に移された。

原因全てが一人の男の欲望と強大な龍の力のせい。

そこには俺の意思なんてどこにも介在していない。

しかし既に順応している。

心ではようやく疑念に気付けたのに、頭ではこれでいいと思っている。

……思わされている。

村人全員の力の集合体。

どうりで強力な竜変身が使えるわけだ。

何の犠牲もなく最初から強い力というわけではなかった。

多くの民の犠牲により成り立つ力の上に、たまたま俺が乗ったというだけだ。

……俺にどうしろというのだろうか。

（もう……いいや）

俺は考える事を放棄し、心を空っぽにして眠りにつく。

外からは激しく地を打つ雨音だけが響いてくるのだった。

第八章　8、不変

翌朝、俺は普通に目を覚ました。

身を起してみると、昨夜聞こえていた激しい雨音などは姿を消しており、窓から差し込む柔らかな日差しが床を温めている。

傍らでは何も変わらないフェレットが健やかに寝息を立てていた。

寝起きのせいで少し意識がぼーっとしているものの、眠ったおかげか昨日の話について頭の中で大分整理が付いているように感じた。

今更だが今のこの自分の状況に関しては、ユンナの幻影に詰め寄った所で元の世界に帰れるわけではないし、元の体にも戻れるわけでもない。

つまりもうどうしようもない訳だ。

そして俺の被害者的心情からすれば、この体に込められた女神への復讐という龍の民の願い等と言うものには何の義理もないし、そうしなければならない義務もない。

ぶっちゃけてしまえば他人事であり、「知ったこっちゃねーよ」と言うのが結論だ。

この体である事が当たり前と認識しているおかげでその事に対する怒りはやはり薄いが、それでも俺にとって恨みの対象と言えるのはユンナなのだ。

しかしこうなった出来事の大元を辿ると、そもそもが龍の民を虐殺した女神のせいだとも言えなくはない。

復讐については置いておくとしても、それとは別に一言モノ申してやりたい気持ちもないではない。

さらにバルバロイの言葉から考えるに女神は「完全なる世界」と関係がある。

となると、結局今俺のやろうとしている事と女神云々に関してはそんなに乖離しているわけでもないということになる。

要するに今まで通りで問題ないということだ。

（メシ作ろ……）

顔を洗って台所へ向かうと、手馴れた動作で朝餉の用意を始める。

そう言えばこのラーニング能力とかの反則スペックも「うつろわざるもの」だからなんだろうな、と自分の能力の理由を考えつつ支度をしていくのだった。

ある程度用意が整った辺りで女性二人の部屋へと赴くと、二人は俺が起こすまでもなく目を覚ましていた。

ディースさんは幻影から聞かされた話の内容がショックだったのか

いつもと違って口数が少なく、エヴァンジェリンさんは俺の顔を見るや難しそうな表情を浮かべて同情的な視線を送っているようだった。

そんな二人に声を掛け、ボッシュも交えて共に食卓を囲む。

それから少しの間、特に会話もなく部屋には食器の音だけがカチャカチャと響いていた。

しばらくするとあまり食の進んでいなかったディースさんが徐に口を開いた。

「その……」

「？」

「リュウちゃん……ごめんね」

「？　……はい？」

突然の謝罪に思わず疑問符が頭の上に浮かぶ。

何故ディースさんに謝られるのか俺にはよくわからなかった。

「いやその……、今の「リュウ」ちゃんは元々普通の人だった訳でしょ？」

「まぁ……そうですね」

「それを龍の民とよくわからないあの男のせいでこんなことになっ

て……元はと言えばあたしがミリアを止められていれば……」

「ああ……」

（なるほど）

ディースさんの言いたい事はわかった

「いやディースさんは何も悪くないじゃないですか。そんな頭を下げないで下さいよ」

正直なところ、そんな俺の知らない昔の事で責任を感じられても心苦しいのだ。

「……」

それでも暗い表情のままなディースさん。

「ほら、そんな暗い顔じゃ美人が台無しですよ？」

「！」

（……うっわ何今の俺キザじゃね？）

俺の言葉にすこしビックリしたようなディースさんを見て、途端にこっ恥ずかしい気持ちでいっぱいになってきた。

ていうかちょっと後悔した。

「……ふっ」

するとディースさんとは違う方向から、それを鼻で笑う声が聞こえてきた。

発信源はやはりというかエヴァンジェリンさんだ。

笑ってはいるものの、どこか子を見る親のような表情にも見える。

「あの……すみません今のは聞かなかった事にしてください……」

馬鹿にされる前に訂正をする小心者な俺である。

「ん？　ああいや、そういう意味じゃないんだが……お前の態度に少しだが感心したよ。よくもまぁこの状況でそんなセリフが出るものだな」

「ぐっ……」

内心恥ずかしさで転げ回りたい気持ちをぐっと我慢する。

「私は吸血鬼にされた時、復讐と生きる事しか頭になかった。それが私の原動力だった。お前はそういう事に目が向かないのか？」

今度は少し羨ましそうな表情のエヴァンジェリンさん。

その言いたい事も大体察せたが、俺がユンナによって怒りを薄められていることを抜きにしても、復讐しようなどとは特に思わない。

「あれですよ。復讐とかするにしてもユンナもう死んでますし」

「あの機械を壊したりもしないと？」

「ん……まぁそうですね」

「そうか。私も似たような立場だからな……お前の気持ちはわかるつもりだ」

確かにエヴァンジェリンさんが吸血鬼になった経緯と俺の状況はどことなく似ているとは思う。

「まぁあれです。俺としては周りの人にそれまで通りにしてもらうってのが一番ですよ」

「……そうだな」

俺の言葉にエヴァンジェリンさんはまたも感心したように強く同意を示した。

自分が人外になったとしても、周りの態度が変わらないと言うのは当人にとってとてもありがたいことだと思う。

その辺の事はきっとエヴァンジェリンさんがずっと前に通った道なんだろう。

朝食後、片付けを終えた俺は気を取り直して再びあの研究所へと向かった。

イライラを抑えつつも、取り合えずまだ聞いてない色々な知識や情報を引き出す為だ。

幻影の顔はあまり見たくなかったが、とことん利用し尽くしてやりたいと言う僅かながらの仕返し心もあったかも知れない。

エヴァンジェリンさんとディースさんは、別にそこまで興味があるわけでもないのでその間あの家で待っているそうだ。

ボッシュを連れて再び研究所にやってきた俺はユンナの幻影にいくつかの質問をし、結構な疑問に対する解を得る事が出来た。

ドラゴンズ・ティアは、元々代々の龍の御子がその力を抑える為に身に付ける物だったらしく、俺が使って何ら問題ないとのことだった。

収納機能はユンナが付け加えたらしい。

ドラゴナイズドフォームは竜変身の力が強すぎる為にその前段階として考案された高出力形態で、俺が最近変身すると気分が高揚するようになったのは、体が怒ると強くなると学習したためだろうということがわかった。

思い当たる原因はあのウィンディアの事件。

元々ドラゴナイズドフォームは龍の民本来の物とは違う「うつろわざるもの」の力が強く作用しているせいで安定せず暴走しやすいとのことで、さらに怒りから出力が上がってしまったために、より暴走が起きやすくなったのだろうということだった。

制御する方法は、単純に俺自身がそれに耐えられるようになること。
ようするに修行だ。

逆に竜変身自体はプロセスに逆らってないのでその手の問題はないそうだ。

いくつかそんな感じで聞き出していたが、中でも驚きだったのがこの呪いの指輪（仮）の正体が判明したこと。

幻影曰く、この指輪はドラゴンズ・ティアの亜種で、通称「竜のなみだ」と呼ばれるものだそうだ。

言葉自体は同じ意味だがその性質は全く違い、強力な加護と呪いがかかっている物だと説明された。

俺は「竜のなみだ」と言う名称を聞いて、ようやく指輪の本質を掴む事ができた。

記憶の中にある「竜のなみだ」と言うアクセサリーの効果は、「ステータス異常の完全防止」だ。

つまり、眠れなかったのも毒を食らって平気だったのも、そして石化しなかったのも全てこの指輪のおかげであったのだ。

確かにそれほどの効果があるなら城で祀られていても不思議ではない。

「相棒よぉ、俺っちも全部思い出したぜ。コイツの知識とかを全部な。けったくそわりぃが」

そう言うボッシュは複雑そうな顔をしていた。

ユンナによりボッシュに施された不死は呪いとは違い、それは最早「体質」と言えるモノになっているそうだ。

そしてボッシュはさっきから何事か小さな液晶画面のようなものがついた機械を操作していたらしく、それによって全ての記憶を取り戻したらしい。

つまり今後何かあった時にはボッシュに聞けば大体わかるということになる。

……俺とボッシュはユンナによる被害者という意味では同類だ。

目が合うと、ボッシュもそんなことを考えていたらしく自嘲気味にフッと笑った。

大概の疑問に対する答えを聞き出した所で、俺は研究所を後にした。

正直なところ、研究所ごと吹っ飛ばしてやろうかと考えなくもなかったが、そんなことをしても空しいだけだと気付き、やめた。

多少もやもやした状態でユンナの家に戻ると、そこには二人の姿はなく、代わりにエヴァンジェリンさんの別荘がぽつんと置いてあっ

た。

何か二人で思う所もあるのだろうと思い、取り合えずその中へ入ってみると

「あたしはあの男が許せないね！もうこの世に居ないったってさ！人の命を何だと思ってんだい！」

ディースさんが真っ赤な顔で怒っていた。

床には酒瓶が乱雑に転がり、エヴァンジェリンさんが心底うんざりした顔をして同じテーブルに着いている。

「む、来たか。スマンがこれの相手を頼む」

「あー……」

どうやらディースさんがエヴァンジェリンさんを引きずり込んで色々愚痴ってるっぽかった。

「ちょっとリュウちゃん！あんたは怒りを感じないのかい！」

そして矛先がこちらへ。

（……）

俺だって怒りを感じたかった。

ユンナが倫理的に間違ってるのはわかっている。
でももう俺はそう言ったことをグダグダ考えるのが面倒になっていた。

「いやまぁよかないですけど……」

俺のキレの悪い反応に酔っ払ったディースさんがガーッと喚きたてるがここはスルー。

なんかもうどうでもいいやと思うのはユンナの術のせいなのか俺があまりゴチャゴチャ考えるのが好きではないせいなのかは定かではない。

「それで？　貴様はこれからどうするんだ？　ん？」

テーブルに座ると、エヴァンジェリンさんが俺に何かを期待する目を向けて話しかけてきた。

「いやぁ……まぁ変わらないですよ」

「詰まらんな。この世への復讐に燃えたりはしないのか？」

「ちょっとキティ！あんたリュウちゃんに何てこと言ってんのよ！」

エヴァンジェリンさんも多少酒が入ってるっぽいが、何を思ってそんなことを聞いたのかはわかる気がする。

しかしもちろん俺には朝言った通り、そんなテロまがいなことを起こす気はない。

「いや別に……」

実際やろうと思えばできたりするんだろうが、世界を滅ぼすだなんてそんなことしたいとも思わない。

「……そうか。だがまぁそれもいいだろう。お前の好きなように生きるがいいさ」

何かを悟った目をするエヴァンジェリンさん。

多分言わなくてもわかってくれたんだろう。

「ありがとうございます。先輩」

するとエヴァンジェリンさんは一瞬呆けたような表情を浮かべ、次に笑い出した。

「ハッハッハッ！　なるほど先輩か、聞く限りでは貴様も不老のようだし確かにそうだな。ならば私の従者にでもなってみるか？」

楽しそうに言うエヴァンジェリンさん。

「……すみません、ありがたいんですけど遠慮しときます。俺一応やることあるんで」

それは魔法世界の大戦を止めること。

俺の出自がどうだろうと、力があることには変わりない。
どうせ復讐の為の力なら、良い事に使うのも小さい頃に憧れた特撮ヒーローっぽくていいかと単純に考えた。
それに女神ミリアにもどこかで繋がるとわかっている。

「俺は魔法世界に戻りますよ」

「そうか。ま、適当に頑張れ」

エヴァンジェリンさんは、俺が従者になるとははなから思っていなかったのか、あっさりと認めてくれた。

「あたしはもう少しキティと一緒に居ようかね～。久方ぶりにこっちに来たんだし～」

「ディース、お前も帰れ。私は忙しいんだ。お前に構ってる暇などない」

エヴァンジェリンさんは酔っ払いの相手が至極鬱陶しそうな感じでディースさんをしっしと邪険にしている。

「何よー。キティも暇でしょ？たまにはおねいさんと退廃的なガールズトークでもしましょうよー」

しかしめげずに酒瓶片手にエヴァンジェリンさんに擦り寄るディースさん。

（ガールズって年か？）

という突っ込みは心の中に何とか留めて置く。

「そろそろこの村から出ますか？これ以上見る所はないですし」

「……そうだな」

「おわっ！？」

イキナリ声がそれまでとは反対の方から聞えてきた。

エヴァンジェリンさんの居たはずの席を見ると、そこには何故かチャチャゼロが座らされており、ディースさんが全く気付かずに延々と絡んでいる。

「しかしそれにしても……元来私は魂など信じていなかったが……あの話とお前を見ていると「意志あるところに魂は在る」のだと認めざるを得ないな」

若干感心したようなエヴァンジェリンさん。

「そうですねぇ。まぁ日本的な考えだと人形なんかにも魂宿ったりしますし、そんなもんなんじゃないですかね」

あんまり深く考えずに適当な事を言う俺。

するとエヴァンジェリンさんは、俺の言葉になにやら思いついたようだった。

「ふむ、いつになるかはわからんが「自然に魂の宿る人形」に挑戦するのもいいかも知れないな」

「いいんじゃないですか？きっと出来ると思いますよ」

俺は未来に生まれるだろうロボっ娘を思い浮かべて、エヴァンジェリンさんに進言するのだった。

その後、ディースさんが別荘でのグータラ三昧に味を占めたのかなかなか止めようとしないので、結局数日だけ村に留まる事になった。

俺も二人と同様寿命と言えるものが無い事が判明したため、ついでに別荘内で村へ来る時に約束した浮遊魔法と、暇つぶしの余興としていくつか技を覚えさせられる事になったのだ。

1日はディースさんの介抱に追われ、次の日に塔の屋上でさっそく二人から魔法を習ってみると……

「一度見た技を簡単に真似できるだと……実に教え概がないな貴様は」

「……すみません」

というのが俺のラーニング能力に対するエヴァンジェリンさんの反応。

なんとも怒られる理由として理不尽な気がする。

「あら、いいじゃない。誰かさんが初めて魔法に触った時なんて、火も灯らなかったのに比べたら……」

ディースさんの言葉に反応して、エヴァンジェリンさんのこめかみにピクリと青筋が入ったのを俺は見逃さない。

「ほほぅ……そうだな。まぁ私は誰かのように教え方が致命的なレヴェルでグダグダなわけじゃないからな。そのおかげだろう」

ピシリ！と空気が凍りついた気がした。

「ま、まーまー、二人とも抑えて」

「「……」」

（なんで教えるとなるとこうなる……）

エヴァンジェリンさんの教え方は徹底的なスパルタ方式だったが、なんとか俺はそれに耐えていた。

本人曰く、人に物を教えるのは初めてだったがこの方式だと肉体と精神を共に鍛え、さらに自身のストレスも解消できて実に楽しいとのこと。

今後、もし弟子を取る事になったら全てこの方式で行くと高らかに宣言していた。

（……ごめん）

俺は恐らく未来で弟子になるであろうネギに心の中で謝罪の言葉を

述べていた。

そんなこんなで、浮遊魔法と幾つかの技や魔法、さらには戦術・戦い方まで二人の強力な魔法使い様にありがたく教えて貰う俺でした。

ーーー

そこには少年の姿の石像と、石像そっくりの顔立ちの青年が立っていた。

続く

第八章　8、不変（後書き）

第八章終わりです。

何か意見等ございましたらいつでもお待ちしております。
ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

5月は色々と忙しいので少々更新が遅くなると思われます。
申し訳ありません。

第九章　1、休息

「あ～～……」

「相棒、気持ちはわかんねぇでもねぇけどその緩みきったツラぁどうにかならんのかい？」

ここはとある喫茶店。

周りから聞えてくるざわざわとした喧騒は全く耳に入ることなく、二人掛け用のテーブルの上に横を向いて突っ伏している俺は、今のこのダラダラとした時間を思う存分堪能している。

エヴァンジェリンさん&ディースさんと別れ、俺はまた魔法世界へと戻ってきていた。

あの村での事で、俺自身の事と「完全なる世界」が女神ミリアと繋がりがある事等がわかったが、やることは特に変わらない。

情報を集めつつ、「完全なる世界」の下っ端組織だろうがなんだろうが発見次第潰していくのだ。

……些か目的が暴力的になったのは、恐らくあの二人による修行のせいだと思われる。

あのスパルタ修行の日々は思い出すだけで吐きそうになる程だった。

散々俺のラーニング能力に対してやり甲斐がないと文句を言っていたエヴァンジェリンさんだったが、途中から逆に何でも覚える俺が面白くなったのか、当初の倍くらいのペースで色んな魔法を教え込まれた。

現実時間にして1週間ほど、別荘を一日につき4時間分使った為に実際には1ヶ月ほどの修業期間であったのだ。

エヴァンジェリンさん直伝の魔法だけでなく、ディースさん秘蔵の技なんかもいくつか教えてもらった。

おかげで今の俺なら変身なしでも本気のエヴァンジェリンさん相手に少しは良い勝負できるだろうと思う。

ついでだが舌の肥えたお人だったので料理の腕の方も着実に進歩している。

ナギの言う「強くなる」と言う課題は確実にクリアできているという自信も湧こうと云ふものだ。

そして、その地獄から開放された今はメガロメセンブリアの喫茶店で平和を噛み締めながらお茶をしているのだった。

「相棒、いい加減もうちょいシャキっとしろや」

余談だがボッシュも色々ユンナの知識を思い出したと言っても性格に変化などはなく、今まで通りだ。

もっとも、俺の修行の巻き添えを食って色々教え込まれたおかげで、その辺のヒラの魔法使い程度になら勝てるくらいにはなっていた。

さらに俺とだけだが、念話による会話までできるようになったのだ。

全く持って恐ろしいフェレットである。

ただボッシュは江戸っ子気質なので、よっぽどの事がない限りは無闇に魔法を使ったりはしない。

ちなみに使っている発動体は、エヴァンジェリンさんが塔の中から発掘してきたちょうどいいサイズの首輪?だ。

そんな事を考えてテーブルに伏せたまま顔だけをボッシュの方へ向けてぼへーっと見てると目が合った。

「なんでぃ、じろじろ見やがってよ」

どことなく照れた感じのフェレットは微笑ましく思う。見た目だけは。

「いやーしかしホント平和っていいよねぇ」

これで普通にネットでもあれば最高である。

こんな感じで、俺とボッシュは久方ぶりの穏やかな時間を満喫しているのだった。

次の日、所変わってここは海辺。

メガロメセンブリア近辺の海岸沿いだ。

昨日喫茶店でしばらく呆けた後、開放感から購買欲が出てきたので服やら靴やらを大量に購入し、その後は久しぶりにホテルで惰眠を貪っていた。

そこでなんと、巨大なマイロッドが「釣りをしやがれラリホ～」と脅しを掛けながら追いかけて来ると言う実に恐ろしい夢を見たので仕方なく、それはもう仕方なく釣りをしに来たのだ。

全く夢の中にまで出てくるとはなんという恐ろしいお告げなのであろうか。

「相棒、顔がニヤけてるぜ」

「んなこたーないよ」

ボッシュの呆れ顔を華麗にスルーしつつよさげな場所を見極める。

「……む！　あの辺で爆釣の気配！」

「……」

ニュータイプ並の超感覚で良さげな気配を察知した俺はその場へと向かい、腰を降ろしてこれまた久方ぶりの趣味に没頭するのだった。

「なぁ相棒よぉ、これからどうすんだ？」

「んー？」

中々の好調っぷりで釣り上げていると、傍らから暇そうにそんな声が聞えてきた。

「何かやる事あるんじゃなかったんか？」

「あー……」

俺としては別にしばらく休養とってもバチは当たるまいと思っているが、これからどうするか具体的に、と聞かれると当てがないのは確かだ。

シュークの港町でのように普通の人はまず「完全なる世界」なんぞ知らないし、悠久の風に登録している人たちでも恐らくは知らない。

となると、それこそ全世界に広がって裏も表も熟知している強固なネットワークの持ち主でもないときっと知らないだろう。

俺のさして広くない交友範囲の中で、それっぽい人と言うと……

「！　……そうだな。よし、ならば釣りだ！」

「待てや相棒その発想はおかしい」

俺の意見に切れ味鋭い突っ込みを入れるボッシュ。

「ふっ、甘いなボッシュ。釣りと言っても使うのは…これだ！」

そしてドラゴンズ・ティアから取り出したるは金ピカのコイン。

「なるほどなぁ、あの魚のアンちゃんか」

「その通り、マニーロさんなら俺の知りたい事も知ってるかもしれん」

というわけで情報を得るべくコインを餌にマニーロさんを召喚することにするのだった。

「相棒よぉ」

「なに？」

「いつになったらコイン使うんでぇ？」

「……あと5匹」

「これでそのセリフが5回目だぜ」

「わかったよちくしょう」

すでに日本で買っておいた大容量クーラーボックスが数箱一杯になるまで釣っていました。

「よっ……」

括りつけたコインを勢いよく海へと垂らす。
するとすぐさま竿に反応があった。
「随分と早くねぇか？」
「まぁ気にしたら負けだろ」
訝しげなボッシュをいなしてリールを巻くと、実にすんなりと巻き上げられた。
「ぷはー、毎度。マニーロ商会でっせ」
そこには水面から顔を出す海人、マニーロさんが。
「どうも。えーと……マニーロさんですか？」
「そうやで。わてらはみーんなマニーロって名前や。わてはぼっちゃんとは初対面やけどな」
言いながら水からあがってくるマニーロさん。
（……見分けつかねぇ）
当人達は一体どうやって区別してるのか知りたいところである。
「まぁいいや。ちょっとお聞きしたいことがあるんですけどいいですか？」

「なんや取引やないんか。まぁ何が聞きたいかによるなぁ」

ちょっと残念そうなマニーロさん。

「すみません。じゃあ単刀直入に聞きますが、「完全なる世界」って知ってます？」

「「完全なる世界」やって！？　……なんやそら？　初めて聞く名前や」

首をかしげるマニーロさん。

その前の思わせぶりなリアクションは関西系だからだろうか。

「そうですか……お仲間さんでも聞いたことなさそうですかね？」

「ん～多分ないんやないかなぁ」

マニーロネットワークでも知らないとなると、その隠蔽ぶりに舌を巻くしかない。

「……じゃあ全然話変わるんですけど、何かきな臭い空気の街とかって知りませんか？　例えばこう諍いが絶えないとか……まぁなんでもいいんですけど」

少々アプローチを変えてみる。

おぼろげな記憶を頼りに大戦の火種が燻ってそうな場所を探るのだ。

「ん～そうやなぁ……」

俺の言葉に少し考え込んでたマニーロさんだったが、少し自信なさげに答えてくれた。

「わてはあんまり詳しくは知らへんけど、エライ物騒な催し物が裏で開かれとる町ってのは聞いたことあるなぁ」

「へぇ」

（催し物……？）

俺の「何となくちょっと気になるかもセンサー」が鳴り響く。

「ん～なんやったかなぁ？　もうここまで出掛かっとるんやけどなぁ」

そう言ってどことなくわざとらしい感じで俺の方を見るマニーロさん。

ここまで来て引っ張るとは流石に商売人だけあって駆け引きが上手い。

その辺のちゃっかりっぷりは俺も参考にしたいところである。

「……わかりました。今これだけありますから教えてくれたら取引しますよ」

俺はここで釣った魚と、さらにドラゴンズ・ティアから今まで釣った魚を取り出した。

「おっほー、こらまた凄いわな。わかったで、確かヘラス帝国の…
…ジンメルっちゅうたかな。悪いんやけどそれぐらいしかわての耳
には届いとらんなぁ」

（ジンメル……？）

記憶の中に確かそんな町の名があったような手ごたえを感じる。

「なるほど、ありがとうございます」

「よっしゃ、まぁ世の中ギブアンドテイク言うからな。ちょい待っ
とってな」

早速、と腕まくりをして魚の吟味に入るマニーロさんであった。

～数分後～

「どやぼっちゃん、こんなかで好きなもん3つと交換したるで？」

「おー、なかなか凄い品揃えですねー」

マニーロさんがそこに広げたのは様々なアイテム達。

名前は知っているものが多いが、こうして実物を見るのは新鮮で楽
しい。

「キングオブダガー」「聖なるスカーフ」「フィランギ」「ハリセ
ン」「四葉の冠」「蜻蛉斬り」「バグナク」「鈴の首輪」「閃光弾
×１０」「煙玉×２０」「火薬玉×３０」

と言った品々が置かれていた。

「う～ん……」

そろそろカッツバルゲルも大分痛んできたし、武器は欲しい。

（とすると……）

「じゃあ「フィランギ」と「キングオブダガー」と、……あと「コレ」を下さい」

「お、おーきに。その三つを選ぶとは中々目利きやなぁぼっちゃん」

「いやぁそんなことないですって」

そんな会話をかわしながら魚と3つのアイテムを交換する。

「フィランギ」はかつて旧世界はインドの部族が使ったという曰くつきの剣だそうだ。

刀身は真っ直ぐで切っ先から2／3までは両刃、根元に近い部分が片刃と言う不思議な形状の剣で、柄には弓状の鍔がついている。

「キングオブダガー」はこの中では一番の掘り出し物と思われる一品で、刀身に意識を集中させると自分自身の防御力をアップさせる魔法効果が発動するのだそうだ。ダガーとしての切れ味もなかなかで、護身用に常に身に付けるのもいいと思う。

そして最後の一つ。

何故こんなモノが陳列されているのか、普通の人ならマニーロ商会

の正気を疑うところである。

しかし、見た瞬間に俺はこれに魅入られてしまった。気が付いたら手に取っていたのだ。

そしてその試し心地は実に素晴らしいものだった。

素材は紙なのかよくわからないが、防水加工や耐久性は完璧で、爽快な破裂音に対しダメージは皆無。

コテコテの関西風味であるマニーロさんも、俺が素振りを終えた後、実に満足そうな表情でサムズアップ！したのだ。

そう。

それはどこからどう見てもまごう事なき「ハリセン」。

使い道など突っ込み以外にはないであろう「ハリセン」。

何かあるだろうと見せかけておいて、魔法無効化等の特殊効果は全くない正真正銘ただの「ハリセン」である。

何故これを選んだか、それはとても一概には言えない。

しかしあえて言うなればそれは「夢」であると言える。

これさえあればあらゆるお約束で必須な「どこからともなくハリセン突っ込み」という夢が物理的に実現可能になるのだ！

どんなニーズにもお答えできる究極の万能紙型突っ込み兵器である。

本当にドラゴンズ・ティア様々だ。

余談だが類似品に「トイレのスリッパ」というものがあるが、そちらは衛生的によろしくないので手に入れたとしても使わないだろう。

「そいじゃまた何かあったらよろしゅうなー、まいどー」

「ありがとうございましたー」

ハリセンの良さがわかったのが嬉しかったのか、煙玉を3つ程おまけしてもらい、絶妙な笑顔で挨拶を交わすと、マニーロさんは海へと戻っていった。

「で、そのジンメルって町に行くのかい相棒？」

「まぁね。他に目ぼしい情報もないし、俺の勘が行けって言ってる気がするし」

「そうかい」

「んじゃまぁ服も武器も新調したことだし、ぼちぼち向かう事としますかね」

「おうよ」

釣り道具をしまうと、俺は旅の支度をするために宿へと戻るのだった。

第九章　2、手伝い

そこは誰も知らぬ場所。

神殿らしき建物の、祭壇と思しき台座の中心で、人とは思えぬほど美しい女性が目を瞑り祈りを捧げていた。

どれほどの時間そうしているのか知る者は居ない。

そんな女性の後ろに、白髪の青年が姿を表す。

「……どちら様かしら？」

女性は目も開けず、そのままの姿勢でその青年へと話しかける。

その声はあたかも全てを包み込む聖母のように穏やかで透き通っていた。

「お初にお目にかかります。僕は地のアーウェルンクス」

そう名乗った青年は全く感情の伺えぬ顔をしている。

振り向きすらしない女性に対して青年はゆっくりと跪き、顔を地へと向けた。

「……では「完全なる世界」の？」

「はい。この度はご報告があり、お伺いに上がりました」

跪いたままの青年に対して、ようやく女性は祈りの姿勢を解き、そちらへと振り返った。

「報告……それはバルバロイのことかしら？」

「……ご存知でしたか」

言葉とは裏腹に、青年には全く驚く様子はない。

「ええ。あの子は……バルバロイは龍の民の生き残りに破れたようですね」

その瞬間、女性はとても悲しそうな表情を見せる。

しかしそれもほんの一瞬の事で、顔を伏せている青年は全く気付かない。

「はい。彼の亡骸はこちらで手厚く弔わせていただきました」

「……それで？　まさかその事だけを伝えにきたわけではないのでしょう？」

女性の言葉に、青年は顔を伏せたまま僅かにだけ言葉を強くする。

「計画を早めて頂くわけにはいきませんか？」

「……何故です？」

「……」

青年は答えない。

「いえ、不粋な質問でしたね。あなた方にとってこちらの世界を救

うことが、何より優先されるという事情はわかります」

「……はい」

「ですが、私にとっては龍の民の方が度し難い問題なのです。それが解決するまでは、あなた方のお手伝いをするわけには参りません」

女性の答えは青年の期待とは異なっていたが、予想とは合っていた。

「……わかりました。ではアレを僕達の方で消す事ができたら、お願いを聞いていただけますか？」

「……いいでしょう。あなた達にあの生き残りを倒すことができるのでしたら……」

女性は即答する。まるで未来を確信しているかのように。

「……」

「その時は、私はすぐに計画を実行致しましょう。ただし、期限は私がもう一つの力の封印を解き終わるまで。もしそれまでにできなければ……」

女性の声にはそれまでの優しさに加え……凍えるような冷たさが混ざっていた。

「私は全力を持って、あの生き残りの殲滅に当たります」

それは青年達の最も恐れていた事態。

計画を修正せざるを得なくなる事態だった。

「……わかりました」

「そう。ではあなた達の盟主にもよろしく伝えておいてくださいね」

「はい、ではこれで」

青年は一度も顔を上げないまま、どこからか発生した水のゲートを通って姿を消した。

「……」

女性は再び祈りの姿勢へと戻るのだった。

――

メガロメセンブリアからヘラス帝国領内には問題なく入れた。

ジンメルという都市は内陸部で、ニャンドマの北西辺りに存在するらしい。

飛行船で向かってもよかったのだが、俺はお金の節約と習った浮遊魔法の訓練がてら自力で飛んでいっていた。

長距離飛行はエヴァンジェリンさんの別荘ではあまり行えなかったので、魔力の配分コントロール等まだまだ学ぶ事が多いのだ。

途中でキャンプを張ったりしつつ、大体工程の半分辺りに差し掛かったところで、

≪ん？　相棒、ポケットが光ってねぇか？≫

「お？」

風を切って飛んでる俺に、腰に着けてるポーチの中から妙な報告が上がった。

飛行を止め、ポケットを見てみると中の何かが確かに光っているようだ。

「なんだ？」

調べてみると、光っていたのは以前妖精に貰った赤い宝石「フェアリドロップ」だった。

宝石は何か切羽詰まったように明滅を繰り返している。

「これは俺を呼んでんのかね？」

「さぁなぁ。使ってみりゃいいんじゃねぇか？」

確かにポーチから顔を出したボッシュの言う通りなので使おうと思ったのだが、

「どうすりゃいいんだろ」

「掲げるんじゃねぇのかね？」

使い方を聞いてなかった為、ボッシュの意見の通りフェアリドロップを頭上に掲げてみる。

すると段々と宝石が熱くなり明滅の間隔が短く、発光自体はますます激しくなっていき――

「……なぁボッシュ、俺なんか悪いことしたっけ？」

「……そうだなぁ俺っちの記憶にゃぁねぇなぁ」

この後どういう展開になるのか一瞬にして悟った俺とボッシュを嘲笑うかのように、周辺の荒野に耳をつんざく大爆音が響き渡るのだった。

「あ、リュウのヒト！」

「やっと応答があったよぅ」

「これで何とかなるよぅ！」

気が付くと耳に覚えのある甲高い声が聞こえてきた。

「「……」」

俺はあのスパルタ修行のおかげなのか意識を失う事もなくその場に

立ち尽くしており、煙を上げて見事に爆発オチ後のアフロキャラと化していた。

買ったばかりのおニューの服がボロッボロになっているだろうことは想像に難くない。

衣服類は大量に買い過ぎたかと思っていたのだが、それがこんな形で役に立つ事になろうとは人生とはわからないものである。

「「……」」

恐らく、今俺の背景に「ゴゴゴゴゴ」と出ていてもなんら不思議はないだろう。

「な、なによぅ」

「久しぶりよぅ！」

「私達に会えたんだからもっと嬉しい顔をするのが普通よぅ」

俺の雰囲気に気付いていつつも見当はずれな妖精×３の言葉により、俺とボッシュの頭の血管は限界を超えた。

「何で爆発するんじゃぁぁぁ！」

「死んだらどーするおめぇらぁぁ！」

その形相はまさに悪鬼の如しと後の妖精は語る。

「わ、悪かったわよぅ」

「そんなことより大変よぅ」

「食べ物が尽きたのよぅ」

「「……」」

しかし俺とボッシュの怒りの声を「そんなこと」としてかる～くスルーし、全く持って反省の色なしの妖精達。

（こいつら……）

思わずドラゴナイズドフォームになりそうになったのをぐっと堪えて腹に溜め込み…

「全　員　そ　こ　へ　な　お　れ　ぇ　！」

「「「！！」」」

吐き出したエヴァンジェリンさん仕込みの言霊ＭＩＸ怒号に、ビクゥッ！と硬直する妖精×３。

その後、正座させた妖精達に俺とボッシュの怒涛のお説教が２時間に渡り繰り広げられるのであった。

「……以上だ。今後は気をつけるように」

「「「はい……」」」

すっかり大人しくなった妖精達を見て怒りが収まった頃、俺はここへ呼ばれた理由へようやく思考が回帰していた。

「……で？　何だっけ、食べ物がないとか言ってたけど」

「そ、そうよぅ」

「貰ったお金も尽きちゃったのよぅ」

「どうすればいいかわかんないよのぅ」

「……」

思わず漏れる大きな溜息。

（こいつら本当俺に会う前はどうやって生きてきたんだ？）

そんな以前にも感じた疑問を思い浮かべつつ、俺は自分のした事があまり妖精達の為になっていなかった事を認識した。

こいつらは甘やかしては駄目なのだ。

俺は少し考えた後、徐に人差し指を天に向けた。

「おじいちゃんが言っていた……「魚を与えれば一日の飢えは凌げる。しかし、魚の捕り方を教えれば、一生飢えを凌げる」とな」

「「「……？」」」

妖精達は俺が何を言いたいのかイマイチわかっていないようで、その？な姿にまたもや溜息が漏れる。

「仕方ねーからお前らに食料……魚の釣り方ってヤツを教えてやんよ」

「「「え～……」」」

俺の意見に不満たらたらの妖精達。
その態度にまた先程の説教モードが首をもたげる。

「え～じゃありません！　取り合えずどこココ！？」

俺はくわっ！と目を吊り上げながら辺りを見渡した。
以前の龍山山脈ではないようだが、同じように殺風景な山の上のようだ。

ちょうど今居る場所は崖の上で、下へ目を向けると多少離れているものの緑が見える。

「…タ、タルシス大陸のオリンポス山よぅ……」

「聞いたところで山の名前なんぞ知らないけどな！」

「そんな……」

俺の理不尽な反撃に素直な反応を返す妖精達。

「近くに川は？」

「あ、あったと思うよぅ」

「なんだと!?」

「「「ヒィッ…!」」」

ノリで大声を出してみたらビビった様子の妖精×3。

「よし。　お前等に適当な竿の作り方と、魚の釣り方の基本を教えてやるからそこへ案内しなさい!」

「り、了解よぅ……」

「もうリュウのヒト怖いよぅ」

「でも逆らったらもっと不味いことになりそうよぅ」

「文句を垂れる前と後にサーと言え!」

「「「は、はい!　サー!」」」

さっきの説教が堪えたのか、俺の言う事に反論せず渋々といった形ではあるが妖精達は重い腰をあげるのだった。

そうして案内されたのは崖から急斜面を下へと降りていったところの山間部。
そこはちょっとした谷となっていて、多少の緑と妖精の言った通りの川が流れていた。

急流ではあるが魚はそこそこ居るようだ。

俺は妖精達に暖かい怒号と優しい罵倒を交えて木の竿の作り方をレクチャーし、続いてその辺の虫を餌に簡単な釣り方を教授した。

「あ、きたよぅ」

「意外といけるよぅ」

「……」

一人だけ当たりが来ないようだが他二人はそれなりに釣れているらしい。

どうやら飲み込み自体は悪くないようだ。

「よし、これでお前達は釣りビギナーだ。もう食料には困らんぞ」

俺は後ろで腕組みしながらその光景を見ていた。

「でも毎日お魚じゃぁ……」

「たまにはお肉も食べたいよぅ……」

「お菓子も……」

川岸に腰掛け、微妙に暗い影を落としながらぶつくさ不満を言う妖精×3。

「わがまま言うんじゃありません！」

とはいえ気持ちはわかる。

何でこんな辺鄙な場所を住処に選んだのかわからないが、仕方ないからなんとかしてやるかとも思っていた。

「なんだかんだ言って結構面倒見いいよなぁ相棒よぉ」

「だまらっしゃい」

改めて言われると妙に気恥ずかしかったので、にやけるボッシュの言葉を適当にスルーし、釣りを続ける3人の背中を見ながら考える。

こんな山中では近所の街とかはあったとしてもかなり離れているはずだ。

そうなると肉を食べたいなら山の生き物を狩るしかない。

俺は狩りのイロハなんてわからないので、得意そうなヒトでも探してこいつらに教え込んで貰うしかないだろう。

そうすると教えるのは泊り込みになってしまうだろうが、そのためには最低限の宿も必要になる。

今の妖精達の住処はお世辞にも建物とすら言えない建造物？で、木で組んだ骨組みと草らしきもので敷いた屋根だけ、というそれはそれは風通しの良いものだ。

（あんなんじゃ誰も来るわけねぇしなぁ……）

あんな宿泊所では人など呼べようはずもないので、建築に関しても人を頼るしかない。
こんな所で建物を建てるのを請け負ってくれる人など居そうもないことを考えると頭が痛い。

（めんどくせぇなぁもう……）

そんな感じで悪態を付きつつも考えを巡らす俺であった。

その後、釣り終えた妖精達を適当に宥めすかし、爆発しない改良型フェアリドロップを貰って俺とボッシュは元の場所へと戻ってきた。

「厄介事を抱え込んじったなぁ相棒よぉ」

「まぁ……よくあること？だろ」

自分で言っててそんな頻繁にあったらやってらんねーけどな、と突っ込みを入れる。

若干滅入った気分を吹き飛ばすように、ジンメル目指して浮遊魔法の出力を上げてかっ飛ばす俺だった。

第九章　3、闘都

「ここがジンメル……」

「なぁんかガラのわりぃのが多いみてぇだなぁ相棒」

「ホントだな」

町の入り口にて周りを見渡し、そんな感想を持つ俺とボッシュ。

ヘラス帝国、内陸都市ジンメル。

別名を「闘都」と言い、格闘大会が頻繁に開かれる町である。

どちらかと言えば住宅街より歓楽街の方が多いような、日本の新宿歌舞伎町と似たところがある町だ。

今はちょうど2週間後に「漢羅狂烈大武会」という1年で一番大きな大会が開かれるとあって、腕に自身のありそうな猛者……というか荒くれ達が集っているらしかった。

大会はタッグ戦であり優勝賞金は５０万Ｄｑだそうで、金稼ぎを兼ねた腕試しに出てみるのも良いかも知れない。

しかし一般に普通に告知している辺り、この大会がマニーロさんが言っていた「物騒な催し物」だとは思えない。

「で、どーするね相棒？」

「ん～取り合えず今は情報収集が目的だからなぁ。取り合えず酒場か」

「ん。芸がねぇけど仕方ねぇなぁ」

「そう言うなって」

俺は多少街を散策してそれっぽい大きめな酒場に当たりを付けると、宿を取って夜を待つことにした。

――――

中から酒瓶が派手に割れる音が聞こえてくる。

「あんだとこらぁ！　やろうってのか！　ああ!?」

「上等だコラァ！　表ぇ出やがれ！　その減らず口叩き潰してやる！」

それに伴い、粗野な男達の喧嘩腰の声も聞こえてきた。

（チンピラばっかじゃねーか……）

現在俺は酒場の入り口からその光景を覗き見てゲンナリしている真っ最中である。

夜になるとさらに町は柄の悪い連中で溢れていた。

騒がしい喧噪のなかには子供の姿などほとんど見当たらず、その中を一人で行動している俺は、ここまで来るのに大分好奇の視線に晒されていたのだ。

そんな視線を掻い潜りつつもようやく目的の酒場に着いたのだが、中は以前のシュークの酒場が可愛く思えるぐらいに荒れているようだった。

「これじゃあ情報収集なんてやってらんねーな」

「だな。どうする相ぼ……」

と、ボッシュが喋るのを即座に止めた。

俺が入り口の前で突っ立ってたのが悪かったのか、さっきの盛り上がってた二人がいつの間にか目の前まで近付いてきていたのだ。

二人とも典型的なチンピラそのまんまの容姿でそれなりにガタイが良く、身長は高めなのか俺の目の位置がちょうどそいつらのヘソくらいだ。

「ああ？　何だこのガキィ……邪魔だ」

俺が進路をふさいでいた為に気分を害したのか、チンピラの一人が俺の顔目掛けて払うように腕を振ってきた。

しかし俺は極めて自然な動作でそれを避ける。

「っと、すみません。余所見してたようで……」

そして俺は何食わぬ顔で脇にそれ、道を譲った。

「オイ待てガキ。避けてんじゃ…ねーよ！」

チンピラはイラついた様子で、今度はハッキリとパンチを俺に放って来た。

しかしまたもや俺はそれをあっさりとかわす。

「っと。あぁ、いやまぁお気になさらず……」

（あーもう、何か面倒な事に……）

どうもこのチンピラは俺があっさりかわしたことが御気に召さなかったようだ。

すると、その後ろからそいつに絡んだもう一人のチンピラが前へ出てきた。

「はっ、てめぇこんなガキにも当てられねぇ癖にこの俺に喧嘩売ったってのかよ。いいかパンチってなこうやんだ…よ！」

前のチンピラよりわずかに鋭いパンチ。

だが例によって軽く避ける俺に掠りもしない。

「！？」

「あ、どうぞどうぞ俺のことなんてお構いなく」

俺は二人を広い道の真ん中へと行くよう促すが、二人とも動きが止まっている。

「「……」」

何かチンピラ同士が顔を見合わせていた。

（……なんかなぁもう……）

「おうガキィ、てめぇちょっとはやるみてぇじゃねぇか」

「俺もちょっとばかりイラっと来たな。おいこのガキ〆ちまおうぜ」

「俺も今ちょうどそう思ったところよ」

（何意気投合してんだよチンピラ×２！）

俺の前でテンプレ的にバキボキと指の骨を鳴らすチンピラが二人。

「やっちまえぇ！」

「おおらぁ！！」

「ちょっ……待ってって……」

こっちの話に聞く耳持たず、思いっきり拳を振りかぶってくるチンピラその１。

「っもう……」

俺はパンチが当たる直前、それを瞬動の要領でジャンプしてかわした。

「あぁ！？　どこ行ったぁ！？」

チンピラその1は全く見えてなかったのか、周りをキョロキョロ見渡している。

「上っすよ」

「なぁ！？」

俺の言葉に上を見上げて固まるチンピラ。

「平和主義者クラーッシュ（棒読み）」

「へぶぅっ！？」

間抜けた顔面に落下速度と体重を乗せた両の膝蹴りが決まった。

そのまま鼻血のアーチを描きつつ仰向けに倒れるチンピラその1。

「このガキィ！」

一人が成す術なくやられたのを見てヤバいと思ったのか、チンピラその2はどこからかナイフを取り出した。

「死ねやぁ！」

そのまま俺の顔面目掛けて突いてくる。

……が、

「!?」

鈍い太刀筋だったので俺は左手の人差し指と中指でそれを白羽取ったのだ。

（お、なんか今の俺かっこよくね？）

客観的に見た自分の姿を想像してちょっとだけ感動である。

「まぁまぁ、こんなんで刃物なんか出さないで下さい…よっ」

そしてそのままナイフを強引に「ぶんどり」、

「あ、てめ……」

ヒュパッと瞬時にドラゴンズ・ティアに格納した。

「うぉ!?　俺のナイフ!?」

辺りを探すチンピラその2。

実にいいリアクションをしてくれている。

まぁ種を明かされなければ俺でもどうやったかわからないだろう。

「さてどうします？　別に俺は争う気はないんですけど」

「……舐めてんじゃねぇぞ糞ガキがぁ！」

俺の言葉に冷や汗をかいてるものの、やっぱり襲い掛かってくるチンピラその2。

「はぁ……」

俺は溜息を付きながら、先ほどと同じようにチンピラの前から姿を消した。

「てめ！？　また上か！？」

「後ろっすね」

「！？」

今度は上ではなく、瞬時に背後に回り込んでいた。

そしてチンピラが上を向いたまま、こちらを振り向く前に、

「人畜無害キーック（棒読み）」

「ゲフゥッ！？」

適当に背中に喧嘩キックを喰らわして吹っ飛ばした。

チンピラ×2とも地面に寝っ転がって大人しくなったようだ。

別に息切れしている訳ではないがここで一息。

「なーんでイチイチ突っかかって来るかね？」

≪さぁなぁ意地ってやつだろ。それにしてもいいのかい相棒？≫

ボッシュが飛ばす念話の言葉に俺は？を返した。

「何が？」

≪連中殺気立ってるぜ？≫

「え？」

ボッシュの足指す店の中へ視線を向けると……しーんとなった店内から、あらゆる客が俺の方を見ていた。

その中の一人と目が合う。

（……こっち見んなよ）

「えと……お邪魔しましたー」

俺は笑顔でそう言うと、踵を返して駆け出した。

「待てガキィ！」「兄貴の仇だぁ！」「次は俺がやるってんだよ！」

「強い男の子ハァハァ」

後ろから良く分からない声と何人もの足音が聞こえたが、俺は振り返らずにダッシュしてその場を後にするのだった。

「あー無駄に走った」

「どうするね相棒。あの酒場にゃあもう行けねぇぜ？」

適当に走り、追手のチンピラどもを巻いた俺は当てもなくブラブラしていた。

「まぁいいじゃん。どうせあんな店じゃ話なんて聞けないし。酒場だって一軒しかないなんてこたないだろ」

「そりゃそうだな」

元々町人のガラが悪いためにそこまで期待してなかったので、そんなに落ち込むほどでもない。

俺は次の酒場を探してしばらく夜の街を徘徊するのだった。

「離せよ！」

「いーじゃねーかねーちゃんよー。俺たちと飲もうぜぇ？」

「うるさい！　あたしは急いでるんだ！　邪魔するな！」

（……なんだぁ？）

ちょっと人気のない場所へ来たと思うと、視界の先にある路地裏からそんな声が聞えてきた。
今の会話から察すると、女の子を無理やり誘ってる野郎どもと言う図が嫌でも思い浮かぶ。

「……っていうかベタだよな」

「だなぁ」

これほど荒れてる街ならそんな光景も普通にあるのだろうが、見過ごすのもアレなのでそっちへ向かう。

（あーでも「きゃー、リュウさんありがとー」みたいなシチュとか悪くないかも）

そんな打算計算しつつ距離詰めると……

「おごぉっ!?」

「ふん！　あたしの邪魔するからそうなるんだよ。べーっだ！」

そこには倒れて気絶した2人の男と今まさに倒れゆく男、根らしき長い棒を担いだ亜人の女の子が居た。

「……あれ？」

（何この状況……）

俺が格好良く助けに入るまでもなく、ナンパ野郎どもはその女の子がとっちめたらしい。

それを見てどうするか考えて固まっていると、女の子がこっちに気付いたようだった。

「あ、君！　悪いけどこいつらよろしくね。あたし急いでるから！」

「えぁ！？」

「じゃーね！」

そう言って駆け出す女の子。

「ちょっ……おーい……」

女の子はあっという間に人混みの方へと見えなくなってしまった。

「どうしろと……」

「まぁ頑張れ相棒」

ボッシュの声をスルーし、倒れたままのナンパ男達をどうすればいいか悩んだ俺は、彼らの自業自得を思いつつ適当に壁にもたれかけさせてやるのだった。

第九章　4、夜食

「つか、さっきの子マジでどこ行ったんだ？」

「さぁなぁ。しかしありゃ中々できる嬢ちゃんだったなぁ」

適当にナンパ男達をあの場に置いてきた俺は、情報収集そっちのけであの女の子を捜していた。

あまり長く見た訳ではないが、その格好の特徴はハッキリと目に焼き付いている。

流石に人込みの中では見つけるのが困難なのは重々承知だが、どうしてももう一度会いたい理由があるのだ。

（あの娘は多分……）

そんなことを考えながら街を徘徊しだして約2時間。

もういい加減夜も更けてきており、段々と周りの人も減ってきていた。

「相棒よぉ、俺っち疲れちまったよ。今日はもうよくねぇか？」

「むぅ……」

ボッシュの言うこともわからないではないし、なにより漠然とノープランで探すにはこの街は広くて手掛かりが少なすぎた。

「……しゃーねぇか。なんか小腹すいたしどっかで夜食でも食って帰るか」

「おうよ」

そして俺はこの時間でも開いていて、こんなナリでも入れそうな店探しに目的を変更するのだった。

しかし繁華街をそれっぽい食事処目当てにぶらつくも、普通に考えて飯屋なんて開いてるはずも無く、目に付くのはガラの悪そうなバーやイカガワシイ店ばかり。

これがマーフィーの法則か、などとどうでもいい事を考えて、もう夜食もいいかと諦めかけたその時

「相棒、あれ開いてんじゃねぇか？」

「お？　どれ？」

ボッシュから発見の報告が上がった。

ポーチから乗り出して前足を指す先には確かに飯屋っぽい看板があり、中から明りも差しているようだった。

しかしこんな時間まで開いてる貴重な店の割に、そこの周囲には妙に人が居なかった。

場所的には繁華街であり立地条件は悪くない筈なのだが、何故ここまで人が居ないのか気にはなる。

「……行ってみる？」

「まぁいいんじゃねぇか？」

客が居ないので味に期待できるかはわからないが入ってみる事にする。

店の前に立ってみると、子供の入れない妙な空気とかのない、至って普通の定食屋のようだった。

取り合えずドアを開ける。

「へいらっしゃい！」

来客を知らせる鈴の音が鳴り中へと進むと、内装は別にボロくもなくしっかりとした作りで、明かり等も普通ではあった。

ただ客が一人も居ないせいか雰囲気が微妙に暗く感じられはするが。

そして威勢のいい声を掛けてくれたカウンターの方には、コック姿のフーレンのお兄さんが立って居た。

レイさんほどスレてはなさそうで、クレイさんほど真面目一辺倒というわけでもない気さくな雰囲気の人だ。

「あの……」

「おいおいこんな時間に子供一人かい？　どうした坊や迷子か？お父さんかお母さんは？」

カウンターから出てきて、俺の目線に屈んで聞いてくるお兄さん。

「いやあの……客です」

内心予想通りな反応をスルーしつつそう言うと、ちょっと驚いたようだった。

「へぇ、そいつは悪かった。じゃまぁカウンターでいいよな。こっちだ」

謝るお兄さんにカウンターの席に案内され、水とおしぼりを出される。

置いてあったメニューを見るとやっぱり普通の定食屋の様で、しばらく眺めて腹具合と相談し、食べたいモノを告げた。

「じゃあこの肉と野菜の炒め物と麺の小さいのを下さい」

炒め物はメニューの写真から判断して普通の野菜炒めで、麺類はラーメン？ぽいものだ。

「あいよ！　こんな時間にそんなもん食えるたぁ若いっていいねぇ！」

そんなお兄さんの言葉に愛想笑いしつつ、夜中のラーメンとか脂っこい物って美味しいじゃん、と内心で反論する。

カウンターの奥の厨房にお兄さんが引っ込むと、包丁の音や炒め物の音が聞こえて来た。

多少乱雑な感じはするものの、普通に調理していると思える。

「へいおまち！」

しばらくして、俺の前には小さな丼に入ったラーメン？と、一皿に軽く盛られた炒め物が出された。

「じゃあ、いただきます」

ここらの魔法世界では箸がないのが普通なので、前に日本で買っておいたお徳用大入り割り箸パックの中の一本をドラゴンズ・ティアから取り出し、麺を一口すする。

「！！」

その途端、俺は振えあがった。

口の中に広がるスープは生臭く、出汁か何かの灰汁が抜け切れていないのか他の味を抑えて苦さが際立っている。

麺は歯応えの欠片もなく明らかに茹で加減を間違えており、それがスープと絡んで筆舌に尽くし難いハーモニーを奏でていた。

俺はすぐさま水の入ったコップをひったくると、意識を舌に向けないようにしながら麺を無理やり喉の奥へと流しこんだ。

「……」

改めて器の中身を見ると見た目は極めて普通。なのに何故ここまで酷いのか不思議で仕方がない。

（いやいや何今のあり得ないだろ……？）

震える指を必死に動かし、箸を炒め物に向けた。
麺がこれではこちらもどうなのかという不安がよぎる。

しかし、こちらは見た目通り普通であってくれという微かな希望と、
頼んだ手前口を付けないのももったいないという微妙な貧乏根性が
俺を突き動かしていた。

「!?」

それを口に入れた瞬間、俺は全身の毛穴という毛穴から嫌な汗が噴
き出す感覚と言うモノを初めて体験した。

肉自体火が通ってなくてやはり生臭い上に妙に堅く、野菜も芯が残
っていて土臭い。
使っている油も大分古くなっているのか口の中に嫌な匂いが広がる。

さらに味付けが薄すぎるせいでそれらの味がまとめてダイレクトに
舌に伝わってくるのだ。

最早これ以上咀嚼などしようものならば、リバースしろという脳内
命令に耐え切れる自信が無い。

「!!」

俺は必死に残りの水でそれらを一気に胃に流し込んだ。

「っ……はぁ、はぁ、はぁ」

「あー……駄目だったか？」

ふとカウンター越しに話しかけられた。

その言葉を発したお兄さんに目を向けると、あちゃーって感じで頬を掻きつつ冷や汗を垂らしている。

「……」

俺は睨んだ。それはもう親の仇かと言わんばかりに睨んだ。

思わず前にエヴァンジェリンさんから盗んだスキルの一つ、「ガンとばし」を発動してしまったほどだ。

ちなみに相手の行動をキャンセルする効果がある。

「あー、その……スマン」

俺に頭を下げるコック姿のお兄さん。

正直ここで怒鳴り散らすのは容易い。だが俺はその選択をしなかった。

もっと陰湿にねちねちと責めたくなる程のものだったからだ。

「…よくこんなので店を開けていられますね…」

それは自分でもビックリするくらいに低い声だった。げに恐ろしきは食べ物の恨み。

「う……」

「俺なら絶対にこんなの人様には出せませんよ」

「く……」

「なるほど、これならこの店に全く人が居ないのも納得ですね」

「……」

「いくら積まれても今のだけは二度と口に入れたくないです」

「……わかった。悪かった。この通りだ」

カウンターにゴチッと頭を付けて謝罪するお兄さん。

「……」

そもそもあんな料理しか出せないのに、見た目は本当に普通なこの店を持ってることがおかしい。

どう考えてもこの人は料理と言うモノをわかっていないとしか思えない。

「ていうか、お兄さん料理人じゃないんでしょ？」

「な、何故わかった!?」

俺の言葉を聞くや否やギクリとした表情で顔を上げるフーレンの虎さん。

（……天然？）

適当に言ったのに速攻で肯定するあたり、それが素だとするならよっぽどである。

「そもそもこの……」

再び俺の陰湿モードが発動するかと思われたその時、けたたましい音と共にドアが開かれた。

「おーいティガー！　居……る……？」

「「あ」」

振り向いてみるとそこに現れたのは、あの悪漢3人を薙ぎ倒した女の子だった。

「ゲェ！？　リンプー！？　何故この時間に！？」

その姿を見るや、ヤバい物見つかった！とばかりに先ほどとは別種の汗を垂らすティガと呼ばれた虎コックさん。

シャッ！とカウンターの下に隠れてしまった。

「……あれ？　君……？」

俺の方を見て、何でこの場所に部外者が……？とばかりに首をかしげるリンプーと呼ばれた女の子。

（おお？　やっぱ俺の記憶は間違いねぇ！）

俺はそれまでの料理のことなんかすっかり忘れ去り（たくて）、その女の子の姿と自分の記憶が正しかった事を確認していた。

この人はブレス2のキャラなのだ。

（しかしそれにしても……）

年の頃は恐らく16前後のフーレン族、顔の雰囲気は勝気な感じでもちろん可愛く、赤い髪のショートカットに大きめな虎耳、ヘソの上までの丈のピッチリとした紫のタンクトップを着ていて胸は控えめながらも健気に自己主張している所が実にポイント高い。

そしてその背には先っぽに猫の手を模した飾りの付いた根を背負っており、視線を下に移すと黄と茶の縞模様の尻尾があって、何も履いていない。

……履いていないのだ！

（おいィィ！？）

パンツじゃないから恥ずかしくないとかってレベルではない。

恐らく本人的にはこれが普通で、ディースさんとかと同じなのだろうが……下半身全部虎の毛で覆われていると言ってもこれはビジュアル的に刺激が強すぎる。

（待て落ち着け、落ち着くんだ俺。こういう時は素数を数えるんだ。3．141592……）

ここまでの思考を約０．０３秒くらいで済ませ、なんとか平常心を取り戻した俺は、女の子の方に向き直った。

「ふぅ……あのー、この店の関係者の人……ですか？」

「ん？　そーだよ。あたしはリンプーって言うんだ。ここで働かせてもらってるの。よろしくね」

はち切れんばかりの笑顔のリンプーさん。素晴らしく可愛い。

「こ、これはどうも。あー、えっとさっきの殴った人達は適当に処置しておいたんで」

「ああ！　そっかあの時の君か！　任せちゃってごめんね。あたしちょっと急いでたからさ」

ポンっと手を打ちつつようやく思い出してくれたようだ。

「それなら多分大丈夫ですよ（放置したけど）。それより、そこの人の関係者なら何であんな料理を出してるのか良かったら教えてほしいんですが？」

「え！？」

適当な話題として俺がカウンターを指差すと、途端にリンプーさんの顔が険しくなった。

隠れたティガさんの尻尾がブルブル震えているのがわかる。

「……ふ～ん、ティガ？　あんた、なんでそんなカッコしてそんなトコに立ってるのかな……？」

「う……」

「もう！　クラリスが帰ってくるまで店閉めるって言ったじゃん！」

「でもなぁリンプー……俺だって……」

ギャーギャーとかなり本気で怒ってるリンプーさんに、何やら言い訳しているティガさん。

「大体ティガご飯作ったの今までで2回だけでしょ！」

「なにぃ！？」

聞こえてきたその言葉に俺は絶句した。

「もう、やっぱり変なの作ったんだ」

呆れるようなリンプーさんの視線に晒されたティガさんはひたすら謝っている。

「あの、ということはこの店に人が居ないのって…？」

「それはそうだよ。だってこの店元々クラリスの店だもん。　ああ、クラリスっていうのはそこの馬鹿ティガの彼女ね」

「……」

話によると、ティガさんは負けず嫌いでクラリスさんがちょっと遠い実家に用事で帰っている間、料理ぐらい俺だってできるから任せろ！と余計な気を回したのだそうだ。

あらかじめ周辺にはクラリスさんとリンプーさんが休業する事を通達していたのだが、ティガさんが余計な事をしていないか見回りに来るリンプーさんの目をかいくぐり、夜を見計らって厨房に立っていたらしい。

しかし練習もせずにいきなり本番をやろうとは命知らずもいいとこである。
俺は一通り話を聞いて現状を理解すると、またもやティガさんにガンとばしを発動した。

「……すまんボウズ。お代はいいから」

「そりゃ当たり前だと思います」

憮然として言い放つ俺。

しかし最悪なもんを食わされたとはいえ、ここでリンプーさんに会えたのは運が良かった。
俺が彼女を探していた理由、それはこの人は狩りが得意だったと記憶していたことからだった。

つまり妖精達の狩りの先生には持ってこいなのだ。

「あーその、リンプーさんにちょっと……」

「っと、そうそう！　そんなことより聞いて！　あのね、あたしね、

明日ショーに出る事になったの！」

ティガさんと俺の方を交互に見ながら一気に捲し立てるリンプーさん。

「本当か！　良かったなリンプー。前から有名になりたいって言ってたもんな」

ティガさんの言葉にさらにヒートアップしていく。

「なんかね、今回はただモンスターと1対1で対決するだけなんだけど、受けがよかったら次もあるよってオーナーさんが言ってくれたの！」

「へー」

凄い勢いで捲し立てていて、とても俺の話を切り出せるような雰囲気ではない。

「それで……はいこれ。チケット貰ったから良かったら見に来て！」

そう言ってどこからか取り出したチケットを、何故かティガさんではなく俺に渡された。

「え、俺に？　会ったばっかりですよ？」

「ん？　あー本当はティガにあげようと思ってたんだけど、何か変なもの食べさせちゃったみたいだし、そのお詫び！」

「うぐ……」

あっちでカウンターに突っ伏してるティガさん。

「そう言うことならありがたく頂きます。明日ですね」

「うん！　よろしくねー」

そう言うと嵐のように去っていくリンプーさん。

「あー……」

こっちの話があまりできなかった。何と言うか凄い猪突猛進虎娘だ。

……だが可愛いのでまるっとＯＫである。

「で、ティガさん？」

「……なんだ？」

「もう店閉めて下さいね？」

「うっ……わかったよ」

「じゃ、そういうことで」

もう俺のような哀しい被害者が出ないよう三度のガンとばしと共にキッチリ釘を刺し、俺は腹が痛くなりそうな気配を感じて宿へと急ぎ戻るのだった。

第九章　5、催し物

翌日、夕方頃まで適当に時間を潰した俺は、日の傾いた薄曇りの中でリンプーさんの出るというショーを見に行くべく街中を歩いていた。

このジンメルには、「闘都」を象徴するシンボルとも言える、大きなコロシアムが街の中央にある。

そこは大きな格闘大会が度々開かれる場所なのだが、リンプーさんの出るというショーはその隣にあるビルのようなそれなりに大きい建物の中で行われるそうだ。

俺は宿を出た後に人の居ない路地へと移動すると、エヴァンジェリンさんから教わった変装魔法を使い、髪の色と身長を誤魔化して見た目の年齢を上方修正していた。

昨日の経験から子供の姿のままだと入れるのかどうか不安であったし、変装姿で人混みに入ることで、コスプレしているような気恥ずかしさを消すという目的もある。

午前中にあらかじめ下見しておいたので、迷うことなく道を辿ってビルへと入っていった。

入口でチケットを渡して中へと入ると、実際には地下が闘技場になっているらしく、そこそこ深い階段を降りていく。

地下闘技場の入り口に到着すると、やけに物々しい警備に歓迎され

た。
いくつかの注意事項が言い渡されたがどうでもいいので聞き流し、中へと進むと野球場のように階段状の席があり、中央が円筒状に窪んでいた。
どうやらその中で戦いが行われるらしい。
だが入ってみて気付いたのだが、どうにも空気がおかしい。周りの人からはどこかそわそわしたというか浮ついた空気が感じられ、何か妙な期待のようなモノが伝わってくるのだ。
≪相棒、何か妙じゃねぇか？≫
≪なんだろね……？≫
ボッシュと訝しみながらも、しばらくすると会場は満員となり、趣旨を説明するアナウンスが響き渡った。
そして耳障りな音楽と共に中央の窪みの両側からスポットライトを当てられたリンプーさんと熊のモンスターが現れた。
あのような少女がでかい熊のモンスターに勝てるのか!?といったアナウンスが入るが、始まるとすぐリンプーさんは前評判を物ともせずに棒術でモンスターをタコ殴りにしていった。
≪中々堂に入っているなぁ≫
≪うん。かなり強いな≫
俺の目から見てもリンプーさんは中々の腕前で、あの程度のモンス

ターに負けるとは全く思えなかった。

だが周りの観客達は、興味を抱いていないかのように盛り上がっていない。

目の前のショーが何か期待されているものとは違う光景であるかように静まり返っていた。

俺が周りを見渡してその雰囲気を不気味に思っていると、突然それまでの打撃音が止み、代わりに乾いた音が響き渡った。

急ぎ闘技場の中を見ると、リンプーさんが持っていた武器を落としたらしかった。

「？」

そしてそれまでに比べて格段に動きが鈍くなり、モンスターにいいように痛めつけられ始めると、周りから強烈な歓声が沸き起こった。

「え！？」

周りは一気に興奮しだしていた。

女の子がモンスターにボロボロにされているのを見て、満員の観客達が喜んでいるのだ。

（ちょ……ヤバイって！）

見る見るうちにモンスターの猛攻に晒されていくリンプーさんは、すでに気を失っているのかぐったりしている。

≪相棒！≫

≪わかってる！≫

歓声の声を押し返すようにボッシュから念話が飛ぶと、俺はドラゴンズ・ティアから煙玉３つを取り出し、闘技場の壁目掛けて投げ込んだ。

衝撃により玉が破裂し、大量の煙幕が闘技場の中に充満してモンスターが動きを止めた。

「……！」

一気に観客達がざわめきだして俺の周囲から人が引いていくと、即座に警備の人間らしき黒服が数人、俺の方へとかけてきた。
やはりこんな場所だけあってその辺の対応は素早いらしい。

（蹴散らす……！）

「君、あの嬢ちゃんを」

「！」

俺が警備員達に囲まれようかと言う時に、突然後ろから声を掛けられた。

「ここは俺が引き受けよう」

言うや否や集まって来ていた警備員達が次々に倒れていく。
何かが高速で警備員達の顎の辺りを撃ち貫き、脳震盪を起こさせているようだった。

振り向いてみると、そこには室内なのにサングラスを掛けた白いスーツの男性が居た。

「ありがとうございます！」

声の感じとその行動から少なくとも敵ではないだろうと判断し、俺は浮遊魔法と瞬動等を駆使してリンプーさんの側まで行くと、襲いかかろうとしていたモンスターを蹴り飛ばす。

幸い致命にはまだ至っていなかったようで、応急的に治癒魔法を施してそのまま背負い、武器も拾って出口へと急行した。

謎のスーツの人が警備員を半分以上倒してくれていたのと、煙幕が観客席の方まで軽く覆っていた為に煙に紛れて脱出は思ったより楽に行う事ができたのだった。

「う……あれ……あたし……？」

「気が付きました？」

「……あ、君は……」

俺はティガさんの店へとリンプーさんを運び込んでいた。

単純に宿より近く、ティガさんに事情を話すと快く住居に使っている二階へと匿ってくれたのだ。

あのスーツの人も何故か一緒に来ているが、敵ではないと道中説明されたし、実際俺もそう思えたので取り合えずはおいておく。

「えっとあたしどうしたんだっけ？　何か突然目の前が暗くなって……？」

ベッドから体を起こしたリンプーさんは、自分に何があったのかまだわかっていないようだ。

「あー、体の方は大丈夫ですか？」

「え……うん、大丈夫みた……いっつ……！」

助け出した時は全身かなり酷い怪我だったが、この場で治癒魔法を掛け続けたおかげで痕は残らない程度に回復している。

だが血を流し過ぎていた事や痛み自体はまだあるようで、しばらくは寝ていた方がいいだろう。

一通り痛み以外は異常が無い事を確認すると、俺はリンプーさんが気を失ってモンスターに殺されそうになったので、俺と謎のスーツの人が助け出した事を話した。

「そうだったんだ……ありがとね。えーっと……」

そう言えばまだ自己紹介してなかった事に気付く。

「あー、すみません。俺はリュウって言います」

「じゃあリュウ、助けてくれてありがと。命の恩人だね」

ニコッと微笑むリンプーさん。

（くふぁ……可愛すぎるだろ）

眩しすぎて思わず目を逸らしそうになる。

「あとそっちの……」

リンプーさんがおずおずと尋ねると、それまで黙って煙草を吸っていたスーツの人はサングラスを外し、普通のメガネを取りだした。

「っと、すまないが名前は出せない。素性も明かせんが、まぁ敵ではないから安心してくれ」

「！」

「……何か？」

「あ、いえ何でもないです」

（この人……！？）

俺はそのスーツの人の容姿に覚えがあった。

サングラスでなく普通のメガネを掛けた姿は、後に「紅き翼」に入る事になるであろう人とそっくりだったのだ。

他人の空似かとも考えたが、改めてあの闘技場での手際を思い出すと、疑う余地はない。

何故名前を隠すのかは疑問に思うが取り合えず保留しておく。

「さて、リンプーと言ったかな。嬢ちゃんが大怪我を負った理由だが……」

そう言うとスーツの人は俺の方に目配せをした。

「多分、これのせいですよ」

俺はそれが何を意味しているのかを察し、小さな小さな細い針のようなものを取り出した。

「これがリンプーさんの足に刺さってたんです」

「何これ……」

「多分、毒針です」

「え!?」

その単語にリンプーさんの顔が青くなる。

途中でリンプーさんの動きが鈍ったのはこれのためであるというのが謎のスーツの人と俺の見解だった。

でなければ、あの棒術捌きから言って普通にモンスターを倒せていただろう。

「嬢ちゃん、あのショーに出る時には何も聞かされていなかったんだね?」

「……うん。あたしはただ、これで有名になれるってオーナーって名乗った偉そうな人に言われて……」

「なるほど」

その言葉に考え込むスーツの人。

俺は俺で、恐らくこの一連の騒ぎが、マニーロさんの言っていた「物騒な催し物」であろうと結論付けていた。

「人が嬲り殺される様をショーにする、か。どうやらその「偉そうな人」を締め上げる必要がありそうだな」

そう言って立ち上がり、何かを決意したような表情のスーツの人。

「あの、すみません」

「ん？」

「その「偉そうな人」を締め上げるの、俺にも手伝わせてもらえませんか？」

リンプーさんをこんな目に会わせた連中ってだけでフルボッコにしたい所だが、ひょっとしたらどこかで「完全なる世界」に繋がってるかも知れないという考えもある。

「君さえよければ、俺に断る理由はないよ。「紅き翼」のリュウ君？」

「！？」

そこまで言ってない筈なのにいきなり素性を言われて俺は少し動揺した。

その俺の顔を見て、どことなく意地の悪い笑みを見せるスーツの人。

「何、職業柄その手の情報収集は得意でね。先日の酒場での一件も知ってるよ」

「はぁ」

（なるほど、そう言えばこの人はどちらかと言えば諜報員っぽかったな）

そのこちらを見る「してやったり」みたいな顔に、俺も悪戯心が刺激された。

「じゃあよろしくお願いしますね、「ガトウ」さん」

「！　……ガトウ？　誰だいそれは？」

トボケているようだが一瞬だけ目が鋭くなったのを俺は見逃さない。

「俺もこう見えてそういう情報は知ってるんですよ。ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグさん？　別に情報を漏らしたりはしないので安心してください」

リンプーさんに聞こえないようにこっそりそう言うと、ガトウさんはふっと観念したように笑った。

「いや参った。一本取ったつもりだったがなかなかどうして。まだ小さいのに頼もしいなぁ」

そう笑いながら煙草の煙を吐くガトウさんであった。

その後ガトウさんがある程度の事を話してくれた。詳しくは言えないらしいがとある筋から依頼され、この町の行方不明者が飛び抜けて多いことで少し前から調査をしていたそうだ。

あの場に居たのはショーの存在を知り潜入捜査していた所だったらしく、あと少し俺が騒ぎを起こすのが遅かったら、多分自分が騒動を起こしていただろうと笑って話してくれた。

リンプーさんから聞いた話の、「偉そうな人」についてこれから調査するらしく、1日ほど待ってほしいと言われた。

リンプーさんの体調も少し不安だったのでその日はそこで泊まる事にし、ティガさんへのお詫びの意味もこめて2人に料理を振る舞い、俺はその日定食屋に泊まるのだった。

翌日の夕刻頃、ティガさんの定食屋へ資料を片手にガトウさんがやってきた。

そしてその調査結果から、どうやら偉そうな人というのはこの町の大会を一手に仕切っている組織の大元締めらしいということがわかった。

ガトウさんによると直接会う事はこの町の有力者とのコネがあって

も難しいらしく、忍び込むのも難しいとのことだった。

恐らくリンプーさんはどうせ死ぬから、と言った思惑があった為に会えたのだろう。

「マジでどうしましょう……」

「何、当てはある。ちょうどいい当てがね」

そして出た結論は、あと約1週間後に開かれる「漢羅狂烈大武会」で優勝する事。

その大会はこの町を代表するような大きな大会であり、ガトウさんが調べた所によると優勝者に賞金を手渡しするのが決まってその大元締めらしいのだ。

それしか直に会う方法はないとのことだった。

一通りこれからどうするか話していると、リンプーさんから自分はどうすればいいのかという声が上がった。

リンプーさんはヤツらに対して顔が割れている。

実は昨日まだリンプーさんが目覚めていない時、この店にやくざ者っぽい連中が「この娘が働いていたはずだ」と写真のようなものを持って尋ねて来ていたのだ。

その時はティガさんが適当にあしらってくれたのだが、これでは下手に外も歩けない上に体調が万全でないこともあるので、しばらくここで休養してもらうことになる。

「でも……いいの？」

「気にすんなよリンプー、なんなら俺が力のつく料理を作って……」

「いや俺が作るのでティガさんは何もしないで下さい。下手すると致命傷になりますから」

ちなみに俺の事も聞かれたそうだが、あの時の俺は変装していた為、今の俺にはどうあっても辿りつけないだろう。

そしてティガさんには迷惑料という形で料理を教える事になり、ここに置いてもらう代わりに夜だけ店を開けるという条件を呑む事になった。

俺の料理の腕前に感激したらしく、これならイケる！との判断からだそうだ。

ティガさんの腕前は壊滅的とは言え、単に基本がなっていなかっただけなので、どこかの大魔道士さんよりは見込みがあるので大丈夫だろう。

ティガさん曰くクラリスさんが帰ってくる前に上達して驚かしてやりたいそうだ。

どうでもいいがその話を聞いている最中、あっちこっちへと話が脱線していたので、惚気は余所でやってくれと俺とボッシュが念話で話していた事は秘密だ。

第九章　6、予選

「漢羅狂烈大武会」

形式は2対2のタッグ戦で、まずA～Gブロックごとに分かれてのバトルロイヤルの予選を行い、最後まで勝ち残った7チーム＋予選免除シード枠の1チームでトーナメント本戦を行うという非常にオーソドックスなものだ。

これだけなら極めて普通の健全な大会であるように見える。

しかし、この大会の最大のポイントは「何でもアリ」な所。実際に殺人を犯してしまっても特例で咎められないという大会なのだ。

一旦試合会場に上がったが最後、武器凶器魔法トラップ何でもOKと言うルール無用の殺し合いなのである。一応気絶・20カウントKOというルールはあるのだが、それでも毎年数名は命を落とす者が出るという話だ。

昔はローカルな大会だったものの、一般に告知した辺りからスリルを求めてやってくる客が毎年増えていき、ここまで規模が膨れ上がったそうだ。これは俺の推測であるが、恐らくそのスリルに慣れた者達がより刺激を求めて裏の非合法の殺戮ショーへと転がっていくのだろう。

「相棒よぉ、俺っち居なくて大丈夫か？」

「いや大丈夫だろ。ガトウさんいるし」

俺とボッシュは雲一つない晴天の中、現在大会受付を目指して歩いていた。ガトウさんは他にも仕事とかがあって忙しく、大会への登録くらいは俺がする事になったのだ。

大会には年齢制限は無く、誰でも参加可能だそうなので変装はしないつもりでいる。それと名前等は偽名にしておいてくれとガトウさんに頼まれたので、俺もそれに則って適当な偽名を名乗る事にした。

目指す目的地のコロシアムは、ティガさんの店を出た時点で嫌でも目に入った。この街の裏でどんなことが行われているかを知った今となっては、あのコロシアムも鴨を誘き寄せて捉える蜘蛛の巣の様に見えて仕方がないのだった。

コロシアムの入口付近に到着すると、「エントリー受付中」と書かれた幕の張られた長いテーブルが脇の方にある事に気が付いた。係の人らしき人間が一人退屈そうに座っている。

「あれだよな」

「だな」

俺はそこへと近付いて行った。

「あのー、大会のエントリーに来たんですけど……」

話しかけてみると、係の人は俺の方を見てあからさまに面倒そうな対応をしてくれた。

「君ぃ、ここは子供はお断りだよ？」

「え？　でも年齢制限なんてどこにも書いてませんでしたけど」

大会のチラシは何度も確認したので、そんなことは一言も書かれていなかったと記憶している。

「確かにそうだけどさ、悪い事は言わないから止めときなよ。君みたいな子供はもっと友達とかと遊んでいるべきだよ」

その言葉で、この人は普通に常識があると思った俺。しかしその気持ちはありがたいが、こちらにも事情があるので引き下がるわけにはいかない。

「お気遣いありがとうございます。でも全部わかった上での事ですので出場させて貰えませんか？　お願いします」

言って頭を下げる。面倒事を起こさないようにするには下手に出るのが一番なのだ。

「…ったくそう言われてもねぇ。ん～……あー、駄目。やっぱ駄目だ。帰んな」

お兄さんはちょっと考えてくれたらしいが、それでも意見は変わらなそうだ。

（頭かてーなちくしょう）

こうなると変装してこなかった事が悔やまれるが今そんな事を言

っても仕方がない。出させて・駄目だと何度か押し問答を繰り返し、長丁場になってきたので仕方なく一旦引き下がって変装してからこようかと思い始めた頃、後ろから粗野な声が飛んできた。

「出してやれ」

「え？」

「こ、これはバリオさんにサントさん」

その声の主を見て急にペコペコと腰が低くなる受付の人。振り返ってみるとそこに現れたのは馬面……と言うか馬そのままの亜人だった。

確か種族的にはホースマンと言ったと思うが、馬をソックリ直立歩行にしたような見た目で片方は黄緑の体色とタテガミ、もう片方は水色の体色とタテガミを持っている。

二人ともユニコーンのような一本角が額から生えていて、かなり引き締まった体つきをしていた。

「おうチビ。その年で大会に出ようとは見上げた心掛けじゃのぉ。わざわざ死にに来るとはなぁ！」

「俺達は誰も拒まんぞ。だが死んでも恨むなよ？」

馬鹿にしたような口調で、俺を品定めするように見てくる馬兄弟。黄緑の方が口が汚く、水色の方は言葉使いは普通だが冷酷な空気を纏っている。

（こいつらって……）

俺の記憶が確かなら、コイツらは敵キャラでいた連中なのだ。

「どなたかは存じませんが、ありがとうございます。「こんな程度の大会」ならまず死なないですから心配は御無用ですよ」

「「！」」

俺が笑顔でお礼を言うと、俺を見下していた二人の表情が硬いものに変わった。

「……いい度胸だ。せいぜい足掻いて見せろ」

「生意気なガキじゃのぉ。ムカつくんじゃ」

二人は捨て台詞を残してコロシアムの中へと消えていった。

（まさかあの連中が居るとは……）

先程の言葉から、恐らく今の二人は大会主催者側の人間なのだろう。どうにも不穏な気配がしてきてひょっとしたら本当に「完全なる世界」とも繋がりがあるやも、と期待が膨らむ。

「じゃあ、なんか偉い人？の許可も出た事だし登録お願いしますね」

「……あの人達に喧嘩売るなんて……俺はどうなっても知らないからな」

受付の人の怖がる視線と意見をスルーしつつ、大会出場の受付を

完了するのだった。

そしてその後はティガさんに料理を教えながら夜だけ店の厨房に立っていた。店には最初こそ誰も来なかったものの、俺の様に間違って入った客の絶賛の声が口コミで広まったりして少しずつ人が来るようになっていた。

ティガさんの覚えも悪くなく、そんな感じで割と問題なく1週間が過ぎ、あっという間に大会当日となった。

ガトウさんは色々と報告やら仕事やらが多いらしく、その間は姿を見せなかったが大会前日にはどこからともなく現れた。変装の為なのか大きなサングラスをかけ、髭を剃り、髪型が完全なオールバックになっていて雰囲気が全く違った為に、話しかけられなければわからなかったほどだった。

大会は1日目は予選で2日目に本戦が始まるとのことで、俺とガトウさんはコロシアムで参加確認を受けると、内部へと足を進める。

「なぁリュウ君、俺の名前なんだが……この「アナベル」というのには何か意味があるのかい？」

「気にしないで下さい。俺の趣味です」

ちなみに俺の名前は「ケリィ」で登録しておいた。是非ともガトウさんには今回の作戦成就のために「私は帰ってきたぁ！」と叫んで光の大砲をぶっ放して欲しい気持ちで一杯である。

「……あ、それとも「ヴィヌマシヴァ二世」とか「シュトルテハイ

ム・ラインバッハ三世」とかの方が良かったですか？」

「……あーいや、今のままでいいな」

そんな感じでちょっと引き攣った笑みのガトウさんと情報交換をしていると、控え室に向かう廊下の途中でムカツク声に呼び止められた。

「どんな相方を連れて来たかと思えば親子コンビか。ケッ、てめぇらは生き残れんのぉ」

「確か……ケリィだったか。そっちはアナベルだったな。まさか父親同伴で来るとはな」

「「……」」

俺とガトウさんが振り向いた先にはバリオとサントの馬兄弟が。

（こいつら組織の幹部だぞ。知りあいなのかい？）

（いえ全然全くこれっぽっちも知りません。ただの雑魚なんじゃないですか？）

（……言うねぇ）

俺の言葉にニヤリと笑うガトウさん。咥え煙草が煙いのは気にしてはいけない。

「何とか言ったらどうなんじゃぁ！　ああ！？」

廊下に響くようなでかい声で恫喝してくるサント。

「いえ別に。まぁ面白い事になると思うので楽しみにしててください」

「そういうことだな。それと、君達はもう少し挑発の仕方というモノを勉強した方がいい」

言い返されて怒り心頭な馬兄弟を背に、颯爽と控室へと向かう俺とガトウさん。

「さて、噂に聞く「紅き翼」の力、期待してもいいかな？」

「ま、見てのお楽しみってことで」

長身のダンディと青い髪の少年が闘技場へと足を進めていく。

『あーっとぉ！　最後に出てきたのはなんと子供とその親御さんらしきコンビ！これは一体どういうことだぁーー！？』

大仰なアナウンスが聞こえる。

舞台は意外と普通な試合会場のようで、観客席はあの地下闘技場と似た作りだが、中央には窪みではなく、かなり広いスペースが闘技舞台として取られていた。

その石造りの四角い舞台の上で、周りに居る同じブロックの屈強な荒くれどもが、俺とガトウさんを注視している。

「おやおや大注目だな」

セリフは困ったような感じで言うガトウさんだが、表情からは全然困った感は感じられない。

「やっぱり変装してくれば良かったか……」

俺もちょっとその視線に引きつつ、辺りを見渡すとあまり強そうな人がいなくてがっかりしていた。

（……あれ？　いやいや違う違う、がっかりなんてしてないしてない……）

何か気付いたら思考がバトルジャンキーの方面に傾いていた。今更遅いかもしれないが気をつける俺。

『さぁ！　以上でDブロックの予選参加チームが全て出揃いました！　これより本日4戦目の！　本戦出場枠1チームを決めるバトルロイヤルを開始いたします！』

アナウンスが入って会場の空気が一気に盛り上がると、周りのタッグ達も気合を入れだしたようだ。どうも気配からすると周りは真っ先に俺たちを潰す気らしい。

「ふむ、こんな所で躓くわけにはいかんな」

そう言って煙草を吸い、煙を吐き出しながらポケットへ手を入れて臨戦体制のガトウさん。

「そうっすね」

『ではDブロックバトルロイヤル……スタート！！』

合図と同時に一斉に声を上げてこちらへと向かってくる荒くれ達。

ガトウさんはあの居合拳で、俺は適当な当て身などでそれぞれのチームを片っ端から気絶させていった。

「おいおいおっさん、ピクニックならもっと良い場所を教えてやろうか？」

「ガキ連れて来るにはここはちょいと場違いだぜ？」

粗方片付け終えて、最後に残ったのは屈強な戦士と言った風貌の男二人。片方は剣を持ち、重そうな鎧に重厚な盾、もう片方は長い槍持ちで軽装鎧のコンビだ。

対する俺は普通の服装、ガトウさんは白いスーツと全くの普段着である。一応忠告してくれるだけ、まだこの二人には常識はあるといっても良いだろう。

「リュウ君、先ほどから見てると君は拳士よりなのかな？　魔法は使えるのかい？」

「あー、一応魔法はそこそこ使えます。ただ……」

「ん？」

「いや、ちょっと得意ではないと言うか……」

「ほう？」

別に魔法と相性が悪いとかそういうわけではない。実はエヴァンジェリンさんとディースさんに魔法を教えてもらったはいいのだが、詠唱の発音がよくわからなくて苦労したというだけの話だ。

何度か二人の詠唱を聞いたものの、何言ってるのかさっぱりさっぱりだった。魔法の射手くらいなら短いのでソラで言えるが、それ以上の呪文は単語とかどれがなにやらわからない上に唱える途中で舌を噛みまくったのだ。

（ていうかあんななげぇ呪文噛まずに唱えるのマジ無理だっつの！）

ラテン語だがギリシア語だかは知らないが、魂に染み付いた基本言語が日本語である俺は、長い呪文をスラスラ言えるような便利な舌をスペックとして持っているとしても、中々使いこなせないでいたのだ。

それでも別に唱えきれれば発動はするので何とかしようとした結果、情けない事に懐に日本語のルビを振った詠唱のカンペ……というかあんちょこが忍ばせてあった。

今度会ったらナギには馬鹿にしたことを誠心誠意謝罪せねばならないだろう。

「まぁいい。今までの連中よりは多少手強いかも知れないが、あの程度には負けないだろう？」

「当然ですよ」

こっちに目線だけを送り、ニヤリと笑う仕草が実に渋いガトウさん。

「人の忠告を無視するような親子にはお仕置きしないとな」

「死んでも恨むなよ、おっさんにガキィ！」

一応俺とガトウさんの会話が終わるまで待っててくれた二人の戦士は、ようやくそれぞれ剣と槍を構えだし、そしてそのままこちらへと突っ込んできた。

（なんでこの手の人たちは馬鹿正直に突っ込んでくるしかしないんだろ？）

トラップとかアリのルールなのだから、せめて目晦ましを用意すると言う知恵はないのだろうか、という疑問には誰も答えてはくれないだろう。

「リュウ君、剣のヤツいけるか？」

「うぃっす」

ガトウさんは槍に軽装鎧の方へと対峙し、俺は剣に重装鎧の方へと対峙する。剣の男は走ってきた勢いに乗せ、上段から斬りかかってきた。

「ガキは帰っておねんねしてなぁ！」

剣速はそれなりではあったが、俺には最初から最後まで丸見えだった。周りの雑魚達よりはまともな太刀筋だったので、一応勝ち残れただけの力量はあると見えた。

「っ！」

俺は半身ずらすだけという最小限の労力でそれを回避。

「！　ちっ！」

男は空振って床を打ちつけた剣を、そのまま横薙ぎに振ってくる。

「よっ」

俺はそれをしゃがんで避け、がら空きの胴体が目の前に来たところで、ドラゴンズ・ティアからフィランギを取り出した。

「な!?　どこから剣を!?」

驚く男を尻目に、剣の根元の片刃になっている部分で男の腕を下から打ち上げる！

「ぐぁっ!?」

男は腕のダメージにより剣を取り落とした。

「それじゃ悪いけどこれで！」

「くっ!?」

俺が改めて剣を構え直すと、男は盾を前面に出し、受ける気迫を見せた。盾は重厚そうで、男が信頼するだけの防御力はありそうだ。

（……！）

俺はそれに対して剣を突くように構えなおす。例えばテラ・ブレイクなら簡単に盾もろとも全てを両断できるのだが、アレはその威力により武器への負担が大きく掛かるため頻繁には使えない。

修行中にそれに変わる技を色々編み出しておいたので、その内の一つ、「3連撃」＋「大地斬」＋「空裂斬」＋「海破斬」を使う。

「俺式獣剣技！」

そして発動する高速の三連突き！

「参！」

大地斬の突きにより盾に大穴が開いて亀裂が走り、

「獣！」

突き出す空裂斬の衝撃波により盾と鎧が砕かれ、

「葬！」

海破斬の飛ぶ刺突で男を盛大に吹き飛ばす。

見事に全段決まり、男は声をあげる間もなく吹っ飛んで倒れ付し

た。

「うがぁっ！？」

「お？」

同じくらいのタイミングで、ガトウさんの方も居合拳が決まり、槍を砕いてふっ飛ばしたようだ。しかし二人の戦士はまだやる気なのか、こちらを睨みつけながらよろよろと立ち上がってきている。

「こ……この俺たちがこんなふざけた連中に……」

「負けて……たまるか……！」

恐らくもう自分達の負けは悟っていると思われるが、それでも立ち上がるのは意地によるものだろう。

「ふぅー……リュウ君、とどめは任せてもいいかい？」

煙草の煙を吐き、何やら俺の魔法の腕を見てみたそうな感じのガトウさん。

「ま、いいっすよ」

俺は気合を入れて呪文を唱える体勢を作る。詠唱はまぁアレだったが、エヴァンジェリンさんとディースさんの修行でオリジナルの始動キーも作ることになり、魔法の威力自体は上昇したのだ。

しかしイキナリあんちょこはカッコ悪いので、取り合えず見ないでも唱えられる魔法を使う。

「ソル・ファル・リ・エータ・リギエンダ、『火の精霊２１１柱・集い来りて敵を射て！』」

俺の周囲に大量の魔法の射手が浮かぶ！

「『魔法の射手・連弾・炎の２１１矢！』」

そして火の矢の嵐が二人に襲い掛かり――――問題なく炸裂した。

「「……」」

爆風の後には倒れ付した戦士×２の姿が。気絶はしているものの死んではいない。

『お子様選手の見事な魔法攻撃！！　これにより、Ｄブロック本戦進出チームはまさかの親子コンビ！　アナベル・ケリィチームに決定ーーー！！』

途端に観客席から歓声が沸き起こる。

「親子ねぇ、そんなに老けてるかな」

「まぁまぁ」

俺とガトウさんのコンビは瞬く間に注目株として噂になっていくのだった。

第九章　7、本戦

「リュウもおじさんも勝ったんだって!?　凄いじゃん!　あたしも見に行きたかったなー」

「なに、俺達は大したことはしてないよ。たまたま彼らが弱かったんだろう」

「そうっすよ。多分リンプーさんの腕だったら余裕で勝ち残れる程度の……」

≪相棒!　もう店開けるってよ!≫

「!　っとすみません。もうちょっと色々話たいんですけど。客が押し寄せて来ちゃってるみたいなんで俺行ってきますね」

現在大会予選を終えてティガさんの定食屋。リンプーさんに予選突破を報告し、俺が厨房に立つまで本来なら多少時間に余裕があるハズだったのだが、なにやら俺が働いていると言う事がどこからか噂になったため、開店前の店に大勢の客が押し寄せてきているらしかった。

とっとと開けないと周囲の人たちに迷惑が掛かったりとマズイことになりそうだったので、仕方なく開店を前倒しする事に。

≪相棒よくやるよなぁ。まぁ頑張れ≫

余談だが最近ボッシュは人前で話さない代わりに念話で突っ込みを入れるようになってきていた。

怒涛の勢いで流れ込んできた客達であっという間に超満員の店内では、今日明日の大会の話で持ちきりだ。

「なぁ！　明日はどこが優勝するかね？」

「やっぱバリオとサントだろ、あいつ等古参だからな。相当のヤリ手だぜ？」

「いやいやあの親子コンビだって、圧倒的だったじゃねぇか」

「あんだよおめーには聞いてねーよ！　すっこんでろ！」

「んだとぉ！？」

「すみませんねお客様、店内での喧嘩はご遠慮願えますか？」

熱くなりそうな客の所へ颯爽と登場、ウェイター姿のガトウさん。リンプーさんは上で控えてもらっている為に人手が足りないので、駄目元でヘルプを頼んだら結構乗り気でやってくれている。

「え！？　あ、あんたは！？」

「ほ、本物！？」

俺だけでなく親？の方も居るとは思ってなかったのか驚く客達が

面白い。なかなかウェイターっぷりも板についてノリノリのガトウさんである。しかしそれでもあちこちでヒートアップしている客は多かった。

「お前らぁ！　喧嘩なら外でやれ！」

「「「……」」」

そこへティガさんが厨房から一括すると途端に黙る客達。あちこちで手が出そうな雰囲気になったところだったが、流石にフーレン族の人が本気で怒るとその迫力は凄まじいらしい。

だがそれくらいで客が帰ったりすることはない。俺の料理の評価が高いのもあるが、他の荒れた店とは違ってそこそこ落ち着いて食事が出来るのは実はここくらいなのだ。

そんな感じでかつての閑古鳥はどこへやら、店は大いに繁盛しているのだった。

いつもより賑やかな店内で、次から次へと来る注文に対応するべく額に汗しながら厨房で腕を振っていると、なにやら乱暴に店のドアが開く音が聞こえてきた。

「おうおう、チビにおっさん、お前らちったぁやるようじゃのう」

「本戦出場か。どこで死ぬか見ものだな」

ドアを開けて入ってきたのはやっぱりな感じで馬兄弟だった。恫喝と言うか挑発にでも来たのだろう。意外と暇な上にしつこい連中

だなぁと内心で毒づく。

客達は突如として襲来したその馬兄弟を戦々恐々としながら見やり、冷や水を掛けられたように静まり返っている。

だがそんな程度の事で動じるガトウさんではなかった。

「これはこれは。食べに来たのかい？　だが生憎今は満席でね。良かったら外で待っててくれるかな？」

二人に近付き、挑発を全くスルーして接客仕事に徹するガトウさん。

（さすが……）

それを厨房からチラッと見て感心している俺である。ちなみに当たり前だがこの馬兄弟二人も大会に出場しており、特権なのか予選免除で本戦からのシードというのがこいつらだった。

「……ムカつくおっさんじゃのお……今この場で殺ったろうか」

「やめろ弟よ。だがムカつくのは同感だ。貴様等、俺達と当たる事になったら覚悟しておくんだな」

逸る弟を諫めるように兄の方が制止しているが、顔を見ると両者とも似たようなものだ。明らかに俺とガトウさんに対して殺気を当てつけていたが、ガトウさんはそしらぬ顔で相対し、俺は適当に右から左へと受け流して中華なべと格闘していた。

「フン……」

「ケッ……」

これ以上は居ても無駄だと思ったのか、馬兄弟は耳にも残らないような捨て台詞を吐くとデカイ態度のまま店から出て行った。

二人が出て行った後の店の中には、俺の振うなべの音だけが響いている。

「おう、そっちのおっさん、おめぇあいつらのこと知らねぇのか？」

「ええ、自分は新参者でしてね。よければ教えて頂けませんか？」

酔っ払った客のうちの一人がガトウさんに話しかけてきた。内情を知ってる俺からすると対応が白々しく感じるが、あんな感じで常日頃から情報収集を行っているのだろう。

「あいつらはな、この町を取り仕切ってる組織の幹部さ。下手に目を付けられると厄介なことになるぜ？」

「ほう、それはそれは。わざわざのご忠告痛み入ります」

（やっぱ有名なんだなぁあいつら……）

別にもう目を付けられてると思うが、そうなった所で俺とガトウさんにとってはむしろ好都合である。主に情報収集的な意味で。

「ま、勝つか負けるかはやってみないとわかりませんよ。ね」

そう言って厨房の俺の方にウィンクするガトウさん。中年のおじ

さんの割に様になっていてなかなかお茶目である。そしてそのガトウさんの言葉でまたやんややんやと盛り上がるお客さん達。

そんなこんなで夜も更け、俺とガトウさんは明日があるので一足先に床に着いたのだった。

『さぁ！　いよいよ始まりました漢羅狂烈大武会！　最初の試合はイキナリ皆さま大注目のコンビが登場です！』

アナウンスの声が控室にまで聞こえてくる。抽選の結果、俺とガトウさんは前半ブロックの一試合目となった。ちなみにシードの馬兄弟組は後半ブロックの最後の試合になっていた。俺達と当たるとしたら決勝だ。

『では！　驚異の親子コンビ！　アナベル・ケリィチームご入場ください！！』

「やれやれ、すっかり親子が定着してしまったな」

「まぁまぁ」

アナウンスの声に従い、割れんばかりの歓声を受けながら俺とガトウさんは舞台へと向かう。ほぼ同じ位のタイミングで向こうから出てきた最初の試合の相手は、盗賊っぽい格好の女性クローと小太りの魔法使いカウワーのコンビだ。

「は、こいつらが鳴り物入りのおっさんとガキのコンビかい」

「少しはやるようだがわしらに勝てるとは思わんことだぞ？」

普段着とスーツという俺とガトウさんの姿を見て思いっきり侮りまくりの相手さん。

「さてリュウ君、どちらが女性を相手するか決めないかい？」

そう言って煙草を左手で持ちつつ右手をグーにしてこちらへ指し出すガトウさん。予選の結果から、俺とガトウさんは戦いに際しての作戦として、お互い一対一の方がやりやすいことから相手を分断することが前提になっていた。

「えー、ガトウさん大人なんですから頑張って下さいよ……」

文句を言いつつ俺もそれに乗っかり、ジャンケンを始める俺達。舐められているとわかり、明らかな怒気が相手の女性と男性のコンビから放たれているのがわかる。

『それでは第一試合……はじめ！』

「『契約執行・クロー・１２０秒！』」

「すぐにケリをつけてやるよ！」

開始の合図とともに女性に魔力供給をする相手コンビ。どうやら前衛が撹乱し、その隙に後衛が火力の大きい魔法を決めるというスタイルらしい。普通の魔法使いと従者というのがとても新鮮な印象を受ける。

最も割とオールマイティに動ける俺やガトウさんみたいな方が魔法世界では異端と言えば異端なのだが。

「ではそういうことでな！」

「もう！　大人気ないですよ！」

普通にジャンケンに負けたので渋々女性の相手をする俺の図。ガトウさんは一足飛びに小太りの魔法使いへと向かっていった。

「ちっ、とっとと仕留めないと！」

「おっと！」

こちらが分断する作戦なのを知ったクローが、突っ込んできたままナイフで顔を狙って斬り付けてくるが、それをスウェーで危なげなくかわす。

「仕方ねーなもう」

俺は体勢を立て直すと懐からあんちょこを取りだし、呪文を唱える。

「！　させないよ！」

それを見たクローのナイフの攻撃が激しくなるが俺は割と余裕でかわし続ける。動きながらだと余計に舌を噛みそうになるが、この魔法なら一発で無力化できるので頑張って唱える。しばらくすると突然クローの動きが鈍った。

「しまったっ……」

体を覆っていた魔力のオーラが消失していることから契約執行が切れたらしい。クローの顔には焦りの色が浮かんでいる。俺のような子供などすぐに仕留められるハズという自信があったのだろう。

「『凍てつく氷柩』」

「！！」

その隙を見逃すほど甘くない俺の魔法により、クローは氷の柩へと閉じ込められた。一息つき、ガトウさんの方へと目をやると既に終わってて煙草に火を付けている所だった。

どうやら勝負は決まったようだ。

『あ、あっと言う間の余裕の勝利！　この凸凹コンビはとどまる所を知らないのかー！！』

勝ち名乗りを受けたのを確認してクローの氷を溶かす。一応女性なのでその辺は労うのだ。カウワーは倒れているがただ気絶しているだけと思われるので放置。

「流石に見事な手際だね」

「男相手ならもうちょい楽なんですけど……」

俺の抗議のセリフは華麗にスルーされたが、とりあえずあっさりと1回戦突破である。

後は問題なく試合が消化されていき、勝ち残ったチームには当然馬兄弟も含まれていた。あいつらは卑怯な手を使うのかと思いきや、割と真正面から力押しで戦っていたのが意外だった。２チームほど卑怯な手段を使うチームが居たが、結局そいつらは負けたという辺りが興味深い。

そんなこんなで準決勝の控室でガトウさんと出番を待っていると、不意に部屋にノックの音が響いた。

「ん？」

扉を開けてみると、そこには弱々しい感じの男が一人立っている。

「失礼します」

「！　ほう、あなたは……」

「確か次の対戦相手の…えーと、エミタイさん？」

「いかにも、そのエミタイです。実は折り入ってお話がありまして……」

男は極めて普通のおじさんと言った風貌で、とても申し訳なさそうな態度でそう言ってきた。

（あ、思い出した。確か「エミタイ」って……）

その紫っぽい頭髪とどことなくわざとらしい弱々しさに、俺はこんな人居たなぁと記憶を掘り起こしていた。

「……」

ガトウさんは煙草を吹かしたまま静かにエミタイを見据えていて、俺の対応に任せるようだ。俺はエミタイが何を言いに来たのか、記憶からおおよその見当が付いたので、揺さぶりを兼ねて先制攻撃してみた。

「へー、お話ですか。まさかそれって病弱な子供の為にお金が欲しい…なんて話じゃないですよね？」

「え！？　あ……いや…その……」

ドキリという心臓の音がこちらまで聞こえるくらいに吃驚した様子のエミタイは目が泳ぎ、脂汗を垂らして明らかに動揺が見て取れる。まさに言おうとした事を俺にズバリと言い当てられて狼狽しているようだ。

「それでまさかとは思いますが、わざと負けて欲しい……だなんて言い出しませんよね？」

さらに畳み掛けると、顔が段々と蒼白になっていってるのがわかる。

「あ……と、その……実は……」

（なんか楽しいなコレ……）

こう人が自分の掌の上で踊っているのを見るのは意地が悪いが快感ではある。だがまぁ少し可哀そうになってきたのでここらでイジメルのはやめる事にする。

「残念ですがまるっとお見通しですよ？　そんな演技なんかせずに正々堂々闘いましょうね！」

自分でもちょっと引くほどの笑顔でそう言ってみた。

「くっ……！」

すると一瞬悔しがったエミタイは逃げるように去って行った。俺の記憶ではこの「エミタイ」は事前にそんなことを言ってこちらのやる気を削ぐ演技をするズル賢い相手だったのだ。

「ふっ、やるなぁリュウ君」

「ガトウさん、知ってたんでしょ？　あの人の手口」

そう言うと、ガトウさんは煙草の灰を落としながらニヤリと笑った。

「まぁね。そのくらいの情報は嫌でも集めてしまってね」

「まぁ別にいいですけど……」

ガトウさんはガトウさんで中々食えないお人である。

そして準決勝が始まる。

相手はエミタイとパトリオとか言う戦士で、やはり前衛、後衛のノーマルなタイプだった。だが一回戦の相手とは違い、そもそもの地力が大分高いように感じられる。

「さて、またジャンケンといくかい？」

「む、いいですよ」

そして相手の目の前で大人と子供の壮絶なジャンケンバトルが繰り広げられ――また負けた。

（何故だ！？）

いつぞやの紅き翼の面子相手の真似をして、直前に手を見切っているはずなのに勝てない。実に不可解である。

「じゃあ俺は……後衛の方を担当しようかな」

「はぁ。了解です」

俺は前衛のパトリオとか言う戦士を担当する事になった。

『準決勝第一試合……はじめ！』

「ではな」

合図と同時にポケットに手を突っ込んだガトウさんが瞬動で前衛を飛び越していく。

「さて！」

俺は地を這うようにダッシュして正面からパトリオへと仕掛けた。

「小僧ごときが！」

パトリオは盾を持たない剣士タイプで、剣を中段に構えて俺を待ちかまえている。ヒュパッとドラゴンズ・ティアからフィランギを取りだし、勢いに乗せて斬りかかる！

「大地斬！」

「なんの！」

結構力を込めたつもりの振り下ろしの一撃が、普通に剣で受け止めきられてしまった。

「はぁっ！」

「…っとぉ！」

鍔迫り合いの状態からふっと力が抜けて蹴りが飛んでくるが、即座に後ろへ跳んでかわす。

（なるほど、さすがに勝ち残ってきただけは……）

「今度はこちらの番だぞ！」

「っ！」

剣を振りかぶりながら踏み込んでくるパトリオ。

「ハァッ！」

「よっ！」

斜めに振られた剣を死角へしゃがみ込むようにして避ける。

「じゃ次はこっちの……」

「甘い！」

斜めに剣が通り過ぎた直後、反撃に出ようとした所へすぐさま袈裟懸けに斬り上げる一撃が来た！しかし咄嗟にフィランギで受け、事なきを得る。

「早い…！」

「ほう、俺の「ダブルヒット」を受けきるとは……ここまで来れただけはあるようだな！」

（ダブルヒット！？）

ブレスのスキルの一つであり、２連続で攻撃するスキルだ。しかし偉そうに誇示する割に技の難易度は低いようで、一度見ただけで俺にもできることはわかる。

「……ふっ！」

力任せに相手の剣を弾くと、今度は俺が同じように斬り下ろし――

「ぬっ！？」

「うらぁっ！」

喰らった時と全く同じ軌道をとって斬り上げる。

「！？」

２発の剣撃を受けきったパトリオの顔が見る見るうちに怒りで染まった。

「き、貴様！？　俺の技を！」

「その程度で著作権を主張されてもね！」

俺の真似を見て冷静さを欠いた所へ、とどめとばかりに真横に薙ぐ。

が、

「ぬんっ！」

「！」

きっちり剣の腹で受けられ、こちらの剣はパトリオに届かない。

そのまま剣の軸を絶妙にずらされ、顔目掛けてパンチが来るが体ご

と捻ってかわす。

（……？）

俺の剣技は詠春さんほどではないにしろ、この程度の相手にそう易々と受け流される程やわではないと思っている。しかし初太刀と同じように斬りに行ってもすぐさま受けられ、しかも反撃されるという妙に高い受け流し技術に違和感を覚えた。

俺の少しばかり思考に走った表情を焦りの表情と勘違いしたのか、それを見たパトリオは笑みを零す。

「くくく……俺はダブルヒットだけではなく、「カウンター」の使い手よ！　その程度の攻撃など捌くのは容易いわ！」

俺の攻撃が捌き切れると判断したのか、ダブルヒットを真似された事の動揺も消え、パトリオは余裕の笑みでそんなことを口走った。

（カウンター！？　だからか！）

「カウンター」もスキルの一つで発動したターンは攻撃を受けると１００％反撃するというモノだ。

確かに剣撃や打撃には強い。「カウンター」を使う限りおいそれと攻撃を加えられない。……だが調子に乗って自ら種を明かしてしまったのはよくない。しかもその相手がよりによって「知っている」俺と言うのが運の尽きだ。

「……」

俺はフィランギをドラゴンズ・ティアへ収納した。

「！　何故剣をしまう。臆したか？」

武器を収納したのを降参の証しかと意外そうに問うパトリオ。

「んなわけないじゃないっすか。こうするためですよ！」

俺はバックステップして若干の距離を取ると呪文を唱え、周囲に大量の魔法の射手を展開させた。

「！？」

それを見てパトリオはあからさまに顔色を変える。慌てて助けを求めるようにエミタイの方を振り向くが、あっちはあっちでクライマックスのようだった。

（ていうか最初からこうすりゃ良かったな）

心の中で思わず自嘲する。ついつい相手に合わせて剣での打ち合いをしてしまったのが失敗だった。だがまぁダブルヒットとカウンターを覚えられたのだからいいやと納得する。

「魔法の射手・連弾・炎の１３１矢」

周囲の魔法の射手が雨のようにパトリオへと降り注ぐ。

「おおおお！？」

最初のいくつかは剣で薙ぎ払ったパトリオだったが、

「ぐあああっ！」

２／３くらいは問題なくヒットしてダメージを負う。剣を杖代わりにかろうじて立っているが、これでもまだ膝をつかないのは流石に準決勝の相手である。

「ま、まだ……この程度……！」

もちろん容赦するつもりはない。むしろここで手を抜いては失礼だと俺的には思う。

「んっ……」

力を込めた俺の両手の上に二つのバスケットボール大の球が浮きあがる。ディースさんに教わった技の一つ、「マジックボール」だ。

これは属性を持たない純粋な魔力による破壊球。そして俺的なアレンジにより両手の二つを一つにして野球ボール大の大きさへと凝縮する。その魔力の玉、文字通りの「魔球」を野球投手のように振りかぶり、パトリオの持つ剣目掛けて思いっきり投げる！

「そんじゃまぁ、受け取れぇ！　うりゃぁ！！」

それは物理法則を軽く無視し、うねるように不可思議な軌道を取って剣へと着弾――盛大に爆発した。

「……」

後には吹き飛び倒れて気を失っているパトリオが。

「やぁ、終わったかい？」

「！」

と、唐突に後ろから話し掛けられた。向こうを見るとエミタイが伸びているようで、やはりと言うかガトウさんの敵ではなかったようだ。

「お疲れ様です」

「しかし彼らももう少し分断された時の対処法というのを学んだ方がいいと俺は思うんだがね」

咥え煙草のガトウさんの言う通り、俺が魔法の射手を出した時のパトリオの慌てぶりからすると、多分魔法に関してはエミタイが防御したりするのが常だったんだろう。でなければ、あんなあっさり魔法を喰らう癖にここまで残れるはずがない。

『決勝進出はアナベル・ケリィコンビに決定――――』

とにかくこれで決勝へと駒を進める俺とガトウさんであった。

第九章　8、決勝

その後、準決勝第二試合ではバリオとサントが普通に勝ち残った。相手チームも頑張ってはいたが、単純に地力で差があったため順当勝ちという所だろう。あの兄弟は確かにそこそこ強いようだが、それでも今の俺やガトウさんには及ばないと思われる。

しかしあいつ等は俺とガトウさんを明らかに目の敵にしている。妙な隠しだまを用意してくることも有りうるので気を付けるに越したことはない。そんな風にあれこれ考えているとさして興味のなかった三位決定戦もいつの間にか終わり、決勝の舞台へと場面が移っていく。

『さぁ！　熱戦が繰り広げられてきた漢羅狂烈大武会もいよいよ大詰め！　並居る強敵を打ち倒してきた二つのチーム！　頂上対決の果てに栄光を掴み取るのは！　前評判通りのバリオ・サントチームか！　はたまた驚異の快進撃を続けてきたアナベル・ケリィチームなのか！　勝利の女神は一体どちらに微笑むのかーーー！』

（女神、ねぇ……）

実況から聞えてきた単語にあまりいい感情を抱かないままで、俺はガトウさんと舞台へと上がる。同じタイミングで反対側から馬兄弟が姿を現すと、会場の観客達の盛り上がりは最高潮に達していた。そして俺達は静かに舞台の上で対峙する。

「兄者、わしはムカつくおっさんの方をやる」

「いいだろう。俺はガキの方だな」

どうやら水色の兄バリオの相手を俺が、黄緑の弟サントの相手をガトウさんがする流れになりそうだ。今までの試合から、こいつらも一対一を得意としていることがわかっている。

「やれやれ、血気盛んなのは結構だが相手は選べよ？」

そう言って相変わらず煙草をふかしているガトウさんだが、相手を見る目が今までよりは鋭くなっているように思える。

「わしを舐めるとどうなるか思い知らせてやる！」

対するサントは殺気剥き出しで、ガトウさんの態度に勝手に挑発されているようだ。

「さて、じゃ俺も真面目に……」

俺も多少気を引き締めてバリオを見据える。

「俺達に生意気な態度を取った事を後悔させてやるぞ」

バリオも憤ってはいるらしいが、幾分サントより冷静に見える。

『では！　漢羅狂烈大武会、決勝戦……はじめ！』

「くたばれぇっ！！」

「死ね！　ガキ！」

「！」

合図と同時にサントがガトウさんへと突っ込んで行き、バリオは少し距離を取って周囲に魔法の射手が浮かばせた！

「魔法の射手・連弾・雷の７９矢！」

「！」

全弾が俺の方に集中して飛んで来ている。当然俺も周りに魔法の射手を展開。

「魔法の射手・連弾・氷の７９矢！」

同数の魔法の射手で飛んできた矢を容易く相殺する。ガトウさんの方を見ると、うまくサントの攻撃をかわしながらこちらから離れていっていた。お互い邪魔にならないようにと言う配慮だろう。

「ちっ！」

バリオの周囲に又もや魔法の射手が発生する。

「魔法の射手・収束・雷の８３矢！」

「！」

今度はバラけさせずに一つに纏めた雷の矢を放ってきた。束ねただけあって威力もスピードもあると見えたが、素直に一直線に飛んでくるソレをかわせない俺ではない。

「……っ！」

「なに！？」

俺はそれをギリギリに引き付けてかわすと、間髪居れずに瞬動でバリオへと近付く。
そして勢いを拳へと乗せたまま鳩尾に一撃！

「フンッ！」

しかしバリオはそれを掲げた膝でガード。俺は即座に体勢を低くし、軸足の方を狙って水面蹴りを放つ。

「接近戦で分がある等と思うな！」

バリオは俊敏な動作で俺の地を這う蹴りを跳ねてかわすとそのまま回転し、しゃがんでいる俺の頭目掛けてソバットを放ってきた。

「ちっ！　うらぁっ！」

俺はそれを片腕でガードし、浮いてるバリオへもう一度拳を放つ。

「ぎっ！」

バリオはそれを肘でガードして距離が離れた。思っていたよりかなり体術は熟練しているらしい。

「ガキが！」

と、息つく暇もなくバリオがダッシュで突っ込んで来た。流石に馬だけあって数メートルの距離が瞬時に潰され、俺の前に立ったと

思うと散弾のような蹴りを放ってきた。

「ハァァッ！」

「おっ！　っと！」

『おーっと、これは凄いバリオ選手の足が何本にも見えているー！！』

キレと鋭さからバリオの足技はかなり鍛え込まれている事がわかる。だが当たってはやれない。エヴァンジェリンさんの猛攻に比べたらまだまだ全然軽いモノだからだ。

「クッ…！」

「よっ！　ほっ！」

一発一発が急所を狙い、無防備な所に当たれば悶絶しそうな威力は伺えるが……当たらない。かわしている内に段々と癖が見えてきて隙も認識できる。

「ふっ！」

「――ッ！？」

その内の一発の隙を見てバリオの真横へと超短距離の瞬動で移動し、一発！

「うらぁっ！」

「がはぁっ！？」

鈍い音と共に脇腹に拳がめり込んだ。バリオの肺から空気が絞り出され、馬面が苦痛で歪む。

「……ちぃっ！」

ヤバイと判断したのかバリオはバックステップして距離を離した。

「ぐっ……ガキの割に……だがここまでだ！『戦いの旋律』！」

ダメージを堪えるように歯を食いしばっているバリオの周囲を魔力のオーラが包み込んだ。

（身体強化！？）

「戦いの旋律」は、「戦いの歌」よりも上位の身体強化魔法だ。

「……準備運動は終わり、ってやつ？」

「！　ほざけ！」

激昂し、瞬動レベルで跳びかかってくるバリオ。そしてそのまま先程よりも早い乱舞と言っていい程の蹴りの嵐が飛んできた。

今度は俺もただかわし続けるつもりはない。高速の蹴りの内、何発かに一発来る隙の大きいヤツを狙って脛や膝等へ寸分違わず打撃を合わせ、「ねらいうち」していた。

「ぐっ！　お、おのれ……っ！！」

足にダメージが溜まったバリオは即座に蹴りの乱舞を止めると、後ろへ跳ねて俺から距離を取った。既に息が切れているのがわかる。

「はぁ、はぁ……！」

するとバリオが何かを決意したように眼を鋭く光らせた。

「！」

「魔法の射手・雷の3矢！」

バリオは俺の方へ一発、サントとガトウさんの方へ2発の魔法の射手を放った。難なくそれを横に逸れて回避し、ガトウさんも当たる訳がなくサントに居合拳を当ててのけ反らせ、後ろに下がって矢を回避した。

「……今のは何のつもり？」

「く……くっくっく。なに、調整しただけだ」

「……？」

笑うバリオの態度に疑問を感じて少し周囲を伺うが、特に何かが周りに起きたということもなさそうだった。ガトウさんの方にも別段変化は見られない。

「じゃ、とっとと決め……」

そう言って瞬動の体制に入ろうとしたとき、バリオが地面を強く

踏み込んだ。

「……？」

その動作の意味を問おうと思った瞬間、何かが俺の足へと刺さった感触に襲われた。

（っ！　……何だ！？）

ちくりとした痛みの走った足を見ると、針のようなものが刺さっているのがわかる。

（これは……あの毒針！？）

『あーっと、アナベル選手突然ダウン！　一体どうしたのかーー！！』

「！　ガトウさん！」

聞こえてきた実況の声でガトウさんの方を見ると、顔は見えないが片膝を付き、荒い息を吐いているのがわかった。

「ハッハッハ！　油断大敵じゃのぉオッサン！！」

サントの勝ち誇ったような馬鹿笑いが耳に付く。その態度とバリオの所作から、先程の魔法の射手は俺とガトウさんを毒針の射程範囲に収めるためだったのだと思い当たる。

「フン、気付いたか？　反則などではないぞ？　この試合はトラップも許可されているのだからな！」

（そういうことか……！）

確かにルール上はアリだが、舞台そのものにそんな手の込んだ仕掛けを施すなど普通の出場者では無理である。まんまと隙を付かれたその仕掛けに、俺達は一転して危機に陥いった――――りはしなかった。

「……で？　この針がどうかしましたか？」

俺は足に刺さった毒針をあっさり引っこ抜くと、指で弾き飛ばした。

「!?　馬鹿な!?」

ようやく驚愕を見せたバリオ。まさか俺に「毒」が効かないなどとは思わなかったのだろう。そしてちょうど同じタイミングで膝を付いていたガトウさんから激しい光とオーラが立ち上った。

「！」

「な、なんじゃぁ!?」

そして何事もなかったように立ち上がり、スーツの汚れを払い、メガネを直すガトウさん。

「俺とした事が……こんなことでコレを使う事になるとはまだまだ修行が足りないなぁ」

そう言うガトウさんから感じるオーラは尋常でない程だった。本

気のエヴァンジェリンさんに匹敵するかも知れない程の凄まじい威圧感。

「ガトウさん……それって……」

「ん？　ああ、俺の切り札。究極技法と呼ばれる……まぁあれだ。身体強化さ」

面倒そうに端折るガトウさん。

（そうか。これが咸卦法……）

気と魔力の合一を持って身体能力を一気に飛躍させ、しかも暑さ寒さや毒なんかも無効にする究極技法である。

「リュウ君は……大丈夫なようだな」

「え？　ああ。俺にはこれがあるんで」

俺の持つ魔法発動体、「竜のなみだ」のおかげで毒などは俺には効かないのだ。そして折角の罠も俺とガトウさんに全く効果が無い事を知ると、大分焦った表情を浮かべる馬兄弟。

「さて、こうなったからにはもう遠慮はいらんな」

二人を見据えたガトウさんの咸卦の気が膨れ上がる。

「「！！」」

「今のような姑息な手に頼るとは哀れにも思えるが……行くぞ」

と、ガトウさんが圧倒的なスピードでサントへと向かう。俺には見えたが会場の客はおろか、馬兄弟にすら影しか見えていないだろう。

「あ、兄じ……」

サントがバリオへと声をあげた瞬間、声を発した本人は強烈な見えない拳により闘技場の端まで吹っ飛んでいった。

「！　おのれ！」

バリオも恐れ知らずにガトウさんへと向かい……

「がぁっ！？」

しかし足を踏み出した瞬間に超高速の居合拳で吹き飛ばされた。同じ場所へと吹き飛んだ二人を、今度はそれぞれに遠距離居合拳を二発ずつくれてやるガトウさん。傍目には何が起こって二人が弾けたのか全くわからないだろう。

「……」

まさにガトウ無双。俺は全く出番なしである。兄弟二人はそれでも立ちあがってきているが、今の連撃でかなりのダメージを負ったようだ。

「あ、兄者ぁ」

「……弟よ、情けない声を出すな。俺達が……今まで負けたことが

あったか？」

「！　ない！」

「そうだ。俺達は負けない。負けるわけにはいかない！　こんな連中ごときに！」

「そうじゃ！　わしら兄弟は！　負けんのじゃぁ！」

二人は気力を振り絞り、まだやる気を見せている。

（何かなぁ……）

これでは俺達が弱い者いじめしているような気になってしまう。

「リュウ君、同時にとどめと行くかい」

ガトウさんも似たような気になったのか、とっとと決めるつもりらしい。

「え、あ、はい。じゃあ俺があいつ等の動き止めますね」

俺はポケットからカードを一枚取り出して額に近づけた。

≪ザムディン、あいつらの動き止めて！≫

≪……ＺＺＺ≫

≪……起きろや！≫

≪……ん……ああ？≫

≪あいつらの動きを止めて！　いいね！？≫

≪……たりぃなぁ≫

やる気のない声をスルーし、俺はカードを頭上に掲げる。

「ザムディン！！」

するとカードから眩い光が放たれ、俺とガトウさんの頭上に黄色い東洋の龍が現れた。

「「な！？」」

「ほう……」

馬兄弟の驚愕の表情と感心したようなガトウさんが対照的だ。

≪……さっさとやるかぁ≫

若干眠そうだった龍の目が光を放つ。

「これはっ！？」

「な、なんじゃぁ！？」

その瞬間馬兄弟の周りの石が膨れ上がり、そこから幾重にも石のツタが伸びて、二人の周囲を囲んで折り重なっていく。そしてあっという間に石のツタが乱雑に絡み合ったドームのような半円状の石

の檻が出来あがった。

≪…じゃぁなぁ≫

そして速攻でカードに戻っていくザムディン。

（どんだけだよコイツ……）

「兄者、どうするんじゃ！？」

「硬すぎる！　これはただの石ではないぞ！」

馬兄弟が二人揃って散弾のような蹴りをそのドームに中から見舞うが壊れる気配がない。

「なるほど、「紅き翼」の龍を使役する術者がいるという噂はリュウ君の事だったのか」

「みたいですよ」

「ふむ、ではとどめといこうか！」

「ういっす！」

ガトウさんは両手をポケットに入れ、ふわりと上空へ浮かんだ。

俺も二人へと手を向け、決勝前に思いついた一人スキルコンボを発動する。

ディースさんから教わった技（マジックボールを含めて全部で６つ）の一つ、精神力を剣に変えて敵へと放つ「マインドソード」と、

「3連撃」、さらに覚えたての「ダブルヒット」の組み合わせだ。

「おおお！」

気合いを込め、檻の周囲に計5本のマインドソードを次々と作り上げる。

「さて、耐えられるかい？」

そして上空より満を持して放たれるのは、ガトウさんの必殺奥義。

「ふっ！」

「俺式獣剣舞！　伍獣葬！」

「「――――ッッ！！」」

掛け声とともに一斉に檻へと襲い掛かる5本のマインドソードと、ガトウさんが放つ空を貫く光の大砲――豪殺居合拳とが同時に炸裂し、激しい轟音と共に舞台ごと全てを叩き潰した。

『も、もの凄い攻撃が炸裂ー！！　バリオ選手とサント選手は果たして――――――！！！』

「ふぅ。やれやれ、俺も少し大人気なかったかな？」

「まぁいいんじゃないですか？」

砂埃が舞い上がる中、俺とガトウさんは勝利を確信して無事な部分の闘技場で並び立つ。次第に砂埃が晴れていくと、炸裂した箇所

にはバリオとサントが倒れ伏していた。

『あーっと！！　バリオ選手とサント選手共に戦闘不能！　よって優勝はまさかの親子チーム！　アナベル・ケリィコンビだーーーーー！！！』

勝ち名乗りを受けると、一際凄まじい大歓声が巻き起こる。

俺は一息ついて深く深呼吸し、ガトウさんは一仕事終えた感じでシュボッと煙草に火を付けるのだった。

第九章　9、決着

優勝式やインタビューはのらりくらりと適当にかわし（俺はそう言った注目を浴び慣れていないので、ほとんどの対応をガトウさんに任せていたが）、今現在俺はティガさんの店へと帰って来ている。

今回の大会では死者は出なかった。

運が良かったなーと思ったのだが、実は裏でガトウさんが大会の医療チームに、息の掛かった優秀な治癒術師を送り込んでいたということを終わった後に教えてもらった。

ガトウさんは、「大会出場者は次の日には皆ピンピンしているだろうよ」と笑っていた。そして、これで目的の元締めと明日会う事が出来る。あの殺戮ショーに関して、ガトウさんは問い詰める気満々のようだった。

本当のクライマックスはこれからなのである。

そのガトウさんは、今は何か仕事があると言ってどこかへと行っている。大会終了直後だというのに仕事熱心な人だと感心しきりだ。

「ホントに優勝しちゃったんだ。リュウもおじさんも凄い強いんだね！」

リンプーさんがベッドから起き上がって嬉しそうに話しかけてきている。

「いや俺なんてまだまだですよ。それより体の方はどうですか？」

「ん、もう全然大丈夫。この一週間ずっと休んでたし、リュウの作ってくれた料理一杯食べたしね。大分調子良いよ」

「それは良かった」

ティガさんも料理の腕は上達しているが、これだけは譲れないと言い張って昨日と今日の分もあらかじめ作り置きしておいたのだ。

「何かリュウにはお礼しないといけないね。……ん～、何かして欲しい事とかある？」

「お礼……」

思わずヨコシマな方向に思考が傾くが、そんなこと言ってブン殴られでもしたら元も子もないので、素直に頼みたい事を言うヘタレな俺、参上。

「そうですね……もし良かったら狩りの仕方を教えて込んでほしい奴らがいるんですが」

「狩り？」

「はい。山に住み出したんですが肉が食べたいのにどうすればいいかわからないとうるさくて……」

「ふーん、わかった。あたし狩り大得意だから、そういうことならあたしに任せてよ！」

ドンっと自分の胸を叩くリンプーさん。

「ありがとうございます。多分手を焼くと思いますがよろしくお願いします」

快く引き受けてくれて、これで一応妖精達の狩りの講師ゲットである。

一夜明け、引き続きボッシュには店での留守番を頼むと、俺とガトウさんは賞金受け取りという名目の元、あのリンプーさんが殺されそうになったビルへと向かっていた。

どうやらこのビルが組織とやらのアジトだったらしい。前の地下闘技場への入り口とは違い、堂々とエントランスから入ると、黒服の連中にお出迎えされた。そしてその内の一人に案内され、エレベーターに乗って最上階へと赴く。

「リュウ君、気を引き締めろよ」

「うぃす」

派手な絨毯の敷かれた廊下を進み、突き当たりの豪著なドアを開けると、中はまるで大統領の執務室かと思えるほどに豪華な作りだった。

見事な事務机の奥に椅子に腰掛けた状態の男、さらに見覚えのあるホースマンがその傍らに立っている。

座っている男は長髪でにやけた表情を浮かべる紳士のような中年、

そしてホースマンは言わずもがな、バリオとサントだった。昨日の怪我はどこにも見当たらない。

「ようこそ。優勝者のお二方。まさかこの彼らを圧倒できるほどの力の持ち主が現れるとは思いもしませんでしたよ」

胡散臭いニヤニヤとした笑みを向けてくる偉そうな男。何か生理的に受け付けない。

「賞金の５０万Ｄｑはこちらに」

そう言って男が指を鳴らすと、バリオが脇から重そうな袋を取り出し、中を開く。そこには確かに大量のお金が詰まっていた。

「実に素晴らしい腕前でした。どうですか？　これから私達と共にこの町で生きていくつもりはありませんかねぇ？」

元締めと思われる男は終始ニヤついた表情のままで、俺とガトウさんにそのような話を持ちかけてきた。だがもちろんそんな与太話を聞くつもりは無い。ガトウさんはそれまで黙って聞いていたが、ここで初めて口を開いた。

「組織の元締め、アーガス。地下闘技場での殺戮ショーを執り行っているのはお前だな？」

その途端、男の目が一瞬見開かれたと思うと、表情のニヤつきが一気に増した。

「何だ、知っていらしたのですか。それなら話は早い」

「何故そんなことをする？」

ガトウさんの問いを受け、机に両肘を突いて手を組ませる元締め。

「くくっ、人と言うのは愚かですよねぇ。表の顔とは裏腹に殺戮の現場を見たいと言う浅ましい欲求を内に秘めている……金持ちの人間は特に」

「「……」」

「私どもはね、それを娯楽として提供しているだけなのですよ。幸いこの街には叶わぬ夢を求めて多くの人間が詰め掛けてきますからねぇ。死という舞台を派手に演出することで、両者の欲求を叶えてあげているのですよ」

「……なるほどな」

俺でもわかるほど、元締めの目は濁っている。ニヤけた表情との相乗効果で気持ち悪いことこの上ない。

「どうですお二方、殺しのエキスパートとして私達にその力を貸して頂けませんか？　そろそろモンスターを使うのもマンネリになってきていた所だったのですよ」

「……反吐が出る」

「「「！」」」

ガトウさんが一言で斬って捨てると、ニヤついた顔が今度は俺の方へと向けられた。

「そちらのボクは？」

「お断りです」

俺は即答した。俺の良識から言って考える価値も無い誘いである。だが俺とガトウさんの答えを聞いた元締めは全く落ち込むような素振りを見せず、傍らのバリオとサントに至っては、その俺達の答えを聞いて愉快そうな笑みまで浮かべていた。

「そうですか。それは実に残念。では……知ってしまったあなた達には死んで頂かないといけませんねぇ」

静かに椅子から立ち上がり、妙な雰囲気を醸し出す元締め。

「くく……よくぞ断ってくれたよ」

「これで心おきなくてめぇらをぶち殺せるのぉ！」

傍らの馬兄弟からも剣呑な空気と共に殺気が溢れだす。

「全く、ムシケラのくだらない人生を少しでもドラマチックにしてやろうという私達の気持ちがわからないとは……なぁ！」

そう言うとやせた中年の男だった元締めの体が脈動し、膨らみ、毛が生え、変化していく。

「ゴァァァァ……！！」

「「！！」」

元締めはどこから取り出したのか大きなこん棒を二本持ち、紫の鎧を着た猪のような化物と化した。そして傍らにいたバリオとサントは互いに向かい合い、妙な気配を漂わせている。

「弟よ、我等が真の力、見せる時が来たようだ」

「はっはぁ、お前等！　みんな終わりじゃあーっ！」

二人が向かい合ったままさらに近付くと、二人を中心に白い魔方陣が浮かび上がり、辺りを閃光が包み込む。

「「ぬおおおおぉぉぉぉぉ！！」」

「！　これは……！！」

（まさか……）

俺は記憶を掘り起こしつつ、眩しさに目を細めていた。そして一気に閃光が晴れると……

『ふうぅぅぅん！　狂！烈！合！体！スタリオォンンッ！！』

「「！？」」

そこには馬面は変わっていないがたてがみが白く硬質化し、上半身は白を基調として赤い輪の模様、下半身は赤を基調に白い線の模様、肩に青い宝石のようなものを付けた光の戦士がいた。

『わし等の！　この姿を見て！　生きていたヤツぁ！　おらんんん

！！』

「ククククク……私たちの戦いをショーにできないのは残念だが……せいぜい派手に殺してさしあげよう！」

元締めと馬兄弟――スタリオンは両者とも３ｍを優に超える大きさで、俺とガトウさんを見据える。

「やはりこうなるかっ！」

問答無用でガトウさんが咸卦法を発動。俺も戦闘態勢へと移行する。

「リュウ君、俺は元締めの方を」

「わかりました。俺はあの馬野郎を！」

「できれば生かして、な」

「了解！」

『二人まとめて死ねぇ！』

スタリオンが右腕を横に、左腕を縦にし、手首の辺りで交差させる。

『ウペシウム！！』

すると扇状に広がる虹色の光線がその腕から放たれた！

（前から思ってたけどパクリすぎだ！）

「ふっ！」

「大防御！」

ガトウさんはポケットに手を突っ込んだまま跳んで元締めの方へ、俺は相手の気を引く為にわざと避けず、その虹色の光線を両腕をクロスして受けていた。

『フハハハハハ！　いつまで耐えられるかな！！』

「……！」

見た目に反してセリフは悪役そのものなスタリオン。俺の方は光線の直撃を受けているものの、大防御のおかげで別段ダメージはない。

「グガァッ！！」

「っ！」

派手な音が響き、視線を発生源のガトウさんの方に向けると、撃ち降ろしの豪殺居合拳により床に穴が空き、下の階へと元締めもろとも落ちていった。

落ちる直前、こちらをちらりと見たその目からは任せたぞ！という意志が読み取れた。

（了解！）

大防御中は動けないが、ダメージ覚悟でそれを解く。

「……ぐっ！！」

『フハハハハ！　そのまま死ね！』

「っ、んなわけねぇだろっ！！」

（シャドウウォークッ！）

次の瞬間、俺はスタリオンの背後に居た。

『！？　消え……！？』

「ずあぁっ！！」

瞬間的に俺が消えて驚愕したスタリオンの背中に、龍の力を込めた渾身のパンチを見舞う！

『うがぁっ！？』

豪華な装飾の施された壁をぶち抜き、外へと盛大に吹っ飛ぶスタリオン。

「ふう」

光線で傷ついた個所を回復魔法で癒しながら壊れた壁に近付いていく。

『くっ……おのれぇ！』

「お？　飛べるんだ」

外では背中を抑えているスタリオンが浮きながらこちらを睨んでいた。

『貴様……絶対に殺してやる！！　戦いの旋律！』

「やってみろよ！　『戦いの歌（バトルソング）！』」

俺も壊れた個所から浮遊魔法を使って外へと踊り出る。

『シェアァッ！』

スタリオンはこちらへと突っ込んできて、嵐のようなチョップ攻撃を繰り出してきた。

「学習してねぇな！」

バリオ単体の時より動きが早く、威力も十分。しかし身体強化を掛けた俺はそれを捌き、いなし、避ける。

「うらぁっ！」

そして隙を見て掌にマジックボールを発生させて掌低とし、スタリオンの腹に当ててゼロ距離で炸裂させる。

「ゴファッ！？」

こうすることにより、体の内部への回避不能な直接的ダメージを与えられる。炸裂した威力で距離が離れたが、さらに追撃。

「魔法の射手・連弾・炎の４０１矢！」

『ぬぅっ！？』

大量の炎の矢が腹を抑えているスタリオンへと飛んでいく！

『うおおお！？』

一瞬ガードしてる風に見えたが次々に炸裂する炎の矢の爆煙で姿が見えなくなった。だがさらに駄目押しでもう一発。俺は懐からあんちょこを取りだす。

「ソル・ファル・リ・エータ・リギエンダ！　『ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の微よ、我が手に宿りて敵を喰らえ！』【紅き焔】！」

俺の手から放たれる炎の魔法が爆煙をさらに激しい物にする。その煙を睨みつつ気配を探っていると……中から虹色の光弾が高速でこちらへ迫ってきた！

「おわっ！？」

先程の広域の光線と違いすぎる速度の変化に驚いたが、何とかかわす事に成功。光弾はビルを掠めて飛んでいき、後方で大きく爆ぜた。

（あぶなっ……）

煙が晴れていくと手をこちらへと向けるスタリオンがそこにいた。

『ちっ、外したか……』

ギリッと歯を食いしばる音がこちらまで聞えてきそうなほどの怒りの表情が伺える。

そうしていると後ろのビルから凄まじい爆音と破壊音が聞えてきた。恐らくガトウさんが元締めを追い詰めてるのだろう。こちらもとっとと決めることにする。

「早いとこ終わりにするか！」

俺が浮遊魔法と虚空瞬動を重ねて突っ込もうとすると……スタリオンは何故かニヤリと笑った。

『おっと！　それ以上近付くんじゃねぇ！　この街の人間がどうなってもいいのか！？』

「！？」

その言葉に俺はピタリと動きを止めた。

見ればスタリオンは掌を下へ向け、虹色の光弾を溜めている。おそらくさっき俺に放った高速の光弾と思われる物だろう。眼下では爆音に気付いた街人がざわざわと、俺とスタリオンの方を見上げている光景が目に入った。

「……」

『くっくっく、少しでも妙なマネをしたらこれを下へ放つぞ？　まずはその身体強化魔法を解除しろ！』

（マジかよ……）

まさか自分がこんな風に脅される立場になるとは本当に人生とはわからないものだ、等とどうでもいい考えが浮かんで現実逃避したくなるが、俺は選ばなければならないらしい。

実際こういう場合、忠告を無視して全力で突っ込んだり、「放ったらお前を殺す」等と逆に脅したりすればなんとかなるんじゃね？とは思う。しかしあの光弾の速度と威力からして、もし本当に下に集まっている住民達に放たれでもしたら大惨事だ。

正直、俺にはそんな選択を躊躇なく選べるほどの胆力はなく、普通に考えて街の人を見殺しになんて出来ない。

こういうピンチには都合の良い謎の味方なんかが助けてくれるのがお約束だろ、と思うが唐突に現れて風車とか薔薇の花なんかを投げつける酔狂なヒーローなど居るわけがない。

（何か打開策……あるか？）

考えがまとまらないまま、取り合えず纏っていた戦いの歌を消してその場に直立する。

『フハハハハ！　いい判断だ。そのまま動くなよ？』

スタリオンは俺の姿を見て馬鹿笑いしつつ、片手を下へと向けた

ままもう片方の手を俺の方へとむける。

『まずは先程のおかえしだ。魔法の射手・連弾・雷の１０１矢！』

発生した魔法の射手が俺の方へと殺到し、次々に命中していく。

「うっ！　…くっ…」

流石に全くの防御なしで全弾ヒットは少しは効く。かと言って何か事態を好転できる要素があるかというと何も浮かばない。考えたくはないがこのままではこのウマトラマンにやられることになる。

（冗談じゃねぇ……）

『次はこれだ！』

スタリオンの俺に向けた手から高速の光弾が俺の腹に直撃して爆ぜる。

「がっ……！？」

血を吐く程ではなかったがダメージには変わりない。腕や足などへ次々にヒットしていき、それぞれに痛みが蓄積していく。

「ぐっ……」

『しぶといな。まぁいい、そろそろとどめだ。お前の次はあのムカツクヤローを血祭りにしてやる！』

スタリオンの片手に魔力が集中して虹色に光り、回転ノコギリの

ような輪になった。

（そこまでパクるかよ……）

相変わらずもう片方の手を下に向けてる辺りは油断がない。

『じゃあな！　ガキィ！！』

「くっ……！？」

そして、俺の首目掛けて光輪が放たれ――――なかった。

『ぐがぁぁぁぁぁぁっ！？』

「！？」

スタリオンが光輪を振りかぶった瞬間、風切り音と共にそのがら空きの背中へと、斜め下から桜色のビームが直撃したのだ。全くの不意打ちにより下へ向けていた手のエネルギーも消え、ダメージにもがくスタリオン。

「！？　誰だ……！？」

急ぎビームの発射元の方向に目をやる。しかしその場所には誰も居ない。それらしき人の姿などどこにも見当たらず……

……いや、居た。

そこには確かに居た。それは人の形をしていない小さな姿の――――

≪よう！　相棒！≫

≪！！　ボッシュ！？≫

≪おうよ！　でっけぇ音が聞こえて外へ出たら苦戦してる相棒が見えたんでよ、思わずやっちまったが……余計なお世話だったか？≫

≪……へっ、何言ってんだよ！≫

まさかの救援はヒーローでも、ましてや人間ですらなく、しかし頼れる相棒のフェレット！あまりのいいタイミングっぷりに思わずニヤリと口元が釣り上がる。

「ナイスだぁ！　ボッシュ！！」

俺は見事に危機を救ってくれた相棒に全力で感謝の言葉を捧げつつ、虚空瞬動と浮遊魔法の最大出力でスタリオンに頭からの体当たりを敢行した。

『ガァッ！？　ガキィッ！』

「おりゃあああああっ！！」

そしてそのまま一気に加速し、街から離れていく。

『くっ！？　は、離せぇ！！』

暴れるスタリオン。だが体勢のせいかボッシュのおかげか、大したダメージは受けない。

（……よし！）

全力でおよそ数ｋｍほど飛び、辺りに人の気配のない荒野まで来ると右腕に力を集中する。

「うらぁっ！」

『うぎっ！？』

顎に一撃カチあげるように拳をくれてやり、距離を離した。

「ふう、これでもう脅しはできねーよ？」

『ぐっ……！？』

さっきまで余裕だった馬面が再び怒りに歪む。

『さっきのアレは……なんだ！？』

忌々しげに聞いてくるスタリオン。恐らくボッシュの魔法のことだろう。

「アレはホントに頼れる俺の相棒さ。残念でした」

俺は怒りを込めて馬鹿にした風に挑発した。

『おのれぇぇぇぇ！！　タダでは済まさんんっ！』

逆上し、怒り心頭なスタリオンを尻目に俺は自分の中へと意識を

向ける。

「そいつは！　こっちのセリフだろうが！」

『！？』

足元から火柱のようなオーラが吹き上げる。

「ハァァァァッ！！」

オーラが眩い光を放ち弾け飛ぶと、俺はドラゴナイズドフォームへと姿を変えた。

『ガ、ガキィ！？　貴様なんだその姿！？』

「さぁね」

修行によりさらに伸びた俺の力はドラゴナイズドフォームにも影響を与え、角のようなものや肩から胸への入墨のような模様、顔の入墨のような模様もデフォルトになっていた。

『あ…う……』

俺の持つ龍の力を感じたのか、たじろぎだすスタリオン。

『ま……待てよ。……へへっ、そ、そうだ。お前俺と組まないか？俺とお前ならアーガスの野郎なんか蹴散らして組織を……』

「……は？」

頭のネジが緩んだのか、スタリオンが突然妙な事を口走りだした。
そんな問いには当然答えはＮＯだ。

『ま、まぁそう言うな……よっ！！』

「！」

スタリオンは不意打ち気味にあの虹色の光弾を俺の方へと放ってきた。光弾は俺に当たり爆発する。

『ハッ！　馬鹿め！　直撃だ！　誰が貴様なんぞに……』

「……」

『ハ……！？』

当たり前だが俺は無傷だった。最もかわせなかったわけではなくわざと動かなかったのだが。それが功を奏したのか、今の一撃が全く効果を及ぼさない事でようやく理解できたのだろう。

スタリオンは震え出していた。

『ば……化け物め……』

「お前もな」

刹那、俺はバーニアによって視認出来ない速度で突っ込み、全く反応できていないその腹に肘をめり込ませる。

『アガァッ！！？』

貫通はしなかったものの、くの字どころか不等号のように身体を折り曲げるスタリオン。そして両手を組み、ハンマーパンチをその頭上へと振り下ろす！

「っ！！」

『！！？』

ゴッ！という鈍い音と共に脳天が陥没するほどの威力のそれを食らったスタリオンは、高速で地面へと突っ込み、大地に大穴を開けた。

「……」

俺はゆっくりと地面に着地し、大穴へと近付いていく。

『ぐっ……かはっ……ち、ちくしょう……』

わずか2撃でボロボロになったスタリオンが大穴から這々の体で這い上がってきた。

「降参でもする？　お前に勝ち目はないよ？」

『……』

するとスタリオンは観念したように力無く、構えていた両手を降ろした。

（素直だな……？）

『……俺が貴様なんぞに……貴様なんぞに……！』

「！」

スタリオンから発せられる空気がどこか変っていく。俺からのプレッシャーを矜持で塗り潰していくかのようにブツブツと呟いている。

『俺は！　貴様のようなガキに！　負けるわけがないのだ！！』

そしてスタリオンの目が光った。

『ガァァァァァッ！』

「！？」

スタリオンの全身が光ったと思うと、それがグングン巨大化していく。

「おいおい……」

『フ、フハハハハッ！　場所を移して有利になったのはお前だけだと思うなよ！　これが俺の究極の姿！　虫けらめ！　踏み潰してくれる！』

それは全長５０ｍはありそうな、まさに光の巨人だった。ダメージも幾分回復したらしく、それに伴って若干余裕を持ち直したらしい。

『死ねぇ！』

巨大な足で俺を踏み潰そうとしてくる。巨体の割に速度は鈍っていなかったが、俺はそれを難なく避けていく。

『くそっ！　死ね！　死ねよ！』

中々踏み潰せないのに焦ったのか、両腕を交差させるスタリオン。

『ウペシウム！』

「！」

大きくなった為にかなりの広範囲に渡る虹色の光線により、俺の周囲一帯を爆風が包み込んだ。

『はぁ、はぁ……ど、どうだ！』

「……」

爆風の上から声が響いてくる。単純な大きさとして比較するなら俺は確かに小さい。だがスタリオンはそれでも、俺に怯えているようだった。

恐らく本能が俺の力を感じているのだろうが、矜持でそれを押さえ込んでいると見えた。ならばより圧倒的な力を持って、その矜持ごと捻じ伏せる事に、俺は決めた。

そして俺は爆風の中で、自分の奥深くへと意識を巡らせる。

以前ユンナの知識を継いだボッシュに聞いたところ、ドラゴンズ・ティアは竜変身の際にその体と一体化する機能を持っているそうで、一々外さなくても良いのだそうだ。おかげでどこへ放っても壊してしまいそうな竜変身も行えるようになった。

そうして自分の奥深くに眠る竜変身の為の因子、名称を竜因子（ジーン）と言うそれを選択し、組み合わせていく。

【ワンダー】巨大化

【シャープ】特徴強化

さらに

【ガイア】地巨竜

直接形態を変化させる力の一つを加え、体内に眠る大きな力が目を覚ます！

「でぇぇぇやあぁぁぁぁぁ！！」

舞い上がる砂埃の中、リュウへと紫の雷が落ちると、突如として辺りを巨大な黒いドームが覆った。

『な、なんだこれは……！？』

スタリオンは驚愕した。そのドームはあまりにも巨大過ぎたのだ。

全長５０メートルはあるはずの今のスタリオンが小さく見えるほどの巨大なドーム。

そのドームの上方から徐々にヒビが入り、ガラスのような音を立て、砕け散る。

ブ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　ッ　！　！

『うあぁっ！？』

風に舞う紙切れのように吹き飛ばされるスタリオン。それは空を、大地を揺らし、離れているはずのジンメルの街、それ以外の町へも轟くほどの咆哮による衝撃だった。体勢を立て直し、地面へと着地したスタリオンはそれを見上げる。

『な、なんだ！　なんなんだ！？』

――――そこにあったのは「山」だった。

あのドームから現れたその「山」を目前に、スタリオンは震えが止まらない。先程のリュウへのそれとは桁が違う。歯はガチガチと鳴り、膝はガクガクと揺れていた。

≪……まだやる？≫

『！！？』

「山」から声が響いてくる。途端、目の前の山の表皮が捲れ上がり、鍾乳石を逆さまにしたような、尖った巨大な白い何かが現れた。

『ま……』

まさか、とは思った。信じたくなかった。しかし上を見上げるとスタリオンは信じざるを得なかった。

その白い何かは「牙」だった。

そしてそれがある場所は、自分の身長を超えるサイズの口。それが「山」の表面に徐々に開いて……否、山ではない。これは生物――――アイツだ。

それは「ベヒモスドラゴン」の上位種、「地巨竜（バンダスナッチ）」。数ある竜変身のなかでも群を抜く超巨大な体躯を誇るドラゴン。亀のような見た目と背中の四隅から生える４本の角を特徴とし、そして地を操る力を持っていた。

『あ……う……』

先程唐突に頭に響いた声の口調は確かにさっきまでのヤツのもの。しかし圧倒的過ぎる巨体とそこから感じ取れる力により、酷く恐ろしい地獄からの呼び声のようにスタリオンには感じられた。

スタリオンは考える。

これは無理だ。絶対に勝てない。ならばどうするか。どうすれば自分は生き残る事ができるのか。今にも逃げ出してしまいそうな足

を何とか抑え、混乱する頭で必死に考えていた。

『わ、わかった。お…俺が悪かった。だ、だから……』

≪……≫

リュウは迷っていた。今までのスタリオンの態度から、その言葉が本心であるとはとても思えない。しかし、このまま倒すのも微かに気が引けた。

≪一つ聞く……≫

『……!?』

リュウは思いつく。

≪お前は「完全なる世界」を知ってるか?≫

『!?　な、なんだそれは!?　し、知らんぞ!?』

スタリオンは狼狽した。それは全く聞いたことの無い単語だったからだ。

≪……嘘じゃないだろうな≫

『!?　ほ、本当にし、知ら…な……』

リュウの目が、山の二ヶ所から真っ赤なドラゴンの眼が開かれる。

『ヒッ……!!』

その凶悪な眼に射竦められたスタリオンの恐怖は、限界を越えた。

『……あ……うあぁぁぁぁぁぁ！！！』

一度溢れてしまった恐怖は濁流のように全身を支配し、スタリオンはリュウへガムシャラに攻撃を繰り出した。虹色の光線を、光弾を、拳を、蹴りを、手刀を。しかし攻撃する毎にますます恐怖は積り続ける。

『うあぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

≪……≫

それは例えるならリュウの体の表面を撫でるそよ風ほどのものでしかなかった。圧倒的という言葉ですら生ぬるい生物としての差に、スタリオンは錯乱していた。

リュウは直前のやりとりの知らないと言った言葉は嘘偽りではないと悟っていた。そして最早話をする余裕も無いということを理解し、終わらせることを決意する。

≪地巨竜（バンダスナッチ）のドラゴンブレス……≫

厳密に言えば、地巨竜のそれはブレスではない。しかしその巨体を活かした技は、他のドラゴンのブレスに勝るとも劣らない威力を秘めている。

≪……メテオ＝ダイブ！≫

――――瞬間、山が動いた。

リュウは体から溢れ出る地の力により、その自重をものともせずにはるか上空へと飛び上がったのだ。そのまま雲の高さへと到達した巨体は龍の力のオーラを纏い、引力に引かれ、落下する。

……さながら流星・星の屑のように。落下地点のスタリオンを目掛けて。

『あ……ああ……あああああああぁぁぁぁぁぁっ！！！』

そして……大陸が悲鳴を上げた。

そうとっても差支えない程の地響きが、轟音が、大陸全土を文字通りに揺るがせたのだ。

リュウが衝突した周囲は半径数ｋｍに渡って太陽の光を遮る程の微細な粉塵が舞い上がり、夜となった。その中心には干上がった湖を思わせるほどの巨大なクレーターが広がり、その脇には縦横無尽に走る地割れと――――真っ白になって気絶しているバリオとサントの姿があった。

「危なかった……」

リュウはガトウの言葉を忠実に守り、ギリギリでスタリオンへの直撃を避けていた。

「しかしやっべぇなこれ……どうしよ……」

元の姿へと戻ったリュウは襲いくる筋肉痛に耐えながら、変えてしまった地形や日の光が届いて来なくなった現状を見なかった事にすることを決める。そして気絶している二人を適当にロープで縛ると街へと戻っていくのだった。

第九章　１０、後始末

あれから気絶したバリオとサントを引っ張って街へと戻ってみると、街は軽い騒動に見舞われていた。

それは組織の本拠地であるビルが瓦礫の山と化したことと、時を同じくして起きたド派手な地響きが原因だった。幸いビルの倒壊に関してはそうなる事を予想していたガトウさんが、あらかじめあちこちで手を回していてくれたおかげで混乱は少ないようだった。

ガトウさんの方は少しだけ元締め相手に梃子摺ったようだったが、それほどは問題なくぶち倒したらしい。

しかし流石のガトウさんと言えどもあの地響きは想定外だったらしく、フォローに結構骨が折れたとのこと。地震と言えるほど長く続いたわけでもなかったので、それによる人的被害などはなかったとか。

「あの地響きが起きる直前、流れ星のような物が見えたんだけどね、まさかとは思うがあれはリュウ君の仕業だったりしたのかい？」

「いえいえそんな訳無いじゃないですか。しかし何だったんでしょうねアレ」

多少の責任感からビルの後片付けや周囲の人へのフォローを行っている最中にそんなことを訪ねられたので、極めて冷静を装いつつ疑惑を払拭することに注力する俺。ガトウさんは何やら考え込んだが、それ以上は深く聞いて来なかった。

そして翌日。

「さて、あの二人と元締めは俺が責任を持って連行するよ」

「よろしくお願いします。もし何かわかったら連絡もらえます？」

俺とガトウさんは現在町の入り口へと向かいながらそんな会話を交わしている。馬兄弟と元締めは、これから軽く情報を聞き出した上で依頼者の元へとしょっ引くらしい。

今回の事は、「完全なる世界」とは全く……と言えるかはわからないが、少なくとも重鎮だった筈の馬兄弟が知らなかったのであれば、組織としても関与してはいないだろう。

俺の勘は見事に空振りである。だがしかし、修行という観点から見れば色々得る物もあったりと問題はないと思われるので、まぁいいかと無理やり納得する。

「ねー！　リュウー！　早く行こー！！」

一足早く入口の所に到達しているリンプーさんから俺の方へそんな声が聞こえてくる。リンプーさんは体調も全快し、店はティガさんの相方であるクラリスさんが明日には戻って来るらしいので、俺の方を手伝ってくれることになった。これから妖精のとこへ向かうのだ。

「それにしてもリュウ君には大分世話になったなぁ。なんならもう少し渡しても良かったんだが」

優勝賞金の５０万Ｄｑはもちろん組織の金なので没収。ガトウさ

んがそれならば、と小遣い＋とある頼みごとを聞いてくれていた。と言っても3万Ｄｑという小遣いの範疇とはいい難い金額だったのでそちらは断ろうと思ったのが、

「なぁに、頑張った子供にご褒美を上げるのは親の仕事だろう？」

とさらりと返されてしまった。それがまた様になっていたので何か断り辛く、ありがたく貰っておく事にした。そしてもう一つの頼みごとの方も僅か一晩であっさりと解決してくれた。その頼みごとの内容……ポケットから取り出した紙には、人の名前と住所らしきものが書かれている。

「あれで十分ですって。俺の方こそ助かりました。わざわざ探してもらって」

「たまたま俺の知り合いでちょうどいいのが居たからね。そんなに難しいことでもなかったさ」

その後、聞いたところだとガトウさんはまた密偵のような仕事に戻るそうだ。今更だが確かガトウさんはどこかで「政府の犬」と称されていたような記憶があるので、多分そんな感じの仕事なのだろう。

「いやしかし“紅き翼”は噂に違わぬ実力のようだね。仕事が無くなったら俺も入れてもらおうかな」

冗談めかして言うガトウさん。それが冗談にならないことを俺は知っている。

「そうですね、じゃあ俺がリーダーにガトウさんのこと推薦してお

きますよ」

俺がそう言うと、ガトウさんは「その時はよろしく頼む」と、笑って煙草に火を付けた。

≪相棒、虎の嬢ちゃんの相手をはえぇとこしてくれよ≫

そんな感じにマッタリと歩いていると、ボッシュから催促の念話が来た。既に入口にて待機している二人の方を見ると、暇を持て余したリンプーさんがボッシュを弄り回しているようだ。

≪はいはい、今行くよ≫

今回ボッシュには世話になったので、そうそう邪険にはできない。

「リュウ君はもう行くんだろ？　またどこかで会うかも知れないが元気でな」

「はい、ガトウさんもお元気で」

そう言って煙草を吹かして去っていくガトウさん。こちらに背を向けたまま手を振る仕草が実に絵になっていた。

「さて、っと」

これからこの街は大会を組織していた組織の崩壊と共にあの地下闘技場でのショーも消えていくだろう。

あのショーを見物に来ていた客達は一旦はナリを潜めるだろうが、これからこの街はヘラスの治安維持用の部隊……要するに警察機構

のようなものが配備されると言うことで、さらに裏へともぐる可能性もある。

その辺は自浄作用に期待するしかないが上手くいくかはわからない。どこの街でも何かしら問題というものはあるものだと言う事が感じられた。

今回、色々と世話になったティガさんの店や本人に直接被害がなかったのも、ガトウさんが裏で手を回して街で工作をしてくれていた事が大きい。

ただ暴れるだけでなく、そう言ったフォローも大事だという事を理解し、俺もそう言う方面にももっと気を使わないとなぁ等と考えつつ、待たせているボッシュとリンプーさんの方へと俺は歩き出すのだった。

その後、騒動に見舞われた街人達は、あの地響きは起きる直前に見えた流れ星が、街からそこまで離れていない個所に衝突したのが原因だと断定した。

リュウの残したクレーターはその証拠とされ、あれよと言う間に観光資源の一つとして利用される事になる。そのクレーターの名称は流れ星の後と言う事で、星屑の記憶（スターダストメモリー）と名付けられ、街の財政を健全な方面で潤して長く人々に親しまれることになるのだが、

それはまたもう少し後の話。

続く

第九章　１０、後始末（後書き）

第九章終わりです。

何か１話１話の文字数がバラバラ過ぎて申し訳ありません。

一重に私の力量不足です。

ここまで読んでくれた皆様に深く感謝を

第十章　1、狩り

俺とボッシュとリンプーさんはジンメルの街を離れて人目のなくなった辺りまで来ると、フェアリドロップを使って妖精の住処へと移動した。もちろん理由はリンプーさんに妖精達へ狩りを教え込んでもらうため。これで上手くいけば肉も妖精達自身で確保できるようになるだろう。

「ケツいてぇ……」

「ビックリしたけどなんか楽しかった！」

「相棒、俺っちあいつ等に一言二言言いてぇんだけどよ……」

フェアリドロップは爆発しないと聞いていたので安心して使ったのだが、何故か爆発の代わりに足元に穴が開いて落ちる仕様になっていた。そして浮遊魔法を使う間もなくどこかに激突したと思ったら、あの妖精達の住む山の崖の上だった。一度じっくり妖精達と話し合う必要があるだろう。

「へー、どこだかわかんないけど、とにかくここで狩りをすればいいんだよね」

「まぁ大変かと思いますがお願いします」

「リュウの頼みだもん、それくらいお安いご用だよ！」

取り合えず気を取り直して周囲を見渡してみる。

「で、その妖精ちゃん達ってどこに居るの？」

「……確かあっちの方に小屋（仮）があるはずなんで、そこに居ると思いますよ」

辺り一面、以前に来た時と全く変わり映えのしない殺風景な山の上。周囲に妖精の気配がないので俺達はそこから移動し、妖精達の寝泊りしている建造物の方へと歩みを進めることにした。

「なぁボッシュ……俺さっき腰打ったせいか目が悪くなったみたいなんだけど」

「相棒、おめぇ疲れてんだよ。まぁかく言う俺っちも何故か足し算ができねぇんだけどな」

「よし、じゃ帰るか」

「そりゃいい、俺っちとっとと寝てぇよ」

「どうしたの二人とも、何か変だよ？」

「「……」」

小屋の方へ着いた途端、思わず二人で目を合わせ、その場で回れ右したい気持ちで一杯になった俺とボッシュ。俺たちの思う事はたった一つ、目の前に広がる光景をただ信じたくないというのが本音

である。

「リンプーさん……妖精、何人居るか数えてもらっていいですか？」

「え？　んっと……うん、何回数えても5人だよ？」

「「……」」

リンプーさんの何言ってんの？的な顔が、俺とボッシュの目も脳も間違ってはいない事実をご丁寧に突き付けてくれた。何と現実は無常なのだろうか。どこから来たのか妖精が増えているのだ。

「リュウのヒトのおかげよぅ」

「私達はこうやって卵から孵るのよぅ」

食事の時間だったのか、ふがふがと魚を頬張っている見た事のある妖精が3人。言われてから気付いたが、あの草敷きの屋根が二棟に増えており、片方の下にはまだいくつか卵らしきものが転がっているようだった。そして俺とボッシュの頭痛の種、件の2人は、サイズは他3人と同じくらいだが、まだ幼いらしく近くでキャッキャと遊んでいる。

「マジかよ……」

「マジみてぇだな……」

ただでさえ手を焼く妖精達が、このままネズミ算式に増えていく悪夢を連想して青くなる俺とボッシュ。いっそ他人のフリしてここへ来るの止めようかという考えが頭をよぎる。ある一定まで増えた

らそれ以上増えなくなったりすることを切に願う次第だ。

「……ところで、その卵どこから来たの？」

ちらりと目に付くその卵。大きさ的に妖精を一回り小さくした程度のその卵が一体どうやって作られたのかなんとなく単純に疑問に思ったのだが……

「い、いきなり何ヘンな事聞くのよぅ！　リュウのヒトのエッチ！」

「スケベ！　ヘンタイ！」

「そんな恥ずかしい事聞くなんて正気を疑うよぅ！　何考えてるのよぅ！！」

「ええ！？」

なんでか3人に凄い勢いで謂れのない罵倒をされ、少し涙ぐみそうになる俺。個人的にはそんなセクハラな事を聞いたつもりではなかったのだが、その辺の生態に関しては深く突っ込んではならないのだろう。

（でもそこまで言うようなもんをその辺に転がしておくなよなぁ……）

「で、今日はなんの用よぅ？」

「私達に会いたくなったとか？」

「おみやげはないの？」

「「「……」」」

魚を食べ終わるとコロっと態度を変えて言いたい放題の妖精達。見た目だけは可愛いが、中の人はあまり可愛くない。

「あー……お前等肉食べたいって前に言ってたじゃん？」

「「「！！」」」

俺の言葉にパァッ！っと花が咲いたように明るくなる妖精×３。

「なので、こちらの人にお前等に狩りを教えていただきます！」

「「「……」」」

そう言うと今度は一気にお通夜になったようにテンションがズンドコな妖精×３。どうせ俺が肉そのものを持ってきたとでも思ったのだろうが、そうは問屋が卸さない。

「とゆーわけで、あたしが君たちに狩りの仕方を教えるよ！　がんばっていこうね！」

張り切るリンプーさんとは対照的にやる気なさげな妖精達だが、俺が後ろから睨みを効かせるとかつての説教トラウマを思い出したのか、力無く頷くのだった。

そんなこんなで１週間ほど妖精の住処に寝泊りすることに決定した。別に俺がそこに留まる理由はなかったのだが、ワザワザ俺の頼みで教えてくれているリンプーさんに魚を焼いただけとかの食事を

して貰うのも気が引けたし、一応監督責任？があると思ったのだ。

「相棒、おめぇさんはとことん女と趣味に甘いやね」

「……何の話カナ？」

何かボッシュに失礼な物言いをされたが、決して「美味しいご飯が食べたいなー」とリンプーさんに上目遣いで可愛くおねだりされたからと言う訳ではない。ましてや近頃やっていなかった釣りの、しかも急流釣りに心引かれた等という訳では全然全くこれっぽかしもないのだ。

そう、これは純粋な善意と責任感からの行為なのである。ボッシュの言葉は物事を一方向からしか捉えていない典型的な視野狭窄というものだろう。物事はもっと大きく見るべきだと俺は思う。

翌朝、早速リンプーさんが妖精達を引き連れて少し離れた所の森へと入っていった。俺は釣りへと向かう前にふと思い立ってナギへ連絡を取ることにした。現状報告と言うかあいつら何してんだろ？的な感じだ。久しぶりのテレコーダーをドラゴンズ・ティアから引っ張り出し、起動させてみると数コールの内に応答があった。

『もしもーし、ナギ？』

『おー、リュウ。こっちに戻ってきてたのか。調子はどうだ？』

機械から聞えてきたリーダーの声。そう言えば旧世界に行ってこちらに戻ってきた報告をしていなかった事を思い出す。しかしあまり気にしていない辺り、このチームの適当さが伺えるというものだ。

『ボチボチ。そっちは？』

『ん？　あー、俺もボチボチだな。結構前より強くなったとは思うんだけどなぁ……』

久々のナギだが何故か言葉にあまり元気が無いと言うか勢いが弱い印象を受ける。

『何か歯切れ悪いね？』

『いや、試せる相手が中々いなくてよ』

『あー……』

確かにナギの強さをまともに発揮したら普通の相手では手も足も出ずに即リタイアだろう。そう言う意味では強者は大変だ。

『そろそろ一旦集まろうかと思ってんだがリュウはどうだ？』

『あー、いいんじゃね？　久々だし』

『うっし、じゃあ集まるか！　と言っても俺とアルとリュウだけだろうけどな』

『ゼクトさんはまだ連絡なし？』

『ああ。詠春もたまに手紙が悠久の風本部に来る程度だな』

『へぇ……』

ゼクトさんは未だ音信不通で行方知れず。詠春さんもまだ旧世界に滞在中。それほど心配しているわけではないが、久々に会いたいという気持ちはある。

『そういうわけだから、アルにも連絡してみてだな。また連絡するぜ！』

『了解。んじゃまたー』

普通に軽く友達と電話するかのように挨拶すると、テレコーダーのスイッチを切った。

「さて……」

リンプーさん達が帰ってくるまでまだまだ時間があるだろうから、俺は嬉々として山間部の急流へと降りていくのだった。もちろんボッシュの抗議の声には聞えないフリがデフォである。

妖精達が大分魚を取っていたせいかはわからないが、粘った割にあまり芳しくない釣果にがっかりだった夕暮れ時、狩りの一行が戻ってきた。

初日だからなのかリンプーさんが小さなウサギ一羽を獲って来て妖精達は手ぶら。疲れのせいか3人はぐったりしていた。

取り合えず労って飯の時間。疲れからか生来のものか妖精達のがっつき具合が凄まじかった。生まれたばかりらしき二人も結構な勢いで食べていて、このままもしここで暮らすとしたら、エンゲル係

数がひどい事になる気がして仕方が無い。

そこから妖精達は日を追うごとに手慣れていったのか、だんだんと鳥や小さな猪らしきものを獲ったりと上手になっていった。その中で、リンプーさんが獲ってきた獲物の簡単な捌き方を教えると、そのグロさに妖精達は青くなっていたがなんとか受け入れていったようだ。生まれたての二人も徐々に言葉を理解して仕事を手伝えるほどになっていた。

また、その間の寝床として俺はキャンプ用のテントを張り、流石にあんな吹き曝しでは失礼なのでリンプーさんにも予備の分を貸しだしていたら妖精達からズルイの声があがった。やはり早めにちゃんとした建物を用意する必要がある事を再認識。

そんなこんなでちょうど一週間たった頃、そろそろ俺は本腰を入れてここにまともに住めるくらいの家を建てることにした。

「ねぇリュウ、その紙はなんなの？」

「ガトウさんに頼んで建築を引き受けてくれそうな人を探して貰っておいたんですよ」

「へー、そうなんだ。所でガトウって誰？」

「あ」

そう言えばリンプーさんは知らないのだという事をスッカリ忘れていたが、まぁ特に問題はないと思い、あの街で助けてくれたおじさんの名前だと説明する。

ガトウさんから貰った紙にはアリアドネー方面の農村「ファマ村」という住所と、とある人物の名前と詳細が書かれていた。それとは別に、会ったら渡してくれと頼まれた手紙もある。

「ふーん、そこにこれから行くの？」

「そうです。とっとと妖精達の所なんとかしちゃいたいし」

「完全なる世界」について手掛かりが途切れたので、またどこかで別のマニーロさんに情報でも貰おうかとも思っている所だが、取りあえずは目の前の問題を解決する方を選んだのだ。

「ね、あたしもそれ付いてっちゃ駄目かな？」

「え？」

「妖精ちゃん達も大分慣れてきたみたいだし、そろそろあたし無しでも大丈夫だと思うんだけど……」

「そうですね……でもティガさんのお店の方はいいんですか？」

「大丈夫。クラリスも帰ってきたし、あたしが居たら逆に邪魔になっちゃうだろうし」

あはは、と笑うリンプーさん。確かにこんな所に居て妖精達に手が掛からなくなったら暇だろうとは思われる。

「わかりました。じゃ行きますか」

「やた！　ありがと！」

「ようやく退屈ともオサラバかぁ。俺っちもう暇はコリゴリだぜ」

嬉しそうなリンプーさんを見ると何となくこっちまで楽しくなる。そしてボッシュの呟きはスルー。

そんな感じで妖精達にまた来ると伝えると、俺の抗議を受けてさらに改良されたらしいフェアリドロップを受け取ってもとの場所へと戻り、俺とボッシュとリンプーさんはファマ村を目指して出発した。

ガトウさんのメモによるとだいたいここから東の方角へ歩いて幾日からしい。飛んでいけばもっと早いだろうが。

「ねーねー、凄い遠いじゃん。魔法でさ、ピューっと行こうよ」

「嬢ちゃんはフーレンなんだから走りゃいいじゃねぇか。それくれぇ朝飯前だろ？」

「ん～……わかった！　じゃあ競争だよリュウ！　あの木の辺りまでね！」

「マジすか……」

今更だが、いつの間にやらボッシュが喋れることにもリンプーさんは慣れていた。そんな感じで歩いたり走ったりたまに飛んだりしながらファマ村を目指して邁進する俺たちだった。

第十章　2、農村

「うわー、凄いのどかなトコだね」

「本当ですねー」

「俺っちはこういう村の方が好きだなぁ」

なんだかんだで到着したファマ村は、それはもう一面畑の広がる見事な農村だった。ガトウさんから紹介されたのはこの村に住む亜人で、「ランド」という名前の人だ。

（まさかそんな繋がりがあるとはなぁ……）

俺の記憶が確かなら「ランド」は体の大きい「甲殻族」、すなわちアルマジロの亜人だったはずだ。メモによると何でも屋みたいな仕事のよろず屋「ナマンダ」を経営しているらしい。巨体の割に手先が器用で建築なんかも得意だそうだ。ガトウさんの旧知の仲で名前を出せば手伝ってくれるだろうと書かれている。

「しかしメッチャ広いなこの村……なんか家と家とが遠いし」

「相棒、あそこに人がいるみてぇだしちょっくら道聞いてみようぜ」

あぜ道からは右の方を見てポツンと一軒家があり、そこから１８０。首を回して左を見るとかなり先にようやくもう一軒家が確認できる、と人口密度で言えばエライ低い。他は全部畑なので目的の「ランド」さんの家の場所がわからず、偶々居た畑仕事に精を出して

いる人に道を聞いてなんとか進んでいく。

「あれかなー？」

「多分そうっぽいですね」

しばらく迷ったりしながら歩いて教えてもらった場所へと到着。
そこには普通の民家よりサイズ的に大きめではあるが、質素な感じの一軒家があった。取り合えず家の前に立ち、引き戸をノックしてみる。

「すみませーん、ごめんくださ……」

と、次の瞬間戸が吹き飛んで中から何か大きな物体が飛んできた！

「「「！？」」」

飛んできた物体は派手に2回転程してバタリと倒れたが、すぐに体を起こしながら家の中を恐ろしげな表情で見やった。

「か、母ちゃん！　勘弁してくれよ！」

「何言ってんだい！　この穀潰し！　仕事もしないで遊んでばかり！」

「だから俺はよろず屋を……」

「そんなセリフは１Ｄｑでも稼いでから言うのが筋ってモンだよ！」

「「「……」」」

俺、ボッシュ、リンプーさんはその光景を唖然と見ていた。玄関をぶっ壊して飛んできたのはいい年と体格をした亜人さん。そしてそれ以上の迫力を出す年配の亜人さんが玄関に仁王立ちしたまま怒鳴り散らして飛んできた方を叱っている。

その様相はまさに某ジャイアンとその母のようだ。

「ん？　あれま、お客さんかい？」

「あん？」

ここで怒鳴っていた方の人が俺たちに気付いたらしい。こちらに意識が向いたので恐る恐る尋ねてみる。

「あの、すみませんがランドさんのお宅……でしょうか……？」

「ああ、そうだよ。ウチの馬鹿息子に何か用かい？　そこに転がってるのがそうさ」

「「「……」」」

顎で転がってる方の亜人さんをしゃくる年配の亜人さん。なんと言うか肝っ玉母ちゃん的なオーラが漂っている。

「あ痛てて……っと、何だぁ？　俺がランドだけどお前等みたいなのに知り合いはいねぇが？」

腰をさすりながらこちらを伺う亜人改めランドさん。

「あ、どうも。実はガトウさんからの紹介で……」

そこまで言うと、ランドさんの顔が険しい表情に変った。

「ガトウだと!?　何だあの野郎、今どこにいやがる!?」

何故か今にも飛び掛って来そうな凄い剣幕で怒り出した。

「えっと……何かガトウさんと問題が?」

「あンの野郎、散々俺との賭けに勝ったままトンズラこきやがってよ。今ならギャフンと言わせてやるってのに……」

ぐぐっと握り拳を作るランドさん。

(……なんか駄目な人っぽいなこの人……)

深刻な問題かと思いきや出てきた単語が「賭け」とは、と俺以外にボッシュもリンプーさんも似たような感想を持った事が二人の表情から伺えた。

「で、俺に何のようなんだ?」

「あーその、何でも屋と聞いていたので家を建てるのを手伝ってくれないかと……」

「家だぁ!?」

「あ、それと……これを渡してくれと」

そう言って俺はドラゴンズ・ティアからガトウさんの手紙を取り出す。

「おやおや、何か込み入った事情があるようだね。取り合えずお上がりよ。何にもない家だけどさ」

「え？　いやでもそんな……」

「子供は遠慮なんかするんじゃないよ。ほら、上がった上がった！」

母ちゃんパゥワーにより問答無用で家の中へと上がらせられる俺とボッシュとリンプーさん。居間の方に通され、そこで改めて自己紹介するとお母さんの名前はデイジイと言うそうだ。

ランドさんの方はメモに書かれていた通りによろず屋をやっているそうだが、そう言ってもこんな村では村民全員が顔見知りなので、頼まれごとがタダ同然でやりとりされて大した収入にはならず穀つぶしと言われているらしかった。

「ちっ、ガトウの野郎……」

渡した手紙に一通り目を通したランドさんがそれをグシャっと潰す。

「あの……それには何が……？」

「あん？　……以前の勝ち分を勘弁してやる代わりにお前等を手伝ってやれとよ」

「そんなことが……」

どうやら逆らえないところを見るとガトウさんにかなりの借り？があるらしい。一体どんな賭博でそれだけ勝ったのか気になる。

「はん、いいじゃないか。お前みたいな穀潰しは偶にはよそ行って力仕事でもしてきな！」

デイジイさんの母ちゃんパワーが炸裂。ランドさんにこうかはばつぐんだ。

「……は、まぁ仕方ねぇ。が、俺一人で家を建てるってなぁ出来なくはないが、俺はどっちかと言えば力仕事の方が得意なんでね。知り合いにちっとばかし器用な野郎が居るからそいつも連れてきな。そしたら受けてやるよ」

「知り合い、ですか。それって近くに居るんですか？」

「ああ、多分この季節だと……」

ランドさんが言うにはその知り合いはそう遠く離れていない町に居るらしい。ランドさんは何だかんだで準備をしておいてくれるみたいで、素直じゃない感じが巨体に似合わずツンデレ気配を漂わせている。

「ほら、今日はもう遅いから泊まって行きな。久々のお客さんだ。私の自慢の料理をごちそうするよ」

デイジイさんの提案。確かに外は大分暗くなってきていて、今から向うのもどうかと言う時分だ。俺達はありがたくその言葉に甘える事にした。

「あ、料理なら俺も手伝いますよ」

「そうかい？　全く出来た子だねぇ。はぁ～……それに引き換えどこかのボンクラときたら……」

「勘弁してくれよ母ちゃん……」

「あはは」

そんな感じで夕食の準備に取り掛かった。素材はもちろんこの村で獲れた新鮮な野菜が中心。それに野山で獲れた猪っぽい動物の肉などと、ドラゴンズ・ティアから取り出した魚。これだけあれば中々に豪勢な夕食に仕上げられるだろう。

「ごめんくださーい」

ちょうど色々な料理が出来あがりそうになった頃、玄関の方からそんな声が聞えてきた。どうやらまた誰かが訪ねて来たらしい。

「やれやれ、今日は千客万来だねぇ。坊や、ちょっとこっちの煮物、見ていてくれるかい？」

「わかりました」

デイジイさんはパタパタ……というか体格的にドスドスと音を立てて玄関へ急いでいった。

「……む、美味いなコレ……」

こっそりくつくつと煮立つ煮物の汁の味を見てみたのだが、出汁の味と甘辛さが絶妙で、これで煮付けられたならどんな物でも美味しくなるだろうと思えるものだった。これは是非ともコツを教えてもらわねばなるまい、と密かに決心。

その他の料理の具合も見たりしてちょっとの時間のあと、居間でくつろいでいるリンプーさんから「ご飯マダー？」の声が聞こえてきた時……

「ふざけんじゃないよ！！」

玄関の方からデイジイさんの怒鳴り声が聞こえてきた。

「ですがそれはあの方だけでなく、領主の御言葉でもありまして……」

「馬鹿を言うんじゃないよ！　領主なんざ知ったこっちゃないけどね、あのエカルさんがそんなこと言う筈ないだろう！」

（？　……なんだぁ？）

恐る恐る玄関の方を覗いてみると、何か良い身なりの訪問者に対してデイジイさんが怒鳴り散らしているようだった。

少しの間、何やら激しく押し問答しているようだったが、訪問者の方が折れたようで頭を下げて出て行った。ちらりと見えた態度や聞えた言葉使いから、訪問者の人はそれほど悪人っぽくは感じられなかったが。

「まったく……」

「あの……何かあったんですか？」

「ん？　あーいやいや驚かせちゃったみたいで悪かったね。アンタ達とは全然関係ないことだから安心おしよ」

台所へ戻ってきたデイジイさんに聞いてみるもそんな感じに軽くはぐらかされてしまった。どうやらこれ以上聞いても教えてはくれなそうだったので、頭の片隅に置いておきつつ料理の仕上げに取り掛かる。

その後、予想通りの美味しい晩御飯をみんなで頂き、一晩泊めてもらった俺達はランドさんの言う知り合いを探しに出る事にした。

ランドさんが教えてくれた場所はここファマ村からさして遠くないガンツと言う街。そこは機械系の技術が発達した工業の街で、ランドさんの言う手先の器用な人物は恐らくそこに居るだろうとか。

どことなく何か起きそうな気配を肌で感じつつ、俺達はそこへと向かうのだった。

第十章　3、犬猿

ファマ村を朝早くに出てから普通に歩いて大体４時間ほどでガンツの街へと到着した俺ボッシュリンプーさん一行。遠くないと言うのは本当のようで、まだまだ午前中である。

ガンツは至る所で歯車のような機械が蒸気を吹き上げて回っていたり、煙突が何本も突き立って慌ただしく煙を吐き出していたりと実にスチームパンクチックな見た目の街だ。

暮らしている人間は屈強な見た目の人が多く、その中でも牛の亜人と思われる「鉄鬼衆」と言う人達が多い。この種族の人達は筋骨隆々で角を生やしたコワモテなのだが、見た目とは違って温厚な人が多く、手先が非常に器用で治金技術なんかに秀でているそうだ。

ファマ村を含めてこの周辺は寒暖の差があまり激しくないので、ちょっと離れた空気の綺麗な所にお金持ちの邸宅や別荘も軒を連ねているらしい。

そしてこの街の名産品は何と言っても金物。見た目通りに製鉄機械系の技術が栄えているので武器や防具、さらには鍋なんかの日用品も結構良い物が安く手に入るそうだ。

「さて、取り合えず来てみたけど探し人の情報結構アバウトなんだよなぁ……」

「まぁなんとかなるんじゃねーかね？」

「……そうだな」

意外と楽天的な考えの俺とボッシュ。ランドさんが言うには目的の人物は「猿」とのことだった。「猿」と言うのはあだ名とかではなく、見た目はそのまま猿の亜人のことで「高山族（ハイランダー）」と言う種族を指している。この街でハイランダーは目立つからすぐわかるだろうと言っていた。

「武器とか鍋とかもできれば見たいなぁ」

「相棒、そりゃ後でもいいんじゃねぇか？」

「あ、でもホラ、すぐそこに金物屋さんがあるよ？」

そう言ってリンプーさんの指差す先には、雑多でメタルな輝きが眩しい日用品がひしめいてるソコソコ大きめな店舗が。

「よし行きましょう」

「だぁから相棒、そんなのぁ後でも……」

「お前にも何か一つ好きなモン買ってやるから」

「よし、行こうぜ相棒」

「何か面白い物あるかなー？」

何だかんだでボッシュも大概だ。そんなわけで人探しを後回しにし、適当に店を物色する事にした俺とボッシュとリンプーさんだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

（ふいー。中々良い物買えた）

ひとしきり目に付いた店を次から次へと物色し、満足のいく買い物が出来た俺。手持ちに３万Ｄｑ程あるおかげで大抵の品物は買えた。それでも大きさや性能を見比べて１０Ｄｑ単位で迷ってしまったりしたのは生来の貧乏根性のせいだろう。

だがその甲斐あって一回り大きな中華なべや切れ味の良い包丁、そして無銘ではあったが掘り出し物の日本刀……まさに「剛剣」と言えるような業物が手に入ったのだ。あまりに見事な剣だったので密かに「マンジカブラ」と名付けた。段々調理器具やら武器やらにマニアックになっている自分に思わず苦笑いしてしまう。

……しかし何故魔法世界に日本刀が売っているのかは気にしたら負けである。

「ねーリュウ、あたしいい加減お腹空いたんだけど……」

「っと、そうですねもうお昼……ってあれ……？」

言われて気付いたが、広場にある大時計を見るとランチタイムなどとっくに過ぎていた。よくよく見ればボッシュもリンプーさんもうんざりしたような顔をしている。

「誰のせいでこうなったんだろうなぁ相棒？」

「さて誰だろ？」

「「……」」

「……ごめんなさい」

二人のジト目視線が胸に痛い。どうやら夢中になっていたせいで軽く数時間経っていたようだった。ボッシュとリンプーさんは武器や調理器具なんかには早々に飽きてしまっていて、そんな二人に全く気付かず俺一人だけ盛り上がっていたらしい。何故楽しい時間と言うのはこんなにも早く過ぎ去ってしまうのだろうか。

「あー、じゃあ適当に店入りましょうか」

無理やり流して適当な定食屋へと足を運ぶ。入った店はまぁまぁ流行ってそうな定食屋で、味の方はまぁ可もなく不可もなくだった。だが洋食系だったのは俺が中華系を得意としている為か新鮮だった。洋食となると使う道具やら手間やらが結構違うため、そっちも誰かに習って新規開拓するのもいいかと思う。

もちろんここの払いは全額俺が払わせて頂いた。さらに今日これからの出費はボッシュの物もリンプーさんの物も全てを俺が誠心誠意払わせて頂くことになった。ささやかながら精一杯のお詫びである。

「さーて腹も膨れた事だし、人探しを……」

「相棒、俺っち達にも買い物させろや」

「……ちっ」

「ふふーん、どこ行こっかなー」

最早目的が人探しでなくショッピングとなって大通りを練り歩く俺達。しばらくキョロキョロしながら歩いていると、なにやら奥の方に人だかりが出来ているのが目に入った。先程まではそのような物はなかったはずだが、結構な数の人が輪になってやいのやいの盛り上がっている。

「ありゃなんでぃ？」

「何々？　なんか楽しそーな予感！」

楽しげな気配を感じ取ったリンプーさんがここぞとばかりにそちらへと駆け出した。

「うーん、猪突猛進・虎娘……」

「相棒は人の事言えねぇっての」

「うっ……」

ボッシュの鋭い突っ込みに言葉を詰まらせつつ、リンプーさんの後を追った。

「さぁさぁ寄ってらっしゃい見てらっしゃい！　こちらにおわす先生にたった一発だけでも攻撃を当てられた方に、１万Ｄｑ差し上げちゃいますよ！　さらに先生は目隠し、もちろん手は一切出しません！　一人３０秒で２０Ｄｑ！　さぁ腕に覚えのあるそこのお兄さん！　挑戦しない手はないよ！」

子供の体格を利用して人だかりを掻き分けて最前列へと滑り込むと、なにやら猿の亜人さんが叩き売りのような口上でパフォーマンスを盛り立てているのが目に入った。そしてその猿の人の隣には、先生と呼ばれた人物――周囲のざわつきを掻き消すような空気を纏う細長い犬の亜人が立っている。

「あ」

≪どうしたぃ相棒？≫

≪いや……≫

ボッシュの念話に言葉を濁す。俺はその二人に見覚えがあった。

猿の人は青いベストのような物を着ていて手足が長く、飄々とした雰囲気とその道化のような物腰にはどことなく憂いを感じさせる。言うまでも無く種族はハイランダーだ。

そして犬の亜人の方は、端的に表すなら長身痩躯の犬侍。緑の着物をいなせに着流し、刀を片手に無造作に持っていて口には葉っぱを咥え、前髪（前毛？）で目元を隠している。種族としては犬や兎、狐の亜人はまとめて「野馳り族」と言う。

（ひょっとしなくても……）

俺の記憶にこの人達も存在している。そしてランドさんの言う「猿」は十中八九あの人だろう。これだけギャラリーが居てもハイランダーなど他には見当たらないのだ。いきなり本命と遭遇である。

まぁそれとは微妙に関係無しに俺の出費を抑えてくれる絶妙なタイミングでの出現を心の中で感謝していると、猿の人の煽りを受けて周りのギャラリーから出てきた様々な男達がその犬侍さんに挑戦しだした。

「はい残念時間切れ！　惜しかったねーお兄さん！」

猿の人の口上が巧みなせいもあり、パッと見で相当な実力者に見える犬侍さんに挑戦しまくるギャラリー達。犬侍さんは目を鉢巻のようなもので覆っているにも関わらず、挑戦者達の攻撃を完全に見切ってかわしていた。

「ね、リュウ！　２０Ｄｑちょうだい！　あたしもやりたい！」

いつの間にか隣に来ていたリンプーさんがそう言ってこちらに手を差し出してきた。目がすっごいキラキラしていて、これは断っても無駄だと俺の本能が囁いている。

「一回だけですよ」

「うん！　ありがと！」

（……許す！）

何を許すのか自分でもよくわからないが、この笑顔に負けた俺をきっと誰も蔑んだりはしないだろう。

「おっと！　次の挑戦者はフーレンのお嬢さんだ！」

「行っくよー！」

リンプーさんが背中の武器（にゃんにゃん棒と言う名前らしい）を持って犬侍さんと対峙する。

「……！」

（お？）

それを見た、と言うか察した犬侍さんは、それまでの割と緩やかな雰囲気を一変させて緊張が走ったようだった。

「やぁっ！！」

リンプーさんが掛け声と共に一気に犬侍へと襲い掛かる。

「おお！　これは凄い！」

猿の人が囃し立てるように、リンプーさんの攻撃はそれまでの男達の攻撃とは一線を画す速さだった。しかし縦の攻撃も横の攻撃も紙一重でかわし続ける犬侍の方も流石である。

「やっ！　たぁっ！」

「…！　……っ」

（あと１０秒……）

リンプーさんも時間が迫っているのがわかっているようで、ラストスパートの如く棒術で一気呵成に攻め立てる。ペースが上がったものの、犬侍さんの方も見事なまでの軽やかな動きでそれをかわし

続けている。

（駄目か……）

俺がそう思った時、

「やぁぁぁ！！」

「……っ！」

最後の最後、渾身の打ち降ろしが横へと避けた犬侍さんの着物の裾を捉えた。

「あ！　当たった！　今当たったよね！」

「あー、残念お嬢さん。時間切れだよ」

嬉しそうなリンプーさんを咎める猿の人。

「おいおい当たったんじゃねぇか？」「いや服だから駄目だろ」「次！　次は俺がやる！」

今の攻防でなお盛り上がる周囲の人々。

「いや当たったじゃん！　ほら、着物のあそこほつれてるし！」

「いやいや、アレは最初からああだったんですよ」

猿の人とリンプーさんの問答が続いていたが、元々あまり口の上手くないリンプーさんはうまい具合に丸め込まれたようで、イラつ

きながらも俺のほうへ戻ってきた。

「残念でしたね」

「っもう！　絶対あれ当たったじゃん。何さ、あんの猿！　あいつだったらボッコボコにしてやるのに！」

流石に納得いってない様子でぷんすか怒っている。そして次々に挑戦しては失敗していく周囲の男達。次第に無理じゃね？という空気になってきて手を上げる挑戦者が居なくなっていった。

「さぁ！　もう勇気ある挑戦者は居ないのかい！」

最後の一人がトボトボとギャラリーに戻っていったあと、誰も挑戦しなくなったその場で猿の人が煽っていた。周りはざわついているものの皆二の足を踏んでいる。そんな周囲を適当に伺っていると、リンプーさんがこっそり耳打ちしてきた。

（ねね、リュウはやらないの？）

（……）

実際俺は迷っていた。

犬侍さんはかなりの腕前だとは言え、今の俺にとっては自惚れでなくやれてしまうだろう。ただ、俺は子供なわけで、公衆の面前で叩き潰しちゃうと何と言うかプライドとかまで粉砕しちゃいそうで怖かったのだ。

「……」

（よし、やろう！　今すぐ！）

するとリンプーさんが俺の沈黙を押し切って――

「はいはーい！　次はこの子がやるよ！」

「あちょっと！？」

勝手に俺の手を取って挙手してしまった。

「お！　勇気ある坊や！　見所あるねー、周りのお兄さんたちの仇を取れるかな！」

猿の人が煽りまくる。

それによって周りの人たちも「頑張れー」「いけーチビッこー」とかやたらと盛り上がってしまっている。流石にここで「やっぱいいです」とか言ったとしたら、空気読めよこらぁってな視線で蜂の巣にされてしまいそうだ。

「はぁ……じゃあ、はい」

俺は財布から２０Ｄｑ取りだすと猿の人に渡した。

「さぁ！　勇気あるお子様の挑戦！　制限時間は３０秒！　どうぞ！」

猿の人の開始の合図で、俺は犬侍に対して真面目に構えた。

「！」

その瞬間、目隠ししている癖にリンプーさんの時に見せた気迫以上の、それこそ真剣勝負の戦闘態勢と言えるほどの威圧感を放つ犬侍さん。確かに隙のない構えだが、強引に当てにいける自信はある。

「……」

「……」

「ち、ちょっと、旦那……」

真剣に見合っている俺と犬侍さん。全く動かないのを訝しんで声を掛けてくる猿の人。ギャラリーも妙な空気を感じ取っているのか誰も喋らず、耳に痛いような沈黙が場を支配したまま、時間だけが過ぎていく。

（やるか……）

もう残り時間もないので一気に決めてしまおうかと思ったその時、

「……いい」

「！」

突如、それまで一言も発さなかった犬侍さんが口を開いた。

「だ、旦那、いいって……まさか！？」

「負けで……いい」

そう言って緊張を解く犬侍さん。鉢巻も取って一瞬だが俺の方をちらりと一瞥したようだ。

「おいおいなんだ!?」「え、もう終わりなの!?」「まだ何もやってねーじゃねーか!」

ギャラリー達が騒ぎ出すが犬侍さんはもうやる気がないらしく、俺に背を向けて猿の人の側へスタスタと行ってしまった。

「えー、あースミマセン。旦那はちょっと調子が悪くなったようなので、これにてお開きにしたいと思いまーす！　皆々様、ありがとうございましたー！」

猿の人は強引に纏めるとさっさと片付け初めてしまった。そして周りのギャラリー達もざわつきながら解散していく。

「……」

俺は俺で犬侍さんが恐らく実力差を感じ取ったのだろうと感心していた。

「ねー、リュウ。一体何がどうなったの？」

≪相棒、いいのかい？≫

「あーなんか一応俺が勝った……のかな？」

そうして気が付くとその場に残っているのは俺とボッシュとリンプーさんのみになっていた。片づけを終えた猿の人と犬侍さんがこ

ちらへと寄ってくる。

「いやぁ旦那があんな態度を取るとは坊や只者じゃないね。おいらビックリしちまったよ」

「……」

猿の人が感心したような様子で話しかけてきた。その隣では犬侍さんも静かに佇んでいる。こちらとしてもランドさんが言っていた「猿」という言葉と合致するこの人に話を聞こうと思っていたのでちょうどいい。

「おいらはステンってんだ。で、こっちがサイアスの旦那。さっきは悪かったねそっちのフーレンのアネさん」

と、猿の人――ステンさんがそうリンプーさんに軽く頭を下げた。

「あーどうも、俺はリュウと言います。で、こっちは……」

「あたしはリンプー。アネさんはやめてよね」

「わかった。リュウにリンプーのアネさんだな。ここへは観光に来たのかい？」

気さくな感じのステンさん。名前から何から俺の予想通りだ。リンプーさんのこめかみにピクっと入ったのは取り合えずスルー。

「いえ、俺達はある人から人探しを頼まれて来たんです」

「へー、こんな場所にねぇ。もし良けりゃ、さっきのお詫びに知っ

てるヤツだったら案内してもいいよ？」

なんか凄くいい人なステンさん。しかしさすがに探し人がステンさん自身だとは思っていないようだ。

「いや、探してるのはハイランダーの方なんです。で、「猿」と言えばわかると俺に頼んだ人が言ってました」

「！　ちょ……まさか……そ、その頼んだ人って……？」

「ランドって言います」

「あっちゃー……やっぱランドの旦那かぁ」

天を仰ぐような様子のステンさん。そのリアクションから、やはり俺の予想はドンピシャだったらしい。

「やっぱりステンさんが「猿」さんでしたか。そうじゃないかなーとは思ってたんですが」

するとステンさんは何かを観念したようだった。

「ああ、まぁその、そうさ。おいらとランドの旦那は昔からの知り合いでそんな風に呼ばれててね。……ただなぁ、こんな風に呼び付ける時ってのは大抵碌な事じゃないんだよなぁ……」

うーん、と渋るステンさん。どうやら前にもランドさんにこんな感じに呼びつけられての苦い思い出があるらしい。

「大丈夫、ちょっと人手が欲しいだけだよ。家を建てるためのね」

「はい？　家ぇ！？」

リンプーさんの言葉にまたも驚くステンさん。俺はガトウさん経由でランドさんを紹介され、そのランドさんが人手としてステンさんを紹介したという事のあらましを説明した。

「はぁ、なるほどそれでおいらをねぇ。まぁおいらとしてはお金を貰えるなら行ってもいいけど、サイアスの旦那はどうする？」

「……」

サイアスさんは先程から顎に手を当てて一言も喋らず、何事か考えているようだった。

「い……」

「？」

「行く……」

「ほ、こりゃ珍しい。旦那も行きますかい？」

サイアスさんは無口と言うか寡黙と言うか、会話が明瞭簡潔過ぎて中々コミュニケーションを取るのが難しいような気がする。

（それにしても……）

見た目から「犬猿の仲」なんて言う話はこの人達とは全く無縁のことなんだろうかと、その不思議な組み合わせに突っ込みを入れた

い気持ちを抑えている俺だった。

第十章　4、拉致

あの後ステンさんとちょっとした交渉を行った結果、サイアスさんが負けを認めた事による俺への支払い１万Ｄｑをチャラにする、という条件で家を建てる為の協力を頼む事になった。実は俺としては「あの勝負に勝ったらお金が貰える」という事をスッカリ忘れていたので、懐具合は全く痛まずタダで受けてもらったも同然だったりする。

そして俺達はその日はガンツで一泊し、次の日になってから再びファマ村を目指すことにした。ステンさん達も一応荷物やらの整理があるのでそういう日程になったのだ。午前１０時頃に出発し、道中で休みがてら俺が昼飯を作る。一刻も早く手に入れた調理器具の性能を試してみたかったのもある。

「コレがリュウの作った飯！　うはぁっ！　美味すぎる！」

「あ！　ちょっと！　それあたしの分だよ！　返せ！！」

「へへっ、すいやせんね。この肉がおいらに食われたいってさ。ハムッ……ンまぁーい！　味に目覚めたァーッ！！」

「あ～～～！！　こんのぉ！　馬鹿ステン！！」

「ウキャキャッ！　こっこまっでおいで！！」

「あの、おかわりあるんで暴れるのは……」

食べ物の恨みが怖いのは重々承知しているので、少し多めに作っ

ておいたのが功を奏し、おバカな争いはなんとか収まった。取り合いする程喜んでくれるのは嬉しいが、もう少し静かにしてくれるとなお嬉しい。

「……美味い」

それに引き換えサイアスさんの落ち着きっぷりは凄い。そこだけ時間が止まったかのような実に穏やかな食事風景だ。食べながらも時折空をぼーっと見ているが、一体何を考えているのだろう。

「はぁ。それにしてもリュウはすげぇね。これだけの料理を作れるのに全然威張らない！　いやー、おいら参ったよ」

「そうだろ？　俺っちも相棒の料理の腕は結構買ってんだぜ？」

例によってボッシュは仲良くなると普通に喋っていた。ステンさんもサイアスさんも多少驚いたものの普通に流してくれている。サイアスさんは結構可愛いものが好き？なようでボッシュに興味津々な感じだ。

（しかし……）

何となくこのドタバタした感じが「紅き翼」でキャンプしてた時を思い出して感慨に更ける。まだナギからの連絡はないがその内集合しようとの事だったので、その時が楽しみである。

（みんな今どこで何やってんだかな）

そんなこんなで再び歩いてファマ村へと到着。ガンツの機械的な見た目とは正反対な農村の風景には、どこかほっとするというか懐かしいような感覚を覚える。

「ココも変ってないみたいだねぇ。ランドの旦那は元気にやってるかな」

「俺が訪ねた時はデイジイさんに怒鳴られてましたよ」

「ははっ、ならいつも通りだね」

どうやらあの親子喧嘩はステンさんも公認らしい。叱られてる本人にとってはたまらないだろうが、見てるほうとしては微笑ましいというか何と言うか。ただランドさんもいい年だろうし、いつまでもふらふら？しているという事にお母さんが怒る気持ちはわかる。

そんな感じの雑談をしつつ、以前に通った道を辿ってランドさんの家の方へと進むと……和やかだった雰囲気が一変した。

本来ならそこで見えてくるのは少し大きめなランドさんの家であるハズだった。しかしその代わりに目に飛び込んできたのは、濛々と立ち上る黒い煙とその根元に存在する真っ赤な炎。鼻に付くのは風に乗って運ばれてくる、物が焼けていく匂い。

「え……何で！？」

「旦那の家が……！？」

「！　急ぎます！」

「……っ！」

ランドさんの家は炎に包まれていた。

何故火事が起きたのかわからないが、全員そこへ向かって猛然と走り、一分もかからないうちに家の前まで来ると、中へ向けて声を出す。

「ランドさん！　デイジイさん！」

炎の勢いは凄まじく、大声を出しても轟々と燃え盛る音に掻き消されて中まで届いているとは思えない。

「くそ！」

「旦那ぁ！！　ちくしょう！　どうなってんだこりゃ！？」

「早く！　早く火を消さないと！！」

「……水……」

みんなが水源を探して慌てている中、俺はポケットからカードを一枚取り出すと額に近づけた。

≪消火お願い！≫

≪まかしといて。久々の出番ね！≫

「ハルフィール！！」

そして頭上に掲げたカードから、眩い光と共に翡翠色の龍が現れる。

「「「！？」」」

火事の所へさらに龍が現れ、混乱の極みといった感じの３人への説明は後回し。それより消火の方が先である。

「全員下がって！」

≪行くわよ！≫

俺の言葉に戸惑いながらも全員が家の前から退避すると、ハルフィールから発せられた光が上空の煙を一気に払い、そこへ大量の水が発生した。それは敷地全てを囲む巨大な滝となり、家を押し潰す事無く包んでいた炎だけを一瞬にして消し止める。

「すご……！」

「こいつぁ……」

「……！」

大量の水は役割を終えると音も無く消えていった。その光景を呆然と見ている俺とボッシュ以外の三人。

「ありがとハルフィール！」

≪……なんかちょっと物足りないんだけど≫

若干不満そうにカードへと戻っていくハルフィールを労い、呆然としている3人に声を掛けて半分以上が焼け爛れている家の中へと入ろうとすると、裏の方からドヤドヤと人の声が聞こえてきた。

「おい何だ今のは!?」

「誰だぁ!?　邪魔すんのはよぉ!」

家の裏手からゾロゾロ現れたのは傭兵のような男たちが数十人、その中に盗賊としか思えない風貌の男が一人、いずれもナイフや剣、槍、棍棒などで武装している。

「……何あんたら?」

「あぁん?　なんだ躾のなってねぇガキだな」

「お前らかよ、折角点けた火ぃ消しやがったのは」

「……」

今のセリフだけで、こいつらが家に火を放った張本人だと判断するには十分である。

「なんとか言えやこのガキ」

「……」

俺はこれ以上この連中と会話などしたくなかったので、何も喋らず後ろに居るリンプーさん達の側へと寄る。

「……取り合えず、速攻で蹴散らしましょう」

「！　おっけー！」

「はいよ！」

「……！」

リンプーさん、ステンさん、サイアスさんもそれぞれ棒、ナイフ、太刀を構えて戦闘態勢。

「やる気かよ。おいおめぇら！　行きがけの駄賃だァ！」

何故か盗賊のような風貌の男が指揮を取って周りの傭兵崩れ達に命令を下していた。総勢５～６０人程で、いずれも大した強さは感じられない雑魚である。

「……」

しかし雑魚だからと言って先手を譲るつもりはない。俺はポケットに右手を突っ込み、そこで龍の力を拳に集めた。ガトウさんの使っていた居合拳はもちろんラーニング済み。流石に豪殺居合拳は覚えられなかったが、俺式のアレンジによる構想は練ってある。スキルとしては居合拳＋散烈拳＋ねらいうちの合わせ技だ。

「ショットガンッ！」

「ふべっ！？」「ぼがはっ！？」「あぷっ！？」

ポケットから高速で撃ち出された龍の力の剛弾が、半数以上の傭

兵崩れ達を吹き飛ばす。

威力は低いが複数に当てられる散烈拳と、威力が高くて速度が速いが一度に一発分しか撃てない居合拳を合わせて互いの弱点を解消し、さらに命中率を高めて長所を伸ばした凶悪な技だ。ぶっちゃけ雑魚相手にはこれだけで十分である。

「ひゅ～！　リュウってばやるねぇ」

「……っ！！」

軽口を叩くステンさんの隣からサイアスさんが飛びだし、あっという間に間合いを詰めて瞬速の居合いで反応できていない傭兵達を斬り捨てていく。一応みねうちなのは村と言う場所に配慮しているのだろう。

「この！　てやっ！」

リンプーさんもにゃんにゃん棒を巧みに操り、手近な連中からフクロにしていく。

「っと、おいらもがんばらないとっ！」

ステンさんもナイフを器用に使いこなし、鮮やかな手捌きで傭兵達を次々と無力化していった。

「！？　こりゃやべえな。お前ら引け！　引くぞ！」

指示を出していた盗賊は不利を察するとすぐさま撤退の合図を出した。周りの連中は逃げるとなると素早いようで、傷を負いながら

も蜘蛛の子を散らすように四方八方へと逃げ去って行く。

「ほいっ！　……あ、動くと斬れちゃうよ？」

「あ……ぐ」

しかし逃げ出そうとしていた一人を捕まえ、ステンさんが首筋にナイフを当てる。

「……こ、降参だ」

捕らえられた傭兵は持っていた武器を足元に落とし、両手を上にあげて降参の姿勢を取った。ステンさんはまだ油断なく首筋にナイフを当てたままだ。

周りに居た男達は既に逃げ去ってはいたが、情報を引き出すならこいつ一人で十分である。他の連中の気配が無くなった事を確認すると、俺はその男の方へ向き直った。

「ランドさんとデイジイさんはどうした？」

「……う、裏だよ」

男は観念した様子だったので嘘ではないと判断し、俺とボッシュでこいつらがやってきた家の裏手の方へと向う。

「！！　ランドさん！？」

家の裏手、畑の真ん中に血まみれの状態で横たわっているランドさんを発見するのに時間はかからなかった。

「相棒……」

「……大丈夫、息はある」

近寄って見るとランドさんはかなりの重症だった。俺はその場で治癒魔法をかけ、応急処置を行うと辺りを改めて見回したが、デイジイさんの姿はどこにもない。

「おい！　デイジイさんはどうした！」

ランドさんを背負い、表に戻って捕まえている男を問いただす。

「し、知らねぇ」

「あっそ。いけね、おいら手元が狂うかも……」

「い、いや本当に知らねぇ。俺たちは雇われただけで……攫った後はあいつ等が連れてったから場所も知らねぇ」

「あいつらってなぁ誰だい？」

「あ、あの盗賊連中だよ」

「……」

どうやら本当にこいつは知らないらしかった。取り合えず周囲……と言っても隣家が遠いがそこへ助けを求めると、快くベッドを貸して貰えた。

少々手狭なベッドに寝かせたランドさんは命に別条はなさそうだったが、念の為に俺は治癒魔法をかけ続け、リンプーさんやステンさん、サイアスさんは引き続き捕らえた傭兵への尋問を続けた。

少しの時間のあと、大体目立つ外傷を治癒し終え、みんなが部屋へと入ってきた辺りでちょうどランドさんの目が開いた。

「母ちゃん！」

ガバッと身を起こしたランドさんの第一声はここには居ないデイジイさんの安否のセリフだった。

「あ……ここは……？」

「ここはランドさんの隣の家ですよ」

「え？　あ……お前らは……」

「よ、旦那。久々の再開に酒でも酌み交わしたいトコですが……大丈夫ですかい？」

「ステン……？」

「何があったってんです？　旦那がああまで痛めつけられるなんざ只事じゃないですぜ？」

「そうだ。あいつら母ちゃんを……」

話によると、最初に家に妙な客がやって来たらしい。それをデイジイさんがいつもの調子で怒鳴って追い返したら、そのすぐ後に武

装した集団が大挙して押し寄せてきたそうだ。そしてデイジイさんが気絶させられて連れ去られ、ランドさんももちろん抵抗したが、数が違った為に数人殴り飛ばした所で意識を無くしたらしい。

捕まえた男からもたいした情報は得られていないようで、デイジイさんがどこへ連れて行かれたかはわからなかったようだ。

「……手掛かりなしですか」

「いや、あるぜ。最初あいつ等は領主の使いだとか言ってやがった」

「領主？」

「この近辺の領主は確かキルゴアって男だよ。ただ特に悪い噂とかは聞かない人間だったと思ったけどね」

俺が誰の事かわからないといった顔をしていると、横からステンさんが補足してくれた。

「俺も聞いた事はねぇよ。だがそう名乗ったのは事実だ」

「じゃあその領主とやらに聞けば何かわかるかも知れませんね」

「ああ」

「どこに住んでるんですか？」

「確か……」

その領主はガンツのはずれのお金持ちの住む地帯に邸宅を構えて

いるらしい。ガンツとファマ村を行ったり来たりだが、そんなことはこの際どうでもいいことである。

「じゃあそこへ行きましょう」

「……いいのか？　お前等には直接は関係ないぞ？」

「何言ってるんだよ！　あたし達だってデイジイさんにはお世話になったんだから当たり前だろ！」

リンプーさんが当然のようにランドさんへ反論している。もちろん俺も同じ気持ちである。デイジイさんには一宿一飯の恩義もあるし、見捨てるなどと言う選択肢は最初から無いのだ。

（そう言えば……）

俺はファマ村を出る前日の記憶を思い返してみた。あの料理中の時にも妙な来客に対してデイジイさんは怒っていた。そして確か聞えてきた言葉に「領主」という単語があったはず。

恐らくあれも何かしら関係はあるだろう。となると、他にも「エカルさん」と言う単語がその時には出ていた気がするが、その事は取り合えず置いておき、俺たちはランドさんを加えて再びガンツへと進路を取るのだった。

第十章　5、伝手

ガンツへと向かう前、捕らえていた傭兵の処遇については全員一致でランドさんに任せることとなった。ランドさんは自分の姿を見るや怯えて謝ってくるその男を無言で睨んだあと、意外にも一発だけぶん殴って釈放とした。胸中複雑そうな表情のまま、慌てて逃げ去って行く男の背中を見るランドさんは何を思っていたのだろうか。

その後、辺りが夕焼けから夕闇に変りそうな時分になって再度ガンツの街へとやってきた俺達は、ステンさんに案内されて別荘や邸宅が立ち並ぶ高級住宅地へとやってきていた。

立ち並ぶと言っても一軒一軒の敷地が半端なく広く、ファマ村とは別の理由で家同士の間隔が大きい。確かに景色も悪くないし過ごしやすい地域ではあると思えたが、ほぼ全てと言っていい家が泥棒等の対策の為に強固な壁で覆っていたり門番を配置していたりと、厳重な警備が景観との間でミスマッチを起こしている感は否めない。

「ところで、デイジイさんが攫われた理由には心当たりとかってあります？」

「さぁな。母ちゃんは村じゃ働き者で通っていたし、誰かの恨みを買うとも思えねぇからさっぱりだ」

今わかっている手掛かりは、キルゴアと言う領主が誘拐に関わっているかもしれないと言う事だけである。ランドさん曰く、デイジイさんは当然のように周りとの人間関係も良好だったから怨恨の線は薄いらしい。そうなると余計に狙われた理由がわからないが、悩

んでも答えは出なそうだ。

そんな感じでキョロキョロしながら歩いて数分。

「着いたよ。ここが領主キルゴアの屋敷さ。でも前に言った通り、別に悪い噂とかはない平凡な男なんだけどねぇ」

「何これ!?　あたしこんなでっかい家初めて見た……」

リンプーさんが驚く通り、確かに屋敷はデカかった。今居る場所は巨大な門の前だが、その奥の方に宮殿のような城のような立派な建物が立っているのがわかる。庭にも噴水やら花園やらが普通に配置してあり、ここがヨーロッパかどこかなら高級リムジンが数台止まっていてもなんらおかしくないような雰囲気だ。

しかしそれとは別に、その光景に俺は何か違和感を覚えた。少しだけ辺りを見回すと、大して考えなくてもその正体にはすぐ気が付いた。

「……何で誰も居ないんですかね？」

門の隣に門番の詰め所のような建物もあるのだが、そこには誰も居なかった。寂れていると言う程荒れている訳でもないので、最近まで人は居たような気配は残っているがそれだけだ。この人数で門の前に居ようものなら即注意されそうなのに何もリアクションがない。

「食事時かなんかじゃないのか？　それより問題はどうやって会うかだ」

「「「……」」」

ランドさんの言葉に全員が押し黙る。ぶっちゃけ会う方法とか全くのノープランである。

当たり前ながら門は施錠されており、いつぞやのように陽動でもして強引に押し入るのはこの人数では目立ち過ぎるし、兵士が居る訳でもないから意味がない。それにあの時は俺の記憶を頼りに半ば確信に近い物があったからこそ、それを根拠に荒事にしたが今回は事情が違う。

「門番の人も居ませんし……飛んで行きましょうか？」

「いや、それは止めといた方がいいよ。確か侵入者撃退用の魔法感知システムが設置されてるって前に聞いた事があるんだ。おいら飛んだ事ないから引っ掛かる自信大有りだね」

「……」

ステンさんの言葉が事実だとすると、飛ぶのはコツを覚えるまで若干かかるので確かにセンサーに引っ掛かる可能性は高そうだ。その場合悪いのは不法侵入の俺達だから、万が一にでも領主が関係なかったとしたら余計な手間がかかりそうなのは目に見えている。

「相棒、普通なら誰か仲介役みてぇなのが居ねぇと駄目なんじゃねぇのかい？」

「仲介役ねぇ……」

ボッシュの言葉は至極正道。とは言え俺がこの辺のそんな人など知る筈もない。かろうじて領主と何か関係がありそうと言えば、デ

イジイさんの怒鳴り声に含まれていた「エカル」さんとやらくらいだ。

「ランドさん、「エカル」って人知ってたりします？」

「エカル……？」

俺の言葉に何かを思い出したようなランドさん。

「ウチの村に以前から商売をしに来ていた男が確か「エカル」って言ったな。そういやそいつも金持ちだし、この辺に家があると聞いた覚えがあるな」

「へぇ」

なんとなく繋がりのような物が見えてきた気配を感じる。

「なら、領主とも知り合いの可能性大きいですね」

「……そうだな。金持ちの事は金持ちに聞くのが一番てっとり早いかもな」

鍵の掛かった門の方を忌々しげに睨むランドさん。

（それにしても……なんかなー、エカルってどっかで……？）

俺は俺で何か記憶の片隅に引っ掛かっているような気持ち悪い感覚を覚えていた。元の記憶での話ではなく、魔法世界に来てからの話でエカルという名前をどこかで聞いたような気がしているのだが思い出せない。

「相棒、その指輪の元の持ち主が確かそんな名前じゃなかったか？」

「！　あぁ！」

ボッシュに言われて一気に引っ掛かっていた物がとれた。言われてみると俺の持つ魔法発動体の指輪「竜のなみだ」が祀られていた城の持ち主が、確かそんな名前であった事を思い出す。あの時は特に印象とかが薄かった為に記憶の片隅に追いやられていたようだ。

「じゃあここに居てもしょうがないし、その「エカル」さんの家に行ってみましょう」

既に辺りは夕闇から「夕」の字が消えかかっているが、そんな事はお構いなしにステンさんに案内されて行く俺達。領主と違ってそっちの人は一応話しの出来る人であることは確実なので、まだ希望は持てる。

領主の屋敷前からまた少し歩いたところに、そのエカル氏の邸宅はあった。流石に領主の屋敷程ではなかったが、それでも十分な豪邸である。こちらは普通に門番が立っているようだ。

「ランドさん、エカルさんと面識あります？」

「いや、ねぇな。遠目にちらっと見た事があるくらいだ」

ステンさんやサイアスさんの方も見てみたが、両者とも首を横に振った。そうなると覚えてないとはいえ、一応会った事のある俺が何故か一番関係が近い？という不思議な結果になってしまう。

「ねぇねぇ所でさ、リュウってその人と会った事あるの？」

「え？　まぁ……会ったと言うか……ちょっと以前色々ありまして」

俺とボッシュのさっきの会話に疑問を感じたのか、リンプーさん以外の面子にも頭上に？が浮かんでいるのがわかる。依頼がどうだとか言うとさらに根掘り葉掘り聞かれそうなので適当に誤魔化しておく俺。

「そんじゃ、やましい事もないし正面から堂々と行ってみますね」

俺は周りの疑問を軽やかにスルーすると、一人で門番の人に声を掛けに行った。

「うん？　なんだい坊や。ここに何か用かい？」

当たり前だが門番の人に話しかけられた。別段感じが悪いわけでもない普通の人だ。

「あの、エカルさんにお会いしたいんですけど……」

「……理由を聞いてもいいかな？」

門番の人はなんとなく優しげな感じで意外と食いつきは悪くないが、堂々と人攫いと関係ありますか？なんてこの場で聞く訳にもいかない。また、いきなり「紅き翼」がどうのと言ってもまだ知名度はそこまで高くないから何言ってんだコイツ？的な目で見られそうだ。

「えーと……お、お金持ちになるにはどうしたらいいのかなーって

教えてもらおうかと……」

咄嗟に口を突いて出た適当な答え。見た目１０才程度の俺がこんな質問とか世も末だと思われてもおかしくない。

「ハハッ、そうだねぇ。そう言う事はもう少し大きくなってからね。さ、もう遅い時間だ。危ないから早くおうちへ帰りなさい」

「……」

苦笑いで普通に流されてしまった。その後も色々とお話聞きたいんですが攻撃を繰り返すも効果は今一つで取り次いでさえくれない。話の中で領主と会いたいから橋渡しをして貰えませんか？とも言ってみたがこれも拒否。ある程度予想出来ていたとは言え、暖簾に腕押しとはこの事である。

（まだまだ……）

それでも諦めない俺のしつこさに少しずつ面倒そうになってきた門番さん。だがこれは逆に一気にイケるチャンス到来な気がしないでもない。俺はタイミングを測って門番さんのストレスが溜まってきたところで、最後の手段に出た。

「じゃあ「紅き翼」の者が会いたいっていう風に伝えてもらえませんか？」

「……紅き翼？　今度は一体なんの事なんだい？」

「お願いです、その一言だけでいいですから伝えてください。これが最後ですから！」

「あーもう、わかったわかった。言うだけ言うから、それで駄目だったら帰りなよ？」

最後の手段、「これで最後」の言葉でようやく門番さんが折れてくれた。

（計画通り……！）

これは一種の賭けではある。「紅き翼」は以前エカル氏からの依頼をこなしたわけだから伝えて貰えさえすればイケる可能性は高いと踏んでいたのだ。門の隣にある小さな小屋的な詰め所に門番さんが引っ込んだあと、その中で電話のような機械に向かって喋る門番さんが驚愕の表情を見せるのがわかった。

どうやら俺は賭けに勝てたらしい。

「いやぁ、家の中は無理だけど後で尋ねるから街の宿で待っていてくれってさ。宿代はこちらで持つ、と伝えてくれと。君、「紅き翼」って暗号か何かなのかい？」

「いえ、ちょっとしたことですよ。ありがとうございました」

心底不思議そうな門番さんに愛想笑いで返してお礼を言うと、俺はみんなの元へと戻ってアポが取れた事を伝えた。しかしこんな所であの時の伝手が活きてくるなんて、全く人生いつどこで何がどう役に立つか本当にわからないものである。

「ねーリュウ、一体どんな手使ったの？」

「おいらもわかんないな。どうやったんだい？」

「えーと、まぁ色々と複雑な事情がありまして……」

「ふ……不思議……」

まさかの一発ＯＫのせいでさらに大きな質問責めに会うことに。

流石にスルーは厳しくなって来たので長々と説明する羽目になる俺（と巻き添えのボッシュ）だった。

そんな感じで他に手も無いので大人しく街の方へと戻り、宿を取って夜を待つ俺達一行。広めの部屋に集まり、あまり明るくは無い雰囲気の中で時間と格闘していると、ちょうど真夜中の０時頃に部屋のドアがノックされた。

「どうぞ」

ギィィと立てつけのあまり良くないドアを開けて現れたのは、シルクハットを深めに被り、ステッキを持った紳士とお付きの人という風体の二人の男。柔らかな物腰ながら、どこか周囲を伺うようにそわそわしているような印象を受ける。

「失礼、こちらに「紅き翼」の人間が居ると聞きましたが……？」

開口一番低くてダンディな声でそう切り出したシルクハットの人。

恐らくこの人がエカル氏本人と思われるが帽子が影になっていて顔が良く見えない。

「それ、俺です」

そう言うと、一瞬だが俺の方をちらりと見たようだった。そしてそれは疑っているような視線だという事はすぐにわかった。

「……何か証拠などお持ちではないですかな？」

「証拠、ですか……？　あ、この指輪に見覚えありませんか？」

俺は指に嵌っている指輪を提示した。シルクハットの人はそれをじっと見つめると、ハッと何かを思い出したようだった。

「コレは……そうだ。確かにあの時見た呪われた指輪……！」

改めて俺の方を見ると、ようやく納得したのか大きく安堵の溜め息を付くシルクハットの人。どうやら信用を得ることが出来たらしい。

「失礼、少々お待ちください」

そう言うとシルクハットの人とお付きの人は半歩ばかり下がり俺達から距離を取った。そして軽快に指を鳴らすと、ポンっという軽い音を立てて二人の足元から煙が立ち上る。その煙が晴れた所に現れたのは、立派な髭を生やした――――カエル。

（うわっ……）

「先程までの姿は主に外での活動用でしてな。改めまして、エカル・ホッパ・ド・パ・タパタ伯爵です。お見知りおきを」

そう言ってピシリと様になった挨拶をするエカルさん。見た目通

りにカエルの亜人、葡萄族（クロウラー）という種族だろう。初めて見る等身大の二足カエルに多少面食らったが驚くのも失礼かと思い、平静を装って挨拶をする。

「こちらこそ、俺は「紅き翼」のリュウです」

「あたしはリンプー」

「おいらはステンさ」

残り二人、サイアスさんは無言で軽く頭を下げ、ランドさんは口も開かずに黙ってエカルさんを睨んでいた。

「よろしくお願いします皆様方。先程はリュウさんには失礼を。いやはや年のせいか物覚えが悪くなりましてな。疑うような真似をして申し訳ありません」

「いえそんな……」

どことなく好々爺な感じの笑みを浮かべるエカルさん。こちらも忘れていたのだからお相子だということは心の中にしまっておく事にする。

するとここで今まで黙っていたランドさんがズイっと前に乗り出した。

「おっさん、不躾で悪いがあんたに頼みがある」

「……なんでしょう？」

「……なんとか俺達を領主に会わせて貰えねぇか？」

「！」

その言葉に妙にビックリした様子のエカルさん。何かいきなり核心を突かれたような、そんな表情である。そしてまじまじとランドさんを見ると何か納得した表情を浮かべた。

「君は……そうか。デイジイさんの……」

その途端、俺を含めて全員が驚いた。エカルさんは部屋の床に膝をつき、ランドさんに土下座をし始めたのだ。

「！　そりゃ何の真似だ！？」

「すまない……私のせいだ」

ランドさんもいきなりの土下座に戸惑っている。俺含めて周りもどうしていいかわからなかったが、俺は思っていた疑問を口に出してその雰囲気を打開することにした。

「あの……エカルさん、紅き翼が居ると知ってこっそりと訪ねてきたって事は、何か頼みたい事柄があったりするんですか？」

俺の言葉にゆっくりと顔をあげるエカルさん。何かに縋るような、心底申し訳なさそうな表情をしている。

「……はい。実は……キルゴアさんと私の息子と……デイジイさんを盗賊達の手から助け出して欲しいのです」

「「「!?」」」

その唐突過ぎる救出依頼にことさら戸惑う俺達。

「あの、助けるってどういう……？」

「それが……」

そこからポツポツとエカルさんは話をしだした。

事の発端はエカルさんの息子、エカル・ホッパ・ド・ペ・タペタが流れ者の盗賊達に誘拐された事だった。エカルさんの元に賊から突き付けられた要求は、身代金ではなく何故か領主のキルゴアさんと会わせろと言うものだったらしい。

「何ソレ？　変なの。普通誘拐したら代わりにお金を貰おうとするんじゃないの？」

リンプーさんが素直な感想を口にする。その点は俺も同感である。エカルさんは続けて話をしてくれた。

「私も当初はそう思いました。しかし彼らの狙いは初めからキルゴアさん本人だったのです……」

それ以外は何も要求が無かったために、それで息子を返してもらえるのならばと、キルゴア氏と結託して落ち合う場所の周囲を傭兵を雇って固めたのだそうだ。ノコノコと入ってきた盗賊一味とキルゴア氏が話をした後、息子のタペタさんを取り返して一網打尽にする腹積もりだったらしい。

「ここからが不可思議なのですが、その賊の頭目と思われる男がキルゴアさんに何か腕輪のような物を付けさせてから、目に見えてキルゴアさんの様子が変わってしまったのです」

「「「……」」」

妙な話だった。その腕輪を付けさせられたキルゴア氏は操られたように盗賊の言う事を聞くようになってしまい、エカルさんの言葉にも耳を貸さなくなってしまったという。それによって領主と言う金づるを手に入れた盗賊達は今もあの豪邸で好き放題しているらしい。

「なぁ、じゃあなんで母ちゃんが攫われたんだ？」

ランドさんの最もな疑問。それに対してエカルさんは苦々しげに答えた。

「あいつらは、今度はデイジイさんの住むファマ村に自分達用の別荘を作らせようとしたのです。彼女はあの村で一番の働き者でしたから、彼女さえ了解すれば他の住人も容易く折れるだろうと……。どうも国から目を付けられないよう合法的に土地の権利を手に入れようとしているようだったので、私はなるべく逆らわないようにとデイジイさんに使者を送ったのですが……」

「そんなくだらねぇ事の為に……ッ！」

「家に火を付けて本人攫っといて今更合法も何もないと思うけどねぇ」

ギリッと怒りの表情を浮かべるランドさんの気持ちはわかる。ス

テンさんの言う事も最もであるが、それくらいは多分金の力で揉み消せるのだろう。

しかし事情はわかった。つまりエカルさんも領主のキルゴアさんもその盗賊連中の被害者だと言う事だ。

「おっさん、ってことは母ちゃんは無事なんだな？」

「はい。今は屋敷の方で土地の権利を譲るまで軟禁状態となっています。しかしデイジイさんは決して首を縦には振らないでしょうし、危険が及ばないとは言い切れません」

少なくとも2，3日ならデイジイさんに危険はないだろう。デイジイさんに対して強硬手段に出るまでの間に救出あるいは盗賊の殲滅を行えばいいと言う事になる。

「その息子さんはどこに？」

「恐らくタペタも屋敷に居ると思いますが……行方がわからないのです」

エカルさんは出入りは出来ているみたいだが、捕われているハズのタペタさんを見つけられていないらしい。

「なるほど、だから紅き翼を頼った……と言うわけですか」

「そう……なります」

エカルさんは渋い顔をしたまま頷いた。恐らく盗賊達によって外への情報発信も制限されているであろう所へこのタイミングでやっ

てきた「紅き翼」は、正に渡りに船だったのだろう。

「なんかよくわかんなかったけど、要するにその盗賊が悪いってことだよね！　ぶっとばしちゃおうよ！」

リンプーさんが強引に纏めてしまったが要するにそういうことだ。気になるのは領主に付けさせた腕輪とやらだが、今の状況だと多分考えてもわからない。

「おいらもランドの旦那のお袋さんには昔ちょいと世話になったしねぇ。そういうことなら手伝うよ」

「……っ」

サイアスさんも含めて、どうやら皆さんやる気らしい。

「じゃあもう少し詳しい情報を……」

俺がそう言おうとしたところで、影の薄かったお付きの人がなにやら懐中時計のような物を取り出すと、慌ててエカルさんに耳打ちした。

「……申し訳ありませんが、今夜はこれで失礼させて頂きます。何分私にもあまり自由があるわけではありませんが、明日またこちらへ訪れますので……」

恐縮そうにエカルさんはそう言った。恐らく盗賊に行動も監視されているのだろう。難儀だが致し方ない。目を盗んで来て貰っただけでも十分ありがたいのだ。

「……わかりました。わざわざありがとうございました」

そそくさと去っていくエカルさんとその付き人を見送り、取り合えずデイジイさんが無事である事に安堵しつつ、これからどうするか考える俺達だった。

第十章　6、潜入

エカルさんとその付き人が帰って行った後、話し合いをしようとするもデイジイさんの無事がわかって気が緩んだのか早々にランドさんが眠気に負け、詳しくはまた明日と言う事になって俺達は休むことにした。

濃い一日であったためか俺とボッシュ以外は全員昼過ぎくらいまで寝入ってしまっており、周りが起きだしてきた時には既に日は頂点を少し過ぎた辺りだったが、そこで気を取り直して情報の整理を行うことになった。

エカルさんからの依頼内容は至ってシンプルでポイントは大まかに４つ。

・デイジイさんの救出
・エカルさんの息子タペタさんの救出
・領主キルゴアさんの解放？
・盗賊の殲滅

以上である。

人質は優先的に取り戻しておかないと、ガチでやり合う事になった時にこちらが不利になる事は明らかだ。つまりそれまでに屋敷に忍び込むなりしてバレないように人質を助ける必要があるということになる。理想を言えば３人の同時確保が望ましい。だがステンさんの言うセンサーのおかげで外から入り込むのは中々に骨が折れることが想像できる。

「……と、まぁ大体こんな所ですね。問題はやっぱり人質の確保ですが……」

「ね、もうさ、屋敷ごとぶっ壊すとかどう？　で、壊した所から入ってってみんなを助けて盗賊もぶっ飛ばす！」

「はぁ……アネさん、その屋敷に近付くのが難しいって話なんだよ？　それにもし壊した所に人質がいたらどうするのさ」

「あう……」

「忍び込むって言うけどよ、俺たちに出来る事っつったら暴れるくらいしかないぜ？」

「……」

ランドさんの言葉に、サイアスさんが任せろ！と言わんばかりに刀に手を掛けて気合を入れている。実際ランドさん達にわざと陽動としてセンサーに引っ掛かってもらって、その隙に俺とステンさん辺りで屋敷へ潜入と言うのもありと言えばありだが、昨夜の話を聞く限りでは盗賊達はどうも無駄に慎重そうなので、そうそう引っ掛かってくれるとも思えない。

「暴れるのはまぁ最後に取っておいて……実は俺に考えがあります」

「「「？」」」

全員の視線が俺に集まる。昨夜周りが寝静まった後、実はこっそりと考えておいた秘策があった。それにはエカルさんの協力が必要不可欠だが、上手くすれば全員で堂々と正面から屋敷に入る事がで

きるかもしれない案だ。

「昨日のエカルさんの話だと、盗賊達が屋敷で好き放題ってことなので、結構中は汚く荒れていると思うんですよ」

「ふんふん」

「で、門番が居なかった事からも、あの屋敷で働いていた人間は解雇されたか逃げ出したかで、お手伝いさんとかも減ってると思うんです」

「それで？」

「おいら何となくわかってきた」

「エカルさんに協力してもらって、臨時の執事とかメイドとか掃除夫とかに扮して潜入すると言うのはどうでしょう？」

「「「……」」」

（あれ……？　リアクション薄……）

結構自信あったのだが周りの反応が全く無くて、なんか得意げに披露したのが妙に気恥ずかしくなってくる。

「あの……何かおかしなトコとかありました？」

「リュウ、あたし掃除とかあんまりできない……」

「その前に俺やサイアスの体格でそれは無理があるだろ」

「ていうか、おいら達顔バレてるんじゃないの？　旦那の家の前で暴れたし」

一瞬の間を置いて反応が返ってきてちょっと安心。リンプーさん以外は至極最もな突っ込みである。確かにステンさんの言う通り顔が割れていては入り込む事などできない。となれば答えは簡単。別人に成りすませばいいのだ。

「その辺はご心配なく。こんな時の為に、俺変装の魔法が使えるんですよ」

「ホントに！？」

「マジかよ」

「ええ。身長体重性別まで見た目を変えられます。それもちょっとやそっとじゃ見破れません」

そう、以前エヴァンジェリンさんに教わった変装魔法である。正体を隠して潜入するとなれば、これほどおあつらえ向きの魔法はない。実際ジンメルの街で効果は実証済みだ。

試しにと目の前で実演して見せたところ、流石に納得せざるを得なかったような表情のランドさん達。他にいい案も出ず、反対意見も特になかったために見事採用ということになった。

いきなり向こうでぶっつけと言うのもどうかということで、取り合えずそれぞれに変装魔法を掛けてどんな感じか見ることになり、何故か始まった壮絶なジャンケンバトルの結果、まずはリンプーさ

んに魔法を掛けることとなった。ちなみに変装後の姿は全て俺がプロデュースすることになると前もって言っておいてある。

「……こんな感じでどうでしょう」

「……」

リンプーさんは元々活発な感じの赤いショートカットだったのを大きく変え、腰まで届く金髪に鋭く尖ったトンガリ耳、肌の色は全体的に青っぽくしながらも胸までを覆う赤いハイレグな衣装で凛とした感じを引き立たせる、と言う魔族的な感じのアダルティ色溢れる妖艶な美女へと変化させた。

「……ね、ねぇ。なんかさ、凄い大人な女になってない？　あたし」

うわーっと言った表情でクルクル回ったりして自分の姿を確かめているリンプーさん。もちろん胸はかなり増量しておいた。

「……」

「……」

ステンさんが無表情のままで、しかし目が俺の方に「わかってるねぇ！！」と訴えてきていた。もちろん俺も同様に全くの素知らぬ顔で、「バッチリっすよ！！」と目で返している。ステンさんとは実にいい酒が飲めそうである。主に趣味的な意味で。

「何かちょっと恥ずかしいかも……」

リンプーさんの恥じらいはなんか新鮮でしばらく見ていたいもの

であるが、まぁなんとかそれは克服してもらうとして、次にサイアスさんに魔法を掛けた。

元々スラッとした長身で顔の雰囲気が目元の隠れたアイリッシュ・セッター又はアイリッシュ・テリア風?な感じだったのを思いきってイメチェンし、身長を低くして耳を大きく、緑の着物のまま丈を揃え、寡黙な雰囲気を一掃したブルドックとセントバーナードを足して2で割った風?な青年に変えてみた。少々小太り気味に見えるが話しやすい穏やかな空気を醸し出すことに成功している。

「……」

するとどこからか取り出した手鏡をじっと無言で覗き込むサイアスさん。

「ど、どうでしょう……?」

「……いい」

実は内心おっかなビックリだったがどうやら意外と満更でもないらしく、気に入ってくれた?ようだ。

「じゃ次はランドさんですね」

「……確かに恥ずかしいなこれは」

ランドさんは特徴と言ってもいいその巨体を正反対に縮め、ピンク色の甲殻にちょっとした角を持ったデフォルメ型アルマジロといった感じにしてみた。尻尾が長く、ぐりぐり目でマスコットキャラといっても通じそうな可愛さである。ポケ〇ンの中の一匹と言って

も違和感がない。

「ぷっ……あはははは！　ランド可愛い！」

「くくっ……だ、旦那……に、似合ってますぜ……っ……」

「か……可愛い」

「すげぇ変貌っぷりだなぁこりゃ」

爆笑一名、目を背けて笑いを堪えてるの一名、ニヤリと笑いグッと親指を立てる者一名、俺の趣味に若干呆れている者一匹。概ね好意的な反応である。

「……リュウお前、後で覚えておけよ」

いくら凄まれようとも、今のランドさんは俺より身長の低い愛らしさ万点のポケ〇ン。全く持って迫力など皆無なので、覚えておけと言われてももちろん忘れる予定の俺である。

「じゃ最後だし、おいらはカッコよくしておくれ」

「わかりました」

そして最後に魔法をステンさんにかける。ラストと言う事で気合を入れ、元々はどう見ても猿だったそれをむしろそっちの方向へと進化させる。炎のように逆立った赤い頭髪、牙を生やした眼光鋭い厳つい顔、ボディには金属と生物の中間のような半生物的見た目の鎧を着け、腰から下は最早原型なんて知るか！とばかりに炎の車輪を回転させているという人とは程遠いデザインに仕上がった。

「「「「……」」」」

「……やりすぎだろ」

「あたしもそう思う……」

「い……良い」

「いやいやおいら結構好きだよこれ」

「相棒、いくらなんでもこいつぁ……」

「まぁそうだよね」

多数決の結果ステンさんの姿はあえなく没。まぁ確かにあの姿で掃除したりとかシュールにも程がある。結局ステンさんは種族を人間に変え、どこから取り出したのか伊達眼鏡を掛けた普通の町人Ａと言った感じになった。ちなみに俺は青い髪はそのままに１６、７才くらいの容姿で黒い執事服、と言った格好である。

「なんかさー、リュウとステンだけ普通すぎない？」

「お前らも妙な格好にしろよ」

「じゃあエカルさんに話して、上手く出来そうだったらこれでいきましょう」

「「……」」

若干恨みがましい目で見てくるランドさんとリンプーさんの二人だがここはスルー。そんなこんなで夜を待つと、再び深夜になってエカルさんとお付きの人がやって来た。

考えた作戦を話すと特に反対は無く、早速明日盗賊達に進言してくれるらしい。俺の読みはそんなに外れてはいなかった様で、使用人等はかなりの数が解雇されているらしかった。

これは余談であるが、領主のキルゴアさんはエカルさんとは元々貿易仲間だったそうで、彼は珍しい調度品や食べ物などが好きな好事家なのだそうだ。しかし今では盗賊達により、金目のものは全て換金されて自慢のコレクションも酷い有様だとの事。

「恐らく明日の午後にはお呼びすることができると思います」

「わかりました」

ある程度どうするかの話をした所で、昨夜自分の屋敷を抜け出した事が盗賊達に多少怪しまれたかもしれないらしく、前日ほど長い時間を取れずにエカルさんはすぐに帰ってしまった。

「じゃあ明日の潜入作戦に備えて今日はもう休みましょう」

「緊張するー……」

「今に見てろよ盗賊ども……」

エカルさんに確認を取れたことで決行が確定し、その日は早くに就寝する俺たちだった。

翌日、言っていた通り正午の辺りでエカルさんの使者が宿へと俺たちを呼びに来た。あまりの屋敷の汚さに臨時で雇いの人間を入れると言う事で、それ専用の紹介所から無差別に選ばれたのが俺達という設定だ。各々に変装魔法を掛け、改めて領主邸宅へと赴く。

問題なく敷地内に入れたが、屋敷では本来の入り口ではなく、勝手口らしき場所から中へと案内された。中に入ってみるとそこでは緊張した面持ちのエカルさんが待っていた。

「いくつか盗賊達に絶対に入るなと厳命された部屋があります。恐らくそこに何かあると思いますが……どうかよろしくお願いします」

「わかりました。ここから先は俺たちが何とかしてみます」

「よーし、がんばろー！」

「アネさん、ボロ出さないようにね」

「しかしこの格好だと動き辛いな」

「が……頑張る」

入ってみてわかったがやはり屋敷はかなり広く、部屋数も尋常ではない。俺たちはカモフラージュ用の掃除具等を持ち、人質の捜索を開始するのだった。

第十章　7、捜索

「ちっ、昼間っからバカ騒ぎしやがって……」

「まぁまぁ、ムカつきますが俺達にとっては都合がいいじゃないですか」

勝手口のある厨房から出てみると、廊下一杯に粗野で下品な笑い声が響いているのが耳に入った。恐らく盗賊集団がどこかの部屋で酒盛りでもしているのだろう。ランドさんを宥めつつも、俺は俺で今のうちに精々夢見てろや、と内心で文句を言ってみる。騒いでいると言う事はそこに人数が集中していると言う事である。即ち出くわす可能性が低くなって捜索がやりやすいということだ。

「じゃあ手筈通りに俺とランドさん、リンプーさんで一階を」

「おいらとサイアスの旦那で二階だね」

「ボッシュ、連絡係よろしく」

「おうよ。任せな相棒」

屋敷の内部は全三階建てで、そもそも三階は階段を上がった所に見張りが居て入る事すら出来ないらしい。怪しさ大爆発だが、取り合えずは一階と二階を手分けして捜索するのだ。ボッシュは俺と念話ができるので、ステンさん達の方に付いていって何かあったら連絡を取る事になっている。定位置はサイアスさんの服の中だ。

「じゃあ行きましょう」

「ああ」

「ねぇ、もし会っちゃったらぶっ飛ばしちゃっていいかな……？」

「いやそれじゃ何のために変装してるんですか……」

リンプーさんはなんか腕力に訴える事が多いのが心配だ。ちなみに格好はハイレグだとあまりにあんまりなので、露出の少ない服装をしてもらっている。不謹慎だが少し残念なのは秘密である。

屋敷の中央にある階段でステンさん達を見送って改めて左右を見渡してみると、無駄に長い廊下にズラリと並んだ扉の数々が目に飛び込んでくる。あまりの部屋の多さにこれだから金持ちは……と毒づきたくなるのも無理は無いだろう。

「さて、一部屋ずついきますか」

「おう、待ってろよ母ちゃん……」

そして俺達は一部屋一部屋丹念に調べて周った。酒盛りをしている部屋と入るなと言われている部屋はひとまずスルーし、それ以外の部屋を掃除するフリをして物色していく。盗賊の居る部屋もあったが、俺達が掃除に来たと知ると文句を言いながらも渋々出ていく姿が少し笑えた。実際入ってみるとどこの部屋も汚く、フリとは言え目立つゴミを片付けるだけでも面倒な作業だった。しかし目的の人質は案の定と言うか影も形もない。

「いねぇな。となるとやっぱり入るなって言われた部屋か……」

「それとも三階か、だね」

「一旦ステンさん達と合流しますか」

とりあえず一通り周ったところでボッシュへと念話を送る。あちらは主に寝室ばかりなようで散らかってはいたものの、やはり人質は居なかったらしい。

「二階は駄目だね。それっぽい部屋はなかったよ」

ステンさんの報告を受け、俺達は立ち入り禁止を言われている部屋へと足を向ける事にした。一階の部屋の内、入るなと言われた部屋は全部で3つある。二部屋は隣同士になっている部屋で、もう一つは少し離れた所にある部屋だ。全員で集まった後、そこから距離の近い隣り合ってる二部屋の方へと向おうとしたまさにその時……

「おいお前らぁ、どこ行くんだぁ？」

「「「！！」」」

突然後ろから声を掛けられた。

恐る恐る振り返ってみると酔っ払った盗賊が二人ほど立っている。恐らくトイレにでも行く所だったのだろう。さすがにそこまで幸運は続かないらしい。それにしても豪華な服などもあるだろうに、一目でそれとわかる服装をしているのは彼らのアイデンティティか何かなのだろうか。

「いえあの、あちらの部屋のお掃除がまだ……」

「ああん？　あそこは入んなって聞いてなかったのかぁ？」

「もう終わったんだろぉ？　いいからとっとと帰れよなぁ……」

（おのれ酔っ払いめ……）

二人は舐めきった態度で俺たちに忠告してきた。まだ人質の一人も発見できていないこのタイミングで事を荒立てるのはよろしくないので、ペチ倒す以外の方法を模索する。

（どうする？　やっちゃう？）

（いえ、今考えてますからちょっと待って下さい）

（ったく面倒だな……）

こそこそと話し合うもこのままだと手が出そうな人が多いので、とりあえずここは従ったフリをして一旦離れるのが上策か、と思い当たる。

（仕方ないですが、一旦引き下がって……）

「おお！？　おめーよく見たら中々美人じゃねぇか？」

「え？　あたし……！？」

と、ここで盗賊の片方があろうことか目聡くもリンプーさんに目を付けやがったらしい。それに釣られてもう片方もどれどれ？と言った感じでじろじろ見ている。

「おうそこの女ぁ、お前ちょっとこっちこいよ」

「酌ぐらいできんだろぉ？　チップ弾んでやるぜぇ？」

「へ？　いや……えっと……」

リンプーさんが額に汗を浮かべて俺の方を見てくる。

（くそぁ……どうする……？）

リンプーさんに盗賊の相手をして貰ってその隙に……とか考えるが、あのリンプーさんが大人しくしているわけがない。個人的にもこいつらに引き渡すとか絶対嫌なのでどうにかして波風立てずに断りたい。と、あれこれ悩んでいるとそのうちの一人が近付いてきた。

「おら、早くこいよ」

「ちょっ……離せ……！！」

そいつがリンプーさんの腕を取って無理やり連れて行こうとして、リンプーさんのこめかみにピキッと一筋入ったのがわかった。

（あ、もう駄目だ……）

「ぶげぇっ！？」「はぐっ！？」

次の瞬間リンプーさんの見事な裏拳と後ろ回し蹴りが盗賊達の意識を刈り取っていた。変装姿の為か、普段と違う感じがなかなか様になっているのだが……

「さっすがアネさんだぁ……」

「ま、いつかこうなると思ってたけどな」

「き……気絶……している」

「……」

思わず溜息が出るがこうなってしまったものは仕方が無い。こいつら二人が帰ってこないことを他の連中に怪しまれる前に、速攻で人質を見つける以外の道は無くなった。

「こいつらは適当な部屋に放り込んでおいて、あの二部屋を調べましょう」

「あはは……ごめん」

笑って誤魔化す戦法に出たリンプーさん。だが流石にこのタイミングで騙されはしない俺である。サイアスさんとステンさんが気絶した二人を手近な部屋の中に引きずり込んでいる間に、俺とランドさんとリンプーさんは入ってはいけない部屋の前へと移動した。

「いきますっ！」

バンッとドアを開けてみると、そこには光り輝く大量の金銀財宝が。

「「「……」」」

なんとも言えない沈黙が漂う。これがダンジョンとかなら大当た

りなんだろうが、この場合は明らかにハズレである。

「……隣は！？」

急ぎ隣のドアを開け放ってみると、今度は銅像やら絵やら壺やら用途の良く分からないモノなどが転がっていた。いくつか額だけだったりケースだけの物体も転がっている。キルゴア氏のコレクションの美術品の類なのだろう。

「「「……」」」

まさか両方ハズレとは思わなかった。確かに宝物庫的な部屋なら立ち入り禁止も納得ではあるが。

「もう一つの部屋へ急ぎましょう……」

もう形振り構っていられないので、もう一つ、離れた所にある立ち入り禁止部屋へと俺たちは急行した。

「あれ？」

ドアの前に立ち、勢いよく開け放ってみようとすると、妙に強い抵抗感がそれを遮った。鍵が閉まっているのだ。

「ったく何で閉まってんだよ……」

よく考えたらあの財宝部屋？に鍵がかかっていなかった事が幸運すぎるのだが、今は愚痴っていても仕方がない。

「ステンさん、鍵開けとかできません？」

「いやー、おいらそういう芸当はできないねぇ」

他のメンツも出来そうにない事を雰囲気が示している。

「……仕方ないっすね」

俺は手にマジックボールの小さいのを発生させると、ドアノブの上、鍵穴の部分へと押し付けた。バゴッという音と共に衝撃で鍵穴周辺の部分だけが丸く吹っ飛ぶ。なるべく音の出ない方法を考えたつもりなのだがそれでも多少の物音は発生している。

「段々投げやりになってきてねぇか相棒……」

「……気にすんな」

俺もなんかこういう頭を使った潜入とかは向いていないらしい。気を取り直して壊れたドアの中へ入ってみると、そこはパッと見でごく普通の部屋だった。特にそれらしい人も居なければ物もない。

「「「……」」」

ここまで来てまさかこの部屋もハズレなのか？という雰囲気が俺たちを包む。

「……少し調べてみましょう。何の意味も無く入るなって言ったり鍵掛けたりはしないと思いますから」

多分に希望を含んだ俺の言葉に全員頷き、部屋の中を捜索する俺たち。すると、サイアスさんが鼻をひくひくさせながら何も無い壁

の方へ近付いていく。

「？　どうかしたんですか？」

「こ……ここ」

「？」

サイアスさんが一見何の変哲もない壁を指差している。よーく目を凝らして見ると一人通れるくらいの長方形をした線が壁に走っているのがわかった。

「隠し部屋！？」

「さっすが旦那。誰かさんとは違いますねぇ」

「ねぇステン……誰かさんって誰かな？」

「さぁて誰でしょう？」

「……」

軽口をたたくステンさんと睨むリンプーさんはさておいて、サイアスさんは無言だがどことなく誇らしげに見えた。

「でもこれどうやって開けるの？」

「ちょっと待って下さい、こういうのは大抵……」

ちょっと見回してみるとその壁の上に明かりの灯っていないラン

プのような物が備え付けれらているのが目に入った。明らかに怪しいそれを弄くり回してみると、ガコンッと音がして横に倒れ、扉が上へとスライドしていく。

「へぇ、リュウよくわかったねぇ」

「いやなんとなく……」

どうしてこういう仕掛けをするのか金持ちの考える事はイマイチわからないが、まぁ侵入する方としてはわかりやすくて実に助かる。

「ちょっと狭いですねココ……」

「あ、じゃーあたし待ってるよ」

「おいらもちょっと疲れたから待ってる」

「俺……も……」

「じゃあ俺とランドさんで行ってみましょう」

「おう」

「ボッシュは連絡係ってことで待ってて」

「おうよ」

そして隠し扉の奥、現れた階段を下りて行く。地下と言っても大して深くなく、広くもなく、奥の方は牢屋のようになっているらしかった。

「！　誰か居ますね……」

牢屋らしき鉄格子の向うには明かりが灯っており、人の気配を感じたのでそこをこっそり覗いてみると……

「～♪～♪～……ん～ちょっとデッサン狂いましたね」

「「……」」

なんか小太りのカエルさんが鼻歌交じりに絵を描いていた。

目の錯覚かと思い目と目の間を指でぐりぐりしてもう一度見てみると、なんと小太りのカエルさんが絵を描いていた。少し考えて自分の頬をペチペチッと叩き、今度こそ、と意気込んで牢屋の中を見てみると、驚くべき事に小太りのカエルさんが絵を描いていた。ランドさんも俺と同様に呆れ顔をしていらっしゃる。

「「……」」

もし仮にエカルさんの正体を見ていなかったとしたら、咄嗟に殴り飛ばしたとしても誰も文句は言わないだろう。

「あの……」

「～♪　ん～～～～、ここは黄……いえ青の方が良いですね」

時折ぶつぶつ呟きながら、ひたすらに絵を描き続けるカエルの人。警戒心とか全くなしに近付いて後ろから絵を覗き見ると、そのキャンバスに描かれている風景画がまたヤケに上手いのが何とも言えな

い。俺達の存在など全く気付いていないようだ。

「こいつは何だ？」

「もしかしなくても……タペタさん？」

ここでようやく俺達の姿に気付いたらしいカエルの人が振り返った。

「おーう。これはこれは気付かずに失礼したのですね。ボンジュールお二人とも。どこかでお会いしましたですかね？」

「あ、いえ……」

「では初めましてですね。ワタクシ、エカル・ホッパ・ド・ペ・タペタ言いますね。よろしくするといいですね」

「はぁ……」

なんとも気の抜ける感じで声を掛けてくるタペタさん。確かこんな味方も居たなぁとかつての記憶を思い出しながら、ようやく見つけた一人目の人質に俺は安堵した。

「タペタさんよ、あんた捕まってる割に随分気楽だな」

「おーう、捕まっている？　何を言っているのかわかりませんが、ワタクシこのアトリエ気に入っているのですね」

「アトリエ？」

何を言っているんだコイツは的な視線をランドさんが投げ掛けながら、タペタさんに問う。

「ウィ、そうですね。ここの人私の絵を素晴らしいと褒めてくれたのですね。そしていつまでも絵を書いていていいと、こんなに素敵なアトリエをプレゼントしてくれたのでした」

「「……」」

見渡すまでもなくこの場所は牢屋なのだが、どう脳内変換すればココが素晴らしいアトリエになるのか俺のような常人には理解できないようだ。ランドさんも概ね俺と同意見なのか、ポケ〇ン姿で引き続き呆れ気味である。実に呑気なカエルさんだ。

「そんなことよりお前、俺と同じ甲殻族のババァを見なかったか？」

ランドさんが鉄格子を掴みながら言うと、タペタさんはどんぐり眼をパチクリさせていた。

「ん～～～ワタクシほとんどここから出てはいないので知らないのですね」

「そうか……」

気落ちしたランドさんを励ましつつ、取り合えず目的の一つはこのタペタさんなので鉄格子を壊し、適当に理由を話しつつ連れて行く事にする。

「……ということはワタクシ人質だったのですか？　では助け出してくれたあなた方は恩人なのですね。メルシー、リュウ。お礼にワ

タクシの歌を聞かせて差し上げるのですね」

「いえ……まぁとりあえず付いてきて下さい。あと歌はまた今度で」

（なんか調子狂うな……）

ダッシュで階段を駆け上り、元の部屋へと戻る。

「リュウ、ランド！　……と後ろのはダレ？」

「おーう、美しいお嬢さん。ワタクシ、エカル・ホッパ・ド・ペ・タペタ言いますね」

「自己紹介は後にして、こうなったらもう三階へ行きましょう」

一階、二階はもうこれで調べ尽くした。残るは立ち入り禁止の三階のみである。後はもうただ時間との闘いだ。盗賊をシバキ倒してしまった今となっては変装も無意味なので全員の魔法を解き、元の姿へと戻る。ちなみにボッシュはサイアスさんのゆったりした着物とフサフサの毛が気持ちいいらしく、そちらへ潜んだままだ。

「じゃあ急ぎま……」

そしてドアを開けたところで、俺たちは止まった。

いつの間にか廊下の左右を盗賊達が埋め尽くしていたのだ。

（……時間切れかよ……！）

どうやら救出作戦は間に合わなかったらしい。

「おめーら……わかってるよな？　大人しく着いてこねーと……あのババァの命はねーぜ？」

「……」

その内の一人が俺たちに言い放つ。最悪ではないがかなり悪いパターンである。人質を引き合いに出された俺たちは大人しくその盗賊の言う通りにし、全員縄でぐるぐる巻きに縛られて、何故か三階へと上がらされていく。

三階にある豪著な食堂らしき空間に連れて来られると、そこには痩せて目つきの鋭い偉そうな男が一人と下っ端らしき盗賊が一人、見覚えのある甲殻族の女性が一人と虚ろな目をした初老の男性が一人居た。

「ようこそ、歓迎するよコソ泥さん達」

（盗賊が泥棒呼ばわりかよ……）

「バカ息子！　何で来たんだい！」

「！　母ちゃん！」

痩せの男――恐らくは頭領らしきその男が声を掛けてくる隣で、下っ端らしき盗賊が捕えられたディジイさんの首筋に刃物を当てていた。

もう一人の虚ろな目をした男性は、領主のキルゴア氏だと思われる。

「なぁキルゴア、あいつら不法侵入だよなぁ？」

「……ああ」

「「「！」」」

キルゴアさんは抑揚の無い返事で男の言葉を肯定していた。

（やっぱり操られているっぽいな……）

聞いていた通り、腕に妙な腕輪が付いているのが見て取れる。しかしあれでどうやっているのかは見当がつかない。お世辞にも頭領と思われる男からは大した力を感じられないのだ。

「その人を離せ！　じゃないと……」

リンプーさんがフーレン族特有の気迫で首領へと迫る。

「おいおいてめぇらよ、何か勘違いしてねぇか？　これが目に入らねぇのかよ」

その言葉でデイジイさんの首に押し付けられている刃物がわずかにめり込む。

「うっ……」

「母ちゃん！」

「おーおー、そうかそうか。母の為にわざわざこんな所まで来ると

は泣けるねぇ」

心底馬鹿にしたような盗賊の頭領。今俺達は縛られていて動きが取れないからか、やたらと自信に満ちた対応を取っている。

「おめぇらが報告にあった邪魔者達だろ？　何でもその辺の傭兵じゃ太刀打ちできないらしいじゃねぇか」

「……？」

突然俺達の強さを褒めだす頭領。イマイチ意図が掴めないが、そもそも俺たちを何故ここに連れてきたのだろうか。俺がその辺の事を考えていると、男は自ら理由を話してくれた。

「実をいうとな、お前たちみたいな侵入者がいつかは来ると思ってたんだよ。でな、もちろん対策を取らない俺様じゃないわけだ。幸い金づるが居るからなぁ」

金づるとはもちろん虚ろな目のキルゴアさんのことだろう。

「でもよぉ、莫大な金を払って雇ったはいいが、一度もその力が見られねぇってのも……なぁ？」

「……」

「なるほどねぇ」

ステンさん、サイアスさんも気付いたらしい。恐らくこの男はその雇った何かと俺達を……

「だからよ、おめぇら……ちっと殺されてみてくれねぇか？」

「「「！！」」」

その瞬間、俺達に緊張が走った。

「おら！　出番だぜぇ！！」

「「「！」」」

頭領の声に反応するように、気のせいか空気が震えだしている感覚を覚えた。そしてどこからともなく声が聞こえてきて……

「……ィィィィィィイイイイイッッハアァァーーー！！」

暑苦しい雄叫びと共に思いっきり天井をブチ破り、ヤツは現れた。

舞い上がる埃が晴れていく毎に徐々に明らかになるその姿。全身に何故か無意味に汗を滴らせ、鋼もかくやと言う程に無駄な筋肉を誇り、頭髪は後頭部に僅かに残した弁髪のみという潔さ。そして濃ゆ過ぎるその顔から覗かせる不釣り合いに白い歯は、光源も無いのにキラリと輝き、思わず目が潰れそうになる程だ。

「ハァーハッハッハァ！　わが名はラ・カーン！　主の陳情により参上仕った！　我が拳の錆になりたい者共よ、存分にかかって来いぃ！！」

「「「……」」」

ビシィッとこちらへ指を突き付けるカーンに、俺達は言葉が出なかった。

「「「……」」」

台無しである。

なんかもー本当に色々と台無しなのである。

緊迫感とか緊張感とか、そういった類の張り詰めた空気がこいつの登場と共に一気に霧散してしまった。その場の空気がカーン一色に染まってしまったのだ。

そして俺は呆れと共に安堵してもいた。一体どんなツワモノが雇われたのかと思えばあのカーンである。どうやってもこんな出落ちキャラには負けない。というか負けたくない。

「む……!?　やや!?　貴様は……「紅き翼」の!?」

「……」

カーンは俺に気が付くと、やたらと芝居がかった大袈裟なリアクションを見せた。対して俺は自分でもわかる程に冷めた呆れ顔でのノーリアクション。

「く……くふふふふ……何と言う……何と言う巡り合わせよ！　このような場所で貴様と相まみえる事になろうとはな！　……今日こそ、今日こそ我が宿敵「紅き翼」を下してくれるぞぉぉ！　ぬふぁぁっ！！」

何やら頭の血管がぷちっとイってしまいそうな程にヒートアップして、暑苦しさ3倍増しのカーン。確実に部屋の気温がハネ上がっているのがわかる。

「ね、ねぇリュウ、知り合いなの？」

「いえ全然知らない人ですよ」

「そうなの？」

「はい」

ドン引きしているリンプーさんの問いに無表情で全力否定する俺。こんな暑苦しいのと知り合いだなどと思われるのは、なんか色々と嫌なのだ。

「サイアスの旦那、どう見ますかい？」

「……弱い」

流石にサイアスさんの評価は的確だった。あまりに的確過ぎて涙が出て来る。

「ほぉう、この俺が弱いだと……？　貴様らなど新たな師の元で修業を積んだこの俺の敵ではないわ！　フォォォォ！！」

耳聡く俺の後ろの会話が聞えていたようで、機嫌を損ねて雄叫びをあげながら突っ込んでくるカーン。

（魔法の射手・収束・氷の３７矢）

問答無用で無詠唱の魔法の射手を発生させ、一本の氷柱となったそれをカーンのどてっ腹へとぶち込む。

「ど　ふ　ぉ　ぇ　っ　！　！　？」

その一撃により目玉が飛び出しそうかつ謎のスローモーションで吹っ飛びゆくカーン。一撃必倒、いいとこなしで退場である。

「「「……」」」

何故か俺が攻撃しても微動だにしなかった賊の頭領と周りの賊たち。些か雰囲気が間抜けな物になったが取り合えずこれで障害は取り除いた。

「……自慢（笑）の傭兵さんがいきなり退場しましたが？」

「ああ？　おいおい、俺が雇ったのはこいつじゃねぇぞ？　勘違いすんなよ？」

「……え？」

その頭領の言葉からは、多少うんざりしたような気配が感じ取れた。つまりカーンを厄介者としているらしい。どうりで俺の攻撃に何も突っ込みが来なかった訳である。

（……てことはまさか……？）

「ったくこの馬鹿弟子がよお。お前弱いんだからでしゃばんなっつったろうが」

俺のその嫌な予想は間違いではなかった。もう一人、体格のいい大男がカーンが壊した天井から降ってきたのだ。

「し、師匠ぉ……」

「「「!?」」」

その新たに降ってきた男の姿を見た俺とサイアスさん、ステンさんは顔が強張った。

それもそのはず、カーンの後に天井から降ってきた男の容姿が容姿だったのだ。褐色の肌に金髪、カーンとは違い無駄に誇示する必要のない見事な筋肉、幾多の戦場を渡り歩いてきたであろう強者だけが纏う空気。そして何より溢れんばかりの強キャラ……否、狂キャラ臭。

「おう、そういうわけで俺が雇われ傭兵のジャック・ラカンだ。この馬鹿が何か余計な事をしたようだが」

（!?　ちょっ!?　はぁぁぁぁぁ!?）

完全に予想外だった。まさかこんなところで、しかも敵としてラカンと相まみえる事になろうとは思いもしていなかった。カーンを弟子にしていると言うのも驚きではあるが。

「だ、旦那、こいつは……ちとやべぇよ」

「……」

ステンさんとサイアスさんはその焦りの表情からどうやら相手が誰であるか知っているらしい。「ジャック・ラカン」の名は「闇の福音」ほどではないにしろ、一人行動するようになってからボチボチ耳にしている。アホみたいに無敵と言われる話も少しだけだが聞いていた。

「ふん、どうやら知ってるようだな。そうだ。こいつがあの無敵のラカンだ。金ってのはこう言う使い方しねぇとな」

頭領はそう言ってアホみたく笑っている。悔しいがこれは確かに最良の金の使い道と言える。まだそこまで名前が広く知られている訳でもなく、世界を救った英雄と言うわけでもないラカンならば、大金を積めば容易に雇う事が出来るだろう。しかし……

（くそがっ！　仕事くらい選べよ！！）

「ね、ねぇリュウ、あの人そんなにヤバいの？」

リンプーさんが？を頭に浮かべて聞いてくる。まだ今の状態じゃ「紅き翼」同様に一部でしか有名ではないから知らないのも無理はない。

「正直マズイです。あっちのハゲは今の通り大した事ないけどあの大男は……」

「そうなんだ……」

俺の真剣な表情からそれが真実だとわかったようだ。少なくともこのメンバーではラカンには歯が立たないことは自明の理。まともに相手をできるとしたら多分俺だけである。

（……待てよ）

だが考えようによってはこれはチャンスであるかもしれない。あの賊の頭領も、俺達はラカンには敵わないだろうとタカをくくっているからこそ、戦わせてみようとあそこまで余裕な訳である。つまり、俺がラカンをなんとか抑えさえすれば、みんなと人質を一気に解放する隙が見出せる可能性が高い。

「お前もうクビだクビ。弱すぎて話しになんねぇ」

「そ、そんな師匠……」

カーンがラカンの足に縋るが鬱陶しそうにしっしと追いやるラカン。カーンは強者を見極める目は確かなようだが、弟子入りしているくせになんであんなに弱いのか、と言う疑問はこの際どうでもいい。

「おらどうすんだ！　とっととやろうぜ！　めんどくせーから全員一度にかかってきても一向に構わねぇぜ！！」

ラカンはカーンをポイッと天井の壊れた穴から外へ投げ捨てると、待ちくたびれたのか貧乏ゆすりを始めている。

「こうなったら、みんなでやるしか……」

「待って下さい」

逸るリンプーさんを抑え、俺はラカンに対し真っ直ぐに視線を向けた。

「ジャック・ラカンさん、俺はあなたに一対一の決闘を申し入れます！」

「「「！？」」」

「ほう？」

「リュウ、お前何トチ狂ってんだ！　あいつはヤバいってわかってんだろ！？」

俺の突飛な行動に、ステンさんが焦った声を掛けてくる。

「き……危険……」

その横からサイアスさんが珍しく目を見せて心配してくれている。

「フン、勇気があるなぁ少年。だが自分が何言ってるかわかってるか？　俺が誰だか知ってるのか？」

流石のラカンも俺のような子供が自分に対して真面目に決闘を申し込むなど、真に受けてはいないようだ。しかし俺個人としては至極本気である。

「知ってますよ。「死なない男」のジャック・ラカンさんですよね？　無敵なんですから俺の挑戦も当然受けてくれますよね？」

俺の吐いたセリフに反応して、後ろに居る二人から「本気でよせ！」みたいに思っている空気が伝わってくるがスルー。

「……ハッ、何考えてんのかしらねーが安い挑発だな。だが、俺は無謀な挑戦ってな嫌いじゃねぇ。いいぜ、受けてやるよ。……おう雇い主さんよ、俺はこいつと決闘することに決めたがどうすりゃいい？」

「！」

正直俺みたいな子供の、傍から見たら血迷った戯言のような意見など聞いてもらえるか若干不安ではあったが、まぁその辺は大雑把なようで助かった。

「そうだな。よし、全員で見物と洒落込むか。……おっとおめぇら妙な気を起すなよ？　こっちには人質が居る事を忘れんじゃねーぞ？　……おいお前ら、コイツらが妙な事出来ねぇようも少しキツく縛っとけ。そのガキだけはほどいてやりな」

「「「ヘイ！」」」

「リュウ……」

「お前大丈夫なのかよ」

心配そうな面々。確かにラカンはそれこそエヴァンジェリンさんと同レベルで、素の俺でどこまで通用するかはハッキリと言えない。しかし俺は変身するつもりはなかった。こんな大勢の盗賊達の前で正体を晒すのは嫌だし、俺の目的はラカンを倒すことではなく盗賊達の目を俺の方に釘付けにする事にあるからだ。

「大丈夫ですよ」

生返事をしつつ、俺は今、サイアスさんの服の中に隠れているボッシュへと念話を送る。

≪ボッシュ、俺があいつらの目を引き付けるから、そしたらみんなの縄切って上手くやってくれない？≫

≪へっ、そういうことかい。任せろってんだよ相棒！≫

≪……よろしく頼んだ≫

頼もしい相棒の返事に少し不安が払われる俺だった。

第十章　8、羅漢

キルゴア氏の屋敷から少し離れ、ここは通称「アム湿原」。所々に濁った沼や足場の悪いぬかるみがあり、背の高い葦のような草や雑木がぽつぽつと点在してどんよりとした雰囲気が辺りを埋め尽くす、人の寄り付かない空間である。

ラカンの希望により、この辺りで存分に暴れてもいいだだっ広い場所へと移動することになり、周辺は大抵畑になっていたりするのでここぐらいしか適当な場所は無かったのだ。

今、俺の前にはジャック・ラカンが一人だけ。みんなや盗賊達はそれなりに離れた所におり、遠方の状況を映し出す大きな鏡のような魔法の道具でもってここの様子を見物しているらしい。恐らくキルゴアさんの所有物の一つだろう。

「さーて用意はいいか少年」

「……」

コキコキと首や手の骨を鳴らすラカン。どうやら体勢は万全のようで、まともに戦えば苦戦……どころか一方的に負ける可能性すらある。全力を出す事は死なない為にも当然だが、しかしこの場合におけるこちらの真の勝利とは、デイジイさんを救出し盗賊をぶっ飛ばすことである。ラカンとの戦いはヤツ等の目をこちらに釘付けにし、隙を付くための撒き餌であれば良いのだ。

「お前の勇気に免じて大サービスだ。俺は最初動かねぇでいてやる」

「！」

両手を広げて無防備な体制を作るラカン。本気で俺に最初の一撃を譲ってくれるらしい。どうしようか色々と考えていた俺にとっては願ってもないチャンスである。

「……気前いいんですね」

「ああ構わねぇ。存分にやって来い。その妙な力でな」

「！」

（そう言うことか……）

すっかり忘れてたが、やっぱり実力者には龍の力がバレてるのだった。どうりで俺みたいな子供の挑戦をあっさりＯＫした訳である。

「じゃあ……遠慮なく！」

≪そっちは頼んだぞボッシュ……！≫

俺はみんなと相棒が上手くやってくれる事を信じて、最強の傭兵へと勝負に出ることとなった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

その頃、湿原から離れた屋敷の裏手では……

「お、ようやく始まるか。オラ、お前等の代わりに無敵の傭兵の餌食になる可愛そうなガキの末路をしっかりと見届けろよ？」

盗賊の頭領はニヤニヤとした笑いを縛られている面々へと投げかけていた。盗賊達は頭領を中心に湿原を映し出す大鏡の前で酒を呷り、その後ろでは縛られたランド達と見張りが一人、それにデイジイも後ろで手を縛られて立たされていた。

「リュウ大丈夫かな……？」

「おーう、ムッシュ・リュウに励ましの歌を贈りたいのですね」

（旦那、このロープ千切れませんかい？）

（無理だな。俺の体格も考えてかなり強固に縛ってある。中々頭の切れる連中だ）

（……）

ステン、ランド、サイアスはその状態でも何とか反撃の目を探っていた。しかし盗賊達の卒の無い行動と、未だ捕われのデイジイの為に身動きが取れないでいた。

だが、逆転への芽はすぐそこに顔を出していた。今、この時を狙ってサイアスの懐に居るリュウの相棒がもぞもぞと動き出していたのだ。

（おうおめぇら！）

「「「！！」」」

（相棒があいつ等の目を引き付けたら俺っちがその縄切るからよ！
それまで待っててくんな！）

タペタを含めた囚われている数人のみに聞こえるような声で、そのフェレットは作戦を語る。端的ではあったが、全員がその言葉で己のやるべき事を察していた。

「ん？　何だ？　何か言ったかてめぇら」

「！　あ、ああ。おいらがリュウを応援しちゃマズイかい？」

「……は、今まで無言だったくせに今更応援かよ。しかも小声とは随分薄情な連中だなぁてめぇらはよぉ」

「「「ハハハハハ！！」」」

馬鹿笑いする頭領に釣られ、周りの盗賊達も笑っている。

（せいぜい笑ってりゃいいさ！）

その光景を覗き見て、不敵に笑うフェレット一匹。

――――――――――――――――――――

相手は百戦錬磨の傭兵。勝てればもちろん言う事はないが、無理でもなるべく派手な攻防を行い、鏡を通して見ている筈の盗賊の目を引き付ける必要がある。

（……）

初手はことさら重要である。ラカンはリュウに最初の一撃を譲り、動かないと言う宣言までした。リュウはその千載一遇のチャンスに、確実に相手の体力を奪える選択をしなければならない。それによってその後の攻防が有利に運べるかどうか決まるからだ。

「……」

リュウは僅かに思案し一つ戦法を決めると、対峙するラカンの頭上に掌を向けた。発動させるのは以前ディースに教わった技の内の一つ。

「行きますよ！」

「は、いいぜ。来な！」

リュウはディースに教わったようにラカンの頭上に向けて魔力を放出し、そして発動させるキーワードと共に掌を振り下ろす。

「【ド・ブンバ・ラァ！！】」

「！！　おぁ！？　なんだぁこりゃぁ！？」

ラカンの真上に巨大な鉄球が生まれた。それはリュウの魔力を受けて見る見るうちに膨れ上がり、直径１００ｍを超えた辺りでラカンへと落下する。

「ふぬぅぅっ！？　な、何だこの重さは……っ！　うおぁっ！？」

ラカンは動かないと宣言した手前避ける訳にもいかず、落ちてきた鉄球を両手で受け止める。しかしトンの単位すら耐える筈のパワーであるにも関わらず、想像を超えたあり得ない超重量を持つその鉄球に押し潰されてしまった。

ド・ブンバ・ラ。それは対象自身の体力によって大きさ・形が変動する魔法の鉄球を召喚する技である。召喚された鉄球の重量は対象物の体力に比例して重くなり、その全体力の半分のダメージを奪うのだ。鉄球は通常、対象の身長の二倍程度の大きさであるのだが、直径１００ｍを超えるほどの巨大さは他に類を見ず、ジャック・ラカンの人並み外れた体力の多さを物語っている。

リュウが初手にこの技を選んだ理由は、最初の一撃に使うのが最もダメージを与える効率が良いと言う事もあるが、発生から直撃までのタイムラグにより非常に避けやすいというこの技の欠点が、ラカン自ら動かないと宣言したことにより消失したためである。

鉄球はラカンを押し潰した後、音もなく消えていく。リュウは即座にドラゴンズ・ティアからカッツバルゲルを取り出し、逆手に持って後ろ手に構えた。

「おおおおっ！」

戦いの歌（バトルソング）を発動させ、大地斬・海破斬・空裂斬の力を一度に剣へと伝わらせるとラカン目掛けて全力で特攻を掛ける。ド・ブンバ・ラはラカンがサービスを言い出した為に使用したのであり、本来ならば、多数の技で一気に畳み掛けるのがリュウの作戦である。

「ぐぬぅ……！　妙な魔法使いやがる……！」

ラカンは初っ端から想像していた以上のダメージを受けた事に僅かに驚いていた。しかし頭を押さえながらも難なく立ち上がり、そして目前に迫るリュウを見て、表情を引き締める。

「テラ・ブレイクッ！！」

「気合防御！！」

リュウが振り下ろした渾身の一撃は、避ける素振りすら見せなかったラカンの胸を確実に捉え――

「！？」

「っと、いい一撃だな。ええ？」

剣は跡形もなく砕け散っていた。

「マジ……！？」

テラ・ブレイクはラカンの服を切り裂いたものの、気合防御により筋肉の表面を赤く腫れさせた程度の傷しか負わせられなかった。わずかに後ずさりもさせたがダメージと言うには程遠い。この技は剣への負担が大きい為に折れる可能性も考慮していたが、しかし砕け散るとは思っていなかったリュウはその防御力に驚嘆していた。

（……簡単にはいかねぇかっ！）

「一撃目はサービスだったからな。悪ぃが防御させてもらった。さっきのはなかなか面白ぇ魔法だったが、もうあんな大味なのが通用

するたぁ思うなよ？」

「！」

途端、ラカンから猛烈な殺気が放たれる。ラカンはド・ブンバ・ラのダメージと言うリュウにとってのアドバンテージさえも、僅かな間にほとんど無効化していた。

「ふぅん！」

「うぉあっ！？」

ラカンが気合を込めて腕を振り上げただけで、地面ごとリュウは空中へと吹き飛ばされた。視界が塞がれ体勢も崩され、この後どうなるかリュウには容易に想像が付く。

「くっ！」

ラカンは宙に舞ったリュウを瞬時に追い越し、リュウの頭上で腕をバレーのスパイクのように振りかぶっていた。

「これくらいは耐えられるよなぁ！　ラカンスマァッシュ！」

「！！　大防御……ッ！」

何ら特殊な技術は使っていない腕を振り下ろすだけという力任せの一撃。しかしラカンのパワーによりその一撃は強力無比な必殺技と言えるだけの威力を誇っていた。

かろうじてガードに成功したリュウは凄まじい勢いで地面に向け

て叩きつけられた。しかし咄嗟に発動した大防御のおかげで振り下ろし自体のダメージはまだ軽い。エヴァンジェリンの修行が仮に無かったとしたら、この時点で勝負は着いていただろう事が予想できる。

（っ！　大防御イキナリ貫いてくるとか……っ！！）

それでも軽々と大防御を貫いてくる威力になお驚嘆するリュウ。ぬかるみへ着地し即座に体勢を立て直すと、リュウは空中から落ちて来るラカンに手を向け、その周りを囲むように5本のマインドソードを作り上げる。

「むっ？」

「伍獣葬！！」

5本のマインドソードは宙空のラカンを串刺しにするべく一気に襲い掛かる……が、それらは薄皮一枚を越えた所で動きが鈍り、そこより先へは進まない。当たった五箇所からは一筋の血が流れたが、すぐに止まった。

「このおっさんマジで剣刺さらねぇ！？」

「ハッハー、いいねぇ。だが５０点ってとこだな！」

ラカンは地面へ着地すると、適当に気合を発して刺さり損ねた5本のマインドソードを吹き飛ばす。リュウはそれを唖然と見ながらも、次の技を繰り出すべくポケットへ手を入れた。

「ぅおらぁっ！！」

そして放たれる散烈拳と居合拳の合成技、ショットガン。あまりの数に最早「点」ではなく「面」での攻撃と言える程の無数の剛弾幕がラカンへと飛来する。

「今度は物量ってかぁ！」

ラカンは避ける事もやろうと思えば出来たがあえて避けず、弾幕の前で構えていた。

「フンフンフンフンッ！」

「！？」

居合のスピードで自らに殺到する常人ならば逃げ場の無い弾幕を、ラカンは一つ残らず素手で払いのけていた。一発すら漏らすこと無く、飛来する全ての弾丸を見切って捌いていたのだ。

「！！　どんだけだよこの野郎っ！！」

リュウはこれ以上は生半可では駄目だと理解し、再びポケットへ手を入れると、一枚のカードを取り出した。

≪頼む！≫

≪心得た！≫

「サイフィス！！」

リュウがカードを頭上に掲げると、眩い光と共に青い龍がそこに

現れる。

「ほぉ？　今度はドラゴンの召喚たぁな。おめー中々芸が広いじゃねーか」

ラカンは自らを睨む青い龍を見て、俄然やる気を湧かせていた。

「サイフィス！　アレよろしく！」

≪承知！≫

青い龍はリュウの周囲を高速で回りだし、激しい風の渦を巻き起こし始める。

「！　……なるほどな。じゃあいっちょ……力比べといくかぁ！」

ラカンはリュウが何をするのかを大まかに察すると、ビシッとポーズを決め、両手を水平に広げる。

「ぬぅぅぅぅうっ！！」

そしてひたすらにその場で回転を始めた。ただしそのスピードは尋常ではなく、本人の気を伴ってとてつもない暴風が巻き起こり、さらに回転も青い龍の物とは逆だった。

「！！　まさかあんなんで……！？」

あんな馬鹿げた方法で対抗されるのは冗談ではないとリュウは憤り、龍の力を青い龍が作り出した周囲の風の渦へとぶつける。

≪頃合いだ！≫

リュウの周囲を囲む風の渦は、青い龍の持つ魔力とリュウ自信が放つ龍の力により、擦れあって高熱を帯びていた。

「うーし、勝負と行こうぜぇ！！」

ラカンの回転も極大に達し、ラカンを中心に小規模な竜巻が発生していた。そして二人は全くの同時に攻撃を放つ。

「飛竜昇天破！！」

「必殺！　大・回・天・羅漢んん（今命名）！」

リュウは氷の魔法の射手を腕に纏わせて、ラカンはただ己の気を込めて力任せに、両者とも相手方向へ向けてねじり込むようなアッパーを繰り出すと、それぞれの起こしていた風の渦は巨大な竜巻へ姿を変え、無慈悲な風の暴力となってぶつかりあう。

「うおあああああっ！」

「ふぬぅぅぅぅぅっ！」

互いに無遠慮であり逆回転の巨大な竜巻同士。その威力は周辺の雑木や岩、沼の悉くを巻き上げ、地面を削り取り、天を二分して暴れ狂う。

「うあああっ！？」

「うおっ！？」

拮抗かと思われた直後、二つの竜巻は全く同時に弾けた。それぞれの中心に居た両者とも、その余波で吹き飛ぶがダメージそのものは大したことはない。辺り一面に巻き上げられた物体の、凶悪なまでの暴風に切り刻まれた慣れの果てが降り注ぐ。

「……ていうか、マジでアレで相殺されんのかよ……」

「っととと……てめーやるじゃねぇか。この俺の今作った必殺技とタメを張るたぁ……」

回転の影響か目を回し気味にふらふらしているラカンと、数々の技と竜召喚を使ってまでもまともにダメージを与えられなかった事に少なからずショックを受けるリュウ。そしてラカンの方が復帰が早かった。

「さてと……もう種切れか？　ならそろそろ決めちまう……ぜ！」

「！！」

ラカンの姿がリュウの前から掻き消えた。

（はや……！！）

「オラァ！」

一瞬にして間合いを詰められたリュウはすかさず後方へと飛び退く。ラカンの拳が寸前で空を切り、湿原のぬかるみへと突き刺さると衝撃で深く陥没する。

「フンッ！」

「いっ！？」

しかしラカンは織り込み済みとでも言うかのように、間髪入れずに虚空瞬動でリュウを再びその拳の射程に捉えた。

「くっ！」

さらにリュウは虚空瞬動と浮遊魔法を駆使して上へと退避する。だがラカンはリュウの予備動作を見切ってあっさり追随。右へ行けば右へ、左へ行けば左へ、ラカンはリュウを射程に捉えて離さない。

「逃げ方が甘ぇなぁ」

「っ！？」

リュウが次にどちらへ逃げるか迷った一瞬の隙を突いて、ラカンは悪魔のような笑みと共にその掌低をリュウの腹へと押しつけた。

「！！　ッ……大ぼ……」

「羅漢破裏剣掌っ！」

ラカンがねじ切るように掌低を振うと、リュウの小さな体は枯れ葉の様に宙を舞った。

「が……っ！！」

防御が間に合わず、衝撃により内臓を抉られる様な強烈な痛みが

リュウの全身を襲う。激しいキリモミ回転と共に舞い上がるリュウへ、さらにラカンは追撃を行う。

「いくぜぇ！」

「っっ！！！！」

巨竜をも倒すと言われる必殺の右ストレート。それが無情にもリュウの小さな体へと吸い込まれていった。猛烈な勢いで地面へと叩きつけられ、仰向けにめり込むリュウ。傷ついた内腑側から一斉に血が込み上げ、中空へと吐きだした。

「かはっ……！」

（し……洒落に……なん……ね……）

「今のでまだ意識があるヤツぁ久しく俺の記憶にねーな」

「……ぐっ……っ」

技の乱発による疲れと痛み、そして悉くを跳ね返すラカンからの精神的プレッシャーにより、リュウは精神的にも肉体的にも大きくダメージを受けていた。それでもなんとか動く腕を自分へ向け、ダメージに回復が追い付かない事を承知で治癒魔法をかけ、立ちあがる。

「……まだやるってか？」

「ハァ……ハァ……」

息をするだけでも苦しい。立ち上がるのも辛い。できればこれ以上こんな馬鹿げたヤツとは戦いたくないが、ボッシュからまだ報告がない。ならば、自分はもう少しコイツを相手にする必要がある、とリュウは考えていた。そこにはこのままで終われるか、と言う意地も含まれている事に、本人はまだ気付いていなかった。

「ハァ……ハァ……、もう……切り札……だ」

「ほお」

ラカンは久々に相対する骨のある相手に、心底楽しそうに応じていた。リュウはこれで駄目なら最悪変身も視野に入れると、ポケットからカードを……二枚取りだした。

「ラグレイア！　ザムディン！」

それは掟破りの2体同時召喚。眩い光と共にリュウの頭上に赤い龍と黄の龍が現れる。

「まだ召喚する余裕があるたぁな」

ラカンは感心したようにそれを見ながらも、いつでも動けるよう体勢を崩さない。

（一か八か……）

リュウは自分でも珍しく先の見えない賭けに出る事を選択すると、ドラゴンズ・ティアからボロボロのスクラマサクスを取りだした。

「あぁ？　悪ぃが、そんな剣じゃ俺には通用しねぇぞ？」

「それは……わかってますよ！」

リュウはスクラマサクスを両手で握ると、頭上へと掲げる。

「あん？」

「ラグレイア！　ザムディン！　頼む！」

≪いいわよ。最近呼んでくれなくて寂しかったのよね≫

≪……俺はそれで良かったんだけどな≫

「おおおおおっ！」

リュウの掲げた剣にラグレイアから赤く輝く炎の力が、ザムディンから黄色く輝く地の力が、一つに集い収束していく。ただでさえ強力な竜召喚、さらに二体の力を同時という本来なら反発して暴発してもおかしくないその力を、リュウは自らの魔力と龍の力を全開にして無理やり剣に抑えつけていた。

「！　でけぇ……！　どうやら今度こそ全力らしいな！！」

ラカンはリュウの剣に収束する力を感じ取るとニヤリと笑い、自分も右腕を腰溜めに構えて強大な気を集中し始める。

「ぬぅぅぅぅっ！！」

「集え！！　森羅万象の力ぁぁ！！！」

リュウの気合いと共に掲げる剣に収束していた強烈な炎と地の力は混ざり合い、二つは爆裂の力へと変貌を遂げる。リュウにとって2体同時の力は未知数。さらにそれと組み合わせるつもりの「絶命剣」さえ、かつてエヴァンジェリンの修行中に数度使っただけというほぼぶっつけ本番の技である。

≪いいわよ！≫

≪……じゃぁな≫

二体の龍から完了の合図を受け、リュウはボッシュへと念話を飛ばす。

≪ボッシュ、そっちまで被害行くかもしんないけどフォローよろしく！≫

一方的に相棒へメッセージを送ると、リュウは鋭くラカンを見据えた。ラカンの右腕には膨大過ぎる気が溜まっているのが見受けられる。

「「必殺！！」」

期せずして互いの声が重なる。リュウは力の収束した剣の切っ先を真下の地面へと向け、ラカンは愉悦の笑みを浮かべながら今にも力を放とうとリュウから視線を逸らさない。

「竜ぅ！　陣っ！　剣っ！！」

叫びと共に、リュウは全力で剣を地面へと突き立てた。広がる大地に解き放たれた爆裂の力は、リュウを中心に巨大な魔法陣となっ

て湿地一帯を駆け巡る。木を炭化させ、岩は砂へと還され、沼は瞬時に水分を消し飛ばされる、あらゆる物を粉砕する環状の衝撃波が陣の内側から外側へと暴走していく。

「ラカン・インッパクトァッ！」

同時にラカンも右腕の力を解放し、尋常ならざる膨大な気の波動をリュウへと放った。

一点集中のラカンの気弾に対して広範囲を殲滅するリュウの衝撃波。リュウのそれは申し分の無い威力ではあったが両者の密度の違いにより、衝撃波とぶつかった気弾は多少その勢いを殺がれたものの、リュウへと直進する事を止めない。

「うぉあああああっ！！」

「！　何！？」

しかしそれはリュウにもわかっていた事だった。衝撃波は一発だけではなかったのだ。二発、三発、四発。魔法陣の上を暴走して広がる環状の衝撃波は、都合４度も同威力の物をその上に走らせる。

「ぐおぁぁっ！！」

ラカンの放った気弾は相殺に相殺を重ね、絶対の威力を保てなくなっていた。そして４度の衝撃波は、最大の一撃を放った直後という最も隙の出来るタイミングでラカンへと次々に直撃し、大きなダメージを与える事に成功していた。

「うぐぁっ！？」

しかしそこはやはり最強の傭兵ラカンの一撃。勢いの殺がれた気弾はそれでもなおリュウを吹き飛ばすだけの威力を有しており、同じく最大の一撃を放った直後のリュウを魔法陣の中心から弾き飛ばした。それによって周囲一帯を覆い尽くしていた陣は消えていき、後には衝撃波によって湿原の面影が彼方へと消え失せた、荒野のようにただれた景色だけが残った。

「うっ……く……」

二体同時の竜召喚による炎の力と地の力を抑え込むため、自らの龍の力と魔力を消耗したリュウはそれまでのダメージも相まって疲労の色が濃く、体を起こすのがやっとという有様だった。手に持ったスクラマサクスは根元は融け、切っ先部分は蒸発し、柄だけがかろうじて残っている。

「はっ……まさか……この俺にここまでのダメージを与えるたぁ……」

リュウの切り札、竜陣剣の直撃を受けたラカンは至る所から流血を起こし、かなりのダメージを負ったものの未だ倒れずにいた。まさか目の前に居る子供が、自分の本気の一撃を真正面から相殺し、なお且つ自分にここまでの傷を負わせたという事態に素直に感心していた。そして、だがそれでも自分の勝ちは揺るぎないと確信を持っていた。

≪相棒！　終わったぜ！　相棒！≫

「！」

リュウの頭に待ち侘びた相棒の声が響いた。その一言で自分の役割を全うできたことを察したリュウは力なくラカンへと告げる。

「……もう……終わりみたいですよ……？」

「ああん？　！　あぁ……なるほど、最初からそれが狙いだったわけか」

ただれた景色のはるか向うから、捕えられていたはずの面々が走ってくるのがラカンの目に映った。その中には正気を取り戻したキルゴアの姿と、引きずられるように引っ張られてくる盗賊の頭領の姿もある。

「フン、だがこの勝負は俺の勝ちだな？」

「……」

ニヤリと笑みを浮かべるラカンの問いに、リュウは答えない。無言はその言葉を肯定しているに過ぎない事はわかっていたが、それでも認めるのは悔しいという気持ちがリュウにはあった。

「まぁ……なんとか……なったし……」

リュウは遠方から近付いてくる面々の姿を視界に納めると、自分自身に言い聞かせるようにそう呟き、悔しさと安堵の気持ちを抱えたまま意識を手放すのだった。

第十章　ＳＯＬ　～鏡の向こう～

「おいおいなんだありゃ？」

「見たことの無い魔法っすねぇカシラぁ」

（相棒……マジだなありゃ）

大鏡に映し出される巨大な鉄球。いきなりのリュウの大技に盗賊達は度肝を抜かれていた。あっさりと無敵の傭兵を押し潰した光景を見て幾人騒ぐ者が出るが、頭領はそれを冷静に諌める。

「落ち着けお前ら！　仮にも無敵の傭兵があんなんで死ぬわけがねぇだろうが！」

頭領の言葉通り、その直後に平気な顔でリュウの剣撃を防ぎ、地面ごと吹き飛ばすラカンの姿が映ると、場は大いに盛り上がっていた。

「ほれ見ろ。全くあんな規格外とは死んでも戦りたくねぇよなぁ？」

「全くですぜぇ」

リュウの猛攻を軽く凌ぐ圧倒的強者を自分達が雇っているという事実に気を良くした盗賊達は、自分たちの常識から逸脱し過ぎているその光景に、驚きと呆れを感じながらも次第に目を奪われていった。

「「「……」」」

その後ろでは、脱出の機会を伺っていた筈の面々もリュウとラカンの激し過ぎる戦いぶりに唖然としていた。

「す……すご……」

「マジかよこいつは……」

「リュウってば曲がりなりにもあのジャック・ラカンと戦りあってるよ……」

「……！」

リュウが一人で引き受けなかったら、自分達もあの何かがおかしい傭兵と戦う事になっていた事を想像して全員が青くなる。

（！　ありゃ確か相棒の必殺技……！）

そんな中、リュウが青いドラゴンを召喚した姿が大鏡に映る。現れた隠し玉に盗賊、人質含めて鏡へと送る視線に一層熱が入るが、その召喚が何を意味するのか理解したボッシュは周りに声を掛けた。

（おめぇら！　これから相棒が派手な技を使うぜ！）

「「「！」」」

（そん時が勝負だ！）

ボッシュの言葉にハッと我に返った面々は、即座に気を取り直して周囲に目を配った。盗賊達は鏡に釘付け、頭領すら酒を飲む手を

止めて目の前の光景に見入っており、側に立つ見張り役の男も生唾を飲み込んで鏡に集中していた。

「「「……」」」

静かに、気取られないように静かに、全員が横一列に密着し、サイアスがその端に移動する。上半身をぐるぐる巻きに縛っている縄が、全員並んで一直線になるように後ろで捕らわれの数人が動いていた事に、盗賊達は誰一人気付かなかった。

（……今だ！）

そして鏡の中と実際の湿原の方向に、天を貫く二本の竜巻がその姿を表した瞬間、ボッシュが動いた。

（魔法の射手・光の3矢！）

サイアスの服の足元の隙間から外へと滑り出たボッシュは、並んだ全員の縄を掠めるように3本の光の矢を飛ばす。それにより縄は焼き切られ、捕えられていた面々に自由が戻った。

「！！　か、かし……」

真っ先に異変に気付いた見張りの男は、瞬時に間合いを詰めたサイアスに当身を食らわせられ、最後まで言葉を言う事が出来なかった。

「うがっ！？」

デイジイを抑えていた男の手からナイフが弾き飛ばされる。ステ

ンが隠し持っていたナイフを投擲して見事に命中させていた。

「なんだと！？」

「あたし達を舐めないでよね！」

リンプーの蹴りが周囲の盗賊達をなぎ倒す。酒も入っていた男達は反応できないままに夢の世界へと旅立っていった。

「母ちゃん！」

「あたしの事より領主を助けちまいな！」

ランドはデイジイの身柄を確保すると安全な場所へと避難させようとするが、デイジイは捕われていたことを全く感じさせない気丈さで息子に激励を飛ばす。ランドはすぐにその言葉を実行し、虚ろな目をしたキルゴアを自分達の方へと避難させる。

「ようし、いい子だ」

「いつまでもガキ扱いすんなよな」

「おーう、ワタクシどうすればいいのですね……？」

そんな中でただ一人、タペタだけは何もしていなかった。

「お前はコイツを守ってな」

「！　メルシー、ランド。ワタクシ一生懸命守るのですね」

タペタはキルゴアを預けられると、盗賊から庇うように自分の影へと引っ張りこむ。鏡の向こうに見える2本の竜巻が消え去った頃には、既に勝負は付いていた。

「馬鹿な……てめぇら……どうやって……!?」

「さぁて……よくもやってくれたな……」

リンプーが棍を構えて怒りの視線を頭領へと向ける。既に周りの盗賊達は倒され、デイジイ、キルゴアも奪い返されてしまっている。盗賊の頭領は油断が過ぎた事を後悔し、不可解な脱出劇に疑問を僅かに抱くが、それよりこの場から逃げる術を考えていた。

「てめぇ……散々好き放題やりやがって……覚悟はできてんだろうな?」

「……ちっ……」

さらにランドも頭領へとにじり寄る。その拳は怒りのためか、骨のきしむ音が聞こえそうな程に握り込まれている。頭領は視線を鋭く周りへと巡らせると、ある一点に気付き、まだ自分には運が残っている事を確信する。

「……へへへっ……」

「「!?」」

「……キルゴア!　暴れろ!」

「「「!」」」

頭領は虚ろな目のままのキルゴアへと命令を下した。キルゴアはその言葉通り、腕を振り回し、抑えていたタペタを振り切って暴れ出す。

「おーう、どうしたのですね！？」

「今だ！」

「「「！！」」」

全員の視線がキルゴアへと集まった隙を突いて、頭領は煙玉のような物を地面に投げつけた。玉は破裂し、辺りに煙幕が充満する。

「ハハッ！　じゃぁな！！」

「！！　旦那ぁ！」

「……っ！！」

ステンの声に呼応するように、サイアスが俊足を持って煙の中へと飛び込んだ。

「っ！　この野郎！」

「……！」

何が起こっているか分からない煙の中から争いの声と音が聞えてきたところで――――不意にナイフが飛んで来た！

「！　危ねぇ！」

それは頭領が放った苦し紛れの一発。そしてその射線上に居たのは暴れているキルゴア。ひたすらに頭領の命令を実行して暴れていた為に誰も近づけなかった、まさに不運としか言えないタイミングだった。

「！！　ゴフッ……！」

「ボッシュ！？」

しかし、危機を知らせた声の主、一匹のフェレットはそのナイフの前に身を躍らせていた。キルゴアに刺さる寸前、ボッシュは自らの身体でナイフを止めていたのだ。最早誰の目にも入っていない鏡の中では、時を同じくして血を吐いて地面へとめり込むリュウの姿が映し出されていた。

「くっ……くそぉっ！！」

そして晴れていく煙の向こうには、頭領を羽交い絞めにしているサイアスの姿があった。

「お前ぇ！！」

リンプーの怒りの棍の一撃が頭領の胴を薙ぐ。

「げふっ！」

「この野郎！」

そしてトドメとばかりにランドの拳が頭領の顔面を容赦なく捉え、その意識を奪い去った。

「誰か！　治癒魔法とか使えねぇのかよ！」

すぐさま取って返し、ナイフが刺さったまま地面に横たわりピクリとも動かないボッシュを前にしてランドが声を荒げる。しかし周りは全員俯いたまま答えない。ボッシュの体から広がっていく赤い染みが、最早どんな名医でも手に負えない事態である事を指し示していた。

「この傷じゃ……おいら達にはどうしようも……」

「……」

「おチビちゃん……死んじまったのかい……？」

デイジイがそう声を掛けると、全員が顔を下へ向け目を瞑り、どうしようもない自分たちの無力さを嘆いて――――

「……っていうかよ、誰でもいいからはえぇトコこの刺さってるの引っこ抜いてくんねぇか？」

「「「！？」」」

それは確実に死んでいる筈のフェレットから響いてきた声だった。その場にいた全員は、まさに鳩が豆鉄砲を食らった顔と言うのが相応しい表情。

「いやー危ねぇトコだったぜ。死んだらどーするってんだよ。なぁおめぇら？」

「「「……」」」

ナイフが刺さったままの姿で意外な程の余裕を見せ、返答に困るような同意を求めるボッシュを前に、全員時が止まった。

「……なんで生きてんの？」

リンプーが呆気に取られた状態で発した質問は、同じ質問をしようとした周りの面々より僅かに早かった。

「俺っち不死身なのよ」

そう言って血だらけのまま笑うフェレット。それはそれは実に奇妙な光景だった。

「！！　っておいやべぇおめぇら！　伏せろ！」

「え？」

「いいから伏せろ！　全員だ！　来るぜ！」

いきなり豹変したボッシュの言葉に混乱しながらも、その真剣な顔から抜き差しならない状況が発生した事を全員が察していた。そして言葉通りその場に伏せると、強烈な衝撃のような物が湿地帯の方から届く。

「うわっ！？」

「なんだってんだこりゃ！？」

気を抜くと吹き飛ばされそうなその衝撃の威力で鏡にはひびが入り、映像はノイズだらけでまともに映っていない。ただ一匹ボッシュだけが事前のリュウからの念話で何が起こったかを理解していた。

「とっととそいつのその腕輪みてぇなのを外しちまいな！　それで終わりだ！」

「！　わかったよ！」

衝撃波が収まるとボッシュは即座に言い放つ。リンプーがそれに応じてキルゴアの腕についている腕輪を無理やり外し取ると、次第にその目に光が戻っていくのがわかった。

「……ぁ……あ？　……私は……？」

それを確認するとボッシュはすぐさまリュウへと念話を送る。

「よしおめぇら！　相棒のとこへ急ぐぜ！」

ノイズの交じった鏡にかろうじて映し出されているボロボロのリュウと傷だらけのラカン。ボッシュの言葉を受け、いつの間にか見晴らしが良くなり、湿地帯ではなくなったその場へと急行する面々だった。

第十章　9、仕返し

「……？」

目を覚ますと、そこは見慣れぬベッドの上だった。体には特に異常を感じることもなく、強いて言えば幾らか空腹感があるくらいである。

「……よう、相棒。気が付いたか？」

俺の意識が覚醒した事に気付き、声を掛けてきたのは傍らで丸くなっていた白い物体。良くも悪くも頼れる相棒、ボッシュだ。

「……ようボッシュ。ここどこ？」

体を起してキョロキョロと見回してみれば、そこはどこかで見たようなそうでないような、微妙な既視感漂う豪華な部屋。自分が何をどうしてここで寝てるのか、思い出そうとして混乱する俺。

「ここはあの領主の家ん中だぜ。あれからちょうど丸二日経ってるけどな」

「あー……そうか」

あれから、という言葉でラカンを前に意識を失った事を思い出す。ぼーっとした頭で考えてみれば、あれほど全力を出したのはエヴァンジェリンさんの修行中でもなかったことだった。二日も寝ていたと言う事に少し驚いたが、恐らく慣れない事をしたせいで疲れたのだろう。そして自分がここに居る事から察するに、ボッシュの方も

問題はなかったのだと思い当たる。

「そっちは上手くやってくれたみたいだな」

「ん？　まあそりゃな。ちっとばかし死ぬかと思ったけどな」

苦笑気味なボッシュ。お前死なないじゃん、という突っ込みは置いておいて、そう言えば自分も危うく死ぬかと思う程の一撃を受けていたのが思い出された。

「実は俺も死ぬかと思ったけどな」

思い出したくもない内臓をねじ切られる様な一撃と重たすぎるストレートのコンボ。あれは二度と喰らいたくないと思わせるだけの威力があるものだった。喰らった箇所をさすると傷自体は無くなっていたが、まだズキズキと痛んでいるような錯覚を覚える。

「そうかい。まぁ何にせよ無事だったからいいじゃねぇか」

「お前もな」

「俺っちはあれだ、死なねぇからよ。さて、じゃぁあいつ等の所へ行こうぜ？」

ボッシュに促され、知らぬうちに着せられていた寝間着のままで廊下へと出る。そのまま案内されて行きついた場所は3階の食堂らしき部屋。あのラカンが降ってきた場所である。カーンの事もついでに思い出したが、その部分は静かに切り取って俺の主記憶上のゴミ箱へドラッグアンドドロップしておいた。

「どうもー……」

大きな扉を開けて中へと侵入する。どうにもこういった豪華な仕様には慣れがなく、恐る恐ると言った感じの及び腰になってしまうのは、貧乏根性が魂に染みついているからだろうか。

中へ入ってみると、まずは壊れた天井が応急的に修繕されているのが目に入った。そして長いテーブルにランドさん、リンプーさん、サイアスさん、ステンさん、タペタさんと、キルゴアさん、エカルさん、デイジイさんが寛いだ様子で座っていた。

「あ、リュウ！」

「よお。体は大丈夫か？」

「大丈夫みたいです。ご心配をおかけしたようで……」

俺の体を気遣ってくれているランドさんとリンプーさんに返事を返す。まぁ色々と思う所はあったが無事は無事なのでそう言っておく事にする。

「坊や、あたしらの為に酷い目に会わせちゃってすまないねぇ。おかげであたし達もこうして無事に居られるし、ホント坊やには感謝の言葉もないよ」

「いえそんな」

デイジイさんは俺の姿を見るや謝り&お礼の嵐。俺がそうしたかっただけだし、非常に恐縮なので謝らないで欲しいと言ってみる。

「いやいや私からも礼を言う。君が頑張ってくれたおかげで、私達はヤツらの呪縛から逃れられたんだからね」

「いえそんな……」

こちらの言葉を遮ってさらに頭を下げるのは正気を取り戻したキルゴアさん。虚ろな目だった時とはうってかわって精悍な顔つきをした初老のダンディだ。

「実際リュウがあのジャック・ラカンを抑えてくれてなかったら、おいら達みんな間違いなくやられてただろうからねぇ」

「そ……そう」

「いえそんな……」

なんかやたらと俺を持ち上げるステンさんと、その言葉全部を肯定して賛同するように頷くサイアスさん。ここまで褒め殺しの連発で妙に恥ずかしくなっている俺である。あまり慣れていないのだ。

「えーと……そう言えばそのジャック・ラカンは……？」

なんか耐えられなかったので話題を変えるようにそう切り出してみた。部屋をいくら見渡しても、そこにあのデタラメ傭兵の姿はない。少し思案したのだがここで縁が出来たならそれはそれ、出会いの形式なんぞは無視してとっとと「紅き翼」に入ってもらい、ナギの相手をしてくれれば実に建設的だと考えていたのだ。

「彼ならそれまでの契約分の金を受け取ったあと、すぐにどこかへ行ってしまいました。リュウさんに「今度どっかで会ったらまたや

ろうぜ！」と伝えておいてくれと言い残しておりましたよ」

「うげ……」

エカルさんがそう俺に告げる。それは俺の企みが儚く散った事を意味し、何故か再戦を一方的に言い渡されると言う個人的には最後まで救えないオチなのであった。雇っていたのは盗賊なのに律儀に金を払ったらしいキルゴアさんはお人好しと言うかなんというか。

「おっと、立たせたままで失礼しました。さぁさぁどうぞ、こちらへ座って下さい」

促されるままに俺もテーブルに着くと、キルゴアさんが手元にあった小さな呼び出しベルらしき物を鳴らした。するとどこからともなく聞きつけた使用人数人が扉を開け、手押しカートを転がして入ってくる。

そして俺の目の前に並べられていく豪勢な料理の数々。どうやら俺が寝ていた間に、キルゴアさんが正気を無くしている時に解雇した人間を雇い直したらしい。もちろんこの料理は俺が二日も寝ていて腹も減ってるだろうから、と用意してくれたらしく、全て食べて良いとの事だったので遠慮なく頂くことにした。

諸問題が片付いたとあってその場の雰囲気は非常に和やかで明るく、しばらくラカンと戦った感想を聞かれたりとか、ボッシュが死んだと思ったら死ななかった！とか、あーだこーだと歓談し、話題は盗賊達の事に移る。

被害は甚大ではあったが、ギリギリ人命にまで影響が出なかったのが不幸中の幸いだった。全焼したランドさんの家は全額エカルさ

んとキルゴアさんが負担して建て直す事が既に決まっているそうだ。盗賊達は全員しょっ引かれ、今頃は監獄の中だろうとのこと。

「それじゃ、こっちの方も家建てるの手伝ってくれますよね？」

「まぁな。何か色々とお前とその相棒にゃ世話になっちまったしな」

ランドさんが認めると、ステンさんもそれに習って頷いた。サイアスさんはどうするのか再度聞いてみると、「お……面白……そう」とだけ答え、付いてくる気満々なようだった。「何が」面白そうなのかはあえて聞かなかったが。

「おーう。ワタクシもついて行くのですね。みなさん、喜ぶといいですね」

「！？　はい？」

いきなりそんなことを言い出すタペタさん。理由を聞いてみるとタペタさんは旅に出るのが趣味で、俺について行けばいろんな場所へ行けそうだと思ったらしい。エカルさんは苦笑していたがどうやら放浪癖は意外と根強いらしく、諦め半分のようだ。そんなんだから誘拐されるんだよ、という突っ込みエカルさんのメンツを考えて言わなかった。

「まぁ別にいいですけど……人手もいるだろうし」

と言う訳で取り合えず建設作業補佐？にタペタさんも同行する事になった。

その後、食事が一段落した辺りであの腕輪らしき物体の事に話は

変る。実物を見てみたいと俺が言うと、脇からキルゴアさんが現物を取り出した。念の為か、直に触らないように良く分からない魔法のサランラップ？のような物で包まれている。キルゴアさん的には見るのも腹立たしいが、勝手に処分する訳にも行かないから俺の意見を聞き、それからどうするか判断する予定だったらしい。俺はそれをためつすがめつすしてみる。

「それにしても、あの盗賊はこれをどこから手に入れたんですかね？」

「それが……「拾った」と……」

「……え？　……拾った？」

てっきりどこかイカガワシイ魔法具を取り扱う店とかがあって、そこから手に入れたのだろうと思っていたが、まさか拾ったとは驚きである。

盗賊はたまたま拾ったこの腕輪を部下に着けさせた所、何故か意のままに動くようになったのを見て今回の事を思い立ったらしい。キルゴアさんが言うにはその他の事もペラペラと喋っており全て本当の事だったので、これも嘘ではなさそうとのことだった。

「……」

俺は少し考えた後、その腕輪を預かる事にした。人を操る腕輪なんて物は俺の元の記憶にもないが、そんな物がポンポン落ちていてはたまらないので、手が空いたら調べてみようと思ったのだ。

「そうですか。まぁリュウさんなら不用意な事に使ったりはしない

でしょう」

キルゴアさんは俺の事を信用してくれているようで、そう言うと俺に正式に腕輪を渡してくれた。その後はさしたる話題も無くなったので、全員で食べたり飲んだり使用人さん達まで巻き込んでワイワイやり、夜遅くになってお開きとなった。

そんなこんなで俺は今、あてがわれた自室で窓の外を見ながらぼーっとしている。

「まぁ色々あったけど、全部丸く収まったようだし……」

結果を見れば、俺がラカン相手になんとか粘った挙句、最終的に気を失った事を除いて万事上手くいったわけである。釈然としない気持ちはあるが、それは俺個人の問題だ。

「相棒、悔しいって顔に書いてあるぜ？」

「……」

横から飛んできたボッシュの言葉は図星だった。実際、悔しくない訳がないのだ。変身無しとは言え、全力でやってあの結果である。あれをラカンがデタラメだからと言ってもそれは逃げだ。それなりに重傷な所まで追い詰めたのだから尚更だ。あの最後に見た勝ちを確信していたようなふざけたニヤけヅラも、今思い出すと俺の神経を思いっきり逆撫でする材料でしかない。

（あんにゃろいつかぶっ倒して……）

そんなムカムカ全開の決意をひっそりこっそり空に浮かぶ二つの

衛星に誓う。しかしそれでも晴れないこの気持ち。取り合えず今感じるこのどうしようもないもやもやを、どうにかこうにか晴れさせる方法はないかと思いを巡らせてみる。

「……！」

そして唐突にある一つの方法が閃いた。ささやかながら俺の気も晴れて、なお且つ即効性と持続性も兼ね備えたナイスな計画である。若干手間はかかるがそんなことはさしたる問題ではない。

「……なぁボッシュ、男にはやらなきゃなんねー時ってあるよな？」

「？　お、おう。そりゃあんだろうが……いきなりなんでぇ？」

俺が突然真面目にそんなことを言い出した事に若干戸惑ったようなボッシュ。だが返ってくる回答自体は割とどうでもいい。何故ならボッシュに言うのは己の実行意思確認のような物だからだ。

「そう。だから俺はやんなきゃなんねーと思う。これは他の誰でもない、俺がやんなきゃいけない事なんだ」

「お、おう……？」

自分では普通にカッコいい感じの表情をしていたつもりだったが、後にボッシュが言うにはこの時俺は凄い決意をしたような、しかしドス黒いモノが表に出ているような、そんな表情をしていたとのことだった。

「まぁ今日はもう寝るけどな」

「……相棒、丸二日寝てたくせにまだ寝るのかよ。寝過ぎだっての」

「……てい」

「べぷぁっ！？」

突っ込みフェレットの口へデコピンをかまし、俺はとある計画を練りながら、ベッドへと横になるのだった。

その後、しばらく経ってからジャック・ラカンに関して「つかあのおっさん剣刺さんねーんだけどマジで」や「不死身バカ」と言った、まるで誰かがやっかみを込めたような内容の二つ名が、それはそれは不自然な速度で関係者の間に浸透する事になる。一説によると青い髪の少年が各所に現れ、率先して触れ回っていたと言う話もあるが、それがリュウであるのかどうかは誰も知らない。

続く

第十章　9、仕返し（後書き）

第十章終わりです。

ここまで読んでくださった皆様、重ね重ねありがとうございます。

第十一章　1、悲劇

キルゴアさんの屋敷で2、3日ほど御厄介になった俺達は、やっと言った感じで妖精の住処へ向う事にした。

何か色々と遠回りしたような気がしないでもないが、一応これであそこに人と妖精の住める家を建てる事が出来る。資材や何かはキルゴアさんとエカルさんが気を回してくれたらしく、色々と用意してくれていた。もちろんドラゴンズ・ティアが大活躍してそれらを収納、実質手ぶら万歳だ。

「いいなそれ。俺にくれ」

「駄目です。これは誰にもあげませんよ」

屋外に置かれていた大量の資材を、ヒュパりヒュパりと質量保存の法則とか何ソレ？って勢いで収納しまくる様子を羨ましそうに見ていたランドさん。冗談みたいなものだとはわかっていたがコレは残念ながら誰にも渡せない。

そんなこんなで用意が整った俺達はキルゴアさん達に別れを告げる。一気に人数が増えて総勢6人＋1匹ほどで人の目のなさそうな所へ来ると、俺はポケットからフェアリドロップを取り出した。

「……」

「……どうしたの？　早く行こうよ？」

「いやちょっと……」

取り出したはいいものの、何か直感にビンビン来る良からぬ気配を感じ、俺はその赤い宝石を手に持ったまましばらく見つめていた。思い返せば前々回は爆発、前回は落とし穴。二度ある事は三度あると言うから、ひょっとしたら今回も何か罠が仕掛けられている可能性があるのでは？といった事が頭をよぎったのだ。

「……どうしたんだいリュウ？　その妖精達のとこへいくんじゃないのかい？」

「……ん～……まぁそうですよね……」

だがしかしこのまま睨んでいた所で妖精の住処に移動できる訳ではない。俺は爆発と落とし穴は最低でも阻止するべく、ステンさんに促されると気合いを入れて赤い宝石を掲げてみた。

「……あれ？」

（何も起こらない……？）

……と、思ったのが間違いだったと気付くのは、頭部への激しい衝撃を受けた後だった。

ーーー

「リュウてめぇ何しやがんだ！」

「いやいや俺のせいじゃないっすよ！？」

「いった～……なに？　何が降ってきたの？」

派手な音を伴った頭へのダメージにより一瞬目の前が遠くなったような錯覚に襲われた後、気が付けばそこは何度か来た殺風景な山の上だった。そう、言わずと知れた妖精の住処である。頭に衝撃を加えた物体がなんなのか探して見ると、果たしてソレは足元に人数分転がっていた。

「……」

「ナニコレ……？」

「こりゃタライだねぇ……」

そこにはくわんくわんと間抜けな音を立てて転がる金属質なタライが複数落ちていた。ちなみにサイアスさんは頭に出来たたんこぶを摩りながら無言で突っ立っているだけで、タペタさんは当たり所が悪かったのか目を回してぶっ倒れている。

（うかつ！　俺！）

どうやら爆発と足元のみに注意が行き過ぎていたようである。それでも少なからず緊張はしていた筈なのに、その存在を微塵も察知されずに俺達の頭に見事に直撃させられるこのステルスタライは一体なんなのだろうか。ご丁寧にもボッシュ用のサイズまであるのが芸の細かさを感じさせていた。

「……まぁ……文句は後でヤツらに言うとしましょう。あっちです」

「「「……」」」

何とも言えない無言の空間。この鬱憤は後でまとめて妖精達に被って貰うとして、俺達は怒りマークを頭にくっつけながら、ゾロゾロと妖精の居る方へと向かった。

「こんにちはよぅ」

「そんな大人数で今日は何の用よぅ？」

「リュウのヒトのおかげであたし達こんなに増えたよぅ」

「「「……」」」

あの家と言えない建物の所へ到着してみると、そこには妖精が群れていた。こちらは全部で６人＋１匹。対して妖精達はどう見ても１０人程は居る。こいつらが魔法世界を覆い尽くすかも、という俺とボッシュの悪夢が現実になるのも、そう遠くは無いのかもしれない。

「まぁ色々と言いたい事はあるけど取り合えず……」

「「「？」」」

素で俺が何を言いたいのかわからないと言った感じに首をかしげる３人の妖精。こいつらが一番の年長であるせいか、なにやらリー

ダー的な地位に就いているらしい。しかしながら役に立っているのかどうかは甚だ疑問ではある。俺はドラゴンズ・ティアからハリセンを取り出しながら、そのリーダーさん達ににこやかな笑顔で告げた。

「あのフェアリドロップを作ったやつは誰かな？　正直に言えば一撃……かわかんないけど一応手加減くらいはしてやんよ？」

「「「……」」」

俺の静かな怒りを込めた言葉を受け、どういうことか瞬時に察したと思しき妖精達は3人で顔を見合わせた後、なにやら決意を込めたように頷いてからズザッと同時に俺の方を向いた。

「「「こいつよぅ！」」」

「……」

赤いのが青いのを指さし、青いのが黄色いのを指さし、黄色いのが赤いのを指さす。見事な友情のトライアングルの完成である。もちろんその行為が全く何の効果もあげないどころか、完璧なまでの逆効果である事は確定的に明らかだ。

「……」

当然のように手加減無しの必殺ハリセンホムーランが火を噴き、山岳地帯に三つのイイ音と悲鳴が木霊したのは言うまでもない。

その後、気を取り直して妖精達への自己紹介やら諸々を終えると、ランドさん達に早速建設準備に取り掛かってもらう事となった。場

所は割と広めな崖の辺りに決定し、大体普通の家より少し豪華？なくらいのモノが建てられる予定である。

「で、おいら達はせっせと作業に入る、と」

「たまんねーなこりゃしかし」

文句を言いつつ基礎工事を始めるランドさんとステンさん。ドカタ的なヘルメットと作業着が良く似合っている。ついでにタペタさんも色々と手伝いをしてくれているようだ。その辺の作業については専門外な残りのメンバーは、何をするでもなく暇なので自由時間である。

「じゃ、あたしは久々に妖精ちゃん達と狩りでもしてこよっかな」

「わかりました。サイアスさんはどうします？」

「こ……ここに、居る」

サイアスさんはどうやらぼーっとしてることに決めたらしく、妖精達の草敷き屋根の下で待っているらしい。

「となれば俺は……」

そして俺はヒュパヒュパとドラゴンズ・ティアから釣り具と言う名の決戦兵器を取り出し、颯爽と崖の下へ身を躍らせて……

「っと相棒、釣りすんなら俺っちここで待ってっからよ」

「ん？　ああ」

崖下へと飛び出すまであと一歩の所で、それまで影の薄かったボッシュが腰のポーチから顔を出していた。

「ついでによ、あの腕輪置いてってくんねぇか？」

「？　あれを？」

腕輪とはキルゴアさんが操られていたあの腕輪のことである。ボッシュが興味を示すとは中々珍しい感じがする。

「何すんの？」

「いやな、俺っちの記憶ん中にゃよくわかんねぇもんも結構あんだけどよ、あの腕輪の事なら何か分かりそうな気がすんだよ」

そう言えば忘れ気味ではあったが、ボッシュはユンナの知識を継いでいたのだった。そのせいかどうかは知らないが、何気にそういう科学的な好奇心は結構強いのかもしれない。実は相当頭いいって事なんじゃないのか？っていう話だがそれはスルー。

「わかった。まぁ何かあったら呼んでくれりゃ……」

「……すぐ来るってか？」

「……努力はする」

「俺っちの目を見て言えや相棒」

「……とぉう！」

ボッシュの突っ込みを華麗にスルーし、崖下へと投身自殺さながらに身を投げる俺だった。

そんな感じで建築担当以外は各々適当な時間を過ごした俺達。山の向こうに日が隠れだし、いい感じに夕方頃になると集まって全員で夕食を囲む運びとなった。当然料理担当は俺である。手際良く鍋を振ったり野菜を刻んだりする俺の姿を、興味津々な感じで妖精の何人かが見に来ていた。中々いい心掛けだと感心する。

（まぁ料理なら俺でも教えられるしな）

あのリーダー三人と違って素直ならいいなぁとか、そんな事を考えながら出来あがった料理をランドさんが作ってくれていた大きめな木のテーブルに並べていく。

「おーう、ムッシュ・リュウ。良ろしければ、ワタクシの作った料理も皆さんに食べて頂きたいのですねシルブプレ」

「え……？」

そんな俺の側にペッタラペッタラとカエル的効果音を伴ってやってきたのはタペタさん。いつの間に料理をしたのか両手にお皿を持っていた。その上では中々に美味しそうな唐揚げらしきモノが湯気を立てている。

「……ああ、別に……いいんじゃない……ですか？」

「？　なんですかね？」

確かにそれは美味しそうではあるし何も問題はないと思った。だが……しかし何故か、それを見た俺の記憶の中にある何かが、メッチャけたたましくサイレンを鳴らしていた。そいつはヤバイ！ヤバイんだ！とまるで最凶の敵を目の前にしたような、そんな具合である。

「ああいや……その……」

「？　どうかしたですかね？」

俺のそんな根拠のあるのか無いのかわからない疑念など露知らず、屈託のない笑顔を向けてくるタペタさん。眩しすぎるその顔からは、本当に自分の料理をただ食べて欲しいだけなのだという事が痛い程伝わってくる。

「ワタクシ、こう見えて料理は得意なのですね。父上にも実に素晴らしいと何度も褒めて貰ったのでした。皆さんにも是非味わってほしいのですね」

そこには何の害意も敵意も悪意も無かった。あるとすればそれは心からの善意、ただそれだけである。

「うん……まぁ……いいと思いますよ……じゃあそこに並べといてもらえます……？」

「おーう。メルシーボクゥ、リュウ。たくさんあるので遠慮せずに食べて欲しいのですね」

嬉しそうに、本当に嬉しそうにお皿を並べだすタペタさん。俺は何が引っ掛かっているのかわからず、脳内サイレンの原因について

記憶の中を掘り返しながらその他の料理を並べていくのだった。

「あーお腹空いたー」

「リュウの料理だけを楽しみに今日頑張ってたよおいら」

「そういや確かにリュウの料理は美味かったな」

「た……楽しみ」

ちょうど並べ終わった辺りのいいタイミングでこちらへとやってきた皆様方。そんなみんなの期待とは裏腹に、あのタペタさんのお皿の上の料理についてどうにも気が気でない俺である。

「っと、皆さん揃いましたね。じゃあ頂きましょうか」

全員が席に着き、今か今かと待ち構えているこの段階に至っても、まだ何だったっけなー？と脳内格闘中の俺である。

「？　どしたの？」

「あいえ……別に……」

ちなみに妖精達用の分は別途きちんと作ってある。あちらはあちらで人数が多いので分けてあるのだ。そんなこんなで始まるお食事タイム。今日のメニューはいつもと少し違い、不死身の癖に健康に口五月蝿いボッシュの嗜好で油分控えめのヘルシー系料理である。出来は上々のようで美味い美味いとランドさんやステンさんも仕事の疲れを癒せているようだ。

「ねーリュウ、この唐揚げ初めて見たけど新作？」

「！！」

「お、それも美味そうだねー。じゃおいらが一口……」

そんな中ついにあのお皿へと手が伸びていく。俺が口を挟む余裕も無く、ステンさんがフォークを一閃させるとその唐揚げを口に持っていって……

「ハムッ……ん……これは……中々……うん、食べた事のない食感だねぇ」

「おーう。ムッシュ・ステン、味の方はどうですかね？」

「え？　いや、そりゃ美味しかったけど？」

「それは良かったのですね」

「あれ？　これリュウが作ったんじゃないの？」

俺作ではないと知って少し驚いたような様子のステンさんと、美味しいという感想に至極御満悦なタペタさん。しかしそのタペタさんの次の一言がその場を凍り付かせる事になろうとは、この時誰も思っていなかった。

「実は、隠し味にミミズ肉が少し混ぜてあるのですね。獲るのに苦労した甲斐があったのですね」

「「「！？」」」

それは全員の時を止めるのに十分過ぎる一撃だった。見事なまでに全員動きを止め、一斉にギギギッと油が切れたような動きでタペタさんの方を向いた。

（しまったそうだった！　思い出した！）

「え？　ちょっと待って……ミミズ……ってなんだよそれ？　じゃ、じゃあこれって……一体何の唐揚げ？」

「ちょっ、それ以上は……！」

自分が一体何を食したのか、確かに俺も同じ立場なら気になる所ではある。しかし世の中には聞かない方がいい事もあると言うのに、敢えてそれを聞くステンさんの勇気を俺は称えたい。そして、咄嗟に止めようとしたが機嫌を良くしたタペタさんは残念ながら止まらなかった。

「それはワタクシ自慢のフライド・ゴキブリですね。父上も絶賛の一品なのでした」

「！！？　ゴ……ゴキブ……！？」

（案の定だよ！　おバカ！　俺！）

サーッと言う音が聞こえてくるくらいの勢いで顔を青くするステンさん。俺はもっときちんと思い出すべきだったと後悔した。思い出してさえいれば、何とかして同じ食卓に並べるのを断っていたはずである。

キルゴアさんの屋敷ではエカルさんもタペタさんも普通に食事していたせいか頭の中からスッポリ抜け落ちていた。そうなのだ。普通の人間と同じ食事をする亜人の中においても、匍匐族（クロウラー）だけは嗜好がカエルそのものを色濃く受け継いでいるという事を昔の記憶からようやく引っ張り出せた。

「ア、アネさん！　おいらに水を……水をーっ！！」

「ちょっとやめてステン！　ゴキブリ食べた口で話しかけないでよ！」

「……駄目だ。俺一気に食欲失せちまった……ウッ……気持ちわりぃ……」

「俺っちもだよちきしょう……」

「……」

「……何かおかしかったですかね？」

喉を抑えてのたうち回るステンさんと、気持ちはわかるけど何気にヒドイリンプーさん。火が消えたように顔に縦線が入っている他メンバー。ただ一人タペタさんだけは何事もなかったように食べている辺り、結構大物かもしれない。

それにしても和やかだった筈の食事風景が、一転して悲劇の舞台に早変わりである。俺がキッチリ思い出していれば防げた事態なので、何とも申し訳ないような気持ちで一杯だ。世の中の嗜好と言うのは千差万別であるということを嫌になる程知らされたのだった。

その後何故か開かれた緊急ミーティングで、タペタさんは自分の分以外は絶対に料理に携わってはならない法案が圧倒的賛成多数で可決されました。

※全員がリタイアしてしまったせいで余った料理（フライド・G以外）は後でスタッフ（妖精達）が美味しく頂きました。

第十一章　2、行方

「相棒、ちょっとこっち来てくれ」

「？　どしたボッシュ？」

一連のG料理騒動から一夜明け、タペタさんの動向を数人が監視しながら俺が作るというかつてない厳戒態勢の朝食を済ませたあと、何をしようかと思っていた所の俺は唐突にボッシュに呼ばれた。

「何？」

「おう。実はあの腕輪だがよ……」

「？　なんかわかったの？」

何かと思えば調べようと思いつつボッシュに投げっぱなしの腕輪の話しである。つらつらとボッシュが言うには、あの腕輪に使われている技術はユンナの知識の中に引っ掛かる項目があったそうだ。しかしどうにも腕輪に使われているモノは技術的に未成熟な様で、もしかしたらコレ自体は試作品みたいなものなのではないか、とのことらしい。

「じゃあ他にもあるってこと？」

「多分な」

あれで試作品ということは、またもや何かどこかで良からぬ事に使われる正規品があるのではないか？という事なので、念のため探

し出して壊した方がいいだろうといった結論に至った。

「でもそれって探せたりすんの？」

「まぁ出来るっちゃ出来る……」

「マジかよ。すげーな天才かお前」

「……が、俺っちの手じゃ無理だろうなぁどう考えても」

「なんじゃそら？」

話によると探索用のレーダー的な機械を作れれば探すのは比較的容易らしい。しかし理論とか設計とか、そういうのはわかるが生憎ボッシュは知識だけな上にフェレットなので、機械の操作は出来るが細かい綿密な「作り出す」作業は苦手なのだそうだ。

「じゃ誰かそういうのが分かる人に代わりに作ってもらうしかないわけ？」

「そういうこったな」

「……」

つまりまたもや人を頼るという事になる。いくら竜変身とか出来てもこういった専門分野には歯が立たない辺り、強さとかってこんな時無意味だなぁと自分の無力さを痛感する俺である。それはさておき自らの交友範囲を顧みて、誰かそんな科学色に強い人は居ないものかと思い返すこと数十秒。

「……モモさんくらいか」

「ああ、あの3人組みかい」

以前シュークの街でふとしたことから話しかけたらナンパと思われ、何故か勝負を挑まれることになった悠久の風所属の女性3人ユニットの一人、機械フェチでメガネきょぬーという野馳り族の天然系バズーカおねーさんである。ちなみに後二人は剣を持つと性格が変わる？な厳しい女上司風リーダーのゼノさんと、ツンツン風味で障害なんざ壊して進め！な怖い銃撃おねーさんのアースラさんだ。

「連絡先交換しといて良かったな」

「だなぁ」

一応「完全なる世界」捜索は忘れてはいないが手掛かり無しなのでこっちを優先。まだまだ時間はあるので大丈夫だろう。ドラゴンズ・ティアからテレコーダーを取り出し、メモリ機能を使ってコールしてみる。

「「……」」

待つ事数分……

「……でないし」

「ま、世の中そう都合良くは行かねぇってね」

したり顔でこの世を語るフェレットとかどうなんだ？と思いつつ、またまた足で捜索する事になりそうな気配を感じる俺である。ただ

今回の相手は顔見知りだし、悠久の風支部にでも問い合わせれば行方も割り出せるだろうから、幾分気が楽でそこまで手古摺らないと思われる。

「そうだ、ついでに……」

テレコーダーを取り出したついでにまた連絡すると言っておいて一向に来る気配のないナギが今何やってるのか気になって呼び出してみると、こちらは割とすんなり出てくれた。

「あ、もしもしナ……」

『わりぃ！　今取り込み中でよ！　また今度連絡する！』

「は？　おいちょっと……」

そしてそこでプッツリと途切れるテレコーダー。リダイヤルしても今度は反応なしという有様だ。

「……何だろ？」

「まぁナギッ子も元気にはやってそうだなぁ」

僅かな会話ではあったが聞こえてきたのは以前のように鬱々とした声ではなく、実に生き生きとした感じの声だった。まるでスゴイ強者と戦う事が出来る事になったような、そんな喜びっぷりが溢れ出ていた感じである。

（なんかあったのか……？）

今の感じから察するに、集まるのはまた少し先になりそうな予感バリバリだ。

「こっちはしばらく動かなそうだな……んじゃま、モモさん探しに行きますか」

「おうよ」

そんなわけでモモさんとコンタクトを取ることに決め、まずは身支度を整えるべく寝起きに使っていたテントに戻る俺とボッシュであった。

――――――――――――――――――――

「あれ？　リュウ今度はどこ行くの？」

「おいおい、お前が居なくなったら誰がメシを作るんだ？」

いそいそと着替えたりドラゴンズ・ティアの中身を整理したりしている俺の側へとやってきたのはリンプーさんにランドさん。ステンさんは昨日のG食（ショック）のせいか朝食もあまり取らずにうんうん唸って寝込んでおり、タペタさんはノホホンと妖精達と会話、サイアスさんは日陰でボーっとしている。

「色々あって、ちょっと機械系に強い人の手を借りたいんですよ。幸い心当たりはありますので」

「ふーん。あ、当然あたしも付いてくからね」

「今回はそんなに面白くは無いと思いますが……」

「まぁいいじゃん。どうせここにいても暇だし」

なんかスッカリここに住み着いてる人って感じのリンプーさんである。その隣で若干マジでメシの心配をしているランドさん。確かに俺が居なくなると、まともに料理が出来る人間はあのお方しかこの場には居ない。

「頼むからタペタの料理だけは勘弁してくれよな」

「一応妖精達に言っておくんで肉やら魚やらは確保できると思いますし、そんなにかからないと思いますからすぐ戻ってきますよ……多分」

「そうかぁ？　まぁ早めに頼むぜ」

文句を言うランドさんをなんとか抑え、妖精達に言って食料を分けてもらう事をお願いし、新しいフェアリドロップを受け取る。ちなみにこの赤い宝石に関しては、今度こそ普通にしろとキツく言い含めておいたので、妖精達のなけなしの良心というものに期待を寄せる俺である。

「あれ？」

「……」

「サイアスさんも行くんですか？」

「……」

いつの間にか俺とリンプーさんの後ろにサイアスさんがついて来ていた。俺が行くのかどうかを尋ねると無言で頷く孤高の犬侍さん。別に断る理由はないので同行決定。

「さて、じゃあ行きましょう」

家の建設をランドさん、ステンさん、タペタさんに任せた俺達は元のファマ村・ガンツ地方へと戻った。目的地は一番近い悠久の風支部のある街である。そこでモモさんの所属するチーム、確か名を「レンジャー」と言ったと思うが、その行方を聞くのだ。

「ていうかこの辺に他に街あんのか調べてなかったな」

「相棒……そういうこたぁもっと早く気付け」

「お前も気付かなかったじゃん」

「リュウってさ、意外と場当たり的だよねー」

「うっ……」

リンプーさんにまで何気ない一言で突っ込まれた俺は一体どうすればいいのだろうか。

「こ……この先……確か……街があった」

「え？」

そんな俺を見るに見かねてか、助け船を出してくれたのはサイアスさん。ゆっくりと指を指す方向、北の方に街があるらしい。

「マジでありがとうございますサイアスさん……」

というわけでそっちへ向かって歩き出した俺達一行。道中サイアスさんから聞いた話によると、この先にあるのは「ウルカン・タパ」と言う名の街で、どうやら悠久の風支部が存在しているらしい。偶然とは言えありがたい限りである。

そんなこんなで道中特に問題も無く、野を越え森を越え一日掛かりで歩いた先に街が見えてきた。

「あれかなー？」

「恐らくは……」

そして到着ウルカン・タパ。どことなく民族宗教的な香りの強い厳かな雰囲気の街で、岩やレンガを積み上げた素朴な感じの家々が目に付く。田舎の割に人は多く、少し歩いてみた所俺達のようなヨソ者も偏見で見たりはせず、穏やかな感じで挨拶をしてくれる至って平和な街のようだ。裏を返せばそこまで目立った特徴が無いとも言えるが。

「いいトコだけど、あんまり面白くないかも」

「……」

「まぁ今は観光じゃなくて人探しが目的ですし」

そう言えば最近良く人を探すなぁと自分の動向を振り返ってみたり。そんなこんなでトコトコ歩いていると、悠久の風支部を示す看

板を発見したので、そこを訪ねてみることにした。

「お邪魔しまーす」

「相棒、その挨拶はどうかと思うぜ」

訪ねてみたはいいものの、中は非常にガラーンとしていて閑古鳥が鳴いているような有様である。そりゃこんだけ平和な街ならここに頼るような事も無いだろう事は俺でもわかる。一応係の人らしき女性がカウンターにぽつんと立っているので、その人に話を伺ってみる事にした。

「あのー、すみませんちょっとお尋ねしたい事があるんですが……」

「はいはい、何か御用でしょうか？」

受付の女性は、例え誰も訪ねて来なかろうとも常に笑顔を絶やさない、といった感じの物腰柔らかな人というのが第一印象。やはり接客業なだけにこういう穏やかな人が受付には向いているのだろう。

「人……というか登録しているとあるグループの所在地を知りたいのですが……」

「かしこまりました。そのグループのお名前をお伺いしてもよろしいですか？」

不躾に尋ねても嫌な顔一つしないのは流石である。とりあえず目的の人達の名前、「レンジャー」を告げると、女性は背後の棚から何か目録のような物を取り出してパラパラと捲りだした。

確かメガロメセンブリアの本部やシュークの港町では端末のような物を操作していた筈である。しかしここでは取り出したのは本という辺り、意外と田舎の方ではアナログな仕様なのか？と思ったら、ページの上の空中に詳細画面が立体映像で浮かんでいた。流石は田舎とはいえ魔法世界。自分の認識の甘さをちょっと反省する俺である。

「レンジャー……ああ、こちらの方々ですね。最近登録名が変更されていますが……」

「？　そうなんですか？」

「はい。新しい名前は……「トリニティ」と言うらしいですわ」

「へぇ……」

何があって改名したのかは会った時に聞けばいいので今はスルー。

「現在は……エリジウム大陸にある支部へ立ち寄ったのが最後のようですね」

「そうなんですか……？」

正直大陸名とか言われてもナニソレってなもんである。

「よろしければ、そちらの支部へ詳しい情報の照会を行いましょうか？」

「いいんですか？」

「構いませんわ。一日ほど待って頂ければ詳細をお伝えできると思います」

「じゃあ、お願いします」

「かしこまりましたわ」

なんかスゴイやる気を見せる受け付けの女性。取り合えずお願いして出て行くとき、暇つぶし来たァァ！なんて燃えた声が微かに聞こえた気がしたが、俺は第一印象を大事にしたかったので聞こえないフリである。

「という訳でここで一泊しますがいいですか？」

「おっけー」

「……待つ」

リンプーさんとサイアスさんのお二人から特に文句は無く、そういうわけで適当に一泊する事に決定した俺達。幸いお金はまだあるので宿屋なんかは問題ない。

「今ごろランド達大変だろうねー」

「まぁ頑張ってもらいましょう」

工事中でひーこら言ってそうなあの巨体を思い浮かべて思わず苦笑いである。そんなこんなで一晩経って、再び適当にのんびりと悠久の風支部を訪ねる俺達。しかし期待とは裏腹に受付嬢さんからは色の良い結果を聞く事はできなかった。

「消息不明……ですか？」

「はい。最後に支部を訪れたのは約三週間程前となっています。「トリニティ」は週に一度は支部に依頼を受けに来ていたようですが、その最後の依頼達成後、次は「ハイランド」へ向かうと言ったまま音沙汰がないようですわ」

「……」

「相棒……」

モモさんはともかく、あの規律とかに厳しそうなゼノさんとアースラさんが、それまでの習慣を何の意味もなく破るとはあまり考えられないことである。つまり……

「何かあったのかな」

自然、そういう方向に考えのベクトルが向く。結構楽に連絡を取れると思ったのに、なんだかまた一悶着ありそうな塩梅である。

「なんかよくわかんないけど、ソコへ行ってみればいいんじゃないの？」

「……」

リンプーさんの言葉に頷くサイアスさん。うすうすそうなることは感じていたが、ここは確かに二人の言う通りだ。

「そうですね、行ってみますか」

「おうよ」

俺達はレンジャー改めトリニティの行方を探すべく、エリジウム大陸を目指す事にするのだった。

第十一章　3、猿の国

受付嬢さんによると最後に「トリニティ」の面々が向かったとされるのはエリジウム大陸の「ハイランド」という国とのことで、そこへ行くにはここウルカン・タパから出ている飛行船の定期便で一旦アリアドネーへ向かい、乗り換えるのが手っ取り早いらしい。

少し長旅になりそうなので、ウルカン・タパの街で食料を多めに買い込んだ俺達は一旦妖精達の里へ戻ることにした。普通になったという触れ込みのフェアリドロップだったが、使ってみると今度は物凄い勢いで宝石の中に吸い込まれるという現象に見舞われた。確かに痛みはないし今までよりは普通だが、しかし何のタメも無く「うわっ」とか言う暇もない程に突然過ぎて正直心臓に悪かった。当然リテイクだろう。

戻ってみると、目を離した期間は僅かに2日程だったにも関わらず、家の土台部分は出来ていた。普通に考えて桁違いのスピードだと個人的に思うが、そこは気にしたら負けというやつだ。

「よお、戻ったか。……？　っておい誰も連れてきてないじゃねーか」

「すみません、またすぐ行く事になりまして」

「なんだよ、やっとまともな飯が食えるかと思ったのに」

ランドさんの隣ではステンさんも普通に作業をしている。どうやらもう復活しているらしく、作業着姿で頑張ってくれているみたいだ。

「ワタクシの看病、効きましたね。ムッシュ・ステンの為にたくさんの料理作った甲斐があったのでした」

「「……」」

（ああ、なるほど……）

非常に引き攣った表情をこぼすステンさんとランドさん。つまり今のはカラ元気、寝込んでいるとタペタさんが看病にかこつけて善意であのG料理を持ってくるから、嫌でも元気なフリをしないとならなかった、といった感じだろう。頭ごなしに拒否しない辺り、ステンさんのイイ人ぶりに心の中で涙がちょちょ切れる俺である。しかしなんだかんだ文句を言いつつ手はきっちり動かしている辺り、この二人は結構な職人さんだと思う。

ちなみに妖精達はさらに1人増えていた。このまま行くと数えるのがめんどくさくなるだろうこと請け合いだ。仕入れた食料をヒュパリと取り出すと保管しておくよう頼み、取り合えずこれで飯はしばらく我慢してくれとランドさん達を説得したりしてちょっと休憩タイムである。

「……で、次は「ハイランド」っていう場所へ行くんです」

「ぶっ！？」

話の流れ上どこへ行くんだ？と言う話になり、向かう先の地名を聞いたステンさんがなんか勢いよくお茶を噴きだした。

「おいおいそりゃホントかい？　ハイランドって言やおいらの地元

じゃないか」

「？　そうなんですか？」

（そーいやそーだっけ？）

言われてみればハイランドという地名が昔の記憶に引っ掛かる感じがしていた。しかしハイランダーが住むからハイランドなのか、それともハイランドに住むからハイランダーなのか、卵か先か鶏が先か、全く関係ないけど由来が気になる所である。

「ウキャキャ、そういう事ならおいらが案内するよ！　決して仕事するのが嫌な訳じゃなく！」

「お前……あからさま過ぎるだろ？」

「そ、そんなことないっすよランドの旦那」

「じゃあサイアス、お前ステンの代わりに手伝ってくれよ。な？」

「……」

バツが悪そうに目を逸らしているステンさん。雰囲気で拒否ってるのがわかるが結局は身代わりに差し出されるサイアスさん。そういうわけでステンさんに案内をしてもらう事になり、俺、ボッシュ、リンプーさん、ステンさんの3人と一匹でハイランドへと向う事になった。

余談だがタペタさんは久しぶりに料理熱が再燃したとかでマッタリやる気を出しており、あまり長居するとあの身の毛もよだつ料理

を食わされそうなので早めに戻ろうと満場一致で即刻離脱だった。もちろんフェアリドロップは妖精に言ってまた新たに調達済みである。

そんなこんなで元の場所へと戻った俺達はウルカン・タパから出ている飛行船でハイランドへと向かった。全行程で乗り換え含めて大体2日程だ。気付いた事としてその日の晩にステンさんがご飯を食べる時、腕の振えが酷かったのはきっとGがトラウマになっているのだろう。心の傷はなかなかに深そうである。

ところで近頃湯水のようにお金を使っているが、まぁまだ財布には余裕があるので問題ないだろう。下世話ながら財布の余裕は心の余裕に繋がると思うのだ。そんな事を考えながらゆったり空の景色を眺めていると、隣ではやたらとテンションの高いリンプーさんがはしゃいでいた。

「うわースゴイね！　あたし飛行船初めて乗った！」

「アネさん、意外と田舎もんだよね」

「う、うるさいな！　別にいいじゃんか……」

ステンさんにからかわれ、仏頂面しつつも尻尾はふりふり。喜んでもらえてるようで何よりである。

そんな感じで快適な空の旅を楽しんだ俺達はエリジウム大陸にあるハイランドまでやってきていた。この大陸は古代の遺跡やなんかとケルベラス大樹林とか言う熱帯雨林が広範囲を占める大陸である。ハイランドは森から離れて北へ少し行った場所にある城と城下町に分かれている小さな国家で、城の方は高く強固な壁と深い堀で囲ま

れた、まさに城塞と言える鼠一匹入る隙のない城である。

城下町のハイランドシティは一般の高山族（ハイランダー）が多く暮らす街で、人間やその他の亜人も居る事は居るが多くなく、要するに猿だらけである。機械や自然はちょうど半々な感じの調和のとれた街並みがなかなかに映えている。

そんな中、地元に帰ってきたという割にテンションの低い猿のお方が一人。

「……」

「なんか暗いですねステンさん？」

「まだアレ引き摺ってるとか？」

「いやぁまぁおいらにも色々と事情がありましてね。ていうかアネさん、それ思い出させないでよ……」

（そういや確かステンさんて……なんだっけ？　まぁいいか）

ハイランドと言う国とステンさんは、確か地元という以外に何かしらの関係があったような気がするが、今回は特に関係ないし、本腰入れて思い出さなくてもいいかと一人で納得する俺である。

「ねリュウ、まずは情報でしょ？」

「っと、そうですね」

この街には「悠久の風」支部は無い。ウルカン・タパで得られた

情報から、ゼノさん達「トリニティ」が支部のある町からこの街へ向かったとすると、移動時間とか滞在時間とかを考えて今から二週間～三週間前の情報を中心に集める必要がありそうだ。そんなこんなでステンさんに案内されながら情報求めて街を徘徊する俺達だった。

――――――――――――――――――――

「手掛かりなしかよ……」

「まぁ仕方ねぇよ相棒」

流石に二、三週間も前の話となると余程印象強くないとあんまり覚えている人も居ないようで、道行く冒険者とか武器屋とかで色々と話を聞いて回ったが特に有力な情報は得られなかった。残る頼みは夜を待っての酒場突入である。今回は見た目大人なステンさんが居るし、俺が入ってもヘンな目で見られたりはしないだろう。

「ここがおいらの知ってる限り一番大きな酒場さ」

「よし、気合い入れて行きましょう」

「あたしお酒って嫌い」

そう言えば魔法世界じゃ未成年とかって関係ないのか？なんて疑問はさておき、ステンさんを先頭にその大きめな酒場へと侵入していく俺達。中はやっぱりハイランダーが多いがそれ以外の人もそこそこいるようである。素行が悪い人は見受けられず、盛り上がってはいるがみんなまとも？な酔っ払いばかりだ。

「おや？　……あそこだけ妙に人が少ないねぇ」

「……あれ？」

そんな中、一角だけ妙に人の少ないテーブルが目に付いた。よくよく見てみると大きな体を持つ亜人さんが一人、こちらに背を向けて酒を飲んでいるようで、その巨体に怯えているのか誰も近付かないらしい。

≪おい！　相棒！　あいつぁひょっとして……≫

≪……やっぱそう思う？　他人の空似ってレベルじゃねーよね≫

俺とボッシュはそのどこかで見たような背中にピンと来た。ピンク色の鱗肌に頑丈そうな鎧、長い尻尾を持った巨躯の亜人。背負っているのが斧でなく巨大な槍と言うのが若干俺の知っているあの人とは違うが、以前会った事のある気配なので本人であることは間違いないだろう。俺は物怖じせずにその背中へと近付いていった。

「お、おいリュウ……」

「あ、大丈夫ですよ」

ステンさんがその亜人さんの方へズンズン近付いていく俺の行動を止めに来るが、俺は構わずにその大きな背中の人に声をかけることにした。

「お久しぶりです。ガーランドさん」

「……！」

俺の声に振り返った巨躯の亜人さん。僅かに驚いたような表情を覗かせるその人は、やはり以前ウールオルの街でお世話になったあのガーランドさんであった。ここで本当に他人の空似だったとしたら恥ずかしいどころの話ではないが。

「……リュウか」

相変わらずの巨体なため、その手に持っているお酒の入ったジョッキがやけに小さく見える。そう言えば初めて話し掛けたときも似たようなシチュエーションだった事を思い出して内心苦笑する俺である。

「久しいな。まさかこんな所でお前と会うとは思わなかったぞ」

そう言ってジョッキの酒を一気に飲み干し、表情を緩めるガーランドさんは相変わらずの厳しい雰囲気と、見た目に反する穏やかな空気を纏っていた。後ろでステンさんが「ゲェー！？　鰐の獣人！？」なんてリアクションを取っているが突っ込みはしない。

「ねぇリュウ。このランドみたいなおっきい人、知り合い？」

流石に怖いもの知らずなリンプーさん。見た目超怖い鰐の獣人ガーランドさんを思いっきり指差してこの人呼ばわりである。

「こちらはガーランドさんって言って、ちょっと前に俺が世話になった人ですよ」

「へー」

「なんだリュウの知り合いかぁ。それにしてもランドの旦那に勝るとも劣らない巨体だねぇこりゃ」

そんな二人のコメントを静かに聞きながら、ガーランドさんは俺の後ろの二人を不思議そうに見ている。

「……しばらく見ない間に妙なツレが出来たんだな。それともその連中が「紅き翼」とやらか？」

「あーいや違います。ちょっと色んな因果がありまして……」

「ふむ……」

何やら顎に手を置いて不思議な物を見るような目で俺を見てくるガーランドさん。どこか納得している風だが、一体どこら辺に納得する要素があるのだろうか。会話が途切れたが沈黙のままっていうのもアレなので、取り合えずここに居る理由を聞いてみる事にした。

「ガーランドさんはこんな所で何を……？」

「それは……む？……悪いが話は後だ！」

「え？」

俺の後ろのさらに後ろ、酒場の入り口付近を見て表情を一変させたガーランドさんは、そう言っていきなり入口へと駆け出した。巨躯を誇るガーランドさんが突っ込んでいくその姿はまるでダンプか何かのようで、店の中なんて事はお構いなし。

「ちょっ！？　どうしたんですか！？」

ガーランドさんの視線の先、入り口付近に居たのは頭からスッポリと深緑のフードを被り、同色の全身ぶかぶかなローブを着こんだ正体不明な人物。男か女かすらわからないその人物目掛けてガーランドさんが突っ込んでいく。

「!?　ヒィッ!?」

当然、そのローブの人物は恐ろしい形相をした鰐の獣人が自分目掛けて突っ込んできたのを見て恐怖に駆られ、後ろを向いて一目散に逃げ出した。

「逃がさんぞズルスル!」

ガーランドさんはそのままそのローブの人物を追いかけて店の外へと出ていってしまった。後にはそのあまりの迫力に酔いが醒めたのか、しーんとなって入り口の方を見ている大勢の客達＋何がなんだかわかっていない俺達という図である。

「相棒、取りあえず追いかけようぜ!」

「あ、ああ。わかった」

唯一冷静だった?ボッシュに促され、同じく店を後にしようとする俺達。しかしボッシュ同様冷静だったらしい店の店長さんに止められ、ガーランドさんの飲んでいた分の料金を支払わされた。こんな事態でもそこに気付ける店長さんは凄いが、少し空気を読んで欲しいと思う俺は我儘だろうか。

「貴様がレイに話を持ち掛けたという事はわかっている」

「ヒィッ！　な、なんのことだか……」

「とぼけるなっ！！」

（何がどうなってんだ？）

ちょっと足止めされたがなんとか追いかけてみると、さほど離れていない路地裏でその二人は見つけることができた。ガーランドさんはその正体不明の人物の首根っこを捕まえ、片手で持ち上げギリギリと締め上げている。ローブの人物は一応じたばた抵抗しているようだが、ガーランドさんの巨体の前には無意味に等しい。

「ガーランドさん、一体何が……？」

「……」

そう尋ねると少しの沈黙の後、ガーランドさんは徐に口を開いてくれた。

「今から二週間程前か。俺とレイはこの街に立ち寄った。2、3日滞在するつもりだったがその翌日……突然レイの姿が消えた」

「……」

「何か用事でもあるのかと思い放っておくつもりだったが、数日待っても姿を見せず……妙だと思った俺は幾人か心当たりはないか聞いて回った。その結果この男、ズルスルが消える直前のレイとこそこそ話をしている姿を何人かが目撃していてな、あの店にコイツが

出没するという情報を得た俺は、ああして張っていたわけだ」

「なるほど……」

まだレイさんと行動を共にしていたとは驚きだが、まぁそこは取りあえずスルー。

「さぁ吐け。貴様、一体レイをどこへやった」

「ひ、わ、わかりました。わかりましたから離してくださいよ。く、苦しい……」

ガーランドさんが睨みを利かせながらギリギリと締める手に力を入れると、男は暴れる事も無くあっさりと観念したようだ。今だローブから顔すらも見せないが、溢れ出る小物臭がこいつの情けなさを強調している。

「わ、私はただ、この国が狙う財宝が「盗人の墓」にあるって言っただけで……」

「！」

「財宝だと！？　どういうことだ！」

「ひーっ！！　声が大きいです！！」

「国」という単語が出た瞬間、後ろに居るステンさんから剣呑な空気が一瞬だけ漏れ出したがとりあえずスルーして男の話に耳を傾ける。

その正体不明のローブの男（？）、ズルスルの言い分はこうだ。
女性４人組とこの国の近衛兵らしき人物が話しているのを偶然盗み聞きしてしまった。内容は「盗人の墓」へ潜り、その最深部にある宝を取って来て欲しいという依頼のようなモノだったらしい。国が狙う程のお宝なら一攫千金も夢ではないと思い、ちょうどその時街の不良を〆ていた強者のレイさんに目を付けて、お宝の存在を匂わせて話を持ちかけ、まんまと「盗人の墓」へ行かせてしまった、ということらしい。

何とも頭が痛いといった風な表情のガーランドさん。俺としてはレイさんの行方も気になったが、それ以上に気になる点がその話にはあった。

「あの馬鹿が……」

「ちょっと待って下さい、その４人組の女性って……見た目はどんな？」

「そ、そりゃ……確か怖い銀髪と目付きの悪いお団子頭と学者みたいなのと水色の服を来た女達だよ」

「相棒」

「うん、多分ゼノさん達だな」

最後の目撃証言に関しては俺の記憶には無い人物だが、他三人はほぼ間違いないだろう。

「盗人の墓ねぇ……まさかまだあそこに潜ろうなんて人間が居るとはね……」

そんな中、後ろから聞こえてきたそんな呟き。発信源は神妙な顔をしたステンさんだ。

「ねぇステン、「盗人の墓」ってどんな場所だか知ってるの？」

リンプーさんは興味津々な様子でステンさんに尋ねている。俺もちょっと気になったのでそちらに意識を向けてみる。

「大昔、伝説の大盗賊ダンクが隠した秘宝がそこに眠ってるって話だった筈さ。でも凶悪なモンスターやトラップの嵐で誰も奥まで辿り着けず、いつしか潜る人間もいなくなっていったんだったかな」

「へー」

「何故国がわざわざ一介の冒険者達に依頼するのかはよくわからんが……お前はそれをレイに先回りさせて取ってこさせようとしたわけか」

「は、はい……」

ズルスルは力無く頷いた。

先程のガーランドさんの話も含めると、時期的にもゼノさん達が音信不通になったのと合致する。ようするに、そこへ潜ったままだという可能性が非常に高いということになる。ガーランドさんは抑えていた首根っこを離し、ドサリと落ちたズルスルを見据えた。

「イタタ……も、もう用はないでしょ？　じゃ、じゃあ私はこれで……」

「……そう言えばお前は色々とこの街で狡い詐欺を働いているそうだな？」

ズルスルはその言葉にギクリという効果音が聞えるほどにビクっと反応した。あからさま過ぎてどんなアホでもそれが事実だとわかるほどである。

「そ、そんな事は……」

「俺に目を付けられたのがお前の運の尽きだ。役所へ来てもらうぞ」

「ヒィッ！？　ぜ、全部質問に答えたじゃないですか！？」

「それとこれとは話が別だ」

一度解放すると見せ掛けて再び頭を鷲掴みにするとは、中々いい感じのガーランドさんである。その後、問答無用で役所に突き出されたズルスルは普通にお縄になったようだった。取り合えずそこまで同行し、外で待っていた俺達はガーランドさんと初めて会った時の話なんかを二人にしながら待つ事数分。

「すまんな。これは酒の代金だ」

役所から出てきたガーランドさんは、そう言って役所で貰ったと思われる謝礼金を渡してきた。しかし明らかに店で払った金額よりも多いので、ここは丁重にお断りする俺である。それよりもこれからガーランドさんがどうするか、大体想像がつくので尋ねてみることにした。

「ガーランドさん……あいつの言ってた「盗人の墓」、行くんですよね？」

「！　……まぁ、な。あの馬鹿が無事かどうかはわからんが……見捨てるのも寝覚めが悪いのでな」

なんだかんだ言って結構義理人情に厚いガーランドさんである。

「実は俺達の目的も盗人の墓にさっきなった所でして」

「ほう？」

俺はここに来た目的をガーランドさんに話した。探している人達が先程のズルスルの話に出てきた４人組の可能性が高い事、そしてそこで立ち往生していると思われる事等である。

「そうか。ならばレイの方もやはり何かあったと見るべきか。全く世話の焼ける……」

「そういうわけで早速明日向かうんですが良かったらガーランドさんも一緒に行きます？」

「そうだな。お前達が良ければ同行させてもらいたい所だが……」

「リンプーさん達はいかがです？」

「あたしは問題ないよ」

「……」

「ステンさん？」

「！　あ、ああ。おいらも問題ないよ」

「？　そうですか？」

俺が話を進めている事に関しては特に意見は無いらしく、むしろリンプーさんに至ってはどんな所だろうとワクワクしているような印象だ。対してステンさんは先程から真面目な顔で何かを考えていた風である。気になる事でもあるのだろうか。

「まぁそういうわけで、明日みんなで盗人の墓とやらに行ってみましょう」

予期せず再会したガーランドさんを加え、盗人の墓と呼ばれるダンジョンに挑む事にする俺達だった。

第十一章　4、探索

翌日、朝早くから俺達は手分けしてダンジョン探索の為の準備を行った。道具屋で医療品を中心に必要そうな物をいくらか買い揃えたり、食料品店で新鮮な食料を調達したりしてドラゴンズ・ティアに放りこんでおく。俺は回復魔法は使えるが、しょっちゅうそれに頼りっきりだと早々にバテてしまうし、こう言う時に金で楽ができるならばケチケチせずに使うのが正解だ。備えあれば憂いなしなのだ。

これは余談だが俺はてっきり傷を治す物の代表格である薬草は「薬草」という名前だと思っていたのだが、正確には「アルテミシアの葉」という葉っぱの事らしい。割とどうでもいい話だが。

そして今は昼を少し回った辺り。現在俺達の目の前には古びた遺跡がある。

これこそが「盗人の墓」。実際はハイランドシティから徒歩で半日ほどの場所にあるこの古代遺跡の通称なのだそうだ。中はステンさんの言葉を借りるとするなら多数の罠や凶悪なモンスターが犇めいていて、最深部には伝説の盗賊ダンクの残したお宝があるという、まぁ遺跡としてはよくある感じの物だ。

俺としてはそんな所へ侵入するのは初めてであるからして、気分はインディ・ジョーンズか、はたまたアルセーヌ・ルパンの三代目か、ちょっとテンション上がらないでもない。

しかし今回はお宝よりもそこへ潜った人を探す……というか救出が最重要目的なので恐らくそっちはスルーせざるを得ない。ズルス

ルの話からもしやと思い、今朝がた用意のついでに食料品店で話を聞いてみたら、案の定女性４人組が二週間程前に食料を多めに買い込んでいたと言う目撃証言が出てきたのだ。その量から逆算しても、持ったとして一週間ちょいがいいとこだ。

もし今から二週間前にここに侵入し、そのまま中に閉じ込められているとしたらマズイ事態なのは嫌でも想像できる。お宝に興味が無い訳ではないが、どの道古代の遺産等と言う人類の宝は俺のポケットには大きすぎるし。

「？　……結構荒らされてますね」

入口付近まで近付いてみると、思ったよりボロボロになっている光景が目に飛び込んできた。本来は石の壁に四角い入口だったと思われるが、その名残は上の部分だけで横の部分は両側とも壊されている。

「ここって以前は盗掘者が後を絶たなくてね。だけど深い所に潜るのなんて無理な連中ばかりだったから、こうして入口の近くだけ乱暴に荒らされていったのさ」

後ろからステンさんが解説してくれている。昨日の話にもあったようにそれらは相当前の事らしく、今はそれこそ酔狂な人しかここに入ったりはしないそうだ。

「じゃあ皆さん準備はいいですか？」

「いいぜ相棒」

「うむ」

「おー！」

「はいよ」

そんなわけで、俺達はヒヤリと漂う遺跡内部の空気に背筋を震わせつつ、建物の中に入って行く。ちなみに隊列は俺（ボッシュ）・ガーランドさん・リンプーさん・ステンさんの順だ。魔法の明かりを灯す技が使えるのが俺だけなのは承知しているが、しかし何故この中で一番年下っていうかどう見ても子供なはずの俺を先頭にしているという事に、誰も疑問を持たないのだろうか。

≪そいつぁ今更ってヤツじゃねーか相棒よォ≫

≪お前人の気持ちを読むなよ≫

そんなボッシュの突っ込みが心に染み渡ったり。一階は荒れ果てた瓦礫以外特に何もないようだった。隅の方に下へと続く階段があったのでその先へと進んでみると、途端何か嫌な空気が前方から流れてくる。

「……早速エンカウントっすか」

「ゾンビだな」

ガーランドさんの言う通り、奥の方からゾロゾロと現れたのは盗賊のゾンビと言った風体のモンスターが４体。ゾンビ自体は初めて見るが、あまり恐怖のような物は感じない。この手の連中は「こういう見た目のモンスター」であると物知りボッシュから聞いており、別に本物の死体が動いてきているというわけではないからだろう。

「けどまぁ墓ってのは伊達じゃない、と……」

「よーし、一人一体がノルマだね」

「ま、仕方ないやね」

「ふむ、悪いが押し通らせてもらおう」

全員が獲物を取り出す中、ガーランドさんも背中に装備していた長槍を構えた。

「そう言えば武器変えたんですか？」

「……こちらの方が性に合っていたのでな」

ニヤリと笑うガーランドさん。巨体にゴツイ長槍というのが手斧よりもマッチしている感じだ。かなりの重量感漂う槍なのに片手で棒きれの様に軽々と扱うのは流石のパワーである。

「狭いけど、まぁなんとか！」

俺もドラゴンズ・ティアからフィランギを取り出すと、全員で一斉にゾンビへと襲い掛かり――――瞬殺だった。

「……」

ツッコミを入れる隙も無いまま誰一人、一撃すら喰らうことなく蹴散らせてしまった。見事な肩透かしだ。

「弱かったね」

「ふむ、まぁ進むのが楽だということだな」

この程度が内部に犇く凶悪なモンスターなのか？と若干疑問を抱きながらも、存外手応えのないゾンビ達にそれぞれ感想をもらしつつ奥へと進んでいくのだった。

――――――――――――――――――――

「わぁ～団体さんのお着きだぁ～……」

「またぁ？　もういい加減にして欲しいんだケド……」

「……一筋縄ではいかんか」

「だから言ったでしょ、凶悪なモンスターが犇いているってさ……」

これでもう何度目かのモンスターとのエンカウント。毎回代わり映えのしないこいつらの姿にはもう心底うんざりである。盗人の墓に入って数時間、ゾンビの他にも人魂らしきものやミミックっぽいモンスターがどこからともなく出現し、こちらの行く手を阻むのだがやはりそれほど手強くない。なのだが、俺達はここに来てその「凶悪さ」の意味をようやく理解してきていた。

一言で言えばキリがないのだ。

倒した事を確認して数歩進むと、すぐにゾロゾロと似たようなモンスターが現れる。物量作戦とでも言うべきか、凄まじいエンカウント率の高さだ。一体何処からこれほどのモンスターが湧いてくる

のか疑問が尽きない。これは確かに中途半端な戦力で挑むと進むも戻るも不可能になってアウトだろう。

「よっ！！」

「やぁっ！！　っと」

「ほいさっ！」

「フゥンッ！」

剣が人魂を斬り落し、棍がミミックを砕き、ナイフがゾンビを切り裂き、槍が弱ったそれらをまとめて薙ぎ払いトドメを刺す。最早工場でのアルバイトの如き流れ作業で撃退である。

「さ、とっとと行きましょう」

そんな感じでうんざりしつつも一応順調に進む俺達。ダンジョンだけあって何度も分かれ道や分岐点があったのだが、俺達は迷う事なく、行く手を阻むハズのトラップの洗礼すら容易く回避して進む事ができていた。その理由は至極単純だ。

「……この後を辿れば一発だよねー……」

「何かおいらちょっと情けなくなってきたよ」

リンプーさんとステンさんの、何とも呆れた言の葉が、静かな遺跡に木霊して。

要するにトラップというトラップが既に作動し、尚且つ破壊され

ていたのだ。吊り天井やら壁から飛び出した無数の槍やら振り子のようなギロチンやら、思ったよりオーソドックスな罠ばかりだがいずれも無残に粉砕された姿を晒している。破壊の痕はそれほど古い物ではなかった為、十中八九レイさんかゼノさん達の通った痕だろう。

「まぁこれならモンスターと違って楽でいいですが……」

それらはアスレチック的な要素など微塵もない、ただ侵入者の命を機械的に狩るだけのトラップ達。しかし悉く返り討ちに会い、哀れな屍を晒すその残骸達のあまりの多さゆえか、僅かばかりではあるが同情を覚えてしまう。モンスター達のように際限無しに湧く事もなく、一度破壊されればそれで終わり。無情ここに極まれりと言った感じだ。

自分達が直接ハマった訳ではないせいか、そんな悠長な感想を哀れなトラップ達に抱きながら、さらに奥深くへと足を進めていくのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――

「……あれ？」

相変わらずモンスターどもをペチ倒し、トラップという名だった筈の単なる障害物を避けながら下へ下へと進むことさらに数時間。とある狭めの一本道の途中にて、罠の破壊痕がパッタリと途切れていた。

その先はそれまでとは全く違う……というか破壊の痕の欠片も無い、この遺跡本来の綺麗な通路がその姿を誇示している。逆に怪し

すぎるので、その先の通路の両側を叩いたり小石を放ったりしてみるも何の反応もない。

「トラップゾーン終わり……みたいですね」

「そのようだな」

まだまだ奥へと続く一本道だが、試しに一歩二歩と歩いてみると、やはり何の仕掛けも施されていなかった。

「まぁそれならそれでとっとと進みますか」

そんな訳でそこからは普通に歩いていく俺達。やはり何事もなく進み、一体何処の辺りにゼノさん達又はレイさんが居るんだろう？と警戒心が薄れた矢先だった。……カチリと何かの音が聞こえたのは。

「……ん？」

「相棒……」

何か嫌ぁ～な予感がして冷や汗が背筋に流れた正にその瞬間、瞬時に左右に割れ、シュバッと両側に引っ込む足元の床！　突然の浮遊感が俺を包み込む！

「おぅわぁ！？」

「リュウッ！？」

「……って、浮いてるし……」

だがしかし、所詮は単なる落とし穴。使えて良かった浮遊魔法。咄嗟にそれを発動させた俺に隙は無かった。引っ掛かったと見せかけてのこの仕打ちに落とし穴め、さぞや悔しかろうこの馬鹿め！フハハ！等と心中悪態をついてドキドキ言ってる心臓を落ち着かせる。決して焦った訳ではない。断じて。

「ふ……ふふふ……うんまぁわかってたよこれくらい……」

「相棒、今確実に慌ててたよなおめぇ」

俺のスゥパァな冷静っぷりがわからないらしい節穴ｅｙｅ全開のフェレットをポーチに押し込んで黙らせる。それにしても俺達は実際に嵌ったわけではないから良かったが、あのトラップの嵐を抜けてようやく安全になったと思わせて、ちょっと間をおいてからこの落とし穴。人の心理の隙を突いた中々に意地の悪い仕掛け方だ。

「大丈夫か？」

「ええ、問題ないです。しっかし俺が先頭で良かった……」

何事も無かったようにガーランドさん達の方に降り立つ俺。もしここで俺以外が先頭だったら、恐らく気の緩みも手伝って成す術なかった可能性が高い。こればかりは運が良かった。一応特に自分に異常が無い事を確認していると、後ろにいたリンプーさんが何かに気付いたようにしゃがみ、落とし穴の中の方を指差した。

「？　……ねぇリュウ、あそこに何かあるよ……？」

「はい？」

その指し示された場所に魔法の光を向け、よく見てみると少し下の方の壁にキラリと光を反射する物体が刺さっているのがわかった。

「あれは……？」

再び浮遊魔法を使って俺はそこへ近付き、引っこ抜いてみる。刺さっていたそれはナイフだった。なかなかに使いこまれた業物のようで錆びも無く、少なくとも昔からここにあったというものではないと思われる。

「！　それは……レイのナイフ！」

「！」

俺の持つナイフを目にしたガーランドさんは表情を硬くした。それにつられて俺たちの表情も硬くなる。つまりこれはどういうことか？　落とし穴の中の側面にナイフだけが刺さっていたという事実を前に、全員が事の次第を飲み込んでいた。

「その人、落ちた……のかな？」

「……そのようだな」

そーっと穴を覗きこむリンプーさん。浮いてる俺の足の下の空間は、どこまでも暗く深いようで底など見えない。試しに側にあった小石を落としてみた所、こつんという音がいつまで経っても聞こえて来なかった。あまり考えたくはないがこの高さで落ちたとなると身体能力が高いとしても無事では済まないかもしれない。

「どうやって行く？　リュウに全員で掴るかい？」

「……それしかないっぽいですね……」

レイさんがこの下に落ちたであろうことはほぼ確定。しかし幾らか思案してみるも俺に捕まる以外、他に安全に降りる方法は思い浮かばない。ロープを持って俺が先に降りて……とも思ったが、恐らくロープの長さは足りないだろうし、ガーランドさんの重さに耐えられるとは考えられない。

「ふぬっ……！」

結果、右手にステンさん、左手にガーランドさんがそれぞれ掴り、そして上半身から頭にかけて抱きつかれる形でリンプーさんを背負い、ゆっくりと穴の中へと降りていく事になった。こんなこともあろうかと、念の為買っておいた松明に火を灯し、片手フリーのリンプーさんが持って周囲を照らしている。後頭部に柔らかな膨らみが当たっているが、これくらいはまぁ役得というものでバチは当たるまい。

「大丈夫？」

「鍛えてますから」

手でシュッ！とやりたかったが両手が塞がってるのでセリフだけ。確かに重いがまぁなんとかなるほどである。しかし子供に大人が数人で掴るとか、傍から見たらイジメ以外の何物でもない気がする。ガーランドさんの方が重くて若干左右のバランスが悪いがまぁそこは気にせず、どこまでも続く縦穴の中をふわふわと重力に抵抗しながら降りていく。

「しかし深いな……まだ底が見えん」

「こりゃあその落ちたって人も……」

「……」

暗闇が支配する足元に視線を向け、そんな感想を漏らす男二人。降りていくにつれて口数も減り、冷たい空気と重苦しい雰囲気の中で、ようやく底が見えてきた。

「！　うわっ！？　骨だらけ！？」

「イダダダッ！？　ちょっ！　ギブ……ッ！」

考えてみれば当然だが、底には結構な数の骨が散乱していた。リアルに人骨が大量なのを見ると何と言うか背筋にゾクリと来るものがある。しかしそれを掻き消すだけの痛みが俺を襲っていた。背中に抱きついているリンプーさんがその馬鹿ヂカラでベアハッグのごとく締めつけてきていたのだ。……この場合はタイガーハッグと言うべきか、下手をすると俺も人骨の仲間入りしそうな勢いである。チラチラと視界の隅に入るリンプーさんの尻尾はピーンと伸びて毛が逆立っていた。ゾンビは平気で人骨は駄目とかその辺の線引きやいかに。

「この骸達はみなあの落とし穴に嵌ったのか」

「そうでしょうねぇ。実際おいら達も嵌りかけた訳だし」

盗掘者とは言え、流石に骨になっていると黙祷を捧げたいような

気分にはなる。ガーランドさんはキョロキョロ辺りを見回していたが、そこにフーレンの男の姿は無く、骨もかなり古くなっている物しかないようだった。

「……！　これは……」

「へぇ、抜け道かな？」

骨のほかには何にもないかと思いきや、横の壁に穴が開いていた。そうとわかればここに留まる意味は無いので、その道をさらに進んでいく俺達。さっきとは違ってゾンビの代わりに骸骨の兵士のようなモンスターが出てくるがそう多くは無い。さすがに落とし穴の中なので罠は全く無いようだった。

「！　人の気配……？」

少し進んだところで、先頭を歩いていた俺はピタリと足を止めた。右手の壁がその先の途中で途切れているのがわかり、恐らくちょっとした空間になっていると思われた。そしてそこから明らかにモンスターとは違う、生きた人間の気配が感じ取れたのだ。

「……」

この先に居るのはレイさんだといいが、まさかボスとかじゃないだろうな？と不吉な考えがよぎるのは警戒し過ぎであろうか。歩くテンポを落とし気味に途切れた壁際へと近付くと、いつでも動き出せる様に全身に緊張を張り巡らせつつ、そろりそろりと覗いてみるのだった。

第十一章　5、合流

「……」

俺は壁から顔を覗かせた所で動きを止めた。

「……」

正確に言えば止めざるを得なかった。何故ならば、ゴリッ！と、何かが額に強く当たったからだ。

（……よし、まずは落ち着くんだ……）

タラリとこめかみから汗が滑り落ち、一瞬の間をおいて次々と浮かんでは消えていく「どうしよう」の言葉達。今の状況をどう打破するか、脳内は一気にフル回転状態。

（こういうときはＣｏｏｌだ。Ｃｏｏｌになるんだ……）

片手に持つ松明のおかげで朧げながら今自分がどういう状況か見えてくる。ゆーっくりと視線を横へとずらしてみれば、そこに居たのは水色を基調とした服を纏った女性。俺の目の前……というか覗きこんだ壁の影に気配を殺して隠れていたらしい。

そしてその女性が何をしているのかと言うと――――現在進行形で俺の額にピッタリと銃口を突き付けていた。額に伝わる冷たい感触。マジで撃たれる五秒前。

「あの……怪しい……者では……決して……」

「……」

Ｃｏｏｌになった結果出たセリフがあまりに月並過ぎて自嘲の嵐。自分で言っておいて何だがこんな所に現れる子供が怪しくない訳がない。しかしこの場ではそう言うしかない。実際正体はどうあれ俺はモンスターとかではないのだ。

「……」

俺の言葉に全く無反応の女性。それにしてもちょっとだけ予想外である。目でこの空間を確認しようとしたのが甘かったらしい。この女性の気配の殺し方は一流だと思わず感心してしまう。視点を女性全体像でなく目と鼻のすぐ先に合わせてみれば、今にも引き金を引いてしまいそうな細い指がそこにあった。

「子供……？　……何者だい？」

その女性は俺の額に銃口を突きつけたまま、慌てず騒がず冷静な声で、一切の無駄を排除した質問をぶつけてきた。俺の後ろでリンプーさんとステンさんが臨戦態勢らしいが、ガーランドさんがそれを抑えていると言う事をボッシュから念話で聞いている。多分、話せばわかる筈という判断からだろう。俺もそれに同意であるため、ここは下手な嘘はつかずに真っ直ぐに答える事にする。人間正直が一番だ。

「……俺はリュウと言いまして……こちらに居るはずの「トリニティ」さんとフーレンの男の人を探してここまで……」

「！　リュウ……だって！？」

俺の名を聞いた途端、随分と驚いた様子のこの女性。どうやら俺の事を知っている？らしい。ということは、この人が目撃証言で聞いたトリニティの最後の一人と思われる。ていうか、そうだと思いたかった。

「あの……別に暴れたりとかはしないので……これ外してくれると嬉しいのですが……」

そう言って笑顔を精一杯頑張りながら額の銃を指さす。引き攣っているのが自分でもわかるが、なるべく相手に良い印象を持ってもらえるようにするのが俺式世渡り戦法だ。女の人は若干困ったような表情を浮かべて少し考えたようだったが、何か納得したように突きつけていた銃を下ろし、その後で大袈裟に溜息をついてみせた。

「まさか、実際に会う事ができるとは思わなかったよ。それもこんな場所でなんて……」

「はい……？」

「いや……まぁこんな所に来れるくらいだし聞いていた通りだし……信じるよ。あたしはリン。新しくこのチーム……トリニティに入った者さ」

「あどうも。改めて、リュウです」

（ああ、「リン」か。そう言えば確かに……）

改めてよく見ると、その女性は昔の記憶に引っ掛かる容姿をしていた。水色のフードのような帽子に身体にフィットした水色の服、

ホルスター付きのベルトをしていて帽子からはオレンジ色の前髪が覗いており、目が大きめでキリッとした顔立ちの美人。こんな時に不謹慎ながら目が行く胸元は、服の上からにも関わらずかなり立派にその存在をアピールしている。フードのような帽子にはピョコンと飛び出た耳を覆っている風な箇所があり、ふわふわした長い尻尾が腰の辺りに見えている事から恐らく野馳り族だろう。

そんな感じに変な空気で互いの紹介をしていると落ち着いた空気を察してか、俺の後ろからゾロゾロと出てくる3人。ガーランドさんが抑えてくれていたおかげで、いきなり飛びかかって話が拗れたりしなかったのは助かった。

「リュウ大丈夫だった？」

「まぁなんとか」

「おいらはリュウなら何とかすると思ってたよ、うん」

ステンさんの少し投げやりな感じの発言がいい感じだ。俺も同じ立場なら多分そんな事を言うと思う。それはそれとしてガーランドさんはこの空間の中を見渡していた。俺も釣られて松明を掲げてみると、そこにはテントのような物があるのがすぐにわかった。どうやら人の気配はそこから漏れているようだ。

「……ここにレイという名のフーレン族の男は居るか？」

「！　あんたは？」

「俺の名はガーランドと言う。レイと旅をしている者だ」

「そう。……その男ならここに居るよ。ついてきな」

そう言ってリンさんが向ったのはその空間の真ん中に配置されたテント。テントと言っても大分簡素な物で、大きめな布らしきものを吊るし、屋根代わりにして三角形に覆っているだけの代物だ。

「……ほら」

「！！」

そして開かれた中には、ほぼ全身に包帯を巻いたレイさんとアースラさんが横たわっていた。二人とも胸が規則正しく上下しているのがわかり、生きているのは理解できたがかなりの重症のように見える。モモさんとゼノさんの姿はどこにも見当たらない。

「今は薬で寝てる。色々あってご覧の有様さ。用意した道具ももう尽きててね……これ以上は治療しようにも……」

「……」

色々とリンさんに聞きたい事もあったが、それよりまず二人の傷の手当ての方が先だと感じた。よくよく見れば包帯は大分血で汚れており、恐らく何日もこのままの状態だと言うのがわかる。

「……俺治癒魔法使えるんで、治しますけどいいですね？」

「！！　本当！？」

「任せてください。……ボッシュ、ちょっと手伝って」

「おうよ」

「!?　イタチが喋った!?」

「俺っちはフェレットだっての。久々だなぁその反応」

色々と混乱しているリンさんに力強く返事を返すと、俺はテントの中で横たわっている二人の側へと寄り、治癒魔法をかけ始めた。ボッシュに薬草を渡してすり潰してもらい、特に酷く傷が化膿している部分に塗りつけておく。全体的に消毒も兼ねてスキルの「ヤプリフ」を主に使って治癒をしていった。肋骨はいくつか折れ、腕や足の骨に至っては砕けて複雑骨折のようになっている。どうしてこんな酷い怪我をこの二人だけが負っているのか疑問が浮かぶ。

「こりゃ一体……？」

「ねぇ、リン……だっけ？　この人たち……どうしたの？」

「……詳しく話を聞かせてはもらえないだろうか？」

「……」

俺が魔法を掛けている間、テントの外では三人がリンさんに俺と同じ疑問を投げかけていた。リンさんは少し無言だったようだが、どこか申し訳なさそうな雰囲気と共に重い口を開きだした。

「……あんた達もここへ来たならわかると思うけど、あの落とし穴に私達は引っ掛かってね、その時この二人が身を呈して庇ってくれたおかげで、私達はなんとか軽傷で済んだんだよ」

「この二人って……あの高さで？　一体どうやったの？　浮遊魔法とか使ったの？」

「それは……そっちの男が大きなトラに変身して私達の下敷きになってくれたんだよ。もう一人はみんなを包むように魔法障壁を展開していたんだけど、まだ慣れていなかったからバランスを崩してトラと一緒に地面に叩きつけられてね……」

「「「……」」」

外からは暗い雰囲気が伝わって来ていたが、俺は聞こえてきていた話に一応の合点が行っていた。

（なるほど、ワータイガーと魔法障壁であの高さの落下に耐えたのか……）

その後も少しずつ外から聞こえて来るそんな話をＢＧＭに聞き流し、アースラさん魔法覚えたのか、とか、そういやリンさんとアースラさん声そっくりだよなぁとか、少し関係ない事を考えながら、俺はひたすら治癒魔法を横たわっている二人に掛けていった。

ーーーーーーーーーーーーーー

四、五十分程で大体の治癒を終え、すこーし疲れたところで一息ついてみると、テントの外では松明を中心に４人が座り込んでいた。

「あ、リュウ。あの二人はどうだった？」

「大丈夫です、ほぼ治せました。まぁ血が足りないと思うんで、多少貧血気味だとは思いますが……」

よく治癒魔法を使うせいでそんなことがわかるようになっていた。近頃は治癒魔法って一番役に立つのではないかと思う次第である。

「そうか……ありがとう……本当に……」

「いえいえ、そんな大したことしてませんから……」

リンさんは俺に頭を下げていたが、照れくさいので何とか顔を上げてもらって俺も松明を囲む輪に入り、取り合えずリンさんに話を聞く事にする。

「すみませんが、良かったらここまでの経緯とか、あとゼノさんとモモさんの行方とか教えてもらえませんか……？」

「ああ、わかったよ」

そしてリンさんは語ってくれた。

まず今から二週間前にハイランドの国の将軍側近を名乗る人間にここの宝を取って来て欲しいと依頼された事。何故か非公式で極秘に、とのことだったので悠久の風ではなく直接の話だったこと。ここまでは大体ズルスルの話と一致していた。

そしてここへと入ったはいいが、想像以上のモンスターとトラップの群れで苦労した事。なんとかあの通路まで漕ぎ着けた所で例の落とし穴に嵌り、落ちてしまって現在に至ると言った所だ。

話の途中、やはり国と言う単語が出た辺りでステンさんの雰囲気が変わったのは気になったので、心の中に留めておく事にする。

何やらここは場所柄かなり深いせいで奥に水が染み出している箇所があるらしく、何とか水分は確保できたので細々と食料を分けて粘っていたらしい。ゼノさんとモモさんは今なんとかこの場を打開する術はないかと奥の方を探索中だそうだ。

「そう言えば、レイさんとは一緒に行動していたんですか？」

「いや、あの男とは遺跡の中で鉢合わせしたんだ。目的が同じだったから互いに排除しようとしたんだけど、そこへモンスターの軍団が現れてね。争ってる場合じゃないって事で一時休戦って形になったのさ」

「へぇ……」

確かにあの際限無しモンスター軍団の前じゃ下手に争ってたらやられちゃうよなぁ、と一人で納得してみる。それにしても最初は反目していた癖に落とし穴で庇ったって辺りにレイさんの人柄が滲み出ている気がした。

「それで、あんた達がここへ来た目的は？　やっぱりお宝？」

「いえ、違います。実は……」

かくかくしかじかとここまでのこちらの経緯を説明。

「！　じゃあ私達を探しに？」

「はい」

「……よくまぁ、そんな理由でここに入ろうだなんて思ったね。危ない場所だって聞いてたんだろ？」

「まぁなんとかなるかな、と」

「はぁ……まぁ私達としては正直な所ありがたいけどね……」

俺の向こう見ずっぽい答えに微妙に呆れ顔が加速しているリンさんだった。

そんな感じで段々と打ち解けていると、俺達がやってきたのとは違う方からコツコツと足音が聞こえてきた。数は恐らく二人。

「！」

「ああ、大丈夫。多分隊長達が帰って来たんだよ」

徐々に弱い明りが奥のほうから近付いてくる。そして姿を見せたのはリンさんの言う通り、銀髪メガネのゼノさんとおっとりメガネのモモさんだった。二人とも大分服装が煤けているのがここまでの苦労を物語っている。

「！　あなた達は……！？」

「どうも、お久しぶりです」

「え？　……リュウ君！？　なんで……！？」

いきなり現れた集団に警戒し、次に俺の姿を発見して驚きに固まる美女二人。そのリアクションはまぁこちらの想定の範囲内である。

ビックリしたままの二人にリンさんが事情を話し、取り合えずこちらの面子との紹介を終えると、ステンさんは先程一瞬だけ見せた鋭い雰囲気はどこへやら、妙にテンション高かった。

「いやぁ、それにしてもこんな美人さん方と知り合えるなんてね！おいらリュウについてきてよかったよホント！」

（流石ステンさんだ。冷たい視線を浴びようが何ともないぜ）

一人で盛り上がっている猿の人を尻目に、レイさんとアースラさんを治療した事や助けに来た事などを説明する。じゃあ早速脱出しましょうか、と思っていると、ゼノさんは何か神妙な顔をしていた。

「？　どうかしましたか？」

「いえ……私達を助けに来てくれたと言う事には素直に感謝します」

「……？」

「……ですが、もう少しだけ待っては貰えませんか？」

ゼノさんは何か悔しさを滲ませているような、そんな顔をして俺に頼み込んできた。

「……何かあるんですか？」

「……」

「実はねー、この先の行き止まりの向こうに強力な反応があるみたいなのー」

するとゼノさんの代わりに横から説明してくれたモモさんは、どこからともなく卓上電卓のような機械を取りだした。電卓なら液晶画面が存在する筈の箇所に、代わりに体重計のようなメモリがあり、中心で針がゆらゆらしている。

（まさかガイガーカウンターとかじゃあるまいな……？）

実物を見た事はないが、確か放射能を観測する機械がそんな名前だった事を思い出し、その強力な反応とやらに少し恐怖を感じる俺である。

「これ、簡単に言えば「物体」のエネルギーを測る機械なんだけどー、これが向うの行き止まりの所で凄い反応を示しているのねー」

その話で、おおよそゼノさんが戸惑っている理由は察せた。

「……なるほど、つまりその行き止まりの向うに目的のお宝があるのかもしれない、と？」

「……」

ゼノさんは俺の言葉を否定しない。恐らくそういう事なのだろう。

（さてどうしよう……？）

俺としては怪我を治療したとはいえ、今だ寝ている二人は一刻も早く連れて帰った方がいいと思えた。しかしゼノさんの気持ちもわかる。散々な目にあってここまで辿りつき、目の前にゴールがあるかもしれないのに引き返す、というのは確かに心情的に悔しい。俺

達が来た事で無事に脱出できる可能性が高まった事もある。そして雰囲気からしてゼノさんの説得は難しいと思われる。いざとなったら自分一人残ってでもと言いだしそうだ。

「……どうします？」

俺は一緒にここまでやってきた三人に意見を聞いてみることにした。

「あたしは構わないよ。モンスターが出たらあたし達がやっつけちゃえばいいし」

「おいらもそのお宝ってヤツを見れるなら見てみたい所だね」

「……俺としては早めに戻った方がいいと思うが……判断はお前に任せよう」

「……」

結果、決定権は俺にあるらしい。となれば話は決まった。普通ならすぐにでも引き返した方が命を守るという意味ならいいに決まっているが……俺はその選択を選ぶつもりはなかった。もちろん他人の命をないがしろにしてでも宝が欲しいから……などと言う理由ではない。

実はダンジョン脱出に関しては非常に簡単な方法があるのだ。以前エヴァンジェリンさんとの修行の時、戯れにボッシュがディースさんから覚えさせられた技の中に脱出用の技があり、それを使うことでいつでも脱出は可能なのである。後でモモさんを貸してもらいたいし、頼みを聞いておいても良いよな、という打算的な考えもな

いわけではなかったが。

「わかりました。なら俺達も一緒に行きますよ」

「……いいのですか？」

「はい。まぁこっちにも後で少し頼みたい事がありますし……」

「……ありがとう」

「いえ……」

そんなわけで、レイさんをガーランドさんが、アースラさんをリンさんが背負い、テントを引き払って俺達は進む事にした。幸いモンスターが現れると言っても骸骨兵士の単品ばかりだったので問題は無い。

怪しい計測機械を片手のモモさんに案内されながら、奥へと続くくねった道を行く事数分、行き止まりが見えてきた。

「ほらこれ見てー。この先に凄い反応ー」

そこでモモさんの持つ機械は針を左右に物凄い勢いで振りまくり、おかしくなった時の見本のような症状が現れていた。モモさんとゼノさんは荷物からスコップをいそいそと取りだしていたが、なんか時間がかかりそうだったので俺が代わりにやることにする。

「ちょっと下がって下さい」

「？　何をするのー？」

行き止まりと言えど、所詮は石と土で出来た壁である。ならばそれを掘り進むには「地」の力を持つ彼に頼むのが最も適切だ。俺はポケットからカードを一枚取り出すと額に近付けた。

≪ザムディン、起きてる？≫

≪……なんだよ≫

珍しく寝息以外の反応があることにちょっと驚きである。

≪この壁に俺達が通れるくらいの穴、開けてもらえない？≫

≪……ったく……龍使いが荒いな≫

一応その言葉をＹＥＳと受け取り、俺はカードを頭上に掲げた。

「ザムディン！！」

狭い通路の中、カードから発せられた眩い光が収まると、俺の後ろにずらりと並ぶ総勢８人の頭の上に長い体を持つ黄色い龍が現れた。

「じゃあお願い」

≪……ちょっと待ってな≫

ザムディンが俺の前にある壁目掛けて口を開け、何か聞こえない音波のような物を出したかと思うと、激しく振動した壁がボロボロと崩れ始めた。崩れ落ちた土や石はどういうわけか消滅していく。

（すげーな……）

そしてあっと言う間に先の先まで貫通し、即席のトンネルが出来あがった。奥の方からは何故か光が漏れているようだ。

「ありがと」

≪ああ、じゃあな≫

そしてスマートにカードへと戻っていくザムディン。

「相変わらず……非常識ですね」

「？　そうですか？」

呆れたゼノさんの言葉に生返事を返し、そろっと後ろを見てみれば、竜召喚を見た事があるメンツはゼノさんと似たような呆れ顔だったが、初めて見たらしいリンさんと、ついでにガーランドさんは驚いていた。

「リュウよ、お前はドラゴンの召喚も出来たのか？」

「あれ？　前に言いませんでしたっけ？」

「いや、聞いていないな」

そうだっけ？と頭上に？マークを浮かべつつ、気を取り直して開いたトンネルの中を進んでいく俺達。トンネルの長さは目算でも数十mはあり、そんな距離から計測されるとはどんな物体がこの先に

あるのかと興味がわいてきた。まさかウランとかじゃないよね？といった不安も無い訳じゃなかったが。

「うおっ！　眩しっ……」

トンネルを抜けると、そこは神殿の様だった。小奇麗に磨かれている壁に細かな装飾を施された蜀台がいくつも飾られ、部屋の真ん中は祭壇のようになっており、その中心から謎の光が放たれている。

やはり本来の入り口とは全く違ったようで、明らかにその部屋の側面に大穴を開けてブチ抜いたといった格好である。泥棒のお手本とでも言うべき反則っぷりに、恐らくまだ色んな罠や敵が配置されていただろう正規ルートを作った伝説の盗賊さんへ、心の中でごめんなさいをしてみたり。

「ゼノ隊長！　あれが……？」

「ええ。間違いないようですね」

「うわー。何あれ桁違いのエネルギー……」

モモさんの持つ計測機はさっきから針が振り切れていてどうやら壊れてしまったらしい。多少周囲を警戒しつつその祭壇へと俺達は近付いていった。どうやらここが最深部なのは本当の様で罠はなく、これを守っているボス等も居ないようだった。意外と不用心だと思うがこの際細かいこたぁいいのだ。

「すごいね！　で、これ何なの？　ピカピカして綺麗だけど……」

「へぇ、これが盗人の墓のお宝……」

その祭壇の上に浮かんでいたのはソフトボール大の玉だった。それは穏やかな光を放ちながらふわふわと呼吸するようにその場で浮いている。

「これが盗人の墓の宝、「盗賊の魂」……」

「盗賊の魂？」

「ええ。私達に依頼した方の言葉によれば、「恒久的なエネルギー発生装置」だそうよ」

「ふーん」

「相棒、俺っちにも見せてくれ！」

俺は伝説の武器とか幻の鎧とか、そういうのを期待していたので興味が殺がれていたが、知識に目覚めて以来こういうの大好きになったらしいボッシュの食い付きが凄かった。モモさんと一緒になっていろんな角度から見たりモモさんのメモ用紙に何か書いたり書き足したりとエラく盛り上がっている。

「ふんふん……なるほどー。これ、多分ゴースト鉱の結晶ね。それも超々高純度の……」

「ゴースト鉱？」

昔の記憶にあったようなその名前。詳細説明をボッシュに頼む。

「ゴースト鉱ってなぁな、魔力を持った生物の死骸が何かの原因で

一部に魔力を残存させたまんま、長い年月を掛けて化石んなった鉱石の事さ」

「へぇ」

正直な所あんまり興味は無い。突然の科学的考証に後ろでリンプーさんが欠伸をしているようだ。

「ゴースト鉱って世界でも埋蔵量が少なくて凄い貴重なの。出てきたとしてもほんの小さな欠片だったりするのがほとんどなのよー？　それがこの大きさに加えてこの密度だなんて……明らかに人工物だし昔の人は一体どうやってコレを作ったのかしらー？」

「はぁ」

その光の玉を見て興奮気味にぶつぶつ言ってるフェレットと学者さん。なんかちょっと不気味である。

「それで、この「盗賊の魂」でしたっけ？　これ持って帰って大丈夫なんですかね？」

「……モモ」

「はっ！　……えーっとぉ……そ、そうね。……うん、大丈夫だと思うわよー？」

そしてモモさんのお墨付きをもらったゼノさんが恐る恐るその光る玉に手を伸ばすと、玉は驚くほどすんなりその掌に収まった。光は多少弱まったがエネルギー自体は収まった訳ではなく、変わらずに凄い威圧感を放っている。

「ふう、これで私達の目的は達成ですね」

「でもリュウ君達が来てくれなかったら私達どうなってたかしらねー」

さらっと怖い発言をするモモさん。ゼノさんが若干引き攣っているような気がするが気にしない。

「さ、じゃあもう用はないですし、とっとと脱出するとしましょう」

そして俺は全員に手を繋ぐようにお願いした。脱出の準備と言えるものはぶっちゃけこれだけでＯＫだ。

「？　戻るんじゃないの？」

リンプーさんの最もな疑問。それに対して自信満々に答える。

「いえいえ、そんな面倒なことしなくてもいいんですよ。なぁボッシュ？」

「おうともよ。俺っちに任せときな」

「「「？」」」

全員のクエスチョンマークをスルーしてボッシュが俺の肩へと飛び移り、なにやら意識を集中しだす。この脱出技、非常に便利だと俺は思うのだが、何故かディースさんはあまり使いたがらないようだった。理由は使ってみればわかるの一点張りで教えてくれなかったが、まぁこの技は名前が「デルダン」と言う、なんかそのまんま

なネーミングでアレだから、と言った所だろう。

「じゃあ頼んだボッシュ」

「おうよ……行くぜ！　『デルダンッ』」

「「「！？」」」

ぐにゃっ……と俺達を包む空間が歪んだと思うと視界が暗転しだし、車でうねった山道を延々走るような絶妙な不快感を感じたと思ったら、既にそこは外だった。辺りは真っ暗でどうやらもう日付を跨いでいるらしい。

「……気持ち悪……」

「使っといて何だが俺っちもだぜ……こんな技だったたぁな……」

周りを見るとみんな青い顔をしている。あのぐにゃっとした感じと不快感が三半規管にダメージを残しているらしい。こういう理由でディースさんは使いたくなかったのかと納得だ。

（うっ……できれば事前に教えておいて欲しかった……）

そんなわけで、なんとか一応外に出られた俺たち。全員の救出と宝も取れた事だし結果オーライである。

「さて、じゃあハイランドシティに戻りましょう」

「……」

と、ゼノさん達一行の足取りは重かった。

「どうしました？」

「いえ、その……」

「？」

ゼノさんは何かを言い辛そうにしているようだった。さっきのような意地の決意とかではなく、何か恥のような物を感じているらしいが何の事だかこっちにはさっぱり分からない。すると横からまたもモモさんがフォローをしてくれた。

「ごめんねリュウ君、私達今お金ないからー……」

「「！！」」

途端、ゼノさんとリンさんの顔が暗闇でもわかるくらいに赤くなっている。アースラさんが起きていたら確実に怒鳴っていただろう。

「モモ！　あなたはどうしてそう……」

「……大変なんですね」

「ど、同情は結構です！」

なんとも世知辛い世の中である。しかし置いていくのも気が引けるので、ここは無理にでも帰るよう説得することにする。

「まぁまぁ、宿代くらいなら俺が出しますから行きましょうよ。困

った時はお互い様ですよ？」

「！　ですが……しかし……」

「ウキャキャ、お嬢さん方、リュウはお金持ちだから大丈夫だって」

「そうだよ。それにみんなボロボロじゃん。ちゃんと休んだ方が絶対いいよ？」

「……」

「リュウのような子供に金を出して貰うのに抵抗を感じるのはわからないでもないが、そう意地を張る事もあるまい」

「！……そう……ですね。わかりました。リュウ、お言葉に甘えさせてもらいます」

みんなの怒涛の説得攻めにより、ゼノさんは折れた。実際疲れもかなり溜まっているだろうし、今だって結構無理して頑張っているというのは肌で感じ取れる程である。

そんなこんなで空が薄らと白み始めた頃、俺達は盗人の墓を後にし、再びハイランドシティへと戻ってきたのだった。

第十一章　6、散歩

リュウ達はハイランドシティの宿へ到着すると、新たに各メンツ用の部屋を借りなおすことにした。幸い部屋にはまだいくつか空きがあり、早朝に叩き起こされた宿の主人は若干不機嫌ながらも二つ返事でこれを了承。やはり疲れていたトリニティの面々は久方ぶりのベッドへ吸い寄せられるように横になり、それはもう爆睡であった。

ちなみにこの時点でリュウの財布の中身は残金1万Ｄｑにまで減っていた。この所金遣いが荒かった事を少しだけ後悔し、軽くなってきた財布を見て嘆息するリュウである。

「俺って金にあんまり好かれないのかも」

「金は天下の回りモンだぜ相棒。気にすんなってこった」

全て自分が原因なのだが、それをあえてスルーしたボッシュの慰めが心に響き渡るのだった。

翌日――と言っても宿に着いたその日であったが――リュウが起きたのは昼の少し手前といった辺り。丸1日寝過ごしたという訳ではなく、日付は変わっていない。ほんの数時間しか寝てないじゃないか、勿体ない！　とすぐにまた横になって夢の世界へと旅立とうとしたリュウだったが、残念ながら見事に脳は覚醒し何だか眼も冴えてしまっていた。

「……はぁ。起きるか」

「はえーな相棒」

「？　わりぃ、起こしたか」

「いや俺っちもちょうど目が覚めたとこさ」

リュウとボッシュはお互い随分と波長が合うなぁと苦笑しつつ、起きたはいいがやる事が無いのでとりあえずパパッと着替え、トイレへ行ってついでに外の空気でも吸ってこようかと宿の玄関へ向かう。

「……あれ？」

「！」

と、そこには先客がいた。突然背後から掛けられたリュウの声にビックリしたように振り返ったのはハイランダーのステン。宿の扉に手を掛け、今まさに外へ向かおうという様子である。

「おはようございます」

「お、おはよう。いやー、リュウ早起きだねぇ」

早いと言っても時間的にはもう昼前だけどね、なんて突っ込みをリュウは心の中で入れていたが、どうにもステンは微妙に声が上擦り、何か焦っているようでどことなく挙動不審な感じを受け、頭上に？マークを浮かべる。

「……どこか行くんですか？」

「！　あーいや、そのー……」

「？」

あからさまに目が泳ぎ、冷や汗まで垂らしているステン。少しの間混乱気味にあーとかうーとか唸っていると、いつものお調子者の顔を取り戻してリュウの方を向いた。

「……おいらちょっと散歩に行ってくるよ」

「？　散歩……ですか？」

どう見ても散歩に行くような雰囲気ではなかったとリュウには思えた。

「……どちらまで？」

「……いやぁちょっとその辺まで、ね」

おちゃらけた表情ではあったが微妙に視線を逸らし、やはりどこかよそよそしいステン。何か言い辛いことでもあるのか？とリュウとボッシュにはすぐにわかった。それだけに、妙な不安がリュウの心の中に生まれていた。

「ん～、俺も一緒に行っちゃ……駄目ですかね？」

「……い、いやいやホントその辺だし、見るものもないって」

リュウの申し出を焦って拒否するステン。その眼は「頼むから付いて来ないでくれ」と口ほどに物を言っていた。リュウはそれが気

になり、ハイランドに来てからのステンの気になる行動を思い出して自分の昔の記憶と照らし合わせていた。

しかしもう少しで思い出せそう、というところで気付くとステンはくるりとリュウに背を向け、意を決したように玄関から出て行こうとしていた。どうもあまり余裕はないらしい。

「リュウ、悪いけどおいらちょっと一人になりたいんだよね。それじゃ……」

「あ、ちょっと待って下さい！」

「？」

ステンの態度にほんの一瞬だが死亡フラグめいた嫌な気配を察知したリュウはあわてて引き止めると、首に掛かっているドラゴンズ・ティアからヒュパッとキングオブダガーを取り出した。

「コレ、結構切れ味良くて、意識を集中すると防御力が上がるスグレモノなんです。良かったらお守り代わりに持ってって下さい。最近は何かと物騒ですから」

「へ？　コレを？　おいらに？」

「はい」

リュウの顔とナイフを交互に見やり、何かを考えこむステン。もちろんハイランドシティは治安は悪くないので物騒等と言うのは建前である。しかしリュウが一際強くその手のダガーを差し出すと、その妙な勢いに断る理由も思いつけず、おずおずと受け取った。

「……わかった。ありがたく貰っておくよ」

「あ、いえ貸すだけですよ？　もちろん後で返して下さいね？」

てっきりくれるものだと思っていたステンはリュウのセリフに一瞬呆けたような顔を見せる。そして些か間の抜けた空気によくわからない沈黙が数瞬漂うと、次に肩の力が抜けたように笑ってみせた。

「……はは、わかった、ちゃんと返すよ。それじゃあ……」

そのままステンは宿から出ると、意思の強さを感じさせるしっかりとした足取りで歩きだした。

「……」

「……どしたい相棒？　なんか気になることでもあんのか？」

「ん？　……まぁ……」

そのステンの態度に何かよからぬ物を感じたリュウとしてはこっそり後を付けたかったが、ああ見えてステンは結構鋭い所がある。下手な尾行は気付かれてしまうし、空中から行くのも隠れ場所が無くて振り返られでもしたら一発でバレてしまうだろう。はてさてどうしたものかと悩んでいると、ふと自分の腰のポーチから顔を出すフェレットと目が合った。

「……なぁボッシュ、悪いんだけどこっそりステンさんの後付けてくれない？」

「あん？」

「いやまぁ何もなければそれでいいんだけど……」

「……わかったぜ相棒」

「！　……いいの？」

「どうせなんか考えがあんだろ？　まぁ俺っちに任せときな」

全く根拠を示さない怪しさ万点過ぎる尾行の依頼だが、ボッシュはその理由を深く聞くことはしない。そんなことは最早この相棒相手には日常茶飯事のようなもので、要するに慣れっこなのだ。

「じゃあ頼む。何かあったら念話で」

「おうよ」

ボッシュはピョンとポーチから飛び出すと、急いでステンの後を追うように駆け出していった。リュウは取り合えずボッシュからの報告を待つことにして、一旦部屋へと戻ることにする。パタパタと音を立てるスリッパに気を使いながら廊下を歩いていると、突然目の前が暗くなった。

「おわっと！？」

「きゃっ！？」

危うくぶつかるかと思われた所で上手い具合に横へと緊急回避。その程度例え気が抜けていたと言えど、リュウにとっては文字通り

に朝飯前である。無駄にいい動きをしたリュウの前で硬直していたのは、中折れ兎耳とピンク色の長髪が目立つ野馳り族のモモだった。帽子を被っていない寝ぼけ眼のモモは傍から見ても抜群に癒し系だ。

「あ、おはよー、リュウ君朝早いわねー」

「おはようございます、モモさんも結構早起きですね」

「私ー、レポートとかよく書くから短時間睡眠に慣れてるのよー」

「……へー」

その割にはぐしぐしと目を擦り、寝ぼけているかのようにフラフラしているモモ。リュウはその事への突っ込みは我慢して心の中だけで済ませ、「畜生ぽにゃっとぶつかっておけばよかったぁ！」と己の反射神経の良さを後悔していた。まぁそれは脇へと置いておき、ちょうどいいので本来の目的を伝える事にする。

「そうそう、実はモモさんに折り入ってお願いしたい事があるんですが……」

「？　なにー？　私で出来る事なら力になるわよー？」

思いのほかしっかりしている受け答えとは裏腹に、モモはぼけぼっけした空気を変わらず周囲に振りまいている。それに対しリュウは「まぁいいか。癒されるし」と突っ込みを放棄し、ボッシュと協力してあの操る腕輪（仮）を探す機械を作って欲しい事を伝えた。

「ふ～ん、なるほどそう言うことなら任せてー。リュウ君の頼みだものねー」

「ありがとうございます。お手数おかけしてすみません」

「あ、でもちょっと待ってー。今日あの依頼品を届けて来ちゃうからその後でならー」

「もちろん、それくらい待ちますとも」

ふわふわ空気のモモになんとか協力を取り付け、その後ちょっとした世間話をしてリュウは自分の部屋へと戻った。再びベッドに寝転がり、ボッシュから連絡来るまでの間何しようか、少し腹減ったなー、何か食おうかな？と適当にどうするか考えていると、それから僅かな時間を経て、部屋にノックの音が響く。

「？　はーいどうぞー」

だらしなく寝っ転がりながら迎えるのもアレなので、取り合えずベッドの上に腰かけなおす。ドアを開けて入ってきたのは巨体を誇る鰐の獣人ガーランドと、その後ろからのそりと姿を現したのは遺跡の中からずっと寝ていたフーレン族のレイ。

「あ、レイさん気が付いたんですか。体の方は大丈夫ですか？」

ベッドの上から己を心配する声を受け、レイはポリポリと頬を掻きながら自嘲気味にリュウの質問に答えを返す。

「あ、ああ。おかげさんでな。ちっとフラフラするがまぁ問題ねぇよ」

「？　どうかしました？」

「……いや……その……」

「？」

レイは首をかしげるリュウと目を合わせられなかった。かつて多少なりとも盗賊の真似事をしていた自分が、正にミイラ取りがミイラになるという見本のような事をしでかす所だったのだ。さらにそこが「盗人の墓」と言うまさにそのまんまな名前の場所だった。そんな醜態が重なった所を自分の知らぬ間に助けられて……まぁ要するに思いっきり恥ずかしかったのだ。

「お前はこれでリュウに命を助けられたのは二度目だ。しっかり礼を言っておくんだな」

「！　うるせーな。わかってるよ」

ガーランドに言われ、親に反抗する子供のように反発するレイ。その姿はどちらかと言えば子供と言うより体の大きいガキと言った方が正しいかもしれない。

「おっさんから全部話は聞いた。その……なんだ……正直助かった」

「いえいえ、気にしないで下さい」

ぷらぷらと手を振りながらレイの言葉に恐縮するリュウ。傍から見たら、子供に頭を下げるいい年をした青年という図。中々におかしなものである。

その後、もうその話は取り合えずヤメ、とばかりに色々とリュウ

と別れてからの珍道中の話をしたり、逆にリュウの紅き翼としての活躍を聞いたりと愉快な話題に花が咲く。

「そういやお前、あの連中とも知り合いなんだってな？　驚いたぜ」

「？　ああ、ゼノさん達ですか？」

「あいつら、マジでおっかねーな。会った時殺されるかと思ったぜ」

「あはは」

リュウは冗談ぽく受け取っていたが、レイの目はマジだった。実際その時の状況は1対4だったわけで、モンスターの軍勢が現れなければレイは容赦なく斬撃と銃弾×2とバズーカで全身骨折など生温いような事態になっていた事は誰の目にも明らかだ。

「リュウよ、お前はこれからどうするのだ？　もう目的は達成したのだろう？」

「そうですね、俺は……」

そこまで言いかけて、部屋の前に慌ただしい足音が聞こえてきた。そして僅かな間をおき、けたたましい音と共に開かれる部屋のドア。

「リュウにボッシュおっはよー！！」

「！」

ノックという選択肢はその脳裏にあるはずもなく、入り口全部をぶっ壊さんばかりの勢いで開けて入ってきたのは暴走特急虎娘。恐

らくこの部屋のドアの寿命は著しく減っただろう。

「ん？　あ！　あんた起きたんだ」

「……なんだお前？」

いきなり現れたリンプーは、やっとその部屋の中に居たメンツに気が付いたらしい。しかし客観的に見て、お世辞にも人相のあまり良くない同族のレイに向かって堂々とあんた呼ばわり。流石である。

「あたしはリンプー。リュウと一緒にあちこち回ってるんだ！」

「一緒に？　へぇ……」

「……何か？」

レイは面白い事を聞いたとばかりにリュウの方を見てニヤニヤしだした。勿論自分の失敗による恥ずかしさを他人をからかう事で晴らす気満々である。

「いやいやいや愉快だねぇ。俺ぁてっきりリュウは女とか興味ねぇ人間だと思ってたんだが……」

「何ですかその根拠のない疑いは……」

「あん？　だってお前……聞く限りじゃお前のチーム女いねぇじゃねぇかよ」

「うっ……まぁそれは……」

痛い所を突かれてぐうの音も出ない。「そんなこと俺が知るか！ていうかむしろ何でかこっちが知りたいわ！」と内心憤っているリュウの気持ちを知ってか知らずか適度なネチネチ感でからかうレイである。

「ねーリュウ、そーいえばステンの姿が見当たらないんだけど？」

「さっき散歩に行くって言って外へ行きましたよ」

「なーんだ」

ただの散歩と聞いて途端に興味を失うリンプー。「でもきっとリンプーさんがステンさんのあの態度を知ったら絶対追いかけるだろうなぁ」と自分は相棒に尾行を依頼している事を思いっきり棚に上げるリュウである。

「愉快だねぇ……」

そんなこんなで取り合えず会話もひと段落し、腹減った、と言うレイの一言で食堂に向かおうかという話が出た矢先、リュウの頭にボッシュからの念話が飛びこんで来た。

≪相棒！！≫

「！？　ゴフォッ！？」

「うわっ！？　何どうしたの？」

「おいおい何やってんだよ」

タイミング悪くちょうど部屋に備え付けの水差しからくんだ水を飲もうと口に含んだ所だった。景気良く噴き出した水を布巾で拭きつつボッシュへと語りかける。

≪ど、どうしたボッシュ？≫

≪ヤベぇぜ！　いいから今すぐ城まで来てくれ相棒！　アイツが大変なんだよ！≫

≪！？　城！？≫

ボッシュの焦り具合からかなり良くないことが起きたらしいことはわかった。どうやら抜き差しならない状況らしい。細かい事は道中聞く事にしてリュウは表情を一変させた。

「すみません、ちょっと俺急用を思い出したんで行ってきます！」

「あ、おいリュウ！」

（城は……あっちか！）

リュウは即座に窓を開け放つと、全力の浮遊魔法を使って城の方へと急行するのだった。

――――――――――――――――

時は少々遡り、ここはハイランド城へと続く道の途中。

「またここに戻る事になるとはなぁ……」

ステンは宿を出た時の勢いはどこへやら、時折止まりそうになる足を無理やり動かし、ゆっくりと城へ向けて歩みを進めていた。今更のこのこ戻ってきた事を恥じ、心の中で笑いながらである。

「みんな……元気かな」

それでもかつての自分とその周囲が脳裏に蘇り、ぽつりと本音が漏れる。徐々に近づいてくるハイランドの城は、ステンの記憶と寸分違わずに悠然と聳え立っていた。その変わらぬ姿にどこか言い知れぬ不安を覚えたステンは歩みを僅かに速くする。

「あれは……」

城門が見えて来ると、その前にはハイランダーの兵士が二人、槍を持って立っているのがわかった。ステンはそこに見覚えのある顔を発見し、懐かしさから頬が緩みそうになるのを堪えつつ、その二人へと近寄って行く。

「！　止まれ！」

「ここは王城だ。用の無い者は即刻……！？」

通りすがりのハイランダーの青年を咎めようとした門兵二人の顔は、その青年の顔を見て驚愕に染まった。

「……よっ、ゲイン。そっちはウルマンか。久しぶりだな」

その青年はどこか自嘲気味に笑いながら軽々しく、まるではるか

以前からの知り合いかのように二人に挨拶をする。突然の訪問者を止めようとした門兵二人は、しかしそれに対して怒る素振りすら見せなかった。

「！！　ステン隊長！？」

「隊長！　生きておられたのですか！」

そこには城の門を守る兵としての顔は既に無く、まるで親と久しぶりに再会した子供のような、嬉々とした表情だけがあった。

「……隊長は止めろよ。おいらはもうお前達の隊長でも何でもないよ」

「何を言うのですか！　私達にとっては隊長はいつまでも隊長です！」

真っ直ぐな二人の眼差しを受け、後ろめたさを感じて暗い影を落とすステン。それは自分の行いを悔いているような、そんな懺悔から来る行動。

「……」

「隊長、何故今まで戻ってこられなかったのです？」

「そうですよ！　生きていたなら連絡くらい……王女様もトゥルボー様もずっと待ってたのに！」

「いや……」

二人の言葉の意味が、ステンには痛い程わかっていた。しかし自分は今の今まで帰ってこなかった。それが酷く後ろめたくて、申し訳なくて、弁解する事ができない。

「今更……どんな顔をして会えっていうのさ……」

深く事情を知らない門兵の二人は、そのステンの言葉の真意がわからない。しかし、自分達の隊長が生きて帰ってきたことが嬉しくて、そんなことはどうでもよかった。

「今城の中は大変な事になってるんです。でも隊長が帰ってきてくれたのなら……」

「隊長、とにかく中へ……」

「その必要はない！」

「「「!?」」」

門兵の言葉を遮ったのは甲高く響き渡った女性の声。ついで聞こえてきたのは規律正しく揃った複数の足音。門兵が開くより早く、城門は中から開かれていった。

「「「！！　シ、シュプケー……様！？」」」

門から出てきたハイランダーの兵士達は、ベテランを思わせる手慣れた素早い動作でステンを囲み、別れた数人が門兵二人を見張るようにその側に立つ。そして一際煌びやかな鎧を着飾った女性の兵が、その兵士の輪を裂いてステンの前に姿を現した。その顔はハイランダーとして美人ではあったが、張り付いているような不気味な

薄笑いが全てを台無しにしていた。

「……誰だいあんた？　おいらに何か用かい？」

「私の名はシュプケー。お前が消えた後に就任したこの国の将軍さ。お前がステン、ね。戻ってきていた事は知っていたよ」

街に情報収集のための密偵が居ることぐらい、ステンにはわかっていた。だから特に自分が帰ってきたと知られていた事についての動揺は無い。驚いたのは、シュプケーと名乗ったその人物が、見下したように自分を一瞥した後に突然、仰々しく頭を下げたからだった。

「！　……何のつもりだい？」

「フフッ……お前が居なくなったおかげで私がこの座に着く事が出来た。感謝してるのよ？　……ねぇ臆病者のステン隊長？」

「！　……」

ステンは何も言い返さない。それでもギリっと目の前の人物を胡散臭げに睨んでいた。それに対し値踏みするような視線で舐めまわしてくるシュプケー。敬愛する隊長をいきなり臆病者呼ばわりされ、門兵二人が言葉を放った張本人に鋭い視線を向けるが当のシュプケーはそちらなど気にも止めていない。

「……おいらが臆病だってのは認めるよ」

「あらそう、謙虚なのねぇ」

当然、シュプケーの発言は馬鹿にした意味でしかない。しかしステンは構わずに続ける。

「お前、将軍やってるんだろ？　なら、この国が「盗人の墓」の宝を欲しがった理由ってヤツを知らないかい？」

「！！？」

それがステンがここにやってきた理由だった。遺跡で見たあの宝。強力な力を持つゴースト鉱の結晶。あんな物を何故この国が求めたのか。もう自分とは関係ないはずなのに、確かめたい気持ちがステンにこの行動を取らせていた。

「……答える必要は無いね」

「へぇ、顔色が変ったね。ってことは相当知られちゃ困ることみたいだねぇ。お・ば・さん？」

先程とはうってかわり、ステンの挑発を受けて見る見るうちに鬼のような形相になるシュプケー。周囲の空気がピンと張りつめ、辺りに怒気が充満する。

「……今更お前に戻られても困るんでね。ここで死んでもらう」

シュプケーはそう言って片手を上げると、兵士の輪が再び左右に割れていく。そこから一際屈強なハイランダーの兵士が現れた。黄色の体毛に立派な鎧、手には使いこまれたヌンチャクを持っているその兵は、ステンの前へと無造作に歩みを進める。

「！！　ト、トゥルボー……！？」

「……」

トゥルボーと呼ばれた屈強な兵士は、虚ろな目をしたまま何も反応を返さない。

「おい！　トゥルボー！！」

「はっ、何を言ってもこの男には届かないよ。私の命令以外はねぇ」

「はい、シュプケー様」

シュプケーの声にのみ、トゥルボーと呼ばれた男は機械的な反応を示した。

「！　お前……トゥルボーに何をした！」

「そんなことはどうだっていいだろう？　お前はこれから死ぬんだよ。トゥルボー、やってしまいな」

「はい、シュプケー様」

「！　くっ！？」

ステンの呼びかけも空しく、戦闘態勢に入ったトゥルボーは容赦なくステンへと襲い掛かる。最初の一撃を辛くもかわしたステンは使いなれたナイフを取り出し、仕方なくトゥルボーと相対した。

「ま、待て！　トゥルボー！！」

「……」

再度のステンの声にもやはり応じることなく、虚ろな目のまま攻撃を繰り出すトゥルボー。変幻自在に繰り出されるヌンチャクの一撃は確実にステンの急所を狙っていた。

「くそっ！　何で……」

その怒涛の攻撃をギリギリで回避し続けるステン。しかしトゥルボーは一向に攻撃の手を止めない。受け流す事に徹し、反撃をしようとしないステンをトゥルボーは徐々に追い詰めていく。さして時間も掛からずに、ステンは谷のように深い堀の淵へと追い込まれていった。

「「ステン隊長！」」

門兵二人はステンの側へと寄ろうとする。しかし周りを固めている兵士がそれを許そうとはしない。

「くっ……」

「やっておしまい！」

「……」

シュプケーの言葉に無言で反応したトゥルボーの一撃がステンを襲う。

「うあっ！？」

振り下ろされたヌンチャクを受け止めようと突き出したナイフは、一撃の重さに耐え切れずに中心から真っ二つに折れ、その勢いのままヌンチャクがステンの足を打ち据えた。

「ぐっ……！？」

「アハハ！　良いザマだねぇ。ほらトゥルボー、とっとと決めておしまい！」

「はい、シュプケー様」

「！！」

ただシュプケーの声にのみ従うトゥルボーの攻撃が武器を失ったステンへ肉薄する。ステンは咄嗟にリュウからダガーを預かった事を思い出し、腰に着けていたそれに手を掛けて――――

「……」

「うっ……がはっ……」

それは僅かに遅かった。せっかくのダガーは振われることもなく、トゥルボーのヌンチャクがステンの腹に強烈な一撃を残していた。

「「隊長！！」」

「く……くそ……トゥル……ボー……」

ステンは遠のく意識の中、最後までかつての同僚の名を呟きながら深い堀の中へと滑落していく。

「ちっ……しまった。……まぁこの高さなら助かりはしないか……お前達、戻るよ！」

「「「ハッ！」」」

「それから……いいこと？　ああなりたくなかったら、今の出来事は忘れた方がいいわねぇ」

「「……」」

呆然と光景を見ていた門兵二人にそう告げ、悠々と城の中へと去って行く兵士達とシュプケー。門兵二人は血が滴るほどに握り込まれた拳をただ震わせていた。

彼女達は気付いていなかった。ステンが転がり落ちる直前、その手に持ったダガーが僅かに発光し、彼の体を薄い魔法の光が包んでいた事を。

第十一章　7、違約

「愉快だねぇ……どうしたってんだ？」

「さぁ？」

「……」

リュウが血相を変えて飛んで行った後、部屋に取り残された3人は呆然と開けっぱなしの窓を見つめていた。一体何事？とそれぞれリュウの行動にクエスチョンを並べつつ、ハッと正気を取り戻したのは再び部屋にノックの音が木霊した時だった。

「？　リュウは……居ませんか？」

ガチャリ、とドアを開けて顔を見せたのはキリッとした厳しい雰囲気を醸し出す銀髪麗しいゼノ。その後ろにはレイと同じく遺跡から寝ていたアースラとリン、モモの姿もある。チーム・トリニティそろい踏みだ。

「アイツならちょうど今どっかへ行っちまったぜ？」

ドアの方へ振り返ったレイはそう言って両手を左右に広げ、肩をすくめて見せる。日頃からとり慣れてるらしいそのポーズは実に馴染んでいた。

「……そうですか。アースラも気が付きましたし改めて礼を、と思ったのですが……居ないのでしたら仕方ありませんね」

そう言って小さく溜息をついたゼノは部屋を後にしようとする。
それに反応したリンプーがゼノへと質問を飛ばした。

「あれ？　あなた達もどこかへ行くの？」

「！　……ええ、私達は今からあの宝を依頼主の所へ届けて来ます」

そのリンプーとゼノの会話に耳がピクッとしたレイ。これから受け渡しが行われるのは一応とは言え自らも狙ったお宝である。知らぬ間に助け出されたおかげで実物をチラリとさえ見ていない。流石にそれはどうにも納得がいかなかった。

「へぇ。なら、俺も付いてくぜ？　そんくらいいいだろ？　別に横からぶんどったりはしねぇからよ」

「……付いてくるだけなら構いません。あなたにも一応借りがある事ですし……」

「フン、少しでも妙なマネを見せたら今度こそ蜂の巣にしてやるから覚悟しておくんだな！」

ゼノの後ろからレイに向けてガンを飛ばし、非常に物騒な発言をかますアースラ。その好戦的な性格はレイとの相性バッチリである。もちろん悪い意味で。

「おーおー怖い怖い。勇ましいこって」

「……」

再び肩をすくめるレイの仕草を見て、あからさまにムッとしたア

ースラ。レイの斜に構えた性格は根っからであるため、矯正など無理だとガーランドも匙を投げる程。かたやアースラも根っからの軍人気質でこの手のからかいを受け流せるような温和な性格ではない。両者とも病み上がりとは言え短気なのは相変わらずだ。この場にはそんな二人を宥める緩衝材となり得る青い髪の少年が居ない為、場の雰囲気は険悪になる一方である。

「じゃ、あたしも付いてく。暇だし！」

「「……」」

唯一人、場の空気なぞどこ吹く風な、我が道を行く虎娘。その元気で能天気な一言に二人は毒気を抜かれたのか、かろうじて物騒な気配は霧散していった。

「ったく愉快だねぇ……おっさんはどうする？」

「俺は宿で待とう。大勢で行っても仕方があるまい」

「わかりました。では二人は私達に付いてきて下さい」

「はーい」

「へいへい」

「フンッ」

一人若干不機嫌なアースラを宥め、リュウの部屋から出てゾロゾロと廊下を行くゼノ達6人。余談だが何故か発言のなかったリンは、実は現在進行形でうつらうつらと夢と現実の狭間を行ったり来たり

しているモモを介抱するのに忙しかったりする。残念ながらこの場にその事への突っ込みスキルを持つ人材はいないのだった。

「やれやれだ……」

一人残り、気を取り直して食堂へ向うガーランドの呟きは、誰に聞える事なく廊下の壁に吸い込まれていった。

――――――――――――――――――――――――――――

「……うっ……」

「！」

ゆっくりと開いた瞼の向こうには今朝方見た覚えのある天井。体のどこにも違和感すらなく、ふとすれば悪い夢を見ていたような錯覚に陥る。そんなボーっとする意識の中で、ステンは縄を手元に手繰り寄せるように、少しずつ記憶を再生していく。

「ここは……？　……そうだ……おいらは……！！」

急速に意識が覚醒しだし、がばっと身を起こして周囲を見渡すステン。

「……大丈夫ですか？」

「あ……リュ……ウ……？」

真っ先に目に入ったのは、先日知り合った青い髪の子供の心配そうな表情。部屋には他に誰もおらず、薬箱のような物が側に置いてあるだけだった。

「何でリュウが……？　おいらは確か……トゥルボーにやられて……落ちて……？」

自分の状況が掴めて来るにつれ、逆に混乱していくステン。それを見てリュウはさてどう説明しようかと頭を悩ませながら、順を追って話を始めた。

リュウがボッシュからの念話を受けて城に急行した時に見えたのは、城門前に居る多数の兵士達と、ちょうど堀の淵を転げ落ちていくステンの姿だった。連絡の意味を即座に理解したリュウは咄嗟に門からは見えない位置で急降下し、ぐるりと城を囲んでいる堀の中に潜り込み、ステンが落ちた場所へと急いだ。

意識を失ったまま崖を転がり落ち、ちょっとした出っ張りに跳ねあげられて無造作に水面へ投げだされたステンを、リュウは着水寸前でキャッチするとすぐにUターンし、治癒魔法を掛けながら元来た道を辿って宿へと直行したのである。

そしてちょうどゼノ達一行と入れ違いになるように宿へと戻ったリュウはステンを彼の部屋のベッドに寝かせ、治癒魔法を掛けて怪我を治していたのだった。

これは余談だが、全くの無防備で崖を転がったらそれこそ無事では済まないのが普通である。にも関わらず、ステンの全身にはトゥルボーに傷つけられた足や腹の傷以外は道端で転んだ程度の擦り傷

や切り傷しか見当たらず、命には全く持って別状がなかった。それはまさしくキングオブダガーの特殊効果、防御力上昇がすんでの所で発動したおかげであった。

「――――というわけでして」

「……後を付けてたってわけね」

「うっ……まぁでも何を話していたとかは知りませんよ」

リュウは後を付けるよう相棒に頼んだ事を包み隠さず話していた。そこでの会話を聞いた訳ではないし、いいタイミングで助けられた事への上手い言い訳も思いつかなかったのだ。ちなみに今、その小さな相棒の姿は何故かその場にない。

「……」

（やっぱ怒るかなぁ……）

ある意味信用されていなかったのと同義であるので、ステンが怒るのも当然だとリュウには思えた。しかしステンはそんなことは全く気にしていない様子でバタッとベッドに横になる。

「……なぁ……何でリュウはおいらを助けたんだい？」

「は？」

それはリュウにとって予想だにしなかった質問。てっきり頭ごなしに怒鳴られるか軽蔑の眼で見られるかと思っていたら、突拍子も

ないそんな問いかけである。これにはリュウもその意図がよくわからない。

「何でって言われても……死んじゃいそうな人が居たら助けるのって普通じゃないですか？」

「おいらは、助けてくれだなんて頼んでないよ？」

ステンは寝転がって天井を向いたまま、あまり感情のこもっていない声でそう言い放った。リュウは言葉の内容ではなく、そこはかとなくぶっきらぼうなその「言い方」にちょっとだけムッときて、

「誰かを助けるのに理由がいるかい？」なんてどこぞの主人公を気取ったセリフを言おうかとも思ったが止めた。

「じゃあ、死にたかったんですか？」

「……」

リュウのぶっきらぼう返し。その一言にステンは黙った。黙らざるを得なかった。死んだ方が良かったと過去に思った事もあったが、今現在進んで死にたいと思う訳ではない。だからその質問返しに対する答えは当然に否である。どうしてリュウへ向けてそんな意地の悪い言葉を口にしたのか自分でもよくわかっていなかった。

「……」

「……」

しばらくの間、険悪とまでは言い切れないが好ましくは無い空気に包まれ、内面的にどこかもやもやとしているステンと、さてこの

空気どうしようと隙を見るリュウ。沈黙に耐えかねて、先に口を開いたのはリュウだった。

「……さっきの訂正します。助けた理由は「俺がそうしたかったから」です」

「……」

質問に質問で返すのは良くないしな、とよくわからない論理で先程聞かれた内容を改めて考えた結果、リュウが出した答えはそれだった。とは言え、内容的にはよくあるモノである。

ステンは特にリアクションを見せず、再びその場に沈黙が訪れて時間だけが過ぎていく。少し経ち、次にその沈黙を破ったのはステン。ふっと息を吐くと徐に話し出した。

「……なぁリュウ、良かったら……とある男のくだらない話を聞いてくれないかな?」

ステンはベッドに寝転がりながらそんな事を言い出した。リュウとしては言い合いに発展するかな?と思っていたので正直少々肩透かし。しかしそんな普段とは違う真面目な態度で言われては断る訳にはいかないし、もちろんそのつもりもない。

「いいですよ、俺なんかで良ければ」

「……」

すこーしだけまだ棘のあるリュウの言葉をスルーし、ステンは静かに語りだした。

「……昔、さ。ある男はある国の軍の隊長をやっていたんだ。その国は表側は普通の国だけど、裏では軍事国家としての顔を持っていてね。その男は来る日も来る日も戦いばかりの毎日に次第に嫌気が刺していった」

「……」

「ある時、大きな戦があった。その男はそこでも自分の部隊を率いて戦果を挙げ、敵を深い所まで追い詰めていった。でもそれは敵の罠だった。奥まで誘い込まれた部隊は周囲を敵に囲まれ、絶体絶命のピンチに陥った」

「……」

「その時、隊長だったその男はあろうことかこう思った。「これで自分は解放される」って。そしてその男は単身で敵の大部隊へと特攻を掛けた。一騎当千の活躍を見せたその男のおかげで部下達は窮地を脱し、そしてその戦いが切っ掛けとなり、男の国は戦況をひっくり返して勝利をもぎ取った。……でも戦いが終わった後、そこにその男の姿はなかった」

「……」

「男は大部隊に特攻を掛けてから行方不明になっていた。色んな人間がその男は勝利の為に犠牲になったのだと思い嘆き悲しんだ。……でもその男はひっそりと生き延びていた。全てを放り出して戦場から遠ざかるために、不毛な戦いから逃げるために、男はその国から去ったのさ。一部の人間が自分のその行動を知っていたとしても、男にはもう関係なかった」

「……」

「男は世界中をふらふらして、そして数年が経った。ある時ふとした切っ掛けで、本当は戻るつもりなんてなかったその男が自分の国へと戻ってきた。国の事には決して関わらないと誓っていたつもりだったのに、その国の内部が乱れている事を知ると、そんな資格なんてないのに浅ましくどうすればいいか悩んでいる。……ねぇリュウ、その男はどうすればいいんだろう？」

話を終えたステンは天井を見ながら、最後にそうリュウに問いかけてきた。

「……」

リュウにとって、そこまでの体験をした事は無いから正直どうするのが正解かなんてよくわからない。ただ、その言葉にどう返せば良いのかくらいはなんとなくわかっていた。こういう時、大抵の事は自分の中で決着は付いているものなのだ。ただ少しだけ、背中を押して欲しい。そんな感じの空気を、リュウは肌で感じ取っていた。

「あんまり気の利いた答えは言えませんが……多分、その男の人がやりたいようにやるのがいいと思います」

それは自分の行動原理と同じ、しかし質問への答えとしては極めて曖昧な物だった。要するに、自分で考えろと丸投げしたも同然である。それでもステンにとってその答えは心地よかった。自分が正しいと思ったように動けばいいじゃないか、そう聞こえたからだ。

全てが救われた、と言うわけでは当然ないが、ほんの少し気が楽

になったのは確かだった。

「……」

「……」

自分はこの国が嫌いな訳ではない。ただもうその一部となって悲惨な戦いを繰り返すのは嫌だ。でも自分の好きなその国に何か良くない事が起きていたら？　自分の大事な人達がピンチに陥っていたとしたら？　やっぱりそれは助けたい。ならどうするか？　戦うしかないじゃないか。例え自分の大切な人達から臆病者だ卑怯者だと罵られようとも、それでいいじゃないか。

リュウはステンの目に決意の光が灯っていくのを感じていた。

「あ、あとその男の人に伝えてください。俺に出来る事があったら協力しますよ、って」

青い髪の少年は、最初から答えの決まっていた青年にそう声を掛けた。そこには打算的な考えは全くない事が容易に伺い知れる。

「……いいのかい？」

「ええ。俺その男の人別に嫌いじゃないですし。……っと、俺の名誉のために言っておきますが、断じて「そっちの気」はないんで、変な風に取られると困ります」

それはリュウの本心だった。前者も、そして傍から見たら恥ずかしさを誤魔化しているように聞こえる後者もである。むしろ後者の方が本命かと思われる程に力が篭っていたのはこの際気にしてはい

けない。

「そう……。じゃあ……悪いけどちょっと手伝って欲しい事があるんだけどね」

「はい」

そう言ってベッドから起き上がったステンとリュウの顔には、微かな笑みが浮かんでいるのだった。

――――――――――――――――――――――――――――

そこはハイランドシティの一角にある多目的ホールのような広い空間。普段ならば市民の憩いの場として賑わう大型の体育館的建物である。ゼノから目的達成の連絡を受けた依頼人――――ハイランドの高官は、その建物の内部一切を貸し切りにし、一般人を完全にシャットアウトして、受け渡し場所に指定していた。

ゼノ達トリニティの一向にリンプー、レイを加えた6人はその建物内部へ入って少しだけ驚いた。だだっ広い空間の真ん中に、ポツンと依頼主たる人物が一人だけ立っていたのである。街で自分たちと接触した時でさえ、側に二人の護衛付きだったと言う事を思い出すと聊か不思議ではあるが、まぁ人払いが済んでいるならば気にするほどの事でもないか、とゼノは納得していた。

「ご苦労だった。まさか本当に取って来るとは……。いやいや大したものだよ」

「……ありがとうございます」

ハイランダーにしては珍しく恰幅が良く、口元に豊かな髭を蓄えた高官はそう満足そうに話し掛けてから、徐に手を差し出してきた。それを見てゼノは傍らの道具袋から光る玉を取り出す。

「へぇ、あれが……」

「そーだよ。確か……「ごーすとこー」っていう何かスゴイ貴重な物なんだってサ」

初めて見たその強烈なエネルギーを発する玉を見て感心するレイと、したり顔で説明するリンプー。もちろん１００％混じりっ気なしの受け売りである事は一瞬で看破されていた。

「これが、「盗賊の魂」です」

「おお……これが……素晴らしい……確かに文献の通りだ……」

光の玉を受け取った男は満足そうにそれを手の上で転がし、強力なエネルギーを発するそれが本物だと確認すると、改めてゼノ達の方を向いた。

「いや本当に礼を言うよ。これで私達の研究は完成したも同然なのだから」

「？」

「っと、そうだった。君達への報酬だがね……」

「盗賊の魂」を取って来た暁には報酬として８０万Ｄｑという大金を払う、と男は依頼の際ゼノ達に伝えていた。男はゼノ達の前から一歩下がると、パンパンと軽く手を二回叩く。

「悪いがね、これが存在する事を知られる訳にはいかんのだよ」

「！」

それを合図に男の雰囲気が一変すると、その場へと通じるあらゆる扉と言う扉から、武装したハイランダーの兵士達が雪崩れ込んできた。特に男の周りにはざっと見積もっても数十人。さらに自分たちの後ろにも十数人。その一連の動作には全く無駄が無く、よく訓練されている事がわかる。

「これは……最初から約束を守るつもりは無かった……という事ですか？」

眼鏡の奥から鋭い視線を男へと飛ばすゼノの前には、一行を囲むように展開するハイランダーの兵士達。殺気立つその雰囲気は明らかにゼノ達を敵と見なしている。この期に及んでまだそいつらが自分たちに害を成す者でない、等と考える者はその場に誰一人居なかった。

「愉快だねぇ……エライ歓迎されてるみてぇじゃねぇか」

「……どうやら我々はまんまと躍らされたらしいな」

殺気に当てられレイはナイフ二本を、ついでアースラは腰に下げていた銃を。

「怪しいと思ってたのよねー」

「モモ……それならそうともう少しそう言う空気を出してくれれば良かったんだけどね」

モモはバズーカを、リンはアースラ同様、ホルスターから銃を。

「ねぇ、どうすんの？」

「……ここは明らかに多勢に無勢、まずは逃げる事を優先したほうが良いでしょう」

ゼノは剣を、リンプーは棍を。

ゼノ達はそれぞれが得意とする武器を一斉に取り出し、構え、自分たちを囲む兵士の大群を見据えて――――

「死人に口無し。一人たりとも逃がすなよ！！」

「「「ハッ！」」」

そして男の号令で一斉に襲い掛かってくる兵士達。僅か6人を相手にするには過剰戦力とも言えるような人数が、大波の如くゼノ達へと押し寄せる。

「アースラ！　リン！」

「「了解！」」

ゼノの声に共鳴し、二人の銃使いが前に出る。銃口を兵士達の波

へ向け、反動を吸収するべく足に力を込める。

「爆ぜろ！」

「そこっ！」

両者の持つ銃から兵士の大波に向け、扇状に広がる散弾が発射される。突進してくる兵士達の出鼻を挫くに最適なその一撃で、兵士達の勢いをいきなり削ぐ事に成功した。

リンの持つ銃はかつてゼノ達がリュウに勝負を挑んだ時にアースラが使っていた銃で、「ランゲージ・コマンド・システム」と言うモモの考案した装置を搭載した、持ち主の音声によって発射する物体が変化するという銃である。当時より改良が施され、音声の組み合わせで様々な追加効果のある弾丸も発射する事が可能となっている。ちなみに銃本体の正式名称は「バムバルディ・セカンドインパクト」と妙に長い。

それに対し今、アースラが持つのは「飛天雷神筒」と呼ばれる散弾を発射する事を目的とした大型の銃。何故アースラが武器を持ち替えたのか、それは単純にランゲージコマンドを使うには発声が不可欠であるため、せっかく覚えた魔法の詠唱が同時には出来なくなるからである。もちろんこちらについては発声は全く関係無い為、ただの掛け声と化している。

「今です！　あなた達は私について！　退路を確保します！」

「わーったよ！」

「りょーかい！！」

前面の兵士達を銃で牽制しているうちに、自分達の後方、入ってきた入り口付近に居る兵士達を蹴散らすべく、ゼノ、レイ、リンプーが突進する。

「そらよっ！」

持ち前のスピードを活かし、瞬時に敵陣に切り込んで周囲を斬り伏せていくレイ。

「ふんっ！　てやっ！」

真正面からにゃんにゃん棒を振り回し、飛んでくる斬撃や刺突をひらりとかわして力任せに兵士達の武器や鎧を粉砕していくリンプー。

「ハッ！！」

確かな技術に裏打ちされた剣技で兵士達を手玉に取り、次々に無力化させていくゼノ。

３人は即席の割に見事なコンビネーションで兵士達を蹴散らして退路を切り開いていく。しかし相手は雑兵とは言え仮にも軍事国家の兵である。ゼノ達のある意味奇襲により陣を崩されたと言えど、そのままともにやり合うのはどう考えても不利だ。

「よし！　全員こちらへ急げ！　モモ、あれを！」

「はーい。みんな目伏せてねー」

だがそこは歴戦のチーム・トリニティ。リンとアースラの二人が引き、再び大波が押し寄せようとした所へ待ってましたとばかりにモモが前方の敵陣へバズーカを向け、弾を装填する。

「えぇーい！」

ボスッと言う音と共に迫り来る敵陣の真ん中へその弾丸が炸裂した瞬間、目も眩む程の閃光がその空間を満たした。

「ぬぁっ！？」

モモの発射した弾丸は「閃光弾」と言い、弾丸自体の威力もさることながら瞬間的に強烈な光を発して敵の目を晦ませる事が出来る、秘蔵の秘密兵器である。

その激しい閃光に目の機能を奪われた兵士達はまともに動く事が出来ない。その隙にゼノ達は開いた退路を通り抜け、まんまと建物からの脱出に成功していた。

「愉快だねぇ……何処の特殊部隊だよこいつら……」

建物を後にし、呟いたレイの一言は慌しく走る足音に掻き消されていた。

「くっ！？　おのれ！　追え！　追うのだ！」

光が収まりだした頃、最早影も形も無くなったゼノ達の姿を探して慌てた男は周囲の怯んでいる兵達に向けてさらに号令を飛ばす。それに従い、兵士達はこぞって街中へと溢れ出していく。

「ちょっと！　逃げるのはいいけどどこに行くのさ！？　」

「町外れに廃屋があったハズだから、隠れるなら取り合えずそこがいいと思うわよー？」

街行く人々の好機の視線をぶっちぎり、天下の往来を全速力で疾走しながら、モモの間延びした声がリンプーの声に答える。

「おい！　俺は一旦宿に戻るぜ！　おっさん置いてきちまったからな！」

「わかりました。なら私達の荷も全て、ついでにとってきてくれませんか？」

「ったく愉快だねぇ……いいけど高くつくぜ？」

「……仕方ありません」

「っと、そうだ！　あたしもそっち行くから！　リュウとステンに知らせなくちゃ！」

レイ、リンプーは４人と別れ、宿の方へと向う。

理不尽に襲われた事に各自立腹しながらも、ゼノ達は追ってくる多数の足音から遠ざかり、そして逃れるべく隠れ場所を目指して走るのだった。

第十一章　8、同盟

既に日はとっぷり暮れて、鈴虫にも似た虫の声が少しずつ数を増していく最中。リュウ達はハイランドシティの郊外にある廃屋の前で、現在チームトリニティと一緒に焚き火を囲んでいた。

「で、この状況ですか……」

誰も言葉を発さない中で、リュウは小さな溜息と共に一言そう呟く。

あれからステンとどうするか話した後、たまたま合流したガーランドと共に遅い朝食を取っていたリュウ達は、鬼気迫る勢いで駆け込んできたレイ、リンプーにトリニティと共に国の高官に襲われた事を聞かされ、取り合えずそのまま宿に留まるのは不味かろうと人目を偲んで郊外の廃屋へと向うことにしたのだった。

幸いゼノ達が意図せずとも街中を引っ掻き回してくれていたおかげか、二人のフーレン族への追っ手はほとんどおらず、速やかに郊外へと向う事が出来た。

一方で約束を反故にされ、街を大量の兵士達に追いたてられていたゼノ達トリニティの面々だったが、それでも何とか一人も欠けずに撤く事には成功していた。

途中街の中であるにも関わらず、モモのバズーカが火を噴いたり、リンの銃からビームの雨が降り注いだり、アースラが唱えた魔法の矢が乱舞したりと色々あったが、幸運にも住人に被害は及んでいなかった。そして現在の彼女達の顔にあるのは１から１０まで不機嫌

一色。ついでにレイ、リンプーもムスッと納得がいかない様子である。

「「「……」」」

レイ、リンプーはともかくとして、トリニティの一行からすればこのままでは盗賊の魂をただで奪い去られたも同然、しかも犯人は国であるために表立って反抗する訳にもいかず、否応なしに泣き寝入り確定という有様である。それは不機嫌にもなろうというものだ。

「しかし、国はあの玉で何する気なんだろうね？」

「そうねー、研究がどうのって言ってたわねー」

ふと口を突いて出たステンの疑問に、少しばかり膨れっ面のモモが聞いた話で補足する。城へとそれを探りに行ったステンだったが、結果はわからず終いで返り討ち。結局何を目的にしているのかは全く分かっていないこの状況。

周囲にピリピリとしたイライラを孕んだ空気を漂わせたまま、空に浮かぶ二つの衛星と、無造作に薪をくべられた焚き火の明りだけが辺りを照らしていた。

「……ったくいい迷惑だぜ。こっちは巻き込まれただけだってのに……」

ガシガシと頭を掻きながら、そんなレイのボヤキと同時にパチリと弾ける薪が一つ。

「いや全く人生って何が起こるかわかりませんよねー」

「お前、何でそんな慣れてんだよ……」

リュウのどこか達観しきったような態度に呆れたレイが突っ込みを入れる。その姿に何がしかの違和感を感じたリンプーが、ん?と悩んである事に思い至った。

「ねぇ、そう言えばリュウさ、ボッシュが居ないみたいだけど……?」

いつもならリュウの側からべらんめぇ口調の突っ込みがあるハズなのにそれが無い。違和感の正体をリンプーが訪ねると、リュウは何事も無かったように答えた。

「ああ、それならもう来ると思いますよ?」

「へ?」

そう言うや否や側の草むらがガサリと揺れた。焚き火を囲む一同に瞬時に警戒の色が走った所で、ひょっこりとそこから姿を表したのは白い体毛のフェレット。何処へ行っていたのか、ここまで姿を見せなかったボッシュのお出ましである。

「おう、相棒」

「お疲れボッシュ」

「?　そういや、どこ行ってたんだい?」

ステンの後を付けてから、行方がわからなくなっていたリュウの

相棒不死身のフェレット。一体ボッシュはリュウに緊急の念話を送った後、どこで何をやっていたのか。てっきりちょっと席を外しているだけだと思っていたステンもその事に疑問を挟む。

「実は……」

「おう、ちっと城ん中まで偵察ってやつよ」

「は！？」

「まぁ中っつっても奥までは入ってねぇけどよ」

ボッシュの突拍子もない発言に驚きで返すステン。他の面子は何の事かイマイチわかっていないが、邪魔をする事も無くボッシュの言葉を黙って聞いている。

実はステンが城へ赴いた時、後を付けていたボッシュはリュウに念話を送った後でドサクサ紛れに城の中へと入り込んでいたのだ。簡単な情報収集ととある目的を達成したボッシュは、ちょうどいいタイミングで発生したトリニティ追跡というさらなるドタバタの中で、達成した目的と共に悠々と城から抜け出したのである。そしてリュウとの念話で“人目を避けるために日の暮れた頃に郊外の廃屋まで来てくれ”と連絡を取り合っていたのだった。

そうしていると、その成果である「とある目的」が、ボッシュのすぐ後ろから顔を出した。

「ステン隊長！　ご無事だったんですね！！」

「ゲイン！？　お前……何でここに！？」

「とある目的」の正体は何を隠そう城の門番のゲイン。城門前で起きた事の顛末を一部始終見ていたボッシュは、ステンの味方と思えた彼に接触していたのである。「こいつぁ何かあるな」と睨んだボッシュは情報を得るならば内部の人間が一番と考え、リュウに“我潜入せし”との念話を送っておいたのだった。

明らかに城の兵である彼の姿を見てあわや殺気立つトリニティとフーレン族の二人。脇では唯一事情を知るリュウが何とかそれを抑えようと苦心して取り繕って宥めているという図が展開されているが、ここはスルー。

門兵のゲイン自身、もちろん最初は突然話し掛けてきた言葉を話すフェレットを怪しみ、聞く耳を持たなかった。しかしこれまで彼と行動を共にしていた事、そして現在ステンが無事な事などを事細かに話してくるボッシュに次第に猜疑心が薄らぎ、最終的に「付いて来ればステンに会えるぜ」というボッシュの言葉を信じる事にしたのである。

これが例えば説得にあたったのが見た目怖いガーランドなどだったとしたら、流石にこうもうまくは行かなかっただろう。しかしそこは見た目だけならば愛らしいフェレット。その姿が警戒心を和らげる事に一役買っていることは疑いようも無かった。

「だぁから言ったろ？　俺っちを信じろってよ」

「ああ、疑ってすまなかったな」

もうかなり仲の良い友達であるかのようにゲインと打ち解けているボッシュ。殺気立つ周りを諫めながら、私服で来てくれりゃ良か

ったのに！　とゲインへ若干ベクトルのおかしい突っ込みを入れるリュウだった。

「さて、そんじゃおめぇさんの知ってる限りの事を話してくんねぇか？」

「ああ。……隊長、聞いてください。今城の中は大変な事になっているんです」

ボッシュに促され、ステンの方を向いて真剣に語りだす門兵。リュウの必死の説得もあって敵ではないと理解した周囲の面子もその会話に耳を傾けだす。

その話の内容は中々に複雑なものだった。

大まかに端折るとこの国からステンが消えた後、後釜に据えられたシュプケーは類稀なる才能と貪欲なまでの野心を見せて城内での存在感を増していき、着実に自分のシンパを増やし、ついには城内の勢力が戦争あるべしという急進のシュプケー派と、これ以上争いを行うのはやめ、穏やかに暮らそうという穏健の王女派に二分されるほどにまでなっていたとの事だった。

二つの派閥は拮抗していたが、しかしつい最近そのバランスが一変する出来事が起こる。王女派だったはずの将軍、トゥルボーが何故か突如として反旗を翻し、シュプケーの軍門に下ってしまったのだ。そのせいで王女派は勢いを無くし、現在の内部情勢はシュプケー派に大きく傾いていて、もう王女もその勢力を抑えるのが難しい状況らしい。そしてとうとうシュプケーは王女を亡き者にしようと画策しているらしいと言う噂まで聞かれるようになった。

「――――といった次第なのです」

「……なるほどね」

話を聞き終えたステンは両の目を閉じ、微かに思いを馳せる。それは先刻不意に刃を交えた旧友へのものか、それともそれ以外の人物へのものか、その心中は誰も知らない。

「隊長、お願いします。王女を手に掛けようなどとは最早我慢の限界。シュプケーを止める為に……力を貸してください。私にはあの女の掲げる理想がこの国の為になるとは思えません」

悲痛なまでの表情で願いを込め、真っ直ぐに自分を見つめるその門兵に、ステンは目を開け、ついで渋い顔を向けた。

「……ゲイン。おいらはもう隊長でも何でもない。だから、いくらお前に隊長と言われても、おいらにはどうすることも出来ない」

「そんな……」

想像はしていたが聞きたくは無かったステンの拒否。思わず落胆の声を上げてしまう。しかし諦めきれないゲインは尚も食い付こうとして口を開きかけ、だがそれをステンは遮った。

「でも……おいらちょっとあのオバチャンに用ができたんだよね。もっかい会いたいから良かったら城の中を案内してくれない？」

気がつけばその表情は少し意地の悪さを感じさせる笑みへと変貌し、そして目には力が宿っていた。その意味を理解した門兵は、兵としては似つかわしくないパァッと花が咲いたような笑顔を見せる。

「はい！　もちろんです隊長！！」

（素直じゃないなぁステンさん）

そんなやりとりを横目で見ながら、どこからか取り出したお茶を啜りつつ、密かに心中突っ込みを入れる少年が一人。

「……リュウ、彼は一体何をしようとしているのです？」

と、そこで一連の話と行動からでは今一その全景が見えてこず、不思議そうに事の次第を眺めていたゼノからリュウに質問が飛んだ。

「んーそうですね、簡単に言うと、これからちょっとあの城に喧嘩売ろうぜって話です」

本当に色々な部分を省略し過ぎているわけであるが、城の半分以上を占める派閥の長をとっちめると言うのだからそれで大体あっている。ゼノを含めて話を聞いていたトリニティの女性陣はリュウの言葉の意味はわかったが、頭がまともに理解しようとはしておらず、少しばかり呆けたような表情を見せていた。

「その……まさかとは思いますが、あなたとその彼だけで？」

「ええ」

リュウは全く何の心配も無いように頷いた。きっぱりハッキリたったの2人で城に喧嘩を売ると言い切ったのだ。これには流石のゼノ達の呆れを通り越し、感心するしかなかった。

「はぁ……わかりました。では私達もその作戦、参加します」

「え！？」

「何か不服でも？」

「いえ……」

（何かスゴイ殺る気を感じるんですけど……）

ゼノの言葉には“心配”と言える部分もあるにはあったが、“好機を得たり、この機に乗じて我らを愚弄した報いを与えてやるぜよ！”と、多分にそういう含みを持たせたものであると薄々リュウには感じ取れていた。しかし純粋に戦力が増えると言うのはリュウ達にとってはまぁありがたい話ではある。

「えーと……ありがとうございます。ねぇステンさん？」

「ん？　まぁ……手伝ってくれるって言うならありがたいけど……あんまり気は進まないんだけどね……」

「では決まりですね。これより、我らトリニティはあなた方に一時的に協力致します」

ゼノの力強い宣言に頷く3人の女性。ステンはそれほど気は乗らないらしいが、協力してくれるというのだから無碍に断る訳にもいかない。決して眼鏡の奥から覗く迫力に負けた訳ではなく。

「あ、とーぜんあたしも手伝うから。よくわかんないけどやられっ

ぱなしは嫌だしね！」

盛り上がる周囲の空気に釣られて気勢を上げる脳天極楽虎娘。段々とステンの顔の薄皮一枚下に困惑の色が広がっていたりしているのだが、それに気が付いているリュウは軽やかにスルー。

「愉快だねぇ……お前ら物好きにも程があるぜ」

「残念だがお前も手伝うんだ」

「は？　おいおいおっさん冗談キツイぜ？　俺ぁ……」

「たまにはリュウの役に立ってみたらどうだ？」

「うっ……」

（ガーランドさんコエー……）

ジロリと睨むガーランドの有無を言わせぬ眼光とセリフに言葉を返せないレイ。弱みとも言えるリュウへの借りを引き合いに出されては、反論などできようはずも無かった。

「そういう訳だ。俺とコイツも手を貸すぞ」

「はぁ……愉快だよ全く……」

「えーと……ありがとうございます……」

その場に居る面子全員がリュウとステンの功城戦に協力してくれると言う事で、目的を一つとしたおかげかはわからないが、ピリピ

リとしていた空気は大分融けだしていた。

「そういうわけで、何か皆さん協力して下さるそうですよ？」

「いやぁありがたいね。おいら涙出ちゃうよ」

当事者なのにどこか蚊帳の外的な疎外感を感じるステンは諦め半分でそんな言葉を口にしていたり。

と、ここで仕切り直してこれからどう城を攻略するかの作戦を練る事にしたリュウ達。本来ならリュウと共に正面から強行突破するつもりのステンだったが、この人数で行くならばそんな無茶はせずとも作戦を立てれば被害もぐっと小さくできる。

「……よし、フォーメーションPで行こう。城にはたしか非常用の出入り口が2つあったはずだから、正面1チームと左右2チームの合計3チームで乗り込むんだ」

「あれ？　俺てっきり上から一気に標的の居る場所へ行くんだと思ってたんですが？」

「それができれば簡単なんだけど……そうもいかない事情があってね」

「？」

門兵ゲインの話では、シュプケーは王族が代々住居とするはずの棟に大胆にも自らの居を構えているらしい。その棟は城の最奥部であり、リュウは空から直接その棟へと乗り込む気満々であった。しかしステンが言うには、なんとその王家の棟周辺には無限ループの

結界が張ってあるというのだ。“どれだけ飛ぼうとそれが空中である限り絶対に近付けない”というその結界のせいで、そこへ侵入するには棟と棟を繋ぐ吹き曝しの石橋を渡るしか手段は無いのだった。

（こわ……）

ステンを救出しに飛んで行った時、下手をすればそれに嵌る可能性があったわけで、自分の運が良かった事を密かに感謝するリュウだったりする。

そういうわけで決まった作戦は簡単に言えば2重の陽動である。正面からの第一陣と脇の非常用出入り口からの第二陣で城内の強硬派達を混乱させ、さらにもう一つの非常用出入り口から本命の第三陣が手薄になった石橋を渡りシュプケーを叩くのだ。

「第一陣には敵を引き付けるって意味で見るからに強そうな人が良いんだけど……」

ぐるりと周囲を見渡すステン。その場に居る面子で明らかに強そうな強面と言えばガーランドである。ついでレイだがガーランドと並ぶとどうしても体格の差でインパクトが薄れる。どうせならもう一人、似たような体格の人物でもいれば、道場破りならぬ城破りとしての印象は強固な物になるだろう。

「うーん……もう一人……」

「あ、じゃああの人に頼んでみたらどうです？」

「あの人？」

「多分ちょうどストレス溜まってると思うんですよね……」

リュウの脳裏にあるのはガーランドに勝るとも劣らない巨体を誇る亜人。今は時間的に休んでいると思われるが、普段はせっせと妖精の里で建築作業に勤しんでいる筈であり、それによってほぼ間違いなくイライラしているであろうあの人物。

「あーまぁ旦那ならガーランドの旦那と並び立ったら威圧感バッチリだよねぇ」

「ですよね。もうこの際言いっこなしで」

そういうとリュウは徐にポケットから赤い宝石フェアリドロップを取り出し、一人テコテコと焚き火の輪から抜け出て距離を取った。

「さて何がでるかな……」

その行動の意味がわからない面々は、今度は何する気だ？　と離れたリュウを不安げに見守る。リュウが恐る恐るその宝石を掲げると、宝石からカッ！と鋭い閃光が放たれた。反射的に閉じた目をゆっくり開けてみると、なんと目の前にピンク色のドアが現れているではないか！

「どこで○ドアかよ！」

「「「……？」」」

「相棒、こりゃなんでぇ？」

思わず周囲の疑問を代表して口にしたボッシュ。そのあまりにも

アレそっくりなソレに突っ込めるのはリュウしかおらず、全員なんだありゃ？てな状態である。

「（何で妖精達はコレを知ってんだ……？）　……まいいや。じゃ、ちょっと呼んできますね」

ガチャッ、っとノブを回して引いてみれば、やっぱりその先に広がるのは妖精の里の景色。痛みも無く心臓に悪い事も無いが、流石にここまでの丸パクリは駄目だろ、と再び妖精にダメ出しする気満々のリュウであった。

～数分後～

「ただいまー」

再びガチャリとピンク色のドアが開き、呑気な声を出しながら戻ってきたリュウの後ろには、妖精の里で休んでいたはずの巨躯の甲殻族、ランド。そして何故かサイアス、タペタの姿まである。

「スミマセン、何故かついてきちゃいまして……」

「もう何人でもいいんじゃない？　この際」

ステンは大体予想済みだったのか、もう諦め全開で何人でもバッチ来い状態である。

「おいリュウ。暴れさせてくれるってなぁどこでだ？　ここでか？」

「あ、これから説明しますよ」

リュウの予想通り、ちまちまと家を建てていたランドはその作業が退屈でイライラが募っていたらしく、普段とは違い大分目が吊りあがっていた。今ならばガーランドにも迫力で劣りはしないだろう。

「おーう、麗しのマドモアゼル！　ワタクシ、エカル・ホッパ・ド・ペ・タペタ言いますね！」

「うわ！？　な、何だこのカエル！？」

「ノンノン、カエルではないですね。ワタクシ由緒正しき匍匐族。タペタと呼ぶと良いですねシルブプレ」

「わ、わかった。わかったから寄るな！」

「そちらのお嬢さんも、ワタクシ、タペタ言いますね！　よろしくすると良いですね！」

「あ、ああ……」

美人が目に映るや否や、そちらへ一目散に駆け出していって声掛けをしているタペタ。突然現れた上から下までどー見てもカエルな亜人に流石のアースラもリンもまともなリアクションを取れずに硬直している。

「まさか貴様とも再び会う事になるとはな」

「……！」

かたや、サイアスの前にはそれまでの穏やかな表情を塗り潰し、鋭く尖った視線を送るガーランドの姿が。ガーランドは警戒した表

情だがサイアスは目元を隠す前毛のせいで表情が伺えない。しかし無造作に刀を握る手には僅かに力が篭っていた。

「もしかしてお知り合い……？」

「……」

「……こいつとは以前斬り結んだ事が数度あってな、「知り合い」ではなく「死合った」仲だ」

「そ、そうですか」

「まだ流れの傭兵をしているとばかり思っていたが……どういう心境の変化だ？」

「……」

サイアスは答えない。しかし以前ならわからなかったが、今のリュウにはそのサイアスの醸し出す空気がどことなくステンと似ている事に気が付いた。

（もしかするとサイアスさんも……？）

流れの傭兵。それが本当ならばサイアスも常日頃から戦場に立っていたと言う事である。そのサイアスが何故ステンと行動を共にしていたか、きっとそこにあったのは共感のようなものなのではないか？　とリュウは勝手に想像していた。

「まぁそれはともかくお二人とも、過去の事は水に流してココは出来れば穏やかに……」

「……」

「……」

まさに一触即発な雰囲気をかろうじて抑える、苦労性な青髪の少年。

「相棒、呼ばねぇ方が良かったんじゃねぇか？」

「……言うな」

ちょっとだけ自分の行動を後悔しているリュウであった。

「えっと、皆さんにお願いしたいのはですね」

そのままでは埒が明かないのでナンパに勤しむカエルや不穏な空気をまき散らす二人を収め、気を取り直してまたまたこれから何をするのか具体的に説明することさらに数分。

「……お前、馬鹿だろ？　普通そこまで首突っ込もうとするかぁ？」

「むぐ……」

極めて一般論的に放たれたランドの一言がリュウの胸に突き刺さる。実際の所たったの9人で城を相手に喧嘩しようと言うのだから正気の沙汰とは思えない。それが普通の感想と言えよう。

「まぁ俺は土木作業よりかこっちの方がいいから参加するけどな」

何だかんだと協力的なランド。サイアス、タペタも同意見らしく、ここに12人＋一匹の即席同盟が発足した。

「じゃあまずは……」

「それよりよ、俺達晩飯食ってねぇんだけどな？」

「あ、あたしもお腹空いたー！」

「そう言えば私達も何も食べていませんね……」

「……」

腹が減っては戦はできぬ。

全方位からの期待の視線で体が穴だらけになっているのは、当然料理の腕も一流のリュウ。何故かその腕前を知らぬ筈のトリニティの面々、レイ、ガーランドさえもが期待の目を向けている。もちろん宝を渡しに行く時の道すがら、リンプーがポロッと話してしまっていたのだが、その事をリュウは知る由もない。

そして自らを押し潰さんばかりのその無言のプレッシャーに、リュウがあっさり押し負けたのは仕方のない事だった。一応これでも空気を読める男なのだ。

「……」

誰にも気づかれぬよう心の中で溜息を付いたリュウは、無言でドラゴンズ・ティアから自慢の鍋その他の調理器具を取り出す。この日、ドラゴンズ・ティアに保存されていた食材の大半が消えた事を

ここに記しておく。

第十一章　9、逆襲

明くる日、ハイランド城。

実質城の実権を握っていると言っていいシュプケーを長とする急進派は、その中で二番目に権力を持つ高官の命令により兵士達を朝から街へと駆り出していた。理由は一つ、“盗賊の魂”の存在を知っているチーム・トリニティ＋αを消すためである。

「何をしている！　まだ見つからんのか！」

本来なら会議の為に使われるハズの一室を我が物顔で占有し、唾を撒き散らしながら部下を叱責するその男。ハイランダーにしては珍しく恰幅の良い、そして高圧的な雰囲気を纏うこの国の高官、名をトラウトと言う。

「申し訳ございません、何分手掛かりが少なく……」

「言い訳など聞かぬ！　今日中に始末できなければ貴様はクビだ！　とっとと行け！」

「は、はっ！」

「愚図どもめ……っ！」

“クビ”と言う単語に顔を青くし、慌てて去って行く部下の背を一瞥して男は一言そう吐き捨てる。

トリニティとの約束を目の前で破って見せたこの男、トラウトは

苛立っていた。盗賊の魂を手に入れられた事はいい。これでもうじきこの国の支配者になるであろうシュプケーに多大な恩を売る事が出来た。それは良し、だ。しかしその後がいけない。あの玉の存在を知られていては思いも寄らない所から弱点として露出するかも知れぬ。何としても後顧の憂いは断つべし！

彼はそう考えていた。

……彼は臆病な程に慎重だった。

権力欲に凝り固まるあまり、本来なら杞憂とも言えるような事象に執拗に拘っていた。

少し前から患っている持病の高血圧。それを抑える薬を懐から取り出しては次々に口へと放り込んで腹立たしげにガリガリと噛み砕きつつも、彼の興奮はなかなか収まらない。そして、そんな彼の血圧の値は奇しくもこの日史上最高を迎える事となる。

――――――――――――――――

ハイランド城には、城自体への入り口と城門との間に僅かな“間”が存在する。そこにはせめてもの緑として草や花、小さな木などが植えられ、かつては荒んだ兵士たちの心を和ませる役割があったが、今ではほとんど誰も見向きもしなくなっている。

「まずは、我らだな」

「腕が鳴るぜ」

慌ただしく街へと向かって行く兵士達の、誰一人として気にも留めないその草の茂みの裏に、何故かちょうど人が隠れられるサイズの穴が掘られていた。そしてそこから周囲を伺うように４つの視線が城門の方を注視している事に、兵士達は当然だが気付かない。

「ちょっとー、まだ合図が来てないわよー」

「ワタクシ、頑張るですね！」

その人影の正体は、【ストレス解消殴りまくり大作戦（命名・ランド）】の第一陣。ガーランドとランド、それにモモ、タペタである。前衛にて格闘のランド、槍による中距離を得意とするガーランド、そしてバズーカによる遠距離大火力のモモという攻撃一辺倒な組み合わせだ。タペタは一応レイピアを扱えるのだが、戦力としては若干心許ない為にリュウから大量の薬草を預かっての回復要因という役回りとなっていた。

この作戦、夜中のうちに城へと戻ったゲインのおかげで城内部の穏健派はほぼ全てリュウ達の味方となり、半ばクーデターと言えなくもない規模になっていた。

当然４人が隠れている穴も夜の内にこっそり穏健派が掘っておいたもので、明け方にひっそり忍び込んだのである。夜間に奇襲を掛けるという案もあったが、リュウ達はあえて夜が明けてからの作戦開始を選んでいた。それはトリニティ討伐の為の兵士が出払い、城内における急進派の戦力が低下する事を計算に入れた事に加え、夜は王家の棟の警備が極めて厚くなるためでもあった。

いつものように何食わぬ顔で城門の番をしているゲインがトリニティ追撃隊が出払った事を確認すると、４人の居る場所へ向けて合

図を送る。いよいよ作戦開始、まずは第一陣が行動を起こすのだ。

「あ、合図ねー。動きましょー」

４人は一斉に穴から飛び出し、城の入り口の前で堂々と各自の獲物を取り出す。ガーランドは“ギガンテス”の名を冠する長槍を、ランドは“ブラスナックル”という強固なナックルを。モモはバズーカにノーマルな弾“ショットシェル”を装填し、タペタも“むてきのレイピア”と言う少々名前負けしていそうなレイピアを鞘から抜く。

「……そうだな。派手に宣戦布告といくか」

「？　あんた何する気だ？」

「少々離れていろ。危ないぞ」

ランドからの疑問をよそに、何かを思いついたガーランドはわざわざ城門の外へ行き、門を閉めさせた。そして閉じた門を前にして槍を足元に突き立て、右腕に自らの気を集中させ始める。

「ぬぅぅぅぅ……っ！！」

装備していた手甲を軽々と弾き飛ばし、気合いを込める度に一回りも二回りも巨大に膨れ上がっていく右腕のその掌に、気の固まりのような光球が生まれる。淡く輝く光球に凝縮された破壊力は、解放されるその時を今か今かと待ち構えているかのよう。

「かぁぁぁぁぁっっ！！」

気合いと共に膨れ上がった右腕と掌を閉じた城門へと向け、ソレは放たれた。

掌の光球は姿を変え、まるで大きな竜巻を真横に放ったような凄まじい闘気の大渦となって城門へと直進！　直撃！　轟音と共に貫通！　さらに勢い衰えぬその大渦は城そのものの入り口付近をも木っ端微塵に大粉砕！　まさに会戦の初撃に相応しい一撃である。

それは修行の末に編み出したガーランドの必殺技、『会心撃』。素早く動く標的には当たり辛いが、動かぬ的には情け容赦のない、当たりさえすれば文字通り必殺の大技である。その場にリュウが居たとしたら、間違い無く技名の頭に“獣王”と付け足すよう要請していた事だろう。

「……」

ちなみに、何をするのかとその光景を見ていたゲインは口をあんぐりと開けて呆然としていたり。

「……よし、行くぞ」

「……やるなぁアンタ……」

「派手ねー。じゃ、てきとーに頑張りましょー」

「ウィ。ワタクシの剣捌き、特別に見せて差し上げるのですね！」

突然の轟音を聞きつけて各所から集まってくる兵士達を見据えて、４人は堂々と城内へ侵入していった。

――――――――――――――――

「何事だ！？」

突如として入口方面から聞えてきた爆音、それに驚いたトラウトは直ちに廊下に待機していた部下の兵を呼び出していた。

「は、何者かが城内に侵入したとの事です！」

「何だと！？　警備はどうした！　あの臆病者どもは居眠りでもしていたのか！」

急進派であるトラウトは、その思想から穏健派を完全に見下していた。自らはあまり表舞台に立たず指示を出すのみにも関わらず、彼の中では戦いを止めようという者達はこの国の民に非ずと思うまでになっていたのだ。しかし、そんな彼でもまさか穏健派が内部から手引きしているとはこの時考えもしていない。臆病者共の性根に自分達に逆らおうという度胸などある筈も無いとタカを括っている事がその理由だ。

「それがどうも侵入者はかなりの猛者達らしく……現在速やかに処理に当たっていますが何分相当の戦力が街へと向かっているせいで少々時間がかかるかと……」

「！　ぐっ……」

トラウトは自らの命令が仇となった事を悟る。しかしそんな事を易々と認められる彼ではない。

何故このタイミングで!?　まさかどこかから情報が漏れたのか？　いや、そんなことよりまずは城の防衛が先……いや待て、シュプケーの命を仰ぐのが先か？　いやしかし……

ハイランド城に直接攻め込んでくる人間が出るなど、彼がこの城に勤めだしてから一度もない事態だった。よって混乱するのも無理はないと言える。

「ええい、どこの馬鹿かは知らぬが、そんな命知らずどもは総力を揚げて叩き潰せ！　いいな！　ワシはシュプケー様にこの事を伝えてくる！」

「はっ！」

トラウトは懐から血圧の薬を取り出し、中身を一気に口の中に流し込んでボリボリと咀嚼しつつ、重い腰を上げてシュプケーの居る王家の棟へと足を向けるのだった。

――――――――――――――――

「全員、用意はいいですね」

「問題ありません！　隊長！」

「あたしも大丈夫さ」

城の左側面、堀に面した城壁の一部に、内部の者にもあまり知ら

れていない非常用の出入り口が存在する。本来の用途は火事等における避難用だが、手すりの無いバルコニー程度のでっぱりであるその場所で、４つの人影が行動を開始しようとしていた。

「……」

「貴様！　返事はどうした！」

「……だ……大……丈夫」

それは【我等の怒りを思い知るがいい大作戦（命名・アースラ）】の第二陣、ゼノ、アースラ、サイアス、リンである。二刀流剣術使いのゼノと居合いのサイアスを前衛、銃使いリンと銃＋魔法のアースラを後衛としたバランスの取れた布陣だ。ちなみにこちらの薬草役はリンが務める事になっている。

「……時間です」

第一陣が騒ぎを起こしてから5分。時間差で城の内部をさらなる混乱に陥れるべく、彼女達が動き始める。

「リン、アースラ、あちらに負けないようにお願いしますね」

「「了解！」」

ゼノの声に答えるようにリンは銃口を真上へと向け、アースラは呪文を唱え始める。

「ウェイブス・レイブス・ブレイブス！　『火の精霊７１柱・集い来りて敵を射て！　魔法の射手・収束・炎の７１矢！』」

「これで……とどめだ！！」

アースラの収束した魔法の矢、そしてリンの銃バムバルディィから一旦上空へと放たれたミサイルの嵐が、全く同時のタイミングで一斉に扉へと殺到！　そして着弾！　鉄で出来た扉は可哀想なくらい無残な鉄屑に、さらに周囲の城壁を不必要なくらい大きく削り取って、この日二度目のド派手な爆音がハイランド城に響き渡るのだった。

「では、行きましょう」

「……斬る」

ゼノは最早体の一部とも言うべき愛刀である二本の紫音剣を両手に、サイアスはその手に刀――――かつて戦争の最中に千人の血を吸ったと言う曰く付きの業物“千人斬り”を携え、もうもうたる爆煙の中を静かに歩み進める。煙の中であろうと二人のサムライには見えていた。前方から聞えてくる声の出所、そしてそれらが集まり増えていく気配、その全てが。

――――――――――――――――

「こ、今度はなんだ！？」

王家の棟へと続く石橋、そこへと至る最後の階段を昇っていたトラウトはまたもや聞こえてきた爆音に、慌てて発信源の方向へ振り返る。

「誰か！　誰か居るか！！」

「はっ、ここに」

たまたま通りすがった兵士を捕まえ、トラウトは今起きた爆発らしきものの詳細を問いただす。もちろん汚く唾を飛ばす事と高圧的な態度は忘れない。

「何が起こったのだ！？」

「そ、それが、さらに侵入者との報が……」

「何だと！？」

予想だにしなかった事態にトラウトは焦る。

何なのだこれは！？　何故こうも同じタイミングでこのような馬鹿が出るのだ！？

！　……まさか、穏健派の連中か！？

ここに来てトラウトはようやくその可能性に気付き始めていた。考えてみればそもそもがおかしい。今こうして泡を食っているのはほぼ急進派の兵のみだ。ここまでで穏健派の兵の姿を全く見ていないし、こうも易々と侵入される事自体がまずあり得ない。

「！　ここに居られましたか閣下！　ご報告がございます！」

「！　なんだ！」

しかし、その場に現れたもう一人の兵士の報告で、その可能性を追求しようとしたトラウトの思考は惜しくもそこでストップすることになる。

「侵入者は追っていた「トリニティ」であると判明いたしました！」

「何！？」

その一報を聞いたトラウトの顔から焦りの色が徐々に消え、それは安堵と共に愉悦の表情へと変貌する。

……は、そうか。そういうことか。あやつらの復讐だったのか。そう言えば奴らはそれなりには出来る連中だったな。ふん、のこのこと向こうの方からやってくるとは……愚か者どもめ。返り討ちにしてくれる！

「……飛んで火に入る夏の虫とはこのことよ！」

トラウトは先程までのうろたえぶりが嘘のように鋭く兵を見据え、伝令を伝える。

――――穏健派の連中にそんな度胸などあるはずもないし、な。

そう自分の思い込みを肯定しながら。

「ただちに街に居る全兵を引き上げて城へ戻せ！　侵入者は一人残らず皆殺しにせよ！　このハイランドから生きて帰すな！」

「「はっ！」」

報告に来た兵と通りすがった兵に命令を下し、さらにトラウトは石橋へ続く扉の前に居る警備の兵に顔を向ける。

「おい！　貴様らも行け！」

「は？　いえ、ですが……」

「構わん！　ヤツらを殺せば後はもう何も問題はないのだからな！」

「……はっ！」

そしてトラウトは事態をシュプケーに報告するべく悠々と石橋へ向う。脳内ではもう問題は全て解決したも同然であり、自らの功績をどうシュプケーに伝えるか、既にそれだけに思考のリソースは割かれているのだった。

――――――――――――――――――――

「さーて、いよいよですねー」

「がんばろーね！」

「ったく愉快だねぇ……」

城の右側面、ゼノ達の居た場所をそっくり鏡に映した様な足場の箇所に、彼らは居た。【レッツ大暴れしちゃおう大作戦（命名・リンプー）】の本命、第三陣のリュウ（ボッシュ）、ステン、リンプー、レイである。王家の棟侵入を目的とした素早さ特化の速攻チー

ムだ。

「おいら達は真っ直ぐ王家の棟を目指す。旦那方が暴れて手薄になっているはずだからね」

「あんだけでっかい音立ててるぐらいだし、城の中スゴイ事になってそうだよねー」

実際、この時ガーランド達とゼノ達はもう本当に十二分すぎる程兵の目を引き付けているのだが、リュウ達にはそのことはわからない。

「じゃ、そろそろ時間だし行きましょう」

第一陣が動き出してから10分、第二陣が動いてから5分。とうとうリュウ達が行動を開始する。ヒュパッとドラゴンズ・ティアから以前ガンツの街で買った無銘の“剛剣”、マンジカブラを取り出し、錆びついたドアに一瞥くれるリュウ。

「大地斬！」

刹那の如き剣速で鉄の扉は十文字に斬り裂かれ、ゴトゴトと崩れ落ちる。

（うん、いい切れ味！）

「じゃ、しっかりおいらについてきてよ！」

内部を熟知しているステンを先頭に、リュウ達は城内へと侵入していく。廊下を走り、階段を昇り、囮役の一陣、二陣のおかげで全

く兵士とは遭遇せず、一度も交戦すらすることなく、順調すぎる程の勢いで王家の棟へと続く石橋の扉の前までやって来ていた。

「この先さ」

「？　何止まってんだ？　さっさと行こうぜ」

「……そうだね」

少しだけ戸惑ったステンだったがレイに促され、ふっ切ったように力強くその扉を開ける。そこには申し訳程度に柵のついた石橋が一本だけ。下は外の堀と同じなのか谷のように深く底に水面が見え、吹き抜ける風が足元を揺らがせる。

「おい……誰かいるぞ」

「！　あれは……」

「！？　な、なんだ貴様らは！？」

ステン達の前、橋の後半部分をのそのそと歩いていたのは恰幅の良いハイランダー、トラウト。考え事をしながら歩いていたトラウトはいきなり聞えてきた声に後ろを振り返り、そしてその先頭に立つハイランダーの青年を見て驚愕に染まった。

「貴様は……馬鹿な……な、何故貴様が……」

トラウトは一番考えたくない事態を考えざるを得なかった。とうの昔に死んだと思っていた男が、このタイミングで今自分の目の前に居る。そしてその男は自分の記憶が確かなら確実に王女の側の人

間。それらの事実から導き出される答えは、先程捻じ伏せたあの結論以外には……ない。

「まさか……騒ぎの元凶は……っ！！」

トラウトは全てを察した。

「なぁアンタ、あれ知り合いか？」

街で自分達が追いまわされる切っ掛けを提供してくれたトラウトに向け、ギロッとガンを飛ばすレイ。その口から自分へと向けられた質問に、ステンはすっ呆けたように答える。

「いや……見た覚えはあるけど知り合いってほどじゃないよ」

ステンの記憶ではトラウトに関しては精々顔見知り程度のものだった。実際シュプケーが台頭するまではさして目立つ事のない男だったため、それは当然と言える。

「くっ……衛兵！　衛兵であえ！　であえーっ！！」

睨んでくるレイを見て焦ったトラウトは王家の棟に向って力の限りに叫んだ。棟にはシュプケーの息の掛かった近衛兵が常駐しており、王女の護衛も幾人か滞在しているのだ。トラウトの魂の叫びはギリギリ届いたのか、王家の棟から武装した兵が何人も出てきていた。

「……なんだよ、まだ結構居るじゃねぇか」

レイは不貞腐れたような態度で悪態を突く。

「ふ、わはははは！　こうなれば誰が来ようが最早関係ない！　馬鹿どもめ！　ここで死ぬがいいわ！」

わらわらと出てくる兵士を見て勝ち誇ったように高笑いするトラウトは、そのまま一目散に王家の棟へと疾走する。と言っても走る速度は非常に遅かったが、それを庇うように近衛兵達が前に出てきていた。

「……やるしかないかな」

ステンは少し諦めたように腰に下げていたダガーを引き抜く。

「……」

「相棒、どうした？」

と、そこまで言葉を発さなかったリュウは兵士達の隙間を縫って王家の棟の入り口を注視していた。いや、正確にはその少し上にある窓のように開いている空間を、だ。

「……ステンさん、あそこの窓みたいな所って例の結界届いてます？」

「ん？　いや、あそこには結界はきてないハズだけど？」

「……」

リュウが何を考えているのか、その場の誰もわかっていない。ただ一匹、ボッシュだけはおおよその見当がついたのか、腰のポーチ

から顔を出して事の成り行きを見守っていた。

「……この場は俺達が引き受けますから、ステンさんは決着を付けてきてください」

「！」

何を思ったのか、あえて自分たちはこの場で残ると言うリュウ。

「……それはありがたいけど、どうやってアレ突破しろってのさ？」

ちょうど橋の真ん中くらいまでを埋めるように、前方に槍や剣で武装した近衛兵がわんさといる。この狭い石橋ではかわす事など出来はしないからぶつかるしかないはず。まだリュウが何を考えているのか分かっていないステンはリュウへ質問をぶつけた。

「……こうするんですよ。戦いの歌（バトルソング）！」

「！？」

まだバトルに突入していないのに身体強化を掛けるリュウ。敏感に本能が察したのかヒヤリと嫌な予感が走り、ステンは僅かに、だが確実に足を引く。しかしリュウはにこやかな笑みを浮かべて逃さんよ？　とばかりにそのままガシッとステンの肩に手を掛けた。

「……あの……おいらちょっと……急用が……」

「……そんじゃあいってらっしゃいステンさん！」

そしてリュウは笑みを浮かべたままステンを……思いっきり

向こうの窓目掛けてブン投げた！

「ウッッッキャーーーーーッ！？」

割と本気に聞えるその叫び声を華麗にスルーしているリュウの目論見通り、兵士達の頭上を一気に越えて窓の中へと見事ステンはストライク！　ちょっとドゴッと何かにぶつかったような破壊音が聞えたけど気にしない！　ナイスコントロール、俺！と自画自賛のリュウである。

「うわぁ……」

「愉快だねぇ……」

呆れたレイとリンプーの視線がリュウの何故か微妙に誇らしげな背中を射抜いていた。

「な、何だ！　一体何が目的なんだ貴様らぁっ！！」

トラウトはステン一人だけを棟に先行させたリュウ達の行動の意味がわからず、兵士達の後ろから唾と共に質問を投げ掛ける。

「さぁな。取り合えず俺はお前をぶちのめしたいってのが目的だがな！」

「あ、あたしもそれ賛成！！」

「俺はこれで一応の目的は達成したんで、後はフォローですかね」

レイは両手にナイフ――――以前旅の途中で手に入れたナイフ“

スライサー”を、リンプーは言わずと知れた猫の手棍棒、にゃんにゃん棒を構え、リュウもドラゴンズ・ティアからマンジカブラを取り出す。

「さて、じゃあ……やりますか！」

「ああ！」

「おっけー！！」

狭い石橋の上で向ってくる大量の近衛兵へ突っ込み、リュウ達は片っ端から蹴散らしていくのだった。

――――――――――――――――――

「あいたたた……ったくリュウ結構乱暴だよなぁもう……」

なんとか無事？に王家の棟に潜入し、頭に出来たたんこぶをさすりながら文句を言うステンの顔に怒りの表情は浮かんでいない。それどころか、自嘲とは違う笑みのようなものが垣間見える。

宿でステンがリュウに頼んだ事、それは確実にシュプケーの側に居るであろうトゥルボーとの決着をつけ、助けたいという事だった。リュウはステンから聞いたトゥルボーについての話から、操られているという一点において一つの可能性を示唆し、ステンもまたそれに間違いないと、ある確信を抱いていたのだ。

「……」

そしてそれと同じ、もしくはそれ以上に気になるのは王女の安否。ステンは過去を思い出して僅かに躊躇する。しかし自分が入ってきた窓からチラリと奮闘する少年達の姿が見えると、迷いを振り切り、感謝の念を送り、表情を切り替え、階段を駆け上がっていった。

――――――――――――――――

「さぁ、王女よ私と一緒に来て頂きたい」

「お断りします。私は……いえ、この国の民は戦を望んではいません」

王家の棟、最上階。代々王族の住まう一室。その豪華な装飾あふれる部屋の中で二人の女性が、およそその部屋に似つかわしくない剣幕で言い争っていた。

「お戯れを……この国がこれまで栄えてきたのは何故か？　どうやって我等を養ってきたかをお忘れか？　我が国は元々軍事国家。戦争こそ我等が生業。それを否定する権利はあなたにはありませんよ」

「……」

悲壮な雰囲気を漂わせ、美しいドレスに身を包むハイランダーの王女。そして煌びやかな鎧を着飾った、美しいがどこかに棘のある気配を纏う女将軍。王女は目の前の女性が放った言葉を否定しない。出来ない。それは純然たる事実だから。

「確かに……そうです。ですが何と言われようと……私は考えを曲げるつもりはありません」

「……そうですか……わかりましたわ」

王女は将軍の目を真っ直ぐに見据え、言い切る。しかし女将軍はそれを一笑に附すかのように鼻で笑うと、ツカツカと王女の側へと無作法に近付いていく。

「！　な、何をするのですか！　無礼者！」

「は、もうすぐアンタは王の座を明渡す事になるのさ。このアタシにねぇ！」

女将軍は王女の腕を荒々しく掴む。王女はそれを振り解こうとするが、しかしその細腕はガッチリと捕まれていて振り払う事など出来ない。

「……くっ……離しなさい！」

「フフ、最後にあなたに相応しい仕事が残っていますの。この城の隠された力を解放するというお仕事が。そして新たな戦乱の世が幕を開ける……是非来て頂かないと困るのですよ王女殿下？」

王女の腕を掴み、ギリギリとその手に力を込める女将軍の顔はこれ以上ないほどに歪んでいた。それは野望の成就を確信した笑み。今日この日より自らが王になるのだと、まさに勝利に酔った者の笑み。

「断ると言ったはずです！　そんな事に使われるくらいなら……今

すぐ私を殺しなさい！！」

「フッ、アハハハハ！　素敵ですわ王女様。でも残念。もうこれは決定事項なんですの」

腕を掴まれたまま、強く将軍を睨む王女。それを痛くも痒くもないと嘲笑う女将軍。王女は祈るような思いを胸に、離れた位置で待機している旧知の友に望みを託す。

「離しなさい！　……トゥルボー！　聞えてるのでしょう！　お願い！　私の声に答えて！」

「……」

しかし確実に聞こえている筈のトゥルボーは、王女の声に全く反応を示さず待機の姿勢のまま。視線すらピクリとも動かず微動だにしない。

「あら、形振り構わず私の配下に助けを求めるだなんて、随分と無様なお姿ですわね王女様？」

「……くっ……あなたは……っ！」

勝ち誇る女将軍を前に悔しさを滲ませ、王女は語気をさらに荒げる。

「殺しなさい！　殺せばいいでしょう！？　さっさと私を――――――」

それは王女の心からの叫び。いざとなったら自刃さえ厭わないと

いう決意。しかしその自棄とも言える決意の言葉は、最後まで紡がれる事はなかった。

「おいおい、穏やかじゃないねぇエルファーラン？」

「「！？」」

沈黙が訪れる。

二人の女性は声の聞えてきた方……部屋の入り口を同時に見やる。そこに居たのは一人の青年。蒼いベストを羽織ったような服装の、飄々とした雰囲気を纏った男。そしてその男の登場に対する反応は女性二人でまさに真逆。

「まさか……ステン？　本当にステンなの！？」

「馬鹿な……貴様はあの時……っ！　何故ここに居るのだ！？」

両者とも、その表情にあるのはただ一つ“信じられない”という驚き。しかし王女の根底にあるのは喜び、女将軍の奥底にあるのは焦り。それらのベクトルは決して交わる事はない。

「王女に取って代わろうだなんてふてぶてしい事考えちゃって……お仕置きしちゃうから覚悟しな……シュプケー！」

「くっ……！？」

ヤツは昨日殺したハズ！　一体どうやって生き延びた！？　警備

の兵は何をやっているのだ!?　何故こいつの侵入を許した!?
おのれ!　やはり死体を確認しておくべきだった……ッ!

シュプケーの脳裏に様々な疑問と後悔の念が渦巻く。しかし次の瞬間にはすぐそこにいる、最も信頼できる兵に命令を飛ばしていた。

「トゥルボー!　そいつを殺せ!」

「はい。シュプケー様」

シュプケーの声に即座に反応したトゥルボーは躊躇うことなく標的をステンに定め、一足飛びに飛び掛かり、ヌンチャクを降り抜く。

「!　おっと!?　へっ……トゥルボー、今度は昨日みたいにいくと思うなよ!」

もちろんいつでも動けるよう神経を緊張させていたステンはひらりと横へ回避。そしてキングオブダガーを取り出し、その刀身に意識を集中させる。刀身が淡く輝き、薄い魔法の光がステンの全身を覆っていく。

「すぐに正気を取り戻させてやるよ!　トゥルボー!!」

ヌンチャクを振り被り、なお飛び掛ってくるトゥルボーの攻撃を真正面から受け止める。ダガーの特殊効果で強化された防御力は、トゥルボーの一撃を完全に上回っていた。続く攻撃に対して反撃こそしないものの冷静に捌き、かわし、対処していくステン。

攻撃を当てられたとしても碌なダメージを与えられないトゥルボーには、最早決め手はなかった。そして攻撃を往なしながら、ステ

ンは注意深くトゥルボーを観察する。

「！　……あれだ！」

攻防の最中、ステンは目聡く見つけだしていた。トゥルボーの手首に着いているリストバンド、それが妙に盛り上がっている。まるでその下に何かを隠してでもいるかのように。

「よっ！」

操られているせいか、そのワンパターンな動きを見切ってきたステンは攻撃をかわし様に器用にリストバンドだけを切り裂く。その下に現れたのは、かつてキルゴアが盗賊にいい様にされていた元凶。現在リュウが所持しているあの腕輪とそっくりの代物。

「やっぱりか……その腕輪のせいみだいだな、操られているのは！」

「！！」

ステンの声に反応を示したのはシュプケー。一気に顔色が変化していた。リュウとの話で大体想像していたステンとしては、案の定といったところである。

「そんなのに操られるなんて、爆裂中隊隊長の名が泣くぞ！　トゥルボー！！」

振り下ろされたヌンチャクの一撃をカウンター気味に弾き、バランスを崩したトゥルボー目掛けてステンのダガーが一閃――――

「……！」

交差するようにすれ違った後、トゥルボーの手首に嵌っていた腕輪のみが真っ二つに斬り裂かれ、落ちる。

それはカツン、と二つの乾いた音を立てて。

「！　しまった!?」

シュプケーの叫びと同時、まるで糸が切れた人形のようにがくりと膝を折るトゥルボー。呪縛から解き放たれ、シュプケーの命令を受け付けなくなった事で、最早勝敗は決していた。

第十一章　10、道連れ

「ば……馬鹿な！？　何なんだこいつ等は！？」

トラウトはまさに混乱の極みであった。近衛兵は城の兵の中でも選りすぐりの手練で構成されている。その精鋭であるハズの兵達が、目の前の3人組に全く歯が立たずにやられていたからだ。

特に恐ろしいのはあの青い髪の少年。兵士達は二人のフーレン族にはまだ多少の手傷を追わせられるものの、あの少年だけには触れる事すら出来ていない。それどころかフーレン族につけた傷を、隙を見つけてはあっという間に治癒させている。信じられない。こんな馬鹿なことがあってたまるか。

「ひ、ひいぃぃぃ！？」

トラウトは走る。一刻も早く王家の棟に避難するために。自らも戦うと言う選択肢はその脳裏に欠片ほどもない。自分は死なない。こんな所で死ぬわけには行かない。もっと上に昇り詰める。その権力に対する執念がかろうじて恐怖を抑え込み、ひたすらに足を前方へと進ませていた。

「！　逃がすかよッ！」

レイは倒れている兵士達に目もくれずに駆け出すトラウトの姿を視界の隅に捉えると、腰に備えていた投擲用ナイフの一本をその背に向けて投げつける。それはようやく棟の入り口へ踏み出したトラウトの足、そのふくらはぎを寸分の狂いもなく着実に射抜いた。

「うぎっ！？　ぎやぁぁぁぁぁっ！！！」

足から脳へと伝わる激痛に悲鳴を上げ、転がりのたうつトラウト。すぐに誰かが気付く、声を掛けてくれる、そして助けてくれる……トラウトの頭をよぎったあらゆる期待は、しかし叶う事はない。

「これで！　終っわりぃッ！！」

「あぐぁっ！？」

リンプーの棍の一撃が最後に残った兵士の兜を砕く。勢いのまま足元に頭を叩きつけられた兵士は意識を彼方へ飛ばし、動くことをやめる。

今、その場に二本の足で立っている者は3人。あれだけ居た兵士達は悉くが地に伏し、ものの数分で壊滅状態。もちろん死んではおらず、リュウの意向で気を失う程度に留めてあるが戦闘不能にはそれで十分。

「ひ、来るなぁ！！？」

橋の奥、王家の棟の入り口で、足から血を流し無様に這いつくばるトラウト。その表情には恐怖のみ。威厳、格、オーラ。人の上に立つものが必ずや纏うであろう独特の空気を、トラウトは何一つとして感じさせはしなかった。

「……ちっ」

レイは震えて醜態を晒すトラウトを鋭く見据え……ナイフを持つ腕をダラリと下ろす。

「あれ？　ぶっ飛ばさないの？」

「……」

キョトンとしたリンプーに無言で返すレイ。かつて自分が葬った相手を思い出し、その最後の姿と被るトラウトに、レイはこれ以上の攻撃を加える気にはならなかった。

「ま、いーけど……じゃあ、覚悟しなよ！　あの人達からお宝を奪ったヤツ！！」

「ひっ！？」

リンプーが棍をかついだままの姿勢でズンズンと歩み寄るとトラウトの目の前に仁王立ち、棍を握る手に力を入れて思いっきり振りかぶり――――

「あ、ちょっとだけ待って下さい！！」

「！？」

と、そこで思わぬ所からストップが掛かった。その場に不釣合い極まりない子供まんまな声の発信源は、やはりと言うかトラウトが最も恐怖した青い髪の少年、リュウ。

「一つだけ聞いときたいんですが、あの盗賊の魂、どこへやったんで？　答えてくれたら俺はこれ以上あなたに何もしません。約束しますよ」

「！！」

それは今度こそ命運尽きたと思ったトラウトにとって願ってもない誘い。地獄に仏、天から蜘蛛の糸が垂れてきた、とでも言うべき事態。トラウトにとって自分の命は何よりも重い。例え重要な機密だろうとも、比較になどなりはしない。

「ち、地下だ。あれはこの下、王家の棟の地下にある……」

自分が助かる見込みが出てきて多少冷静さを取り戻したのか、トラウトは滑らかに口を滑らせる。

「へぇー地下。……で？　そこで何に使うんですか？」

「そ、それは……知らぬ……」

「……」

使用目的を問われた途端にトーンダウンし、リュウから目線を逸らすトラウト。もちろんリュウにはこの状況でこの男が、真っ直ぐに嘘をつける程の豪胆な人間には見えない。

「なるほど」

「おいリュウ、今のを信じるってのかよ？」

レイが不思議そうな目でリュウを見る。

「ええ、どうやらコイツもそんなにシュプケーとやらに信用されていた訳じゃないっぽいですし。今のは多分本当でしょう」

「……くっ……」

……まさに図星。口にこそ出さなくとも、ゴマをすり、媚びへつらい、築き上げた地位に対して薄々感じていた事だとその顔には書かれていた。それをズバリ指摘されたトラウトは急にぶり返してきた足の痛みも相まって顔をしかめる。

「とまぁそう言うわけで……じゃ、リンプーさん、後よろしくお願いしますね」

「!?」

にこやかにそう告げる少年を見上げ、トラウトは顔面蒼白、天国から地獄。リュウが言った言葉の意味は、どう考えても自分にトドメを刺す以外ないと理解してしまったトラウトは焦る。そして吼える。

話が違う！　何を言っているんだこの餓鬼は!!　と。

「ど、どういうことだ貴様！　このワシとの約束を違えるというのか!!」

（うーわ、コイツには言われたくねーなそれ……）

そっちが先にトリニティとの約束を反故にしたらしい癖に、よくもまぁいけしゃあしゃあと。どのツラさげて言ってんだこのデブは。年末にリュウの脳内で盛大に開催される予定の“本年度お前が言うなオブ・ザ・イヤー”に強力な優勝候補がノミネートされた瞬間であった。

「……何か誤解があるようですが、俺は別に嘘は言ってませんよ？絶対何もしませんですとも……“俺は”ね」

「!?　な……!?」

「そんじゃーねッ!!」

「ぐぼぅふ!?」

卑怯だなんだと騒ぎ立てる間もなく、トラウトの脳天に向けてにゃんにゃん棒が遺憾なくその威力を発揮し、まるで跪いて土下座をしているような姿勢でノックアウト。ぶくぶくと泡まで吹きだすこの有様。

「愉快だねぇ……」

ふとついたレイの溜息は吹き抜ける風に紛れ、流されていくのだった。

――――――――――――――――

「トゥルボー、大丈夫か？」

「……う……」

激しかった争いの音がピタリと止んだ王家の棟最上階。ステンは膝をついたままの姿勢で固まっている旧友へ、警戒色のない声で話

し掛けていた。すると徐々に再起動し始めたらしいトゥルボーの顔に、人間らしい表情が戻ってくるのがわかる。

「俺は……ここは……？」

「おいらがわかるかい？　トゥルボー？」

「……！　……ステン！？　な、なんでお前が居るんだ！？　こ、ここは！？　俺は……！？」

自我の戻ったトゥルボーは目の前に突然現れた懐かしい顔と、今自分がどこに居るのかを見回して驚嘆の声を上げる。一体何がどうしてどうなっているのか。そんな混乱がトゥルボーの頭を埋め尽くす。

「トゥルボー……良かった。正気に戻ったのですね……」

その光景を離れた位置から呆然と見ていた二人の女性。王女はどうにか自我を取り戻したらしいトゥルボーと、まさかこの場に助けに来てくれるとは思ってもいなかったステンの姿を交互に見やり、うっすらと涙さえ浮かべていた。

「……」

一方王女の腕を捕らえたままのシュプケーは――――異様なほどに落ち着いていた。

トゥルボーを操っていた腕輪の存在をどうしてステンが知っていたかは気になる所だが、まぁ今はどうでもいい。……ヤツラは油断している。少々取り乱しはしたが王女を捉えている以上、自分が優

位に立っている事に何ら変りはない。焦る事はない。王女ごとこのままあの場所へ行きさえすれば……さらにヤツを利用してアレを解放できれば――――

シュプケーは王女を捕まえたまま、静かに後ずさっていた。

「！　おっと、待ちなよシュプケー。動かないほうが身のためだよ？」

「！！」

トゥルボーを介抱しながらもしっかりとシュプケーに対して警戒していたステンは、その怪しい動きに釘を刺す。トゥルボーを奪回された以上この場をどうにかする術がシュプケーにあるとは思えないが、そのままでは王女を人質にされている状態だ。ステンは早々に王女を取り戻す決断を下し、隣の旧友に小さな声で作戦を伝える事にする。

「トゥルボー、早速で悪いけど……エルファーランを頼む」

「！　……よくわからんが、断る！」

「……へ？」

まさかの返答。間髪入れずにデカイ声で要請拒否したトゥルボー。これには流石のステンも予想外。

「お、おいトゥルボー！？　お前、まだどこかおかしいのか！？」

あまりの不意打ちにステンは今の状況が見えていないのかと、正

気を取り戻した筈の旧友に疑問をぶつける。

「……ふん。まぁどうやらかなり切羽詰った状況のようだ。そしてどうしてかは知らないが俺は今まで正気を失っていた、ってとこか？」

「そこまでわかってるんだったら！？」

「っ！　このモンキー野郎！　俺はともかく王女が今までどんな思いでお前を待っていたか……わからねぇとでも言うつもりか！？」

「！」

それはステンがこの場で敢えて避けようとしていた事。自分に思いを寄せてくれている女性に対する後ろめたさ。正面から向き合わなければならない最後の一線。

「王女はな、ずっと待ってたんだ。俺じゃなくお前を選んでな！　だから、お前が王女を救え！　……俺はあの女を何とかする！」

「……」

ステンは僅かに迷う。しかし今はそんなことを問答している場合じゃない。伊達にかつて共に並んで戦場に立っていた二人ではない。トゥルボーは言い出したら絶対に言葉を曲げないと理解しているステンはすぐさま頭を切り替える。

二人が見ると、シュプケーは王座の裏辺りに王女を捕まえたまま立ち尽くしていた。周囲は壁、逃げ場はなし。そもそもその部屋の入り口付近にステンとトゥルボーが陣取っていたのだ。二人のある

種の余裕はそこから来ていた。

――――そして、その余裕が間違いだったと気付くのはすぐだった。

「フッ……トゥルボーを解放して、してやったりってところかい？だけどね……詰めが甘いんだよ！」

「「！！」」

「王女を返して欲しかったら……地下まで来るんだね！！」

そう言い放つとシュプケーは王座の裏に隠されていたスイッチを押す。すると王女とシュプケーの足元が開き、二人はステンとトゥルボーの視界から――――消えた。

「！　何！？」

「しまった！？」

慌てて王座の裏に回る二人。しかし穴は閉じてしまい、シュプケーが押したスイッチらしきものをガンガンと乱暴に連打するもウンともスンとも言わない。

「くそっ！　油断した！」

「シュプケー……っ！」

二人は歯噛みする。まさかこんな場所にこんな手段が隠されていようとは想像すらしていなかった。……しかし、逃げたのなら追え

ばいい。ヤツの言葉を信じるならば向かった先は棟の地下。即座に二人は部屋を飛び出し、階段を一直線に駆け下りる。

「くそっ！　あんな逃げ道があったなんて！！」

「トゥルボー！　お前知らなかったのか！？」

「馬鹿言え！　あの部屋に入ったことなんかあれが初めてだ！」

ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ。二人は言い合いをしながら凄まじい速度で階段を駆け下りていく。

「あれ、ステンさん！？」

「！　っと、リュウ！！」

「うおっ！？」

ステンのフォローをしようと階段を上がっていたリュウ達は、上から猛烈な勢いで降りてくるステン・トゥルボーと階段の途中で鉢合わせていた。危うくぶつかるところだったステンはギリギリブレーキが間に合い、トゥルボーは勢い余って顔からリュウにダイビングする所だったが、リュウが華麗に回避したせいで壁とディープな接吻をすることになっていたり。

「何かあったんですか？　……あ、そっちの人が言ってたトゥルボーさん？」

「ああ、何とかトゥルボーは助けた。だけど……」

「っつ～……っと、なんだ？　お前達はステンの仲間か？　悪いが構っている暇はないんでな！」

「「「！？」」」

なにやら慌てている二人の妙な雰囲気に、リュウ達は顔を強張らせる。

「何かあったんですか？」

「……シュプケーが王女を連れて落とし穴みたいなので落ちていってね。助けたければ地下まで来いとさ」

「？　王女を連れて……地下……？」

すぐに頭に浮かんだトラウトが言っていた盗賊の魂が置いてあるらしい場所。何をするのか知らないが、この状況で一発逆転を狙ってそこへと向かったのだろうか？　リュウ達はすぐにその結論に達していた。

「じゃあ俺たちも地下へ行き――――」

しかしリュウの言葉は遮られる。

巨大な地響き。

まるで城全体に命の火が灯ったような、まるで城事態が動き出そうとしているかのような、そんな振動が襲ってきたのだ。

「うわわ！？　え！？　じ、地震！？」

「な、何だぁコリャ！？」

二人のフーレン族がその揺れに驚き、二人のハイランダーはハッと顔を見合わせる。

“シュプケーが何かを始めた”

ハイランダーの二人は確信を持ってその結論にぶち当たっていた。

――――――――――

「ウフフ……ついに……ついにこの時が来た……！」

薄暗く、有機的な謎の物体で作られた機械で埋め尽くされた部屋の中。王族ですら知らなかったルートを使い、シュプケーと王女は上から滑り落ちてくるようにそこへ到達していた。長年この城で暮らしてきた王女は、一度として見た事のないその部屋を見渡してそこがどこであるか一つの予想を立てる。

「ここは……まさか地下にあった開かずの扉の先……！？」

王家の棟の地下。それは王族すら入る事の出来なかった場所。扉の鍵さえも何代も前に紛失し、何があるのかも伝わらず長く放置されていた筈のその部屋の中へ、何故シュプケーは入る事が出来たのか。

「ご明察ですわ。まぁ、知らないのも無理はありませんわね。……

フフ、王家は代々この城の素晴らしい機能を恐れて封印し、口伝すら残していないのですから」

「一体あなたは……っ！？」

王女の自分を見る視線に段々と恐怖が混じってきている事を感じたシュプケーは、そのまま自慢するかのように、自分の軌跡をひけらかし始める。

言うなれば、それは全てが偶然だった。

ステンが去り、シュプケーがのし上がる為の土台が出来たという偶然。この王家の棟地下の全てを記した古びた文献と、紛失した筈の扉の鍵を、たまたま倉庫の奥の奥で発見したという偶然。王家が封印したハズの秘密と鍵を何代も昔の誰かが盗み、書き残していたという偶然。そして最近、何かと邪魔だと思っていたトゥルボーを、手駒に変える事ができるあの腕輪を拾ったという偶然。

全ては偶然の積み重ね。そのあり得ないほどの幸運と呼べる偶然が、シュプケーに野望を抱かせた。自分は間違い無く神に愛されている。これほどの偶然を享受できることこそ、その証拠ではないか。ならばその自分は全てを支配してしかるべき。そしてその為の力こそ、この城。

“この城の力を使い、自らが世界の王になる”

「王家はなんと愚かなのでしょう……この城の力……古代の兵器を封印するだなんて」

シュプケーは王女を連れ、ツカツカと二つ並んだカプセルの様な

機械へと近付く。その内の一つがまるで生贄を捧げよとばかりに口を開け、その中には人一人が入れるほどの空間が垣間見える。

「……」

「きゃっ!?」

シュプケーは無機質な表情を浮かべ、そのカプセルの中へ入るよう王女の背中を押す。シュプケーの雰囲気に気圧されていた王女はされるがままに、その中へと入れられてしまった。

「こ、これは!?」

カプセルの口が閉じると内側からウネウネと伸びてくるコードの類が全身に纏わりつき、身動き一つ取れなくなる。かろうじて顔の部分は外から見えるようになっており、そこからシュプケーが何か大きな機械のパネルのような物を操作しているのがわかる。

「城の機能は全部で三つ。それら一つずつに起動の為の“鍵”がありますの。……ウフフ、これでその内の二つが手に入った」

「!?」

シュプケーがパネルの赤いスイッチを押す。そして同時に起こる地響き。城の胎動。現代に蘇る、失われた筈の古代技術。

「残る一つの鍵ももうすぐ手に入る……後はもう用済みさ!」

ーーーーーーーーーーーー

ハイランドの城の棟同士を繋ぐ唯一の石橋は、今まさに崩れ落ちようとしていた。王家の棟の振動が激しくなるにつれ建築材である石にヒビが入り、そして一旦真ん中に亀裂が走ったが最後、真っ二つに折れた石橋は何もかもを重力のままに委ねる。かろうじてまだ意識のある兵も、気を失っている兵も、石橋の上で倒れている近衛と呼ばれたシュプケーの側近達は、等しく皆奈落の底に落ちていく。

「とりあえず、おいらとトゥルボーは地下へ行くよ！」

「ああ。王女を取り返さないとな！」

「あ、おい！！」

レイの静止を聞く事なく、ステンとトゥルボーは王家の棟地下への階段を真っ直ぐに走り下っていった。いつまでも続く地響きは止む気配がなく、むしろドンドンと揺れは酷くなっている。

「レイさんとリンプーさんは、あっちの城に戻ってガーランドさん達と穏健派の人達に合流してて下さい」

「お前は？」

「俺はステンさん達に付いて行きます」

「！　なら、あたしも……」

「いえ、まずはもう陽動とか必要ないので、あの人たちを止めた方がいいと思うんです。……それに何か大変な事になる気がして……」

「「？」」

リュウは自分の昔の記憶を掘り起こしていた。しかしいかんせん最近は大分ぼやけてきているその記憶。こんなハイランドでの出来事で、ここまで大掛かりな事があったかどうか、どれだけ悩んでも出て来ない。

「……あーくそ。……まいいや。じゃ、あっちはお願いしますね！」

リュウは強引に二人へ戻るよう言い含めると、ステン達の後を追って下へ続く階段を駆け出した。

「あっ！　ちょっ！　……っもう！　もう少し何がどーなってるのか教えてくれてもいいのにさ！」

「愉快だねぇ……まぁあいつなら心配ねぇだろ。俺達はおっさん達を止めるとしようぜ」

「……わかったよ」

レイは以外にあっさりと、リンプーはぷうと膨れた顔で納得し、ボロボロに崩れ落ちていく橋の端からもう一つの棟へと跳んでガーランド達の元へ走るのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「扉が二つ！？」

「どっちだ!?」

地下の最奥。王族ですら入ったことのない扉の前で、二人のハイランダーは立ち往生していた。右と左、二つの頑丈そうな扉が行く手を遮っていたのだ。

「ステンさん!」

「「!!」」

「？　……なるほど、二人とも下がってください!」

「ちょっ、リュウ何を!?」

「おいちょっと待て!?」

追いかけてきたリュウは止まっている二人と左右の扉を見て“開けられないのか？”と間違えた方向に理解したようで、適当に右側の扉へと掌を向け、もう片方の手で懐からあんちょこを取り出す。

「ソル・ファル・リ・エータ・リギエンダ!『ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の微よ、我が手に宿りて敵を喰らえ!』【紅き焔】!」

「おわ!?」

「やめ!?」

リュウの手から放たれた炎が弾丸のように扉へと強襲。爆炎と派

手な音を立てて扉はひしゃげ、内側に吹き飛ぶ。

「げほっげほっ……な、なんだこの無茶苦茶なガキは！！」

「ごほっごほっ……ったくリュウってば手加減してよ！」

「……てへ」

「相棒、やりすぎだぜ」

あわや爆風に呑まれるという所で何とか伏せて事無きを得た二人のハイランダー。煤けた二人からリュウに抗議の視線が飛ぶが、当のリュウはどこ吹く風。これ以上抗議しようにも、中から聞えてきた声のせいでスルーせざるを得なかった。

「！　おや、ようやく来たかい。待ちくたびれたよ！」

「ステン！！　トゥルボー！！」

「「「！！？」」」

そこは一面妙な物体で出来た機械で埋め尽くされた部屋。そしてにやけた笑みを浮かべるシュプケーとカプセルのようなものに閉じ込められた王女の姿。

「フフ……今ここで、王女の見ている前で他ならぬお前を殺せば、嘆き悲しむ心のエナジーが強大な力となる。……そして、お前の死は最後の鍵になるのさ！　アタシの為に死にな！　ステン！！」

「！　ステン！　来ちゃ駄目！」

腰に備えていた剣を鞘から抜き、笑みを浮かべたままステンに狙いを定めるシュプケー。カプセルの中から声を荒げる王女。しかしステンは動じない。冷ややかな視線をシュプケーに向けたまま、静かに部屋の中へ足を進める。

「待ってなエルファーラン。すぐにそこから出してやるからさ」

「！」

優しげに掛けられるステンの声。何より渇望していたその声は王女の胸に響き渡る。

「ハッ、随分余裕を見せてくれるじゃないか。だけど、そう簡単に王女を助けられると思うのかい！」

シュプケーはパネルのボタンを叩くように押す。王女の入ったカプセルの前に、薄い膜のような物が発生する。

「あれは！？」

「バリアか何かっぽいですね！」

当然、ステンだけに任せるつもりのないリュウとトゥルボーはその部屋に入ろうとして、しかしそれは妨げられる。

「おっと、この部屋に入っていいのはステン一人だけさ。お前らはそこにいな！！」

続いてまたもシュプケーはパネルを操作すると、今度はリュウと

トゥルボーの前、その部屋の扉があった場所に先程のものよりはるかに強固そうな扉がズドンと上から落ちてきた。

「しまった!?　おい！　ステン！」

「ステンさん!!」

二人の声は完全に扉がシャットアウトし、中の様子はわからない。壊そうとリュウが魔法を使うが全く通用せず、先程のように簡単にはいきそうもない。

そして扉の中では最後の戦いが始まろうとしていた。

「とにかく、エルファーランを解放しな」

「それは出来ない相談ねぇ。なんなら力づくでどうぞ?」

「……おいらは、お前相手なら女でも容赦しないよ?」

「フン、能書きはいいって言ってるんだよ!」

どこか人の神経を逆撫でするステンの対応に焦れ、瞬時に間合いを詰めると上段から真っ直ぐに剣を振るうシュプケー。それは本人の正確とは正反対に、教科書に載せたいくらいの綺麗な太刀筋。

「ふっ!」

ダガーでソレを受け止めるステン。ギリリと刃同士が鳴り合い、両者が肉薄する。

「さっきも言ったけど……カクゴしな。シュプケー！」

「はっ、神に愛されている私が、お前如きにやられるわけがないだろう！」

どこまでも自分を過信するシュプケーは、尚もお手本のような攻撃を繰り出す。ここまでのし上がったのは確かに運もあるが、決してそれだけに頼ったわけではないと感じ取れる程の、堂に入った剣捌き。しかし――――

「なるほど、どうりでトゥルボーを操ろうとするわけだよ！」

「ぐっ……！？」

しかしステンはその上を行っていた。技量の差、膂力の差、判断力の差。シュプケーはそれらの面で確実にステンより劣っていた。懐に入られては小回りの効くダガーのほうが有利。そのような状況に持ち込まれた時点でシュプケーが劣勢になるのは決まっていたのだ。

「くっ……おのれぇっ！」

ステンの巧みな攻撃に押され、パネルのある機械の前まで後退させられたシュプケー。

そんな筈はない……私がこんなヤツに負ける訳がない！　ないのだ！！

追い込まれ焦った人間が狙うもの。それは大抵の場合一発逆転、これさえ決まればという賭けの一撃。そしてそれは多くにおいて、

失敗するのが世の理。純粋な勝負の場面に、そうそう都合の良い偶然が口を挟む余地など……ない。

「終わりさ、シュプケー！！」

「！！」

一突き。

焦ったシュプケーが大きく剣を振り回した一瞬の隙、ステンのダガーは鎧を貫き、その胴に刃を滑り込ませる。……動きが止まる。喉の奥から込み上げる鉄の味。痛みではなくピリッと感じた個所から鮮血が滴る。力が急速に抜けていく感覚に襲われ視界が揺れる。

「が……こ……こん…な……」

「……」

取り落とした剣がガシャンと鳴き、目を見開いて前のめりに倒れていくシュプケー。彼女は最後まで自分の勝利を疑っていない。自分が死ぬなんて、そんな筈がない。自分は世界を支配する。必ず……

「馬鹿なヤツ……」

ステンはそう呟きながらダガーの血を拭って納め、近くにあるパネルを彼女が押していたように操作する。すると王女の入ったカプセルの前にあった薄い膜のようなバリアが消え、入り口の頑丈な扉が上に上がっていく。

「ステン！！」

「ステンさん！」

「ああ、終わったよ」

扉のあった場所で壊そうと躍起になっていたらしい二人にそう声を掛けると、ステンは王女の方に向き直り、カプセルに近付いていく。

「待たせてごめんよ、エルファーラン」

「ステン……」

カプセルの扉をこじ開け、コードのような物をぶちぶちと引き千切り、ステンは王女を抱き抱える。それはまるで、物語の王子様の様で。

「……けっ」

「絵になってんなーステンさん」

「だな」

その光景に不機嫌を極めて明後日の方に目をやるトゥルボーと、生暖かい視線を送るリュウ&ボッシュ。

だが次の瞬間リュウとボッシュの顔が凍りつく。

「！！　まだ生きてる！」

「「！？」」

リュウとボッシュが視界に捉えた蠢く物体。シュプケーはまだ生きていた。息も絶え絶えに機械に寄りかかりながら、パネルのある位置までズリズリと這い上がっていたのだ。

「……だから……詰めが……甘いって……言った……っ」

「！　シュプケー！！」

トドメを刺すべくステンとトゥルボーが飛び掛るが遅い。シュプケーは最後の力を振り絞るように、パネルの大きなボタンを叩く。

ドンッと城が一際大きく揺れ、部屋のあちこちから赤い警告の光が灯る。そして全員の身体にズシリとかかる、大きな重力。

「何を！？」

「……」

シュプケーは機械にもたれたまま答えない。傍目にはもう答える力も残ってはいない。

「何かヤバイ気がします！　とにかく脱出しましょう！　上へ！」

リュウと同様に危険を察し、王女を抱き抱えたステンとトゥルボーは部屋から出て行く。

「……く……くく……」

後に残された部屋の中、赤い光に満たされて、不気味な笑い声が響いていたのを彼等は知らない。

「道……連れ……さ……」

シュプケーが最後に思う事、それはこの城の兵器の力。

一つ、盗賊の魂によって解放されるのは城自体の起動、そして移動を司る浮遊装置。

二つ、王家の者の血によって解放されるのは最強の矛、即ち如何なる物でも防ぐ事の出来ない、城の攻撃装置。

三つ、他者の命によって解放されるのは究極の盾、即ち如何なる物でも貫く事の出来ない、城の防御装置。

王女の力で二つ目を、ステンの死で三つ目を解放しようとしたが最早それは叶わない。もうすぐ自分の命は尽きるだろう。だが私だけ死んでなるものか。何もかもを道連れに、全てをこの世から消し去ってくれる。

恐らく“盗賊の魂”を暴走させればそれも容易いハズ。

最後に押したボタンが浮遊装置のフルドライブだが、通常ならば暴走などまず起きる事はない。……しかし私なら起こす。起こしてみせる。必ず！　何故なら私は……神に愛されているのだから！！

シュプケーは残り僅かな命を使い、王女が入れられていたカプセルの隣にあるもう一つのカプセルに這い進む。それは本来ならば三つ目の解放のための物。他者の命と引き換えに究極の盾を発動させる為の物。

「……フ……フフ……ハハハ……」

カプセルに辿りついたシュプケーは最後に笑みを浮かべる。もう見えもしない目の前に広がる、叫び、嘆き、断末魔を上げる人々を思い描いて。そしてカプセルは、今にも燃え尽きそうな彼女の命を音もなく吸い上げるのだった。

第十一章　11、焼失

急ぎ階段を駆け上がり、王家の棟入り口に辿り着いて見えたものは吸い込まれるほどに綺麗な青空。穏やかな日の光を遮る無粋な障害物など何一つ無く、遠くの山々やケルベラス大樹林が一望できる絶景が目の前に展開されている。

「おおお！？　し、城が飛んでるぞ！？」

「こりゃやばいね……」

眼下に見えるはハイランドのもう一つの棟。まだそこまで高いわけではないが王家の棟はモノの見事に浮いていた。いや、浮いていると言うよりは、現在進行形で上昇し続けていると言った方が正しい。

「とっとと降りましょう！」

シュプケーは死んだが、気になるのはあの女が最後に押したボタン。雰囲気と状況からしてお約束っぽく自爆ボタンだったりしたら洒落にならない。もしここが地上のままだったら何とかして止める所だが、おあつらえ向きにここは上空、しかも上昇し続けているなら尚の事好都合。とっとと脱出、後は野となれ山となれ。爆発四散するならしてしまえ。

リュウはそんな事を考えるとトゥルボーを無理やり背負い、王女を抱えたステンをさらに抱え、浮遊魔法を使って城から飛び降りた。リュウが空を飛べると知らないトゥルボーは取り乱したが、普通にふわふわと降りている事にすぐに気が付いて押し黙る。途中ボッシ

ュが背中から“潰れっちまう！”と抗議の念話を送るが華麗にスルー。

「！　みんな無事だったみたいですね」

徐々に近付いてくるもう一つの棟の屋上には、穏健派のハイランダー兵達と城に攻め入ったメンバー全員が集合していた。全身埃まみれで、薬草が足りなかったのかあちこちに多少の怪我が見受けられる第一陣の四人。傷こそあまり負っていないものの、かなり疲れた風な気配を伺わせる第二陣の四人。そして残り二人のフーレン族は片方は溜息、もう片方は元気一杯にリュウ達に向けブンブン手を振っている。

「やれやれ、随分大事になっちゃったねぇ」

「まぁ終わりよければ全て良しってことで」

城内を二分していた勢力の内、片方の頂点にいたシュプケーは討伐、残りの兵達も大半が壊滅状態。これではもう建て直しは不可能。城の実権は王女率いる穏健派が握るだろう。

そんな感じの他愛ない話をしつつ屋上に降り立ったリュウ達を、やれやれと迎えようとしたガーランド達。しかし彼等何かに気付いて足を止め、再び宙を見上げていた。

「？　どうかしましたか？」

全員が全員上を見ている事に釣られ、自分達が出てきた城を振り返ると、リュウ達に戦慄が走った。そのままはるか上空へと消えていくか、もしくは爆発するのだろうと思われた城が、何か薄い紫色

の幕のようなもので覆われていたのだ。

「な、何だありゃ!?」

真っ先に怪訝な声を上げたトゥルボー。同じ感想をリュウ達も抱いていたが、城の兵である彼が知らない物が、リュウ達にわかる道理はない。

「!……モモ、大至急あれを解析して!」

「え?　あ、りょーかい。ちょっと待ってー……」

紫色に包まれた城に妙な雰囲気を察したゼノは、モモに調査を依頼する。スカウターのような道具を取り出し、照準を上空の城に合わせて何かしらピッピと計測しては、手元に持つ電卓のような機械で計算を始めるモモ。次第にその顔からはいつもののんびりとした表情が消え失せていった。

「……これは……」

「どうしました?」

「その……言い辛いんだけどー……」

「おい、いいから早く言えよ!　ありゃ何が起きてんだ!?」

声を荒げるレイ。ゼノだけでなくその場に居る全員があの空に浮かぶ紫色の物体に言い知れぬ不気味さを感じ、モモが渋るその解析結果を聞こうと耳を澄ませていた。

「えっと……あれ、多分“盗賊の魂”のエネルギーを増幅させて作り出していると思うんだけど、尋常じゃない出力の魔法障壁みたいなの。……ううん、魔法障壁じゃ生温いかしら。言ってみれば魔法障壁を越えた、“超魔障壁”って所ねー」

「超魔障壁……」

人が持つ魔法で最強の障壁を作り出すモノといえば『最強防護』という魔法がある。１０個の連なった強固な対魔法・対物理防御力を誇る魔法障壁を作り出すのだが、それはあくまで人が作り出せ得るもの。モモが言う“尋常じゃない出力”と言うほどではない。

「それにー、あの障壁の向こうにすっごいエネルギーが溜まってるみたいで……多分盗賊の魂の力が暴走でもしてるんじゃないかしらー？」

「……つまり？」

「……つまり、あれは大きな爆弾みたいなモノってこと」

リュウの質問にさらりと答えるモモ。紡ぎだされたその情報は、戦勝ムードだった穏健派の兵達も巻き込んで、周囲を急速に冷ましていった。

「ま、まぁでもあれだろ？　あの城が落ちてきたりしなけりゃ別に問題は……」

ランドが場を和ませようとそんなセリフを口にする。そして、それを聞いたリュウは思いっきりあっちゃー、といった顔をした。この場合、間違い無くそのセリフはフラグだと、他の誰にもわからな

い突込みをリュウは心の中で入れていたりする。

「おい……言った側からアレ、落ちてきてねぇか？」

レイが呟いた言葉を誰も否定しなかった。先程まではそれなりの速度で遠ざかり、遠近法によって確実に小さくなっていったその城の大きさが、一定の大きさから全く小さくならなくなり、そしてゆっくりではあるが徐々に大きくなっているように見えたからだ。リュウにとってはこの上なく案の定である。

「！　まさか……シュプケーなのか！？」

「まだ生きてやがったのかあいつ！？」

ステンとトゥルボーはあまりにも自分たちを狙ったようなタイミングで起きた為、同時にその可能性に思い当たる。そうだ、最後にヤツに言われた言葉は――――

“詰めが甘い”

まさか！？

その場に居る全員の顔に緊張が走るのだった。

シュプケーが道連れを願って浮遊装置を全開にした事は、結果としてその願いを叶える最後の偶然に繋がる事になった。

長年放置されていた城の浮遊装置、そのエネルギー伝達回路は、

長い年月により耐久性能が限界に来ていた。シュプケーが装置をフルドライブに入れたことで伝わるエネルギーが一気に増え、その影響で経年劣化を起こしていた回路が焼き切れてしまったのである。結果、盗賊の魂から尽きる事無く供給されるエネルギーは行き場を失い、ドンドンとその装置の中に溜まっていく事になったのだった。

最後の最後に起きたそれは本当に偶然なのか、それとも機械と一体化したシュプケーの執念が回路に影響を及ぼしたのか、真相は定かではない。シュプケーの死によって城の3つめの要素である究極の盾、城を取り巻く紫色のバリアを発動し、しかし内に篭ったエネルギーは浮遊を行う力に変換されず。膨大なエネルギーを溜め込んだままの城は、落ちるしか道はない。

「負傷のない兵を集め、あの城へ集中砲火をかけよ！」

城が落下してきていると理解した王女は、すぐさまその場に集まっていた穏健派の兵に向けて号令を出した。兵達は機敏な動作で備え付けられていた火薬の大砲や魔法の大砲の砲口を上空へ向け、一斉射撃。怒涛の砲撃が次々に城を取り巻く紫色のバリアへと直撃していく。

「……」

辺りに響く連続した砲撃音、立ち込める硝煙の匂い。上空の城は爆炎に包まれ、それがタダの王家の棟であったなら確実に粉微塵になっているほど。しかし兵の誰もが不安に満ちた表情でそれを見上げていた。“超魔障壁”だなんて過大すぎると思いつつ、どこかにそれが本当なのではないかと恐れる気持ちがあったからだ。

そして大規模な砲撃が止み、その場の全員が固唾を飲んで見守る

中、爆炎の中から姿を表した城は――――全くの無傷だった。

「効いていない！？」

「そんな……！？」

砲撃を行っていた兵達はそう声を上げ、驚愕と落胆に包まれる。

悪い意味での予想通り、モモが“超魔障壁”とまで名付けたそれが、そんな簡単に壊せるような代物ではないと薄々わかっていたことを再確認するだけに終わる結果だった。

「やっぱり……あれは“壊せない”わ」

「「「！」」」

「少なくとも、私の知るこの世界の人や物で出せる力を完全に超えているもの。あれを壊す術なんて、ないわ」

「「「……」」」

絶句する一同。破壊は不可能、つまり自分たちはアレが落ちてくるのを指を咥えて待つしかないと言う事になる。

「それと、多分落ちてくる頃には暴走も臨界に達する筈よー」

この上まだ良くない情報があるのか、もう止めてくれと言う視線を真っ向から受け止め、さらにモモは続ける。

「臨界？　って爆発するってこと……？　今から逃げて間に合う？」

「無理ね。多分、この大陸の……半分は消えるくらいの規模になるわー」

「「「！！」」」

要するにアレは空に浮かぶ超巨大な時限爆弾、今この場を逃げたとしても落ちてきた時点で爆発しアウト。そんな短時間で大陸を離れる事など出来る訳がないし、この大陸に住まう人々を見捨てる事になる。そんな事を許容できる筈もないが、しかし障壁を何とかできない以上どうしようもない。

「……打つ手なし……か」

「そんな……こんなことになるなんて……」

「「「……」」」

ガーランドは紫色の物体を見上げて拳を震わせ、王女の嘆きに誰も励ましすらできない。それは即ち、シュプケーの怨念の勝利とイコールであり、その最後の願いが叶ったも同然。勝利どころか負け戦。しかも最後の最後でとびっきりの絶望を味わわせて。

「……手ならあります」

「「「！？」」」

しかし誰もが希望を手放すところ、たった一人、異を唱えた者が居た。

「……リュウ」

それは青い髪の少年。

「手って……どうするのさ!?　だってあの城が落ちてきたら逃げ場なんてどこにもないって……」

「幸いまだ落ちてくる速度はそんなに早くないみたいですから、今のうちにもう一度城の中に入って“盗賊の魂”を装置と切り離すなりして暴走を止めて、それからあの城を破壊する。……で、順番合ってますよね？」

「「「……」」」

確かに順序は合っているが……一同は再び絶句した。こいつは何を言っているんだ？　それが不可能だから絶望しているんだろうが。そんな空気が辺りを包む。

「あの障壁が見えないのか？　お前……気でも触れたか？」

最初に我に返ったトゥルボーが呆れたような言葉をリュウに掛けた。それに対しリュウは落ち着き払った様子で事も無げな表情を見せる。

「俺は至って正常ですよ」

以前にも何度か似たような場面で自分の精神を疑われた事があり、その度に同じようなセリフを吐いてる事を思い出してクスリと笑うリュウ。この状況で笑うなど、傍から見ればトゥルボーの言う通り、気が触れたようにしか見えない。

「……リュウよ、確かにお前は強い。それは認めよう。だがそれでもアレをどうにか出来るとは思えん。無茶だ」

ガーランドはリュウの力量を正確に測り、冷静にそう述べた。

「どうですかね？　俺はできると思いますよ？」

「……」

「ボッシュ」

「おうよ」

ポーチから白いフェレットがピョンと跳ね、青い髪の少年から距離を取る。鰐の獣人の言葉も少年を思い留まらせるには至らない。そしてリュウは一歩二歩と前へ出る。

この場にいるみんなを死なせたくはない。自分だって死にたくない。なら、やれる事をやろう。そしてアレなら多分出来る。それだけの力がある。今考えれば城から脱出する時だったらまだ何とか出来た筈。それを見逃した俺のミス。だからこれは俺の仕事。

一人進み出るリュウを誰も止められなかった。止めた所でこの場を何とかする術があるわけではない。それにリュウから滲み出ている自信。例え誰にも砕けぬ障壁だろうとも俺にはできる。例え無茶だ無理だと言われても、俺にはできる。そんな有無を言わせぬ自信と、決してハッタリではない何かが、リュウを止めようと言う気持ちを封じ込めていた。

そしてリュウは自分の中に語りかける。自らの内面に浮かび上が

るスイッチ。同時に足元から吹き上げる火柱のような赤いオーラ！
太陽にも負けない光が周囲一帯を染め上げる！

「ハァァァァッッ！！！」

「「「！！」」」

強烈な閃光と共に小柄な少年を包んでいたオーラが弾け飛び、同時に猛烈な風が吹き荒れ、その場に居るものは目を閉じる。そしてそれらが収まった頃、開いたその目に映ったのは、青い髪ではなく白い髪、真っ赤なオーラを吹きだす背中の突起物、両手両足が竜のように変化し、少年の面影が全くない半人半龍の姿。

ドラゴナイズドフォームがそこに降臨した。

「「「……」」」

その姿を始めて目の当たりにしたリンプー、ランド、ステン、サイアス、タペタ、リンはまるで別人のような圧倒的な威圧感を放つそのリュウの姿に、一様に同じ反応を示していた。

即ち、唖然。

「お前のその姿が強えってのは知ってる。だがそれでもアレをどうにかできるとは……」

実際に変身したリュウの鬼神の如き強さを見たことのあるレイだが、それでもその力があの障壁を打ち破れるとは思えない。そんな

感想を抱いたのはレイだけではなかった。

「……俺もレイと同じ意見だ……」

「……」

ガーランド、そしてゼノ、アースラ、モモも同じ反応。特にその傾向が顕著なのはモモだ。それは以前ドラゴナイズドフォームのリュウをうっかりスカウターで計測し壊してしまい、新たに作り直したそれでリュウを見た事が原因だ。

つまり、ドラゴナイズドフォームを持ってしてもあの城の紫の幕は越えるのは不可能だ、と彼等彼女等の顔には書かれているのだ。

「……とりあえずやってみますよ」

リュウは両腕に龍の力を込め、上空の城に掌を向ける。それは大砲の砲口よりはるかに小さく、そして集う力は大砲以上。

「ウオォォォォッッ！！」

凝縮された龍の力の熱線、Ｄ－ブレス。リュウの両腕から放たれた青白く輝く極光が、薄い紫色のバリアと激しく衝突する。

「……っ！」

小さな砲口から発せられた、大砲など足元にも及ばない威力を誇るその極光。しかし光が止んだあと、そこには無傷のまま依然ゆっくりと落ちてくる城の姿があった。

「おーう、駄目みたいですね」

「……」

イマイチ暢気なタペタ。その事実はリュウの肩に重く圧し掛かり――――はしない。

「……」

リュウは全く気落ちしていなかった。実際リュウとしてはある程度折込済みではあったのだ。最強の障壁、仮にも超魔障壁とモモが名付けるほどのそれが、あっさりＤ－ブレスで片が付くとは思っていない。そして、そうならば次こそ本番、今度は今以上の力でぶつかってやる。

自分にはそれを可能とする『竜変身』があるのだから。

「じゃ、ぶっ壊してきますよ！」

「「「！！？」」」

後ろに居る共に戦った仲間達とハイランドの全員に向け、そう言い放つリュウ。今の凄まじい攻撃だって防がれて、その自信に根拠なんて全くないハズなのに、何故か期待せずにはいられない。そんな気持ちが全員の胸に生まれていた。

リュウは自分のさらに奥深くへと意識を巡らせ、呼び覚ます竜因子（ジーン）を選択する。強固な障壁、小細工はいらない。今必要なのはそれをぶち壊すだけの、力。

【パワー】力

【トランス】覚醒

解放したジーンが体内で深く共鳴し、形態の強化を促していく！

「でぇぇぇやあぁぁぁぁぁ！」

「「「！！？」」」

上空からリュウへと飛来する紫苑の雷。轟音と共にリュウにぶつかったそれは漆黒のドームを形成してリュウを包み込んだ。ドームの表面には緑色の魔法陣が浮かび、バチバチと火花が散っている。一回り小さいそのドームがフッと空中へと浮かびあがると、徐々に表面にひびが入っていく。

ウ　オ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　ォ　！　！

「「「！？」」」

そこに現れたのは一見するとドラゴナイズドフォーム。しかし細部は異なっていた。背にはバーニアではなく蝙蝠のような翼、腰からは爬虫類を連想させる尾が生え、表皮の色は朱に近く頭髪は白でなく薄い黄、そして成人を思わせる長身。

それは半人半龍ではなく、完全な「人型のドラゴン」。“ウォリア”と呼ばれるパワーを重視した形態の、さらに上位の形態“ウォリアセカンド”である。単純な力、と言う意味では他のドラゴンの

追随を許さない、まさにパワーそのものの具現化した姿。

「……」

宙を舞ったまま目標をしっかり見据えると一対の翼をはためかせ、高速で空の城へと突っ込んでいくウォリアセカンド。その眼の前に立ちはだかる、全ての攻撃を跳ね返す超魔障壁。

「ウラァァァッ！！」

勢いに乗せて拳を突き出し、ウォリアは迫る。他には何も必要無い。それだけでいい。それだけで十分。

高速のウォリアと紫色のバリアがぶつかったと思ったその瞬間、パリンッと一筋の軽い音を立て、バリアは砕けた。

「……嘘……だろ……」

「あり得ない……」

呆然とするレイとモモ、そしてそれ以外の全員。開いた口が塞がらない。

どんな生物、物体にも貫く事は不可能とされたハイランド城の究極の盾、超魔障壁。それを正面から、強引に、何の小細工も用いず、たったの拳一つで打ち破って見せたのだ。過去の英知、古の科学技術、オーパーツとも言えるゴースト鉱の結晶。その全てがたった一人のドラゴンに叶わなかった瞬間。

それは奇跡でも、ましてや偶然ですらない。固い壁にその耐久能

力を超える威力の攻撃を加えた結果。単なる力技。しかし破った事は紛れもない事実。

「っと、この辺りか」

障壁を拳一つで容易く突破し、その内側で暴走するエネルギーをものともせずに城内部へと辿り着いたリュウ。目標は地下。あの時入らなかったもう一つの部屋に、恐らく“盗賊の魂”はあるだろう。

「……」

バチバチと荒い音を立てて肌を撫でる火花、生物を寄せ付けないエネルギーの海。だがそれらは障害になどなり得ない。平然と、悠々と中を進んでいくリュウ。地下の扉の前に立つと、リュウはその扉に手を掛け――――無造作に捻り切った。

「……！　……あった」

溢れるパワーに任せ、鉄の扉をまるで飴細工か何かのように千切って放ると、その向こうには妙な装置の中心で耀き続ける丸い物体。警告のブザーが鳴り響き、しかしウォリアは止まらない。暴走するエネルギーがなお強烈に肌を撫でるも、あくまでウォリアにとっては撫でる程度。圧倒的に力不足。

「……よっ……と」

保護している透明なケースのような物を軽く引き裂き、エネルギーを放出しつづける盗賊の魂を機械の中心からかっさらうように手に取るウォリア。その時、何かが切れたように城がガクンと揺れた。それは動力源を奪い去られた城の最後の嘆きか断末魔か。

「……よし」

リュウはそれを片手にしっかり握ると、狭い地下室で翼をはためかせ、天井をぶち抜いて城の上階へと飛んだ。

「あとは……」

少し広めの部屋に出たリュウは大きく息を吸い込み、体内に龍の力を集中させる。どうすればいいのかはわかっている。力を集め、それを一気に解放するだけ。

「ハァァァッ！！」

ウォリアの全身から光が放たれ、それは輪となって全包囲に向けて放射される。建築材は何の抵抗もなく貫かれ、広がりゆく輪は城を飛び越え、空に咲く一輪の花火のように広がっていった。

それは“オーラバースト”と呼ばれるウォリアのドラゴンブレス。凝縮した龍の力を自分を中心に全方位に向けて叩きつけるものである。

「オラァァッ！！」

崩壊に次ぐ崩壊。次々に放たれる“オーラバースト”による城の蹂躙は留まる所を知らず、城の中から幾度も輪のような龍の力が拡散する。時には真横に、時には垂直に、力を失った無人の城は、その荒れ狂った「力」に抗うことなどできようはずもなく、原形を無くして砕けるばかり。

障壁を発生させていた装置――シュプケーの亡骸を抱く地下の装置はその余波を受け、無残にも完膚なきまでに破壊される。そして装置の破壊により、城を覆う究極の盾はあっけない最期を遂げていた。

「「「……」」」

地上に居る者たちは、夢でも見ているかのような呆けた表情をしていた。唖然呆然、桁が違うと言ったレベルではない。城を砕いて広がる花火を、ただただ見ているだけだった。

「……」

一通り城の内部を破壊し、しかし腐っても城ではあるのかまだ一応の形を残す王家の棟。落下のスピードは徐々に早まり、地上へと到達するのは最早時間の問題という状況。

リュウは再び翼を操り城を飛び出て宙へと身を躍らせると、そのボロボロの城と同じスピードで落下しながらポツリと呟いた。

「……しぶてーなぁ」

パワー重視のウォリアの弱点、それは大きさ。対人、対モンスターならばとっくに決着は付いているが、こう言った大きすぎる物体相手には手に余るのも事実。

「ま、最後まで面倒見ないとね……」

リュウはウォリアセカンドへの変身を解き、再びドラゴナイズドフォームへと戻る。襲ってくる疲れを高いテンションで抑え込み、

手に持っていた盗賊の魂をドラゴンズ・ティア内部に収納すると、もう一度己の中へと意識を巡らせた。そして目覚めさせる竜因子（ジーン）を選択すると、その力を解放させていく。

【フレイム】炎

【シャープ】特徴強化

【グロース】能力強化

そして

【イグニス】火飛竜

かつての【アクエリアス】とは相反する炎の力を強く引き出し、リュウは叫える。

「でぇぇやぁぁぁぁぁぁあ！！」

2度目の轟音。落雷がリュウへとぶつかると、その周囲に漆黒のドームが広がる。先程のものよりはるかに大きいそのドームの表面には緑色の魔方陣が浮かび、脈動するようにバチバチと火花が散っている。

「「「！？」」」

奇妙な縁でリュウと知り合った仲間達は、再び見ることになったそのドームにまたも目を奪われていた。これから何が起こるのか、リュウは何になるのか、唖然としたままその光景に見入っていた。

ヴォォォォォォォォォォォォォ！！

「ド……ッ！？」

「ドラゴン……ッ！？」

それは誰とも知れぬ呟きだった。宙に浮かぶ一頭のドラゴン。さっきの姿はまだ人の形を成していた為、それが何なのかはよく認識できていなかった。しかしまさか今度はドラゴンになるとは、その場に居る誰もが想像だにすらしていなかった。

≪さて……≫

茶色がかった身体を揺らし、凶悪な眼で城を見つめる飛竜。その姿はかつて火山を止めた「水飛竜（ジャバウォック）」と対を成す、「火飛竜（ジャブジブ）」と呼ばれる形態である。

徐々に落下するスピードを上げていく城を上から見下ろす飛竜。その凶悪な口が開き、目の前の城に照準を合わせる。

≪……これで……終わり……！！≫

リュウは溜める。体内を巡る炎の力を。肺かわからない個所で吸い込んだ息と混ぜ合わせ、膨大過ぎる熱量に変換していく。

≪ジャブジブのドラゴンブレス、ギガ＝フレイムッ！！！≫

――――そして、炎が放たれた。

それはあらゆる物を燃やし尽くす地獄の業火。リュウの放ったブレスの一撃は、崩壊し落ちゆく巨大な城を、容易くその奔流に飲み込んでいく。

木材、石材、ガラス、鉄骨、そして古の機械の残骸達。城を構成するありとあらゆる物質がその膨大な熱量に抗えず、灼熱のブレスにより文字通り灰塵と化していく。シュプケーの怨念も度重なる偶然も何もかもを、分け隔てなく、全くの平等に焼き尽くしていく炎の宴。

≪……ふう≫

数瞬前までは確かに城だった物体。それが今は見る影も無く黒ずんだ塵と化し、ボロボロと崩れ風に流されながら、しぼみきった風船のように堀の中へと落下していく。

「「「……」」」

「……愉快だねぇ……」

キッチリ始末を付けた事を確認して、大きな翼をはためかせながら残った城の屋上へ降りてくる飛竜。炎の名残で肌がひり付き、なお唖然とする全員を代表するように、レイはいつものセリフを呟くのだった。

第十一章　12、炎の吐息

その後、巨大な飛竜に変身していたリュウは残った城の屋上に着くと、力尽きたように元の姿に戻り、ポテッと倒れてしまった。その場にいた面々は呆然としながらも取りあえずそのままでは不味かろうと言う事で、ハイランド兵以外のメンバーも合わせて城の無事な部屋へ案内される運びとなったのだった。

町へとトリニティ探索に出ていた強硬派の兵達は、トラウトからの伝令で戻ってくるや、ちょうどいいタイミングで巨大な飛竜が城を焼き尽くしている場面に出くわしていた。あわや一悶着あるかとなったが、王女が語ったシュプケーの野望の全容、そして真摯に説得に当たった穏健派の兵と正気に戻ったトゥルボーのおかげで、ショックを受けながらも現状を受け入れていた。

こうなった以上、穏健派も強硬派もまだいくつかわだかまりがあるにせよ、再び国家を守る兵として一丸となっていくだろう。ハイランドの歴史上他に類を見ない規模にまで発展した今回の騒動も、何はともあれ一応の区切りがついたわけである。

ちなみにガーランド達は暴れていたとは言え、一応城内の強硬派の兵達を殺したりはしておらず、全てが終わった後は負傷した兵の手当てに積極的に参加していたりする。

そんなこんなであっという間に時刻は夕刻。

まだまだ瓦礫や破壊の痕が目立つ城の内部は、あれだけの争いが嘘のようにシンと静まり返り、耳を澄ますと至る所から穏やかな寝息が聞えてきていた。

まるで城そのものが戦いに疲れて寝ているかのような穏やかな時間は、日が沈み、一周して再び顔を覗かせるまで続いたのだった。

そして翌日。

既に兵達は起きだし、復興に向けてにわかに活気付く城内。王女が直に命令を下していると、リュウに対して“あれだけの事が出来るのなら、王家の棟を崩壊させずに何とかする事も出来たのではないか”と、後になってから無責任に言い出す輩が出てきていた。

しかし王女はそれらを全て、一言で切って捨てる。

曰く、「あの城の装置はこれからの世には必要無いからあれで良かったのだ」と。

王女にそう言われてしまえば誰も反論などしなかった。意外とあっさり引いたその手の連中だったが、実はそこにもリュウの行った行為が多少なり関係していたりする。

実の所生き残った強硬派の兵士達や町から戻ってきた兵達も含め、ほぼ全ての兵があの圧倒的過ぎるドラゴンの力を見て、“戦う”という行為自体にどこか馬鹿らしさというか空しさのような物を感じてしまっていたのだ。それが良いか悪いかは別として、とにかくこれからのハイランドという国が戦いに傾倒する事はなくなるだろう。

「ステン……やはり行ってしまうのですか？」

「……」

「何とか言えよこのモンキー野郎！　姫様はずっとお前を……っ！」

「……良いのですトゥルボー」

「ッ！　ですが……」

「……悪いね。エルファーラン」

「いえ、構いません。いつか戻ってきてくだされば、それで……」

「ったく何でお前みたいなヤツを……」

一通り指示を出し終えた城の上階では、正気を取り戻したトゥルボーとステンが王女を交えてなにやら真面目なお話中。ステンは城に戻る事を選択せず、まだしばらくは気ままな生活がしたいと言い、王女は胸の内を明かす事無く、それを笑って送り出す。歯がゆい感情を表に出すトゥルボーに謝りながら、それでもステンは思う。きっといつか必ず帰ってくるだろうと。

「あ、おはよー」

「む……」

リュウが運ばれた部屋の前で鉢合わせしたのはガーランドとモモ。二人ともリュウからあの姿について話を聞こうと思い、この部屋の前にやってきていた。

「もう起きてるかしらねー？」

「……そろそろ起きて貰わないと困るがな」

一応今回共に戦った仲間である二人。なんとなくお互いどういう人間か理解してはいるが、モモはともかくガーランドは進んで話すタイプではない。そのまま無言で居るのもなんなので、取り合えず用がある目の前のドアをノックしてみる。

「「……」」

が、反応は返ってこない。まだ寝ているのかとガーランドがドアノブに手を掛けた瞬間、中から何か声が聞える事に二人は気付いた。

「う……くっ……ボッシュ、お願いだから……もうちょっと……優しく……」

「おいおい相棒、これでも十分優しくしてやってんじゃねぇかよ」

「「！？」」

何やら中から聞えてきたリュウの悩ましげな声とボッシュの少し呆れたような声。何か気になってドアノブを回す事を忘れ、さらに聞き耳を立てる出歯亀二人。

「あっ……いっ……痛ッ！　待ってこれ以上はマジで痛いって……！」

「あぁん？　……男は度胸、何でも試してみんのさ！」

「ちょっ！？　アッーーー！！」

「「！！？」」

聞えてきたアヤしげな会話にいったい何をしているのだ！　と盛大にドアを開け放つガーランド。その脇から何故かどこかワクワクしているモモ。そして踏み込んだ彼等が見たものは……

「……お？　よぉおめぇら」

「ボッシュお前……後で……覚えてろ……」

「「……？」」

貸し与えられたベッドの上に突っ伏し、背中や腕、足に至るまでびっしりと湿布を貼られて喘いでいるリュウとちょうど最後の一枚を貼り終えたらしいボッシュの姿だった。考えてみれば当たり前の話。直前に聞えてきた会話で何かヘンな事を想像した人間がいるとしたら、その人はきっと心が汚れているのではないだろうか。

「……コホン」

モモは目をそらした。

「……どうしたのだ？」

「おう、見ての通り相棒は全身筋肉痛なんだとさ」

「……こんな感じで動くのがやっとっす……」

ギギギッと油が切れたような緩慢な動作で腕を動かして見せるリュウ。それだけの動作なのに顔をしかめ、心底辛そうである。

「「……」」

ノリでやったとは言え、二連続の竜変身による反動はリュウの体に凄まじい疲労を残していた。それが祟ってこの有様である。駄目押しの“ジャブジブ”はやらない方が良かったかな、と乱暴に湿布薬を貼ったボッシュを恨めしげに見ながら少し後悔しているリュウ。

「……」

「……」

昨日の凄まじい迫力だったあの光景とはあまりにかけ離れた情けない姿を見て、早速“あれは何かの見間違いか何かだったのか？”とモモとガーランドは微妙に首を傾げていた。

＊

2，3日自分たちが壊した個所の修理や負傷した人達の手当て（主にリュウの治癒魔法で）を行い、ちょうど後始末もついたということで、リュウ達はハイランドを後にする事にした。色々とあったこの国ともお別れである。

余談だがハイランド城はそのままではバランスが悪いので、今までの王家の棟に変る新たな棟を建設することになったらしい。

「……いいんですか？」

「ん？　……まぁいいじゃない。ウキャキャ」

ステンはやはり城に残るつもりはないらしく、リュウ達と一緒に城から出て来ていた。ぞろぞろと歩く総勢１２人の集団。なんだかんだで忘れそうだったが、本来の目的はモモに腕輪捜索の協力を依頼する事なのだ。

「まぁた結局リュウに助けられちまったよなぁ……」

「まぁお気になさらず」

歩きながらボヤくレイに突っ込むリュウ。そんな感じでダラダラと歩いていると、突如その隣をピョコピョコ歩いていた虎耳の彼女が一歩前に踊り出ると、全員を見渡すように振り向く。

「ね、ね、みんなさ、一緒に来ない？　今回みたいにさ、大勢で居るのも楽しいよ？」

ゼノ達やガーランド達が気に入ったのか、一緒に行動しないかと勧誘を始める元気一杯虎娘。すでに彼女の中ではランドやサイアスは普通に仲間として認識されており、ここぞとばかりに勧誘にひた走る。

「……迷惑ではないのか？」

「……おいおいおっさん、まさか付いてく気じゃねぇだろうな？」

意外にも乗り気らしいガーランド。彼はリュウがあれほどの力を持っているのにそれを決して暴力として使っていない事に興味が湧いていた。それに自分の武者修行にもここへ来て若干の停滞感を覚え、リュウの所属するという“紅き翼”とやらに接触してみるのもいいかと考えたのだ。

「お前は嫌なのか？」

「いや俺は別に……どっちでも……」

こうして大勢で集まるのは得意ではないが、少し楽しいと感じたのも事実。レイは戸惑っていたが、本気の拒絶は出てこない。

「……ねーリュウ、迷惑かな？」

「え？　あーいや俺は構わない……と思いますけど……」

「じゃ、けってー！」

「私達には聞かないのですか？」

「え？　だってあなた達は付いてくるんでしょ？」

「……」

どうやらモモを借りると言う事が、リンプーには何故かトリニティ丸ごと一緒に行動すると脳内変換されていたらしい。実の所、ゼノ達も自分たちが軽々と依頼を受けたりしなければ、今回の騒動も起きなかっただろうと少しばかり責任を感じており、何となくリンプーの申し出に反対するほどの気力が起きなかった。

（うーむ、何か段々話が変な方向に……）

その様子をギギギっと見ながら内心で一番戸惑っていたのは他ならぬリュウであった。何やらリンプーはチームでも作ろうとしているかのような勢いだ。しかし自分は“紅き翼”に属しているわけで、この場に居ては自分もそのチームに普通に数えられかねない。

もう入れられているような気がするが取り合えず考えないようにしておき、なるべく話掛けられない様にさりげなくドラゴンズ・ティアからテレコーダーを取り出し、連絡を取るフリをしたりして、小賢しくちょっと距離を置こうとするリュウの図。

「よーっし、じゃあみんな一緒にこれから動くんだし、なんか名前つけよーよ！　カッコいいやつ！」

（……ホラ来た！）

楽しそうにそう言い放つリンプー。なんだかんだ文句を言いながら何故か真面目に考え出す１１人。ゼノ達は自分たちはあくまで協力するだけですから、と言いつつ結構そういうのが好きだったりするのだ。

予想通りの行動にリュウはどうしようと必死に頭を回転させる。集まった面子を見回してみれば、とあるチーム名がぽやぽやと浮かんでくるが、それは頭の片隅に追いやって思考する事数秒。

「ねー、確かリュウが入ってるチームって“紅き翼”って言うんでしょー？」

「え？　あ、はい……」

電話するフリが見破られているのか、それとも電話していようがお構いなしなのか、大声で話し掛けてくるリンプーに思わず答えてしまうリュウ。

「それって何から取ったの？」

「あーそれは……その……」

何となく眼を逸らす。自分の変身後の姿から取ったんですよ、なんて言うと、それに倣って名付けよう的な話になり、自分が中心に祭り上げられてしまうような気がしたからだ。

「そいつぁな、相棒が変身したドラゴンから取ったんだぜ」

「へー」

「ちょ！？　ボッシュ！？」

しかしボッシュは空気を読まなかった。いや、むしろこの場合リュウが空気を読んでいないのか。ボッシュとしてはまぁ楽しければ良いのだ。

「なるほど、確かにあの姿にあやかろうと言うのはわかるな」

「おーう、ではそのように名前を付ければ良いですね」

「でもよ、竜とかドラゴンってそのまんまじゃあんまりセンスねぇよな」

ガーランドにタペタ、ランドまでもが何故か真面目に考えている。ポツンと一人輪から外れて仲間ハズレなリュウ。その間も何とかチームの結成は阻止しようと頭はフル回転。

「ん～なんだろ、ドラグナー（竜の騎兵隊）とか？」

「あんまり強そうじゃねぇな」

「じゃー、タイガー&ドラゴンなんてどうだろ！」

「タイガーは俺とお前しか指してねぇだろ」

「む～……じゃ、チーム５Ｄ’ｓ！」

「いい感じだがパクリの匂いがする」

（……チクショウ隙がねー……）

口を挟もうにも輪から外れているためタイミングが掴めない。賢しい作戦が裏目に出てしまった事を舌打ちしつつ、ついつい聞えてくるチーム名候補に対して脳内であれやこれやダメ出ししてしまったり。あーでもないこーでもないと盛り上がってるチーム名発表会に段々と少しずつウズウズしだし、とうとうリュウの独り言が炸裂した。

「……そこは“炎の吐息（ブレスオブファイア）”だろやっぱり……」

「「「……」」」

「あ」

タイミングがいいのか悪いのか、思わず口を突いて出たリュウの独り言は、何故か会話の谷間、しーんとしていた空間にやけにハッキリと染み渡った。

「……いいなそれ」

「うん！　何かカッコいい！！」

「なるほどな、“紅き翼”に対して“炎の吐息”とはなかなか洒落ているな」

「確かにあのブレスを思い出すと、それ以上の物はないかもねー」

（しまった！）

何で今だけ全員黙ったんだよ！！　と自分の間の悪さ？を全力で嘆くリュウ。しかし最早後の祭り。

「よーし、それじゃリーダーはリュウね！」

「ぶっ！？」

「「「賛成！」」」

「何で！？」

（誰か反対しろよ！！）

一応紅き翼の一員であるのにそんな集団のリーダーなんか兼業できるわけがない。必死に断ろうとするも11対1という数の暴力で責められては分が悪い。押し負けるのは時間の問題。というか既に決定したも同然である。

「マジかよ……」

「難儀だなぁ相棒」

「お前も困れよ」

「ナギっこ達なら話せば通じんじゃねぇの？」

「他人事みてーに……」

こうなったらナギ達に極力会わず、騙し騙しお茶を濁しながら行くしかない！　と、速攻で脳内戦略を立て直したリュウ。だが世の中はそんなに甘くなかった。なんとまさに今、このタイミングで手に持つ物体がけたたましくブルブル震えだしたのだ。

「……まさか……」

電話するフリのために取り出したハズだったテレコーダー。激しく震えるそのディスプレイに浮かび上がる文字が「ナギ・スプリングフィールド」でない事を心の底から祈るリュウ。しかしその祈りは届かない。恐る恐る見てみれば、今一番見たくない名前がそこにあった。

「……勘弁してよ……」

台風でも起きるんじゃないかってくらいに激しいリュウと周りの温度差。周りは楽しげにワイワイ盛り上がり、その横で一人だけどんよりと顔に暗い影を落としている。そんなリュウの掌の上では、ディスプレイに映し出される“ナギ・スプリングフィールド”の文字がいつまでもいつまでもその存在を主張しているのだった。

続く

第十一章　12、炎の吐息（後書き）

ようやく11章終了です。
予想外に長くなった……

更新が非常に遅くなってしまい大変申し訳なく思っております。orz
まさか100話越える事になるとは思ってもいませんでした。
ひょっとしたら字数の少ない話を統合したりするかもしれないです。

ここまで読んで下さった皆様には本当に感謝感謝です。
突っ込み等大歓迎ですので、気が向いたら気軽に感想書いてやってください。

今更で恐縮ですが
第九章　2、手伝い
の白髪の青年のセリフを少しだけ修正させていただきました。

第十二章　1、引越し

「はぁ……」

「まぁ元気出せよ相棒」

「お前ね……」

雲一つない穏やかな青空。川の流れは留まる事を知らず、草木はそよ風にさざめいて柔らかな音を奏でている。そこは普段なら気持ちもスカッと爽やかになりそうな早朝の渓谷。リュウは川べりの岩に腰を降ろし、朝だというのに疲れた目をして釣り竿を握りながら一人溜息をついていた。

「いっその事全部放り出して逃げるか……」

「相棒はそういうこと言っときながら、ちゃーんとやるこたやんじゃねぇか」

「……」

先程からちゃぷちゃぷとルアーを水面に浮かばせているものの、一度もアタリが来ない事で溜息2連発。そんなリュウのすぐ隣からなんだかんだでそれなりな付き合いのせいか、よく分かっているらしいボッシュの一言。……が、したり顔でそんな事言われるとなんかむかつくのは仕方ない。

「……つーかさー、何でこんなに一気に色々起きんの？」

「別に突然って程じゃねーだろ？　まぁ妖精達のあれは予想外だったけどなぁ」

「……はぁ」

僅かな間に3度目の溜息。何故かピクリとも動く気配を見せない釣り竿を握りながら、リュウがどうしてこんなグダグダしているかというと話は前日に遡る。

＊

あれからリュウ達は妖精の里に一旦戻ってきていた。あの場でワイワイやっていても仕方がないし、取り合えずナギからのしつこいコールに根負けしてテレコーダーに出てから、一旦フェアリドロップを使って移動したのだ。

ちなみにフェアリドロップは使った瞬間凄まじいスモークが発生した。辺り一面を毒々しい緑色の煙がモクモクと包み、一寸先さえ見えなくなったところでサァッと煙が消えるとそこは妖精の里だった。

アレと言えば確かにアレだったが、なんかもーこれでよくね？みたいに妥協する気持ちもないではなかった。しかしここまで来ると次はどんなネタで来るのだろうと若干楽しみになってきている自分を必死に否定するリュウであったりする。

さて、とにかく妖精の里についた12人の一行だったが、そこは何やら様子がおかしかった。いつもなら何人かはゴロゴロしている

はずの妖精達が一人も見当たらなかったのだ。

物珍しそうにキョロキョロしている初めて来た数人を尻目に、取りあえずランドとステンは家の仕上げ、サイアスとタペタはその手伝い、リュウとリンプーは何となく妖精を探してみると、ちょっと行った先でよろよろと弱ったいつもの妖精三人が見つかった。ただ事ではない様子に急いで駆け寄ると、その口からは思いも寄らない言葉が。

「りゅ、リュウのヒト……」

「お腹空いたよう……」

「獲物が見つからないのよぅ……」

「「……？」」

ここで第一の問題発生。妖精達はそのあまりの食欲旺盛ぶりに、なんと付近の森の獲物や木の実、魚なんかをほぼ食い尽くしてしまっていたのだ！　最早ここら一体は不毛の大地、長い時間を掛けてゆっくり環境修復していく事を期待するしかないような土地となってしまったのである。げに恐ろしきは食欲なり。

「……」

それはまぁともかくとして、今現在飢え死にしそう（と見せかけて実はただ怠けているヤツも多数）な妖精が総勢２０人程＋卵がゴロゴロ。何かかなり増えた気がするが一々突っ込んでいたらもう追いつかないのでスルー。

そんなこいつらを一体どうすればいいのかと言うのが第一の問題である。

うーん、とリュウが頭を悩ませているとその背後につつつと忍び寄る白い影が一つ。何を隠そう正体はモモ。曰く、今ランド達が仕上げている家は精々一般常識的な別荘と思って大差なく、それだと腕輪を探す機械を作るにはスペース不足で設備も不足、しかもこんな場所だと部品の調達もままならないからどうしよう、との事。

第2の問題発生。ここでのあの腕輪の研究は不可能。ううーん、とさらに頭を捻るリュウの側にのっしのっしとやってくる二つの巨体、ランドとガーランドここにあり。実はもうほぼ完成形であるその家だが前述の通り一般常識的な別荘なので、自分たちでさえ寝泊りするには窮屈な上にこれほど増えるとは想像していなかった妖精達全員は確実に収容できない、と。

第3の問題発生。せっかくの家がその役割を果たせそうにない。ううううーん、と悩みに悩む事になった青い髪の少年。この上ナギからの話まで加わってしまっては思考回路はショート寸前、今すぐ逃げたいよ。と言うわけで考えても答えが出ないので、リュウは考える事をやめた。

即行で一人ハイランドの街に戻り、若干ヤケ気味に有り金の3／4程を使って食料を買い込み、戻ってきて全員分の飯を作り、食って、そして寝た。もーいいから全部先送り、明日は明日の風が吹く。きっと寝ている間に妖精さんが全部片付けてくれるさ。あ、妖精さんてこいつらじゃん。じゃ駄目じゃん。なんてうとうとしながら考えたり考えなかったり。

そして翌朝目が覚めて、寝ぼけ眼に飛び込んできたのは卵から孵

化したばかりらしい妖精４人の姿。何とかしてくれる所か余計に増えた食い扶持に、やってられっかボケー！　とばかりに谷間へ向かってＩ　ｃａｎ　ｆｌｙ！して冒頭に至るのであった。

＊

そんなこんなで数十分釣り竿握ってボーっとしてるが一向に魚が掛かる気配がない。そりゃ気分もズンドコに沈もうというものである。

「いーからよ、やっぱ魚もいねぇみてぇだし、戻ろうぜ相棒？」

「……」

確かにウダウダしてても仕方がないっちゃ仕方ない。と渋々、本当に渋々釣具をしまい込み、よたよたと力無く浮遊魔法で上がっていくリュウ。まぁどうするか地道に考えるしかないか、と腹を括らざるをえなかった。

「……あれ？」

「お？　何かあったんかね？」

力無く家の裏手に降り立ったリュウが表のほうに回ってみると、そこでは既に皆起き出していた。何やら集まって少し騒がしい様子だが、そんなリュウに気付いたリンプーがててっと寄ってくる。

「リュウおはよ！」

「おはようございます。何かあったんですか？」

「うん、実は……あー、うんまぁとにかくタペタから話を聞いてやってよ」

「？　タペタさん？」

なんのこっちゃ？　とリュウとボッシュは頭の上に？を浮かべてその集まりへと近付いていった。

「おーう、ムッシュ・リュウ、今日は良い朝ですね」

「おはようございます。えっと、皆さんお揃いで何を？」

「おう、それなんだがな……」

やたらとご機嫌なタペタの横からランドが神妙な顔をして説明をしだした。と言っても話は至極単純明快。何やらタペタがこの家が駄目なら自分の別荘へ来ないかと言い出したらしいのだ。長い事使っていない場所だが折角だし使ってくれとのありがたい申し出である。

「別荘、ですか？」

「ウィ。ワタクシの別荘でしたら皆さん全員入っても、まだまだ大丈夫ですね」

「そこ、ここよりずっと広いみたいだから機械も置けるってー」

「へぇ……」

言われてみればタペタの実家は金持ちである。別荘の一つや二つ持っていたとして何もおかしくはないだろう。恐らくエヴァンジェリンの持っているああいった“別荘”ではなく、本物のリゾート的物件だろう事は理解できたが。

「結構自然があるみたいだから、妖精ちゃん達にもいいんじゃないかなってあたしは思うんだけど」

「……なるほど、いいかも知れませんね」

ゼノやアースラ達にレイやガーランドはそれで構わないと言った感じだが、納得行かないのはランドやステン、サイアスだ。自分たちが苦労しながら建てた家を一度も使いすらせずに放棄するのは何となく嫌だった。愛着もある。このまま全員でここに留まる事は無理があるのはわかっているから、そこまで声を大きくしたりはしない。しかし顔は不満色で一杯だ。

「せっかく俺たちが建てた家だ。俺としては何とか誰かに使って欲しいんだがな」

「おいらもそう思うね」

「……さ、賛成……」

「うーん……」

又もやリュウの頭を悩ます問題発生。だがここを説得してタペタの別荘とやらに妖精達も全部ひっくるめて引っ越せば、食料問題も

家問題も機械問題も全て解決。なんとかランド達を説得するのが上策だとリュウの脳内ジャッジマンは囁いていた。

（あーもう、ナギとの約束もあるってのに……）

説得する言葉を捜しながら、ナギからの伝言も思い出して眉間に皺を寄せるリュウ。だがここでリュウの脳内に輝かしいアイデアの神光臨。

“ナギ”と言えば、そうだ。確か「紅き翼」はどこかに隠れ家を持っていた筈だ。なら場所的にも秘境で持ってこいな感じのこの家をその隠れ家として使ってもらい、そんでもってついでにそれを自分の話の交渉材料にできれば言う事なしじゃね？

そんな色々問題ありげな思考を巡らせ、リュウはランドたちの方を向いた。

「“紅き翼”でこの家を隠れ家として使えないか提案してみます。多分いけると思うんですが、それでどうでしょうか？」

「「「……」」」

ランド達3人は顔を見合わせたが、こんな場所ではあるし、ここでそれ以外に何かいい案というのも浮かばない。依頼主で金を出したのも一応リュウだし、ある種自分たちの我侭でもあるし、それにこの少年がいけると言うなら大丈夫だろう。と言う事で3人は納得した。

「……わかった。悪いな、よろしく頼むぜ」

「ええ、任せといてください」

と言うわけで話しは纏まり、妖精達の軍団も含めて大規模な引越しと相成る事となった。ちなみにだが、ランドやステン、サイアスはこの時点で契約と言うかリュウからの依頼は達成されたので別れる事も普通に出来た。しかし何となく面白そうだったり興味があったりで、3人ともついていくことに異論は全くなかったのだった。

引越しには実際たいした手間はかからない。リュウ達が新天地へ移動し、そこでフェアリドロップを使ってまたここへ戻ってきて、今度は妖精達や待機している人らも連れてその新天地へと戻ればそれで引越しは完了。今後はそこを基準にフェアリドロップをチューンしてもらえばいいのだ。

「そう言うわけで、案内お願いしますタペタさん」

「ウィ。では皆さん、ワタクシに付いて来るといいですねシルブプレ」

その場に残るメンバーとリュウについてくメンバーを適当に挙手制で決めると、リュウ達一行はフェアリドロップで一旦ハイランド地方へと戻り、タペタに連れられて突き進む。ちなみにリュウとタペタにくっついてく面子はリンプー、ガーランド、サイアスの3人。リンプーは色んな場所を見るのが好きでガーランドとサイアスも似たような物だったが、微妙にピリピリした空気と間を放つ二人に対してリュウは華麗にスルーを決めた。

それからはぶらり空の旅。移動手段は飛行船が主である。5人と一匹で目指すはメガロメセンブリアの北辺り、タペタの別荘はその辺にあるらしかった。

「金どうしよ……」

「そろそろ真面目に考えねぇとなぁ」

飛行船の中でリュウはメッキリ軽くなってしまった財布を見て嘆いていた。実際リュウの財布はこの飛行船の代金でレッドゾーンギリギリだ。ある程度纏まってチームとして動くには何かと金という物は必要である。先を考えて溜息しきりなリュウ。タペタとリンプーはのんびり景色を楽しみ、ガーランドとサイアスはすこーしづつではあったが徐々に会話をかわしているようだった。

そんなこんなで大体丸2日飛行船に揺られ、メガロメセンブリアに着いてからは1日ほどタペタに連れられて北へ向かい、とある場所へと到着。そうしてタペタが得意満面な笑みで「これですね」と指差したそれは、リュウにとって物凄く規視感を覚える大きな西洋風の古城……

「スッゴーイ!!　でっかいお城じゃん!　……まぁちょっとだけボロッちいけど……」

「お、お城……」

「ここがお前の別荘、なのか？」

他の3人はまさかと思って矢継ぎ早にタペタに質問攻め、そして自慢気にタペタは腰に手をあてた。

「ウィ。ワタクシの別荘として父上から譲り受けたのですね、その名も……」

「って、スイマー城じゃん！！」

「！　おーう、その通り。リュウは知っているのですか？」

リュウがその古城の名前を知っていた事に驚きの眼差しを向けるタペタ。確かにこの城はエカル伯爵の持ち物だったハズだが、それがタペタの別荘だったとは知らなかったリュウも驚いた。

この城、実はタペタの持ち物となったのはごく最近の話で、エカル伯爵が何の気なしにタペタ名義にしただけであったりする。かつて呪いの指輪があったりで薄気味悪い城だが、放浪癖のあるタペタが寄り付く事はないだろうという計算での事だった。まぁその計算は見事に狂ったのだがここではあまり関係のない話である。

「ね、ホントにここ使っていーの？」

「もちろんですね、皆さんのお役に立てればワタクシとても嬉しいのですね」

こんな城をポーンと一つ丸々使っていいだなんてどこまでお人好しなんだこの人（カエルさん）は、というリュウの感想はさておき、とにかくその城に感心する一向。かつてリュウが詠春と共に住み着いた悪霊を退治して以来、周囲に漂う不気味な雰囲気は払拭されており、観光の一環としてチラホラ遠巻きに見物客も来ているようである。

「でも結構汚そうだよね」

「所々ぶっ壊れてる個所もあるみてぇだしなぁ」

「……やれやれ、これは総出で掃除や修繕をする必要がありそうだな……」

「掃除……みんなで……」

「ですね。取り合えずみんなを呼びましょうか」

そしてリュウは改良していないフェアリドロップで妖精達の場所へと移動し、全員纏めてスイマー城の前へと戻ってきた。いきなり現れた西洋風古城を前に、「おー」と声を上げて感心する他のメンバー。

「凄い！　お城よう！」

「私達のお城！」

「これで私達一国一城の主よう！」

「お前らね……」

何故かその城が自分たちの物になった、とやたら黒い野望を覗かせる妖精リーダー3人にリュウが突っ込みを入れ、では中を見てみようと足を踏み入れるメンバー達。しかしリュウは少し躊躇しながらパーティの後方を恐る恐ると言った感じでついていく。

「……？　どしたの？」

「いえ、別に……」

やたらと足元をキョロキョロしながら警戒を怠らないリュウ。そ

の怪しい姿に誰しもが何だ何だ？　と思うのは当然といえば当然であろう。

「……なんだよ、何か足元にいんのか？」

「……Gが」

「G？」

リュウが警戒したまま示したGと言う単語、聞き返したレイは全くその意味がわかっていない。しかしただ一人、その単語にピシッと音を立てて空気を凍らせた人物が居た。

「……おい、待て貴様……そのGとはまさか……」

「……多分そのまさかです。アースラさん」

「！？」

そう、アースラである。普段から軍人気質で強気な彼女の唯一にして最大の弱点、それがGやフナムシ等の蟲なのである。故にリュウの示したGと言う単語の意味をいち早く理解できていた。

「……大きさは？」

「それが……めっちゃデカイです。具体的には１ｍくらい……」

「ヒッ……！？」

顔に縦線を走らせたままそう呟くリュウ。何しろあの大きさと速

度たるや、リュウの中の『できれば二度と見たくない物体ランキング』堂々の第一位であるのだ。そんな聞きたくなかった情報を受けとってしまったアースラの顔からは一気に血の気が失せ、早撃ち真っ青な速度で腰の銃を引き抜いて足元にその銃口を向けた。幸い今は何も見当たりはしないが、何か物音でもしようものなら反射的にぶっ放してしまいそうな勢いだ。

「……アースラさん、大丈夫、こちらはこれだけ居るんですから」

「そ、そうだな……」

強気に振舞っているが、声が震えている事はスルーするのが優しさというものである。

「常に緊張を保ち、発見即撃破を心掛け、警戒しながら行けばヤツラ如き恐るるに足らないはずです！」

「……確かに、そのとおりだ。ならば、背中は頼む！」

「イエッサー！」

しっかりと背を合わせて死角を消し、周囲を鋭く伺いながらまるで戦場を行くかのような鬼気迫る表情の二人。おめぇら何やってんだよ、と呆れ顔のボッシュの呟きが暗闇に響き渡ったり。

そんなこんなで何とかスイマー城の中の散策を終えたリュウ達。所々の壊れた個所（アースラの過剰反応による誤射含む）の修理や汚い場所の掃除を行えば十分使用に足る環境であったようで、リュ

ウ達は早速その城の手入れを行う事にしたのだった。

「と言うわけで、今度から君達には農作も行ってもらいます」

「「「えー……」」」

「はいはいブーたれないの」

そんな中、リュウは例の妖精リーダー3人にそんな申し出をしていた。理由はもちろん、食料確保の為である。狩猟生活ではまたも限界を迎えることが有り得るので、今後は自給自足を目指すのだ。日々増えていく妖精達の人手があればこの広い土地でも十分可能と言う計算だ。ちなみに講師は実家が農家のランド。この辺一帯はほとんどがエカル伯爵経由でタペタの土地であるので権利とかは何ら問題ないのだった。

スイマー城はなかなかに大きな城であったが、修繕や掃除を行うと徐々にだが往年の姿を取り戻していった。あの崖の上の家とは逆に12人と妖精達を全員収納しても尚部屋数が余るほどで、折角綺麗にしたのに放置するには勿体無いホールなんかもある。時間がかかるだろうが、明りの設置や水道の配管工事、寝具なんかの搬入を行えば豪華なホテルにも負けないほどになりそうだった。

「そんじゃ、ちょっと行って来ますね」

「悪ぃけどよ、よろしく頼むぜおめぇら」

そして皆が忙しく働くなか、何故か一応リーダー的地位に抜擢されている筈のリュウとその相棒ボッシュは城から離れていく。

「あたしも行きたかったなー」

「まぁまぁアネさん、リュウにも都合はあるんだし、おいら達はちゃちゃっと掃除しとこ」

「む～……」

城の手入れはみんなに任せ、二人が目指す場所。その先に待っているのは先日リュウに連絡を入れた“紅き翼”のリーダー、ナギ・スプリングフィールド。

しばらく会ってなかったし、どうなっているんだろうという興味と、今の自分の立場をどう説明しようと言う憂鬱な気分が混在する中、新たにこの城へ転移（？）できる様にチューンされたフェアリドロップをポケットにしまい、リュウは指定された場所を目指してとてくてく歩き出すのだった。

第十二章　2、岩壁

「しっかし“ムクトの岩壁”ってどこにあんだよ……」

「目的地を探しながらってなぁ旅の醍醐味だぜ相棒」

口を突くのは愚痴ばかり。それを宥めるようなセリフを吐いた小さな相棒に、似たような景色ばかりで醍醐味も何もないだろ、と心中突っ込む少年が一人。

改装途中のスイマー城を離れて早４日、現在の状況と言えばジャングルのような森の中、鬱蒼と生い茂る植物をひーこら掻き分けて探索ってな感じである。

ナギからの連絡により、リュウとボッシュは指定された落ち合い地点へと向かっていた。それだけならばそれほど時間は掛からないと思われたのだが、何故か今だにナギと合流できていない。理由は幾つか挙げられるが、そもそもナギがテレコーダーで話した集合場所は、中々に珍妙な秘境であったのだ。しかも肝心の話の中身も実に曖昧で、

『ちょっと話があるからこれから言う場所まで来てくれ』

要約すればこれだけである。そしてその指定した場所と言うのが、龍山山脈の最北端、通称“ムクトの岩壁”と言うらしい場所だった。現在財布事情が赤貧万歳なリュウは龍山山脈のある大陸までの飛行船代をケチり、浮遊魔法を使って移動したので割と時間がかかっていたのだ。

もちろん話の途中に「お前がこっちに来てくれよ」と言いたかったリュウだが、一方的に話しまくられて、終いにはガチャ切りされて取り付く島もなかった。相変わらずのナギのマイペースぶりにやれやれだぜ、と溜息乱れうちである。

「あー、もう。やっぱ歩くのめんどいから飛ぶ」

「仕方ねぇな。いいんじゃねーか」

実の所飛んで居ればもう少し楽だったのかもしれないが、何故リュウがジャングルをえっちらおっちら歩いていたかと言うと、不毛の大地かと思っていた龍山大陸の北の方にこんな緑があることに感心したボッシュが色々辺りを観察したいと言い出したからだった。

ギャーギャーと知らない生物の原始的な鳴き声が至る所から聞え、耳元ではこ五月蝿い虫の羽音にしかめっ面を繰り出す。いい加減面倒くさくなったリュウが浮遊魔法を使って森の上に出てみると、先の方のいくらか開けた場所に小さな集落らしき物が見えた。どうやらその辺りから煙も上っているらしい。

「なぁボッシュ、あれって人居るよな？」

「みてぇだな」

「ちょっと道聞くか」

「だな」

もう自分たちの他力本願ぶりに対して何の疑問も思わないほど慣れてしまっていたりするリュウとボッシュである。と言うわけでリ

ュウは浮遊魔法でもってその集落らしき場所へと直滑降していくのだった。

＊

（注目の的っすね）
（ま、仕方ねぇやね）

こそこそ小声で会話を交わしながら集落を散策するリュウとボッシュ。ついた集落は小さなものではあるが、ちゃんと住人は居た。魔法世界にはあまり似合わない鍬なんかの農具を振るい、突然空から降って来てキョロキョロしながら歩くリュウをチラチラ怪しみながら見ては農作業に戻っていく。まぁリュウ的にはそれくらいの目で見られる事は予想していたのでどうって事はない。幾分恥ずかしいのは我慢我慢だ。

「ん～……あ、あの人に聞いてみようか」

「おうよ」

ポテポテ歩きながら周囲を見渡し、目をあまり合わせたがらない住人達の中で何となく感じのよさそうな女性を見繕うと、話し掛ける事にした。

「すみませーん、ちょっと道をお尋ねしたいんですがー！」

「はいはいなんだべ……？　あんれー見たことねぇボウズだなー？」

素朴な感じでイントネーションが微妙にずれている。大分田舎のほうだからなのか訛りが激しく、手拭いで汗を拭きながらリュウ達

の方へと寄ってきたその女性。「お？意外と美人かも」等とこちらはこちらでピントのズレた頷きを見せるリュウである。

「お忙しい所すみません。俺は都の方から来た者でリュウといいます」

「おんや礼儀正しいボウズだなー。オラは“マミ”っつんだ。よろすくなー」

穏やかな笑顔で答える女性改めマミ。近付くとわかるがかなり年若いようで17~くらいの女性である。尻尾や目立つ耳などはないので純粋な人間だ。

「えーと、この辺で“ムクトの岩壁”って場所をご存知ないでしょうか？」

「ん～？　ムクトの……？」

むー？と悩む仕草が中々可愛らしいマミ。だがその仕草で（あ、知らなそう）と瞬時に悟る無礼なリュウ。ちょっと悩むと、マミはリュウの考えを裏切って、パッと明るい顔を見せた。

「ああ！　神皇様のお墓の事だべな？　そんならこっから真っ直ぐ行くとすぐだよ」

「？　……神皇様？」

聞きなれぬ単語ではあるが、昔々にどこかで聞いたことあるような無いような、微妙な感覚を覚えるリュウ。彼女が指す場所が果たして“ムクトの岩壁”なのかどうか、リュウにはもちろんわからな

い。

「そうだべ。むかーしの神様のお墓だよ。オラ達は毎朝あっちへ向けてお祈りしてんだ」

そう言って目を瞑り、大きな山があるその方角へ手を合わせて頭を下げるマミ。話によると、昔からこの辺りに伝わる言い伝えで、彼女が指差す山の方に偉大な“神皇様”という存在の墓があると言われているらしい。今でもこの地方で嵐が起きたり雷が鳴ったりするときは、神皇様があの山の向こうで怒っているからだ、と言われる事もあるとか。

魔法世界の割にそう言った迷信じみた話があるのは中々面白い所だが、まぁそんな眉唾な話は今は無関係と言えば無関係だろ、とさらっと流すリュウの図。

「それが“ムクトの岩壁”なんでしょうか？」

「ん～、何かどっかでそんな名前も聞いた気がするっぺさ。間違っとったらごめんよー」

そう言い、たははと笑うマミ。まぁ彼女の記憶が違っていたとしても、現状それ以外に手掛かりはないわけで、そこを目指す事に方針決定である。

「いえ、ありがとうございます。行ってみます」

「うん、気ぃ付けてなー！　日が暮れる前には帰ってきなさいよー！」

割と天然なボケをかまし、手を振るマミに手を振り返し、リュウはその山の方角へと進んでいった。

＊

「いやホント空飛べるって反則だよな」

「そうだけどよ、なんつうか風情とかそんなもんの一ッ欠片もねぇなぁしかし」

「まぁそう言わない」

あらよってな具合で高い山々も一っ飛び。そんな山登りなんて何の感慨も沸かないぞ、と中々に拘りのボッシュを宥めすかし、山頂付近をキョロキョロと見渡すリュウ。

確かに景色は良い。だがあくまで普通の山の頂。“岩壁”と言えるような個所もなければ、墓のようなものすらない。

「うーん……お？」

所詮は言い伝えなのか、とふらふら文字通りに山周辺を浮遊していると、ふと山の反対側に妙な地形がある事に気がついた。それは登ってきた村のあった方からはちょうど見えない山の裏側で、妙な形に岩が突き立ち、深い谷があったりするややデコボコした地形であるようだ。

「……この辺……なんかなー？」

「どうだろうなぁ。取り合えず近付いてみようぜ相棒」

吸い寄せられるように、リュウはその一帯に近付いていく。ぐるっと見て周ってもほとんど同じような岩や崖ばかりで、確かに“岩壁”と言えなくはないが待ち合わせに使えるような目立つ物体は特にない。

「……ん？」

「どうしたい相棒？」

「いや……」

ふと、崖と崖の間の谷間に差し掛かったリュウはその壁に違和感を覚えた。パッと見で特に何があるわけでもない、ごく普通の岸壁である。強いて言うなら少し大きめの岩がボコッと突き出ている程度だ。

「なんか……変じゃね？　この岩……」

「あん？」

しかし、何かがおかしい。直感と言うか、他の岩とは違う何かを感じたリュウは、その岩へとさらに近付いてみる。

「え、これ……幻！？」

触れてみるとはっきりと違和感の正体が掴めた。なんと岩だと思った個所には何の感触もなく、ふっと手がその向こうへとすり抜けたのだ。つまり、これは幻の類。明らかに人工的な気配が漂っているのがわかった。

「何これ……普通誰も来なそうな所にこんなもんあるか？」

「おほ、何だか面白くなってきやがったな！」

怪しすぎるその幻に興味が刺激されたのか張り切るフェレットに呆れつつ、その幻の岩を通り抜けてみる。するとその先は洞窟のようになっており、岸壁の中を奥へと続いていた。

手に魔法の明りを灯し、恐る恐るその洞穴を進むリュウ。微かに、ほんの微かにだが、覚えのある魔力らしきものを感知できていた。その感覚に間違いがなければ、この先に居るのはあの赤い髪をした少年が最有力だが……

「……？　何だココ？」

「こいつぁ……墓か？」

しかし着いた場所は行き止まりだった。分岐はない。正真正銘の一本道。一応目を凝らして壁を見ていたが、どこにも入り口のような幻はないと断言できた。

「ひょっとして神皇様のお墓ってこれか？」

「かもなぁ」

そこにあったのは何か文字が彫られた石碑。薄暗い空間にポツンと建てられたそれは、どことなくサイフィス達と契約した石柱と似た感じを受けるが、あくまで似ているだけ。龍の声や気配などは全く感じ取れない。

「てっきりこの先にナギが居るんだと思ったんだけどね」

「ナギっこが？　そいつぁ相棒の勘違いってヤツじゃねぇのかい？」

「でもなぁ……」

自分の感覚が間違っていたのだろうか？　居たらいいなぁっていう願望をこじつけていたのかなぁ、と何の気なしにその石碑に手を触れた瞬間――――

「うおぁっ!?」

「!?　おい、相棒!?」

何とリュウは急に光を発しだしたその石碑の中に吸い込まれているではないか。咄嗟にボッシュはポーチから飛び出て口でリュウの足を引っ張るがとてもそんな力では対抗できそうもない。

「なんじゃこりゃぁぁぁぁ!!」

「うぉぉ!?　どうなってんだぁぁぁぁ!?」

抗いもむなしく、リュウとボッシュはスポッとその石碑の中に吸い込まれていった。彼等の驚声が虚しく木霊し、まるで食事を終えて満足したかのように石碑は放つ光を弱めていく。後には元の静かな洞穴だけが残っていた。

第十二章　ＳＯＬ　～幕間３～

～ポケットの中の戦争～

リュウのポケットの中にある４枚のカード。
それは各地で契約を結んだ事により仲間となった４体の龍の仮の姿。
リュウの呼びかけで顕現し、時には単体で、時にはリュウと協力して、幾多の戦いを共に過ごしてきた心強い仲間である。そんな彼等であるが、はてさて呼ばれる事のない日常を一体どのように過ごしているのだろうか。今日はその生態に少しばかり触れてみよう。

＊

「……」
「……」
「……」
「……」

彼等は何日かに一度、リュウからの呼びかけ以外の一切を隔絶した空間に引きこもる。そこはここではないどこか。彼等はカードにその身を移した龍の化身であるが、その作り出された空間内では擬似的に人の姿を取る事も可能であるようだ。そして行われているのは、古来より龍として生きてきた彼等の知識の交換、知恵の披露。即ち、重厚な“会議”なのである。

「……」
「……」
「……早く切りなさいよ」
「ま、待て……」

交錯する視線と視線。ぶつかり合う気迫は、互いの持つ意見を一歩でも上回ろう、飲み込もうと牙を剥く。常人には到底耐えられない龍の持つ圧倒的プレッシャー！　だがそれは、この場では至極当たり前の光景！

「……もう！　いつまで待たせる気よ！」
「むむむ……っ！」

白熱する舌戦！　飛び交う怒号！　小さな長方形の物体を己の分身とし、一期一会に積み重ねた譲れぬ自論を展開するその場は、まさに真剣勝負！

「！……これは……通るッ！」
「あ、それロン」
「！？　ぬぉぉっ！？」

淡々と自らの意思を貫く者、他者の思惑を受け入れて柔軟に考えを改める者、示される道は一つに非ず。時には自らの過ちを思い知らされ、肩を項垂れる事もある。だがそれは明日への糧！　諦めてはそこで試合終了なのだから！

「ねぇねぇザム、サイってさぁ、見え見えのスジ引っ掛けに弱すぎない？」
「……ていうかさっきから俺ら空気じゃね？」

……彼等は決して遊んでいるわけではない。一見すると正方形のテーブルを４人で囲い、何やら小さな物体を並べたり崩したりしているように見えるが、これは実に高度な話し合いの場なのだ。そこには自信、決断、読み、さらには観察力、洞察力、推察力と言った、

常日頃から周囲の変化に興味を持つ彼等にとって、必要不可欠なあらゆる要素がコンパクトに納められているのである！

「あ、サイフィスもうハコでしょ？　はいこれで私の８０７９勝目ね！」

「ぐっ……ぬぬぬ……っ」

自らの意見を粉砕され、震える手に握った小さな長方形の物体は今まさに砕け散る寸前！　しかし暴力に訴えては何の意味もないと言う事をサイフィスは思い出す。この場における勝者とはつまり相手の思考を読み、その上をいく者にこそ与えられる称号！　それで勝たなければ意味がないのだ！

「ふふん、サイフィスってば背中が煤けてるわね。じゃ、次の半チャンいきましょー！」

「うぬぬ……次こそは……」

ジャラジャラと、１３６個の小さな物体を掻き混ぜる音が鳴り響く。洗われた牌達は再び彼等の手足の如く、その意見の代弁者となる。そして生み出される勝者と敗者。それは彼等流の知識と知恵の交換。決してタダ暇だからと遊びに耽っている訳ではない……のだ。

「よーし、きたきた！　リーチ！」

「！　くっ……早い……」

ここではないどこか、今宵も龍たちの開く会議は踊る……

＊

～妖精村殺人事件　おこげは死の香り～

リュウから新たな任務として農作を行うよう厳命された妖精達。現在の総戦力はリーダー達を含めて２５人。誰が何をするのかという振り分けを決める作業を、実はリーダー３人が行っているという事をリュウは知らない。一応は最年長者の３人、こう見えて意外と働いていたりするのだ。

「じゃあ、あんた達１０人は開墾作業よぅ」

「「「は～い」」」

威勢のいい返事と共に、手作りの農具を担いでふよふよと飛び立っていく妖精達。テンションの高い者、低い者、各々の性格は千差万別。そんな彼女達ではあるが、ランドからの手解きを受けて一通り作業の基本は学習済みなのだ。

「そっちの１０人はいつも通りに狩りよぅ」

「「「おー」」」

まだまだ農作業で自給自足を目指すには時間がかかる。その間の食料を得る方法として狩りは基本中の基本である。幸いこのスイマー城の周辺には森や草原、湖なんかもあるので自給自足が波に乗るまでは、十分狩猟生活で食料を確保する事ができるだろう。

「後は……どうするよぅ」

「うーん、人手が余ったよぅ」

「何かやる事ないかよぅ……」

現在の重要事項は農作業と狩猟のみ。一度に纏まって行動できるのは精々１０人程度なので、やる事がない戦力が二人ほど周囲に残ってしまっていた。

「あ、そうよぅ！」

と、ピコンッ！　と豆電球がついたような閃きがリーダーの内の赤いのに走った。残り者の彼女達にはある一つの共通点がある事をなんでかわからないが思い出したのだ！

「「？」」

「あなた達って、確かリュウのヒトの料理をじっと見てたハズよぅ！」

唐突に妙な事を言い出したリーダーのうちの赤いの。彼女が発した言葉で、長い付き合いである他のリーダー二人は、その言わんとしている事を瞬時に察し、同じ高さにテンション急上昇！

「そうよぅ！　見てたって事はもう覚えているってことよぅ！」

「暇だから、何か美味しい物でも作ってよぅ」

いや見てただけでできるわけないし、と残り者二人は揃って首を振る。しかし相手は妖精リーダー。向こうの方が序列が高いので断っては角が立つ。ゴリ押し攻撃であっと言う間に押し切られ、渋々以前リュウが使っていたお古の調理器具（前に捨てられてたものをこっそり拾って遊んでいた）をどこからか取り出し、たどたどしい

動きで料理の真似事を始めるのだった。

～数分後～

「……なにこれ？」

「……黒いかけらよぅ」

「せっかくの材料が無駄になっちゃったよぅ！」

ごめんなさいとばかりにしょぼんと肩を落とす残り者二人。案の定出来上がったものは真っ黒い“おこげ”一つ。材料が鳥の卵だった為に一応卵焼きを作ろうとしたのだろうが、そこにある物体はどー見ても単なる炭素の塊でしかない。

「……あんた食べなさいよぅ」

「言い出しっぺはあなたの筈よぅ」

「わ、私はお腹一杯だからいらないよぅ」

以前の話だが、リュウが作った料理を少し残してしまった時に、“お残しは許しまへんでー！！”と鬼の形相＋包丁片手で追い掛けられたという苦い記憶が彼女達にはある。その為、せっかく作られたソレを捨てるという事はどうしてもできなかったのだ。

姦しい相談とゆー名のバトルの後、結局連帯責任で全員がそれに口を付ける事になった。その辺、妙に義理堅いというか有言実行の妖精リーダー達である。

「じゃ、じゃあ、せーのでいくよぅ」

「「うん」」

「「「…せー、のっ！」」」

パクッ……と、意を決して3等分した真っ黒い“おこげ”を口の中へと運んだリーダー3人。緊張の一瞬、残り者二人はそのリアクションを固唾を飲んで見守っていた。

そして……

妖精Aは混乱した！
妖精Bは毒を受けた！
妖精Cにこうかはばつぐんだ！

やっぱり無茶でした。ピクピクと地面に転がるリーダー達の姿はまるで蚊取り線香で弱った羽虫のようだったと残り者二人が後に語ったとか。

何はともあれ料理の道も一歩から。彼女達がこれからどう生きていくかの方向性が、おぼろげながら見えてきた事に、まだこの時には誰も気付いてはいなかった。

＊

～？？？～

「これで改造は完了さ。気分はどうだい？」

「……」

「答える訳ないか。全く失敗作の癖に梃子摺らせてくれるよ。その無駄な意志の強さは一体どこから来たんだろうね？」

「……」

「女神が力を完全に取り戻すまで後少し……これで君が彼を消せなかったら、僕達の計画は大幅に遅れる事になる。何しろ多分女神は彼を……」

「……」

「ま、そうなった時の為の布石はもう打っているけどね。あの不良品を世界中にばら撒くのは少し骨が折れたけど、これで種蒔きは終わりさ」

「……」

「後は……まぁ君が彼を消せればいいか。無用な戦争は僕だって起こしたくないからね。リミッターが外れれば彼に負けはしないんだ。精々頑張りなよ？」

「……」

かつて石像と化した少年は、生気のない瞳を開いたままで、冷たいベッドの上に横たわっていた。

少年と似た顔をした青年は、氷のような瞳を向けて、横たわる少年を見下ろしていた。

青年が去った後も、少年は動かない。彼の身体は最早石像ではなく、元の白く華奢な肌に戻っていた。唯一以前までと違う点があるとすれば、それはその細い腕に、奇妙な形の腕輪が着けられていることだけだった。

第十二章　ＳＯＬ　～幕間３～（後書き）

今更で恐縮ですが、１章の２～３と５～６をそれぞれまとめました。

今後もいくつか纏める事があると思います。

第十二章　3、神皇

「そうそう何度もケツから落ちたりはせんよ！」

「そいつぁいいがここはどこだい相棒」

シュタッと上手い具合に両足で着地し、無駄にポーズまで決める余裕を見せるとようやく周囲を見渡すリュウとボッシュ。先程まで居たあの洞窟はどこへ行ったのか、気がつけばそこは洞窟では無く、みすぼらしく朽ちた小屋の中のようだった。少し小突いただけで壊れてしまいそうな薄い木戸の隙間からは光が漏れている。

「……って、また異世界……？」

「しっかし相棒はつくづく警戒心ってもんがねぇよなぁ」

「……ほほぅ、面白くなってきたとか言ってたのはどこの誰だったっけかね？」

妖精の時といい、どうしてこうも“気がついたら別世界”なパターンに良く嵌るのか。リュウとボッシュが互いの感想を交えつつくだらない言い争いをしながら、まぁこのままってのも埒があかないと結論付けてその小屋らしき場所から外へと出てみると――――

まさに一歩踏み出した途端、リュウの頭上を影が覆った。見上げてみれば巨大な狛犬のような生物が二頭、文字通りに天から駆け下りてリュウとボッシュの前に現れたのだ。二頭は低く唸りながらリュウの目の前に降りると、その敵意を隠そうとすらしない。

「何奴」
「曲者か」
（うおぁ！？）
リュウの身長よりはるかに大きい犬の化け物。片方は白く、片方は青い。即噛み付く、と言う訳ではなさそうだが、明らかに自分に対して殺気を向けてくるその犬二頭の姿に、リュウはまず驚き、次に何故か記憶の奥底を刺激されていた。
「直ちに去れ。ここは下界の者が来て良い場所ではない」
「去らぬと言うなら、はらわたを喰ろうてくれるぞ！」
警告、威嚇、そして咆哮。
二頭の狛犬が発した咆哮は互いに共鳴しあい、ビリビリとリュウの肌と鼓膜を震わせ、強烈な威力を見せ付けていた。並ではない。この狛犬達は相当の実力を持っている事がわかる。それこそ普通の魔法使い等なら睨まれただけで気を失ってもおかしくはないほどだ。
（おっかねー……）
しかしリュウも伊達にここまで多くの戦いを潜り抜けてきたわけではない。この二頭の威嚇に対しても、真正面からそれを受け止め、腰を抜かす事もない程度には胆力が鍛えられているのだ。万一の為にすぐに戦闘態勢に移れる様に頭の一部を緊張させつつ、だがペースを崩されるというほどではなかった。
「あの、無断でお邪魔したのは謝ります。ちょっとこの辺で人を探してるんですけど……」

「「……」」

調子を崩さないその態度に拍子抜けしたのか2頭の狛犬はリュウの言葉を大人しく聞いていた。怪しんでいるのか様子を見ているのか、低く唸るのみの狛犬達はそれ以上口を開かないので、一応平和主義者なリュウとしては取り合えず自分の目的を言うくらいしかできなかったりする。

「もし知ってたら、なんですけど、この辺にナギ・スプリングフィールドっていう赤い髪の子供居ませんですかね？　見た目俺と同じくらいの」

「「……」」

しかし二頭の狛犬は微動だにしない。リュウの言葉は確実に聞えている筈だが全く動かない。

≪うーん……どうしよ……≫

≪強行突破でもするかぁ？≫

≪お前他人事だと思って無責任な……≫

ボッシュの提案は即却下。リュウとしてはなるべくなら戦いなどしたくなかった。何しろ何となく昔の記憶のどこかに引っ掛かる見た目のこの犬達、どう見ても強そうなのだ。例えばそれぞれがジャック・ラカン程だとは流石に思えないが、しかし状況的に見て二頭を同時に相手取らなければならないのは確実で、激しく面倒そうだ。

そんな感じに狛犬二頭と小柄な少年＋フェレット、互いに睨みあいでしばらく膠着状態かと思いきや、突如白い方はその場にドスッ

と腰を降ろし、もう片方の青い方は詰まらなそうに鼻を鳴らした。

「そうかお前か……客人達の待ち人は……」

「……付いてこい……」

「？　……あ、ありがとうございます……？」

いきなりの態度の軟化に戸惑うリュウとボッシュ。もう敵意など霧散していて青い方はその場から歩き出し、白い方はそのままお座りの姿勢で留まっている。大きな体躯を誇る癖にちょこんとした座り方のギャップに「なんか微妙に可愛いなチクショウ」と緊張を解いて割かし余裕を見せるリュウである。

「どうした、早く行くがいい」

「あ、はい」

座ったままの白い狛犬に先を急ぐ様に急かされ、リュウはのしのし歩いていく青い方の犬の後を案内されるままに付いて行くのだった。

≪ここ何なんだろうな？≫

≪あれじゃねぇか？　あの“別荘”みてぇな空間≫

≪あーそれっぽいな確かに≫

リュウとボッシュは青い狛犬の後を付いていきながら、周りをキョロキョロ見渡してそんな念話を交わしていた。周囲は広く、一見すると普通の草原か何かのような印象を受ける。遠巻きに川らしきモノが流れているのがわかり、所々に木々が生い茂っていて非常に穏やかな空気の場所であるようだ。

だがしかし、そこが普通の空間ではないと確信させる点が一つあった。視線を上にずらしてみれば、そこには青い空の姿は微塵も無く、何か七色のオーロラのような物がモヤモヤと渦を巻いてるのだ。全く持って訳の分からない空間だが、目の前を歩く狛犬に質問した所で答えが返ってきそうもないので、リュウとボッシュは疑問を溜め込むハメになっていた。

「ここで待つが良い」

「あ、はい」

しばらく大きな背の後を追ってテクテク歩いていると、草原の中ぽつんと目立つ一本の木の側で立ち止まった狛犬にそう言われ、流されるままにリュウはその木の元に立つ。見届けた青い狛犬は再び空へ向かって駆け、いずこかへと去っていった。

「……って、なんだこの状況……？」

「相棒、もう少し今のヤツに何か聞いても良かったんじゃねぇか？」

犬に案内されて木の下で待ち惚け。流されるままに自分が置かれた状況に対してのグダグダな会話をしていると……辺りに何か妙な気配が漂い始めている事にリュウとボッシュは気がついた。殺気……とまでは行かないが、何か敵意めいたものが周囲を取り囲んでいる。

「……てっきりナギが居る場所にでも連れてってくれると思ったんだけどね」

「やっぱ相棒はそう都合のいい星の下にゃ生まれてねぇみてぇだな」

全くだ、とボッシュの言葉に心の中で同意しつつ次第に表情は緊張の色を帯びて行き、自然と辺りを警戒しだす。感覚的にはエヴァンジェリンとの修行の時と似ている。何かに狙われ、狩られるような感覚。一瞬の油断が命取り、そんな気配をリュウは敏感に感じ取っていた。

「……来たっ！！」

咄嗟のバックステップ。次の瞬間それまでいた足元に突き刺さる魔法の射手が数本。あと一瞬遅ければ背中にヒットしていたであろうそれは、サイズは小さいがその分威力と速度が凝縮された、相当の手練が放った物だと一目でわかる。

「おっとぉっ！！」

さらに今度は左右から、間髪居れずに襲い掛かる魔法の射手の乱れうち。咄嗟に地に伏せてやり過ごすと、今度はその姿勢から一気に身体を起こし、前方に跳ねる。

「よっ！　ほっ！」

続けて八双飛びのような華麗なステップを踏むリュウ。どこからか放たれている魔法の矢はリュウが足を着いた個所を狂い無く射抜いていく。かわすタイミングは紙一重。次第に魔法の矢は勢いと数を増していく。

「ぬぉあ！？　何なんだよ！！」

リュウが跳ね、一瞬遅れて魔法の射手がそこを貫く。何度も何度も繰り返される曲芸演舞。徐々にスピードが上がっているがまだ十分かわせる範囲。だがこうもねちねちと同じ戦法でやってくる相手に対して、このままやられっ放しはもちろん嫌なので、リュウは放ってくる相手を探す事に決めた。

「とぅぁっ！！」

浮遊魔法でその身を空中に晒す。これで魔法の矢は上下左右、正面背後の3次元攻撃が可能となる。だが、代わりに周辺の木々などの遮蔽物がなくなって遠くまで見渡せ、どこから魔法の射手が放たれているか気配がよくわかる。

「どっからだ……？」

神経を研ぎ澄まし、周囲に気を配る。宙に留まり、数瞬の静寂。次の瞬間、後方の少し離れた巨木の上から魔法の気配。振り向くと同時に大量の魔法の射手が現れた。

「あれか！！」

リュウは飛んでくる魔法の射手の大群へ、頭から飛び込んだ。もちろんそのままではダメージを受けてしまうが、しかしいい加減同じ魔法の射手を見続けて多少なり目は慣れている。

「てやぁっ！！」

ポケットに手を突っ込み、龍の力を込めて居合の如く放たれる散烈拳。魔法の射手が自分に当たる直前、ピンポイントで目の前の魔法の射手のみを打ち落として矢の大群を抜けると、そこから一気に

全開にした浮遊魔法と虚空瞬動の重ね掛けで瞬時に巨木へと間合いを詰める。

「食らえ！　卍キィック！！」

「……っ！！」

無駄に全身を回転させ、無駄に貫通力を増して勢いそのままに葉の茂った巨木へ“とびげり”をかまし、バキリと切れ味鋭くその幹を蹴り折るリュウ。巻き添えを避けるべく葉の陰から飛び出したのは全身ローブを纏った長身の人物。チラリと見えるその口元には余裕か嘲笑か、笑みが毀れていた。

「ふふふ、いやぁなかなか。あの程度では挨拶にもならなかったようですね」

「……そっちは趣味の悪さは相変わらずで」

もうリュウにはこの相手が誰なのかわかっていた。そもそもあれだけねちっこい魔法を繰り返し撃ってくる相手という時点で一人の人物が予想できていたのだ。それにあの狛犬は自分に向けて“客人達の待ち人”と言っていた。ここで自分を待っている人間などナギぐらいしか思い浮かばない。そして客人“達”という事は、自分を待っている人間が複数人居るという事。ならば彼が居たとしてもなんらおかしくはないのだ。

「お久しぶりですねぇ。大分修行したとお見受けしますが？」

「一応ね。お久しぶり。アル」

お互いふわりと地面に着地し、緊張感の欠片もない会話を交わす。
徐に長身の人物がファサリとフードを取ると、そこには随分久しぶりのアルビレオ・イマの胡散臭い笑顔があった。

「手荒い歓迎じゃねぇかよ、アルの兄さんよ」

「おやボッシュ。あなたも元気そうで何よりです」

「それより今の状況を説明して欲しいんだけど？」

リュウとボッシュの白い目線を飄々とかわすアルビレオ・イマ。
分かれる前と全く変化の無い腹黒スマイルの特殊効果が発動し、リュウの脳裏に散々からかわれた日々が思い出される。

「そうですねぇ。では道すがらお話するとしましょうか。どうぞこちらへ」

「もう何か襲ってきたりはしないよね？」

「さてどうでしょう？」

「「……」」

相変わらずのアル節である。一応微妙に辺りを警戒しながらアルの背中をついていくリュウとボッシュ。アルは「攻撃を仕掛けたのはリュウがやって来たと聞いたので、どれだけ修行したのかを試す為だった」という事はあっさり話したが、もしあの攻撃を避けられなかったらどうするのか？　という疑問には笑って答えなかった。

「……で、ここって何なの？」

「その質問にお答えする前に、リュウはソンの村でここの話は聞きましたか？」

「ソンの村？」

「ここへ至る山の麓付近にある小さな農村ですよ」

「あー、あそこかな……？」

思い出される道を訪ねる為に立ち寄った村の事。村の名前自体は聞いていなかったが、まぁ恐らくそんな名前なんだろうとリュウは納得する。マミの話によって“神皇様のお墓”がナギとの待ち合わせの“ムクトの岩壁”と同一の場所らしいという事までは聞いていたが、逆に言えばそれくらいの事しかその村に関する事は知らない。

「ちょっと“ムクトの岩壁”について道を訪ねに寄ったくらい。何か“神皇様のお墓”って言うのと間違えられたけど」

「それでしたら話が早いですね。その通り、ここはその“神皇様のお墓”であり、ここへ来るあの地形の場所が“ムクトの岩壁”と呼ばれる場所なのです」

「へー……」

崖と崖の谷間にあった、まるで人目を偲ぶ隠し通路のような洞穴。普通の人間はまず気付く事すらないであろうあんな場所にお墓を作るとか、その神皇様とやらは何を考えているんだ？　とリュウは脳内にハテナマークを浮かべたり。

「そしてその“神皇様”ですが、実はまだご存命なんですよ」

「……へ？」

随分昔に亡くなったらしい人のハズなのに生きてんの？　という疑問を挟む余地もなく、アルは歩きながら淡々と話を続ける。

「私も詳しくは知りませんが、色々とあったそうですよ。何でも“神皇様”は人間が嫌いで、この場所に隠れ住んでいたそうで、偶然やって来たナギを殺そうとしたらしいですから」

「何か随分物騒な話に……それで？」

「まぁそれ以降色々とあったようで、結局ナギが“神皇様”の興味を買ったのか心を融かしたのか……とにかく紆余曲折を経てここで修行をする事を許されたそうなんですよ」

「ふーん……」

流石はナギ、心を閉ざした存在が気を許すとは、何かあっちはあっちでそれっぽい活躍してるんだなぁとリュウはその主役っぷりに感心していたりする。

「その神皇様って強いの？」

「ええ、それはもう」

恐らく自分が前にナギに連絡しようとして即行で切られたあの時には、もうここで修行していたのだろう。きっとそれが楽しかったに違いない。テレコーダーがこんな場所に通じるとは思えないから、

たまたま外に出ていた時だったのかな？　等とリュウが以前のことを思い出して理由付けしていると、アルは木々を分けながら次第に林のような所へと入っていく。見失わない様がさがさと草を踏み鳴らしながらその後を付いていき、開けた場所に出てアルは足を止めた。

「さて、着きました。あとはナギ本人に聞くのがよろしいかと」

「……？」

そこにあったのは湖。大きくはないが水は澄んでおり、まるで童話に出てくるように周囲を林に囲まれた静かな湖畔。対岸と両端は十分目視の範囲内。斧を落としたら泉の精が出てきそうなほどの穏やかさ。しかしリュウの目に美しいその湖本体は入っていなかった。なぜなら、その両端に浮かぶ二つの人影から尋常でない力を感じていたからだ。

「あれは……ナギ？」

片方の見た目は見覚えがありすぎる。鳥のようにつんつんした赤毛、ローブに杖、そして身長がそんなに高くない子供のような見た目。間違い無くナギ・スプリングフィールドだ。

（……あっちは……？）

もう片方、ナギと対峙するように泉の対岸に浮かんでいる人物に、リュウは何か一種の畏怖というか威圧感のような物を感じていた。さらりと流れる銀髪、紫と青の中間のような色をした動きやすそうな服を身に付け、自然体で目を瞑り静かに宙に浮いている。肌の色は透き通るように白く、顔はシャープな感じで凄まじい美形だが、

感情の色はあまり伺えない。

「おい！　今日こそ勝ってやっからな！！」

「フッ……」

対岸に浮かぶナギはその人物に対し心底楽しそうにそう言い放つ。そして銀髪の男はそこでようやく目を開け、笑みを見せた。そこにあるのはナギと同じ、楽しいという感情か、少なくともネガティブな表情ではない。

「行くぜ！！」

ナギは膨大な量の魔力を惜しげもなく解放し、男へ向けて大量の魔法の射手を放つ。ソレに対し銀髪の男は全く動かない。そして、何故か矢は一つも男には当たらなかった。

（え……？）

すり抜けた、ようにリュウには見えた。しかし何度か繰り返し行われたその動作の、事実は違うとリュウは気付いた。男は最小限の動きと尋常でない高速を持って矢をかわし、また元の位置に戻っていたに過ぎない。その速度があまりに速すぎてすり抜けたように見えていたのだ。無駄の一切無い完成し尽くされた動き。

「ハッ！！」

「！！」

ナギの魔法の射手による爆撃が止んでいないにも関わらず、銀髪

の男は一瞬でナギとの間合いを消した。凄まじい緩急の差。その手には光り輝く剣がいつの間にか握られている。魔法ではない実態のある剣のはずなのに、それはやけに眩しかった。

「くっ！？」

杖に魔力を通してナギはその剣激を受ける。続けて繰り出される連撃。軽やかで重く、艶やかで強烈な、舞の如きその連撃は、見る見るうちに防御に徹するナギの体力を削り取っていく。

「くそっ！　【雷の斧】っ！！」

自らの劣勢に焦れたナギは至近距離で魔法を放つ。眼前から、バチバチと雷の証を響かせて襲い掛かる雷斧。それを銀髪の男は事も無げに光り輝く剣で受け止め……斬り捨てた。

「……甘い」

「！！」

振るわれる剣。胴はがら空き、防御は間に合わない。かわせないと悟ったナギは――――

「うおらぁっ！！」

「っ！」

回避できないと悟ったナギは防御を捨て、なんと蹴りを男の顔面目掛けて放った。男にとって予想していなかった反撃。だが空いている腕でガード、僅かに緩む剣速。そしてナギは蹴りの反動でギリ

ギリ剣閃から逃れ、距離を取って息を整える。

「へっ、そう簡単に行くかよ！」

「……フッ」

「笑ってられんのも今のうちだぜ！！」

対峙する両者。互いの顔に浮かぶ笑み。そして再び激突。魔法使いであるにも関わらず、果敢に殴りかかるナギとそれを無駄一つない動きでかわす銀髪の男。ぶつかる魔力の余波は湖面を激しく波立たせ、周囲の木々を薙いでいく。

「……すげぇなナギッ子のヤツ……」

「全くナギはああなると周囲が見えませんからねぇ」

のほほんとしながら障壁を張って余波を防ぎ、両者のバトルを見物するリュウとアルとボッシュ。集中力の賜物か、リュウが来ている事にナギは気付いていないらしい。

「……」

「どうした相棒？」

リュウは一言も発さずに両者の戦いを見ていた。魅入っていた。ナギと互角どころか、どこかに余裕を見せる銀髪の男。美しさすら感じさせる一つ一つの動作を、形容するならまさに“いくさするかみ”。その姿に昔の記憶を掘り起こす事もなく、自然と男が何者であるのか思い出せていた。

「……フォウル……」

「……」

障壁にぶつかってくる魔力の余波を受け止めながら、アルはリュウの呟きをしっかりと聞いていたのだった。

第十二章　3、神皇（後書き）

さらに今更報告ですが、２章の４～５話を統合致しました。

第十二章　4、果実

結論から言えば、見ごたえバッチリだった空中戦はあっさりとナギの負けに終わった。いい勝負を繰り広げているように傍からは見えたものの、実際にはナギが銀髪の男にほとんど攻撃を当てられていないというワンサイドゲーム。ムキになったナギは一瞬の隙を付かれて銀髪の男から首に一撃貰い、ストンと意識を飛ばされたのだ。最初から最後まであまりに見事すぎる一連の動作に、リュウはボッシュに言われるまで落下していくナギに気が回らない程だったという。

「……はっ！！」

「あ、起きた？」

「……あ……？　俺は……どうしたんだっけ……？」

とりあえず泉のほとりに寝かせていると、さほど時を置かずしてナギは目覚めた。キッチリ数分で意識を取り戻す辺り、絶妙な職人技とすら言えるだろう。流石は銀髪の男である。

「……やれやれ、あなたはあの方に気絶させられたのですよ、ナギ」

「！　そうだった！　……てことはまた負けたのか俺は！！　ちくしょー今度こそって思ったのに！！」

「あの……おーい……」

がばっと上半身を起こすとリュウの存在を軽くスルーし、心底悔

しがり自分の負けを呪う赤髪の少年。ナギ的にはもうかなりの数挑んで同じ数だけ返り討ちにされているのだろうな、と無視されつつも豊かに想像力を働かせる青髪少年とフェレットである。

「おーいナギー？　とりあえず何がどうなってんのか教えてくんねー？」

「まずあいつぁ誰で、ここは何で、お前さんは何やってんだぁ？」

さり気にナギの前でひらひら手を振ってみるも反応がなくてちょっと寂しかったり。ちなみにナギを軽く蹴散らした銀髪の男は、リュウ・ナギ・アルから少し離れた場所で静かに佇んでいた。心なしかその視線はナギやアルではない方を向いている気がしないでもないが、もちろん何となく怖いので、リュウはそっちの方がなるべく視界から外れるように動いていたりする。

「……ま、いつまでも悔しがってても仕方ねぇか。……で、おーそういや久しぶりだなリュウ、ボッシュ！」

「遅っ！」

「ナギッ子も相変わらずだなぁ」

切り替え素早くナギはシュタッと立ち上がると、リュウとボッシュにようやく目を向けた。相変わらずのマイペースぶりにリュウ式突っ込みが冴え渡る。と、ふとリュウはナギの姿を改めて見て違和感を覚えた。前より何か目線の高さが違うような気がするのだ。

「あれ？　……ナギさ……背伸びた？」

「んあ？　そうか？　お前が縮んだんじゃねーの？」

「いやナギッ子がでっかくなってんだよ」

二人並ばせてみるとよく分かったが、以前まではナギの身長はリュウと同じくらいだったのに現在はその均衡が崩れていた。肉体的にも伸び盛りなナギに対して、同じ位の年代に見えるリュウは全く変っていない。

「そう言えばリュウはあまり変っている様には見えませんねぇ？」

「あ、ほら俺何か“龍の民”ってヤツだから成長遅いって聞いたような」

「へー、そうなのか」

本当は成長が“遅い”のではなく、成長“しない”。ユンナに言われてわかっていた事だが、こうしてその事実を目の当たりにすると、自分だけが時間に取り残されていくような、一抹の寂しさのようなモノを感じるリュウである。

「さてナギ、そろそろ先程のリュウ達の質問に答えては？」

「ん？　ああ。んーと、あそこに居るのはフォウルって一名前のメチャクチャつえーヤツで、ここはアイツが作った変な場所だ。で、俺はアイツに勝つためにここで修行してるって訳だ。以上！」

「……なんとも端的な説明で……」

ナギに説明を求めると言葉が足らず、アルに説明を求めると肝心

な所ではぐらかされる。久しぶりに“紅き翼”の良心、青山詠春に助けを求めたくなったリュウだった。まぁ一応アルとの話も統合して、ある程度理解できてはいた。無理やり納得した所でリュウはテレコーダーで言っていた“話”とは何なのか、次はその事を訪ねようとして……

「リュウ、少しよろしいでしょうか。実は私からあなたに折り入ってお聞きしたい事があるのですが」

「……な、何……？」

胡散臭さ限界突破のアルビレオ・イマに出鼻を挫かれた。が、改まって一体何を聞きたいと言うのか。この男がかしこまる時は大抵碌な事ではない。リュウの背にイヤな予感が迸る！

「実は私がここへ到着する前、悠久の風支部で面白い噂を聞きまして……何でも青い髪の子供が新しいチームを作ったとか何とか」

「！？」

噂と言うものは本当にどこで誰が聞いているか分かったものではない。まさか既にリュウが“炎の吐息”というチームのリーダーに祭り上げられている事を知っているとは、何たる地獄耳か。先手を取られ、これ以上アルに話を続けられてはマズイと即座に判断したリュウには二つの道しかない。即ち認めるか、誤魔化すか。そしてリュウは――――

「そ……」

「……そうそうその子供はペットのフェレットらしき生物といつも

一緒だそうで……いやぁ偶然とは言えとてもリュウに似ているとは思いませんか？」

「……ソ、ソウデスネ……」

汗だらっだらである。リュウには喋る隙すら与えられず、最早逃げ道は封じられた。悠久の風に登録されている人物で青い髪をした子供、さらに常日頃からフェレットと一緒に居るなどよっぽどの偶然でもなければまずリュウしかいない。最早分かって言っているとしか思えない。いつも通りの真っ黒スマイルが１０割増しでドス黒く見える。

「おいリュウ……今の話、どういう事だ……」

「えーと……その……」

ユラリ……と何故か前髪で目元が隠れ、それが余計にプレッシャーを放つナギ・スプリングフィールド。まさに万事休す。何しろナギからすれば、自分のチームのメンバーが勝手に新しいチームを作ってそちらのリーダーをやっているのだ。背信とさえ言えるその行為。しかし成り行きとは言え事実は事実。リュウにできるとしたらせいぜい言い訳をするくらいしかない。

「お前、俺に一言も言わずにチームなんか作ったってのか？」

「……ハイ……成り行きで……」

ぶっちゃけリーダー就任をリュウは拒否したのだが、無理やりそういう事にされてしまったのだ。しかし絶対に嫌だと言い張れば何とかなったとも思え、流石にこれは流された自分が悪い。といった

風に己の非を認める結論に達し、殴られる覚悟さえしてリュウはぐっと目を閉じ、歯を食いしばって――――

「……でかした！！」

「ごめんなさ……い……？」

リュウはまず耳を疑った。次に聞えた単語がどこか別の国の言葉なのかと疑い、最後に己の脳の異常を疑った。聞えてきた言葉。脳内でそれとわかる意味に噛み砕くのに、聊か時間がかかった。何の間違いかと思い目を開けると、なんとナギはグッと親指を立てているではないか。そしてグッジョブ！　と言わんばかりのいい顔である。どうやら言葉の意味はそのままの意味らしい。全く持って訳がわからない。何で俺誉められたの？　とその日一番の混乱にリュウは陥っていた。残念ながらこの混乱は“竜のなみだ”も防いではくれなかったようだ

「俺が頼む前にもうチームを作ってるとは流石だなマジで！」

「？？？」

そう言ってばしばしリュウの背中を叩くナギを、リュウとボッシュは鳩が豆マシンガンを避けずに食らいまくったような、実に間の抜けた顔をして見ていた。その様子を静かに伺って、非常に満足そうな表情をしているのは先程話を振ったドス黒スマイルエセ紳士。

「……どういう……？」

そしてリュウはやけに上機嫌なナギから一旦目を離し、ぐぎぎとエセ紳士のほうにヘルプを求めるのだった。

「つまり、ナギは最初からあなたに頼むつもりだったのですよ。私達“紅き翼”のライバルとなるチームの作成を、ね」

「……」

ナギが話がある、といっていた話とはズバリその事だった。理由を言ってしまえば、ナギはここで、今までの人生の中でもほぼ最強と言えるかの神皇“フォウル”を相手に修行すれば、思い描く最強になれると思った。だが、考えてみればこの修行の旅でも自分はフォウルに出会うまでまともに戦える相手が居なかった。これで彼を越えてしまったら、目標がなくなってしまう。

そこでナギは思いついた。“ないなら作ればいい”と。

仲良くなった（とナギは思っている）フォウルには、かつて“神皇”と呼ばれだすよりももっと昔に強敵と書いてライバルと読むような相手が居たそうだ。なら、自分達にもそう言ったライバルを作れば、お互いにお互いを超えようとして無限に高みへと昇って行ける。そう考えたのだ。

ちなみにフォウルは自身の事についてはほとんど語っておらず、その話はナギが狛犬二頭から少しだけ聞いた話を自分に都合の言いように解釈したものだという事と、軽々しく“越えたら”と考えるナギの暴走思考は留まる事を知らないと言う事の二点を強調して付け加えておく。

「……で、それを俺にやれと？」

「おう。アルは嫌だっつーし、詠春はまだあっちだし、お師匠は行

方不明だし。お前に頼むのが一番だと思ってな！　まぁまさかもう作ってるとは思ってなかったけどよ」

「……」

てっきり責められると思っていたのにまさかまさかのナギ公認。許可を得たことで、リュウは晴れて“炎の吐息”のリーダーに何の憂いもなく就任出来る事になってしまった。色々と突っ込みたい気持ちもあったが、何かもう色々悩むのが馬鹿らしくなってきていたので、それならそれでその事はいいとありのまま受け入れる事にリュウは決めた。物事が丸く収まると言うなら、わざわざ自分から話を混ぜっ返したりする事もないのだ。

ただし、どーしても納得行かない事が一つ。それは目の前の、やたらとニヤニヤしたエセ笑いが目に付く長身の男。明らかにリュウを非難するような方向への話の持って行きぶり、しかしナギの本心を知っていたはずのその男。

ここでリュウのターン！　リュウはアルへ向けてガン飛ばしを発動した！

「……アルさ……全部知っててさっきみたいな言い方した訳？」

「いやぁリュウの慌てふためく反応とその後の表情、実に素晴らしかったですよ。一粒で二度美味しいとはこのことですね」

リュウのガン飛ばしを右から左へ受け流し、先程の支部での噂話だとかの流れは全てリュウをからかう為の伏線でした！　と堂々とアルは言ってのけた。

トラップ発動！　スルースキル！　ガン飛ばしなどアルには馬の耳に念仏だ！

「ぬぁーーー！！　性格ＷＡＲＹＹＹＹ！！」

「いえいえそれほどでも」

「誉めてＮＥＥＥＥＥＥ！！」

憤慨するリュウ。前より性格悪くなってんじゃね？　という疑惑の視線を否定しないアル。とにかく上機嫌なナギ。久しぶりの和気藹々（？）としたやり取りが広がっていた。そんな中、一段落付いたと見なしてそこへ近付いていく銀髪の男。

「……話は済んだか？」

「！　おう、まぁな。そーだ、紹介するぜフォウル。俺の仲間のリュウだ」

「あ、ちょっ！？」

興奮冷めやらぬままにズイっとナギに押し出され、フォウルと真正面から相対して、リュウは凍った。その瞳は自分の目をじっと見つめ、全てを見通すように全身を射抜いていく。間違い無く気圧されていた。あの2頭の狛犬の威嚇にも耐えたリュウだが、一見すると何でもないタダの人間であるフォウルの雰囲気に一瞬で呑まれてしまっていた。

「……」

「……」

アルもナギも何も喋らない。何か割って入れない一種独特の雰囲気が形成されて二人を包んでいるためだ。少し前のふざけた空気は跡形もない程に冷えきっていた。

「……」

「……」

無言の雰囲気は流れる時の速度を一気に低下させたと錯覚するほどに重い。息が詰まり、呼吸をするのも一苦労。そんなリュウには目の前の相手が何を思っているのか全くわからない。実力差というだけではない。一言も会話をかわしてすらいないのに、何故か尊敬したくなるような、目上の存在と思えるような、そんなよく分からないカリスマのような物をリュウは感じていた。

「……」

「……面白いな」

沈黙を破りフォウルは一言そう言うと、何故か小さく笑みを浮かべた。同時に二人を包んでいた独特な雰囲気は失せ、どこからともなくフォウルの後ろにあの白と青、２頭の狛犬が駆け下りてきていた。

「オンクー、アーター、丁重に持て成せ」

「御意」

「仰せのままに」

した事と言えばひたすらにリュウの目を見続けただけ。だがそれ

で何かに納得したのかフォウルは背を向けてリュウ達3人から離れていく。そこでようやくリュウはプレッシャーから解放され、盛大に息を吐いて見せた。

「良かったなリュウ、お前あいつに気に入られたみてーだぞ？」

「ふふふ、初対面で気に入られるとは流石はリュウですね」

「……そうなの？」

自分が気に入られただなんてまっったくわからなかったリュウは一体今のやり取りのどこにそんな事がわかるポイントがあったのかと、無駄かもしれないと思いつつ二人に解説を頼むのだった。

＊

フォウルの作り出した空間は、何故か外の世界と時を同じとしているらしく、昼夜の概念があった。段々と空を支配している七色のオーロラから出る光が弱くなり、周りに闇が増えていく。リュウとボッシュはナギとアル、そして2頭の狛犬に連れられて、小屋のような建物の前へと案内されていた。この空間へやって来た時に居たようなオンボロではなく、それなりに立派な山小屋らしき建物で、そこでナギ達は寝泊りしているらしい。

そして、二頭の狛犬はどこからか肉や魚、野菜なんかを持ってきていた。ナギとアルは手馴れた仕草でそれらを焼いて食べようとしたのだが、そこでリュウは咳払いを一つ。俺に任せろ、とばかりにその新鮮な材料をかっさらい、ドラゴンズ・ティアから料理道具一

式を取り出したのだった。

～数十分後～

「うめぇぇぇ！！　何だよリュウお前いつの間にこんな料理上手くなりやがったんだよ！」

「これは驚きましたね。リュウにこれだけの才能があったとは」

「まぁそっちの修行も抜かりなく」

リュウの作った絶品料理に舌鼓を打つナギとアル。食えればいいやってな具合にあまり料理に興味が向かないナギと、意外と面倒くさがりなアルは、連日の焼いただけという“男の料理”とは違うきちんとした料理を思う存分堪能していた。こんなに料理ができるならやっぱリュウをさっきの話のに回すのは惜しいな、とナギは本気でそんなことを言っていたり。

ちなみにリュウは狛犬2頭の分も作って差し出していた。その辺は律儀と言うか、まぁ材料を持ってきてくれたのは彼等なのだから当たり前の事である。2頭は若干警戒していたが、美味そうな匂いに釣られ、気が付いたらがっついていた。美味いメシというものは万国共通で場の空気を和ませるのだ。がぶがぶ食べている2頭の様子を見て嬉しく思ったリュウは小さくガッツポーズをしていたりする。

良く戦い、良く食べ、そして良く眠る。ナギはその辺り実に忠実に己の欲望に従っていた。

夜も更けて、小屋の中で毛布を蹴飛ばし大の字になって眠るナギと

すやすやと規則正しい寝息を立てて眠るアル、そしてリュウは横になりながら、まだ起きていた。この不思議な空間に月はないが、その明りと同じ程度には外は明るいらしい。何となく寝付けないリュウは足元で丸くなっている相棒に気をつけながら、ふらっと小屋の外へと出る事にした。

「……」

外に出たからどうだと言うわけではない。ひんやりとした空気に晒されて、余計に目も冴えてしまう。眠れない時に取る行動としてはあまり正解とは言えないようだ。

「……どうした」

と、確実に周りには誰も居なかった筈なのに、突然後ろから声が聞えてリュウの心臓は跳ねた。穏やかながら何でもない一言にさえ腹に響くような印象を受けるその方向に振り返れば、そこに立っていたのは予想の通り、“フォウル”。

「ど、どうも……」

その姿を見てリュウは改めて昔の記憶を手繰っていた。記憶の中では“フォウル”は単独で世界を滅ぼせる程の凄まじい力を持ち、ヒトと言う生き物に迷い、迷った挙句に絶望して全てを無に帰そうとした神のような存在だ。しかしリュウは目の前の人物からそんな物騒な気配は感じていなかった。確かに正面から相対するだけで凄まじいまでの威圧感を感じるが、それが自分に対して害しようとしているものではないことぐらいはわかる。

「……」

「……」

昼間の再現ＶＴＲのように、又もや沈黙が訪れた。だが昼間ほどの重圧はその場になく、その為リュウには少しだが余裕があった。だから“今日は月が綺麗ですね”等と適当な事を言おうとしたのだが、良く考えたらこの場所で月は出ていない。とにかく無言で居るのは精神的に堪えるので会話の取っ掛かりを探していると、リュウより早く目の前の男は口を開いた。

「お前は……何だ？」

「……？　えと……何だ……と言われましても……」

開いた口から紡ぎ出されたのは疑問符だった。いきなり何だ、と訪ねられてもリュウ的にはどう答えればいいのかわからない。

「お前は“龍”か、“ヒト”か、それとも別の“何か”か。お前ほど“異質”な存在を、私は初めて見る」

「……」

フォウルはリュウが何者なのか大体わかっている。分かっている上で問いかけている。異質な龍とヒトの集合体であるリュウは一体どういう存在なのか、と。故にお前は何なのか、と。

「……」

「……答える気はない、か」

「あ、いえ……」

別に言いたくないという訳ではなかった。なんと説明したら良いか、言葉が見つからなかっただけなのだ。自分は何か、と聞かれたらどれが本物なのか。この身体になった元はただの人間？　それとも龍の民の恨みの結晶である生物兵器？　それとも“俺は俺だぞ”とでも言えばいいのか？　改めて問われると難しい質問だった。

「では……お前は、ヒトをどう思っている」

「ヒト……って人間に対してって事ですよね……？」

「そうだ」

リュウは迷った。元々自分は人間だ。今の自分も竜変身が行える龍の民だと言ったって基本的に人間だと思いたい。人間には確かに否定的な面はあるが、肯定的な面だってあるのだ。口ぶりから察するとフォウルはやはり人間に対してあまり良い感情を抱いてはいないようだが、かといってその期待通りの言葉を口に出す気にはならない。

「確かに良いばかりではない、と思いますが……」

「が、なんだ……？」

「あ、その……」

良いばかりではないが悪いばかりでもない。そんな風な事を言おうとして、鋭く射抜くフォウルの眼光に少し言葉が詰まる。リュウが僅かにたじろいだのを見て、フォウルは静かに言葉を続けた。

「ヒトは……無知で、傲慢で……偽り、傷つけ、殺し……どこまでも、愚かだ」

「……」

「身勝手で残忍で、守るに値しない。……そうだろう？」

「……そんな事は、ない……と思います」

「……」

フォウルの言葉は全てに重みが感じられた。一体どれほどの経験を積めばそれだけの重みを言葉に含ませられるのか、リュウには想像すらつかなかった。だがその重たい言葉を否定するには、せめて自分の中にある記憶や思い出全てを言葉に乗せて対抗するしかないと悟っていた。勝ち負けで言えば勝てるとは思えないが、しかしフォウルの言葉を肯定するのは嫌だという気持ちの方が強かった。それは元ヒトとしての意地と言い換えても良いかもしれない。

「……」

「……」

少しだが重圧が増し、三度訪れる静かな世界。そしてフォウルは――――笑った。

「……やはり面白いな。どうやら本当にお前は龍であり、ヒトであるらしい」

そう言うとフォウルは、光り輝く何かをリュウに向かって放り投げた。

「お、っと。……？　……あの……これは？」

受け取ったそれは金色に光り輝く林檎のような形の果実だった。不思議な力が感じられるがそれがどのような効力を持っているのか、何の意図でこれを投げたのか、どうにもリュウにはわからないことだらけだ。

「それは神の果実“アンブローシア”。お前がヒトに飽いたら使え」

「……使うと……どうなるんですか？」

「それは龍を爆発的に活性化させる。お前は真に龍となるだろう」

「！！」

“真”とは何か、リュウには分かった。余計な事だけはすぐに分かってしまった。これを口にしたら、恐らく自分は龍そのものになる。その時“自分”がどうなるのか、聞かずともわかってしまったし、聞きたくもない。ただじっとその果実を見つめていた。

「……」

「お前のような存在と出会う、か。“異質”な人間に付き合うのも、悪くはないものだな」

“異質な人間”と言うのはナギの事だと察しはつくが、一体何を考えてこの果実を渡したのかと視線を果実から正面へと戻した時には……既にフォウルの姿はそこにはなかった。

「……いないし……ま、くれるって言うなら貰うけどね」

使う事はないけどね、と心の中で付け加え、僅かな時間にドッと疲れを増したリュウはそのアンブローシアと言う名の果実をドラゴンズ・ティアにしまいつつ、今なら絶対寝付けるだろうという確信と共に小屋へと戻るのだった。

第十二章　5、対面

何はともあれナギやアルとは久しぶりの再会という事で、お互いの近況報告やら何やらしている間にどんどんと時が過ぎていっていた。

具体的には前にディースと日本に行った時のお土産を渡したり、ちょっとした縁で出会ったナイスダンディ“アナベル・ガトウ（仮名）”をどうよと推薦してみたり、オリンポス山中にある新築の家をタダでいいから是非使って欲しいと怪しい営業活動したり、例によって修行してどれくらい強くなったのかとナギからバトルを挑まれたり、あんちょこ見ながら呪文を唱える所をアルに見られてからかわれたり、かと思えば「だよな！」とナギにあんちょこ仲間が出来た事を嬉しがられたり、と言った具合である。

さらにはもちろんリュウもフォウルに無理やり挑戦させられ当然ながら数十秒で撃沈したり、手も足も出なかったことに少し意固地になったリュウがこれならどうだとドラゴナイズドフォームに変身してリベンジしたり、予想をはるかに越える力に本気と書いてマジになったフォウルと人知を超えた激闘を繰り広げたり、だがいい所で空間に無数の亀裂が走った為にやむなく引き分けとして終わったり、続けてテンションの上がったナギにも挑まれそうになったり、それを何とか「疲れてるからまた今度で」とかわして安堵の溜息をついていたり等々、かなり密度の濃い日々を送るハメになっていた。

「まぁ確かに前よりは大分強くなってっけどさ、まだそんなんじゃ俺たちのライバルっつーにはちっと物足りねーな」

「そりゃまぁ……ご尤もで」

そして今はとある昼下がり、昼食を取り終えた3人＋一匹で食後の雑談タイム。素のリュウの実力を大体把握したナギの評価はそんな感じに下るのだった。現状フォウルと互角以上である変身については、位置付け的には切り札なので取り合えずは置いておくとして、そのままのリュウは確かに魔法も大分使えるようになったし、全体的な強さは以前とは段違い。最低でも別れる前のナギとどっこいくらいには強くなっているはずであった。しかし今現在のナギの強さはさらにその上の上を行っていた。懲りずにフォウルと何度も戦っているナギは元々の素質も手伝って猛烈な勢いでレベルアップしているのだ。

「やはり梃子入れが必要ですかねぇ」

今の素のリュウよりもレベル的に強くはないと聞いている“炎の吐息”の面子では、“紅き翼”にとっては全然もってライバル足り得ない。と暗にアルは言っていた。まぁそんな結論になるだろう事はリュウにはわかりきっていたのだが。そもそもライバルを自らの手で育てようという考え自体が酔狂の極みなのはこの際言わないでいる。

「何か手でもあるの？」

「そうですねぇ……」

まぁ確かに今のままで“紅き翼”のライバルを名乗るなんてとんでもない。真面目に考えてもちゃんちゃらおかしいレベルだ。リュウとしてはみんなのパワーアップはないよりもあった方が断然いいので、ちょうどいい機会である事だし、修行するならまとめてフォウルに師事しようかな、等と流され気味に考えていたのだが……し

かしその案はナギの一言で却下とされてしまう。

「何が駄目なのさ？」

「そっちの手の内がわかっちまったら面白くねーだろが」

同じ修行場で合同っぽくやってたんじゃ戦う事になった時にリュウ達のチームの情報が筒抜け過ぎて面白くない。自分達の情報はリュウを通してダダ漏れでも別に構わないという中々にナギらしい言葉だったが、その次に出てきたセリフにリュウはピシッと固まった。

「つーわけで、俺達はフォウルの元で修行するから、お前らは別の所で修行しろ。で、尚且つ俺達に追いつけ。な？」

と、なんとも理不尽極まりない要求をナギは突きつけてきたのだ。

「いやそりゃ無茶だろ……」

ナギやアルは既に自力がある上に天才といって良い才能を持っている。“男子三日会わざれば活目して見よ”と言うが、ナギに関してはまさにそれ。おまけに会わなかったのは三日どころではないのだから、その成長ぶりたるや推して知るべしだ。それに対して一応ツワモノの部類ではあるが、ナギ達ほどぶっ飛んだ才能持ちという訳ではないあの面子に普通の修行でナギ達レベルに追いつけと言うのは難しい。難しすぎる。

「まぁお前ならやれんだろ。とにかく、頼んだぜ」

「……」

「た　の　ん　だ　ぜ　！」

「……」

とまぁリュウの顔には大きく見開きサイズで「無・理」と書かれていたのだが、それをわかっているのかいないのか、駄目押し気味に満面のザ・ナギスマイル攻撃でもって恐らくそれまでで一番の難題を押し付けられ、リュウの脳内お悩みゲージは加速度的に上昇していく。そんなある日の午後の事であった。

＊

ナギとアルとのフォウル空間生活も早6日ほど時が過ぎ、7日目の朝になってそろそろ断りきれなかったナギの頼みをどうするか、小屋の裏手の小川で顔を洗いながら夏休みの宿題に手を付けだすような気分にリュウが陥っていた所、その話を聞きつけたらしいフォウルの使い魔である狛犬二頭――青い方をオンクー、白い方をアーターと言う――が、リュウの背後からのそりと忍び寄り、声を掛けていた。ちなみにこの二頭はリュウが作るメシが気に入ったのか、今は割と好意的に接してくれるようになっていたりする。

「……【拳を極めし者（ラグナライダー）】？」

「そうだ。かつて神皇様と世界を二分した御仁がそう呼ばれていた」

「未だ決着は着いておらぬ。神皇様に勝るとも劣らぬ豪の者よ」

「へー……」

何かと思えばかつてフォウルが“神皇”と呼ばれだす前に存在したというライバル、それに会ってみたらどうだと言うのである。フ

ォウル相手に修行するナギやアルに対抗するにはどうすれば良いか悩んでいたリュウにとってはかなりナイスな助言だった。何しろフォウルと同等レベルの存在が他にも居るというのだ。ならそっちに何とか修行をお願いすれば、少なくとも質だけで見ればナギ達と互角の修行が出来るという事になる。

「その人（？）ってどこに居るかまでは……」

「知らぬな」

「だがまだ生きてはいるだろう」

「……そっすか……」

場所はわからないと聞いて少し肩を落とすリュウ。生存はしているだろうがそれ以外の情報は全くのノーヒントで探すとなるとこれまた難しい。しかもフォウルと同等の強さなのに全然有名じゃないという事は、やはりどこかでひっそりとしているっぽいわけで、そうなると本当にお手上げだ。まぁ情報としてはありがたいモノなのでキープはしておくことにした。

「それにしても……【拳を極めし者（ラグナライダー）】なんて呼ばれた存在のライバルだったんなら、フォウル……さんはその時どんな風に呼ばれてたの？」

ふとリュウの頭に興味が湧いた。今でこそ神皇と呼ばれているが、じゃあその昔はどんな風に呼ばれていたのだろうか。すると二頭は少し間を置いてから、何か昔を懐かしむように口を開いた。

「あの頃の神皇様は【最強を求めし者（ペイルライダー）】と呼ばれ、ヒトどもから恐れ敬われていたのだ」

「こうしてヒトの相手をするなど当時は考えられなかった。思えば神皇様も大層丸くなられたものだ」

「そ、そうなんだ……」

昔の事を思い出して目を細める狛犬という穏やかで和やかな絵と、会話自体の物騒さのギャップに曖昧な返事をしつつ、ドラゴンズ・ティアから取り出したタオルで顔の水気を拭っていると……不意にポケットで何かが振動しだした。なんだろと思って探ってみると、どうやらカードの一枚がプルプル震えているらしい。掴んで取り出したカードの絵柄は翡翠色の龍。

「ハルフィール？」

≪ねぇねぇちょっとちょっと、あんた達にお願いがあるんだけどさ！≫

取り出したリュウの掌の上でクルクルと踊るように回るカードからは高めの声が響いていた。何だと顔を見合わせるオンクーとアーター。何か妙な事言って怒らせたりしないだろうな、とそのおかしなハイっぷりにちょっと嫌な予感なリュウである。

≪あんた達の主人の彼さ、あたし達と一緒に来てくれたりしないかしら？≫

「ちょっ！？　何言ってんの！？」

いきなり飛び出したフォウル勧誘発言。ビックリしたのはリュウだけではなかったようで、オンクーもアーターも僅かに目を見開いてカードから聞えた言葉の意味を吟味しているらしい。

「……本気で言っているのか？」
「我等が主にヒトに付き従えと？」
≪あたしはいつだって本気のホンキよ！≫
「おいィィ！？　マジでやめれ！？」

水龍さんによる一方的な空気読まない発言により、終始和やかだった筈の空気が一転して一触即発なまでのシロモノとなっていた。嫌な予感が嫌な方向のさらに斜め上に的中したせいで焦りまくるリュウの図。

「そんなん無理だし！　っていうか何で今そんな事言い出してんの！？」
≪だってあの彼、“古龍”でしょ？　あたし古龍って初めて会ったんだもん！　おまけに超強いしカッコいいし！≫

どうやらハルフィールはフォウルにいたくご執心のようである。だがもちろんそんな戯言を目の前の使い魔達が許容するはずがないし、仮に本人に直接言いでもしたら天災レベルの攻撃でオーヴァーキルされてしまいそうだ。犬達の顔が全く笑っていない事を必死に諭しても聞く耳持たずにギャーギャー喚きたてるカードに、自分だけじゃ宥めるのが無理そうだと悟ったリュウは急遽他3体のカードを引っ張り出してお願いし、無理やりハルフィールを押さえ込んだ。

他3体も「恐れ多いわ！」とリュウに同調したため、何とかそれ以上の向こう見ずな発言は押さえ込む事に成功。最後には「せめてサインだけでもちょーだい！」と、中々の往生際の悪さを見せるハ

ルフィール。被疑者を確保し素早くポケットの中へ連行すると、すぐさまリュウはオンクー・アーターに土下座せんばかりの勢いで頭を下げた。伝わってくるピリピリした空気から、その機嫌が簡単には直りそうもないと即座に判断したリュウはエサでの懐柔を迷わず選択することにしたのだった。

その後、ムスッとご機嫌斜めに見えるのに何故か律儀にお座りして待っている狛犬二頭の前で、リュウが特別料理を振舞っている姿はナギアルボッシュにしっかり見られ、“何やってんだ？”と思われたとかなんとか。

＊

さらに翌日になり、リュウはオンクーとアーター、そしてフォウルに挨拶してからその空間を後にする事にした。ナギからの頼まれ事であるチームの強化を早速みんなに知らせて実行する為だ。方法はフォウルのライバルである【拳を極めし者（ラグナライダー）】という謎の存在を探して、その元で修行する事。「うん、それ無理」と放り出すのは簡単だったが、せっかく助言してもらった事だし、一応探すだけ探してみようと思ったのだ。

ちなみにまた会うだろうナギ達には適当な声掛けのみである。

あのボロボロの小屋に最初に来た時にはわからなかったが、よく見るとその床には魔方陣のような紋様が描かれていた。その上に立つと転移が発動する仕組みになっているらしく、早速、と転移すると以前見たムクトの岩壁にある隠し通路に出た。そのまま特に変化も無い洞窟を進み、幻の岩を通り抜け、浮遊魔法で谷間へ飛び出すと何日かぶりに本物の太陽光線の刺激を受ける。

何となくインドア生活だったような気がしたので一旦大きく深呼吸し、そしてフェアリドロップを取り出してさらなる転移の準備。使用してみるとその赤い宝石は一段バージョンアップしたのか、掲げた瞬間リュウの周囲にどこからともなく枯れ葉が渦を巻いて集まり、それに包まれるや否やフッとカッコよくリュウの姿は掻き消えた。「忍者かよ！」と突っ込みを入れた辺りで目の前にはスイマー城が。作り直しを要求するか微妙に迷う演出ぶりである。

「さぁて、あいつらぁどうしてっかね？」

「いやみんなしっかり修繕とかしてくれてるでしょ……うんきっと……多分……」

ボッシュの呟きに生返事を返し、リュウは城へ向けて足を一歩踏み出――――

「リュウの仲間ってどんな連中なんだろうなー？」

「私は筋骨隆々の大男達ではないかと思うのですが」

――――す動作をピタっと止めた。

「いやいや、きっとスンゲー美女とかだったりするんじゃねーか？」

「なるほど、ああ見えてリュウは結構マセてますし、その線はありですねぇ」

「……」

さてこの場合今リュウの後ろには一体何が居るのだろうか。まず

聞えてきた会話から想像するとリュウを知っている人物である。次に人数は複数である。そして聞えたのはリュウにとってひっじょーに聞き慣れた声である。以上のことより導き出される答えは、つまり後ろを振り向きたくないという事であった。しかし願望はどうあれスルーする訳にもいかないので、どうするかって言ったら振り向くしかない。仕方なくリュウは諦めモードを全力全開で前面に押し出しながら、くるりと後ろを向いた。

「よっ」

「おやリュウ、どうしました?」

「……っていうか！　何で付いてきてんの!?」

「「面白そうだから」」

なんという事だろうか。ナギとアルは何故かリュウに付いてきていたのだった。リュウの作ったというチームのメンバーにもちろん二人は興味津々であったので、ひっそりこっそり付かず離れずリュウの後を付けていたのだ。そんな二人をフェアリドロップは同行者と判断したらしい。その仮説に至った瞬間、リュウの中で八つ当たり気味に赤い宝石のリテイクが全会一致で決定した。

「修行は!?　情報とか筒抜けじゃ嫌なんじゃ!?」

「まーかてー事言うなって。一応どんな連中か顔くれー見とこうと思ってよ」

「そうですよ、たまには息抜きも必要ですしね」

「相棒まぁいいじゃねぇか。どっちみち早いか遅いかだぜ？」

「ぐぬぬ……」

三方から真っ当な意見を言われてリュウは反論不能。もちろん見られて嫌な訳ではないのだが、例えるなら友達に別の友達を紹介する時のような、なんとも言えない気恥ずかしさみたいなものがあり、それに対する心の準備的措置が整っていないのだ。まぁぶっちゃけ半分はノリで突っ込みを入れていることも否めなかったりする。

「で、どこにいんだよ？　その“炎の吐息”ってヤツのメンバーは――――お？」

ワクワクしながら早速辺りを見回すナギの視線の先に一人、暢気に城の方を向いてキャンバスに何かを描いているらしいお方が居た。その姿は小太りで、明らかに人間ではない緑がかった肌が顕わとなっている。

「～♪～♪～」

ベレー帽を被り、鼻歌交じりに絵筆をパレットとキャンバスの間で往復させているのはご存知フランス被れのカエル紳士。

「おあ？　なんだありゃ！？　でっけーカエル！！」

「おや、匍匐族ですねぇ。こんな所に居るとは珍しい。あまり見かけない種族なのですが……」

「ふーん、まぁ観光にでも来てるんじゃねーのか？」

ナギとアルがアレはなんだと盛り上がる中、城の絵を書いていたらしいその二足歩行カエルさんは、視界の端っこに騒ぐリュウ達の姿を認識すると筆を動かす手を止め、屈託の無い笑顔を浮かべながらペッタペッタとその側へとやって来た。

「おーう、ムッシュ・リュウではないですか。帰ってきていたのですね。皆さん、ずっとあなたを待っていたのでした」

「あ、はい……えーと只今帰りました……？」

「……？　ちょっと待てリュウ、こいつまさか……？」

「そのまさかだぜナギッ子よ」

イヤに親しげにリュウと会話しだすカエルを見て、ナギは素直に驚いた。まさかと思って訪ねてみれば、案の定リュウの仲間の一人だという。どう取り繕ってもカエルにしか見えないのが仲間だと言うのだから当然と言えば当然の反応だが、もちろん驚きはそれだけでは終わらない。

「おう、リュウじゃねぇか。帰ってたのか」

「あ、ランドさん」

次にリュウ達の前に現れたのは巨躯の甲殻族ランド。右手には鍬らしき農具を担ぎ、左手にはバケツ、首には手拭い、そして麦わら帽子、と明らかに今しがた畑仕事を終え、いい汗かいた！　と言いたげな風体だ。

「おおでけぇ。　……って待て待てこいつもなのか！？」

「これは……想像以上にいい身体をしていますねぇ」

「……。おいリュウ、何だよこいつらは？」

「あーその……」

リュウの側にいるイケメン少年と怪しい微笑みを携えた青年？を指差して問うランド。答えようとしたものの、しかしリュウに説明の機会は訪れない。

「あーー！！　リュウ！！　やっと帰ってきた！！」

さらに続けて現れた元気爆発虎娘。片手に毛深い人型をした何かを掴みながら、彼方の方角から猛スピードでドドドドドッと走って近付いてきていた。

「ア、アネさん、ちょ、首が、キマって……く、くるし……」

と、今にも消えそうな声がリンプーの持つ人型の何かから発せられている。もちろん正体は猿の人。リンプーの傍若っぷりに相当疲れているのかボロボロだ。

「おかえり！　こっちは大変だったんだよ！　色々……って、あれ？　そっちの人達は？　……あ、もしかして新しい仲間とか！？」

ハイテンションで捲くし立てるリンプーとボロ雑巾のように引き摺られているステンを怪訝な目で見つめるナギ&アル。段々と驚きは呆れへとシフトしているような気配をリュウはありありと感じていた。

「今度はフーレンの女に……なんだ……猿……？」

「ナギ、猿ではなく高山族と言うのですよ。……いやしかし……それにしても……」

「……何か？」

アルのリュウを見る目が何か生暖かいモノになっている。非常に居心地悪く感じる視線にリュウはジト目を返すが、それが効果など上げないことは先刻承知の上だ。それはそれとしてリンプーその他にナギとアルについての説明をしようとすると、そのがやがやとした喧騒が城の中にも伝わったのかタイミングがよかったのか、大きな入り口の方からもわらわらと人影が出てきて又しても遮られることになった。

「一体何かしらー？　……あ、リュウ君。おかえりなさーい」

「……お……おかえり……」

最初に出てきたのは学者帽にピンクの長髪、間延びした声の兎っぽい女性と葉っぱを加えた侍姿で刀を持った犬のような男の二人の野馳り族、

「ったく愉快だねぇ……何で俺まで引っ張り出されるんだよ」

「リーダーの帰還だ。出迎えるのが礼儀というものだろう」

次に出てきたのは少しだるそうで鋭い雰囲気の虎男、ランドに勝るとも劣らない巨躯を誇る鰐男、

「やっと戻ってきたようだね……ほらアースラしっかりしな！」

「ううぅ……も、もうゴキは嫌だ……」

さらには青い顔をして耳を垂れ下げている狐風な女性と、それに呆れつつも肩を貸しているふわふわした尻尾を持った女性、

「ようやく戻りましたか。全くリーダーと言う立場ならこれほど時間がかかる場合連絡の一つも入れるのが当たり前なのですが……」

そして最後に短い銀髪に眼鏡の光る、キリッとした女性が出てきていた。心なしかリュウに対する小言が聞えるが肝心の本人はもちろん聞えぬフリである。

「……」

「……」

「どうしたんでぃおめぇら？」

次々に現れる亜人達の姿に、いつの間にか驚く事も口を開く事もしなくなっていたナギとアル。この多種多様な種族の人間達が全員リュウの仲間である事は疑いようも無い。唯一種族として「人間」らしく見えるのは最後に出てきた銀髪の女性だが、彼女にしてもよく見てみると耳が尖っている。純粋な「人間」が一人も居ない、まさに完全無欠な亜人ワールドである。

「いやよ、その……もう何ていうか……」

「ええ、よくもまぁこれだけの……」

「何？」

「「個性豊かな面子を集めたもんだな、と」」

「……まぁね」

ナギとアルの感心したような呆れたようなそのセリフに、リュウは苦笑いを浮かべてそう答えるのだった。

第十二章　6、請求

スイマー城の概観は見違えるほどに綺麗になっていた。ランドとガーランドという二大力自慢を中心に壊れた箇所の補修や配管の設置などを行い、さらに他の男性陣による細かな修復作業によって往年の姿を取り戻す事に成功していたのだ。もちろん内部もリュウが城を離れた時とは大分様変わりしており、床一つ取っても破損どころか汚れさえ見当たらないほど手入れが行き届いている。在りし日の姿を容易に想像させるその城は、さぞ名のある王族が住んでいたのだろう荘厳なオーラを放っているのだった。

「俺はナギ・スプリングフィールド。かの有名な“紅き翼”のリーダー、“千の呪文の男”とは俺のことさ！」

で、現在リュウが連れて来た謎の少年と痩躯の青年？の自己紹介タイムの真っ最中。城の会議用らしき二階に位置する大広間にて、ナギのキメ顔がズビシッと炸裂していた。

「「「……」」」

片手を腰に当て、もう片方の手は軽く握り立てた親指で自らを自慢げに指す。良く通る大きな声で素性を明かしたナギの顔を、リュウの仲間たちは皆一様に怪訝そうな目で見ている。ナギ以外誰も喋ろうとしないのでやたらと静かだ。そんな何だろコイツ？的な視線を真っ向から浴びてもなお、リュウの感性で言えば恥ずかしくて言えそうもない文句をさらっと口にしてのけるナギはやはり大物であると言えよう。

「……なぁリュウ、なんかノリ悪くねー？」

「いやみんな多分驚いてるんじゃないかな……」

実際、リュウの言うとおりであった。リュウを通して“紅き翼”に関しての情報はいくらか聞いていた“炎の吐息”のメンバーだが、まさかそのリーダーがリュウとさして変わらない少年だとは思っていなかったのだ。てっきりリュウが仲の良い友達でも連れてきたのだろうと思っていた者もいるくらいである。

「まさか……本当にこんな少年だったなんて……」

そう呟いたゼノを中心とするトリニティの一行は悠久の風に所属していたため、“紅き翼”のリーダーが子供であるという話は知っていた。だがこうしてその事実を目の当たりにすると、以前に“紅き翼”が次々と打ち立てた実績のあり得なさと目の前にある能天気そうなナギの雰囲気のギャップのせいか、彼女たちは言い知れぬ敗北感に襲われているのだった（モモは除く）。

「では続いて……初めまして皆さん。私はアルビレオ・イマ、又の名をクウネル・サンダースと申します。よろしくお願いしますね」

ナギの自己主張が済んだと見るや、いつものエセスマイルを浮かべたまま聞いてもいないのに偽名までアルは名乗った。ナギのなーんも考えてないおバカそうな感じとは違い、その何か腹に一物隠してそうな雰囲気に、やはり怪訝な視線を投げかけるのはリュウとボッシュ以外の面子である。

「あの……あなた達がリュウの“紅き翼”の仲間なの？」

そんな視線の中から一人、おずおずといった風にフーレンの少女

が尋ねた。彼女にしては珍しくどことなく縮こまった感じである。

「おう、そうだぜ」

「今日来たのってもしかして……その……」

「ん？」

「リュウを取り返しに……とか？」

そう言いながら、バツの悪そうな顔をリンプーはしていた。そもそもチームを立ち上げようと提案した元凶は自分であるのだ。なんとなくリュウをリーダーにしてしまったが、元のチームの人から見たらやっぱりいい気はしないだろうな、と少々意外だがそんな風に考えていた。

「あ、ちげーちげー。そういうわけじゃねーから安心してくれ」

「その辺りの経過については後でリュウから聞くといいと思いますよ」

「？　……そうなの？」

「あ、話とかは全部俺に振るって訳ね……」

こうしてまた一つリュウに説明責任が増えるのだった。

そんなこんなでリュウの作ったチームの様子を見に来ただけだと聞いてリンプーはホッと胸を撫で下ろし、それを皮切りにざっくばらんな質疑応答のお時間と相成った。持ち前の明るさと馬鹿っぽさ

のおかげでナギはもちろん、胡散臭いけど悪い人間ではないと理解を得られたアルも同様にリュウの仲間達と打ち解けていった。

もちろんその強さについても見てみたいという話になり、手合わせ願う、とガーランドが申し出ると二つ返事でナギが承諾、素のリュウを凌駕する実力を惜しげもなく披露されて驚愕の渦に巻き込まれる炎の吐息のメンバーだったりする。

＊

あっという間に時間は過ぎて夕暮れ時。ナギとアルを含む全員に期待の言葉を掛けられたせいでリュウは厨房へと向かっていた。期待されちゃあ裏切れない、俺一応リーダーの筈なのになぁと思いつつ、もう厨房では火も使えるし一通りの調理はできると聞いたので興味が刺激され足取り自体は重くない。

「よっし、今日はなんか気合入れて作るか」

「おう、豪勢なもん頼むぜ相棒」

フォウルの空間で余った食材を貰ったから量的には何とかなるなと考えつつ、テクテクとまだ慣れない城の中を彷徨いながらも厨房へと辿り着いてその中へと一歩進むと……そこには見慣れた小さな姿が3つほど浮いていた。そう言えば外のどこにも居なかったし、どこ行ったんだろうと思ってみればこれである。

「……お前ら何してんの？」

「あ、リュウのヒト！」

「帰ってきたよぅ！」

「いきなりで申し訳ないけどお願いがあるよぅ！」

この妖精達にも申し訳ないと思うような殊勝な心があったんだ、と中々に失礼な事を考えながら、リュウは彼女らの手元に目をやる。そこにはコンロがあり、フライパンがあり、その上に良くわからない黒い塊があった。

「……何それ」

「こ、これはその……」

「れ、練習してたのよぅ」

「そ、そうよぅ！　それはいいからとにかく私たちにお料理教えて欲しいのよぅ」

「……なんで？」

リュウからの疑問に妖精達は揃って小さなため息をついた。何でもリュウが城を離れた直後辺りから、増えに増えていく妖精達の間に良からぬ不満が溜まりだしていたらしい。何かと聞いてみれば「美味しいご飯が食べたい！」という直球ドストレートな要望であった。「自分達だって食べたいけど料理なんてできないから我慢してくれ」と何とか抑えてはいたものの、最近になって一般妖精達は「もう我慢の限界！　美味しい物食べさせてくれないとストライキ起こすぞ」と労働者の権利を振りかざすようになってきており、これ以上は暴動に発展しかねないと悟った妖精リーダー達が苦肉の策としてリュウのように自分達で作れないものかと挑戦していた、とい

うのが事のあらましである。

「なるほどねぇ……わかった、いいよ」

「！　ホント！？」

「まぁそれくらいならね」

何とも妖精達の社会も意外と大変なんだなと思いつつ、リュウとしては今までずっと嫌々仕事していた妖精達が、きっかけはどうあれ自分から教えて欲しいと頼んできたその成長ぶりに心を動かされていた。以前なら料理を“作ってくれ”と言っていただろうに今は“作り方を教えろ”ときたのだ。もちろん料理を教えるのは自分でも出来るし、別段目くじら立てる事もないか、と協力する気持ちになっていたのだ。

「じゃあ今から晩飯作るからとりあえず最初は見学からね」

「あ、ちょっと待ってよぅ」

すると妖精の一人がどこからかホイッスルを取り出し、それを思いっきりけたたましく吹き鳴らした。

「っ！　……何すんだよいきなりうるさ……っておぅわっ！？」

「みーんな教えて欲しいみたいなのよぅ！」

「「「よろしくお願いするよぅ！！」」」

何だと思う間もなく、わらわらと大量の妖精達が厨房に集結して

いた。料理を教えて欲しいと思う妖精達はリーダー3人だけではなかったのだ。厨房の半分以上を埋め尽くす勢いで入ってくる大量の妖精達。物凄い数の瞳に凝視されるのは流石のリュウもプレッシャーを感じざるを得ない。

「うーわ何これすっげぇやり辛いんですけど……」

「ま、自分で言った事だぁな。頑張れ相棒」

「……ちきしょう」

リュウの一挙手一投足を見逃すまいと真剣な眼差しを向ける妖精達。食への凄まじい執念ぶりを間近で感じつつ、リュウは自分の言動を少しだけ後悔しながら夕食の下拵えから始めるのだった。

＊

何だかんだで終始賑やかだった夕食も終わり、ナギとアルは一泊したら帰るという事なのでその日はスイマー城に泊まる事になった。城にはまだ大量に空き部屋があるので問題はない。リュウ用に割り振られていた部屋は狭くなく、かといって広すぎず、シンプルだが質のいい寝具やアメニティグッズの置かれた部屋である。中々の趣味の良さが伺えるこの辺りの配備等は、みなトリニティの女性陣が行ったというから後でお礼の言葉を伝えようかと思ったり。

「おー、ふかふかだ」

ボフッとベッドに飛び込み、その柔らかで肌触りのいい感触を確かめる。フォウルの空間では寝床は適当に敷いた毛布くらいしかなかったので久しぶりにいい夢が見れそうである。

「おほ、これ俺っちのベッドって事でいいんだよな！」

リュウが飛び込んだベッドの傍ら、ちょっとした台の上には小さな籠があり、その中にクッションが置かれていた。ちゃんとしたボッシュ用のベッドである。ここまでしておいてくれるとはキッチリお礼言っておかないとな、とリュウとボッシュで軽い雑談のお時間。

「……」

少しして話が途切れ、ゴロリと仰向けに寝っ転がって石造りの天井を見る。全くの自由な時間というのも久しぶりなので、これからどうするかリュウは考えていた。

今やらなければならない事は何か。そもそもの自分の目的は何だったか。近頃その考えが少し揺らいできていた。まず昔の知識を元にして、とにかくこれからこの魔法世界で起こるであろう戦争を止める、と言うのが大前提にある……筈だった。

しかし世界は平和だ。

これまで全世界と言うわけではないにしてもそれなりに色々な地域を回ってわかったが、個々の街の中や地域的な問題はあるにせよ、それらが世界全体を二つに割るほどの争いの元かと言うとそうは思えない。

ヘラス帝国内にもキナ臭い話は今の所聞かないし、まだ行った事のないオスティアだとかも伝え聞く限り全く平和だ。特に人間と亜人の仲が悪いなんてこともない。となると、もう自分の考えを改めるしかないのだろうかとリュウは思う。そもそも本当に戦争なんて

起きるのだろうか、と。根拠になっているのは自分の昔の記憶だが、考えてみれば全くその通りになるという保障はどこにもない。

「完全なる世界」という組織はどこかに存在している事は確実、だがその組織がどこにあり、どうやってここから世界に戦乱の渦を巻き起こそうというのか皆目見当がつかない。いや、それ以前に彼らは本当に戦争を起こすのだろうか。そして仮に何かをしようとしてたとしても、あのドラグニールでのバルバロイ以降全く手掛かりが掴めていない。これでは手の打ちようがない。

「……」

だが今のままならまぁどちらにしろ時間はあると見える。それについては一通り今やることの区切りがついてからでもいいか、とリュウは結局保留として結論付けた。

次に気になるのはあの人を操る腕輪の事。一応明日以降に天然学者さんと相棒のフェレットが探す為の装置を作ってくれるらしいので取りあえずはそれ待ち。一応悠久の風本部にも報告をしておくべきだろう。

そして目下最大の問題は自分の立場とチームについて。“紅き翼”の一員で、何故か成り行きで“炎の吐息”のリーダーとなってしまった。そう言えば夕食の席じゃ「リュウの二つ名考えようぜ！カッコいいヤツ！」とナギが盛り上がっていたが、変な呼び名を付けられた日には表を歩けないのでその辺には気を配っておくとして。

今、このチーム“炎の吐息”には特に目的のような物がない。精々“強くなる事”くらいだが、どうせなら人助けとかの目的を“紅き翼”から引き継いでもいいだろう。その前に修行の話だが、これ

はフォウルのライバルという存在についてハルフィールが口走った事が探す手掛かりになりそうだし、明日以降はそれをする事にするか。

と、リュウがこれからの事の大体の優先順位を脳内で決めたところで、コンコンと部屋に軽いノックの音が響いた。

「はーい」

「失礼しますよ」

ガチャリとドアを開けて顔を見せたのは銀髪メガネのゼノ。さっきお礼をしなきゃなとボッシュと話していたのでちょうど良いタイミングだ。

「あ、ゼノさんちょうど良かった。なんか色々と手配してくれたみたいで、ありがとうございます」

「いえ……それより、もう少し早く帰って来てくれれば良かったのですが、今はそれを言っても仕方ありません」

「？」

何が言いたいのかよくわからない、とリュウが首を捻ると、片手に持っていた紙の束のような物をゼノは差し出した。何だと思ってそれを受け取ると、紙には何か文字列と数字が書かれている。それも一枚一枚全てに。パラパラとその紙の束を捲っていく度、段々とリュウの脳裏に嫌な予感が込み上げてきて、額にはうっすらと汗のような物が浮かびだしていた。

「……これは……その、何でしょうか？」

「この城の修理に掛かった費用と雑費、その他諸々の請求書です」

「え」

リュウは固まった。なるべく考えないようにしていたが、やっぱりそりゃそうだった。これだけ至れり尽くせりな城の整備をするのに金が掛からない訳がないのだ。そしてその請求先がどこに行くかと言えば、曲がりなりにもリーダーやってるリュウの所だ。責任者の立場とはつまりはそういう事で、コレばかりからは逃げられない。

「何これ……え……うそ……」

一番最後の紙に書かれている合計らしき金額を見て、リュウは髪の色だけでなく顔色までサッと青くなった。まさに一瞬、血の気が引くとはこの事である。

「な、ななじゅうにまんろくせんさんびゃくななじゅうよん……」

そこには７２６３７４Ｄｑという金額が書かれていた。どれだけ目をこすり、桁を数え直してもその数字は変わらない。こういう時って本当に気分が悪くなるものなんだとリュウはある意味冷静に自己分析していた。

「今はこの城を担保に借金という形で借りています。あと１週間ほどで返済できなければ利子が膨れ上がり、最終的にはここを明け渡すことになるでしょう」

「えええぇぇ！？」

それを聞いたリュウの顔色は蒼白から土気色へと変化していた。どれだけ強さを追求しようとも、これに対しては一切意味を成さない。修行どころではない、それこそ致命的な問題の発生である。

「……とにかく、この事は明日話し合いましょう。では……」

「……」

そう言ってゼノが出ていった後、見事に魂が抜けたような表情のまま、ポフッと力なくリュウはベッドに体を横たえた。

「……なぁボッシュ、助けて……」

「……」

「寝たふりかよ……」

ベッドに突っ伏し、返事をしようとしない薄情な相棒に恨み事を述べつつ、受け取った請求書の束に再び目を通すリュウ。折角のふかふかベッドであるのに、その日リュウはほとんど眠る事が出来なかったとか。

第十二章　7、商人

早朝。

空が深い青と薄い白とに彩られ始める天文薄明。日の姿はまだ見られず、大抵の生物がその活動を開始すらしていないであろうそんな時間に、リュウは城中を妙なテンションで駆け巡り、緊急と題してメンバー全員を大広間に集めていた。常識で考えなくても非常識なお時間に、皆当たり前のように起こされたわけで、「朝早すぎんだろオルァ！」といった正論過ぎる文句がそれこそ至る所から聞こえて――――きそうなものなのだが、何故か誰からもそんな声は上がっていない。

「んじゃぁこれより第一回炎の吐息緊急会議を始めます」

全員が召集に応じて椅子に腰掛けるのを見届けると、部屋の奥にドカッと陣取っていた青い髪の少年はぶっきらぼうにそう言い放った。どうにもいつもの調子とは違い腕を組み、髪はボサボサ、目は座っていて微妙に目の下に隈が見受けられる。そして全身からこれでもかと立ち昇っている不機嫌オーラ。後ろにはどこから取り出したのかキャスター付きホワイトボードがあり、黒く大きく乱暴な字で「緊急命題！！」と書き殴ってある。その有無を言わせぬ妙な迫力が抑止力となってメンバーに抗議行動を躊躇させているようだ。

「さて早速本日の議題ですが……まぁ皆さん知っていると思いますが、実はですね、お金がないんですよ」

イライラ成分８０％オーバーの視線で全員を見回し、リュウは言った。昨夜ゼノから渡された請求書の束は如何ともし難い事実である。仲間たちは眠い目を擦りながらも、リュウが一方的に話す言葉

を遮らない。

「と言いますか、むしろ借金まみれでしてね」

リュウが一体何を言おうとしているのか薄々感じてきた仲間達は、何故か揃いも揃ってまともに彼を見る事ができていない。それは別に眠いからだとか、リュウの雰囲気がいつもと違うから、というだけではないらしい。どちらかと言えば知らんぷり、自分のせいじゃないぞ、という責任放棄っぽく傍からは見えなくもない。

「修繕費等に関しては……まぁ文句ないんですよ。むしろこのくらいの金額でここまでやって頂いて感謝の気持ちで一杯です。ええ一杯ですとも」

「「「……」」」

如実にご機嫌斜めを表す見た目とは裏腹な、リュウのやたらと引っ掛かる感じの丁寧な物言いにメンバーは不気味さを覚えた。なんだか“嵐の前の静けさ”であるようなないような……実際そう感じた各々の感覚は実に正しいものだった。

「で・す・が……」

徐に取り出した請求書の束をテーブルの上に置き、リュウは溜めた。ゴクリ、と誰かが唾を飲み込む音が聞こえる程の長くて痛い沈黙。黙りこくった少年から放たれる、ゴゴゴゴと背景に刻まれていそうな静かなるプレッシャー。そして少年は、溜めに溜めたその鬱憤を――――解き放った。

「……サイアスさん、ガーランドさん。……お酒は美味しかったで

すか？」

「ぬ……」

「……う、美味……かった」

「それは良かったですね」

微妙に申し訳なさそうな鰐男と飄々と言ってのける犬侍。そして少年の額にピキッと浮かび上がる怒りマーク。

「リンプーさん、いいですねぇ大量の高級“うまにく”。感想は？」

「う、うん。その……あはは」

冷や汗を垂らしながら必死に誤魔化そうとするフーレンの少女。リュウのこめかみに浮かび上がる二つ目の怒りマーク。

「アースラさん、気持ちはわかりますが１０００個も必要でしたか？」

「あ……ぐ……ひ、必要に決まっている！　やつらは一匹残らず殲滅せねば……！」

「でも多すぎますよね明らかに」

追求を受けプイッと目を逸らすアースラ。そこから視線を剥がし、握り拳を作りながら次にリュウはその隣を見た。

「レイさんにステンさん。いやぁ随分斬れ味のよさそうな業物みた

いですね？」

「あ、ああ。いや……その……」

「まぁ……ね。うん……」

フーレン族の青年とハイランダーの青年は揃って頭を掻きながら、揃って明後日の方向を向いている。リュウは握った拳をわずかに震わせながらさらにその隣に目をやった。

「モモさん、機械の調達にお金が必要だったのはわかりますが……」

「？」

「……ハニワは必要でしたか？」

「えー？　必要よー？」

「……」

何言ってるの？　と本当に素でそういう反応なモモへこれ以上突っ込むのはやめ、気を取り直して次に控える人物へと視線を移す。

「リンさん、あまり甘い物を食べ過ぎるのはどうかと思いますが？主に体型的な意味で」

「うっ……」

微妙に気にしているらしいウィークポイントへの精密爆撃に呻くオレンジ髪の女性。さらにさらにその隣へとリュウは顔を動かす。

「ランドさん……」

「い、言っとくが俺のは必要だからな」

「……へぇそうですか。“二台”も……必要なんですか」

「……」

抵抗空しく撃沈する甲殻族の大男。その隣で眠気に豪快に負けているカエルさんには暖簾に腕押しと判断してスルーし、リュウは一度溜息をつくと大きく息を吸い込んだ。

「てゆーか！　あんたら無駄な物買い過ぎ！！」

そう、これこそがリュウの不機嫌の元だった。徹夜で請求書と睨めっこしている内に気がついた、どう考えても城の修理とは関係ない品物の数々。あろうことか各々メンバーが好きな物を買いまくってそのツケを経費で落とそうとしていたのだ。

ガーランドとサイアスは両者とも酒好きだからか大量の古酒・高級酒を、リンプーは世界の“うまにく”詰め合わせなる物を１０人前も、アースラは“ジェノサイドＺ”とか言う怪しげなゴキブリ駆除薬を１０００個も、レイとステンは名工ビルダーという有名な鍛冶屋作のナイフを、モモは機械以外に何故か巨大なハニワの置物を、リンはお取り寄せ各国御当地デザートセットを３人前も、ランドは最新の魔法トラクターを何故か二台も、タペタは無駄に豪華なグランドピアノを。

総請求額約７３万Ｄｑの内、個人の趣味または嗜好品と言える物

品が半分以上を占めていた。これには流石のリュウも怒り心頭、怒鳴るのも当然だ。「俺だって欲しい物買えるんだったら買いたいわ！ズルイぞチキショウ！」といったドロドロの妬みが9割、なんてことはきっと多分恐らくはないっぽいはずだ。

「はっはっは、いやぁリュウも色々と大変なようですねぇ」

一連のやりとりを見ながら、何故かアルはお茶を飲みながらその場に居た。というか、気付いたら空いている椅子に座って見物していた。リュウはナギとアルは起こしておらず、一体どこから嗅ぎつけたのか。神出鬼没っぷりは格好の突っ込みポイントであるのだが生憎今のリュウに余裕はなく、周りの面子にも完全にスルーされて単なる人間サイズの置物と化している。ちなみにナギは部屋で盛大に爆睡中だ。

「一応チームを組んでいる限り、個人的な買い物は各自のポケットマネーで済ませて頂きたい！　大体こんな風に請求書を紛れこませるなんてのを大の大人が……」

そのままやけにクドイ説教モードへとリュウはハードランディング。対して耳が痛い、とメンバーは（一部を除いて）反省しきり。気づけば１０分２０分と時間が経過していくにもかかわらず、一向に止む気配を見せない、くどくどと吹き荒ぶ説教の暴風！

「全く、皆さんもう少しゼノさんを見習ってですね……」

ここでリュウは唯一槍玉に挙げていないゼノを引き合いに出した。ゼノだけはそういった個人的な買い物はなかった。まぁ正しくは請求書の中にそれらしい買い物の痕跡はなかった、というだけの事だが。

「リュウ、もうそれくらいにしておきませんか」

と、ちょうど自分の名前が出たからか、件の無欲？なメガネ美人からリュウに注意が飛んだ。

「……まだ言い足りないんですけど」

「……まぁあなたの気持ちは良くわかりますが……それより、実はまだあなたに渡すものがあるのです。受け取ってもらえますか？」

「……なんですか？」

話を強引に自分のターンへ持ってくると、渦中のメガネ美人は何やら脇に置いてあった物体をごそごそし始めた。どうせまた請求書か何かだろ？　と半ばやけっぱち気味に諦めかけてたリュウの前にゼノが取り出したのは細く長い箱。その妙に気合の入った木の箱は持ってみると思ったよりも軽い。

「……これは？」

「取り合えず、開けてみてください」

「？」

箱をテーブルの上に置き、パカッとその蓋を開けてみると、その中にあったのは――――

「あ……釣り竿……？」

それは紛う事なき一本の釣り竿だった。一見すると無骨なデザインの物だが、今自分が持っている随分前に日本で買った物とは違う、とても不思議な魅力が溢れる一品だとリュウは直感した。吸い寄せられるようにそれを手に取る。

（軽い……）

まるで重さを感じない。しかし不思議と竿の強度を疑う気持ちは湧かない。吸い付くような一体感。過ぎる程にしなやかで、それでいて強い。もしこの竿を使ったとしたら、魚の呼吸さえ手に取るようにわかるだろう。釣り好きのリュウをして一目でそう実感させるほどの釣り竿。今ドラゴンズ・ティアに入っている大量生産品とは明らかに一線を画している。

「それは知る人ぞ知る釣りの名匠ギョシルの作った“匠の竿”。“あなたの為”に用意しておいた……皆からのプレゼントです」

「え……マジ……ですか……？」

妙に“あなたの為”という部分を強調して言ったゼノの言葉に反応し、釣り竿に釘付けだった顔を上げ周りを見渡すと、リュウの仲間たちは皆そうそう、とばかりに頷いてその言葉に同意を示していた。

「……」

「確かに、皆少々羽目を外してしまったきらいがありますが、私たちは何もあなたにだけ全てを押し付けるつもりはありません。これはそう思わせてしまった皆からのお詫びの証として、受け取っては貰えませんか」

口八丁に二の矢三の矢を飛ばされてリュウはグラついた。というかもうこの時点で勝負は着いていた。根は割と素直なリュウである。徹夜のせいで変なテンションになっていたのも手伝って、まさかこんなサプライズがあるなんて、と事の他感動してしまっていたのだ。

「……俺が間違ってました！」

即座にリュウは皆に向かってズザッと頭を下げた。それはもうテーブルに擦りつけんばかりの勢いだ。心中「自分だけのけ者かよ」とやっかんでいたのが途端に恥ずかしくなったのもある。申し訳ない気持ちで一杯になっていた。最も説教の内容に関しては決して間違ってはいないのだが。

「リュウ、顔を上げてください。私たちは、同じチームじゃないですか」

「……ゼノさん……」

そういうゼノは優しげな笑顔だった。もちろん、リュウの仲間達も皆、笑顔だった。自分は何に対して怒っていたのか、何だかどうでもよくなってしまっていた。こうして、早朝のスイマー城にどこか微妙にズレた絆が生まれたりしてリュウの怒りは収まっていくのだった。

さて、かなり強引にリュウを丸め込んだゼノであるが、事実はもちろん違う。

実は経費扱いにしようとした買い物の内、皆だけというのでは流

石にまずかろうと考えたゼノが、リュウの分という事で“匠の竿”も合わせて調達していたのだ。ただ前日に渡すのをうっかり忘れてしまい、今朝召集を掛けられてちょうどいいからとたまたまこの場に持って来ていたに過ぎない。

ところが請求書の件でリュウの怒りが見事に爆発してしまったため、咄嗟に“全員からのプレゼント”という名目にして渡し、うまい事場を丸く治めようと思いついたのだった。当然事前に打ち合わせはしていなかったので、リュウが釣り竿に目を奪われていた隙に仲間たちへ“今から自分に合わせろ”とアイコンタクトを送り、“あなたの為”と強調したセリフを言ったという訳であった。

徹夜のせいで判断力が鈍り、元々こういう攻撃に弱いリュウはあっさりそれに引っ掛かって計画通りに事なきを得た、というのが事の真相である。流石にトリニティの隊長を勤めていた苦労人だけあってこの手の気転は十八番という訳だ。ちなみにちゃっかり自分も欲しかった紫音剣用の“高級砥石”やこっそり練習するための“魔法発動体ブレスレット”なんかを購入しており、それらは細かく分けて“雑費”として計上している辺り抜け目がない。“匠の竿”の代金も実は巧妙に工事費等の金額に上乗せされており、遠回しに「受け取ったからにはリュウも共犯だよ」という意味もあったりするのだ。

「いやいや釣り竿だけに釣られたのはリュウ本人だったというわけですね」

「……うめぇ事言うねぇ兄さん」

リュウのポーチに入っていた筈なのに、いつの間にかアルの傍で同じようにお茶を啜って傍観者になっていたボッシュは、自分の相

棒と仲間達のそんなやり取りを乾いた笑いで見ていたのだった。

＊

何となく良いいお話的に纏まった感のある早朝緊急会議であるが、実は何一つ問題が解決していないということにリュウが気付くのは割とすぐだった。借金は依然として存在しているのだ。よくよく考えてみればまぁなんとも情けない議題だ。せめてもう少し希望に満ちた議題だったら良かったのにと思わないでもないリュウだったが、困窮したままでは今後の活動も何もないから仕方ない。金という物はいつでもどこでも何かをする場合嫌でもついて回るのだ。今日の飯にさえ困るというのでは何もできない。個人的にも絶食など言語道断であるわけで。

「えー、そういうわけで改めまして……」

こほんと咳払いを一つして仕切り直し。

もちろん全てを自分だけで背負う事はない。自分達は苦労を分かち合う一つのチームじゃないか、とたった今認識し合ったばかりなので、三人寄らば文殊の知恵、それなら１２人寄れば必ずや良い知恵が出るはずだ！　とそんな希望を胸にリュウは皆へ向けて良い金策の手段はないかと投げかけてみた。

「「「……」」」

が、どこからも色の良い返事は帰ってこない。それはそうだ。たった一週間で７３万用意しろなんてのはどう考えても無茶である。そんな方法が簡単に見つかるなら魔法世界に住む誰もが今頃大金持ちか、もしくは未曾有のハイパーインフレが発生しているかの二者択一だ。

時折小さく唸る声やカエルさんの暢気なイビキが木霊す中、手詰まりかも、という閉塞感が次第に広がっていくまさに瀬戸際にて、長い沈黙を破ったのはまたしてもゼノだった。

「一応、あるには……あったのですが……」

流石ゼノさん！　と思ったリュウだが今度はそう易々と問屋が卸さない。ゼノが言う案とは、とあるモンスターを捕まえる事だった。そのモンスターは手強く、以前自分達トリニティも捕獲に向かった事があったのだが一匹も捕まえられずに大損を被ってしまった。しかしリュウの強さを持ってすれば大丈夫だろうと思った、と彼女は語る。

「そのモンスターってどんなヤツなの？」

「それは……コレです」

リンプーの質問にゼノはぴらっと一枚の紙を取り出した。そこには何か卵そっくりの物体に小さな足が生えたような集団の絵と、虫のような物の絵が描かれている。不思議な事に、両方とも金色に塗られていた。

「これは魔物の一種で、上が“金のたまご”下が“カナクイ”と言います」

「！！」

耳にするや否やガタンッ！　と勢いよく椅子を倒して立ち上がるリュウ。眠っていた昔の記憶を思いっきり刺激され、全てを瞬時に

悟ったらしい。

「なるほどわかりました。そいつら、捕獲してきましょう！　大量に！」

リュウの記憶の中の“金のたまご”と“カナクイ”というモンスターには、共通している事が一つある。信じられない事だが、これらの体は本当に“金”で出来ているのだ。文字どおりに生きた金である。このタイミングでゼノが捕まえると言い出したという事は、おおよそその記憶は間違ってはいないだろうとリュウは読んでいた。

「そう、私もそれを実行する……つもりでした」

「……何か、問題でも？」

「それが……」

次に出たゼノの言葉にリュウはフォウルの空間で道草を食っていた事を大いに後悔した。なんとそのモンスターが生息する場所へは最短でもこのスイマー城から4日はかかるというのだ。つまり往復の時点で期限をオーバーする上に捕まえる為の滞在時間を考慮すると完璧に不可能。リュウが城に帰ってきたとき、ゼノが小言を言っていたのは実はコレが原因だった。しっかりと対策を考えていたのだが、リュウの帰還が遅くておじゃんになってしまったのである。

「……」

突き刺さる視線を痛々しく感じながら他にいい案がないかと促す。その後タペタの実家に頼るという案やドラゴンズ・ティアに収納されているお宝“盗賊の魂”を売却する等という案も出たりしたが、

前者は流石にそれは人としてどうか、となり、後者はこんな物騒な物を市場に流出させるわけにはいかない、と言う事で両方ボツ。それ以上短期でお金を稼ぐ良い案は出てこず、埒が明かないのでリュウは会議の終了を宣言した。ゾロゾロとその場を後にするメンバーを見送ると、ではこうなったら自分はリーダーとしてどうするべきか。リュウは渋々ながら一つの結論を出していた。

＊

「ここですかゼノさん？」

「ええ、この街に住むある商人に私たちは資材の調達を頼んだのです」

その日の午後、リュウはゼノに頼んでお金を借りたという商人の居る町を訪れていた。そこはメガロメセンブリアの西にある小さな街で、名をシェドと言う。スイマー城からもそれほど離れてはおらず、商売が盛んで活気に溢れた街である。ワイワイガヤガヤと非常に賑わっており、初めて来た者は露店などの多さにゴチャゴチャし過ぎ！という印象を持つ者も多い。

「で、なんで兄さんは付いてきたんでぇ？」

「おや、いけませんか？」

「いや悪かねぇけどよ」

リュウにくっついてきた面子はいつものボッシュ、道案内を頼まれたゼノ、暇つぶしリンプー、同じくサイアス、そして何故かのアルビレオ・イマ。

「ふふふ、実は今朝の話し合いの始末をリュウがどう着けるのか気になってしまいまして」

パーフェクトに他人事なので存分に面白がっているのがわかるが、もうリュウは慣れたモノなので華麗にスルーである。ちなみにナギは「金の事なんざわかんねー」と言って付いてはこなかった。他にもリュウの説教が結構効いたらしいガーランドやアースラ、リン等は、心身を鍛え直そうと城の周辺で自発的に修業をしているらしい。

「あそこがその商人の屋敷です」

「……」

「結構おっきいね」

「金……持ち……」

ごちゃごちゃした街並みに一際目立つ大きな屋敷。それなりに派手で、道行く人々の目を確実に引きそうな成金趣味全開の建物をゼノは指差した。それに伴い、見るからに自分とは話が合わなそう、とリュウは会ってもいない人物に評価を下す。実は仲間達が買った趣味嗜好品は全てこの商人が売り込みをした物であるという事を道の途中で聞いていた。

あのガーランド等といった堅物までもがあんな事をするとはおかしいと思ったが、成程そういうことだったのかと理解を示し、そのおかげで相手はかなりの辣腕営業マンであろうというイメージが出来上がっている。ぶっちゃけリュウとしては苦手なタイプだ。

「気が重いけど……頑張りますかね」

「おうよ」

重たい気持ちを抑え込み、リュウはリーダーとしての職務を全うすべくその豪華な建物の呼び鈴を鳴らすのだった。

＊

「ほな、お金返せへんってことですかいな？」

「いえあの……少しだけ返済期限を延ばして頂けないかと……」

屋敷の玄関にて、まさに今出掛けようとしていたらしい件の商人と、たまたま運よくリュウは面会する事が出来ていた。そのリュウは今、頭を下げている。結局彼が選んだ方法とは何のことはない、謝り倒して返済期限を延ばしてもらうことだった。今日は朝から良く謝る日だなぁと内心思いつつ、しかし短期で出来るいい金稼ぎの手が思い浮かばなかったのだから仕方がない。もう少し日程を延ばしてもらえさえすれば、一応何とか金を工面する方法がないわけではないのだ。

「……期限延ばしてそれでわいらに何のメリットがあるんや？」

「……それは……その……とにかくお願いします……！」

プハァ、と斜め宙空に向かって紫煙を吐き出す商人。見た目から種族はマニーロ達と同様の海人であることがわかる。しかし纏う雰囲気は、どこか愛嬌のあるマニーロ達とは大いに違っていた。葉巻を吹かし、ナポレオンハットをかぶり、豪華な服を纏い、ギラリと

貪欲そうな目をした、まさにふてぶてしさが服を着ていると言っても過言ではないその容姿。

「……話にならんわ。わいもそう暇やないんでな。これで失礼させて貰います」

「ちょ……待ってくださいマーロックさん！」

全く持って聞く耳持たず。座右の銘、時は金なりを地で行く海人の商人マーロックは、リュウを蔑んだ目で一瞥すると、まるで関心を無くしたように玄関から出て行こうとしていた。

「これ以上話しとっても時間の無駄ですわ」

何でこんなヤツに頭下げなきゃならんのじゃ！と段々腹立たしく思えてきたリュウだが暴力に訴えたらますます自分達の立場を悪くさせるだけである。我慢我慢と念仏のように心の中で唱え、何とか必死に追いすがる。と、リュウの仲間とも視線すら合わせずにスタスタと歩き去ろうとしていたマーロックが最後尾に居た一人の男をその目に捉えると、ピタリとそこで足を止めた。

「……失礼ですが、そちらさんは“紅き翼”のモンですな？」

「おやこれはどうも、良く御存じですね」

値踏みするような眼差しを向けるマーロックに、いつもの胡散臭い笑顔を貼り付けたままでアルは答えた。何かビシバシと水面下で火花が散っているようにリュウには見えたがとりあえずスルーして動向を見守る。

「わいらは情報が命ですからな。まぁあちらの“炎の吐息”とか言う連中に関しては全く聞いた事ないですが……なんで“紅き翼”のアンタが一緒に居るんや？」

（……俺も紅き翼の一員なのに……）

単独行動時にナギとアルは色々とやらかしていたようで、魔法世界のそれなりに通な人には名前が知られるくらいにはなっているらしい。リュウはその辺無頓着だったので、それほどではなかった。最も、情報が命だったら知ってろよ！というリュウの突っ込みには念話の中でボッシュも静かに同意していたりする。

「特に理由はありませんが……まぁ強いてあげるとしたら、ここに居る彼らは私達の愛すべきライバルだから、ですかね」

マーロックの質問に、チラリとリュウを見てから楽しげにアルは答えだした。本気で言っているのかわからないけどなんか言い方気持ち悪っ、と思ったのはボーっとしているサイアス以外の面子である。

「ほほー、ライバル、ねぇ……」

アルの冗談めかした発言をマーロックは疑っていないのか、値踏みするような目が改めてリュウ達へと向けられた。その視線は「どう見てもライバルとして釣り合ってないな」と言っている様にしかリュウには見えない。

「ほな、ライバル言うなら当然アンタ達は戦ってみたわけですな？」

「いえそれはまだ……ですが近い内には本格的に一戦交えるかもし

れませんねぇ」

ふふふと青い髪の少年を見ながら笑うアルは、彼のリアクションが楽しみで仕方がないようだ。まぁ確かにやるかも知れないけど……とその事にはあまり気が乗らないリュウは渋い顔をしている。

「……さよか」

本気なのか嘘なのかわからないアルの発言を受けたマーロックは、特にこれといって考え込む素振りを見せずにリュウのほうへ振り返った。

「気が変わりましたわ。アンタ達への貸し、全額帳消しにさせてもらいます」

「!?　え!?」

「ウソッ!?　ホントに!?」

「ほ、本当なのですか……？」

突然の意趣返しに驚くリュウとリンプーにゼノ。本当かという質問に頷きで返すマーロックを見て、ヤッター！と声を上げようとしたリンプーだったが……

「ただし――――」

すかさずマーロックは但し書きを付け加えた。一気にしーんとなるリュウ達一行。なるほどやっぱり世の中そうそう美味しい話はないな、一体どんな条件を付けて来るんだと息を呑む。

「アンタ達と“紅き翼”の戦い、わいにプロデュースを任せてくれれば、の話しですが」

「!?」

その条件はリュウにとって想定の範囲外であった。てっきり何かモンスターを倒して来いだとか、盗賊に盗まれた物を取り返して来いだとか言われると思ったからだ。まさか“紅き翼”との戦いに関して口を出してくるとは思ってもみなかった。

「……一体どういう意味ですか……？」

「アンタ達と“紅き翼”の戦いをわいに仕切らせて欲しい言うとるんや。そうやな、時間は今から一ヶ月後、場所はキッチリ確保したるで」

「一ヶ月……!?」

「これはこれは……妙なことになりましたね」

予想外の展開に驚いたのはアルも同様なようで、珍しくその顔から笑顔が消えていた。この案を呑めばリュウ達の借金は消える。その代わり、一ヵ月後に問答無用でナギ達とバトルしなければならない。１週間で金を工面できる手段がなく、マーロックに返済期限を延ばす気がない以上、リュウ達には条件を呑むしか道はない。

「……わかりました。俺達はいいですけど……」

そう言ってリュウは横目でアルを見た。こっちが良くてもあっち

がそれで良いかはわからない。アル達がこの要求を突っぱねるなら借金を返せず、城を明け渡すことになってしまう。するとリュウがやると言った事でアルは再び微笑を取り戻していた。

「構わないですよ。ナギなら恐らく今からでも良いと言うでしょうし……詠春は大丈夫として、ゼクトはそれまでに私が責任を持って探しておきましょう」

「ほな、決まりやな。それじゃわいはこの辺で。詳しい日取りと場所は追って連絡入れますわ」

「……」

手早く翻し、今度こそとマーロックは待たせていたお付きを従えて外へと出て行った。もう後戻りはできない。少なくとも今のままではナギ達にボロ負けするのは目に見えている。負けたからと言って何かペナルティがあるわけではないが、一方的な展開になるのは正直気分が良い物ではない。一ヶ月で強くならなければならない。出来るかはわからないがやるしかない。

「ふふふ、一ヵ月後、ですか。楽しみにしていますよリュウ」

「……」

もろもろの決意やら何やらをしたものの、考えた挙句相当困難そうだという結論に回帰したリュウは、どうしてこうなんの……とその顔にどっと疲れの色を浮かべるのだった。

自前の魔法駆動車に乗り込んだマーロックは機嫌が良かった。先ほどのやり取りを思い出すとついつい口の端が緩んでしまう。これほど愉快な取引は久しぶりだ。お付きの二人はどうして主人がそんなに上機嫌なのかわからず、困惑の色を浮かべている。

「お前ら、わいが何であいつらの借金取り消したかわかるか？」

そんな二人に気づいたマーロックは、まるで試験を出すかのように二人へ声を掛けた。

「いえ……」

「あ、わかった！　見世物にして金を取るんですね！」

片方は降参、もう片方は一応答えはしたが、それはマーロックの考えにほんの少し掠っている程度。僅かに機嫌を損ね、フンと鼻を鳴らす。

「アホ、１０点やな。一般人なんか集めんでええんや」

「では……？」

「一体……？」

二人からの懇願を受け、もったいぶったようにマーロックは答える。

「わからんか？　“紅き翼”言うたら悠久の風ん中で破竹の勢いの

チームや。注目度も半端やない。そいつらが大々的に勝負すると宣伝したら、どれほどの大物が釣れるやろな？」

「「！」」

「そや、その大物にわいらの顔を売るんや。なんかの拍子にどこぞの偉いさんの御用達にでもなってみぃ。そんときにはこの貸しが何倍にもなって帰ってくる。こんな破格のチャンス滅多にないで」

加えて、“紅き翼”も“炎の吐息”もその内何かでかい事やらかすかも知れん。恩を売っとくに越したことはないな、と彼にしては珍しい直感とも言える非合理的な考えを心の中で追記して。

「なるほど……」

「流石はマーロック様……」

「……お前らも、ちっとは頭を使いなはれ」

お付き二人にフンと呆れながらも、ギラッ、と獲物の匂いを嗅ぎつけた狼のように、マーロックの目は爛々と輝いていた。この時、彼の目論見によって歓迎されない招かれざる客まで呼び寄せる事になろうとは誰も思っていなかったのだった。

第十二章　8、混沌

思考の迷路を何巡かして、考え抜いた揚句に結局は腹を括るしかないと決断したリュウの行動は早かった。シェドの街から帰る途中、わざわざメガロメセンブリアにまで足を伸ばし、悠久の風本部に直行して保存されているデータベースを片っ端から漁りだしたのだ。

「ね、ねぇリュウ、一体何を調べるの！？」

「取り合えず、世界中の“古龍に関する伝説”をお願いします！」

いきなりそんな場所へ連れてこられて混乱しているリンプー達に、目的のみを簡潔に述べるリュウ。求める情報、それは「古龍」に関する情報だ。フォウルの空間で、ハルフィールが彼の事を指して「古龍」だと言った。後日改めて他の三体の龍達に確認したら、それは間違いないと言う。フォウルが古龍であるなら、そのライバルとして世界を二つに分けた“拳を極めし者（ラグナライダー）”とか言う存在もまた「古龍」なのではないか、リュウはそう考えた。魔法世界において、ただ闇雲に探しただけでは古龍になんて滅多に御目にかかれるものではない。

一通りデータベースに登録されている情報を漁って目ぼしい物がないとわかると、データ化されていない古呆けた文献にまで手を伸ばした。あんまり関係のないアルまで巻き込んで古龍に関する伝説をひたすら捜索する。夕暮れ手前にメガロに到着した後、資料の捜索は深夜にまで及んだ。

まず訳も分からず巻き込まれたサイアスやリンプーが難しい文字の多さに目を回してダウン。次にゼノ、しばらくしてアルが静かに

睡魔に屈し、日付が変わって少し経った頃にとうとうリュウもぶっ倒れた。流石に二日続けての徹夜＋文字だらけの本攻撃には抗えず、本を開いたまま突っ伏して眠りこけていた。それぞれが妙な体勢で眠りに落ちる中で、“しゃーねぇな”と文句を垂れつつその作業を継いだフェレットが一匹、黙々と信じられない速度で文献を読破していくのだった。

翌朝、リュウ達が起きだした頃には、残っていたはずの文献は全て片付けられていた。

「おう、全部読んどいたぜ相棒」

「は？　マジで！？」

「おうよ」

そう言って眠そうに欠伸をするボッシュに目を丸くする一行。ユンナの膨大な知識を継いでいるボッシュにはこれくらいの量の本くらい朝飯前なのだ。今すぐその場で聞き出したいリュウだったが、メンバーからの抗議のジト目視線で蜂の巣にされたため空気を読んで即時退散。なんだかんだで午前中にはスイマー城に戻ったのだった。

「で、どうだった？　俺が調べた範囲じゃそれらしいのなかったんだけど」

城へ着き、巻き込んだリンプー達に礼と謝罪を述べてから自室へと戻ってくると、リュウは早速相棒に尋ねていた。自分が調べた範囲にはそれらしい情報はなく、リンプーやサイアス、ゼノにアルが調べた所にもガセとしか思えないような物や抽象的過ぎて意味のわ

からない伝説くらいしかなかった。一応念のためメモは残してあるが、とても手掛かりになりそうな情報ではない。

「おう、一個だけだがな、それらしいのがあったぜ」

定位置のクッションの上で丸くなり、したり顔で語りだすボッシュ。その内容とは「遠いサルディンと言う名の地方に今なお語り継がれている龍についての伝説があるらしい」というもの。古めかしい文献の隅っこに小さく載っていた極めてローカルな民間伝承だ。それでも調べた中ではリュウが欲する情報に一番近そうで、地元の住民にでも聞けばもっとよくわかるんじゃねぇの？　と言うのがボッシュの見解だ。

「サルディン……ねぇ。それって遠い？」

「遠いみてぇだなぁ。こっからだと結構かかるんじゃねぇか？」

ついでにボッシュが調べておいたところでは、サルディンは大小様々な島から成る温帯地方の名称で年中暖かく、海が綺麗で景色も良い南国リゾートのような行楽地らしい。にも関わらず外との交流が多くない為、意外と知られていない穴場スポットなのだそうだ。

リュウとしては早速明日にでも全員引き連れて向かいたい所だったが、問題はもちろんある。そこへ行く途中には山があり、海があり、いくつもの大陸を経由していかなければならない。つまり、またもや首をもたげてくる金銭問題だ。

借金を帳消しにしてもらったとは言え、手持ちの資金自体は限りなく０に近い。無い袖は振れないわけで、到底そこまでの交通費なんて捻り出せそうもない。ん十万Ｄｑ今すぐ必要という訳ではない

ので幾分気が楽なのは確かだが。

「何かどっかで1日バイトとかするしかないかね」

「堅実だねぇ相棒」

そんな感じで体を休め、リュウはベッドに、ボッシュはクッションに横になりながら悠久の風でなんか依頼とかも見てくれれば良かったなー、等と適当な会話をしていると、いいタイミングでグゥーと妙な音が一人と一匹のお腹から聞こえてきた。

「……」

「……」

「まずは飯食うか」

「だな」

よく考えてみたら昨日から何も食べていない。となれば最優先事項は腹ごしらえだ。リュウの肩にピョンとボッシュが飛び乗ると、二人は部屋を出て厨房を目指した。

やってきた厨房には妖精が数人集まってローテーションを組み、料理に挑戦している姿があった。美味しい物を作ろうと悪戦苦闘している光景は実に微笑ましい。脇に大量のおこげが山積みで放置されているような気がするのはきっと気のせいであろう。リュウの姿に気付いた妖精達からの質問に答えつつ、空いてるコンロを確保しドラゴンズ・ティアから食材を取り出す。

「もうこれしかないし……」

「流石になんとかしねぇとなぁ相棒」

取り出したのは野菜の残りが数点と肉の切れ端が数点。正真正銘、今ドラゴンズ・ティア内部に貯蔵されている食材全部である。最近忙しくて釣りもしていないから魚さえ無い。個人的に腹が減っただけなので、城の少ない食料に手を付けるつもりはなかった。これで出来る料理と言えばリュウのレパートリー的に野菜炒めが鉄板だ。前に日本で密かに買っておいた味噌で味付けすれば良いかと作るメニューを決定し、手早く材料を切るとお気に入りの中華鍋を火に掛けて熱し、油をしき、順に放りこんでいく。強火にして短時間で炒めるのがポイントだ。

「ま、取り合えず腹の足しにはなるでしょ」

「まぁなぁ」

小さな体に似合わない大きさの鍋を豪快に振り、厨房中にジュウジュウという空腹を促進させる音を響かせるリュウ。その手元を覗き込んでくる妖精達に一言二言アドバイスを送り、出来上がった物を手近な皿に盛りつけると、サッと使った器具を軽く洗ってリュウは広間へ向かった。厨房には座れるようなスペースがないためだ。

「美味そうな匂いがすると思ったらここに居やがったなリュウ！」

「！」

有り合わせの割に中々な出来の特製ホイコーローをボッシュと分けて頬張っていると、その香ばしい匂いに釣られてか赤毛のツンツン頭が姿を現した。隣には先程まで一緒に居たなんちゃってスマイ

ル紳士も居る。

「おー、すげーうまそ……」

「断る！」

見事な展開予測。リュウの先制攻撃がナギの言おうとした台詞の続きをバッサリ両断。先読みされて言葉を無くしたナギは「まだなんも言ってねーじゃねーかよー」と小声で文句を言っている。

「ナギ、つまみ食いしに来た訳ではないでしょう？」

「あーっとそうだった。リュウよぉ、アルから聞いたぜ？」

箸を動かしながらチラリとナギの顔を見ると、やたらとつやつやした血色のいい顔をしている。そのはち切れんばかりの眼差しにどういう意味が込められているのか、リュウには痛い程良く分かった。

「期待、していいんだよな？」

「まぁ、頑張る」

「うし、いい返事だ。お、そうだそれともう一つ……」

リュウの前向きな返事に満足げな笑みを浮かべたかと思うと、今度は微妙に真顔となって顎に手をやり、ナギはリュウの顔を真っ直ぐに見据えた。

「俺なりに色々考えてみたんだけどよ、やっぱここはリュウの意見を聞いとかねーとと思ってな」

「？」

何をそんなに真面目に考えたのだろう、と箸を持つ手を止めリュウも釣られて真顔になる。ナギはうむむと唸って少しだけ思案してから再び口を開いた。

「……“千の龍の男（サウザンド・ドラゴン）”……なんてどうだ？」

「……はい？」

「いや二つ名だよ二つ名！　一応お前の変身から取ってみたんだけどどうだ？　結構良くねーか？」

「……」

「あのステン……だっけ？　とかからは“魔竜王（カオス・ドラゴン）”なんてのもいいんじゃねーかって話が……」

「お断りだぁ！」

昨日フォウルの所に帰る予定だったナギはリュウとアルを待っている間とても暇だった。それはもう暇だった。あまりに暇だったので、城内をうろうろしていたステンやタペタをとっ捕まえて、一昨日の夕食時に話していたリュウの二つ名についてどんなのがいいかと相談していたのだ。悪ノリしたステンと生真面目なタペタがあーでもないこーでもないと案を出した結果、他にも色々と二つ名候補が挙がったらしい。

「それでしたら“蒼き流星（レイ・ズナー）”などもいいのでは？」

「お、それもいいなー」

完全に空気を読み切ったアルが嬉々としてその話に食いついてきた。リュウの反応を見てからかうのが好きな彼にとっては格好の話題だ。こうなってしまうともう下手な突っ込みは逆効果。早々に抵抗を諦めて、話しが過ぎ去るまで我慢せざるを得ない。当事者置いてけぼりで盛り上がる二人である。

「……」

『おい、あれは“蒼き流星”じゃないか？』
『まさか、あいつがあの“魔竜王”！？』

例えば街で買い物をしている時、後ろの方からそんな痛い二つ名で指を指される事になったとしたら、耐えられるだろうか？　……答えはＮＯ。どうあってもＮＯ。考えただけで鳥肌モノだ。そして、ふとそんな想像をしてしまったリュウは――――

「絶対いやぁぁぁぁ！！」

盛大に頭を抱えて悶え転がるのだった。

＊

「じゃ、そろそろ俺はフォウルんとこへ戻るぜ」

所変わってここは城の前。例のバトル話を聞いたナギはそうと決

まれば修行も再開しないとな、と意気込んでいた。そんな訳で、そろそろ帰ると言い出したナギを見送りにこの場にはリュウの仲間達が揃っている。ナギは不敵な笑みを浮かべながらグッと拳を突き出し、それにリュウが複雑そうな表情でゴツッと拳を当てた。

「うんまぁ……なんとかやってみるわ」

リュウの言葉に頷き、次に会う時を楽しみにしてると言い残すと、何とナギはその場から猛スピードで北の方に向かって走り出した。これも修行の一環、陸は走り、海は泳ぎ、魔物を蹴散らして行くのもいいのでは？　とアルに言われて特に難しく考えずに実行したのだ。フェアリドロップの元の場所に戻る機能を使えば一瞬で行ける、という事を説明するのを忘れていたリュウは罪悪感を感じそうになったが、なんかもう割とどーでもよかったりする。

「「「……」」」

終始マイペースで常識何それ食えるのってな具合のナギという台風を見送り、リュウの仲間達はやれやれと言った表情。紅き翼のリーダーのとんでもなさっぷりを改めて認識している次第だ。

「……で、アルはどうすんの？」

「私はナギとは別に、マーロックさんから日時の詳細を頂いてからにしようかと」

相変わらずの微笑みを携えて、アルはそう答えた。確かにフォウルの空間に居たら連絡なんて取れないので正しいっちゃ正しいのだが、それはつまりしばらくここに厄介になると言う事か？　とリュウは瞬時に察していたり。

「ええ、そうなりますね」

「……お願いだから心を読むの止めて」

もちろん本当の読心術なんてものではなく、思いっきりリュウの顔に書いてあったものをただ読み上げただけ。まぁ駄目と言う理由も特にないので、もうどうにでもして状態のリュウである。

大型で非常に強い台風ナギ号も過ぎ去り、ぞろぞろと城の中へと戻っていくメンバー達。その最後尾に居たリュウは資金とついでに食料の調達についてどうしようかと頭を切り替えていた。妖精達が頑張っている農場も形にはなっており、魔法のおかげか植物の成長が早いのでそろそろ収穫も見えているのだが今すぐに、というものではない。

なんか手っ取り早くソコソコ稼げる良い方法でもないかなーと考えながら、城に入ろうとした所で――――

「あ、いたいた！　おーいリュウちゃーん！！」

遠くの方からとてつもなく聞き覚えのある女性の声がその耳に入ってきた。「あーあー聞こえなーい」と耳を塞ぎたい気持ちで一杯になりながら声が聞こえた方向に振り返ると、そこには青紫の長髪をポニーテールに纏めた下半身が蛇の女性、かの大魔導士（？）ディースが満面の笑みでぶんぶん手を振っていた。

千客万来。一難去ってまた一難。

そう簡単に台風一過とならないこれこそリュウのクオリティ。ナ

ギとの入れ違いぶりはまるで狙ったかのようである。

「ディースさん!?　何でここが!?」

「ふっふーん、あたしの辞書に不可能の文字はないのよ?　それにしても久しぶりねー」

自慢するように大きな胸を張ってふんぞり返るディース。久しぶりに会うその姿は態度も含めて前に会ったときとまっっったく変わっていなかった。

「へぇー、このお城がリュウちゃんのアジトな訳ね」

「アジト……うーんまぁそういうことになるんですかね」

そのディースは城を見上げて感嘆の声を漏らす。ここではたとリュウは気がついた。ディースの後ろを見慣れぬ女性が付いてきている。金髪ロングで黒いドレスを着た見事なスタイルの女性、言わずもがな美人だ。

「あの、そちらの方は?」

「……なんだ貴様、まさかこの私の顔を見忘れたとでも言うのか?」

「あ」

その喋り方でリュウとボッシュはすぐに察した。まさかこっちの世界に来るとは思ってなかったため、頭の中から抜け落ちていたのだ。

「エヴァンジェリンさんじゃないですか」

「あー駄目よリュウちゃん。その名前はこっちじゃご法度よ？」

「っと、そうか」

「フン、聞く所によると貴様、何やらお山の大将をしているそうじゃぁないか。んん？」

「お山の……」

こちらもこちらで相変わらず。微妙に言い返せなくて言葉に詰まったり。どうしてこう自分の周りにはゴーイングマイウェイなお人が多いのだろうとリュウは現実逃避も兼ねて脳内会議を開きたくなった。

「えーと……何でその辺の話しを知ってらっしゃるんでしょうか……？」

「まーネタばらししちゃうとね、リュウちゃん探してあちこち話を聞いて回ったってだけ」

「あちこち……ってエヴ……あーこちらの人も連れてですか？」

「ククク……全くな、目の前に高額の賞金首が居ると言うのに、悠久の風の人間がご丁寧に色々と教えてくれたよ。男というのはつくづく馬鹿な生き物だな」

そう言ってとてもブラックな笑みを浮かべるエヴァンジェリン。ディースも変装しているエヴァンジェリンも黙っていれば超絶美人

なのだ。男が彼女らから話しかけられたら、そりゃ舞い上がっていらん事まで喋るだろうな、と想像するリュウである。

「あーそれにしても疲れたわー。……ってわけで、お邪魔してもいいかしら？」

「あ、そうですね、どうぞどうぞ」

「相変わらず貴様は気が利かんな」

「う……すみません」

修行時にお世話になってからと言うもの、この二人には色んな意味で頭が上がらない。そんな訳で突然現れた客人二人を城へと招く事になったリュウ。運がいいのか悪いのか、たまたま誰ともすれ違わずに自分の部屋まで案内できたのだった。

「へー、中々いい部屋じゃない」

「確かに悪くはないな。貴様には勿体ないくらいだ」

「……」

いきなり押しかけられていきなり駄目出し。この二人には強く出られないので何というか涙目だ。一応人数分のお茶を用意すると、備え付けのテーブルにカップを置いていく。ちなみにエヴァンジェリンは周りに誰も居ないことを確認したので変装魔法を解いている。

「あ、そーだ。リュウちゃんにおみやげあったのよ。んーと……はいコレ」

「これは……」

ポンと手渡されたのは黒い固形物の絵がでかでかと描かれた物。どう見てもチョコレートだ。マカダミアナッツと書かれているので本当にハワイかどこかのおみやげ用の物のようである。

「それとコレとコレ……あとコレでしょ……あ、コレもあげる！」

「？？」

次から次へと出るわ出るわ土産物の数々。絵や文字から判断するにヨーロッパ、ソビエト、南北アメリカ、アフリカ、エジプトｅｔｃ。食べ物だったり置き物だったり一体どこに持っていたんだと疑いたくなる量。しかも旧世界を一周してきたとしか思えないぐらいの豊富な品揃え。店が開ける勢いだ。

「見ての通り、結局あれから旧世界をぐるっと周るハメになったんだよ。全く何がしたかったんだコイツは……」

「うわホントに世界一周したんですか……」

エヴァンジェリンは心底うんざり疲れたような顔をしていた。リュウと別れてからずっとディースに付き合っていたらしい。まぁでも文句を言っている割には最後まで付きあったわけで、意外と楽しかったんじゃないのかと勘繰るリュウである。

「はいこれで全部、っと。あー重かったー」

「スゲェ量だなぁしかし……」

世界中の土産物を全て出し終え、トントン自分の肩を叩くディース。山のようなその量に呆れたボッシュのセリフも耳に届いてないようだ。

「それで、一体どういったご用件なんでしょう？」

まさか土産を渡すためだけじゃないよな、と疑うリュウ。普通ならないだろうが、彼女は“あの”ディースである。あり得ないとも言い切れないのが怖いところだ。

「ん？　まぁそうねー。一応リュウちゃんの耳に入れておこうと思って」

「？」

改まって何用か尋ねると、ディースは意外な程真面目な顔になった。世界一周旅行中に何か深刻な事態に気付いたのか、ノホホンとしていた空気が冷え固まったような錯覚さえ覚えてしまう。

「あっちの世界にね……ミリアの気配がなかったのさ」

「……それって……」

「こっちに戻ってきて良く分かったわ。どういう訳か知らないけど、あいつは今こっちに居るみたいよ」

そう言ったディースは何とも言えない苦い表情をしていた。向うに残って世界を回ったのは決して旅行がしたかったと言う訳ではなく、ミリアの気配を探すためだったのだ。しかし旧世界のどこにも

それらしい痕跡がないと言う事は、必然的にこの魔法世界のどこかにいるという結論に至っていた。

「そうですか……」

「こっちに居るって事はきっとリュウちゃんに無関係じゃない気がしてね。それでこうしてはるばるやって来たって訳」

なるほど、とリュウは頷いた。ミリアは元々旧世界の女神だ。魔法世界に来ている理由はわからないが、龍の民の生き残りであるリュウに関係している可能性は高いかも知れない。

「忠告ありがとうございます」

「ま、リュウちゃんが無事な所を見るとちょっかい出してきたってわけじゃないみたいね」

案に手を出されたら確実に無事では済まない、とディースはそう言っていた。存外シリアスな雰囲気になっていたが、そうこうしていると蚊帳の外だったエヴァンジェリンが飲み干したカップをカチャリと置いた。

「貴様の話はどーでもいい。興味も無いしな。ところで、私達は今日寝床がない。……見た所この城には部屋が多そうだな？」

「脅迫ですよねそれ……。まぁどうぞ泊まってってくださ……」

半ば脅しのようなエヴァンジェリンの睨みに負けたリュウ。しかしここで重要なことに気付いた。今この城にはとてもお持て成し出来る程の食料は無い。買ってくるだけのお金もない。前なら良かっ

たかもしれないが、今はやすやすとボランティア的に受け入れるわけにいかないのだ。せめて何か対価のような物を貰わないと……と打算を計算すること僅か０．２秒。

何が欲しいかと言えば第一に金である。だがそのまま頂戴と言ったところで特にエヴァンジェリンは払うとは思えない。何とかする方法はないかそう言えばこの二人は最高峰の魔法使いだ魔法使いでお金と言えば……と僅かな間に考えて考えて思いついた。

「……話しは変わりますが、お二人は錬金術とかなんて知りませんか？」

「「？」」

魔法使いでお金と言えばそう、錬金術。短絡的で突拍子もない発想だが、意外と可能性はあるんじゃないかと思ったリュウ。だがそれを聞いてエヴァンジェリンは鼻で笑い、ディースは呆れた顔をした。

「あー駄目駄目、そういうのあたしの性分じゃないのよねー」

「ディースは馬鹿だから知らんのも当然だろう。悪いが私も錬金術にはそれほど詳しくない。魔法というより科学に近いからな。それにお前の想像しているような金を作り出すことはできはせんぞ？」

馬鹿にされるかと思ったがすんなり話が通じた事に逆にビックリである。まぁほとんどダメ元で聞いただけなのでガッカリするほどでもない。それに知り合いとはいえ“闇の福音”に借りを作ったら後でどんな目に会う事やら。色々冷静になったリュウは結局止めた。馬鹿と言われたディースが挑発をし返し、ギャーギャー喧嘩になり

そうな気配を感じたので早々に仲裁する事にする。以前修行時に多々あった光景なので慣れっこだ。

「まぁそうですよね、錬金術なんてあるわけ……」

ですよねーと溜め息をついたところで、ふとクッションで丸くなってる相棒に目が留まった。科学の範疇……科学と言えばユンナの知識。そういやこいつはそんなのを知らないのか、と。

「なぁボッシュ、お前の知識ん中に錬金術とかない？」

「……」

藁にも縋るとはこのことだ。もちろんリュウも期待はしていない。なんとなく聞いてみただけである。

「……あるぜ」

「だよなー、やっぱそんなもんあるわけ……ん？」

「……」

「ちょっと待て……え……あんの？」

「おうよ」

何事も無いかのように言うボッシュ。もう一度確認するとしっかりと頷いた。一瞬時が止まる。そして次に出てきたのは、喧嘩に発展しそうだったディースとエヴァンジェリンさえビクッとするほど大きな「それならもっと早く言えよ！」という突っ込みだった。

「一体何事です……か……」

「あ」

城全体に響き渡るくらいの突っ込み。それに面白事探索センサーが反応したらしいアルが思いっきり部屋のドアを開いた。その後ろには何かあったのか、と同じく野次馬根性丸出しのリンプーやらランドやらも来ている。

さてここで今のリュウの部屋の状況を整理してみよう。

リュウが居る。ボッシュが居る。露出度の高い謎の美女が一人。同じくゴスロリ服を着た謎の美幼女が一人。リュウが自分の部屋に女を連れ込んだと見られても言い訳が出来ないこの状況。しかも二人。リュウ自身が子供の容姿とはいえ片方は犯罪レベルだ。勿論ディースには会った事のあるアルだが、事態が面白くなる方向に動こうとするのは火を見るより明らかだ。フォローになど回るわけがない。

「おやおや皆さんリュウの部屋が実に面白い事になっていますよ。是非御覧になってはいかがです？」

「ちょ、待って――――」

抵抗も空しく全面公開されてしまった部屋の中。まるでスキャンダルが発覚した芸能人のごとく質問攻めにされるリュウ。騒げば騒ぐほどどんどんメンバーが集まってきてしまい、事態が収束する気配の欠片も見えてこない。そんなわけで非常にカオスな事態に陥るスイマー城だったとさ。

第十二章　9、錬金

リュウの部屋に居る二人の女性は一体誰で、リュウとの関係は一体なんなのか。渦中の少年はなんとか説明しようとしていたのだが、その度に新たにメンバーがやってきて話の腰を折られまくっていた。もうどーにも収拾が着かなくなったので、何度目になるのか大広間に全員を集め、そんでもってうんざりしながらその事について1から説明する事数分。

「……というわけで、この人達は俺の魔法とかの修行でお世話になった人達なんです」

大まかに要点だけを掻い摘んで説明を終えると、思ったよりも簡単に事態は収束に向かった。特にそれ以上質問もなく、メンバー達はリュウの説明を受け入れてあっさり納得したのだ。

もし仮にリュウが普段から素行の悪い人間だったらこんなに簡単には行かなかっただろう。まさに日頃の行いの賜物、リュウの人徳の成せる技と言える。最も、子供なリュウがハードな色恋沙汰というのは流石にないだろ、という先入観も手伝ってる事は否めない。随分あっさり片付いたせいで微妙に消化不良な重力魔法使いが一人、脇で佇んでいた。

「リュウちゃんって意外と人望あるのねぇ」

自分達の事なのに他人事万歳な蛇の下半身を持つ女性。そんな感心した表情のディースの呟きにリュウは苦笑いを返すくらいしか出来なかった。

「さて、それじゃ一段落したみたいだし、いちおー自己紹介しとこうかね。あたしの名はディース。泣く子も黙る大魔導士（マジックマスター）とはあたしの事さね！」

「「「……」」」

（うわぁ何この光景超デジャヴ……）

何となく胡散臭げ～な視線を受けても全っ然気にせずふんぞり返るディース。どこかのリーダーとそっくりな、規視感ＭＡＸな光景を目にしてリュウは溜息しきりだ。流石に二回目となるとリュウの仲間達にも免疫が出来ているらしく、もう深く突っ込まずに“あ、またこの手のタイプなんだな”と一発でどんな性格か看破していたりする。

「それで、そっちの金髪の女の子は何者なんだい？」

それまでのやり取りに一切口を出さず、傲岸不遜な雰囲気で見ていた謎の美幼女。只ならぬ気配を撒き散らす幼女にリンのレーザーサイトのような鋭い視線が飛ぶ。

勿論そんな視線如き意に介する様子すらないエヴァンジェリンだが、頭の中ではさてどうするかと微妙に悩んでいた。本名を告げても自分にとって別に問題はないが、１２０％騒がれる事は目に見えている。ぶっちゃけ一々相手をするのも面倒くさい。仕方ないので、適当にはぐらかす事に彼女は決めた。

「私は……」

「あーこの子はあたしのツレで、キティって名前なの。仲良くして

ねー？」

「んな！？」

いきなり話を遮って、横から思いっきり口出しするディース。思わずつんのめるエヴァンジェリン。どことなく漫才チックに見えたのはリュウとボッシュだけではないかもしれない。

「おいディース貴様……！」

「何よー。いいじゃないキティ。そんないつまでも仏頂面してないで、あなたも社交性ってもんを身に付けなさいな」

「大きなお世話だ！」

（あーもうどうしてこう……）

そんなリュウの声なき声が聞こえるはずもなく、ディースの態度は小さな吸血鬼の真祖さんの癪に障らないわけがなかった。

いい加減キティと呼ぶな馬鹿が！　あとその言い方も気に食わない！　私がどう自分の事を言おうと私の勝手だろうが！　……まぁ何を考えて私の発言を遮ったのかはわかっている。正体を晒したら大変な事になるからだ。混乱を避けると言う意味では実に正しい判断だと言えなくはないのだろう。

だが断る！

このエヴァンジェリンの最も好きな事の一つは、押しつけがましいおせっかいに、ＮＯと言ってやることなのだ！

「ふ……ふっふっふ……いいだろう。……貴様ら！　耳の穴かっぽ

じってよぉく聞けぃ！　私こそ最強最悪の魔法使い、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル！　懸賞金額６００万$の！　“闇の福音”、“不死の魔法使い”、“禍音の使徒”とは私の事だぁ！！」

怒りのせいか微妙に魔力を放出しながら、腕を組み目を吊り上げて高々に言い放つエヴァンジェリン。さぁ恐れろ敬え媚び諂え愚民がふはははは！　と、その様相はまさに魔王。漏れ出す魔力の威圧感も相まって、これ以上ない完璧な（？）名乗りっぷりだ。

「「「……」」」

が、この時ばかりはその限りではなかった。対象となっているのは既にナギ、そして直前のディースという同色の自己紹介を受けている“炎の吐息”のメンバーなのだ。多少魔力による威圧感が増えた所でどうという事はない。“あ、結局この娘もそんなノリなのね”と、前述二人と同類としか彼ら彼女らの目には映っていなかった。むしろ第一印象こそ「人形みたいな大人しい子」だったのに、「あの有名な賞金首“闇の福音”に憧れてるちょっと可哀想な感じの女の子」と印象があらぬ方向に上書き修正されている始末だ。リュウと紅き翼に関わるようになってから、最早その辺の感覚がマヒしているらしい。

しかしまぁ、そんな空気を全く読まずに輪から外れていた毛色の違う彼だけは、思いっきり食いついた。

「キティさんと仰るのですか。いやいや実に可愛らしいお名前ですね」

エヴァンジェリン渾身の名乗りを全く無視してディースの言った“キティ”と言う名前にのみ反応を返す、彼こそは性悪魔法使いア

ルビレオ・イマ。消化不良だった彼はあろうことかその矛先をエヴァンジェリンへと向けた。彼は目の前の幼女が本当に“闇の福音”である事などとっくに知っていた。

しかしそんな事はどうでもいい！

相手が誰であろうとその脳かどっかに搭載されている“なんかコイツからかいやすそうセンサー”がビビビと反応を示した事の方がむしろ重要。というかそっちが全て！

当然、唯でさえ良くなかったエヴァンジェリンの機嫌は、見る見るうちに急降下していく。

ぐぬぬディースに言われるのは１００億歩譲って不本意ながら我慢するとしても、初対面で見ず知らずのこんな優男にその名で呼ばれるのは非常に腹が立つ。……だがしかしよく考えたらここでさらに激昂してはそれこそまさに子供そのものだ。この程度軽く流せないでは悪の魔法使いとしての沽券に関わる。これ以上舐められないためにも静かに、しかし威厳たっぷりに大人な対応を取るのがベターと言わざるを得まい……。

「……貴様、確かアルビレオとか言ったな。二度とその名で私を呼ぶな。一度目は許してやるが次はないぞ」

最初だけは許してやる。ふふふなんと大人な対応か。さぁ恐れろ跪けこの下郎が！

ナチュラルにガンとばしをしながら精一杯の低い声でそう告げたエヴァンジェリン。しかし今日、彼女の運はすこぶる悪かった。何しろ相手はアルビレオ・イマ。他人をからかうのが３度の飯より好きな曲者中の曲者である。

「おやそんな物騒な事を言わないで下さいよキティさん。可愛らしいお名前なのに何が不服なのですか？」

（うーわアルの顔超イキイキしとる……）

アイモカワラズエセ笑顔。リュウはその裏に潜む感情を正確に読み取りながら、びきっ、と音を立ててエヴァンジェリンのこめかみに怒りマークが浮かんだのも見逃していない。が、そちらはスルー。色々説得とかで疲れてるし、なんとなくアルなら負けなそうだし、というのが理由だ。

「いいじゃないキティ。……あ、良く考えたらキティ“ちゃん”の方がいいかしら？」

「おお、それはいいですね。ではこれよりあなたの事を親しみを込めて“キティちゃん”と呼ばせてもらいましょう」

天然ディース&腹黒アルの波状攻撃！

はい無理。限界。イコール爆発。頑張ってはみたものの、エヴァンジェリンの沸点はやっぱり低かった。

「ぬがぁぁぁ！　ディース貴様いい加減にしろ！　あとアルビレオ！　貴様のような輩は今この場でこの私が直々に地獄へ送り込んでくれる！」

「全く我が儘ねぇ、何が気に入らないのよー」

「はっはっは、私の事は気軽に“アル”と呼んで下さって結構ですよ。それと、もう少しお淑やかな言葉遣いのほうが可愛らしいですよキティちゃん？」

「うなぁぁぁぁぁぁぁ！」

「あんたらイイ加減漫才はその辺にしといてくださいコンチクショウ……」

怒りボルテージが一瞬で振り切れたエヴァンジェリン。このままだと折角直したばかりの城をぶっ壊されてしまいそうなので、喧嘩は外でやれ、と呆れながら投げ出すリュウ。

事実上、これが初対面の吸血鬼の真祖ｖｓ紅き翼の腹黒男の初戦であった。結果は切れてしまったエヴァンジェリンの黒星。この後、この男とは二度と会うまいと誓ったエヴァンジェリンだったが、何だかんだで延々と未来までからかわれ続けるという事をこの時は知る由も無いのだった。

一方、リュウはリュウで“炎の吐息”の仲間達から何故だかとても生暖かな同情的眼差しを送られていた。ナギやらアルやらこの二人やら、なるほどリュウは普段から色々苦労してたんだろうなぁ。あの年で妙に達観しているのも頷ける話だ。せめて自分達くらいは常識を守ってやらないとなぁ、等といった酷い憐れみがその視線には込められていたという。

「ウキャキャ！　それにしてもリュウは美人さんの知り合い多くてホント羨ましいね」

「ディースさんを見ていると、ワタクシ何故だか体に電気が走ったようになるのですね」

若干そっちの方向へ盛り上がってる猿の人とカエルさんはさてお

き、何はともあれリュウの魔法の師匠という事とあけすけな雰囲気のおかげでディースは問題なく受け入れられていた。エヴァンジェリンも態度が偉そうでちょっとアレな娘、として認識されており、アルやディースとのやり取りから誰も真面目に“闇の福音”だなどとは信じていない。そんな訳で、エヴァンジェリンはふわふわと窓から外へ退避していくアルに魔法の射手をぶちまけながら追いかけたりしていたので、取り合えずその場は一旦解散となったのだった。

「あれ？　タペタさんどうかしました？」

「おーう、ムッシュ・リュウ……ワタクシ助けて欲しいのですね」

ゾロゾロと人が出ていく大広間にて、何故かタペタは痺れていた。別に比喩でもなんでもなく、事実として麻痺していた。何とか動く口で説明されると、なんでもディースと目が合ったら体がしびれた、と。要するにアレである。

（コレがホントの蛇に睨まれたカエルか……）

諺の成り立ちを律儀に実践してくれているカエルさん。さっきから色々と呆れっ放しのリュウである。

「……ヤクリフ」

「！　おーう、痺れが取れたのですね。メルシー、リュウ」

「まぁ気をつけてくださいね」

状態異常だけを回復させる魔法でタペタを治し、部屋へと戻るリュウ。懲りずにディースに話しかけにいって、再び麻痺したと言う

情報をリンプーが持ってくるのはそのすぐ後だった。

＊

夕刻近くになって、運よく妖精達が狩りで大物を仕留めたらしくなんとかその日の食い扶持は確保できていた。ついでにディースの持ってきたお土産や残り僅かな城の食料を使って思ったよりは豪勢だった夕食を終えると、リュウは早速ボッシュから錬金術の詳細を聞きだしていた。

悔しいが天才だったユンナ。彼はうつろわざるものの研究過程で錬金術の分野にも手を出していた。複雑すぎる理論の構築、難解すぎる高度な計算、そして数多の実験を経て、とうとう彼は金を作り出す方法を導き出すに至っていた。しかし、いざ実際にその通りの実験を行っても、金はできなかった。何度繰り返し実験をしても金は出来ず。構築した理論や計算には、どれだけ見直しても誤りはない。即ち、原因不明。

ユンナにとって錬金術を追求する事は、本来の目的の為の足掛かりの一つに過ぎなかった。それ故に、錬金術自体に時間を取られるという事は全く持ってナンセンスだった。よって、必要なノウハウを得られた後、最後まで成功を見ることなく、錬金術の研究は凍結していたらしい。

「へー。それで、それって俺でも出来んの？」

「おう。つーか最終的な理論じゃ誰にでも出来るくれぇ簡単なモンになってやがってよ」

偉そうに錬金術の詳細を細かく垂れていたボッシュだが、リュウの頭じゃ１／１００も理解できないので適当に頷いて大事そうな部分以外は聞き流していた。とにかく、色々とユンナが煮詰めたそれはどういう手順で、どのような物質を使って行うのか、大変な簡略化がされていたのだ。それこそ「馬鹿でも出来る金の造り方」とまで言えるほどにである。本当ならばこれは世紀の大発見だ。上手く出来れば金銭問題解決どころか一生金に困らず左団扇も夢ではないのだ。

「で……どうやるんでしょうかボッシュさん……」

「相棒、目があぶねぇぞ」

欲望全開で目の色を変えて迫るリュウを諫めながら、ボッシュが案内したのは何と厨房。まさかここでやるのかと聞くとそうだぜと頷くボッシュ。途端になんか信憑性が薄れてきたなとテンションダダ下がりのリュウである。

「で、どうやんの？」

「そう投げ槍になんなっての。まずは――――」

手順は本当に単純だった。必要なのはとある二つの道具だけというシンプルさ。あまりの簡単さにそんな所まで煮詰めまくったユンナの努力そのものを疑うリュウである。

「一応あるにはあるけど……」

必要な物１、ファイアスパイス

言わずと知れた火炎魔法の効果を秘めた粉だ。

必要な物2、かきごおり

シャリシャリした食感で、冷たくて、食べるとこめかみがキーンとするアレ……ではない。ファイアスパイスと対を成す、氷系魔法の効果を秘めた粉である。何故そんな名称なのかは謎だ。

たまたま以前ハイランドで買い込んだ道具の中に、まだ一度も使っていないこれらはあった。

「これを？」

「その二つを混ぜてから熱を加えんだぜ」

「……」

説明を受けてリュウは思った。馬鹿か、と。少なくとも相反する魔力が詰まったアイテム同士を掛け合わせたところで、消滅するか爆発するに決まってるだろ、とリュウの常識的な思考回路は回答を出していた。しかしまぁもしかしたら出来るのかもしれないし、一応やってみるか、とも思った。隣で興味津々の妖精達にねだられたので、仕方なしにアイテムを分けてやったらどうも真似しようとしているらしいが、そこはとりあえずスルー。

「それじゃ……」

瓶を開け、ドザッとフライパンの上で混ぜ合わせる。そして熱を加えた途端に二色の粉は輝きだし、爆発するのかと身を潜めたリュウの目の前で綺麗さっぱり消え去った。

「……ま、こういうわけだぜ相棒」

「いやどういう訳だよ」

色々とこの二つの道具を選んだ理由やどうして熱を加えるのか等の理由もあるのだが、細かい事は無視。とにかく手順はこれだけだった。計算通りなら、消滅はしないである物質が出来るハズらしい。ユンナもこの消滅という結果が不可思議だったらしいが、結局どうにもならなかった、と。欠陥だらけの話じゃないかとリュウは肩を落とし、やっぱ人間楽を求めちゃいかんのだな。あほくさ、と厨房を後にしようとした。

その時だった。

「な、なんか変なのできちゃったよぅ」

「「!?」」

その妖精の一言が二人の足を止めさせた。顔色が変わるボッシュ。妖精の一人が同様に混ぜ合わせてたそれは、明らかに元の物体の面影のない、不思議なピンク色の毛玉のようなモノになっていたのだ。

「こ……こ……」

ボッシュは驚愕に目を見開いた。まさか、知識の中の理論上にだけその存在が予言されていた物体が、今目の前にある。これほど驚いた事はここ最近記憶にない。

「お、おいおめぇら！　コイツをもっともっと作るんだ！」

興奮したフェレットがキョトンとした妖精達に捲し立てている。
その勢いに呑まれたリュウは手元にある全てのファイアスパイスとかきごおりを妖精達に手渡し、先程やったのと同じようにしてみて、と促した。恐る恐る妖精達が同様の手順を行うと、次々に量産されていくピンク色の毛玉。アイテムが尽きた頃、出来た数は全部で12個。

「で、コレ何？」

「相棒、そいつを三つ一緒にして炒ってみてくれ」

「？」

ボッシュに言われた通り、リュウはそのピンク色の毛玉を三つ一度に火に掛けて炒ってみた。

……が、後に残ったのは真っ黒いおこげ。

「先生駄目でした」

「……」

何事か考えるボッシュ。そして次に妖精達に全く同じ事をするように依頼した。

「うんしょ」

「ふらいぱん重いよぅ」

妖精二人がかりでフライパンをゆする。しばらくすると、融け合

った毛玉は徐々に個体を形成しだし、それに伴って光沢のようなモノが現れていた。

「ま、またなんか変になっちゃったよぅ」

「まさか……」

気が付けばそれは眩く輝く黄金色。まるで金平糖のような形状をした、妖精の掌に収まるくらいの小さな塊がフライパンの上に乗っていた。

「嘘……金……？」

「間違い……ねぇなぁ……」

一度として成功した事の無かった錬金術が今、数十年の時を経て日の目を見た瞬間だった。続けて残りの毛玉も妖精が炒ると、それは同じく金へと変わった。

「こんな簡単に金が精製できるなんて……」

これは素直にマズイ、とリュウは思った。こんな手法が世に広まれば、確実に大混乱が起きる。誰にも言うまい。これは自分とボッシュ、ついでに妖精達だけでストップさせておかねば。

「ま、まぁとにかくこれを売れば……」

「……」

小さいが確かな重量感。初めて見る金塊に興奮冷めやらぬリュウ。

一方ボッシュはどうして妖精達がやると出来て、リュウがやったら失敗したのか考察していた。フェレットの癖に顎に手をやってうむむと唸るのは中々シュールである。

兎にも角にもこれを逃す手は無い。時刻は夜だがそんな事は無視して浮遊魔法全力全開超ダッシュでリュウはメガロメセンブリアへ赴いた。ギリギリ開いてた貴金属店でその金を売ってみたら、純度が極めて高い金塊だったため、小さくてもかなりの高額になったのだ。そして適当な道具屋へ入り、得たお金でありったけのファイアスパイスとかきごおりを購入して、再びリュウはスイマー城に戻ってきた。

「悪いんだけどこれでもう一回お願い」

リュウからの頼みに妖精達は頷き、全く同じ手順を行う。これぞまさに錬金術。一個、また一個と造り出される金塊にリュウは眠気など吹っ飛んでいた。……ところが、それもすぐに終焉を迎える事となった。いくつか金塊が出来た所で、同じ手順に見えるのに何故かピンク色の毛玉が精製出来なくなったのだ。

「なんで……？」

「……わかんねぇなぁ」

自分達のせい？　と、しゅんとする妖精達に気を使っていると、厨房に別の妖精達がやってきた。ローテーションの時間が過ぎてそれまでの妖精と新しい妖精達が交代しなければいけないのだ。新たにやってきた妖精達もやはり興味津々にリュウに話を聞き、自分達もやってみたいと言い出したので、駄目元で先程の手順をやらせてみると――――何故か成功した。

「訳わかんね」

「……おう、さっきのおめぇらよ」

ボッシュは帰ろうとしていた先程の妖精達を呼び止めていた。そして何故か急に、目玉焼きを作れと言い出した。本気で訳が分からないリュウだが、先程の妖精達が言われたとおりに目玉焼きを作ると、それはすんなり出来ていた。おこげにならず、見た目は良くないが一応目玉焼きと言えるものにはなっていたのだ。

「……多分……わかったぜ相棒」

「……何が？」

ボッシュは信じられないという顔をしていたが、この一連の現象に結論を出していた。

それは――――

「どうやらこいつぁ……壊滅的な料理ベタじゃねぇと、できねぇらしい……」

「は？」

どういう訳かはわからないが、とにかく、料理が出来る者がやると金は出来ないと言うのがボッシュ博士の結論だった。言われてみれば確かユンナは料理の出来る人間だ。同様にリュウも言わずもがなだ。逆に妖精達は脇に積まれたおこげの山から察してください、な所である。

「じゃあ途中から出来なくなったのは何で？」

「ありゃ、料理の腕が上がったってことじゃねぇかね？」

その事を確認するために、ボッシュは目玉焼きを作らせたのだ。結果は見ての通り。一応辻褄はあっているので、何となくそうなのか、とリュウは納得していた。

「あ、……って事は俺じゃ永久に出来ない……？」

「そうなるなぁ」

少しでも料理のレベルが上がったらもうアウト。つまりリュウには金を造りだす事は出来ないのだ。まさか自分の料理の腕が仇になる事があるなんて、と結構ショックなリュウである。

まぁ残念だけど出来ないもんは仕方ないか、と後ろ髪を引かれつつ思考を切り替え、自分の仲間達の情報を思い出す。炎の吐息のメンバーは誰しも最低限の料理はできる。壊滅的と言えるような人は残念ながら居ない。ボッシュの仮説が正しいとすると、必然的に金を造りだせる数は現在の妖精達の人数分×いくつか、が限界だ。

「……ん？　……でもさ、そうなると丁度今ってうってつけの人がいるよね」

「相棒も同じ事考えてやがったか」

壊滅的な料理ベタ。幸か不幸か今この城にはその代名詞的な存在が泊まっている。恐らくもうガーガー寝てそうな彼女の手に掛かれば、黄金の量産も夢ではないかも知れない。

「あの人はそんなにお金とかに固執してなさそうだし……じゃ早速明日にでも頼んでみますか……」

「おうよ。楽しみだな」

錬金術の情報が漏れるがまぁ大丈夫だろうと結論付けて、まるで悪代官と悪商人のようにコソコソするリュウとボッシュ。その姿は妖精達から気味悪がられたとか何とか。

翌日、早速寝起きのディースを厨房へと招くリュウ。半分寝ぼけている彼女にお願いして、昨日の通りにファイアスパイスとかきごおりを混ぜ合わせてもらうと……

全ての理論を超越し、爆発した。それはもう盛大に爆発した。

改めて、この人の場合はその辺の理論やら何やらが一切通用しない、料理下手とかそういうレベルではないのだ、という事を文字通り身を持って実感するハメになったのだった。

第十二章　１０、合宿

アルにディースとエヴァンジェリンがスイマー城に滞在して４日目の朝。今は朝食を取った直後というリラックスタイム。その日の畑担当の妖精の一人が、慌てた様子でリュウの部屋の扉を叩いた。マーロックの使者がスイマー城へとやってきたのだ。

「こちらがマーロックさんからのお手紙です」

「あ、どうも」

「相棒、もうチョイ堂々としたらどうでぇ。おめぇリーダーだろうが」

「うっさい」

城の前。確かに受け渡しました、と言うと足早に去って行く使者。リュウはとうとう来たか、と半ば召集令状を受け取るような気持ちで封を空け、中を除く。予想の通り、そこにはナギ達とのバトルに関する場所と日時の詳細が書かれていた。

場所
機械浜国立公園全域
日時
今から４０日後

要約するとこのような趣旨。

機械浜国立公園はメガロメセンブリアから直営の魔法バスで１５分ほどの場所にある。元々は使用済みマジックアイテム関係の埋め

立て廃棄所で、国が市民の憩いの場として再利用したとてつもなく広い公園だ。その敷地面積の一切を一日まるっと貸し切りとは何とも太っ腹な話である。相当の費用がかかっていそうな辺り、マーロックがかなり入れ込んでいるという事を表している。

日時が厳密に一ヵ月後でないのは、諸々の準備に時間がかかってしまう為だとして謝罪する一文が手紙の最後に付け加えられていた。

（ふーん、まぁこっちとしては時間があるに越した事はないけど……）

「どうやら詳細が決まったようですね？」

「うわっ！？」

「おおう、ビックリさせんなよ兄さん」

例によってどこからか嗅ぎ付けたアルがいつの間にかリュウの後ろに立っていた。気配の欠片も感じさせないのは最早デフォルトだ。そのアルはリュウの持つ手紙をしばらく覗き込み、少ししてふうと一息ついた。

「……なるほど一ヶ月と少し後、ですか。わかりました。ではそろそろ私はゼクトを探しに行くとしましょう。いやはや中々居心地が良かったので名残惜しいのですが」

「……」

なんちゃってスマイルを浮かべてそんな事を言うアル。それを見たリュウの脳裏に思い起こされるここ数日の出来事。アルが楽しい

と言う事は、つまり＝で多数の被害者が居るという事に他ならない。

リュウやエヴァンジェリンのみならず、リンプーやステン、レイ、ランド、リン、アースラ等炎の吐息の面子も彼のからかいターゲットになっていた。普通に考えて一同から煙たがられてもおかしくないのだが、彼のからかいはギリギリプッツンラインを超えない絶妙な距離感を保って行われていた。その為、蛇蝎の如く忌み嫌われている、と言うほどでもない。

一言で言えば職人芸。一応モモやタペタ、サイアス等の天然又は無関心系には、アルの毒牙も効果が薄いというのがわかったのは大きな収穫だ。

「リュウ、あの“約束”、忘れないでくださいね。それでは４０日後を楽しみにしていますよ」

「……」

語尾に気持ち悪いハートマークが付いている。そんな事を直感したリュウは渋い顔のままでアルを見送った。約束、とは先日アルが言い出したことである。なんでも今のままじゃ炎の吐息のメンバーはモチベーションが低かろうと実に余計な気を回し、「負けた方のチームが罰ゲームをしましょう」などと言い出したのだ。

じゃあこっちの話を飲むならその件受けてもいい、と、リュウは自分達が勝負に際して有利になるであろう“とある条件”を交換として提示したのだが、「何だ、そんなことですか」と、思ったよりあっさり承諾されてしまい、後に引けなくなったのだった。

ああ見えて実はナギ並に頑固な部分が存在するアル。この男が言うからにはよほど碌でも無い罰ゲームをさせられるに決まっている。

負けるわけにはいかない。

「ん？　貴様だけか？　アルビレオ・イマはどこへ行った？」

「あ、エヴァンジェリンさん」

リュウが城内へと戻ろうとすると、ちょうど上から降りてきたエヴァンジェリンと鉢合わせした。リュウと同様アルの被害者であるエヴァンジェリン。ターゲットの中で最も被害に遭っていたのは何を隠そう彼女だった。まさにアルは彼女からすれば天敵と言える存在だったのだろう。

「アルなら今しがた行方不明のゼクトさん……あー仲間を探しに行きましたよ」

「何だと？　……チッ。運のいいヤツだ。ようやくあの男の腐った性根を刈り取る用意が出来たと言うのに……」

「オイ御主人。俺ノ復帰戦相手ハドコダ？」

「あ、チャチャゼロだ」

闇の福音のパートナーであるこの物騒な人形は、実はスイマー城に来た時点ではバラバラに分解されてオーバーホール中だったらしい。本来ならゆっくり時間をかけて各部の掃除や修理を行うはずだったが、エヴァンジェリンがなんとかアルに一泡吹かせようと予定を繰り上げて組み上げ直したのだ。どおりで今まで姿が見えなかったはずだと納得のリュウである。

「残念だが相手は居ない。お前の不戦勝だ」

「何ダト!?　オノレ、腹イセ二ソコノ白イノヲ斬リ刻マセロ!」

「おいおい何で俺っちを……」

「そうだ、もし良かったらコレ、見に来ます?」

「ん?」

八つ当たりする人形については標的となったボッシュに丸投げし、リュウは持ってる手紙を指差した。リュウ達とアル達が戦うらしいというのはここ最近で嫌でも耳に入っている。しかしエヴァンジェリンはあまり気が進まない様子だ。

「ふん、あの憎きアルビレオ・イマをボコボコにすると断言するなら見に行ってやらんでもないが……」

「うーん……」

正直、それは断言できない。もちろんやるからには勝利を目指す。しかし自分も含め、全員がこれからの修行でどこまで伸びるか未知数なので、はっきりとは言い辛い。

「ま、今のお前らでは１００%無理だろうがな。どちらにしろ私はあまり人前に姿を見せたく無い。遠慮しておく」

「そうですか」

リュウもその辺の事情はわかっているので無理にとは言わない。境遇が似ており、共にアルビレオ・イマというある意味共通の敵に

苦労したせいか、エヴァンジェリンはリュウへの態度が大分柔らかくなっているようだ。

「まぁいい機会だ。そろそろ私もここを離れるとしよう」

「あ、ディースさんは？」

「ディースの住処は元々こっちだろうが。これ以上私が面倒を見る義理は無い」

押し付ける気満々なエヴァンジェリン。まぁ正論なので反論のしようも無い。

「まだ“アレ”の定着には時間がかかるだろう。不具合が起きたらディースにでも聞け」

「あ、“あの件”ですね。了解です」

「じゃあな。精々元気にやれ。行くぞチャチャゼロ」

「ええ。またどこかで」

エヴァンジェリンが何かしたらしい“あの件”についてはひとまず置いておき、そういう訳でエヴァンジェリンも旧世界への帰路に着いたのだった。

ちなみにディースは寝坊が常なのでまだ夢の中だ。城の一室は既に彼女の専用個室として占拠されており、ひたすらぐうたら三昧の日々。その内飽きたら出て行くだろうと言う事で最早放置のリュウ達である。

＊

その日の夜。リュウはかねてからチームのメンバーに周知していた強化合宿（仮）を明日から行うと発表した。合宿の目的は文字通りにチームメンバーの強化。ひいては打倒・紅き翼。一応自分とボッシュもそっちの一員ではあるが、ここは心を鬼にして、何としても打ち倒さなければならないのだ。

「愉快だねぇ……あんなバケモンどもと戦えなんて正気じゃねぇや」

「全くだ……」

「それもあるけど、明日からの修行ってのがおいらは不安だよ」

気が乗らなそうなレイにランド。どんな修行をするのかと不安がるステン。ナギに赤子の手をひねるようにあしらわれたガーランドの姿を思い出すと、普通の人間とは思えないバケモノっぷりにそんな愚痴も出てしまう。

「皆さんがそう言う気持ちは痛いほどわかります。……が、もし負けたらあのアルからどんな罰ゲームが課せられるか……」

「「「……」」」

リュウは語る。今日に至るまでのアルの陰険さを。その思いは場の大勢たる被害者メンバー達に伝染していった。もし負けた場合、あの腹黒スマイルから一体どんな悪逆非道な命令が飛び出すのか。

下手をすると人間としての尊厳を傷つけられることになるやも知れない。にわかに盛り上がる熱気。それは本来ならやる気のないメンバーの心を動かすにも十分だった。そして一つになる、全員の意思。

アルの暴挙は断固として阻止しなければならない。心の平穏の為に、やる事は一つ。

「頑張りましょう、主に皆の精神的安定のために！」

「「「おー！」」」

奇しくも、アルがリュウ達のモチベーションを上げるべく用意した策は、このようにして大成功を収めているのだった。

翌日、早速サルディン地方目指して出発したリュウ達。留守にしている間の城の管理（とディース）は妖精達に一任。ただではイヤだとごねたので、報酬としてリュウの知る料理のレシピ等を詳しく紙に書いて譲渡済みだ。

本来なら引越し時に使ったフェアリドロップ応用の反則技で、城待機組は移動する必要がないはずだった。しかし、あの忍者のように消えるフェアリドロップは妖精的に自信作だったらしく、作り直しにはアイデアの創出も含めて時間がかかるとの事だった。時間がかかってもいいので普通にしろ、と念入りに言っといたリュウ。移動に関しては仕方ないので全員で、となったのだった。

「取り合えず、走りましょうか」

「「「えーーー！？」」」

城を出てから数歩歩いたところで突然、そんな事言い出した少年リーダー。静かに漂うスパルタな気配。リュウもあのノリに毒されているのか！？　とメンバー一同に緊張が走る。だがそこは常識的なリュウ。移動には飛行船を使うという事で、走るのはスイマー城からメガロメセンブリアまで、と幾分良心的な距離だった。

余談だがユンナ式錬金術のおかげで資金にはかなりの余裕が出来ていた。具体的には妖精４０人（今もどんどこ増えている）×２～３で計９７個の金塊を作成。ファイアスパイスとかきごおりの金額を差し引いて一個につき約４千Ｄｑの儲けだったので、純利益合計３８万８千Ｄｑという大金が懐に入ったのだ。

チーム全体での資金として２０万Ｄｑを確保し、さらにボーナスと称して各々に１万Ｄｑずつ配るという大盤振る舞い。手伝ってくれた妖精達にも幾らか配り、残りはヘソクリと自分の小遣いに当てているがそれでも十分大金が残っている。妖精達もお金貰えたし料理が上手くなったしと喜んでおり、この件もあって城の管理についてもさほど労せず説き伏せられたのだった。

＊

そんなこんなで道中特に問題はなく、飛行船で３日、最寄りの街から徒歩で１日。ようやく目的の地サルディン地方の島の一つに辿りついたリュウ達一行。

青い空に白い砂浜。そして宝石のようにキラキラ輝く海。時期が良かったのか他には誰も居ない。後ろには小さな森があり、小川もさらさらと流れている。噂に違わぬリゾート地。しかも人っ子一人居ない為プライベートビーチと言っても過言ではない。

「海だーーーーー！！」

「あちょっと！」

リュウの静止も空しく、海へと突撃虎娘。いつの間に用意しておいたのか、他の面子も綺麗な砂浜にシートを敷いて、直射日光をパラソルで避け、南国リゾート満喫体勢準備万端だ。

「この辺には修行しに来たんですけど！」

統率するべく声を張り上げる少年リーダー。だがそんなリュウの真面目な声も何故かあんまり相手にされていない。ニヤニヤされるだけ。ぬるい視線がなんか気持ち悪い。

「な、何ですか？」

「なにって……なぁ？」

「フフン、やはりリュウもまだまだ子供だという事だな」

「？？」

レイとアースラから投げられる謎のぬるい視線。リュウが周囲の態度に困惑していると、ポーチから助け舟が出された。しかし心なしかその声も上擦っているような感じだ。

「すまねぇ相棒、実はおめぇがさっきトイレ行ってる時によ、ついうっかり喋っちまってな」

「……何を？」

「相棒が出発前の夜中に「馴染むッ！　実にッ！　馴染むぞッ！」とか言ってスゲェワクワクした顔しながら、あの新品の釣り竿握って素振りしてたって事をよ……クク……」

「なぁ！？」

やはり南国と言うからには魚もわんさと居る筈。釣りを楽しみに思っていたリュウは遠足前の子供のようにはしゃいでいたのだった。誰も居ない事を確認していたはずなのに、見られていたとは一生の不覚。

ボッシュは笑いを堪え、レイ、アースラ以外の面子もなんか妙にニヤニヤしている。これは痛い。いたたまれない。顔から火が出るとはこのことだ。キリッとカッコよくリーダー的に纏めようとした威厳など最初から無いも同然だったのだ。

「……ボッシュ……」

ゆらりと影を漂わせ、リュウはボッシュをポーチから引きずり出す。そしてその上半身と下半身を別々にガシッと掴んで――――

「コンチクショォォォォ！！」

「ぎゃぁぁ千切れる！　千切れるぅぅっっ！？」

――――思いっきり雑巾絞りの刑に処していた。

そんな訳でとにかくもう修行するとかいう雰囲気は丸めてポイされていたので、初日は思いっきり遊ぶ事となった。

リンプー（とその近くに居た巻き添えのモモ）は海ではしゃぎ、レイとランドはどっちが速いか水泳の競争をしだし、ステンはリンプーとモモにちょっかい出しに行ってぶっ飛ばされ、サイアスは木陰にハンモックを吊って昼寝し、タペタはヤケに凝った砂の城を造り、リンとアースラは真面目に砂場での戦い方を実演交えて議論し、ガーランドと珍しくゼノはパラソルの下で肩の力を抜いて一杯やっていた。

そしてもちろんリュウはここ最近溜まっていたストレス全てを釣りにぶつけていた。潮流を見切り、魚が集まりそうなポイントを即座に発見。覗いてみれば予想の通り、小物から大物まで玉石混合な魚影の数々。新品の匠の竿を取り出し、ルアーを装着していざ勝負！

「ゲヒャーッハッハァ！！　さぁ魚達よ！　我が手によって釣られるが良いわぁ！！」

「あ、相棒が……おかしくなっちまった……」

常勝無敗。

一度食いつかせればどんな相手も逃す事無くスルスルと釣り上げる。久しぶりすぎて楽しすぎて、テンションメーターぶっちぎり。邪悪な顔で人としてあるまじき奇声を発するその姿にボッシュもドン引きだ。リュウの直感どおり匠の竿の性能は凄まじく、小さなクラゲだろうが巨大なクジラだろうがもうありとあらゆる魚類（？）を容赦なく釣りまくるのだった。

そして遊んだ後の夕食は釣った魚や持ち込んだ食料で豪快にバー

ベキュー。さらにお約束のキャンプファイヤー。おまけに季節はずれの怪談話。どこの修学旅行だと言いたくなる様な充実した時間を過ごし、修行の事など忘れて思う存分リゾートキャンプを満喫するリュウ達一行だった。

＊

翌日。

浮かれた空気を引き締めて、リュウ達はサルディン地方で一番大きな村、チクア村を訪ねていた。目的はもちろん、メガロで調べた古龍伝説について話を聞いて回るためだ。手分けして人海戦術で現地の人間に話を聞いた所、その手の話はとある果物売りの老人が詳しい、という情報を得る事ができた。

大きく赤い鼻が特徴的な、“ヨム”という名前らしいその老人を尋ねたリュウ達一行。いきなりの大所帯の出現に、路上に陳列していた果物をしまっている途中だったヨム老人は警戒色を露わにする。だがリュウが伝説について尋ねると、驚いた様子で答えてくれた。

「お前さん、その話をどこで……？」

「えっと……し、知り合いの人に……」

「……そうか。まさかその話を知る者が今の世に居るとは思わなんだぞ」

「ちょっと昔の事に詳しい人に聞きまして……」

まさか古龍である神皇フォウルの使い魔からヒントを貰ったなんて言える筈も無い。射抜くように鋭く見据えられた気がしたリュウ

だったが、そのまま老人は話を続けてくれた。

「はるか昔、この地には龍が居た。その龍は自分を討伐に来たありとあらゆる戦士達を悉く返り討ちにした。そして余りにヒトの返り血を浴び過ぎた龍はいつしか正気を失い、修羅となった。飽く事のない強者との戦い。それのみを求める修羅となった龍は、存在すら忘れ去られた今でも、自らに挑む強者が現れるのをあの“獄炎島”で待っている……と言われておる」

「……」

話自体は御伽噺とかでよくありそうな話だなと思ったが、淡々と話す老人の凄みのようなものが、その話の龍は実在するのだと確信を持っている風に、リュウは感じた。

「その獄炎島、というのは……？」

「……あれだ」

ヨム老人が指した指の先に見えるのは、僅かに噴煙を吐き出す活火山島。チクア村のある島からそれほど遠くはないその火山島は、改めてみると異様な空気を漂わせているようにリュウには見えた。

「あれですか……」

「まさかとは思うが、お前さん達はあそこへ行くつもりか？」

「えと……そのつもりですけど……」

「……」

ヨム老人は黙り込んだ。もしかして入れないとか、近づけないとかあるのか？とリュウが思ったところで、再び老人は口を開く。

「あの島はな、海流の関係で海からは近づけず、また火山による乱流が原因で空からもうかつに近づけんのだ」

「え、そうなんですか……」

「……だが一つ、あの島まで行く方法がある」

「？」

ヨム老人はそこまで言うと、リュウの後ろに居る面子を見回した。じっくり、という訳ではないが、一人一人を分析するような視線を向けた後、再びリュウを見据えた。

「……お前さん達には力があるようだから、止めはせん」

「？」

謎の独り言を呟いた老人は、改めて体の向きを獄炎島の方へ向け、そしてチクア村の出口を指差した。

「この島の、ちょうど先端からあの獄炎島に向けて列島が連なっておる。今の時期なら浅瀬になっていて、そこからあの島まで歩いて渡れる」

「なるほど」

「気をつけよ。島の数は最後の獄炎島を含め全部で５０。そして、そのそれぞれに強力なモンスターが住み着いておる」

「え？　そ、そうなんですか？」

「そうだ。いつの頃からか、ここに住む者はあの列島をこう呼ぶようになった。その名も――――」

――――ココン・ホ列島。

それがその連なった５０の島の呼び名である。獄炎島に住む龍の狂気に当てられてか、特にこの列島に住む魔物は強力だった。この列島を越える事が出来ず、龍の姿を見る事さえなく散っていった挑戦者も数多い。サルディン地方で唯一、この列島は超Ａ級の危険地帯として立ち入り禁止区域に指定されているのだ。つい最近も一人、無謀な男が向かったらしいがやはり帰って来てはいなかった。

その話を聞いて、リュウの後ろの面子はやる気になる組とマジかよ組、割と無関心組の三つに分かれていた。

「お話、どうもありがとうございました。取り合えず、行ってみます」

「……期待しておるぞ」

「？」

何をヨム老人が期待するのだろう、と思うリュウに背を向け、老人は去っていった。

気を取り直して準備を整え、チクア村の先端へと向かうリュウ達。ここに来る前、メガロメセンブリアで回復道具等の補充は済んでいる。

５０の島にモンスターとは随分修行向きな場所だな。しかしいくら強力とは言っても所詮はモンスターだし、まぁ大丈夫だろう。

……そんな風に思ったリュウが、その考えを後悔する事になるまで、あと少し。

第十二章　11、挑戦

一日目。

「ねぇリュウ、これって魔物……なの？　なんか可愛いよ？」

「……」

リンプーの問いに、リュウは答えられない。何故ならリュウにもそれが魔物かどうか、判断できなかったからだ。ハッキリ言って拍子抜けだった。どれほどの魔物が潜んでいるのかと気を張ってみればこれである。

強力な魔物が住み着いている、と聞いたココン・ホ列島。その最初の島へと踏み込んだリュウ達を出迎えたのは、大きなトカゲの親玉でもなければ発達した四肢や角を持った魔獣でもなかった。

それは、小さな鳥のような生物だった。

大きさはリュウの膝まで程度。毛むくじゃらで人懐こく、何より大人しい。犬をあやす様に手を出せば、何かを期待したように寄ってきて鼻を近づける。魔力は感じられず、力も一般の動物と大差ない。正直、可愛い。リンプーが無警戒にあやしているのを見て、メンバー達の一部は緊張を解き、ほぅ、と大きく息を吐いた。

「何だよ……これのどこがつえぇ魔物だってんだ？」

「おーう、ワタクシ一匹持って帰りたいのですね」

「ゆ、油断するな貴様ら。ひょっとしたらとてつもない力を持っているやも……」

肩を竦めるレイと既に鳥に囲まれているタペタ。二人に注意を促し、警戒を解こうとしないアースラ。しかし彼女もほろっくほろっくと喉を鳴らす小鳥の姿を目に映し、頬が若干緩んでいる。

「か……可愛……い」

「最初の島だ。恐らくこんなものなのだろう」

リンプー達と同じく鳥に和んでいるサイアス、冷静に意見を述べるガーランド。どうやらこの島には他に魔物は居ないようだ。リーダーとして警戒を続けていたリュウは全員へと声を掛けた。

「ガーランドさんの言う通り、危険は無いようです。次の島へ行きましょう」

（最初はスライム的存在（？）とは何と言うセオリー通りな……）

島は全部で５０もある。修行にもならなそうだし、ゆっくりしてはいられない。鳥達を避けつつ、島の中央に茂った林の中を進む一行。纏わり付いてくる鳥達を気遣うのも一苦労だ。

「おっと、いけね」

そんな中、ランドが不意に一羽の鳥を蹴飛ばしてしまった。体の大きい彼は、どうしても足元の注意が疎かになる。足が当たる直前に気付き、勢いを緩めたのがせめてもの抵抗だ。

「すまねぇ」

言葉が理解できるとは思えないが、蹴飛ばした鳥にランドは謝る。蹴られた鳥が、鳴きだした。つられたように、周囲に居た鳥達も一斉に鳴きだした。

「お、おいおい……」

「何？　何なのー？」

「……急ぎましょう」

混乱するステンとおろおろするモモ。周囲で鳴き喚く鳥達。嫌な予感を覚えたリュウは足を早く進めるようにメンバー達に声を掛ける。誰ともなく走りだした。

林を抜けると、広い砂浜の向こうに浅瀬の海と次の島が見えている。いつの間にかあの鳥達は居なくなっていた。とにかくさっさと次の島へ行こうとして、リュウは足を止めた。

一羽。先程の鳥たちよりも大きな鳥が、リュウ達の行く手を遮っていた。リュウの背と同じくらいの大きさ。同様に毛むくじゃらで、胸の辺りの毛だけがブーメランのような形で白い。

「……」

リュウは直感した。これは恐らく、さっきまでの鳥達の親だ。鳴き声に反応して現れたのだろう。という事は、やる気だろうか……？

あくまで念の為、フィランギをドラゴンズ・ティアから取り出す。

一歩、二歩。間合いを詰めてみる。親鳥は、動かない。

「……」

何をされたわけでもないので、こちらから手を出す気にはならない。何もしないなら、別にいい。それにここは最初の島だ。親と言えど大した事はして来ないだろう。見た目も可愛いし、捨ておくか。

一応注意はしながら、リュウ達はその脇を通ろうとして。

親鳥は、魔法を使った。

「!?」

曇る空！　轟く雷鳴！　降り注ぐ雷がリュウ達を襲う！

油断。最初の島だから弱い魔物が住む、というのは完全な思い込みだった。

「千の雷」、親鳥が放った魔法は雷系魔法の中でも最上級の攻撃魔法であった。

「うおおおお!?」

「きゃーー!!」

想定外の攻撃にリュウ達は足並みが乱れた。雷が轟音と共にリュウ達を狙い続ける。親鳥は魔力を溜めているのかその場から動かない。かろうじて雷の直撃を避けたリュウは親鳥目掛けて特攻を掛ける。フィランギの片刃になっている峰の部分で、親鳥を強烈に打ち据えた。気絶した親鳥が転がり、空は一転して青を取り戻していた。

「危ねぇ……皆さん大丈夫ですか？」

ヒヤリとした汗をぬぐい、振りむくリュウ。メンバーの半分が、雷により大きなダメージを受けていた。危うくいきなり全滅する所だった。えげつない。最初の島でこれとは洒落にならない。甘かった。薬草には限りがあるのでここは治癒魔法を使い、回復を図る。

ここから先、確実に一筋縄ではいかない。そう静かに感じ取り、ココン・ホ列島の洗礼を浴びたリュウ達は気を引き締めて、次の島へと足を進めるのだった。

＊

その日は、１０の島を攻略した所で夜を迎えた。

ゴブリンのような容姿で知性の低い魔物や、体だけ大きな一つ目の化物。最初の島以外は割と力押しの魔物が多かった。その間、味方の戦力を少しでも上げる為、リュウはなるべく手を出さないよう努めた。後ろから補助魔法や回復魔法を使い、徹底的にサポートに回る。そのおかげか最初の島程の被害を受ける事はなかった。自身の修行も兼ね、リュウは余程の事が無い限り変身はしないでいこう、と密かに決めた。

２日目。１０番目の島でキャンプを張り、夜を明かしたリュウ達は朝早くから列島の攻略を再開した。それぞれの島に住む魔物の構成は、徐々に苛烈になっていく。

１２番目の島。

巨大な岩石のような魔物がごろごろしていた。近付いても、攻撃を加えても動かない。邪魔だとばかりにアースラがそれに向け、魔法の射手・炎の矢を放つ。すると岩石は動き出し、大噴火を起こして火山岩を撒き散らした。撒かれた火山岩を浴びて連鎖的に動き出す他の岩石魔物。炎の攻撃を受けると目覚める、という事に気付いた時には遅かった。降り止まない火山岩の雨。手に負えない。再びリュウ達は壊滅の危機に陥ったが、リュウも前線で奮闘し、ギリギリのところで制圧に成功した。

１８番目の島。

ドロドロのマグマを人の形にしたような魔物がうようよいた。炎の攻撃を吸収しそうな見た目。今度は絶対炎の攻撃はしない、と決めてかかる。その作戦を嘲笑うように、魔物達は自分たち同士互いに炎の魔法を掛けあっていた。攻撃力、防御力、素早さが見る見るうちにパワーアップする魔物達。またしてもリュウ達は半壊の憂き目に会い、最後は炎以外の竜召喚を使い果たしてなんとか撃退。気が付けば辺りは暗闇に支配されていた。

３日目。ここからはリュウも積極的に戦闘に参加していた。さらに、ボッシュさえ戦力として数えていた。そうしなければならないほど、生息する魔物達は強くなっていた。

２５番目の島。

生息していたのはまずハエ、次に鳥の頭のみで浮いてるような魔物、そしてグミのような本体の上に目玉らしきものがポヨンポヨンと跳ねている魔物、の三種。今更、こんな雑魚然とした魔物に負けるはずがない。リュウ達の誰一人として、そんな悠長な考えには至らなかった。全ての魔物が、巨大だったのだ。一体一体が１０ｍはあろうかという大きさを誇っていた。全員が全力を振り絞り、一匹

ずつ確実に殲滅していった。

２９番目の島。

以前にゼノが紙に書いた魔物、体が金で出来た“カナクイ”が大量に生息していた。金に困っている訳ではないが、それでも倒そうと躍起になるリュウ達。しかし、素早い。攻撃が当たらない。ようやく全てを倒した頃には、日が暮れていた。

４日目。列島も後半に入り、魔物の強さは常軌を逸したレベルになっていく。一つの島を越えるごとに、リュウ達は幾度もの回復魔法と大量の薬草を消費していた。

３３番目の島。

三つ首の食虫植物、同じく三つ首のリザード、ケルベロスのような三つ首の狼。その島は三つ首が支配していた。三つ首のリザードがそれぞれの頭から魔法を放つ。リュウ達がかわすと、その魔力を食虫植物と狼が吸収して力を上げる。無駄のない共存関係。攻撃魔法を使わず補助の魔法を駆使し、斬撃、打撃、銃撃を中心に攻め立てる。一進一退の攻防の末、最後に立っていたのは、三つ首の魔物ではなくリュウ達であった。

４０番目の島。

ミノタウロスのような化け物。一目で強敵とわかる魔物が待ち受けていた。まず、攻撃が効かない。強固な魔法障壁が幾重にも展開されていた。振り回す斧の威力も尋常ではない。攻守共に隙が無かった。相手の攻撃が終わった直後、全員で持てる力を一点に集中。息も付かせぬ連続攻撃の果てに、障壁を突破して撃破。時刻は既に夜を指し示していた。

５日目。残る島の数は１０。あと少し。ここまで来たら、絶対に獄炎島に到着してやる。リュウ達は団結し、気勢を上げる。

４５番目の島。

あのグミのような魔物が集団で現れた。今度は大きくはない。そのグミは大してリュウ達に攻撃をして来なかった。これ幸いと、相手にせずに通り過ぎようとする。その時、手癖の悪いレイが、たまたまグミの一匹から青リンゴを掠め取った。次の瞬間、リュウ達を炎が、吹雪が、竜巻が襲った。グミは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の虎人どもを除かねばならぬと決意したのだ。グミは、この島の王であった。盗みに対して、とても敏感だった。リュウ達はグミのオウの集団と死力を尽くした激闘を繰り広げ、辛くも勝利をもぎ取った。

４９番目の島。

最初の方の島に居たゴブリンのような魔物の最上位種。カナクイの最上位種。グミのオウ。三つ首の狼。ミノタウロスの化け物。巨大なハエ。それまで苦戦した全ての魔物が一同に集結していた。まるで今まで倒された魔物の怨念を晴らすかのように、リュウ達に襲い掛かる。だが、リュウ達もここまでで大幅に力を上げている。相手の弱点もわかっている。負ける要素は無いはず。死闘は夜中まで続き、リュウ達は、勝ち残った。

＊

６日目。何度も全滅の危機に瀕しながら、とうとう獄炎島へとリュウ達は到達した。この先にあるのは天国などではない。伝説を信

じるなら、古来より強者を待ち望む龍が住んでいるはずである。言ってみれば、ようやくスタートラインに立ったに過ぎない。

とうの昔に回復道具は底をついている。勝てる、かはわからない。しかし、ココン・ホ列島を踏破して得た強さ、莫大な経験、そして文字通り苦楽を共にした仲間たちとの絆が、リュウ達にとって大きな自信になっていた。全員で挑めば、きっと負けない。思いを一つに、足を踏み入れる。

「これは……」

所々に泉のような物がある。火山の熱で霧のように水蒸気が漂っていて視界が悪い。だが、只ならぬ気配が辺りに充満している。気配の正体が掴めないが、何者かが居るのは確かなようだ。リュウを先頭に、周囲を警戒しながら歩みを進める。

「！！」

大きく開けた場所の中央に、何かが居た。こちらに背を向けているらしく、水蒸気のせいで未だ正体が掴めない。全員が武器を取り出し、構える。あれが伝説の龍だろうか。いきなり襲い掛かるか。いや、ここは正々堂々と戦いを挑むべきだ。不意を突いて勝っても、意味が無い。

リュウは、その何かに声を掛けようとして――――

――――ソレは、振りかえった。

「よくぞ来た！　強者たちよ！」

「！？」

服など要らぬと上半身、炎天下の下曝け出された見事なマッスル！
照りつける太陽光線を真っ向から跳ね返す、眩しすぎるヘッド！
全身から匂い立つ漢剥き出しの暑苦しさ！
その振るまいたるや堂々の仁王立ち！
彼こそ列強犇めくココン・ホ列島の主！
圧倒的な存在感でお送りするヲトコの中のヲトコ！

「天知る地知る人が知る！　我こそは全世界最強の漢！　ラ・カー……」

「魔法の射手・連弾・氷の４４３矢！！」

「ぬわーーーー！？」

危なかった。どうやら幻覚に幻聴を患ってしまったようだ。疲れているのか。まぁ無理もないかな。リュウは考えるより早く半ば条件反射的に氷の矢を放ち、そこに居た何かを即抹殺。鍛えられた氷の矢は間違いなくその何かに直撃。危機は去った。

……かに思われた。

「……などと言うと思うてか！　片腹痛いわぁぁぁ！！」

「！？」

全身からむわっと発する漢オーラっぽい何かが、殺到する氷の矢を全て寸前で蒸発させていた。予想外の展開に思わずしっかりと前

を見てしまったリュウ。3秒も耐えられずに目を逸らす。しかし、手遅れ。幻覚ではなかった。こんがりと小麦色に焼けたマッソゥは網膜に焼きついてしまって離れない。もうリュウは諦めた。試合終了。思い切り顔を引き攣らせながら、脳裏に浮かんだのはこの列島に来る前のヨム老人の言葉。

「そう言えば……つい最近ここに挑んだ男が一人居るって……聞いたような……まさか……？」

「ほぉう、良く知っているな！　その問いにはＹＥＳと答えてやろう！」

「……伝説の龍……は……？」

「ぬふぅん！　見てわからんか？　この島にはこれこの通り何もおらぬわ！！」

震える声で尋ねると、暑苦しい顔から暑苦しいセリフが紡ぎ出された。つい先程、仲間達と確認し合った決意やら何やらが、何かもースゴイ勢いでガラガラと崩れ去っていく。史上最悪の台無し魔人、ここに見参。

「ふっ、だが案ずる事は無いぞ！　お前達はこの俺という、新たな伝説誕生の瞬間を！　その目で見ることが出来るのだからなぁ！　ふん！　ぬおあああああああああ！！」

カーンのふいうち！

カーンは雄叫びをあげながら見事なマッスルポーズを放った！

気温が上がった

湿度が上がった
不快指数がぐーんと上がった

「げふぅっ」

リュウの精神に大ダメージ！

「思い起こせば幾星霜……お前に負け……師匠に捨てられ……一条の光すら注さぬ地獄のような日々。……だが！　神は俺を見捨ててはいなかった！　最早これは運命！　さぁ我が好敵手よ！　今日こそお前と俺との！　決着を着けてくれるぞぉ！　ぬん！　はぁぁぁぁぁ！！」

再びカーンの攻撃！
カーンは雄叫びをあげながら会心のマッスルポーズを見せつけた！

「ぐふぁっ」

クリティカル！
リュウの精神に９９９９のダメージ！

（ないない。これはないよ。あり得ないよ。ナニコレ。苦労してここまで辿りついた結果がコレ？　いやいやそりゃないでしょいくらなんでもさ。空気とかさ、読もうよホラ。ていうか俺っていつからコイツの好敵手になったの？　ねぇちょっと誰か。教えてくれない？　ねぇもうホントさ……勘弁してください）

朦朧とする意識をギリギリで保ち、リュウの目からはキラリと輝く心の雫が滑り落ちた。数秒間、地面に手を付いて落ち込みのポーズを取る。そののち、沸々と湧いてくる。それは怒り！　リュウは

無意識にガンとばしを発動しながら立ち上がると、この今までで一番の理不尽を、思いっきりぶっ飛ばすことに決めた。

「魔法の射手・連弾・氷の４９９矢！」

鍛えられた氷の矢。基本魔法とは言え、ここまでの道のりでその威力は大幅に上がっている。並大抵の相手には、十分過ぎる破壊力だ！

「甘い甘いぞぉぉぉ！　ンンンンファイィィィヤーーーーー！！！」

「！！？」

何と、カーンの顔から火が発生！　より正確には“目”から火炎放射の如く炎が発射された。それは次々と氷の矢を掻き消していく。正真正銘、汚物は消毒だーと言わんばかりの炎だ。どうやればそんな技が身に付くのか。最早人間技とは思えない！　もちろんラーニングなんて不可能！　というかしたくもない！　気が付けば炎はリュウの目前へと迫る！

「おわぁ！？　あっつぁー！？」

「ぬぅ！？　かわしたか！　だがまだまだぁ！　くらぇぇぇい！」

不意を付かれたが何とか避ける！　するとカーンは激しく跳躍！　そして眩しく照らす太陽を背に、テッカテカの肉体を浴びせるべくフライングボディプレスを敢行！　なんという恐ろしい、本気で嫌過ぎる一撃か。直撃を食らおうものなら再起不能（精神的に）は確実だ！

「ぎゃーーーーー！！」

避ける！　跳ぶ！　プレス！
避ける！　跳ぶ！　プレス！

止む事のない肉弾爆撃！　それも（リュウにとっては）ガード不能！　反撃も忘れて逃げまくる！　しかしカーンは諦めない！　むしろますますヒートアップ！

「トァタァー！　妙技！　カーン・ダイナミィィィィック！！！」

掛け声一発！　飛び散る汗！
全身を不気味な程に振動させ、まるでカーンが複数人になったと錯覚してしまうような、高速フライングボディプレスの嵐！　まさに悪夢！　周囲の気温を上げまくり、カーンの筋肉が舞い踊る！

「いやーーーーーー！」

逃げるリュウもこれには認識を改めざるを得ない。流石にココン・ホ列島をここまで突破しただけはある。今までのカーンとは一味も二味も違う！　何より全てがもの凄く嫌な方向に進化している！

余談だがカーンの標的はリュウ一人。それに対してリュウの仲間達は傍観を決め込んでいる。
何故か？　そこには培ってきた信頼があるからだ。リュウならば一人で十分。信じているのだ。リーダーの力を。決して“アレとは関わりたくないなー”、等と思って距離を取っている訳ではないのだ！

「いい加減に……！　魔法の射手・連弾・氷の５４７矢！！」

「フンハァー！　飛び道具なぞ使ってんじゃねぇ！　秘技！　灼熱のカーンストライクゥゥ！！」

かつて己も散烈拳という飛び道具を使っていた過去を真っ向から全否定！　目から炎を放出、そしてそのまま体を丸めて回転！　炎と筋肉が生み出す珠玉のコラボレーション！　自ら強固な火炎弾と化し、カーンはまたもリュウの放った氷の矢を全て溶かしてしまった！

「うおわああっ！？」

そのままカーンはリュウめがけてローリングアタック！　しかし軌道は一直線、危なげなく避けることに成功！

「ぬふぅ、またしても避けたか。だがそれでこそ我が好敵手！　さらにゆくぞぉ！　必殺！　カーンナッコォゥ！！」

一瞬だけ、オラに元気をわけてくれーとばかりに両手を空に掲げ、すぐさま右拳をリュウに向けて突き出す！　拳に纏う漢のオーラ！　そしてそのまま、まるでワイヤーアクションで引っ張られているように宙に浮いて突っ込んできた！　ホントにもう不自然極まりない姿勢だ！　その推力はどっから出てるんだ！

「どっせぇぇぃ！！」

体を横へ逸らし、緊急回避！　だがカーンは即座にＵターン！

「甘いわぁぁぁ！！」

「!?　んなんとぉー!!」

もいっちょリュウは回避!　それでもカーンはUターン!　そしてさらに突撃!

本当にしつこい!　色んな意味でしつこい!　とにかくもう一刻も早く逃げ出したい!　何が何でも触れたくないので、掠らせもしないようにリュウは回避に全力だ!

「くふぁーっはっはっはぁ!　いいぞそうだ慄け!　貴様に味わわせてやるぞぉ!　このラ・カーン……いやさ、カーン・ザ・グレェトの恐ろしさをなぁ!」

(なんか名前パワーアップしてるー!?)

どうやら回避ばかりで反撃が少ない為に、カーンを調子に乗らせてしまったらしい。憎たらしい。ムカつく。非常にムカつく!　イライラしてきたリュウの怒りゲージも上昇の一途を辿る!

「レイギルレイギルレイギルレイギルゥ!!」

ムカつくがカーンの攻撃は無駄に素早い。懐からあんちょこを取り出す時間すら惜しい。故に選択したのは即効で発動する中級氷系魔法の連打!　無数の鋭利なツララがカーンの四方八方に出現!　串刺しにするべく一気に迫る!

「フェイラァァァ!　まだわからんかぁぁ!!」

気合と共に目からファイヤー!　拳を炎が包み込む!　そしてカ

ーンは跳び、激しく横回転！　飛び散る熱き漢のしずくが、迫ってきたツララ全てを溶かしてしまった！　最早カーンは何でもあり！
拳を燃やした意味が全く無い事など些細な事なのだ！

「うそぉ！？」

「好機！　カーン流古武術最終奥義！　禁千弐百拾壱式・八稚漢（ヤヲトコ）！」

全身にむわっと漢オーラを漲らせ、闘牛の如くリュウ目掛けて突っ込んでくるカーン！　なんかこう掴まれたらヤバいっぽい気配が濃厚！　自分で作った癖に“古”武術を名乗るふてぶてしさ！　しかし突っ込みを入れる暇が無い！

こうなったら触りたくないなんて言っている場合ではない。全力で相手をしなければ、何か大事な物を無くしそうな勢いだ。非常に癪だが、色んな意味で今のカーンは恐怖の的なのだ！

「あーもう！　舐めんなこのボユゲェ！！」

両手に龍の力を集中！　発動させるは魔法の射手＋大防御＋カウンター＋3連撃！　思い描くは無敵のカウンター技！

「天地！」

左の掌に集めた龍の力！　大防御を集中させた重厚な盾！　その掌圧が、全体重を乗せたカーンの突進を止めた！　カーン流古武術最終奥義、不発！

「な……！？」

「魔闘ぉぉぉぉ！」

間髪入れずに龍の力を溜めた右の掌を手刀として一撃。強烈なダメージと共に上空へと激しく打ち上がるカーン！　さらに次の瞬間、無詠唱の魔法の射手・氷の２７１矢が伸ばした両手からカーンへと放たれた！

「ほべべべらぁぁぁ！？」

瞬時に決まった防御・攻撃・魔法の三動作。カーンはお手玉のように空中ではねた後、力なくドシャリと落ちてきた。どうやら攻撃にのみ力を集中していたらしく、防御はからっきしだった。見かけ倒しで打たれ弱い。流石はカーン。期待を裏切らない。

「ぐぐ……お、おのれぇ……」

「うわ、しぶと……」

それでも立ち上がるカーンを見て、リュウは懐からあんちょこを取り出す。何かすぐに復活しそうな気配だ。ここは一つきっちり戦闘不能にしておくべし。でないとまたぞろ空気を読まずにしゃしゃり出てくる気がするのだ。

「ソル・ファル・リ・エータ・リギエンダ！えーと【来たれ氷精、闇の精】」

使える事は使えるが、使用回数自体は少ないちょっと大きめな魔法。呪文の詠唱に時間がかかるのは御愛嬌だ。

「【闇を従え吹雪け常世の氷雪】」

唱えながら掌をカーンに向ける。一応命を奪うまではいかないように微妙に軸をずらして。呪文は完成した。カーンは動けない。絶好のトドメシチュエーション。

「くっ……！！」

「【闇の吹……】」

その時――――

「来たか……待ち侘びたぞ」

「！！　え……！？」

リュウは、魔法を中断した。それと同時に、驚愕に目を見開いた。目を逸らしていた訳ではない。注意を怠っていたわけでもない。そのはずなのに、気が付いたらカーンの前に、見覚えのある人物が立っていたのだ。

「ヨ……ヨム……さん！？」

「……」

いつの間にか現れた、静かな迫力を放つ小柄な老人。

リュウを、リュウ達を覗き込むその二つの目は、紅玉のように真っ赤に染まっていた。

第十二章　11、挑戦（後書き）

特殊技
フライングボディプレス
ジャンプ中に←＋強Ｐ
攻撃動作中にカウンターでダメージを二倍くらう

必殺技
カーン・ダイナミック
ジャンプ中に←＼↓＋Ｐ
攻撃動作中にカウンターでダメージを三倍くらう

灼熱のカーン・ストライク
←＼↓＋Ｋ
攻撃動作中にカウンターでダメージを四倍くらう

カーン・ナックル
←／↑＋Ｐ
攻撃動作中にカウンターでダメージを五倍くらう

超必殺技
禁千弐百拾壱式・八稚漢
←／↑／←＼↓＋強Ｐ
攻撃動作中にカウンターでダメージを十倍くらう

突進技しかありません

第十二章　12、師匠

「……」

「何で……」

何でヨムさんがここに居るのか。

そう言い掛けて、リュウは止めた。聞かずとも、想像できてしまっている。

何故このタイミングで。何故この場所に。いやそんな、まさか……。

そんな確信めいた想像を、理性は認めようとしていない。ヨム老人の、その紅い目を見ただけで、鼓動が早まり、汗が噴き出る。この感覚は、普通じゃない。

「……みんな、構えて！」

「「「！」」」

リュウは目の前の老人から目を逸らさず、後方に待機している仲間へ向け、叫んだ。額から、頬を伝って汗が滴り落ちる。リュウが言うまでもなく、仲間達は尋常ではないこの状況に、警戒を露にしていた。皆、わかっている。あの老人が、何なのか。

「……うぬらは……我が渇きを満たせるか」

「……！」

ヨムの声そのものが、変わった。先程聞いた、老人然としたものでは最早ない。

ゾクッ、とリュウが背に感じたそれは、“殺意”。

純然たる殺意が、小柄な老人から放たれている。動けない。動いたら、殺られる。そうだ。この老人には既に“ヒト”としての気配が無い。この威圧感は、あのフォウルと同等……いや、それ以上。

「ぐぅ……ご老人、どこから来たかは知らないが、ここは危ない。早くあちらへ……」

「！！　ば……やめ……！」

カーンは、ヨム老人の気配の変化に気付いていなかった。

リュウが止めようとするより早く、カーンがヨムの肩に手を掛けた瞬間、それは起きた。

「無粋！」

――――閃光。

ほんの、ほんの一瞬だった。

瞬きよりも短く。

まさに刹那と呼ぶに相応しい一瞬。

その一瞬の閃光が放たれた直後。

カーンは、地に伏していた。全身から、夥(おびただ)しい量の血を流して。

一瞬千撃。リュウの頭にそんな言葉が浮かんだ。カーンの体の至る所に、自分の攻撃で与えた物ではない無数の傷跡が見受けられる。

あの一瞬で、これほどの攻撃を加えたというのか。

全く、見えなかった。

倒れたカーンの前に、リュウ達に背中を見せ付けるように立つ者が一人、佇んでいる。

一瞬前までは、確かに老人の姿だった。だが今は、違う。

リュウは、確信した。

ああ。やはり。この男が。ヨム老人の正体である、この存在こそが。

この列島の、真の主――――

「我は」

血のように紅く逆立った髪、巨大な数珠を首から下げ。

「拳を極めし者也」

肌の色は浅黒く、纏う道着は漆黒。

「うぬらの無力さ」

瞳は紅く。滾るオーラは禍々しく強大。

その背に浮かぶ、“天”の一文字。

「その身体で知れぃ！」

膨れ上がる殺意。

その姿、まさに修羅。

「っ！　みんな！　避け……」

「滅殺！」

豪！

掌より放たれた強大な波動。全てを飲み込む、リュウのＤ－ブレスに酷似した力の奔流。凄まじい密度で放たれたそれは、リュウの立っていた箇所から後方全てを一挙に薙ぎ払った。地を削り、海を削り、空を削り、波動はどこまでも突き進む。

「！　タペタさん！　アースラさん！」

寸前脇へと逃れ、同じく逃れた仲間達と合流したリュウから、光に飲まれる二人の姿が見えた。一瞬の判断の遅れ。僅かに逃げ遅れたタペタとアースラは、その波動を避けられなかった。悲鳴すらあげる間もなく、はるか後方にまで吹き飛ばされる二人。倒れたまま、動かない。タペタとアースラ、戦闘不能。

「冗談じゃ……ねぇや！」

「……斬る！」

俊足を誇るレイとサイアス。修羅へ向け、左右に別れての同時攻撃。力の差がわからない訳ではない。恐怖が無いわけでもない。だが仲間がやられ、尻尾を震わせて逃げるなど、言語道断。殺られる前に、殺るしかない。

波動を放ってから動かない修羅へと迫る二人。右手からレイが、左手からサイアスが。己の信じる得物を手に、今まさにその首を獲らんと刃を振り下ろす。

「滅殺！」

豪！

天を貫く昇竜の如き拳。
紫炎を纏い、空を切り裂く鬼の拳が、容赦なくその牙を剥いた。
直撃。
攻撃態勢だった二人、かわす事、叶わず。

「うがぁぁぁ！？」

「！？　……ッッ！」

大きく弧を描いて宙を舞い、グシャァ、と、嫌な音と共に地に転がる。たった一撃。それだけで、ここまでの全てをへし折られてしまった。レイとサイアス、戦闘不能。

「レイさん！　サイアスさん！」

「リュウ！　前！」

「！？」

レイとサイアスに、リュウが気が逸らした一瞬。すでに修羅は、次の行動を起こしていた。リンプーの声に我に返ったリュウと、その仲間達の眼前。跳躍。中空から、両の掌をリュウ達へと向ける。
強大な力をそこに集中させて。

「天魔！」

気弾の雨。否、暴風雨。

最初の波動を戦艦の主砲に例えるなら、今度は秒間数百発のガトリング砲。一発一発が地面を抉り、クレーターを作る。降り注ぐ気弾に、隙など在りはしない。恐ろしく正確に、リュウ達へと飛来する。

「うおおお！」

「がああああ！」

「！！」

ランドとガーランド。巨体二人がその身を盾に、やらせはせぬと仲間を庇う。猛烈な気弾の暴風雨に晒された二人。猛威が止んだ後、リュウ達の中でも屈指のタフネスを誇る彼らは、ボロボロの無残な姿となってその身を地に横たえた。ランドとガーランド、戦闘不能。

「くっ……！」

着地した修羅は変わらぬ殺意を放ち、リュウ達を見据えている。時間にして１０秒に満たない。たったそれだけの間に、６人倒された。今までの比じゃない。列島の魔物が可愛く思える。これが、これがフォウルのライバル、『拳を極めし者』か。

「逃げだ！」

「「「！」」」

リュウは即断した。このままでは勝ち目はない。全滅だ。倒れている者はまだ息がある。むざむざ死なせるわけにはいかない。この

場は引く。……しかし、そうやすやすと見逃してくれるはずも、ない。

「ボッシュ！」

リュウは、相棒に念話を飛ばした。今即興で練った全てのプランを、念波に乗せて一方的に送りつける。飛んでくる内容を理解するごとに、苦虫を噛み潰したような険しい表情となるボッシュ。

本当は、そんな事を許容したくない。しかし、頷くしかない。今の状況ではそれが最善としか思えなかった。これは賭けだ。命が助かる確率の一番高い賭けだ。それに乗るしかもう道はないと、ボッシュは腹を括った。

「みんな、倒れてる皆を集めてボッシュの周りへ！」

「「「！？」」」

残っているのはリンプー、モモ、ゼノ、ステン、リンの5人。逃げるというのはわかる。倒れている者を集めるというのもわかる。

でも、どうやって？

この修羅は、それを見逃してくれる程甘い相手ではない。そんな隙が、どこにあると言うのか。

「……」

修羅は、リュウの判断に怒りを感じていた。

成る程正しい。この場で逃げの選択は全く正しい。

だが、許さん。

まさかこれほどあっさり負けを認める愚者であったとは。

失望だ。
死合うに値する相手ではなかった。これ以上無様な姿を晒す前に、地獄へと葬り去ってくれる。

「逃さぬ！　恥を知れぃ！」

放つオーラの威圧が増す。凶暴なまでの殺意が渦巻く。リュウ以外、足が竦む。
殺される。皆がそう感じた。
だがリュウは、その殺意の渦中にあってなお、不敵な表情を浮かべてこう告げた。

「俺が、“フォウルと引き分けた事がある”……って言ったら、信じる？」

「！！」

修羅の動きが、止まった。

威圧が緩む。殺意が薄まる。千載一遇のチャンス。その僅かな緩みの間に、リュウの仲間は気絶した仲間をボッシュの下に引き寄せた。その中にはカーンの姿もある。
一つ間違えば、動いた瞬間に標的にされていた。だが、皆はリュウが何かをしてくれるはずと信じていた。リュウも、皆が動いてくれると信じていた。そしてやるべき時に、やるべき事をやった。言わずとも、お互いの信頼がこの結果を生んだ。

――すまねぇ相棒――
――気にすんな。さっきの全部任した――
――おうよ――

そう念話で話し、ボッシュは

「デルダン！！」

ダンジョン脱出の魔法を使った。
リュウだけを、その場に残して。

ぐにゃりと、ボッシュ達の周囲の空間が捻じ曲がる。
リュウは、賭けに勝った。
この隙のない相手の気を引く事に成功したのだ。
デルダンが機能するかどうかも一か八かだったが、海からも空からも離脱不可能という列島の特殊な環境により、この魔法なら恐らく発動するだろうと踏んでいた。

「『最強を求めし者』と、引き分けた……だと」

修羅の目には、最早リュウのみしか映っていなかった。その後ろの、歪んだ空間の向こうに消えていく者達など、どうでもいい。随分懐かしい名を聞いた。その名を知っている者が、只者である筈がない。引き分けたと言うのが真実だとしたら、一層の興味が湧く。

「ならば、うぬが秘めしその力、見せてみよ！」

「言われなくても……！」

修羅は待っている。
変身するまでの時間を許してくれている。ありがたい。そして、ここまでは上手くいった。咄嗟にしては、上出来すぎる程だ。だがここからだ。ここからが、自分の勝負どころだ。

リュウはボッシュに託していた。そして仲間を信じていた。きっとみんななら、もう一度ここへ来てくれる。だから、自分がそれまでに出来る事をする。みんなが来てくれるまでに、俺はコイツを何としても……“説得”する。

……全く損だ。ああ損だ。仲間を守る。修行もする。両方やらなくっちゃぁならないのがリーダーの辛い所だ。全く損な役回りだ。……だが仕方ない。そうすると決めたのだから、仕方がない。

心の声とは裏腹に、リュウの顔に我が身を嘆くような表情は、一片たりとも浮かんでいなかった。そしてリュウは、自分の中へと意識を巡らせる。

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

火柱にも似たオーラが弾け、リュウはドラゴナイズドフォームへと姿を変える。

「……」

修羅は、リュウに対する評価を改めた。

一人で我と戦うか。成る程それだけの力もあるようだ。『最強を求めし者』と引き分けたと言うのも、あながち嘘ではないらしい。先程の非礼は詫びよう。強者よ。

「小童……名乗れ」

「……リュウ」

修羅は、久方ぶりの覚えるに値する者として、その名を心に留めた。口の端を吊り上げる。相手は名乗った。ならば自分も名乗る。それが己の知る、戦前の礼儀だからだ。

「我が真の名は、ドヴァーなり！」

返答するように名乗った修羅を見て、認められたのか、とリュウは思った。ならばついでにもう一つ。ここまで来たんだ。怖い物なんて何も無い。それならいっそ、毒を食らわば皿まで。

「一つ……もし、俺が倒れるより前に、俺の仲間がまたこの島に来る事が出来たら……あんたに、俺達の師匠になってもらいたい！」

「！」

この者は、どこまで本気か。この島に来るのもやっとだった連中が、ほんの数分前に、我に完膚なきまでにやられて逃げた連中が、再びこの島へ来るだと。しかも、その中で最も強者であろう、この者抜きで。そんな事が起こり得るというのか。まるで絵空事だ。

だが、面白い。いいだろう、乗ってやる。

「よかろう……だが――――」

殺意が、さらに増した。張り詰めた空気に、リュウは気が遠くなりそうになる。

「我が滅殺の拳！　うぬに耐えられるか！」

「……！」

裂帛の気合いが弾ける。
空気が、変わった。

リュウは、溢れる龍の力を抑えない。そんな生易しい事を言っていたら殺される。
最初から、全力。後の事は後で考える。皆を信じて、気力の続く限り。
ドヴァーは、構えを崩さない。まさか『最強を求めし者』と同等の者に出会うとは。
待っていた。これぞ愉悦だ。我が望みだ。この者との死合いを、心行くまで堪能するのだ。

二人の間に緊張が高まる。
大地が揺れる。
大気が震える。
火山がそれに耐えきれないと嘆き、地上の至る所から蒸気が噴き出した。

そして――――

「滅殺！」

「ヴィールヒ！」

――――二人の竜が、激突した。

＊

「う……」

「お、気が付いたみてぇだな」

薄らと、瞼を持ち上げる。吸い込まれる程に青い空が、その眼に飛び込んでくる。

ハッと思い、レイは身を起こした。周りにはまだ寝ている者が数名と、起きている者が数名。足元の白いフェレットが、訳知り顔で自分の顔を覗き込んでいた。

「……おい、ボッシュ、何がどう……」

「わかってる。全員目が覚めたら、全部話してやっからちっと待ってな」

ボッシュはそう言うと、まだ寝ている面子に目を落とした。そこまでで何も言えなくなったレイは、仕方なく自分の体の確認をする。

傷は……塞がっている。治癒の魔法か、薬草か。ここはどこだ。そう言えば見覚えがある。……チクア村の一角だ。俺が気を失ってから、どれくらい経った。……まだ日は高い。それほど時間は経ってない。……そういやリュウが居ない。リュウはどこに……まさか！

わからない事だらけだが、何となく察しがついた。きっとまた、自分はあの少年に命を救われたのだ。今すぐにでも、その事をボッシュに問い質したかったが、出来なかった。起きてる面子も神妙な顔をして黙りこくり、妙な雰囲気が漂っている。周りが起きたら話すと言ったボッシュの言葉を頭の中で反芻し、座ったまま大人しく

時間を過ごす事にした。

タペタ、ランドが目を覚まし、続いてサイアス、アースラ、ガーランドが目を覚ました。彼らの体の傷も、既に癒えている。起きだした面々は、薄々感づいていた。あの状況でこうして全員無事など、どう考えてもあり得ない。この場に居ないリーダーが、何かをしたのだ。明確な回答を得る為に、ボッシュの言葉を待つ。

ボッシュは、全員の視線が自分に向いている事を確認し、重々しく口を開いた。

「今、あの島で相棒が……頑張ってる」

「「「……」」」

誰も驚かなかった。やはり、という空気があった。ボッシュは特に気にも留めず、話を続ける。

「あのまんまだったら、確実に全員死んでたからよ。そういう意味じゃ、仕方なかったんだ」

「「「……」」」

皆、黙っている。確かにその通りだ。また自分達はリュウの世話になってしまった。あの場を見ていたリンプー達も、気を失ったレイ達も、同じ気持ちがそこにあった。あの修羅への恐怖。殺意に竦み、役に立てなかった己への不甲斐なさ。粉々に打ち砕かれた自信。

「あたし達、何も出来なかった……」

リンプーが落ち込みながら、そう告げる。普段の元気が、今は見る影も無い。

「私達は、ずっと足手纏いなのでしょうか……」

眼鏡の奥に悲しそうな色を浮かべて、ゼノもそれに続く。誰もそれを否定する言葉を発さない。暗く沈んだ雰囲気を、しかし振り払うように白いフェレットが活を入れる。

「おいおい何暗くなってんだ。相棒は足手纏いだなんて一っ言も言ってねぇっての。むしろ、俺っち達を今か今かとあの島で待ち構えてるはずだぜ？」

「「「……」」」

ボッシュの言葉は、逆にメンバーからの不信を買った。

待ってる？　リュウが？　全く役に立てなかった自分達を？　一体何のために？　下手な慰めなら止してくれ。そう思った者が多かった。

納得いかない表情のメンバーに、少し溜め息をついたボッシュは、仕方ねぇなと再び口を開く。

「……わかった。あん時、あのヤロウと対峙した時、相棒が俺っちに、なんつったと思うね？」

「「「……」」」

「相棒はな、あのヤロウを“説得”しておくから、よろしくっつったんだぜ？」

「「「!?」」」

説得？　あの修羅を説得？　何の事だ？　一体何を説得すると言うんだ？

皆の顔にはそう書かれていた。それを理解したボッシュが、さらに話を続ける。

「何を、って顔すんなよ。そりゃおめぇ、あのヤロウに、俺っち達の“師匠”になってくれってよ」

「はぁ!?」

リンプーは思わず素っ頓狂な声をあげた。「正気か」とも思った。それはそこにいた全員の声を代弁したものだった。これで何度目だろうか。リュウの正気を疑うのは。

「まぁ確かに何言ってんだって感じだがよ、相棒がやるっつって、出来なかった事が今まであったか？」

「「「……」」」

促され、これまでの事を思い返してみる。

……ない。

いざという時、必ずリュウはどうにかしていた。こういう時に言った事は必ず実行していた。

……そうか。そうだった。じゃあもういい加減、疑うのはやめよう。

リュウは本気だ。本気で、あの修羅を師にするつもりなんだ。

誰もがその結論に達したと察すると、ボッシュは少し真面目な顔をして、話しを続ける。

「俺っち達ゃよ、あの列島を越えて強くなった。そりゃもうかなりのもんのはずだ」

「「「……」」」

それは事実。今のレイやリンプー、タペタに至ってさえ、過去の自分達とは比べ物にならないくらい強くなっている。今更、改めて言われるまでも無い事だ。だがそれでも、とボッシュは続ける。

「だけどよ、想像してみてくれ。ナギッ子が、もしあの列島に挑んだとしたら、俺っち達ほど苦戦したかね？」

そう言われて、皆言葉に詰まった。苦戦している姿が想像出来ない。あの“ナギ”ならばあんな列島くらい、単独かつ無傷で突破していておかしくない。自分達があれだけ苦戦したあの列島を、だ。

「な？　つまり、残念だがまだそんだけ、俺っち達とあいつらとの間にゃ差があるんだって、相棒は言ってたぜ」

「「「……」」」

ボッシュはそう言って、自嘲気味にフッと笑った。リュウから託された話はもう少しオブラートに包んだものだったが、これくらい言っても問題ねぇ、と大雑把に自分の言葉に置き換えていた。

「だから、相棒抜きであの列島を越えるってのは、まぁ言ってみりゃ最低条件ってヤツだな。んで相棒は、俺っち達ならそんなもん楽

々クリアして、またあの島まで来てくれるって、信じてんのさ」

「「「……」」」

リュウは信じている。仲間達が、自分を信じてあの島まで来てくれると信じている。

その後に、皆を次の段階へ進ませるために、今もあの修羅と戦っているのだ。

そこまで考えて、仲間達は思う。

全く、馬鹿だ。ああ馬鹿だ。どこが常識的だ。あれほど常識外れだと思った“紅き翼”のリーダーも、かくやという程に馬鹿じゃないか。……だが、こうまで素直に信じられたら、こっちだって信じるしかないだろう。答えるしかないだろう。でなければ、炎の吐息の一員として、合わせる顔が無いではないか。

「……行きましょう」

「うむ。これ以上リュウに負担を掛けるのは忍びない」

ゼノが、ガーランドが立ち上がった。その顔に、先程までの鬱屈とした表情は浮かんでいない。

「愉快だねぇ……ま、そういう事ならやるしかねぇな」

「ウキャキャ。そんじゃーおいらも頑張っちゃおうかね！」

「お……同じく……」

レイが、ステンが、サイアスが立ち上がった。
ぐっ、と、その足取りには今まで以上の力強さを感じさせて。

「はぁ、俺達大変なリーダーに付いてきちまったな」

「全くだね。でもそう言うアンタだって、行かないってわけじゃないんだろ？」

立ち上がり、ニヤリと笑うリン。同じく立ち上がったランドは照れ臭そうにそっぽを向く。

「おーう、ワタクシ、ムッシュ・リュウの為にお腹一杯のご馳走用意するのですね」

「心意気は買うが、貴様には絶っっ対に料理はさせん」

「それなら私が代わりに何か作るわー。爆弾とかでいいかしらー？」

言いながらタペタとアースラ、モモも立ち上がる。アースラがチャキッと銃に手を掛けてタペタを脅し、タペタは「なぜですね！？」と嘆いているが、スルー。

「そっか……よっし！　じゃあ、みんなでとっととリュウのところへ行こう！」

「おうともよ。待ってな、相棒！」

リンプーがいつもの元気を取り戻して立ち上がり、そして最後に、ボッシュが立ちあがった。

全員が、再び列島を越える決意をした。自分達のリーダーを、リュウを信じて。

＊

リュウの仲間達は、再びココン・ホ列島へと足を踏み入れた。
士気高く、相手の弱点は把握し、地力も上がっている彼らにとって、リュウ抜きと言えど最早列島の魔物は物の数ではなかった。
岩石魔物を粉砕し、三つ首魔物をぶっ飛ばし、グミのオウを蜂の巣にし、集結した魔物どもを力でねじ伏せる。前回以上に一丸となった結果、驚くべきスピードで４９の島を踏破することに成功した。

所要時間、僅か２日。

道中、魔法の訓練をしていた幾人かが弱い治癒の術を使えるようになっただけで、まともな回復手段も持ち合わせておらず、最終的には傷だらけとなった炎の吐息の面々。
だが、到着した。リュウ抜き、僅か２日という短期間で、再び獄炎島へと到着した。

そして彼らは、その光景に絶句した。予想していたとは言え、獄炎島の環境が一変していたのだ。

大地には深い地割れが幾重にも走り、点在していた泉は全てが干上がってみすぼらしい姿を晒している。僅かにあった植物は一切がその姿を消し、火山に至っては火口の縁がボロボロに欠け、中腹に

抉られたような大穴が何個も開いている。
まるで地獄。島がその全貌を保っているのが、不思議なくらいに思える惨状だった。

「滅殺！」

「ウゥオオォォォッ！」

「「「！」」」

空中でチカチカと光る、赤い何かが見える。それが二人の修羅であると理解するのに、時間はかからなかった。

リュウとドヴァーは、二日の間休む事なく闘い続けていた。
リュウが拳をドヴァーの頬に叩き込めば、ドヴァーの肘がリュウの顎を捉える。ドヴァーが螺旋を描く蹴りの乱舞を放てば、リュウの爪の連打がそれを真っ向から相殺する。

熾烈。

まるで今始めたとしか思えない動きで、二人は拳を交え続けている。バケモノ。これが竜同士の闘いか。この相手「拳を極めし者」が、かつてフォウルと世界を二分して争ったという話しは、決して誇張ではないとボッシュは思った。そして、それと拮抗する相棒のデタラメさに、改めて驚いていた。

「相棒！　来たぜ！　相棒！」

ボッシュが空中で激突する光に向け、声を荒げる。
二人は、闘いを止めない。……聞こえていない。

「ウゥォォォォ！！」

――――リュウは、限界だった。

長く変身を解かずにいた為、ドラゴンズ・ティアの効果も薄れてきていた。

1日目を過ぎた辺りから徐々に強くなっていく破壊衝動を抑え、さらにドラゴナイズドの体にさえ容赦なくダメージを与えてくるドヴァーの猛攻にも耐える。

皮肉にも、その暴走とも言える状態のおかげでドヴァーと戦えてはいる。

しかし心身ともにもう限界だった。

きっともうすぐ。もうすぐ来るはず。そんな仲間への信頼が、最後の一線をギリギリの所で耐えさせていた。

「ヌゥアアアッ！！」

――――ドヴァーは満足し、そして、さらに飢えていた。

この者は拳を交えるごとに力を増している。これだ。この気の昂り、久しく味わえなかった高揚感。我が求めていたのはこれだ。もっとだ。もっと！　我を楽しませよ！　どちらかが、死すまで！

二人の激突は止まらない。

ドヴァーが地に拳を打ち込み、リュウ目掛けて天高く波動を噴出させる。

リュウが空に手を掲げ、上空から極大の雷の柱を何本もドヴァーへ落とす。

苛烈さは、増していくばかりだった。

「おい！　みんな叫べ！　相棒に俺っち達が来た事を知らせるんだよ！」

「「「！」」」

念話を送っても、反応が無い。ボッシュにはリュウが暴走しかけているという事がわかった。こうなった時の対処法なんて知らない。出来る事と言ったらただ単純に、ひたすらに、名前を呼びかける事。リュウを信じて、気付かせるくらいしかない。

「相棒！」

「リュウ！！」

各々が、空に向けて大声を出す。ここまで来たぞ、と声を張る。喉を潰す程の勢いで。ありったけの大音量で。爆音に掻き消されようとも、付近に流れ弾が着弾して吹き飛ばされようとも、声を出す事を止めようとはしない。

「ウ……」

「天衝！」

「「「！」」」

リュウの動きが、鈍った。同時にドヴァーの渾身の蹴りが、鳩尾に食い込む。

強烈な痛みがリュウの全身を駆け巡る。

――――聞こえた。確かに。

襲い来る破壊衝動、そして痛みと戦いながら、声の聞こえた方向

へと目を動かす。
――――居た。みんなだ。やっぱり、来てくれた。

蹴りの勢いで地面へと激突したリュウ。気力を振り絞ってよろよろと起き上がると、かろうじて残っている意思と全神経を集中させ、変身を解いた。その途端、どっ、と凄まじい疲労感が襲ってくる。竜変身の時よりも、今は何倍も酷い。さらに痛みが全身を支配して、すでに感覚が無くなっている。指一本動かせず。気を抜かなくても、今にも倒れる。

「リュウ！！」

「相棒！」

仲間達が駆け寄り、今にも倒れる所だったリュウの体をしっかりと支えた。
助かった。ホント、持つべき物は仲間だ。心底リュウはそう思った。
でも、まだ意識を失う訳にはいかない。コイツに、ドヴァーに明確な了承を得るまでは。
支えてくれる仲間に全体重を預けながら、目の前に降り立ち、じっとこちらを睨み続けているドヴァーに向け、声を絞り出す。

「……俺……の、勝ち……って……事で……」

「……」

ドヴァーは考える。
ここで終りか。口惜しい。
しかし約束を違えるは恥。我が言に、二言は無い。

いいだろう。
どうやらこの連中、思ったよりは骨があるらしい。この者も含め、成長を見るというのも中々に心躍る。我が力に耐え得る強者を自ら育てる。それもまた、一興なり。

「よかろう……我が極意、しかと継いで見せよ！」

「「「！」」」

仲間達は驚いた。まさか本当に、この修羅を説き伏せるなんて。尋常じゃないこの相手とずっと闘い続けていた事といい、うちのリーダーは、とんでもなさ過ぎる。

そんな呆れにも似た尊敬の念を浴びるリュウ。
仲間達の腕の中で、身動き一つしない。

「お、おい、相棒？」

「リュウ？　……リュウってば！！」

声を上げ、揺すってみても反応が無い。
まさか、力尽きて……？　と皆が一瞬青くなったところで。

「……ＺＺＺ……ＺＺＺ……」

静かな寝息が、聞こえてきていた。

「……眠って……いるようですね」

「……焦らせんなよこの野郎……」

ドヴァーの答えを聞いた瞬間、ぷつりと緊張の糸が切れたリュウ。
仲間達に囲まれて健やかな寝息を立てながら、先程まで修羅と互角に戦っていた者とはとても思えない、あどけない寝顔を晒しているのだった。

こうして、リュウ達は『拳を極めし者』ドヴァーという強力な師を得て、文字通り必死の修行を行うことになる。

ナギ達とのバトルまで、あと一ヶ月弱。

続く

第十二章　12、師匠（後書き）

12章終わりです。えらい時間掛かりました。
更新延びまくりで申し訳ありません。

ご意見ご感想お叱り及び盛大なご突っ込み等々ありましたらお気軽に書いてやって下さいませ。

第十三章　1、当日

リュウ達がサルディン地方へと修行に出てから一ヶ月。

晴天。機械浜国立公園広場。ＡＭ１０：００。

だだっ広い国立公園の真ん中の広場にて、ぽつんと佇む四つの影があった。徐々に世間の目を集め始めている『悠久の風』所属の戦闘集団、“紅き翼”である。

「遅ぇな……」

「そうですね。どうしたのでしょう」

リーダー、若干１１歳にして『千の呪文の男（自称）』ナギ・スプリングフィールド。傍らにはお馴染みスマイルを浮かべた重力魔法使い、アルビレオ・イマ。

「ふーむ……あのリュウ君が約束の時間に遅れるとは思えないのだが……」

「……そうじゃな」

旧世界での修行を終えて駆けつけた若きサムライマスター、青山詠春。アルがどうやってか探し出した無愛想で幼い容姿の老魔法使い、ゼクト。“紅き翼”メンバーである彼ら四人は、最後のメンバーであるリュウが結成したチーム“炎の吐息”との対戦の為に集合していた。

「アル、今日の集合予定……何時っつったっけ？」

「その質問はこれで４回目ですが……午前９時に公園の広場、です」

「……もう一時間も過ぎてるぞ」

「そうですねぇ」

予定の時間を大幅オーバーしているのに、リュウ達は一向に姿を表さない。

せっかく修行の成果を存分に試せると思ったのに、この俺を待たすたぁどういう了見だリュウの野郎。いっそここからあの城まで飛んでって連れてくるか。いやでも入れ違いになったらさらに面倒だし。あーくそ。

そんな具合にナギは苛立っていた。他の３人にしてもアルは割とのほほんと。詠春はいぶかしみながら。ゼクトは無表情で。来るはずの対戦相手を求めて、ひたすらに待ち惚けをくらっていた。

所変わって、ナギ達の居る広場の端に設けられた一角。透明なガラスのような、幾重にも張られた対衝撃対魔法結界に守られた空間。広場をあらゆる角度から見渡せる巨大な魔法スクリーンが展開されているそこは、この日のためにマーロックが用意した特別な観覧席だ。

とある古き民の王族や長、経済界でも一二を争う大富豪、アリアドネーの魔法騎士団総長、悠久の風最高責任者、果てはメガロメセンブリア元老院議員の肩書きを持つ超々ＶＩＰ等々、魔法世界津々浦々の大物がマーロックの招待に応じて集まっていた。頑強な鎧を着た護衛の兵士がズラリと取り囲む、そうそうたる顔ぶれが並ぶ様は、さながら小規模な国際会議の如き様相を呈している。

「まさか逃げた……わけやないですやろな……」

その中にあって、食い入るように広場を見つめている海人の商人、マーロックは冷ややかだった。今日の為に今までの“紅き翼”の足跡を洗い出し、関わりのありそうな各所に働きかけ、安くはない額を投資してこの場所を抑えたり設備を揃えたりしたのだ。幸い目論見以上に多数の大物が集まってくれたおかげで、通常なら考えられない程のコネを作る事ができた。元を取るどころかお釣りが来るくらいだ。

だがしかし、これで“炎の吐息”不在のせいで終了などとなったら、いくらなんでも不完全燃焼極まりない。もしこのまま来ないようなら、このセッティングにかかった費用全てをリュウ達になすりつけて、全額払うまで地の果てまでも追いかけてやる……と、密かに算段を立てていた。

「……リュウが逃げる訳がねぇ。きっともう少しで来るはずだ」

「ええ、きっと来ます。来なければ……と言ってある事ですし」

若干ぴりぴりしている広場の方では、４人とも腰を下ろしての雑談が進んでいた。アルの含みを持たせた発言に、妙な引っ掛かりを覚えたのは詠春だ。

「……アルお前、まさかリュウ君を脅したんじゃないだろうな？」

「おや脅したとは人聞きの悪い。私はただ、負けた方が罰ゲームをしましょうと提案しただけですよ。勿論来なければ不戦敗と言うことになりますね」

「ほう……それなら心配は要らぬな。リュウは必ず来るであろう」

「……やれやれ、それを脅しって言うんだよ」

それからさらに数十分。

広場の周囲に遮蔽物などは一切無く、３６０。パノラマで見渡せるのだが、人影一つ見えてこない。いつまで待たせるつもりだ、と来賓席に不穏な空気が漂いだした頃、痺れを切らせたマーロックはナギ達の方に通信を送った。

「あんたらには申し訳ないですが、これ以上待つようですと……」

ナギ達の前にポンと出現した平面画像。映し出されている仏頂面のマーロックがそこまで口にした時、何かに反応したようにナギが立ち上がった。

「……おいおっさんそんな事より……あいつら、やっっっと来たようだぜ！」

「？　……どこに？」

ナギが反応したのに続き、他３人も立ち上がった。釣られて周囲を見渡してみても、相変わらず人影は全くない。映像の向こうでキョロキョロしているマーロック。それを見かねたナギは、溜め息混じりにアドバイスを送る。

「おいおいどこ見てんだ。あっちだよ」

「？」

そう言ってナギが徐に指を差した方向は……上。

「あ……」

ヒュゥゥゥ……と言う風切り音の後、盛大な爆音を響かせて、ナギ達の前方数十メートルの辺りに次々と降り注ぐ多数の何か。相当な高さからだったのか、着地の衝撃でもうもうと土煙が舞い上がる。

「けほっ……くっそぉディースさんめ！　どうしてこう土壇場でミスんだよちくしょう！」

「気持ちはわかるが俺っち達にも悪ぃ部分あるぜ相棒」

「間に合ったんだから文句言うんじゃないよ。……と、マスターは言ってます」

「よいしょ！　っと。あ、ねぇねぇ大丈夫だった？」

「はい。私高い所ってクラクラして結構好きなんです」

土煙の向こうから誰かに対する文句のようなものや、女の子同士の会話のようなものが聞こえてくる。煙の中に徐々に浮かび上がってくる何かの影の数は全部で１２……ではない。よく見ると影の数はそれよりも少し多い。

「ほー、壮観じゃの」

「あれが、リュウ君が作ったというチームか……」

「遅ぇじゃねぇかよ！　リュウ！！」

詠春やゼクトをして、只者ではないと認識させる影の大きさは大小様々。先程までナギの顔に張り付いていたぶすくれた表情はパッタリと影を潜め、代わりに実年齢よりも若干大人びた不適な笑みが、そこには浮かんでいた。

「悪い。ちょっと色々あって……」

サァッと撫でる様に風が吹き、舞い上がった土煙がかき消される。リュウを初めとした“炎の吐息”の面々が、満を持してその姿を表した。

これから最強のチームを相手にするというのに、その振る舞いにはどこにも気負うような空気を感じさせない。まさに威風堂々。

「……ん？」

そしてナギは、その集団に違和感を覚えた。

見たことの無いヤツが二人混じっている。あいつらは一体誰だ？片方はどっかで見た事あるような気がするが、もう片方は何なんだ？　少なくとも、自分がスイマー城に滞在していた時には居なかったはずだ。……気になる。

そんなナギの疑問への答え。その謎の人物二人と、ついでにリュウ達がどうして遅れたのかについてを知るには、１日半だけ時を遡らねばならない。

＊＊＊

対戦日の前々日。深夜。

「……」

「生きて帰って……来れたね……」

メガロメセンブリアから北へ行った所にある、豊かな湖のほとり。聳えるスイマー城の前に並び立つ１２人。この城の主、“炎の吐息”の一行である。現在の彼らの見た目はそう、まるで闇夜を徘徊するゾンビか何か。ポツリと漏れ出たリンプーの一言は、心の底から今、自らの生があるという事に感謝した言葉だった。

ドヴァーの元での一ヶ月は、修行と呼ぶにはあまりにも過酷なモノだったのだ。

『実戦に勝る修行無し！』

それがドヴァーの基本方針。まず、気配察知や気・魔力のコントロール等の基礎中の基礎が出来ていない者は、戦いの中で習得するまで少人数での列島越えを課せられた。ドヴァーが自分と修行をするならそれが必要絶対条件である、と頑なに譲らなかったのだ。最終的には全員がその資格を得るに至ったが、特にそういった事を意識した事のない面子にとっては、０から習得するまで延々列島越えを繰り返させられるという非常に非情な苦行であった。

だがそれは、その後に控える真なる地獄への招待状に過ぎない。女だろうが子供だろうが容赦なく滅殺の拳を叩き込む、鬼のような古龍との修行（という名の死合い）こそが本丸。意識を失って綺麗なお花畑に招かれ、その先を流れる川を渡りそうになったのは、リュウを含めたメンバー全員一度や二度では済まない。生き残れたのは死線を薄皮一枚で越えない、神業的手加減をしていたドヴァーの技量と、回復需要が多すぎて、供給を間に合わせる為に嫌でも上達

するしかなかったリュウを筆頭とした治癒魔法部隊による所が大きかったりする。

それでも互いに助け合い励ましあい鍛錬修練切磋琢磨の末、一ヶ月という短い期間にも関わらず、何とか一人も欠けずにドヴァーの出した“最低合格ライン”は踏み越える事が出来ていた。

「うぬらの拳、我が境地に程遠し！（要約・修行するならまたいつでも来い）」というドヴァーからのありがたいようなありがたくないような言葉を貰って、ボロ雑巾のようなゾンビ状態で城へと戻ってきたリュウ達一向。後一日半後には対紅き翼戦である。とにかく体を休める事を第一にして、そろそろと足音も立てずに裏口から城の中へと入り、みな泥のように深く眠るのだった。

翌日の夕刻。睡眠時間が１５，６時間を超えるかどうかという所で、眠っていたリュウ達を起こしたのは城の管理を任されている妖精達だった。「知らない間にリュウのヒト達が帰ってきてるよぅ！」と部屋掃除担当妖精からの報告を受けた妖精リーダーが、見て貰いたい物があるから全員起こせ、と伝令を出したのだ。そして「一旦外へ出て貰うけど、その時正面入り口は絶対に通らないように。外からなら入ってきていいから」と謎の念を押されたリュウ達。仕方なく裏口から外へ出てみると、そこに広がる景色に皆、驚いた。

「お？　畑が広くなってんじゃねーか」

「旦那旦那、あっちに果樹園みたいなのが」

「……す……凄い……」

たっぷりの睡眠を取ってボロ雑巾状態から復活したリュウ達が妖

精に見せられたのは、スイマー城周辺の見事な開拓ぶりだった。戻ってきた直後は夜で暗かったのと、とにかく寝たい、というのがあって気付けなかったらしい。城周囲の妖精農場（仮）が大幅にその規模を拡大していたのだ。

広大な畑には瑞々しい菜っ葉の類が規則正しく並び、少し遠くに目をやれば、果物らしき実をごろごろ生らせた木がこれまた規則正しく植えられている。細かな水路も整備され、自給自足体制が磐石なものになりつつあった。

「まさかあの妖精達がこれほどしっかり動けるとはな……」

「驚きよねー」

その光景に心底感心しているアースラとモモ。それを小耳に挟み、うんうん、と親のような気持ちで感慨深く一人頷くリュウである。

「それはそうとリュウ。予定では確か明日が約束の日……ですよね？」

「そうです。なので、今日も城でゆっくり休みましょう」

「いよいよ明日か。愉快だねぇ」

思えば明日の為にあれほどの地獄を潜ってきたのである。ここで体調不良であっさり負けました、等となったら真正の大馬鹿者だ。休息上等。睡眠万歳。妖精農場を一通り見終わったリュウ達が、さてもっかい休もうかと正面の城門をギィィと開けると――――

そこは一面、ファンシー一色で埋め尽くされていた。

「……なにこれ……」

「こいつぁいってぇ……？」

荘厳な雰囲気だった筈のスイマー城のホールは、その面影を微塵も感じさせない姿へと変貌していた。まず目を引いたのは綺麗に並べられたテーブルに椅子。よく見れば2人掛け用から大人数用まで用途別に揃えられている。それぞれの卓にはしっかりとアイロンがけされたテーブルクロスが掛けられ、その真ん中には色取り取りの花々が飾られている。小洒落た照明が高い天井からいくつも吊り下げられ、柔らかな明かりがホール全体を満たしていた。

言うなれば“趣味でやってるこだわりの小料理店”とでも形容するべきか。その内装にリュウもボッシュも絶句。ついでに仲間達も狐に摘まれた様に目を白黒させている。

「いらっしゃいませよぅ！」

「お客様第一号はリュウのヒト達よぅ！」

「いいからとっとと席に着けよぅ！」

聞こえた声に、ハッと正気を取り戻したリュウ達の前には、ピシッと横一列に並んだ妖精達が眩しい笑顔で出迎えていた。中央の妖精リーダー3人だけが一際大きなコック帽を被り、皆お揃いのエプロンを身に着けている。

「これ……どういう事？」

「私達、お料理のお店を出す事にしたのよぅ！」

「リュウのヒトがくれたレシピは全部バッチリ習得済みよぅ！」

「ちゃーんと親分にも許可貰ってるから大丈夫よぅ！」

「……親分？」

お店なんて自分は許可してないのに。それに親分て誰だよ？　とリュウが首を捻ったちょうどそのタイミングで、奥にある階段から誰かが降りて来る音が聞こえてきた。

「あたしさリュウちゃん。やぁっと帰ってきたかい」

「ディースさん！？　ていうかその格好は何ですか！？」

妖精達から親分と慕われていたのは何を隠そう大魔導士。まだ帰ってなかったんだ、というリュウのさり気に酷い心の突っ込みはさておいて、何故かディースは胸元が開いたチャイナドレスを着ていた。さらに髪をアップにし、薄い赤のアイシャドーを引いて、花魁キセルまで吹かしている。大人の色気を存分に振りまいた、実にけしからんデンジャラスな格好だ。スリットから除く蛇の下半身が何とも艶かしい。

「ふふん、どうだい似合うだろう？」

「まぁ確かに似合ってますけど……それより、これどういう事ですか？」

「どうもこうもほら、このコ達が折角上達してきた料理を誰かに食

べさせたいって言うもんだからさ。その願いを叶えてあげたいな、って思っちゃったのよねぇ。あたしとしてはその気持ちすっごい良く分かるし。あ、別に暇だったからとかそういう訳じゃないのよ？」

（暇だったんだな……）

つまりはディースの暇つぶし。リュウ達が居ない事をいい事に、我が物顔のディースが好き放題このホールを改造していたのだ。ちょっとリュウたちが目を離した隙に、スイマー城の影の支配者として妖精達の親玉に君臨しているディースだった。

「ま、そういうわけさね」

「そういうわけよぅ！」

「とりあえず、リュウのヒト達はそっちの席に座ってよぅ！」

「オーダー！　１２人前のフルコースよぅ！」

「「「アイアイサー！！」」」

無理やり大きなテーブルへと座らされたリュウ達。ふよふよと浮かぶウェイトレス役らしい妖精から威勢の良いオーダーが飛び、伝言ゲームのように厨房へと伝達されていく。まぁ空腹なのは確かだし、ここまでされてスルーするのも悪いか、ということで全員の意見が一致。しばらくすると、あのおこげだらけの妖精達が作ったとは思えないほどの、本格的な中華料理が続々と運ばれてきた。

「さぁ、冷めない内にどーぞよぅ」

「絶対絶対美味しいはずよぅ！」

「是非とも感想を聞かせて欲しいよぅ」

所狭しと並べられた豪勢な料理の数々は、リュウが作った物と見た目ほとんど変わらない。出来立てほやほやの食欲をそそる匂いが、湯気に乗ってふわっと香り立つ。しかしリュウの手はなかなかそこには伸びてこない。“ディースが親分として慕われていた”という一点にして十分すぎる理由が、リュウに物凄い警戒感を与えていた。

「いっただっきまーす！！」

「！」

そんな事とは露知らず、空腹腹ぺコ虎娘。取り分けた唐揚げ料理をイの一番にその口へと放り込む。

「！！　……おーーいしーーーーー！！！」

絶賛の声が、スイマー城に響き渡った。実は微妙に二の足を踏んでいた他の面子も、リンプーのその様子を目にして次々に料理を口へと運ぶ。すると見る見るうちに全員の顔が綻びだす。そしてリュウもリンプーと同じ唐揚げを一口食べて、驚いた。自分が作った物と全く遜色なく、妖精達の料理は美味だった。それまでの懸念は完璧なまでの取り越し苦労だったのだ。

「ンまい……」

「こりゃおったまげたなぁ……」

素直な感想を口にするリュウとボッシュ。その言葉をしっかりと聞き取った妖精リーダー達は、満面の笑みを浮かべてハイタッチ。

「いやホント美味い……よくここまで出来たもんだ」

「全部リュウのヒトのおかげよぅ」

「レシピをしっかり覚えるまで、聞くも涙語るも涙のお料理修行の賜物よぅ！」

「映画なら三部作、単行本なら１４巻くらいの壮大な修行秘話よぅ」

「……」

どこかで聞いたような事を口にする妖精達。よく見ればそこに居るほとんどの妖精達が指先に絆創膏を貼っており、確かな努力の跡を伺わせる。

「お店の名前もみんなで考えて、もう決まってるのよぅ」

「ふーん、なんていうの？」

「その名も、『魅惑の妖精亭』よぅ！　これ以上ないネーミングだと思うよぅ！」

「勿論ゆくゆくは全国チェーン展開、目標１３２７件よぅ！」

「そうよぅ、千人乗ってもだいじょーぶな素敵なお店よぅ」

「……いいんじゃない」

何か色々アウトな気がしたが、料理が美味しかったので気にすることをやめたリュウだった。まぁこのホールも綺麗にはしたけど使い道がなくて持て余しているところだったし、この妖精達の店が上手くいけば、恒久的な収入源になる。それに自分達の修行と同様、努力の結果がこうして実を結んだということを素直に応援したい気持ちもある。打算もあるが意外と悪い案でもないか、と柔軟に受け取っていた。

そういうワケで遠慮なく目の前の料理をがっつこうとしたリュウ。しかしディースがちょいと待ったをかけた。

「おっと待ってリュウちゃん。それでちょぉっとさー、あたしからリュウちゃんに大人なお話があるんだけどナー？」

「……」

ピキーン！と、リュウの直感が発動。ディースが何を言わんとしているのか、瞬時に読み取った。

「……幾らですか？」

「さっすが、話が早くて助かるわー。まぁ見ての通りで色々と入り用だったわけよ。……んーと全部で１０万」

「……まぁ仕方ないですから出しますよ」

「ありがとー。悪いわねー」

と言いつつ全く悪びれる様子のないディースである。恐らくこの

格好もなるべくリュウの譲歩を引き出そうという手の一つなのだろう。

（ま、それくらいで済んで良かった！）

元々財布にはかなりの余裕がある上に、列島でのカナクイ乱獲のおかげでさらなる余剰金もある。なので確かに楽といえば楽なのだが、１０万でも大金なのに随分感覚が麻痺してきているリュウである。

「そうそうリュウちゃん、話は変わるけど“アレ”、完成してるわよ」

「マジですか？」

「マジよ。おーい、降りてきなー！！」

ディースが階段の上に向けて声をかける。するとまたもや何かが降りてくる音が聞こえてきた。しかしその音は実に奇妙で、コツコツではなく、スタスタでもない。ガションガションと金属と石がぶつかりあうような、とても妙な音だった。

「うふふー、呼ばれたようですよ」

そして姿を現したそれは、本当に金属の塊だった。金属製のポリバケツに目を付けて、手と足を生やしたような、ずんぐりむっくり寸胴体型をしている謎の物体Ｘ。

「一月ぶりだねぇ、……とマスターは言ってます」

「コラ、“マスター”はあんたの名前でしょ」

「あ、そのようです。うふふふー……笑う所あってますか？」

「……」

高さ１２９．３ｃｍ，重さ１２９．３ｋｇ，スリーサイズまで全て１２９．３で統一されているこの謎の物体。実はこれこそ、あのエヴァンジェリンが滞在していたときに携わっていた“アレ”の正体。言ってみれば闇の福音の置き土産。

「あー、そうだ忘れてたー！　マスター元気にしてたー？」

「まぁ俺っち達の仕事は完璧だったから大丈夫だろ」

その姿を見て、ガタッと立ち上がったモモ。さして気にしてないように料理を食べ続けるボッシュ。この二人が物体の基礎設計や駆動部分や動力関係の担当責任者である。

「忘れてたとは酷い言い草じゃないかい？　……と、マスターは言ってます」

「はぁ。このややこしい話し方だけはどうしても直らないのよねぇ……」

そんなディースの呆れたセリフ。

この物体はポリバケツではなく“鎧”であり、これ自体の名称は“マスター”と言う。そして、その内部にはモモとボッシュによる超高機能のＡＩが搭載されており、エヴァンジェリンとディースの混成魔法によって作り出された擬似人格が、そのＡＩに移植されて

いるのだ。この鎧自体が混成魔法の影響によって意識を持ち、そのＡＩを“自分の主”という意味での“マスター”と読んでしまうため、このような訳の分からない事態になっているのである。

「まぁ慣れれば何言ってるかわかるからいいけどね」

「おうよ。別に問題はねぇだろうしな」

この鎧、どういう経緯で作られたかと言えば、モモ先生とボッシュ博士によって密かに作られていたあの“人を操る腕輪の探知機”の成れの果てだったりする。探知の機能以外の部分に様々な余計な機能が付加されてこうなったのだがそれはそれ。一応これで腕輪を探して破壊するという目的も達成する事が出来るだろう。

「妖精ちゃん！　おかわりー！！」

「すまんが、こちらにももう一皿貰えるか？」

「あたしもお願いできるかい？」

「「かしこまりましたよぅ！」」

一方で半ば宴会と化した食事会は盛り上がっていた。妖精達の作った料理はとても美味しく、先程から横に空き皿を積み上げているリンプーはともかく、普段なら摂生して多くは食べないガーランドやリン（こちらはダイエット目的）すらもおかわりをする程だった。

「さて、それじゃ話も終わったしあたしも飲もうかね？　いやー相手が居ないと詰まらなくてさ」

「いやディースさんは自重してくださ……」

「堅い事言わないの！　ほらマスター、確かジャパァンのお酒の良いヤツあったろ？　持って来ておくれよ」

「人使いが荒いねぇ……とマスターは言ってます」

しかし断るつもりはないのか、マスターは地面から少しだけ浮き、シュイーンと謎の音を立てて滑るように奥へと引っ込んでいった。

（何だろうあの無駄な技術……）

そしてマスターは立派な酒瓶をいくつか抱えて戻ってきた。それをひったくったディースがガーランドやサイアスの酒飲み周辺に殴り込みをかける。もうリュウは突っ込みを諦め、明日への影響がないことだけを願った。

……しかしそんなリュウの願いも空しく、酔っぱらいと化したディースのせいで成人以上の面子は例外なく飲まされ、場はカオスへと片足を突っ込んでいくのだった。

「ごめんくださーい」

「……？」

ドンチャン騒ぎの中、周囲の喧騒とは別にスイマー城の扉を叩く音がリュウの耳に届いた。同じく聞こえたらしいお腹一杯のリンプーが、一体誰だろうと席を立ち、大きな扉を少し開けて外を覗く。

「夜分にすみません。こちらにリュウさんという方がいらっしゃる

とお聞きしたのですが……」

「？　ひょっとしてリュウの友達？」

「あ、いえ私はその……」

扉の外に居たのは少女だった。年の頃は１３～１４といったところか。顔立ちは幼いがリュウよりは年上で、リンプーよりは下のように見える。髪の色は金で長くはない。何より、その背には桃色がかった翼があった。

「ブフォッ！？」

「うお、汚っ！」

気になったのかそちらを見ていたボッシュが突然、口の中の物を思いっきり噴出した。

「ミ……」

「み？」

「ミイナちゃんじゃねぇか！！」

口の周りを拭くのも忘れ、驚愕した様子で叫ぶボッシュ。誰だっけそれ、とリュウはボッシュの代わりにテーブルを拭きつつ、自らの記憶の海へとダイブする。

以前“紅き翼”がウィンディアでの事件に首を突っ込んだ時、そんな名前を聞いた気がする。確かエリーナさんが第一王女で、その

妹の第二王女の名前……がミイナだったような。そう言えば自分はその人の写真とか見たこと無かったし、ボッシュはエリーナさんよりもミイナちゃんの方が好みだとかなんとかアルと俗な雑談をしていたっけ。

そこまで思い出して、リュウはこの異常事態に気がついた。今はもう夜だ。こんな人里から離れた城に、護衛もお供も連れていない王女が一人で訪ねてくる。普通に考えてあり得ない。取り合えず外で立ったままというのはアレなので、城の中へと招き入れる事にした。その際に外を見回してみたが、やっぱりミイナは一人だけで、お供やお付きは居ないようだ。

「お、王女様がどうしてここに？」

「えーと、あなたがリュウさん……でしょうか？」

ディースのおかげで目も覆いたくなるような惨状が横では繰り広げられているが、そちらは視界になるべく入れないようにしてスルー。巻き添えを食わないようにホールの隅へと案内する。

「はい、そうですけど……」

「良かった……実は私その……ずっとお礼を言いたくて」

「……お礼ですか？」

と、そこでミイナはリュウに向けてペコッと頭を下げた。

「あの時、姉さまと義兄さまを助けて頂いて、ありがとうございました」

「!?　いえいえそんな、頭を上げてください」

正直、リュウは焦った。いきなり現れていきなりお礼を言われ、しかも相手は王族だ。これで恐縮するなと言うほうが無理である。それにお礼ならあの時王様からも言われているし、そんな改まって言われると、むず痒い気持ちが沸いてくる。

「リュウさん達のおかげで、姉さまも義兄さまも無事に済んだと聞いていました」

「まぁ……そうですけど」

「本当なら私もお父様達と一緒にお礼を言いたかったのですけど、部屋から出して貰えなかったので……」

「はぁ……」

なるほど目的はわかった。しかしどうしてこのタイミングなのだろうか。この一ヶ月留守にしていたのに、ちょうど帰ってきた次の日に尋ねてくるとは運がいいというか何というか。それにウィンディアからここまでは凄まじく遠い。どう考えても王女が一人で来れる距離ではないとリュウには思えた。

「つかぬ事をお伺いしますが、どうやってここまで来たのでしょうか？」

「あ、実はですね、“紅き翼”さんの戦いを見ないかというお知らせが城に届きまして。折角だからお招きに預かろうという事で、お父様や姉さま、それに義兄様と一緒にメガロメセンブリアまで来て

いたのです」

「へ、へー……そうだったんですか……」

まさかウィンディアの人が明日の戦いの見物に招待されているとは思わなかったリュウ。微妙に頬を引き攣らせながら、ほぼ間違いなくマーロックさんの仕業だな、と心の中で決め付けた。しかしそこではたと気付く。

「でもそれならこんな時間に来なくても、明日お会いできたのでは……？」

「それは……その……直接お礼を言えると思ったら、居ても立っても居られず……」

「……」

伏し目がちにもじもじしながらそう言うミイナ。なんという美少女の恥じらい。これはもうリュウの脳天直撃だ。しかし何となく王様があの時にミイナを部屋から出さなかった理由が分かった気がした。この行動力から考えて、この人はあの時放っておいたら、敵陣まで勝手に乗り込んでいたかも知れない。部屋に閉じ込めていたという王様の判断は、正しかったと言わざるを得ない。

「でもきっと王様も心配してると思いますよ」

「あ、それなら大丈夫です。書き置きを残してきましたから」

何とまぁ行動派な王女様である。書き置き一つで王女の失踪を見逃すような王様じゃないだろう、とリュウが心の突っ込みを入れた

その時、背後からニュッと白い腕が伸びてきた。

「あーら……可愛いヒヨコちゃんじゃない……」

「!?」

がしっとリュウを羽交い絞めにしたそれは、世にも恐ろしい文字通りのウワバミ。どうやらとうとう気付かれてしまったらしい。片手に持った酒瓶はまだ開けたばかりらしく、大量の液体がちゃぷちゃぷと揺れていた。

「ヒヨコちゃん……いえその……私は……」

「んまー赤くなっちゃって可愛いわねぇ。気に入ったわ。よし、あっちでおねいさんと飲みましょう」

「ちょっと待った酔っぱらい！　こっちの人は王族で、そんな事したら……」

「何よリュウちゃん、あたしの邪魔する気ー？　いいからあんたも飲みなさいよホラホラ！」

「ふごふっ!?」

持ってた酒瓶を無理やり口に突っ込まれたリュウ。今までディースに無理やり飲まされた事は幾度かあったが、こうも度数のキツイ酒を一度に大量に流し込まれてはたまらない。即効で世界がぐるぐる回っていく。

「きゅう……」

「何よだらしないわねぇ……さ、ヒヨコちゃん、あっちへ行って飲みましょ。それはもう浴びるが如く！」

「え？　あ、その、待って……」

ぐいぐいとミイナの手を引くディース。リュウが潰れてしまってはメガロメセンブリアに滞在しているであろうウィンディアの王へ、連絡などしている余裕はない。見かねたリンプーとマスター、ボッシュがその脅威からミイナを守るのに苦心したのは言うまでもない。

そして狂乱の夜が明けて、対戦当日。リュウ達は見事に約束の時間を寝過ごしていた。

起こした妖精達から時間を聞いて青くなるリュウ達。二日酔いというほどではなかったのが不幸中の幸いではある。断片的に昨夜の事を覚えていたらしいディースが謝罪の意味も込めて、大規模転移魔法を使ってリュウ達を機会浜まで送ると言いだし、それに頼った結果、何とか２時間遅れで機械浜……の上空３００ｍに到着して、冒頭へと戻るのだった。

＊＊＊

再び時は戻り、機械浜国立公園広場

「あっちが見物用の席みたいですよ」

「わかりました。わざわざ送って頂いてありがとうございました。頑張ってくださいね」

ミイナはそう言うとリュウ達から離れていく。昨夜酷い目にあったというのに全然気にしていない風なのは天然なのか大らかなのか。見物席へ向かう途中、ナギ達にもきちっと昔のお礼をする事を忘れない辺りは、天然なのかも知れない。

「今のは……確かウィンディアのミイナさんですね。なるほど、そういうことですか」

何を勘ぐったのかニヤニヤする重力魔法使いに、呆れ顔で突っ込みを入れるリュウ。

「いや多分アルが想像している事は絶対間違ってるから」

「んな事より、俺達をこんだけ待たせたからにゃ、楽しませてもらわねぇと割に合わねーぞ！　リュウ！」

魔力を少しだけ開放し、不適に挑発するナギ。明らかに1月前よりもパワーアップしていて、辺りの雰囲気が一変する。しかしリュウ達もさるもの。誰もそれに気圧される様子は無い。

「ま、ご期待には添えられると思うよ？」

「へ、言うじゃねぇか！」

そして、“炎の吐息”と“紅き翼”の戦いの火蓋が斬って落とされる。

第十三章　ＳＯＬ　～マスター誕生秘話～

それはリュウ達がサルディン地方へと出立するより前の話。まだマーロックから日時の指定が届いておらず、アルとエヴァンジェリンが城に滞在していた時の事。

「あ、リュウ君。後でちょっと私のトコに来てもらっていいー？ボッシュはもうこっちにいるからよろしくねー」

「？」

リュウが厨房の錬金術師として妖精達に料理（と怪しい合成）を指導していると、モモがひょいっと顔を出して、そんな事を言ってきた。

（なんだろ……？）

呼び出される理由をしばし考えて、思い当たったのはあの“人を操る腕輪の探知装置”について。ボッシュがもう居るという事は、間違いなくその話だろう。そうとわかれば早速お邪魔する事にする。妖精達には自習という事で納得させ、早速リュウはモモの部屋へと向かった。

ディースが料理している時と並んで、度々スイマー城に爆音を響かせるモモの部屋。実は来る直前にも、中からボフンと小さな破裂音が聞こえてきていたりする。ノックをしても反応がなかったので仕方なくドアを開けてみると、そこは試験管やら三角フラスコやらが乱雑に置かれ、どう繋がってるのかわからない配線や、謎の計器

類が至る所に配置されているマッドな部屋となっていた。

「あー、リュウ君ー！！」

「来ました……ってそんなデカイ声出さなくても……」

「えー！　なーにー！　聞こえないー！」

「えーとだから……」

寸前に起きた小爆発せいかモモは耳がキーンとしてるらしく、やたらと大きな声で話しかけてきていた。よく見れば頬の辺りが黒く煤けている。しばらくして落ち着いたらしいモモから話を聞くことにする。

「実はねー、あと一息でリュウ君から頼まれたあの腕輪のレーダーが完成なのー」

「おー、そうですか」

若干忘れそうになっていたあの人を操る腕輪の探知装置。とうとうそれが完成間近らしい。リュウの予想通り、モモはその事で呼んだのだった。奥にあるスペースへと案内されると、そこにはボッシュ……と何故かディースとエヴァンジェリンの姿があった。

「あれ？　お二人はどうしてここに？」

「ん？　ちょっとねー。あたしもキティもおチビちゃんにお呼ばれよ」

「フン、何故この私がこんな茶番に付き合わなければならんのだ全く」

「まぁまぁいいじゃねぇかご両人」

「？」

どうもボッシュが頼んだらしいがどうしてこの二人を？　とリュウは疑問符を浮かべた。まぁ何かあるのだろうと一旦スルーし、その部屋の中央に目をやる。そこには白い幕をかけられた何か大きな物体があった。モモはその物体の近くによると、幕の端をがしっと掴んで。

「じゃあ、お披露目ー！」

バサッと幕を剥ぎ取り、「じゃーん！」と得意げに見せるそれ。どう見ても鉄の塊。リュウ位の大きさの人間なら入れるかどうか、というくらいのポリバケツのような物体だ。それに手足と上部の半円になっている頭っぽい部分に目らしき丸が二つついている。

「あの……それ探知機、ですか？」

「そうよー」

「レーダー、ですか？」

「そうよー」

「……」

探知機じゃない。どう見てもそれは探知機なんかじゃない。リュウの想像ではこう手のひらに収まる程のサイズで、自分を中心にして周囲にある腕輪の位置がピコンピコンと反応するような、なんちゃらレーダー的な物体を想像していたのだ。まさかそれとはかけ離れた人型ロボット兵器を作っていたとは思いもしていなかった。

「ボッシュ……お前こんな事になってるって知ってたんなら言えよ。もっと早く」

「いやぁ相棒の驚く顔が見たくてよぉ」

何気にボッシュもアルに影響されてか性格が悪くなっているような気がするリュウである。それはさておき、そのずんぐりむっくりな鉄の塊は、まだ動力に火が入っていないのか動く気配を見せない。電源ケーブルが付いている訳でもないし、まさか電池か何かで動くのか？　と訝しがるリュウ。

「それでこれ、どうやって動かすんです？」

「あ、それいい質問ねー。実はその為にリュウ君を呼んだのー」

「？」

まるで意味が分からない、と首をかしげるリュウ。するとボッシュがリュウの肩にぴょんと飛び移り、小さな声で話しだした。

「実はよ相棒、そのドラゴンズ・ティアに入ってる“アレ”をこいつの動力源にしようってな話になってな」

「“アレ”……？」

ドラゴンズ・ティアに入っている物で、何か動力になりそうな物？　とリュウは少し考えて、ハッとした。そんな事に使えるようなお宝が一つ、そう言えばドラゴンズ・ティアに入っている。

「まさか……」

「おうよ。“盗賊の魂”だ」

「何考えてんだお前！？」

かつてハイランドの国の騒動で手に入れる事になった“盗賊の魂”。白く輝くソフトボール大の球。その正体は超高純度のゴースト鉱の結晶であり、恒久的エネルギー発生装置だ。城一つを宙に浮かせ、強力なバリアを展開させ、もし爆発すれば大陸の半分以上を消し飛ばせてしまえるほどの威力を誇る、恐ろしい代物だ。そんな物を動力にして、まかり間違って爆発でもしたら本気で洒落にならない。

「んなの駄目に決まってるだろうが！」

「まぁ相棒ならそう言うと思ってよ。その為にそっちのご両人にスタンバイしてもらったんだぜ？」

「意味分からん！」

「まぁ聞けよ相棒。おめぇさんの懸念もよく分かるがよ……」

ボッシュが言うには、目の前にあるこの金属の塊は、“盗賊の魂”を厳重に封じる為の言わば“鎧”であり、万一爆発したときもそ

の被害を最小限に抑えるだけの設計や封印術式が内部に構築済みだそうだ。そして、誰かが悪用しようとしてもそれを自ら拒む自律式のＡＩ……人間で言えば脳にあたる部分を、エヴァンジェリンとディースという大魔法使いの技で、作り出して貰おうというのである。

「……それってじゃあ最初から“盗賊の魂”を動力にする気だった訳？」

「ま、まぁな……」

「どうせ使い道もないみたいだしー……」

これだから学者は、とリュウのジト目がボッシュ博士とモモ先生に突き刺さる。腕輪の探索装置は“盗賊の魂”を使う事が既に前提になっていて、それ以外の動力じゃ起動さえしない訳で、渡さなければリュウの考えも頓挫してしまう事になる。後戻りできない、退路を断った状態でリュウを呼び込む辺り、ボッシュはやはり性格が悪くなってるような気になってくる。

「……絶対に爆発とかしないようにしろよ」

「おう。それに関してはバッチリだぜ相棒」

しぶしぶドラゴンズ・ティアから盗賊の魂を取り出すリュウ。その白く輝く球体に食いついたのは魔法使いの二人。

「貴様、そんな大それたモノを隠し持っていたのか」

「へぇー、凄いわねソレ。大きな力がビンビン伝わってくるわー」

「……あげませんよ」

物欲しそうなディースとうずうずしているエヴァンジェリンを牽制し、リュウはソレをモモに手渡した。早速モモとボッシュがそれを“鎧”の内部奥にある窪みへと設置する。

「……ふう。これでよし。後は内部のＡＩに人格を宿せば動き出すはずよー」

「つうわけで、頼むぜご両人」

しっかりと頭なのか蓋なのか分からない場所を閉めると、その鎧から離れる博士二人。既に魔方陣が“鎧”の下には描かれており、それが俄かに輝きだす。

「機械についてはさっぱりわからんが、こと人形に関してという事ならこの私の右に出る者は存在しない！」

「ま、あたしもここらで大魔導士としての威厳を見せとかないと、ね！」

そして構える魔法使い二人。エヴァンジェリンは指輪、ディースは双頭の蛇が絡みついた杖を取り出し、鎧に向けて手をかざす。呼応するように魔方陣の輝きが増していく。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

「ベリ・ルス・ル・ビルス・ウロボロス！」

二人の魔法使いが呪文を唱えると、魔方陣から強烈な閃光が放た

れ、モモの部屋が膨大な魔力の輝きで満たされていく。溢れ出た魔力はディースとエヴァンジェリンの指揮の元、徐々にその矛先を鎧へと定める。そして目標の鎧内部のＡＩへと集い収束し、吸い込まれていく。部屋を満たしていた輝きの全てが鎧に入り込むと、部屋はそれまでの光が嘘だったように、元の落ち着きを取り戻していた。

「……これで良いはずだが」

「うーん……失敗しちゃったかしら？」

さらっと怖い事を言うディース。魔法を使ってから全く変化のない鎧を取り囲むリュウ達。取り合えず待つ事数分。突如、「ヴンッ！」と駆動音のような物が静かな部屋に響き、鎧の目に光が灯った。

「おはよう……と、マスターは言ってます」

「「「……？」」」

いきなり喋りだした鎧。その場に居る全員、はてなマークが頭に浮かぶ。

「……どうしたんだい？　とマスターは言ってます」

「……“マスター”って、あなたの名前なのー？」

「マスターは、マスターですよ。うふふふー……笑うところあってますか？」

「……？」

どうやら人格を宿す事については成功したらしい。しかしその直後、鎧の目に宿っていた光は「ブツンッ」と音を立てて消えてしまった。声をかけたり叩いたりしてみても、ウンともスンとも言わない。

「……まだ定着しきっていないようだな」

「結構不安定な事になっちゃってるみたいねー」

人格を宿した魔法使い二人が言うには、しばらくこのまま安静にしていれば、その内落ち着くだろうという事だった。

「なんかよくわからん」

「まぁ成功は成功みたいだなぁ」

「それじゃー、この子の名前を決めましょー？　取り合えず、“ハニー”か“ぷかぎゅる”なんてどうかしらー？」

「「「……」」」

この見た目に対してそのネーミングはどうだろう？　とモモ以外は思ったとか。その後、鎧が自分で名乗ったモノを名前にしようという事になったが、モモはそうならせめて理由が欲しい、と駄々を捏ねたので、激しい口論の末に

“マ”ジで
“ス”ゴイ
“タ”ンサク用の
マッスィ“ー”ン

を略した形での“マスター”という名前になった。リュウは何故か納得しているが、ハッキリ言ってそのセンスはどうかと思うボッシュである。

「はぁ～。疲れたわー。部屋で休もっと」

「妖精達、ちゃんとやってるかな……？」

もう自分の仕事は終わったとリュウとディースが疲れた顔をして部屋から出て行き、鎧改めマスターの調整をボッシュとモモが行っていると……何故か意味深にその作業をじっと見つめるエヴァンジェリン。

「……この人形の武装はどうなっている？」

「武装？　まだほとんど実装してないわねー。一応構想はあるのだけれどー」

「あの“盗賊の魂”の出力なら結構なモンが出来ると思うけどなぁ」

「……そうか」

その答えを聞いたエヴァンジェリンは、彼女の十八番とも言える真っ黒凶悪な笑みを浮かべて、モモ先生とボッシュ博士に自分の考えを話した。

「……そいつぁいいなぁ」

「そうねー、それは是非搭載するべきだわー。やっぱり世の中火力

よねー」

「そうだ最終的には火力が全てだ。貴様中々わかってるじゃないか」

「ふふふふふ、楽しみねー」

こうして妙な方向で意気投合したモモ先生とエヴァンジェリン。

超監督“闇の福音”監修の元、マスターに様々なびっくり機能が付け加えられているという事を、リュウが知るのはもっと後になる。

第十三章　ＳＯＬ　～マスター誕生秘話～（後書き）

今更ですが、１章の５を修正しました。

第十三章　2、先鋒戦

「それにしても……雁首揃えてエライ重役出勤ですな？」

ナギ達と対峙しているリュウ達に向けて横から口出し。上から目線でそう言い放つマーロック。映像の向こうでふてぶてしく葉巻を一吸いし、遅れてきた事に対してやたらと大袈裟な態度を見せている。明らかな不満をわざわざ表明し、ストレスの矛先をリュウへとぶつけている様だ。

「フン、まぁ遅刻に関してはこの機会をくれた事に対するワイからの謝意、って事で大目に見たりますわ」

何事も取引材料と捉える商人特有な、恩着せがましい物言いに少しイラッとしたリュウ。だからと言ってイチイチ気にしてたらキリが無いので、気持ちを抑えてのスルーがここでは正解だ。

「……それはどうも」

「ほな早速ですが始めてもらってええですか」

「おう。待ちくたびれたぜ」

「了解です」

リュウとナギがマーロックの映像を挟んで会話している頃。リュウ達の登場により、来賓席は俄かにざわついていた。何しろリュウ達は無名だ。実績も功績も無ければ実力さえ全くの不明。業界にその名が広がりつつある紅き翼とは、ネームバリューに雲泥の差があ

る。

特に、紅き翼の活躍を噂でしか聞いたことのない元老院議員やアリアドネー騎士団総長などは、「噂に聞く“紅き翼”とは、一体どれほどの力を持っているのか？」という事にしか興味はない。その実力を測るための噛ませ犬としか、リュウ達の事は映っていなかった。

何故かウィンディアの王女がリュウ達と共に降ってきて、それを見たウィンディアの王がホッと胸を撫で下ろし、顔に暗い影を落としてブツブツ小声で愚痴のようなものを吐いていたのは全くの余談である。

「そや一つ言い忘れてましたわ。死なない範囲でならルールはそちらで決めて貰って結構ですが……時間については制限を付けさせて貰います」

「なんだと？　んな話聞いてねーぞ」

思い出したようにそんな事を言う映像の中のマーロックに、これだけ待たされた上に時間制限ではストレスの解消にならない、とナギが食って掛かる。真っ先にそれに反応したのは、勿論隣に立っている真面目なあの人だ。

「ナギお前、その態度は相変わらずだな。修行して何か変わったかと思えば全く変わってないじゃないか」

「うっせーよ詠春。お前もその小言ぶり全然変わってねーよな」

久しぶりに見る紅き翼の良心の活躍。詠春が微妙に呆れながら諫めている姿は、リュウ的には中々懐かしい光景である。

「……そう言われましてもな。あんたらに好き放題させたら、万が一にも今日中に終わらんかも知れませんからな」

「……」

マーロックの“紅き翼”に対する評価は的確だった。流石に凄腕の商人だけあって、物事を見る目だけは確かだ。実際ナギ達ならば、１０時間ぐらいぶっ続けで戦う事なんて朝飯前だろう。

「形式はどうでもええですが、一度の戦いは精々１時間に納めて頂きたいですな」

「ナギ、ここは大人しく従いましょう。逆に言えば疲れを気にせず戦えるという事ですし」

「その通りじゃ馬鹿弟子。単細胞は治っとらんようじゃの」

「……わかった。……それとお師匠は後でボコる」

まだ納得いってない風ではあるものの、こんな事に時間を取られるのも馬鹿らしいと判断したのか、とっとと話を切り上げる事にしたナギ。一歩引いて見ているリュウからすれば、余計な一言を付け加えたゼクトの無表情っぷりも懐かしく、久々に披露されたアルのナギ操作術は、ほぼ完璧な域に達しているようだ。

「俺達の方も構わないです」

「では後はご自由に。ワイは仕事がありますのでこの辺で」

そう言うと、マーロックの映像はぶちんと途切れた。大方来ている客に自ら飲み物でもサービスして回るのだろう。その後は来賓席の方で、文字通り高みの見物と言った所か。マーロックに関しては色々文句を言っても仕方ないので放置し、リュウはさて、と頭を切り替え改めてナギの方に目をやった。

「じゃあルールは……前言っといた通りで」

「おういいぜ。確か……」

「私達の内の一人対あなた達の四人以下。そういう話でしたね？」

紅き翼一人ｖｓ炎の吐息四人以下。

それがアルの提案した罰ゲームを受ける代わりとして、リュウが出した“とある条件”だった。実力的に冗談抜きで“紅き翼”と天と地の差がある“炎の吐息”が、たった１ヶ月の修行をしたからといって、一対一の戦いでナギ達に勝利できるレベルになれるとは到底思えなかったからだ。

「何なら全員束になって掛かってきてもいいんだぜ？」

「いやぁ今の俺達は多分そう簡単にはいかねーよ？」

あの時点の“炎の吐息”の力量では、例え全員でかかったとしても、それこそアル一人にだって勝てなかった。だが修行した後であるなら何とか４人で“紅き翼”一人分くらいにはなれる……かも知れない。期待を込めて、当時のリュウはそう考えた。そして、それは間違っていなかったと今のリュウは確信している。

「ほっほぅ、大した自信じゃねーかよ」

「まーね」

一月前の時点で、半分紅き翼のマネージャーのようなアルとの間で勝負の細かい話は詰めてある。

形式は勝ち抜き戦ではない変則的な団体戦で、先鋒ｖｓ先鋒、次鋒ｖｓ次鋒、副将ｖｓ副将、大将ｖｓ大将の計４戦。勝負ではあるが力比べの意味が強い為、例え先にどちらかが３勝を上げたとしても、必ず大将戦までやるというのがナギからの要望だ。勝敗はどちらかが降参の意思を表明するか、気絶（リュウ達の場合は場に出ている全員が気絶）した時点で終了。時間制限があるからそれを過ぎたら引き分けという事になる。

そして誰をどういう順で出すのか等についても、両チームともももう決まっていた。とは言っても相手チームの詳細についてはお互いに秘密なので、誰が相手になるのかは運次第だ。

「そんじゃ……詠春、頼んだぜ！　生意気なリュウに吠え面かかせてやれ！」

「吠え面はどうか知らんが……最善は尽くすさ」

紅き翼の先鋒は、青山詠春。

片手に白木拵えの野太刀……夕凪を携え、長身眼鏡のサムライマスターが前に出る。

「お久しぶりです詠春さん」

「ああ。どうしてこんな事になってるのかはアルに聞いたよ。悪いが、勝負となれば手加減はしない。例え相手がリュウ君の仲間だと

しても、ね」

トン、とまだ鞘に入ったままの刀を地につき、肩の力を抜いて話す詠春。その立ち振る舞いは別れる前よりも格段に自然体で、それでいて全く隙が無い。元々の腕に加え、旧世界で相当厳しい修行を積んだであろう事を伺わせる。

「勿論ですよ。こっちも倒すつもりで修行してきましたから」

「ふっ……面白い！」

詠春の顔に、笑みが浮かんだ。

相手はどれほどの力を持っているのか。自分の修行の成果はどのくらいか。何より目の前の少年の自信に溢れた態度の根拠が気になる。それらへの興味が複合的に混ざり合い、まさに“ワクワク”といった感情となって沸き立っていた。

「じゃあ……こっちも先鋒、よろしく！」

「「「了解！」」」

リュウに促され、気勢良く前へ出る炎の吐息の４人。

虎人少女、リンプー
のほほん学者、モモ
カエル紳士、タペタ
二刀流女剣士、ゼノ

この４人が、炎の吐息の先鋒である。詠春に負けず劣らず、こちらもそれぞれの顔に浮かぶのは“ワクワク”といった表情だ。修行

後初めての実戦で、リュウが言うには“とんでもなく強い”相手らしい。どこまで通用するんだろうか。でもあの地獄に比べれば何の事は無い。よし存分にやってやる。そういった感情が大勢を占めている。

「女性が3人……？　これはやり辛いな……」

出てきた顔ぶれを見て、詠春は少し困惑した。誰がいつ出るかについては、リュウ達の間での話し合いの結果としてこうなったのであり、詠春を相手にすると見越してこの面子になった訳では当然ない。しかし詠春にとって少々不本意な展開であることは確かだ。

「へへっ……あのオジサンを叩きのめせばいいんだよね！」

「おじ……！？」

背中に装備していた棍を手足のように振り回し、ピシっとキメて見せるリンプー。その挑発的な言葉の一部が詠春にファーストヒット。まだ年齢的にオジサンと言われる区分ではない詠春的には結構ショックな先制攻撃である。

「ワタクシ、精一杯やるのですね！」

「そうねー、頑張らないとねー」

タペタはレイピア。モモは例によってバズーカ。軽口を叩きながらそれぞれが武器を取り出すと、徐々に周囲を緊張が染めていく。

「見た所、あちらも剣士のようですね。相手にとって不足はありません」

最初から二振りの紫音剣を携え、ゼノが鋭く詠瞬を見据えた。
ほわほわした雰囲気だが、所々に危うい空気が混じっている。相当な修羅場を潜ってきているようだ。これは油断ならないな。そう感じた詠春一人、静かに鞘から愛刀の夕凪を抜く。既に水面下で勝負は始まっていた。

（剣を持つ者が二人、棒が一人、飛び道具が一人、か）

百戦錬磨の剣士は、静かにそれぞれの得物を見やる。広がりだした緊張感が場を支配しだし、対峙した両者は極めて自然に距離を取った。双方既に臨戦態勢。出番ではない面子は空気を察すると、そっとその場を離れた。リュウ達とナギ達は今は敵同士。互いに反対の方向へと別れ、それぞれの味方の背を見守る構図となる。

「では合図を」

一人両者の中間地点に残ったアルは言いながら、袖から一枚のコインを取り出した。これを弾き、地面に付いた瞬間が開始の合図となるのだ。

「用意は……よろしいですね？」

「……」

「「「……」」」

静かに対峙する両者とも、浮かんでいた笑みは消え去っていた。あるのは戦士としての顔。そして目の前の相手への集中。それぞれの得物を握る手に、力が籠もる。

一試合目
青山詠春　ｖｓ　リンプー・モモ・タペタ・ゼノ

キィン、と澄んだ音を立て、アルの指からコインが弾かれた。続けてアルもその場を退避する。キラキラと光を反射して回転するコインが、ゆっくりと大地に到達し――――

「ふっ！！」

――――た瞬間、ゼノが仕掛けた。完璧な瞬動の入り。瞬時に詠春との距離を消して懐に飛び込み、先手を取って二刀からの剣閃が走る。

「っ！」

油断と言うよりは、頭を切り替えきれていなかった、と言うべきか。集中していたつもりが、それでもどこかに相手が女性であるとして侮っていた部分があった。一気に間合いを詰められ先を取られた詠春は、左右の剣から繰り出される怒涛の連続攻撃をただ受けるしかなかった。

連続で響く金属音。流れるような丁々発止。思ったよりも手強い。ゼノの猛攻にそう感じた詠春。しかし野太刀一本で二刀の連撃を軽々と防ぐのは流石の技量と言える。

「くらえぇぇ！」

「何っ！？」

ゼノとの攻防に気を取られている隙を突き、横からも攻撃を仕掛ける。多数の強みを存分に発揮し、リンプーが思いっきり棍を振り上げ、迫る。

「おおっ！」

ゼノの攻撃を裁きつつ、空いた片手に気を集中させ、詠春は振り下ろされたリンプーの棍を何と素手で受け止めた。バチィッと耳触りの良い音を立て、只ならぬ威力に止めた手が痺れる。

だがそこは、古来より多数の妖魔を相手にする神鳴流。培ってきた一対多への身のこなし。続くゼノからの剣撃が来るよりも早く、詠春は受けた棍を掴むと……

「ふ……んっ！！」

そのままリンプーごと放り投げた！

「うわぁっ！！」

「おーう、では次はワタクシが行くのですね！」

投げられたリンプーは、うまく空中でバランスを取り着地。すると今度はゼノに加え、追いついたもう一人の剣士タペタが攻撃に加わる。まるで示し合わせたように、互いの動きを邪魔しない二人の剣士。修行前はあらゆる面で劣っていたタペタも、今や立派にゼノと並んでいる。

「くっ……！」

手数が増えたことに加えて連携される事で、ゼノ相手に構築しかけていた詠春のリズムが乱れた。タペタの主体が突きである事が、それに拍車をかける。たまらず後ろへ跳躍し、一旦距離を取る詠春。だが、彼女はそれを見越して走り込んでいた。

「今度こそぉぉぉ！！」

「！」

金属同士とは違う、ガン、と言う鈍い響き。再び襲撃虎娘。洗練された剣技とは一味違うリンプーの棒術。修行の賜物、習いたての気を纏ってコーティングされたにゃんにゃん棒は、切断される事なく夕凪と打ち合えていた。

「こ、このパワー……！？」

「おりゃーーー！！」

虎人少女リンプーの馬鹿力。空振りしようが剣に阻まれようがお構い無しに叩きつける。ゼノやタペタの鋭い剣技とは違い、受ける毎に剣がブレる。驚愕する詠春。それが僅かに隙となったのかリンプーの攻撃にバランスを崩し、続く一撃に大きく剣を弾かれた。

「今だ！」

リンプーはにゃんにゃん棒を片手に持つと、空いた方の手に気を集中させた。拳に生まれる淡い光。弾と成ったその光を、全力で詠春へと放つ！

「食らえ！　獅子ほーこー弾っ！」

「！」

棒術による連撃からの気弾攻撃コンビネーション。“獅子咆哮弾”というネーミングは完全ただの思いつき。採用理由は何となく響きがカッコいいから。ちなみにリンプーは“獅子”を虎の事だと勘違いしているのだが、ここではスルー。

「ふん！」

だがそこはにわか仕込みの気弾。威力はそれなりのようだが易々と当たるサムライマスターではない。あっさりと体勢を立て直して夕凪を振るい、両断。気弾は詠春の両脇に着弾し、爆発。

「中々惜しかったが……！」

「うわわっ！？」

すぐさま取って返し、隙だらけのリンプーへ夕凪が迫る。一応刃の方ではなく峰の方なのは詠春の心配りか。しかし振り抜こうとしたその一撃は、失敗に終わる事となった。何故ならこの時を見計らったかのように、詠春の剣を持つ腕がピンポイントで爆発したからだ。

「な、何っ！？」

「待ってたわー」

爆発の正体はモモの砲撃。一人全く戦闘に加わっていなかったモモは、一定の距離を保ちながら付かず離れず隙を伺い、確実に当て

られる一瞬を見極めていた。ただし勿論見てから撃ったのでは間に合わない。実質先読みのような形でバズーカを発射し、それは見事に詠春の腕へと着弾したのである。

「ここだ！　畳み掛けるぞ！」

詠春に迫るゼノ、タペタ、そして体勢を立て直したリンプー、さらに狙い続けるモモ。大きな隙を晒したここをチャンスと判断したゼノにより、４人が一斉に詠春へと襲い掛かる！

「紫音絶命剣！」

「弐獣葬、ですね！」

「もっかい……獅子ほーこー弾！」

「火炎撃～！」

間欠泉のように地面から三連続で噴き出す気の奔流。リュウから習った気を込めた高速2段突き。リンプー必殺の気弾。そして炎の属性を宿したバズーカの砲撃。４つの攻撃は全く同時、重なるように詠春へと繰り出され――――

「うおおおっ!?」

――――大きく、爆ぜた。凄まじい爆風が広がる。確実に決まった。手応えを感じたゼノ達は一旦距離を取り、息を整え爆風の中心地を静かに見据える。

「……さて、どうか……」

「結構イケたねあたし達」

「おーう。ワタクシ達の勝利ですね」

「だといいんだけどねー」

軽い調子で話しながらも、得物を持つ手には未だ油断なく力が込められていた。あの程度で倒せるとは正直なところ思っていない。しかし、それなりのダメージは与えた筈である。各々一息付きながら、爆風が収まるのを待つ。

「……ふう……」

「「「！！」」」

煙の中から姿を現した詠春は、無傷だった。彼は瞬時に全身の気をコントロールし、体を覆う膜のようにして防御したのだ。ポンポンと服についた埃を払い、衝撃でずれたメガネを直す。所々服は煤けているが、どこにも目立った外傷は……いや、あった。一箇所だけ、腕にバズーカが直撃した部分だけが、僅かに赤い血を流していた。怪我の程度はちょっと転んで出来た擦り傷、と言った所か。他は全くの五体満足。夕凪は変わらずその手に握られていた。

「……流石は“紅き翼”か。あの頑丈ぶり、いつぞやのリュウと戦った時を思い出すな」

「ホントねー」

「ていうかアレでかすり傷？　ナニソレ」

「やはり強いのですね」

呆れるゼノ達。だがそう言いつつも瞬時に悟った。詠春の纏う雰囲気が、明らかに変わっている。再び戦闘態勢を取り、油断無く武器を構え、詠春の動きに集中する。

「中々やんじゃねーかあいつら。っつーかそれより詠春のヤツ、エンジン掛かんのおせーよ」

「ここからが見所じゃな。何しろ詠春は今の所、奥義の一つも出しておらんからの」

遠巻きから、ナギとゼクトがここまでの感想を述べていた。勿論反対側で見物しているリュウとボッシュも、二人の言った事とほぼ同様の総評を下している。そして気配の変わった詠春についても、双方同じ分析を行っていた。恐らく頭のどこかにあった女性への遠慮が、今の怒涛の攻撃で解き放たれたのだろう。言い換えれば、ゼノ達は詠春に“強敵である”と認められたとも言える。

「……ハッ！」

剣を正眼に構えて意識を集中させ、迷いを吹っ切るように気合を入れ直す詠春。ゴッ、と強大な気を纏い、風が激しく吹き荒れる。巻き起こる剣気に足元の小石が巻き込まれ、触れてもいないのにピシパシと弾け飛ぶ様は圧巻の一言。

「神鳴流剣士、青山詠春……参るっ！」

それなりに離れている筈のゼノ達にまで届く剣気。正々堂々名乗

った詠春が放つそれは、紛れも無い本物だった。ゆらり、と自然体から戦闘用のものへと体勢が移行する。仕掛けてくる。そう判断したゼノ達に緊張が走る。

「神明流奥義、斬空閃！」

「「「！」」」

本気となった詠春の愛刀から、鋭い一撃が放たれた。螺旋状に駆ける気の斬撃が、ちょうど集まっていたゼノ達の中央目掛けて飛来する。

「離れろ！」

ゼノの掛け声でバラけるリンプー、タペタ、モモ。通り過ぎた斬撃は大地を割りながら突き進む。反則的な威力が肌で感じ取れた。避ける事は避けた。だがもし自分の首に当たっていたら、確実に撥ね飛ばされていたと錯覚してしまう。先程とは全く違う。これが“紅き翼”のサムライマスター、青山詠春の本気なのだ。

「行くよタペタ！」

「ウィ！　了解ですね！」

やられたらやり返す。本気の詠春を目の前にして、何故かリンプーはタペタの両足をガシッと掴み、ジャイアントスイングのように盛大に振り回しだした。

「いっけぇぇぇ！　ハヤブサ斬りぃぃ！！」

「ぬおおーーうううう！」

そして十分な遠心力を蓄えると、タペタはリンプーの手から放たれた。ゴウッと風を大きく切り裂き、気を纏わせたレイピアを突き出して、超高速で詠春へと迫る！　タペタ自身を斬撃に見立て、一直線に飛んで行く姿はハヤブサの如し！

「桜楼月華！」

「おぶふっ！？」

だがしかし、紙一重。突き出されたレイピアを冷静にミリ単位で避けた詠春は、気を込めた掌底をすれ違いざまタペタの顔面に叩き込んだ。リンプーの馬鹿力で投げられたタペタはクロスカウンターのようにそれを食らってしまい、ベタリと地面に倒れ、悶絶。それこそまるで、潰れたカエルの様に。

「そうそう好きにはさせません！」

「！」

飛んでいくタペタの影に隠れ、すぐ後を追っていたゼノ。再び二刀による連撃が始まる。……しかし今度は先程とは勝手が違う。本気となった詠春はゼノの動きに完璧に対応し、着実に弱所を見極めていた。ほとんど全ての攻撃を封殺されていくゼノ。何とか喰らいつくが、僅かな隙を逃さず攻める詠春の膂力に対抗できない。そして狙い済まして繰り出された剣撃は、一発でゼノの二刀を同時に弾き、大きく仰け反ってしまった。

「くあ……っ！」

「神鳴流奥義……」

即座に奥義を放つ体勢を取る詠春。気を夕凪に込め、狙いは目の前のゼノ……

「……斬空掌・散！」

「！？　きゃぁぁ！！」

……ではなかった。隙を狙っていたモモに、気の散弾が降り注ぐ。詠春にとっての好機こそ、モモの狙い所。それを読んでいた詠春は、利き手ではない方の手でモモへと気を放った。詠春の力量ならば誰がどこにいるのかくらい、気を探ってわかるのだ。そして夕凪に注ぎ込まれた気は依然としてそこにあり、ゼノをその目に捉えて離さない！

「奥義……！」

「くっ、貰う訳には……っ！」

モモへの迎撃に割かれた一瞬、それによって僅かながらの余裕を得たゼノは、両の剣を交差し、固くガード。気を込められた剣による防御は、そう簡単には貫かれない……筈だった。

「……斬岩剣・弐の太刀！」

「！？　あっっぐっ……！？」

斬られた。混乱がゼノの頭を支配する。確実にガード出来た筈の

それは、ゼノの肩に深い傷を残した。馬鹿な。鋭い痛みに襲われながら、ゼノの思考が鈍る。両の剣に、何かを受けた衝撃はない。すり抜けたとでも言うのか？　わからない。

「よくもやったなぁぁぁぁ！！」

「っ！」

後ろからゼノを飛び越えて、詠春へと襲い掛かるリンプー。にゃんにゃん棒に込められた気は仲間がやられた怒りもあってか、大きく輝いている。大振り上段に振りかぶったそれを、詠春目掛けて全力で叩きつける！

「パワーは確かに凄いがな……っ！」

「んにゃ！？」

瞬間、カクン、とリンプーは空中で体勢を崩した。当たった筈なのに、まるで空振ったように衝撃がない。力に力で対抗すると見せ掛けて、詠春はそれを柳のように受け流していた。これぞ百戦錬磨の経験値。こういった力任せの相手にはどのようにすれば効率的か、神鳴流剣士たる詠春の体には、対処法が染み着いているのだ。

「まずい……っ！　リンプー……！」

致命的な隙を晒したリンプーを目の前に、ゼノがフォローするべく肩の傷を押して駆ける。先ほど掌低を食らったタペタも、気の散弾を受けたモモも、リンプーに致命の一撃を浴びさせぬ為、再び一斉に詠春を取り囲み……

「神明流奥義、百烈桜花斬！」

……そして、吹き飛ばされた。詠春を中心として、円状に広がる無数の斬撃。リンプー以外の他3人が己に迫っていた事など、先刻承知の上。そう来るならば、一気に纏めて吹き飛ばす。放たれた退魔の技は咄嗟の防御さえ許さず、強烈な斬撃の嵐にゼノ達を巻き込んだ。そして詠春は、静かに仕事を遂行する。

「かふっ！？」

気を全開にして瞬動。それは最早縮地。夕凪の峰が、無防備なゼノを背中から打ち据えた。そこから間髪入れずの虚空瞬動。

「おうっ！？」

神鳴流・烈蹴斬。くるくると宙を舞うタペタに、強烈な蹴りでの追撃。地面に叩きつける。さらに視線をその先にいるモモへと移し。

「斬空閃！」

「きゃぁぁっ！？」

螺旋状の斬撃がモモを襲う。幸い直撃ではなかったが、掠めた斬撃の威力でさらに吹き飛ばされる。そして最後に。

「あぐぅっ！？」

ちょうど目前に捉えたリンプー目掛けて徒手空拳。突き出した拳がリンプーの腹へとめり込んだ。程なくしてドシャリと大地に倒れこむ4人。一瞬で形勢逆転。先程とは逆に詠春が立ち、ゼノ達が沈

むという光景が、そこには広がっていた。

「ふむ流石は詠春。彼女達も良くやりましたが、ここまでですかねぇ」

「……」

アルの呟きに反応を示さず、口数の無くなったナギ。一連の攻防を目にしたその顔に浮かぶのは、不満だった。確かに気を使えなかった連中は使っているし、個々の強さも一ヶ月前よりは断然良い。でも、それでもあの程度なのか？

あの程度でリュウはさっきのような自信満々な態度を取ったのか？　それとも詠春が強すぎるのか。いや少なくとも自分から見てそうは思えない。つまりこれは……期待はずれ。

そんな結論に達したナギは、八つ当たりとも言える剣呑な視線を詠春達の先、リュウへと向けた。

「……？」

リュウは、腕を組んだままじっと戦いを見ていた。その顔には焦りも、劣勢を嘆くような表情も、浮かんではない。ボッシュも同様、そして見守る他の者達も同様だった。ナギは気が付いた。あれは違う。こんな程度で終わりと思っている顔じゃない。仲間の勝利を信頼しきっている。つまりまだ、この“先”がある。そうとわかった途端、浮かんでいた不機嫌は消え去っていた。

「これ以上女性に剣を向けるつもりは無い。力の差がわからない訳でも無いだろう。降参を進めるが」

倒れている４人へ向け、詠春がそう声をかけた。これまでの攻防

で、詠春はほぼ全員の動きを見切っていた。見切れる範囲だったのだ。つまりもう自分はどうあっても負けない。そう確信を持っていた。だからこその降参勧告。しかしゼノ達は無言で体を起こし、立ち上がった。誰も詠春の言葉に返答する様子は無い。

「やっぱり……強いね」

「ああ」

「ですがワタクシ……勝ちたいと思うのですね」

「そうねー、このままっていうのも、ねー」

怪我の具合を確認する４人。受けたダメージは確かに濃いが、深刻という程ではない。このままの状態で続けても、恐らくいい勝負は出来るだろう。だが、勝てはしない。ズルズルとジリ貧になり、いずれ全員力尽きる事が目に見えている。

「……ならば、やるしかないな」

「うん。それしか無いもんね！」

「！　……勝負を捨てはしない、か」

まだ目に光を灯し、向かってくると宣言するゼノにリンプー。当然、とそれに頷くタペタとモモ。なるほど流石にリュウ君が見込んだ仲間達だ。その心意気や良し。降参を迫るのは失礼だったか。そう心の中でゼノ達の姿勢を評価し、再び夕凪を構える詠春。するとゼノ達はあろうことかその場で、ゆっくりと目を瞑った。

「！？」

敵を目前にしてのあまりに不自然な姿。何かの反撃や罠を警戒し、詠春は油断無く周囲に気を巡らせる。だがゼノ達は何かしてくる気配はない。この行為に何か他の目的があるらしいと気付く。隙だらけの今ならば阻止は容易いが、もしも形成を逆転できる程の何かをやろうというのなら……見てみたい。邪魔をするなど無粋な行為。そう思い、成り行きを注視する事に詠春は決めた。

「……なんだ……？」

目を閉じたまま不気味な雰囲気を醸し出す４人を前に、感覚の目を研ぎ澄ませた詠春は妙な事に気が付いた。４人の“気”が増している。いや、これは“気”なのか？　それとも“魔力”？　何か“よくわからない力”が４人から発せられている。

「これは……」

似たような現象が記憶のどこかに引っ掛かる。これは何だ。思い出せ。確か……そうだ。これは……これはリュウ君の変身！　あの青い髪の少年が、無敵の力を発揮する姿に変わる時のような――――

「やぁぁぁぁぁぁ！！」

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

「！！」

リンプー、ゼノの咆哮が機械浜に轟いた。

続けてモモ、タペタからも同様に咆哮があがる。
４人の足元から吹き上がる強烈なオーラ！
それはまるでリュウのように、光の柱となってそれぞれを包み込んでいる！

「何じゃあの光は……？」

「ありゃまるでリュウじゃねぇか……！？」

「これは……」

ナギ達サイドは一様にその光景を見入っていた。リュウの変身に酷似した現象が、あの４人から起こっている。強いて違う点を挙げるとすれば、それは吹き上げるオーラの色。リュウは赤だったが、４人は違う。薄い青に黄や緑、ピンクなど、そのカラフルさはまるでそれぞれを象徴しているようだ。

「……ま、まさか……！！」

驚愕する詠春を尻目に立ち昇る４つの光の柱。それぞれの柱が一層の光を放ち、機械浜を４色の閃光が埋め尽くす！

この光り輝くオーラこそ、炎の吐息が得た新たな“力”！
死に物狂いの修行の末に身に付けた、【拳を極めし者】直伝の“極意”！

その名も……“セブンスセンス”！！

【拳を極めし者】たるドヴァーは遠い昔、数多の強者と戦ってきた。武の道を極めんと歩み出した初期には、当然のように力及ばず、己の死を意識した戦いもあった。そんな時、死の間際には決まって目は見えなくなり、音も聞こえなくなる。全身の感覚も失せ、味も匂いも感じる事は無くなる。生と死の狭間、言わば生物にとっての極限状態。飽く事のない戦いに身を置き続ける内に、ドヴァーはその生死の境で、五感が断たれた状態でだけ知覚できる、真の潜在能力とでも言うべき“凶暴な力”の存在に気が付いた。

力を求め続けるドヴァーはその“凶暴な力”さえ我が物にしようと貪欲に修行し、ある時、遂に力の一部を通常の状態で開放する事に成功した。しかし、開放した力は彼の手に余る物だった。制御できずに古龍本来の姿となった彼は、とある“銀髪の男”に止められるまで、世界を破壊して回ってしまったのだ。

正気を取り戻した時、ドヴァーは己のしでかした事に震えた。恐れたのではない。嬉しくて震えた。この力を極める事こそが、己の目指す武の道の頂点だと確信した。そしてそれを制御すべく常日頃からその力を纏う事を決意し、修行の場所を獄炎島へと移して、噂を聞きつけて挑んでくる戦士達を、己の力の実験台にしていたのである。

リュウ達を幾度も死ぬ寸前まで痛めつけ、徹底的に鍛えたドヴァーの目的は、このセブンスセンスに目覚めさせる事だった。それがドヴァーの出した“最低合格ライン”だったのだ。その結果ドヴァーほど完璧ではないものの、リュウ達炎の吐息のメンバーは彼の目論見どおりに、極意セブンスセンスを操る力を会得するに至ったのだ！

「か……変わった……！？」

光が収まり、姿を現したリンプーは、先程の姿ではなかった。腰まで届く金色の長髪に青白い肌。耳が尖り、虎のような縞模様だった尻尾は細く、先端のみに毛を残している。そして見につけているのは赤いレオタード。まるで魔族を思わせるような、扇情的なスタイル。

「今度は、さっきみたいには行かないよ……！」

それは以前、リュウが施した変装魔法の姿と同じだった。リンプーにとって始めて姿を変えたあの時の事が強くその深層心理に残っており、それが力を引き出したと同時に表に出てきたのだ。つまりこの姿は、リンプーにとって最も“変身”を意識した結果と言えた。

「私の全力、受けてもらいます！」

ゼノは、光の柱が収まってもリンプーのように身体的変化は見られない。しかしその代わり、大きく変化していたのは二本の紫音剣。装飾の少ない造りだったはずの剣は強大なオーラを纏い、神秘的な意匠の施された大振りな二刀に進化していた。ゼノの剣に対する拘りや思い入れ、それらが形となって降臨したのだ。

「今の私は、タダじゃ済まないわよー？」

モモもゼノと同様、身体的変化は見られない。だが当然のように手持ちのバズーカが、巨大な大砲と化していた。身長よりもはるかに巨大な砲身全長。シンプルだった見た目は近未来的で複雑な機械の塊となり、相当な重量感を伺わせる。そんな機械的大砲を軽々と肩に担ぎ、のほほんとしているモモ。持ち前の大艦巨砲主義が見事に顕現していた。

「ワタクシの本当の力、お見せするのですね！」

タペタは、ある意味最も変化が大きい。レイピアだった剣は両刃の大剣となり、只ならぬ威力を想像させる。小太りだった身なりは見紛うばかりにスラッと高く、長い足に小さな顔、青の肌に純白の軽装鎧、さらに赤い頭髪のようなトサカまで揃えたスマートな姿になっていた。王宮に使える騎士の如きイケメンカエルへの劇的ビフォーアフターだ。

あの地獄の修行で最も力を伸ばしたのは何を隠そうタペタだった。ほとんど素人同然だったタペタは成長の幅が著しく、その成長が力を引きだした後の姿にまで影響を及ぼしたのだ。

「まさか、こんな裏技を用意しているとはな……」

つぅっと、詠春の額から汗が流れ落ちた。どういう原理で変化したのか、正直な所想像もつかない。しかし、４人が発する威圧感。さっきまでとは段違い。見るからに、感じるからに大幅なパワーアップを果たしている事は疑いようも無い。

「では……いきますよ」

待ってくれた詠春への礼意を込めて、ゼノは攻撃を宣言した。構える詠春。恐らくあの女剣士に飛び道具はない。という事は先程と同様に距離を詰めてくる筈。ならば手段は瞬動が濃厚。あの変化でどれだけ速度が上がっているかはわからないが、来ると分かれば対処はできる。

「……来い！」

そして、再びゼノが駆けた。

「!?　速……!!」

来るのは分かっていた。コースの予想も、迎撃体制も整っていた。見誤ったのは速度、そして予備動作だった。先程のゼノは瞬動に入る直前、ほんの僅かだが足に力を溜める隙があった。今度もその兆候があるはずと思った。だが今は、それが無かった。しかも速度は比べ物にならない。

「だがっ……!」

繰り出される剣撃。飛び散る火花。互いに速く、そして重い。二人の周囲は容易に近づけぬ空間と化していた。大地が飛び交う剣閃によって斬り刻まれていく。それはゼノと詠春の放つ斬撃に、大した差が無いという事を物語っていた。

「ふんっ!」

「はぁぁっ!」

受ける、反撃、かわす、反撃、かわす、受ける、かわす……僅かな予断も許さない。しかし徐々にだが追い込まれていく詠春。一振りと二振りの差、手数の違いがここに来て浮き彫りとなった。総合的に見て、互角。今の女剣士は、間違いなく自分と対等に立っている。詠春はそう判断せざるを得なかった。

「実はあたしも居るのよねー」

「っ！　な！？」

いきなり後ろから聞こえた間延びした声に、詠春は驚愕した。視界の隅に映りこむ巨大な砲身。一体いつの間に回りこまれたのか。確かにゼノに集中していた。周りへの注意が散漫になっていのも認める。だが、それでももう一人のここまでの接近に気付かないわけが無い。一対何が起きたんだ。

大砲を担いでいるにも関わらず、フットワークの軽いモモ。その理由は短距離ワープの“シャドウウォーク”。セブンスセンスを発動させたモモは、これの連発を可能にしていた。まさに神出鬼没の大火力。

「えぇーい！！」

「！！？」

予備動作無しの虚空瞬動で、詠春の目前から退避したゼノ。密着の如き至近距離で、詠春は自身を飲み込む大きさの砲口から、ジジッとエネルギーを集める音が聞こえた。次の瞬間、放たれる極太のビーム。受けるなどと言う選択肢はない。正解は避けるのみ。飛び道具が効かないことを誇る神鳴流が、飛び道具相手にまさかの撤退。

あわや光に飲まれるか、というところで虚空瞬動が間に合い、はるか上空へと避難。あの大砲の女性は遠距離担当と思い込んでいた。まさか零距離を挑んでくるとは思ってもいなかった。

「来たねおじさん、じゃあ次は……」

「ウィ、ワタクシ達なのですね！」

「！！」

詠春が避けた先、空中で待ち構えていたのは妖艶リンプー、騎士タペタ。盛大な歓迎セレモニー代わりに振舞われる、暴力的な格闘術と見事なまでの刺突及び斬撃。迷惑極まりないその歓迎に、全力で返礼を行う詠春。

「くっ……！？」

冗談じゃない。

詠春は心の中で悪態を突くように、そんな事を思った。リンプーの馬鹿力はさらに強化され、拳や蹴りには衝撃波のおまけまで付いている。もしあの拳が直撃したら、確実に骨の一本や二本頂かれるだろう。さらにタペタの剣もレイピアでなくなり、そのせいで突きの範囲が広く、変幻自在に斬撃に派生して、ほとんど読めなくなっている。何より、スピードが両者とも大幅に上がっていて、一人で二人を裁ききるのは到底不可能と言える領域になっていた。

「神鳴流奥義！　斬魔剣、弐の太刀！」

だがサムライマスターは伊達ではない。夕凪に気を送り込み、防御不能、相殺不可能の刃を持って反撃を繰り出す。自分の防御に割く割合が多いせいで連続で放つ事は難しい。よって狙うのは研ぎ澄ませた一撃。お互いに浮遊魔法は使えないらしい。高度を下げていく間に、数え切れない攻防が繰り広げられる。

「残念！　当たらないよ！」

「あなたの動き、よく見えているのですね！」

「っっ！！」

幾度か放たれた詠春の奥義。しかし、当たらない。いくら防御を素通りする弐の太刀と言えど、それ自体をかわされてしまっては意味が無い。強引に技を放ち続けても、リンプー、タペタの腕や足に僅かな切り傷を付けただけ。猛攻は止まらない。しかし、辛くも凌ぎ続ける詠春。数ある攻防のうち、不意にリンプーが目の前で拳を空振りした。今なら当たる。隙を突いて奥義を放とうとして……

「引っ掛かったぁ！！」

「！？」

詠春の顔に、苦悶の色が浮かぶ。リンプーの“誘い”。拳はフェイントだった。先程の仕返しとばかりに、詠春の反撃をかわすと同時に強烈な後ろ回し蹴りが、その鳩尾に決まったのだ。気を全身に巡らせて最低限の防御をしているとは言え、下手をしたら内臓が破裂してもおかしくない。

「うぐぁっ……！」

「食らうのですねっ！」

「！！」

よろけた所へタペタの追撃。だがかろうじて剣で受け、その威力に押され、下方の地面へぶつかりそうになる詠春。咄嗟に受身を取り、未だ宙空の二人と地面にいる二人に注意しながら距離を取る。始めてまともに食らった一撃は、少女の物とはとても思えない威力

だった。喉に込み上げる血を吐き捨て、夕凪を握り直す。

「負けられん……！」

ギリッと歯を食いしばり、痛みに耐える。４人がかり、さらに最初より大幅なパワーアップをしているとは言え、このまま女性の多いチームに負ける訳にはいかない。徐に掲げた詠春の剣に、突如として雷が落ちる。

「神鳴流奥義、雷鳴剣……！！」

詠春の気と混ざり、電撃稲妻熱風を纏った夕凪は爛々と輝いていた。今のこの剣は掠っただけでも大ダメージ。これで相手の隙に弐の太刀を当てられれば、いかなパワーアップを遂げていたとしても一撃必殺。神鳴流の真髄、見せてくれる。

「二人とも、時間稼いで。あたしちょっと“溜める”から！」

「ワタクシも集中するのですね！」

「ふ、わかった」

「強力なやつをお願いねー」

稲妻を剣に纏う詠春の前に、再び４人集まったゼノ達。リンプーは胸の前で両手を合わせ、タペタは剣を腰だめに呼吸を制し、気を集中させる。それを庇うように、前に出るゼノとモモ。

「そろそろ終幕が近いか。……行くぞモモ！」

「りょーかいー」

ゴォッと纏うオーラを強大に吹き上げ、三度地を駆けるゼノ。僅かに距離を空けて、モモがそれを追う。

「おおおおおおっ！！」

迎え撃つ詠春も彼らしからぬ咆哮を上げ、同じくオーラを纏って瞬動で正面からぶつかっていく。

一合二合三合四合……瞬く間に積みあがっていく剣撃の応酬。夕凪が振るわれる度に、大地を無数の稲妻が走り、紫音剣が振り抜かれれば、衝撃波が空気を裂く。

剣舞の舞台は次第に空中へと移り代わり、ぶつかっては離れ、離れてはぶつかる。二人が纏うオーラの輝きが二条の光となって、大空を縦横無尽に駆け巡る。数度の虚空瞬動を経て、天空高く駆け上がる詠春、それを追随するように空を蹴るゼノ。両者の気合がぶつかり合い、中空で結界のようにはじけ飛ぶ！

「神鳴流決戦奥義！」

「我流奥義！」

更なる稲妻を夕凪に蓄え、上から見下ろす詠春。方や、二刀を重ねて下段に構え、力を集中し見上げるゼノ。互いに必殺の力を剣に纏わせ、それを同時に解き放つ！

「極大・雷光剣んん！！」

「活殺！　剛翔剣っっ！！」

巨大な雷球を纏って振り下ろされる詠春の奥義に、ゼノの三日月の如き斬撃の結晶が立ち向かう！　激しくぶつかり合う力と力！天空で弾ける二つの光！

「うおおおっ！！」

「くぅぅぅっっ！」

そして勝負は……雷球が制した。威力は相殺したものの、押し負けたゼノは雷撃の一部が腕に直撃し、まともに動きが取れない。正真正銘のチャンス。だが詠春は気を抜かない。まだ居る。もう一人が。どこだ。……横！

「あ、バレたー？」

「そう何度もくればなっ！！」

予想通り。真横に砲口をこちらへ向けたモモが居た。となれば来るのはビーム系の砲撃のはず。それをかわして、上から一撃。そこまでプランを立て、しかし詠春の予想は覆された。目の前のモモが虚空瞬動の形跡も無く、いきなり消えたのだ。

「消え……！？　……ぐぁっ！？」

「大きな砲身にはこういう使い方もあるのよー？」

モモはシャドウウォークで詠春の真後ろに出現すると、その巨大な砲身を無防備な背中目掛けて叩き付けた。まともに食らってしまい、斜めに吹き飛ぶ詠春。どうやって移動したかわからないが、し

かし一方的にやられてなるものか。斬空閃の一発ぐらい、見舞ってくれる。そう思ってモモのほうに振り向き、詠春は青ざめた。

「エネルギー充填１２０％ー」

「！！」

自分を向く巨大な砲口に、考えたくも無いエネルギーが溜まっている。モモ全力全壊の必殺技、「アトミックボム」。大艦巨砲主義たるモモの一撃は、情け容赦なく詠春に向けて放たれた。自身を飲み込む大口径のエネルギー波。かわす、不可。防御、不可。ならば耐える。なんとしても。

「頼む……夕凪よ！！」

剣を前方、水平に構え、全身の気を全力で放出。耐える姿勢を見せた詠春は流されていく枯れ木のように、光の洪水に飲み込まれた。モモの放ったアトミックボムはそのまま機械浜の彼方の地に着弾し、一拍の間をおいて凄まじい爆音と爆風を轟かせ、地を揺らし、巨大なキノコ雲に姿を変えた。

「隊長大丈夫ー？」

「ええ、何とか……」

腕を押さえて大地に着地するゼノ。服が所々破けており、疲労の色は濃い。モモも今の一撃に力の大半を注ぎ込んだのか、顔色が良くない。そんな二人の視線の先には、同じく服をぼろぼろにした詠春が立っていた。モモの技に、詠春は耐えきった。両の足は微かに震え、力は大分衰えている。だが剣を握る腕とその眼は、未だ力強

さを保っていた。

「まだ……まだだ……！」

「流石ですね……」

思わず感嘆の声を漏らすゼノ。最早彼女に詠春と互角に打ち合う事は出来ない。モモも、あんな大技はもう無理だ。二人に戦う力は、もう残っていない。

「後は、頼みます……」

「二人とも、お願いねー……」

そんな二人に代わり、庇うように前へ出る二つの影。

「おっけー！」

「やってやるのですね！」

詠春の視線の先に、力を溜め終えた二人の亜人の姿が見えた。顔が強張る。どうする。考えが纏まらない。どうする。妖艶な少女は振りかぶっている。その手に集う、強大な光を。どうする。駄目だ、間に合わない！

「いくよ必殺！　……捷星っっ！　魔光弾っっ！」

リンプーの全力。溜めに溜め、ほとんど全ての気を注ぎ込まれた巨大な光球が向かってくる。淡いエメラルドのような輝きに込められた破壊力は如何ほどか、詠春にとっては想像したくもない。距離

は離れている。速度も瞬動などには遠く及ばない。それでも、詠春は向かってくる光球をかわす事が出来なかった。先程のダメージで、もう足がまともに動かないからだ。

「神鳴流、四天結界っ……！」

「！」

咄嗟に足元に四つの独鈷を打ち込み、詠春は自身を囲む正四面体の絶対防御壁を展開。この期に及んでまだそんな技を隠していたとは。驚愕するゼノ達。リンプーの放った光球が、防御壁とぶつかる。僅かに抗った防御壁は、威力に押し負け紙のように崩壊した。

「な……！？」

詠春には、驚愕する暇すら与えられなかった。
防御壁を容易く突破した光球はそのまま直撃。
激し過ぎる閃光。耳をつんざく大爆音。
光球は天を貫く巨大な火柱となって、詠春の身を焼いた。
実はリンプーはセブンスセンスに目覚めた事で、もう一つの才能を僅かだが開花させていた。それは究極技法、“咸卦法”。彼女が必殺と呼ぶその光球には、無意識の内に魔力と気が混合された力が込められていた。

「うぐぅあああっ……！！」

リンプーの光球の破壊力は桁違いだった。モモの一撃も大概だったが、凝縮されている分こちらの方が威力が大きい。気をしっかりと持たなければ。意識を失うわけにはいかない。こうなったら意地だ。血が出るほどに歯を食いしばり、耐える……。

「ぐぅぅ……っく！！」

「あれでも……駄目なの……？」

……踏み止まった。凌ぎきった。焼け焦げた大地の中心に、詠春は未だ立っていた。

防御壁は吹き飛び、全身血だらけ傷だらけだが、見れば光球を放った少女も、呆然としてがくりと膝を折っている。今の威力でトドメをさせなかったんだ、当然だろう。

しかし休息は与えない。反撃する力は僅かだが残っている。今すぐに攻撃を……。そう思い、今見た絵を頭の中で噛み砕いて……違和感。頭のどこかが警鐘を掻き鳴らす。もう一度、詠春は前を見た。奥に疲れきった女性が二人、手前に膝を折った少女が一人。……？　……三人しか……居ない！？

「！？　……しまっ……！！」

詠春を、影が覆う。同時に、気付く。

視線を自分の真上、太陽の方向へと向けて――――

「これで、終わりなのですねっ！」

「っっっっ！」

その目に映るは逆光の中を突き進む、大剣を上段に構えた剣士タペタ！

眼下に見下ろす詠春目掛け、最後の一撃を振り下ろす！

「……！」

「……」

静寂。

時が止まったような静けさが辺りを支配する。

はらりと、詠春の前髪が数本、滑り落ちる。

空間が、ズレた。

タペタの剣閃に沿って、空が二つに“切り裂かれた”。少なくとも詠春の目にはそう映った。力を溜めたタペタ渾身の一刀。技名無し。名称不明の“ジャンプ斬り”。両刃の大剣は詠春の中心線を正確に捉え、そしてその、額の僅か１ｃｍ手前で、ピタリと止まっていた。気が付けば、空には何の変哲も無い。空ごと切り裂いたように思ったのは、詠春の見た幻だったのか。だが後ろに広がる大地には、まるで彼の身代わりのように、どこまでも続く一筋の溝が深く刻み込まれていた。

「お……俺の……負け……だ……」

詠春は素直に認めた。どう見ても、どうあがいても、付け入る隙の無いほどの負けだ。

だが不思議と気分は悪くない。正直に言って、全力を尽くした。それで、負けた。自分の修行がまだまだ足りないのは百も承知。だが今は、自分を負かした目の前の相手達の力を、賞賛せずにはいられない。リュウ君の仲間は、彼同様とんでもないな。勝利に沸き、力の入らない腕でガッツポーズを取るリンプー達を尻目に、詠春はそんな事を思うのだった。

炎の吐息、まずは１勝

これより後年、この勝負を女性に負けた詠春の話として情報屋がどこからか嗅ぎつけ、それが巡り巡ってどこかの筋肉ダルマの耳に入ったりするのだが、それは今は関係のない話である。

第十三章　2、先鋒戦（後書き）

長くてすいません

第十三章　3、次鋒戦

――――来賓席。

沈黙が、場を支配していた。口を開く者は、誰一人居ない。

「……」

ある者は不意に息が詰まり、そこでようやく自分が途中から呼吸さえ忘れていた事を思い出した。またある者は知らぬ間に拳を固く握り込んでおり、その掌にじっとりと大量の汗を掻いている事に気が付いた。シルクハットを深めに被ったとある一人の大富豪は、何故か眼の端に涙を浮かべてさえいる。開始前にマーロックが愛想笑いを浮かべながら全員に振る舞った冷たい飲み物は、一口も付けられないまま温くなっていた。

「……」

言葉にならない。舐めていた。

その場に居る大半の人間が、悠久の風注目株の戦いという事で、まぁそれなりに楽しめる余興程度なのだろうと、そう思っていた。そんな彼らは文字通り、度肝を抜かれた。

開始前の時点でざわついていた観客達は、ゼノが最初の一手を取った所で、水を打ったようにしんと静まり返る事になった。初っ端から、茶々を入れる余地など全くなかった。戦闘開始から終了までおよそ１０分足らず。その間絶えず映し出される息もつかせぬ怒涛の展開に、客達は唖然としながら只々見入るしかなかった。

「……」

平静を装いながら、心中穏やかでないのはアリアドネー騎士団総長その人だ。単なる一介の戦闘集団如きが、正規の軍人など足元にも及ばない戦闘力を見せ付けたのだ。あの二つのチームの人間の力は、明らかに自分達を上回っている。認めたくないが、もし彼らに個人で戦いを挑めと言われたら、断固として拒絶するだろう。勝てる見込みが塵ほども見えない。

メガロメセンブリア元老院議員も、悠久の風最高責任者も、メンツを保つため顔にこそ出ていないが、驚愕しているのは明らかだった。手に持ったカップを始まってから一度も離していない事や、凝視し過ぎて目が乾いたらしく、今不自然に瞬きを繰り返している事などが、それを裏付けている。

「……」

仕掛け人のマーロックも、周囲と同様に驚いていた。そしてそれ以上に、悔しがっていた。何故自分は、映像の録画用意をしなかったのか。さらにはこの場で、この戦いを賭けの対象としなかったのか。魔法世界広しと言えど、これだけの戦闘は例え拳闘大会の優勝決定戦でもお目に掛かる事は出来ないだろう。自分が知る中でも間違いなく、最高峰。この戦いそのものに、値千金の価値がある。

また、この場に居るのはほぼ全てが金持ちか、その関係者だ。仮に賭けをしていたとしたら、その賭け金は膨大な物になっていた筈だ。そしてほぼ間違いなく、この場に居るほとんどが、実績のある“紅き翼”にベットしていただろう。だが結果は大番狂わせ。つまり賭け金は胴元である自分の一人占めだ。それを考えると悔しくてたまらない。

戦いが始まる前の浮ついた雰囲気だったらいざ知らず、今はもう「賭けをしましょう」等と安易に言い出せるような空気ではない。接待の事ばかりに気が行き過ぎていた。マーロックの商人人生最大の不覚であった。

「……」

そして各々は様々な思惑を胸に、この間を利用して少しの休憩を取る。映像からわかったのは“紅き翼”は一人ずつ勝負を行うのだと言う事。つまり後3戦は行われるという事実。大して待たずに、次の戦いが始まるだろう。まるで映画が始まるのを楽しみに待つ子供のように、客達は自分の席で、静かにその時を待つ。彼等の眼は、スクリーンから一時も離れる事無く――――。

＊

勝負が着き、リュウ達陣営の元に先鋒戦を制した立役者4人が帰ってきた。セブンスセンスを解いた彼女達は元の姿に戻ると、糸が切れたマリオネットのように、その場にへたり込んだ。

「お疲れ様でした。……みんな体の方は大丈夫ですか？」

「ええ、何とか……」

「あは……ねぇねぇ見てた？　勝っちゃったよ。凄いじゃんあたし達……」

勝てた事の嬉しさから、笑顔をこぼすリンプー。だが彼女達の疲

労の色は濃い。まさに疲労困憊という言葉が相応しい。張り詰めていた極度の緊張から解放され、またセブンスセンスも解いた事で、詠春にやられた箇所の痛みがじわりとぶり返していた。

「いやホント良くやったもんだなぁ。大金星ってやつだぜおめぇらよ」

「あれほどの剣の腕を持つ御仁を降すとはな」

労いの言葉を掛けるボッシュにガーランド。その他の者達も彼女達の勝利を称え、さらには一人であれほどの力を見せつけた詠春に対しても、敬意の念を忘れない。

「まぁでもー、こっちもボロボロなんだけどねー……」

「ワタクシ、活躍できて嬉しかったのでした……」

モモも、タペタも、息は荒い。憔悴している事が一目で分かる。それをナギ達に見られないように覆い隠し、4人を囲むリュウ達。あの“紅き翼”に一矢報いたのだ。普通に考えれば、そのように囲んで盛り上がっても特におかしくはないだろう。

「うっ……」

「！　大丈夫ですか！？」

「あ、ああ……」

へたり込んだまま、ゼノはフッと気を失いそうになった。咄嗟にしゃがんだリュウが支えると、気力を振り絞り意識を保つ。原因は

言うまでも無く疲労とダメージ……そしてセブンスセンスの影響だ。

セブンスセンスは一時的に莫大な力を行使できるが、当然リスクもある。使ったその日は深い睡眠を取るまで魔力や気が最低限に減少してしまい、さらに体が耐えられない為、一度使うと二日の間は使用する事ができないのだ。生物に備わっている一種の防衛本能のようなモノらしい。ドヴァーのように常日頃から纏って過ごすなど、それこそ修羅の領域なのである。

「ま、気付かれる前に勝負が終わったってなぁ幸運だったなぁ。なぁ相棒？」

「まぁね。詠春さんは結構押せ押せな人だし。そういう意味じゃ上手く噛み合って、相性が良かったのもあるね」

セブンスセンスは事実上一度しか使えない。

これはリュウ達にとって大きな弱点だった。今の戦いではナギ達にとってもセブンスセンスは初見、さらに紅き翼の中でも割とリアクションの大きい詠春が相手だったため、予想以上の結果を叩きだす事が出来たのだ。

だがここからは違う。既にこの切り札の存在がバレている。一応プレッシャーになりはするだろうが、これで“一度しか使えない”という事実と、“使用後の極端な弱体化”、もう一つの弱点とも言える“持続時間の長さ”に気付かれでもしたら、この後の戦いは非常に厳しい物となるだろう。だから、リュウ達は４人をナギ達から隠していた。弱点の一つである、この使用後の弱体化に気付かれない為に。

「すみません。出来れば治癒魔法を使いたい所なんですが……」

「ええ……わかっています」

「あたし達なら……大丈夫だよ」

気丈に振る舞うゼノとリンプー。リュウにはまだ出番があるため、ここで悪戯に魔力や龍の力を消費する訳にはいかないのだ。焼け石に水な薬草をいくつか使い、取り合えず見ている分には問題ないくらいの体力を回復させる。

「さて、じゃあ早速次鋒戦ですが……準備はいいですか？」

「おう。行ってくるぜ」

「隊長達にあやかりたい所だね」

「ホント、出来れば後に続きたいよ」

リュウに促され、前に出たのはやはり４人

甲殻族ファーマー・ランド

常識人銃使い・リン

猿顔道化師・ステン

そして――――

「うふふふ……出番です！」

「……」

無駄に張り切っている不思議系動く鎧・マスター

以上４人が次鋒戦のメンバーである。正直、リュウは不安だった。と言うのも、本来ならば二陣の最後の一枠はマスターではなく、サポート担当でボッシュが入る筈だったからだ。それが話し合いをしていた日に……

「マスターも参加すると言ってますよ」

「え？　いやでも流石に無理じゃ……」

「マスターが大丈夫と言ったら大丈夫」

「いやマスターじゃ多分歯が立たな……」

「マスターが大丈夫と言ったら大丈夫！」

「あの、だから……」

「マスターが大丈夫と言ったら大丈夫！！」

「……」

と、徐々にドアップになってくるマスターの異様な迫力に押され、二陣の最後に無理やり捩じ込まれる形で参加する事になってしまったのだ。戦力の不明もさることながら、万が一内部の盗賊の魂が暴発したらと思うと気が気でない。武装についてはボッシュやモモに尋ねても何故かはぐらかされるばかりで、戦力的な面では修行した自分達より圧倒的に低いだろうとリュウは見ていた。

「さ、行くよ」

「おう」

「さぁて、鬼が出るか蛇が出るか……」

マスターを加えた次鋒４人が、ゆっくりと戦場へ赴く。

さて一方の紅き翼陣営。

「スマン……」

腕の特に痛む箇所を抑え、足を引き摺りながらナギ達の元へと辿り着いた詠春。頭を垂れ、まず口を突いて出たのは仲間に対する謝罪だった。

「お疲れ様です詠春」

「うむ。とにかくまずは体を休めるが良い」

詠春を迎えたアルとゼクトは、特に罵声を飛ばすでもなく、力を尽くした仲間を労う。ゆっくりと腰を下ろした詠春は、思わずバタッと倒れたくなる心情を抑えながら、大きく深呼吸をして見せた。

「詠春、戦ってみた感想をお聞きしても？」

「ああ……正直、あれ程とは思っていなかった。全く世の中は広い。

今はまだ個々の力では俺達の方が上ではあるが……いや、やめておこう。これ以上は負け惜しみになりそうだ」

アルからのインタビューを途中で打ち切り、詠春は溜息を付いた。やはり彼自身、負けて悔しい気持ちがそれなりに大きいようである。

「詠春にそこまで言わせるとはの。確かに、あの身体強化を超えた変身技といい、相当手強いと見えるな」

「……リュウ達は本気で私達を倒そうと、修行を積んできたのですねぇ」

素直に感心するゼクトと、言いながらも顔は笑っているアル。リュウ達が頑張る様に仕向けた大元の元凶はアルなのだが、そんな事はもうどうでもいいのでスルーである。そして詠春は、じっと黙っているリーダーへと目を向けた。

「スマン、ナギ。最善を尽くすと言っておきながらこのザマだ。全ては私の修行不足が……」

「気にすんな！」

「！」

良く通る声でそう答えたナギは、非常につやつやした表情を浮かべていた。目は玩具を与えられた子供のように、輝いていた。疲れていた詠春は、その勢いにちょっとびっくりした。

「お前の仇は俺達が取ってやっから、安心してぶっ倒れてろ！」

「いや……お前どうした？　ヤケにテンション高いな？」

「何でもねぇよ！」

「？」

ナギは、嬉しかった。そして、燃えていた。リュウは、きっちり自分の出したリクエストに応えたのだ。やはりライバルとなるチームの結成を、リュウに依頼した自分の目に狂いは無かった。しっかりとこちらに対抗できるだけの用意をしてきやがった。これでこそ。こうでなくちゃ困る。

「よっし、次だ次！　頼んだぜアル！　詠春の弔い合戦だ！」

「うむ。今は亡き詠春の為にも負けられんぞ！」

「おい待てお前ら、俺は死んでないぞ」

盛り上がってノリノリなお馬鹿師弟からの遠慮ない言葉に、今更どっと疲れが襲ってきた詠春である。

「そうですね、詠春が馬鹿正直に戦ってくれたおかげで、いくつか試してみたい事が出来た事ですし……」

いつも以上に不適な笑みを浮かべ、するりと音も無くアルが前へ出た。彼自身もナギと同じく、リュウ達が背伸びしてまで自分達と同じ台に立とうとしている事に、嬉しさを感じていた。そして、だからこそ容赦はしない、と内心で決めていた。

「うーん、さっきからそこはかとなくバカにされている気がするが

……」

「とんでもない……詠春、あなたの尊い犠牲は決して無駄にはしませんよ」

「……おまえら……いや、もういい」

「ふふふ。まぁあなたはゆっくりと休んでいてください。では、行くとしましょう」

「おし、頑張って来いよ、アル！！」

心なしか戻ってきた時よりも疲れた顔をして頭を抱える詠春を華麗に流し、いつもの笑みを浮かべながら悠々と戦場に向かうアルであった。

二試合目

アルビレオ・イマ　ＶＳ　ランド、マスター、リン、ステン

ざっ、と両陣営から出てきた二組が、その中間地点で相対する。片やローブを着込んだ年齢不詳の微笑み魔法使い。片や甲殻族・野馳り・高山族、加えて謎の金属人形と、統一性皆無のごちゃ混ぜパーティ。お世辞にも、あまり迫力のある絵ではない。

「おや、あなたとは初めてお会いしますね」

「そのようですね。うふふふー……今の笑うところですよ

ね？」

「……」

マスターを初めて見るアルは、その雰囲気に少し警戒した。今までのリュウの仲間には居なかったタイプだ。表情が無いので心理が読めず、天然とも計算尽くとも判別が付かない。アルは大まかに“からかい辛そう”との評価を下した。

「リュウの新しいお仲間は、なかなか愉快な方のようですねぇ」

「愉快なのはアンタの顔の方だよ……とマスターは言ってます」

「……」

これから戦うというのに、アルとマスターのせいでイマイチ緊張感が無い。何故か喧嘩腰のマスターにいきなり暴言を吐かれ、アルの笑顔が微妙に固まった気がしたのは気のせいである。

「アンタは何か気に入らないから、あたしがぶっとばしてやるよ！……だそうです」

「何故かは知りませんが、随分と嫌われているようですねぇ私は」

表情の無いマスターの評価を“やり辛い”に修正し、取り合えずスルーすることにアルは決めた。後ろからてこてこと開始の合図を行おうと出てきたゼクトを、アルは振り返らずにさっと手で制止する。ゼクトが声を出すよりも早く、アルはランド達に向け、余裕の笑みを浮かべてこう言い放った。

「フフフ……では、いつでもいらっしゃって結構ですよ？」

「「「……」」」

好きなタイミングで、好きなようにして来いとの余裕の発言。意図を察してか、何も言わずに引き上げるゼクト。そして言われた当のランド達は、警戒した。これは舐められているのか。いや、恐らくそうではない。何か考えがあるに決まっている。直接的な先程の剣士とは違い、前に僅かだが接する機会があったおかげでわかっている。

この男は、性格が悪いのだ。

「そうかい……なら、遠慮なくやらせてもらうとするよ！」

リンがホルスターから愛銃を抜き、戦闘態勢を取った所で、アルの姿が一瞬だけ“薄くなった”ように、彼女たちには見えた。

「！？」

「どうかしましたか？　さ、遠慮せずにどうぞ」

……が、何も変わった所はない。相変わらず薄笑いを浮かべてアルは突っ立っている。気のせいだったのか。改めて全員で戦闘態勢を作るリン達。取り合えず、この胡散臭い男は何をしでかすかわからない。油断を誘って返り討ち、等という事も十分にあり得る。

気付くと僅かに浮いてゆらゆらと漂うアルの姿は、まるで幽霊か何かの様で、何より殺気が全く無かった。これは本気で自分から仕掛けるつもりが無い、と全員が判断。リンは愛銃バムバルディ・サ

ードストライク――モモとボッシュの共同改造により声紋照合のランゲージコマンドシステムから進化し、声に出さずとも持ち主の念波による銃弾の自動選択が可能となっている――の狙いを、しっかりとアルの急所に定めた。

「……」

ダンッ！　と機械浜に轟く一発の銃声。バムバルディから発射された高速の弾丸は、正確無比にアルの急所を狙い、そしてあっさりと、その魔法障壁に阻まれた。

「……もう終りですか？」

アルは何事も無かったように微笑みを絶やさない。リン達にとっても、別に驚く事ではない。想定の範囲内だ。どうやらあの魔法障壁に相当の自信があるらしい。突破出来るものならやってみろと言う事か。警戒しながら、リン達はアルの前後左右をあっさりと取った。アルが動く気配は、未だない。

「おらっ！」

側面からランドの鉄拳攻撃。御多分に漏れずその拳には気を纏っている。しかし、やはり障壁に阻まれて、アルを殴るには至らない。何度打ちつけてみても、結果は同じ。

「援護しますっ！」

ランドの反対側に陣取ったマスターの片腕が、カッ飛んだ。男のロマン、ロケットパンチ。マスターの主兵装だ。だが所詮は気も何も纏っていないタダの金属の塊。いくらロケット推進とは言え、銃

弾と大差ないそれが通用する筈も無く、障壁に当たって跳ね返った。

「ホンッと厄介な兄さんだよあんたは」

「お褒めに預かり光栄ですよ」

隙だらけの背後から、軽口を叩きながらステンが迫る。その手に持つナイフは、以前リュウが留守にしている時に購入した新品の武器、炎の属性を宿す「紅蓮のナイフ」だ。

「っ！」

「ふふふ、残念でした」

大方の予想通り、それも障壁には通用しなかった。ナイフは障壁と当たってバキンと音を立てるだけ。繰り返しても、やはり通らない。

「……なるほど、よく分かりました。やはりあなた方はあの“力”を使わなければ、私達には対抗できないと言う訳ですね」

アルは確認していた。やはりあの妙なパワーアップを行わなければ、彼らは自分達には手も足も出ない。それが詠春を馬鹿正直としたアルの見解。つまりあの力を使わせなければ、負ける道理は無い。

「ではそろそろ反撃と……」

「おっと、そうはいかないね。このまま封殺させてもらうよ」

正面からアルを見据え、再び銃を構えるリン。しかしアルは態度

を崩さない。

「銃は私には通用しないと、先程証明した所ですが」

「どうかな？　怖いんだったら止めてあげるよ」

「……」

見下したような言葉の弾丸を、リンは突きつけた。セブンスセンスは切り札故に、いざと言う時までなるべく温存したい。今のままでも、障壁を破る手段ならばある。あのココン・ホ列島に住んでいたミノタウロスの魔物相手に、散々経験済みだ。対策法はズバリ、四人での一斉同時攻撃。手応えから、一度に集中すれば恐らくは突破できるとリンは分析していた。

「……」

リンのそれが挑発である事は明らかだ。バレバレ過ぎて引っ掛かる奴などまずは居まい。だがアルは、あえて挑発に乗った。何事か考える素振りを見せると、上げかけていた腕を下ろし、動こうとしていた動作を止める。相変わらずの微笑を浮かべて。

「……いくよ。あの障壁、突破して目に物見せてやるさ！」

リンの声で、アルを囲む他三人は何をするのか即座に理解した。攻撃のタイミングを合わせるのは、列島の魔物相手に嫌になる程やっている。唯一の不安はマスターだが、最後に合わせて貰えば、見てからでも十分に間にあう筈。

「……砕け散るがいい！！」

マシンガンの如き連射が、バムバルディから放たれた。先程の銃弾とは違い、銃が丸ごと気でコーティングされている為、そこから出て行く弾丸も全てが気を纏っている。連射は障壁に次々と弾かれるが、途切れる事はない。声に出さなくてもいいのだが、ついつい叫んでしまうのはリンの癖である。

「俺のパンチを舐めんなぁ！」

アルの側面。障壁の手前まで距離を詰め、ファイティングポーズを取ったランドは頭を左右に振り始めた。徐々に加速していくそれは、数字の“８”を横にしたような軌道を取り始める。

「おおおらぁぁぁぁ！！」

頭を振り、振り子のように勢いを付けた反動を利用して、左右から高速で叩きつけられる気を纏ったフックの連打。相手の攻撃をかわすのと、拳による攻撃を同時に出来ないかと悩んだ末に、ランドが編み出した攻防一体の技、デンプシーロール（名付け親・リュウ）！　畑仕事で鍛えられた強靭な足腰が、巨体ランドの体重を余さず拳へ伝達させる！

「……」

横からはランドの拳の強烈な連打、正面からは次々に直撃していく銃弾の雨。僅かにだが、障壁が揺らぐ。まだアルは、動じない。

「おいらの芸も見といてよ！」

ランドの反対側、マスターと場所を交代して距離を詰めたステン。

纏う気を受けて紅蓮のナイフが勢いよく燃えだし、赤い軌跡を残して障壁を刻んでいく。ナイフの扱いに長けたステンの妙技、名付けて“千切り”。器用に腕だけを高速で動かし、常人には見えない速度で斬りつけていく。間抜けな名前だが、ステンはそれが逆に気に入っていた。

「……」

左右に正面の三方向から、アルの魔法障壁に強烈な威力が加わり続ける。障壁に、徐々にヒビが入っていく。あと一押しで、砕ける可能性が高い。それでも、アルは動かない。

「やるしかないね……とマスターが言うのでやるとします」

背後を取っているマスターは、シュイーンと謎の音を立て、アルから少し距離を取った。そして片腕をぐるぐると勢い良く振り回していく。

「……はいっっやぁっ！！」

ドゴウッと盛大な音を立て、猛スピードで発射される純粋な質量兵器。ロケットの推進力に加えて遠心力もプラスされた、必殺の大車輪ロケットパンチ。肩に力を入れ過ぎていると表現しても過言ではない、“りきみすぎ”な一撃が、アルの障壁へと思いっきりぶつかる。それは三方向からの攻撃によりひびの入っていた障壁への、最後の一押しとなった。障壁は派手に砕け、拳が、多数の銃弾が、ナイフが、ロケットパンチが、アルの体にめり込んだ。

「いやいや、貫かれてしまいましたね」

「「「！？」」」

どう見ても、直撃だった。銃弾はアルの全身を穴だらけにし、ランドの拳は思いっきり後頭部に叩き込まれ、ナイフはアルの半身をズタボロにし、ロケットパンチはどてっぱらを貫通して大穴を空けている。これはもう、勝負が決まったとしか思えない。

……しかしアルは全く態度を変えずに、悠々と喋っていた。

「まだまだ研究の余地ありですねぇ」

あり得ない。痛みと言うものを感じてないのか？　最早ホラーだ。だがそこでリン達は気付いた。空いた穴や傷跡から、血が一滴も垂れていない。という事は……

「偽物……！？」

そう誰かが叫んだ瞬間――――

リン達の体は、大地に磔にされた。
凄まじいまでの超重力が襲ってきたのだ。
抵抗できずに全身がベタリと地面に張り付いてしまい、指一本動かせない。体中の骨がみしみしと音を立て、今にも押し潰されてしまいそうだ。

「うあ……っっ！」

「ふふふ……その通り、ソレは私の偽者、言わばダミーですよ」

「！」

リン達の耳に届いたアルの声は、遠く上方からのものに聞こえた。障壁を破って攻撃を加えたはずのアルの姿が、スゥッと音も無く消えていく。そして、全く傷の付いていないアルが、ふわりと同じ位置に降り立っていた。

「こうして皆さんの前に今いるのが、本物の私です」

「あ、あんた……いつの……間に……」

当然の疑問を、押し潰されたままのステンが尋ねた。何とか必死に目だけをアルへと向けて。ランドとリンも、頭を動かす事は出来ないが、耳だけはしっかりとその会話を聞いている。

「それはですね……」

リンが銃を抜いた時、あの一瞬だが“薄くなった”と錯覚した時には、アルはもう入れ替わっていた。本体は上空でダミーを操りながら、悠々の見物。挑発から何から全て計画通り。リン達は、まんまとアルの策略に嵌っていたのだ。

「……というわけです。種を明かしますと先程のダミー、私の障壁などは寸分の狂い無く再現できているのですが……動かせないんですよ」

「！！　何……だって……」

「ですから、あのダミーは動かなかったのではなく、動けなかった。という事になりますね」

リン達にとっては、結構な屈辱だった。あの余裕の笑みと態度にまんまと騙された。もう少し警戒の範囲を広げていれば、上空に潜むアルに気付けた筈。弱点まみれの試作魔法を、“アルならば動かなくてもおかしくない”と思わせて囮に使うという大胆な発想。リン達の動きは全てが見透かされていた。

「ふぅむ。しかしあれ以上はどうも私の力では動かせませんねぇ……となると、何か外部から大きな魔力を借りなければ無理ですかねぇ……」

自分の精巧なダミーについてぶつぶつと考察をするアル。リン達の能力を試すと同時に、自分の魔法についても試していたのだ。アルにとっては一石二鳥の戦略だった。そして、今のその態度はリン達には完全な油断に見えた。その隙を突いて、ランドが這い蹲りながらも、自分の中へと意識を向けようと……

「ぐあっ!?」

「！　だ……旦那っ！」

「残念ながら、変身する隙は与えませんよ」

ランドへ、アルの手から魔法の射手が放たれた。セブンスセンスを発動するには、自分の中に意識を集中する必要がある。しかし、誰があの隙だらけの動作を見過ごすだろうか。飛んできたのが魔法の矢一本とは言え、ダメージを食らえば集中は途切れてしまう。アルにとって、動く事のできないランド達の怪しい気配を感知して妨害する事など、造作も無い。

「ふふふ。……させません」

「！！」

集中しようとしていたリンにも、飛んできた魔法の射手がヒット。的確に矢を飛ばし、集中を邪魔する。こうなっては、この重力結界の中では変身は不可能。……いや、例えこの重力を解かれたとしても、隙だらけの動作を経なければならないセブンスセンスは使えないだろう。つまりそれは、リン達に反抗する術が無い事を意味する。

「あなた達の実力を、過小評価するつもりはありません。そろそろ気を失って貰いましょうか」

「ぐ……」

アルは呪文の詠唱に入った。リン達に掛かる重力を一時的にもっと大きく上げて、全員を一度に気絶させるためだ。万事休す。これで勝負は着いてしまうだろう。将棋で言う所の“摘み”の状態にリン達は嵌った。次鋒戦、番狂わせは無し。ごくあっさりと、アルの勝利が決定した。

……はずだった。

「はいやぁ！」

「……！」

這い蹲りながら、腕だけをアルへ向けて、マスターのロケットパンチが火を噴いた。重力の影響を何故か全く受けずに飛んでいくそ

れを、アルは驚きながらもしっかりとかわす。……しかし唱えていた呪文の詠唱は、途絶えてしまっていた。

「……これは驚きました」

「マスターにとっては大したことないそうですよ」

「……ほう？」

続けて、何とマスターは圧し掛かる重力の中を何でもないように立ち上がった。アルは即座に無詠唱で、マスターにだけ、掛かる重力を増す。その辺の普通の金属ならば、既にひしゃげて鉄クズと化しているだろう程の圧力。しかし……

「いきますよっ！」

「！！」

だが、マスターには効果が無かった。再び飛んでくるロケットパンチ。マスター自体も、何事もないかのように平然と立っている。ロケットパンチを難なくかわしつつ、アルの頭の中に疑念が沸いた。

（妙ですね……）

ここでようやく、アルから笑みが消えた。マスターはアルにとって不気味だった。不確定要素過ぎる。一体何がどうして自分の魔法を無効化しているのか。考えてもわからない。それなら、と。無駄とは思いつつも、本人に聞くことにした。

「……一体、どのような手品を？」

「マスターは、『もうアンタには負けないよ。この“対アルビレオ・イマ専用迎撃システム”のロードが完了したからにはねぇ！』……と言ってます」

「……」

「あ、マスターが怒ってますね。『言うんじゃないよこのポンコツ』って。うふふふー、笑うところですね」

マスターはそう言うと、腹を抱えて大げさに笑う素振りを見せている。しかし、アルには全く笑えなかった。対アルビレオ・イマ専用迎撃システムとは？　そんな都合の良いシステムが、都合良く積まれているというのか。ハッタリだろうか？　しかし重力を無効化しているのは事実だ。

「……ふ、これは面白い。流石はリュウの仲間。機械がユーモアを嗜んでいるとは」

「……うふふふー」

アルは軽口を叩くと、すぐさま呪文の詠唱に入った。阻止するべくロケットパンチを繰り出すマスター。だが今度はかわしながらも、詠唱は止めない。呪文はさしたる間もなく完成した。これで周りの三人を戦闘不能にしてしまえば、この謎の機械一体が居た所で、大した事は出来ない筈と当たりを付けた。

「これで終わりです！」

「！！　マスターレッドフラッグ！」

アルが唱え終えた魔力を開放しようとした瞬間、マスターの頭頂部がパカッと開き、中から赤い旗が現れた！　それはバサバサと激しく左右に振られている！

「……？」

「……あ、マスターは間違えたようですよ」

……しかし、何も起こらなかった。

何をするのかと警戒したアルの前で、マスターの頭から生えた無意味な旗が、ばさばさと虚しく振られている。実にシュールな光景だ。そして当然のように次の瞬間、再びアルの手から魔力が放たれようとして、同時に今度はマスターの両腰の部分がパカッと開く。その中には謎のレバーが存在していた。

「！……」

アルの手から光が離れ、僅かな時間差でマスターがその両腰のレバーを手でガチッと倒した。アルの魔力が放たれた方が、マスターの行動よりも間違いなく早かった。しかし……

「……？　か……体が、動く……？」

「ホントだ……軽い……！」

「何だかわからないけど……助かった……？」

「……！」

地べたに這い蹲っていた三人が、復活した。その瞳に、アルへの反撃色を燃やして。アルの魔力が消失したわけではない。確かに重力魔法は発動した。というか、今もしている筈なのだ。現に自分達の周囲のさらに外周部分では、地面が超重力によって現在進行形でへこんでいる事がわかる。だが、目の前では何かに無効化されている。何故か。思い当たる原因なんて一つしかない。この謎の機械だ。

「……何をしたのですか？」

「迎撃システムその1、広域重力低減装置・セイリングシステム……だそうです」

「……」

重力低減。そう言われてみれば、無効化されているのはこの機械を中心とした半径数十mだけだ。つまりどうやら魔法無効化などではなく、純粋に重力に対しての抵抗装置らしい。しかし、わざわざ搭載するにしては効果の対象が限定的過ぎる。まさか本当に、対自分専用の迎撃システムという事なのか。

「……まずは、あなたを止めなくてはならないようですね」

アルは頭を切り替えた。周りの三人がパワーアップするより早くこいつを止め、そしてまた重力の結界を敷く。それが最適解。遠距離の重力波は無効化される可能性が高いと読み、距離を詰めての接近戦で仕留める。ふわっと優雅にアルは滑空し、勢いのまま掌低をマスター目掛けて突き出した。岩をも砕くであろうその一撃を、しかしガシッと、マスターは見事に受け止めた。

「……！」

「体術の動作もお見通しさ。……と言ってます」

受け止めたマスターの腕の部分がバクンと音を立て、アンテナのように開いた。掴んだアルの腕を離すまいと強く握りこむ。同時に、パチッと何かが弾ける音がした。

「！！」

「近接戦闘用兵器、マスターコレダー！　……のようです！」

近距離戦用高圧電撃兵装。強烈な電撃がアンテナを展開したマスターの腕から放たれた。しかし、先の音から何が来るのかを咄嗟に悟ったアルは強引にマスターの腕を振り解き、即座にバックステップ。かろうじて電撃の効果範囲外へと逃げる事に成功した。

（……これは）

近接も対策済み。もう疑う余地は無い。迎撃システムとやらは、実在する。……しかし、腑に落ちない。この機械と対面するのはこれが初めてだ。一体いつの間に、これだけの自分の情報を集めたのか。流石のアルも戸惑っていた。

『対アルビレオ・イマ専用迎撃システム』

これこそ、かの『闇の福音』エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルが、モモ、ボッシュとの共同開発の元、こっそり仕込んでおいた最強の嫌がらせ機能であった。一緒にいた期間は僅か数日という短い物だったが、その間あのアルから様々なからかいを受けていた彼女がその鬱憤を晴らすべく、からかわれ中に集めた情報と、ある程度の推測を元に、アル対策をこれでもかと練り込みまくってい

たのだ！

止めるべき立場のボッシュやモモは最初こそ断ろうとした物の、重力に対する機械的制御という発想。「闇の福音」指導による鎧の防呪処理理論。その他諸々の情報に興味を掻きたてられ、あろう事かエヴァンジェリンの要望のほとんどをマスターの武装にかこつけて、実際に実装してしまったのである。

ギャグ風味な話だが、ターゲット当人にとっては本気で笑えない。何しろ自身の魔法や動きに対しての綿密なデータが取られていて、しかも完璧に対策されているのだ。それが日常での仕返しどころか、よりにもよって大事な勝負の大一番で使われてしまったというのは、不運と言う言葉では言い表せないくらいの不運である。

（仕方がありません……）

マスターに対する評価が“やり辛い”から“本気でうっとおしい”にランクアップし、ならばシンプルゆえ逆に対策し辛いであろう魔法の射手の物量作戦で押し切るか、と、そうアルが次の手を考え実行に移そうとして――――

機械浜の三箇所から、三本の光の柱が立ち昇った。

「！！」

「時間稼ぎはこんなとこかね……だそうです」

「……やれやれです」

アルは自分の判断の誤りを認め、そして気を引き締めた。どうや

らこの機械に気を取られすぎてしまったようだ。こうなっては仕方が無い。ベストなのはあの力を使われる前の決着だったが、こうなったらこうなったで対処法はある。その為には、自分も今以上に集中しなければ。

ついに、セブンスセンスが発動。リンとランドとステンの三人が、光の柱から姿を現す。

「好き勝手やってくれたね……覚悟はいいかい」

光が納まり、姿を表したリン。見た目に変化はない。銃にも変化はない。一見するとただオーラを纏っただけのように見える。しかし、注意深く見ると分かる。彼女の手首に、ブレスレットの様なものが装着されている。それは彼女の理想。銃を最強の矛に見立て、それに対する最強の盾として具現化した、“ヴァリアブルブレス”。一体どのような効果が秘められているのか。

「……出来れば俺は使いたくなかったんだけどな……」

光の柱から出てきたランドはリンプーと同じく、以前リュウが掛けた変装魔法の姿に変貌していた。ピンク色の甲殻にぐりぐり眼、長い尻尾のデフォルメアルマジロだ。縮んだせいでパワーダウンに思えるが、実際は真逆。その身には信じられないパワーが詰まっている。

修行中、ランドは自分よりも早く覚醒したリンプーの姿を見て、かつての自分の変装姿を思い出してしまっていた。「絶対に俺はあのチンチクリンな格好にはならねぇ！」と、セブンスセンスに目覚める過程であまりに強く意識しすぎたせいで、逆にその姿になってしまったという悲劇的背景が、裏にはあったりする。

「おいらも、ちょっと頭に来ちゃったね」

ステンもランドやリンプーと同様に、リュウが掛けた変装魔法の姿だった。勿論、強そうな方のだ。真っ赤で逆立った頭髪、鋭い牙を生やした凶悪な面構えに、炎を吹き出す鋭利な爪。下半身は無く、代わりに腰から下は轟々と炎が燃え盛っている。この姿のステンにとって、足なんて飾りに過ぎないのだ。偉い人にはわからないだろうが。

「マスター、セーフティロックを解除しますか？　……了解。マスターからの許可が下りたので、解除します」

ハッキリ言って怪しさ満点の、マスターの一人芝居。しかし次の瞬間、カッ！　とマスターの目が光った。マスター内部の盗賊の魂から供給されるエネルギー量を、通常モードである３０％から７０％に引き上げたのだ。

これにより、マスターは搭載されているいくつかの武装が使用可能になった。モモとボッシュとエヴァンジェリンにより作成された大火力兵器の封印が今、解かれたのである！

「ツインマスターライフル、セット！」

パカッと、マスターの頭が開き、中から飛び出たのは二丁のライフル！　グリップから伸びたコードをマスターの腹の部分にある接続口にセットし、内部ジェネレーターに直結してエネルギーを供給する！

説明しよう！　マスターの内部はボッシュ博士の知識内にあった

ドラゴンズ・ティアの収納技術が応用されており、数々の武装が収まっているのだ！

「ファイアッ！」

「！？」

アルは驚いた。先程詠春戦で見たモモのビーム砲撃よりは劣るものの、マスターのライフルは、十分な破壊力を伺わせるビームを放って来たのだ。マスター本体の動きはそこまで早くないし、耐久力もそれほどではないと思える。しかし、火力だけはホンモノだった。これに加えてあの迎撃システムもある。厄介な事この上ない。

「……いいでしょう。受けて立ちましょう」

しかしアルは引かない。迎撃システムのせいで攻撃手段が著しく制限され、さっきまでとは逆にアルの方が“摘んだ”と言えなくも無いこの状況。だが逆転の芽ならある。あの変身技の出力は膨大だ。それが長く続くなんて事は、絶対にあり得ない。そう断定していた。凌ぎさえすれば良い。アルは勝負に出た。

「むんっ！！」

人一人飲み込まれてしまいそうな大きさの、重力弾。空中に舞いながらそれを大量にばら撒き、無差別に爆撃を行う。機械浜は、次々と大穴だらけになっていく。

「迎撃システムその2、ベクトル変換マスタータイフーン……との事です」

撒かれた重力弾に反応して、マスターのヘソの部分にある小さな二つの風車が回転し、そこから猛烈な竜巻が巻き起こる。竜巻の軌道上にある全ての重力弾は、その影響をモロに受けて向かうベクトルを狂わされ、てんでバラバラな方向へと飛んで行ってしまっていた。

「……」

予想通りとはいえ、実際に対策される所を見ると僅かだがへこむ。アルはそう思いながらもチャンスを待つ。今の重力弾も、真の目的は当てる事ではない。向かってくる三人のタイミングをずらす事にあるのだ。

「おらぁっ！！」

小さな体を回転させ、突っ込んでくるランドを下に避け、大地に着地。それを逃さじと回転を止め、今度は打ちおろす様に上から拳が放たれる。しかし読んでいたのかアルは華麗にひらりとかわす。勢い余り、大地に突き刺さったランドの拳。そのヒットしたポイントから半径数ｍに渡って、大地はスリバチ状に“砂”になった。

「！！」

「ちぃ、避けんなよ！！」

「いえ、それは無理かと」

ランドの拳はセブンスセンスの力により、反則的な破壊力を生み出していた。衝撃の伝わる範囲内という制限があるものの、何と脅威の破壊伝導率１００％。本人は技名を考えるのが面倒なので、適

当に“ドゴーンパンチ”と読んでいる。当たりさえすればダイヤだろうが一撃粉砕。力こそパワーなのだ！

「！　おっと、危ない危ない」

「さっきから避けるのは上手いよねホント！」

ランドからの攻撃をかわし、息つく間もなくステンが襲い掛かる。背後から振われた爪を振り返らずに横へとかわし、お返しに重力弾を撒いて目くらまし。それに紛れて空中へと逃げるアル。下から見上げるステンの爪先に、炎が噴き出す。凝縮されたレーザーのような熱線、“魔炎烈波”。浮いたままゆらゆら漂うアルを狙い、下方から細い光線が撃ち貫いていく。

「なかなか……」

「仕方ないねっ！」

「！」

さらにステンは足が無いのに虚空瞬動。どうやら気合でそれをこなしているらしい。とにかく、空中へと躍り出たステンによる手刀攻撃。下から袈裟懸けに来たそれを、アルは横へとズレて確実に避ける。しかし、触れてもいない筈のローブが切り裂かれた。“空手裏剣”。ナイフのような真空波を手刀とその周囲数mに及ぼす。この姿となったステンのもう一つの技だ。

「本当に、厄介ですねぇ……」

ぼそりと呟くアルはさらに上空へと昇ると、またもや大量の重力

弾を降らせた。空が3、黒が7の割合で、重力弾が宙を埋め尽くす。マスターの竜巻でその内の半分を吹き飛ばすも、まだ半分は残っている。

「アンタ達はあたしの後ろへ来な！！」

「！」

それを纏めてガードしたのはリンだ。手首のヴァリアブルブレスから3人を囲うように、障壁の様なものが展開されている。

“アブソリュートディフェンス”。

六角形の光の膜で紡がれたその障壁は、ただの魔法障壁ではない。一方向のみ、さらに発動は常時では無く任意という制限があるものの、魔法・気・物理、さらには幻覚など、あらゆる攻撃に対して極めて強固な防御能力を持つ障壁だった。先程のアルの障壁よりも、強度は上だ。かつてのハイランド城の超魔障壁には届かないが、個人で扱う分にはまさに最強の盾と言える能力だった。

「チェック！！」

「ッ！」

続けてリンの銃から放たれる、円錐状のドリルのようなエネルギー。正体は強力なバインド効果を持つサポート系の気弾。いかなアルであろうと、動きを止められてしまえば一巻の終わり。一目で効果を見破ったアルはそれを避け、さらに上空を飛びまわる。

（まだです……）

ここからの戦いは、一方的であった。マスターとリンがアルの攻撃のことごとくを封じ、ステンが肉薄して隙を作り、大火力持ちのランドと、手が空いたマスターがそれを逃さずに攻め立てる。傍から見たら、アルは確実に追い詰められていた。

（まだ……恐らくもう少しで……）

だがアルは、猛攻を全てかわしていた。どうしてこれだけの集中砲火を掻い潜れているのか。見ている方からはわからない程に、アルは巧みだった。

詠春が負けた理由の一つに、一対多の状況が多かったから、という事をアルは挙げる。なまじ自信と経験があっただけに詠春は気にしていなかったが、アルは極力、二人以上を同時には相手にしないように細心の注意を払っていた。

無効化されるにも関わらず、時折重力弾を放っていた目的はこれだった。攻撃のタイミングをずらして、一度に二人以上はかかって来れないようにする。これが、アルが猛攻を凌げていた大きなポイントだった。その手腕は巧妙で、ランド達は気付く事はなかった。

（まだ……）

「観念したらどうだいっ！！」

リンの銃撃。しかしアルはかわす。反撃もせずに。

もう一つ凌げていた理由を挙げるとすれば、それはマスターの存在だ。マスターの迎撃システムのせいで、アルは攻撃を捨て、完全

に防御のみに集中するようになっていた。攻撃に出てくれればソレに乗じる隙もあったかもしれないが、その可能性が０だったのはリン達にとって不運だった。

（くっ……！）

「オラオラオラァ！！」

危うく当たりそうになる小さな体から繰り出されるパンチを、浮遊魔法を駆使して避け続ける。この浮遊魔法と言うのも、アルにとって大きなアドバンテージになっていた。リン達の側に、空を自在に飛べる者が居ないと言うのが、攻めきれない事の一つの理由だった。

大地を砕くランドのパンチ。ステンの巧みな熱線と真空波。リンのサポート気弾と多種多様な銃弾の嵐。そしてマスターの大火力。それらの猛攻を、アルはかわし続けた。幾度となく繰り出される攻撃を、アルは凌ぎ続けた。

――――そして、ついにその時は訪れた。

「！！　くっ……」

「おや……」

とうとう、リンのオーラが消えた。力なく地に足を付けると、今

にも気を失ってしまいそうになる。セブンスセンスの反動だ。

「あうっ！？」

「どうやら、チャンスが巡ってきたようですねぇ」

即座にアルが放った魔法の射手。動きの鈍った的に当てるのは、目をつぶっていても出来る。その放たれた一矢の衝撃で、彼女はあっけなく意識を失った。リン、気絶。

「なるほど。持続には個人差があるようですが……大まかに１５分、と言った所ですか」

「……ちっ！」

変わらずふわふわと滞空するアルにステンの熱線やランドの回転体当たりが襲う。しかし、掠めるだけ。絶妙にポイントをずらして、直撃を避ける。４人でなんとか回っていたここに来て、リンが抜けた穴は大きかった。

「く……くそぉ……」

「はい、もう一人」

「っ！」

リンに続き、ランドが脱落。光が消えて姿が元へと戻ったところへ、容赦なく魔法の射手が襲った。ランド、気絶。

「ふう……あらかじめ言っとくと、おいらももう持たないね」

「そのようですね。降参でもなさいますか？」

「はっ……冗談でしょ！」

残ったステンは諦めない。実際もう残る時間は少ない。ならば一撃に賭ける。残る力を集中させ、魔炎烈波に使っている炎と熱を、全て拳に乗せる。全力の炎を至近距離で爆裂させる、一発限りの大技、“タイランレイブ”。文字通り執念の炎を燃やし、アルに最後の勝負を挑む。

「ぎゃうっ！？」

「非常に惜しかったですが……」

しかし、撃沈。焦って燃える拳を直接叩き込もうとして、カウンターの掌低の餌食となってしまった。セブンスセンスのオーラが消え、姿が元に戻る。ステン、気絶。最後に残ったのは、マスター一人。

「あたし一人でもやってやるさ……だそうです」

「さて……」

今この時を限定して言えば、間違いなくアルにとって対アルビレオ・イマ迎撃システムは最も厄介な存在だった。ほとんどの攻撃が効果を及ぼさない。かろうじて対策されていないのは魔法の射手だが、それもマスターの鎧の防呪処理に通用しない事がわかっている。向こうの攻撃は当たらないが、こちらの攻撃も当たらない。千日手のような状況になるだろうと、傍からは思えた。

「勝てなくても、せめて引き分けに持ち込んでやるよ……とマスターは言ってますね」

当然だが、マスターの武装はライフルだけではない。周りを巻き込む事を恐れて一番取り回しの利くライフルを使っていたが、こうなった以上、遠慮はいらない。超長距離砲マスターランチャー、赤いマント状の耐魔遮断兵器マスターシールド、質量実体弾マスターホームラン、悪党捕縛用装備マスターカウボーイ、さらにはマスタートマホークやマスターリングなんていう用途不明な物まで、合わせて２６の秘密兵器が内蔵されているのだ。

「引き分けですか。残念ながら、そういうわけにはいきませんねぇ」

不適に笑い、アルはマスターの言葉を一蹴した。この状況でこの態度。その根拠は一体どこから来るのかと、マスターのマスターが訝しんだ所で……アルは袖から、一枚のカードを取り出した。

「ふふふ……『来れ』」

「！！」

それはアルの姿が描かれたカード。アルの言葉をキーワードに、カードは当人を囲む大量の本へと姿を変えた。規則正しく舞い踊る本。そのうちの一冊を手に取り、アルはそこに挟まれている栞を……

「ファイアッ！」

マスターのライフルが唸る。盗賊の魂からのエネルギーを受け、マスターライフルの閃光が迸る。しかし、それは張り直されていた

アルの障壁に遮られた。止める事叶わず。アルを、激しい光が包む。

「！」

「さて、果たして迎撃システムとやらは、この姿に対応していますかね……？」

光が収まり、そこに居たのは日本刀を持った面長長身の青年。神明流剣士・青山詠春その人だった。勿論、はるか遠くの紅き翼陣営に、本人は座っている。この目の前の詠春は、アル本人だ。

アーティファクト、イノチノシヘン。他人への変身能力を持った、アルの切り札だった。

「！！　しまった！　……ようです」

アル（詠春）は本人顔負けの瞬動で一瞬にして距離を詰め、刀を振るう。マスターは、そのアルの動きに反応し切れなかった。アルビレオ・イマ迎撃システム。つまり、それ以外の人物に対しては、その機能が意味を為さない。マスターは、あっさりとアル（詠春）の斬撃に被弾。大きく吹き飛び、ダウン。

「……どうやら、マスターは立ち上がれないようですよ」

緊急事態発生の為、盗賊の魂からのジェネレータ出力を9割カット。全武装使用不可。マスターには、もう立ち上がる力は残っていない。そしてこの瞬間、勝負は決まった。

「ふふふ……切り札は、最後までとっておきませんとね」

決着。機械浜に４人の戦士が倒れ込み、立っているのはボロボロのローブを纏った魔法使い一人。先鋒戦とは違って静かな滑り出しだった次鋒戦は、アルビレオ・イマの勝利と言う形で幕を閉じる事となった。

紅き翼、１勝。

「まぁ、“変身”はあなた達だけの専売特許ではないという事ですね」

再び微笑を浮かべてカードをしまい、アルは一言そう言い放つのだった。

第十三章　3、次鋒戦（後書き）

また長くてすみません

第十三章　4、副将戦

次鋒戦が終り、リュウ達サイド。

「悪いね……負けちまったよ」

かろうじて気絶から復帰し、互いに肩を支えながら戻ってきた４人。代表するように、リンがそう口を開いた。他二人の男も含めて、詠春戦のようにはいかなかった事に意気消沈気味だ。

「お疲れ様でした。まぁドンマイですよ。気を落とさないで下さい」

迎えたリュウが素直な感想で、彼らの健闘を称える。しかしリン達の顔は晴れない。彼女らの気落ちっぷりは、見事にアルの手の上で踊らされた事の悔しさから来ているのは明らかだ。マスターの予想外の機能のおかげであれだけ粘れたが、本来ならセブンスセンスを封じられた時点で、全く良い所無く負けの筈だったのだ。

「いやホント……あの兄さんイイ性格してるよ」

悔し紛れに呟くステン。敗因はいくつか思い当たるが、あのアルの余裕を結局最後まで崩せなかった事が何より口惜しい。自分の行動を顧みて、「あの時ああしていれば」という後悔が至る所に顔を出す。

「あそこまで追い詰められたんだから、凄い成長具合だと思いますよ。きっとリベンジの機会もその内あるでしょうし……」

「……そう言ってくれると救われるな」

確かに負けたが過程はどうあれ健闘は健闘である。出力低下で喋る事も億劫なマスターはさておき、例によって体力的に弱りまくっているランド達に薬草を使ってもらい、最低限には回復を図る。

「しかし、これでこちらの弱点は全て露呈してしまったな」

「うーん、そうなんですよね……」

困った風なガーランドの呟きに、リュウは顎に手を当てて応えた。その事はリュウ達にとって緊急命題だ。残る紅き翼はゼクトとナギである。ここまでくれば十中八九、ゼクトが副将でナギが大将だろう。

「まぁ実際ナギだけは確実に大将だろうな」という無駄に確信めいた前提の上でリュウ達はチーム分けしていたりするのだが、そうすると自動的に次の相手はゼクトという事になる。もちろん彼もアルと同様に甘くは無い。つまりもう、セブンスセンスは実質封じられたに等しい。もしもナギが相手だったら、喜んで発動するまで待つだろうが。

「……“アレ”でいきましょう。形振り構っていられませんし」

「やはりそれしかないか」

「は、愉快だねぇ……」

何かを決断したように呟くリュウの声に反応し、ざっと前に出た4人。

なんちゃってニヒル虎人・レイ
G嫌い狐軍人・アースラ
ストイック鰐男・ガーランド
孤高の犬侍・サイアス

この面子が炎の吐息の副将である。

「些か反則の様な気もするがな……」

「別にルール違反じゃないですし」

「その通りだ。どこにもおかしい所はないぞ」

若干渋るガーランドにリュウとアースラが追い打ちをかける。セブンスセンスを使わなければ、ナギ達に通用しないのは最早バレている。だから、使わないという事は勝利を諦める事と同義だ。ではどうするか。リュウ達にはこんな時の為に一つ、ある意味乱暴な腹案があった。

「……さて。それはそうとボッシュ君？」

「お、おう……なんでぇ相棒……」

４人がそれぞれとある「準備」に入った事を確認した後、リュウは目の笑っていないにこやかな笑顔を浮かべ、改まって相棒に話題を振った。タラリと汗を一滴垂らしながら、何用か瞬時に察するボッシュである。

「お前ちょっと後で屋上な。議題はマスターについて」

「……俺っちだけってなぁ、幾らなんでも不公平じゃねぇの？」

「モモさんはお疲れだからいーんだよ」

「ひでぇ。そりゃ差別だぜ相棒」

「黙らっしゃい」

「自分に内緒でマスターにあんなよくわからない機能を大量に乗せていたのか。全部話してくれてれば、もっと色々やりようはあったんだぞコルァ」と、リュウはボッシュを“平和的”に糾弾する気満々である。

「まぁ搭載した機能は滞りなくその力を発揮出来てたから満足だし、そのくらいは甘んじて受けるか」とボッシュは半分諦めたとか何とか。

そんな炎の吐息の副将４人が戦闘の準備を整えている頃――――

「いやぁ実際に相手にしてみるとなかなかどうして、手強かったですねぇ」

「……うむ」

紅き翼陣営に戻ってきたアルは開口一番そう告げて、仲間に勝利を報告した。結果として特に酷い怪我を負った訳ではないが、纏っているローブは大分ボロボロになっている。迎えたゼクトはアルの確かな勝利にしっかりと頷き、引き換えナギはあまり機嫌が良ろし

くない。

「？　おやナギ、どうかしましたか？」

「いや確かに勝ちは勝ちだけどよ……」

力に力でぶつかって、完膚なきまでに勝ってこそ勝利。そんな若干脳みそ筋肉的な思考がナギにはある。だから、相手のスタミナ切れまで粘ったアルの勝ち方に不満があった。

「ナギ、相手の弱点を突くのは戦法として正しいと思いますが……」

「そりゃそうだけど……何か納得いかねぇ」

「……まぁ、私がそうしなければならない程に相手の力が厄介な物だった、ということで」

もしマスターの迎撃システムがない状態で、セブンスセンスを発動したリン達を相手にしたとしたら、ナギの希望するガチンコの勝負になっていただろう事は想像に難くない。マスターの存在は色々とダークホースであったのだ。勿論両チームにとって。

「……んー……まぁ……いーか。誰かみてーに負けたわけじゃあねーしな」

「ぬぐ……」

しゃがみ込んだままサクッと言葉のナイフが突き刺さったのは、アルが勝ったせいで肩身の狭い神鳴流剣士である。

「よしじゃー次だ。お師匠はアルみてーなヒキョーな真似すんなよ！」

勝つ事前提で、さらにその“勝ち方”に注文を付けるナギ。この自分の師匠たる少年姿の老魔法使いが負けるとは微塵も思っていない。

「時と場合によるわ。本当の殺し合いを想定すると、そんな悠長な事は言っておれん。隙あらば殺らせてもらうぞ」

「……」

あの変身技は出すのに時間が掛かるだろうから、そんな隙を見せた時が最後だと、彼は言っていた。ゼクトの言い分は正しい。ナギは一応理解してはいたが、その顔にはあと一押しでその文句が飛び出そうなくらいの不満が溜まっていた。我慢できずに「それは駄目だ。あいつ等が変身しようとしたらするまで待て！」とむちゃくちゃな要望を自分の師匠に押し付けようとして――――

突如、リュウ達陣営の方から４つの光の柱が立ち昇った。

「！？」

「あの光はまさか……」

紛れも無く、前に二度見たあの変身技の光だった。まだ戦いが始まっていないのに使うとはどういうつもりなのかとナギは考え、そしてすぐにその意図がわかった。

「……お師匠」

「……なるほどそう来たか。彼奴らは小細工無しの勝負を望みのようじゃな」

セブンスセンスの先制発動。

リュウ達の腹案はこれだった。罠や設置型の魔法等とは違って変身技なのだから、バトルの始まる前に使っても何も問題は無い筈。戦っている最中に使う事ができないのなら、最初からその姿になっておけばいいという単純な発想。代償として、持続時間約１５分で勝負を決めると言う短期決戦を、リュウ達は選択したのだ。

ゼクトは、今しがた口に出した言葉を撤回する事に決めた。殺し合い等ではなく、正々堂々の勝負としてぶつかり合う事に決めた。ある意味潔いと言えるリュウ達の姿勢に、敬意を表す事にした。それはリュウ達にとって願ってもない事だった。余計な事を考えず、素直に勝負を楽しめるな、と、そうゼクトは確信した。

「全く正直な連中じゃ。まぁそれならそれで良い。存分に暴れるとするかの」

「お師匠！　叩きのめして2連勝だぜ！」

ナギの声援を受けてぐるぐると小さな肩を回しながら、愉快そうに二ィと笑うゼクトが出陣する。

「……」

ちなみに詠春は、がくりと落ち込んだままだった。

三試合目

ゼクト　ｖｓ　レイ、アースラ、サイアス、ガーランド

三度、二つのチームの間に戦士達が集まった。既にセブンスセンスが発動しているせいで、その対立の構図は凄まじいものとなっている。

ガーランドは主武器の槍に加え、銀色に輝く鎧を装着している。総合的な強さを求めた結果、自分には防御に関する技術が足りないと悟った彼に、鎧という形で潜在能力が応えたのだ。巨体に銀の鎧が眩しく輝いている。

レイは、虎そのものになっていた。『ワータイガー』、元々持っていた変身能力だ。そしてこれには理性を失うという欠点があったが、今の彼はそれを完璧に制御していた。セブンスセンスに目覚めた事で、１２０％その戦闘力を引き出す事が出来るようになったのだ。

アースラは、見た目にも武器にも変化は無い。リンの様にどこかに特別な装備があるわけでもない。彼女自身は、オーラを纏っただけである。しかし彼女の後ろに、奇妙な光の玉が付いてきている。数は二つ。それはアースラの後ろを、まるで彼女の通った軌跡をなぞるように動いていた。

異彩を放つのはサイアスだ。彼はオーラすら纏っていない。最低限、申し訳程度には身体強化が成されているが、それまでの普段の姿と何一つ変わっていない。葉っぱを咥え、静かに空を仰ぐ様は時が止まったかのようだ。本当にセブンスセンスを使っているのかどうかすら怪しい風体だった。

そんな強烈な印象と威圧感を放つ４人に対して、紅き翼側に立っているのはちょこんと子供の容姿のゼクト一人。もちろんそんな威圧なぞどこ吹く風、意にも介していない様子のゼクトである。が、もし何も知らない人がこの場を見たら、どう考えても陰惨なイジメだとしか映らないだろう。

「流石はリュウが見込んだ連中じゃの。まさかワシらに正面から挑んでこれる連中が居るとは思わんかったわ」

「ああ？　何だお前やけに上から目線だな。そういう過信は身を滅ぼすって相場が決まってんだぜ？」

皮肉の中にも自嘲が混じり、ワータイガーの姿で悠々と言葉を話すレイ。二本足で立つ虎の化物が、ズゥンと音に聞こえるような迫力を伴って目下の子供に何かを言う様は、今まさに取って食おうとしているかのようである。

「……過信かどうかは拳を交えればすぐにわかるわ。それと、ワシはこう見えてお主よりはるかに長生きしとる。口の利き方に気をつけろ」

「はぁ？　嘘付けよどう見てもガキじゃねぇか。わざとらしく時代掛かった喋り方しやがってよ」

「……」

何気にガキと言われて、ゼクトはカチンと来たらしい。売り言葉に買い言葉で舐められるのが嫌いなレイによる言葉の応酬。ジリジリと場に闘いの空気が形成されていく。

「……まぁ良いわ。その減らず口、今に叩けぬようにしてやる」

「愉快だねぇ……やれるもんならやってみやがれ」

「言うたな……その言葉、後悔させてくれる！」

言うやグッと両手に力を込めて構えるゼクト。同じタイミングでそれぞれの武器を手に体勢を作る４人。

両者の間に、合図はいらなかった。

まず先手を取ったのはゼクト。詠春が破れ、アルを苦戦させたチームの４人、さらにそのど真ん中に狙いを定めて自ら飛び、突っ込んでいく。既に臨戦態勢だったレイ達は、遅れる事無く俊敏な反応を見せた。

「おおおおっ！」

「ぬああっ！」

レイ、ガーランドが応戦。アースラ、サイアスは後ろに距離を取って様子見の姿勢。左からレイの爪、右からガーランドの槍が、二人の目の前まで来ていたゼクトを横一文字に薙いだ。しかし、手応えがない。薙いだ対象は残像だったと一瞬遅れで気付く二人。

「甘いわ」

「うごっ！？」

踏みつけるように、跳ねていたゼクトの蹴りがレイの顔面を射抜く。さらにその勢いを利用し、反対側のガーランドへと向かう。今度ははずさん。そうガーランドは心に決め、向かってくる小さな対象目掛けて無数の刺突を繰り出した。巨体に似合わない華麗な槍捌き。幾重にも連なる散弾銃のような突きが、ゼクトを襲う。

「ずあああああっ！！」

「ぬぅ……っ！」

ガーランドの槍を、ゼクトは避けていた。上下左右の動きだけで避けられそうな物は避け、当たりそうなものは魔力を指先に集中させて、最小限の動きで切っ先の軌道を僅かに逸らす。避け方は完璧に近いものだったが、それ故に距離を詰めようとした勢いは完全に殺がれていた。

「てめぇ俺を踏み台にしやがったなぁ！」

「！」

顔を蹴られて激昂した虎が、動きを止めたゼクトを背後から強襲。刺突が止み、今度はレイの暴力が文字通りに牙を剥いた。野性に任せて乱暴に振るわれる爪と牙。小柄なゼクトは触れるだけで引き裂かれてしまいそうな程の迫力。だがゼクトは、それを正確に紙一重で避ける。そしてすぐに反撃。身を屈めて爪を避け、大地を踏みしめた反動で空いた腹を目掛け、体ごとぶつかるように魔力を込めたブローを叩き込む。

「ぐっ！？」

「！　……ふむ、腐っても虎か」

分厚いゴムで出来たタイヤを殴ったような感触が、ゼクトの拳に残った。柔軟なワータイガーの体は、衝撃に強かった。強烈なパンチではあったが、レイはひるまない。ギロッと獣の目が獲物を捕え、再び爪が振るわれる。ゼクトは尚も避けながら、即座に呪文の詠唱を始めた。攻めて来ない他二人にも注意を向けつつ、狙って振るわれた爪を避け様に、距離を取るべくレイの背後へ進み出る。

「かぁぁぁっ！！」

「！！」

その一瞬を見逃さず、レイの脇を掠めるようにガーランドの会心撃が放たれた。刺突を止めた時点で力を溜め始めていたのだ。ゼクトの背に狙いを定め、闘気の竜巻が襲い掛かる。

「何のっ！」

しかしそれもゼクトは振り向き様に受け止め、弾いた。手に魔力を集中させ、竜巻そのものの軌道を逸らす。先程の槍に対して行っていた防御の応用だ。対象が大きかろうと彼にとってさしたる問題ではない。大技を放って隙を晒したガーランドにターゲットを変更し、反転するように虚空瞬動で瞬時に間合いを詰め、鎧の上から強烈な蹴りを見舞う。

「！　……こっちは堅いのぅ」

「そう簡単にやられはせん」

ガキンと音を立て、ガーランドの鎧は蹴りを通さない。それなりに気の入った攻撃でないと通用しない。そう分析したゼクトの真後ろから再び迫るレイ。振り下ろされる爪を読んでいたかのように、ゼクトは難なく横へと回避。完全な2対1にも関わらず、ゼクトは真っ向勝負を選んでいた。

「……ちっ」

「……」

アースラとサイアスは手を出せないでいた。持ち前のセブンスセンスの力の関係上、敵と味方が入り乱れていると味方も巻き添えにしてしまうからだ。その事はレイやガーランドも頭の片隅で理解していた。理解してはいたが、中々アースラ達の力を発揮する機会を作れないでいた。

（……ふん、見え見えじゃ）

ゼクトは、アースラとサイアスの動向にもしっかりと気を配っていた。あの二人が最初に距離を取ったのは、つまり接近戦が得意ではないからだろうと読んでいた。その通り、二人は戦闘に参加してこない。これだけ密着していれば、外からは容易に攻撃できはしまい。冷静に4人の役割を見極めたゼクトであった。

「【奈落の業火！】」

「！！」

いきなり放たれたゼクトの魔法、レイと真正面から応戦しながら呪文を紡ぎ、その掌から業火が迸る。慌てて身を屈め、やり過ごす

レイ。反応があと一瞬遅かったなら、間違いなく黒焦げになっていただろう。

「【雷の暴風！】」

「！？　なにっ！？」

さらに雷の魔法を背後に放つ。ゼクトはチラリとさえ振り返っていない。だがその掌の先は、確実にガーランドを捕えていた。巨体を雷が掠める。威力に吹き飛ぶガーランド。だがダメージ自体はほとんどない。ガーランドの鎧は物理防御に加え、耐魔法防御力にも優れているのだ。

「【氷る大地！】」

「くぁっ！？　足が……！？」

続けざまに氷の魔法が放たれ、大地が広範囲に凍りつく。ゼクトの力は凄まじかった。的確に詠唱を完成させ、多くの属性魔法を手足の様に操り、２対１を物ともしていない。流石にナギの師をしているだけはある。これはやはり全員で掛かるべしとレイとガーランドは判断。凍り付いて地に根付いた足を強引に引っぺがし、二人揃ってゼクトから距離を取った。

「……！」

「今だ……展開ッ！」

やや強引に思えたが、アースラはチャンスを逃すまいと背後に伴う二つの光の固まりを解き放つ。光の球はアースラを頂点に、ゼク

トの右背後と左背後を囲んで三角形を形成。

「喰らえ！」

「ぬ！？」

手に持つ散弾銃からは気を纏った散弾が。さらにその二つの光の塊からも、ほぼ同種の気の散弾がゼクト目掛けて放たれている。これがアースラのセブンスセンス。一人でオールレンジ攻撃を可能とする光の玉、“オプション”の発現。自由度が高く、彼女の少し固い頭に反比例するように応用性の利く力だった。

「ちぃっ！」

三方向からの平面攻撃。散弾である為に範囲が広い。3次元的に避けるしかないと分析したゼクトは即座に上へと跳ぶ。

「行ったぞ！」

「……斬る」

上空に逃れたゼクトに狙いを定め、サイアスが腰の刀に手をかける。刹那、ヒゥンと何かの音がした。

「ぐっ！？」

（な、何じゃ……！？）

音がした瞬間、上空にいるゼクトの頬が斬りつけられた。赤い血が空に舞う。

サイアスのセブンスセンス。背水の陣の覚悟を持って防御を捨て、全ての力を攻撃に回し、その斬撃は光さえ捉える。

言うなれば『斬光剣』。

自らは動かず、力を溜めこまなければならない居合いの要である“間合い”を超越した形。刀が振られた瞬間に、どんな距離に居ようと相手は斬られる。その性能は非情に尖った物だった。欠点は狙いが目に見えていなければならない事と、連射が不可能な点だ。

無論サイアスは侍ゆえ、ゼノのような近距離での応戦も出来る。だが、そもそもスタイルの違いからか、サイアスの真の力はこのような静かなものであった。存分にその威力を発揮できるのは、近距離武器であるにも関わらず、実は遠距離なのである。

（く……少々見誤ったか）

ゼクトは自分の見立てを誤ったと悟った。様子見の二人は放置ではなく、先に潰すべきだったのだと。だが既に今更な話だ。戦闘中にそんな事を考えている余裕は――――普段ならあるだろうが、今のこいつらを相手には、ない。

「よそ見たぁ余裕じゃねぇか！」

「ぬ！？」

虎が空を駆け、空中のゼクトへと迫る。その手には野生のオーラを纏っている。レイにも固有技は幾つかある。これから放つのはその一つ、リュウの爪の二連撃タルナーダを参考に、爪にオーラを集中させた連撃。

「うるあぁぁぁ！！」

「うぬっ！？」

バーサーカーバレッジ。単純に爪を振り回しているだけに見える攻撃だが、爪の軌跡が3本の衝撃波となって空気を引き裂き、見た目よりもずっと威力を及ぼす範囲が広い。先程までの動きに慣れていたゼクトは紙一重でかわしてしまい、衝撃で服や肌が切り裂かれ、血塗れになっていく。レイの地上戦での単調な攻めは、これを狙っての物だった。

「おのれ、小賢しい！」

吼えるゼクトの周囲に浮かぶ、無詠唱の魔法の射手。数百の矢がレイに狙いを定め、そして撃ちだされていく。しかし、レイは全てを見切って避けていた。ワータイガーの動体視力とヒトには不可能な挙動の連続虚空瞬動。浮遊魔法を使えずとも、空中での機動力は半端ではない。

「かぁぁぁぁっ！」

「！！」

さらに、後を追うように空へと追随してきたガーランドの闘気の竜巻が下方からゼクトを狙う。だがこれは既に一度見た技。ゼクト程の熟練が、そう簡単に同じ技を喰らう訳も無い。あっさりとその直進しかしない渦を回避。

「その技は既に見切ったわ！」

「グフフ……そうか。ならばもう一つの渦をくれてやろう！」

「なに！？」

槍を背中に戻し、ガーランドは闘気を放っていない方の腕にも気を集中させる。そして放たれるもう一つの渦。

「ぬぅんっ！」

「！　これは……！？」

最初に放たれた渦と、後に放った渦。両者の回転方向は同じ。そして、後から放たれた方はゼクトが避けた先に向けて放たれている。では、もしこの二つの渦の間に挟まれたらどうなるか。ゼクトはすぐに察した。しかし、時既に遅し。

「いかん……っ！」

「激烈掌！！」

ガーランドが二つの竜巻を放つ掌を交差させると、それぞれの渦は挟み込むようにゼクトを捕えた。片方は上から下へ、もう片方は下から上へ。挟まれた時の接合面に流れる方向は、全くの逆。強烈な二つの渦に巻き込まれ、ゼクトは全身が捩じ切れてしまいそうになる。

「うぐううっ！？」

「今だ！」

さらには地上に居るアースラのオプションが空中にまで展開。そこから放たれるのは力の分散した散弾ではなく、オプションと同サイズの気弾。弾幕さながらの一点集中連射がゼクトへと命中していく。

「……っ！」

「!?」

駄目押し気味にサイアスの斬光剣が放たれ、距離を超越した斬撃がゼクトを襲う。防御している左腕に当たり、激しく出血。

「とどめだ喰らえ!!」

いつの間にかゼクトの真後ろに陣取ったレイが吼えた。“虎砲”、口から咆哮と共に気弾を発射するフーレン族の十八番だ。勿論威力はセブンスセンスのおかげで大砲を優に超すレベル。

全員の技の直撃により、空中に大きな爆炎が広がった。各々の位置から油断なくその中心を見やるレイ達。直後、炎の中から何かが高速で飛び出した。

「!?　おっさん避けろ!」

「……遅いわ」

爆風を突きぬけて、オーラを纏ったゼクトがガーランドへ急襲。そのまま巨大な魔力を込めた拳を、鎧の上から叩きつけた。構えていたガーランドはしかし、その拳を避けられなかった。

「がは……っ！？」

「……どうやら、ワシの拳の方が堅かったようじゃな」

大きく腹を覆う鎧は、砕けていた。ガーランドの口から血が吐き出される。ゼクトの魔力を込めた一撃は、ガーランドのセブンスセンスによって生み出された鎧の強度を上回っていた。

だがそこで、レイ達はゼクトの様子に気付いた。左腕から流れる血の量が酷く、ダラリと降ろされ真っ赤に染まっている。最早あの左腕では、パンチを打つ事は出来ないだろうと一目でわかる。技の直撃は確実にゼクトにダメージを与えていた。

「愉快だねぇこのガキ！」

虎が、空を蹴って手負いの少年へと襲い掛かる。牙を剥き出しに闘争本能のまま襲いくる密林の王者。その迫力だけで、常人なら恐怖のあまり気絶している所だ。

「抜かせ若造が！」

それに対してゼクトは真っ向からの殴り合いを選択。空中を駆け巡りながら、虎と子供が格闘戦を繰り広げる。両者はほとんど密着している為に他の者は手を出せない。威力は二人とも凶暴の一言。しかし、ここで技量の差が出た。

片腕が戦力にならずとも、ならばそれは攻撃を避ける盾に使う。レイがゼクトを引き裂こうと爪を振り下ろす。ゼクトはそれを、血だらけの左腕でトンと柔らかに押やって軌道を逸らして回避、その

まま空いた顔面に右拳を叩き込む。年季の違い。レイの攻撃ターンは転じてゼクトの攻撃ターンとなる。荒削りなレイの技は、老練なゼクトには及ばなかった。

「うがぁっ！？」

「１００年早いわ！」

幾多の攻防の末、小さいけれど強烈な拳が数度顔面を捕え、レイは仰け反ったまま大きく吹き飛ばされた。拳に付いた血をペロリと舐めながら、ゼクトは競り勝った事に僅かに気を良くする。もちろんこのまま終わるレイではない。セブンスセンスに目覚めたレイのもう一つの力、“ヒーリングファクター”が即座にダメージを回復させていく。常時発動している強化された回復能力だ。

「そこまでだ！」

「！」

いつの間にか、アースラが空を蹴ってゼクトの目前まで迫っていた。どういう意図か、後衛に徹していた彼女が進んで前に出てきたのだ。両手に気を纏わせた二丁の銃を携え、ゼクトの左右には展開するオプション。さらに……

「ウェイブス・レイブス・ブレイブス！【来れ　深淵の闇、燃え盛る大剣、闇と影と憎悪と破壊……】」

「！　ほう、器用な真似を……」

銃撃、銃撃、銃撃、魔法。一人で４つの仕事を同時にこなす器用

さ。空中に佇むゼクトへ向けて、アースラの全力が迫る。

「……じゃが、魔法でワシに挑もうとは笑止千万！」

即座に、ゼクトも呪文詠唱を開始した。先に詠唱を開始したアースラと、後から始めたゼクトの詠唱。完成するのは同時だった。

「【奈落の業火！】」

「【最強防護！】」

ゼクトの左右に正面から無数の銃撃、そして炎の魔法が全てを飲み込む。全く同時にヴォンとゼクトの周囲を幾重もの魔法陣が覆う。強固な魔法障壁が展開され、アースラの魔法と銃撃に抗っていく。

「やったか！？」

完璧な一人同時攻撃。避けられてはいない。当たる直前に障壁が見えたが、この密度での攻撃ならば恐らく突破している筈。アースラはそう考えたが、その予想は甘すぎた。

「残念じゃったな。【雷の暴風！】」

「なっ！？」

ゼクトの最強防護を、アースラは貫けなかった。ぶわっと爆風が晴れた先、目の前に居るアースラ目掛け、ゼクトの魔法が放たれる。真正面からの直撃コースだ。誰の目にもやられた、と思われた瞬間、しかし雷の暴風の軌道が大きく逸れた。それはアースラ自身では無くその片腕を巻き込みながら、彼方へと飛んで行く。

「ぐっ……！！」

「ちっ……あやつか……」

「……」

腕を抑えてその場から離脱するアースラ。逸れた原因は、遠方からのサイアスの斬光剣。魔法を放ったゼクトの腕を、斬撃は狙った。瞬間的に気配を察したゼクトが腕を引っ込めたため、放っていた雷の暴風が逸れたのだ。

「……ふん、中々良い腕をしとる」

「……」

タイミング良くアースラを救った形になったが、遠方に居るサイアスは静かに驚愕していた。今の一撃は、本来ならば片腕を斬り落としていた筈だったからだ。ゼクトは、斬光剣を既に見切り始めていた。

「……ようガキ。どうした顔色悪いぜ？」

「もう復活したか。お主こそ、その尋常でない汗はなんじゃ？」

「うるせぇよ」

片腕を下ろした状態で、二ィと不敵に笑うゼクトの前に、吹き飛ばされていた虎が姿を現した。横からの虚空瞬動で首を？っ切ろうと迫るレイを、油断なく避けるゼクト。レイ自身、体力自体はそう

簡単には行かないが、ダメージは大分回復している。

「俺を忘れてもらっては困るな！」

「鰐の方もか」

もう一人、大きく腹の部分が砕かれた鎧を纏ったガーランドが、上空から鋭く槍を振り下ろす。当然のようにひらりとかわすゼクト。アースラが前に出てきたのは、レイとガーランドの回復の為の時間稼ぎ。このわずかな間でも、ガーランドのタフネスとレイの回復力ならば十分だろうという信頼の上でのことだ。

「……」

ゼクトは、二人に叩き込んだ一撃にはそれなりに自信があった。並大抵の相手なら、確実にＫＯ出来ていた筈の攻撃だ。にも関わらずこの復活劇。流石にプライドが傷つけられた。

「上等じゃ！」

「「「！！」」」

冷静なゼクトにしては珍しく、熱くなって魔力のオーラを纏い、レイとガーランド、さらにアースラとサイアス目掛けて魔法の射手を乱れ撃つ。まるでシャワーのように降り注ぐ大量の矢の爆撃が、ゼクトの魔力の底知れなさを伺わせる。

「ケッ、可愛くねぇガキだぜ！」

「流石に手強い……っ！」

矢の隙間を縫うように迫る虎。幾つか矢の直撃を受けながらも強引に距離を詰める鰐。再び2対1での近距離戦へともつれ込む。

ゼクトは、時間切れを待つなどという戦法は選ばない。真っ向勝負。全力と全力。レイ達の潔さ（と口の悪さ）に感化され、正面から打ち破る方向に思考が傾いていた。

「ワシの名に賭けて、オヌシら全員叩き潰してくれる！」

「はっ、じゃあ俺らが勝ったら掛け金貰うぜ！」

対するレイ達4人、互いのフォローは完璧だった。レイとガーランドがゼクトに打撃を与えて吹き飛ばす、または逆に吹き飛ばされると、その瞬間を狙ってアースラとサイアスが追撃またはカットに入る。ゼクトが矛先をアースラ達に向けると、させじとレイとガーランドがそれを阻んで近距離戦に持ち込む。

一見すると互角に思えるが、本当はそうではない。レイ達には時間制限がある。これを過ぎれば負け同然なのだ。だから、形振り構わない。後の事など考えない。この15分で倒すと最初から決めてかかっている。飛ばしっ放しの状態だ。その勢いが、戦闘巧者たるゼクトに喰らい付いて離れさせないのだ。

「何としつこい連中じゃ……」

「へ……」

力の入らぬ腕で槍を、爪を避け、隙を見て高威力の打撃を叩き込む。タフネスを誇るガーランドと驚異的な回復力のレイは幾度喰ら

おうと立ち上がり、アースラとサイアスがその間の時間を稼ぐ。それでもゼクトは少しずつ傷を増やしながら、その全てに対応していた。驚異的なスタミナだ。

（やりおる……じゃが、見えてきたぞ……！）

何度目かのぶつかり合い。ゼクトはこの時、４人全員を同時に相手取るという離れ業をやってのけた。まるで後ろにも目があるかのように魔法を放ってアースラとサイアスに仕事をさせず、目の前のレイとガーランドの攻撃は的確に避けて拳や蹴りを叩き込む。恐るべきはその適応力か。

「……やらせぬ！」

「くっ！」

幾度もの接戦。互いに決め手を欠き、均衡に楔を打ち込むには至らない。しかし、ゼクトは徐々にだが確実にレイ達全員の動きを上回りだしている。まるで何か狙いがあるかのように空中を巧みに動き回る。レイ達のタイムリミットが近付く中、地上に居るサイアスとアースラにゼクトの放った魔法の射手が幾つかヒットし、運悪く転倒。さらにレイとガーランドの攻撃を避け、受け止め、二人纏めて突き落とす様にゼクトの蹴りが決まった。

「……ここしかあるまい！」

「！？」

「【我に従い、契約に従い、我に従え、炎の覇王！】」

空中から眼下を見下ろす様に浮き止まり、紡ぎ出される呪文。集う魔力から相当の大技とわかる。詠唱させてたまるか。レイとガーランドは空を蹴ろうとして、ハッと気付いた。自分達の後ろに、魔法の矢で転倒したアースラとサイアスが居る。

ゼクトは、巧みに誘導していた。気付かぬうちに、ガーランド達はゼクトから見て一直線になる様に位置を調整されていたのだ。次第に手慣れていくゼクトへの対応に手一杯だったガーランド達は、その事に気付けなかった。

「【来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に！】」

「！！」

ガーランド達に、戦慄が走る。詠唱の阻止は最早この距離では不可能。さらに集う魔力は膨大。感じられる威力の規模から、放たれれば地上は業火に包まれるだろう。そして、その場に居るサイアスとアースラは、間違いなくやられる。

「あいつ纏めて決める気だ！」

「……かわせんか！」

「喰らえ……【燃える天空！】」

ゼクトの炎系広域魔法。灼熱を閉じ込めた熱線が、問答無用で放たれた。レイ達は悟る。どうにかしなければ地上に居る二人が。レイよりも、ガーランドの決断の方が早かった。

「……後を頼む！」

「！？　おっさん！！」

ガーランドが、魔法の前に進み出た。犠牲は一人の方が良い。二人やられるよりは希望が残る。自分を盾に、二人を助ける道を選んだ。

「ぐあああああっ！？」

高熱に身を焼かれるガーランド。魔法防御に優れた鎧とは言え、既にゼクトの攻撃で大きく砕け、またヒビ割れている。とても炎系大呪文に抗えるだけの抵抗力は無い。

「ぐ……う……」

魔法の光が消え去ると、燃え尽きた様にぐらりと空中から姿勢を崩し、真っ逆さまに地上へとガーランドは落ちていく。魔法の威力を一身に受けたガーランドは、これまでの積み重なるダメージに、とうとう限界を超えた。そのガーランドの影となる位置に居たアースラ、サイアスは無事だった。それ以外の地上は大きく抉られ、大魔法の威力を物語っている。

「おっさん！！」

――――しかし、ゼクトは容赦しない。

「ふん……【おお　地の底に眠る　死者の宮殿よ……】」

「！！　なんだとっ！？」

ゼクトは、今を好機と見て一気にカタを付けるつもりだった。勝負所を見極める目は流石の一言だ。この上でさらに大魔法など使われたら、ガーランドの犠牲が無駄になる。

「唱えさせてたまるかよ！」

「させん！」

「……っ！」

レイに加えてアースラが空を駆け、サイアスが地上で力を溜める。オプションが再びゼクトの周囲に展開。さらにここで初めてサイアスの持つ刀に膨大なオーラが滾った。

「はあああああっ！！」

「うおらあああああっ！」

銃とオプションからの一斉気弾掃射。加えてレイの爪から繰り出される無数の衝撃波が、ゼクトへと集中する。しかしぶつかったのはゼクトの手前。呪文を唱え出した段階で張られていた、ゼクトの魔法障壁。そこまでの強度があるには思えないが、詠唱の時間稼ぎには十分過ぎる。

「羅刹……」

そこへ、遅れて現れる救世主。放たれるサイアスの切り札。斬光剣のように距離を超越し、巻き起こるのは敵を斬り刻む檻。言い換えれば斬撃で構成された結界。一撃で意識を奪うに足る威力がある。

あくまで狙うは詠唱の阻止ではなく、勝利なのだ。

「……覇王剣っ！」

「！！」

気合い一閃サイアスの刀が解き放たれ、ゼクトは魔法障壁ごと、あらゆる角度から来る不可視の斬撃に刻まれた。他2人の攻撃も重なって障壁は砕け散り、ゼクト自身も斬りつけられていく。ここしかないと勝負を賭け、全力で力をぶつける3人。瞬く間にゼクトの全身が嵐のような攻撃に晒され、血塗れとなっていく。

――――だが、それでも呪文は止まらなかった。

「【冥府の石柱！】」

文字通り肉を切らせて骨を断つ。

全てをその身に受けながら、ゼクトの大魔法が放たれた。

「うおあっ！？」

「あぐっ！？」

召喚され、降り注ぐ巨大な石の柱。レイ達を襲う純粋な大質量。疲れてさえいなければ、かわす事は出来ただろう。だが直前の攻撃に集中していた事も相まって、レイが、アースラが、降ってくる石柱の直撃を受けた。サイアスも、元々防御力は紙のようなレベルで必殺の一撃を放った直後。同じく石柱を避けられず、直撃。

石柱は轟音と共に、3人を押し潰す様に大地へと落下。シュウゥ

と音を立て、何処かへと消えていく。

「……ハァ……ぐっ……しかし……手強い連中じゃったわ……」

腕を抑え足を引き摺り、傷だらけのフラフラで地上へと降り立ったゼクトの前に、４人が転がっていた。レイ、アースラ、サイアスは気を失っているのかセブンスセンスは解けている。ただ一人、ゼクトの言葉にガーランドがピクリと反応した。警戒するゼクト。しかし意識はあるようだが、四肢は動きそうに無いようだ。もう間もなく開始から１５分経つ。攻撃してくる事は無いだろうとゼクトは踏んだ。

「ぐ……くっく……これが音に聞く……“紅き翼”の力、か……全く……常軌を逸しているな……」

「……」

顔だけを動かし、喋りかけるガーランドの声を、ゼクトはただ聞いていた。まるで今まさに命尽きるようではあるが、そこまでではないとわかっている。

「主らの力は本物じゃ。ワシが保証しよう。……しかしお主のタフさには呆れるわい」

「タフか……そう俺は見ての通り、頑丈さが取り柄で……な！」

「！？」

直後、ガーランドの口から放たれる闘気の渦！　口からの会心撃、ガーランドの最後の最後の奥の手だ。ゼクトは完全に意表を突かれ

た形となった。ゴゥと砂埃を巻き上げて機械浜の彼方へと消えていく闘気の竜巻。

――――しかしそれは、ゼクトの肩を掠めるだけに終わった。

「……ふぅ。冷やりとしたわ」

「……く、無念……だ……」

ガーランドの奥の手は、今のゼクトならば相討ちに持ち込むに足る威力だった。不意を突くタイミングも完璧だった。惜しむらくは、狙いの甘さ。放たれた闘気の渦がゼクトの全身を巻き込む位置であれば、かわしきれず、どうなったかはわからない。最後の力を振り絞ったガーランドは力尽き、気絶。

「……全く……これほど疲れたのはいつ以来か……」

紅き翼、2連勝。

激戦を制したのは老獪な少年魔法使い、ゼクト。

炎の吐息1勝2敗。この時点で、勝ち越しの芽は儚く消えるのだった。

第十三章　5、大将戦

「痛っつ……クソ……あのガキ……っ」

「こりゃまた手酷くやられたもんだなぁ」

「ほら、動かないで下さい」

ナギ達紅き翼に二連敗を喫したリュウ達炎の吐息一行。現在戻ってきた傷だらけのレイやアースラに薬草を使い、ぺたぺたと絆創膏を貼ったりしている最中である。今の段階でまともに動けるのはリュウとボッシュだけなので、これから大一番を控えるリーダーなのに、看護師のような事を率先して行っている。まるで野戦病院の様な図であるのは仕方ない。

「完敗だ。全く情けない……」

「そんな事ないですって。いやホントに」

力及ばず己の無力を嘆くガーランドに、それは違うと声を掛ける。ぐるりと周りを見渡してみれば、リュウとボッシュ以外の面子は皆、大なり小なりボロボロだ。今現在のリュウ達はそんじょそこらの相手には傷一つ負わされる事のないレベルであるのだが、それをこんな風に出来るという事自体、“紅き翼”が本当にかなり“おかしい”事を端的に表していた。

「さて、と。じゃあ後は頼んだボッシュ」

「おう、しっかり面倒見とくぜ」

一通りレイ達の応急手当が済むと、後の処置を任されたボッシュはピョンとリュウの肩から飛び降り、そしてリュウは徐に立ち上がって軽い準備運動を始めた。屈伸・伸脚・深く伸脚・アキレス腱伸ばし・前後屈・腕回し・体の回旋。全国大会１００ｍ走決勝出場前の選手のように、体の各機能をほぐしながら集中力を高めていく。

「よぉ、バトンは落としちまったが、俺らの分まで頼むぜ……大将！」

「……ええ」

「リュウ、絶対勝ってよ！」

「……頑張ってきます！」

二人のフーレン族からの声援と、他全員からの信頼を受けて、彼は戦場へと向かう。しっかりとした足取りで。意志の強さを感じさせる顔つきで。炎の吐息リーダー、リュウが満を持しての出陣である。

そしてその頃紅き翼陣営では……

「やったぜお師匠！」

「当然じゃ……と言いたい所じゃがの。あやつらは、もう少し老人を労わる心を持つべきではないかの」

「ふふふ、あなたは老体には見えませんけどね」

出血多量の状態でナギ達陣営に戻ってきたゼクト。見た目瀕死に近いのに、焦らず騒がず表情一つ変えないのは性格ゆえか年の功か。実際、今のゼクトの態度には確実に強がりもあった。それだけレイ達の攻撃は激しかったのだ。

ゼクトはふうと一息つくと、自分の弟子に目をやった。傍から見ても、その弟子はこれからの自分の出番に対して異常なまでにワクワクしているのが一目でわかる。そこでゼクトは何故だかさらなる疲れに襲われた気がして、またしてもふうと溜め息をついた。

「馬鹿弟子よ。残る相手はリュウ一人。しかし、気を抜くでないぞ」

「ああ」

「私達と彼らの力の差を、強引とは言え埋める術を見つけてきた張本人ですからねぇ。リュウ自身、一体どんな裏技を身につけて来たのやら。いやいや楽しみですねぇ」

「ああ！」

「俺が言えた義理じゃないが、これだけはわかる。多分今のリュウ君は、これまでで最大最強の敵だろうな」

「ああ！！」

ナギは、仲間達の声を聞いていない。いや、聞いてはいるが、それは右から左へ抜けていた。それだけ、これからの戦いに集中していた。

ナギは思う。

全く楽しみすぎる。リュウは詠春やアルやお師匠にあれだけ喰らいついた連中の、大将を勤めている。この勝負のトリを飾るからには絶対、中途半端じゃ納得しねぇぞ、と。

「よし……じゃあ行ってくるぜ！！」

杖を手に、ローブを翻し、颯爽と突き進む赤髪の少年。向こうからやって来る青髪の少年を、しっかりとその目に捉えながら。

４試合目
ナギ・スプリングフィールド　ＶＳ　リュウ

その場に居るのは子供二人。
この構図はそれまでで一番貧相な対立と言えた。杖を持ち、ローブを着た勝気な顔の赤髪の少年と、どこにでも居そうな普通の格好をして、武器すら持っていない青髪の少年。過去3戦ド派手な勝負を仕出かした両チームの大将にしては、迫力という点が大きく不足しているように思えた。

「よぉリュウ。このオレに一対一って事ぁ、それなりに出来るようになったって事だよな？」

腕を組み、見下ろすように不適な顔で挑発するナギ。ここで正直に「はいそうです」とリュウは答えない事くらい、そこそこ長い付き合いのおかげでわかった上での質問だ。

「多分ね」

「……相変わらずハッキリしねーな。何なら、待ってやってもいいぜ？　あのドラゴなんたらになるまで」

「あーいや、その必要は多分ないから」

「……」

リュウは、あの姿にならなくても自分の相手は務まると言っている。今日久しぶりに会ったときから気になっていたが、リュウのこの自信の根拠は何だろうか。タダの勘だが、コイツに関してはあの変身技だけとはどうしても思えない。

ナギは、知りたくなった。もうこれ以上、余計な事を言うつもりも、余裕もない。一刻も早く戦いたい。それだけだ。

「さて、じゃあ……覚悟は出来たかよ？」

「覚悟って……何の？」

「へ、勿論……お仲間の面前で、このオレにボッコボコにされる覚悟だ！」

「……ならそのセリフ、そっくり返す！」

言葉の応酬もそこそこに両者の気合が一気に解放され、それを合図に二人とも全くの同時に後ろへ距離を取った。相手の出方を見る、と言う消極的な選択ではなく、単純にこれから自分が放つ力に、自分が巻き添えにならないためだ。

「まずは小手調べだ！」

リュウの位置から、距離を取ったナギが呪文を唱える姿が見えた。一応あんちょこを見なくとも、あれくらいは唱えられるようになったらしい。それにしても相変わらずのバカみたいな魔力が、ナギの拳に集中していくのがリュウにはわかった。

「あれで小手調べって……」

どう見ても決め技レベル。初っ端から大技だ。そんな規模の魔力を感じさせるナギに早速呆れながら、リュウも呪文を唱え出した。小手調べと言うからには避ける気は無い。魔法と魔法のぶつかり合いをするつもりだ。だが修行したとはいえ、リュウにはナギ程の馬鹿魔力はない。普通に放てば、１０割押し負けるだろう。

「ソル・ファル・リ・エータ・リギエンダ、【来たれ氷精、闇の精……】」

リュウの口からスラスラと何も見ずに紡ぎ出される詠唱。この日の為に舌を何度も噛みながら、早口言葉で無理やり鍛えた努力の賜物だ。そして呪文を唱えながら、ヴン、とリュウの背後に薄く蒼い残像のような物が発生していた。

「【雷の暴風！】」

「【闇の吹雪！】」

ドンとナギの拳から放たれる閃光。膨大な魔力を惜しげも無く投入された、ゼクトの物より数段太くて巨大な雷光線。それに対してリュウが放った黒い光線も、何と全く見劣りしない大きさだった。

「！？」

「っ！」

ぶつかる二色の光線は両者の中間で激しくせめぎ合い、力の拮抗を見せている。天秤はどちらに傾く事も無く、互角。……全くの互角。行き場を失った互いの魔力はその場に留まり続け、ついに耐えられず大きな爆発を呼び起こした。最終戦の開始を告げる合図と呼ぶには、少々過ぎた爆音だった。

「……何かやってやがんなリュウの野郎……」

立ち込める爆風を睨みながら、心底楽しそうにナギは呟いた。ナギとて、リュウの魔力が自分に届かない事くらいわかっている。にも関わらず、自分の魔法を魔法で相殺した。あの変身技を使った風にも見えないし、ドラゴなんたらになった気配も無い。つまり、何か全く別の技術で、あれだけの威力を出しているのだと推察した。

「そんじゃ次は俺の番ってね！」

「！」

爆風が晴れると、リュウは馬鹿正直にそう宣言した。リュウは、ナギにペースを掴ませる前に、速攻で勝負を決めるつもりだった。その為の奇襲策も、考えてある。

そして次の瞬間、リュウの姿がナギの前から消えた。

「っ！？」

気配も何も感じさせず、リュウが出現したのはナギの真後ろ。肩

口にポンと手を置かれ、驚愕したナギが振り向くよりも早く。

――――閃光が、辺りを支配した。

「!?」

「な、何だ!?」

遠方のゼクトや詠春の目さえ眩ませるほどの閃光。

超大規模なカメラのフラッシュのような光量が、機械浜一帯を埋め尽くした。

“滅殺”。

刹那の間に無数の打撃を叩き込み、敵を粉砕するドヴァーを象徴する技である。リュウが苦労してドヴァーから盗んだ技の一つであり、本来は別の名が付いているらしいのだが、リュウはただ“滅殺”とだけ呼ぶ事にしていた。特筆すべきはシャドウウォークによる短距離ワープとこの“滅殺”を組み合わせた事にある。知覚されずに間合いに飛び込み、問答無用で叩き潰す。非常に極悪な連携技だが、ナギ相手ならばこれでもやり過ぎという事はないのだ。

（……手応えあり！）

リュウの拳に、確実に全弾決まった感触があった。ドヴァーの様に無数、と言う訳ではなく、刹那の間に出せる打撃の数は精々１５発が限界。だが、決まった。当たれば当然一撃必殺の威力だ。それこそあの時、刹那の間に倒れ伏したカーンのように。思わず決め台詞として「我、拳極めたり！」などと口走ってしまいそうになる。

そしてコンマ何秒かの時を経て……リュウの頬を、強烈な痛みが襲った。

……殴られたのだ。

「!?」

「……何だリュウ、間抜けヅラ晒してボーっとしてんじゃねーぞ」

閃光が収まった後、そこに倒れたナギの姿はなかった。ぶっ飛ばされたリュウだが体勢を立て直し、殴られて切った唇を拭いながら、ズザっとしっかり地に足を付けて、ナギへと目を向ける。

「……!」

ナギは無傷だった。

リュウの顔面を殴った手をプラプラさせて、ニヤリと不敵に笑っている。解せない。いくらナギとは言え、初見のこの技をまともに喰らって尚且つ無傷で済むとは、リュウにはとても思えなかった。

「危なかったぜ。まさか本当にアレを使ってくるとはよ。前に一度見てなきゃ、やられてたな」

「! ……一度、見た?」

「おう。今の技、フォウルのヤツが一回だけ見せてくれたんだよ。“見ておいて損はない”とか何とか言って珍しく自分からな」

「……」

リュウは歯軋りした。心の中で、あの銀髪の古龍に恨み節を吐いた。リュウ達がドヴァーの元へ行くと言う事をあの狛犬二頭が話してフォウルが知り、気が向いたか何かでその得意技を披露して見せ

た、といった所か。

拳の手応えは、リュウの放った刹那の打撃に全く同じ打撃を打ちこんでの相殺だったのだ。まさかドヴァーの技をフォウルが模倣できるとは思いもしなかったが、それにしても一度見ただけで破れるナギのあり得ない戦闘センスは大概である。

「一気に勝負を付けたい所だったみてーだが……残念だったな？」

「……別に？」

してやったりな得意顔で話しかけるナギにムッとして、リュウはぶっきらぼうに返した。この辺り、精神年齢の割にリュウは見た目の年相応に気が短い。

「まぁ今ので終りってー訳じゃねぇだろ？」

「当然」

「だよな。じゃ、小手調べはこれくらいにして……ガチで行くとするぜ！」

「いいですとも！」

ナギは魔力のオーラを滾らせ、リュウは龍の力のオーラを纏い、両者ロケットの如く加速しての衝突。その余波で足元の地面が大きく陥没したのは言うまでも無い。直前の会話だけを拾ってみれば、仲の良い少年二人が対戦ゲームでもするかのような、微笑ましい光景と受け取れない事も無い。しかしてその実態は、軍の最高権力者も舌を巻くほどのガッチガチな格闘バトル。遠慮の欠片もなくぶつ

かり合う赤い髪と青い髪の少年同士が、殴り殴られ蹴り蹴られ、熾烈な肉弾戦を繰り広げていた。

「くぉのっ！」

「舐めんな！」

振り抜いた拳圧が大地を抉り、受け止めた蹴りの衝撃が後方の空気を射抜く。とても少年同士が行うレベルの戦闘ではない。次第に速度を上げていくそれは、最早常人の目には映らない速さに達していた。瞬く間に大地の陥没箇所が増えていく。離れている筈の炎の吐息陣営、紅き翼陣営にまで、その衝撃は届いていた。

「……アルに詠春、気付いておるか？」

「……ええ。あのリュウの上達ぶり、一か月前とはまるで別人です」

「信じられん。本当にあれがあのリュウ君なのか……？」

紅き翼陣営は、ナギと互角に殴り合っているリュウを見て、全員そんな驚きに満ちた感想を抱いていた。驚くべきはリュウの戦闘力の向上度合い。見た所身体強化も使わずに、素の状態でナギと渡り合っている。

ゼクトと詠春の二人は、この数ヶ月の単独修行期間の経過についてはアルから聞いていた。その時点では、決してここまで強さではなかった筈だ。なのに、その後たった一ヶ月ばかり修行しただけで、これほど地力が上がると言うのだろうか。成長度だけで見れば、ナギさえ越えている。リュウに関して、これほど成長が早くはなかったと、各々の記憶が解答を寄こしていた。

「やるじゃねぇか！　どんな裏技使いやがったんだ！」

「……さぁてね！」

殴り合いながらも会話する余裕のあるリュウとナギ。ナギはここに来て確信していた。リュウの自信の根拠はこれだと。どうやったかは知らないが、リュウは変身などせずとも、自分と大差ないレベルにまで到達している。

……ハッキリ言って気になる。気にはなるが、こうまで自分に付いて来れるレベルになった事が嬉しくて、どうやったかなんて割とどうでも良くなっていた。

「……」

リュウの成長の秘密、それはあのドヴァーへの弟子入りの際の戦いにあった。

リュウの体は修行した分、ドラゴナイズドフォームにもその影響はフィードバックされる。

それはつまり、逆も然り。

変身した状態でドヴァーと長い時間戦ったせいで、その経験が素の方にもダイレクトに反映されたのだ。それがこの急成長の原因だった。そしてそれは、素のリュウとドラゴナイズドフォームがより“近く”なった事の証明であるとも言えた。この事は他の面において少なくない影響をリュウに及ぼしていたが、ただ素の状態での戦いという面においては、“近く”なった事はプラスに働いていた。

「このやろっ……！」

格闘勝負は互角。お互い全力投球しているにも関わらず、息一つ乱れていない。突き出した全力の拳と拳がぶつかり合い、バチバチと火花を散らせて威力を殺しきれず、ナギとリュウは互いに吹き飛んだ。当然のように両者クルッと空中で姿勢を戻し、地面に着地して睨みあい。格闘戦のままでは決め手に欠くと二人とも察したのか、今度はそのまま動きを止めていた。

リュウは基本的に相手の出方に合わせる方が得意。対してナギは最初から自分のペースを貫くタイプである。よって、次に動くのも、やはりナギであった。

「……へっ、よーし……これからお前にオレのとっておきを見せてやる。お前のその間抜け顔を、ゾッとさせてやんぜ？」

「？　どうぞ？」

ナギのやる事は大抵が並外れているのだ。今更何が来た所で、ゾッとなんてするものか。ナギの不適宣言を、そんな心構えでリュウは聞いていた。大体そんな事を考えてんだろうな、と、ナギはナギでリュウが重く受け止めて居ない事を察知し、不気味な笑みを浮かべながら自分の左右に手をかざした。

「……？」

ナギのかざした手の先に、何か魔力の渦の様な物が展開していく。そしてそれは徐々に人型を取り始め……何と、二人のナギになったのだ！

「！？」

「「「な、ゾッとしたろ？」」」

話しかけられて、リュウは自分が本当にゾッとした表情をしていた事に気づいた。3倍の音量で聞こえてくるナギの声。杖もローブも何もかも、影やら質感やらどう見ても本物だ。これにはリュウも驚愕した。いくらなんでも戦力が単純に3倍なんて事はないだろ、と思いたかったが、ナギがそんな中途半端な技を身に付けて得意になるとも思えない。

「マジ……！？」

“アルター・エゴ”ってんだ。フォウルのヤツに習った」

またあの古龍か、とリュウは内心でさらなる恨み言を吐き潰した。自分もドヴァーから色々なスキルを盗んだが、ナギの方もちゃっかり技を盗んでやがる。元々アホみたいに強いくせに貪欲すぎ。その辺りはもう少し自重してくれよ、と若干の現実逃避的思考を脳内で展開したり。

「っつーか、3対1は卑怯だろ！？」

「「「お前らはさっきまで4対1だっただろーが！　今更文句言うんじゃねー！」」」

至極最もな突っ込みと共に、一斉に飛んでラッシュの体勢になるナギズ。逃げようかと思ったが、ナギ相手に逃げられる筈も無い。迫り来る3人のナギに、リュウは凌ぐ選択をした。分身の力がどれほどかを見極める意味もある。

「うおおっ！？」

「どうしたぁ！　反撃してみろよオラァ！」

（出来るか！！）

当たり前だが3倍の手数にリュウは手も足も出なかった。流石は数の暴力である。なんとか二人の攻撃を止めても、残る一人から打撃を貰ってしまう。救いなのは、分身二人の攻撃の威力が思ったほどではない事だ。速度はどれも同等だが、拳や蹴りが軽い。魔法ならば恐らく本体と遜色ない威力の物を放てるのだろうが、格闘ではその性能を発揮し切れていないようだった。

「くっ！」

「「「甘ぇ！　喰らえ！」」」

「！！」

リュウが考え事で一瞬動きを止めた隙を、ナギズは見逃さなかった。全く同じタイミングで繰り出される魔力パンチ×3。両腕をクロスしてガードするも、大きく斜め上にリュウは吹き飛ばされていた。

「っってぇなもう！　こんちくしょうが！」

ギシギシと痛む腕の骨を心配しながら、リュウは早々に手札を晒す事となった。だが良く考えれば相手はナギである。出し惜しみをする理由も無い。距離が若干離れて時間的余裕が出来たため、リュウはポケットに手を突っ込むと、そこへ龍の力を集中させていく。

「そりゃ前にも見たぜ！」
「そんな化石みてーな技にゃ当たらねーよ！」

以前フォウルの空間で戦った時に、ナギは今のリュウの構えを見た事があった。ショットガンとリュウが呼ぶ、高速の散弾を放つ技だ。あの時もほとんど当たらなかった技が、今更通じる筈も無い。

「そりゃ……どうかな！」

「「「っ！？」」」

ヴンとリュウの背後に蒼い残像が現れたのを、ナギ本体はしっかりと見た。そして、リュウのポケットから放たれるショットガン。本体は嫌な予感が。分身一体はたまたま位置取りの関係で。二人のナギは射線上から避けていたが、正面から弾き返そうと杖を構えた一体は――――

「うお……」

叫ぶ間もなく跡形も無く、きれいさっぱり消し飛ばされていた。記憶にあるソレとは似ても似つかない巨大な龍の力の弾幕が、ナギの予想を上回るスピードで、分身の体を構成する各部位を一瞬にしてもぎ取って行ったのだ。速度も威力も大きさも桁違いだ。斜め下の地面には、巨大なクレーターが瞬時に幾つも開き、蜂の巣のようになっている。流石のナギ本体もこれには驚いた。

「おいおい……マジかよ」

「マジ」

「その後ろの残像に秘密がありそうだな。最初の魔法のヤツもそれがタネか？」

「……」

これぞリュウがドヴァーから盗んだ技その2、“スーパーコンボ”。“技”や“魔法”の威力を極限まで高めるスキルである。この技の長所はデメリットがほとんどない事。どんな技にも組み合わせられ、威力を引き出す事が出来るのだ。何故か発動すると背後に蒼い残像が出てしまうのが、一応欠点と言えば欠点か。

「まぁ取り合えず、もう一体にも消えて貰う！」

「！？」

続けてリュウの背後に再び蒼い残像が現れ、グッと握り込んだ拳に集中する龍の力。そのまま空中を疾走して分身目掛けて突っ込んでいく。目前に迫るリュウに対して、残った分身は同じく拳に魔力を集め、先にブン殴ってやると息巻いた。が、

「お……！？」

ボッと音を立て、その分身もリュウの拳の一撃で消え去っていた。見ていたナギ本体に、今の拳に力を集中させた技を見た記憶はない。それもそのはず、今のはドヴァーから盗んだ技その3、“オーラスマッシュ”だからだ。一点に集中させたオーラの密度を操作して、その一発だけに凶悪な破壊力をもたらす。これをスーパーコンボと組み合わせた攻撃は、テラブレイクにスーパーコンボを組み合わせた物と並び、リュウ個人による単体向け必殺技の中で最大威力を叩きだすのだ。

「……」

「……」

煙のように消えた二体の分身。空中で睨みあう両者。フォウル直伝の分身技“アルター・エゴ”を、これまたドヴァー直盗みのスキルであっさり打ち破られたナギは……感動にうち震えていた。

ちょっとムカつく部分もあるが、それはそれ。オレが求めていたのはこれなんだ。戦いと言うのはやはりレベルが同じぐらいじゃねーと面白くない。今、オレは最高に楽しい！

最早手遅れかもしれないが、ドヴァーの様な重度のバトル中毒に陥っているナギであった。

「ほんっっっとになぁ！　お前と戦うのは面白過ぎるぜ！！」

「うお！？」

テンション最高潮のナギがさらに勢いを増して突撃をかましてくる。殴りかかる拳には無意識にかなりの数の魔法の射手が乗っていて威力も増大、加えてスピードも落ちない所か増している。どこまでもふざけた戦闘センスである。

「ぐっ！？」

「【雷の斧！】」

「！」

魔法の射手パンチからの華麗な連続コンボ。リュウのガードの上から殴りつけて、それを追いかけるように斧が迫る。ナギの腕から発生した斧の刃は三つに分かれ、正面左右の三方向からリュウへと迫る。

「おっ……と！　そんなのに当たるか……」

「【雷の投擲！】」

「……って……！？」

雷の斧を落ちるように下へと避けたリュウに、間髪入れずに放たれる巨大な雷槍。三段構え。ナギは考えてやっている訳ではない。コンビネーションも練習などしていない。自然に体が動くという、真に才能に根差した戦いっぷりだった。

「避けてみろぉっ！！」

まるで槍投げのように、次から次にナギの手の上に発生しては放られる巨大な雷槍の群れ。狙いはムカつくほどに正確だ。ズドンズドンと大地に高速で突き刺さる槍を、しかしリュウは地面すれすれを滑る様に飛び回り、掠ることさえなく避けていく。

「このっ……！」

「【百重千重と重なりて、走れよ稲妻！】」

「！？　ちょっ！？」

「【千の雷！！】」

魔法の射手パンチから三又の雷の斧、雷の投擲の乱舞と来て、トドメに千の雷。怒涛の４連続コンボ。いつの間にか取り出したあんちょこ片手に、嬉々として呪文を唱え終えたナギの手から極大の雷が放たれる。これだけの魔法を放ってなお、ナギに疲れは全く見えない。

「こんなんかわせるかボケェ！！」

リュウ魂の叫び。

範囲が広い。とてつもなく広い。そして、超デカい。あの列島の最初の島に居た鳥の魔物が使ったモノと、同じ魔法とは思えない。放たれた魔法が到達するまでに動ける範囲で、避けられるスペースなどどこにもない。

「くそっ！」

困った時のシャドウウォーク。短距離ワープを即座に発動し、リュウは千の雷を素通りしてナギと同じ目線の空中へと瞬間移動。雷は絶大な威力でもって機械浜の地面を黒焦げにした。

「そうくると思ったぜっ！！」

だが、リュウの咄嗟の回避すらもナギには通用しなかった。空中に出現したリュウの目前に、拳を振りかぶったナギの姿が！

「ぶぐっ！？」

思いっきり、殴られた。

ぐらりと体勢を歪ませるリュウ。不意を突かれたせいで結構なダ

メージだ。
　ナギは予想済みだった。千の雷をかわすには、最初に見せた謎のワープ技を使うしかないだろうと、直感でわかっていたのだ。出現位置までは流石に特定出来なかったが、楽しくて集中力が異常なまでに増大しているナギには大した問題ではない。空中に現れたリュウの姿を発見してからの時間的ロスはほとんどなく、感知即突撃を行っていたのだ。

「【雷の斧！】」

「っ！？」

　リュウはこの後の展開を悟った。このままでは反撃のチャンスは来ないと。斧を上に避けても下に避けても、大した違いもなく先程と同じ流れになるだろう。ナギに疲れた様子は全くない。リュウはすっかりナギのペースに巻き込まれていた。どこかで流れを断ち切らなければ、ずるずるとやられる羽目になる。

「くっ……！」

　雷の斧を今度は上に避け、予想通りナギの手に雷槍が出現。この槍が到達する前の一瞬で、リュウは流れを変える一手を打つ事にした。

「【雷の投擲！】」

（ここだ！！）

「うおぉぉぉぉっ！」

「！！」

ナギの手から放たれて飛来する雷の槍を、リュウは咆哮と共に気合いで弾き飛ばした。リュウの周囲を包み込むように、赤いオーラが展開している。

「ありゃあ……あの変身技か！」

ナギの予想は当たっていた。ここでリュウのセブンスセンスが発動。変化の仕方が他の面子より地味で、尚且つ赤いオーラを纏ったのみで見た目にも特に変化は無い。さらには力の上昇という面でも地味で、上げ幅は小さなものだった。だが、何より他者の物と決定的に違うのは、リュウはセブンスセンスの力のコントロールを自在に行えるという点だ。

何しろリュウはドラゴナイズドフォームという、扱いの難しい変身を何度も経験しているのだ。ユンナがそこまで考えていたのかは定かではないが、ドラゴナイズドフォームはセブンスセンスのさらに上とでも言うべき状態だった。だから、それよりも下の段階であるセブンスセンスに関しては、コントロールだけならほぼ完璧に近かった。リュウがこの自分の特殊なセブンスセンスを、勝手に“ドラゴンインストール”と呼んでいたりするのはどうでもいい余談である。

「おもしれぇ！！【百重千重と重なりて、走れよ稲妻！】」

出力的には大した変化でなくても、リュウにとってこのセブンスセンス――ドラゴンインストールの意味は十分にある。何故ならばこれを使う事によって、今まで思い描いていたものの実現できなかった技術が、ようやく可能となったのだから。その一つが、これか

らリュウが放とうとしている、名付けて“竜言語魔法”だ。

「【千の雷！】」

「『火炎（カエン）！』」

龍の力を消費して、龍の民だけが使える炎の魔法の最上級、パドラーム。リュウの放った『火炎（カエン）』は、その最上級でさえも大きく上回る炎を呼び起こしていた。遠く離れている筈のゼクトやアル、ガーランドやゼノまでが、その熱を肌で感じられるほどの高温の炎の嵐。それがナギの放った千の雷と激しく衝突し、凄まじいスパークを巻き起こす！

「何だこの魔法は！？」

この魔法の正体、それは龍の力と魔力の合成によるものだ。気と魔力の合成である“咸卦法”にヒントを得て、兼ねてよりリュウが試行錯誤していた技術である。元々龍の力と魔力の二つは、相性自体は悪くない。だから難易度的には咸卦法より簡単な筈なのに、それでも今までその二つを混ぜる事が出来なかったのは、単純にリュウの体にそれに耐えるだけの器が形成されていなかったからだった。

だがそれも、修行と新たに得たこのドラゴンインストールによって器が広がり、ようやく二つの力の合成が可能となったのだ。

激しいスパークを巻き起こしていた千の雷と火炎（カエン）は、共にエネルギーを放出し尽し、互いに霧散して終わった。チリッとナギの頬に火の粉を飛ばし、リュウにはピリッと指先に痺れを与えて。

「あの野郎、破りやがった……！」

千の雷を真っ向から消し去った竜言語魔法。自分の魔法は破れはしないだろうという予想を覆されたナギが、僅かに呆けたその一瞬。勿論リュウは止まらない！

「『波水牙（バズーカ）！』」

「！？」

今度はリュウの反撃だ。続けて発動した水の竜言語魔法は、絶対零度に近い極低温のブリザードを辺り一帯に発生させ、全方位からナギの体へ容赦なく叩きつけられていく！

「！？　マズイ……っ！」

寒いではなく、痛い。そしてあまりの低温にすぐさまその“痛い”という感覚さえ失せていく。直感的にヤバいと感じたナギは魔力を燃焼させ、丸い球状の障壁を張ってやり過ごす事に決めた。だが瞬く間にその空間ごと障壁すら凍りつき、空気は分子運動を止めていく。

「『牙流風（ガルーフ）！』」

「！！」

ブリザードが止まぬまま、重ねるように発動する風の竜言語魔法。今度は風速にして３００ｍを越える暴風が吹き荒れ、天は分厚い雲に覆われて、小規模な竜巻が幾つも生成されていく。球状の障壁を展開したナギに、容赦なく襲い掛かる竜巻の群れ。複数の自然現象を重ね合わせた巨大台風の如き風が、猛然と機械浜に吹き荒れる！

「うおおおおっ！？」

「『波土破（バドハー）！』」

待った無しの４発目。畳み掛ける地の竜言語魔法。発動と同時に大きく隆起した大地が鋭利な槍となって、まるで地が天を目指して反逆するかのように、我先にとナギへ切っ先を伸ばしていく。大地そのものを敵に回したような錯覚さえ起こすその魔法は、風によって切り刻まれたナギの障壁を、いとも簡単に打ち砕くのだった。

「ぐっ……てめぇ……やりやがったな」

「そりゃ、お互い様」

迫る大地の大槍をナギは寸での所でかわし、串刺しにこそならなかったものの、全身に切り傷を負って血を流していた。少し悔しそうに特に出血の大きい肩を抑えつつ、しかしすぐにその悔しそうな表情は、数度目の不敵な表情へと変化した。

「……けど、これで俺の勝ちは決まった様なもんだな。お前ソレ、あと１０分くらいしか続かねぇだろ。ま、逃げ回る気は全然ねぇが」

「ああ、その点なら心配ご無用」

そう言うと、リュウの纏っていた赤い光はプシュンと消えた。セブンスセンスを自分の意思で消せる。これも力のコントロールの成せる技だ。使用時間全体で１５分を過ぎなければ、いつでも再発動が可能なのだ。

「！　……スタミナ切れは、起きねーって事か」

「その通り」

なるほど、どおりで大将を張ってオレに一対一を挑もうと思える訳だ。他の炎の吐息の面子とは、全てにおいて力の差がある。まぁその辺は当然といえば当然だ。こいつの力に一番最初に目を付けたのは、他ならぬこのオレなんだからな。

そんな風に適当な事を言って過去の自分を褒めてやるナギだが、だからと言ってこのままやられっ放しで気が済む訳では当然ない。

「んじゃぁお前が泣き入れるまで、とことんやってやるぜぁ！」

「そうはいかねー。ここまで来たら、俺がお前をしっかり負けさせてやる！」

リュウは、自分が変身などに頼らずにナギと対等に戦えている事が素直に嬉しかった。それが例え、ドラゴナイズドとの距離が縮まった事によるとしても。これまでずっと素の状態で叶わなかった相手に、ようやく一泡吹かせる事が出来るかも知れないのだ。これで頑張らなかったら、男がすたる。リュウは、熱くなっていた。

「喰らえ！」

「！　は！　んなのに当たってやるかよ！」

リュウが放つのは以前ディースに教わっていた技の一つである“黒の炎”。水中であろうと燃やせる、無属性の攻撃技だ。対して真っ黒い火炎放射のように放たれるソレを見たナギは、一目で威力の

ほどを見抜いた。
そしてその手から放たれるのは、フォウルから教わった技の一つ、魔力を白色光弾として打ち出す技“エバーホワイト”。黒を白で塗りつぶすように正面から炎を迎撃。単純な威力の差し引きで勝るナギの光弾は、黒の炎を貫通してリュウを飲み込んだ。咄嗟に防御したものの、光弾が過ぎ去った後にはプスプスと体から焦げた煙を上げるリュウの姿が。

「……ぐっ……この……それなら！」

「！！」

ならばとリュウは三度シャドウウォークを発動して瞬間移動。既に二度それを見た事のあるナギは勘で察知し、出現位置を見切って拳をそこに見舞った。タイミングは完璧。現れたモノは防ぐそぶりも見せず、思いっきり砕かれていた。

「な……これは！？」

が、砕いたのはただの石。ご丁寧にへのへのもへ字が描かれていたのは御愛嬌。フェイクだと気付いたナギに、違う場所に出現していたリュウが高速で迫る！

「掛かったなアホがぁ！！」

「！？」

矢の如き強烈なドロップキックがナギの背中にヒット。意表を突かれたナギは蹴りのダメージに加え、猛スピードで地面に激突。盛大な破砕音と舞い上がる土煙り。作戦成功に気を良くしつつ、煙の

向こうの気配を探りながら静かに見下ろすリュウ。

「誰がアホだとてめぇぇぇッ！！」

「おおっ！？」

が、静かだったのはほんの一瞬。ナギの墜落現場から、対空高射砲のように飛び出てくる大量の魔法の射手。その数は千を優に超え、もはや数えるのも馬鹿らしい。空を飛んで避け続けるリュウを、矢が意思を持つように追尾するその光景は、まるでホーミングミサイルの群れを突っ切る全領域可変戦闘機の如し！

「くそぉ！　しつけー！！」

弾数無制限で飛んでくる魔法の矢。しつこく追いかけてくるそれを戦闘機顔負けの回避運動で避けながら、リュウはポケットからカードを一枚取り出して額に近付けた。

≪よろしく！≫

≪フフ、任せなさい≫

「ラグレイア！」

華麗に空を舞いながら、発動する切り札の一つ、竜召喚。赤い龍を頭上に召喚し、リュウはその場に急停止。

≪消えなさい！！≫

龍が吐き出す炎のブレス。迫りくる魔法の射手は、ブレスが作り

だした炎の壁に遮られ、リュウまで届かず消えていく。そのまま眼下を見下ろすと、大分薄くなった土煙りの向こうに、薄らと見えるナギの姿。動きは無いが、気配からそこに居るのは間違いない。

「よし、じゃあアレお願い！」

≪了解。全力で行くわよ！≫

リュウの背に、再び現れる蒼色の残像。ラグレイアの吐き出す強烈な炎を全身に受け、ナギを目掛けて急降下。必殺のスーパーコンボ版・ドラゴンライダーキック。名付けてドラゴンファイヤーストームか。纏った炎が大きく尾を引き、まるで天から炎で出来た龍が舞い降りるが如くのド派手な一撃。薄らと見えるナギは避けようともしない。

「うおりゃあああああっ！！」

直撃。加えて、爆発。さらに、炎上。

炎のキックは爆発と共に地面を大きく抉ってクレーターを作り、赤い龍はカードへと戻っていく。爆心地の中心、炎が燻ぶるそこに、一人立つリュウ。周囲に気を配るが、どこにもナギの気配はない。

「……？　上か！？」

しかし、それも空振り。全天周を見渡しても、やはりナギの姿はどこにもない。粉微塵に吹き飛んだなんて事は１００％ない筈。それともまさか、姿が消える技でも習得しているのか！？　とリュウが周囲にさらなる緊張を向けたところで……リュウの足元が、ボコッと盛り上がった。

「へ、掛かりやがったな馬鹿が！」

「！」

ナギはリュウが竜召喚を使った時点で何をするのか大まかに察し、魔法で地面に深く穴を開け、そこに潜んでいたのだ。土煙の中に薄らと見えていたのはナギの分身、アルター・エゴ。上半身を土の中から乗り出し、リュウが動こうとするより前に、その細い足首をしっかりと掴んでいた。

「この距離なら、フラフラ避けらんねーぜ！」

どうやら地面に激突した際に額を切ったらしく、ナギは額から血を流して片目を瞑っているが、足を掴んだこの距離で得意の魔法を外す訳も無い。もう片方の手に杖を握りしめ、そこに溜まった魔力は未だ衰えを知らない。ナギの盛大なお返しが今、リュウへと迫る！

「まっ……！！」

「【雷の暴風！】」

リュウの腹に拳を捻じ込むように放たれる零距離魔法。回避不能な雷のビームが、リュウをその中央に捕えた！　爆ぜず消えず、雷の暴風はその威力をリュウに直撃させながら、はるか上空にまで運んで行く！

「うあああああっ！？」

一挙に空が近くなったところで、リュウは歯を食いしばってドラゴンインストールを発動。赤いオーラに身を包み、拳に龍の力を込

めて、雷の暴風を直接殴打。反動でなんとか逃れる事に成功。身体のダメージを確認しつつ即座に自分の周りに注意を向けるが、ナギは追ってきてはいないらしい。すぐに若干遠い距離にある先程の爆心地へと、目の焦点を合わせると……

「へーんだバーカバーカ！」

「んなっ！？」

ナギはベーッと舌を突きだして、ガキっぽさ丸出しの挑発をしていた。普通ならアホらしくて呆れ返る所だが、イイ感じに頭に血が昇っていたリュウには効果覿面。ピキピキッと怒りマークが複数こめかみに浮かんだ。

「んのやろぉぁっ！！」

赤いオーラを纏ったまま、リュウは再度魔力と龍の力を合成させた。同時にリュウを取り巻く周囲の空気が、全てを切り裂く凶器となる。吹けよ風、呼べよ嵐！　リュウの単純な怒りを体現するように、生成されていく竜巻の群れ！

「『牙流風（ガルーフ）！』」

「！　さっきのアレか！」

ナギの顔が少しだけ強張った。リュウの放つ竜言語魔法は自分の千の雷と同等の威力な上、効果範囲も凄まじく広い。何より今放たれたのは風の魔法。吹き荒れる暴力的な風の中で、避けるためだからと空中に出るのは自殺行為に近い。

「……でもな！　そう簡単に当たってやるこのオレ様じゃねーぞゴラァッ！！」

出てくるとびきり全開パワー。暴風強風何のその。全身に魔力を漲らせたナギは杖に体を預け、何と迫る竜巻の群れに、そんなの関係ねーとばかりに自ら飛び込んだ！　まだ完全には生成しきれておらず、所々に隙間がある竜巻の間を狙って、リュウへと高速で近づいていく。最低限の障壁しか張っていない為、ちょっと間違えば大惨事は免れない。

「当たってたまるか！　うらぁぁぁぁ！！」

……が、流石は稀代の戦闘凶ナギ・スプリングフィールド。凄まじい集中力で全ての竜巻をかわしきり、見事嵐を抜けて見せた。

「よっし貰ったぁ！！」

すぐそこに居た何かの影目掛け、ナギは魔力のこもった拳を振るう！

ビビッたかリュウ！　って待てよ、そういやコイツ何故動かない……。

ハッとしたナギがその影を良く見ると、何とそこにあったのはまたしてもタダの石！

しかも微妙に人型に削ってあって、顔のへのへのもへ字がやけにキリッとした表情で描かれている。何たる手の込みよう。これはもう完全に人を馬鹿にしている。

「ずりゃぁぁ！！」

「おぐふっ！？」

ナギがへのへのもへ字に怒りを感じたその瞬間を狙い、さらに上空に居たリュウが思いっきり脳天目掛けて踵落とし。近年稀に見るクリーンヒット。グルグルと激しく回転しながらナギは墜落していく。

「はっ！　ざまーみろや！！」

そこに居ると見せ掛けて、ドラゴンズ・ティアから取り出した人っぽい大きさの石で身代わり。さらに石にムカつく絵を書いておく事で、神経を逆撫でして若干の足止め。二重の罠にナギはまんまと引っ掛かっていた。ようやくさっきの挑発の溜飲を下げるリュウである。しかしそれにしてもこの男大人気ない。本当に超オトナゲない。

「痛っってぇーー！！　もう許さねーぞリュウてめぇ！　狡い手使いやがってぇ！！」

「知るか！　引っ掛かる方が悪いんだよバーカバーカ！」

「なんだとぉ！！」

セリフと内容に激しいギャップを生み出し、第三者を二つの意味で呆れさせるナギとリュウの極限バトル。やってはやられ、やられてはやり返し、中々決着を着けられないまま、二人の戦いは続いていく……

＊

――――そして、瞬く間に５０分が過ぎた。

平坦だった地表は、無い場所が見当たらない程のクレーターや地割れによりアップダウンの激しい地形と成り果て、戦場よりもはるかに酷い有様となっていた。未だしっかりと二本の足で立つリュウとナギ。今現在は数度目の睨み合いタイム。戦闘開始から休みなく戦い続け、流石の二人にも疲れが襲い掛かっていた。

「……」

「……」

両者血まみれで腫れぼったい顔、肩で息をし、既に大体の手札を晒し尽して気も魔力も龍の力も大分減っている。そして、ここで制限時間が近い事をふと思い出したナギは、渋々といった感じでリュウに提案を出す事にした。

「よぅリュウ。オレとしてはもっと戦いてーけど、このまま時間切れで引き分けってのは気に入らねぇ。一旦ここらで決着と行こうぜ」

「……」

声にこそ出さないが、リュウは肯定の意を示していた。概ねナギの意見と同じ事を、リュウも考えていたからだ。

「これから、俺の今出来る一番強ぇ技を使う。だから、お前も今出来る一番強ぇ技で来い！　勝負だリュウ！」

「！」

ビッとリュウを指差し、ナギはそう宣言すると、ふわりと空中に浮かんだ。そして一定の高さまで到達すると左右に手をかざし、生み出される二体の分身。……もちろんそれだけでは終わらない。

「ってちょっと待って……！？」

ナギの魔力は止まらない。一人、さらに一人と、分身は次々に生み出されていく。ようやく止まったその数、総勢7人。まだこれだけの力が残っていたのか。ナギの魔力は本当に底無しなのかと全力で疑いたくなる。

「「「いくぜ！　【契約に従い、我に従え高殿の王！】」」」

「！？」

7人のナギが、一斉に呪文の詠唱に入った。流石のナギでもこの規模では長い詠唱を必要とするらしい。これから放たれるのは7人による“千の雷”。この場合は“七千の雷”だろうか。この規模の威力が直撃したら、まず骨すら残らないだろう。

「くそっ！」

間違いなく今のナギの全力だ。リュウはアレに対抗できるだけの技を求めて、必死に自分の引き出しを探った。竜言語魔法にスーパーコンボを組み合わせても、あの規模には恐らく届かない。テラブレイクやオーラスマッシュは単体技だから対抗は無理だろう。となると、残った選択肢は一つだけ。変身を行わずに現在使える最大技は、これしかない。リュウは躊躇なくポケットからカードを、三枚同時に取り出した。

「ザムディン！」

リュウの頭上、右側に黄の龍を召喚。

「ハルフィール！」

さらに真上に翡翠色の龍を召喚。

「サイフィス！」

そして左上、青色の龍を召喚。

「うおおおおっ！！」

三体同時召喚の上に、残り時間僅かなドラゴンインストールを発動。赤い色のオーラがリュウを包み込む。修行中にわかった事だが、竜召喚にはある“掟”があった。二体以上を同時に呼び出す場合、契約した順の“逆”に呼び出さねばならない。さらに、一体ならばノーリスクだが、同時の二体目から先には己の龍の力を餌として与える必要があるのだ。昔、あのジャック・ラカンと戦った時は、その掟を知らずに呼び出したせいで体に負担が掛かり、二日も気を失ってしまった事が前例としてある。

≪……あー眠ぃ……≫

≪うはー、まさにクライマックスって感じよね！　張りきっていきましょ！≫

≪やれやれ、あまり無茶をしてくれるな≫

ドラゴンインストールを発動させたリュウから大量の龍の力を食らって、三体の龍が上空に居る7人のナギに向け、その口を開けた。じりじりと、強大な波動がそこに集まっていく。恐らく威力の面ならばこれで対抗できる。問題なのは持続力。ナギの魔力が勝つかリュウの龍の力が勝つか。傍迷惑な我慢比べ。しかしここまで来て負けるのは絶対に嫌だ。

「「「【来たれ、巨神を滅ぼす、燃え立つ雷挺……】」」」

「皇（マー）……」

集う魔力。集う龍の力。互いの額に汗が滲み、限界が近い事を知らせている。

「「「【百重千重と重なりて、走れよ稲妻！】」」」

「龍（ノー）……」

呪文、完成。龍の力の集中、完了。リュウと三体の龍を睨む7つの視線。宙に浮かぶ7人のナギに照準を合わせる一人と三体の瞳。後はただ、無心で撃つのみ――――

「「「【千の雷！！】」」」

「破（ウォー）ッ！！」

そして、ついに最後の勝負が幕を開けた！

天の裁きかと見紛う豪雷！　地の怒りかと錯覚するブレス！

空前絶後の全力全壊！

今日この日、ここで行われた勝負全てを上回る最大のエネルギー！

両チームの大将二人の少年が、己の持てる力を振り絞り、意地とプライドの正面衝突！

「いかんっ！　皆伏せるんじゃ！」

「やべぇ！　おめぇら早く俺っちの障壁の後ろへ！！」

眩しすぎる閃光！　激しすぎる衝撃波！　当事者以外の全てを拒む、無茶苦茶な威力同士の衝突は、周辺地域を容赦なく破壊し尽くしていく！

「うおおおおおっ！」

「おあああああああっ！」

こうして、二人の少年の戦いの行方は、誰にも予測を許さないまま、ただただ機械浜の地を太陽の如き閃光で染め上げていくのだった。

第十三章　6、変転

「……納得いかねぇ……」

「んな事言われても……」

天変地異も裸足で逃げ出しそうな力の衝突から、既に１０分あまりの時が過ぎた機械浜国立公園。今はラストの勝負で出来た底の見えない大穴の脇に両チームとも集合し、倒れていたリュウとナギを起こして結果を伝えた所である。お互い全力を尽くした最後の勝負は、力の使い過ぎによる二人同時の気絶という形で決着と相成った。

即ち、引き分けだ。

魔力と龍の力の使い過ぎで、放出していた力が途切れたのは全くの同時。例え１秒間に１００００コマを映し出すスーパースローカメラであろうとも、どちらが先に放出を止めたか判別出来ない程の同時である。時間内に決着を着けるつもりが結局引き分けに終わり、何とも締まらない結末を迎える事となってしまっていた。

「うわーこれ相当深そうねー」

「公共の場だと言うのに……さてどうしたものか……」

大穴をのほほんと覗き込んでいるモモと、その対処に頭を悩ませる苦労人・詠春。今、リュウとナギ以外の面子に戦っていた時の様なギスギスした空気は全くない。さっきの敵は今の友。実際に拳を交えてお互いの力を認めた両チームのメンバー達は、まるで幾千幾万の言葉を交わした知人同士であるかのように、自然な形でうち解

けあっていた。

「気絶したのは同時らしいし、そこは納得するしかないでしょ」

「……ちげぇ。それもだけどそれだけじゃねぇ。オレが納得いかねぇのはな……」

「？」

この目の前にある大穴を作った犯人の片割れであるナギは、勝負中の上機嫌から１８０。転換し、あからさまな不満を表明していた。イライラしている原因は、てっきり“引き分けという事柄”に対してだと思ったリュウ。だが次に出てきた言葉で、リュウは少しだけ固まる事になった。

「……リュウてめぇ、何で最後変身しなかった」

「……」

ギラリと飛んでくる鋭い視線。

そう、ナギは期待していたのだ。今出来る全力と言うならば、必ずあのドラゴなんたらを使ってくるはずだと。一月前にフォウルの空間で見た変身後のリュウの強さは、明らかにフォウルと同等か、それ以上の域だった。修行して素の状態でこれほど強くなったのなら、当然変身後の姿もあの時より強くなっているはずである。ナギは勝負の最後に、その力の程を見たかったのだ。

結果としてリュウは三体同時竜召喚という切り札を披露し、見事ナギと引き分けて見せたのだが、それではナギは満足しなかった。変身していれば、とても高い確率でリュウが勝っていただろうと思

えたからだ。そこまでは良かったのに、最後の最後で水を差されたような気分になっていた。

「……」

「どーしたよ、なんとか言ってみろよ」

「まぁまぁ。リュウにも何か都合があったのではないですか？」

やれやれと、困った風にリーダーを宥める空気の読める（けど普段は読まない）男、アル。だが流石のアルも興奮気味のナギのこだわりを留めるには、少し力不足のようだ。

「都合だぁ？　じゃあその都合の中身は何だってんだよ」

「……」

「おい！」

「……力試し、って事じゃ駄目？」

リュウの反撃。こう言われてしまうと、ナギはそれ以上の追及を出来なかった。何故なら自分も変身後のリュウ相手に同じような事をしようとしていから。自分に対して、自分と同じ事を考えて変身しなかったと言われたら、ぐうの音も出ない。しかし、やっぱり最後の最後でリュウがワザと手を抜いたような気がして、ナギはご立腹だった。

「……まぁあんまり変身はしたくないって事でそこは納得してよ」

「……」

地べたに座って平静を装いつつ、どう丸めこもうかと適当な言い訳を探すリュウ。と、色々と悩んでいたその頭に、聞きなれた相棒の声が飛び込んできた。

≪よぅ相棒、体は大丈夫か？≫

≪ん、大丈夫。普通に疲れてるだけ。変身しなけりゃ大した事ないね≫

≪そうかい≫

リュウが言った力試しというのはまるっきりの嘘……では勿論ないが、それだけという訳でも当然ない。今の勝負で最後まで変身をしなかった事には、もっと別の理由がある。

「……」

違和感を覚えたのはドヴァーとの修行の最中。彼の要望に答えてドラゴナイズドフォームになった時の事。

変身しても、暴走の気配が無くなったのだ。

それだけなら単純にメリットと言えるかもしれない。しかしまるでエネルギー保存の法則の様に、“暴走”という現象は形を変えた。変身した際に一度に意識を奪おうとするのではなく、まるで川の流れが山を削る様にゆっくりと、“何か”がリュウの意識に侵食してくるようになったのだ。これこそが、最も大きい“近く”なった事

による影響だった。

その浸食してくる“何か”について思い当たる節はある。初めて変身した時に、暗闇の中で対峙した“アイツ”だ。自分の中に意識を巡らせても、何故かあの時の様に対話する事は出来ないが、それが“アイツ”だと言う事は感覚的にわかっている。

思い返せば以前からリュウは何となく変身をしたくないと思う事が度々あった。最初から変身していればあっさりと片付いた事柄だってあった。でも何故か、ギリギリまでそうしようとしなかった。その時は、変身した姿を見られたくないとか、暴走したらヤバイから、といった理由を頭の中で考えていた。

しかし今、リュウは悟っていた。本当はそれらの理由を隠れ蓑にして、第六感的な部分のどこかで、この意識の侵食という事象が起こる事を、自分は恐れていたのだと。

只の思い過ごしならば良かったが、厄介な事に実感がある。それは自分の昔の記憶について。時間の経過での記憶の薄れとは違う。何かで上書きされていくような不快感。浸食された事で、昔の記憶が消えていく。引いてはそのうち、自分さえも塗り潰されてしまう様な気がして――――。

リュウは、それが怖い。

リュウは、ヒトでありたい。

だから、なるべくならもう安易に変身したりしたくない。

言い訳ならば他にもある。今の変身したリュウの力はとてつもなく強大だ。竜変身に至ってはどれ程の域に達しているのか想像すら

つかない。ドヴァーやフォウルが隠居生活をしている理由が良くわかった。今の自分の力は、簡単に世界を左右出来てしまう力なのだ。そんな物を多数の見物人の前でポンポン使ったらどうなる。大きな力には責任が伴う。おいそれと使って良い力ではない。自慢するように見せびらかすのは、馬鹿のする事だ。

「……」

「……」

そんな色々な思惑と言い訳を重ねて、リュウはこの勝負で変身しなかった。と言うか、本当に余程の事でも起きない限り、今後は変身という選択肢を選ばない事に決めている。全てを語って心配させる気にはならないので、ナギには適当にはぐらかしていた。

「……」

「まぁほら、やっぱ普通の自分で戦ってこそ、じゃない？」

ちなみにリュウとナギの最後の衝突劇は、衛星軌道上からでもしっかりと確認できる規模だった。大量破壊兵器もかくやというほどである。おまけに他の面子も全力を出せば、これを少し劣化させた程度の爆発は起こせるわけで。今の状態でも彼らが集まれば十分世界をどうこう出来そうじゃね？　という突っ込みをリュウの頭に入れられる人間は残念ながらこの場に居ないのだった。

「……あー、もういいよ。納得してねーし、ホントはよくねーけど、終わっちまったモンは仕方ねぇ。次はお前が変身しようが何しようが、絶対にコテンパンにしてやる！」

「……じゃあ、そうならないように努力するよ」

ナギはずっと不満状態でいる事に飽きたのか、またもや態度を１８０。変えた。からっと陰気な空気を吹き飛ばし、周囲を明るく変えられるのはナギの良い所である。威勢良く立ち上がろうとしたナギだが、消耗しているせいかプルプルと生まれたての小鹿の様に足腰が振えてしまい、すぐさまカクンと座り込んでしまった。彼にしては珍しく、格好を付ける余裕がそんなにないらしい。

「愉快だねぇ……」

「あーあ、それにしても、結局あたし達の負けかぁ……」

二人のフーレン族の呟きが耳に入り、リュウは取り合えず今直面する最大の問題に目を向ける事にした。死力を尽くした勝負の結果は、一勝二敗一分けで炎の吐息の負けである。やはり天才集団との壁は厚かった。まぁ一カ月程度の修行でここまで喰らい付けたという事実は、十分称賛に値すると言っても過言ではないが。

「フフフ……リュウ？　あの約束の事、よもや忘れてはいませんよね？」

「ぐ……」

リュウ達の負けであるからして、当然その後に待っているのは罰ゲームである。ボロボロローブを纏ったアルは、これ以上ない程に楽しげかつドス黒い笑顔だ。一体どのような非人道的な罰ゲームが課せられるのか。リュウ達は戦々恐々としながらも、潔くその言葉を待つ。

「代表として、リュウに死ぬほど恥ずかしい二つ名を名乗りながらメガロの街を回ってもらう……というのと大っ変迷いましたが……」

「！？」

苦渋の決断を迫られたように、くっと眉間に皺を寄せて苦しそうな演技をするアル。候補を上げられただけで、想像力豊かなリュウは精神的ダメージを受けた。リュウのゲッソリした表情を見てニヤリとしたアルはさらに勿体ぶり、大きく引きを作る。

「発表しましょう。あなた達への罰ゲームの内容、それは……」

ゴクリ、と誰かが唾を飲む音が聞こえた。勝負中よりもむしろ今の方がアルは輝いている。詠春はやれやれと額に手をやり、ゼクトはリュウ達に手を合わせて南無南無唱え、ナギさえも溜息だ。そしてイヤに静まり返ったその場に、ついに非情なる判決が下された。

「……皆さんの人生を、私のアーティファクトに記録させて頂きたい」

「……へ？」

気の抜けた声を出したのはリュウである。恥ずかしい二つ名の他にも女装かコスプレか、はたまた一生アルの奴隷扱いとか、それはもう人としての尊厳を踏みにじりまくる痴態を晒す事になるのかと想像していたのだ。聞かされた言葉は、そういう意味では予想の斜め上だった。

「……それだけ？」

「ええ。安心してください。皆さんのプライバシーは私の誇りに掛けて守ります。記録内容は、私が個人的に楽しむだけに留めると約束しましょう」

「……」

どうやらアルの言葉に嘘偽りは無い、と理解したリュウ達。漂っていた空気が瞬く間に氷解し、安堵の溜息が幾つか漏れだす。人生の収集なんて悪趣味と言えば悪趣味だが、まぁ被害度的にそれくらいなら何も問題ない。少々恥ずかしいが、ここはアルのプライバシー云々の言葉を信じるしかないだろう。女性陣は渋るかと思いきや、しっかりと承諾していた。その辺の男より、はるかに男らしいゼノ達である。

「まぁ今すぐにと言う訳ではありませんから、後日改めてあの城にお伺いするとしましょうか」

「え……」

「何か？」

「いや別に……」

リュウが「また来るの？」という若干の抗議の視線を送ったものの、やはりアルには暖簾に腕押し、ぬかに釘であったとか。

そういう訳でチーム間の事後処理も終わり（大穴や地形に関しては知らんぷりする事で全員一致）、“紅き翼”との対決という一大イベントを終えたリュウ達。本日の予定はこれにて終了。今すぐにどうこうしなければならない事案も特になし。これで一応約束は果

たしたし、晴れて自由の身（？）である。時間的にはまだ昼だが、もう今日は城に帰ってマッタリしようなどとリュウは考えていた。

「んじゃ、終わった事だし一応あっちの魚野郎んとこに行ってみようぜ？」

「！　そうだった……そういやマーロックさん達の事すっかり忘れてた……」

昨夜のビックリ来訪者であるミイナから聞いた話では、少なくともウィンディアの人達はこの場に来ている筈である。ならば挨拶もせずに帰るのは道義的によろしくない。なーんか他にも居そうだなーという妙な予感を感じつつ、リュウ達とナギ達はそちらの方へと足を向けるのだった。

＊

リュウ達の居た激闘の舞台から、それなりに離れた所にある来賓席。……だった場所。

強固な魔法障壁が幾重にも張られていた筈のソコに、今現在障壁の姿は見当たらない。かなりの数の人がざわざわしながらリュウ達とナギ達を見ていて、周りには日除けのサッシやらワインクーラーっぽい物体やら高級チェアーらしき残骸やらが散乱し、それはもう酷い有様である。

「ありゃ？」

「これは……」

言うまでも無く、原因は両チーム激突の余波だ。戦いの最中に発生した爆風・衝撃・流れ弾、その全てに耐えていたご自慢の魔法障壁。だが流石に傷付き満身創痍の状態でリュウとナギのラストのとんでも勝負の余波には耐えられなかった。結局全部ぶっ壊れてしまったのだ。

「大枚はたいて用意したモンが全滅ですわ。全く、あんたらにはほとほと呆れて言葉もないですな」

「すみません……」

「あんた無事だったのか」

心底呆れた様な表情でそう声をかけてくるマーロックは、トレードマークのナポレオンハットも微妙に折れ曲がり、埃まみれだった。惨状の割に人的被害は少なく済んだのか、とリュウが疑問に思った所で、ふとした事に気付いた。良く良く見れば、周りのガードマン役の鎧兵士達が一際汚れている。恐らく障壁が崩壊した後は、彼らが身を呈してこの場に居る大勢の人の盾となったのだろう。何とも護衛の鏡と言うべき人達である。

「ま、とにかく勝負は終わりですか。お疲れさんでしたな」

「どうも」

「別にまだやれるけどな」

お疲れと声を掛けられたのに、どことなく腹が立つのは何故だろう。そんなマーロックの態度を例によってスルーなリュウ。すると

マーロックは挨拶もそこそこに、以前はまともに見ようとさえしなかったリュウ達を、何故かしっかりと真っ直ぐに見据えた。

「は……ん……正直な所、あんたらが“紅き翼”に善戦するとはこれっぽっちも思ってませんでしたが……」

「……」

歯に衣着せぬこの物言い。商いの世界でぶいぶい言わせるマーロックのふてぶてしさは、あれほどの力を見せつけたリュウ達を前にしても全く変わる事はない。

「……あんたらに対するワイの評価が低すぎた事は認めます。今日は中々ええモン見させてもらいましたわ」

「！」

リュウ達にとっては初めて見ると言ってもいい、マーロックの僅かばかりの笑顔。儲け損ねたストレス等は、あの派手な戦いぶりを見てとっくにすっ飛んでしまっていた。一応性格的に嫌味を言ってみたものの、実はそこまで怒っている訳でもないのだ。

“あの”マーロックがそんな態度でリュウ達を褒めた事で、リュウだけでなくその他の面子も「雪でも降るのではないか」と驚いて固まっていたりする。

「……ふん、まぁワイの感想なんてどうでもええですわ。それより……」

「？」

リュウ達のある意味大袈裟なリアクションに少し気分を害したらしいマーロック。彼に促され、その後ろから懐かしい顔が現れた。最初に近付いてきたのは背中に立派な羽を生やした老齢の男である。さらにその後ろには見覚えのある逞しい身体つきのフーレンの男と、これまた羽を生やした美しい女性、そこに昨日突然リュウ達の城に訪ねてきたお転婆姫がくっ付いている。

「久しいな。“紅き翼”の諸君」

「あ！　……ホラ……えーっと……あれだ……畜生誰だっけ！」

「……」

リーダーにあるまじき失礼な態度を取るナギ。喉まで出掛かっているが誰だったか思い出せない。そんな感じでうーうー唸る姿に溜息乱舞なその他の面子。王様はわかっているのか苦笑いでスルーしてくれている。

「ゴホンッ！　……フォウ帝国の件では世話になったな。今日はそなた達の力をじっくりと拝見させて貰った。いやいや、凄まじいの一言に尽きる」

「いえいえそれほどでは。王様に置かれましては、ご健勝のようでなによりです。本日は私達の為にわざわざ御足労頂いたようで、ありがとうございます」

リーダーのナギを差し置いて、しれっと答えるアルの図。こういう時のアルの人当たりの柔らかさは貴重だ。少なくとも無礼なナギより何倍もマシである。裏ではどんな事を考えているか知れないが。

「そうそう、近々我が娘エリーナとクレイの挙式があるのだ。差支えなければ、そなた達にも出席して欲しいのだが……」

「それは目出度い！　私達で良ければ喜んで」

「うむ。是非参加させて貰うとするかの」

リーダー不在で勝手に話を進めるその他の“紅き翼”。話に加わらない当のナギ本人はと言えば……

「あ！　思い出した！　ウィンディアの王様！」

「おせーよ！　時間掛かり過ぎだよ！」

ようやくこの人が誰か思い出していた。そんなナギの無礼過ぎる態度も軽やかにスルーしてくれる王様の懐の大きさに感謝を捧げ、久しぶりのリュウの突っ込みが冴え渡る。そして改めて、王様の隣に立つフーレンの男と美しい女性。言わずもがなのクレイとエリーナだ。

「久しぶりだな。ナギ、リュウ。お前達があそこまで強いとは思わなかった。今日は驚きの連続だ」

「お久しぶりね。元気そうで……ううん、元気良すぎて、羨ましいぐらいだわ」

仲の良い婚約者の二人は極めて自然に寄り添っていて、他者の付け入る隙がない。戦いぶりにフーレンの血が騒ぐのか、クレイはどこか微妙にうずうず。しかしそれをエリーナがしっかり抑え、手綱

を握っているようにリュウには見えた。もう既に完璧な夫婦の風格である。

「凄かったです！　リュウさんもナギさんも皆さんも、こうズバーッてドヒューって！」

「ミイナ、はしたないですよ」

「でも姉様！　本当に凄かったんですよ！」

ミイナは大興奮で背中の羽をパタパタさせていた。大仰な身振り手振りで必死に味わった感動を伝えようとしている姿が微笑ましい。そんな穏やかな世間話をしていると、話題は今日の戦いの対戦相手、リュウの作ったチームの事へと自然に移っていく。

「確か、相手をした君達は“炎の吐息”と言ったか。君達の関係者も、ここに幾人か来ていると聞いたぞ？」

「え？」

リュウがウィンディアの王から話を聞いていたちょうどその頃、後ろの方でボーっとしていたステンに忍び寄る影があった。その影はステンと同じような体型で、鎧を着た黄色い体毛のハイランダーだ。

「よぉステン」

「……あー何か……オイラ疲れてるせいか幻聴が聞こえるみたい……」

即座にそれが誰であるかわかったステンが嫌々ながらに声の聞こえた方向に振りかえると、予想の通り、とても見覚えのある戦友の顔がそこにあった。

「トゥルボー、来てたんだ」

「よ。まさかお前があんなに強くなってたなんてな。まぁ勝負の方は残念だったが」

中々ご機嫌な表情で話しかけるステンの親友トゥルボー。勿論、この場に彼一人だけで来ている、なんて事はあり得ない。トゥルボーは立場で言えば護衛であり、マーロックの招待に飛び付いた本命は、彼の後ろに居る“彼女”なのだ。

「ちぇ、カッコ悪い所見られちゃったな……」

良い勝負をしたとは言え、負けた所を見られた訳である。トゥルボーの後ろに居る彼女にそんな姿を見せてしまったのが、少しステンは悔しかった。

「いいえ！　カッコ悪いだなんて、そんな事ありません！」

「！？」

ズズイッと出てきてステンの言葉をやたら強固に否定する彼女改めハイランド王女。えらく興奮しているのか、その顔は火が出るくらいに真っ赤だ。

「？　あの……エルファーラン？」

「あ……いえその……」

そしてササッと目を伏せて王女はステンを見ようとしない。そんな彼女の心の内が、男二人にわかるはずもなかった。

（おいトゥルボー、まさかと思うが、エルファーラン何か変なモノでも食ったのか？）

（わからん。さっきからずっとあの調子なんだよ）

「……」

もじもじしてまともに顔を見ようとしない王女の態度に訝しむステン。何を隠そう王女はステンの変身した姿とその想像以上の力強さにクラッと来ていた。要するに惚れ直したのだ。ラブコメも真っ青な展開である。

そんな寸劇を猿の人達が展開している傍らで、シルクハットを被った富豪の一人が某カエル紳士に静かに近付いていた。

「タペタ……」

「！　その声は……おーう、父上ではありませんか。今日はワタクシの晴れ舞台にようこそ来てくれたのでした」

シルクハットの男はタペタの姿を見るやいきなり感涙に咽び泣きだした。勢い余ってボゥンと変装魔法が解けて、真の姿を晒してしまっているのにまるで気付かずお構いなし。この人こそ誰あろうタペタの父、エカル伯爵だ。

「うう……あの放蕩息子のお前がこれほど立派になるとは……私は

父として鼻が高いぞ！」

「？　父上どうしたのですね？」

色々とタペタの自由奔放ぶりに苦労していたのだろう。エカル伯爵の泣きっぷりは本物だった。親の心子知らずでタペタにその辺の感情が上手く伝わっていないようだが。

「エカル伯爵は匍匐族だったのか……」

思いのほか親馬鹿な面を見せているエカル伯爵。どうでもいいが、今まで交流があった富豪仲間達は皆、その正体を知って驚いていた。

さらに続けて、おいおい泣くエカル伯爵の声に覆い被さるように、一際大きな声が辺りに響いた。エラく目立つその声の発信者は、何人目になるのかフーレン族の男性だ。

「ようリンプー！　スゲェな！　お前あんなに強かったのか！　っていうかリュウのヤツはもっとスゲェな！　強すぎだろあいつ！」

「え？　ティガじゃん！？　来てたの！？」

「おう。あっちに居る金持ちさんにいきなり一緒に来ないかって誘われてな。まぁ久しぶりだってんでお招きに預かったわけよ。ほれ、クラリスもこの通り」

フーレン少女の元には、かつて一緒に働いていた同僚が訪れていた。ティガの彼女、クラリスも同伴で見物である。どうして金持ちでも国の重鎮でもない彼らが来ていたのか。ティガが会話の中で“あっち”と指差した方には、これまた一組の親子……否、母子が。

「か、母ちゃん!?　何で!?」

「いやなに、ランド君が戦いをすると聞いたものでね。私がデイジイさんも誘ったのさ」

富豪の一人、キルゴア。彼がティガとクラリスも連れてきた張本人だ。リンプーにも以前世話になったのだから、そのお返しという訳らしい。律儀な彼らしい事である。

「あたしゃ嬉しいよ。あのドラ息子がこんなに立派になって。……ってそうだあんた、まさかとは思うけど、お仲間の皆さんに迷惑掛けてんじゃないだろうね!?」

「勘弁してくれよ……まいったなぁこりゃ……」

人目も憚らず炸裂する母ちゃんパゥワー。巨体のランドもこれには頭が上がらない。戦っていたときの勇敢さはどこへ行ってしまったのだろうと、キルゴアはその光景に苦笑していた。

そんな和気あいあいとした輪の外で、静かに佇む男達が居た。特に知った顔が居るでもなく、盛り上がっている間に割って入る気にもならない。そんな無愛想な空気を纏う男が3人。

「おっさんは知り合いとか来てねぇのか?」

「居るわけなかろう。そういうオマエはどうなんだ?」

「……。サイアス、あんたは?」

「……」

「愉快だねぇ……」

ガーランドとレイとサイアスは、一歩外からその光景を見ていた。知り合いなんてほとんど居ないから、こうなると蚊帳の外なのだ。まぁ俺達には関係ないさ、と静かにしてようと思った彼ら。……しかしそうは問屋が卸さない。そろりそろりと、彼らの側に寄ってくる影。一つや二つではなく、数はそこそこ多い。そして、その影の一つが意を決したように、彼らに話しかけた。

「あの……俺、感動しました！」

「あん？」

振りかえったレイの視線の先に居たのは……分厚い鎧を着込んだ兵士達。ボディーガードをしていた連中である。

「もし宜しければ、是非俺に武術を教えてください！」

「俺はあの剣技を！　神速の抜刀術を是非！」

「俺はあの大渦を出す技を！　お願いします！」

「これは……」

「……愉快だねぇ」

男たるもの、強い者に惹かれるのは古今東西万国共通である。曲がりなりにも武力を持つ兵士が、レイ達に憧れを抱くのも無理は無い。そんなわけで、予想外の方向から意外とモテモテな男三人。わいわい取り巻かれて珍しく困惑していた。周りの全員がむさ苦しい

男であり、全く華が無いのは仕方ないと言える。

「ええい、寄るな！」

「そんな……！？」

「あたしに何か用かい？」

「いえあの、用というわけではないんですが……」

しつこい男相手に危うく銃に手を掛けそうになるアースラ。勇気を出して話しかけたものの話題が思いつかなくて焦る男と、その意図を全く読めないリン。

当たり前だがトリニティの美人４人組にも富豪と兵士が半々くらいで擦り寄って行っていた。勇ましさや華麗さが一部の男性の心を鷲掴みにしたらしい。ゼノの鋭い眼光やアースラの威嚇でビビッている者も多く居たが、邪険にされて何故か逆に喜んでいる危ない者も結構居たとか居ないとか。

≪みんな元気そうだなぁ≫

≪良い事じゃん。久々に会ってもみんなそんなに変わってないね≫

さて、そんな中で一部に数人で固まって中々動かない者達も居た。兵士などやリュウ達の知り合いとは違う、豪華な服を着て難しい顔をした男達だ。こそこそと小声で話しながら、何かを伺うようにリュウ達やナギ達全員の動向に気を配っている。

マーロックが招待したゲストの大半と知り合いであるリュウは、

一通り彼らと話やら顔出しをして、ちょっとフリーになった所だった。僅かに空いたその隙を狙って、こそこそしていた集団の中から一人が抜け出て、リュウへと近付いていく。その集団の他の人間達は一斉に「しまった」と言う顔をして、慌てて少しずつだが距離を縮めて来ていた。

「初めまして。リュウ君……だったかな。こうして会うと、聞くのとはまた印象が違うな」

「？　えーと、あなたは？」

スッと握手を求めるように手を差し出すその男。肌は浅黒く長身。金色の短髪で白いスーツらしき奇妙な服装。種族的には人間だろうか。気配的に只者ではなさそうで、正直に物を言う人間にはお世辞にも見えない。一目でアルとは違った意味で胡散臭そうと勝手な評価をリュウは降した。

「失礼。私の名はメベト。メガロメセンブリア元老院の議員を務めている。君にはガトウの上司、と言った方がわかりやすいかな？」

「……ガトウさんの？」

これまた懐かしい名前が出てきてリュウは驚いた。ガトウの上司。恐らくそこだけは本当だろう。それと同時に、リュウは少しだけ気を緩めた。あの秘密主義なガトウが不用意に他人へ自分の事を漏らすとは思えないからだ。一応挨拶としてリュウが握手に応じると、メベトと名乗ったその男は唐突に話を切り出した。

「単刀直入に言おう。我が国の魔法衛士部隊に来る気はないか？無論、君達全員でだ。待遇の方は大いに期待して貰って構わない」

「はい？」

「「「……」」」

突然の勧誘にピシッと空気を凍らせたのは、メベトが出てきた集団の者達だ。数人がやられた、と苦々しい顔をしている。そう、彼らの目的はメベトのそれと同じだった。即ち、リュウ達を自分の陣営に取り込む、という事である。

集団は魔法世界各国の重鎮達であった。お互いが同じ目的だと察して牽制し合っていた所で、メベトが先制攻撃を仕掛けたのだ。その彼らにとって、先制を許したこの状態は非常に面白くない。もし万が一リュウ達の戦力をメガロメセンブリアが取り込んだらどうなるか。いつその矛先が自分達に向かないとも限らない。

何しろ大量破壊兵器も同然の連中だ。これを取り込めれば、それだけで一個師団どころか現在の各国のミリタリーバランスを根底から覆す事さえ可能だろう。勝負の最中から、既に水面下でドロドロの争いが行われていたのだ。

「あの……俺達はそういうのはちょっと……」

「それなら我がヘラス帝国はどうかな少年よ？」

メベトに負けじと横からヌッと出てきたのは、やけに筋肉の逞しい男性。片目に眼帯をしているが、開いている方の眼光は強烈だ。まるでずっと最前線で戦い続けてきたような、歴戦の戦士の如き雰囲気を纏っている。

「……あなたは？」

「俺の名はデモネド。ヘラスで軍を率いている。階級は大佐だ。もしウチに来てくれるなら、そこのそいつが提示する額の3倍は用意すると約束しよう。どうだ？」

「……」

そいつ、と指差されたメベトは冷ややかな視線をデモネドと名乗った眼帯男へ送っていた。隻眼から放たれる眼光が、それをしっかりと受け止めている。あまりに露骨なその駆け引きを皮切りに、負けるわけには行かないと焦った各国の重鎮達が、一斉にリュウの仲間やナギ達の元へ駆け寄っていった。

「不本意だが貴殿らの実力には素直に敬意を表する。我がアリアドネー魔法学園の非常勤講師として雇われる気は無いか？　これは栄誉な事だぞ。私が直接スカウトするなど滅多に……」

「すみません、そういうのもちょっと……」

「なら我が国は……」

「だから、そんな気はありませんから……」

どんどん激化していく勧誘の嵐。ぶっちゃけ面倒くさい。こうなると厄介だ。ハッキリとどこかの国に属する意思はないと示しても、次から次にやってくる。リュウの仲間達も全員リュウと同じで面倒くさそうに対応している。一応今は穏便な空気だが、そのうちキナ臭くなりそうなのは明らかだ。

当然のように紅き翼にもその手の勧誘は行っていた。だがアルやゼクトはその手のはぐらかしが上手く、詠春は堅物。ナギはおバカ。そのせいで、自然と話の通りやすそうに見えるリュウに攻撃が集中していた。

「皆さん！　その辺にしておきませんか！」

「「「！」」」

収集がつかなくなり掛けたところで、パンパンと手を叩き注目を集めたのは影の薄かった悠久の風最高責任者だ。マーロックがその後ろに控えており、どうやら打ち合わせてこの流れを止めようという事らしい。実際あまり手応えを感じられていなかったせいもあり、一大リクルート合戦はそこで一旦の収束となった。

「もし気が変わったら、ここへ連絡してくれたまえ」

「……」

それでも諦めきれない何人かが、ならばと連絡先の書かれた名刺や用紙を次々とリュウに預けていく。段々と重くなっていく紙の束に、なおうんざりするリュウである。

≪イヨ、相棒！　モテるねこの！≫

≪お前ね……≫

ボッシュのからかいに反応する元気もなく、リュウはゲソッとした表情だけを返すのだった。

ここ来賓席にリュウ達が来た事で起きた混乱もようやく落ち着きを取り戻し、「妖精ん所へみんなを招待してご飯でも」と考えていたリュウのすぐ隣へ、再びザシャッと何者かの足音が聞こえてきた。

まだ誰か勧誘にでも来たかいい加減にせいやと、「ああん！？」と声に出し下からえぐる様にガンを飛ばして振り返る。

「大丈夫ですか？」

「……え？　ああ、はい」

ある意味戦いのときよりもぐったりしていたリュウに話しかけてきたのは、予想に反して鎧兵士部隊の隊長格らしき人物だった。何故隊長とわかるかというと、目立つように一人だけ鎧が金ぴかだったからだ。それにしても疲れているとは言え、リュウに気配をほとんど感じさせずに隣に立ったこの男は、中々の手練のように思えた。

「……？」

「何か？」

「あ、いえ……なんでもないです」

その隊長はスッポリと頭を覆う兜を着けていて、目の部分のスリットからしか顔が見えず、どんな人相なのかもわからない。顔の部分をじっと覗き込んでしまったリュウは、何か彼に違和感と言うか、ざらっとした感覚を覚えた。

「そうですか……恐縮ですが、よろしければ握手などして頂けませんか？」

「……はい？」

何の用かと思いきや、力の抜けるその言葉にカクンとリュウは砕けた。厳格な人と見せ掛けて意外とお茶目な人なのか、と苦笑しながら認識を改める。

「あ、隊長ずるい！」
「俺達には駄目って言った癖に！」
「そーだそーだ！」

「……」

目敏く気付いた周囲の兵から飛ばされる野次。それが全く耳に入っていないかのように、スッと手を差し出す隊長。その態度にやはりどこか違和感を感じたリュウだが、戦いの影響と勧誘攻撃にふらふらだったので、さして気にも留めなかった。求められるままに手を差し出し、ちょっとした芸能人のような気分で快くそれに応じようとして――――

差し出された手は、迎えようとしたリュウの手をするりと通り過ぎた。

「え……」

「……」

一瞬、リュウは今何が起こっているのかを理解できなかった。
感じた感覚は、今日の戦いで蓄積されたものではない、新たな痛

み。

その刺激を送ってくる場所は、手のひらではなく自分の腹。

鎧に覆われた手だった筈のそれは、とても奇妙なモノに変化していて。

「……！」

「……」

ゾブリ、と触手の様な物体がリュウの腹を貫いていた。

第十三章　7、強襲

「……っっ！」

「あ、相棒！！」

リュウの頭に警報が鳴り響く。

貫かれている痛みもそうだが何より、この触手らしき物体。触れているだけで、その部分が焼かれる様な感覚……。これには覚えがある。忘れる筈も無い。かつて旧世界の山奥、ドラグニールで相対した自分の天敵とでも言うべき力、ドラゴンキラー。ならばこの、兵士隊の隊長の姿をしているのは、あの時自爆的に放った魔法で石と化した筈の――――

「バ……」

――バルバロイ。そう言葉に出そうとして、込み上げてきた己の血が口を塞いだ。必死に頭を回転させる。今一番しなければならない事は、この傷に治癒魔法を当てる事。貫かれた箇所が心臓の位置だったら即死だった。危ない所だったが、それでもこの傷は対処を誤れば致命傷になる。そして傷を治しながら、ここを離れる。こいつがバルバロイだとすれば、その目的は自分の命。周りを危険に晒す訳にはいかない。

「……」

「うぐっ！？」

ゾブッ……と耳に残る音を立てて、兵士はリュウの腹から変化し

た腕を引き抜いた。

「他愛無いね」

ようやく口を開いた兵士の声は、先程までの精悍な男の物ではなくなっていた。ヴンと兵士は光に包まれ、小柄な少年の姿へと変わっていく。そこに居たのはリュウの読み通り、冷たい顔をした白髪の少年だった。

「相棒！　しっかりしろぉ！」

「か……はっ……」

「……」

ボッシュの呼びかけに応答出来ず、崩れ落ち腹を押さえ血反吐を吐き捨てたリュウを、少年は氷のような目で見下ろしていた。そして血で塗れた己の腕の感触を確かめると、顔色一つ変えぬままに今度はリュウの首目掛け、再び触手へと変化した腕を振り下ろ――――

「リュウ！！」

「！　……ちっ」

――す寸前、少年はその場を飛び退いた。ナギの魔法の矢と、詠春の斬撃。その二つが自分を狙って飛んで来ていた。二人の瞬時の判断が、文字通り間一髪でリュウを救った。

「アル！」

「わかっています！」

「モモ！　あなたも！」

「了解ー！！」

ナギの一声でアルが、ゼノの声でモモがリュウの側に駆け寄ると、すぐに治癒の魔法を唱え傷を癒し始める。炎の吐息メンバーの三分の一とナギ、詠春がリュウを庇うようにその前に立ち、残りとゼクトは見物客達の警護へと回る。一変して、場に緊迫した空気が形成されていた。

「てめぇは……！」

「やぁ、ナギ・スプリングフィールド。直に会うのは二回目かな」

ナギは、少年の顔に覚えがあった。随分前の事で名前は忘れてしまったが、麻帆良で初めてリュウに会った時、勝負を邪魔したヤツだ。その時は、自分も危うく殺されかけた。今もこうしてリュウを狙った。理由はさっぱりわからないが、“敵”だと判断するには十分過ぎる。

「挨拶なんざどうでもいい！　よくもリュウをやりやがったな！俺達全員を相手に無事で済むと思うなよ！！」

ナギをはじめとした紅き翼の４人、リュウを除いた炎の吐息の１２人。彼ら全員、断定していた。こいつは正体不明の“敵”だと。既に取り出していた武器を持つ手に、力が篭る。

「……威勢がいいね。でもそれはこっちのセリフさ。君達こそ、今

の弱々しい力でこの僕を止められると思うかい？」

「……っ！」

少年の言葉に、ナギは僅かに汗を滴らせていた。この少年の力は未知数だが、強敵である事は間違いない。今、自分達は皆、例外無く力を消耗している。炎の吐息のメンバーは勝負で使ったセブンスセンスの影響で、大きな力は使えない。ナギ達にしても、全員普段の力の半分も出せるかわからない。

唯一“変身”という切り札を持つリュウがやられている現状で、背後に居るこれだけの見物客達を守りながら戦うというのは、厳しい物がある。

「うわ……」

「これは……いけません、早く消毒を！」

少年と対峙しているナギ達の後ろで、リュウの傷を見たモモが顔をしかめ、アルが顔色を変えていた。リュウの腹の周りは、まるで強烈な酸で溶かされた様に焼け爛れている。それが、二人には毒か何かのせいに見えた。

「だ……大丈……夫……だから……！」

もし仮に毒だとしても、リュウの持つ魔法発動体“竜のなみだ”が防いでくれる。この焼け爛れの原因は、ドラゴンキラーだ。だがその事を二人に説明している暇は無い。相手は“あの”バルバロイ。今は一刻も早く傷を治して動けるようになる事が先決。アルとモモの手を借りれば自分はすぐに復帰出来る。リュウはボッシュに自分はいいから他の援護に回れと念話で伝え、とにかく回復に専念しよ

うとして……

「……“結界”」

白髪の少年がそう一言呟くと、その足元から波紋のように白い光が放たれた。それは辺り一面を這うように広がっていく。

「!?　魔法が……!?」

「あ、あれー!?」

リュウの治癒を行っていたアルとモモの二人の掌から、魔力の光が消え去った。治癒の光を放っているのは、“龍の力”を元としているリュウ自身の治癒魔法だけとなる。

「な、何だと!?」

「気が消えた……いや、消された!?」

不可解な現象にナギが声を荒げ、詠春は驚きを隠せない。刀に纏わせた光が失せ、ナギの握る杖が単なる木の棒に成り下がる。少年の足元から広がった光は、その場に有る全ての気や魔力を掻き消していた。

「馬鹿な……あり得ん!」

「まさか……魔法無効化能力!?　そんな筈は……」

「……僕のは一時的なものさ。でも、今はこれで十分」

再び気や魔力を纏おうとしても、光の波紋の影響が残っているらしくまともに力が発揮されない。予想しなかった事態に衝撃が走る。これでは翼をもがれた鳥も同然。この場に居る全員が、攻撃も防御も大きく弱体化した事を意味する。

「……」

気が付けばバルバロイの周囲に、実体の石の矢が大量に浮いていた。それはリュウ達だけでなく、後ろの客達をも襲ってなお余り有る程の膨大な数の暴力だ。標的とされた見物客達は、兵士も含めてごく一部を除き、事態のあまりの突飛さに現状把握が出来ず呆然としていた。

「ついでだから、全員消えて貰おうかな」

「！！」

少年に躊躇いは無い。鋭利な石の矢は、切っ先をその場に居る全ての人達へ向け、唸りをあげて飛んで行く。自分一人分ぐらいなら、弾くのは容易。だが、後ろの見物客達はそんな芸当は出来ない。ナギは“人を助ける”という己の理念に従い、リュウの防御をアルと彼の仲間に任せ、意思を汲み取った詠春と共に客達の前に躍り出た。

「お前ら！　そこから絶対動くんじゃねーぞ！！」

下手に動かれては守れる者も守れない。ナギは見物客の集団に向けて言い放つと、護衛に回っていた炎の吐息メンバー三分の二とゼクト・詠春と共に、石の矢からの防衛戦を開始した。

「くっ……！」

弱い障壁すら張れないせいで、素手で石の矢を弾く度に、あちこちに増えていく擦り傷や切り傷。体力が万全の状態だったなら。または気と魔力が使えたら。どちらか一つさえあれば、これほどの苦戦はしない。無い物ねだりをしながら、それでも石の矢を弾き落としていく。

「ひ、ひいい！！」

「！　馬鹿動くな……」

「ぎゃああっ！！」

「っ！」

恐怖に駆られ、ナギの制止を振り切って逃げ出そうとした某国の重鎮が、腕を、足を、背中を、石の矢で串刺しにされた。集団から離れた為、ナギ達の手もそこまでは届かなかった。

「くそぉっ！！」

「……」

犠牲者が発生してしまった事に顔を歪めながらも、ナギ達は必死に石の矢を叩き落としていく……

「……ぐ……」

迫る石の矢全てを叩き落した後の光景は、先程の勝負終了後よりも酷かった。何しろ数が数だ。増えた傷から流れ出る血が、失われ

ていく体力そのもののように思えてくる。それは先頃既に多くの血を流している彼らから、集中力を奪うには十分だった。

「……」

白髪の少年の目はリュウではなく、観察するようにナギ達の方を向いていた。その瞳に映っているのは、まるでこの先の何かを暗示するような光景。丁度集団が中央から二つに割れて、メガロメセンブリア元老院議員やアリアドネー騎士団総長を筆頭とした人間達を“紅き翼”が。ヘラス帝国の者を始めとした古き民である他の見物客を“炎の吐息”が。それぞれを代表するように、矢面に立っている光景だった。

「う……あ……」

「！　あの方、まだ……た、助けないと！」

「……ミイナ、何を!?」

石の矢で足や腕を貫かれた男は、まだ息がある。集団の一番後ろに居たおかげでその事に気付いたミイナは、持ち前の行動力で彼を助けようと集団から飛び出した。弱いが治癒の術なら自分も使える。彼らが守ってくれているこの集団の中にまで引っ張ってくれれば、きっと何とかなる。そう考えての行動だった。

「……」

少年は目だけを動かして、集団から離れたミイナを追った。特に彼女が気に触ったと言う訳ではない。脅威となる力を感じたという訳でもない。

……しかし、放っておく理由も特にない。集中力を落としていたナギ達の、一瞬の隙を突いた形だった。白髪の少年は、飛び出した飛翼族の少女の目の前へと瞬時に移動した。鞭のようにしなる触手と化したその腕を、大きく振り上げながら。

「!?　ミイナッ!!」

「え……!?」

「!!　やめ……!!」

エリーナの悲鳴にも似た叫び声と、焦燥に彩られたナギの声が重なり――

――――鮮血が、宙を舞った。

「!」

――――僅かに遅れて、キィンと響き渡る、澄んだ金属音。

「やらせ……ない……っ!」

……切断された触手が血を撒き散らしながら地面へと落ち、折れ飛んだ刀身がカランと音を立てて地に転がる。

「あ……リ、リュウ……さ……ん……!?」

塞がりきっていない腹の穴からポタポタと血を流し、額に玉の様

な汗を浮かべたリュウが、へたり込んだミイナの前に立っていた。

「っ……！！」

歯を食いしばり、続け様に放ったリュウの蹴りがバルバロイの脇腹にヒットし、誰も居ない方向へと吹き飛ばす。反動が腹の傷に響いて苦痛に顔が歪む。だが目論見通り、ナギ達を含めた集団から引き離す事に成功したリュウは、折れてしまった剣を投げ捨ててその後を追う。

リュウはアルや仲間達が自分へと飛来する石の矢を払い除けてくれた後、傷に治癒の魔法を当てつつ、一時もバルバロイから目を離さないでいた。そして動いた瞬間、咄嗟に追随するように瞬動で駆けて、ドラゴンズ・ティアから取り出したフィランギで、触手を切断したのだ。

「……く……っ！」

何事もなかったようにふわりと着地したバルバロイと相対し、腹の傷の痛みに喘ぐリュウは、責任を感じていた。バルバロイの狙いはほぼ確実に自分である筈だ。だから、この場で襲われた皆については“巻き添え”以外の何者でもない。自分のせいで、これ以上他の人達が傷付くのは嫌だった。

「……そう言えば、以前にも君には腕を斬られた事があったね」

白髪の少年バルバロイは、変わらない氷の様な表情のまま、抑揚の無い声でそう言い放った。バルバロイが言っているのは初めてリュウが変身した時の話だ。その時は、後で腕を接合しなければならなかった。だが今は、斬られた筈のバルバロイの腕が、まるで内側

から新しい腕が生えてくるように再生している。

「お前の狙いは……俺だけだろ……」

「……」

リュウは、何とかしてバルバロイの意識を自分だけに向けさせたかった。どうやってあの石化から戻ったのか。何故今、この場に現れたのか。気になる事は山ほどあるが、それ以上に他の人間に手を出して欲しくない。気も魔力も封じられた状態では、以前のドラゴナイズドフォームと互角にやり合う力を持つこいつに、ナギ達や自分の仲間ではまず勝てない。対抗できるのは、リュウだけなのだ。

「……」

ギリっと尚も歯を食いしばり、余裕が無いリュウと相反するように、バルバロイは静かだった。その目はリュウだけでなく、何故かその後ろに居る集団へも向けられ、交互に視線が動いている。

「……声がね、聞こえるんだ」

バルバロイは、突然妙な事を言い出した。リュウは、そんなバルバロイの話よりも一挙手一投足の方に細心の注意を払っていた。左手で腹に治癒の魔法を当てているが、このペースでは完治に時間が掛かる。なんとか“このまま”でこの場を打破する術が無いか、頭を回転させていた。

「何故だろうね。今僕は……君だけじゃなく、他の人間も殺したい気分なんだ」

「！！」

再び、バルバロイの周囲に石の矢が浮かんだ。今度は、前の物よりもさらに数が多い。

――何故自分だけを狙ってくれない！？

リュウは焦った。こいつは本気だ。嘘や冗談を言うヤツじゃない。自分以外も標的に、皆殺しにしようとしている。

「今の君に、防げるかい？」

「こ、この……！」

リュウの頭上を飛び越えて、再びナギ達の方へと襲いかかろうとする石の矢の大群。しかし気と魔力は封じられて使えなくても、龍の力は使える。リュウは咄嗟にポケットに手を突っ込み、残り少ない力を絞り出す様にスーパーコンボを発動。極大のショットガンを放って石の矢全てを塵へと返した。

「……はっ……はっ……」

「……」

バルバロイは、かつてのように暴走する素振りを欠片も見せない。そもそもドラゴンキラーは半身が黒く染まる不気味な姿だった筈なのに、その姿にならずに効果だけ発揮している。おまけに自分だって魔力が使えなくなった筈の空間で、どう見ても魔法のようにしか見えないあの石の矢。わからない事が多すぎて、リュウは考えが纏まらない。

「今ので大分力を消耗したようだね。“あの姿”にはなる気はない

のかな？」

「……」

前にもドラグニールで似たような問いかけをされた事を、リュウは思い出した。あの時は素の状態では全く叶わず、やむなく変身という選択を取るしかなかった。今度はどうだ。体調が万全なら、あの時の様に一方的に殴られる事はないと思いたい。だが消耗し、怪我まで負った状態で、こいつを退ける術……今度も、やはり“変身”する以外に思い当たらない。

しかし……

「……」

リュウは迷った。リスクがある。暴走なんかよりもハッキリと、自分が消えてしまうかも知れないという恐怖がある。だから、迷っていた。考えても他に選択肢が見つからないのに、それでも必死にそれ以外の可能性を模索していた。

「そう。まだあの姿になるつもりはないんだ。……まぁ、それならそれでいいよ」

「！？」

リュウは思考を中断して、バルバロイの態度に疑問を抱いた。バルバロイは、自分に対抗する為だけに魔法世界に生息するドラゴンを大量に取り込んで、ドラゴンキラーを得る程の執着を見せていた……筈だ。己の意識の混濁さえ、厭わずに。その事と比べると、今の態度には違和感がある。まるでリュウへの執着が、バルバロイの

中の優先順位で最上位ではなくなったかのようだ。

「どっちにしても、僕には好都合だから……！」

「！！」

そう言ったバルバロイが上空に手を掲げると、そこに巨岩が召喚された。いや、“巨岩”という言葉では生ぬるい。それは“山”だ。直径数ｋｍはあるほどの“山”を、根こそぎ移動させたかのような超巨大な岩塊。あまりの大きさに太陽の光が届かなくなった機械浜の地で、バルバロイはリュウへと迫る。

「さぁ、変わって防ぐか、変わらずに皆と共に死ぬか、好きな方を選べばいい」

そしてバルバロイが掲げた手を振り下ろすと……巨岩は、真っ直ぐに落下を始めた。自分だって巻き込まれる規模なのに、涼しい顔をして。

「っっ！」

考える暇すら貰えない。何でだ？　何でこんな事になった？　自分が自分じゃなくなるのと、この場に居るみんなの命。その二つを天秤に掛けられたら、後者を取るしかないじゃないか。他に方法なんて、切羽詰まったこの状況では例えあったとしても、思い付かない。……思い付けない。

「くそぉぉぉぉ！」

リュウの叫びに呼応するように、紅く禍々しいオーラがその全身

から立ち昇った。リュウの身体が、半人半龍のそれへと変化していく。後方に居る大勢の人間の目の前で、リュウの真の姿、ドラゴナイズドフォームが降臨した。

「ウゥオオォ！！」

落ちてくる“山”に向け、リュウは咆哮と共に、爪を一閃させる。“ウラガーン”。真横に薙ぐような爪の一振り。たったのそれだけで、直径数ｋｍはある筈の“山”は、粉微塵に粉砕された。瞬きをするのと等しい時間の間に、真上にあった筈の“山”は、原形を無くしていた。

「オアァァァ！！」

さらに上空へと向けられた両の掌から一瞬だけ放たれた熱線が、空を埋め尽くす小石と化した大群を、一つ残らず蒸発させた。たった一人の存在が、目にも止まらぬ速度で山さえ消してみせる。まるで夢物語の様な桁の違う力を、リュウは見物客全員に見せ付ける形となった。

「な……何なんだアレは……！？」

「か、彼は人間じゃあなかったのか……！？」

それは恐怖だ。根源的な恐怖だ。今のリュウの姿を初めて見た見物客達の反応は、一様に同じものだった。見ているだけでカタカタと体が震え、バルバロイよりむしろリュウに対して怯えている。今のリュウは、そこに居るだけで巨大なドラゴン以上の威圧感を放つ存在になっていた。それが人間の、巨大な生物に対する潜在的な恐怖心を呼び起こしていた。

「……流石だね。化物」

「……お前には、言われたくない」

リュウは、これ以上この姿で居たくない。腕を斬られたバルバロイと似たように、塞がりかけていた腹の傷がさらに高速で修復されていく。それと共に、僅かずつだが自分が失われていく気がする。

……すぐに終わらせる。そう決断したリュウは、ナギの目にすら影しか捉えられないほどの速度で、バルバロイの横を通り過ぎた。

「がっ……！？」

ヴィールヒ。爪を振り抜く、何でもない只の一撃。しかし、桁の違う一撃。以前はあれほど苦戦した筈のバルバロイの体が、上下に千切れ飛んだ。断末魔の声を上げる隙すら与えない。文字通りの瞬殺。リュウが受けた感触は精々、バルバロイの体に宿るドラゴンキラーが、じわりと指先を焦がした程度だった。

「……」

「……フ……フフ……」

「！」

……笑い声。あり得ない。リュウは声の出所、自分の後ろへと咄嗟に振りかえるが、そこにバルバロイの体は無かった。分れた筈の、どちらの身体も。感覚の鋭敏なリュウは即座に察知した。上だ。

そしてそこを見上げたリュウの目は、驚きで見開かれる事になった。

「フフ……僕はね、力を手に入れたんだ」

――――頭に、リュウと似た角のような物が生えている。両手両足にも、リュウと似た甲殻の様なものが付いている。

「ドラゴンキラーよりもずっと強力な……」

――――背中に、リュウのそれよりも禍々しく尖った突起物がある。リュウと同じような文様が、顔から上半身に掛けて走っている。

「君と……同じ力を！」

――――全身に、リュウとよく似た蒼いオーラを纏っている。そう、それはまるで……

「ドラゴナイズド……！？」

バルバロイの姿はリュウとオーラの色や各部の形状こそ若干違えど、紛れも無くドラゴナイズドフォームそのものだった。

（……そんな……！）

そんな筈はない。自分のこの姿は、元々ユンナによる改造が原因だ。そのユンナはもう居ない。現実世界のドラグニールに機械はあったが、ユンナの投影機器以外の大半は破損していたし、ボッシュの様な存在でも居なければ解析すら無理な筈。

「まさか……」

一体誰がバルバロイをこうしたかと考えて、リュウは一つの結論に辿りついた。

“完全なる世界”

かつてバルバロイが口にした、その組織が関わっているとしか思えない。石化を解除し、数多のドラゴンを取り込んでいたバルバロイに、さらに何らかの改造を施したのだ。そう考えれば、一応の辻褄が合う。だが、わからないのは目的だ。単純に自分を倒す為だけなのか。それとも別の目的があってバルバロイを改造したのか。

「……！」

リュウは今この時、浸食の影響が出ている事を感じた。昔の記憶の中身が、思い出せない。あの姿の詳細を自分は“知っている”筈だという事は覚えている。だが、肝心の中身が思い出せない。思い出そうとしても、霞のように消えてしまう。

「フフ……リュウ……君の見ていた世界……見えるよ……ボクにも」

「……！」

宙に浮かぶバルバロイは、蒼いオーラを纏っている。龍の力ではない。似た感じを受けるのは、あくまで取り込んだドラゴンの影響だ。ではあの力の出所は一体何だ？　未だ後方に居るナギ達から魔力や気の発現を感じ取れない事から、この場にあの“結界”の効果はまだ生きている。つまり魔力や気ではない。あの力の正体がわからない。

「……そう、僕達は同じだ」

バルバロイの声に、リュウは分析の思考から引き戻された。
同じ？　リュウはそれを否定したい。同じじゃない。こんなヤツと一緒にして欲しくない。でも、どこかに否定しきれないと思う部分もあった。それが、たまらなくもどかしかった。

「……同じ、ヒトにあらざるものだ」

元々人間でなかったくせに、今更何を言うのか。だが、改めてヒトとは“違う”事を強調されると、その言葉は重かった。

「……」

見上げるリュウ、見下ろすバルバロイ。まるで背後に居る多数の人間を守るように立つリュウの姿を見て、バルバロイは、笑った。

「はは、リュウ。今度は……あんなお荷物を庇っている余裕があるかな？」

「……！！」

「さぁ始めようか……リュウ！！」

リュウへ向け、背中の突起物から蒼い光を噴射しながら迫り来るバルバロイ。正面からの突撃。速度は並。だが、リュウに避ける選択肢は無い。もしも避ければバルバロイは、そのまま後ろの集団へと突っ込んでいくだろう。止めるしかない。いくらドラゴナイズドの姿を真似たとしても、力までは真似出来ない筈。

「みんな伏せてろ！」

山さえ粉砕する爪の二連撃、タルナーダ。圧倒的な力を秘めたリュウのその攻撃と、バルバロイの同じくオーラを纏った脚が激突した。一瞬で天地は裂かれ、尋常でない威力の衝撃波が機械浜を襲う。ナギ達は全員、リュウの言葉通りに伏せたおかげで吹き飛ばされずに済んでいた。

「なっ！？」

「フフ……」

（互角！？）

リュウの爪をまともに受けて、バルバロイの足に変化はない。むしろ自分の腕の方に、同じくらいの衝撃を返してきている。こんな馬鹿な事があるか。いくらバルバロイがドラゴナイズドと似た姿になったとは言え、修行という上乗せがある今のこの自分と互角だなんて信じられない。信じたくない。これは偶然か何かだとリュウは思った。

「タルナーダ！」

再び振るわれるリュウの爪に、やはり同種の蹴りと踵落としで対応するバルバロイ。結果は先程の焼き直し。二度も続く偶然なんてない。互角なのは事実だった。だが不可解だ。二度打ち合ってわかった。単純な力やスピードというスペックでは、やはり自分の方が大きく優っている。なのに……

「お前は一体……！」

「力だ。力が湧いてくる……ハハ……ハハハハハ！！」

「！！」

愉悦という感情を露にするバルバロイの爪と蹴りが、リュウを襲う。まるでリュウのヴィールヒ・ウラガーン・タルナーダと、見た目も威力も瓜二つ。受け止めながら、リュウは察した。スペック自体はやはり優っている。違うのは“出力”だ。上限が取り外されているように、バルバロイの“謎の力”が最初からフルパワーを出し続けている。そして、それが途切れる様子は無い。

「くっ！！」

力を使えばそれだけ早く侵食は進む。受け止める事で発生する衝撃波の威力だけで、既に必殺技と呼べるだけの被害を周囲に及ぼしている。これではナギ達への影響も計り知れない。たまらずリュウは隙を見てバルバロイを上空へと蹴り飛ばし、自身も背中のバーニアから紅い光を噴出させて後を追う。

「！　……そう。まだ、あのお荷物を庇うのか」

「……」

バルバロイは興奮状態が僅かに納まったのか、リュウの対応を冷ややかに見ていた。リュウのその後ろに居る人間達の盾になるような行動に、何か不満の様なものを感じていた。

「君は焦っているね。その姿で居る事に、何か不都合でも生じたかな？」

「……」

妙に饒舌なバルバロイ。リュウが攻撃を交えて相手の事を推し計れたのと同じように、バルバロイにも、リュウの僅かな感情が伝わっていた。そのものズバリ、指摘通りだ。

「ボクが思うに君はヒトに成りきれていない。竜にも成りきれていない。実に中途半端だ。潔く、片方は捨てたらどうだい？」

「……」

捨てる、なんて選択肢はあり得ない。外側が竜の民で、中身は人間。今は、それが“自分”なんだから。進んでどちらかを捨てるなんて、あり得ない。そういう意味で後方の人間を守るというのは、自分がヒトである“証”でもある。

「……そう」

己の喋った言葉に一切の同意を示さないリュウを見て、バルバロイは僅かに何かを考える素振りを見せた。

「……なら、こうしよう。君が大事そうに庇っている“全てのお荷物”を、ボクから守れるかどうかのゲームだ。それほど大事なら、守りきって見せなよ」

そう言うと、薄気味悪い笑みを浮かべたバルバロイは……蒼い光を噴出させ、凄まじい速度で、その場から遠ざかって行った。

「！？」

逃げた!?　……そんな訳が無い。逃げる理由がない。そもそも今ヤツは後ろの人間達を“守って見せろ”と言った。ならばどこへ行ったのか。わからない。少しの間警戒したリュウだが、バルバロイが戻ってくる気配はまるでない。

「……」

戻って来ないという事は、その先に何かがあるという事だろうか。向かった先に何がある？

そう考えて、リュウはハッとした。バルバロイが向かった先。その方角のずっと向こうにあるのは……

……メガロメセンブリア。

魔法世界の首都だ。“全てのお荷物を守って見せろ”と言い、向かった方角は首都。……ではこれからバルバロイが何をしようとしているのか。……一つしか、思い浮かばない。

「……！」

リュウは、すぐに後を追おうと背中のバーニアに意識を向ける。

≪相棒！≫

≪！　……ボッシュ、俺はあいつを追う。後頼む≫

≪わかってっけどちょっと待ってくれ相棒！　マスターが話があるって言ってんだよ！≫

ボッシュからの念話に、リュウは後方へ振り向いた。集団から一

人前へと出て来ていたマスターはどこから取り出したのか、メガホン形の拡声器の様なものを手にして自分のほうを向いている。

『さっきのあいつに、あの“腕輪”の反応があった！　気をつけな！　……ってマスターが言ってますよ！』

「……」

腕輪……あの“人を操る腕輪”だろうか。マスターが言うなら間違いない。あのバルバロイの態度はそれに影響された物だったのか？　ひょっとすれば、あの腕輪も完全なる世界が……？　いや、今はそんな事よりこれからヤツがする事が阻止しなければ。

「……！」

マスターの助言を頭の片隅にしっかりと残し、少しずつ失われていく記憶の事を、今は考えないようにして、リュウはバルバロイの後を追うのだった。

第十三章　8、二つ名

魔法世界首都、メガロメセンブリア。

総人口約６０００万人を有する巨大都市。この数字は街に住む“人間”に限った話であり、隠れ住む亜人等も含めれば人口はさらに多い。当然そこに住まう全ての人間は、大なり小なり魔法を使う事が出来る。街の至る所に科学と魔法の融合した技術が溢れていて、上空には魔力を利用した、様々な型の飛行機械が闊歩する。まさに魔法世界の顔と言っても良い、高水準な都市国家だ。

商店街で響き渡る、客を呼び込む威勢のいい掛け声。娯楽施設でレジャーを楽しむ穏やかな笑い声。いつも通りで何の変哲も無い、のどかな一日。少なくともそこに住む人々にとっては、そうであるはずのこの日。大都市のちょうど中央にある大きな通りに……ソレは降り立った。

「……フフフ……」

亜人。

一目で“人間”ではないとわかる異様な風貌。薄らと蒼いオーラを纏い、腕の先や足の先が甲殻のような物に覆われていて、背丈は大きくない。薄気味の悪い笑みを浮かべたソレは、静かに呟く。

「じゃ、ゲームの始まりだ」

その異様な風体と漂わせる空気が、ざわざわと道行く人々の注目を集めている。だが誰も何かをしようとはしない。“亜人”というのは魔法世界ではごく有り触れた存在であり、中にはソレよりももも

っと凶悪な風貌を持つ魔族と呼ばれる人種も居る。ソレについても、「珍しい格好だが、きっと魔族系に順ずる人なんだろう」と、すれ違う人々は、そう思った。

「……“結界”」

ソレの足元から、光の波紋が広がる。……悪夢が、始まった。

「お、おい！　あれを見ろ！　飛行船が……！？」

通りを歩いていた一人の男が事態を察知し、声を張り上げて指を指す。空に浮かんでいた飛行船の一隻が突如としてその制御を失い、機首を地上へと向けて落ち始めた。突然の出来事人々はざわついているが、まだ誰も慌てた様子は無い。人々は一斉に自分の杖を取り出し、落下する飛行船へ向け呪文の詠唱を始めた。こんなトラブルくらい、すぐに回避できる。そう思い、最初に呪文を完成させた男は……異変に気付いた。

「ま、魔法が……発動しない！？」

「ウソ！？　何で！？」

混乱する人々。何度も呪文を唱え直すが、一向に魔法が発動する様子は無い。詠唱のし間違いかと思いゆっくり唱えなおそうにも、飛行船は待ってはくれない。より勢いを増して落ちてくる飛行船から、街人と同じく杖を持った人達が数人、迷い無く飛び降りた。

「う、浮かばな……！？」

「！？　え……！？」

頼みの魔法が発動しないまま、飛び出した乗組員達は容赦なく地面へと叩きつけられる。そして、さしたる間を置かずに響き渡る。轟音と、悲鳴。

墜落。

飛行船は無抵抗に商業施設へとぶつかった。施設内部の逃げ遅れた人々が下敷きになり、衝撃で起きた火花が内部で使われていた可燃性のガスに引火して……爆発、炎上。

「ハハハハハハ！」

穏やかな日常を襲った突然の悲劇。しかし、これはさらなる悪夢の幕開けに過ぎない。

空に浮かぶ飛行機械全てが、まるで動力を強制的に止められたかのように、次々とその目的地を真下に変更し始めた。大きな音を響かせ、隕石のように降り注ぐ機械の塊。至る所から火の手が上がり、街が業火に包まれていく。何より突如として魔法が使えなくなった事が全てに拍車を掛け、人々は混乱し、逃げまどい、嘆き、パニックに陥っていた。

……バルバロイは笑っている。蹂躙は、止まらない。

「遅いなぁ……リュウ！」

ヒゥンと音を伴い、虫でも払うかのように振るわれる爪。バルバロイの前方には、複数のビルが建っている。魔法世界の発展の象徴とでも言うべき摩天楼。それらが、土台から一斉に薙ぎ払われた。

「な、なんで飛べないんだよぉぉ！？」

「助けて……助け……あああああ！！」

大地に根付く土台から切り離されたビルは重力への抵抗を止め、互いにぶつかり倒壊しながら崩れ落ちていく。一体、何人が巻き込まれただろうか。人々は無力だった。何もできないまま、突然の惨禍に巻き込まれていく。天災、ではない。たった一人の亜人が、街を、人を、破壊していく。

「貴様だな！　通報にあったテロリストは！！」

「！」

蒼い光の亜人――バルバロイに縦長の剣の先端を向け、四方を囲むように展開する重厚な甲冑を身に着けた男達。メガロメセンブリアの平和を守る兵士達だ。通行人の一人が、たまたまバルバロイの足元から光の波紋が広がるのを見ていた。その直後に、飛行船の墜落が起きた。偶然かと思ったが、しかしその光景に笑っているバルバロイを見て、疑念は確信に変わったのだ。

「そうだよ」

「貴様！　自分が一体何をしたかわかっているのか！？」

「さあ？」

バルバロイのおざなりな応答は、兵士達の逆鱗に触れた。認めたからには、これ以上問う必要は無い。自分達の裁量で、死刑。一連の出来事は、そんな判断さえ許されるであろう大罪。兵士達の誰一人、自分は正しいと思って疑わなかった。何故か今魔法は使えないが、それならば日頃の訓練で鍛えられた、この剣術を振るう時。四

方八方から、一斉に剣が突き出される。

「!?」

「……で?」

バルバロイは、動こうとすらしなかった。突き出された剣の先端は、バルバロイの体表で止まっていた。

「……気が済んだ?」

「そ、そんな……馬鹿な……!?」

一切の刃が、通っていない。どれだけ力を込めても、それ以上刺さらない。一見すると小柄な亜人。腕や足の甲殻は兎も角、上半身の皮膚自体は、普通の生物のそれと大差ないように見えるのに。これは夢か? そして、兵士達は次の瞬間心の底から思った。夢ならば良かった、と。

「……“ダイアボリカル”」

「!?」

ブワッと、バルバロイの指先から黒い煙に似た波動が放たれた。光の波紋とは正反対のそれは一人の兵士に狙いを付け、飲み込み、通り過ぎた。

「あ……あああああ! うわあああああ!!」

「!? おい! やめろ! 一体どうしたんだ!!」

突如としてパニックを起こし、黒い波動に飲み込まれた兵士は剣を乱暴に振り回し始めた。まるで幻覚でも見ている様に、その顔は恐怖で引き攣っている。バルバロイの黒い波動で、精神が蝕まれたのだ。その尋常でない様子に、周りの兵士達は恐怖を感じ始めた。

「フフ……君達も楽にしてあげるよ」

「!?　そ、総員退避……!!」

再び、バルバロイから広がる黒い波動。輪状に広がる波動に、兵士達は全員が飲み込まれた。ある者は身体を抱え込んでブルブルと震えだし、ある者は視力を失い暗闇にもがき、またある者は倒れて意識を失った。大部分は幻覚を見て闇雲に剣を振り回す。互いが互いを傷付け、同士討ちのように一人ずつ倒れていく。まさに、地獄の様な有様だった。

「……さて……まだ来ないか……」

目的の人物が、現れない。バルバロイの顔から、気味の悪い笑みは消え去った。今度は八つ当たりのように、目に付いた建物目掛けて手当たり次第に爪が乱舞する。混乱から逃げようと走る街人達を、容赦なく巻き添えにして。

――――ォォォォオオ!!

「!」

不意に、何かがバルバロイの爪撃を遮った。人や建物に当たるより早く、何かがぶつかって相殺したのだ。放たれた方向は上からだ。

バルバロイは、再び不気味な笑みを浮かべている。

「やぁ、遅かったね……リュウ」

「……」

そこには、バルバロイと似た姿をした亜人が一人、佇んでいた。

「……」

佇む亜人――リュウは震えていた。何だこの光景は。……酷い。ただ只管に、酷い。

まるで戦争にでも巻き込まれた様に、街を炎と混乱が支配している。木魂すは爆音、響き渡るは悲鳴。人として、ここまで酷い事が出来るだなんて考えられない。全力で飛ばしてきたのに。ほんの数分判断が遅れた事で、このような悲劇を招いてしまった。自分のせいなのかという考えが嫌でも浮いてくる。リュウは無意識の内に、振り払うように頭を振っていた。

「ボクは言ったよ。全てのお荷物を守って見せろと。阻止できなかった君の負けさ」

「……」

これほどの惨状は、見たことがない。すぐにでも人々を助けて回りたい。しかし、元凶たるバルバロイを何とかしなければ、助けても意味がない。放っておけば、戦火は広がる一方だからだ。バルバロイの顔に浮かぶ薄笑いを視界に納めたリュウは、一瞬にして怒りに支配されかかった。バルバロイへの怒りと自分への怒りで、煮え滾っていた。握り込んだ拳からは、血が滴っている。

「その顔。そう言えば君の怒った顔は、初めて見るね」

「……」

様々な感情が内面で渦を巻き混在しているリュウは、激情のような紅いオーラを噴出させて、バルバロイとの距離を失くした。そしてそのまま顔目掛けて叩きつけられるリュウの拳を、バルバロイは避けなかった。

「!?」

渾身の一打が、顔面を打ち抜いた。クリーンヒットだ。しかし、何故避けなかった？　そこでリュウは気付いた。殴り飛ばしたバルバロイは、猛烈なスピードで後方の建物全てを砕き貫通していく。まるでわざと周りを巻き込もうとでもしているように。リュウは、すぐさまその後を追った。

「っ！」

「……ハハ……君が暴れれば暴れるほど、ここではお荷物が巻き込まれる。それでも、全力を出すつもりかい？」

追い付いた場所は、まだかろうじて被害を受けていないらしい高層ビルの真下だった。入口からはパニックになった人々が、蜘蛛の子を散らす様に逃げだしている。魔法が使えない……即ち身を守る手段がない今、遠目からでもわかる圧倒的な威圧感を放つ紅と蒼の亜人の闘争に巻き込まれたら、それは死を意味するからだ。

周りの怒号や悲鳴が耳に届いていないかのように、静かに相対す

るリュウとバルバロイ。渾身の一打を見舞ったはずのバルバロイの顔には、既に殴られた痕跡が全くない。先刻切断した腕と同じく、異常なまでの再生回復だ。

「じゃあ、続きと行こう」

「！？」

バルバロイはリュウに背を向けてビルの方を向くと、右手を、下から上へと振り上げる。

……ビルが、根元から吹き飛んだ。

まるで子供が遊びで放り投げた木の枝のように、高層ビルはクルクルと回転しながら空中で崩れていく。かろうじて原型を留めているのは、バルバロイの手加減か、魔法世界の高度な技術故なのか。

なんて事を……！　リュウはすぐさま進路を予想し、その着地点を見やった。

「！」

……人がいる。女性らしき人物が倒れている。幼い男の子がその側にしゃがみ込んでいる。どうやら女性は母親で、気を失っているらしい。男の子は必死に女性を起こそうとしている。

「お母さん！　起きて！　起きてよ！　ねぇ！」

「う……」

ちょうど幅の広い通りの真ん中辺りだ。他の人は既にその場所から逃げ去っている。子供は必死に母親を起こそうと揺り動かしてい

るが、母親は頭から血を流して倒れたまま、動かない。このままでは、あの二人の命は確実に……ない。

「……お前……っ！」

「ハハハハハ！　さぁリュウ、急がないとあのお荷物が潰れるよ」

見逃せるはずもない。リュウはせめてもの抵抗にバルバロイに侮蔑の眼差しを向けると、吹き飛ぶビルの着地点手前へと急いだ。

「うわあああああ！！」

果たして普通の生活をしていたとして、空から巨大なコンクリートの塊が降り注ぐ光景を見る機会なんてあるだろうか。幼い男の子に、短い人生を思い出す余裕はない。小さいながらに「どうしようもない」と悟った男の子は、迫りくる恐怖に耐えきれず目を瞑った。……だが、いつまで経ってもその時は来ない。男の子は、恐る恐る……ゆっくりと、片目だけを開いて前を見た。

「あ……」

落ちてくる筈のビルは、空中で止まっていた。宙に浮き、紅い光を纏った亜人が一人、二本の腕でビルを受け止めていた。自分達親子の、盾となるように。

「早く！　お母さんを連れて逃げろ！」

紅い光の亜人、リュウからそう声を掛けられた男の子は、怯えた。助けようとしてくれているのは何となくわかった。だが感受性の高い子供にとって、今のリュウの威圧感は大きすぎた。既に恐怖が限

界を超えていて、何が何だかわからなくなった男の子は、大声で泣き始めた。

「っ！」

男の子は泣き喚いたまま動かない。母親も以前気を失ったままだ。このままでは埒が明かない。あっちが動けないのなら、こっちで動く。リュウは支えているビルをなるべく衝撃を与えないようにゆっくり、付近にまだ残っている建物に立て掛けた。土台部分と屋上付近が崩れ、今にも真ん中から折れてしまいそうな状態で、スケールの違う積み木か何かのように無造作に置かれたビル。本当にここは、数分前まで穏やかな街だったのかと疑いたくなる光景だった。

「防いだか。……けど、惜しかったね」

ビルから手を離したまさにそのタイミングで聞こえてきた声に反応し、咄嗟にリュウは振り向く。泣き喚く男の子のすぐ後ろに、バルバロイが立っていた。鋭く尖った爪の先端を、男の子の首に向けながら。

「！？　よせ！！」

「嫌だね」

凶爪が、容赦なく振り下ろされる――――

「！？　ぐっ！？」

――――しかし爪は……バルバロイの腕は、男の子の首に当たる寸前で、何かに受け止められた。

「もう……やめろ……この野郎っ！」

「！　何……！？」

リュウだ。それこそ光の速さに匹敵するかもしれない程の速度で距離を詰め、リュウはバルバロイの腕をしっかりと掴んだのだ。移動に伴って発生した衝撃で、男の子と母親は物のように吹き飛んでいた。……だが不幸中の幸い、命にまでは別状はなかった。新たな痛みと衝撃で意識を取り戻した母親が、リュウとバルバロイの姿に気付く。……母親は悲鳴をあげて男の子を抱きかかえ、一目散に逃げ出した。

「……！」

意識せず、全く自然に行われたその移動術は、力を一時的に何倍にも跳ね上げる“Ｄ－チャージ”による物。そしてその、無意識に発動したチャージの代償は、確実にリュウの記憶を蝕んでいく。

「……フン」

リュウの掴んだバルバロイの腕は、今にも握り潰されようとしていた。憤怒の思いが込められているのか全く振りほどけない。凄まじいまでの握力が、メキメキと腕を軋ませる。

ふとリュウの目に、バルバロイの腕に着けられている装飾品が飛び込んできた。腕輪だ。巧妙にカモフラージュされていて目の前数センチに来るまでわからなかったが、確かに“腕輪”が装着されている。リュウは、ここへ来る前に聞いたマスターの言葉を思い出していた。

「ボクの力を……舐めるな！」

「！！」

（！？　これは……！？）

バルバロイの“謎の力”が膨れ上がる。間近でその身体に触れていた事で、発動し続ける力の正体が何であるのかを、リュウはようやく理解出来た。バルバロイは、スペックの劣る車に大量の燃料を注ぎ込み、ブレーキが壊れた状態でアクセルを全開にして突っ走っている状態だ。だから、今のリュウにも付いて来れる。ではその“燃料”は何か。気付いてみれば、簡単な話。

そう――――“命”だ。

あの力の源は、命そのもの。大量に取り込まれているドラゴンや、それ以外のもっとおぞましい何か。その全ての命を無理矢理燃やされている。バルバロイは今日この日、命を使い果たす為だけにここへ来た。もしくは、来させられた。リュウに勝とうが負けようが、文字通りここで命尽きるのだ。それを止める手段は、ない。

「離せ！」

「！」

力任せに腕を振られ、僅かだが思考の海に浸かっていたリュウは吹き飛ばされた。付近の家屋に大穴を開けて飛び込み、ガラガラと瓦礫に埋もれる。だが当然、傷一つ付いてはいない。何事も無く瓦礫の中から起きあがったリュウは、バルバロイの方を向いて……

「く、来るんじゃねぇ！　化け物！」

コツン、と何かがリュウの頭に当たった。別にダメージになるような衝撃でもない。本当に小石が当たった程度の、極々小さな衝撃だ。

「あ……」

だが、リュウにはその衝撃は十二分に重かった。恐怖の眼差しを向けられながら、投げられたのだ。石を。投げたのはその家の住人らしき若い男だった。傍らには最低限に纏めたと思われる荷物が転がっている。恐らく逃げる寸前だったであろう男は杖を片手に握りしめ、カタカタと震えている。

「……」

「ちくしょう！　何で！　何で魔法が使えなくなっちまったんだよぉ！！」

石を投げたのは、死を覚悟した上での最後の抵抗か。若い男は恐怖で涙さえ流しながら、リュウに杖を向け必死に呪文を詠唱している。勿論、何も起こらない。バルバロイの結界の効果がまだここには残っているからだ。男からすれば、リュウもバルバロイも、同じ“化け物”で、同じ“敵”だった。

「……」

「さて、次は止められるかい？」

恐怖に震える若い男を無視して家屋から出てきたリュウに、バルバロイは告げる。

……本当に、バルバロイは異様なまでにリュウ自身を狙おうとしない。この場所では駄目だ。なんとか誰も居ない所へ引き付けなければ、被害を食い止められない。だが渾身の力で殴った筈のあの顔からわかるように、暴走する“命”の力が凄まじい速度で傷を再生させている。普通にやったのでは、周りを巻き込むだけだ。何か手はないのか。

（……アレしか……）

リュウの目が、一寸前に握り潰し損ねたバルバロイの腕を捕える。……腕輪。これまでに見た操られた人と、このバルバロイの様子は全く違うが、少なからずアレがその心理に影響を及ぼしている筈。

「……」

正直、これにすがるくらいしか方法が無い。予想が当たっていてくれる事を願いながら、リュウは静かに力を溜める。

狙うは腕輪。勝負は一瞬。これでバルバロイが正気――自分を狙う狂った思想が正気と言えるかはわからない――を取り戻せば、街よりリュウを優先して襲ってくるかもしれない。そうなれば、ここから距離を離す事など簡単だ。

「……」

同情する気は全くないが、せめて本来の意思くらいは取り戻して欲しい。自分の境遇と僅かに重ねて、リュウはそう思ったのかも知れない。

「ウオオォォォ！！」

「……っ！？」

光速に近い速度。無意識のＤ－チャージによる力の収束。“命”を力に変えて燃やすバルバロイですら反応できない、代償を伴う反則的な龍の力。吼えたリュウの爪が一閃され、バルバロイの腕輪が付けられていた二の腕部分……否、肩から先全てを抉り取った。

「っ！」

そのまま落ちた腕ごと腕輪を踏み砕いたリュウは、バルバロイへと向き直る。

「あ……あ……う……」

「……」

これでどうだ。腕輪ごとの二度目……いや、三度目の腕の切断。これでバルバロイは、自分だけを執拗に狙う以前の状態に戻る……筈。かつてのような暴走を起こす可能性もあるが、それなら今の自分の力で強引に抑え込める。そんな希望的観測に縋りつつ、リュウは静かに状況を注視する。

「あああ……あああああ……」

「……？」

バルバロイの様子がおかしい。

何故か、肩口から抉り取られた腕が、再生する気配を見せない。
バルバロイは、不気味に呻きながらブルブルと振動しだしていた。

「あ……あああ……アアアア……ア〝ア〝ア〝ア〝！」

「！？」

突如、膨れ上がった。
感じられる力と、そしてバルバロイの身体そのものが。
リュウの予想は真っ向から否定された。まるで今まで抑えていた枷が外れたかのように、バルバロイの身体は内側から醜く膨れ上がり、姿が変異しだす。

（なん……！？）

わけがわからない。一体何が起こっているんだ。混乱するリュウの目の前で、変異は速やかに進行する。

膨らんでいく。何かが皮膚を突き破る。色が変わる。飛び出した骨が金属的な光沢を放つ。見上げるほどに巨大になっていく。濃厚な魔物の気配が溢れだし、バルバロイの身体が異様な何かに変貌していく。

（まさか……）

リュウは今になって、かつてドラグニールでユンナの幻影に訪ねた時の事を思い出していた。

『じゃああのバルバロイはなんだ？』
『バルバロイ……？　ああ、自我を持った失敗作ですか。その昔私

が作った“うつろわざるもの”の実験体ですよ。数多の生物の強靭な部分を繋ぎ合せたのですがうまくいかず、かつて魔法世界に遺棄したはずですがそれが何か？』

そう、ユンナの幻影は確かに言った。

『数多の生物の強靭な部分を繋ぎ合わせた』と。

（まさか……これが！？）

リュウの頭上のはるか上。見上げるほどの高さから、バルバロイが、吼えた。

オ〝オ〝オ〝オ〝オ〝！！

変異――真の姿への変化が、完了したのだ。

それは多数の建築物をゴミの様に踏みつぶす巨大さを誇り、サソリのような蛇のような、長い体をしていた。顔と思われる部分は最早それまでのバルバロイの面影などなく、全てが鋼鉄のような外骨格に覆われている。額の部分に、全てを見通す様な瞳が……真っ赤な第三の目がある。

上半分は所々筋肉繊維のような物が剥き出しで、そこから生えた腕らしき物体はエメラルドに輝く鋭利な爪を備え、やはり強固な外骨格で覆われている。下半分には脚と思しき巨大な突起が４本。これも腕と同じく鋭利に尖り、それ自体が非情な凶器にしか見えない。

そして何より最も特徴的なのは、そのとてつもなく長い“尾のようなモノ”。

多数の剥き出しの臓器が、触手のような物体が、ぐちゃぐちゃに連結されていた。どう機能しているのかわからないが、それらは確

かに脈動し、蠢いている。まさに“繋ぎ合わされた”と形容するしかない異形そのもの。さらに不気味な事に、そこには以前に取り込んだと思われる無数のドラゴンの骸が点在し、形容し難い臭気を放っていた。

「何で……」

ゴ　ア〝ア〝ア〝ア〝！！

発する“声”だけで、街を津波のような衝撃波が襲う。

バルバロイの真の姿は、完全にバケモノだった。剥き出しの臓器を繋ぎ合わせた長い尾が、振るわれる。家が、建物が、人が、全てが、薙ぎ払われる。今この場に、リュウ以外に抵抗出来る者は存在しない。圧倒的な暴力。

「何でだよ！　ちくしょう！！」

尾を避け、空中に飛び出たリュウの悲痛な叫びが木霊した。リュウの考えは、全てが裏目に出ていた。腕輪を砕けば何とかなると思ったのに、より事態を悪化させてしまった。

ア〝ア〝ア〝ア〝！！

「！！」

バルバロイの腕が、リュウ目掛けて振るわれる。命を暴力へと変換した凄まじいエネルギーが刃となり、リュウのドラゴナイズドの体さえ容赦なく斬り裂く。

「ぐっ！？」

かろうじて直撃を免れたエネルギーの刃は依然衰える事はなく、リュウのはるか後方……未だ無事だった建物を、次々と破壊していく。

ヴ　オ〝オ〝オ〝オ〝！

「！？」

灼熱のブレス。バルバロイの口腔部から、高熱の息吹が放たれた。足元の瓦礫、散乱する金属の類はドロドロに融解し、辺り一面文字通り火の海となる。取り込んだドラゴンの力か、はたまたユンナによる改造が原因か。ブレスを避け、裏へと回り込むリュウの動きを追随するように顔を向けたバルバロイは、再びブレスを放つ。……今度は、極低温。極寒のブレスを。

「うあああ！？」

直撃を受けたリュウの体が、たちまち凍り付いていく。ドラゴナイズドの体にさえ効果を及ぼす氷のブレス。即座に龍の力を燃焼させ、周囲の温度の低下に抗う。このままじゃ駄目だ。反撃を。リュウは体に叩きつけられるブレスの中で、強引に力を両手へと集中させていく。

「オオオオオッ！」

両の掌から、輝き放たれる力の極光。渾身のＤ－ブレス。氷のブレスと正面から衝突し、徐々にだが押し返していく。何とかして止めなければ。このままこのバルバロイを暴れさせたら、メガロの街は数分も経たずに完全壊滅してしまう。さらに力を込められた熱線

は、ついに氷のブレスを打ち破り、バルバロイの顔を、腕を、見事に焼き貫いた。

ギャオォオォオ！！

「！？」

だが……瞬く間に、再生が始まる。

早い。早すぎる。暴走する“命”は、傷つけられた箇所を見る見るうちに修復していく。ほんの数秒で、バルバロイの顔も、腕も、全く無傷の状態に戻っていた。

……手に負えない。

渾身の力を込めた筈のＤ－ブレスがこのような結果に終わった事で、リュウは悟ってしまった。コレは、紛う事なきバケモノだ。大きさも、そして強さも。

もう少しで街を支配する“結界”の効果はなくなりそうだが、それを待っている時間があるとは思えない。待ったとしても、事態が好転するとも思えない。今コイツを止められるのは、自分だけ。

「……くそぉ！！」

わかっている。選択肢は限られているという事を。手段は一つしかない。

“竜変身”。

バルバロイの命を一気に消滅させるしか、どうにかする術は最早ないのだ。

ただ……今の状態での竜変身は一体どうなるのか。リュウ自身にも予想がつかない。最悪その時点で“リュウ”が失われ、“アイツ

”に取って代わられる可能性だってある。そうならないという希望的観測を生む根拠もない。しかし……

ヴ　ヴ　ヴ　オ〝オ〝ア〝ア〝！！

「ぐぁっ！？」

奇声を発しながら叩きつけられた爪が、リュウを、そして街を深く抉る。今のコイツの姿はまさに、言葉通り“バルバロイ（不明の言語を話す蛮族）”そのものだ。

やるしか……ないのか。

リュウは、半ば自棄の気持ちで自分の奥深くへと意識を巡らせて……

「！？」

瞬間、リュウの視界はブラックアウトした。

――――――

――――

――

『……何故だ？』

（え……？）

気が付くとそこは、真っ黒い空間だった。明かりはない。耳に届

いたのは、頭から足の先までを貫き裂くような、おどろおどろしい声。リュウはすぐに、自分が今どこに居るのかを理解した。

「……」

『……お前は、わかっているはずだ』

覚えている。この声の主はリュウが初めて変身した時に、この場所で自分を飲み込んだ巨大なドラゴン……即ち、“アイツ”だ。姿は見えないが、わかる。今まで散々話をしたくてここへ来ようと努力したのに、今このタイミングで招くとは、意地が悪い。

「……」

『……消滅に近付くとわかっていながら、何故だ？』

暗闇の主は、何かを言いたげに再び問う。今更のようにそんな事を尋ねられて、徐々にリュウの中に溜まっていた不満が……様々な思いが、頭をもたげてきていた。

「じゃあ……他に……方法あんのかよ」

『……』

「他に……あのバルバロイをどうにかする方法……あんのかよ」

『……』

暗闇の主は答えない。どんな回答を期待しているのか知らないが、誤魔化しても無意味だとリュウは悟っていた。何故ならこの暗闇の

主は……自分の半身なのだから。

「あんたが納得するような理由なんて、ねぇよ！」

溢れだした。リュウが誰にも言えずに溜め込んでいた思いが、爆発した。

「どっちにしても、俺はきっと後悔するんだよ！　何とか出来る力があるのに何もせず見捨てたら絶対後悔するし！　でもそれで記憶か自分が消えたりしたら、それはそれで後悔するんだよ！　わかってんだよそれぐらい！！」

『……』

暗闇の主は、静かに聞いている。

「だから！　そのするかもしれない後悔を“比べてどっちがマシか”ってだけだよ！　自己満足だよ！　俺だって出来れば消えたくないに決まってんだろ！！」

『……』

嘘を言った所でどうしようもない。この半身様は、お見通しの筈だから。今こうしている間にも、ほんの僅かずつだが同化していっているのだから。

ありがちに覚悟とやらでも問いに来たのか。生憎俺にはそんなモンねーよ。言ってみれば“仕方ない”からだよ。あんただって俺のそんな考えぐらい、わかってんだろ。

ある意味相手も“自分”なのだと理解出来ているからか、リュウにかつてのような怯えや遠慮はない。しかし、自分の考えは言わなくとも伝わっているという感覚があるのに、相手の考えに関しては全く分からない。理不尽だな、とリュウは思った。

『……そうか』

一言だけ。

暗闇の主はそう言うと、リュウの身体の……左腕と左足が、暗闇に溶け込んだ。

視界の隅に、ドラゴンの片腕と片足が、浮かび上がった気がした。

――

――――

――――――

「！」

ほんの僅かな時間だったらしい。リュウは正気を取り戻した。暗闇の主に言ったセリフは本心だ。結局今この場をなんとかするには、自分がやるしかないのだ。内面に意識を向けずとも、選ぼうとしていたその力……ジーンは、勝手に浮かび上がって来ていた。

【ダーク】闇

【トランス】覚醒

「でぇやぁぁぁぁぁ！！」

上空から紫の落雷がリュウへと直撃し、形勢される巨大で黒いドーム。

バルバロイの大きさに勝るとも劣らない、禍々しい力を放つその球体。

表面に浮かぶ魔法陣が輝きを増すと、徐々にひびが入り、砕け散る――――

オオオオオオオォォォォ！！

耳にしただけで命を奪われると錯覚する咆哮。

“ダーク”のジーンを極限まで引き出し、姿を現す深く暗い紫緑の龍。

浮遊したまま巨大な蛇のようにとぐろを巻き、それでもなお有り余る全長。獄炎を伴って燃え盛る二本の角。血を固めた紅玉の様な瞳。この世とあの世を行き来する、死出の旅地に誘い導く悪夢の様な姿。

――――“ティアマト”が、降臨した。

イ〝ィ ィ ア〝ア〝ア〝！！

オオオオオオオオ！！

二体の巨大な化物……ティアマトとバルバロイが、互いを敵と認め、同時に吼える。

街を離れ避難した人々は、この世の物とは思えないその光景を目にしてこう思った。

今日でメガロメセンブリアは終わりだ……と。

ガ　ア〝ア〝ア〝！

≪オオオアアア！！≫

巨大都市を舞台に放たれる、バルバロイの灼熱の息――ファイアブレス。

対してティアマトが放つのは闇の力の息吹――ダークブレス。

同時に放たれ衝突し、激しく競り合う赤熱と暗黒のブレスが拮抗を見せたのは、僅かな時間だった。軍配は黒に上がる。ダークブレスはあっさりとバルバロイのブレスを押し切り、その長大な尾の一部と足二本を消し炭と化した。

ア〝ギ　イ〝イ〝イ〝イ〝！

≪いい加減に……！≫

折角のダメージも、ほんの数秒で完全に再生する。だがティアマトは、その僅かな合間に蛇のようにとぐろを巻く尾を解き放ち、強靭な尾の先端を、真上からバルバロイ目掛けて叩き付けた。

ギ　ア〝ッ　！　！

ズズゥン……と地響きが起き、バルバロイは街の深くにめり込む。傷は即座に治っても、全体に与えられた衝撃そのものは蓄積する。ティアマトは畳み掛けるように再び尾を叩きつけようとして……今度は、めり込んだままのバルバロイの醜悪な尾が、ティアマトを横から殴りつけた。

≪っ！　ぐ……！！≫

臓器とドラゴンの骸の塊が叩きつけられ、ティアマトの鱗が僅かに溶ける。尾から胴にかけてはまだ、ドラゴンキラーの力が残っているのか。だがティアマトは己へのダメージさえ顧みず、凶悪な口を大きく開けてバルバロイの胴体に……噛み付いた。

≪ウゥゥゥッ！！≫

ゴ　オ〝オ〝ア〝ア〝ッ　！　？

ブシュブシュと牙の隙間から体液が漏れ出し、異様な臭気が広がっていく。痛みにもがき、バルバロイが暴れる。ティアマトは離さない。突き刺す牙は奥深く。ドラゴンキラーに耐えながら、ティアマトは噛み付いた対象を……徐々に持ち上げていく。

グ　ウ〝オ〝オ〝オ〝オ〝ッ〝！

至近距離からバルバロイの爪が振るわれる。凝縮された命の刃。乱れ撃たれる刃にティアマトは傷付き……だが、離さない。耐え続け、とうとう刃の乱舞が止む。その瞬間、バルバロイの巨大な身体を持ち上げたティアマトは、大きく身体をうねらせて――――渾身の力で、大空へと放り投げた。長大な尾さえもが、はるかな高さにまで舞い上がる。

≪スゥゥゥ……≫

何者をも巻き込むことの無くなった空の下で、ティアマトは力を蓄える。

体の奥。吸い込む空気と力が入り混じり、膨大なエネルギーに変換されていく。目には目を、暴力には暴力を。高く舞い上がったバルバロイに照準を合わせ、ティアマトの口が……地獄の釜の蓋が今、

開かれる。

≪ウォォォォォッ！≫

――――それは、まるで黄昏の様であった。

暗い燈色の……触れる物皆塵と化す、地獄の吐息。

空に浮かぶ一つの生命を飲み込み、終わりを与える亜空の障気。

ティアマトの真骨頂、“ゲノサイドブレス”。

燈色のブレスはバルバロイの身体を包み込み……大空全てを、燈に染めた。

尾の先から頭の頂点に至るまで、放たれた瘴気は存在する“命”の全てを貪り尽くしていく。ユンナによって繋ぎ合わされた身体は全てが崩れて行き……遂にバルバロイの巨体は、悲鳴一つ残さないまま、燈色の彼方へと消え去っていた。

まるで天へと……あの世へと昇っていく様に――――

＊

バルバロイの消滅を見届け、ティアマトの姿から変身を解いたリュウは、遠方に微かに残る気配を感知した。メガロの街から少し離れた荒野。リュウは街から逃げるようにそこへと向かい、気配の元を探して……倒れている一人の少年の姿を発見した。

「……」

「……やぁ……リュウ……」

薄らと開いた目に力は無く、存在感そのものが薄れていくバルバロイの成れの果て。少年の姿を取り戻しているのは、今際の際の微かな猶予か。

「……」

「……僕は……君に、やられたのか……」

バルバロイはそう、自分自身を納得させるように呟いた。あの“腕輪”を切り離した事で、何故バルバロイはあんな事になったのか。リュウは内心問い質したかったが、様子からすると恐らくこいつに聞いてもわからないだろうと、聞くのを止めた。

力の無い目がリュウの方を向き、バルバロイは再び口を開く。

「今の、君は……」

少しずつ……身体が灰になっていく。既に足の先はない。かつてのように、最後に魔法を使う力など残っていよう筈もない。リュウは静かに聴いている。

「“君自身”が……薄れている」

「……」

「“ヒト”に……成り切れていない」

「……」

「ミリア様のような“うつろわざるもの”には……遠く及ばない」

「……」

「そして“ドラゴン”に少しずつ、近づいている……」

リュウが戦っている最中にバルバロイの力を感じ取っていたように、バルバロイもまた、リュウの事を感じ取っていた。腕輪を着けていた時の記憶の筈だが、バルバロイはその事を覚えていた。

「君の中の、その４つ……不安定だ。僕と……同じように……」

「……」

バルバロイは安堵していた。リュウもまた、自分と同じく欠陥だらけだと理解したのだ。最後の最後で、バルバロイの執着は本当の意味で薄らいでいた。リュウは、今言われた言葉を否定する気はない。その事実自体は理解している。完全に受け入れているのとは多少異なるが。

「……」

「……消える……か……」

灰となる速度が加速する。足から腰へ。腰から胸へ。自分が滅ぶというのに、バルバロイは落ち着いている。

「じゃあね……“龍の成り損ない（ドラゴン・クォーター）”。僕は……君が大嫌いだった」

「……！」

“龍の成り損ない（ドラゴン・クォーター）”。

今の自分を的確に表した、バルバロイの最後の皮肉は、リュウの耳にしっかりとこびり付いた。

「ミリア……様……申し訳……あ……り……」

そしてバルバロイは……灰の山となり、完全に消滅した。

一陣の風が吹き、灰は、風に紛れてサラサラと流されていく。まるでそこには最初から何も居なかったかのように……

「……？」

ふと、リュウは気付いた。バルバロイの体が横たわっていた場所に、いつの間にか一振りの剣が落ちている。不思議に思い拾い上げてみると、剣はまるでリュウに持たれる事を望んでいるように、僅かに発光した。

「……」

この剣はなんなのだろう。バルバロイに取り込まれた多数のドラゴン達の、解放された事へのお礼みたいな物なのだろうか。確実に自分に都合の良い解釈ではあったが、今、リュウはせめて、そんな風に思いたかった。

続く

第十三章　8、二つ名（後書き）

１３章終わりです。
良く考えたらここバトルしかしてない……

ここまで読んで下さった皆様には感謝感激雨あられです。
叱咤激励感想批判等々、もし何かありましたら一言でも構いませんので書いてやって下さいませ。

第十四章　1、潮流

死者・行方不明者数千人、負傷者数万人、暫定被害総額約８００億Ｄｑ。

二人の亜人と二体の巨大な化け物――――リュウとバルバロイの闘争は、メガロメセンブリアに大きな打撃を与える事となった。

被害の甚大さを重く見たメガロメセンブリア当局は、公式に今回の事態に対する声明を発表。この騒動の原因は、一部のテロリスト集団による大規模召喚魔法が発端であるとした。犯人グループは既に逮捕されており、事態は完全に終息しているとして、国の内外に向けてアナウンスしたのである。

「しかし……！」

「これは決定事項だ。君が何を言おうと覆る事はない」

「我々にも立場というものがある。君の報告書の内容を、そのまま表に出す訳にはいかんのだよ。……わかるね？」

「……」

リュウ達とナギ達の勝負の見物客の一人。事件の概要を知るメガロメセンブリア元老院議員・メベトは、半ばスケープゴートのような形で一連の責任を背負わされ、職を辞す事となっていた。後任にかろうじて話の通じる“マクギル”という名の男を仕立てるのが精いっぱいであった。

たった二人の亜人による闘争が原因であわや壊滅の憂き目に会ったなどとは、国のメンツに掛けて認める事は出来なかった。メガロメセンブリア元老院は、真実を隠蔽する道を選んだのである。

人々は当然、この発表を疑った。亜人二人――リュウとバルバロイの姿を目撃した人間が多数おり、あの謎の巨大な化け物はその二人が変化した姿であるとして、一部では噂となっていたからだ。そして、魔法が一時的に使えなくなった事が重なって実感した恐怖心。それを何とか忘れようとして、復興もそこそこに人々は“ある方向”へと進みだす事になる。

人間は一部を見て全体を見た気になる生き物である。

都市の規模からすれば、被害は全体の０．５％にも満たない小さな数字だ。しかしこの出来事は都市全体の人間の心に、疑心の種を植え付けるには十分であった。

『人間ではない亜人は皆、あのような残虐な本性と抗い難い力・そして恐ろしい姿を隠しているのか。亜人を野放しにしていたら、またいずれこのような出来事が起こるのではないか』と。

結果として、リュウとバルバロイは人々の心に大きな亀裂を生んでしまっていた。メガロメセンブリアで亜人に対する排斥運動の気運が高まるのは、時間の問題であった。そしてその空気は、大した時間も掛からずに魔法世界全土へと波及していく事になる。

＊

機械浜にてバルバロイの放った“結界”の効果が切れた後、すぐにメガロメセンブリアへと向かった炎の吐息・紅き翼一向。勝負自体はなし崩し的に解散となったため、見物客達の多くはマーロックや悠久の風責任者の先導により、メガロメセンブリアのホテルへと移動する事となった。当然その後は、それぞれの国へ別途帰国するという手筈であった。

一足先に到着したナギ達が目にしたのは、無残に破壊された都市の姿だった。即座にその原因が何であるのか察した彼らは、怪我を押して人々の救助に駆け回った。途中ふらりと傷だらけで見慣れない剣を握ったリュウが姿を見せ、無事を喜びつつもあの白髪の少年はどうしたのかと問うナギ達だったが

「あいつなら、倒したよ」

と疲れきった顔で答えたリュウにそれ以上尋ねる事が出来ず、取り合えずその事は一旦棚上げとして、全員で瓦礫の撤去や人命救助に当たった。街での“結界”の効果も消え去って魔法が使えるようになった事もあり、作業は順調に進んだ。しかし時々対面する犠牲となってしまった人の姿を見る度に、リュウの気持ちは沈んでいった。

結局、深夜過ぎまで動き詰めとなり過労で眠りこけたリュウ達を、恐らくそんな事になっているだろうと予想したマーロックの手配したバスがスイマー城まで運んだのだった。

そして、翌日。

「……なぁボッシュ」

「……なんだい相棒」

リュウ達の拠点たるスイマー城。時刻は既に昼下がり。自室の窓から差し込む明るい日差しに瞼を刺激され、ベッドからゆっくりと起き上がったリュウ。傍らでまどろんでいた相棒に、寝起きとは思えない重い声で問いかける。まだ割り切れない気持ちがもやもやとしているが、それとは別にどうしても確かめなければならない事がある。

「俺ってさ……何歳だったっけ」

……自分の歳がわからない。

度重なる力の行使は、リュウの記憶に大きな影響を及ぼしていた。

「歳？　……あー確か……あのボケジジイの知識によりゃあ相棒は今年で11歳だったはずだな。そいつがどうかしたか？」

「……」

……違う。知りたいのは“この体”の歳じゃない。それより以前の、“昔”の頃から数えた歳の事が……。

リュウは思い出せなかった。わかっていたが実際に記憶が無くなると、自分がおかしくなったのではないかと怖くなる。恐怖を感じたリュウは竜変身の後遺症・筋肉痛も無視してベッドから飛び起きた。そして慌しくテーブルにペンとメモ用紙を用意し、そこに自分について思い出せる事を全て書き出そうとして……愕然とした。

「……」

手が震える。ペン先が動かない。愕然としたリュウは、次に呆然とした。

……自分の事の筈なのに、ほとんど何も思い出せなかったのである。

本来の名前、年齢、職業、家族構成、その他。つい数日前までは確かに覚えていたであろう記憶が、消えていた。どれだけ必死に頭の中を掘り返しても……わからない。思い出せない。まるで最初からそんな記憶なんてどこにもなかったかのように、自分に関する事がすっぽりと抜け落ちていた。

「おいおいどうした相棒」

「あいや……別に何でもな……」

「何でもねぇようには見えねぇけどな」

「……」

取り繕おうとしても、流石に無理だった。

ボッシュの言うとおり、リュウは青ざめた表情をしていた。

「……」

「相棒？」

自分を自分たらしめている根幹が、アイデンティティが、消えている気がする。正直に言えば、凄く怖い。だからリュウはボッシュの声も無視して必死に考える。確認するように、“今の”自分の事を。

自分は誰か？　名前はリュウ。元は別の世界の人間だったはずだが、ユンナによって龍の民の生き残りのこの体に移された。ナギ達と知り合って、しばらくその一員として動き、今は妙な縁で知り合った仲間達と“炎の吐息”というチームを結成していて、そのリーダーをやっている。……ここまでは、大丈夫。

自分を確認するように心の中で反芻し、リュウは少しだけ落ち着いた。今回の事で思い出せなくなったのは、やはり“昔の自分の事”だけの様だとわかった。ドラゴナイズドに似たバルバロイの姿など、いくつか自分以外の事についてもわからなくなっているが、それらはそこまでの大事ではない。

「……」

無くなっているのは自分の過去だけ。それ以外の昔の知識は、時間の経過による薄れと若干の影響はあるにせよ、まだなんとか保っている。そう、リュウにとって何よりも大きなアドバンテージ。この世界に対する、反則とも言うべき“外側から見た知識”。真の心の拠り所と言っても過言ではない大切な記憶。ある意味今現在、こうして何とか平静にしていられるのはその知識のおかげなのだ。

しかし今、リュウは比類なき力と引き換えに、最大の武器たるその“外側から見た知識”を失う危機に瀕していた。今回はピンポイントで自分の過去のみで済んだようだが、今後もっと酷い影響がそちらの記憶に及ばないという保証はどこにもない。

「……！」

「お、おい相棒！？」

リュウは、一心不乱に今思い出せる事を紙に書き出し始めた。自分の事以外の、この世界について“知っている”事を。と言っても全てを書き出すなんて到底無理なので、キーワードだけを厳選して拾いあげる。それでも一枚、また一枚と、メモ用紙はびっしりと文字で埋め尽くされていく。

「相棒よぉ、一体全体どうしたってんだ。何をそんな焦って……」

ペンを走らせるリュウの後ろから、一体何を書いているのか覗き込もうとしたボッシュ。

しかしそこでボッシュはようやく……リュウの、今のその“見た目のおかしさ”に気が付いた。

「っておい相棒!?　ちょっと待ておめぇ……その腕と足はどうした!?」

「ん？　……ああ、これ？」

ボッシュの慌てた物言いに、リュウは書く手を止めて思考の淵から引き戻された。どうやら寝ている間にとある魔法が解けてしまっていたらしい。あの時、左腕と左足が暗闇に溶け込んだ時から、それらがどうなったのかなんてとっくに知っている。だから、指摘されてもリュウ的に今更な話ではある。

「そいつぁ……まさか……」

「まぁ見ての通り……戻らなくなった訳ですよ」

――――リュウの左腕と左足は、ドラゴナイズドフォームのままだった。

「よ……っと」

「！　……変装魔法……か？」

「そ。誰にも言うなよボッシュ」

「……」

腕と足だけに変装魔法を掛け、フッと今までどおりに見た目だけは変化する。どれだけ変身を解こうと念じても、もうこの部位は元に戻らなくなったのだ。外側も内側も、立派に浸食が進んでいた。一応まだ自分の腕と足だという感覚はあるのが救いと言えば救いだろうか。

ボッシュが無言になったので、再びメモ用紙と向き合ったリュウは少しの時間それと格闘。終わったと思うとすぐに束にして、丸めてドラゴンズ・ティアに収納した。

「……相棒、おめぇ本当に大丈夫なんだろうな？」

「ん……まぁ大丈夫でしょ。……さて、ちょっと腹減ったし厨房行ってくる」

「お、おう。んじゃ俺っちもいくぜ」

あまり顔色の良くないリュウの態度に色々と不安げなボッシュだが、取り合えずぐーっと伸びをして、ポーチに身を収めた。釣られてリュウも着替えを始める。肌身離さず見につけているドラゴンズ・ティアに魔法発動体の“竜のなみだ”。そしてボッシュの入るポー

チ。後は適当な普段着だけであるはずのリュウの装備。
しかしこの日は違った。これらに加え、リュウは刀身に布を巻きつけて紐を括りつけた妙な剣――ベッドの側に立て掛けていたソレを、よいしょとばかりに背負ったのである。

「なぁ相棒、昨日から気になってたんだが、その剣は一体なんでぇ？」

「ドラゴンブレイドって名付けてみた」

「いや銘はいいから経緯をよ……」

「拾った」

バルバロイとの戦いの果てに入手したその剣は、妙な剣だった。金属のようで骨のようで石のようで鱗のようで、冷たくも熱くもない不思議な素材で出来ている。鍔には竜を模した意匠。片刃で、峰の部分にルーンのような古代文字が彫られており、全体的に薄い新緑のような色合いをしている。ボッシュは、その剣を何故だか“背負う”リュウに疑問を抱いた。

「その剣はいつもみてぇにしまっておかねぇのか？」

「あー、これはちょっと持ち歩かないと効果が無くてね」

「？」

不思議そうなボッシュに、いつもと立場が逆転したリュウによる説明タイムが始まる。

ドラゴンブレイドとリュウが名付けたこの剣には、特別な効力があった。戻らなくなった腕と足のせいで、リュウの体から常時発散される膨大な龍の力。それを何とこの剣は吸収し、ほぼ無尽蔵に蓄えておく事が出来るらしいのだ。しかもその蓄えた力を使って、剣は炎を生みだす事まで出来てしまったりする。

剣としての斬れ味自体もその辺の量産品とは比べ物にならない上に、アーティファクトのように魔法で顕現した訳ではない完全な実体。さらには龍の力を籠めて振られても何ら剣自体に影響が無い程の強固さを誇り、おまけに自己再生能力までもが付加されているという。魔法世界で言えば伝説レベルの代物だった。

「そりゃまたえれぇモン手に入れたなぁ」

「まぁね」

正直な所、攻撃用の武器としてよりももっと別の方向で、リュウはこの剣が手に入った事をありがたいと思っていた。何しろ左の手足から外に漏れ出す龍の力が大きくて、日常生活に支障をきたしたり、要らぬ威圧を他人に掛けてしまうやもと思った所だったのだ。それがこれを身に着けておけば勝手に漏れた力を吸い取ってくれるので、一応今までと同じように生活できるのである。

つまりリュウにとってこの剣は、武器と言うより“日常の救世主”的存在なのだった。

「しっかし……ちょっと不恰好じゃねぇかそれ」

「……やっぱお前もそう思う？」

そんな良い事尽くめかと思われたドラゴンブレイドだが、唯一の難点がドラゴンズ・ティアに収納しておく事が出来ないという点だ。龍の力を吸収するには常に見に着けていなければならず、しまっておけないのだ。

そして長さは柄を含めて１２０ｃｍ程もある大太刀並の片刃の剣である。リュウの身長から腰に差すには相対的に長すぎる為、背負う事にしたのだが……背負った所で腕の長さが足りず、当然のように抜刀出来ない。実戦で使うとしたらどうしようか悩みどころである。

「まぁ鞘とか含めて後々考えるよ」

「その方がいいだろうなぁ」

そんな適当な会話をしつつ用意も完了。ガチャリと自分の部屋のドアを開けて廊下に一歩踏み出ると……

「よう大将」

「さっすが。いいタイミングで起きてくるねェ」

「っと……レイさんにステンさんじゃないですか」

何やらスタンバった虎の人と猿の人が目の前に立っていた。二人はリュウの方を見てミョーに不気味な笑顔を覗かせている。何用ですか？　とリュウが尋ねるよりも早く、二人は何故だか手に持っていたロープをパシンと鳴らすと……スゴイ勢いでリュウをぐるぐる巻きにしだした！

「……え？」

「わりぃな！」

「ちょっと無理やりにでもこっちへ来て貰いたいんだよね！」

「ちょぉぉぉ！？」

完全に油断しきっていた為、されるがままにロープで雁字搦めにされてしまったリュウ。そのまま二人にえっほと担がれ運ばれて、廊下に叫びがドップラー効果で木霊する。途中腰の辺りのボッシュから“苦しくて死ぬる！”とメッセージが飛んできたが、どうにもできないので静かにスルー。神輿状態で運び込まれた場所は、見慣れた会議室だった。

「お、来たな」

「？　え……何この状況……？」

縛られたまま、まるで蓑虫のように会議室の天井から吊るされるリュウ。周りには既に炎の吐息のメンバーが集まっていて、正面には紅き翼の４人が立っている。文字通りの吊るし上げ。どう見ても糾弾会のような状況に、必死に“俺何かやらかしたか”と自分の行いを心の中で顧みるリュウである。

「さて。早速だがよ、リュウ……」

「……」

正面に立つナギが静かに目を瞑り、似合わない神妙な空気を纏いながら切り出した。リュウからのクエスチョンはオールスルーであ

る。

「昨日のあいつについてと、他諸々。洗いざらい全部喋って貰おーか！」

「！！　……？」

くわっ！　と凄むナギに対して、イマイチ主旨が飲み込めないリュウは首を傾げた。バルバロイについて、というのはわかるが、“他諸々”という部分が何を指すのかわからない。そんなリュウの様子を見て、隅っこにちょこんと座っていた大魔道士が愛想笑いをしながら口を開いた。

「その……ごめんリュウちゃん」

「？」

申し訳なさそうに挙手しながら謝罪するディース。

何でディースさんが自分に向かって謝る？

テヘッとブリっ子な仕草までして何かを誤魔化そうとしている事から、リュウの胸に何となく嫌な予感が湧いてきた。

「何故ディースさんが謝るんでしょう……？」

「……言ってもいいけど怒んない？」

「……。怒りませんから教えてください」

「実は……リュウちゃんの事、ちょっと喋っちゃった」

「……」

たっぷり１０秒くらいの沈黙。

自分の事？　もしかして、今までひた隠しにしていた龍の民云々とかユンナ関係の事？　というアイコンタクトをディースに送るリュウ。ディースは視線の意味を察してあははと笑いつつ、冷や汗を垂らしてからコクリと頷いた。

「おいいいぃ！？　ちょっ何してんすかあんたはー！？」

「だからごめんって言ってるじゃないのー！」

抗議の姿勢！　「怒らないと言ったな、アレは嘘だ」とばかりに蓑虫状態でブンブン身体を揺らすリュウ。きつく縛ってあるのと筋肉痛で力が入らないせいかロープは解ける気配を見せず、ギシギシと括りつけられた天井の梁を揺らすだけである。

「フフフ、私達にまで秘密にしているとは、見過ごす訳にはいきませんよ」

リュウの痴態をいつも通りのニヤニヤ腹黒スマイルで堪能しながら呟くアル。明らかに一人だけこの状況を楽しんでいる。勿論リュウは、その態度にピンときた。

（元凶はオマエか！）

アルに向けてギヌロッ！　と睨むがいつも通りに効果なし。

そんなリュウの直感は正解だった。

昨日のリュウとバルバロイの様子に、二人の関係がどうしても気

になったアル。実は彼は、夜中スイマー城に到着して周りが寝静まっている中で、色々知っていそうなディースに話を聞きに行っていたのである。

起こされて不機嫌なディースだったが手土産のお酒に気を良くし、さらに言葉巧みに誘導するアルの話術に押し負けて、つい“リュウちゃん元々は龍の民とかじゃなかったし”と話の途中にポロッと言ってしまったのだ。

その普通に考えたら意味のわからない言葉の意味を深く考えて、アルはリュウの過去には“何かがある”と確信し、直接本人に聞き質そうと思い立ったのだった。約束通りに半生の書を作成すれば、自分だけはすぐに全部知る事ができるとは理解していた。しかし、他の炎の吐息メンバーもリュウの過去の話は聞きたいだろうと、何と朝方にそれぞれの部屋へ吹聴して回ったのである。

強引に連れて来ようと提案したのも勿論アルだ。何故ならその手の話をしようとした際、リュウは逃げそうな気がしたからだ。今みたいな状況になればリュウがその事に答えようと答えまいと、どちらに転んでも面白くなりそうだから。と言う理由では決してない……かもしれない。

「良く考えたらさー、あたし達ってリュウの事全っ然知らないんだよねー」

「うむ。本人が言いたくないなら問う気はなかったが……昨日の出来事といい、気にならないと言えば嘘になる」

「私達にもあなたとあの少年の関係くらいは、知る権利があると思うのですが」

「う……」

リンプー、ガーランド、ゼノによる波状攻撃にリュウは唸った。確かに巻き込んでしまった以上、ゼノの言う“知る権利”というのは発生しているかもしれない。しかし内容的にあまり気分の良い話ではないし、変に同情されたりするのも嫌なのでどうしたものかと考えて、一応聞きたくない人も居るかもという希望の側に立ってみる事にした。

「……えーと……き、聞きたい人ー？」

そうリュウが苦笑いで尋ねると、炎の吐息は即座に全員が手を上げた。マスターまで機械の癖に手を上げた。ナギ、アルは言うに及ばず、詠春・ゼクトまでもがしっかりと手を上げていた。ついでに何故かディースも。

「じゃ、じゃあ聞きたくない人ー？」

ならばと反対の質問を投げかけると、しーん……と水を打ったような静けさが会議室を支配した。誰一人ピクリとも動かない。一糸乱れぬ見事な全体行動。文句を挟む余地がない。

「……」

前後左右から期待の視線で針串刺しの刑に処されるリュウ。

逃げ場無し。

そんな訳で、リュウは観念せざるを得なかった。

「……あんまり楽しい話じゃないと思うけど……」

溜息と共にそう前置きして、リュウはとつとつと語り出した。

自分の中身と身体は元々は別な事。龍の民の力を一人に集約させた研究者ユンナという男とその実験の事。バルバロイは自分の前にユンナが造った実験体であった事。前にも狙われた事があるという事。今までリュウの他にはボッシュとディース、エヴァンジェリンくらいしか知らなかった事実が、次々と公になっていく。

“女神”と“完全なる世界”、“自分の本当の出身地”についてはややこしくなりそうなので適当な設定を捏造などして誤魔化しながら、最低限語っても大丈夫そうな部分だけを抜き出して、話はゆっくり静かに語られていく。

「……そんな感じで日本に来た俺とボッシュは麻帆良って場所でナギに出会って、そこから現在に至る……と。こんなとこです」

「「「……」」」

数分である程度話し終え、一息ついたリュウは周りを見渡した。リュウの過去やバルバロイがリュウを狙った理由など、思ったよりも数段後味の良くない話にその場に居る者は皆、一様に言葉を失っていた。

「……なるほどな。だからお前は、その見た目でそんなに落ち着いてるって訳か」

少しの間妙な雰囲気に包まれた所で、呆れたように口を開いたのはリュウをふんじばって運んできた二人の片割れ。レイはガシガシと頭を掻きながらそう呟いた。リュウの見た目にそぐわない達観ぶりは普段から苦労していた事もあるにはあるだろうが、元々精神年

齢そのものが見た目通りではなかったからだと納得したのだ。流石にこんな話を聞いてしまっては、枕詞に「愉快だねぇ」なんて付けられなかった。

「じゃあ、リュウって何もしてないのに偶然その変な実験に巻き込まれて……？」

「リュウ君の過去にそんな事が……」

「あ、別にそれでどうとかってのは止めて下さい。今まで通りで」

リンプーや詠春から微妙な同情的視線が送られてきそうだと察したリュウは、即座にその空気を振り払った。もうその辺の事はリュウの中である程度折り合いがついている。今更騒いでもどうにもならないのだから。それより接する態度なんかを変えられる方が嫌なのだ。

「何か……無理に聞いて悪かったな」

引き続き神妙な顔をしたナギが、流石に聞いちゃまずい事だったかと謝った。確かにあまり語りたいとは思えない話だと、その場に居る人間は皆同じ感想を抱いたらしい。この機会を作り出したアルも、流石にニヤニヤしてはいない。

「まぁあれだ。前にもどっかで言った気がするが、お前が何モンだろーとリュウはリュウだしな」

「……」

どう見ても深く考えてはなさそうなナギの発言。これまで一言も

その辺の事に触れないよう黙っといて何だが、今リュウはむしろ少しスッキリしていた。あくまで隠す必要のなさそうな部分だけを抜き出して公開した訳だが、それでも何となく気分が楽になっていた。今は今の自分が有るという事をこうして話して確認できた事が、結果的にリュウの悩みを幾らか解消していたのだ。

「ま、これからもよろしく頼むぜ」

「うん……まぁ……こちらこそ」

「よし、じゃあ気になってた事も無くなったし、腹も減ったから飯でも食おうぜ！」

湿っぽい話が好きではないナギの一言で雰囲気が変わる。

リュウが（全てではないにしろ）言い辛い過去を暴露した事で、最終的に絆と言うか仲間達との距離がさらに近くなったような明るい感じで、話は纏まるのだった。そしてゾロゾロと会議室から移動するリュウの仲間達。

――そう言えば、下のホールに妖精さん達がお店を開いたと耳にしましたが？――

――そーよー。凄い美味しいから是非食べてってー――

――ほう。それは期待できそうじゃのぅ――

――おーうではワタクシも料理のお手伝いしたいのですね――

――穴だらけになりたくなかったらそれだけは止めろ――

「……」

徐々に遠のいていく楽しそうな話声。

うんなるほど、まぁよくあるパターンだよね。
ていうか、見事にお約束だよね。とリュウは誰も居なくなった会議室で一人頷いていた。

「……誰か縄解いてよ」

風荒ぶ、蓑虫一匹、放置オチ。
ボッシュはぐったりしているのだろうか、リュウの腰で身動き一つしない。
1分程して、リンプーと詠春が謝りながら助けに来ましたとさ。

気を取り直して全員でがやがやと移動するリュウ達一向。階段を下りていると、妖精達が何やら慌しく動いている姿が目に止まった。厨房で作られたと思われる豪勢な料理が次々とホールへ運ばれている。

「？」

店を開いたといっても宣伝なんてしていないから、お客なんて来る訳がない。にも関わらず、料理と空き皿を交互に運び続ける妖精達。自分達の行動を察してくれたのか？　と考えたが、どうやらそうではないようだ。

「……あ、ちょっと。何やってんの？」

下から上がってきた妖精を一人捕まえて、リュウは尋ねてみた。

「何か、すっごく偉そうな人が来てるのよぅ！」

忙しそうにそう答えると、妖精はピューッと厨房の方へと行ってしまった。

はて、偉そうな人って？　心当たりはあると言えばあるし、無いといえば無い。ぶっちゃけそれだけの情報ではわからないので、リュウ達は疑問を抱えつつホールへと降りていった。

「ん……おお、紅き翼、そして炎の吐息の諸君」

「！？」

そこに居たのは、何とウィンディア王だった。クレイとエリーナの姿は無く、王とその横に第二王女のミイナが俯いて座っているのみだ。テーブルには妖精達の作った料理が乗っていたと思われる空き皿が幾つか見受けられる。

「ウィンディア王！？　うわスミマセン！　お出迎えとかせずに……」

「いや、連絡も無しに来たのはワシ達の方だからな。気は使わんでくれ」

しきりに恐縮するリュウに、王は特に気にしていない風な緩やかな表情を送った。王の雰囲気はいつもの威厳が抑えられ、幾分フランクな感じである。どうでもいいが空き皿の量からすると王は結構な健啖家なようだ。ワイングラスが空になっているが、それが原因で雰囲気が変わったのだろうか。

「中々美味であったぞ。だが食して思ったが、どこか我がウィンディアで評判の料理屋と味の系統が似ている気がするのだが……」

「あ、それはその……」

元を正せば、今のリュウの料理の基礎はウィンディアの料理屋“山猫亭”が元祖と言える。
そこでの経験を基にしたリュウの料理レシピを、そっくり習得した妖精達である。似るのは必然と言えよう。街の料理屋の味を知っている事に関しては、突っ込んでいいのかリュウは迷った。

「そう言えばクレイさんとエリーナさんは……？」

「公務もあるのでな。先に帰らせた。ここに来たのはワシと……ミイナだけだ」

「そうなんですか」

「うむ。まぁそれよりも……」

「？」

料理の話は一旦置いておいて。王はキリリと表情を改めると椅子から立ち上がり、徐にリュウ達を見渡して……頭を下げた。

「こうしてワシやミイナ……あの場に居た人間の命が今あるのは、諸君らのおかげだ。諸君らの関係者の代表として、礼を述べる。ありがとう」

「いえ、そんなお気になさらず」

「そうだぜ王様！　前にも言った気がするけど気にすんなって」

答える両チームのリーダー。
ナギはともかく、リュウはそもそも個人的な争いに巻き込んでしまったという引け目がある。謝るのはむしろこっちだと言いたい気持ちでいっぱいだ。

「……それで、だ。今日来たのは他でもない。その事と、もう一つ……」

そこで一旦区切ると、王はリュウ個人をしっかりと見つめた。

「君に、頼みたい事があるのだ」

リュウを名指しでご指名である。“そなた”では無く“君”という柔らかい二人称なのは、これがプライベート的な来訪だからだろうか。

「？　……俺、ですか？」

「うむ」

王がチラリと目配せすると、俯いて座っていたミイナが突然ガタッと椅子から立ち上がり、何故かテテッとリュウの後ろへと移動した。服の裾を掴んで、ほぼ密着と言ってもいいぐらいの立ち位置だ。

「!?　あの……!?」

「……ミイナよ、どうだ？」

「はいお父様……何か……安心します」

「おお、そうか」

「？？」

突然の事に動揺するリュウ。何この状況。何で俺王女様に背中の服引っ張られながらくっつかれてんの？　ていうかミイナさん随分大人しくなっているけど……？

リュウの混乱をよそに、王は大きく安堵の息を吐き出した。

「あの……一体何を……？」

「実はな……我が娘のミイナを……しばらくの間、君の傍に置いてやっては貰えないだろうか」

「は、はい？」

飛び出した爆弾発言。全く持って意味がわからない。困惑の極みたるリュウ及び周囲へ向けて、王の話が始まった。

あの時、うかつに飛び出したせいでバルバロイに殺される寸前だったミイナ。彼女はあの場が落ち着いた後になって、目の前に迫った死への恐怖――バルバロイの姿が目に焼きついてしまい、錯乱状態に陥っていた。ガタガタと震える姿に寒いのかという姉からの問いにも、まともに受け答えが出来ない程ショックを受けていたのである。

メガロメセンブリアのホテル（戦いによる破壊は免れていた）へと戻ってからも、その様子は変わらなかった。むしろ震えは酷くなってきている。目を瞑ると腕を振り上げたバルバロイの姿が浮かんできて、眠ることすら出来ないのだ。

当然医者を呼ぼうとした王達だったが、街医者等は全てが怪我人の手当てで出払っていて、どうしようもない状況に陥っていた。そんな折、

「リュウさんの傍なら、ミイナの悪夢も軽くなるのではないかしら」

バルバロイが目に焼きついているのなら、ウィルスに対するワクチンのように、間一髪でミイナを救ったリュウが居れば心の安定につながるのではないか。そんなエリーナの一声で、王はリュウ達の所へと来たのであった。結果は見ての通り。ならば症状が回復するまで、リュウの傍で養生させてやって貰えまいか、というのが王からの頼みだった。

「……と言うわけなのだ」

「……わかりました。そういう事でしたら、是非治るまでこちらで療養して下さい」

これも自分が原因の間接的な害だ。リュウは下心無しの１００％善意で引き受ける事にした。

「……そうか、助かる。預ける身で文句を言える立場でないのはわかっているが、くれぐれも、怪我や病気には気をつけてくれ」

「はい。わかりました」

炎の吐息が守るとなれば、世界でも選りすぐりのボディーガードを得たのと同じである。その点については大丈夫だろうとリュウは思った。そして肩の荷が下りたように、再び安堵の溜め息をついた

王。

……だが何か、王の雰囲気が少しずつだがまた別の物へと変化していっている気がする。

「まぁ諸君らの傍にいれば怪我などについては安心だろう。……だが、な。……もし……万一、だ」

「は、はい」

王様の雰囲気が、変わっていく。普段はどうか知らないが、少なくとも一国の王が公の場で醸し出していい雰囲気ではない。徐々にだがリュウの正面に近付いていて、顔を伏せ気味にしているのがより一層不気味さを演出している。

「もしも……一つ屋根の下で暮らすのをいい事に、君及び君達の内の誰かが我が娘に対して、何らかの破廉恥な行為に及んだとしたら――」

「……」

何か、距離が近い。

ゴクリ、とリュウの喉が鳴った。

王様の背後に、いつの間にかどす黒いオーラが揺らめいている！

「――私はそいつを砲弾に詰め込んで、５００ｋｇの爆薬と共に射出する！　我がウィンディアの総力を結集し、神に誓って八つ裂きにする！　火炙り百叩き市中引き回しの上打ち首獄門、末代までの晒し首だ！　わかったな！？」

「!?　は、ハッ！　りょ、了解であります！　サー！」

「……よろしい」

鬼のような形相とはこの事だ。リュウどころかナギや詠春にまで冷や汗を流させる凄まじい迫力。子を思う親の気持ちだとかそういうのを軽く凌駕している。最早狂気の沙汰だ。きっと王はミイナならば例え目に入れても痛くないのだろう。

「あの……リュウさん。不束者ですが、よろしく……お願いします」

「……ええ。あの……まぁ……我が家と思って寛いでってください」

こうして、また一つリュウの胃に微妙な負担がのしかかるのだった。

――――まだ、生み出された潮流はスイマー城には届いていない。

第十四章　2、仮初

――――リュウ達とナギ達の勝負の日から、2週間が経過した。

「くそっ！　しつこい奴め……っ！」

「逃げんじゃねぇ！」

「ひっ！？」

時刻は夜更け。雲の切れ間から時折衛星が顔を出す深夜。とある街の片隅。暗闇に紛れて逃げる男。追う人影が持つナイフが、キラリと静かに薄明かりを反射する。

「はぁ、はぁ、こ……ここまでくれば……」

「はい残念。こっちは通行止めだよ」

「！？　あっ……ぐっ！？」

「……大人しくソレを渡せば、痛い目見ずに済んだのにねぇ……」

待ち伏せていた追う方の仲間が、追われていた男の腕を掴み、捻り上げる。男は痛みに呻き、ポロッと懐から何かを落とした。

「ったく愉快だねぇ、雑魚の癖に手間取らせやがって。……よっ、と」

「！！」

追っていた男は息一つ切らさずにその場に辿りつくと、その落し物……“腕輪”を、グシャリと踏み砕いた。腕を捻られ腕輪を落とした男は、まるで自身の企みも一緒に踏み潰されてしまった、とでも言いたげに、へなへなと力なくその場にへたり込む。

「さて、任務完了」

「しっかし、これじゃあおいら達まるで追い剥ぎか強盗だよねぇ」

「……ちげぇねぇ」

月光によく似た蒼い光に照らし出され、浮かび上がる二人の亜人……レイとステンは、揃って溜め息をついた。

「ま、ぼやいてても仕方ねぇな。これでここらの腕輪は全部破壊したし、さっさと帰ろうぜ？」

「あいよ。今夜くらいはゆっくり休みたいね」

「全くだ」

レイとステンはへたり込んだままの男にそれ以上何をするでもなく、そこから離れる。周囲に人の気配が感じられない場所まで来ると、ステンは自分の腰に括りつけていた道具袋から赤い宝石を取り出した。徐にその宝石を頭上に掲げると、二人は光に包まれ、その場から消え去った。

「！　あらー、お帰りなさーい」

「おう」

「いやぁ疲れた疲れた」

レイとステンが転移した場所は、スイマー城の地下室。ステンが掲げた赤い宝石・量産型フェアリドロップは、ここに新たに設置された帰還専用ゲート装置……通称トランスポートを基点に調整してある。帰途に限り、こうしてすぐに帰ってくる事が出来るのだ。偶然出迎えたモモは作業着姿で、傍らの機械を整備している。

「学者さんの作ったアレ、役に立ったぜ」

「それはそうよー、なんたって私が作ったんだからねー」

「……まぁ確かに使えたけどさ、何でハニワの形してるのさ?」

「えー？　可愛いじゃない」

「「……」」

レイが黙って自分の懐から取り出したのは、どう見てもハニワの人形。これもモモとボッシュによる発明品だが、搭載されている機能と見た目に何ら関連性など皆無な一品だ。

「……んじゃあ、俺ぁもう寝させてもらうぜ」

「おいらも」

「お疲れさまー」

拠点に着いた安心感からか、どっと眠気に襲われた二人は重めの足取りで自分の部屋へと向かった。モモは二人を見送った後、粗雑なテーブルらしき場所に置いてあったコーヒーを一口啜り、よーしと気合を入れなおして機械の整備に取り掛かった。

……事は、数日前に遡る。

あのメガロメセンブリアでの一件以降、バルバロイの事が気になっていたリュウは、本格的に“腕輪”の探索に乗り出すことに決めた。会議室に仲間を集めて、マスターに搭載されている無駄に豪華な機能の一つ、プロジェクターのように目から壁に世界地図を投影する装置を使い、そこに同じくマスターが感知する腕輪の反応を重ね合わせてみたのである。

その結果に、リュウ達は絶句した。

腕輪の反応である黄色い点が、世界中を埋め尽くしていたのだ。一体誰が何の目的でこんな事をしたのか、詳細は当然ながら全くの不明。だが只でさえ妙な空気が蔓延しだしているここに来て、人を操る事が出来てしまう腕輪が狙ったようにそこかしこに存在する。このままでは、確実に世の中が良くない方向へと進むだろう。

事の重大さを認識したリュウ達は、全員一致でこの腕輪を回収または破壊する事に決めた。飽きずに修行したい（そしてまた勝負したい）と飛び出したナギ達にも注意するよう連絡し、悠久の風にも通報して、このさらなる混乱の火種になりそうな事案に対処する事にしたのだ。メガロメセンブリアに端を発する亜人排斥の動きと人を操る腕輪のコラボ。最悪とも言える組み合わせを何とか食い止め

ようと、リュウ達は動き出したのである。

「じゃーん、探知機能に特化したアイテムを作ってみたのー」

「まぁ俺っち達にかかりゃこんなもんよ」

マスターは一人（一台？）しかいないので、当初は数人パーティの交代制でやろうかと思っていたリュウ達。だがそれでは何かと不便だろうと、モモ先生とボッシュ博士が一晩でやってくれた。何とマスターに搭載されている腕輪探知機能だけを抽出した、簡易的な探知装置を複数作成してくれたのだ。

「……」

「可愛いでしょー。名前はハニーって言うの」

何故か小さなハニワ人形のようなデザインのその装置。それだけに特化出来るなら何故最初からそうしなかった、と内心で突っ込みたかったリュウだが取り合えず置いておく。

とにかくこれがあれば一度に副数人が動く事が出来る。なので計画を変更し、リュウ達は2人から4人程度のパーティを組み、1～2日目的地周辺で腕輪の捜索及び破壊を行い、終わったらフェアリドロップで城に帰還して1日休む。そしてまたランダムにパーティを作って任務に出るというローテーションを組む事にした。

ちなみに移動については体が鈍らないようにと走るのが基本となっていた。既にリュウ達は走った方が下手な寄り合い飛行船で移動するより早いのだ。勿論このために妖精に頼んでフェアリドロップも複数調達した上で、である。

「なぁボッシュ、俺一つだけ納得いかない事があるんだけど」

「……奇遇だな相棒。俺っちも一つ疑問があんだが……取り合えず言ってみ？」

「……何で他のフェアリドロップには、あの変な演出が無い訳？」

「……」

ボッシュもリュウと全く同じ気持ちを抱いていた。どうでもいい余談だが、何故かリュウの持つフェアリドロップ以外には、転移する際の非常に凝った演出が入っていないのだ。他のメンバーに渡された物は、例外なく極めて普通に発光して転移するだけである。単なる嫌がらせなのか、はたまた妖精達の親愛の証なのか、あの演出は全く持って謎である。

とにかくそういうわけで冒頭のレイとステンのように、リュウ達は現在、世界中に赴いては腕輪の破壊または回収を行っているのだった。

腕輪の大半は草に埋もれてたり、既に野生の魔物に壊されていたりといった対処の楽なものばかり。しかしやはり拾われている場合も少なからずある。その時は、ハニーのレーダーを頼りに持っている人間に直接コンタクトを取り、まだ装着していないなら悠久の風からの書状を見せて、譲渡するよう説得する。ごねてくるようなら、ある程度の額までは買い取るようにする。これだけで、腕輪の効力を知らない一般人への対処としては十分だった。

また、反応があるのに頑なに持っていないまたは知らないとシラを切る者も少数居た。この場合はほぼ確実にその腕輪の有効性を認

識していると見て、冒頭のレイ・ステンのように、力づくという強引な方法で壊すのだ。大抵の持ち主が後ろめたい事を考えている事と、一応悠久の風から発行されている書状が効果を発揮し、この場合はそれで問題なく任務を遂行できている。

かつてのキルゴアやトゥルボーのような“既に誰かに対して使われている場合”という最も厄介なパターンには、幸い今のところは遭遇していないのだった。

＊

「凄いです！　私こんな雄大な自然初めて見ました！」

「おーい。あんまり遠くへ行かないようにねー」

「わかってますよー」

さて、ここで話はリュウの近況へと移る。

炎の吐息リーダーたるリュウも動かない訳には行かないので、度々スイマー城から出ている。そんなリュウのパーティ面子は3人まではほぼ固定。リュウ、ボッシュ、そしてミイナだ。ミイナはリュウが傍に居ないと眠れない（部屋は当然一緒）ので、リュウが出掛けるとなると付いて行くしかない。

勿論ゆっくり城で養生しているのが一番安全安心で、リュウもしばらく城に残るつもりではあったのだが、ミイナ自身が「付いていくから大丈夫です！」と譲らない構えで言い張っていた。どうしても付いていくと言って聞かないので、結局リュウが根負けした形と

なったのだ。流石に“移動は走る”なんて無茶は出来ないので、飛行船を使う事になったが。

城に来た当初こそ火が消えたように静かだったミイナだが、数日過ごして大分元気を取り戻したのか、一度決めたら梃子でも動かない頑固さが垣間見えるようになった。ウィンディアの王と王妃の一体どちらに似たのかは、リュウにもボッシュにもわからない。

「ミイナー！　あっちに滝みたいなのがあるよー！　一緒に見にいこー！」

「あ、はーい！」

そして、４人目のメンバーは大抵がリンプー。同行の理由は主にリュウの料理目当て。ミイナとも歳が近いおかげで一際仲が良く、任務そっちのけで遊んでいる事も多い。

「二人ともー！　ご飯にしますよー！」

「「はーい！」」

「……相棒よぉ、なんか最近老けたんじゃねーか？」

「え……マヂで？」

ミイナという同居人が増えたおかげで、何か手の掛かる娘を持つ親のような心境に至る事が多くなったリュウ。成長しないはずなのに、若干の哀愁がその表情には漂っていたとか。

ちなみに今リュウ達が居るのはシルチス亜大陸ルディア地方にあ

る“パーウッズの森”である。ミイナが居るので、あまり戦闘にならなそうな地方を回っている。流石にその辺の魔物程度では今のリュウやリンプーの敵ではないので、ピクニックがてら周辺に存在する腕輪を破壊しつつ、この後ご飯を食べたら帰還の予定である。

「いただきまーす！」

「こうしてみんな一緒に外でご飯を食べるのって、楽しいですね！」

「ねー。あ、そうだ。じゃあ今度ミイナも一緒にサルディン地方でキャンプしようよ！　すっごいキャンプファイヤーとかやってさ！」

「うわーキャンプですかぁ。いいなぁ楽しそう！」

（……）

キャイキャイと盛り上がる女子二人を見て和みながら、それにしても……とリュウは思う。いつも、なんて贅沢は言わない。時々でいいから、今みたいにこうして健やかで楽しい日常を過ごす事が、これからも出来るといいなぁ、と。

＊

その日、午後になって城へと戻ってきたリュウ達一向。リンプーやミイナは取り合えず各々自由行動。だが、リュウにはまだ仕事がある。

「まーた来てるよ手紙がこんなに……」

「ま、仕方ねぇやな」

一応リーダーなので、城に届いた郵便物には目を通す。そのほとんどが、例によって各国からの熱烈なラブコールの手紙だ。特にリュウが普通の人間じゃないという事を知ったせいで、古き民が多く居るヘラス帝国からの勧誘が一層その勢いを増してきた。ヘラスについては、メガロメセンブリアから広がりつつある空気に敏感に反応し、兵力や武器を集めだしているという噂までである。

「うわすげぇ……何かこの前提示された額より桁が一つ増えてる」

「……いやぁヤッコさん達必死だねぇ」

取り分けあの紅き翼といい勝負を繰り広げた炎の吐息は、戦力という面では最重要勧誘対象なのだろう。前には使者と共に大量の贈り物を持って来た事もあった。受け取るわけには行かないのでその時は突っ返したのだが、最近は手紙に書かれている口調も強いものになるばかりだ。

「……」

「どうした相棒。まさか話に乗るってんじゃねぇだろうな？」

「んな訳ないだろ」

一通り手紙に目を通したリュウの表情は重かった。薄々感じている。このままでは例え世界中の腕輪を壊しても、流れは止まらない。今やっている事は気休め程度にしかならないかもしれない。でも……まだ大丈夫。まだ、何とかなる。リュウは首を振った。せめて自

分達が見本となって、人間からの亜人に対する偏見を払拭させられれば、無益な争いは防げる……と思いたい。

そんな風に手紙を見てリュウが真剣な表情をしていると、そこへピューッと妖精の一人がやってきた。

「リュウのヒトー！」

「ん？」

「お願いよぅ、農場に何かヘンなヤツが居るのよぅ！　助けてよぅ！」

「変なヤツ？」

妙に慌てた様子の妖精。リュウとボッシュは顔を見合わせ、放っておく訳にもいかないのでどっこらしょと妖精の案内についていく。城から少し離れた妖精農場の畑の一角に、そいつはいた。

「……」

リュウは、思わず回れ右したくなった。そいつはリュウの姿を確認するや、あぐらで座り込んでいた状態から突然跳躍し、空中で華麗に回転しつつリュウの目の前にズザザッと飛んできたのである。

……両足を折り、地に頭を付けた低姿勢で。何と言う見事なフライングＤＯＧＥＺＡ！　あまりの見事さに非の打ち所が無い。角度とか。

「……何の用だよ」

「は、窮地より我が命を救い出して下さった大恩人に、このラ・カーン！　痛く……痛く感服仕りましてございまする！」

（何か名前戻ってるし……）

そう、今リュウに対して土下座するこの暑苦しい大の男は何を隠そうカーンである。“グレェト”は一時の気の迷いだったのか、今は特に調子に乗った素振りは見えない。一体どうやってこの場所を突き止めたのかは、何かもうどうでも良かった。

「つきましては是非とも……是非ともあなた様を我が主と仰ぐべく、馳せ参じた次第っ！」

（何かキャラ違うし……）

土下座して、顔を伏せたままのカーンが捲くし立てる。要するに、カーンはあのココン・ホ列島で命を狙ったはずのリュウに逆に助けられて感激し、その恩を返そうとはるばるやって来た訳である。極端から極端に走るのは変わっていないが。

「って何もしかして……仲間になりたいとかそういう方向……？」

「御意にござりまする！！」

（えー……）

声を荒げるカーンに、リュウは露骨に嫌な顔をした。リュウ的にはこいつを仲間にする気はあんまりない。暑苦しいし、戦力的にも微妙だし、何と言うか生理的に嫌なのだ。

「なにとぞっ！」

「……」

見た目はどうあれ今のカーンの態度は真剣そのものだ。そして、これほど真面目に頼まれるのをスパッとお断りできるほど、リュウの心は荒んでいない。……けどやっぱ嫌な物は嫌だし。でも何かなー。あー、でもなー。どうしよう。まさかカーンに悩まされるとは……。何気に今までカーンと対峙した中で一番困っていたりする。

「うーん……」

と、非常に難しい顔をして腕を組んで唸っているリュウの傍に、先程案内したのとはまた別の妖精がピューッとやってきた。

「リュウのヒトー、お客様がお見えになってるよぅ！」

「？」

えーまたぁ？　と若干うんざりしたような表情でその妖精の方を向くと、今は屋外だからか妖精はそのお客様を連れてきていた。妖精の後ろに、覚えのあるナポレオンハットがチラチラと見える。今度はどっかの国の使者かなんかか？　とちょっと思ったリュウの予想ははずれ。そこにいたのは最近少し世話になったりしているゴウツク商人その人だ。

「あ、どうも。マーロックさん」

「まいど」

後ろにお付きの人を二人ほど従えて、プハァ、と葉巻の煙を吐き出すマーロック。ふてぶてしい態度は相変わらずだ。

「リーダーやのに畑仕事とは感心ですな」

「う、いやその……」

褒めてる筈の言葉なのに、やはり微妙に返しづらい嫌味のような物言い。どうにもリュウとしてはあまり波長の合わない相手だ。前門のマーロック、後門のカーン。今日はあれか？　厄日か？　と自分の運勢を呪いたくなるリュウである。

「えーと、どのようなご用件でしょうか？」

「フン……今日はあんたに少々相談……いや商談がありましてな」

「？」

マーロックがわざわざ出向いてとは珍しい。何だろう、とリュウとボッシュは思った。実は少し前……というか、ミイナが城に来た次の日にも、マーロックは尋ねてきていた。その時は、何故か大量のレアなアイテムや滅多に手に入らない食材などを携えての来訪だった。

『……あの……この高価そうな品々は一体？』

『あんたらには結果的にとは言え、ワイの命と商人生命を救って貰ったわけですからな。これくらいは当然の謝礼ですわ』

マーロックはそう言い、見たことも無いような宝の山がリュウ達

の前にうずたかく積まれていく。“つきのしずく”“聖杖ホーリーハート”“マンモの毛皮”“武神の小手”“ファイナルブロー”ｅｔｃ。ハッキリ言って普段ならばまずお目に掛かれない、様々な珍品レア品高級品のオンパレードである。しかしいくら命を助けたと言っても、あの強欲なマーロックがここまでするか？　とリュウ達が疑問を浮かべていた時、それを察してマーロックは言った。

『ま、あの件の発端はワイの落ち度。この世界、信用無くしたら厳しくなりますからな』

（！　……ああ、成程。そういう訳ね）

マーロックが何を言いたいのか、リュウは即座に察する事ができた。

あの日、見物客達のボディーガードであるあの兵士隊を雇ったのはマーロックである。その兵士隊にバルバロイのような得体の知れない存在が紛れ込んでいて、あんな大事になってしまった。この事実が公になったら、世間からのマーロックに対する信用はガタ落ちとなるだろう。

この宝の山は、その事を口外するなという口止め料という意味があるのだ。商売人としての致命傷を避ける為に、出費に糸目を付けないマーロックであった。

……とまぁマーロックとはそんな事があり、それから久々の来訪なのだった。その時のアイテムの類は確かに有用な物が多かったので、いくつかは遠慮なく使わせてもらっている。勿論最初から口外するつもりなんてないので貰い特。一応は持ちつもたれつ、ウィンウィンな感じである。

「商談……何でしょう？」

「あんたらの内の誰かを、ワイ専属の用心棒として雇わせて貰いたいんですわ。勿論タダでとは言わん。相応の報酬は払いましょ」

「！？」

マーロックの発言にリュウとボッシュは少し驚いた。マーロックはその性格や仕事上確かに狙われたりしそうな感じではあるが、別にリュウ達で無くとも用心棒なら募集すれば掃いて捨てるほど集まりそうに思える。そんなリュウの表情を見たマーロックは言葉を続けた。

「……あんたも知っとる通り、近頃物騒になってきてましてな。腕のよー立つモンが一人は欲しい所なんですわ。あんたらの実力なら文句はないですからな」

「……」

随分リュウ達に対する評価を上方修正してくれているマーロックである。しかしリュウは困惑していた。個人的な独占欲と言うか、せっかくの仲間を一人とはいえ預けるのは正直嫌だ。我が儘だとわかっているが、それが素直な感想である。だからとていきなり頭ごなしに断るのも、人付き合いという面で見れば確実に良くない。カーンの事もあるのにどうしろと……とリュウの頭が蒸気を噴出しそうになった瞬間――――ひらめいた。

「よし、カーン、お前をウチのチームに入れる！」

「！！」

リュウは突然クルッと反対方向を向くと、ずーっと土下座していたカーンに向けて上からそう言い放った。ガバッと顔を上げ、まるで餌を与えられた犬の如く喜びに満ちるカーン。これはもうレッドカードだ。ハッキリ言ってむさ苦しい男がやっていい表情ではない。

「……で、最初の仕事。たった今からこちらに居るマーロックさんの所に出張。以後彼の身辺警護を行う事」

「了解であります！」

俊敏に立ち上がり、ビシィッと敬礼の姿勢を取ってリュウの言葉に従うカーン。勿論そんなやり取りを間近で見させられて、黙っているマーロックではない。

「待った。そないな得体の知れん男、話と違いますがな」

非常に最もな突込みだ。当たり前すぎてリュウの方がどう見ても分が悪い。

「……心配はご無用です。このカーンはこう見えても、一度は俺達さえ苦戦させたヤツですよ」

「……ほぉ……？」

（苦戦したのは相棒だけだけどな）

リュウの言葉を受け、値踏みするようなマーロックの視線がカーンをねめつける。同時にボッシュの心の中に呆れた感想が冴え渡る。でも勿論ボッシュは声には出さない。既にリュウの考えは伝わって

いる。何しろこれは上手くいけば一石二鳥。マーロックの頼みとカーンの厄介払いを同時に行えるナイスアイデアなのだ！

「……」

……が、マーロックは中々首を縦に振らない。いかにリュウの推薦とは言え、己の目でこの謎の男の腕前を直接見た訳ではないのだ。自分の命を預けるからにはそう簡単に頷く訳には行かない。雰囲気を察したリュウはこうなったら駄目元！　な気分でさらなる追撃を繰り出す事にした。

「あ、報酬は事後報酬で構いませんし、査定も辛口で結構です。期限もそちらで決めて貰って構いません」

「！」

報酬についてはタダで……と言おうかと思ったが、それでは逆にカーンの実力に対しての不信感を与えてしまう。よってリュウは報酬をマーロックの裁量に１００％委ねる事にした。期限は決めずの出来高払いで構わないとしたのだ。ここの所の出費が大きいマーロックにとって、難癖付ければリュウを苦戦させた程の戦力をずーっと格安で雇う事ができるという破格の条件だ。リュウにとってもカーンを波風立てずに厄介払いできるというメリットがある。お互いにとって至れり尽くせりの提案だ。

「……」

そして、マーロックの中で光をも凌駕する速度での計算が行われた結果……

「……ええですやろ。交渉成立ですわ。したらその条件で雇わせてもらいましょか」

……マーロックは折れたのだった。

「どうぞどうぞ。こき使ってやってください」

「……じゃ、よろしく頼みますわ」

「お任せください！　このラ・カーン、主殿を全身全霊を掛けてお守り致しますぞぉぉ！！」

「……何や暑苦しいなこいつ」

流石のマーロックもカーンの無駄に暑いテンションに若干引き気味だ。そのカーンはムキッ！　と無意味な筋肉アッピールまでしている。まぁ実力的な意味でも、あのココン・ホ列島を一人で乗り越えられる人間などそうはいないから大丈夫だろう。リュウは決してカーンに焦点を合わせないようにしながらそう思った。

「ほな、これで失礼します」

「ええ。また何かありましたら」

そしてマーロックは踵を返し、カーンを連れて去っていった。炎の吐息にカーンが入り、そしてすぐに――ある意味永久に――出張に出された事を知る者は、他には誰もいないのだった。

「相棒、やるなぁ」

「あー疲れた」

全くこういうのって戦うのよりも何か精神的にごりごり削れるわ。と心の中で愚痴るリュウ。困っていた妖精からお礼を言われたリュウとボッシュは自室に戻る事にして、畑から城へと戻り、ホールを通り抜けようとテクテク歩いていく。

「あ、リュウさん！」

「？」

するとちょうどそこで、何やら妖精達と世間話をしていたらしいミイナに引き止められた。

「ほら皆さん、ちょうどいい所にリュウさんが来ましたよ」

ハテナ顔でリュウが近づいて来ると、何故か笑顔なミイナに促され、前に出てきたのは妖精リーダー三人。いつもの調子とは違い、何かおずおずとした感じである。

「？　えーと、どうかした？」

リュウがふつーに尋ねると、三人の中の赤いのが代表のように前に出て、ズイッと手を差し出した。小さな掌の上に、何か物体が乗っている。

「？」

「こ、これ……私達がずーっと持ってたお宝よぅ」

「リュウのヒトにはいつもお、お世話になってるから」

「エッヘン、特別にあげるわよぅ！」

「！」

そう言われてちょっと強引な感じに渡されたのは、何か小さな石ころの様なものだった。言葉尻から、恐らくリュウと会うよりも前から持っていた物だろう。妖精達から感謝されているとはあんまり思ってなかったリュウは、突然の出来事に少し混乱していた。まさかのびっくりサプライズ。唐突過ぎるが慕われている事はわかったので、何かこう胸に込み上げてきて涙がちょちょ切れそうだ。

……それはともかくこの石は一体なんだろうか。

「えと……これって一体何？」

「ふっふっふ、聞いて驚け見てビビレよぅ！」

「何と、私達妖精に伝わる伝説のアイテム！」

「その名も“時の砂”！　……の結晶なのよぅ！」

「……時の砂？」

時の砂。

何と妖精が言うには、その砂には時を止めるほどの力があるのだという。しかも今貰ったこれはさらにその結晶だから、ひょっとしたら時を遡る事も出来るんじゃないか、という程の力が備わっている！　……かもしれないらしい。

「へー……」

「ちょっとリュウのヒト！　リアクション薄すぎるよぅ！」

伝承が信じていいのかイマイチ曖昧な点がなるほど妖精らしい。まぁ仮にこれが普通の石ころだったとしても、感謝、と言う気持ちに対してリュウはきちんとお礼を言うだろう。

そう……普通、であるなら。その石の見た目は、ある意味普通じゃなかった。

ぶっちゃけるとなんか不気味なのだ。ちょうど二つ並んだ窪みと、微妙に削れたその下の縞模様が。まるで……

「……何か髑髏に見えるんだけど……」

「「……」」

ボッシュもミイナも思いっきり目を逸らした。どうやら二人は気付いていたらしい。その石ころは、一度気付いたらそうとしか見えないほどに人の頭蓋骨そのものだった。ミニチュア化されているものの、持ったままなら一歩歩く度に敵とエンカウントする呪いが掛かってそうな勢いである。妖精からのプレゼントなので無碍には出来ないが、どう見てもこれが“時の砂”の結晶等と言う大層な物には見えなかった。

「だ、大丈夫よぅ！」

「私達を信じてよぅ！」

「あー、うん……でもどうしていきなりこんな？」

何か微妙に恥ずかしいやうな感じで困ったリュウは、話題を変えることにした。お世話になってると言われても、やっぱり唐突過ぎると思ったからだ。

実際の所は、妖精達が「何だかんだで店や目標まで持てたし、ここまでしてくれたリュウにどうやってお礼をしよう？」と相談していた所へミイナが通り掛り、彼女が「正面から素直に伝えるのが一番いいと思いますよ」とアドバイスした結果である。

その妖精は妖精でリュウから「何故？」と問われると気恥ずかしくなったので、3人同時にそっぽを向いた。

「べ、別にリュウのヒトが最近何か疲れてるようだからって思ったわけじゃないよぅ！」

「そうよぅ！　日頃の感謝とかそんなんじゃないよぅ！」

「たまたまってやつよぅ！　だから勘違いしたら承知しないよぅ！」

「……」

3人ともそれぞれつーんと別方向を向いている。全く素直じゃないテンプレートな態度だが、リュウはその言葉の解読法ぐらいわかる。しっかりとその気持ちを受け取る事にした。

「……ありがと。じゃあ遠慮なく貰っとく」

リュウが正直にそう言うと、妖精達は一瞬だけ嬉しそうにして、

やっぱりぷいっとそっぽを向いた。心なしか、忙しなく羽がパタパタと動いていた。

＊

「あいつらも可愛い所あんじゃねぇか。なぁ相棒？」

「ん？　うん」

自室に戻ってきたリュウとボッシュ。
何となく、自分がやってきた事が良い事だったと認められたみたいで、リュウは嬉しかった。
モチベーションがぐーんとアップしたのは間違いない。

「よっし、明日も頑張るか」

「おうよ」

その夜、貰った髑髏（時の砂の結晶（仮））をポケットに入れたまま寝てしまったリュウが、まるで呪いにでもあったようにうなされていた事はボッシュとミイナしか知らない。

第十四章　3、悪夢

それから、さらに数日が経過した。

リュウ達の努力により、世界中に散らばっていた腕輪の反応はその大半が姿を消していた。進捗は順調かと思われたが、しかしその勢いも終盤になると、事態はそう単純な話ではないという事にリュウ達は気付く事になった。反応が未だ残っているのは悠久の風からの書状も効力を発揮しない、権力のみが物を言う治外法権の領域。即ち、各国の政治・司法を司る都市である。

腕輪はまるで狙ったように様々な国の中枢にぽつぽつと点在しており、リュウ達ではその当事者と接触する事さえままならなかった。強力なセキュリティに阻まれ、事を荒立てては活動に支障が及ぶ為強引な手段に出る事も出来ない。何としても腕輪を取り除かなければならない重要な場所に限って、指を銜えて見ている事しか出来なかったのである。

リュウ達の動向なんて最初から計算の内だと嘲笑うかのように、あの日以降世界に流行りつつある不穏な空気は留まる気配を見せない。日を追う毎に、ギスギスとした敵意の様な物が人々の間にどんどん広がっている。メガロメセンブリアからそれほど遠くなく、リュウを含めて純粋な人間が一人も居ない“炎の吐息”の拠点スイマー城にも、心ない罵倒や批判の声がちらほらと届き始めていた。

――そんな中、久しぶりにスイマー城に炎の吐息メンバーが丁度全員集合し、せっかくなのでみんなでゆっくりしようと休日に設定したとある日の朝方。

「うあぁぁ！？」

ようやく太陽が顔を出し始めるかという頃に、リュウはベッドから飛び起きた。息は荒く、寝間着は汗でぐっしょり濡れている。何かとてつもなく恐ろしい夢を見ていた気がするが、どんな夢だったか思い出せない。

「ふぁ～ぁ……あんだよ相棒……朝っぱらから……」

「ん～～……リュウさん……？　どうかしましたかぁ……？」

いきなり響いた目覚ましに反応し、欠伸をしながらもぞもぞ動くボッシュと３／４程まだ夢うつつなミイナ（ベッドは当然リュウとは別である）が、部屋の主に声を掛ける。ボッシュは前足で器用に眠い目を擦りつつ、妙な叫び声を上げたリュウを見て、ギョッとした。まだ外からの明かりが入ってこなくとも、尋常でないその様子だけはしっかりとわかった。

「お、おい相棒大丈夫か？　顔真っ青だぜ？」

「あ……うん、まぁ……」

リュウは息を整えながら困惑していた。今見ていたのは少なくとも良い夢ではなかった事はわかる。別に寝る直前に怖い話をしていたとか、そういう事はない。なんだか分からないが快楽である筈の睡眠を苦痛に変えられて、リュウは不気味さを感じるよりもまず腹が立った。何を見ていたのか忘れてしまったのが、そのストレスに拍車を掛ける。とにかくこのやり場のない怒りの原因は何だろうと考えて、ふと枕元の小さな台の上が目に止まった。

「……」

寝間着に着がえた際に取りだしたポケットの中身等がそこには置かれている。フェアリドロップにサイフィス達の契約カード、眠れなくなるからと外している“竜のなみだ”。そしてミニチュアサイズの髑髏……もとい“時の砂”の結晶。

「……これか」

ここ数日持ち歩いてわかったが、見た目と違って特に何かの呪いがあるという訳ではない最後の品。しかし妖精に貰った当日も自分は夜にうなされていた（と後でボッシュに聞いた）ので、リュウは嫌な夢を見た原因をこれに全て転嫁する事にした。一応くれた妖精達への義理でいつもポケットに入れているが、本当なら今すぐドラゴンズ・ティアの奥底にでも放りこみたい所だ。

「……何だってんだよ……」

二度寝する気分にもならなかったので、訝しみつつもリュウは起きる事にしたのだった。

＊

「さて、今日はどうすんだ相棒？」

「んー、取りあえず朝飯食ってからかな」

「あいよ」

「朝はしっかり食べないと駄目ですよね」

休日なのに思いのほか早起きしてしまったリュウとボッシュとミイナは適当に顔を洗い、身嗜みを整えると、妖精達の居るホールを目指す事にした。最近は農場もそこそこ順調で食材に困らなくなってきたので、常駐の妖精達に頼めば朝昼晩3食作ってくれるのだ。

ちなみにリュウの持ち物の一つであるドラゴンブレイドは、今はもう抜き身で背負っている訳ではない。

先日、以前のカナクイ乱獲等で得た大量のポケットマネーに物を言わせ、有名な鍛冶屋の名工ビルダーという人物に依頼して、オーダーメイドの鞘を作って貰ったのだ。完成した鞘はリュウの意思に呼応し、1マイクロ秒という驚異的な速度で鞘の腹の部分を自在に開閉させる事が出来る。つまり背負っていても簡単に抜刀する事が可能であり、しかも耐久性も抜群。勿論腰に装備した場合、通常の剣と同様の抜刀も出来るという珠玉の逸品である。奮発した甲斐もあり見た目も中々カッコいいデザインに仕上がっていて、リュウは結構気に入っていたりする。

「む……早いな」

「あ、おはようございます」

そんなこんなでリュウとボッシュとミイナが食堂と化しているホールに到着すると、反対側から鰐顔の巨体が姿を現した。早朝の訓練を欠かさず行う真面目な男、ガーランドである。

「ガーランドさんも朝飯を？」

「うむ」

そう答えながらどかっと特注の椅子に座る鰐男。もともと備え付けの椅子だとガーランドやランドの体重を支えきれないので、わざわざこの二人専用に拵えた頑丈な椅子だ。

「そう言えば、表にまた大量の手紙が届いていたぞ」

「うぇ、またですか……」

「まぁ頑張れ相棒」

あんまり聞きたくなかった情報を貰い、朝からテンションの下がるリュウである。手紙に関しては読まずに捨ててしまえばいいのだが、もし何か自分達の不利益になるような事が書かれていたら厄介なので、一応全部に目を通すのがほぼ日課になっていた。

「めんどくせー……」

「ふっ、まぁそう腐るな。後で訓練に付き合ってくれるなら、半分手伝ってやってもいいぞ？」

妖精達によって運ばれてくる朝ごはんを前にしながら、ガーランドから出された提案に唸るリュウ。厄介な日課が半分になるのは正直魅力的だが、条件として手伝うガーランドの自主トレはそこそこの量がある。何より時間的拘束がどれほどか不明なのが気に掛かる。

「んー……いえ大丈夫です。何とかこっちでやりますよ」

「む、そうか。残念だ。出来れば浮遊魔法について聞きたかったのだがな」

「それでしたらまた今度……」

（あぶねー。ナイス判断俺！）

ガーランドは何気に拘る所があり、修行に関しては自分が納得いかないと同じ事柄を延々繰り返す事が多々ある。それに巻き込まれたら今日一日くらい簡単に潰れてしまうだろう。せっかくの休みなのにそれではあまりに勿体無い。安易に受けなかった自分の判断を自画自賛なリュウである。

朝ごはんを食べ終わると、リュウは大量の手紙を持って例の会議室へ移動する事にした。何もない時は会議室というよりは、休憩や簡単な遊戯などの多目的な部屋として使われているのだ。自室でなくここにした理由は、誰か来て無償で手伝ってくれないかなーという淡い期待も込めての事である。テーブルの上にどさどさと大量の手紙の類を置くと、適当に一通ずつ封を開けて内容を確認していく。

「あんまり代わり映えしないなー」

「お、前より提示額頑張ってんなぁこいつ」

お決まりの文句に彩られた手紙を読み進めるリュウとボッシュ。ミイナは妖精達の所からお茶を持ってくると言って席を外している。特に厄介そうな話は無いとわかると、読み終わった手紙は申し訳ないがゴミ箱にポイッと直行である。

「頑張っていますね、リュウ」

「おはよー！」

「あ、お二人丁度いい所に」

リュウが嫌々ながら手紙の山を消化していると、そこへふらりとゼノとリンプーが現れた。二人はたまたま廊下で会い、せっかくの休みだから近況も含めて世間話でもしようと会議室に来たようだ。勿論このチャンスを見逃すリュウではない。

「良かったらコレ手伝って貰えません？」

「ん～、いいけどあたしムズカシー事よくわかんないよ？」

「あと少しじゃないですか。私達に頼むより、読み進めた方が早いと思いますよ」

「……ですよね」

言われてみると何だかんだで手紙の山は結構減っている……ように見える。何だかうまく丸め込まれた気がするが、とりあえず二人への救助願いを取り下げるリュウ。女性の目がある手前あんまりグダグダしすぎるのもカッコ悪いので、気を取り直して残りを一気に読破しにかかる。

「……よし、これでしゅーりょー！」

「まぁいつも通りのヤツばっかだったなぁ」

一気呵成に読み終えると最後の一通をクシャッと丸め、左手は添

えるだけの華麗なシュートをゴミ箱へ決めてぐーっと伸びをするリュウとボッシュ。例によってへラス帝国のものが一番上から目線な内容だったが、他には特に気になる話などはないようだった。そうこうしているとリンプーがテテッとゴミ箱に駆け寄り、その中の一枚を拾い上げて文面を嬉しそうに指差した。

「ねぇねぇ、ここに書いてある高級ディナーの招待とかさ、あたし行ってみたい！」

「うーん、俺も行ってみたいトコですけど、そういうので先方に変な気を持たせると悪いじゃないですか」

「そうですね。相手に付け入る隙を与えるのは良くないでしょう」

「ぶー……いいじゃん。あ、そういえばさー……」

リュウとゼノから駄目出しされて膨れるリンプー。それから少し世間話に花を咲かせ、まったりとした和やかな時間を過ごしていると、廊下の方からドスドスという大きな足音が響いてきた。

「よおリュウ、ここに居たか。また一通来てたぜ」

「？」

ピッ、と指先に挟まれた手紙を差し出すのはこの城一番の早起き者、ランドだ。妖精農場の監督責任者のような立場のランドは朝から畑を回って作物の具合を見ているのだ。リュウはうんざりした顔を手紙に向けつつもしっかりと受け取った。配達の時間と微妙にズレてしかも一通だけ？　とその手紙の裏を見てみても、差し出し人は書かれておらず不明。

「確かに届けたぜ。じゃあな」

「ええ。……はぁ、さて何だろ？」

忙しそうに畑へと戻っていくランドに礼を言い手紙を開けてみると、中にはメガロメセンブリアへの呼び出し文が書かれていた。当たり障りの無い挨拶から始まる、いわゆる一つの招待状だ。予定の日付はなんと今日である。大方配達が遅れたとかそんな理由だろうか。何やら堅い話ではないとの事で、待ち合わせに指定されているのは少々高級な雰囲気の喫茶店らしき場所である。

「……でさ、タペタってばその凄いおっきなミミズを美味しそうだって言って――――」

「そ、それはまた彼らしい話ですね……」

「あの趣味だけは俺っちも勘弁願いてぇなぁ。そういや前によ……」

楽しそうに盛り上がるボッシュ達を横目で見ながら、リュウは手紙をゴミ箱にダンクシュートしようと立ち上がった。まだ最後まで読んでないが、どうせ他のと同じ様なことしか書かれていないだろう。特に、この手紙はメガロメセンブリアに来い、と言う趣旨だ。あの一件以来、メガロの街には気分的な意味でとても行き辛くなってしまっている。なのでどうせ行かねーよ、と既にスルーを心に決めながら、その最後に書かれていた文字を目にしたリュウは……立ち止まった。

『では、お会いできる事を楽しみにしています。

親愛なる“竜の成り損ない（ドラゴン・クォーター）”様へ』

「……っ！」

「？　どした相棒？」

「いや……」

「何？　何か面白そうな事でも書いてあった？」

「いえ、特には……」

口では平静を取り繕うリュウだがその顔は強張り、力が籠っているのか手紙の端をグシャリと握りつぶしている。只ならぬ気配にゼノやリンプーは話を中断して怪訝な表情を浮かべ、ボッシュは空気を察してすぐさまリュウの肩に飛び乗った。

「俺、ちょっとメガロに用が出来たんで行ってきます」

「え、今から？」

「……」

「あ、ちょっと！　リュウ！！」

言うや否や二人を残し、リュウは会議室から飛び出した。廊下の途中にある適当な窓から空に躍り出て、浮遊魔法を発動させて最高速度でメガロメセンブリアを目指す。

≪どうしたってんだ相棒！　その手紙に何が書かれてたんだ!?≫

≪……≫

ボッシュはポーチに入っていないため、猛スピードで飛行するリュウの肩にしがみつくのが精一杯だ。そんなボッシュからの念話に、リュウは答えない。その心にあるのは只一つの疑問だけ。

（なんで、その呼び方を知ってる……！）

待ち合わせの時間指定はなかったが、リュウはすぐにでもこの手紙の差し出し人を確認したかった。最後に書かれていた“竜の成り損ない（ドラゴン・クォーター）”という呼び方をしたのは、後にも先にもあの時のバルバロイのみ。誰にも言っていないし、あの場には自分の他に誰も居なかったハズ。

相手の正体がわからない以上、警戒するに越した事は無い。最悪の場合戦う事も考えると、とても仲間の誰かを連れていく気にはなれなかった。決して信頼していない訳ではなく、むしろ戦力としてなら連れて行った方が良いのだが、これ以上自分のしがらみに巻き込むのは嫌だったのだ。

「……」

無言で空を飛び続けるリュウの顔を見上げながら、ボッシュは恐らく何か大きな問題が起きたのだろうと感付いていた。もうかなり長い付き合いだ。リュウが何も言わなくても、それくらいはわかる。

程なくしてメガロの町の手前まで来ると、リュウは着地して歩いて街へと入っていった。変身さえしていなければ、剣を背負ってる

とは言え見た目普通の人間の子供である。入り口にテロを警戒して設けられている空港ゲートのような場所も、特に咎められる事無く普通に通された。そしてスタスタ歩いて街に入った直後、リュウとボッシュは四方から纏わり付いてくる視線にすぐさま気が付いた。

≪なぁ相棒……俺っち達、付けられてんな≫

≪……だろうね≫

周囲から自分の動向を注視している幾つかの視線。リュウとボッシュはどこからか監視されていた。まぁ考えてみれば当然だ。メガロメセンブリアの上層部なら、あの騒動の一端がリュウであるという情報は掴んでいるだろう。入り口ゲートに居た役人がすんなり通した事からわかるように、上の人間しかその事は恐らく知らない。

≪どうする相棒？≫

≪……スルーで≫

監視しているのはその上層部直属の諜報組織辺りだろうか。簡単に尻尾を掴ませる時点で大した実力は無い事がわかる。力づくで排除しようとしてこないのは、もし自分が暴れでもしたら、またあの出来事の二の舞になるとしての判断か。そこまでリュウは推測して、まぁそれくらいなら問題ないし、と監視に対しては放置を決め込んだ。

実際、国が街に入ったリュウに対して“監視”という曖昧な対応を取った理由としては二つある。一つはリュウの想像通り、触らぬ神に祟り無し、という上層部の意向。もう一つは、メベトが提出した報告書にリュウの人柄に関して詳細な記述が載っていたおかげで

ある。

「……」

大分復興が進み、以前は多少なり見かけていた亜人の姿がパッタリと見えなくなった大通りを無言で進むと、指定の喫茶店らしき建物が見えてきた。

「……ここだ」

店は高級感とお洒落な雰囲気が程よくマッチした内装をしており、相応に人気があるらしくかなりの人が入っているのがすぐにわかった。

「……」

何の話をするか知らないが、特に人払いをしているわけではないらしい。リュウは無意識に拳を強く握った。これではもし……万が一だが、この場で差出人である謎の相手と戦う事になってしまったら。再び何の罪も無い人達を巻き添えにし、せっかく復興してきたメガロの街に、もう一度地獄のような光景を産み落とす事になってしまう。ある意味リュウにとってトラウマのようなあの出来事を繰り返すのは、絶対に避けたい。

「相棒……」

「……入ろう」

ボッシュの案じるような声を耳にしたリュウは、意を決して店の中に入る事にした。悩んでいても仕方が無い。手紙には話がしたい

と書かれていた。その言葉を信じるなら、いきなり襲ってきたりはしないはず。それに差出人が誰なのかを確認しなければ、この先ずっと悩まされる事になる。

「いらっしゃいませー。一名様ですか？」

「いえ……待ち合わせを……しているんですが」

手紙にはどの席に着いている、とまでは書かれていなかったので、声を掛けてきた店員に用件を伝えつつ注意深く周囲を見て回る。すると一人、二人掛け用のテーブル席に、リュウに背を向けて座りカップを口にしている男が目に入った。明らかに、一人だけ雰囲気が違う。リュウから発せられた警戒の視線に気付いたらしい男は、カップを置いて振り返る。

「やぁ、来てくれたんだね」

「！？」

リュウは目を疑った。ボッシュも驚きに固まった。振り返った男は、バルバロイの見た目をそのまま成長させたような白髪の青年だった。脚を組み、優雅にコーヒーらしき飲み物を飲んでいる。一見すると普通の人間のように見えるが、強いて違和感を上げるとするならその眼と表情だ。感情の色という物が全く伺えない。無表情、ではなく、どちらかと言えば人工物のような……それこそ人形のような色をしている。

「初めまして。どうぞ、そっちに座るといい」

「……」

リュウは警戒を緩めず、対座の席へと近付いていく。一時も青年から逸らさず注視したままで、リュウは瞬時に考える。手紙の差出人は間違いなくこいつだ。どうして“竜の成り損ない”という単語を知っているのか。何の目的で自分を呼び寄せたのか。それら以外にも、聞き出さなければならない事が山ほどある。

「どうしたんだい？　座りなよ。別に罠なんて仕掛けてはいないさ」

「……」

椅子に手を掛けたまま座ろうとしないリュウに向け、優しく促す青年。どこかぎこちなさを感じるものの、一見すると穏やかなその表情は、険しい表情をしたリュウと対照的だった。リュウは立ちっ放しでは先に進まないと判断し、ゆっくりと椅子に座った。注文を取りに来たウェイトレスに静かにアイスコーヒーを頼み、なお視線は青年から離さない。

「……警戒しているね。けど安心していい。ここで君と争うつもりは微塵もない」

「……」

確かに、この白髪の青年からは殺気や攻撃の意志は全く感じ取れない。むしろ自分の方が周囲にピリピリとした威圧を与えてしまっているほどだ。青年は静かに、まだ湯気の立つホットコーヒーを一口啜り、そして無造作に置いた。……まるで隙だらけだ。リュウの腕なら今の間に5回は首を刎ね飛ばす事が出来ただろう。少なくとも、その態度から争うつもりはないという言葉だけは本当の事だとリュウは判断した。

「……お前は、何者だ」

「フ……やっと口を開いてくれたね」

“何者だ”と聞いたが、今の時点で薄々リュウには想像がついている。ドラゴンズ・ティアにしまわれている「記憶のメモ」にも、こいつの事を書いた覚えがある。そう、こいつは……リュウが初めてバルバロイと遭遇したときに、その似ている容姿から勘違いした“完全なる世界”の幹部……

「じゃあ、自己紹介をさせて貰おう。僕は地のアーウェルンクス。君がこそこそと嗅ぎ回っていた組織、“完全なる世界”の一員さ」

「！」

素直に名乗った事を受けて、リュウは僅かに目を見開いて警戒を強めた。まさか堂々と……今までバルバロイから以外は尻尾さえ掴めなかった“完全なる世界”の名まで出して名乗ってくるとは思っていなかった。

「……もう少し驚くかと思ったけど、意外と冷静なようだね」

「……」

アーウェルンクスと名乗った青年は、口でこそ笑いながら顔は笑っていない。青年が指摘した通り、リュウのソレは驚きというよりは怪訝、という部類の表情だ。確かに少し動揺したが、まだ無事な昔の記憶の中に、その辺りの事は残っている。だから、正体そのものを聞いたところで、それは考えを肯定する「確認」くらいの意味

しかない。重要なのは、一体何を企んでいるのか。“何故正直に正体を明かしたのか”だ。

アイスコーヒーを運んできたウェイトレスが去るのを見届けると、青年はそんなリュウの考えを読み取ったかのように、話を続けた。

「フフ、僕があっさり素性を明かした理由が気になるかい？　なら、正直に言おう。……僕達は降参する事にしたのさ。君の力は想像以上だった」

「!?」

青年は演技ともつかないような諦めた表情をして、小さく両手を上に挙げる素振りを見せる。これには流石のリュウも困惑した。

……本気なのか？　いきなり降参だって？　まだその組織の全貌すら掴めていないのに、自分はまだ何もしていないのに。なのに降参？　それに力って一体何を見てそんな……そこまで思考を巡らせて、リュウは一つ思い当たった。あの手紙に“竜の成り損ない”と書いてあった以上、それしかない。

「やっぱりあのバルバロイは……お前らがたき付けたのか……！」

「へぇ、僕達だと気づいてたんだ。その通り。あんな失敗作でも最後には役に立ってくれたよ」

「……！」

リュウは、バルバロイに同情する気は欠片もない。友情を感じているなんてベタな展開もあり得ない。ただ、バルバロイをさも当然のように扱き下ろす青年の態度が、気に食わないのは確かだった。

そして、この青年が言った事が本当なら、今リュウ達が世界中で破壊して回っているあれも……

「じゃあ、あいつの腕に着いていた……世界中に散らばっている“腕輪”も、お前らが……」

「そうさ。今世界中に“何故か”散見されるのは、アレの制御さえ出来なかった不良品さ。資源は有効に活用しないとね。……それと、君は一つ勘違いをしている。アレの腕に着いていた物体は……操る為の物じゃない」

「！　……なんだって？」

青年は楽しそうに、リュウの驚きを期待するように話している。アルのような性悪のそれとは違う、もっと人が絶望に沈むのを心のそこから楽しみにするような、何か薄暗い期待感が感じ取れる。

「アレに付いていたのは……あの巨大で醜い本性を抑えつける為のリミッターだよ。“たまたま”腕輪と同じデザインになってしまったのだけれど……ね。制御機能自体は、思考盗聴装置と共に直接内部に埋め込んであっただけの話さ」

「！！」

この青年は……いや、完全なる世界は、わかった上でやっていたのだ。リュウがバルバロイの腕輪に目を付けるであろう事を。そして、その結果がどうなるかも。リュウは踊らされていた事を知り、しかしまだ冷静に、その怒りをぶつけたりはせず内に溜め込んでいた。

「ならバルバロイをあそこまでしたのは……俺を試す為か」

「試す、じゃない。倒す気だった。僕達の睨んだ通り、君は自らアレのリミッターを破壊してくれたからね。あの失敗作が暴走すれば、君を倒せると思っていたのさ。まさか君がさらにその上を行くとは思わなかった」

青年はそこまで言うと、奇妙なまでに言葉が出てくる舌を潤すように、再びコーヒーを口にした。先程から何度か出てきているが、リュウにとって聞き捨てならない単語が青年の話には混じっている。“失敗作”？　それはユンナにとって、と言う意味なのか？　何故こいつがそんな風に呼ぶんだ？　取り留めの無い疑問だが、青年の態度は妙にそこに固執しているように思えた。

「……なんで、お前はバルバロイを失敗作って呼ぶんだ」

「……知りたいかい？　まぁ教えてあげるよ。アレは君のプロトタイプであると同時に……僕達にとってもプロトタイプなのさ。……癪だけどね」

「！？」

「アレの正式名称は、アーウェルンクス・インコンプリート。かつて“彼女”に拾われた後、我が主によってあの姿を与えられた、プロトタイプのプロトタイプ。アレに使われている技術を解析できたおかげで、主は僕を始めとした様々な種類の人形を造る事が出来るようになったのさ」

「……」

「けどアレは元々無駄な感情が表に出過ぎな上に、彼女への忠誠心の方が圧倒的に強かった。僕らと別れてからは“アーウェルンクス”の名も捨てていた。だから、アレには“失敗作”が最も相応しいのさ」

「……」

青年は全く何の感情も見せずに、そう吐き捨てた。……何なのだろう、この気分は。話を聞いて、リュウは自分の内側に渦巻く思いに戸惑っていた。この、アーウェルンクスを名乗る青年の一言二言が、有体に言えばムカツクのだ。

「フ……」

一旦話が途切れたと見ると、青年は気取った態度でパチンと指を鳴らした。すわ罠か、と周囲に警戒を向けるリュウをさして気にする風も無く、青年は再びコーヒーを口にしている。無言のままで居る二人。何も起こらない？　とリュウが思った直後、奥からウェイトレスがケーキの乗った皿を持って来て、リュウの前に置いた。

「話は変わるが、ここのケーキは絶品なんだそうだ。シェフが朝早くから仕込みをしていてね。限定２０食。それを君の為に取り置きして貰っていた」

「……」

一体、こいつは何を言っているんだ？　何のつもりなんだ？　本当に訳がわからない。罠か？　ただの冗談か？　こいつはこんなユーモアを言うような存在だったのか？　傍から見れば、ただ年上の男が年下の子供にケーキを奢っているだけの様に見える一連の流れ。

そして当事者たるリュウは、思いきり混乱していた。

「……これは一体何の真似だ」

「フフ……さて？　まぁこれは僕達から君への、ほんの些細な……お礼さ」

「……」

お礼……こいつにお礼されるようなことをした覚えは無い。例えばウィンディア王とかマーロックの言ったような、世間一般の価値観と同じ意味の「お礼」だとは全く思えない。無論、結論としては拒否が相当だ。

「……お前なんかに礼を言われる筋合いは無い」

「まぁそう言わず、是非僕に礼を言わせてくれたまえよ。『君と失敗作のおかげで、この世界を戦乱に巻き込む準備が整った。どうもありがとう』とね」

リュウの顔から、表情が消えた。

「最初の一歩が一番難しいんだ。それを僕達に代わってやってくれた。本当にありがとう」

青年の造られた笑顔が、薄ら寒い物に見えた。何を言っているのかわからない。

「やめろ……」

「君が“僕達の目論見通りに”あの失敗作と死闘を演じてくれたからこそ、これからの僕達の行動も非常に楽になった。感謝しているんだ」

「やめろ……っ！」

リュウから、怒気と共に凄まじい気迫が放たれた。青年の後ろに位置するテーブルの上のグラスやカップが砕け散る。原因不明の現象により、店内はざわつき騒然となった。

≪相棒！　落ち着け！≫

≪！≫

今まで成り行きを見守っていたボッシュが大音量の念話を送り、リュウはハッとして気持ちを押さえ込んだ。慌しく店員が右往左往する店内を少し見渡し、大事にならなくて良かったとボッシュに感謝の念を送る。

「……」

……ふと、我を忘れかけた。わかってる。一番突かれたくなかった所を突かれたからだ。自分の行動が、人々の心に楔を打ち込み、結果として戦乱の世にしてしまう。本当は止めたかったのに、止めるはずだったのに、「魔法世界に戦争を招く事になる元凶は、他ならぬリュウ自身」である事を目の前に曝け出されたのだ。

例え裏で働いていたのが完全なる世界だとしても、ひょっとしたら自分が何かもっと別の方法で対処していれば、魔法世界に戦争の火種を落とす事はなかったのではないか。心のどこかで、そうなの

ではないかと恐れていた。

「フ……」

青年はリュウの気迫を受けても余裕の態度を崩さず、悠然としている。……楽しんでいる。リュウの胸の内を見切って、的確にそこを突いている。直接戦うのよりも、はるかに痛い攻撃だった。

「本当はね。もう随分前の時点で、この魔法世界は“完全なる世界”に移行している……はずだったんだ」

「……」

さらに、青年は次の攻勢に出た。今度はリュウに聞かせるというよりは、幾分愚痴のような口調を交えている。リュウは迷っていた。これ以上こいつと話す必要は無い。心の中ではそう言ってこの場から逃げたくても、頭ではもっと情報を得なければと冷静に見ている部分があった。

「僕達の最初の計画……協力者たる、“彼女”の力を借りれば、移行させるのは造作も無い……筈だった」

「……」

青年は目を瞑るような素振りを見せ、語る。リュウは、青年の言った“彼女”が誰であるのか凡そ理解していた。この推測は、ほぼ間違いが無いだろう。

「だが……全ての準備が整い、この魔法世界に住む人々が苦しいとさえ思う間も無く、“完全なる世界”に移行できる……まさにその

直前の段階になって、君が現れてしまった」

青年はそこまで言うと目を開け、つい今しがたまで嘲笑っていた表情は影を潜め、まるで別人のような冷徹な目をリュウへと向けた。

「彼女は君に甚くご執心でね。君を排除するまでは、僕達に手を貸してはくれないと言い出した。あと少し、というところまで来て、君のおかげで計画は狂ってしまった」

「……」

「だから、僕達は彼女に交換条件を持ちかけた。そして彼女は快く承諾してくれた。僕達が君を倒せば、彼女はすぐに僕達の手伝いを再開する、と。……残念ながら結果はこの通りだけどね」

「……」

「アレを君にけしかけたのには二つの意味があったのさ。アレが君を倒してくれればそれで良し。万が一君が勝ったとしても、それはそれで僕達の代替案の礎になる。どちらに転んでも、僕らにとっては都合が良い」

「……！！」

リュウが様々な情報の処理に頭のメモリ領域を裂いている傍らで、ボッシュは一人冷静に今の状況を分析していた。このアーウェルンクスと名乗った人物が語る話は、恐らく自分の相棒が探っていた最も核となる情報だ。それを得られた事は良い。問題は、何故それほどの情報をリュウにあっさり開示したのか。その意図は何か。お礼だなどという言葉を、ボッシュは欠片も信じてはいない。

「おめぇさんは……そんな大事な情報を、何で俺っち達にペラペラ提供するんだ？」

「！」

ボッシュの疑問にリュウは即座に反応した。そうだ。たくさんの情報を一度に得て頭の中がこんがらがっていた。今一番気にしなければならないのはそう、こいつの目的だ。

「それは……」

青年はチラリとリュウの横の方に目をやった。

「……頃合い、か」

呟いた言葉が何を意味しているのか、例によってわからない。反射的にリュウもそちらを見る。そこにあるのは時計だった。話に気が取られていたのか思ったより大分時間が進んでいる。頼んだアイスコーヒーはリュウの気迫を逃れていたが、氷が融けだしてかなり薄くなっていた。そして青年は、静かに、暗い笑みを浮かべた。

「……ここへ君を呼んだ理由ね……。お礼と言うのも嘘じゃないがそうだな……強いて言うなら僕達の計画を先延ばしにしてくれた君への嫌がらせと……ささやかな手向け、と言った所かな」

「……」

嫌がらせとは何の事だ。語られた内容はリュウにとって確実にプラスとなる情報ばかり。ただの負け惜しみにしては稚拙過ぎる。そ

れに手向けとは？　言葉そのものには、死者の霊に花を添えたり、別れる者への餞別という意味がある。冗談にしては笑えない。やはりこの場で、自分を亡き者にする、という事か？

「どういう……意味だ……！」

ドラゴンブレイドに手を掛け殺気立つリュウに、しかし青年は再び小さく両手を挙げる素振りを見せる。

「おっと。……言っただろう？　僕達は降参したんだ。誓って言うが、君に僕達が手を出す事はあり得ない。……“僕達は”ね」

「！？」

「逆に聞こう。何故、僕が重要な情報を与えてまで君をここへ……“君と君の大事な仲間の居る場所”から遠ざけたと思う？」

アーウェルンクスの言う“僕達”とは、“完全なる世界”の事だとして間違いない。つまり言葉の裏を返せば、それ以外にリュウに手を出すモノが居る、という事。話の流れからすればそれは“彼女”しかいない。そして今、ここでわざわざ時間を掛けて話をし、リュウだけを留めておいた事の目的。嫌がらせ。仲間の元からリュウを遠ざける。時計を見て呟いた頃合いという言葉。それらが指し示す答えは……

「相棒！」

「まさか……」

「フフ……そう、君“達”は、もうゲームオーバーなのさ」

リュウの顔は、突き抜けるような青空よりも、深い青に変わった。

第十四章　4、夢の終わり（前書き）

第十四章　4、夢の終わり

「察しの通り、今頃“彼女”は君達の住処に直接出向いている筈さ。……さて、どうなっているだろうね。君の大事な仲間達は」

「……！」

アーウェルンクスはそう言うと、とても楽しそうにリュウを見ている。悪戯が成功した子供が見せるような顔……と言えば聞こえはいいが、実際はそんな可愛らしい物ではない。

つまりはそう……ただの時間稼ぎ。

こんな所に呼び出した目的は、リュウを仲間達の元から引き離す事そのもの。恐らくこれは、アーウェルンクスが“彼女”に知らせずに仕組んだ事なのだろう。嫌がらせとは、即ちそういう意味だったのだ。

「くっ……！」

どうしてだ。

仲間を巻き込みたくないと思って誰も一緒に連れて来なかったのに、それが見事に裏目に出た。言ってしまえば結果論でしかないのだが、それでもリュウは悔しくて堪らない。すぐにでも戻らなきゃ。

リュウがガタンと大きな音を立てて椅子から立ち上がると、アーウェルンクスは詰まらなそうに足を組み替えた。

「話は終わりか。じゃあ最後に一つ聞かせて欲しい。君は……」

「……」

最早悠長に問答している暇なんてない。こいつの話が本当なら……いや、こんな事をしてまで嘘を言う意味もない。全部真実として間違いない。ならすぐにスイマー城へ戻らなくては。

アーウェルンクスの言う“彼女”が、リュウにとって……“龍の民”にとっての最大の敵であるのなら、その龍の民であるリュウと関わりがある仲間達に何をするか。……どうイメージしてみても、最悪な想像しか浮かばない。リュウはとにかくまず店から出ようと歩き出した。

「……一体何故、僕達に敵意を向けているんだい？　君の動機が、僕にはわからない」

「……」

急いで青年の傍を通り過ぎようとした所で、ピタリとリュウの足は止まった。なぜだ。リュウは自分でも足を止めた理由がよくわからない。

「まさかとは思うが、君の動機はそのちっぽけな正義感……だなんて言わないよね？　そうだとしたら実にくだらない。彼女に対する龍の民の使命だ、と言うならこれ以上は何も言わないが……」

「……」

違う。聞いている暇はない。一言「うるせぇ」と吐き捨てて、ここから出る。そうした方が良いとわかっているのに、リュウは言葉に詰まってしまっていた。戦う理由？　正義感？　……否定は出来

ない。リュウは、少なくとも完全なる世界がやろうとしている事……その“過程”で戦争を起こすという事は、正しくないと思っている。そして、“彼女”に対して使命を感じているだなんて思った事は一度もない。

「……黙っているなら続けさせてもらう。僕がさっき“この世界は完全なる世界に移行する”という話をした時、君は疑問の声一つ上げはしなかったね。普通ならそれがどういう意味を指すのか、食って掛かる筈だ」

「……」

アーウェルンクスが言った疑問を、実の所ボッシュは胸に抱いていた。その通り、全く意味のわからない話だったからだ。しかし自分の相棒は特に反応を示さなかった。つまりその話の意味を知っている。そうわかったから、口を挟む気が起きなかっただけだ。

「僕が思うに、君は僕達が何をしようとしているのか。そしてこの世界の“真の姿”……迫る“危機”について知っているのだろう？　なら、“最善の方法”で対処しようとしている僕達や彼女と争う事が、どれほど無意味な事かも理解していると思うんだが……どうかな？」

「……」

リュウは、一言も発さずに再び足を進めだした。

質問に対して答えてはいない。そのまま、一度も振り返ることなく店を出て行った。単なる興味本意なだけだったのか、アーウェルンクスは一口も飲まれなかったアイスコーヒーを見て冷たい微笑を浮かべると、湯気の立ち消えた自分のコーヒーを飲み干した。

「……相棒」

「早く戻らなきゃ……っ！」

店を出て大通りを走りながら、リュウはポケットをまさぐるとフェアリドロップを取りだした。周りに人の目があるが、今はそれどころではない。戻るだけなら飛んで行くより、これの方が圧倒的に早く着く。

……しかし、

「！？　反応が……ない！？」

掲げてみたが、フェアリドロップは動かなかった。振ってみても、魔力を込めてみても、何も起きない。故障……とは思えない。何故なら先日もこれを使って城へと帰還したのだから。考えられるのは、その他の原因。

「……どういうこった……？」

「……」

嫌な予感だけが加速する。リュウは城に居るはずのメンバーに……共に修行した仲間の強さに十分な信頼を置いている。でも……この拭えない不安感は何なんだ。明らかな異常事態。スイマー城で、一体何が起きている。

「みんな……！」

フェアリドロップが使えない以上、空を飛ぶのが一番早い。リュウは来た道を逆走するように、赤いオーラのセブンスセンスさえも発動させて、全速力でスイマー城へと向かった。

＊

「えっ……」

「おい……なんでぇこりゃぁ……」

早かった。一般人が徒歩で　1日はかかる距離を、僅か数分という超高速でリュウとボッシュはスイマー城へと戻ってきた。そして二人は、揃って目の前の状況が理解できず、言葉が出ない状態になっていた。

今見ている景色は一体なんだ？
これは何の冗談なんだ？
幻覚？　それとも幻術？
とにかく、自分達の目の方が間違っていると思いたかった。

「……何……これ……」

何度も往復した事のある道だ。道を間違えたなんて事は１０００％ない。寄り道もしていない。何かの術を食らったような感覚も全くない。最短距離を、真っ直ぐに飛んできた。筈だ。なのに――

――そこに、城はなかった。

妖精達が耕していた筈の畑も。
暇を見つけては釣り竿をしならせていた湖も。
何もない。
あるのは、ただどこまでも広がる平原だけ。

「待て相棒！　あそこだ……！」

「！」

ボッシュに指摘されて目を凝らしてみると……あった。何かが。城の代わりと言うにはあまりに小さい物体が。そこにあって欲しくなかった物体が。失意のままで近寄ってみると、それは複数の……水晶の様な物で出来た柱だった。そして、その中に……

「！！」

「お、おめぇら！？」

リンプーが、レイが、ゼノが……炎の吐息の面々が、そこに閉じ込められていた。

スパナを握ったまま難しい顔をしているモモ。こっそりつまみ食いでもしようという姿勢のステン。訓練中らしきガーランドと、ランニングで汗を流しているリン。鍬を振るい上げたままのランド。銃の手入れをしているアースラ。気分良くピアノを弾いているような仕草のタペタ。いつも通りに空を仰ぎ、ゆったりしているサイアス……

透明な水晶の中に、時間ごと切り取って凍りつかせたような出で立ちの仲間達が居た。

「何だよこれ……。こんなものっ！！」

「！？　よせ相棒！」

その氷にも似た水晶から、とにかく仲間を救い出そうと炎の魔法を発動させようとしたリュウ。だがそれを、ボッシュは慌てて止めた。

「でも……！」

「多分、こいつぁ壊れっちまったら、二度と元には戻せねぇ！」

「っ……」

ボッシュにはわかった。この柱は、リュウの魔法如きでどうにか出来る代物ではない。尋常でないレベルの魔力……いや、魔力と言う枠では収まらない規模の力によるモノだ。解除するなら下手に手を出さず、己の持つ知識を総動員して解析し、冷静に対処しないとならない。ボッシュの中に眠るユンナの膨大な研究記録が、そう警告を発していた。

「大丈夫だ相棒。安心すんには早ぇが、見た所死んでる訳じゃねぇ」

「……」

ボッシュの言葉で、リュウは僅かに冷静さを取り戻した。これをやったのは誰か。そんな事はわかりきっている。城が無くなってい

るのも、コレも……間違いなくアーウェルンクスの言った通り、“彼女”がやったとしか思えない。だが、この場にその主犯者らしき人物の気配はない。……どこへ行ったんだ。

リュウが怪しみながら周囲を伺っていると、ボッシュはこの場にある柱の数が合わない事に気が付いた。

「相棒、あのねーちゃんと嬢ちゃんがいねぇぞ！」

この場にある柱の数は１１。城に居た筈の、他の人物の姿が辺りに見当たらない。ディースとミイナ、人と言っていいかわからないがマスター、それに妖精達。

「どこに……！？」

リュウがさらに周囲へと意識を向けた瞬間。バチっと、何かが弾ける様な音がリュウ達のすぐ傍の空間から聞こえてきた。咄嗟に警戒し、音の出所に向けてドラゴンブレイドを構えるリュウ。直後、まるで裂ける様な形で空間自体にひびが入り、そこから傷だらけの腕が出てきた。

「く……ぅぁっ……」

「し、しっかりしてください！　ディースさん！　ディースさん！！」

空間の裂け目から這い出るように一人が落ち、すぐにもう一人がそこから酷く錯乱した様子で出てきた。ディースと、ミイナだ。ディースは、目を背けたくなるような悲惨な姿をしていた。血塗れ。双頭の蛇が絡みついた杖は半分が炭化している。自慢の髪は焼け焦

げ、片腕は妙な方向に折れ曲がり、全身に酷い傷が見て取れる。

「ディ、ディースさん！？　何があったんですか！！」

「うっ……ぁ……？　リュウ……ちゃん……」

リュウは即座に二人の傍へと駆け寄ると、血だらけのディースに治癒の魔法を掛け始めた。しかし、とても足りない。あまりの怪我の酷さに、自分の魔法だけでは治癒が追いつかない。無力感に顔をしかめながら翳されるリュウの手に、ディースは息も絶え絶えに縋りついた。

「ごめん……ね……リュウ……ちゃん」

「な、何言ってんですか！」

リュウの手に力がこもる。治癒魔法の光が大きくなる。なんだか分からないが死なせてたまるか。見捨ててたまるか。そんな思いが、治癒の魔法の効力を大きく上げていく。必死に何かを訴えようとするディースを、しかしリュウは強引に抑えた。

「喋らないで！　傷が開きます！」

「おう！　嬢ちゃん！　いってぇ何があったんだ！」

「……」

ボッシュから飛ばされた疑問の矢を受け、錯乱していたミイナは震えたまま黙って俯いた。血の気の失せた青白い顔をしたまま、緊張の糸が切れた様にペタンとその場に座り込んでしまった。

「な、何も……わかりませんでした……。気が付いたら、お城の中が静かになってて……妖精さん達が居なくなってて……たまたま一緒に居たディースさんが、突然私の手を掴んで……変な場所に逃げて……私を庇って……その後は……何も……」

ミイナは青ざめたまま、ぽろぽろと涙を流していた。怖かったのだ。バルバロイに植え付けられたトラウマが再び顔を出し、何が何だかわからない恐怖に怯え、震えていた。その姿を横目で見たディースは、何かを必死に訴えようとしてリュウの静止を振り払い、言葉を紡ぎだした。

「……リュウ……ちゃん。あたし……は、いいから……このコも連れて……早く、逃げ……」

その時だった。

「来ましたね……最後の龍の民……」

――――悪寒。

全身の毛が逆立つ。

とても柔らかで、人の心に何の抵抗もなく滑り込んで来るような、艶やかな声が聞こえた。リュウは、即座に声の聞こえた方向に振り向いた。

「……！！」

薄い桃色の羽衣を纏い、その背に透き通るような純白の翼を携え、この世の全てを慈しむ様な穏やかな表情を浮かべる女性がそこにいた。長い金髪がそよ風に棚引くその姿。美しい、神々しい、壮麗な、荘厳な、……どんな修飾語や形容詞でも、彼女の容姿を表現するには役不足。俗で陳腐な文字の羅列では表しきれない、その女性が放つ独特の空気。

只一つ。

敢えてその姿を言葉で言い表すとするならば。

そう……“女神”。

「……」

リュウは、この女性に会った事など一度もない。記憶を丸ごとひっくり返して見ても、どこにもそんな事実は無い。でも、何故だろう。ずっと昔から知っているような感覚を、リュウはその女性から受けていた。自然と空いた方の拳が握り込まれる。身体の奥底から、何か黒い感情がうねりの様に沸き上がってくる。まるで全身の細胞の一つ一つにまで刷り込まれている惨禍の記憶が蘇るように。

ふと、その女性の足元に彼女が放つ空気とは不釣り合いな物体がある事に気がついた。場違いにも思えるその物体が何なのか、さして時間も掛からずリュウは思い出した。見覚えのある、鎧のような金属の塊は……

「！　マスター！？」

女神の足元で、マスターはその機能を完全に停止していた。目の光が消え失せている。リュウの声にも、何の反応も示さない。女神は、リュウが治癒の魔法を掛け続けているディースへと穏やかな視線を送る。

「このような機械に、私の足止めが出来ると？　……姉さん」

「……。あんたに……姉だなんて……呼ばれたく……ないね」

ディースは治癒の魔法をかけるリュウの手を振り払い、僅かに回復した力を振り絞って立ち上がった。そして下半分が炭と化して無くなった杖の、残り上半分の先端を女神へと向ける。それを見た女神は、少しだけ悲しそうな表情を作った。

「……どうしても、私の言う事を聞いてはくれないのですか？」

「あんたの……やり方は……間違ってる」

ディースの魔力が杖の先端に集中し、常軌を逸した力へと変換されていく。全ての魔力を強烈な爆発力に変えて敵を打ち砕く大魔道士ディースオリジナルの最大魔法。制御が難しく未だ完成していない為、便宜的に「スーパーノヴァ」と呼んでいる。

「！？　おいねーちゃん！　そいつぁ駄目だ！　よせ！」

「……リュウちゃんと、おチビちゃん……、後は……頼んだよ」

叫ぶボッシュに、ディースは耳を貸さない。強烈な魔力が収束していくソレが、今の傷だらけのディースにまともに扱える訳が無い。では何のつもりでそんな技を使うのか。ボッシュと、そしてリュウは理解してしまった。

ディースは、自爆するつもりなのだ。この目の前に居る、女神を道連れにして。制御不可能なこの魔法を使っても、リュウとボッシュが全力で魔法障壁を展開すれば、この場にある水晶の柱とミイナは守る事が出来るという計算の上で。だが……そんな暴挙を黙ってリュウが見過ごせる訳がない。リュウはディースへと手を伸ばし……

「ディースさん止め……！！」

「あんたも……私と一緒に地獄に落ちな！　ミリア！」

……しかし伸ばしたリュウの手は、むなしく空を切った。ディースは真っ直ぐに正面を見つめると、己の全魔力を注いだその光を、女神へと放ったのだ。止められない。割り切りたくないが、どうする事も出来ない。リュウとボッシュは即座に自分達と周囲一帯を包み込む魔法障壁を形成。出来得る限りの魔力を込めて、爆発に備える。

「……」

穏やかな表情を崩さない女神の横に、ふわりと杖のような物が浮かんでいた。杖？　いや、鍵？　何か、リュウはその物体をどこかで見たことがあるような気がした。そして、ディースの放った光は女神の前に薄く張られた障壁らしき膜とぶつかり……静かに、霧散した。

「……！？　そん……な……馬鹿な……」

ディースは驚愕した。まさか、全魔力を注いだ自分の魔法が、傷一つ付ける事さえ出来ないとは思わなかった。今、展開した障壁のような物。あれは魔法を打ち消す能力？　噂に聞く魔法無効化？だが、そんな分析はもう何の役にも立たない事に、ディースは気付かされた。

「残念です……姉さん」

女神が、その白く細い指先をディースへ向けた。ただ魔力を集めて固めただけの光弾が高速で放たれ、無防備なディースへと迫る。

「やめろぉっ！」

「！」

しかし光弾はディースに当たる直前で、リュウが振るったドラゴンブレイドによって弾き飛ばされていた。庇うようにディースの前に立つリュウは、とても少年の物とは思えない憎悪を思わせる気迫を顔に貼り付け、女神へと向けている。

女神は、それまで纏っていた穏やかな空気を一変させて、まるでゴミを見るような目でリュウを見ている。

「あなたはそこで大人しく見ていなさい。龍の民」

冷たい……とても冷たい声で、女神はリュウへと語りかける。リュウが、何をするつもりだと女神と視線を合わせたその瞬間、

「！！　か……！？」

突然、リュウとボッシュの身体が硬直した。動けない。何だコレは！？　何をされた！？　全身に力を込めてみても、全く動けない。強烈な金縛りか何かか？　剣を構えた格好から、リュウは押す事も引く事も出来なくなっていた。

「さよなら、姉さん」

再び、女神の指先が光った。
今度は、誰もそれを遮る者など居ない。

――――ディースの胸を、光が貫いた。

「か……ぁ……」

「イヤァァァ！！」

傍で呆然としていたミイナが悲鳴をあげ、ディースは、静かにその身を大地に横たえた。夥しい血の染みが広がり、草原を紅く染めていく。

「ディースさん！！？」

まだだ、まだ今なら息があるはず。俺が助ける！　助けなきゃ！
リュウは動こうと必死で魔力を、龍の力を燃焼させる。怒りと共に。
しかし、どうやっても、何をやっても、身体の自由が利かない。

「いやっ！　ディースさん！　お願い！　返事をして！　ディース

さん！！」

ミイナは、必死に倒れたディースの傍で弱い治癒魔法を掛けていた。半狂乱になって顔を左右に振り、その名前を呼びかけ続けている。

「落ち着きなさい」

「！？」

まるで母親が赤子をあやす時のような、慈愛に満ちた女神の声に反応して、ミイナは涙に濡れた顔を上げた。城に居たとき、訳が分からない状態の自分を庇ってくれたディースをこんなにした張本人からの声なのに、ミイナは、心に安らぎさえ感じてしまっていた。

「あなたはもう、苦しまずに済むのです。そう、心安らかに……」

パキッ……。リュウの耳に何かの音が聞こえた。隣に居た筈のミイナは……リュウの仲間達と同じように、透明な水晶の中に閉じ込められていた。恐怖と安堵の入り混じった表情のままで。

「愚かな龍の民に心惹かれた哀れな人形達よ。大丈夫。あなた達はこの世界から消え、その魂は……龍の民の居ない世界へと旅立つのです」

「！！？」

女神は、鍵の様な形の杖をリュウの仲間……水晶の柱へと向けて掲げた。リュウは、察知した。女神が何をしようとしているのか。脅しなどという物ではない。これは宣言。妖精達、マスター、ディ

ースに続いて、ミイナ、そして仲間達までをも……。

やらせない。やらせてたまるか。なんとしてでも止める。全身の細胞を沸騰させるように、リュウはドラゴナイズドフォームへと変わろうとして……しかし、この金縛りが龍の力を抑えつけているのか思うように変身できない。焦るリュウの目の前で、女神の持つ鍵のような杖が徐々に柔らかい光を放ち……

ピシッ。

「！　や、やめろ……！！」

違う、今の音は聞き間違いだ。まだ間に合う動け。いいから動け！　動くんだ！

ピシッ！

「！　やめ……！！」

動け動け！　何で動けないんだ！　早くしないとみんなが！　そんなの嫌だ！　動け！　動けよぉ！

ビシッ！！

「！！　やめろぉぉぉぉ！！！」

一瞬の静寂を置いて。

甲高い……とても綺麗で澄んだ音が、リュウの耳に響いた。

――――水晶は、砕け散っていた。

「あ……あ……」

キラキラと輝く、幾多の破片。

一斉に。

リュウの仲間達が閉じ込められた水晶は、その仲間達ごと砕け散った。

動けないリュウの、目の前で。

女神は、母親の様な穏やかな表情を浮かべたままで。

もう役目は終えたかのように自由を奪っていた呪縛は解け、その場に崩れ落ちたリュウは、呆けた。リュウはこれまでの人生のうち、自らが好意を寄せる者の死というものを体験した事がない。今のリュウの中で大きなウェイトを占めていた人達との、あまりにも唐突な別れ。それが一度に、複数も。だから、半ば冗談のように思えるこの事実を心が認識するまで、時間がかかっていた。

「う……そ……死……んだ……？　みんな……」

「死んだのではありません。“彼ら”の世界……“完全なる世界”に、その魂を移したのです」

「……」

女神の声は、リュウに届かない。
例え本当に、完全なる世界とやらにその魂が導かれたのだとしても。
今、現実としてリュウに突きつけられたのは。
残酷な“仲間の死”。
それだけ。
完全なる世界なんて関係ない。
そんなの……とても受け入れられない。

「リンプー……さん……？」

虚空に向けて呼び掛ける。いつもの明るい声はもう……聞く事は出来ない。

「レイさん……？」

何だよ、とぶっきらぼうに聞こえたような気がした。それが空耳だとは思いたくなかった。
次々と、取り憑かれたようにリュウは仲間の名前を呟いて。そのどれにも、返事はなかった。

「……」

もう、みんなは戻って来ない。
叫んでも、何をしても、取り返せない。
何でもないような日常も、一緒に過ごした日々も、全ては過去。
もう、これから先みんなと共に過ごす事は……出来ない。

「……」

――――リュウの心は、その重さに耐えきれなかった。

「……してやる」

リュウの目から、涙は出てこない。ただ、目の奥が燃えるように熱かった。

左の腕と足に掛けられていた変装魔法が強制的に解除され、二度と戻らないドラゴナイズドフォームが露わになる。左半身が、右腕が、右足が、身体が、顔が。徐々に半人半龍へと変化していく。それまでのリュウの変身とは違う。血の一滴、ＤＮＡの二重螺旋構造の奥底にまで刻み込まれている女神への憎しみが、敵意が、憎悪が、復讐の心が、リュウの意思と同調し、目覚め始めていた。

「……殺して……やる……！！」

その何よりも暴力的な言葉と共に、リュウの激憤に満ちた目から一筋の涙が零れ落ちた。リュウは、この体となってから現在に至るまで、一度も「殺す」という言葉を誰かに言った事はない。その言葉が持つ意味を初めてバルバロイと遭遇した時に実感し、なるべくなら口にさえ出したくなかったからだ。だがこの時、リュウの中の感情は、その言葉一色だけに染められていた。

「ウ……オオオオオッ！」

ピッと誰の耳にも入らないような音を立て、ドラゴンズ・ティアに一筋のひびが入った。自らの身体すら蝕む濁流の如き龍の力が迸

り、真っ赤なオーラとなってリュウの全身を包み込む。同時に、リュウの意識を“アイツ”が塗りつぶしていく。憤怒に駆られたリュウはＤ－チャージをはるかに上回る速度で龍の力を強烈に増幅させ、比例するように意識への浸食が増していく。

「ウゥゥゥォォォオオアアアアッ！」

「……」

咆哮と共に、練り上げられた膨大な龍の力を凝縮させていく小さな両の掌。まるでドラゴンの口のようにさえ見えるその掌が、女神へと狙いを定める。

「死……ね……！！」

爆音を伴い、今までの何よりも強く、そして悲しみを帯びたＤ－ブレスの極光が女神へ放たれた。それはこれまでのような、青白い光ではない。赤く、血のように紅いリュウと龍の民全ての憎悪が入り混じった極光だ。もう、リュウの意識は“アイツ”によってほとんどが失われていた。侵食の割合は既に８０％を大きく越え、その身体の２割未満しか、最早“リュウ”は残っていない。

「この力……やはり一人とは言え龍の民は、人間に仇成す存在に他ならない……」

女神はとても悲しそうな表情を浮かべると、再び鍵のような杖を掲げた。リュウの放った紅い光の激流を前に、風圧だけで折れてしまいそうな華奢な手に握られた杖が、清浄すぎる輝きを発し……

「！？」

……Ｄ－ブレスは、狙いを反れた。鍵の様な杖による力か、極光は女神に当たる直前で大きく進路を歪められ、空と海と山を激情のままに粉砕しどこまでも飛んでいく。

「……その力を野放しにしておけば、必ず人に災いをもたらすと何故わからないのです？」

「ォォォォオオオオオッ！」

正常な判断力の失われたリュウは、尚強烈な龍の力を再び両手に集中させていく。侵食は、既に９０％を超えた。

「！？　相棒！　俺っちの声に答えてくれ！　相棒！！」

この場において只一人となってしまったリュウの味方。リュウと同じタイミングで呪縛の解けたボッシュは、ひたすらにリュウへと呼び掛けていた。いくら呼んでも、リュウはもう、戻ってくる事はないのだとしても。ボッシュには、それしか出来ない。ただ、愚直なまでに相棒を信じる事しか、出来る事はない。

「愚かな龍の民……いいでしょう。気が済むまでやりなさい。……朽ち果てるまで」

「ォォォォオオオアアアッ！」

再び、リュウの掌からＤ－ブレスが放たれる。先程のものよりも大きく、禍々しい力の大波が押し寄せる。そして女神は、同じように鍵のような杖を掲げ……Ｄ－ブレスは、またもその的を見失い、女神に手傷一つ負わせる事は出来なかった。

「ウゥゥウウウウッ！！」

「相棒！」

リュウの様子がおかしい。ボッシュはリュウの気配がどんどん変化していっている事に危機感を抱いた。何が起きている？　もうあのドラゴンズ・ティアも限界だ。リュウの身体に、一体何が起きているのか？　ボッシュの中の知識にも、答えはない。

そして――――

「！？　ガァッ……！！」

――リュウの胸に下げられた宝石ドラゴンズ・ティアが……割れた。割れてしまった。

この瞬間、リュウの意識は闇の彼方へと放逐された。完全に、“アイツ”に乗っ取られたのだ。もうこのドラゴナイズドフォームの姿をしているのは、リュウでは……なくなった。

「！？　あ、相棒ォォッ！！」

相棒の最後の気配すらなくなった事を直感したボッシュの叫びが空しく木霊し――――

【アンフィニ】無限

「ウゥぅあアああアああッッ！！」

リュウの背が、大きく膨れ上がった。赤い突起物……バーニアだった箇所は盛大な血飛沫と共に変異し、とても巨大な翼へと変わる。ドラゴナイズドフォームの内側から食い破るように、リュウの存在そのものが龍へと変わっていく。

「あ、相……棒……」

あまりに違いすぎる変化の仕方に、ボッシュは呆然とした。砕け散ったドラゴンズティアの中身が、辺りに飛散する。リュウの身体に同化していた筈の“竜のなみだ”や契約カード、ドラゴンブレイドなども、辺りにばら撒かれていた。

ウ　ウ　ウ　オ　オ　オ　ア　ア　ァ　ァ　ァ　ッ　！

リュウの身体は、巨大なドラゴンへと変わった。悲しみを称えた様な深く沈んだ青色の外殻を持ち、翼から光で出来た羽を生やす神秘的な龍に。ただ、その顔は血にまみれた様に真っ赤に染まり、世の全てを呪うが如き形相をしていた。

オ　オ　オ　ォ　ォ　ォ　！

全てを滅ぼす悪鬼と化したドラゴンの、顔の前の空間が歪む。暗く冷たい色をしたブレスの源。女神を殺す為の、ただその為だけの力が、開かれた龍の顎門の前に集っていく。

女神は、三度鍵のような杖を掲げると柔らかく宙に浮かび、何かを庇うようにその場から移動した。ボッシュにはその不可解な行動の意味が分からない。後ろに何かあるようにも見えない。

ドラゴンの顔は女神を捉えて離さない。顎門の前に展開する歪みは極限まで凝縮され、そしてついに、黒い光弾と化した歪みが、女神へ向けて放たれた。待っていたように女神が鍵のような杖を掲げると、やはりそのブレスの砲弾の行き先は狂い、はるか山の彼方へと消えていく。

……僅かな間を置いて、大地が大きく振動した。

「！？」

地震。

あのブレスが引き起こしたのか。光弾は彼方に飛んでいった筈なのに、どうすればこんな巨大地震を起こせるんだ？　あれは一体どれほどの破壊を引き起こしたんだ？　ボッシュは薄らと感じ取った。そのあり得ない破壊力が、この世界に何をしたのかを。

ドラゴンの放った黒い光弾は海を超え、その先にある大陸の、アルギュレー大平原へと着弾していた。そして、その平原のことごとく、直径にして数千ｋｍにも及ぶ範囲を……ブレスは、消滅させたのだ。

――そう、星が欠けたのである。

ウ　オ　オ　オ　オ　オ　！　！

ドラゴンは、止まらない。再びその顎門が開かれ、空間が歪んでいく。

暴走を続ける【アンフィニ】のジーンの力。ユンナによって移植

された物ではない、龍の御子としての、最初からリュウの身体の底に眠っていた真の力。何人も寄せ付けぬ狂った王の姿。

即ち、【タイラント】。

「相棒ォォォ！！」

最早、リュウだったドラゴンは何物をも聞き入れる事は無い。只怒りのまま、破壊するのみ。大陸を消滅させる威力を持つ黒い光弾のようなブレスが、立て続けに女神へ向けて放たれ……だが女神はそのどれをも自分が居る“この大陸”には着弾させず、矛先を逸らせていく。この大陸の代わりに……星が、傷付けられていく。

「やはり龍の民は人を……世を乱す存在。私の選択に、間違いはなかった。滅ぶが良い。最後の龍よ」

冷酷な表情でドラゴンを見据える女神の持つ杖に、恐ろしい程の魔力が集中していく。

ああそうか。恐らく、あれでドラゴンを殺すのか。どちらにしろあの相棒だったドラゴンを野放しにしたら、この世界は破壊されるのを待つだけ。相棒……。

ボッシュは絶望の面持ちで、かつての相棒の持ち物へと目を落とした。

「……？」

散乱するリュウの形見のアイテム。その中の何かが光を発している。光は徐々に大きくなりつつある。一体なんだ。僅かな希望を持

とうとしたボッシュだが、しかしすぐにそれも絶望に塗り替えられた。もう、今更だ。みんな死んじまった。もう何も出来る事など、無いのだから。

オ　オ　オ　オ　オ　オ　！

「滅びなさい……」

一際大きなブレスがドラゴンの顔前で形成されている。
対照的な美しい白い光が女神の杖に集中している。

ああ、これで終わるなぁ。
なぁ、相棒。
相棒だけを、死なせやしねぇよ。
あっちで会えたら、また仲良くしようぜ。

ボッシュは、ドラゴンの前へと進んでいった。
死ぬ事のない自分の身体も、あのブレスに巻き込まれれば死ねるかもしれない。

光が交差する。

ボッシュは、初めてリュウと会った時の事を思い出していた。それからナギ達と会って、紅き翼に入った事。様々な場所を巡った事。炎の吐息という、もう一つの自分達の仲間と出会った事。とても楽しかった。本当に楽しかった。色々と思い出して、それが走馬灯だと気付いたのは、もう目の前に光が迫ったときだった。

ドラゴンが放つ黒い光弾と、女神が放つ白い光。
光の中に、何かもう一つ別の光がある気がしたが――――

――――ボッシュは、そこで考える事をやめた。

2016

第十四章　4、夢の終わり（後書き）

BAD　END

？

2017

第十四章　5、夢の少し後

暗い。

とても暗い穴の底に沈んで行くのがわかる。己の内と外を分け隔てている境界線が曖昧になって、意識が溶け出して消えていく。死に掛けた事なら、自慢じゃないが何度もあった。けれども、これはその経験のどれとも違う。自分が消える本当の死とは、なるほど静かな物だ。思ったより苦しくないのは、正直な所ありがたい。

――――――お前には、悪い事をした。

……何だよ、今更。それを言うならもっと早く言えよ。元を正せばあんたに呼ばれたのが……あぁ。まぁ、いいや。それなりに楽しかったから、もう、いいよ。

――――――未練は、ないのか。

そんなの、あるに決まってる。みんなを助けられなかった事。それに結局自分の力に押し潰された事。自分の力……というか、あんたの力か。挙句の果てには、自分が世界を脅かす元凶になるとか全く笑えない。頑張ってみたけど、やっぱり俺みたいな元々普通の人間には無理だったんだ。話が大き過ぎる。世界とか、デカ過ぎる。

――――――お前は、運がいい。

自分の手を汚した事がないとは言わない。どっちにしても、魔法世界に戦争を引き起こすきっかけを与えてしまったのは自分だ。だから、きっとこれも因果応報というやつなんだと思う。良かれと思ってやってきたけど、このザマだよ。これの、どこが運がいいんだ？

――――――もしもお前に、やり直す勇気があるのなら。

……？

何だろう。さっきから、向こうに光が見える。

暖かい感じの光。前は、あの光の下に居た気がする。

――――――お前の意思で、進め。

……。

いいの？　ねぇ俺なんかでも、もう一度あの光の下に行ってもいいのかな。

……。

もう声が聞こえない。でも……このままここには居たくない。

……。

うん。もう一回ぐらい、いいよね。

リュウは少しだけ戸惑った後、暗闇の先に見える光に手を伸ばして――――

＊

「うあぁぁ！？」

ようやく太陽が顔を出し始めるかという頃に、リュウはベッドから飛び起きた。息は荒く、寝間着は汗でぐっしょり濡れている。

「あ……え……？」

リュウは、まるで今自分がどこに居るのかわからない、と言った風に素っ頓狂な声を上げた。辺りをキョロキョロと見回す。何の変哲も無い、いつもの見慣れた部屋だ。……何だこれは。頭の処理が追い付かない。どうなっている？

しばらく呆然として、思い出したように腕や足の感触を確かめたり、自分の顔をペチペチと叩いてみたり、胸に下げているドラゴンズ・ティアを手にとってみたり。……とにかく混乱の極み、と言った表現が今のリュウを端的に表している。

「ふぁ～ぁ……あんだよ相棒……朝っぱらから……」

「ん～～……リュウさん……？　どうかしましたかぁ……？」

「え……」

いきなり響いた目覚ましに反応し、欠伸をしながらもぞもぞ動くボッシュと3／4程まだ夢うつつなミイナが、部屋の主に声を掛ける。ボッシュは前足で器用に眠い目を擦りつつ、妙な声を上げて妙な動作を繰り返しているリュウを見て、ギョッとした。まだ外からの明かりが入ってこなくとも、尋常でないその様子だけはしっかりとわかった。

「お、おい相棒大丈夫か？　顔真っ青だぜ？」

「……」

「相棒？」

リュウは、まるで幽霊でも見たような顔でボッシュをじっと見ている。その白い毛並みをした体のどこにも、怪我や血の痕なんかは一片も見当たらない。リュウはボッシュへの確認を終えるとすぐ、その部屋にあるもう一つのベッドの上に居る人物へと目をやった。

「ミ、ミイナ……さん？」

「ふぁ～い……何ですかぁ……」

「……」

目元をぐしぐししながら答えるミイナ。まだ眠気が抜けきっていない、ぽやぽやと間延びした可愛らしい声がやけに耳に残る。……生きている。間違いなく。幻の類などではない。

「何でぇ何でぇ相棒、悪い夢でも見たってのかぁ？」

ボッシュのからかうようなセリフに何の反応も返さず、相変わらずリュウは呆然としたまま、ベッドの上で押し黙った。

嘘……夢？　あの出来事、全部夢？

違う。そんな事は、あり得ない。

リュウは、思わず取り乱してしまうようなあの出来事を、ゆっくりとページをめくる様に思い返した。あの胸の奥をガツンと殴られたような深い悲しみ。その後の、煮え滾る様な感情の昂り。自分が

別の何かに変わっていくのを止められない恐怖。全て、あった事だ。起きた事実だ。覚えている。しかし今自分が居るこの状況は……？

しばらく黙っていたリュウは何を思ったか、いきなり自分で自分の頬を思いっきり殴りつけた。

「！？　何やってんだ相棒！？」

「ど、どうしたんですかリュウさん！」

「いてぇ……」

突如響いたガスッという手加減の無い音に驚き乱心したのか、との視線を寄こす二人。そんな二人を尻目に、リュウは頬に走る痛みを噛み締めていた。ここがあの世でない事の証明は出来ない。しかし、夢ではない事を頬のヒリヒリした使者が教えてくれている。この痛みだけは間違い様のない本物だ。

それに……何だろう。リュウは今の状況とほとんど同じ状況を前にも体験している気がした。けど、どこか。何かが違う。部屋の中の状況に規視感と違和感を同時に覚えたリュウは、頬をさすりながらもう一度部屋の中を見渡して……

「あ……」

ふと、枕元の小さな台の上に目が止まった。夜寝る前、寝間着に着がえた際に取りだしたポケットの中身等がそこには置かれている。フェアリドロップにサイフィス達の契約カード、眠れなくなるからと外している　“竜のなみだ”。そして――――

「……！！」

「ど、どうした相棒」

リュウの驚愕に染まった表情を見て、何をそんなに驚いたのかわからないボッシュは怪訝そうに声を上げた。

台の上。そこにあるはずの……いや、“あった”はずの物がない。妖精達に昔から伝わっていたという、日頃の感謝の印と貰ったはずの。悪夢を見せる呪いがあるのではと疑ったはずの。

“時の砂の結晶”

小さな、髑髏のように見える薄気味の悪い石の塊。“前には”確かにそこに置いてあったはずのそれが、まるで空気にでも溶けてしまったように消失していた。

「ボッシュ、そこにさ……妖精達から貰った石、置いてあったよね？」

「あん？　ああ、そういやあったはずだが……ねぇな。落ちてもいねぇしどこ行ったんだ？」

「……」

リュウは察した。そうだとしたら、辻褄が合う。信じられない。信じられないけど、そうとしか考えられない。

……自分は、“戻った”のだ。

妖精達から貰った、時の砂の結晶の力で。まだ、あの出来事の起こる前の朝に。夢か現か静かに自分が消えていくと思われた闇の中でのやりとり。運がいいと言ったアイツの言葉。あれはつまりそういう事、なのか？

リュウは少しだけ間を置いて……突然何かを思い出したように寝間着のまま立ち上がり、そのまま部屋の扉をバンと盛大に開け放って外に飛び出ていった。

「お、おいちょっと待……相棒！！」

「えっと……どうしたんでしょう……リュウさん……？」

「……さぁなぁ」

ポカンとリュウの奇行に唖然とする二人を部屋に残して。

「はっ……はっ……！」

リュウは、猛ダッシュでまず外を目指した。いつもならこんな距離ぐらいで息が上がる事なんてない。しかし、興奮から来る極度の緊張感の様なものが、リュウの呼吸を大きく乱していた。

「あ……」

外に出て少し走り、振り返ったリュウの目に映るのは、まだ日も差さない明け方のスイマー城。悠然と聳えるその城は、リュウの中にある思い出と何一つ変わってはいない。畑も、湖も、女神によって消されたと思われた存在は、何事もないかのようにそこに鎮座している。

「……」

まだだ。まだ他にも確認しなきゃいけない事がある。

リュウは込み上げてくる思いをぐっと心の中に押さえ込み、畑方面へと走った。自分の記憶に間違いがなければ、今外には二人の人物が居るはずだ。いくつかの畑を少しだけ走って周ったところで、野菜の世話をしている大きな体をした男がいるのが見えた。

「ん？　……おう、リュウじゃねぇか。早起きだな。どうした？」

「……」

いつも通り。何も変わっていない日常と共に話しかけてくるランド。リュウは、その巨体から視線を動かさなかった。心臓が高鳴って動悸が激しく、大した距離を走った訳でもないのにやはり息を切らせている。

「……おいどうしたんだよ？　黙ってちゃわかんねぇだろうが。何か事件でも起きたか？」

「……」

何かあったのかとしきりに尋ねてくるランドに言葉を返さないまま、リュウはクルッと背を向けると再び駆け出した。

「あ、おい！　……？　何だったんだ？」

訳の分からないリュウの行動に首を傾げるランドは、しばらくそ

の背を見送ったあと、仕方ないので元の野菜の世話に戻った。

リュウは、次に城を挟んで反対側。そこで訓練しているはずの人物を探した。ズシンと鈍く響き渡る地鳴りのような音が遠くからでも伝わってくる。近付くにつれて大きくなるその気配の元に、吸い寄せられるように向かう。

「む……？」

訓練と称し、大岩を拳一つで粉砕せしめるガーランド。そのすぐ後ろに、やはり息を切らせたリュウが立っていた。

「……お前が早起きとは珍しいな。何か、俺に用でもあるのか？」

「……」

先程の焼き直しのように、ここに来た理由を尋ねられる。やはり、いつも通り。全く変わらない。……わかっている。でも、まだだ。まだ我慢しろ。リュウは、さらに強く込み上げてくる思いをより強引に胸にしまい込んで、一言も発さずにその場を後にした。

「……？」

もう一人の大男と同じくリュウの奇行に首を傾げるガーランドは、まぁ何かあるならそのうち言ってくるだろう、と朝の訓練を再開した。

「はっ……はっ……」

そのまま、リュウは止まらずに爆走を続けて城の中に戻ると、今

度は仲間達の部屋を次々に訪問しだした。

妖精達の部屋。

人数が多いので3部屋使っているが、そのどの部屋でもたくさんの妖精達がスヤスヤと眠っていた。

ステンの部屋。

「ウキャ！？　な、何だいリュウ？　何か用かい？　おいら別に何も厨房から持って来たりなんてしてないよ！？」

既に起きていて口をモゴモゴさせながら、何かをさっと背中に隠して慌てているステン。普通なら何を隠したのかと問い質すところだが、今のリュウにそんな余裕は無い。

リンの部屋。

「……何だリュウか。脅かすんじゃないよ全く。危うく引き金を引く所だったじゃないか」

ドアを開けた瞬間、リュウは銃口を向けられていた。リンは扉の前に来た何者かの気配を察知し、飛び起きたのだ。リュウはそんな状況にさえ安堵を覚えた。

レイの部屋。

「あー？　んだよこんな時間に……」

でかい音で扉を開けられ、完璧に眠っていたレイは目が覚めてし

まったのか不機嫌を露にする。邪険にされた筈のリュウは、ほっと溜め息を付いた。

タペタの部屋

「ＺＺＺ……ＺＺＺ……」

のんきに眠り続けるタペタ。思いっきり開けた扉の音にも全く反応しないその図太さに、リュウは妙な安心感を覚えた。

リンプーの部屋。

「う～ん……もう食べらんないよ……」

タペタと同じく幸せそうに大の字に寝て、さらにはお決まりな寝言を言うリンプー。ピョコピョコ動く尻尾を見ていると、リュウの胸に何か暖かい物が満ちて来ていた。

ゼノの部屋。

「……リュウ。寝起きの女性をじろじろ見るのは感心しませんね」

枕元に置いてあった眼鏡をかけ直し、嗜めるゼノ。会わなかった時間はそんなに長くはないはずなのに、リュウは随分久しぶりなような気がした。

サイアスの部屋。

「……」

仰向けに横になっているものの、目元が常に隠れているので寝ているのか起きているのかも分からないサイアス。ただ、時折聞こえてくる静かな呼吸音にリュウは生を実感した。

アースラの部屋。

「な、何だ!?　敵か!?」

ドアを開ける音に驚いて、慌てて離れたテーブルの上の銃に手を伸ばそうとするアースラ。リンとは違い、意外と隙だらけだ。リュウはまた一つ、心を緩ませた。

モモの研究室。

「あらーリュウじゃなーい。こんな朝早くから私に何か用ー?」

「早起きは三文の得だからねぇとマスターが言ってます」

徹夜で何かの機械を整備していたらしいモモと、それを手伝っているらしいマスターがいつも通りに話しかけてくる。リュウはそろそろ、胸の中に押し込めている気持ちに抗えなくなって来ていた。

ディースの部屋。

「むにゃむにゃ……オイシソーだな……リュウちゃん……」

タオルケットをベッドの端に追いやり、酒瓶を抱いたまま涎を垂らしてガーガー寝ている大魔道士。あの時の、悲壮な決意を秘めた表情と落差の激しすぎる寝姿。

「……」

全ての部屋を回って、仲間達全員がそこに居る事を確認した。“戻った”という推測は、やはり間違いない。どこにも、あの出来事を伺わせるような気配は無い。もう、我慢は限界だった。最後にリュウは今誰も居ないはずの会議室へと向かった。

「……」

みんな、居る。生きている。

会議室へ辿りつくと誰にも見られないようにドアをしっかりと閉め、そのままそのドアを背もたれのようにして寄りかかったリュウは、我慢に我慢を重ねたそれを、開放した。

「う……うぅぅ……！！」

涙。

止め処なく溢れてくる、滂沱の涙。リュウは嗚咽を隠そうともしない。

自分が消えずに済んだ事。勿論それもない訳じゃない。だがそれより何よりあの出来事で一度に仲間を失った大きすぎる悲しみ。今、まだ失う前に戻れたという激しい喜び。冷静になろうとしても、それら正反対の感情がごちゃ混ぜになり、心からの涙となって濁流の様に溢れ出したのだ。

リュウ以外誰も居ない会議室に鼻を啜る音と、しゃくり上げる音が交互に響き渡る。涙は止まらない。リュウはぐしゃぐしゃに泣き崩れた顔を抑えながら、自問自答していた。

いいのだろうか。こんな幸運があっていいのだろうか。再びやり直すことが出来るというのか。これは、世界中の過去現在未来において、あらゆる人達が願って止まなかった奇跡だ。“もしもあの時に戻れたら”。誰もが願って、そして叶う筈のない奇跡。それが、叶った。あの石をくれた妖精達には、いくら感謝してもし足りない。

「……」

少しずつ――まだ鼻を啜ったり等はしているが――少しずつだが落ち着いてきたリュウは、思考をこれからの事に向け始めた。でも、そうだ。これから……大した時間はかからずに……女神が、来る。

「……」

泣いてばかりいられない。戻った事は、イコールあの出来事を回避した、という訳ではない。もう時の砂の結晶はないのだ。この奇跡に次はない。このまま何もしなければ、あの出来事がまた起こってしまう。もう二度と、あんな思いはしたくない。してたまるか。絶対に。リュウは、まだ赤く充血した目のままで固く決意した。涙を振り払って会議室のドアを開け、とにかく行動に移そうとすると……丁度そこに見慣れた小さな相棒の姿があった。

「お、こんなトコに居やがったか。探したぜ相棒。一体どうしたって……」

「……」

ボッシュはリュウの顔を見ると、茶化そうとしていたのをやめた。直前まで、酷く泣いていたのであろう痕が見て取れる。そして同時に、何か深い決意の様なものをリュウから感じ取った。只事じゃな

い。ボッシュは何も言わずにリュウの肩に飛び乗ると、お互い無言のままで歩き出した。部屋に戻り、武器やアイテムをしっかりと身に着けて、リュウはまずディースの部屋へと向かう事にした。ディースならば、女神について確実に情報を持っているだろうからだ。

「……」

「……」

リュウとボッシュの間に会話はなく、心なしか早いペースの足音だけが廊下に響く。リュウは、僅かにだが震えていた。“やり直す勇気”。暗闇でアイツに言われた言葉がフラッシュバックする。そう、今自分に必要なのは勇気だ。決意はしたけれど、それでも正直に言えば、怖い。かろうじて意識のある時に放った凄まじい威力のＤ－ブレスも、全く通用しなかった。これから相対するであろう女神の力は、底が知れない。

「……」

「……」

自分が何も出来なければ、あの思いを二度も味わう事になる。また全てを失うのではないか。抗っても、結局無駄に終わるのではないか。考えれば考えるほど深みに嵌まり込んでしまい、徐々に足が重たくなる。歩く速度は次第に落ちていき……とうとう、リュウの足はディースの部屋へと続く廊下の途中で止まってしまった。

「……」

「……なぁ、相棒」

悲壮な雰囲気のリュウの機微に気付いたボッシュが、不意に口を開いた。

「俺っちにゃ相棒が何をそんなに気負ってんのかさっぱりわからねぇが……」

「……」

「困った時ゃよ、周りに頼ってもいいんだぜ？　……後ろを見てみろよ」

促され、ハッとしたリュウはようやく気付いた。自分の後ろにある、複数の気配に。

「リュウ！」

元気良く声を掛けられ、振り向いたリュウの視線の先には……ズラッと立ち並ぶ総勢１２人の仲間達が居た。さらには、ミイナの姿まである。

「あ……」

「よぉ大将。俺達ぁそんなに頼りねぇか？」

レイが肩を竦めながら、皮肉交じりに口火を切る。

「リュウよ、お前が何を背負っているかは知らない。だが俺達にも、その荷を分けてくれてもいいのではないか？」

「そーそ。あたし達みんな仲間じゃん。困ってるなら、助け合おーよ」

「あの……私もその……何かお役に立てれば……」

リュウの仲間達はみな、ついさっきのリュウのおかしな様子に何かあると察していた。そして、各々がそんなリュウに何かをしてやりたいと思った。そこに打算のような物は一切ない。ただ純粋に、共に過ごした仲間として……リュウという人物の、力になりたいと思ったのだ。

「みんな……」

「それによ、相棒。俺っち達にゃ、まだ他にも仲間が居るじゃねぇか」

「……」

「あいつらにも助けを要請したってよ、恥でも何でもねぇんだぜ？」

「……」

リュウの脳裏に、あの赤い髪をした勝気な顔の少年が思い浮かんだ。そして怪しい微笑を携えた優男を、無愛想で老人のような喋り方をする少年を、生真面目で剣の達人である面長の青年を。

リュウは、無意識にドラゴンズ・ティアから取り出したテレコーダーを強く握り締めた。気を引き締めたはずなのにまた緩みそうになる涙腺を必死に押さえ、リュウは見られまいと前を向いた。

「ありがとう……」

リュウの両足は、また歩く力を取り戻した。今度はいくつもの足音が、リュウの後を付いていく。不思議と、さっきまでのネガティブな考えは吹き飛んでいた。きっと何か解決方法がある。なかったら、作るまで。みんなと一緒なら、必ず出来る。リュウ達は全員でディースの部屋へ向かった。

「おわ!?　な、なんだい何事だい!?　こんな朝から大所帯でゾロゾロとまぁ……」

流石のディースも１０人を超える数が集まる気配に目を覚まさざるを得なかった。一つの部屋にこれだけ集まると少し手狭だ。特にディースの部屋は酒瓶やツマミの皿が散乱していて足の踏み場がない。ディースは起きぬけの所へ雪崩れ込んできたリュウ達に面食らっていた。

「ディースさん」

「何さリュウちゃん」

リュウの雰囲気におちゃらけた雰囲気が一切ない事で、ディースも真面目な表情になる。

「……これから、ここに女神が来ます」

「!?　な、何だって!?」

リュウの言葉は、ディースの想像範囲を超えていた。ディースの驚愕ぶりに酷く大変な事態が起きた事を感じた仲間達は、気持ちを

引き締める。

「時間がないんです。何でもいいので、女神についてディースさんの知っている事を教えてください」

「ちょ、ちょっと待ちなよ。一体どうしてそんな事がわかるんだい！？」

「そ、それは……」

リュウはある種の予知夢、という事にして、出来れば二度と思い出したくもないあの出来事を……覚えている限りの事をディースと、そして仲間達の前で語った。にわかには信じられない話だが、リュウの鬼気迫る表情に仲間達は騒然となる。その過程で女神がディースを姉と呼んでいた、という事実については微かに匂わせる程度に留めた。ディースだけが、リュウがその事を知っているという事に気付く程度に。

「……それで、俺の力が全く通用しない可能性が高いんです」

「そんな……あの姿のリュウでも歯が立たないんじゃ……」

リュウの話が本当だとすると、手の施しようがないという事実が浮き彫りになった。一挙に場が暗くなる。対抗策がない。炎の吐息で最も強力なリュウが通用しないとなると、全員で力を合わせても対抗できるかは難しいと思えた。

「……リュウちゃん。今の話の確認だけど、女神はリュウちゃんの力を“捻じ曲げた”んだね？」

「はい。妙な形の杖を掲げて」

「……」

リュウだけは、あの杖の正体が何かわかっている。冷静になって何とか思い出すことが出来た。あれは魔法世界の理を司る杖。マスターキーだ。あの杖がある限り、魔法世界人である炎の吐息の面々では女神に指一本触れる事が出来ない可能性は高い。

「……リュウちゃん、あたしの魔法はどんな風に消されたんだい？」

「確か……障壁のような物に当たって爆発せずに霧散して……」

「……」

ディースは目を瞑って何事か考え、そして改めてリュウの目を見た。

「いいかい。よく聞くんだ」

ディースはリュウの話を聞いた限りでの、大雑把に纏めた自分の見解を語り出した。

「あたしの知る限り、女神には龍の民の力を捻じ曲げるなんて芸当は出来なかった筈なんだ。つまり、それは後から付け足された力なんだと思う。恐らくは……その妙な杖が原因だろうね」

「……」

リュウ達は、黙って聞き入っていた。ディースの言う事が推測で

ある事は百も承知。本人もそのつもりで喋っている。だが現状ディースの情報しか縋るものがないのだ。

「きっと、その杖は対龍の民用に特化しているんだと思う。だからまずはリュウちゃんの力以外の力で、その杖を破壊するんだ。そうすればきっと、リュウちゃんの力も通じるようになると思う」

「でも……」

「あたしの魔法を杖で捻じ曲げたんじゃなく、障壁で止めたっていうのがその証さ。リュウちゃんの力以外には多分出来ないんだ。障壁を破れなかったのは……悔しいけど、単純にあたしの魔力が足りてなかったんだよ……」

ディースはそこまで言うと少し暗い顔をした。自分の力が及ばないという事を知らされて、自分では女神を止められないと宣告されたに等しいからだ。リュウ達の間でも、やはり希望を持てるような空気ではなかった。ディースの魔法の腕でも無理となると、それ以上の使い手はリュウ達の中には居ない。

「くそ……どうしたら……」

「方法なら一つだけあるよ。ここに居る全員の力を……一つにするんだ」

ディースに、全員からどういう意味か、との視線が飛ぶ。

「リュウちゃんの背負ってるその剣。確かそれには、力を蓄えておく効果があるんだろ？　その剣に、ここに居る全員分の力を集結させる。それで女神の障壁を破って、杖を砕くんだ」

「でも、コレは俺のしか吸収は……」

「あたしがその剣を騙して、みんなの力をリュウちゃんの力だと誤解させる。ただし、全員一度にやったら恐らく剣がもたない。……そうだね、４人ずつ、力をゆっくり込めるんだ」

リュウ達は、黙って頷いた。

「時間がないんだろ？　早速始めるよ。……そうだ、マスター、お前には別の仕事をしてもらうよ」

「了解したそうです」

ディースの指示の元、言葉少なくリュウ達は動き出した。
残された時間で、出来得る限りの策を。
未来に抗う為に。

脅威は、すぐそこまでやって来ていた。

第十四章　6、思い

『目標を視認！　……だそうです』

「ついに来たか……よし、確認場所に急行、撃って撃って撃ちまくりな！」

『了解です！』

スイマー城から離れた広い草原。ディースが傍らに置かれた通信機に向かって叫んでいる。了解の意を示すマスターからの返答後、若干の間を置いて遠目に見える森林地帯の方から砲撃音と爆音、閃光が届き始めた。

「……っ！」

「リュウちゃん、わかってると思うけど……」

「……はい」

リュウはディースの側で魔方陣の上に翳したドラゴンブレイドの柄を握り、必死に自分を抑えていた。今、この剣にはリュウの仲間達が注ぎ込んだ力が満ち満ちている。この場で剣に力を放出し続けているディースとミイナ、ボッシュが作業を終えれば正真正銘、今リュウを除いた状態で彼らに出来る最大の力となるだろう。

仲間達がドラゴンブレイドに力を注ぐ作業自体は、驚くほど迅速に行えた。結界など、多少の小細工の準備も出来た。少ない時間の中で、よくここまで漕ぎ着けたと思えるだけの見事なチームワーク

だ。

だが、それでも時間は足りなかった。ディースとボッシュ、ミイナはつい今しがた力を注ぎ始めたばかり。目の前まで女神が迫っているのにギリギリまでこの作業を行っているのは、ここまでやっても果たして通じるか未知数であるからだ。警戒に当たっていたマスターからの報告通り、ディースが周囲に敷いた結界に女神が足を踏み入れたのなら、力の蓄積を終えるより前にここへと到達するだろう。このままでは間に合わないがそれでも、やるしかない。

森林地帯の方で、多数の光の帯が空中の一点に向かって放たれているのがわかる。爆発の光や音も伝わってくる。同時に、それらが全く功を成していない事も、リュウ達にはわかった。

「あの……マスターさんの攻撃は……通用しているのでしょうか……」

「……してないだろうね」

「え……」

この場に居てなお止む事無く響いてくる爆音。ミイナは、いくらなんでもあれだけやれば多少の損害は与えられるだろうと思った。だがディースは、冷徹な一言でその希望を否定した。

「あの程度で倒せたら、苦労はないよ」

「そんな……」

それなら何でそんな無駄な事をするのか。ミイナはそう言いたか

った。ディースは、ミイナが言わんとしている事をすぐに察した。

「意味ならあるよ。時間稼ぎと……女神の力を僅かにでも削ぐ事が出来れば恩の字さ」

「でも……」

「いいから、それより手元に集中しな。一秒でも早く終わらせるんだ」

ナギ達にも連絡を取り、皆快く助力を申し出てくれたものの、全員遠方に居る為間に合わないだろう。そしてリュウの仲間達は今、剣に力を注いだせいで満足に戦う事は出来ない。衰弱した状態で、今は妖精達と一緒に城の中に避難している。ミイナも、力の収束後すぐにフェアリドロップを使って城に退避する手はずになっている。

女神の狙いはリュウだけである事を周知した上で、城周辺を戦場にしたくないリュウのたっての願いにより、この広場を迎え撃つ地と決めた。唯一の戦闘手段を持つマスターがせめてもの抵抗と時間稼ぎ、そして城から女神の注意を逸らす役割を担っていた。

「……うふふふー。全然駄目なようです」

女神と思しき存在を感知した森林地帯へ急行し、即座に攻撃に移ったマスター。だがその攻撃は結界を易々と越えてきた光の玉に、何ら影響を与える事は出来なかった。

射程距離に補足するのと同時に放った、物干し竿の様に長い砲身を持つ超長距離大量広域先制攻撃兵器マスターランチャー。光子実弾兵器マスターミサイル、マスターライフルの強化版メガマスター

ライフルなど、マスターに搭載されている火器のほとんどが直撃しても、その進行速度は変わらなかったのだ。

「足止めすら出来ないのは、悔しいとマスターは思います」

盗賊の魂から供給されるエネルギーは無尽蔵とは言え、マスター本体には金属疲労が蓄積する。メンテナンスなしで使い続けるのは負担が大きい。様々な火器を使用したマスターは、まるで人間のように肩を上下させて高温となった内部のガス交換を行っていた。

マスターのアイセンサーの先、砲撃によって開けた空間に光の玉が降り立つ。光は徐々に形を変えて行き、それは背に豊かな翼を携えた美しい女性の姿へと変わった。マスターは、穏やかな威圧感という物を始めて感じた。機械であるのに、目の前の女性は逆らってはならない存在だと瞬時に主記憶メモリに刻み込まれた。

「……」

女神は、マスターを見ていない。穏やかな表情のまま、遠く離れた広場に居るリュウ……龍の民のみをその眼に捉え、静かに歩み出す。マスターから見て前方およそ１００m。脅威は、止まらない。

「マスター、S・C・M・Cの使用許可を。……うふふ、無茶なのは承知です」

マスターが己の主たるＡＩに宿る人格へ許可を求めると、人格はそれを笑って許した。マスターの頭が開き、中から一つの大砲と、薄く黒いパネルの様な物が飛び出る。それは未だ試作の域を出ていない未完成の兵器。テスト用の簡素な造りの砲身。モモとボッシュの無茶な発想の賜物。パネルをマントのように、マスターの背にセ

ット。腹部のスロットに大砲から伸びるケーブルを接続し、砲口を女神へと向け、両手でグリップを握り固定する。

「チャージ開始」

徐々に、パネルに光が集まりだす。太陽光。自然の力を取り込み、吸収。さらに増幅させていく。元々は盗賊の魂からのエネルギーが、何らかの原因で減少した場合の対処用だった。パネルから吸収する太陽光を高効率で変換し、予備の動力とする筈だった。だがボッシュとモモの発想はいつしか、そのエネルギーをさらに盗賊の魂から供給するエネルギーと混ぜ合わせたらどうなるか、という無茶な高みへと変わっていった。

「４０％……６０％……」

盗賊の魂からのエネルギーと増幅させた太陽光エネルギーを合成し、撃ち出す兵器。マスターの外装甲は、この規格外の力に耐えられるようには設計されていない。試し撃ちさえしていないため、砲身が持たず自爆する可能性も捨てきれない。そんな兵器を、マスターは持ち出す。何のためか。マスターは自分を生みだしてくれた場所と、そして周りの人間達が好きだった。壊させたくない。だから、戦う。マスターも、既に立派な炎の吐息の一員となっていた。

「９０％……９５％……」

内部に収まりきらないエネルギーが漏れ出し、マスターのボディを赤い光が包み込む。それはある種、リュウ達のセブンスセンスの輝きと似ていた。装甲が膨大なエネルギーに耐えられず、徐々に融け出していく。ボディ内部の圧力が増して振動が発生し、グリップを握る腕が揺れて照準がブレる。それでもマスターは、しっかりと

前を見ていた。女神という名の、脅威を。

「発……射！」

マスターは、躊躇無くトリガーを引いた。極限まで溜まった力が……二色のエネルギーが砲口からクロスして駆け巡る。マスターの最大火力、スパイラル・クラッシュ・マスター・キャノン。螺旋を駆ける二つの光は一つに重なり、狙い通りに女神へと吸い込まれ――――

「……」

女神は、そこで初めて障壁を展開した。先程の光の玉と同じように見える、薄い光の膜を。マスターの放った巨大な光の螺旋は障壁に激突し……女神の足を、歩みを、僅かに止めた。時間にして数秒。僅かと言えど足止めする事に成功したのだ。徐々に光が弱まると、そこには足を止めた以外、何一つ変わらない女神の姿があった。だが意地を見せたマスターの姿は、そこにはない。

「限……界……の……よう……です……」

マスターはボロボロの状態で、後方の彼方に転がり飛んでいた。マスターの足ではその強力過ぎる反動を吸収しきれなかったのだ。兵器の砲身は発射と同時に砕け散っており、ボディの至る所から蒸気の様なものが吹き出ている。オーバーヒート寸前。今にも目の光が消えそうになっていた。

「！？　マスターさん……！？」

「マスター……！」

一際強烈な閃光。それはマスターが敗れた事実を、リュウ達に知らせていた。嫌だ。マスターは無事なのか。リュウは、無茶をして欲しくなかった。剣の柄を握る手がギリギリと音を立てる。出来れば今すぐあそこへ向かいたい。でもまだ力の収束が完了していないこのドラゴンブレイドでは、女神に通じるかわからない。葛藤は続く。そして、これで女神とリュウ達の間を遮る物は無くなった。

「……ここまでだね。……ミイナ、早くここから退避して……」

「ま、待って下さい。あそこを……！？」

これ以上は危険だと判断したディースがミイナの避難を促そうとして……ミイナは、剣にかざす手を止めないまま、女神とマスターが交戦したであろう箇所を驚嘆の表情で見ていた。その場に居るほかの面子も、そこを注視する。……全員の表情が、驚きに変わった。

「良くやったな」

「……？」

ボロボロの状態で尚立ち上がろうとするマスターは、ノイズの混ざるモニターに影が映っている事に気が付いた。ボディが誰かに抱えられている。アイセンサーを影の方に向けると、そこに居る人物が誰なのか、記憶領域から引き上げた。検索を掛けるまでも無い。

「う……ふふ……ふー……マスター……は、嬉しい……そうです……」

そこに居たのは巨大な体を持つ甲殻族の青年、ランドだ。未だ煙を上げる高温状態の装甲を、ランドは意にも介さず持ち上げている。さらにはもう二つ、両隣りに影がある事にマスターは気がついた。

「皆……は……城で休んでいた筈……と……マスター……が」

「やっぱりさ、リュウだけに任せて待つのって性に合わないんだよねー」

「愉快だねぇ……ま、そういう訳だ」

リンプー、レイ。二人の虎人族。ランドと共に、マスターを庇うようにその前に進み出た。正面から近付いてくる圧倒的な力を前にしても、3人は物怖じしない。

「さて、リュウ達の作業が終わるまでの時間稼ぎだな」

「よーするに、あそこにいるヤツをぶっ飛ばせばいーんでしょ？」

「……。ったくなんつーか……お前の単純ぶりがたまに羨ましくなるぜ」

停止寸前のマスターを横に移動させ、女神の進路を遮る様に、3人は立ち塞がった。女神はゆっくりと、だが確実に近づいてきている。三人が気を引き締めると、突如としてその心に、柔らかな女性の声が聞こえてきた。

≪何故、あなた達は龍の民に味方するのです？　ランド、リンプー、レイ。虎人族の若者と、甲殻族の青年よ≫

「!?」

女神は、ごく自然に三人の名を言った。彼女にとって、思考から名を読み取る事など造作も無い。ましてや相手は魔法世界人。その手に持つマスターキーは、魔法世界の理そのものなのだから。三人は、気圧された。思わず頭を垂れそうになった。逆らってはいけない。本能がそう囁いている。絶対に勝てない相手だと一瞬のうちに悟ってしまった。

≪龍の民などに関わらず、健やかに日々を過ごしていれば良いのです。今すぐここから去るならば、見なかった事にして差し上げましょう≫

「へっ……やなこった」

レイは、肩を竦めて女神からの慈愛に満ちた誘いを無碍にした。誰かに指図されるのも嫌いだが、こんな捻ねくれた自分でも受け入れてくれるこの場所と仲間を……それらをくれたリュウを、壊そうとするやつはもっと嫌いだった。

「……じっとしろ、って言われたら……暴れたくなるんだよ。ガキだからな……!」

レイが吼える。その身体を光の柱が包みこむ。セブンスセンス。ドラゴンブレイドに全力は注いだ。だから今は、精一杯の強がりに等しい。ハッタリでも何でも、リュウの力になるならやってやる。ワータイガーへと姿を変え、レイは近付いてくる女神を睨む。

「リュウはこれまでずっと、あたし達みんなを助けてくれた! だから、今度はあたし達がリュウの力になるんだ! お前なんかの言

いなりになんかなるもんか！」

リンプーも、残り僅かな力と気力を振り絞ってセブンスセンスを発動させる。リンプーにとって、リュウは憧れに近かった。ちょっと背は小さいけれど、料理は上手いし、偉ぶらないし、何より強い。自分にない物をたくさん持っている。そんなリュウと、そして一緒になった仲間たちと戦ってこれて、リンプーは嬉しかった。まだまだ一緒に居たい。その為には、力を惜しまない。

「アンタがどれだけ偉いかは知らねぇけどな。抵抗はさせて貰うぜ」

ランドは、既にセブンスセンスの発動を終えている。ランドは今が楽しかった。リュウ達にはなし崩し的に付いて来たようなもので、死に掛けたり散々な目にもあったりした。だがこうして仲間、という括りに自分が属しているのは、掛け替えのない物だと最近思うようになった。誰か一人でも欠けるのは、嫌だった。

「……」

女神は、歩く足を止めない。セブンスセンスにより姿を変えた3人と対峙する距離にまで近付いて、そこでようやく、僅かにだが足を止めた。

「ウゥウゥウォオオ！！」

「やぁぁぁぁぁ！！」

「オラァッ！」

三人の気迫は、万全の状態と比較して何ら落ち度を見せる物では

ない。少ない力だとは微塵も感じさせない勢いを持って、女神へと肉薄する。

「……」

そして三人は障壁に阻まれ……パキリと、澄んだ音が響き渡った。

三人は女神に飛び掛った姿勢のままで、水晶の柱に囚われていた。

「！！」

リュウは、遠目からその光景を見ていた。そして、頭の中にあるあの光景と重なって戦慄した。今すぐに、あの3人を助けに行かなければ。ドラゴンブレイドから手を離してでもその場へ急行しようとして……

「駄目だリュウちゃん！」

……ディースが、それを抑えた。

「離し……！」

「落ち着きな！　この剣はリュウちゃんが握っていないと駄目だってことを忘れたのかい！」

ドラゴンブレイドは融通が利かなかった。ディースが描いた魔法陣の上で、さらにリュウが握り続けている事によってようやく力の誤魔化しを受け付けたのだ。それがリュウがこの場から動けない理由だった。ディースに腕を掴まれたリュウは歯軋りした。何で来たんだ。こうなって欲しくなかったから、城に居てくれと頼んだのに。

「みんなを、助ける……！！」

リュウの中のあの記憶が蘇る。砕け散った水晶の柱。あの惨劇が。思い出すだけで、心を黒い感情が支配していく。涙さえ出てくる。そんなリュウの気配を感じ取って、それでもディースはリュウの腕を掴んで離さない。

「仲間達なら、恐らくまだ大丈夫！　アイツはあれ以上はしない！」

「！？　何で……！」

「いいから聞きな！　ミリアの目的は、リュウちゃんだけなんだ！　アイツにとっては、リュウちゃんの仲間なんて取るに足らない、どうでもいい存在なんだよ！」

「……！」

ディースのあまりに無体な物言いにリュウは激昂しかかった。しかしディースの険しい表情は、そんなリュウに口を挟ませない。

「逆に言えば、アイツにはあれ以上手を出す理由が無いって事なのさ！　もし予知夢の中であいつがあれ以上何かをしたってのなら、それはきっとリュウちゃんの目の前で、見せ付ける為だけにしたんだ。どっちにしても、女神とまともに戦う手段がなければ、今のあたし達にはどうしようもないんだよ！」

「……っ！」

冷徹なディース。リュウにはそう思えて、納得できなかった。す

ぐに目を水晶の方へと向けると、ディースの言葉を裏付けるように、女神は水晶の柱を放置してリュウ達の方に歩みを再開していた。リュウは、かろうじてあの悲劇が起きていない事に安堵した。その手は、血が滴る程に剣の柄を握り締めていた。

「……」

ディースにとっても、今言った事は半分は賭けに近かった。女神が龍の民以外には固執しない事は知っていたが、それでも万一という事がある。もし、あの場であれ以上リュウの仲間に何かをしていたら、恐らく自分が飛び出していただろう。ディースも、葛藤していたのだ。

「とにかく、もう限界だよ。ミイナ、今度こそ城に戻……」

「……」

「……ミイナ？」

ミイナは、女神の方を見たまま固まっていた。その態度ですぐに、リュウ達は察した。まさか……。予感は、的中していた。再び女神の前に立ち塞がる者達が居たのだ。

≪……あなた達も、邪魔をするというのですか？　ガーランド、リン、ゼノ≫

女神の進路上。その前に立つリュウの仲間達。いずれもリンプー達と同じく、セブンスセンスを発動させ、衰弱を微塵も感じさせず臨戦態勢。目の前の存在との力の差に震える者はいない。

「リュウは俺達のリーダーだ。リーダーを守るのは、チームの一員として当然の事だ」

ガーランドは、リュウを尊敬していた。強さを求めるのはいい。だがその強さを何のために使うのか。実験に巻き込まれたという酷い出自にも関わらずリュウは、少なくとも自分の知る限りでは、あれほどの力を人の為に使おうとしていた。無駄に見せびらかしたりしなかった。何と謙虚な。力を持つ側の責任をしっかりと理解している。ガーランドは、リュウの傍に居ながら自分もそうしようと思った。その尊敬に値する人物に仇を為すというなら、武器を取るまでだ。

「悪いけど、リュウをやらせる訳にはいかないよ。あいつには、恩があるんでね」

リンは、あの盗賊の墓の落とし穴の底でリュウと会った時の事を思い出した。ハッキリ言って死を覚悟していた。でも、そんな場所にリュウはやってきた。話には聞いていたけど子供の癖に妙に強くて、妙に気を使いながら自分達を助けてくれた。共に過ごすうちに、ちょっと生意気だけど、とても頼れる弟のような気さえしていた。借りを返す、というだけではない。今度は、自分達がリュウを守る番だと思った。

「その通りです。私達からリュウを奪おうというのなら、断固として戦うまで。例え相手が誰であろうと」

ゼノは、最初リュウに会った時は嫉妬を感じた。紅き翼の活躍と、その見た目の幼さのギャップに言い知れぬ苛立ちを覚えた。だがそんなリュウと妙な縁で再び会い、一時とは言え協力しあった。そして気付いた。何の事は無い、リュウも中身は普通の人間だとわかっ

た。気が付けば同じ仲間として行動を共にし、その隣に立てる程の力を身に着ける事も出来た。今は、ただ感謝している。彼の為に力を振るうことに、躊躇いは無い。

「……」

≪……あなたも、そうなのですか？　戦場を渡り歩く傭兵、サイアス。あなたにとって、龍の民はそれほど大事なのですか？≫

油断無く女神を見据える仲間達から僅かに下がり、佇むサイアス。女神の言葉を受け、サイアスは徐に天を仰いだ。自分は戦いの中で剣を振るって生きてきた。金の為、生きるためだ。今、血生臭い戦乱の世が近付いている事はわかっている。ただ、もうその中で生きて行こうとは思わない。戦乱を阻止しようとしていたこの仲間達と過ごすのは、悪くなかった。そしてその中心に居るリュウが頑張っている事も、サイアスは知っている。

「わ……分からない……ただ……」

だから、サイアスはこう言うのだ。
リュウが大事か、という女神の問いに、こう答えるのだ。

「そんな……気がした……」

ニッと、サイアスは笑った。ガーランド達も、同じくニヤリと笑った。武器を構え、少ない力を滾らせる。女神は足を止め……僅かに、ほんの僅かにだが、表情を堅くした。

「……」

気迫を乗せて、一斉に飛び掛る４人。女神は僅かに曇った表情を、ようやく彼らの方へと向けて……

――――パキッ

「……」

４つの水晶の柱が、そこに現れていた。

「!?　みんなっ!!」

「我慢……するんだリュウちゃん……あと……少し……」

リュウは、もう我慢の限界だった。ディースも、とても苦しそうな顔をしていた。もうわかっている。彼らは、仲間達は、捨て駒となってリュウ達の作業が終わるまでの時を稼いでくれている。おかげで、あと少しで収束を終えられる。その“あと少し”も、きっと……。リュウは、必死に涙をこらえていた。

≪……。何故です？　ステン、モモ、タペタ、アースラ。あなた達は龍の民とは関係ない。今その場に立っている事さえ、怖い、恐ろしいと心の底では感じていながら……何故？≫

直接脳裏に響く女神の優し過ぎる声。そんな圧倒的強者からの甘い囁きも、立ち塞がる彼らの闘志を萎えさせるには至らない。

「関係なくはないよ美人のお姉さん。仲間同士助け合う。普通の事さ。ウキャキャ」

ステンはリュウに多大な恩と、そして友情を感じていた。ハイラ

ンドでリュウに嫌いではないと言われた時、嬉しかった。自分も、リュウを嫌いではない。仲間達も、勿論嫌いじゃない。何だかんだで、この居心地の良い生活が気に入っている。それを壊すというなら、例え誰に何と言われようと、自分は戦うのだ。あの時リュウがそう言った様に、自分がそうしたいから。

「そーよー。私達は仲間だもの。リュウ君には指一本触れさせないわー」

モモにとって、リュウは可能性と矛盾の塊だった。学者としても一人の人間としても不可能であるという結論に達した物事の悉くを、リュウが覆すのを目の当たりにした。凄く強くて何でも出来そうな割に、結構弱点も多い。そんなちぐはぐなリュウを、モモは好ましく思う。それにリュウの周りに溢れる見た事も無い未知の技術、知識の数々に触れて、リュウや仲間達の役に立つ事の、何と楽しい事か。モモは、リュウの行く先々に付いていきたいと思った。その為の障害は、全力で排除するのみ。

「マドモアゼルあなた、寂しい目をしていますね。ですが、ムッシュ・リュウに何かするというのであれば、このエカル・ホッパ・ド・ペ・タペタがお相手するのですね」

タペタは、女神を前にして動じていない。タペタは自分が所属している炎の吐息というチームを誇りに思っていた。取り分けそのリーダーであるリュウに対しては、素直に凄いと思っていた。リュウを守るというのは、己の欲求に素直に従っただけなのだ。キザを気取り、どこか間の抜けた凛々しいカエルは、誇りを守る為剣を取った。

「リュウか……。あいつは……常識的なようで案外馬鹿だからな。

あの馬鹿さが私達にも移ったのかもしれん」

アースラは、そう言って自嘲気味に笑った。以前までの自分なら、こんな圧倒的力量差を感じたら、即座に撤退を意識していただろう。戦場で生きるとは、そういう事だからだ。しかしそんな自分が、今は我が身を盾にさえしようとしている。言った通り、リュウの影響だ。だが悪い気はしていない。むしろ心地良いとさえ感じている。いつからだろう。全く、私もとんだ馬鹿になったものだ。アースラは、笑った。

「……」

女神は、またも足を止めた。魔力による威圧をどれだけ与えても、立ち塞がる４人にそこから退く気配は無い。まるで言う事を聞かない子供に対するそれのように、女神の表情は凍りついた。

「……あなた達の行動は、勇気でも何でもありません。……愚か、と言うのです」

――――パキッ。

そして４つの水晶の柱に、リュウの仲間達は捕えられた。

「……！！」

リュウはもう、爆発寸前だった。

女神は目前まで迫っている。みんなが時間を稼いでくれたおかげで、ドラゴンブレイドの力は極限まで高める事が出来た。決して仕損じてはならない。事は冷静に当たらなければならない。わかっている。冷静だ。冷静に――――なれるか。仲間が殺されそうになっ

て、冷静になんかなれっこない。

「……」

ミイナは、何も出来ない無力さを感じていた。あんなに強い炎の吐息の人達が何も出来なかったのだ。そんな相手に、非力な自分が何か出来る訳も無い。逃げる事は何も恥ずかしい事じゃないとディースから事前に言われてはいたが、それでもやはり、悔しいのも事実だった。せめて、見届けたい。怖いけれど、どうしてもここを離れたくは無かった。

「あの……リュウさん……」

「……」

「皆さんは、リュウさんに居なくなって欲しくないんだと、思います。……私も、そう思います」

「……」

「だから、その……負けないで……ください」

ミイナは魔力を限界まで剣に吸わせたせいで足元がふらついている。それでも気丈に振舞い、そしてフェアリドロップを使おうとはしなかった。邪魔にならないように、その場から下がるだけ。しかしディースもリュウも、その事を非難したりはしない。リュウは静かにボッシュへと視線を送る。魔力の放出を同じく限界まで行ったボッシュは黙って頷き、せめてものボディーガードとしてミイナの後をついていった。……準備は、整った。

「あたしが隙を作る。……後は、頼むよリュウちゃん」

「……」

剣の下に敷かれていた魔法陣が消え、杖を取り出したディースと、そしてリュウは女神と対峙する。

「罪深き龍の民よ」

「！」

女神が、その指先をリュウへと向ける。凄まじいまでの密度を持った魔力の弾丸が放たれ……しかしディースがリュウの盾となるように魔法障壁を展開。一点のみに魔力を集中させた高圧の障壁を生成し、何とかその光弾を防いだ。

「っ……いい加減にしな！　ミリア！」

「姉さん……龍の民は滅ぼすべき、他の生物とは相容れない存在だと何故わからないのです」

「確かに……龍の民はずっとずっと昔、酷い事をしたよ。でもあんたはやりすぎだ！　あんたが龍の民を滅ぼしたあの時には、もう彼らはただ静かに暮らしていただけなんだ！　それに、このリュウちゃんは違う！」

「……」

何を言っても、女神には通用しない。とても古い記憶の中で、ディースは嫌というほどその事を理解している。ただ会う事のなかっ

た長い時間は、女神の考えを変えさせるに足りたのではないか。そんな微かな希望を、心の底に持っていた。

「……。わかりました。あなたと語る言葉はもう、ありません」

「！！」

女神は、細い指先を再び向けた。取り付く島も無い。ディースの希望は、儚く散った。ディースは小さく首を振ると、吹っ切った用に女神を見据え、杖を構えなおす。

「そう簡単にあたしをやれると……思わないことだね！」

ディースは、チラリとリュウの方に目だけを向けた。リュウはそれに応じるように、小さく頷く。キッ、と鋭く女神を睨んだディースは、何と浮遊魔法を発動させて一直線に女神へと突っ込んで行く。

「……。血迷ったのですか。そのような見苦しい特攻など……」

「……！」

女神の指先が光る。ディースを正面から打ち砕こうと魔力の弾丸が放たれる。しかしディースは障壁を張る素振りすら見せずその弾丸を……片腕からの瞬間的な魔力の噴射を持って、自らの勢いを殺さず避けてみせた。

「くぅっ……！」

正確には、それは紙一重などではない。圧倒的な魔力を込められた攻撃に対して、そのあまりに強引な回避は無理があった。噴射を

行った片腕までは、弾丸の進路から抜け出せなかったのだ。ディースの片腕の肩から先は、無残に千切れ飛んでいた。

「舐めるんじゃ……ないよ！」

それは作戦ミスか。答えは否だ。ディースの狙いに腕は二本も必要ない。片腕を捨てて、女神の手前まで接近する事に成功した。残る腕に握る杖を、その場所へと付き立てる。

「ベリ・ルス・ル・ビルス・ウロボロス！」

「！」

杖の先から複雑極まりない魔法陣が展開され、女神の足元を埋め尽くしていく。ディースのそれは攻撃などではなかった。この後に続く一撃を、万が一にも避けさせないための布石。ディースさえも、足止めに過ぎない。

「リュウちゃん！」

ディースが叫ぶよりも早く、既にリュウは動いていた。

「おおおおお！」

「……！」

ディースを飛び越え、両手にドラゴンブレイドを握りしめ、振り上げたリュウが女神へと迫る。咆哮に呼応するように、炎の吐息全員分の力とミイナ、ディースの力を結集させたドラゴンブレイドが、七色に輝いた。

「……」

展開された障壁の向こうで、女神は冷静に杖を掲げる。これがある限り何をしようと、龍の民の牙が自分に届く事はない。女神は杖に魔力を通す。それで終り。……の、筈だった。しかし振り下ろされるドラゴンブレイドは、そのスピードを緩めない。矛先は逸れない。女神は、そこで初めて驚嘆の意を示した。

「これは……！」

「うあああああ！！」

薄い桃色の障壁とドラゴンブレイドがかち合い、発生する凄まじいスパーク。杖が何も効果を発揮しない事で、女神はそれが何なのかハッキリと理解した。

「この力は……龍の力ではない……！？」

「うおおおあああ！」

リュウが吼える。

負けない！

皆が、己を犠牲にしてまで稼いでくれた時間。

負けられない！

その時間で集約した力が、みんなの思いが、これには篭っている。

負ける訳がない！！

虹を纏うドラゴンブレイドが、圧倒的な力を有する女神の障壁に、徐々にめり込んでいく。

「あああああああ！」

「！？」

一閃。

ドラゴンブレイドは振り切られ、障壁を切り裂いた。そしてその狙いである女神の杖……マスターキーを、粉々に打ち砕く。剣に纏っていた虹色の光は、まるで相打ったかのように、その光を弱めていく。

「……」

それは、ほんの一瞬だった。そんな筈は。マスターキーを砕かれた事に、僅かにだけ女神が目を取られた。その千分の一秒にも満たない様な一瞬の間に……

「くおおおお！」

リュウは、次の行動を起こしていた。虹の光が消え去ったドラゴンブレイドに、滾る己の龍の力を込め直し――――

「はあああああ！！」

「……！」

障壁を再構築する間も与えない、リュウ渾身のテラブレイク。そして女神は、ディースの放った魔法陣を砕け散らし、剣を避けた。その場から飛び退いたのだ。攻撃を避けられ、リュウはしかし落胆を示さない。リュウは確信した。龍の力による攻撃は、逸らされな

かったのだ。自分の力が通じる。これでようやく、自分の力が届くようになった。本当に、みんなのおかげだ。

「……」

剣を握る手に力が籠る。女神を倒せば、きっとあの水晶の柱は消える。みんなはまだ生きている。なら、やってやる。あんな未来は、来させない。やっと、やっと掴んだチャンスだ。絶対にみんなを元に戻す。どんな事をしても。

リュウは、あの時のように全身の細胞から込み上げてくる黒い感情を抑え込み、決して負けない決意を持って剣を女神に向ける。片腕のみとなったディースも、気丈な瞳でリュウの隣に立ち、女神を睨んでいた。

「お前には、お前にだけは、負けない！」

「……」

杖を砕かれた女神は、しかし冷徹な瞳をリュウ達へと向けている。

「……愚かな龍の民。いいでしょう。ならば、お前に絶望を与えてあげましょう」

それは油断だったのか。いや、そうではない。忘れていたわけでもない。リュウは女神に攻撃を加える隙を伺っていた。相手の動きに注意を払うという、いくつもの戦闘経験の結果であった。そうリュウは……怪しく光る女神の眼を、見てしまっていた。

「！？　しまっ……！」

体が固まり、金縛りに掛かった様に全身の自由が奪われる。
動けない。
リュウは、女神の術中に嵌ってしまっていた。

「リュウちゃん！？」

リュウに何が起こったか。一瞬とは言えそちらを向いてしまったディース。その瞬間、女神の指から放たれた光弾が……ディースの腹を貫いた。

「が……は……」

「！！　ディース……さん……くっ……！」

「……」

前のめりに倒れるディース。貫通したものの、急所からはかろうじて外れてくれた。しかし腕の出血と相まって最早虫の息だ。その傍で固まりもがくリュウを捨ておき女神は……今度は二人のはるか後方、邪魔にならないようにと下がったミイナを、その眼に捕えた。

「！？　危ねぇ！」

「キャッ！？」

――――パキッ

澄んだ音を伴い、ミイナが寸前まで居た場所に水晶の柱が生える。
女神が自分達の方を向いている事に気付いたボッシュが咄嗟に体当

たりを慣行し、ミイナを強引にその場からどかせた。間一髪、ミイナは柱に閉じ込められずに済んでいた。

「……」

女神は、それ以上手を出さず冷たい顔をリュウへと向けた。飛翼族の少女一人、塵芥の一粒も同然。固執する意味も無い。

「……そこで見ていなさい。龍の民。お前が仲間と呼び、お前を仲間と呼ぶ愚か者達の、魂が砕け行く様を……！」

「！！」

もうマスターキーはない。つまり、完全なる世界に魂を送る事は出来ない。あの水晶を砕くという事は、言葉そのままの意味。そこまで察してしまったリュウは、凍り付いた。

「……」

ゆっくりと、女神は後ろへ振り向いた。視線の先。その足跡を示すように犇くいくつもの水晶の柱。

「やめろ……！」

リュウの目には、今見ている現実とあのときの光景が重なった。嫌だ嫌だ嫌だ。これでは何のために……自分は何のために戻ったんだ。何の為に！！　動け！　動け！！

「……」

「！　やめ……！！」

女神が、その白い手を上へと掲げる。そこに、魔力が集中していく。リュウはもう形振り構わない。ドラゴナイズドを飛び越えてあの恐ろしい力さえも発動させようとして……しかし、思うように動かない。金縛りは、解けない。

女神は静かにその掌を……美しく輝く魔力の塊を、水晶の柱へと向けて――――

「や……やめろおおおおお！！」

――――瞬間、雷鳴が轟いた。

「！」

突如として天空から降り注ぐ数多の雷。女神は、動作を中断せざるを得なかった。その中でも一際巨大な雷が女神目掛けて飛来したのだ。咄嗟に集めた魔力を障壁に変換してそれを防ぐ。

「リュウゥゥゥゥゥ！！」

「！！」

リュウの耳に、聞き慣れた少年の声が届いた。同時に、ふっと金縛りが解けて身体に自由が戻る。今の声はまさか。上空からリュウの目の前に降り立ったのは赤い髪。身長よりも長い杖を持つ、勝ち気な顔の少年。

「ナ、ナギ……！？」

「わりぃ！　待たせたな！」

ナギはそう言って不適にリュウへと笑いかける。リュウは、信じられない物を見たような顔をしていた。連絡した時のナギは、とてつもなく遠くに居たはずだった。とてもこんな短時間で来れるような距離じゃない。連絡時に嘘を言ったとも思えない。

「おま……どうして……」

「あ？　“どうして”だぁ？　おめーが助けてくれっつったから飛んで来てやったんじゃねーか。何寝ぼけてやがる」

ナギはリュウからの連絡を受けてから、全速力でここまで飛んで来ていた。ナギは、リュウを信頼している。ナギにとってリュウは仲間であり、ライバルであり、そして対等に付き合える友達なのだ。そのリュウが自分を頼り、助けを求めてきた。なら、どんなに離れていようと助けに来るに決まってるだろうがこの馬鹿。ナギは照れ隠しのように、ぶっきらぼうな態度を取った。

「ナギ」

「あんだよ」

「ありがと」

「おう」

リュウは、真っ直ぐに女神を見据えた。周りにある水晶の柱は傷一つ付いていないまま、まだそこに確かに存在している。並び立つ赤い髪と青い髪の少年二人。リュウは再び剣を女神へと向け、ナギは周囲の状況をいぶかしみながら、同じく杖の先端を女神に向けている。

「こいつは……」

「……」

女神は、リュウの横に立つ少年を冷ややかに見ていた。リュウの仲間を砕け散らせる事よりも、何故かそちらの事の方に気が向いている。ナギは、大まかに現状を察した。つまり、こいつがリュウと、炎の吐息の連中の敵なのだと判断した。

「誰だか知らねぇが、俺のダチ連中によくも手ぇ出しやがったな！来やがれ！　次はこのサウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールド様が相手になってやる！」

「……」

威勢の良いナギの姿を見た女神は、リュウに向けていた冷たい表情を……柔らかな笑顔に、一変させた。

「私は、ヒトと争うつもりはありません」

「！？」

それは、リュウに対するものとは正反対の……とても優しさに溢れた声色だった。まるでそれまでに見せた非道な振る舞いが、幻であったような気さえしてくる。

≪龍の民……いえ、リュウ≫

リュウの脳裏に、女神の声が響き渡った。ナギに対する表情とはまるで違う。それまで以上に冷たい、威厳に満ちた言葉で、語りかける。

≪お前に、覚悟があるのなら……聖都オスティアまで、一人で来なさい≫

「……！」

≪待っていますよ。リュウ≫

そこまで言うと、ふっ、……と女神の姿は掻き消えた。それまでの出来事が嘘のように、静かに。

「……？　おいリュウ。一体……」

ナギは混乱した。一体どうなったんだ？　何で今のヤツは戦う前に居なくなったんだ？　よくわからない。リュウは周囲にそれまであった女神の気配が、完全に消えて無くなっている事を確認した。途端、ドウと全身に汗が吹き上げ、プレッシャーを自覚する。頭は、まだうまく現状を飲み込めない。

「……」

「あ、おい！　大丈夫か！　蛇のねーちゃん！！」

「！　ディースさん！！」

「……う……」

脅威は、去った。

後に疑問と、１１の水晶の柱だけを残して。

第十四章　7、決意

女神の襲来から数時間余り時が過ぎ……。
あの悪夢の再来を水際で阻止する事に成功したリュウ達は、ナギの到着から僅かに遅れて駆けつけてくれたアル、詠春、ゼクトらと共にスイマー城へと戻っていた。半死半生のディースと半壊状態のマスター、そして炎の吐息のメンバーが閉じ込められた水晶の柱を慎重に傷つけない様運び込ながら、である。

「しかし、信じられません……」

「……一体これは……」

「ワシにもわからん。……恐らく、相当なレベルの魔力によるモノとは思うが……」

駆けつけた三人はリュウの仲間達の惨状を目の当たりにし、ショックを隠せなかった。ディースの怪我やマスターの損傷についてもそうだが、特にこの水晶の柱から感じられる尋常でない魔力は何なのか。これらをやったという相手が一体どれほどの存在なのか、全く持って想像がつかない。

「ボッシュ……どう？」

「……すまねぇ。まだ何とも言えねぇよ」

全員分の水晶の柱を置けるのが会議室しかなかった為、そこにモモの研究室から使えそうな機材を運び込み、柱の解析を行うボッシュ。女神の魔力によって構成されているであろうこの柱を取り除く

にはどうすれば良いのか。ボッシュは己の中にある知識をフルに引き出しつつ機械を操作し、そして苦い顔をしている。

「……」

死んでいない事はわかっているが、裏を返せばそれくらいしかわかってないとも言える。外側から元に戻す事が出来るのかさえわからない。この手の作業に対して何も出来ないリュウは只じっと、冷たく輝く水晶の柱を見つめていた。

傍らに設置したベッドに寝かされたディースは意識を失ったまま、まだ目覚めない。その隣にある椅子にはミイナが座り、心配そうに容体を見守っている。幸いマーロックが以前置いていった希少な完全治癒薬である“つきのしずく”を使用したおかげで命は取り留めた。また、千切れた腕に関してもアルとリュウの二人がかりでほぼ元通りに接合する事が出来た。包帯の巻かれた腹部は、落ち着きを取り戻した呼吸音と共に規則正しく上下していた。

「ボッ……シュ……マスター……も、手伝……う……と」

「おめぇさんはまだ動けねぇだろ。気持ちだけ貰っとくぜ」

駆動部分の損傷が特に激しく、自らは動けないマスター。隅に寄せられたテーブルで作られた即席の診察台の上に寝かされている。会話は一応出来るものの、所々に混ざる雑音が酷い。応急処置は既に施してあるので水晶解析の目途が付き次第、修理に取り掛かる予定だ。

「なぁリュウ、あの女は一体何だったんだ？　何でお前らを狙ったんだ？」

穏やかな外の明るさとは正反対に深刻な雰囲気が漂う室内において、ナギはリュウに詰め寄っていた。ナギ達からすればわからないことだらけだ。あの神々し過ぎる女性は一体誰だったのか。目的は何なのか。そもそも何でリュウ達がこんな事になったのか。当事者たるリュウが語らない限り、ナギ達から見れば一切が謎のままだった。

「……」

そして肝心のリュウにも、わからない事が多かった。いや、正確に言えば分からなくなっていた。

随分前にディースに聞いた話……龍の民は静かに暮らしていたが、女神ミリアがその強大な力を危惧して滅ぼした、という話。その話自体は理由として理解できないわけではない。だが今、どうにもリュウは小さな疑問を感じていた。原因は己の中に蠢く黒い感情だ。奥底から沸き上がってくるソレは、滅ぼされた事への怨恨等という程度では済まない、もっと深い何かだと気付いていた。

同様に、女神のリュウに対する所作も常軌を逸していると感じた。滅ぼすだけでは飽き足らず、まるで龍の民の痕跡一切をこの世から消し去ろうとしているかのようだった。かと思えば、仲間達と同じくリュウの味方をした筈のナギには、全く手を出す事無く自ら退いた。不可解過ぎる。自分の中にある情報だけでは、その辺りの歯車が全く噛み合わなかった。

「おい……何とか言えよ！　リュウ！」

黙りこくったリュウに対して、苛立ちを覚えたナギが強く出る。

言葉に詰まり、とにかくみんなには自分の知っている事だけでも説明しようと、リュウが口を開きかけた所で……

「……あたしが、話すよ」

「！」

悲壮な空気で満たされた部屋に、艶やかな声が響き渡った。

ゆっくりと、ディースの目が開いた。

「ディースさん!?　大丈夫なんですか!?」

「……おや、なんだい、どうしたのさミイナ」

「だ、だって……」

優しげに言葉を掛けられ、ミイナの目の端に涙が溜まっていく。

王族として育てられたミイナは、どこまでも豪放磊落なディースに対して実姉のエリーナとは違う意味で懐いていた。炎の吐息の人達に加え、この上ディースにまで何かあったら……そう悲しみに満ちそうだった心に、ようやく光が差し込んだ形だった。

「……」

縋りつくミイナをあやしながら大きく息を吐き出し、ディースは目だけを動かして部屋の中を見渡した。リュウは無事。ナギ達が居て、炎の吐息のメンバーが閉じ込められた水晶も、砕かれる事なくそこにある。現状を手早く把握したディースは、心の中で小さく呟いた。女神と龍の民が戦ってこれだけの被害で済んだのは、奇跡みたいなものだね、と。

「アイツは……逃げたんだろ？」

「あ、ああ。あの女の事だろ？　どうもこの俺を見てビビったみたいだったぜ？」

ナギの発言が雰囲気を和らげようとしているものである事は、その場の誰もがわかっている。ディースには、何故女神がナギを見て去ったのか、その理由にほぼ見当が付いていた。怪我の影響かまだ上手く魔力を行使出来ないが、少なくとも周囲にあの女神の清浄な魔力が感じられない事はわかる。直近の危機が過ぎ去った事をようやく飲み込み、ディースは包帯の巻かれた上半身を起こした。

「リュウちゃんには……謝んなきゃいけないね」

起き上がったディースは少し申し訳なさそうな顔をして、リュウの方を見た。リュウからすれば、このように主語の無いディースからの謝罪の申し出は何度かされた覚えがある。それが何に対する謝罪であれど、今は静かに先を促す。

「……何を、ですか？」

「随分前……確か旧世界に行くって時だったかね。その時に話したろ。龍の民と、女神について」

それはついさっき、リュウが考えていた話の事だ。リュウとボッシュがドラグニールに戻る為、ディースはエヴァンジェリンと会う為、旧世界に行こうとした時の事。

「あの時、あたしはミリアの目的についてはわからないって言った。

でも……ごめん。ホントはね……知ってたんだ」

「……」

「ミリア……それがあの女の名前か」

聞きなれない単語を耳にしてナギが頷いている。リュウは、ディースが隠し事をしていた事を責めるつもりはなかった。その話をしていた時のディースは、とても複雑そうな表情をしていた。あの時は、ディースが何故ミリアによる龍の民の虐殺を止めようとしたのかまではわからなかったが、今なら分かる。ミリアは……ディースの妹だからだ。だからどこかにほんの少し、本当の事を言いたくない庇うような気持ちがあったのだろう。

今のディースは後悔するような、悔しいような、そんな顔をしている。

「なぁ蛇のねーちゃん、リュウがどうとかミリアがどうとか、イマイチ俺達には何だかわかんねーんだ。良かったら全部教えてくれよ」

「私からもお願いします。リュウが一体どのような宿命を背負っているのか……是が非にでも伺いたい」

「……」

「私も、お願いします」

「わしからも頼む」

ナギ、アルの言葉に続き、詠春、ゼクトも頭を下げる。ディース

が許可を得るような視線をリュウの方へとやると、リュウは小さな頷きを持ってそれに答えた。ディースは一息おいてから、ちょっと長くなるよと前置きし、その場の全員に聞かせるように……語り始めた。

「……いつからだったのかも思い出せないくらい、気の遠くなるほど昔の話さ。リュウちゃん達の一族、“龍の民”と“女神”とは、ずっと血で血を洗う激しい闘争を繰り返していた。旧世界のあらゆる地域の神話に、少なからず竜についての伝説ってのが残ってるだろ？　あれは、そもそも龍の民と女神による争いが元になっているのさ」

いきなり紡ぎだされた話のスケールの大きさに、誰もが言葉を失った。

「両者の争いは凄まじかった。それこそ、地球上の幾つかの大陸が消えたり、または大きく隆起したりもした。女神は個で、龍の民は群で、互いが互いを滅ぼそうと死力を尽くして争った。そんな戦いなのにいつまで経っても決着は着かず、女神も龍の民も、次第に周期を置くようになっていった。女神は力を蓄える為に、龍の民は世代を重ねる為にね」

「ま、待ってくれよ蛇のねーちゃん。訳がわからねぇ。争った？　何でだ？　原因は何だよ？　龍の民が悪モンだったのか？　それともそのミリアってヤツがか？」

ディースの話には“目的”がない。何故戦うのか、その部分がすっぽりと抜け落ちていた。だから、争うからには理由があるはず。ナギはそう思った。ディースは、どこか悲しそうに……静かに首を横に振った。

「……どちらが悪い、とかじゃないんだよナギちゃん。龍の民と女神ってのは……言い換えれば光と影。陰と陽。コインの表裏。どちらか一方に傾き過ぎてもいけない。そういう存在なんだよ。“何の為に”争うか、じゃない。強いて言えば“争う事”それ自体が存在理由。そこに“どうして”って疑問を挟む余地はないのさ」

「な、何だよ……それ……」

ナギは絶句した。何なんだそれは。そんな存在がこの世に在ると？　本当に訳が分からない。当然納得も出来ないが、それ以上質問しては話の腰を折ってしまうので抑える事にした。そしてディースは次に、ナギのその疑問を……肯定した。

「まぁでも、ナギちゃんがそう感じたのも尤もだよ。そしてミリアも、ある時その事に悩んだ。私は一体何の為に……ってね。そして行き着いた結論は……“ヒトを守る”事だった」

「！？」

「ミリア……女神は、ヒトの味方なのさ。正確に言えば、自分と龍の民とが争うのは、強大な力を持つ龍の民という脅威からあらゆる生命を守り抜く為なんだと考えた。それが自分の使命だと思ったんだ」

そこまで聞かされたナギ達は、余計に混乱した。実際にリュウ達へやってみせた女神の行いは、“ヒトを守る”等という高尚な目的から懸け離れている様にしか見えない。にも関わらず、ディースの話では、まるで女神が良い奴で龍の民が悪者のようにさえ聞こえる。

「女神ってのは……何となくわかった。その……じゃあ龍の民ってのは、一体どんな連中だったんだよ」

「……」

ナギの疑問に僅かに口を噤んだディースはリュウを見て、少しだけ困ったような表情を浮かべた。

「……最初の頃の龍の民は、周りの生物や自然の事なんて一切考えない、戦う事しかしないような酷い連中だったよ。実際、争いに巻き込まれて人類が滅びかけたのは一度や二度じゃない」

「……」

歴史にはとんと疎いナギだが、少なくとも人類の歴史として今使われている西暦……約二千年の間には、人が滅びかけるほどの災厄はなかったと断言出来る。つまり、ディースの話はそれよりもずっとずっと前の事だと理解できた。

「でもね……。今から何千年か前、最後の全面対決で、龍の民は女神に大きな痛手を負わせた。そしてその後、平和な時代が長く続いたんだ。その間に……龍の民は、変わっていった。ヒトや他の生き物達と関わる事が増えだしてから、次第に穏やかに暮らす事を良しとしていったんだ」

「……」

リュウは、語られる話の中から何となく感じ取っていた。龍の民とは人と同じ、“うつろうもの”であるのだと。変わっていくとはそういう事だ。しかし、それと表裏一体である女神は……。

「けど……女神は変わっちゃいなかった。力を蓄え今から数百年前に眠りから目覚めたミリアは、圧倒的な力を持って龍の民へと攻撃を仕掛けた。平和に慣れ親しんだ龍の民と、力を蓄えた女神。力の差は歴然だった。そして……」

「……そして、龍の民は女神によって滅ぼされた……」

「……その通りさ」

後を継いだアルの言葉を、ディースは目を瞑って肯定した。

「あたしが知っているのはそこまで。その時の一方的な戦いの後、宿敵を消し去ったあいつがまるで旧世界の管理者でも気取るようになったのが嫌で、魔法世界に移住したのさ。まさか、僅かに生き残った龍の民が居て、よりによってまだ小さな子供を女神と同質の存在に改造して……リュウちゃんを生みだしていたなんて思いもしなかったよ」

「……」

リュウは、かつてのユンナの言葉を思い出していた。女神を超えるための兵器。その為にこの身体は造られた。単純に復讐の為であるとその時は思ったが、どうやらそれだけではないようだとわかった。自分の中の黒い感情の正体も含めて、全ての線がようやく繋がったような……喉のつかえが取れた様な気分だった。

次第に口数が減っていったナギ達の中で、ふとアルは何かに気付いたような素振りを見せる。

「しかし……先程ディースさんはその龍の民と女神は表裏一体の存在と仰いましたが……」

「言ったけど、それがどうかしたかい？」

「……それはつまり、強大になり過ぎた“女神”が存在するせいで、それと対を成す龍の民にも、“リュウ”という同種のカウンターが生まれた……と、考える事は出来ないでしょうか」

「……。ああ、そうかも……知れないね」

龍の民を滅ぼすほどに力を蓄えた女神。それに対抗する為に生み出されたリュウ。見方を変えれば、それは本来の両者の役割……つまりただ“争う”という事への、女神に傾いた天秤のバランスを取っただけのようにも見える。そしてそれは……龍の御子だった少年が死んでしまった事、引いてはユンナがドラグニールに辿りついた事。それら全てが、偶然では無く必然であるという事になる。

「けどあたしは……その考えは少し違うと思う」

ややもすれば、何と酷い話だと呪詛を吐きたくなるようなその説を、しかしディースは僅かに微笑みながら否定した。

「過程はそうかも知れないけど……今の、“この”リュウちゃんは、もう龍の民じゃない。龍の民が引き継いで来た闘争とは何の関係も無い。だから、本当の意味での“龍の民”は、滅んでいるんだと思う」

「……確かに」

中身が違う。それがこの不毛な争いに終止符を打つ切っ掛けになってくれるかも知れない。それはディースがリュウに見い出した希望だった。あるいは以前本人が語った言葉である“可能性”と言い換えてもいい。今ここに居る“リュウ”の中身は紛れも無く人間そのもの。龍の民と女神の因縁とは何の関係も無い、ごく普通の人間だ。

「ま、それをアイツにわからせてやろうとしたんだけど……ね」

ディースはそう言って、フッと自分をせせら笑った。話が途切れると、部屋にはカタカタというボッシュが機械を操作する音だけが木霊する。そこへ少しの間何かを考えていたらしい難しい顔をしたアルが、己の中に新たに浮かんだ疑問をぶつけた。

「何故、“今”だったのでしょう」

「？　何がだよ？」

ナギが首を傾げながら、いきなりのその質問の意味を問う。

「その女神がそれだけの実力を持っているのなら、恐らくリュウの存在に関しては真っ先に察知していたと思うのです。例えばリュウが私達と一緒に初めて魔法世界を訪れた時であれば、それこそ赤子の手を捻る様にその命を断つ事が出来た筈。それを今まで放置していた理由は何なのか……」

「……」

言われてみればその通りである。何故、女神は“今”になって襲ってきたのだろうか。流石にその事は考えてもわからないだろうと

思われたが、しかしリュウには一つだけ思い当たる事があった。

「それは多分……バルバロイが関係していると思う」

そう、女神に心酔していたあのバルバロイだ。彼はリュウに固執していた。龍の民以外には等しく愛を注ぐミリアが、そのバルバロイの意思を尊重したからである可能性は高いとリュウは睨んだ。

「確かにあるかも知れませんね。……しかしそれだけの理由で、滅ぼしたいとまで考える相手を野放しにするでしょうか？」

「……」

リュウ達は黙った。バルバロイを気にしたかもしれないというのもわかるが、それが決定的な理由に成りきれないという事も確かだ。そして思い出したように、ディースも女神に対して別の疑問を感じていた。

「おかしな所、か。……さっきも言ったけど、龍の民は最初気性が荒い一族だった。そして、それは女神にも同様な所があったんだけど、そう言えばその気配が失せていたね。以前はどう取り繕っても隠し切れない、残忍な本性が滲み出ていたんだけど……」

相対した時の女神の態度と、それこそ神の如き神々しさに、ディースは違和感を覚えたらしい。しかし残念ながらこれも、今ここで議論したところでわかるような話ではない。

「……」

静かになった部屋に、やはりカタカタという機械を操作する音だ

けが響く。誰もが口を閉じたまましばらくして……突然ピー、という甲高いビープ音が部屋中に響いた。機械を操作していたボッシュの前にあるパネルが一面青くなり、中央に文字が浮かんでいる。

「ボッシュ……？」

結果が出たのだろうと尋ねるリュウに、ボッシュは沈んだ面持ちで答えた。

「……駄目だ。やっぱり普通の方法じゃぁ、この水晶を取り除く事は出来ねぇ。構成する魔力の持ち主を何とかするくれぇしか方法は……」

「……」

魔力の持ち主、つまり女神ミリアを倒さない限り、皆は元に戻らない。解析結果がこのように出てしまった事は、研究者の知識を持つボッシュとしては降参の白旗を挙げたのと同じだ。リュウ達の空気はますます沈んだ。あれほどの力を誇る相手を倒すなんて、並大抵の事ではない。

「……」

リュウは、密かに決意を固めた。

「取り合えず、今日はもう休もう。……詠春さん達も、今日はわざわざありがとうございました。部屋を用意するんでゆっくりして下さい」

「……大した役に立てず済まない。リュウ君」

「うむ……」

「いえ……」

リュウの妙な迫力を感じさせる言葉の勢いに押され、ナギ達は半ば無理やりに会議室から客室へと移動する事になった。ディースはミイナが付きっきりで看病するつもりなのでそのまま。柱と機械にも触らないよう部屋の入り口で待機していた妖精達に言い聞かせておく。するとちょうど出て行こうとしたナギが、思い出したようにディースの方へと振り返った。

「そうだ、最後に一ついいか？」

「なんだいナギちゃん？」

「ねーちゃんあんた……一体今何歳なんだ？」

「……ナギちゃん、レディに歳を尋ねるなんて、デリカシーってもんが足りないよ？」

どうでもいいけれども意外と気になるその質問は、しかしさらっと諭す様に返されて、それ以上は突っ込めないナギだった。

＊

夜。

時刻は日付を跨ぎ、二つの衛星による淡い光が窓から差し込んで

いるリュウの部屋。目が冴えてしまい眠ることの出来ないリュウはベッドに横になり、天井を見続けていた。ボッシュは夕食の後、マスターの修理を行うため出て行ったのでここには居ない。いつもなら同じ部屋で寝る筈のミイナも、ディースを看病しながらもたれるように眠ってしまったため、会議室だ。ディースがずっと手を握っていたから、リュウが傍にいなくとも悪夢を見る事は無いだろう。

「……」

自分の部屋へと戻る前、とても静かになってしまった城の中が、やけに広いなとリュウは感じた。そして自分がこれから何をすればいいか、もう結論は出ている。とにかく今は体を休めるのが大事だと自分に言い聞かせ、寝転んだまま無理にでも目を閉じようとすると……誰かが、ドアをノックする音が響いた。明かりを付けて扉を開けると、そこには真面目な顔をしたアルが立っていた。

「リュウ、夜半にスミマセン」

「アル……何？　こんな時間に」

「実はどうしても、あなたにお聞きしなければならない事がありまして」

「……？」

リュウはアルを部屋に招き入れると、備え付けの椅子に座るよう促した。自分はボフッとベッドの淵に腰掛ける。アルはどこか神妙な様子で、袖口から自分のパクティオーカードを取り出した。

「あなたも知っての通り、この私のアーティファクト“イノチノシ

ヘン”には人の半生を記録する事が出来、そしてそれにはある条件を満たす必要があります」

「……？」

「対象者と対面し、その人物の本当の名前を聞き出した上で儀式を行うのが、その条件です。ここまではいいですね？」

唐突に現れ、何故か自分のアーティファクトの説明を始めるアル。今聞かされた事は、ちょっと前にも同じように聞いている。まるで復習でもするかのような口ぶりだ。そしてその態度で、リュウは何の目的で尋ねてきたのかピンと来た。一応本人の口からハッキリ聞くまで、その事を表に出すつもりはない。

「……それで？」

「あなたを含めた炎の吐息の皆さんの分は、メガロの事件の後に記録させて貰いましたね。……所が、その中で一人だけ、どういうわけか記録に失敗した方が居ます。……見ての通り、白紙です」

アルはカードを一冊の本に変え、その中を開いて見せた。それは何も書かれていない、どこまでも真っ白なページで埋め尽くされた本だった。そしてその本の表紙、恐らくはその本に書かれる筈の半生の持ち主であろう名前が入る欄には……リュウが毎日のように見る、とても見慣れた文字列が並んでいた。

「……」

「単刀直入に言いましょう。リュウ、“リュウ”と言うのは、その身体の名でも、そして“あなた”の本当の名前でもありませんね？」

「……」

アルの鋭い眼差しに、リュウは押し黙った。

「ディースさんは、“あなた”が普通の人間であると確信しているようですが……疑うようで申し訳ありませんが、私にはそうは思えません」

「……」

「いくつか不審な点はありますが、私が最も気になったのは、ムクトの岩壁であなたと再会した時です」

「……」

「あなたはソンの村は勿論の事、あそこが神皇の墓である事ぐらいしか知らなかった。それにも拘らず、何故かあなたは“フォウル”という表にはまず出て来ない神皇の名を知っていた……」

「……」

「そう、“知って”いた。他にも挙げられますが、魔法世界にさえ来た事の無い筈なのに、あなたの中には知識があった。……何故ですか？　あなたは……リュウを名乗る“あなた”は、一体何者なのですか？」

「……」

真剣な表情でリュウを見据えるアル。一気に畳み掛けられ、リュ

ウは思った。ちょっと前なら、そんな質問をされたら自分の核心を突かれた事と同義だと考え、まず間違いなくたじろいだだろうな、と。きっと自分はどう誤魔化そうか、必死に考えたに違いない。

しかし、今は焦らない。

その質問にはたった一言こう答える事で、思考停止のまま問答無用の回答とする事が出来てしまうのだから。

「……忘れちゃった」

「……」

どこか寂しげに、しかし余裕は残したまま何でもない様に答えて見せたリュウに対して、アルは一瞬驚いたような顔をした。自分の本当の名前、そして自分が本当は何者だったのか。もうリュウの中にその記憶はない。ただ知識だけがぽつんと頭にあるだけ。だから、例え仮に嘘発見器などに掛けられたとしても、忘れたというのは真実だと出るだろう。

「……そう、ですか」

「うん」

「……でしたら……仕方ありませんね」

アルは、笑顔を浮かべた。リュウはこう見えてあまり嘘が上手くない。そして例えリュウが舞台俳優並の演技力を身に着けていたとしても、それを見抜くだけの自信がアルにはある。そのアルの目には、リュウが本心からそう言っている事がわかった。そして思った。本当の自分を忘れる。それはどれほど辛い事であろうか。しかしリ

ュウはそれを受け入れている。ならばもう、余計な詮索はすまいと。

「すみません。不躾な事を聞いてしまいました」

「いいよ」

頭を下げるアルを、リュウは笑って許した。いつもからかわれるのとは少し違った立場になったのが、何か不思議な感覚だった。

「……」

「……何？」

質問が尽きたはずのアルは、真面目だった表情を胡散臭さ満開の笑顔に塗り替えてリュウを見つめている。いつもながら何を考えているのかわからないこの視線に晒されるのは、微妙に居心地が良くない。

「そう言えばリュウ、あなたは……確か私に一つ借りがありましたね？」

「……借り？」

いつの話の事だ？　とリュウは腕を組んで昔を思い返したが、さっぱりわからなかった。小さな物から数えればアルに対する借り（と言う名の言い負かされた回数）は結構な数に上るが、しかし特に大きな話はなかったように思う。

「ふふふ、覚えていませんか？　あなたと京都で初めて手合わせしたときの事を……」

「……あー……ってまた随分古めかしい話を……」

そこまでヒントを与えられてやっとリュウは思い出した。京都の隠れ家にてまだドラゴナイズドフォームの力の加減さえ分からなかった時に、アルを殺しかけてしまった時の事。その時アルに謝罪して、一つ何か言う事を聞くと約束した覚えがあるようなないような。今更そんな話を持ち出されるとは思っていなかった。

「……で、それで俺に何をしろと？」

「そうですねぇ……」

フフフといつも通りのスマイルを披露する腹黒魔法使い。そんなやり取りを随分久しぶりなように感じながら、若干呆れたというか諦めたような仕草を交えつつ、リュウは言葉を待つ。

「……私がお願いするのは……あなたが無事に帰ってくる事、です」

「！」

「一人で行くつもりなのでしょう？　あの、女神と呼ばれた女性の所へ」

驚いたようなリュウの顔には「どうして……？」と書かれていた。アルはしてやったりの表情を作り、くつくつと笑った。

「それくらいはわかりますよ。あなたは、顔に出やすいですから」

「……」

「今言った事は、私があなたの友人として本心から願う事です。無事に帰ってきてくださいね」

「……うん」

「用向きは以上です。では、おやすみなさい」

「……おやすみ」

就寝の挨拶を交わし、アルは静かに部屋から出ていった。

「……」

リュウはじっとアルが出ていった扉を見続けながら、そう言えば、とあの京都の時の事をもう少し思い出す。その時、確か“アルにはずっと勝てないんじゃないか？”なんて自分は思った様な気がする。結局、今もどうやらそうらしい。リュウは、ふっと苦笑してからベッドへと戻った。

＊

翌朝、結局あまり眠れなかったリュウはとうにベッドからは抜け出ていた。手慣れた動作で服を着替え、装備品を身に着ける。その物音に反応したように、遅くに戻ってきて眠っていたらしいボッシュが目を覚ました。

「……早ぇな相棒。ちょっと待ってくれよ、俺っちも……」

「……」

リュウは、大あくびをしながらいそいそと準備をするボッシュに向け、厳かに告げる。

「お前は、ここに居てくれ」

「！　あん……？」

ボッシュは一瞬、その言葉の意味がわからなかった。

「あんだよ相棒、俺っちが付いてっちゃマズイってのか？」

「……」

若干冗談めかして言うボッシュの言葉に、リュウは真剣な眼差しを持って答えた。そんなリュウの態度にいつもとは違うものを感じたボッシュは、語気を強める。

「……相棒おめぇ、どこへ行くつもりだ」

「……女神の所」

リュウは、あっさりと言った。ボッシュに対しては、嘘を付きたくなかった。

「あんだと……！？」

ボッシュは、飛び上がってリュウの側へと寄ってきた。女神の元

へ向かうという事は目的は当然、炎の吐息の皆を解放する事だ。そしてその為には確実に戦う事になる。

「なら俺っちも付いてくぜ！　悔しいのは相棒だけじゃねぇんだ！　俺っちだって……」

「それは……わかってるよ」

「……！」

リュウは、ボッシュがそういう反応を示すだろう事も予想した上で、ここに居てくれと頼んでいた。良く見れば、リュウの顔には苦渋の決断とでも言うべき、苦悩の痕が垣間見える。

「勝てる見込みがあるんなら、付いてきてもいい。……けどもし……帰って来れなくなったら、誰が皆を元に戻すんだよ。俺には他に方法なんて思い付かないけど、お前なら、ひょっとしたらみんなを元に戻す方法を見つけられるかも知れないだろ」

「……」

「だから……お前は、残ってくれ」

「……っ」

ボッシュにはリュウの言っている事の方が正しく思えた。感情に任せて突撃し、万が一全滅したら、それこそ皆を解放できる可能性は潰える。しかし誰かがあの水晶の柱を解析し続ければ、ひょっとしたら女神を倒さなくても何とか出来る方法が見つかるかもしれない。可能性は低いが、０とは言い切れない。

「……」

「……」

睨みあったまま、二人の間に沈黙が流れる。ややあって、リュウは表情を緩めた。ここまで正直に言えるのは、長い付き合いのボッシュだからこそ。信頼しているからこそ。そしてボッシュも、その事は良くわかっている。無言の内にいつの間にかボッシュの表情も、リュウに釣られるように緩んでいた。

「じゃあ……頼んだ、相棒」

「おう……任せろ、相棒」

二人の間に、それ以上の言葉は要らない。

僅かなやり取りでお互いの意思を確認しあい、リュウとボッシュは微笑みながら、静かに頷いた。

＊

「……」

今、リュウはスイマー城の城門の外に立っていた。

城に残っている人達に伝えて欲しい事は、全てボッシュに頼んである。

「……」

ゆっくりと、リュウは歩き出す。
畑や湖、そして城の姿を、しっかりと脳裏に焼きつけながら。

「……！」

少し進んだ所で、そこに見覚えのある４つの人影が立っている事に気が付いた。彼らは、特に誰かに知らされた訳ではない。自然と、リュウがどういう行動に出るのか気付いていた。

「……行くのか？」

「うん」

４人のうちの一人、ナギが代表して話しかけてきた。

「なぁ、俺も……」

言い掛けて、しかしナギはそれ以上言葉が出なかった。ディースの話によれば、女神はヒトには一切危害を加える事はない。つまり人間である自分がリュウに付いていっては、きっと女神は現れない。それでは意味がない。

「……」

「ありがと。でも、大丈夫」

色々な事を伝えたくて、しかし上手く纏められないナギ。ほぼ同じような表情のアル、詠春、ゼクト。感謝の意味も込めてリュウは彼らに……笑いかけた。４人はリュウのその表情の裏側に、固い決

意がある事はすぐにわかった。だからこそ、中途半端な言葉を掛ける事は、憚られた。

「じゃあ、ちょっと行ってきます」

リュウは行く。一歩一歩、城から遠ざかっていく。

ナギ達は、小さくなっていくリュウの背を見送る事しか出来なかった。

「……」

ナギは、何となくもうリュウと会えなくなるような気がした。

心の内で必死に、その嫌な予感を打ち消そうとしていた。

第十四章　8、選択

新しき民を中心とするメセンブリーナ連合と、古き民を中心とするヘラス帝国の狭間に位置する王国、ウェスペルタティア。その王都である空中都市オスティアは、天然の魔力によって宙に浮かぶ巨大な岩塊――――最早島と言える規模の大地の上に築かれている。そしてその王族の血筋には、代々“神代の魔法”という特別な力を持つ子供が生まれるという、魔法世界の最古から連なる歴史が、最も色濃く残る国である。

「……」

今、リュウは一人立っている。そこはウェスペルタティアに名立たる風光明美な空中港でも、古き良き時代の彫刻が施された神殿の前でもない。そこは、数ある浮島の位置関係から唯一、万物の根源たる日の光の一切が届く事のない、空中都市オスティアの真下であった。人間はおろか魔物すら近付かない常闇の地。目前には手に宿した魔法の光により浮かびあがる岩山。中央にまるでリュウを誘うように、ぽっかりと口を開けた洞穴が一つ。

「……」

一度対峙したあの女神の気配は、嫌でもリュウの脳裏にこびりついている。それを手繰れば、微かな気配が洞穴の奥へと続いているのは疑うべくもない。リュウは無表情のまま、その先へと足を進めた。リュウの進行を遮る者は居ない。案の定、螺旋階段のように地下へと続く洞穴の中を進んで行く。

「……！」

気配は僅かずつだが濃くなってきている。どこまでも深い階段を延々と降り、とうとうその終着点へと到達すると……続く道の先に明りがあった。目を凝らすと、行き止まりらしき位置に場違いのようにも思える金属質な扉が見えた。そしてその扉の前に、一人の優男が立っていた。年若く長身で白髪、スーツを着こなしポケットに手を入れ、顔には薄笑いを浮かべている。リュウは表情を変えないまま、若干の警戒と共にその扉と優男の前へと近付いていく。

男はハッキリと顔のわかる位置までリュウが来るのを待って、話しかけてきた。

「やぁ。初めまして“竜の成り損ない”。僕は……」

「地のアーウェルンクス」

「！」

挨拶を遮ったリュウの先制に男の薄笑いが一瞬冷める。冷たい目に驚愕の色が灯る。リュウはそれを見ても表情を変えない。どこかの重力魔法使いの様に意地の悪い笑みを浮かべもしない。知っているのは当然だ。まんまと誘き出され、喫茶店で顔を突き合わせて、楽しくもないお茶をした間柄だ。尤も、その出来事は“無かった事”となりリュウしかその事実を知らないが。

「……驚いたね。まさか僕の存在まで知っているとは」

リュウは、極力目的以外の事に構うつもりはなかった。……が、しかしこの場所に待ち構えていた様に立っているという事は、つまりアーウェルンクスは女神を守って戦うつもりであるのか。……そ

れともただの冷やかしか。どちらにしろ、障害であることには変わりない。脅しの意味も込めて、リュウは背中のドラゴンブレイドに手を掛けた。

「……」

リュウの瞳に遠慮はない。周りに巻き込む人が居ない以上、いざとなれば手加減をする必要が無いからだ。地下であろうとリュウの実力を持ってすれば生き埋めになどなる筈も無い。アーウェルンクスの言葉如何で、剣は容赦なく振るわれるだろう。

リュウの態度は本気だと感じ取ると、アーウェルンクスは小さく両手を上に挙げて見せた。

「君と事を構えるつもりはない。僕はただの案内役さ。君が来たら連れて来いと彼女から言われているんでね。ここで君に暴れられても困る」

「……」

アーウェルンクスはそう言うと、脇の壁に付いている機械を操作した。ピッと何かを読み込む音がし、目の前にある機械の扉は中心から別れるように、上下左右へと引っ込んだ。

「付いてきなよ」

「……」

まるで無防備な背中を見せつけながら、悠然と扉の内部へと進むアーウェルンクス。罠ではない。ここまで来てリュウに不意打ちを

しようとは女神は考えていない。根拠はないが、リュウはそう感じていた。

扉の中はそれまでの洞穴とはうって変わり、とてつもない広さを誇る、科学の発達した近未来の都市の様であった。機械に溢れ、無機質な空間は生命という物を全く感じさせない。魔法世界にある文明とも旧世界の文明とも趣きが異なっていて、その水準は両者よりもはるかに高度に見える。今までに感じた事のない異質な空気がそこには充満していた。

「ここはずっと昔の人類が創り上げた都市なんだそうだ。どこかの種族と彼女の争いによって滅亡寸前まで追いやられた……ね。彼女は嘆き悲しみ、償いの意味を込めてそれらの一部をここに移送した」

「……」

観光案内をするガイドの様に、アーウェルンクスはこの機械都市の顛末を語りだした。間接的に龍の民と女神の事を揶揄し、リュウに精神的な揺さぶりを掛けているつもりなのだろうか。しかし既にディースからその話は聞いている。少々驚きはしたが、リュウの表情は変わらない。

道中、逐一話しかけられる一見他愛のなさそうな話。巧妙に毒と刺を混ぜ込まれたアーウェルンクスの与太話を無視しながら、リュウはその後を付いていく。しばらく歩くと、とある一際大きな扉の前でアーウェルンクスは歩みを止めた。

「君の一族には憐れみを覚える」

「……」

リュウの方を振り返り、アーウェルンクスはそう切り出した。憐れみと言ったが、表情からは全くそんな素振りは見られない。単なるおためごかしだとリュウは即座に看破した。そもそもそんな感情が備わっているようにも見えない。

「何しろ彼女によって大多数は滅ぼされ、その最後の生き残りも…ここで彼女の手に掛かるのだろうからね。そしてその流れから逃れる事はできない。……何とも救いのない、“宿命”というやつだよ」

「……」

恐らく目の前の扉の先に女神が居るのだろう。気配が段違いで濃くなっている。

ここまでのアーウェルンクスの揺さぶる様な言動の数々は、彼らの計画がリュウのせいで台無しになったという事への単なる嫌がらせだ。あの時自分でそう言っていたからほぼ間違いないだろう。この扉の先に進んだら、もうコイツとも会う事は無いだろうと思ったリュウは、小さな悪戯を思いついた。散々聞かされたどうでもいい昔話への、ささやかな仕返しだ。

「今言ったその“宿命（フェイト）”って単語は、あんたの方が似合うよ。ずっと先まで覚えてると面白いかもね」

「……？」

ようやく反応を示したかと思えば、助言とも反論ともつかない意味不明な事を言いだすリュウ。

アーウェルンクスは不快を露わにした。アーウェルンクス達人形はそれぞれ個別の人格を持つが、それとは別に共通の記憶領域という物が存在する。各々の経験や記憶の一部をその領域から新たな人形に引き継がせる事が出来るのだ。今リュウに指摘されたおかげで、より鮮明に“宿命（フェイト）”という単語がその記憶領域に残ってしまっていた。

「……フン」

リュウの言葉の意味が全くわからない事と、期待していた反応とは大違いの態度が非常に癪に障る。アーウェルンクスは面白くなさそうに鼻で笑ってみせ、そのまま目の前の巨大な扉を開け放つと、何も言わずに水の転移魔法で姿を消した。

「……」

開かれた中から漏れ出す気配が暴風の様にリュウを威圧する。光に満ちていて、内部がどうなっているのかよく見えない。リュウは静かに、その中へと足を踏み入れた。

「っ……！」

あまりの眩しさに目を細める。徐々に目が慣れていくと、そこには……

「これは……」

咲き乱れる花々。
緑が萌える木々。
麗らかな鳥の声。

草を食む動物達。

どこまでも自然に溢れ、機械だらけの都市とは全く逆の生命に彩られた空間。多種多様な生物が穏やかに暮らす、そこはまるで地上の楽園のようであった。

「来ましたね……リュウ」

「！」

リュウの前方、地下である筈なのに空だとしか思えない場所に、女神が浮かんでいた。女神は、ナギに向けていたのと同様の優しげな瞳をリュウへと向けている。そのまま音も無くリュウの前に降り立つ。周囲に居る動物達は逃げようとはしない。湧き上がる感情を押し殺し、リュウは敵意のみで構成された視線を女神へと向けた。

「ようこそ。ここは“エデン”。……かつてお前達龍の民と私との闘争により、地上から消滅した筈の数多の生物達が暮らす聖域です」

女神は、周りに存在するあらゆる生命を慈しむようにそう紹介した。機械文明の次は生命。リュウは周囲の動物達を見渡してみる。なるほど、良く見れば知った動物とは細部が異なる姿をしている。その種の生命の系譜の内最も上位付近に位置する動物達なのだろう。

しかしそれらをわざわざ見せ付けて、一体何のつもりなのか。女神は、そんなリュウの疑問を読んでいた様に言葉を続けた。

「お前と私が争えば、今世界に存在する生命や文明は、ここに居る生物達の様に歴史の彼方に埋没してしまう事でしょう」

「……」

「お前は龍の民の最後の一人。けれど……ヒトに造られながらも、私と同じ存在……」

「！」

リュウが僅かに反応を示す。女神は……ミリアは、リュウが普通の龍の民ではない事に気が付いていた。リュウの正体が自分と同じ、“うつろわざるもの”であるという事に。

僅かに驚きを見せるリュウに対してミリアは……その白く細い手を差し伸べた。手のひらを上に向けて。まるで道に迷った子供の手をそっと取り、導こうとするかのように。その行為には、悪意の欠片も無い。リュウは、始めて困惑の色を示した。

「何を……」

「私は……お前を赦しましょう」

それはとても優しい、甘美な響きだった。差し出された手を取れば、この世の一切の苦しみから解放されるような……まさに神からの恩赦と呼ぶに相応しい御手であった。

「さぁ、この手を取りなさい。リュウ。忌まわしい龍の力など捨て去り、この場所で私と共に……永遠の時を過ごすのです」

ミリアは、正しく神であった。一片の欲望無き無償の愛。幾度と無く争った龍の民でさえも赦し、あまつさえ共に過ごそうと言う。両者の争いは無益であり、不毛だ。滅ぼすべき相手と言えど、出来

るのであれば戦わないのが最善。それはリュウの理念と少なからず重なる部分があった。

「……」

「何を迷う事があるのです。お前も、争いは好まないのでしょう？」

ミリアはリュウの思考を読んでいる。その事実を踏まえた上で、これは罠でも演技でもない事がリュウにはわかった。彼女は純粋に、他の生物の平穏を願っている。差し出されたこの手を取れば、それで自分にも未来永劫安息の日々が約束される。極上の誘惑だ。思わず手が伸びそうになる。しかしリュウはそれを振り切り、意思を言葉へと変えた。

「……みんなを……元に戻せ」

「……成程、あの者達の事ですね。いいでしょう。お前がここに留まると決断するのなら、すぐに解放すると約束しましょう」

自分がここに残れば皆は元に戻す。女神は確約した。リュウは迷う。自己犠牲と言えば聞こえはいい。それでみんなが元に戻るなら、それでもいいと思ってしまう自分も居る。

でも……。

――――リュウの心に、仲間達の事が思い浮かんだ。

今自分が皆を欲するように、きっと皆も自分を欲してくれるだろう。リュウはそれを、自分本位な自惚れだとは思わない。ここで女神の手を取り、その加護の下で只生きる。果たしてソレは生きてい

ると言えるのか。

……否だ。それではあの悪夢の中、皆が砕かれて完全なる世界に移行したのと同じだ。周りから見れば、死んだも同然。そこまでして生きて……それで一体、何の意味があるというのだ。出来るなら無事な皆に会いたい。会って話がしたい。そこに永遠はあり得ないが、それでもリュウは、皆と共に生きたい。……浅ましい。浅ましい欲望だが、リュウはそう思う。何故ならリュウは、人間なのだから。

「争いが止めば、世界は健やかにある。私達が今を生きる生命を脅かす事は永遠になくなる。さぁ、リュウ。私の手を取るのです」

「……」

――――リュウは、世界を思った。

確かに、世界を滅ぼせるだけの“力”が自分の中にある事は認める。そしてミリアにも同じかそれ以上の力が備わっている事もわかる。過去に龍の民と女神が幾つもの文明や生命を巻き添えにしたというのも事実だろう。戦わない選択というのは、大勢で見れば確実に正しい。

しかし、とリュウは思う。ミリアとリュウは、見ている目線が違うように思えた。リュウは人として、人同士の戦争を止めたいと思った。ミリアは、自分と龍の民が争う事による影響を考えた。その差に違和感を覚える。つまりミリアは、人同士が争う事自体は止めようとしていないのだ。

「……。何で、お前は完全なる世界に手を貸したんだ」

「……。いずれこの魔法世界は崩壊する。私の可愛い、か弱い人間達は、その時大勢死んでしまう。人間達の意にそぐわない犠牲は見過ごせない。私が彼らを救わずして、誰が救うというのです」

全ては人のため。リュウと同じであり、リュウとは異なるミリアの選択。そしてミリアは、魔法世界人を人とは認識していない。それが両者の間に横たわる、埋める事の出来ない決定的な差。

ミリアによって全てを奪われた悪夢を経て、リュウは思い知った。リュウの守りたい、守るべき世界とは、“仲間が居る”世界なのだ。小を捨て、大を取るのが種として見た場合正しいのだとしても、リュウにはそれは選べなかった。リュウは神ではない。ミリアほど傲慢にはなれない。

「……」

アーウェルンクスにも言われた、知識として知っていた魔法世界の崩壊。それを食い止める手立てなんてリュウ一人では思いつかない。でも、みんなが協力すれば、人間も魔法世界人も垣根を越えて力を合わせれば、乗り越える方法くらい出てくる。リュウにはそう思えた。何故なら、リュウは神でなく皆と同じ、人であるから。同じ目線で考え、その一部として生きているから。甘い戯言である事を承知で、その可能性の方に賭けたいと思った。

「……。どうしました。リュウ。お前は人ではなく龍の民。そして私と同じ存在。この聖域以外、真に人々に受け入れられる事など、ないのですよ？」

「……」

――――リュウは、ヒトの事を思った。

助けようとした人達に、恐怖の眼差しを向けられた。化け物扱いされた。悲鳴を上げられた。石を投げられた。かつてフォウルに会った時に言われた様に、人は、自分のような異形を受け入れないという事を身に染みて理解させられた。

けれども、リュウはヒトに絶望しない。ヒトは異物を排除する。それがどうした。そんな事ぐらい、百も承知だ。何故なら、自分は人間だから。弱者の気持ちがわかるから。そして、人はそれ“だけ”ではない事も十分に知っている。例えどんな扱いをされようと、それでもリュウは、ヒトの側に立ち、共に生きたいと願った。

「さぁ、リュウ……」

ミリアが、強くその手を差し出してくる。

手を伸ばせば、これ以上意識も身体も、浸食されるような事は無くなるだろう。

記憶を失う恐怖におびえる事も無くなる。

この女神の御手を取るだけで、たったそれだけで、自分は楽になれる。

「……」

とても長く感じられる数瞬の時を経て。

リュウの手が動いた。

右手が吸い寄せられるように、徐々に上がっていき――――

――――パシッ……と、乾いた音が響いた。

リュウは、ミリアの手を振り払った。

「……！」

「……」

リュウはミリアを拒絶した。

色々と、理由を考えた。どちらが正しいかも考えた。多分今まで生きてきた中で一番考えた。ミリアは、女神である。人間を第一に考え、その生存を脅かす存在を駆逐する。旧世界においての人間同士の戦争に手を出さないのは、人を愛しているが故。対象が人間である限りどんな行為であれ包み込み、受け入れ、尊重し、愛おしく思うが故。

愛する事を正義とするなら、それはまさしく正義であろう。

リュウはその事を理解していた。ミリアの言っている事が正しいのは分かっていた。自分の良心に問いかけをしてみても、ミリアが間違っているという回答は得られない。

だが、同時に自分も間違っているとは思っていない。

……リュウは、静かに剣を抜いた。

「……お前は、自分が何をしようとしているか……分かっているのですか？」

女神の纏う空気が変わった。悲しい、寂しい、哀れ。リュウを見る目がそう語っている。そしてその、悲哀に満ちた瞳の奥に、小さな怒りの炎が灯った。しかしリュウは、意思を曲げない。

「……」

「その選択をするという事は……私に剣を向けるという事は……世界に、剣を突き付けるのと……同じだという事が、分かっているのですか？」

それでも、リュウは揺らがない。
切っ先を、ミリアへと向ける。

結局は、相容れない。それだけなのかもしれない。敵か、そうでないか。その二つしかないのかもしれない。どれだけ言葉を重ねても、言い繕っても、龍の民と女神は交わらない運命にある。それだけの事かもしれない。

ただ……何より、今自分の力を……自らを蝕むこの半身を否定すると……リュウは、自分が、自分で無くなる様な気がした。

「……」

「……可哀そうな、リュウ……」

ミリアの顔から、表情が消える。

大気が、震え出す。
とてつもない何かが動き出すような。
漠然とした威圧感が、エデン全域を埋め尽くしていく。

「その……大きすぎる力が……お前を狂わせてしまった」

聖域内の空気が完全に変わる。
木々が、花々が、動物達が、幻であったかのように遠ざかっていく。
空が消え去り大地が消え去り、光も音も無くした暗黒の空間が、リュウとミリアをその胎内へと包み込んでいく。せめて周りへの影響を最低限に抑えようという、ミリアの愛か。……それとも、怒りか。

「……リュウよ。呪われし、龍の民よ。……話は、尽きました」

リュウの前に、ヒトを愛する女神はもう、居ない。これまでのリュウの経験が、本能が、ミリアを前に騒ぎ立てる。存在そのものが、これまで相対した者達とは決定的に違う。スイマー城に襲来した時でさえ、見せたのはほんの極々一部の力に過ぎなかったのではないか。今更のようにそんな疑念が沸いてくる。

「お前の決意が、変わらぬと言うのであれば……」

リュウの背筋を凍らせる、ミリアの冷たい眼差し。リュウは、ミリアから放たれている気配が自分のよく知っている物である事に気がついた。それは自分と全く同じ。即ち“うつろわざるもの”としての力だ。そして同時に理解した。自分と比較して、それはあまりに巨大であった。

「……私は、お前を滅しましょう。他の、多くの生命の為……」

「！！」

ミリアの姿が闇に溶け込んでいく。
同時に溢れ出す、未だかつて遭遇した事のない巨大な力。
己が切り札としてきた力を圧倒的に上回る力。

――――私はあえて……鬼神となりましょう……

周囲はまるで宇宙の様な暗い空間だ。空気がとても重たく冷たい。
今立っているのかどうかさえわからなくなり、感覚が狂う。そのリュウとミリア以外、全てを拒絶する様な暗闇に……徐々にミリアの姿が浮かび上がってくる。

「……っ！？」

針のように鋭くリュウの肌を突き刺す威圧感。
再び現れたミリアの出で立ちは、それまでのような人の姿とは懸け離れていた。

はるかな高み、リュウを見下ろす位置にあるミリアの上半身。両の腕は長大な翼となり、頭部から左右に伸びる大きな角。そしてその腰より下に、大螺旋を描く爬虫類と思しき尾。それはどこまでも下方へと伸び、終わりが見えない。美しさと醜さが同居したその姿はある種妖艶でさえあり、巨大さは問答無用で畏怖の念を沸き起こさせる。

まさに、神と呼ぶに相応しい姿であった。

「ウオオオオオ！」

リュウは、瞬時に悟った。

剣では無理だ。コレは、そういうレベルではない。浸食が進もうと構わない。リュウは即座にドラゴナイズドフォームへと変わる。

……しかし。しかしである。変身したこの姿を持ってしても、それでも相手と自分に大きな隔たりを感じるというのは、初めての経験であった。

それ程までに、神と化したミリアは圧倒的だった。

「ハァァァァッ！」

背のバーニアから赤い光を噴出させ、高速でミリアへと飛び掛るリュウ。もうあの龍の力を捻じ曲げる杖はない。ならば、先手必勝。突撃から嵐のように繰り出される左右の爪。ヴィールヒ、ウラガーン、タルナーダ。旋風、暴風、竜巻の名を冠する無双の爪の連続攻撃が、次々とミリアの胴体に吸い込まれていく。

「！？」

海を割り、山を砕き、幾つもの強敵を屠ってきた筈の爪。

避けられた事こそあれど、当たればどんな相手にも痛烈なダメージを与えてきた筈の爪。

しかし……ミリアには、全く効果が無かった。

当たってない訳ではない。障壁で防がれてもいない。

ただ、その皮膚を傷つける事さえできていない。

ミリアは目を閉じ、静かに佇んでいる。

「……クッ！」

即座に切り替え若干の距離を取ると、リュウは両手に力を集中させていく。かつては青白い光だったが、今その光は浸食の影響か、血の様に紅く輝いていた。

「ウオォォォォ！」

極大のＤ－ブレス。進む浸食の事は頭の隅に追いやり、渾身の一撃が放たれる。紅い極光が暗闇を照らしだし、ミリアの上半身へと伸びていく。

「オォォォォ……」

「！？」

リュウのとは違う、甲高い声が暗闇に響いた。

ミリアは、息を吐いた。

それはろうそくの火を吹き消す様な、か細い吐息。

それだけで……ミリアの目前へと迫ったＤ－ブレスが、消えた。

掻き消された。

「な……！？」

驚愕するリュウの前で、閉じられていたミリアの眼が開いていく。

「龍の民よ。お前に命令する。私の可愛い全ての生命の為に……

……死ね」

リュウは、文字通り神の怒りを買った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8060j/

炎の吐息と紅き翼

2011年12月14日19時29分発行